

# 近代思潮叢書

第一高等學校教授 東洋大學講師 三井 並 夏先生著 (既に發行)

有田四郎 伯裝幀 第一編

ルードオイケンの哲学

定價十七錢 郵税六錢

本書の成るは必ずしもオイケン氏哲學流行の故にあらず。著者は多年の研究をして、殊にオ氏とは親交あり。著者固より自説を有すと雖も、オ氏も亦常に其著述、參考書、傳記、信書を贈つて其研究に資し、益々多方面ならしめたり。本書は「認識」「宗教」「宇宙」「人生」等當今須要の問題を悉く網羅し、オ氏の批評と立場とを明かにし、且つ詳細にオ氏を傳し、訪問の印象記には特色ありて、オ氏の面目は紙上に躍如たり。卷頭博士が日本の同學者に寄する自署ある肖像を掲ぐ。

オイケン原著 文學士 今岡信一良先生譯

第二編 伯裝幀

現代思想と倫理問題

定價十七錢 郵税六錢

卷頭オイケン氏の寫眞を掲げ、附録として全博士の「宗教に歸れ」の一文を添ふ。

八月初旬發賣

逐次刊行

(明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可)  
(六合雜誌第三十四年第八號) 大正三年八月一日發行(毎月一回一日發行)

〔本冊定價貳拾錢〕

發兌 東京 橋町 警 醒 社 振五 替三 東番 京



# 新進自由思想家の好著!

著者	書名	定價	郵税	出版元
三並良	福音書大觀	五〇〇	八	統一基督教弘道會堂
安部磯雄	自修の理想論	一、〇〇〇	一六	廣文堂
應用人の政治學	理想論	一、四〇〇	二六	北文堂
近代人の信仰學	理想論	一、六〇〇	三〇	高有倫堂
白中翁	論記	一、七〇〇	三〇	川榮閣
神田佐一郎	高自卑	五〇〇	八	統一基督教弘道會
向軍治	ハツ當リ集	三〇〇	四	警文館
岸本能武太	英語發音の原理	七〇〇	八	北文館
今岡信一	良新神學(譯)	一、〇〇〇	八	同文館
小山東助	久遠の基督教	一、〇〇〇	八	警文館
永井柳太郎	社會問題と殖民問題	一、五〇〇	一六	新興社
合著	進歩的宗教	三〇〇	八	統一基督教弘道會
加藤一夫	闇に輝く光	八〇〇	八	明文堂
淺田泰順	新譯律氏和聲學	一、七〇〇	一〇	淺田泰順

◎振替貯金にての御申込みは

東京市芝區三田四國町統一基督教弘道會宛に  
振替東京一〇〇〇三番

毎月一日十五日發行  
定價金三錢稅五厘

勞働問題の解決の先驅者  
友愛會の機關新聞

## 友愛新報

第三十三號目次

- 此多數の失職者を如何に  
勞働問題數件記 社説
- 機械の進歩と適當なる  
使用法 二木靜齋
- 無題錄 鈴木生
- 親の慈愛 暗涙生
- 工場勞働要義 神田孝一
- 自由文壇 會員有志
- 聯珠 鈴木互清
- 友愛俳句 鈴木一鶯
- 働く乎飢ゆる乎 松本雲舟
- 西洋人の見た日本人の不行儀
- 日射病の注意
- 會報及報告 眞
- 寫眞

發行所

東京市芝區三田四國町二

友愛新報社



夏期中の御來宿者を歡迎致候

高等  
下宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一良

本郷區追分町三〇

電話下谷 三三四六乙

(追分電車終點ヨリ五分間)

●外國諸店へ告ぐ

一、本誌も諸店の熱心なる御勧誘によりて逐號購讀者の増加しつゝあるは本社同人一同の深く感謝する處なり海外發展は本誌の最も希望する所なれば今後益々御盡力あらん事を切に奉希上候  
一、雜誌の發送は毎月一日を以て之を爲す若し不着の疑ある時は直ちに御報知願上候  
一、御送金の際は芝園橋郵便局を御指定被下度候

大正三年八月

六合雜誌社

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾	郵税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共
●海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正三年七月三十日印刷納本  
大正三年八月一日發行  
(毎月一回一日發行)

定價貳拾錢

發行兼編輯人 鈴木文治  
印刷人 山本與一郎  
印刷所 株式會社 秀英合

發行所

東京市芝區  
三田四國町

統一基督教弘道會

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋  
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店



# 神學之研究

金 前 年 一  
錢 五 十 三 圓 壹

號 月 八

錢 十二冊一價定  
錢 四 稅 郵

トレルチ教授の宗教學

赤松智城

共觀福音研究の現狀(米國シカゴ  
ヘール講演)

イーストン

近世神學の理想と欠陥(同志社講演)

ケレ

リツチル神學と現代

日野眞澄

福音書研究の傾向と結果(七月十三日於  
東京講演會)

ヘツドラマ

聖ポーロと機密宗教

太田靈順

ヴント教授の宗教觀

三並良

第五卷總目錄は本號に在り

最近壹年間の新著解説紹介短評ABC順目錄を附す

《後附四》

町保神表富田神 店捌賣大

町張尾座銀京東

所賣發

堂

京

東

社

醒

警



# 東亞之光

冊一 金二十 冊二 金十二 錢四 郵錢 一稅 錢十 錢五 厘共 稅郵 錢錢

號 月 八 回行 一發 月日 每一

▲ケーベル、フローレンツ二氏を送る

文學博士 井上哲次郎

▲露西亞文明史序論

文學士 八 ● 貞利

▲歐洲に於ける宗教々育に就て

文學士 保科孝一

▲義經入夷傳說考

文學士 金田一京師

## ▼評論

○所謂「民本主義」は無責任的團體主義

○現今倫理學研究の趨勢

○ヨードル教授を憶ふ

▲自覺の徹底

文學士 吉田靜致

▲楞最經私見

文學士 常盤大定

▲古神道の神々

法學博士 寛克彦

○漢詩

○和歌

○俳句

○彙報

○海外思潮等

東亞協會

東京市本郷區 駒木五〇

發行所

振替 口七 座七 東京 番七



# 新

# 人

## オイケン博士歡迎號

（八月一日發行）

□ オイケン博士を迎ふ……………海老名 彈正

□ オイケン來朝と思想的準備……………中 島 力 造

□ オイケン教授の宗教觀……………額 賀 鹿 之 助

□ オイケン哲學に就て……………宮 本 和 吉

□ 大思想家の人生觀に就て……………安 倍 能 成

□ オイケンの宗教の眞諦に就て……………三 並 良

□ オイケンの翻譯に於ける印象……………額 賀 鹿 之 助

—— 其他評論、文藝、新著並人物月旦等内容充實 ——

## 十五週年紀念號

（七月號）

## 好評再版

（此號定價二十五錢）

定價

一冊十五錢 半冊十錢 一年一圓 五年五圓 十圓 五十錢

東京 小石 川林 町四 十三

新 人 社



おもむけの正体

郵稅八錢

文學博士井上圓了先生著

定價一圓十錢  
郵稅八錢

南半球五萬哩

定價九十錢  
郵稅八錢

東振東京小石川區原町  
丙午出版版社



る。獨立不羈の立場よりして思ふ存分の批評を下す所、天下一品である。「世の中」は博士が種々の雜誌に公にしたる談話九十餘篇を集めたもの、題のごとく廣く世の中に關する批評、忠言、説教である。博士は現代人物の評論に於ては著しい特色を有するが、これが又此書によくあらはれてゐる。又博士の思想は餘程圓熟して智慧に満ちた觀察と言語とが毎篇に散在する。而して往々皮肉や奇警な文句があつて讀者をして飽かしのめない。今の世の中を知り、且つ之に處せんとする人々には好個の手引書である。理想的の修養書である。

(價一・八〇)

## △ゴリキー懺悔

勝尾英造譯  
有朋館發行

この書には序文も例言もないから能く解らぬが、慥かに露の文豪ゴリキーの懺悔録である。もしくはこれに準すべき作物であらう。流石にゴリキーの作だ。キビくしてゐる。散漫な所がない。本書は「自分は耻辱の兒で、無稽もので、棄兒だ。」にはじまり四歳にして堂守の長子となつたこと、それから正教會の形式的宗教の空氣の中に成長し、結婚する妻が死んでからコドウといふ主人公は宗教的修養を志して、修道院めぐりをする。その暗黒面をみてあきれ、尼寺にもはいりこむ。露西亞の國教會の一面を知るには善い参考書である。最後に主人公は非常に宗教的になる。「自分は耳を澄して其處に座つてゐた。嘗て見聞したものが、悉く自分の心中に開展し、一つの火の中に燃えてゐた。同時に自分はまだ世界中にこの火を反射した。そして世界中の凡てが莊嚴に輝き、不可思議な

衣を纏ひ、嘗て全世界が自分を吸収したと恰當同じやうに、全世界を吸収せんとする燃ゆるやうな希望を、自分の心靈に與へた。自分は獨りて暗黒の中に自分の愛でもつて、全世界を抱擁したその夜の恍惚と法悦とを述べる事が出来ぬ。

朝になると、また太陽が自分に、他の光景を示した。自分は太陽の光線が如何に注意深く柔しく暗黒の上に落ちて、それを散じたか。またどうして太陽の光線が地上から夜の幕を引き去つたかを注目した。地球は豊かな華美な秋の衣をつけて自分の前に現はれた、それは人間の偉大なる計畫のための——その計畫の自由を得んとする戦ひのための——碧玉の野原、美と眞との祭日に巡禮する神聖の場處。

「爾は自分の神である、貴き民衆よ、そして爾は祈願の勞苦と苦難とで、その美しき精神から造つた凡ての神の創造者である。」  
「そしてこの世界に爾民衆の外に神はないものである、爾は奇蹟を行ふ唯一の神であるから。」

「それは自分の懺悔と信仰である」

\* \* \* \* \*

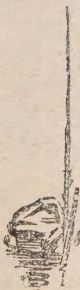
かくして自分は、今人々が暗黒と迷信との束縛から、同胞の心盡を自由にする場處に歸つた。そこに人々は合一した力としての民衆を集め、彼等に隠れたる自我を教へ、彼等を助けてその意志の力を認め得るやうにし、宇宙のために最上の神性を創造する

大業に、凡ての人々を結合せしむる唯一の眞道を彼等に指示した。」  
ゴリキーの宗教はかゝる民衆の宗教である。しかも一種の神秘を入れて餘りあるものである。譯文はこの標本の示すがごとく極めて巧妙である。吾人は近頃興味を以て讀みし翻譯小説の一つとして之を讀者に推薦する。

(價一・四〇)

## △寄贈雜誌

新日本○日本及日本人○獨立評論○新公論○新小説○新人○道○東亞之光○開拓者○早稻田講演○丁酉倫理○哲學雜誌○心理研究○帝國文學○第三帝國○青鞨○詩歌○眞新婦○世界之日本○法學協會雜誌○假面○生活と藝術○エゴ○番紅花○人生と表現○新佛教○基督教世界○基督教週報○人性○婦女新聞○神學之研究○内外教育評論○婦人之友○護教○東洋哲學○福音○弘道○ローマジ○正教時報○道之友○六條學報○九惠華頂○風景○十一人





松本雲舟 先生共譯 四六判三百六十頁  
 原 正男 定價一圓送料八錢

# ルソーの直髓

近代主義の親ルソーの言凝つては萬鍛の鐵と明組織の根本的大革命を促せり。實に文學哲學宗教政治を通じて現代生活の由來を解し眞味に達せんとせば何人も先づルソーに赴かざるべからず。彼は吾々の思想感情一切の源流にして一呼吸一脈搏悉く 巨人ルソー により來らしかもその『懺悔錄』『エミール』等部分的譯書はあれど、未だ彼の全體に互りて其の心核を掴みたる書を紹介したるを見ず。乃ち多年ルソーに心酔せる譯者等これを遺憾とし自由にして巧麗なる譯筆を揮つて『偏見と必然と模範と總ての社會的傳襲』より放たれたる彼の眞髓を我が國に移植し豫言者權化に接せ一讀直に新思想新文明の

人生と人間と藝術と  
 現代生活三相の解剖

早稲田大學教授 北吟吉先生著 最新刊  
 ▲四六判裝幀高雅  
 ▲定價金八十錢  
 ▲小包送料八錢

ベルダン哲學第一時間と自由意志の解説及批判編哲學入門

早稲田大學教授 桂井富之助先生譯 三版  
 ▲四六判裝幀高雅  
 ▲定價金九十錢  
 ▲小包送料八錢

人間としてのトルストイ

早稲田大學教授 片上伸先生著 忽四版  
 ▲新形箱入 醬酒  
 ▲定價金壹圓廿錢  
 ▲小包送料八錢

生の要求と文學

發行所 東京牛込 神樂坂 株式會社 南北社 (總發行所 東京牛込 神樂坂)



なる間違ひである。(價一・〇〇)

### △家庭割烹辭典

東京割烹研究會編  
警醒社發行

家庭生活に須要なる和洋料理の辭典である。何事も便利な辭典の世の中となつたもの。七百三十ページに(一)ページ毎に二種の料理法がのせてあると(二)千四百種以上の和洋料理法があるわけである。贅頭には家庭の年中行事や禮法や料理に關する多くの事柄が掲げてある。この書一本を備ふれば料理講習録といふやうなものがなくも大抵の料理は出来るので、主婦たる婦人方には左右に缺くべからざる寶典である。(價一・八〇)

### △子の見たる父トルストイ

播磨格吉譯  
新潮社發行

トルストイの第三子イリヤ・トルストイが千九百十三年九月から十二月に亘りて、露都新聞紙上に連載したのを譯したものである。トルストイを中心にその家庭、交友、ヤスナヤ・ボリヤナ村の狀況、煩悶時代、晩年、大悲劇の前後等巨人トルストイを裏める周囲の空氣を細かに描いたものである。今日トルストイに關する書籍のみで大きな圖書館が出来るといふくらゐに、トルストイに關する出版物は多い。しかしながらそれは主として外部から見た人々のトルストイ觀である。而して日常生活に於けるトルストイ殊に家庭のなかに於けるトルストイの紹介はまだ甚だ少ない。殊に血と肉とを分ちたる人々の唇から洩れたるものとしては猶更らることである。トルストイを彼れの作物を透して見る人の第一に希望する所のものは、彼れの日常生活の如何て

ある。本書は即ちその要求を充たさんが爲めに用意されたものである。藝術品としての價值を論ずることは措いてトルストイの作物を讀むて想像してゐたトルストイと、その子イリヤの唇を透して來るトルストイとの間には、色々な興味が湧いて來る。忠實に筆を運んで行つたイリヤの勞を多としなければならぬ。父がブーシキヤなどと肩を並べた「大作家」といふ子供達のおどけない心や、晩年に至つてトルストイが凡てのものを否定し、軍務、文學、宗教等に於ける努力を否定した悲しい呻吟の聲までもが節りない筆で描かれてゐる。譯文もまたそのない好譯である。卷頭の數葉の寫眞と德富健次郎、昇曙夢兩氏の序文を載せたるも宜し。日本のトルストイ研究者に一本をすゝむ。(價〇・八五)

### △屁の喝破

溝口白羊著  
本郷書院發行

題を見ただけでは大分突飛な名の附け方であるが、中味は眞面目な議論で充たされてゐる。光つ屁の生理的な解剖から始まつて、著者の軍事、經濟、政治、藝術、法律、家庭論に言及してゐる。例へば婦人問題等に對して著者は同情ある意見を持つてゐる。ユーモアを愛する人々や、夏時の讀みものとして一部の人々には喜ばれるものであらう。紙質はなほ選擇するの餘地ありと思ふ。(價〇・八〇)

### △救世軍觀

金森通倫著  
救世軍發行

基督教界の耆宿金森通倫氏が身を投じて救世軍に入つた告白である。金森氏の入隊によ

りて「日本の救世軍は新たに一師團の戦闘力を増したものである」と言はれただけであつたのである。神學や哲學の理論から一躍して純乎たる信仰の生活に入つた氏の熱心な宗教生活を窺ふべき好參考書である。(價〇・一〇)

### △婦人問題早わかり

高野重三著  
警醒社發行

高野君は商人であるが頗る進歩的の活商人である、ことに近年婦人問題に熱中して或は講演に、或は新聞雜誌に、絶えず意見を發表して婦人運動の有力なる味方となられてゐる吾人が日本の婦人に代りて厚く感謝せねばならぬことである。近著「婦人問題早わかり」は昨年來の同氏の意見を集めたるもの、附録としてオリヴァー・シュライナーの「婦人と勞働」の抄譯がある。本書の特色は誰にも分る様に婦人問題の意義を極めて親切に説明したことである。例證は卑近であると共に切實である。著者最後に叫んで曰く「茲に於て日夕算盤を前に、厘毛の損得を考量して餘念なかるべき素町人の分毫を忘れ敢て自ら掘らざる、漫りに天下識者の驥尾に附し、茲に婦人問題を提げて、謹んで世の批判を問はんと欲するも亦萬止むを得ないのである。婦人と勞働」は近代の名著の一つである。この抄譯は甚だ便利である。婦人問題をいふもので必讀の文章である。(價〇・八〇)

### △殘飯

永井柳太郎著  
南北社發行

時に人の意表に出てゐるとするは永井君の特色である。殘飯の一語何だか人を馬鹿にするやうだが、中味は眞面目な論文である。第一



章天地有情、第二章超人耶穌、第三章死生、第四章現代政治、第五章女性、第六章黃人白人、第七章凡非凡に分つ。第一章にては「神秘の威嚴」と「何人か詩人にあらざる」とを推すべく第二章にては「耶穌の耶穌教」と「耶穌の故郷とを推すべく、第三章にては「復活」を推すべく第四章にては「軍備擴張の裏面暴露を推すべく、第四章にては「新しい女」「愚母愚妻に與ふ」を推すべく、第五章にては「白人の土地と黄人の勢力」とを推すべく、第七章の人物論は皆面白。永井君は多趣味の論客である。即ち西洋風の政治家である。ことに同君が宗教を論じ、婦人問題を説くは現代の少壯政客中に蔚然一頭角をあらはすものである。氣宇瀟灑の精神は同君の特色である。青年を刺戟し世界的眼光と見識とを養成せしむるに足るものである。(價一・〇〇)

### △自修論

安部磯雄著  
廣文堂發行

修養論者として安部磯雄氏の位置は既に定評がある。本書は同氏近年のこの方面の思想を集成したるもの、三十三編の論文いづれも著者の人格と識見とを示して餘りがある。『修學的理想』に於ては同志社の特色ある教育法を見るべく、『成功の眞意義』『努力』『智慮ある青年』『奉公の精神』『使ふ人、使はる人』等皆安部教授獨特の修養論にして現代青年の裨益を受くべき文字である。殊に「龍堂和尚」は明治の一高僧の面目を躍如たらしむ。中村敬字先生」も亦好文字である。「英獨文學の特色」「米國學生の美點」皆他山の石以て磨くべしである。演説練習法」と「演説練習の思想的方面」は中學時代の人々のみならず一般參

考として好刺戟を與ふ。『選手論』、「野球界に對する新希望」皆安部氏ならではと思はるゝ文字である。著者序して曰く「人は實に多くの能力を有す。此等の能力を生出來得るだけ並行的に發達せしむることは幸福なる生活を爲す唯一の途である。……バランスの取れた人、即ち釣合の取れた人、これ吾人が追求せねばならぬ理想であるまいか」と。自修論はこの原理を敷衍し説明したるもの、吾人は之を修養に志す青年諸君に推薦す。(價一・八〇)

### △生の創造と教育

稻毛 詠風著  
内外教育評論社發行

教育界の少壯論客詠風君の最近論集である。僕は本書の上篇を好む。『創造本位の教育』。『教育の第一義』。『文學的教育的價値』等觀「教育の第一義」文學的教育的價値」等の生活は一言にすれば自我の生命を熱愛尊重し且つ無限にこれを發達せしめることを第一義とする生活である。沈滞せる教育界に稻毛君の如き思想家あるは興味あることである。教育思潮の一面を理解するには良き小卷である。(價〇・五〇)

### △精神生活

中村嘉壽編著  
安樂榮治發行

巴里の自由基督教の牧師として有名なるシヤール・ワグナーの單純生活を日本風に書き直したるもの、誰にでも解ると受け合へる。原著者と譯者に敬意を表して單純に紹介す。しかし有益なる小冊子である。(價〇・二〇)

### △カウル舊約聖書の宗教マルテ

前川島潔譯  
前川文學開發行

次號に詳譯すべし。

### △歐米都市とびく遊記

田川大吉郎著  
二松堂書店發行

旅行日記は六ヶしものである。見物に熱心すれば書く時なけりば書く時がない、田川東京市助々半年餘の世界一週に於てその忙はしきとびく遊覽の途より都新聞に寄せたものである。一巻の美裝をなして現はれたるが本書は田川代議士は鋭敏なる頭腦と犀利なる批評眼を有するを以て僕が多年畏敬したからである。殊に政治家中最も熱心なる宗教者の一人として奥に尊敬してゐるからである。しかるに朝鮮、滿州、露西亞の部分は一向珍しい記事がない。僕聊か失望した。しかし英米の見聞録に至りては中々參考となる事が書いてある。殊にホテル制度や都市の美觀や衛生や食物供給の觀察など流石に専門家の觀察であると言背せざるをえない。前三分の二に稍失望したる記者は後の三分の二に於て十分に満足した。著者の結論は「残念だが僕は西洋に上るといふので僕も異議はない。サラ」したる文は清風のごとく鎖夏的好讀物である。(價一・二〇)

### △世の中

三宅集二郎著  
實業界の世界社發行

雪嶺博士は現代日本の指導者の一人であ



## 新刊批評

### △藝術の革命

木村莊八譯著  
洛陽堂發行

藝術界の最近運動は後期印象派立方派、未來派等より成り立つ。しかも吾人の知る所は極めて断片的である。本書は是等の方面に關する専門の著述を譯したるもの、之に加ふるに著者の「三人の畫家」と「藝術上の革命運動」を添ふ。後期印象派中にてはセザンヌやゴッホやゴーガン等の評論や詳傳がある。ゴーガンの標語は「藝術には只に革命者然らざれば彫寫者あるのみ」である。著者は彼等を評して「彼等には宗教がない。描く事が彼等の宗教であり、藝術であり、生活であつた。彼等の前代に見る多くの畫家は基督教徒にせよ、無神論者にせよ、等しく共通に生活に自覺する所が少なかつた。彼等は夫に反して明確にライフを自覺し味識してゐた。描かざるを得ないで描いた畫家、生きなければならぬで生き切つた畫家、描いて生きる事は彼等の病であつた。一の本能であつた」と。しかし吾人は挿入せられたる數十葉の繪畫は、二三を除いてはその妙味を見感することが出来ぬ。譯文は生硬であるが至りて年弱き著者の事業としては一の成功である。(價一・七〇)

### △ジャンク暗を破りて

ロマン・ロラン原著  
三浦關造譯

ロマン・ロランは佛蘭西文壇の新人でその浩瀚なる小説ジャン・クリストフは彼をして一躍歐洲騷壇の巨人たらしめた。三浦關造君

は最初の二卷を譯して「闇を破りて」と題した。

田舎樂師を祖父とし天才あれども酒に身を崩したるこれも樂師を父として教育なき料理人を母としてライン河畔のいづせき家に生れたのは主人公クリストフである。幼兒の眼に映ずる大自然とその音樂は巧みに描寫せられてゐる。クリストフの苦しみ多き幼童時代、音樂に對する好愛、大音樂者との邂逅、天真爛漫たる叔父ゴットフレ、オットーとの友情、ミンナとの初恋、の描寫眞に逼り、息をはずまして讀ませしむる。本書は慥かに大小説である。三浦君が熱心して早くこの事業を完成せられん事を望む。譯文は極めて元氣あるハツキリした文體であるが、佛文の譯として粗に失してはゐまいか。中々達意の筆致であるが、或人が佛原文と對照したるに或處には一二ペーシも省略し、對照したるに或處には一と多しとの事である。殊に音樂の記述に關する條に多いとの事である。記者は電車と汽車中で讀了したる故に缺點を見出かねるが二七一ペーシの川舎屋とあるは *Caintry house* の譯であるまいか。すれば別墅位に譯すべきのであらう。ララー・ケリクとあるは、フラ・オ・ケリクもしくはケリク夫人と譯すべきである。流石に佛蘭西の小説である。ラインの河のやうに、その上に漂ふ露西亞のやうに明るい、氣持のよい小説である。露西亞の小説とは好個の對照である。吾人はロランの影響の日本の文壇に大ならんことを祈る。(價一・三〇)

### △新エルサレムとその説教

鈴木大拙譯  
丙午出版社發行

スエデンボルグが千七百五十八年ロンドンにて出版したるラテン原書の英譯の重譯である。原理は新しきエルサレムと天界の所に關する天界的教説、及び新しき天と新しき地に關する序品」といふとか。スエデンボルグの人物に就いては世既に定説あれば改めて述べる必要がない。鈴木氏の譯文も流暢にして明晰である。表装も清楚である。その見本として左の一節を引用す。

「人の生命と云ふはその人の愛即ち是なり。その愛のある如くにその生命あり、否、全人格を擧げてその人の愛の發現なり、而して實に其を以て其の人たらしむる所以は、その所主の愛、即ち能治の愛これなり。此愛はそれより分れ出づ所の一切の愛をその治下に屬せしむるものとす。此く分流せる諸愛はその形式を異にすれども、所主の愛の中に藏せられざるはなく、相依りて一國土をなすものとす。所主の愛はその國王のごとし、元首のごとし、自餘の諸愛を統治し、またこれを中位の目的として、之によりて、おのれ自分の目的を計畫し、企畫す。此おのれの目的とは即ち諸愛の主點となる處、またその窮極とする處、而して所主の愛は直接に、間接に、之を遂行せんとす。一切の事物に優りて愛せらるゝは、此所主の愛に關する所のもの也。」(價〇・六〇)

### △日蓮上人

須藤光暉著  
金尾文淵堂發行

既に法然、親鸞、弘法を傳したる南翠氏の著である。氏の名僧傳は慥かに出色の著述である。物語體として興味を持たしめたる苦心は察するに餘りあり。日蓮上人の降誕よりそ



の修業、開宗、迫害、勝利、大往生に至る迄漏す所がない。辻説法の一節を抄録する。

「翌日から單身突元として佇立むたのは鎌倉の眞たゞ中、小町大路の辻であつた。道傍に突き出た青石の上に立つて、四方にきつと日配ると、東は葛西ヶ谷東勝寺の塔を壓して、屏風山名の如く引繞らし、執權邸、若宮八幡、大臣山の翠松に隠見する。北は日前に幕府の築地に對して、遠く源氏山の翠微を望む。西は琵琶小路、問註所、南は一路直ちに蘭橋に到り、由比、小坪に通ずるのである。日蓮は今この景勝の地を占めて徐に口を開いた。

「往來の人々、我は末法濁世の衆生を救はんがため、大聖世尊の下されたる御使、唯一眞乗法華經の行者なるぞ。現世の惡業を免かれ、未來の成道を得んと思はん人々は來つて如來の金言を聴き、一佛乘の縁を結んで妙法の化を受けよや。」

かゝる能文なれば一氣に讀了すること難事でない。日蓮は我國の偉僧、この人詳傳なかるべからず、而して本書は最も面白い日蓮傳の一つであらう。(價二・〇〇)

### △新家庭講話

小此木武子著  
大日本雄辯會發行

著者久しく米國にありて見聞したる事實に基いてこの書をなしたのである。本書は社交、食堂と臺所、改良洗濯法、家庭科學、米割みやげ話等に大別して、米國の家庭生活を詳説したものである。米國交際術を知らんとし、または日本の家庭生活の改革に志す人々の良參考書である。訪問に關する心得や、臺所や家庭科學や皆傾聴すべし。殊に著者が愛婦にこの書を獻げられたるは誠に氣持よきことで

ある。(價〇・八〇)

### △基督と人生

柏井園著  
北文館發行

柏井園氏の思想の穩健にして、その文章の圓熟したるは氏が多くの愛慕者を有する原因である。又文學趣味の豊かなるも一つの原由であらう。本書は同氏近年の作物を集めたもの「耶穌の啓示したる人生の地圖」、「耶穌の經驗と教育との一致」、「ヨハネ傳の宗教的價值」、「ボロロの自傳」等精選を值す。ロバート・ソーン傳中の「自然」の一節を錄して著者の筆致を紹介す。

「ロバートソーンは手紙のうちに語りに曰く、路は奇峰削立せる間を曲り曲りて行く。余が此處を過ぎし日は半日好く晴れしが其後雨瀟ち濡れぬ。されど雨さへも景色の雄大を加へ、近き山々をめぐりてさま／＼に卷舒する雲はます／＼景色の壯大を増したり。」(價一・二〇)

### △文藝思潮論

厨川白村著  
大日本圖書會社發行

厨川君さきに「近代文學十講」を出して俄かに文名を高めた。「近代文學十講」は主として近代文藝の研究で、歴史の潮流の叙述を欠いた憾みがあつた。本書はこの缺陷を充たさんとする努力である。本書が豊富な引例を以て異教思想の勝利を證明すれども現代思想は極めて複雑である。一體人の思想は著者の考ふごとくはつきり區別の出来るものでな

い。舊約全書の中にも希臘思想に類似したるものは創世紀にさへ認むることが出来る、イヌタール人エホバの崇拜よりバビロン、アスタールテ等の神々に轉ぜんとしたは即ち著者の異教思想ではないか。箴言は何であるか、雅歌は何であるか。いづれも著者のいふ所の異教思想である。ヘブライズムだつて人の抱いた思想であれば著者の思ふやうに單純のものでない。ヘレニズムにもソクラテースのやうな正義と永遠の生命の觀念の強烈にして、ヘブライの豫言者を想望せしむるものがある。又初代基督教時代には羅馬帝國は随分腐敗し、ポンペーの廢墟の中には嘔吐室といふ出しては改めて又食慾を満たしたといふでないか。この時にあたりヘブライズムの貢獻は大したものである。新約全書に「世」を惡みたる個所の多きは宜しく此背景を見なければならぬ。爾來二千年その間の訓練に於て古代文明の暗黒面は幾分か光明を帶ぶるに至つた。現代文藝思潮は随分複雑である。バーナード・ショウのごときは劇壇の清教徒と目せられてゐる。ゴル・ズウォーセーのごときは哀憐と正義の觀念極めて強く異教思想に征服せられたとは思はれない。要するに現代文化の生命はヘレニズムもヘブライズムも科學思想も經濟も包擁してゐる。一つのイイズムを以て之を律せんとするは大なる誤謬である。依つて吾人は藝術の新潮のうちにヘレニズムを認むるもそれが「花やかな異教時代の背に歸つて行く」とは認むることが出来ぬ。しかし本書は文藝思潮の研究の一參考書として有益なる著述である。若し讀者は悉く之を信ずれば大



其實質内容に於て、かく分離絶縁の地位に在るべき者なる乎。

予輩の信ずる所を以てすれば宗教と政治と分離すべからざるのみならず、固と政教の必ず一ならざる可からざるを信ぜんとす。蓋し眞の宗教は根底に於て政治よりも深く聖明なり而て宗教は常に政治に目的を與ふると共に絶えず政治を指導し政治を向上せしむ故に宗教を離れたる政治は根底なき政治と云ふべく、亦政治を離れたる宗教は何等實地に勢力なき架空の宗教と云はざるべからず。予輩此の意味に於ける政教一致を主張せんとす。則ち政教一致の意義は純粹に正確に其の根本義に遡りて解すべき者にして若し之を通俗の意味に解し、現在の僧侶又は神官は政治に參與せざるべからず、政權は教權に讓步せざるべからずとの旨意にあらず。

抑も政治と宗教と一致すべきはなほ美術と技術の一致すべきが如し。現在の如く美術品と實用品との間に大なる差異あるは、現社會生活の貧弱と缺乏とを示すものにして、凡ての美術と凡ての技術の一致は、總て社會生活の豊富と善美とを示すものと考へらる。殊に政治と宗教との一致は社會の平寧祝福の淵源たるを思はしむ。予輩かくの如き社會を指して文明社會となす。故に今日の所謂文明國の如きは此の域を去る甚だ遠き者にして、自ら文明を譾稱する假裝的文明國となさざるべからず。开は兎も角政教は前述の如く其性質上自ら一致すべき筈の者にして、政教の分離とは政治其の眞髓を失ひ宗教其精神を失ひたるを明證する者なり。

目下我が國に於ける宗教、政治の現況如何。佛耶神の三教各相對峙して、各其無數の信徒を有す。而て其僧侶若くは傳道師なる者の信仰は果して如何、今暫く僧侶に付きて見るに彼等の多くは宗教の何たるを心得ず。唯だ毎朝無意味に讀經し又は死者に引導を爲す外何事も人生の眞諦と相關せず。謂はゞ無能の徒が衣食の爲めに法衣を纏ふと云ふに過ぎざらむ。今日の耶蘇教の傳道師又は神道の神官の如き、其心術に於て僧侶と何等其高卑を判別するに難し凡て彼等は宗教家にして宗教を知らず。何ぞ罵んぞ又政治の眞意義を心得居るべきや。更に譲りて政治専門の政治家なる者を見よ、彼等は口に人民の爲め又は國家の爲めなる空言を弄するも、彼等の精神何ぞ茲に在らんや。彼等は利害の爲め、若くは體裁を飾る爲め心にもなき虚言を弄する者にあらざるやを危まる。要するに彼等政治家なる者は事實政治の何たるを自覺せず、假令之を知ると雖も之を行ふの勇に乏し。況んや政治の根底たる宗教を知りて、謙然之に奉ずるを得んや。彼等多くは宗教を以て僧侶の關すべき事柄なりとす。

憫むべきは我が現代の政治家也、蓋し思ふに現下の頽勢を逆轉し廣く民をして生民の道を樂ましめんとせば、今の時勢に在りて政論も政略も其效力餘りに薄弱なるの感なくんばあらず。必ずや信仰ある政治家の眞勢實力に俟たざるべからず。蓋し時代は此人の出づるの日を待つや切なり。(丘民)



## 惟一館たより

△六月は學生の試験、七月は休暇の季節である。それで此頃になると毎年惟一館は急に寂しくなるのが常であるが本年は少しもそんなことがない。これで見ると本教會が如何に著しき發達を遂げたかを認むることが出来る。六月の重なる説教は「内ヶ崎牧師の「自己超越の道」、「自然の愛慕」、吉田絃二郎氏の「罪人の涙」三並氏の「創造の歡喜」、原田長治氏の「キリストの涙」、「改革の根本標的」等であつた。

△七月五日(日)「人生の背景」失敗の恩寵」と題して内ヶ崎牧師、「廿四時間を如何に暮すか」岸本能武太氏が説教された。

△十二日「情操の力」といふ題で安部磯雄氏、夜は相原氏が「耶穌の生活」原田氏が「眼の着け所」といふので演説された。

△十三日から十八日迄第三回キリスト教夏期講習會が開かれた。講話には原口竹二郎氏の「宗教眞理の特質」、吉野作造氏の「現代政治問題概論」、永井氏の「文明史上に於ける基督教徒の一大貢獻」、杉浦氏の「基督教の終末觀」、額賀氏の「將來の基督教」、高橋堅氏の「生物學上より見たるベルグソンの哲學」、三並良氏の「最近の宗教哲學について(トレルチ論)」、「内ヶ崎氏の「近代印度に於ける宗教改革運動」等世界の大問題を日本の大家が講演せられたの

だが、驚く勿れ毎日の出席者平均三十名であつた。併し集つた人々は等の大問題に大趣味を有するいはゞ一騎當千の人々だ。従つて講師も三千人にでも説くかの如き態度であつた。いづれも本誌の異彩となつた。終りの日に講師と會員との懇談會が催された。三十餘名が次々に立つて自己紹介をして感話を述べた。遙々九州から來た某君が曰く、この講習會は日本の名士方のお顔ぞろひの事だから聴衆は定めに堂に溢れてゐる事だらうと思ひきや「大なる家秋の夕哉」の感じがしたとやると。太つた身體をゆらりとおこした内ヶ崎氏曰く深淵なものの高尚なものには小數といふのが元則だ小學校は生徒が多い併し中學高等と進んで大學院にでもなつて見給へ一級に一人か二人といふ有様でないか我輩と行動を同じうする諸君は一粒選りの方々だ即ち大學院生だ意を強うして可なりだとやると原田君が立つて内ヶ崎先生の説教には幾百の人が聴きに來るが僕がやると二三十人だこれで見ると僕は先生よりも深淵偉大だとやると、大森の牧師三井氏は曰くきさく大勢といふ事がある、やれ自由だとか抱擁だとかいつてみたところで稻荷さんや金比羅さんが時を得顔に躍りだしてもよし／＼と放つておくかね。大學大森は風光明媚鮮魚膳に飛び込む殊に蟹の名所だマナの生へる靈地だ。時々大學院の冷た

い空氣から脱れて來たまへとやられる、三並氏が駁せらる。次に立つて相原氏が曰くその昔日本の進歩的基督教をもつて任じた金森氏がこの度救世軍に投じた告白に舊きが故にとあるが之は別に不思議ではない進んだ階段にあつても若しその空氣を十分に味はぬなら舊い道に歸るといふのが當然だと説かれた、遅れて來られた岡田哲蔵氏例の如くにこゝし乍ら僕は十數年關係して來た學校を退職した。それは宣教師が集つて會議した結果岡田は異端者だと決議された爲だ。是は僕にとつての迫害だ。諸君は自由の空氣の中に生れ自由の空氣を呼吸してゐられるから大迫害の中に獅々吼をした偉人の心事を解し給ふ事は出來ない、僕はこの點に於て宣教師諸君に感謝すると笑はせらる。かくて湧くが如き趣味の中に散會したのが午後三時であつた。

△十五日の夜は第二十八回通俗講話會を開いた。「アイヌの生活狀態」鈴木文治氏、「平凡の偉人」高橋介衛氏が講話された。來會者百五十名であつた。

△十九日は「南紀の自然と人」といふので内ヶ崎牧師「病中感」太田眞一氏「大和民族の將來」原田長治氏が演説された。同日禮拜説教後松村介石氏「三十九年間の信仰變遷進歩の實驗談があつた。



めた程壯烈であつたこと、是等は、皆往年の乃木大將を思ひ起させるものである。夫人は矢張り、舊道德の下に立派に倒れた婦人である。

今日、道義地を拂ひ、武人高官にして罪を國法に問れ、恬然として恥ぢず中には死にそこなつて恥を江湖に曝してゐる者がある時代に、婦人の死や實に好箇の刺戟劑である。ノラやマゲダの歡迎される現代に其の沒我的思想は確に珍らしいことである。余も夫人の精神に滿腔の感謝を惜まぬ者である。然し、其の探られた形式には全然賛成することは出来ない。和田氏も形式に重を置かず、夫婦間の精神の歸着點を倫理的に定めたいと言つて居る。更に進むて余は夫婦間の關係は無上神聖な宗教的なものでなければならぬと思ふ。而余は此問題に對し正面から詳細な研究を試みやうとはしない、唯この問題から偶然强者の道德といふことに思當つた。夫人は死に至るまで柔順であつた。妻として盡すべき道は充分につくされた。唯、此處に問題となるは夫の道である。中佐は夫人を愛して居たらうか。内にあつて善く家政を整へ外に後顧の憂なからしめた妻に對し親切であつたらうか。

元來、東洋殊に吾國に於ては下が上に仕ふる道は非常に發達した。忠と言ひ孝といひ東洋道德の精髓は皆弱者が强者に仕ふるの道である。然し君王が臣下の靴の紐を解いてやる精神はあつたらうか。上が下に、强者が弱者に仕ふる道は殆どなかつたと言つてよい。これは確に不完全な發達である。人間靈魂の尊貴を認め個々人平等の精神の上に發達せる道德に非れば決して完全なものと言へない。吾國古來、忠臣孝子烈婦の美談に乏しくない。されど明

君、慈父、良夫(若しかくの如き熟語ありとせば)の美談は至つて少い。あるとしても前者の如く重きをおかれてゐないのである。米澤藩主鷹山公が細井平州先生を聘せし時、自、郊外に出て先生を迎へた態度は一國の君主として慇懃を極めたものであつた。鷹山公の如き確に楠公以上に偉かつたと思ふ。

弱者の道德もとより必要である。同時に强者の道德は更に必要である。世に忠臣孝子なきを憂としな。寧ろ明君明主の出てむことを望むのである。

カアライルのサルトー・レザルタスの中に有名な句がある。『今や私は無限の愛と憐憫とを以て吾が同胞を見ることが出来た。貧しく彷徨へる兄弟よ、諸君は疲れてゐるではないか。私と同じやうに鞭打たれてゐるではないか。假令諸君は王侯の紫衣を装ふも或は乞食の襤褸をまとふとも、ひとしく疲れてゐるではないか、そして諸君の休息の場所は唯墓にすぎないのか。オ、わが同胞、吾が兄弟よ、何故、私は諸君をわが胸に抱いて諸君の頬をつたふ涙を悉く拭ひ去ることが出来ぬだらう……』

まことに此の心である。天父の愛の下に一切平等の精神が日本の上下を通じて普及するならば、夫婦間の問題の如き忽ち氷解せらるゝであらう。暖かいホームといふ感じのない日本現下の家庭に春風の如き和氣が溢るゝであらう。(めがた生)

## 宗教界亦革新せよ

改革の先驅は宗教界の責務なり、宗教先づ革新して其餘影政治界に及び其他の社會に及べるは歐米の歴史を飾る基督教の光榮な



り。然るに我國に於ては常にこれと反對にして、政治界其他の社會に改革の聲あがりて漸くにして其波動によりて宗教界の改革を促さるゝを見る、これ日本現代の宗教の時勢に遅れ、生命の枯渴せるを證するものにして、宗教家の以て慚愧すべき處なり。先きに憲政擁護の運動起り、今年又海軍腐敗事件あり、政界漸く覺醒の曙光を見んとする時にいたり、漸くにして宗教界は其餘波を受け永き腐敗の偽善を隠し得ず、西本願寺問題一度暴露し聊か痛快を感じしめたるを初めとし次いで熱田神宮事件あり、今や又基督教以外の宗教として余の最も尊敬を拂ひたる我が郷里岡山に於ける黒住教廳に於ける、財政案亂問題起るにいたれり、又日蓮宗に改革派なるもの現はれ東本願寺派亦財政のため改革の聲の起らんとすと傳ふ。右の如き大腐敗大暴露は未だわが基督教界にはあらざるべしと雖も、そは教勢の微弱なると、罪比較的にして世を騒がすに足らざるのみ、五十歩百歩の腐敗偽善は基督教界にも度々耳にする所なり、彼の往々外國財團のパンに馴れて不正直なる傳道をなせるの徒を見るは一面惘然の情なきにあらねど實に唾棄すべきなり。

海軍收賄事件は歎すべしと雖も尙恕すべし、實業界の腐敗、政界の腐敗も然り、唯人の精神を司り信仰の中心として、一世を導くべき使命を有する宗教界の腐敗にいたりては實に歎じても尙餘りあるべきにあらずや。

政府は相次いで宗教界の腐敗にこりて此度法規の改革を計らんとすと傳へらる、宗教が政治によりて監督さるゝにいたりては實に寺も社もいつたものにあらず、あゝ今にして親鸞上人を來ら

しめ、宗忠をして再び生れしめしならば如何に悶ゆる事ならむ、そして若し基督の再現するあらんか世の人は再び彼を十字架に釘つけずんば止まざるべしあゝ戦慄すべき哉。

さはれ宗教界の腐敗は素より宗教の腐敗にあらず僧侶腐敗すと雖も佛典は穢すべからず、牧者墜落すと雖もバイブルは永へに神聖也。

政治に遅れて改革すとも改革せざるよりはよし、遅ればせながら此時を以て日本宗教界に徹底的の革新をあらしめよ。殊に光榮ある歴史を有する我基督教は徒らに世に同ずるなく、先驅して一世を指導し、改新の犠牲に十字架を擔ふべきなり。唯に財政の問題のみならず信仰に於て復活の生命にいきざるべからず(星島)

## 宗教と政治

歴史上我が國に於ては、所謂宗教と政治とは外觀上既に千有餘年の昔に於て早くも其分岐を見たり。更に之を歐洲の歴史に徴するも、最も甚だしく教權の束縛を蒙りしは、中世時代の事にして最早今日に於て政教分離問題は世人より既決問題として殆んど一顧の價值なき者と看做さる状態に在るが如し。かゝる歴史的趨向を以て、自然の成り行と觀ずる者には、政教分離の現状に對して何等の異論も挿まざるべし。然れども宗教と政治とは



ん爲めである。然るに頑迷固陋なる時勢後れの宗教心を無理強ひに信仰せしむるを存在の理由とするならばこれ實に基督教の精神に背くものである。反基督教の精神である。然るに青山女學院は益々メソヂスト型の婦人のみを養成するに決定したらしく思はれるのである。かくの如きは必ず失敗に終るにちがひない。

吾人は本來、青山女學院を尊敬する者にしてその發達を希望する者である。故に此の直言を呈するのである。青山女學院同窓會の諸君は手を懷にして傍觀して止むべきや。諸君愛校の精神あらば母校の爲めに奮然として起たれんことを希望するのである。

これ獨り青山女學院の問題でない。少くとも日本に於ける基督教主義女子教育家の大に考ふべき問題である。(甲島生)

## タゴールのゆふべ

六月二十五日午後八時麴町區五番町女子英學塾の講堂に於いて、詩人タゴールの爲めに一集會が

催された。主催者は慶應義塾大學教授ドッヅ氏夫妻その他であつた。これより先、印度バロダー王國の國立圖書館長クダルカナル氏歐米視察より本國に歸らんとする道すがら東京に滞在してゐた。同氏は印度の神教會の會員にして大詩人タゴールと同じ宗教團體に屬する人である。

タゴールの詩は漸やく日本に於いても愛讀せらるゝに至り、過般丸善に着したる彼れの詩集及び脚本は直に賣れ切れとなつた程であつた。

會は午後八時半頃ムチンダアル夫人のオールガン伴奏にてムチンダアル氏のタゴールの祈の歌の獨唱があつた。抑揚は乏しいが何となく調子良い音樂であつた。引き續いてシャイルスキ嬢はタゴールの『少年歌』を極めて巧みに朗讀せられた。

朗讀者のけだかく麗しき姿と、その玉を轉ずるが如き聲と、大詩人の無邪氣なる思想と相待ちて聽衆を喜ばした。續いてフユース氏夫妻がタゴールの脚本を對話した。これもなか／＼面白かつた。

また某嬢のピアノの奏樂があり、クダルカナル氏はタゴールの生活に就いて詳かに述べられた。本

社の内ヶ崎氏は日本に於いて最初にタゴールを紹介したる緣故よりプログラムの中に加へられてタゴールの詩の日本語の自譯數篇を朗讀した。印度人某氏の米國に於ける印度學生の現狀に關する報告ありて、またムデンダール夫人の奏樂を以て十時半頃會を閉じた。本夕の會合は全く國際的に英米人を主として、日本、印度の紳士淑女多く集り、極めて興味ある會合であつた。

ラビンドラナース・タゴールは印度の自由宗教の運動が生み出したる最大の天才である。吾人は常に此の運動に對して敬意を表してゐたものである。故に此の名譽ある詩人の爲めに東京に於いて一夕の小集會が開かれたことは日印兩國民の友情を温むると共に、東京の一部の人士をして大詩人に對する尊敬の念を新たにせしめたのである。

(R・T生)

## 齋藤中佐夫人の死と

### 強者の道德

去る六月二十七八日兩日、都下の諸新聞に陸軍大學教官齋藤中

佐夫人の死を掲げ、同夫人は土屋大將の娘にして三十六年齋藤氏に嫁し、翌年一女を舉げしも直ちに死亡せるより非常に落膽し、爾來ヒステリー症に罹り、煩悶の結果終に自殺せるの事實を傳へた。越て七月七八兩日に亘り東洋高等女學校學監和田氏が朝日新聞に『日本將來の妻道』なる標題にて齋藤中佐夫人の自殺は決してヒステリー症に原因せるに非ることを明にした。即ち夫、齋藤氏が居常、夫人の態度に不滿を感じ、心が變つて居るから自然、態度に現るるのであるといふ風に些細な失策も一々貞操の問題まで押つめて詰問するのであつた。死の前日も何かの事から接客上に厚薄をつくるの誠意なきを責められた。そして其の翌日夫の出勤前、夫人が如何心得て宜しきやを尋ねしに生家へ歸れとの答なので夫人は更に生家へ歸るやうならば生きては居りませんと言ひ夫は家を汚してならぬと言ひのこして其儘出勤された。「生家へ歸れ」これ正しく離婚の宣言である。而も「何等の事あるも生きて再び生家の門を入る勿れ」と嚴父の教訓は金鐵より重い。此際夫人のとるべき途は只一死以て夫の疑を解き貞操を明にし、一方嚴父の訓言を守るより外ないのは論理上當然の歸結であると和田氏は言つて居る。氏は更に此事實の前に日本將來の妻道につき廣く世の注意を喚び起さうとした。

夫人の死にして和田氏の言ふが如くむば確に見上げたものである。夫人は女子大學の家政科を修め、高い常識を有つて居たが、生家は土屋大將の嚴格な武士的家庭であつたこと、十數年の間よく、家庭の苦痛に堪へ、片言隻語も口にしなかつたこと、其の最後は檢視の軍醫をして、かゝる立派な自害を見しことなしと驚嘆せし



## 基督教主義女子教育家

### を戒む

基督教主義の學校が、やゝもすれば時勢の進歩に伴はずして、停滯し固着しやゝもすれば時の潮の爲めに置き去りにせられんとする傾向が見える。近頃新聞紙の問題とせなりたる同志社の悶着の如きは此の事實を證明するものである。幸にして同志社當局者は學生の要求を是認して、多くの専門教授を増聘し或は圖書館を擴張するの計畫を立て、此の難局を收集したるは吾人同志社の友を以て任ずる者の慶賀する所である。吾人はこれを機會として同志社が堂々たる大學の實力を示すの時の來らんことを期待するものである。然るに多くの基督教主義の學校の中には改革すべきを改革せず姑息的の綱縫策を以て満足する者あるは怪訝に耐へざる所である。殊に基督教主義の女學校に於いて著しく此の傾向を見る。嘗て女子學院に於いて一大事件が突發して矢島校長の退職となりたるが如き何等かの事實を語るものである。最も

これも圓満に解決されたのは女子學院の爲めに祝すべきである。然るにこゝに吾人が默する能はざる一事件が發生した。吾人は忠實に事實を語らんと欲するのである。

岡田哲藏君は吾人の同人にして、毎號その得意の英文を以て本誌を飾られるのである。同氏は青山學院の出身なるが故に陸軍大學教授たるの傍青山女學院に一週二時間英文學の授業を受け持たれたのである。吾人はこれ迄青山女學院を尊敬したるは岡田氏の如き思想家にして、且つ學者たる且又好個の紳士たる人物をその教授の一人として有してゐるからである。基督教の信念に立ちて近代思潮を同情を以て理解する岡田氏の如きは稀なるものである。青山女學院に於いて青山女學院の上級生間に往々にして見識ある婦人の存在するは他にも原因あるべけれども、岡田氏の感化與つて力あることを疑はない。女學生の岡田氏に對する尊敬も甚だ大なるものがあつた。吾人は青山女學院が倍々此の態度を進めて、多くの岡田氏をその教授の中に有するに至らんことを希望してゐたので

ある。然るに何等意外のことぞや、岡田氏は俄かに青山女學院を辭職せざるを得なくなつたのである。

聞く所によれば米國の傳道會社はメンヂスト教主義の女子教育の視察者を日本に派遣した。此の視察者は青山女學院の生徒中に自由主義基督教の信仰を有する者の少からざるを見て驚きその原因を穿鑿したのださうである。而して岡田氏はその原動力と認定せられたのである。岡田氏は紳士である。故に同氏は青山女學院の内部に於いてその學校の方針を誤るが如きことは決してこれを發表しないのである。然るに當局者は同氏が六合雜誌に於いて自由基督教の意見を發表するが故に、生徒は本誌を購讀して同氏より間接の感化を受けるが故に同氏の教授たるは望まじきことでないといふに歸着したのである。依つて同氏は七月中旬潔く青山女學院の教授を辭したのである。

話の筋道はかく簡單である。然しながら岡田氏を學校以外に退けても如何にして六合雜誌を生徒の手より奪ふことが出來やうぞ。或は本誌を排斥

することは不可能でないかも知れぬが、近代の科學、哲學、文藝の感化より頭腦明敏なる女學生を自由ならしむることが出來るか。之れ決して不可能なことである。岡田氏の如き識者が内部に居りてこそ基督教の信念と近代思潮の調和を計りて有望なる女學生をして中正の道を歩むことを得しめたのである。然るに岡田氏を危險視して、退職を促したるは時勢を見るの明なき驚くべきである。

青山女學院の將來は極めて暗慘たるものである。生命なき機械的宗教ぐるゐる危險なものはない。青山女學院は將來舊い頭の婦人宣教師に支配せられて碌々たる平凡なる有るも無きも同じやうな卒業生を出して満足すべきであるか。知らず青山女學院の當局者は如何なる成算がある。

一體基督教主義の學校の使命は宗派心を養成せんが爲めではない、日本の文明を進むる爲めである。善き男と善き女とを造る事である。生命の充實を圖り創造的態度を獎勵することである。青山女學院存在の理由は決して日本婦人をメンヂスト化する爲めではない。日本婦人の創造力を増進せ



ミンスター寺院の戴冠式用椅子の附近に於て一個の爆彈が破裂した。爆彈は椅子と其後ろの衝立との間なる狭い棚に置かれたのであつた。椅子の背の彎曲した木材部の一部と、衝立の彎曲した石の一部とが破損して飛んだばかりで、被害は極めて少かつた。爆彈はニッケル板の中へ鐵片をつめた物であつた、其の場所に婦人用の毛のボアと、一冊の案内記と、小さな絹のバッグとが落ちてゐた。

當日寺院の禮拜式は午後四時に終つたので、爆彈の破裂する迄残つてゐた群集は餘り多くなかつた。實見者なる一役僧は『私は殆ど椅子から吹き飛ばされたと思つた、そして煙と塵埃とで盲目になつたやうだつた』と言つた。又實見者の一人なる畫家セシルキング氏は次の如く言つた『私は丁度ボエット・コーナーにゐたが、爆破の音響は大砲の一齊射撃のやうであつた』云々。此の戴冠式用椅子は英國の至寶であつて千三百年(今より六百年前)エドワード一世の爲めに造られた物である。此の椅子に用ひた木材は當時百志を費し、其の脚部にある二頭の豹を刻むには十三志四片を、また其臺を塗り且つ造るには三十九志七片を費した物である。故に此椅子の爆破を耳にした時は、英國皇帝は非常に驚かれたといふ事である。六月四日二人の婦人は宮中に於て、皇帝の面前に『陛下願くは獄中にある婦人参政權運動者に對する當事者の暴行を停め給へ』と直訴した。マリー・ブラムフィールド及エレアノア・ブラムフィールドの姉妹である、宮中に於て婦人が斯る事の爲に皇帝に直奏したのは之を嚆矢とする、姉妹は建築家故アーサー・ブラムフィールドの娘で、其祖父は倫敦のビショップであつた。

以上は萬朝報の記事を抄録したのである。毎度注意することであるが、日本の婦人は英國婦人の健氣なる精神にあやかるべきである。亂暴は眞平御免である。

### △最近の不祥事

誰れても生命の尊きを知らぬはありますまい、然るに之を粗末にし、或は他を害する様な忌はしき出来事は頻々として報道されます。私は試みに五月一日から十五日迄半月の間に起つた悲惨な事件を數へて見ましたが、實に左の如くであります。

他害	子供斬殺	一	同 毒 殺	一	同 絞 殺	一
	友人刃傷	一	同業者打撲	一	妻を斬殺	一
自害	夫を刃傷	一	警官刃傷	一	計 八	
	劇藥自殺	三	轢 死	五	縊 死	二
自	刃 一	入水自殺	四	計十五		
他害	家庭不和	二	職業上不和	一	情夫の爲	一
	生活難	二	妻の不貞	一	不 明	一
自害	不義不貞	四	生活難	三	學業不成	二
	不公私消	一	家庭不和	二	精神錯亂	一
不 明	二					

などであつて十五ヶ日中此様な記中のないのは唯一日のみでありました。(婦人新報)



時

評

## 數人語

數名の人が私にこんなことを言つた。なに、協同傳道、そんなことをする前になぜ各派が合同せぬか、根本的の一致が可能であるのに、因襲に捉はれてそれが出來ず、せめては事業だけでも協同しようなんて、不徹底だと、一の人は言つた。

なに事業だけでも協同するのはよい、がそれが自働的でなくて、ある外國の有力者の刺激から起來したとは、いくじないなと、二の人は言つた。

いゝえ、そんなことはどうでもよい、皆が盡力して人の靈が救はれさへすれば感謝すると、三の人は言つた。

しかし協同といふが、果して精神上の合致があ

るか、中心思想はどこにあるか、それを代表して居るのは誰かと、四の人が言つた。

傳道といふがその道とは何か、たゞ傳說的の宗教ではないか、それをかの民衆に説く、そんな低級的の事は、覺めたる現代人と沒交渉だと、五の人は言つた。

今日の平凡な宗教家が協同して何になる、今の學者や藝術家を指導し得るものがその中にあるか、千百の凡骨は一人の天才に如かず、精神界のこと一に天才をまつのみと、六の人は言つた。

諸君のいふ所は尤だが、これは無論民衆相手の事だ、また指導者に天才も無い、平凡なものが協同して平凡なことをするのだ、然し少しでも宗教的氣分を濃くし、精神的生活を深くしておかなければ、將來の宗教的天才の起る餘地も無くなるではないかと七の人は言つた。

自己の精神の生命を第一義とし、他人に對する教育や傳道を第二義と見て居る私は、これ等數人の語にさまで深く注意を拂はなかつた、たゞ參考のため記憶にとめておいた。(觀潮生)



當を食ふ事が出来ず、外出して公園や廣場のロハ椅子の上でパンを喰るのである。それでこれをミヂネット即ち蠶出の女工と呼ぶのである。巴里婦人は總て綺麗を飾りて嫵媚たる細腰であると思像するのは旅行談や小説などに誤まれたもので、恰も西洋人が日本婦人をば總て縫箔の衣服で人力車に乗つて外出するものと思つて居ると同様な間違ひである。

**露國の婦人** 露國の海港の主なる場所では人足は大抵婦人である。彼等は石炭を船積する荷物を船から運び出す。それが男が厭がるやうな手荒い勞働を負担して年齢よりも早く老衰するみぢめなものである。浦羅斯德に行けば直ちに此の露國婦人が船と陸上とを荷物を負ふて往復する様を見ることが出来る。

**支那の婦人** 支那では大抵の海岸が遠淺であるため。船が岸に近寄れない。遠い所で投錨して居る此の船と陸との間に旅客の通行や荷物の揚下は總て婦人の役目である。一生涯を波の上に暮すは海港に勞働する支那婦人である。但しこの海上生活婦人等の收入は却つて陸上に耕作する者よりもよいと云ふ。この世界の男子は婦人の勞働を傍觀するか或は是を命令するに止まるのである。

**南洋の婦人** ジャヴァ、スマトラ等の南洋婦人は殆んど何種類の勞働でもやる。そして夫は殆んど全體其妻に養はれて居る。マレーシア諸島の婦人も製造工場に雇はれて荒仕事を負擔してゐる。濠洲に於て今日尙ほ森林中に生存する野蠻種族がある。彼等は男子を以て他種族と爭鬭する役目のものとして、生活上の物質を搜すのは全く婦人の任務であると信じてゐる。比律賓諸島にも婦人が耕作する任に當つてゐるが此の島の婦人は自分の收穫した

米麥を自分勝手に賣却する權利を與へられてゐる。

**亞弗利加的婦人** 男子が衰衰してゐる間に女子は耕作するのが常態であると云ふのは亞弗利加アルジェリヤ人の風俗である。のみならず若し妻の機嫌を取るやうな男子があつたら世間では之を鼻垂れと云ふ。女の兒が出生しても決して此の祝をする事がない其他和蘭では婦人は運河の上に男子と同様船を操つてゐる。

かゝることを報じた一新開社があるが、日本の婦人には土方もすれば、船頭もあれば、何でもやるのである。

## △婦人と擊劍

歐米の婦人等は男子の行ふ遊戲ならば何でも行ふ。米國には婦人許りで組織された野球のチームがある。近頃倫敦の劇場では婦人の拳闘家が公衆の面前に立つたと云ふことである。其他游泳術に於て、乗馬術に於て、婦人の技術は男子に比して、遜色がない又飛行家として著名な婦人も尠からずである事も人の知る所である。今やこれ等の勇敢な婦人達の間には、劍術が非常な勢ひで流行してゐる。

それは肉體の健康と、心的活力とは運動の所産である事が、今日一般に認められた結果である。而して全ての能力の平均した進歩發達が今日の婦人を、五十年前の束縛せられてゐた婦人達よりも、優れたものとした事は確實である。

勿論過度の運動は精神にも肉體にも好くない。單に四肢の筋肉を發達させるのは、身體の恰好を悪くするばかりである。人體の眞の美は全ての筋肉が適宜に均齊に發達する事にあるので、劍術

の効能はこの點にある。而して劍術の甚だ便利な事は、一寸集會所に行つて三十分の運動を手輕にやる事が出来る點にある。其運動は、腕を優雅輕快に動す事と、身體をしなやかに働かすのみでなく、猶其上に思考力の集中を促すのである。

ファイフ公爵夫人は非常に優れた擊劍家で、又甚だ熱心家として知られてゐる。それから最も著名な擊劍家の一人として、ユーゼニー皇后をかぞへなくてはならない。其他クララ・バット嬢の如き唱歌者や、レディー・ツリーやイラ・イン・テリス嬢、ボーライン・チャス嬢などの女優等は、何れも劍術が彼等の技術に與へるところの效果に就て證明してゐる。擊劍は他の遊戲と異つて比較的小額の費用を要するのみで、その服裝は短かくさせた黒い縐子の袴と、白い木綿製の胸着と、靴と靴下と、それだけで全てである刀と面とは集會所に備へ付けられてゐる。英國婦人中の選手は、ミリケント・ホール嬢、及びジュリア・ジョンストン嬢などである。

試合に對する訓練法として、ホール嬢やジョンストン嬢は次のやうに云つて居る。それは試合前の二三日は、音楽や讀書などによつて努めて心を紛らすこと、而して長い郊外散策をするがよいといふのである。

彼等は大概一週に二回俱樂部で定つた練習をする。人々は今、劍術を優秀な運動として認めて居る。これはたゞに肉體のためによいばかりでなく眼や頭腦の訓練のためにも、甚だ効果があると考へらるゝ。ジョンストン嬢は次のやうに言つてゐる。

『私が劍術を始めてから七年経ちました、それに對する私の興味

は日々に増してゐるばかりであります、健康に資するといふ點からいへば、これに匹敵する運動は他にはありません。私は游泳もテニスも大へん好きてありますが、劍術の季節が終つてしまふと、もう他のものからは同じ満足を得られなくなるのです。』

なほ此處に愉快な一事がある。それは何處でも劍術の集會所があるところでは、誰れでもがその教師や會員たちから、暖い歡迎をうけ冷たい刀を通して、多くの友人を與へられるといふ事である。此身體のために、眼や頭腦のために甚だ有効な運動が、非常な勢ひでもつて、今日婦人の間に擴がりつゝあるといふ事は至極當然なことであると思ふ。(日米)

### △ウエストミンスター寺院に於る 婦人參政權運動者の威嚇的計畫

英國の婦人參政權運動者が、ウエストミンスター・アベールの戴冠式用椅子を爆破せんと企てたのは六月十一日の午後五時前後の事であつた。當日英國下院に於ては、内相マッケンナ氏と議員ロバートセシル卿との間に、婦人政客に關する質問應答が交換せられてゐた。セシル卿は『法律が公衆の手中に歸すると云ふ事は、私刑法となる事を意味する』と稱して、アルスター問題と婦人參政權問題を比較し婦人政客の遠島追放を極力主張した。内相マッケンナ氏は之に對して一時間餘に亘る答辯をなし、婦人參政權運動者に對して制定した『キャット・エンド・マウス法』を辯護した。其の辯護の趣意は、要するに婦人政客に對する取締は現在の寛裕なる方法にて足るといふのであつた。恰も其時(午後五時四十分)ウエスト



尙ほ彼れ等諾威の婦人は特別なる要求として官公吏としての婦人の位置を高めること、及び於良き報酬を與へらるべきことに對して目的を達せんことを期してゐる。——最近のタイムズ紙より——（絃譯）

### △母の信條

△私は社會の根本的的制度として家庭の永遠的重要を信じます。

△私はあらゆる子女の無量無限の可能性を信じます。

△私は一切の兒童の心に宿る想像と信頼と希望と理想とを信じます。

△私は自然と藝術と書籍と、友情との美を信じます。私は義務の満足を信じます。

△私は日常生活の些々たる家庭的歡樂を信じます。

△私は吾等の複雑なる世界の背後にある大なる意匠の美を信じます。

△私は神の溢るゝ愛によりて吾等凡てを圍む平和と安全とを信じます。

△私は人生のあらゆる關係に於ける唯一の法則として神の意志を信じます。

△私は神の忠實なる子として、又耶蘇基督の弟子たるやう我が子女を訓練しうることを信じます。

（英國メソヂスト時報所載）

### △百萬圓にも易へ難き子の愛

米國フローレンス、クリワテンデン養兒院にては、此夏期の間不幸なる小兒の母親達を田舎に送りやらんとて、之が基金募集の爲め一策を案出し、三歳より四歳になる此等養兒の展覽會を華盛頓に開いた。此中に殊に勝れて可愛ゆき小兒ありて、端なくも一紳士の眼に留まつた。件の紳士は不幸にして子なき人なりしかば直に展覽會主任に向ひ予は養兒院の基金中に百萬圓を寄附すべければ、此兒を予が養子に賜はらずやと掛合つた。主任は此申出に飛立つ思ひをなしたれども、固より勝手に小兒を賣るべくもあらず、さればとて母親の心次第にてと直に其母親を招き、右の申出を傳へた。嘸かし雀躍して喜ぶべしと思ひたるに、母親は「どうして！我兒は妾に取りては此世界にも同じですよ。世界中の富を皆下さるとしても我兒を手放されませうか」と膠もなく答へた。難有い親心ではないか。

### △風紀紊亂せる臺灣

記者の知人で近頃その良人と共に臺灣に渡れる婦人がある。その最近の報によれば男子の道樂は言語同斷で、新聞の三面記事のごときは殆んど卒讀するに堪えない。然るに婦人達は一尙平氣なもので互に御飾りの競争をして喜んでゐる。殊に停車場の送迎などは着物の展覽會で丸で結婚式にでも行つたやうだと。男も男であるが、女も女である。この遊蕩の夫にしてこの虚榮の妻ありといふべしだ。何でも廓清の世の中なれば、殖民地の風紀も大に廓

清したいものである。

### △戀郷病女性犯罪者

戀郷病的犯罪の例は吾人の常に目撃する處にして、幼少温良なる少女に多い。かかる少女の始めて父母の家を出てたる者は甚だしき戀郷病の襲ふ處となり、心を痛め、その心の壓迫の境遇より免れんとて犯罪するに至るものである。然かもその犯罪事實の殘忍と兇暴とは、普通の殺人犯者、及び常習的犯罪者に劣らざるもので、その犯罪行爲は自由を迫るも大抵欺かんと試み、而かも忽ちにしてその陳述を訂正するのである。後悔の現はれ方は種々にして、多くは只暫時後悔するに止まり、その爲に深く苦悶することがない。然るに予の觀たる一人の少女は持續的に後悔の狀を示した。然れども、快瀾に嬉戲する人々の間に置きては、憚る所もなく談話を交へ、己が境遇に似合しからず子供らしく樂しげな有様を示すのである、尙茲に注意すべきは、其の犯罪は法廷に於ても、又監禁中も、予の確定した限りに於ては、最早少しも戀郷病に就て云ふ所がなかつた。

斯の如き戀郷病女性犯罪者は將來如何になるべきかの問題は簡単に答ふことが出来ない。只今日までの所、此種の幼少女性犯罪者は後年に至るも持續的に善良に保たれ、且つ爾後決して法に甚しく牴觸するが如きことなしと一般認識せられてゐる。

(ローセン氏説)

### △巴里に於ける少年裁判所

英國に於ては既に少年裁判所の設備あるが巴里にては千九百十二年に通過したる法案を去る三月より實施した。巴里少年裁判所には二室あり、一室に於ては十三歳以下の兒童を取調べ他の室にては十三歳以上十八歳以下の兒童を取調べる。取調べは一向形式に拘泥せず、又秘密である。但し宣告は公開である。又少年犯罪者はなるべく父兄もしくはその他保護者の監督の下に置いて丁年迄保護せしむるが主眼である。

### △簡易生活合資會社

北米合衆國ニュ・オルレアン市では、此忙はしい世の中に、住民が各々に糧を控ふ、三度／＼の炊事をなし、下女下男を召使つて家庭の用事を辨ぜしむるは、如何にも不經濟であるとの理由よりして、近頃世帯合資會社と云ふ新團體を組織した。そして約五十個の家庭が放資して會社の如きものを造り、下女下男は一切解雇し拭掃除の工夫は勿論、三度の食事は自働車もて、會社より株主の各戸に配達し、家族の仕事と云へば、只入口の鈴を鳴らした時、之に應ずるだけに止め、世帯向は一切會社に任ずといふ氣樂生活を始めてゐる。其會社は支配人とコックと十名の下女がある。支配人給料一ヶ年二千四百圓、コック長は六千圓であるが、倫敦でも近頃此世帯合資會社の設立につき、運動してゐるものがある。

### △世界婦人の職業

巴里の婦人の中でミゼネットと呼ばれる、一階級の婦人達は火工場に雇はれて薄給を以て生活するので、正午になつても立派の辨



上に立てられたものであつたが、掛け引き上からしては「二者何れかを」といふやうな建言を以て漸次進行するやうな方法が取られた。

これと同時に教育上の大改革が、婦人の爲めに開かれたる方面の新しい事業界に婦人をして適當せしむるが如き目的を以て着々行はれた。下級社會の婦人の爲めに種々の教育が施された。婦人の特殊な訓練が始められ、家政學校が創立せられた。

### その他の運動

實際事業に對する興味及び日常生活に對して家政上の經濟を重んずる觀念の發達は最近に於ける婦人運動の強い特色ある形式である。たとへば『家庭の幸福』の如き大組織は功利主義者たると同時に理想派であるが、是等も齊しく如上の傾向と同様の方向を目的として進んだ。なほ他の多くの運動の間でも結核の傳播に對する戦ひ——就中諾威婦人協會に依つて創始せられ、繼續せられた——の如きは記憶せらるべき事業である。更らに世人の注意は軍隊に於ける婦人の服務の問題に就いて及び凡べての若き婦人の實際教育、殊に家庭及び

家事に關する根本的智識の強制的な實際教育に關して輿論を喚起した。一八九八年第一回婦人會議が諾威に於いて開かれた。一九〇二年同じ種類のスカンデナビア會議が開かれた。蓋し當時の北方諸國に於いて最も大なる集會であつた。一九〇七年諾威婦人協會は『萬國婦人會』の一部として組織された。『萬國婦人會』は一八八八年ワシントンに於いて創立せられた者であつた、而してアベルデイン夫人の下に在つて一八九三年シカゴ萬國博覽會の後急速の進歩をなしたのであつた。かくて諾威婦人協會は漸次範圍を擴大すると同時に、婦人の活動に對して基礎ある組織を形成するに至り、諾威國會は此の年羅馬に於いて開かれた『萬國婦人會』の大會に對する諾威支部の費用の全部を流用することゝした。

### 婦人運動が齎した結果

さて婦人運動の結果は如何といふに、その効果は漸進的なものであつた。一八八八年に於いて諾威の律法は婦人の通常財産に對して、彼の女の夫と同等の權利を與ふべきこと、夫から別に、彼の

女自身の財産を所有すること、及び自身の収入を所有するの權利を賦すべきことを承認した。一八八九年に於いて婦人は學校管理會の委員に選舉せらるゝの權利を持つことを得た。一八九四年に於いて婦人は公認酒類販賣所の問題に關して投票すべき權利を得た。一九〇〇年に於いて細民法委員會委員として選舉せらるゝの資格を得た。一九〇一年に於いて或る制限内の市會の選舉權を與へられた尙ほ同年、新しい結婚式の儀禮を採用するとを允された。一九〇二年婦人は陪審官の職務に選舉せらるゝの權利を得た。一九〇三年教會に關する問題に就いて投票すべき權利を得た。同年始めて婦人が大學から哲學博士の學位を授けられた。一九〇四年婦人は法律上辯護士たることを許可せられた。一九〇六年高等の學府に於ける官吏として初めて婦人が任命された。一九〇七年婦人は或る範圍内に於いて國政に關して選舉權を賦與せらるゝに至つた。蓋し諾威は此の方面の特權を婦人に與へることに於いては歐洲の先鞭を着けたのである。一九一〇年に於いて一般的市會の選舉權を許

された。一九一一年諾威國會は始めて婦人代表者の爲めにその門戸を開いた、即ち婦人の代理者といふ意味で國會に入れたのであつた。同年婦人は後見者となるの資格を與へられた。婦人の工場監視者が任命され、婦人はまた警察部の一員となり、或は正義と平和の代理者として活動するに至つた。同時に官公吏としての婦人の領分が擴大せられて來た。一九一二年始めて大學に於ける婦人の教授（動物學）が任命された。その他最初の婦人辯護士、最初の婦人裁判官、婦人の地方醫師、及び公立學校の校長などが任命せられた。一九〇三年航海者としてのあらゆる位置や試験が婦人にも公開せられた。しかし終に一九一三年六月十一日滿場一致を以て、婦人にも男子と同様の一般選舉權を與ふべき法律が國會を通過した。

此の法によりて從來諾威の婦人がその男子と同等の權利を得んが爲めに努めてゐた障害は取り除かれることになつたのである。しかもこの目的を達せんが爲めには彼の女等は殆んど一ゼチレーションの間。組織立てる挑戰を戰つてゐたのであつた。



驅者はアアスタ・ハンステイン嬢（一八二四—一九〇八）であつた。彼の女は新聞に或は著書に、此の主義を高調した。彼の女は諾威に於ける最初の婦人講演者であつた。同時に婦人運動は歩一步海外からの影響を蒙りつゝあつた、殊に英國の影響は著しかつた。蓋し英國に在りてはスチュアート・ミルは『The Subjection of Women』を公にした。

當時英國に於いてはギクトリア女皇帝位に在り、此の種の緊要な問題が實際に存在してゐたのである。かの偉大なる諾威の作者ビョルンソン、イブセン、ヨナス・リイ、キイランド等も亦、彼等の作物に於いて彼れ等の哲學の思潮によりて、或は彼れ等の作物中の女主人公の性格によりて、婦人運動に有力なる援助を與へた。これと同時に婦人自身は歩一步、業務の新戦場に於いて彼れ等の力量を試むべく或は教師となり、或は電信事務の如き公職によりて、彼れ等の新活動舞臺を獲得すべく努力した。

立法上の社會に於いても此の方面に關する注目すべき運動が起つて來た。一八六三年の法令によ

りて二十五歳に達したる未婚の婦人は保護者なくして直接彼の女自身に關する一切の事件を自決するの權利を與へられた。一八六六年に於いて婦人は事業に於いて彼れ等自身を自由にするの權利を與へられた。一八八二年、大學は婦人學生に對してその門戸を開放して、婦人をして、二科目の試験を受けることを許可した。しかして同年一婦人は第一試験に應じた。

二年後に至りて此の特權は更らに擴大せられて、凡べての試験及び大學の學位をも抱擁するやうになつた。

### 一八八四年の開戦

一八八四年は婦人運動の歴史に於ける最も重要な年である。蓋こゝに至りて兩性が社會的、道德的、經濟的意味に於いて全然同等の土臺の上に立つて、初めて最終の決勝點にまで到達し得たりし組的織運動が創始せられたからである。此の運動はクリスチアニア市長エッチ・イー・バアナ氏（一八三九生）の激勵的論文によりて開始せられた。その後間もなくギナ・クロッグ嬢（一八七四

生)が戦場に現はれた、そして間もなく諾威に於ける婦人運動の指導者の一人となつた。此の年『諾威婦人協會』といふのが創設せられた。この會の目的は『社會に於ける婦人の正當なる權利と地位とを婦人に與へられんために努力する』といふことであつた。彼れ等は彼れ等の要求を提げて其の筋の當局者に到るといふ主義に隨つて行つたので、比較的速かに世人の傾聽を得ることができた。

第一の主要なる問題は當時最も盛に論ぜられてゐた所の結婚したる婦人の憑依的狀態についてであつた。尙ほ公娼の問題も起つて、その建言は政府に提出せられてそれは間もなく公娼廢止を實行せしむるに至つた。婦人の勞銀を昂めることに對しての挑戦も亦頗る根氣強く主張せられた。それと同時に婦人を使用するの機會を擴張する結果として、婦人囚徒に對する婦人監守人及び工場に於ける少年の保護及び衛生の改善に就いても、極力主張せられた。

### 選舉問題

婦人參政權問題も亦間もなく起つて來た。婦人

にも特權を賦與するやうに法律を修正すべく修正案を國會に對して提出すべき建言が主張されるに至つた。前掲の組織立てる婦人協會内には此種の運動者の早急な向ふ見ずな歩き方に對して慎重といふことを楯にして杞懼の念を懷く者もあつた。

それと同時に他の方面に於いては參政權の爲めには闘ふことなくして婦人の主義の爲めに戦ふといふのは、目的を達せらるべき筈の手段を使用することを欲せずして、決勝點に達せんとする者であることと主張するやうな者があつた。そこで是等の人々は別に「婦人參政權運動者同盟會」といふものを拵へ彼等の綱領としては専ら參政權問題を主として立つた。一八九〇年に初めて婦人參政權問題が——主義に關して——諾威國會に提出せられ、論究せられた。一八九三年に至りて此の問題は再び國會に持ち出された。そして多くの議員の同意を得たが全員の三分の二に達せなかつたので遺憾ながら法律修正案は議會を通過することを得なかつた。新婦人參政權同盟會は迅速なる行動や婦人に對して『男子と同等の地位に於ける選舉權要求の



下の妃は王族の出に非ざるを以て、二皇子あらせらるるに拘らず皇位に就かるゝことが能きない。

此の故に此度皇儲と定められたるは前皇儲殿下の御弟の皇子であるが、その如何なる人物なるかは未だ明らかでない。又宗教の關係上普魯西と洪國

とは互に相争ひ、又ボスニアの正教なるにプロシヤは希臘教を奉じて居るので、プロシヤは常に澳國と結ばんとして居る以上、ボスニア、及普魯西がこの度の隱謀事件に關係せりと傳へられて居るのは誤りである

### 「婦人の王國欄」に就いて

吾々が殊更に「婦人の王國欄」を新たに設けました理由は、申すまでもなく我邦一般の人々、殊に新しき時代の御婦人や男子方に、此の方面に關して眞面目な問題や暗示を提供したい爲めであります。かくすることが即て新しき時代の宗教を造り、道徳を生むの道であり、

眞人として世界を開拓する一個の所以であると信ずるからであります。

吾人の意を諒として愛讀者諸君は本欄に對して、特に忌憚なき御批評や、各自の御意見をお寄せ下されんことを希望します。

婦人の

王國

## 諾威に於ける婦人の地位

クララ・エッベル夫人

### 男女平等

十九世紀の半頃までは諾威婦人の活動は、他の國々に於けると等しく、嚴に家庭内に限られ、しかも家庭の範圍内に於いてすら彼れ等の地位は從屬的であり、不安定なものであつた。然しながら、同時に此の頃から婦人に對して、一層の社會的の自由と一層の重要な社會的地位を與へんとする傾向が倍々その根底を固くするやうになつた。しかして米合衆國から發源した婦人解放に對する運動の影響は、諾威に於ける教育ある社會の人々の間に一勢力となつて來た。此の時に當つて諾威政府當局者が最初に、諾威婦人に對して爲したる讓歩は一八五四年に於ける遺産相續法であつた。該法によりて從來遺産相續法に關して男女の權利間に

存在してゐた區別を撤去したことであつた。

### 先覺者の活動

一八五五年に至りて諾威は婦人問題に於ける最初の代表者を異常なる女流天才カミラ・コルレット（一八一三—一八九五）女史に於いて發見した。女史は彼の有名な抒情詩人て愛國者たるヘンリック・エルゲランドの姉妹である。女史の傑作なる小説「シエリッフ伯の娘」の中に、女史は婦人の權利を主張し、婦人が個人として彼の女自身の思想を考ふべきことを説いてゐる。女流著作者としての殆んど彼れの生活の六十年を通じて彼の女は團體に於ける或は道德、或は社會經濟の範圍内に於ける婦人の權利の爲めに戰つた。

その次に現はれた諾威に於ける婦人の權利の先



ネグロの如きは他日必ずセルヴィアに併合せらる

べきもので、只時の問題である。これ即ち謂ふ所の大セルヴィア主義である。第二にはセルヴィアには海岸線がないので、何物の輸入にも土耳其を通過する必要がある。故に先年のバルカン戦捷により彼は土耳其西海岸に發展しやうとした。此の海岸線のないことは澳洪國又同様で、鐵道によつて土耳其のサロニカに出ることはその年來の希望である。併し此の希望は容易に實現せられないことであるから、更にセルヴィアと同じく土耳其の西海岸に出やうとした。かくてバルカン戦争の後始末に、セルヴィアと澳洪國とが互に利益を相争つたのである。露西亞はバルカンに他の國の勢力の加はることを好まないで、この争にセルヴィアに勢援した。一昨年末澳洪國と露國と正に相戦はんとしたのは之が爲めである。斯の如き紛争の結果問題の西海岸に新たにアルバニア國を建てて落着を告げたのであるが、セルヴィアの發展を妨げて却て澳洪國の發展を計るものはフェルディナンド太公なるを以て、セルヴィアは何とか太公を

處分すべき必要に迫られたのである。

## 二

往昔は君主一人の政治であるから、その君主を倒せばその國を覆すことが出来たのであるが、今日に於ては民衆の政治なるが故に、一人を殺すともその國是は他に繼承すべき人があるから其の目的は達せられないのである。然るに澳洪國の國情は主權者一人を殺せばその目的は達せらるゝのである。元來澳洪國は非常に散漫な國柄であつて、人種も大體の區別は四種であるが、更に細密に分割すれば約十種となつて、互に争つてゐる。故に有力なる中心人物を要するは必然の結果であつて、皇儲フランツ・フェルディナンド太公は正に偉大なるこの中心人物であつた。散漫なる國には專政が必要である。獨逸の如き然りである。獨逸以上に複雑なる澳洪國はフェルディナント太公の如き偉人物が專政を施すに非ざるよりは、治まりのつかない國情である。

澳洪國は澳、洪二國より成る。兩者各議會と政

府とを有してゐる。只軍事及び外交のみは陸軍、外務、大藏の各大臣と、兩國議會より六十名の議員を送りて之を議することになつて居るが、各自の利益を固執するが故に、全體の豫算の如き纏まつた例がない程である。之を一に統一しやうとするのはフェルディナンド太公の希望であつたが、常に洪國の爲めに防害せられたのである。又澳國は帝國、洪國は王國と稱し、同一の主權者も前者には皇帝と稱し、後者には國王たる如き有様である。又澳帝國と云ふも、かの獨逸が二十七聯邦より一大帝國を形成せる如き意味の帝國ではないので、十七の王、太公、公、侯國を有して居る。人種の複雑なる又驚くばかりで、獨逸人、ボヘミヤ人、ポーランド人、ルセニア人等が相争ふので、毎年議會を通過するは一二の極めて細末な條例に過ぎないのである。洪國も亦斯の如き複雑さを有して居る。

一八八三年澳洪國及獨逸は露西亞に對抗する爲めに同盟し、後、伊太利も加はりて所謂三國同盟が成立した。又最近には先づ英佛二國協商し、之

に露西亞が加はつて三國協商成り、前者を凌ぐ勢がある。然るに澳洪國の軍備が完全に行はれざる爲めに、強く三國協商に對抗し得ないのであるが、これが充實は獨逸の勢力を加ふることゝなるので、常に洪國の強き反對に妨げられてまだ成立するに至らない。

### 三

かゝる複雑なる國情なるを以て、フェルディナンド太公の如き偉人が專政を施す必要大にあるのであるが、従つて彼一人を刺さば充分澳洪國發展の防害をなすことが能きるので、彼以上の後繼者が現はれざる限り、その目的は達せらるゝの事情にあつたのである。

或る新聞は此のフランツ・フェルディナンド皇儲殿下の死を以て、澳洪國の帝國的希望を滅亡したと説いてゐるが、殿下の死に最も失望したるは獨逸皇帝である。此の事件に關連して起つて來る問題は現フランツヨーゼフ陛下の皇嗣は何人なりやと云ふことである。フランツ・フェルディナンド太公殿





## 現代政治問題概論

吉 野 作 造

### 一

本年六月三十日の新聞紙は、澳洪國の皇儲フランツ、フェルディナンド殿下がボスニアの首府サラエボに於て暗殺せられたことを報じて居る。陸軍の演習の爲めにボスニアヘルツェゴヴィナに赴かれて、此の難に逢はれたのであつた。殿下は云ふまでもなく皇帝ではないが、今の老帝フランツ・ヨーゼフ陛下は八十四歳の御老齡である上に喘息の持病があつて、氣候の變り目には常に苦しまれたのであるが、本年は四月より五月にかけて重病に罹らせられ、五月中旬漸く恢復せられた程である。それで政治問題の實權は殆んど太公殿下の

手中にあるので、殊に軍事上に然りである。兩三年前、二三重臣の更迭を老帝の意志に逆つて行はれたこともある。

此の故に殿下のボスニアに赴かれたのは澳洪國の主權者が、公式にボスニアヘルツェゴヴィナを訪問せられたといふ重大な意味になるのである。觀兵式終りて殿下は妃殿下と共に市會の招待により自働車を驅りて市廳に赴かせらるゝ途中、一人の植字職工現はれてこの自働車に爆彈を投じた。これは幸に爆發しなかつたので、太公は腕を以て道に投げられた爆彈はこの時破烈して二人の従者と、多くの見物人とが死んだ。かくて市會に臨み、歸途再び町を通らるゝ時、十七八歳の學生現はれ

て又々爆彈を投じた。併しこれ亦爆發しなかつたので、學生は更にピストルを二回發射し第一發は太公の頭に、第二發は妃殿下の腹部に命中して知事の官邸に薨去せられ、犯人は直に縛に就いた。此の事實は、かの無政府黨員が主權者を暗殺するものとは大に趣を異にした複雑なる問題である。今暫く太公の暗殺の理由に就て述べて見たい。

新聞紙は太公の暗殺を以て大セルヴィア主義の犠牲なりと報じて居る。此の意味の第一は、此の暗殺が偶然でないことである。太公サラエボに來らるゝや暗殺せらるべしと云ふことはオーストリアの政府は知つて居たので、又その危険あることを露國政府は警告したと傳へる人さへもある。兇行の現場附近には自働的に爆發する爆彈發見せられ、其他御宿所の階段の下等にも同様發見せられたと傳へられて居る。(七月十四日の新聞によれば、サラエボ裁判所が二犯人を取調べたるに、その二犯人の間及その他種々の方面に連絡あること及びこの隱謀がセルヴィアの首府ベルグラードより依頼されたものであることが判明した。但し

セルヴィアの政府が此の事件に關係あるや否やは俄かに斷定は能きないことである。

本來澳洪國セルヴィア兩國間の不和の原因は兩者の發展争であつて、前者發展の中心人物は帝國主義者たる皇儲殿下であつた。故に後者はフランク太公を暗殺せば足ると考へて居るのである。併し上述の如くセルヴィア政府が此の事件に與つて居ると云ふことは疑はしいことで、かの露國が之に干つて居ると云ふ説も俄かに信を置き難いのである。七月三日夜、兩殿下の御遺骸が本國に着するや、之を迎へたる多數の勞働者等はセルヴィア及露國公使館に向つて亂暴を働いたといふ。セルヴィア政府唯一の弱點は、セルヴィアの參謀次長が、この隱謀の首領であつて、彼は政府の金、銃器彈藥等を之に使用したことが明らかなことである。此の兩國は歴史的に不和であつて、第一セルヴィアは今日尙昔日の如く彼等の統一する一大帝國を建設せんとする理想を有してゐる。ボスニアの如きもその人口の七割はセルヴィア人であつて多くはセルヴィアの正教を奉じて居る。そしてモンテ



す。そして腦の何處かに故障があると見えまして頭の廻し具合は顔面の筋肉がつゝ張つてゐるやうでした。

一人の好々爺らしい爺さんの手足は、殆んど乾からびて了つて骨ばかりと云つたやうにです、恰度柚の枯木を見るやうに。それに鼻が恐ろしく瘦せこけて、鷹の鼻のやうに、雀の頭腦をひん剥いたやうに光つてゐました。皺も縦横十文字に目茶苦茶に、殘酷な程浮世の波風に翻弄されました痕が刻みつけられてゐました、兎角苦勞した人は老けて見えますものですから、これで案外に若いのかも知れませんのです。

も一人の老爺さんは頭腦がテカ／＼と禿げてゐました、或は疾病のために毛が抜けて了つたのかそれは解りません。皮膚の色なんか癩病患者さながらですもの。眉毛は落ちて了つて紫青色の班紋が無氣味に描出されてありました。壯年の男は頑強に見えますけれども、皮膚の色は極めて悪く、中風のやうにブル／＼顫へてゐました。若い男は跛でした。彼等のどれもこれもが水銀軟膏か按摩

膏でも塗つたやうな、極めて目觸りの悪い皮膚を有つてゐました。

「こゝは涼しいからいいですね」

「えい、こゝは既う、兎に角これだけの空地がありますんですから、社會より餘程涼しうござんす、まるで湯治にても行つたやうて御座いまする。」

「全くね、それに違ひない、—— だけど随分退屈でせう、何んにもしないで遊んでるのは。」

「さうも思ひませんね、もう馴れつこになつてゐますもんですから。」

「晩はどうです、晩は」

「晩はよつびて、まんじりともしないことがあります。」

「悲うして」

「蚤や白虫に喰ひつかれて、とても眠むられません」

と老人は爪で搔き搥つた枯木のやう肌を出した。可愛想にひどく血がにじんてゐるのです。

「餘程搔いたのですね、其饜に喰ひつきますかね。」

「ですから晝も矢張り眠たうございます」。

社會にゐては人間からくるしめられ、當院に來ては蚤や白虫に喰ひつかれる。いづれに轉んでも彼等の生活は、餘程貧乏籤に當つたと見えまして頗る慘めなものでした。『君等は其儘死んでも浮ば

れますか、魂は迷つて往くところを知らないのではないのですか』——私はいろ／＼と訊いて見たく思ひましたけれども、折角人様が安靜に晝寐をしやうとなさるところを妨げては、其罪輕からずと考へ直しましたので、直ぐに引き返しました。

## 編輯の窓より

△盛暑の折柄愛讀者諸君の御健康を祝します。吾々同人も相かはらず夏にもめげず忙しい日を送つて居ります。

△本月號には兼て豫告を致して置きました自然スケッチを夏の大自然といふ標題にして掲げることになりました。

△別項豫告いたしました通り、九月號にはオイケン哲學に關する評論を掲げたつもりであります。深田康算、蓋田慶治、

三並良、岡田哲藏、岸本能武太、今岡信一良、木村久一、宮本和吉、得能文、北聆吉、稻毛祖風、野村隈畔、栗原基、額

賀鹿之助、相原一郎介、内ヶ崎作三郎の諸氏へ執筆依頼中であります。

△岡田哲藏氏は青山女學院を辭せられた。

△内ヶ崎氏は七月中旬紀州新宮方面へ講演の爲の旅行、一と先づ歸京の上、また下旬から仙臺の方へ行かれた。八月中旬また愛知縣へ講演に出かけられる筈。

△千葉掬香氏は上州四萬温泉の別邸に滞在中。

△神戸なる小山氏は此の夏は鎌倉へ行かれるといふことです。

鈴木氏は芝小山町五へ、野村氏は巢鴨一一四九へ。加藤氏は鎌倉雪の下岩谷堂へ移轉しました。

△鈴木氏は北海道から歸つて來て活動してゐます。三並、今岡、相原、吉田の諸氏また健在。



# 夏の養育院

T O 生 (投)

小石川大塚辻町と云へば電車の終點に近いところ、こゝには日本一の摸範救済院と言はれる東京市の養育院がある。

七月四日、私は根津の下宿からこの養育院まで、てく／＼歩いて参りました。

昔のお屋敷風の板塀に添つて歩きますと表門に出ました。其處から見ますと大方一町もあらうかと思はれる位に、長く續いた勾配の緩やかなだら／＼坂の向の方に、高い淺草本願寺のやうな屋根が、可成古色を帯びてゐます、其下に玄關が小さく見えしました。

ズラリと兩側にあまり見かけたことのないやうなしきみか何かの木が圓く綺麗に體裁よく蒔られてゐますところは、目立つ程よく配合の調和を得てゐましたのも心地よく、さう云へば房州石のやうな粗雑な安山岩の石門も、頗る莊嚴に見えて來るのです。

この古典的色彩を帯びた、殿堂が尤もらしく聳えてゐますところは、まるで中世紀の施寺か伽藍堂を見かけるやうな心持が致しまして、諸所の慈善事業の安つばい、まゝごとと見たやうなおざな

りのものと違ひまして、その歴史から云つてもその内容——多少の技巧があるかも知れませんが——實力から云ひましても、單に建築だけ見たところでも、如何にも救済院らしい感想が湧き起るのであります。

只今迄のところ當院は大したほろも出してゐませんし、これで比較的健實な方な人だらうと、同情を寄せながら小砂利を踏んで足を運ぶと、サク／＼としめやかな響が廣い庭内の靜寂な空氣に反響して、足觸りが非常にいいのです。まるで私は山里の禪寺の本山にでも來ましたやうに、人里離れた修道院にでも禮拜に行くやうな、神秘的な氣分に觸れざるを得なかつたのでございます。

この隔離された養育院被救護者の夏の生活は怎んなものであらう、と云ひますと、當院には約二千人からの收容者がゐますが、毎年夏になりますと在院者がめつさり減るのであります。

夏は怎うしても勞働の仕事も多いものですから、生活も至つて簡易で草を褥に蒼空を天井に

して寝たつて、風邪も引かないから従つて宿錢も入らなくなる、日は長いし労働者がぶらつくには、着物と云つても絆纏一枚もあれば、大威張り、シヤツ一枚もあれば交番の巡査から小言を喰ふやうなこともなく、實に空拳一つの労働者には持つて來いの季節ですから、彼等は燕のやうに飛出して寒くなると又冬籠にやつて來るのが、彼等の慣例であります。

社會に出ては何をするかと云ひますと、泥棒などは決して出來ない方ですから、先づ上等の方で労働者立ん坊になりますし、悪い方では右や左の旦那様奥様方のお慈悲に縋るやうになるのであります。又搔拂ひや無錢遊興をやる者もゐますけれども、そのやり口たるや極めて拙劣なもので、臺所や店先きのものや、菓子だとかパンだとか大根だとか、手拭ひだとか足袋だとか其塵たわいもないものを取つて下手に逃げ出すのですから早速捕へられると云ふわけ合ひてあります。

又空車などを引張り出してめし屋に行き、たら腹飲んだり喰つたりして、お金の代りにそれを置

くと云ふ筆法であります。

私は裏庭の方に廻つて誰れかに遭ふだらうと進んで行きますと、芝草の生えた椎の木の下に菰座を敷いて、藍色染の衣を着た連中が四人寝ころんでゐました。年配から云ひますと六十近い老人が二人に、三十四五と云ふ大きな圖體の男が一人に、廿幾位の若者とでした

私はつと寄添つて蹲躍みました、無遠慮に馴々しく口を利いて

「随分暑くなりましたね」

「へえ」と恐縮したやうに一人の老人がいふ。で私は乃公の顔を知らないのかと云ふ風に見詰めますと、皆んな臆劫さうに身體を擽げて蜘蛛の巣で包んだやうに、恐ろしく清澄を缺いだどんよりした眼玉を睜つて、妙な奴が來たと云ふやうな顔をしました。

よく見ますと眼玉の中に鯖の腹のやうな青味を帯びてゐるのでした。云ふまでもなく營養不良の結果でありませう。まるで鳥目のやうに目玉が据つてゐません。入目か借目でもあるかのやうにて

粹な休息よりも、有効なものであるから、我等は各々何か健全な娛樂を持つて居ると云ふことが肝要である。

### 三

以上述べた項目の外に。時間の消費せらるるは、所謂用事即ち雜事であらう。餘所へ行くとか、人の送迎とか、買物とか、面談とか、散髪とか、沐浴とかする。其他無數の行事がある。併し是等を總括しては雜事時間とても名けやう。

此の外に今一つ徒費時間とても稱すべきものがある。雜事時間は必要なる事のみ時間であるが、徒費時間は意味なく無益に費す時間て所謂怠惰時間である。此の種の時間は成る可く減少する様又利用せられる様にしたいものである。

以上數へ來つた所で我等が一日を費す項目は略ぼ盡きてゐるやうである。そこでここに考へて見たいことがある。我等は實際は以上の項目に従つて毎日時間を消費してゐる様であるがその時間の配當には規則があるか、標準があるか。又項目に

分けて見たところでは各々時間を費す目的が定まつてゐるやうに見えるが、併し一日二十四時間全體として之を費す目的は何であるか。此の目的は甚だ空漠としては居ないか。之は大に注意すべき問題で、若し我等は以上の諸項目のみで漠然毎日の時間を費して居るとすれば、我等は下等動物と大差がないことになる。お互は人間で萬物の靈長であると云ふ以上は、眞に人間らしい生活がしたいものではないか。又爲すべきものではないか。これが大問題である。

そこで私は上述の諸項目以外に、毎日修養時間と云ふものを設けたいと思ふ。此の時間もその長短は人と職業とによつて多少相違するであらうが少なくとも毎日十分間なり二十分時間なり、出来ることならば、午前と午後と二回位特別の時間を設けたいと思ふ。而して第一には自分の智識を擴める爲め、第二には情想を高める爲め、又第三には進んでは意志を強める爲め、即ち一言で云へば精神の向上を計り品性の修養を爲したいと思ふのである。若しその人が學生で智識のことは十分他



に之を得る方法があるならば、その時間は宗教道徳等の爲めに費したるよからう。兎に角意志の鍛錬即ち精神の修養が肝要である。我等は人間なるが故に、人間らしくならねばならない。又之には必ず修養を要するので、時間と努力を費さないで此の目的を達することは出来ない。之が爲めに日曜日に教會に行いて禮拜を爲し、説教を聞き、以つて神に近くことに努力するは、甚だ宜しいことであるが、此の上に毎日左様修養したいのである。斯くして何か大なる理想を得て之が爲め凡べての行動をする様にならねばならない。斯くして我等の職業時間、睡眠の時間、休息の時間等全體が此の大なる理想の爲めに働くことにならねばならない。これを毎日積んで行けば、一年には、又一生には、非常に大きな收獲になつて、自己の爲めにも又社會の爲めにも非常な利益になり幸福にならう。

而して此の修養時間には、成るべく一家族團欒して、聖書や論語を読むもよからう。教訓になる詩歌俳句などを暗誦するもよからう。金言やら座

右銘などを記憶するもよからう。有益なる昔話や世間話をするもよからう。若し又一家族全體が集まる事が困難ならば、出来る者だけ集まつてもよい。若し又それも困難ならば一人一人てやつても差支はない。

斯くして我等は毎日の生活を意味ある生活にして行きたい。年末になつて一年を顧み三百六十五日を無益に費したと云ふことを感じないで、有益な一年を送つた、これだけの收獲があつたと喜んで新年を迎へることが出来る様にしたい。毎年を空しく送れば、一生は空しく濟んで仕舞う。毎日を有意味に暮さねば、一年も一生も有意味にはならない。毎日を有意味に暮す爲めには、怠惰時間や徒費時間を利用せねばならない。雑事時間や娛樂時間を善用せねばならない。又凡べて仕事時間や睡眠時間を有意味にする爲には、修養の時間を設けて、凡べての時間凡べての努力を統一あり秩序あり理想あり目的あるものとならしめねばならない。

岡田先生の如きも五六時間で満足だと云つて居られる。之を西洋の書籍に見るに普通睡眠に要する時間は八時間であるから、一日二十四時間の三分の一は睡眠に費さねばならぬのである。不思議なことには睡眠と云ふ事は果して如何なるものか何の爲めに必要であるかは文明の進歩した今日、醫學上からも生理學上からもまだ解釋されてゐない。斯く本質は明らかでないが、兎に角一般の人が誰でも殆んど最も多く時を使ふのはこの睡眠である。

## 二

第二は食事の時間である。人は食はずに生きて居ることは出来ない。また野蠻時代には何時でも手當次第に食ふたであらうし、又従つて時間は却つて今日より多くかゝつたであらう。今日でも下等動物は殆んど一日中喰つてゐる。人間は今日のところ左程にはないが、これも老幼により習慣によつて多少は人毎に違ふ。三度の食事に就いてのみ考へるも、日本人の様に十分間内外で朝食を終

る西洋人は少なからう。私の考へては我等は三度の食事の爲めに、少なくとも平均一日一時間乃至二時間は費すであらうと思はれる。

以上睡眠と食事とに費す時間は、凡べての人間に共通なことであるが、其の他の時間の費し様に至つては大變に不規則である。此の二者以外に、毎日極まつて普遍的に凡べての人々に共通なものは殆んどないと云ふても過言ではあるまいと思はるゝ位である。併し斯く嚴重な意味で普遍的なものはないとするも、試みに最も多くの人々が誰でも毎日する項目を擧げて見ると、大多數の人々には仕事をする時間がある。教師や學生や官吏や會社員は仕事の時間が朝何時頃から午後何時迄と、比較的判然してゐるが、精密に考へるとそれにも種々の相違がある。たとへば官吏の如きは出勤時間中にも新聞を読む、煙草を吸ふ、無駄話をするので丁度何時間が仕事時間だか分らない位である。又先般ビーボデー博士が來朝せられた時、銀座から日本橋通りを通られて、店毎に二三若しくは四五の人々が火鉢を圍んで話をしてゐるが、あれは何

をして居るのかと尋ねられたことがある、成る程注意して店の有様を見ると、番頭や丁稚等が始終安閑として親睦會を開き無駄話をして居る様に見える。さうすると彼等の職業時間は丁度何時間であるか計算が六ゲ敷くなる。大工、左官等は比較的計算のし易い方であらうが、車夫の如きは仕事時間の最も不規則なものであらう。兎に角此の計算は面倒なものに相違ないが、要するに職業の時間はその職業の性質により大に異なるものである。

次には休息の時間である。働いて疲れたとき、「一寸一服」と云ふが如きは、私の言ふ休息時間の一例である。睡眠時間は重なる休息時間に相違ないが、今云ふのは起きて居る間の休息のことである。休息のことを英語では relaxation といふが「弛緩」の意で、今迄仕事の爲め緊張して居た筋肉が弛んで、凡べて體が延び／＼することである。筋肉が緩るんで、その間に氣力が回復する間の時間である。此の休息時間も人と職業とによつて大に異なるので、殊更らに休息といつては殆んどせぬ人もあるし、休む間にも何か外のことをする人もあるし、

又殆んど休んで計り居る様な人もある。嚴格な意味では眞の休息は何事をもせぬ事であるから、此の意味の休息は餘り多くはないかも知れぬが、多少は必ずあるに相違ない。

休息時間に關聯してゐるのは娛樂時間である。

休息は活動の中止を意味するが、娛樂は一種の活動である。讀書、對話、散步、騎乘、舞蹈、球戲、生け花、茶の湯、謠曲、圍碁等、凡べて一種の活動であつて、決して絶對的の休息ではない。又是等は職業として之に従事すると、それは職業であつて決して單に娛樂ではない。否、世の中には娛樂にすれば面白いことも、職業となると、苦しいことが澤山ある。たとへば圍碁の先生に取つては圍碁は娛樂であるか職業であるか、これも區別は六ヶ敷い場合が少なくあるまい。要するに此事は娛樂としてすれば娛樂時間で、職業としてすれば職業時間である。此は人によつて區別が生ずるのであるから、休息とは別物であるが、娛樂は精神を爽快にし元氣を回復する點に於いて、遙かに純



# 一日二十四時間を如何に暮すべきか

岸 本 能 武 太

## 一

二十四時間とは一日の事であるが、私は諸君に向つて「諸君は此の一日二十四時間を如何に暮されて居るか」と云ふ問を發して見たいのである。

一日二十四時間の暮し方を一々項目に分け各項目の時間を計算して表にして見る事は、餘程參考になることであらうと思はれるので、私は之を成る可く多くの諸君に御依頼して、先づ各人の表を集め、それから進んで総合的な表を作つて見たいと思つてゐる。今これを諸君にお依頼するに當つて、試みに一日の暮し方の條目を數へ、更に進んで一日は如何に暮すべきものであるかと云ふことを、簡單にお話して見たいと思ひます。

一日は誰れに取つても同じく二十四時間であるが、此の二十四時間は人によつて全く暮し方が違つて居る。又同一人でも時によつて違ふこともある。

先づ人によつて如何なる相違が生ずるかと云ふに、第一には老幼の差である。年齢の違ひから來る暮し方の相違は著しいもので、小兒の生活は殆んど全體が遊戲であるのに、大人には終日遊んで計り居るものは尠ない。併しそれとすると老年になれば、大人も亦小兒の如く所謂隱居して遊んで暮すものもないではない。次ぎに男女の相違から一日の暮し様にも亦非常な相違が生れて來る。多數の女は所謂家事の爲めに一生を送つて居る。即ち内を守るが女の仕事である。これを男子の方か

ら見れば、女の仕事は椽の下の方持ちの様な仕事で、如何にも詰らないものであるが、併しこれは今日の處では女の運命であつて、結局男の一生に比べて損な一生である。故に男の方からは大に同情すべきものがある。早い話が私自身は今私は家内と入れ替ふことは免を蒙りたい。そこで我等男子たるものは、他のことと大に女子に償つてやるべき責任があると思ふ。斯く性の相違許りてなく、又貧富の差でも大に違ふので、たとへば富家の女は貧家の男以上に樂な生活をしてゐる。富家の男に至つては一日の暮し様が貧人に比して更らに大に異つて居る。更らに又人々の職業の如何によつて、二十四時間の暮し様は大に異つて居る。體を使ふ人と心を使ふ人とは大に違ふ。學生と勞働者、官吏と商賈人、軍人と文學者等各々大に違ふものである。

かくの如く、或は年齢により、男女の性により、或は貧富により或は職業によつて、二十四時間の分配が違つて來るものであるから面倒であるが、此上に時によつても違つて來るから、此の配當は

非常に複雑な問題にならざるを得ない。如何なる人でも一年中毎日毎日同一の暮し方をする人はない。冬は働けても夏は駄目な人もある。秋が忙しい人もあれば、春が忙しい人もある。又同じ一週間の中でも日曜と普通の日は違ふ。休日とか祭日とかは自然に普通の日は違ふべきである。

斯様に一日二十四時間を如何に暮すやと云ふ問題は、一見簡單に見へて其の實中々面倒な問題である。況や如何に暮すべきやと云ふ理想的な問題になると、一々その人の事情に就て精密に研究しなければ定められないことであるが、同時によく研究すると、非常に面白いと思ふのである。

併しながら一般の人々を考へ、又一年を通じて考へると、如何なる人々も、又如何なる時に於ても、凡べての人が定まつて毎日必ずする事がある。

人間である以上誰でも毎日必ずすることは、第一に寝ることである。併しこれとても人によつて時間に長短がある。職業の繁緩、體格の強弱等によつても睡眠時間は決して一樣でない。ナポレオンは三時間寝れば十分であつたと云ふが靜座法の

き婦女を勧誘して姦淫せしめたる者は三年以下の懲役又は五百圓以下の罰金に處す』とある。この中第百七十六條、第百七十七條、第百七十八條は未遂罪と雖も罰するのであるが、被害者の名譽を重んずる精神から罪は告訴を待つて論ずる制度であるから、告訴を爲し得ない情實を知り抜いて居る場合は、強姦でも猥褻でも敢て行ふやうに成勝である。暴行脅迫によつて強姦猥褻の淫事を敢て遂ぐる者が實際の世上に於ては天下餘程の多數を占めて居ることであらう。事實上この聖代に於て、腕力を以て金力を以て權力を以て、婦女の自由意志に反して強制的に通ずる淫鬼貪狼が白中に横行して居るのである。これでは現行の刑法は一個の空文であつて人權の蹂躪は勿論、風俗の壞亂は到底防止するに由がない。刑法學者はこの點に關して猛省一番する必要があると思ふ。殊に營利の目的を以て淫行の常習なき婦女を勧誘して、姦淫させる淫行媒合罪は事實上最も多きを占めて居る。天下到る所の銘酒店の女中、藝者屋の抱女、待合旅店の女中の種類は皆な滔々として其れである。

父兄、後見人、親戚、知己の手に依つて妾、藝娼妓、淫賣婦になることを勧誘する場合も亦た同じである。鬼は必ずしも新嘉坡や大連行の婦女を賣買する誘拐者のみではない。愛する子女に淫行を勧める自己の親愛なる父母が鬼である。斯うした風俗壞亂の根本的事實を看却して、婦女を海外に誘拐する二三の無賴漢を取締るのみの法規てあつては、一國の刑政は實に頼み甲斐のないものと謂はねばならぬ。

#### 四

(四)の場合には密賣淫を爲し又は其の媒介若くは客止を爲したる開放行爲によつて第三者に性事を想像、刺戟、挑撥させるために風俗壞亂の行爲になるのである。警察犯處罰令第一條に『密賣淫を爲し又は其媒介を爲し若くは客止を爲したる者は三十日未滿の拘留に處す』とある。密賣淫は風俗壞亂の中心點である。男女の風俗壞亂は密賣淫に於て最も顯著なる惡風を組成して居る。男女の情交は神聖なるもので夫婦の性事は自由意志を以て誠意



に湧く共生の愛に於て行ふべきが人間の典當であつた。然るに金品財物を提供することに依つて性事を行ふは、淫樂又は金品を目的とした行爲であつて男女人生の理想に對して何等の意義を有して居ないから、人道に反する沒義の行爲であることは論證する迄もない。密賣淫は健全なる男女情交の神聖を侵すもので最も醜陋なる行爲である。風俗壞亂の行爲としては蓋し最も能く衆目に映ずるものである。密賣淫の社會病的現象に關しては頗る複雑した原因を有して居るが、主として貧富に關する男女の經濟的事狀と晩婚獨身に關する彼等の結婚事情に胚胎するのであるから、國家は淫賣淫に依る風俗壞亂を矯正するためには行政法規を後にして、先づ其の根本に着眼して、男女の經濟と結婚とに關して、根本的解決を與へる政策を採らなければならぬ。

(五)の場合には肉體に關して醜體を開放した、めに第三者に對し風教を侮辱する行爲である。警察犯處罰令第三條に『公衆の目に觸るべき場所に於て袒裼裸程し又は臀部股部を露はし其他の醜態を爲

したる者は二十圓未満の科料に處す』とある。人の心は強くて弱いものである。久米の仙人が川に洗濯して居た女の脛を見て色情を起したと云ふ。これは獨り久米の仙人に限つた譯ではあるまい。

殆ど全部の男子がさうであらう。女子もまたさうであらう。袒裼裸程し臀部股部を露出されたならば如何に道心堅固な者でも正情を亂すのである。

殊に青年男女はそれが動機で女色に陥り、男狂になつて、仙人にもなれず出世も出來ず、多望の才を懷きながら覺えぬ失敗を招くことが往々あるのである。男女が居室を異にするのも浴室を別にするのも是に基因して居る。男女の裸踊や短衣の舞踊女を堂上に拍手喝采する現代人の心理を解剖すれば、人心の弱いにも基くが總じて良風の頹廢して男女の禮節が破毀された現象である。これを自然の推移に任せて置けば、社會は野合醜行の悲に化すること必定であるから、爲政の當路者は須らく此等の行政に留意して其の監督を嚴にせねばならぬ。

て居る有様を想到するのである。非倫の行爲なることは元より了知して居るけれども屢ば之を目前に眺めることに依つて、遂に刺戟され挑撥されて其の淫逸の行爲を憎惡する道德的情操が次第に薄弱になつて、遂に之を讃唱謳歌して我も之を行ふことを以て人生の幸福であると考へ、良心の地位は著しく低下して次第に之を摸倣することになるのである。勤儉貯蓄、奮闘努力と云ふ道德上の規範を、歸するところ富貴を贏ち得て妾宅を構へ豪奢を極める方便であると解して之を追求する理想を懷いて、學校歸や勤め歸に妾宅を眺めて垂涎しながら心を勵まして居る馬鹿者も今日尠くないのである。妾宅を構へて妾を數多く蓄へる實力を以て功名に誇り乍ら互に競争する事實は、實業家の群輩などには最も多い現象である。これは吾々の實見する風俗壞亂の有力なる事實であつて尤も痛惜に堪へないものである。

次に一家に一妻一妾のみならず、一妻多妾を蓄へて置く者が居る。主人が中央の一室に控へて、次々の室に妻妾を環狀に侍らして輪番交代させる

者がある。これは聞くに堪へぬ風教の壞亂であつて、實に言説の外である。男女の大倫に戻ると甚だしく、家庭を破壊し子孫の教育を毀傷する如き大愚の振舞である。佛國の刑法には一家に妾を蓄へた證據のある男子に對しては百法以上二千法以下の罰金を科す規定がある。これは甚だ善法である。男女道德の紊亂して居る佛國に於てすら斯の如くである。如何なる時代に於ても一室に妻妾を並置することは最も憎惡すべき行爲としてある。孟子も之を憎んで居る。齊に一室に一妻一妾を蓄へた男子があつたが毎日滿腹して歸つて來て妻妾にのみ美食をさせて共に食事を取らなかつた。妻は之を怪んで良人の後を附けて行つて見たら、諸所の村落を歩いて乞食して居るので、之を妾に話して良人を誂り互に身を過つたことに泣き合つたと云ふことである。今日我國の女子には甚だしい誤解をして居る者がある。主人が外出して女色を漁り妾宅を構へることは人格に關するから遣るならば宅に居て遣つて頂きたいと云ふのである。一室に妻妾を並べ置くことを夫人自ら發起して居

る。一部の批評家は之を賢婦であると云つて賞讃して居る。現代の日本女子若くは道德の批評家に斯く迄も良心の麻痺腐敗した者の存在することを思へば吾々は憤憂に堪へないのである。

それから妾を連れて外出することは更に一步を進めた風俗壞亂である。齡已に犬馬に達し腕節を堅く持すべき白髪禿頭の祖父曾祖父が、元氣養成のためであると號して、芳紀阿嬌の孫娘の如き處女を擁して痴語喃々しながら物見遊山に出掛けたり旅館に投宿したりする行爲は、悖德亂倫の甚しいものであつて極めて見つともない光景である。

風教を害し世道人心を過ることより大なるはあるまい。我國の現行民法に庶子の制度を是認して居るのは、刑法で妾を公許すると相表裏して風俗壞亂の濫觴を爲すもので、道德政策より見れば極めて惡法である。

### 三

(三)の場合は姦淫猥褻の方法を以て公然と異性に對して情交を要求するために、社會の正教を害す

るによつて風俗壞亂の行爲になるのである。異性の一方が一方の相手方に對して情交の自由を拘束し、性事を敢て想像、刺戟、挑撥するのみならず社會の第三者に對して之を見聞させることは等しく想像、刺戟、挑撥する所爲であつて風俗壞亂になるのである。本邦の刑法には猥褻姦淫の罪を設けてある。第百七十四條には『公然猥褻の行爲を爲したる者は科料に處す』とある。第百七十六條には『十三歳以上の男女に對し暴行又は脅迫を以て猥褻の行爲を爲したる者は六月以上七年以下の懲役に處す十三歳に満たざる男女に對し猥褻の行爲を爲したる者亦同じ』とある。第百七十七條には『暴行又は脅迫を以て十三歳以上の婦女を姦淫したる者は強姦の罪と爲し二年以上の有期懲役に處す十三歳に満たざる婦女を姦淫したる者亦同じ』とある。第百七十八條には『人の心神喪失若くは抗拒不能に乘じ又は之をして心神を喪失せしめ若くは抗拒不能ならしめて猥褻の行爲を爲し又は姦淫したる者は前二條の例に同じ』とある。第百八十二條には『營利の目的を以て淫行の常習な



ることは別に風儀壞亂にはならないのであるが、之を積極的に第三者に想像させる惡意の方法又は過失に出でたならば風俗壞亂の行爲になるのである。況して其の性事を開放して第三者の色情を刺戟挑撥せしめることは甚だしい不徳であつて元より風俗壞亂の行爲である。殊に家庭に於て子弟の間に之を示して平然たる場合は、骨肉近親の間柄であるから刺戟挑撥にはならなくとも、家庭教育は破壊され、子弟は知らず知らず誘惑されて女色を覺え、惡所に通つて淫蕩に身を亡ぼすことは極めて想像し易い順路である。下層細民の社會に於て一室に二組も三組も夫婦が子弟と雜居して食事談話性事を一室に行つて居る事實は風俗壞亂の太だしいものである。假ひ經濟上に齎縁しても、國家又は自治體の力に依り家屋の改良を促がすことに由つて、夫婦者と子弟の寢室位を差別させることはさしたる難業でもないのである。經濟は歸するところ國民の教育にあると云ふ經濟上の原則があるならば、こゝに外債を募集しても貧民長屋の改良位は斷行しなければならぬ。方今、都會の地

主は貸家を濫造して蝸集する窮民に貸し與へて居る。然るに當局は水害火災其他衛生上の虞から繁縟の法規を作り諸般の設備を施して居るけれども、人格陶冶の道德上からは何等の設置經營も爲して居ない。

人は物心兩界の生活を營む者である。是に自己の生命がある。心界に於ても物界に於ても自己の生命に取つては薰育される搖籃である。里は仁を以て美と爲すのである。人生の生活の本據であるこの住居は最も大切なものである。其の位置構造の如何は直ちに人格の修養に大なる影響を及ぼすのである。室内の構造が悪ければ幾ら精神を丹田に据ゑて居ても、外界の刺激に依つて邪念を起し妄想に走り易い。之を努力すれば徒らに精力を消耗するのみで勞して實効を奏さないものである。骨肉縁者の間柄であつて見れば同室に居て一日口を噤んで居る譯にも行かず、長い月日の間には必ず感情の行違も意志の衝突も有勝である。殊に女子に於て最も然りである。これ等が原因で親子の争も起り夫婦の喧嘩も始まり兄弟互に牆を作ると

にも爲るのである。古來より聖賢の士は住居を定めるに頗る苦心を用ゐて居る。孟母の三遷もこれが爲であつた。世に化物邸と云ふものがある。其處に住む者は必ず災難を蒙るが常としてある。劍士や心理學者で無理に住んで見る者もあるが妻子眷屬に嫌忌されて數年とは續いて居ない。又世には家相と云ふものがある。迷信と云つて一概に擯けて居るけれども、私は思ふに化物邸でも家相でも自然界の條理から歸納して人事の吉凶禍福を演繹したもので、畢竟するに人間の住居に就いて人格的修養の適否を言つたものであると思ふ。孔子の周易が實にさうである。私は實踐道德學の上から化物邸や家相の陰陽學に就いて、周易を基礎にして現代哲學の思想で科學的研究を續けて見たいが、こゝでは餘談に亘るから筆を擱く。

## 二

(二)の場合(夫婦(相愛者)でない男女が性事の逸樂を目的とする消極的な風俗壞亂の行爲を更に想像、開放、刺戟挑撥する積極的行爲に出づるによ

つて第三者(社會)の正義を危害するから風俗壞亂の行爲になるのである。其の好例は妾との情交行爲である。妾は人道の公設した妻ではない。淫樂を目的として私設した不義の機關である。之を蓄へるは男女の大倫に違背した情交行爲である。夫婦の道に於て人生の完全幸福なる理想的形式を沒却した無道奪倫の行爲である。人格陶冶の本體である所の男女道德の犯罪者である。行爲に於て不善であつて品性に於て醜陋である。社會的生活の根本義に違反した反社會的の行動である。社會の水準的綱常を破り、道德的意識の靜海に激浪を起した者である。善良なる風俗を蹂躪した正義の仇敵である。

それて妾を蓄へる行爲そのものが既に良俗の破壊であるから、妾宅を構へる行爲、一室に妻妾を並べ置く行爲、妾を連れて外出する行爲は悉く風教の壞亂である。妾宅を構へる行爲は何故に風俗の壞亂であるかと云へば、これは社會の第三者に對して想像、開放、刺戟挑撥する行爲になるからである。通行人は妾宅を見る度に其の淫樂に耽つ

することも出来る。殊に近代に至り科學が發達して、心理的現象を精神より來るものとせず、身體や神經系統に行はるゝ法則、即ち勢力保存の法則より來るものとする論者も出來、遂に宗教は神經心理或は病理學によつて説明さるべきものとする學者も出來たのである。固より此の研究方法で大に我れ等を感服せしむることが澤山發見せられたと云ふものは少なからうとはトレルチの云ふ所である。然るに宗教的現象が科學的或は法則學的でなく、唯だ分解的或は記述的心理學の立場から取り扱はれる時は、随分とその特色を擧げて示すことが出来る。けれども此の場合の缺點は特別な場合の現象が無數になつて、此の無數の現象の中から共通のものを取り出し、そしてそれを宗教の本質を定める基礎とすると益々困難になることである。

要するに宗教を心理學上より研究することは極めて必要なことではあるが、それ計りに任して置くと單に現象の記述になる。或は科學的と云ふことに偏して唯だ現象の上に現はれる法則を認識することになる。さうすると唯だ實驗を順序よく並べる法則を發見する丈けて、眞に宗教を理解することは出來なくなる。宗教には果して此の如き實驗以上に深き實在が働きを及ぼして來て居るものではなからうかと云ふ問題が、等閑に附せられる。けれども此れが反つて宗教にとつては遙かに大切な問題である。是れトレルチが宗教の心理的研究と認識的研究を原理上嚴格に區別しやうとする所以である。

宗教心理學に於ては既に述べたこともあるから(本誌六月號)再び細かに云ふ必要もあるまいからそれは略することにして、トレルチが宗教を認識論上から見て、そして宗教の形而上の本質を發見して居る點に就て少しく述べて見やうと思ふ。(未完)



道德政策上 男女風俗の壞亂（中）  
より見たる

一條 忠 衛

一  
以上は男女の情交に關する行爲に於て、反道德的なる行爲に就いて考察して見たのであるが、次には男女の情交に關する行爲を想像、開放、刺戟、挑撥する事物に關する行爲に就いて精査して見なければならぬ。此の場合は最も多く實に廣衰なる範圍に亘つて居る。大體に分類すれば下の如くなる。

一 夫婦の性事で道德的判斷以外に出てゝ想像、開放、刺戟、挑撥する行爲。  
二 夫婦（相愛者）でない男女で逸樂を目的とする性事を想像、開放、刺戟、挑撥する行爲。  
三 公然男女に對する姦淫猥褻の行爲。  
四 密賣淫を爲し又は其媒介若は客止を爲す行爲。  
五 醜體を爲す行爲。  
六 遊廓、待合、藝者

屋、銘酒店を認可し娼妓酌婦の密賣淫を默許する行爲。  
七 風俗を壞亂する文書、圖書其他の物を製作又は頒布、陳列、販賣する行爲、又は風俗を壞亂する演劇興行の行爲。この七種の行爲に於て風俗壞亂を生ずるものである。

一の場合には夫婦の情交行爲であるけれども公然と第三者に對して其性事を敢て想像させ又は開放し又は刺戟挑發させる爲めに、反道德的になるので風俗壞亂の行爲を作爲するのである。何となれば社會の風教を侵害し之を侮辱するからである。夫婦は道德的制限内に於て男女の情交を公許されて居るのであるから、夫婦の間に性事の行はれて居ることは何人も想像して怪まない。それで夫婦は消極的に自己の性事を第三者（社會）に想像させ

に關する論文が澤山に出た。僕が見たもの計りても Die Christliche Welt 誌の一六、一八、一九の三號に亘つた Theologischen theologischer Entwurf や Theologische Rundschau の一、二月號に於ける Zur Theologie Theologischs や Zeitschrift für Theologie und Kirche の五月號に於ける Philosophie und Theologie bei Theologisch im Zusammenhang mit der Philosophie und Theologie des letzten Jahrhunderts などがあつた。

## 二

宗教哲學と云へば、何んだか宗教を哲學的に構造でもするやうに思はれるが、それ程間違つた考へがあるものではない。宗教は歴史的の事實である。歴史に現はれたるものを除いて、我れ等は宗教を知らないのである。故に若し宗教を哲學的に論じやうとするならば、どうしても宗教の歴史を基礎としてその上に建築しなければならぬ。是れ今日哲學の方面からも、宗教歴史を度外視することの出來ない計りでなく、充分それを知るの必要がある所以である。であるからトレルチも亦た色々な宗教を研究して知るの必要を論じて居る。けれども此の事は今迄の神學に於ては大に等閑に附せられて居たのである。

然しながら若し諸宗教を平等、公平に、歴史的に觀察し來る時は、獨り基督教のみ特殊の宗教であつて、他の宗教は悉く偽りの宗教である、或は他の言葉を以て云ふならば、基督教のみ獨り天啓を受けて出來た所謂超自然的宗教であつて、他は悉く人間或は惡魔の製造した自然的宗教であると云ふこ

とは出来なくなるのである。従つて奇蹟とか救済とか云ふことの如きも基督教にあるものゝみが、眞實であつて他は悉く虚偽であるとは云へなくなるのである。これ等のとは固よりトレルチも彼れの著述「基督教の絶對性と宗教歴史」或は「宗教哲學」などに於ても充分に云つて居るが、これ等の議論は我れ等にとつても最早餘りに耳新らしいことでないから精細に述べる必要はあるまい（若し此の事に就て尙ほ見たき人々あらば、本誌の五月號に於ける僕の論文を參觀あらんことを願ふ）

### 三

次ぎに起る問題は宗教心理學に關してである。現今の宗教哲學を論ずるものはどうしても亦た宗教心理學を度外するとは出来ない。歴史の發展は前幾千年より延いて我れ等の意識に及んで居る。そして我れ等の意識に於て體驗せられて日々に或は刻々に歴史となりつゝあるものである。乃ち我れ等の哲學的宗教研究には斯くの如き所謂現在の宗教性がどうしても缺くべからざる材料である。否な此のものが出發點とならなければなるまい。けれども此の宗教的意識なるものは、さう個人的に計り解すべきものではない。又一宗教或は一教派、一宗派の意識をも云ふのである。是れ等のものは、皆な今日の言語を以て現はされるから、反つて過去の歴史になつて居るものよりも了解の出来易いものである。

かゝる宗教的意識を研究して、こゝに現はるゝ法則を發見すること、即ち所謂意識の分解と云ふことは近代的なる考へ方の特徴に屬するものになつて居る。然るに此の研究の方法は必ずしも宗教の利益とのみならずとは限つて居ない、彼のフアイエルバッハが説を立てたやうに、宗教を全く心理的妄像と



トレルチの名聲は今や獨逸に於ても益々昂つて居る。彼れは自由神學派のうちで宗教歴史派と稱せらるゝもの(本誌五月號參照を乞ふ)の重鎮のやうに思はれて居る。彼れは未だトレルチ派と稱するものを組織するに至らないとしても、青年神學者の間に非常なる勢力を有して居る。或は他日トレルチ派なるものが組織されないとは、誰れも豫言することは出来まい。彼れの年齢も今が丁度働き盛りである。彼れは千八百六十五年にアウグスブルクに生れたのである。さうすると日本流に數へて丁度五十歳である。彼れの大成は以後二十年間にあると云へやう。彼れ千八百九十一年に初めてゲッチンゲン大學の講師となり、翌年にはボン大學に於て組織神學の員外教授となり、千八百九十四年からはハイデルベルク大學の正員教授となり、千九百十年からは同大學の哲學科の講義をも兼任てやつて居る。彼れは初め大にリッチュルやヘルマン・シュルツの感化を受けたので、純然たるリッチュル派のものであつたが、後には段々此の派より離れて、獨立の見地を開いて、前にも云つたやうに宗教歴史派の首領と仰がれて居る。彼れの論文を讀むと、随分理窟のみで堅めた、堅たくろしいものが多いが、彼れの人物に直接に接して見ると、餘程快活な、諧謔フモールのある人である。そして容貌は魁偉である。その演説も場合にもよるかしかないが、僕の聽いたのなどは非常に熱烈なもので、聽衆を感動せしむるの力が充分にあつた。

トレルチ教授は随分多作で且つ多方面の學者である。彼れが有して居る名譽博士の學位でも法學、哲學、神學の三つあるのを見ても大體の想像はつく。けれども彼れには未だ大著述と稱すべきものはない。あるものは百頁か二百頁位のものに過ぎない。固より此小著述の内容に至ると、獨特の識見が

あつて、充分重きをなすに足るのは勿論であるが、しかし彼れの識見全體を組織的に述べた、と云ふ意味に於て大著述がないと云ふのである。けれども彼れの胸中には最早之を著作するだけの準備が出来て居やうと思ふ。四年前に僕が伯林で逢つた時に、僕は博士の著述を平常愛讀して居るが、未だ纏つた大組織のものに逢着しない。若し僕の寡聞にして之を知らないのかも知れんから、あるのならば教へてもらいたい、と云ふと博士は「それはやがて出来る、やがて出来る」と答へた。雜誌などにもトレルチ博士の今度の著述は「宗教哲學」であると二三年前から吹聴して居るが、未だ出来たやうにはない。けれども昨年から博士は一種の大著述を公にしだして居る。それは彼れの論文集であつて、第一卷は *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen* と題して千頁程もあつて上下二冊から成立して居る。第二卷は *Zur religiösen Lage, Religionsphilosophie und Ethik* となつて、これは八百六十餘頁もある。第三卷は出る豫定になつて居る計りであるが、出れば *Aufsätze zur Entstehungsgeschichte des modernen Geistes* と題せられる筈である。けれども又固より此の文集の中へ收められないもので大切な論文も澤山にある。殊に彼のクローノ・フェセルの八十歳祝賀の爲めに多數の學者が執筆して出版した *Die Philosophie im Beginn des 20. Jahrhunderts* の中にあるトレルチの「宗教哲學」や「基督教の絶對性と宗教歴史」や「宗教學に於ける心理學と認識論」の如き、或は「神學百科字典」や「歴史と現在に於ける宗教」の中にあるトレルチの執筆せる「獨逸の理想主義」とか、「信仰」「恩恵」「天啓」などのやうなものは最も注目すべきものである。然しながら僕がこゝに注目したのは特に彼れの宗教哲學に關するものであるから、その他の事へは論及せざる積りである。獨逸でも今年になつてからトレルチ

彼れ等は涯もなき行路の寂しさに焦立つて人を殺し、人を傷け、人を冷笑する。しかしながら彼れ等は悉く人間性の尊さの持主である。彼れ等は泣きつゝ人を殺し、泣きつゝ人を賊する。不可思議なる運命の力は黙してこれ等の旅人を引き摺つて行く。引き摺られ行く人類のあはれなる行旅の道伴れを見よ！

クリストは寂しき人々の慰め手であつた。ドストエフスキイも亦悲しめる不運な囚人等の友であつた。

厭離、憎人の念はこゝに一轉して人類のうちに我が愛の伸展を見、我がいのちの擴充を發見するであらう。そは寂しい行旅である、しかしながら人類の凡べてを擁抱する熱愛の涙に、私達の生活が偉大なる希望と緊張とを覺めるところである。

私は私の敬虔な心があらゆる不運な人生の同伴者の悲しい心を抱くことを得んを冀ふ。

生來、好惡の念の強い私は殊にクリストやドストエフスキイの海のやうな愛を羨ましく思ふ。私自身では餘程この頃になつて、このやうな心を持つことを努めてゐるが、偶々自己を省みる時に自分は恐ろしい憎惡、忿恚の念を抱いて人に接してゐるのに氣付くことがある。

最後に私は現在の私の心境から出發した愛の觀念は、人生に對する不安、疑惑、驚異、宿命といふやうな感じなり或は色彩なりを取り除くことのできないものであることを附け加へて置かねばならぬ。

窓の外には冬の夜の風が荒んでゐる。顫きつゝ相抱いてゐる寂しき人々の涙をして常に私の愛の故郷としたい。





## 最近の宗教哲學

——トレルチに就いて——

三 並 良

哲學的思辨の方面に於て、僕が學生の時代から特に注目して居た獨逸の學者は哲學者ではオイケン、神學者ではトレルチであつた。此の二人の議論を讀んで見ると何時もその議論の立て方に引合つけられる。内容の充實して居るのに敬服した。オイケンは既に四五年以前から世間一般の注意する所となり、やがては我邦へも渡來されるやうになつて居るので、僕は大に愉快に思つて居る。トレルチ教授の事も此の春頃から我國の雜誌などへも度々紹介されるやうになつたのは、是れ亦た僕の愉快に堪へざる所である。トレルチの學說が紹介された重なるものは本年二月の「神學之研究」ヘミラー博士の「トレルチ博士の宗教觀」と題する論文が岡田哲藏君の筆により、又同一の論文が同月の六合雜誌に相原一郎介君の筆により譯出せられて居る。其他本年の「新人」には日野真澄君が數號に亘りて、トレルチの *Die Bedeutung der Geschichtlichkeit Jesu für den Glauben* を「トレルチの基督觀」と題して譯出して居るけれども此れは獨逸語より譯出したるものかどうかは知らない。譯文からはさう思へない。

てはそこに一人の敵もあり得ない筈である。靈の眼鏡を透して見る人類の凡べてはみな靈のものとして彼れの前に動き、愛の眼鏡を透して見る生物の凡べては。彼れの前に悉く味方となり、兄弟となつて現はれたにちがひない。イスカリオテのユダも、バリサイの徒も凡べて彼れの味方として、彼れ自身の反映として現はれたであらう。もし彼れの前に立ちて彼れに敵と見ゆるやうな人があつたならば、彼れは彼れ自身の愛の缺乏を痛感したであらう。

\* \* \* \* \*

私達はどこまでもクリストの愛を持ちたい。どこまでもドストエフスキイの心持ちを抱いて人を見たい。私達がもし「自分は敵をも愛すると」いふ言葉を、そのまゝに取つて自分の生活に愛を活かして行かうと思ふならば、それはまだ眞に愛に生きた人ではない。眞に愛に生きた人にとりて敵といふものはあり得ない筈である。苟くも敵といふやうな觀念を抱いて人に接してゐる間は、その靈は眞實に他我の靈に飛び込むで行くことのできないのである。まだその人の愛は限られたる愛である。

私達の生命の擴大といふことは愛の擴大に他ならぬと思ふ。生命はたゞ愛によりて傳へられ、愛によりて結ばれ、愛によりてのみ伸展するものであると思ふ。

私達が社會に立つて *Misanthropist* となり、或は厭離者とならうとする場合に、私達はユダであり又は税吏である人々に對してクリストが抱いてゐたやうな心持ち、またはドストエフスキイがシベリアの囚人達に對してまで拂つてゐた人間性の尊さに對する驚嘆の念を失はなかつたならば、私達の周圍が餘程異つた氣分や明るさを以て充たさるゝのではあるまいかと思ふ。

私は多くの人々に接するごとに、何時も人々の顔色を見て自分の心を動かさるゝことが多かつた。

現在に於いてもさうである。そこで私にとつては人を訪問することも苦痛であつた。又日々麵麴を索めんが爲めに巷に出て多くの人々と接しなければならないことは猶ほさら苦痛である。私は自分が接した一人の人の不興氣な顔色を見ただけで自分が彼れから侮辱されたやうな、或は裏切られたやうな氣になつて一日悲んでゐることが多い。例へ自分に對してでない事までも私は自分の身上に持つて來る習慣がある。或人は『人が君のことを何と思つたつて宜いぢやないか、君はただ君の眞實と思ふところを盡せばそれで宜い。君は人から愛せられやうと思ふから駄目だ』と言つて私を慰めて呉れた。

私はその友人に感謝する。寔に私達は人から愛せられんことをのみ要求してゐる。私達は自分を愛しなければならぬ。万人を愛しなければならぬ。クリストは誰の愛をも要求しなかつた、彼れはあらゆる人類を愛した。しかも彼れほど自己の生命の伸展を實驗したる人はないであらう。先づ私達は自己を理解しなければならぬ、人類を理解しなければならぬ、自己を愛しなければならぬ、人類を慈しまなければならぬ。私達が他に對して、自己に對する他人の愛の缺乏、理解の不徹底を歎ずる前に先づ自己の愛の不擴充を歎くべきである。自己を愛する者は先づ自己でなければならぬ。

彼れ等はみなあはれなる旅人である。麗しき人間性の光耀を抱きつゝ寂しき道を歩みつゝある道伴れの人々である。怒れる者、彼れも靈に生ける人である。罪を犯せる人彼れもまた麗しき人間性の所有者である。これ等の人々は運命の下に寂しき道をひたすらに歩みつゝあるのである。ただ引き摺られつゝ歩める旅人である。



泣き聲を聽いて一種の快味を覺えるやうなシベリアの囚人も降誕祭が近づけば無邪氣な村の童達のやうに他愛もないことに感激してその日を待つてゐるのではないか。酒の密賣者も、上官殺しの重罪犯人も降誕祭の夕となれば節あはれな故郷の唄をうたつて罪もない一日を過すといふてはないか。鐵の扉も、鐵の鎖も奪ふことのできない人間性の尊さが、機會ある毎に閃き出るのではないか。私はドストエフスキイの心とクリストの心とを結びつけて考へずには居られなくなつた。

クリストは實に人間性の尊さをその窮極にまで捉へてゐた人であつた。彼れの眼にはたゞ人間性の無限なる光耀と生命と尊嚴とがあつたのみで、決して瘋癲病も、癲病も、瘡<sup>あしな</sup>もなかつたのである。

彼れの眼には人間の肉を透して、永久にかはらぬただ一つの靈があるばかりであつたらう。彼れは悲しむ時決して貧民の乏しさが爲めに悲しむのではない、貧しき者の靈の窮乏を悲しむのである。

人間性の尊さを見ぬ者に眞の愛はない。靈から靈に波動するところに眞の愛が成り立つ。肉を透して見る靈なる人間と人間との交渉、そこに眞實の理解があり、融會があり、渾一がある。

人間性の美しさを見ぬ人々の愛といふ愛は、どこまでも有限であり、不定である。時にそれは憎惡となり、怨恨となる。人間性の無限なる尊さを認めたる人の愛は永劫常住のものでなければならぬ。

クリストの一生は常住の愛を以て一貫せられてゐた。釋迦もさうであつたらう、マホメットも恐らくさうであつたらう。彼れ等の眼に映る人間が、肉の上にのみ現はれてゐる刹那的、表面的、象徴的な人間でなくして、悠久、不惑、不變、實相それ自身なる靈である以上、彼れ等がこれに向つて注ぐ愛は常住不惑のものでなければならぬ。

私達の愛が常に不定、不安に襲まれてゐる所以は、私達の愛の對象そのものが肉であり、形骸であるからである。私達が友を求むる時、私達はその友人の面貌や、動作や、境遇やに就いて相互の愛の交渉を要求するならば、その愛は必ず不安疑惑の時を経験するにちがひない。私達が友を求むる時、その肉を透して輝ける彼れの人間性の尊さを見、彼れの心霊を捉へることができるならば、私達の愛はクリストの愛と同じ力を持ち、いのちを持つてあらう。

愛の絶對境を戀といふことができるならば、全人類の交渉は戀の如く潔く純にまた眞剣でなければならぬ。私達の戀人にとりて私達はクリストたり得るであらう。クリストはマグダラの女にも戀人であり、ヨハナにもパウロにも、イスカリオテのユダ自身にすらも戀人であつたにちがひない。あらゆる時代を通じて、あらゆる人々を通じて彼れは人類の戀人であり得る、そこに彼れの偉大なる愛の力が潜んでゐると思ふ。クリストは肉につけるイスカリオテのユダの悲しむべき謀反を知つてゐた。しかもクリストは彼れを憎むことはできなかった。クリストは何うしても汚すことのできぬ人間性の美しさをイスカリオテのユダの裡に見出してゐたからである。最後の晚餐會に於けるクリストの愛は最も強く彼の「師を賣らんとするあはれなる弟子」の上に注がれてあつたにちがひない。更らに彼れがゲッセマテの園に於いて祈つた時、彼れは彼れの愛がまだその最も近き弟子の間にさへ充分動いてゐなかつたことを悲しんだであらう。また彼れは「主を殺さんとする者は誰ぞ」と訊ねた弟子達がまだ眞實に彼れの愛を了解してゐなかつたことを歎いたであらう。彼れはどこまでもその敵を愛することを忘れなかつた。否、彼れは敵といふものを知らなかつたであらう。世界を掩ふ彼れの愛の眼よりし

ゝのである限りは。

Misanthropist となることは即て人生から全然厭離することである。死そのものである。自分を靜かに守りながら、自分といふものを密かに勞はりながら、泌み泌みと人生を味つて見たいといふ心持ちと、何うしてでも生きて行かなければならぬ、麵麴を索めなければならぬといふ要求とが何時も私の生活に悲しい矛盾や分裂やを齎らしてゐる。

私が生きんことを欲する間、私が麵麴を索めてゐる間、私はこの苦痛から遁れることはできない。

しかし私が日々經驗してゐる幾多の苦痛、幾多の屈辱といふやうなことは何れの社會に這入つて行かうとも同じやうに嘗めなければならぬ事を思ふ時に、私は人生を厭離すべきかまたは突き進んで行くべきか、その一つを選ばなければならぬといふ立ち場に到達したのである。幾多の人生の呪咀者、Misanthropists はこゝに至りて、人生を厭離すべき方法をとつたのであつた。しかしながら古來誰一人として、眞に人生を厭離し、人生を忘却し得たものが果してあり得たであらうか。私は斯のやうな問を發する自分の愚を笑はずには居れない。

\* \* \* \* \*

生を要求する間、私は人と人との接觸から離れることはできぬ。そして誰もが眞個に自分といふものの全的な交渉を取りかはすことのできぬ悲しさを感じるにちがひない。そして多くの場合私はやゝもすればその罪を他人の上に置いた。彼れが自分を理解することができないからだ、または彼れが自分に愛を與ふことができないからだといふやうに考へて來たことが随分多かつたやうに思ふ。私達は



こゝに考へなければならぬ重要問題が潜んでゐるやうに思ふ。即ち自分が彼れを理解せず、自分が彼れを愛することができなかつたといふことを私達は第一に考へて見なければならぬと思ふ。極めて通俗的な倫理觀であるかのやうに聞えるかも知れないが、あながちそんな意味ばかりでなく、眞實私達が人と人との生命の交渉を營む際には、どこまでも閑却することのできぬ條件であると思ふ。例へば今日まで私達は随分赤裸々な自分を提げて人々と接したやうであつた。しかし人々は私達に對して幾何の眞實な彼れ等自身を現はして呉れなかつた。私達が赤裸々て接近すればするほど彼れ等は障壁を築いて私達に對するやうに思はれた。こゝに於いて私達はやゝともすれば彼れ等を以て偽善者であり、虚偽の人であるとした。かく呼ぶことを以て私達の眞人であり、新人であることを標榜するかのやうにさへ考へたこともあつた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

ドストエフスキイの「虐げられし人々」を讀んだ時、私はドストエフスキイの寛大な心を思ふて、私達の焦々した心から餘りにかけ離れてゐることに驚いた。殊に私は「虐げられし人々」の主人公ワロニヤがナターシャに對して抱いてゐる愛、寛容、犠牲的精神といふやうなことは、餘りに**ばかばかしい**とさへ想つたことがあつた。しかし更に「死人の家」を讀むに至つて、ドストエフスキイが凡べての不運なる人々に對して抱いてゐた寛容な心持ちを知るに及んで、ワロニヤの心をも窺ひ知ることができるやうに思つた。

幼い子供を誘拐して來ては、彼等の柔かい四肢に鋭い小刀を突つ込んで、その**ひいひい**と絞り出す

愛知縣農  
林學校長

農學士 山崎延吉先生新著

三 版 出 來

# 農村教育論

●菊版總布綴箱入紙數五百八十頁餘●定價金壹圓九十錢送料拾六錢

學術、經驗、人格三者兼備りて著述はじめて眞價あり我山崎先生の如くにして初めて眞に書を著すに足る人と謂ふべし先生曩に『農村の自治』を研究し次で『農家の經濟』を講説し最後に此書に於て農村教育を評論せらる三大著述初めてこゝに完成す他の片々たる隨筆拔萃の編著と異なり眞に系統あり組織あり經綸あり熱誠あり先生の全知識全人格を發揮せる絶大文字は即ち是なり

農村教育論

第一章緒言、第二章農村の短所の其長所、第三章農村の教育的通弊、第四章農村の教育機關と施設、第五章農村教育意義、第六章農村教育の方針、第七章農村教育訓練の要項、第八章教授訓練の方法及手段、第九章學校教育に對する論議、第十章農村の教育家、第十一章結論、附錄

●發行所

東京市麴町區平河町五丁目卅六番地  
振替口座東京二〇九一四番

洛

陽

堂

電話番町四二五八

らば、それは愛を弄ぶ者である。恰かも陰陽二ツの電流が合しなければ電光を發しないやうに、愛は相互から同時に湧き出づる時に於いて最も強き光を發するにちがひない。勿論愛は同時に起るものではないかも知れぬ。同時に起り得ない場合も多くあり得るにちがひない。しかしながら一つの愛が動けば、他の愛が眼醒めなければならぬ。盲ひたる心、頑な心の鎖しを破つて柔かな愛のよろこびを覺えさせるものは、より強き愛の力でなければならぬ。

靈を喚び醒すものは靈であるが如く、眠れる愛の扉に立ちて鎖されたる愛を喚び醒すものは愛の力でなければならぬ。

ガリレア湖畔の無學な漁夫達を率ひて、その敬虔な宗教的生活に入らしめたものは、クリストの智でも才でもなかつた。ただ彼れの愛の力であつた。マグダラのマリヤをして、クリストの足に香油を灑がしめたものも亦、彼れの愛そのものの力を他にしては考へられぬ。

\* \* \* \* \*

私はこの頃毎日いろいろな人達と接觸してゐる。殊に始めて見るやうな人が可なり多くなつた。そしてその多くは私より年長の人達が多い。その人達に接するごとに、私の平和であつた心の状態が絶えず搔きみだされるやうなことが多い。できるならば私は此の境から追れたいと思つてゐる。しかし私は自分の麵麴を索めんが爲めには、何うしても今の自分の境を急に打破することはできない。けれどたとへ私が假りに此の境から追れ出ることができたにしたらところで、私は仍りまた人間の境から追れることはできない。麥の穂は畑に實る。しかしながら麵麴は巷に於いて始めて人の口に與へらる



週刊宗

教雜誌

# 基督教世界

每週木曜發行

一部 金五錢

半ケ年 金一圓二十錢

一ケ年 金二圓三十錢

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の智識に依り基督教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の說教、内外名士の論說と新進思想家の研讀と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、小山東助、山口金作の兩氏每號執筆し、加藤直士氏は外遊中每號見聞記を寄せ其他在兩京の記者數名之を助く

本誌の見本は御申越次第無料進呈すべし

大阪市北區中之島二丁目四七

發行所

基督教世界社

振替貯金大阪參壹七參

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副  
長、八目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)  
(本 八九八(私宅用)

## 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

## 院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ二一番

## 南湖院

河野、高橋、兩副長、八目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後  
入院、診後應需



## 愛の伸展

(クリストとドストエフスキイ)

吉田 絃 二 郎

一と口に愛といふが、與へるところの愛と、與へられるところの愛とは餘程異つた内容を持つてゐるやうに思ふ。愛は與へるところに最も多く生命の觀喜を伴ひ、與へらるるところに最も強く生命の悲哀を感じるのではあるまいか。

私達は私達の周圍を形作つてゐる多くの人々に對して、絶えず愛の交換を實驗してゐる。此の全世界が全一として活動するところには必ず愛の力がその根本調をなしてゐなければならぬ。友人、夫婦、父子、戀人、凡べての人と人との關係が、靈から靈といふ状態に於いて結ばんが爲めには、必ず愛が私達の生命表現の全基調として燃えてゐる時でなければならぬ。しかしてその愛は與へるものでもなければ、與へられるものでもないといふ状態に於いて眞に生命の調和を得べきものであると思ふ。例へば君臣、師弟、主従、といふやうな相對的二元的な態度に在りては眞の愛の力は感ずることはできないのであるまいか。愛を與へる者と與へられる者とを前提したる如き關係に於ては、未だ眞に愛の焔は燃え盡せないと思ふ。「俺は彼れよりは強さが故に、彼れを愛してやる」のだといふのであつたな



▲歴史的批評的舊約聖書の宗教大翻譯出づ!!!

帝國大學講師 加藤玄智先生序  
 瑞西ベルンカアル・マルテ著  
 大學正教授  
 聖學博士 加藤玄智先生序  
 公會長 今井壽道先生序  
 神學院院長 本前島 潔先生譯

最新刊

# 舊約聖書の宗教

定價 壹圓二十錢

郵稅 十二錢

原著書竹像其他寫真數葉入繼クロース獨逸式裝幀函入美本

舊約の宗教を學ばずして新約の思想を知る可からず、預言者の思想に通せずして基督の精神を語る可らず。猶太教は基督の母にして古代希伯來民族の宗教は西洋思想の淵源也。本書は風に斯學の泰斗として學界に暗傳せらるゝ著者が比較宗教學的見地に據り、古代發掘物を材料とし獨特の批評眼を以て舊約古代の宗教を縱横に論評し、解剖し、更に高遠なる預言者宗教の深趣を尋ね、猶太教の本質を評價し、以て基督教に將來したる宗教思想發展の徑路を闡明せる名著也。譯文頗る平明暢達、有益なる附録及脚註を附し、挿畫數葉を挟みて以て初學に便す。基督教徒は勿論一般宗教研究者は必讀せざる可からざる書也。

トルストイ伯著  
 加藤直士先生譯

## 我 宗 教

海老名彈正先生著

## 耶蘇基督傳

第八版 菊判 洋裝 定價 七十五錢 郵稅 八錢  
 第五版 菊判 洋裝 定價 七十五錢 郵稅 八錢

東京市京橋區中橋小廣路六番地  
 前川文榮閣  
 振替 貯金 口座 東京 四一〇九番  
 電話 橋 三三七番

のこわしは、奥に飾つてある陶器に、彈丸をぶつけて破壊するので、癩癩でも起していら／＼してるときは三つ四つこはしてくると胸がせい／＼するといふ話。ドイツ人にはまだどこか野性の抜けぬ所があるのは、遊戲の末にも現はれてゐる。こゝがドイツ人のまだ／＼末頼もしい所であらう。

### 其五、王城附近

フリードリッヒ、ストラッセからウンテルデン、リンデンの中程に出て、菩提樹の朽葉黄に落つる廣々とした街路を東に行くと、やがて並木路は盡きて茲にフリードリッヒ大帝の銅像が立てゝある。こゝから東は兩側何れも巍然たるゴシック式の建物が並んでゐる。先づ右側にはウイルヘルム一世王宮、王立歌劇場、皇太子の居城、左側には王立圖書館、ベルリン大學、遊就館、大學は東京の様な廣々した庭もないので左迄驚かぬが、其他は何れも立派なものだ。遊就館に入つて見るとさすがに武を以て鳴る國だけに各時代の武具やら戦利品やら、うんざりする程並べてある。ビスマー

クの着用した軍服だけは今に目に残つてゐる。

美しいシロックスブリュッケを渡ると、左に天を摩して聳ゆるのが王宮附屬の大寺院右に見ゆるのが王城である。王城はさすがに大きなものではあるが街路に露出してゐるので、どうも有難味がない。

正門（正玄關と言つた方が適當かも知れぬ）はスプレー川に面してゐて、河岸にはウイルヘルム一世の國民紀念像が立てゐる。中央に一世の騎馬像を据へて、臺下には戰勝の紀念を意味する群像をめぐらし、後の川岸に向つた處には廻廊様のものをつくつて、此上にも種々の神像を飾つてある。大體の規模はモスコウのアレキサンダー二世の紀念像に似てゐて、先づベルリンの紀念像の中では第一に數ふべきものであらう。王城は毎日十一時までは拜觀を許してゐるが、自分はいつちも遅く行つたので遂に一度も見ることが出来なかつた。比較的質素なもので、皇帝の聯邦に對する氣兼、國民に對する苦心は、こゝにも見ることが出来るといふ話である。

王城の北、大寺院の前の廣場を過ぐればギリシ

ヤ式の建築が連つてゐる。之が新舊美術館で、銅器陶器の類から彫刻、其他随分細かに分類して集めてあるが、模寫が多いので餘り嬉しくない。尤も後にあるのが國民繪畫堂で、フオイエルパツハやメンツェルの普通戰勝紀念畫、さすがにドイツ帝國建設の由來を語る好紀念物ではあるが、純粹美術としては餘り大したものではない。ベックリンの畫で二つ三つ面白いものがあるが之も思つた程のものではない。

スブレーの西河岸に沿ふて、更に北すればフリードリツヒ皇帝美術館がある。之はルネサンス式のお寺の様な建築で、見飽きる程ギリシャ、ローマ、古いドイツから近代に至る彫刻繪畫が並べてあるが、何れも模寫が多く取り立てゝいふ程のものもない。デュルレルハルスの畫はドイツ人の國寶とも自慢するものであるが、自分は昔から虫が

好かぬので、寧ろ今迄の觀念を強めるに過ぎなかつた。一體にはミュンヘン、ドレスデンにはいゝものがあるといふけれど、ベルリンで見ただけではどうもドイツには碌な美術はないやうだ。どこまでも實利の國で美術の故郷ではないやうだ。

王城附近の見物に附け加へて置きたいのは王城の東にある古いベルリンの遺跡である。王城の裏門から少し東に行くと市廳がある、之も已に大分古い建物で、古風の塔などベルリンでは珍らしく思はれるが、更に其東南數丁スブレーの下流に臨んだ一帯の地區に至ると、往來も狭く舗石も凹凸で、二階乃至三階の低い建物、近代のベルリンを見た目にはいかにも其差が甚しいので異様に見える。大分くづしはじめてゐて、二三年の後には全然とり拂はれるといふことである。ドイツの長足の進歩を語る好紀念であるものを。



四階の食料品部である。生々しい肉類から、野菜、菓物、更に魚類を水槽に放ちて、求むるものあれば一寸頭をちよんきつて、紙に包んで賣るに至つては、いかに三越が新築後、大擴張をしてもまねやうとは思はれぬ藝當であらう。

何を見ても珍らしい赤毛布の見物、一階から四階までぐる／＼廻つて來ると中々草臥れる。

四五度もいつたが行く度にまだ見たことのない室がある如何に大きいかは之でも想像出來やう外へ出てホツと呼吸をつくつと、さて目につくのは之も亦城の様な建物である。飾窓にある美しい陶器の額や、皿に引かれて恐る／＼拜觀を願ひ出づると、制服をつけた門番が外套までぬがしてくれる——之は王立製陶所である。

ベルリンへ來て、何人も目につくのは、象牙でもない、玉でもない、一種言ふにいはれぬ美しい光澤のある品のいい陶器が方々の店に飾つてあることである。夫が中々廉くない、一二寸の犬ころでも、七八マートクはする、之はコーペンハーゲンの陶器である。何事にも、他國にまけまいとする

ドイツのこととて、王室の附屬として此美術的陶器製造所を立てたのである。丁度自分のベルリン滞在中に、たしか創立百年紀念の御祝をしてゐた、コーペンハーゲンの陶器に較べては、どうやら物足りぬ感じがするが、兎にも角にも、其熱心と努力とは吾人の學ぶべきことであらう。但し之は後で聞いたことだが、こゝを見物すると何かしら、買はねばならぬことになつてゐるそうなので、之はありがたくない御制度である、成程賣子の女が後をつけて來て、唯見るだけかと念を押したのを、異様に思つたがそこに曰はくがあつたのだわい。然し自分は陶器を見ると夢中になる友人と行つて、其人が小鳥の置物を買つたので、先づ／＼赤恥をかゝなかつた。

#### 其四、フリードリッヒストラッセ

右へ行き、左へ渡り、あつちこつちと、美しく飾つた窓を、のぞきながらライプチーガーストラッセを辿つて行くと、東西に走る更に賑やかな通りに出るであらう。之が名高いフリードリッヒストラッセである。若しライプチーガーストラッセ

を銀座通りに比すれば之は日本橋通りとも言はふか、町幅が狭くて、電車も通らぬ程の道だが、朝から晩まで、何時通つても歳の市でもありそうなる人通り、而もさすがのベルリンも夜の十二時をすぎると、大抵の通りは、静かになるに、此通りだけは一向變らぬ雜間に至つては、一體ベルリンには、そんなに遊んでる人が多いのかと、不思議に思はれる位である。

此通りには大商店も澤山あるが、寧ろ小賣店が多い、殊に目につくのは一マーク均一や三マーク均一の店。夫が中々立派なものがあつて一マークの置時計や、三マークの懷中時計やら、種々目を引くものがある。勿論所謂メード・イン・ジャーマニーの代物には相違ないが、兎にも角にも、どうしてこう易く、然も立派につくるか信ぜられぬ程である。

此通りに名高い、フリードリッヒ停車場がある。さてどこが入口か解らぬ程で、而も餘り奇麗ではない。プラットフォームに上るとさすがに大きなもので、全體のプラットフォームを被ふ硝子張り

の大家根に至つては、一寸度膽を抜かれる。(ドイツの大きな停車場はどこも同じ様である、丁度國技館の様) そうして殆んど一分置きに、汽車が發着する。而も急行車といへども五分とは停車せぬのはちと忙しい。近々新築されるといふことだが、然し恐らく東京中央停車場には及ぶまい。ヨーロッパへ來てまだあんな大きな停車場を見たことがない、ちと身分不相應の様じゃ。

フリードリッヒ街には又いろ／＼の興行物がある。停車場の前にあるアドミラルバラストといふのは、未だ秋も半ばにならぬといふに、人工的に氷滑り場をつくつて、晝間は普通の練習所とし、夜は氷上で踊や、いろ／＼の遊戲をやつて見せる。丁度自分の行つた時は、オペラの様なものをやつてゐた。バルコンの上から食事をしながら、縦横自在に氷上を踊り廻はるのを見てゐると、遂には一寸滑走して見たくもなつてくる。アドミラルバラストを出ると、すぐ前の空地に東京の緣日に見る様な、興行場がある。こゝで一寸面白いと思つたのは、蛋の曲藝と瀬戸物こわしてである。瀬戸も



# ベルリンより

盧 山 生

## 其二、ベルリンの交通機關

面積から言つたら東京は遙かにベルリンを凌駕してゐる。然し交通機關の備はつてゐることは到底比較にならぬ。市の樞要なる部分から發して市の外周をめぐる汽車と、縦横に市の街衢をめぐる電車、之等はさまでに驚もしない寧ろベルリンの電車は腰掛が木造て（ヨーロッパではどこでもそうらしい。一體日本の電車の様に蒲團を敷いたのは經濟上から言つても衛生上から言つても餘り感心しない）乗換制度がないために甚だ不便で、且つ賃銀均一といへないが尙此外に所謂地下鐵道や、乗合馬車、乗合自働車、辻馬車、辻自働車が縦横無盡に驅けてゐるので甚だ便利である、平行線を許さぬの何んのと杓子定木に拘泥してゐる御役人様

がみたら驚くことであらう。

地下鐵道といふのは、市の重要な部分は主に地下を走るので、並木の中央にある様な道路は大抵並木の下を通つてゐるわけなのだが、邊鄙な線路を除いて地上に出てゐる部分でも、東京の高架鐵道の様な殺風景なことをしてゐない。どこまでも市の美觀を損せぬ様にしてゐる。夫て丁度自分の着いた頃に出來上つた、ウイツテンベルグプラッツの停車場が、甚だ美術的でないといふので、盛んに批難が起つてシャロットンベルグの市長が辭職するの何んのと騒いでゐた。成程廣場の真中に、セセッシュンでもない、まづい直線の丁度辻便所を大きくしたといふ様な建物が出來上つてゐた。此地下鐵道といふのは、頗る早いので非常に便利



である、夫ていつ地下へ這入るか地上へ出るのか、少しも感じない位に、巧に勾配を作つて、兼ねて動力の節約を計つてゐる。

辻待の自動車馬車は何れも、タクサメーナルがついてゐて、而も甚だ廉くて酒手も一々やらんでもないやな顔もせぬ。赤毛布の往來に非常に便利であつた、夫から乗合自動車、乗合馬車の場合によつては、電車よりも便利であるが、殊に其家根の上に乗つて雑踏してゐるライプチーガーストラッセあたりを、高見の見物をしながら走つて行くのは、甚だ痛快なものである。

### 其三、ポッツダムメルブラッツとウエルタイムと王立陶器製造所

ベルリンの中心といへば、フリードリッヒストラッセとウンテルデンリンデンの交叉點のことをいふらしいが、ブラッツを中心として見物するとすれば甚だ便利で、又實際こゝは近年市の中心となつてゐる様だ、同じ名の停車場の傍にあつて、東には大厦高樓軒をならべて、最も大きな商店の多い、ライプチーガーストラッセあり。ポッツダ

ーメルストラッセを南すれば、シエーチベルヒに向ふべく、北は數丁にしてチーアガルテンに入り、其外四通八達、晝も夜も、車馬の往來頻繁な所である。絶えず四五人の巡查が廣場の中央に立つてゐて、一人が手を挙げれば其方向の車馬はピタリと止る。少時して他の一人が手を挙げれば、他の方向の往來が止つて、一糸亂れぬ有様は實に感心なものである。

ポッツダムメルブラッツから東して、ライプチーガーストラッセに向つて歩をすゝむれば、先づ第一に目につくものは、左の角に巍然として宮城の如くに聳ゆる、デバートメントストアのウエルタイムである。ベルリンの市中に同じ名のデバートメントストアが、此外に三つ四つあるが、之を以て第一とする。(此外にも中々大きなものが三つ四つある) 田舎の觀工場から三越へ來ると驚くと同様、何事にもむやみに驚くまいと心がけてゐる自分も、先づ其規模の大なるに驚き、次て其内容の豊富なるには驚かざるを得なかつた。恐らく何でも無いものはないであらう、殊に面白いのは、

いて四町近くにも廣がります、水の流は緩かて、絶えず流れ／＼では永劫の生命を匂はせて、大河の趣を味はせてくれます。

川の半ばまで砂洲が出来て、松林があり縁の鮮かな牧場が陸近くに續いて、放たれた牛の自由な姿が畫ともなります、兩岸にはさして嚴かな護岸工事も施さず自然の趣を害はないのが私達のブライドの一つです。古い酒造場の白壁をうつしては美しい戀物語を思はせ、上流から流して来る筏の上からは震ひつきたいやうな、歌聲が漂ふて來ます。

岸に咲く月見草が夕になるとしめやかな水の音にうなづいて星影に微笑みます。

この河に架した二百餘間の長橋は夏の夕の納涼臺です。晝の暑さに青白い息ついてゐた岸の螢草が、夕露に蘇つて藍色に輝いて夕の星が涼しげな大空に燦き初めると、夕闇に白い浴衣姿が橋の欄干に添ふて見えます。

河の兩岸の家々の燈火と屋形船の紅い提灯の光とがゆらく／＼と水に映つて涼しさを一層肌に泌ませます。薩摩路や肥後路を越えて、乗合馬車が夕この橋を渡る時に旅人は車窓からこの大河の岸の町の灯を見て、云ひ知れぬ懐しさを含んだ旅愁を覺えるとか申します。



橋を渡りつくすとメインストリートに這入ります、石造の高い郵便局と相對した銀行の間に燦熟した香の漂ふ果實店とサク／＼とかんなかけつゝ客呼ぶ氷屋とが並んでゐます。

バナ、水蜜桃、西瓜、それに、日向特有の、月見草の花見た

いた淡い黄ろさを膚にして、胸に沁入るやうな香をもつた薄皮の甘い夏蜜柑があります、皮をはげば白銀色に光つて、口に入るれば音もなく溶けます。誰も此氣品の高い味を褒めない者はありません、それに白い梨瓜も一寸他國に見當らぬ味をそのすべ／＼した外皮に光らせてゐます、一列のボブラの並木の影うつした蓮池の邊も夏の涼み處です、ベンチに倚つて暗にも高い蓮の花の香に酔ふ人もあります。

まだ宮崎の幾らをも語つて居ません、併しもう止ませう。

只黎明の澄んだ霧島風の吹く頃河畔に佇んで次第に蓄薇色に薰じて來る時そこに大古、神代の面影が偲はれます。神武大帝の執政の御跡、古書に見える橘タカラバナの小戸の渡、楳タラシヶ原、今も皆この町の近くに殘つて大淀河に架した長橋を橘橋と呼んでゐます。四里南に行けば檳榔樹茂り眞紅の熱帯花咲く青島があります、北八里行けば、茶白原の孤兒院があります、何れも今は汽車の便がありません、海洋と高原、何れにも夏に相應しい旅の趣が備つて居ます。一度は吾が日本の祖國スパーランド日向の土を踏み給へとお勤め申します。

## △山の寺

### 嶺岸忠之助

仙臺の田舎である私の寂しい故郷にも一の誇がある。それは山

の寺である。日本の三山寺の一である。三山寺とは江州の石山寺山形の岩山寺それから仙臺の砂山寺である。昔海であつた所で土地が砂地であるから砂山寺といふのである。禪宗の寺で千有餘年の古刹である。

七北田の國道筋から見ると谷合の奥の奥、縁の渦を卷いてる様な所のその最も縁な中心に山門の尖端だけ見える。東に這つて清水流る。溪川にかけた朱塗の橋三つ四つを渡り、道の兩側に聳ゆる山を眺めたり、小暗い位生ひ茂つた杉並木の中で涼しい風に吹かれたりして半里も行くとき寺につく。井の底の様な所で周囲は山が急に聳えて縦や其他の雜木か一ぱいに茂つて縁は滴るばかりである。澤は九十九澤あるといはるゝ位で澤を辿つていくら行つても盡きない。澤々から流れ落る清水は音をたてゝ庭を流れてる。夏を知らぬ清涼な而かも人里はなれた閑寂な仙境、端座瞑想して無念無想を觀ずるにはこの上ない所である。山門の入口の戸には左甚五郎の小刀一丁の細工になる有名な彫刻がある。階段を上つて本堂に行くとこの寺の境内は眼下に見え眺望が頗るよい。内には田村鷹の杖と稱する丈餘のものがある。奥にこの寺の開祖や中興の祖を祀つてゐる。欄間には雌雄の大蛇が彫られてある。金の玉をくはへて勇姿颯爽たるものだ、この本堂のすぐ前に山門の二階が立つてゐる、羅漢さん等の彫刻で飾られてゐる。

この寺には美しい傳説がある。昔この寺に近く眉目清秀な長者の一人娘があつた。この娘が何時の間にかこの山寺の稚兒に戀をした。燃える戀の嬉しさに寂しさも忘れて、妙齡の美人は毎夜この山深き山寺に通ふた。いくら通ふてもいくら戀ふても連れ添ふ

ことができぬので。いつそのこと死んだがまだ死んであの世で一所になりませうと盡きぬ恨を抱いて二人で池に沈んだ。その恨のせいかこの邊一帶海と化し二人は雌蛇雄蛇と化けて暮れまわつた。時々人も吞まれた、村人が大に恐れて居つた。この時南方から來た白髯の老翁見るから氣高い偉さうな坊さんが來た。この人に雌蛇雄蛇のことを話すとそれはよろしいおれが經文を讀むと海は煮え立つて大蛇は死するか逃げ去るに違ひないと老僧は語つた。山寺の北方の一本松の所で老僧が經文を讀むと案に違はず雌蛇は瀧原の瀧に入つて死し雄蛇は岩切の霧ヶ淵に入つて死んだ。この老僧が慈覺大師だとか云はれてゐる。寺の寶物としてこの大蛇の爪とか牙とか保存されてゐる。私は夏になると何時でもこの寺とこの傳説を思ひ出すのである。

## △長崎から

大浦汐子

三百年餘りのエキゾチックな香ひにみたされた此の町の夏は一日一日と頽廢し行くもののおはれみと懷しさを想はせます。磯の香の漂ふ居留地の並木影には色彩のはつきりした外國婦人や子供達のリンチルの裾が少かに揺れてゐます。港の口を透して遠い海のただなかに舊教の高い尖塔が突つ立つてゐるのすがすがしく見えます。京の東山に似たと云はれる山腹の墓場から夕陽を眺めつゝ莊重な鐘の音を聽くことは何よりうれしく思ひます。



から見る寢覺の床は無上に美しく静だ、いゝ景色！想像は、あらゆるものを殊に名所に於いて我々を失望させ落膽せしむ、然し僕は初めて此の寢覺の床に來て見て充分心の満足を得たのを喜ぶのである。

## △錦江の夏

朝鮮群  
山にて

佐藤敏雄

當地の氣候は東京市街と大差無之候へ共、朝夕は殊の外涼しく感ぜられ候。今年は餘程の酷暑にて、十數年來稀に見るの炎熱と噉さ致し居り候。併し時々降雨有之、米作の成績は甚だ好都合にて、此の様子ならば本年は大豐作ならんと一般に喜色有之候。茲に面白きは朝鮮水田の草取りに御座候。田の草取りは少きは七八人、多きは三四十人位にて、樂隊まじりに御座候(朝鮮式樂隊とも云ふべきものならん)。囃方は數名にして大鼓、鉦、鐘等の樂器を手にし、龍蛇を畫ける幟數旒を押し立てゝ、大鼓と鉦とをチャング、チャングと鳴らす間に、鐘が一瞬時を経てゴーン、ゴーンとなり、チャング、チャング、ゴーンと云ふ具合に鳴らし申し候。囃の鳴動すると同時に、一群の人夫は一列になりて、じゃぶ、じゃぶと水田に入り、ずん／＼草を取りつゝゆく。其捗りなかなか早くして、取つたか取らぬかと思はれ候程に御座候。此の草取は此の頃から段々處々方々にて盛んに行はれゆくものに御座候。小

生は毎年之を見聞するのを非常に愉快と致し居り候。遠くより聞くときは、日本内地の盆踊の囃しの如く、又近づきて見る時は恰も南洋土人のダンスの如く、その無邪氣にして可笑しきこと抱腹絶倒に不堪候。

我等の家族が田園生活を營める農場の背後に月明山と云ふ小高き山有之候。山頂に登れば一方は錦江(朝鮮七大河の一つ)を隔てゝ、忠清南道の山々に對し、他方は河口より遙に海洋を望み、煙波浩蕩として心胸頓に快潤を覺え申し候。就中夕陽の沒せんとするに當りては其の光景の雄大崇高なる殆ど名狀すべからず候。更に眼を轉じて、背後の稻田を見れば、白衣の鮮人田の草取りの一隊囃方を前に一列となり、田の畔を廻りつゝ歸路につくもの、宛然畫中の趣に御座候。附近の原野にはボブラの葉は青々として繁茂し、其處此處に散在せる林檎の樹は鈴なりの如く結實して、今は成熟するを待つのに御座候。見渡す限り遠近の山々多くは禿山に候へ共、樹木鬱蒼たる内地の山よりも此の禿山の方なんとなく雄大にして且つ未知數の如くに感ぜられ候。

以上は歸着以後最近の情報のみ如此に御座候、今後の二ヶ月間はなつかしき父母弟妹と共に田園生活の人なることを思へば樂しきこと限りなく御座候。敬白。

## △夏の日向

うしほ

『日向は住みよい國ぢやてに』

恙う云ふ言葉を頼りに人口過剰なる地の惨しい生存の惡戦に痛手を受けた幾群かの移住民は、海を越えて四國路から、輪路を巡つて豊後路から、逃げのびては、未だ開拓の歟の刃の觸れない日向の原野のみづ／＼しい青草の露を打拂つて、新しい生活の第一歩を踏み出します。

溫暖な氣候と廣漠な土地に、極めて低廉な生活費と激しい勞働とに依つて、ものゝ十年経てばいつしか小金の幾許かを貯える事は今迄としてむづかしい事でも無かつたのです。

恙うした國の中心である宮崎はやはりいろんな意味での移住民の町と言つた方が相應しいと思ひます。失敗した上方商人、眼ざとい企業家、流浪した揚句の旅商人、恙んな各種の人々はいろんな國訛を使ひ乍らさかしい氣味悪い目玉を光らせて這入り込み、生正直で懶惰な宮崎土着の住民を町から郊外へ、郊外から原野へと逐ひ出してしまひます。權柄な額付してメインストリートのけば／＼しい軒看板掲げた大い商舖の帳場に座り込んでる主人達は他國からの侵入者なんです。封建時代は天領として幕府の小役人の横暴な手に司配され、他の日向の都市のやうに城下として各藩特有な色彩もない町なんですから、風習にも傳説にも價の尊い香を嗅ぐやうな高いローマンチックな匂がありません。

恙う云へば 定めて、餘裕のない、濕ひの乏しい、新開町を想像なさるでせう。併し嬉しい事には此小い都市を圍んだ自然が限りなく恵まれてゐる事です。東は太平洋、それも船人の難所とし

て昔から名高い赤江灘です、黒潮が眞碧の海を貫いて矢のやうに流れて居ます、砂丘の上に立つて、山の様な白波が相踵いて屈曲に乏しい一望限りなき海岸線に押寄せる狂奔した姿を見て居れば、パイロンのチャイルドハロルドの一節は自づと結んだ唇を破ぶつて渚に咲く白い波の花の上に流れます。

町から海まで一里近くもありません、それでも北風の強い晩には恐ろしい程浪の脅かすやうなうめきが町の家々の窓に襲ふて來て、耳なれぬ旅人は幾度か夜の白らむ迄に夢さまされると申します。

西の空の果には金字塔宛らの兩霧島が鋭い角度を描いて從天にいらつくやうな雲の峯吐くかと思へば黒く煙つて横に流れて、それが噴煙だと知らせます。この兩峯から左に走る連嶺は肥后境を劃して桔梗色鮮かに起伏して居ます。

前に廣い平野を置いて田、畑、小川、林をその中に配り遠くからこの都市の城壁代りをして居ます。この連山がつきて北に緩く尾鈴山が秀麗な姿を海に斜めにして座つて居ります、何故か人の心を曳く山で、林の間からや大河の岸から仰いで日向富士と呼んで居ます。

南には文人畫にでもありそうな山々が近く迫つて、少年の日の山遊びの思出と成つて呉れます。

海洋、山陵、平野の様々な眺めに富んだ宮崎の町に濕ひを添へてくれるのは町中を大淀河の流れて居る事です。火を吐く霧島麓から廻り巡つて、次第に幅と水量を増した此河は、市街に近づ

る力なく内を廣くする心に缺けてゐても尙其處には小さな人を惹き付けるだけの或物を持つてゐる。それは恰度「自分のものを全く守つて他を顧みぬ人」によく見る純な初心な心持である。おづ／＼してゐる態度——弱々しい情である。春雨に細々と煙る農家の燈火のやうな淡い情緒である。

細い春雨が降り續くと市の中央を流れてゐる中津川の兩岸には、たてこめたやうな濛氣がボーッと見えて、愛宕山や城山は皆一様にコバルトのベールを被つたやうになる。斯うなると盛岡は全く繪になつて了ふ。雨の中に生きてゐる凡ての人間は全く一の「自然物」としか考へられない。人間といふ人の香を除外した他の自然物と同じ物に見えて来る。靜かな死の前に眠つてゐる寢府の町のやうな氣もする。此の時程此の町の人間と此の町の自然とがよく調和することはあるまい。

私は此の雨の盛岡をたまらなく好きだ。

『盛岡の自然より以外に何物もない』『今地上には只この盛岡の凡てがあるのみだ』と思ふのも此の時である。

私は此の街に對して最早や現在より以上に物質の發展變化を望みたくない。人に對しても然うである。只永遠に淡い詩の國、夢のやうな春雨のまちとして地上の誇りとしたいのである。

## △寢覺の床へ

神 戸 日 N 生

睡つて居る。我々は寢覺床で目を醒さねばならぬ——と立つ前から叫んで居た。

上松で三人は下車して遂に流れを耳にして山路を辿り行く。「此處ら邊の人は皆んな同じ面だせ——眉が太く濃くくつき、噛み付きさうだ——」と突然Nが口をきく。「まさか」つて笑つたが、そんな氣もした。なぜだらう？こんな美しい所に育つて。山國の事だから遠い昔、一夫婦から總べての人が分かれ出たのではあるまいか。

床へは八丁だ。太陽は淡く空にも山にも四邊に柔かく溶けて氣持がよい、なんだか無上にうれしい氣がする、山や水、森や谷を眺めながら白い山路をくねり辿る、路側に桑の實が黒ずんでなつて居たのを枝からもぎ取る、「君、食べられますか」つてTが問ふて二つ三つ口へ入れた。

やがて古るぼけた茶屋が二三軒廂を右側に列らべ煤に黄ばんだ戸障子の「浦島うどん」が讀まれた。「御休みなさりませ、寢覺床は此處からです」と猛烈に女の聲が降りかゝる。

右へ曲る、Nはしきりに口似ねて笑ふ、何處か音楽的らしい所がある、だら／＼に桑路を下りたら寺めいた門に行きあたつてしまつた、中へ入る、「御案内」つて云ふ、小供について五六間歩いたと思つたら、何にやら説明し出した、ふと下を見ると繪で見る寢覺床が白く輝いて目も醒むるばかり、美しい、「これは良い！」と思はず感投詞が飛び出る。鐵道も上方に通つて居る、御案内もあるもんか、わざわざ下車したのも少々馬鹿らしい氣がした、「下りやう」と同じ句が同時に三つの口から出る「其三本杉の



間から行かれまゐす」と云ふ急な路をかけ下りる、鋭く右へ角に曲つて草を分け行く、チカ／＼刺が股にあたる、水が激しく斜に奔り、水垢にぬらつた板が三四枚岩に架け渡して在る。Tが最先に渡れた「滑つて」と顔に不安を浮かべて戻る、Nが行く、向ふ岸でヤレ／＼と滑稽に胸を二三べん下して見せる、僕が最後に渡る、なんでもありやしない、大岩を上り下り飛んだり跳ねたりして水へと近づく。

岩から淵をのぞく、實にいゝ。水は透き通つて緑に深く底知れずだ。大なる勢で奔り來つた流れは急激に岩角に烈しく突きあたつて鳴りつ躍りつ轉びつ沸騰しつ泡立つ、なんとも云へなく氣持ちが良い。痛快だ壯絶だ。

木曾の奔流は淺瀬に激して白く、勢烈しく猛り狂つてすさまじい、何物もくだかでは止まぬ勢だ、千軍万馬の寄せ來る様も斯くやと思はれる、いかにも痛快、勇ましい、此筋肉が躍り出す、じつと水面を見詰めて居るとなんとなく恐ろしい力に心も身も卷き込まれて急に飛込みたくなつてしまつた、恐ろしい。

凄い程水は沸騰し泡立つて奔り去る目も眩むばかりだ、向ひの岩下からは噴火煙の様にモク／＼と水が湧き上つて來る、岩は大きな斧もて打ち割られた形をして白く輝いて美しい、其間を縁に透いた水が底知れずに奔る、すつかり此の恐ろしく力強い寢覺床が氣に入つてしまつた。

校歌を歌はざるべからずと云ふわけで「都の西北早稻田の森に……」と有らん限りの、どら聲を張り上げて繰り返へし／＼三たび、唱へた時には清々した。

靜に自然の心の奥底に觸れやうと水で凹んだ大岩に坐禪し、眼をつぶつて瞑想すると、脚下の奔流は益々其の勢を加へて、凄まじく、其怒る聲は、いや増しに高かまつて來る、岩は揺れ我心は強い迫壓を感じて或世界へ、前へと進む。恐ろしくなつてしまつた。「地震が揺れたら此の岩も動くかしら？」とローマンチックな事をNが云ふ。くれなゐの躑躅は岩の間隙に燃え、緑り葉に包まれ紫がかつた岩の上に堂がある、社がある、顔に『浦島明神』としてあつた、中をのぞいて見たら藥屋の廣告外に何にもない、つまらぬ、鏡でも神體にするか全々何にも置かぬが良いと思つた。上でエハガキを買ふ時「浦島とどう云ふ關係があるのですか？」と尋ねたら「さあ……なんでも今は昔、一人の翁があつて毎日、あの岩上で釣りして居たと云はれて居るですが……」と頗る、おぼつかない話を得た。翁の糸が浦島を釣つてしまつたのだらう。向ひの森は黒く暗く黙して沈み、神秘的凄味が包まれて或力——自然の活力——がこもる。繪で見る寢覺床は美しくして靜かだ、が、眞の床は、其の岩上で見る此處は、そんな所ではない男性的な恐ろしい力強い所だ、魅いる程、恐ろしい力！壓せられる程強い自然の力！何處に？岩に有るのか、水にひそむか森に隠れて居るのか、いや／＼個々別々單獨に切り離なして見たつて其力は無い。

總て之等の統一に於て、初めて此處に或力が有り生命が出、偉大なる靈氣が生れて來る、我々の靈魂も確に五官の統一から生れた命だ力だと思ふ。

路を引き返して遠く上から振り返へり眺めると、流れはゆるやかに／＼、緑の淵を湛へて下へ／＼とゆう／＼と滑り行く。遠く

泥棒をしてゐながら、すましてゐる時なのです。劇の方は漸く遊戯的分子を離れ、眞面目な藝術として人生そのものの演出に努めてゐます。私は劇場の空氣に親しんで、教會の氣分と相通ずる心持を見出すことを、嬉しく思はずにはゐられません。

三菱ヶ原には宏大な中央停車場を始め、二三の大建築がその工事の準備に急いでゐました。物質文明の力は數年を出でずして、この原を西洋市街に變化させることでありませう。

壕に沿うて植えられたサイカチや柳の深緑は、赤熟した太陽の光線を受けて、きらびやかに輝いてゐます。並木の葉影には氷屋が簡單な店を出してゐました。荷車を挽いて來た男が二三人、立ちながら小豆色の氷水を飲んでゐました。その横に荷馬車の馬が疲れきつた様子で、うなだれてゐました。

和田倉門の邊から、女が二人並んできました。一人は稍肥り氣味で丈が低う、一人は丈が高く、すらりとしてゐました。二人共風呂敷を左の手に持つて、右の手で膝のうへを抑へながら歩いてきました。風が吹いて、裾の捲くれるのを防ぐ爲めなのです。印刷局の門からは、吐き出されるやうに、澤山の女工が出てきました。自動車が砂烟をたてゝ往つたり來たりしてゐました。

Gさん。

埃の街は夜でなくてはいいません。私は夜になると、恰も自分の世界が開けたやうな心地がするのです。私の室の南の窓から、美しい月が軟らかな光を机の上に投げてゐます。北の窓からは星の神秘的輝きが見えます。書架の上に置いた石膏像の淋しい姿。一輪差の可憐な白百合。夏の夜の涼しい風がそよ／＼と、南から

北へ、窓から窓を吹きぬけてゐます。夜が更ければ、ますます夜の靜寂を増してきます。夜の沈黙。夜の神秘。私は夜の讚美者であります。

## △若葉の海

雄島濱太郎

自然といふ吳服店が店先に陳列して居る夏向きの新柄の地色や模様や、匂ひは、畫家の繪の具皿の中から生れて來るには餘り多過ぎもするし、廣過ぎもする、その感じや氣分を云ひ現はす言葉の數にも制限がある。余は只やまだしの女が三越や白木屋の前に立つて魂消て居ると同じやうな心持で、此自然の新裝を眺める。あゝ美なる新緑だ、立派な若葉だといふより外に言葉はない。

驚異の念が稍落付いた頃王安石の綠蔭幽草勝花時といふ句が腦裡に閃いた、道は彼杵を過ぎて千綿村といふに差しかゝる、時は五月の上旬だ。

谷を隔てた向ひの山は一面にさへ／＼した黄褐色の波浪が湧き起つて緑の森の上はまるで花笠でも冠つたやうだ。あれは誰でもよく知つてゐる椎山だ。見つめるとその黄色な渦卷の中へ卷込まれて了ひさうで外へ目をそらす。山路は弓なりに曲つて今度は樟の林を正面に見ながら歩いて行く。いづれも丸々と肥つた老幹ばかりで腕力の逞しさうな無數の技の先に烟るかと思はれるばかり淡黄綠色の薄衣を纏ふて居る。これが半月程前ならば血の出さうな

紅みがゝつた若葉の姿が見られる所だつた。老いたる樟は一本で森の形を爲して居る。それが新芽を吹出した様は美觀といふよりも壯觀だ。壯觀よりも崇高だ。宗教畫に取合はすには以上の樹はあるまい。我國の畫家はあまり樟の樹をかゝないやうだが、どういふ譯か僕には解らない。小休みをしてスケッチを取る。

谷は次第に深くなつて行く。見おろす溪流のほとりに野薔薇や卯の花が點々と白く咲いて居る。高い香氣を含んだ風が頬を撫てゝ行く。ふと氣がつくと僕は是迄スケッチなどを取つたことがなかつたのに、今少し前にはさぞ畫家らしく手帳を開いて新樹の寫生をした。我ながら可笑しく思はれる。自然はいつの間にか自分以上に自分の輪廓を擴大して呉れたものと見える。

恰好のよい翠の屏風岩が山の中腹に立つてるのが見られる、上からと左右から取巻いた様に四五本の松が疎に生へて居つて、下の方からは數株の老樹が枝を延ばして此岩を擁へた様に茂つて居る。一番右の端が榎らしい。その緑の色がいかに鮮かで、背景の黒みの勝つた松の緑の前に浮出して居る。之と並んで居るのは見慣れた椎と樟だ。椎の花々しい黄色と樟の烟るやうな緑とが榎の滴るゝやうな緑と對照し、松の深緑と映り合つて何ともいへぬ調和した色の感じが起る。かうなつては最早繪の具なしの寫生は出来ぬやうになつた。かうした屏風岩は九州の山間には珍らしくない。

熟しかゝつた麥畑の傾斜に沿うて爪先あがりとなる。麥の黄色と谷合の小暗い杉の色とが同じ視線に列ぶ。その麥畑の所々に丈はあまり高くはないが眞直な幹の上に鮮綠色の若葉の枝が傘をさ

した様に擴がつて居る並木がある。はぜの木だ。いかにも青々として目に爽かだ。葉の細かいせいとか、何處やら縮みや絞りを見るやうな氣持がする。花時には香氣が高く、その紅葉は楓よりも美しく、其實は蠟になり、新緑は紅葉同様すつきりとして居る。多藝多能の樹だ。

はぜの盡きた所に茶店がある。之に憩うて四方を眺めると身はいつの間にか十二ひとへの襟元を見る様に重り合つた新緑の山に圍まれて居る。無限の緑、若葉の海の上にかゝつて居る嶺頂が折から谷間の山莊の生垣越しに咲いてゐる一丈ばかりの大つゝじを照して血よりも紅く染め出した。

## △北國の町

### 佐藤孤葉

限られた街まち—それは恰度此の盛岡に當あたはまる言葉である。山間の街—それも盛岡に相應しい名である。昔は杜陵モリカガと書いた程それだけ樹木の多い街である。此まちにゐてはとても雄大な放たれた氣分になる事は出来ない。岩手山の麓の流れ南昌山の襲迫。岩山の侵入—此の間を辛うじて縫ふてゆく北上川の畔にさゝやかに結ばれた街まちがこの盛岡である。

此のやうに封ぜられた土つちに執着してゐる此の地方の人には自分から自分を押し出してゆく力もなく又他を受け容れる廣い心量もない。それでも其處に一掬の情味だけは存してゐる。外に出づ



ならない今の中はまるで生きてゐるやうだ。刃物道樂の寅の父は棚元からピカ／＼光つてゐる御自慢の骨斬庖丁刺肉庖丁を取出して中位の鯖を手際よく一皿のなますにつくつた。「せ、ごしといつて島の人なんざア骨ぐるみに食べるんですよ。」彼は揮一つて圍爐はたに坐つた。自分も猿股一つて彼の側に坐を占めた。刺肉は成程うまい。裸體生活の讚美者たる自分は島での原始的な自然其儘の生活に對して聊かの嫌惡も不滿も有してゐない。自分の血管中には大地の土に親しむべき素朴な農夫の血が流れてゐる。併し後天的ながら自分はすでに過去二十餘年の間近代的な文明世界の大氣を呼吸し更に近代的な學校教育の中に培はれた一本の若木である。外的には全然裸體になつて彼等原始的な農夫漁師の間に己の生活を營んで行けやう。併し竿頭更に一步を進めて内的に全然一切の扮飾を撤廢し自ら欺かず彼等と共に食ひ彼等と共に生きてゆけるであらうか。精神的には我々は所詮全くの赤裸々になり得ない文明病者である。換言すれば生えぬきの百姓、生れながらの漁師になりさ

れない近代人である。トルストイの悩みも芦花先生の悶えも歸する所は我々に共通な近代文明病者の悩みであり悶えてある。而して我々の闘ふべき新らしい戦の一つは實に此から出發しなければならぬ。遠くの沖で汽笛が泣いてゐる。考へられる夜だつた。

— 一九一四、七、一六、東片町にて —

## △栗駒山のふもと

### 目 賀 多 生

私の町は取殘された廢驛のやうに寂しい。藥師の森に一抹の狹霧が流れると郭公鳥が町を呪ふやうに鳴く。白くひかる迫川の流域には青々とした一帯の平野が展けて居る。北にこの平野を圍んで黒ずむだ緑の丘が波のやうに起伏して居る。そして縣下一の栗駒山は此等無數の丘と平野とを威壓して王者のやうに立つて居る。其の背には岩手、秋田の連山であらう、夢のやうに淡い。

此の山麓一帯の地には二千年も昔には蝦夷が住んで居た。彼等は洞穴の中に居を構へ、綠、影なす静かな湖畔に魚をあさつたり、熊笹の茂る山に出て、鳥や獸を追ふた。今でも彼等の用ゐた石斧、矢尻、瓶などが其處此處の畑の中から掘出される。太古は漠として涯しもない。時は恐しい力だ。何の時代にか彼等は遠く、彼の

暗い海を思起す北方の島に驅逐されてしまった。そして彼れ等に代つた人類の子孫が今、此處に生息して居る。此の町にも三千餘の人が住んで居る。彼等の多くは百姓だ。白くひかる眞夏の太陽に照されて、田の中にせつせと苗を植付けて居る。日のほてる畑の中に麥を刈つて居る。彼等の赤い顔はたまらなく氣持がいゝ。彼等は政治を知らない。宗教を知らない。文學を知らない。彼等は唯、働くことを知つて居る。

世界の一隅なる此の町に彼等は生れた。五十年六十年、汗水を流して彼等は勞働を續けた。そして子を生むて又、何處へか行つてしまふのだ。

栗駒山の頂には絶えず、雲が往來して、其の暗間々々からは斑に白い雪の膚が見える。山を凝視めて居るに怖しくなつて来る。彼は過去何千年といふ此の山麓に起つた一切の事件を知つて居るやうだ。彼の胸には人間の一切のドラマが映つて居やう。彼の前には千年も一日の如く過ぎてしまふ。しかも彼はじつとして無窮に、没交渉に、沈黙を守つて居る。

## △埃の街から

太田 眞一

Gさん。

新緑を讚美してゐるうちに、間もなく梅雨になりました。けれ

ど、あのじめ／＼した梅雨の鬱陶しさも、いつの間にか過ぎ去つてしまひました。

街々には俄に氷の店が多くなつて、旋風器が妙な音をさせてゐます。夏の街は氷の世界なのでせう。焼芋屋もミルクホールもおすし屋も果實物店も、皆青い字で氷と染めぬいて赤い縁のついた旗を、その軒先きへ掲げてゐます。

學生生活は、夏の二三ヶ月を田舎へ行つて、遊んでゐるものゝやうに習慣づけました。私にとつて、この夏を毎日都會て暮すことは、たしかに苦痛だと思はずにはゐられません。けれども私は夏の暑さのうちに、一種の快感を覺えてゐます。暑さが甚だしければ、却てそれだけ痛切に感じない譯にはいきません。暑さの快感は涼しさの快感よりも徹底的な深酷な心地よささなのです。

Gさん

私は久しぶりで日比谷から神田まで歩いてみました。午後の四時、西の太陽はまだ赫々と照り輝いてゐます。人ごみの停留所で夕刊々々と呼んでゐる聲が、なんとなく暑くるしく聞へました。警視廳の赤煉瓦は重くるしい色彩を射つてゐます。私は何かしら一種の壓迫を感じずにはゐられませんでした。そして隣の帝劇からは、白煉瓦の柔らかな感じを與へられました。夏の建築には白い色が心地よく思はれます。

官衙と劇場と、同じルネッサンの様式を採つた建築から、かうも異つた印象を受けるものであらうか。お役所とお芝居、一つは眞面目な國家の行政事務を執る處で、一つは娛樂的遊戲を演ずる處だと解する人もありませう。然し近頃の有様では國家の千城が

沖の方で急に法螺貝が鳴つた、愈々地引をまわすといふ合圖だ。網船はカンテラに火を點けて船脚疾く網を下してゆく。自分は寅と二人水際をつたつて網船のつくあたりまで歩いた。船が岸につくと中から四五人の漁師が濱へ飛下りた。其間に自分と寅とは早速船の上の人となつた。其夜は誠に静かな風だつた。船は油の上を這るやうに地引の網に沿ふてしづく沖の方へ漕がれてゆく。濱では二十人餘りの漁師とそれに女や子供を交せて三四十人の人々が南北の兩側に分れて「エンヤ。

」の懸聲勇ましく地引の網を引き初めた。船の中では寅の父と漕手の岩さんが何やらわけのわからぬ合言葉で船の操縦を正してをる。漆のやうな三原山は静まり返つて星夜の闇に音もなく聳え立つてゐる。淡いガスの光は廣い廣い闇夜の一小部分を照して人影の見えない濱の闇から「エーンヤ／＼」の懸聲だけ手に取るやうに聞えて来る野増の沖から遠く利島あたりまで鯖船の漁火が幾十となく波間に明滅する。限り無く廣がつてゐる深い闇の彼方には静かな大洋を隔て、伊豆半島の燈臺

もほのかに窺はれる。海の中は夜光虫で幾百幾千の星を打碎いたやうにキラ／＼光つてゐる。櫂が静かな小波を碎いて行く所。かの歴史にあるクレオパトラの銀の櫂も偲ばれる程美しい。自分は唯黙々として天の星と地の山と海の水とを眺めた。船が丁度左右に圓く擴がつてゐる地引網の中央部に來た時透明な海の底には白い網や最後の袋網がはつきり見え出した。濱の方で懸聲がする毎に網全體が左右同じ力でずん／＼岸の方へ引かれて行く。風が／＼のて北奮張れ南しつかりといふ合圖の法螺も吹く必要はない。網が一刻一刻岸邊に引寄せらるゝにつれてそこにもこゝにも一間四方二間四方といふ大きい魚群が白く動き初めた。漁師仲間では之を白魚と呼んでゐる「岩。こんの（こんな）に」あゝ。こゝへ來た。こりや小魚ずらなア。寅の父は舳から海の中を覗き込んで一人で悦に入つてをる。繩網もすんで今度は愈々本網が引上げられ初めた。海面に浮いてゐる大きな網の目から飛魚が無數に脱け出る。寅の父は聲をからして早く一生懸命に網を引上げると怒鳴る。最後の袋網もとう



／＼水際近い濱邊に引上げられた。赤いカンテラの光に照されて大きな魚がピン／＼はね廻つてゐる。一同て船を地引の小屋近くまで引上げ一通り網を片附けてから愈々袋網に手をつける。一人の漁師は早速法螺貝をブー／＼吹き鳴して村中に大漁の吉報を齎す。村中の魚屋はもとより壽司屋、鯖節製造屋など十數人も集つて来る。これから濱に簡單な魚市が開かれるのだ。獲物は鯖が一等で七百近くもあつた。其他いか、むつ、ぼら、たひ、とび。さめなんぞ一と桶位ひあつた。漁師の怖がるふぐ。えい。うなぎ。ごんずい等も一二尾づゝ入つてゐた。砂の上に海水をまきそこへ大小の鯖がずらりと並べられた。生々した魚の鱗が赤いカンテラの先で黄金色にキラ／＼輝いてゐる。寅の父は小さい木箱つげきを持出して其中から短い四五本の鉛筆と十數枚の附木つぎとを取出した。入札者はそれ／＼自分の思つてゐる値段を其附木に書きつけて裏向うらむけに砂の中へさしこむ。さア。もうないかい。開くよう。寅の父は砂の中へさしこまれた十枚足らずの附木を開いて大聲で讀初めた。「さば大五百

二十。小三百八十。いか八十。むつ三百。……」  
 ……「さア。鯖は愈々俺のもんだなア」。「俺のもんだアよ。にしのは五百二十(五錢二厘)ずらが。俺りや五百三十に入れたんだに」。「春吉は自分と寅とに一本づゝ大きな鯖をくれた。漁師の家の女達は其鯖を一桶づゝ落札者の家まで運んで行つた。小娘達はあぢやむつの小魚を籠に一抔づゝ貰つてゐる。漁師も見物人も心からうれしさうだ。自分は寅と松と三人で長い砂濱を手探りに家へ歸つた。自分は深夜此砂濱を通る毎に會て二人の子供に話してきかせたキリスト降誕の際東方の博士達がベツレヘムの空に輝く一個の明星を望んで救世主を求めたといふ聖書の話の想ひ起す。實際その夜の自然は聖書の物語から想像せらるゝユダヤあたりの風物に似通つた所がある。

＊  
 「俺が刺肉なみすをつくつてみんなにお前も一箸ひとばしあがつてみつさい」。「寅の父はカンテラに照された籠の鯖を寫生してゐる自分を顧みてかう言つた。生きながら腐るといふ鯖も捕つてから未だ一二時間にしか

階からこんもり繁つた庭の松林を通して宵の明星のすぐ下に眺められたあの幽玄な天城山の暮色。而して其翌日伊東から湯ヶ島へ越す途中朗らかな鶯の聲をさゝつゝサハラ沙漠に似た雄大な曠野を辿つて天城の中腹を過つたのであつた。今日は不二が見えないのね。」寅は如何にも物足りなささうにいつも際立つて鮮やかに見える富士山の方角をキツとみつめた。暮色が眼に見えて迫つて來る。海は金色の眩しさから濃い灰色の陰暗に代つてゆく。沖の方から小さい飛魚船が幾艘も歸つて來る。利島は薄く暮靄の中に隱見してゐる。新島の島影はもう肉眼では望まれない。

\*

地引の船はすでに沖の方へ出てゐた。濱に上げてある船の一つの側に例のガス燈が立てられてある。中々あかるい。十人餘りの漁師が大きい篝火を中心にあちこち無作法に寢轉げてゐる。ガス燈の下には漁師の娘が五六人集まつて何やらキャツ／＼わめき騒いでをる。岸に近い砂濱では寅、松の連中が眞裸體になつて一生懸命角力を取つてゐる。

る。漁師の父に夕飯代りの辨當を持つてくるあんこもゐる。熱い焼砂の中に生のさつまを埋める腕白さうな子供もゐる。自分の膝にはいつしか大家のポチが尾をふつてうれしさうにグン／＼鼻をならしてをる。「島の油は性質はよいが製造法が拙いさうだて。」庄吉ツアンえ。然うぢやあんまいよ。だつて椿油の産出ん所つて島の他にやなはらうがよう」。「否や。内地でも九州の方の何とかいふ島でも産出んさうだて」何ていつたつてこんな小ぼけな島ッ子だもんが。大い内地と競争したつて勝ッこなんざアあんまいずらよう。彼等の間にこんな會話がねむさうにぼつり／＼交された。大正博覽會への島からの出品について話し合つてゐるのであらう。酒に中毒し切つて年中春のやうに御機嫌のいゝ魚屋の石川さんは此間も相變らずまわらぬ舌を巻きながらどこかの男の子を引抱へて上になり下になり砂の上をゆるい勾配の水際近く迄もころ／＼轉げては躊躇として狂喜してゐる。篝火の近くにゐると帽子といはず首筋といはず乳白の蛾が星夜の闇を衝いて怖ろしい程飛んでくる。一

様に火を蒐<sup>めかけ</sup>てだ。彼等は帽子や首筋から飛下りて熱い燒砂の上を一步一步炎々たる火焰の中へ進んで行く。決して後へ振返らうとはしない。やがて長い觸角が燃える。薄い兩翼が焦げる。而も彼等は尙も火焰の中心を蒐<sup>めかけ</sup>て徐ろに死の途を辿る。彼等の醜い憐な形骸が黒焦げになつた。腹が眞二つに裂けて中から氣味悪い液汁がわき出す。蛾の數が段々多くなると以前のやうに微溫<sup>なまぬる</sup>い廻りくどい方法が嫌<sup>あきた</sup>焉らないと見え眞黒な闇夜をつきさつて一直線に全身を躍らせながら焰の中へ勇ましく身を投ずる。あちらでもこちらでも虫の腹が張裂ける音が小さいながらブシュ／＼傷ましく耳に響いて来る。「飛んで火に入る夏の虫」とは小供の時分から幾百遍となく人からも聽かされ書物でも讀んだ。併し自分は今日のあたり此怖るべき現實の事實を目撃して此を單なる小蛾の運命とのみ觀じ去ることが出来なかつた。小蛾のことではない。實に我々人類の大問題だ。動搖せる幾多の民心は夙に二個の光を望んで止まない。此時混沌たる暗夜の空に炎々たる火焰の字もて「信仰」の二字が記

された。己れの辿るべき方向に迷ひその歸趨する所を見失つた百千の民心は一齊に欣喜し吼哮し叫喚し狂亂して眼を掩はれつゝ其光明に惘惘して慕進した。併し其は最後に彼等の勞れ切つた魂を救ふ眞の「信仰」ではなかつた。「信仰」てふ高い麗しい假面の下に一時狂亂せる民心を欺き得た忌はしき「迷信」安價なる信仰―怯懦なる者の儉安<sup>けんあん</sup>的な隱家<sup>いんけ</sup>に過ぎなかつた。人間の手によつて作られた「迷信の火」に自ら我を投じてゆく弱い動搖<sup>どうごう</sup>さがある我々多くの近代人。―我々にどうして美くしい暗夜の火焰に自ら我を破滅に導いて行く小蛾の闇愚と蠻勇とを嗤ふ權利があらう。蛾とても最初から死を欲したものではあるまい。唯壯んな美しい焰の光に欺かれて終に一身の破滅を招くに到つたのであらう。蛾は一瞬も早く自らを滅ぼすべき暗夜の光を翹望してゐた。現在我々近代人の渴仰して止まない所のものも或は自ら我等を破滅に導くべき「迷信の火」。安價なる信仰の光なのではあるまいか。



## △地引の夜（島の生活より）

井 口 杜 村

「兄さんエ、今晚も来いよ。」からだの小ぢんまりした漁師の春吉がいつもの元氣な親切らしい口調で窓の外から自分を呼びかけた。猿股一つで専心夕飯の胡瓜揉をこさえてゐた自分は菜刀を右手に軽く握つたまゝふと聲のする方へ顔を突出した。春吉の姿は家の影でもう見えなかつたけれども其後につゞいて四五人の漁師連が各自にカンテラ、魚籠擔桶なんぞを持つて濱の方へ下りて行つた。今晚から濱に立てられるといふ簡單な瓦斯燈も一人の漁師に擔がれ其に附屬した小さいタンク風の金壺も誰彼の手によつて運ばれてゆく。此地引の漁師は何れも中年以上で其過半はむしろ老人といつてよい年輩の人々であつた。今の家を借りて一人て自炊を初めてからすてに一と月餘にもなる自分には此等の人達の顔はもう早くから馴染深いものであつた。最後から五十格好の頭天のきれいに

禿げかゝつた一人の老練らしい漁師がやつて來た。心もち膨れ上つた眼蓋の上に太い眉の附根をよせてきつと先方を凝視めてゐるあたりは船乗としての彼の長い過去と同時に癪の強い負嫌ひな彼の性格の一面をよく物語つてゐる。而して彼こそ今自分の借りてゐる家の大家の主人でかねて地引の綱元の一人である。彼の癪の強いのは有る名の島の自分の友N君の父と此村での兩横綱だ。二人はそれ／＼癪。癪。癪。といふ通稱さゝ頂いてをる。曾て此の二人が癪の根競べをやつた逸話は此邊での名高い世評の一つになつてゐる位だ。「今晚もまわすな。」自分は自然にでゝくるやうになつた島の訛で彼に聲をかけた。彼は「あゝ」と軽く點頭さながら「今夜こそ魚は捕り次第だよう。地引の海は魚の油でぎっしりだもんが。」とつけたした。彼は眞面目な顔してよくこんな大袈裟なことを言つた。濱への途々彼はあまり上手でもない法螺貝を吹き立てた。これは地引の漁師を驅集めるための合圖だ。

閑な生活のまゝに夕食は大抵六時頃にすまず。

今高等一年にゐる大家の長男寅は何くれとなくよく自分の世話をやいてくれた。二人で簡単な夕餉の食卓を終つて裸體のまゝ往來に面した窓際に倚りつゝ拙い自分のスケッチなんぞ繰りひろげてゐると搾乳場へゆく乳房の地面につかへさうなよく太つた美しい牝牛が通る。あちこちの山から頭の上に秣の大束をつけた島の女が自分の家の牛を追つて歸つてくる。若い娘達は妙に餘情の籠つた哀音で同年輩の友を誘ひ合つて遠い三原の登山口まで水汲みにゆく。「兄さんえ。今日は胡瓜もみを食つたなア。」鼻自慢の快活な○○あんこが窓の外から聲をかける。「ン。實際馬鹿に鼻がいいな。」自分がつくくゝ感心してゐると「○○のあんこ。胡瓜もみの香を嗅ぎつけるものは格氣者だとさ。」てりこ種のだつたまをかぢりくやつて來たどつかの家婦さんがこんなことを言つて一同を哄と笑はせる。「だつてさうなんだもんが。仕方がないさ。ねエ兄さん。」「○○あんこも元氣よく笑ふ。寅は窓の下を通る澤山の牛をとらへてあれは大島一の牛だ

の一日に一斗四升の牛乳を出すだの、一々細かい説明を與へてくれる。「寅え。にし(お前)は未だ地引にゆかないな」。漁師の娘が大きい魚桶を頭にのせて濱の方へ下りてゆく。心もち薄暗くなつた窓の外でひそ／＼世間話をしてゐた二三のあんこ達もどうやら家へ歸つたらしい。寅が本家の方へ行つて小さい箆に煮たのさつたまを七八本も入れて來た。「地引へ行くべエじエ。歩べ」。

\*

窓下の短い坂を左に下つて右へ折れるとそこからはもう一面の砂濱になつてゐる。寅の學校友達も濱の草地から母と一緒に自分の家の轆を引いて歸つて來た。「寅。行くな。」「ン。松もあとから來いよ。自分も彼等に軽く會釋した。やがて海が見える。丁度落日の景色だ。金色の雲間に伊豆連山が濃い暗紫色にけぶつて懐かしい半島の姿がすぐ眼前に横つてゐる。」「オイ寅。あの圓い格好のいい高い山が天城なんだぜ。」「自分はふと高等學校時代T君と一緒に伊豆の温泉めぐりをやつたあの楽しい旅行のことを想出した。瀟洒な伊東の宿の二

を現じてゐる。自由清新の氣に溢る。更に重厚の赴きを加ふを得んことを祈る。

### 第八信

山上の清會は興つさず、六合雜誌や「近代人の信仰」の愛讀者あり一見して十年の友の間にあるの感がある。基督教徒が愛によつて協力し創造的精神を以て努力する處に何等かの精彩あり。これ教團存在の使命。僕は深い印象を刻まれて諸兄弟と別れた。諸君は誤解と迫害との間に奮闘した。

今後は更に進んで包容的態度に出づべきにあらずや。新宮には旦那衆の勢力甚だ強しと。何故に諸君は更に進んでこの方面を開拓せざるか。新宮教會のなすべき所甚だ多し。諸君はその才と力と金とを以て更に飛躍すべき使命を帯びてゐるではないか。縁なき衆生といふ勿れ、凡てこれ有縁の衆生でないか。諸君願くば一層開放的なれ。

### 第九信

午後二時三十五分新宮停車場を立ちて那智山に向ふ。法科大學生玉置齋次君河津博士及び僕の主役を勤めらる。那智驛より人車を雇ふ。車力各

犬をして助け挽かしむ。上ること五十町車を捨て、いよいよ那智山中の人となる。老杉の中の一を羊腸として上る。約七八丁にして右方に巨瀑白絹を曝らして天上より掛るを仰ぐ。神々しき古杉の中の苔蒸せる石磴を踏み下ること數十級にして瀧坪の下に至る。仰ぎ見れば奇巖臺として數十丈、青樹鬱として左右の頂を飾り、中間の凹所より銀絲八十丈しふきを敢らして下る。中程の突起に激して千變萬化して瀧坪に入る。更に餘水累々たる巨岩の間を流れ下る。大瀑の兩側危巖の上に青苔葛藤繁茂して水勢に震ふさま見るだに涼しげである。ことに紅のつゝじ二株右手の高處に咲き誇るは眞に奇觀。佇立數十分、みれどもみれども飽かず。今夜は御籠堂に残りて一夜を明かさばやとも思はるれども、まさかにそれ程の勇氣もなし。更に石段を上る數丁觀音堂側の觀瀑亭に投ず。

### 第十信

觀瀑亭是那智山三十六坊の一を改造して旅館となしたるもの寺院的建物にして古雅掬すべし。前椽より大瀑を望む。その名空しからず。浴後食を



とつて快談す。やがて月東天に上り、水色幽渺として瀧の音のめいと牙え渡る。山莊の夏のゆふへ、冷氣肌に徹して秋夜のごとし。夜ふけて蚊帳の中に入る。十三日早朝濃霧ありて前谿を埋む、綿を布くがごとし。やがて霧ます／＼深くして大瀑に懸る。下より上に及び、一抹また一抹、眼前の壯景は全く消え去る。霧は又亭に迫りて逢々として室内に滿つ。瀧の音のみ淙々として響く。庭樹には蟬聲之に和するあるのみ。屋後には竹を切る音丁々たり。僕等前椽に横臥して眼頭の大自然の變幻に驚きつゝ唱和して感興を擅にす。山靈怒らずんば幸なり。次信には河津博士と僕との合作を紹介すべし。

第十信

大瀧の音のみ聞ゆ朝霧の

(河)

神々しくもこむる尊さ

(内)

おばしまに霧せまり來てさながらに

(内)

たもとかざして天とぶがごと

(河)

仰ぎ見る大瀑のかげくれなぬの

(内)

二もと三もとつゝち咲くなり

(河)

岩黒く水白うしてみどりこさ

(内)

神代ながらの杉の森かけ

(河)

古杉楓樹つた草にさほふ山つゝじ

(内)

まさにこれ萬綠叢中紅一點

(河)

山莊に短かき夢も結びあへず

(内)

下界の人とわれならんとす

(河)

第十二信

月出て那智の瀧音いとさえぬ

(河)

天女舞ふらむ神杉の中

(内)

大瀧のしぶきに震ふつた草の

(内)

みどりも淡し霧かゝるなり

(河)

山高み雲より落つる大瀧の

(内)

音をかすめてほとゝぎす鳴く

(河)

紀の海の津浪しくるか白霧の

(内)

ふかく埋むる那智のあけぼの

(河)

そのかみに巨神天斧を一揮して

(内)

飛瀑千丈山けづり得ぬ

(河)

議をかもしたる歴史的の商船である。四時本船に移る。河合船長吉田事務長好意を以て一向を迎へらる。食堂には二個の大氷花を飾る、かゝる冷遇は大に感謝すべしである。一行は角、河津兩氏の外工科大學生玉置君及び新宮に歸省する一女學生あり。午後四時十五分地久丸は錨を上げて動きはじめた。

### 第三信

東京灣の波は靜かなれば遠慮なく夕食の卓に就く。談笑のうちに食やゝすゝむ。食後甲板に上りて夕雲の中に隱見する富士を見る。僕は籐椅子に横はりて白雲の去來を仰ぐ。千變萬化一々端睨すべからず。船はやがて觀音崎燈臺を左にみて相模灘に入る。風漸く加はり浪また高し。船房に下り溫浴すれば船の動搖次第に甚しく氣分よろしからず、用心に如くはなくベツトに轉がる。終夜浪高く、十一日あくれば氣分益々悪く、起きるの勇氣もなく、折々苦き水を吐く。我慢して遠州灘を過ぐ。船房風なく、床また狭し。船窓より巨浪を望み、雲の飛ぶを眺むるのみ。しかも瞑想には届竟

の時である。久し振りにて悠々の思ひをなす。

### 第四信

地久丸は十一日午後二時勝浦入港の豫定であつたが、遠州灘の浪高くして船脚極めて遅々たり、よつて午後八時十五分辛うじて港口に入る。偏に河合船長の盡力の結果である。勝浦灣一泓の水鏡のごとく横はる。僕も蔦を離れて漸く蘇生の思ひをなす。角氏の親戚諸氏、三輪崎町有志新宮の學生諸氏ことに早大の學生赤松、烏居、永田君等わざわざ出迎えらる。好意謝すべし。一行は提灯にて飾られたる小舟に運ばれて對岸の赤崎溫泉に宿る。僕は猶胸惡ければ別室に横臥して學生諸君と閑談す。樓灣に臨み、稻妻閃き雷響いて驟雨至る。一陣の涼風頓に頭痛を癒す。午後十一時始めて食膳に對して終日の饑をみたま、溫泉に浴すれば神氣快暢を覺ゆ。

### 第五信

十二日午前五時離床、溫浴して出立の準備をなす。一行小艇を命じて勝浦灣を横ぎらんとする時驟雨沛然として至る、俄かに傘を開いて身を蔽ふ。

されども銀珠瑠璃盤上に躍る。また一美觀である。對岸に上れば雨晴れたり。勝浦發の汽車は一行のために數分の餘裕を與へたるは地方ならでは見られぬことである。新宮の有志諸君來り迎ふるもの多く、車中大に賑ふ。鐵路海岸に沿ひ、白砂青松の間、或は柑橘の畠を望み、或は巨岩の間の墮道をすゝむ。初旅のことなれば風物悉く珍し。熊野浦曲の煙波浩蕩として日に焦けた海士の子達その渚に戯る。午前八時新宮町に入る新宮川には流木溢れ、製材會社の鋸聲特に聞えて身は既に木の國の本場にあるを感じた。

#### 第六信

新宮に日本基督教會あり沖野岩三郎君の牧する所、多くの意味に於て有名なる教會である。沖野君僕の新宮に來るを聞いて特に日曜の禮拜時間を八時半に繰り上げて僕をして説教せしむ。この寛大なる待遇に對して僕辭すること能はず、旅店吾妻屋より直ちに教會に至る。その構造は小なれども何處とない落ちつきもある魂の据つてゐるやうな建築である。小倉長老司會の下に僕は二十世紀

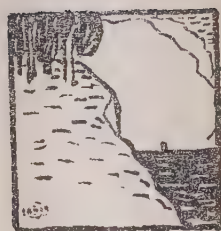
の基督教に就いて語る。會衆三十名數は多からずと雖もいづれも新鮮と聰明とに輝く。この教團の一癖あること推して知るべし。僕は辨ずること約四十分にして中學校に於ける講演會に赴く。講堂には四百の聽衆滿ち驟雨校庭に溢れ、河津博士は得意の貿易論を講じてゐた。

#### 第七信

僕は東西文明論を説いた。由來紀州は外國文明との接觸地、徐福此處に不老不死の藥を求め、上古朝鮮の樹木を移し、今は二萬人の移民を米國に有す。和歌山縣に於て本論を講ずるは最も適當であると信じたのである。十二時近くして講演會を終る。新宮教會の諸兄姉僕を日和山上の日和亭に招して會食せられんとす。好意辭すべからず、赤松君に導かれてゆく。二十餘名の諸兄姉既にあり。亭は南太洋を望み北連山に對す。眺望雄大、絶景の御馳走は何よりである。席定まるや西村伴作君歡迎の辭を述べられ、沖野牧師諸兄姉を紹介せらる。料理また甚だ佳し、大に健啖す。新宮教會は此都會に於ける智識階級である。一個の別社會



墓は今つめたく苔も生へしらむ越前の海岸の雨深き森に  
わが丈たけなみにカンナのびたりきらんとおもふ悲しき夕陽  
異教徒とのしられつゝ送られし棺ひつぎの悲しさよ棺ひつぎはカンナもて  
飾られてありけり  
汝ゆへに作りし花畑汝ゆへに荒れし花畑たゞ荒るまゝにじつと  
ながめてあらむ  
汝の死後いまだ三月を出でざるに園荒れ園に鶏あそべり  
カンナ刈れば其切口よりしとしとゝ水したゝれるかなしかりけり  
あゝカンナよ此の赤き一輪に芽だちそめたる戀なりしかな  
カンナ作りしかば異教徒は異國の花を好すくと云はれたり  
さんらんと夕陽ゆふひたゞるゝカンナ畑に汝は歌をうたひて居たり  
「主よみもとに近づかん」……虫より細き聲なりしぞよ花畑にひと  
りうたひて居たり



## 夏の大自然

### △熊野の夏波 第一信

内ヶ崎 生

紀州新宮出身の在京學生諸君此度郷里に於て夏期講習會を創設第一回講演者として帝大の河津博士と余とに出向するを依頼された。一昨年高野山に登りし事ありしも熊野の浦を訪るゝ由がなかつた。はじめ七月五日東京出發の豫定であつたが、河津博士の都合にて十日に出發することにした。従つて統一教會に開催されてゐる基督教同志會主催の夏期講習會へは大部分欠席せねばならぬ破目に陥つた。これは同志諸君の寛容を仰がねばな

らぬことである。臺灣總督府通信局長は河野博士の親友、新宮附近の三輪崎に歸省せられんとして一行の東道の主人たるを申し出でらる。好意謝すべし。

### 第二信

十日正午前新宮在京學生大西君余を迎へらる。共に中食をとり、輕裝して新橋に至れば角源泉氏河津暹君あり。午後二時五分の汽車に投ず。原田、吉田、太田、海上諸君見送らる、諸兄の好意謝するに足る。三時横濱大坂商船會社支店に入る。僕等は角氏の好意によりて同社の貨物船臺灣通ひの地久丸に乗船する特權を與へられたのである。地久丸は三千噸の商船、嘗て辰丸と稱して南清にて物

光を描け、  
光を憎め、  
光を知れ、  
鴉の糧は光なり。

## 山梔の花

伊藤 寥々

端居して山梔の香に親めるこの夕ぐれのもの静かなる  
夕さればやり水黒きかはたれの庭もせにうく山梔の花  
貧しくも頂きにのみ葉を有てる庭樹の上の片われの月  
村の寺の修養の會に語るべき話を想ふ夏の夜の月  
故知らず熱き涙のわき止まで和やかかなりやけさの天地

## 信なき日

水野 秀雄



わが若きころゆきくれ聖經にうちむかふ夜のしのび音に泣く  
 全しといふころねに日を一日せめてあらむと冀ふらく  
 師に友に親にむさぼるその愛になほ飽くしらぬころなるかな  
 なにものか胎るやらむうら若きころいらく懷きなやめり  
 雲間より斜陽大野にさしきたる友よしづかにいざ祈るべし  
 祈るべきところをしらず淋しに黄なる銀杏の高きにむかふ  
 鐘がなる鐘がなるなるよみがへるそのたまゆらの命いとしむ  
 憧れは青のみ空のはるくといやはてにげに日につのりゆく  
 ひもすがら地にかけめぐるひたぶるに安きときなく地にかけめぐる  
 空裂けよ魂よびさせ人の世のありのすさびのさもあらばあれ  
 耳澄ませば満都のひびき落ちきたるこの大寺の石のきざはし  
 瞬く刹那さへいとあそろしく流轉る世あはれ晝の鐘鳴る

## 命日にうたへる

中山直

三國かは三國は汝の墓所と足づり泣けば日もしらむなり

わが拾へどもはてなし  
手に充つ。

落穂はいのちの束の間  
わすれられたる束の間  
さんとして光ぞふる。

ゆるしたまはば君に捧げむ  
かなしみのきはみに

わがめがけたる  
最後いひさの一の落穂を、

われは生く。

## 耶蘇

耶蘇は父をもたず、  
耶蘇は麥を刈らず、

耶蘇は笛を吹かず、  
耶蘇は女をしらず、  
耶蘇は十字架に死ねり。

### 蟲道

巢を作る鴉、終日、  
いのちの巢を作る。

鴉の糧は光なり。

光は終日、  
われも終日、

光を滌え、

光を釣れ、

光を碎け、

光を商へ、

光をいだけ、



心の奥にきりくづされずに残る絶壁を仰ぎ、  
われはしばし涙を垂れて祈り、跪き、髪をかきむしれり、  
死にたしと思ふ日はいくかとなかつづけり  
心の中にては尙よく生きんことをこひねがひつつ。

\*\*\*

輕蔑と批難の夕立はわが頭上を過ぎゆき、  
絶望とにがき唾の夜はわが全身を蔽へり、  
歸り來るまじとあきらめし力と喜びといのちは、  
ああ見よふたたびわが心の深き底に湧き起れり、  
我は忘れき、我は見えざる戦場にただ獨にて立ちてあるを、  
日々我顔を見、我と論じ、我と職を執り、  
ただ客觀として見なせる鼻より息の出づる者は、  
皆わが神秘なる觀念の寫象に外ならざること、  
また我は忘れき、戦ひは建築や原野にあるにあらずして、  
皆唯一なるわが觀念と直覺と意志の戦ひに外ならざること、  
ああ喜びは再びわが心の底に湧き起れり、

力といのちと愛はわが全身を光の中へ導けり、  
絶望とにがき唾の夜のかなしみをはじきかへし、

おのが作れる幻影に對する恐れを遁るる力は、

暖かく若き生命を盛れる血汐と共にかへり來れり、

強く雄々しく汝の歩み來りし道を進み行き、

傍らに立ちて汝を擲<sup>や</sup>擧<sup>ゆ</sup>する幽靈に耳をかすこと勿れ、

ただ汝みづからを高くせよ、強くせよ雄々しくせよ、

汝の心の絶壁をさり崩して汝みづからを壯嚴にせよ。

八月雪割草のあざやかにほほゑむごとく、  
喜びといのちと力はわが心の底に湧き起れり、

お  
ち  
ぼ

山  
村  
暮  
鳥

わが畑にめぐみの落穂

日の立てば忘らるべしと思はれし日の、  
いかなればかくも久しくわが前に消えざるや、  
死にたしとねがふ日さへいくかつもりて、  
わが目の前にかくはしき若葉はしげれり。

\*\*\*

わが耳は急にはげしく鳴れり……  
われは忽ち全身の知覺を失へり……

われは狂せり……俄かに全身は燃えあがれり……

輕蔑と冷笑は氷河の如くわが頭上を走り行けり……

人は皆その本性を我に向つてあらはせり……

犬に對する外あらはさざる態度を……

姪賣婦に對する外あらはさざる態度を……

痴人に對する外あらはさざる態度を……



われは狂せり……幾千萬年は一刹那に過ぎ去れり……  
われは狂せり……われは奈落の底に向ひつつあり……

\*\*\*

人は皆枯木となれり……歩く枯木となれり……  
恐れはわが心をつかみ、わが足はその前より退けり……  
禮儀を知らざるものを捕へよ、捕へよと彼等は叫べり……  
利己主義なる彼れを捕へよ、捕へよと彼等は叫べり……  
恐れはわが心をつかみ、わが足はます／＼その前より退けり……  
われは狂せり……彼等は皆健全なり……彼等の自ら言ふがごとく……

\*\*\*

死にたしと思ふ日のいくかたなくなつづけり……  
心の奥にきりくづされずに残る絶壁のなかに、  
ひとり窮屈に閉ぢ籠められて生さんよりは、  
早く死にたしと思ふ日のいくかたなくなつづけり……



愛

西  
灘  
よ  
り

佐  
藤

清

言ひあらはせない愛のくるしみにくらべて、  
 更にいたましくやるせない心<sup>こころ</sup>がどこにあらうぞ、  
 言ひあらはせない強い深い<sup>ふか</sup>いわたしの愛<sup>あい</sup>のため、  
 誰<sup>たれ</sup>か<sup>たれ</sup>がわたしをにくむやうになつたならば、  
 之れよりもいたましくつらい心<sup>こころ</sup>がどこにあらうぞ、  
 けれどもわたしはたつたひとりで愛<sup>あい</sup>してゐやう、  
 誰<sup>たれ</sup>も知らないわたしの心<sup>こころ</sup>の絶壁<sup>ぜつぺき</sup>のかげに坐<sup>すわ</sup>り、  
 たつたひとりで苦し<sup>くる</sup>しい愛<sup>あい</sup>のさかづきを呑<sup>の</sup>んでゐやう、  
 わたしの心の絶壁<sup>ぜつぺき</sup>に消<sup>き</sup>えな<sup>い</sup>しるしをつけてゐる多<sup>おほ</sup>くの<sup>な</sup>名、  
 いつまでもわたしの目をひきつけてゐる多くの名、

わたしはいつもそれらのなつかしい名に唇をあて、  
なやましいおもひてにおのれを失うてゐたい……  
愛よ、愛よ、人間には萬人を愛するちからがありながら、  
どうしてそれを自由にあらはす術に缺けてゐるのか。

### 檜

けさ立ちのぼる青い水蒸氣のかげに、  
黄ばめる檜の木末はけぶれるやうに立てり、

すがたよき十四五本の檜の並木は、

わかやぎし少女らの立てるよりもこちよし、

ふしぎなるいのちは木木のなかにつよくよみがへり、

聲なきよるこびと未來をしづかにうたへり、

ああもとの木を忘れずに歸り來れる檜のいのちよ、

汝は果して此冬の間靜なる同じ木の間にのみ眠れるや。

### 若葉

いかなればかく悲しき日の長くつづくや、



## KNOWLEDGE FOR KNOWLEDGE'S SAKE.

An Antarctic explorer said ; " Let me reach the South Pole."  
An astronomer said ; " Let me at least visit the Moon, if not Mars."  
God asked them ; " Why do you seek after useless impossibilities ? "  
They answered ; " Because we seek knowledge for knowledge's sake."  
" All right," said God. " As you ask, so it shall be done you.  
But you explorer shall be sealed up in ice after reaching the pole.  
And you astronomer shall be an exile in the Moon, never to return."  
" No, no," they protested. " We want to come back among  
mankind and inform them of our success."  
Then God said. " It is knowledge for fame's sake, not for  
knowledge's sake, that you really want."

---

## KNOW THYSELF.

The precept " Know thyself " has almost always been a failure.  
But it has been a happy failure.  
See how many of your friends are striving, striving, striving, simply  
because they do not know themselves.  
They think there must be something more in them and they go on.

---

## RELIANCE ON THE PAST.

What is the ground of your trust on human ability ?  
Why do you prefer one man to other man for some position ?  
Only because he has given proofs in the past.  
" He did well, therefore he will do well," we say.  
But who is really sure about that ?  
And such is not the case with other men only.  
I myself lay confidence on my past.  
My enterprises, my hopes, my promises ;—all depend on this confidence.  
Thus we only trust that the old friend will not fail us in time of  
need.

## AT MOUNT FUJI.

Climbing all day I now lodge in a rock house near the summit of Fuji. It is a moon night. Below is the sea of clouds. It is as if the rolling waves tossed by the wind have suddenly coagulated in endless masses. They look so thick that one is almost tempted to walk over them.

The feeling of transcendence is now supreme, for I have passed beyond the limit of clouds and now stand on the other side of it. Oh how I wish to do the same in the world of knowledge and wisdom ! Could I but see beyond death like this !

I nearly forget myself. I feel I am in the Platonic world of Ideas. A spirit with ethereal body or with no body at all. Eternity is before me.

Suddenly I think of the world below. Cities and villages, government and people,—all below the clouds, all on the other side. Suppose my life was unpassably separated from the world of men like this ! How great my longings will be !

Will the higher beings long to descend to the world of men, just as we men wish to ascend to their heavens ? Perhaps so. Hence the endless transmigration !

As we know there is the world of men below the clouds, so the ancients thought of the Kingdoms of the Sea-Kings below the waves. Analogy is perfect.

After a night of transcendental thoughts, it is dawn. The sunrise view on the summit of Fuji is simply grand. One is led to imagine the Dawn of Creation.

We visitors see the grand view rarely in life. But the mountain is always surrounded with such views. How I wish to see all the variety of views, both sublime and beautiful ! Especially that of storm must be most grand. Could I but live here a year and meet all the wonders of the mountain !

### IGNORANT MASTERS AND WISE SERVANTS.

Of scientific theories, they know little.

Yet they manage the engines.

We are like these engineers in living our lives.

With little knowledge of anatomy or physiology, we live and move.

Our astonishment is that the masters are so ignorant and the servants so wise.

---

### PICTURE BOOKS.

A three and half year old boy is very fond of picture books.

In the day-time he spends hours looking at them or copying from them.

When night approaches he piles up these books beside his pillow and then goes to sleep.

Brave soldiers and lovely children, birds and beasts, warships and aeroplanes, cars and automobiles,—all will probably march out of the books in procession to visit the sleeping little one in his land of dreams.

---

### GRAND PARENTS.

Grand parents see the lives of their sons and daughters repeated in those of their grand children.

Similarities bring back the by-gone days.

Generations are linked together.

But alas ! they themselves do not repeat their past.

---

### TRAGEDY OF A PENCIL.

A pencil is being sharpened.

A part of wood and lead is cut off.

The remainder is fit for use.

That is sharpening.

But are not all wood and lead of exactly the same substances ?

And yet some part of them is thrown away as useless to make other part useful.

And no one ever pities the thrown-away.

Tetsuzō Okada.



### INDIVIDUALISM.

Why lament the spread of individualism?

When one becomes wide awake to oneself, when self-consciousness takes hold of him, love, sympathy, philanthropy may no doubt suffer. Morality itself may seem to be in danger.

But regardless to such danger let him press on.

He will surely know, if he is self-conscious enough, that no mere getting on in the world does satisfy him.

He will be awakened to the great problem of his own self.

He will feel that he stands in presence of great universe.

Whatever he has or he knows must be awfully insufficient before this problem of existence itself.

If individualism, pursued so far, brings one to such metaphysical sense, what is more desirable than that?

And if such sense is not aroused in him, his individualism must be considered to be far short of the goal.

---

### VEGETABLES.

Looking at the various shapes of stems and branches, we feel some plant life has more freedom than animals.

Animals cannot change their shapes like that.

---

### GRAFTING.

Man contrived to outwit Nature by grafting.

But his art was limited among plants of the same kind.

Nature, to show her greater skill, tried grafting between the plants of different kinds and the result is the mistletoe.

---

### NATURAL SELECTION.

Far more popular are hens, ducks, and geese than cocks, drakes, and ganders,

Woman's right preponderates among the domestic birds.

Not so with the beasts.

Compare horses and dogs with mares and bitches.

There strength is everything.

Only with oxen and cows, there is almost an equal right.

## 二

更に進んで價值保存の信仰と實生活との關係とを考へて見たい。今先の猶太人の實例を見るに、かの羅馬が勃興して、タイタスが西暦七十年にエルサレムを焼き盡したとき、既往千年の間住みなれた猶太人のホームは、全く根底を失ひ、止むを得ず歐洲全體に散らばつて行かねばならなかつた。しかしながら、彼等には落ちて行く先も安らかな場所ではなかつた。彼等は到るところに迫害せられたのである。彼等の多くが沙翁『ヴェニスの人』のシャイロックに見るやうな金貸を本業としてゐるのは、一處に定住して不動産を得ることに對し、有らゆる妨害を受くるからである。彼等の金貸業は歴史的生活から必然に餘儀なくされたのである。

然しながら現在世界に於ける猶太人の金權は實に驚嘆に値するものがあるので、彼等が數千年前に夢想したる世界統一の理想は或は實現せらるゝことがあるかも知れないのである。又只に金力の

みならず、彼等の發展は勞働方面にも及んで居る。勞働者は猶太人を目して殘酷なる資本家と見るけれども、何ぞ知らん、社會主義の元祖とも云はれるカール・マルクスは猶太人である。佛國のサンシモンと並び稱せらるゝラレールも亦猶太人である。世界最大の大勞働同盟の首領たるゴンバースまた然りである。學術の方面ではベルグソン然りエーデルツヒ然りである。彼のフランクフルトに於ける研究所は世界に比肩すべきものがない。音樂者にはメンデルスゾーンがある。彼等があらゆる外圍の迫害を受けながらに、斯の如き大なる發展をなし遂げたる所以のものは、一に自己の内心に在る生命の價值を信じたる結果に外ならないのである。

かくの如く、國民として發展するものは、國民の抱ける價值と、價值は保存せらるべきものなりと云ふ宗教上の眞理に基くものである。獨逸今日の隆盛は、獨逸の國民的信仰が強いからである。ナポレオン時代の普魯西は疲弊の極點に達して居たのであるが、柏林大學生れ、フヒテの如き熱烈

なる教育者現はれ教育を根本より改革し、遂に一八七一年佛國に對し報復の實を擧げ得るに至つたのは、一に此の國民的信仰の力によるのである。

更に個人の例に見るに、かの紐育に於ける日本大商店の支店には最も敏腕の者を派遣する例であるが、多くの法學士、多くの商學士を使役する支店長の中には完全なる高等教育を受けてゐない人が多い。即ち彼等の内心の堅き信仰がかくあらし

むるのであつて、古來大事業を成し就けたる人は皆然りである。

凡ての個人、凡ての國家の興廢には、此の信仰の力が重をなして居る。宗教の優劣は神學の優劣によるのではなく、實に如何なる力を以て實世界に活動せるやにあるのである。吾人は須く自己の領分を固守して、其處に價値を求めて行くことが必要である。

## オイケン號！

△來る九月オイケンの來朝を記念し、同時に幽玄なオイケン哲學の一端を紹介するの目的を以て、吾人は九月號をオイケン號に充てたいつもりである。



# 宗教的眞理の特質

原口竹二郎

## 一

獨逸ヘフディング教授はその哲學に於てカントの影響を受けて居ることは、自らもその著書の序言に述べて居ることであるが、その見解には大に學ぶ可きものが多い。

彼はその『宗教哲學』に宗教的眞理の特質は、價值保存の信仰にありと説て居る。本來吾人の日常生活の凡ての事象には種々な價值がある。第一に物質的に見たる自己保存に關するものは、衣食住に於ける經濟上の價值で、次は自己を超越した道德上の價值、美的の價值、知力を得んとする研究上の價值等て吾人の生命を傳ふる上に頗る重要なものである。世俗にも一寸の蟲にも五分の靈と云つ

てある程で、如何なる人にも量見があり考がある。これ即ち價值である。これ等の價值は吾人生活の根本であつて容易に動かすことの出来ないものである。

併しながら、此の價值は實生活上に自ら實現せらるゝものでもない。あるはかの恐るべき天變地災により、疾病により、あるは道德上の惡の力により、吾人にとりて最も價值あることの實現が、甚だしく妨害せらるゝのである。こゝに於てか吾々は實社會と自己の主義との對照を試みざるを得ないのである。

安心立命の生活を送るが爲めには、自己の主義なり理想なりに含まるゝ價值は容易に廢滅せらる

べきものでないと云ふ信仰が必要となる。即ち宗教的信仰の生るゝ所以で、價值が自ら實現せらるるものならば、全く宗教的たり得ないのである。

價值は自らに實現せらるゝものと深く信じて居る人が多いやうである、従つて此の價值を保存しやうとする強い要求がない。併しながら信仰は、自己の導く價值が實在に破壊せらるゝ時に生ずるものであつて、スプランガーは宗教は理想と實在との衝突より生ずるものであると言つて居る。かの多くの基督教徒が、十字架に對して云ひしれぬ意味を感じる所以のものは、基督がよつて以て最後まで奮闘した、自己の考へたる價值は天地を貫くものなりといふ信仰に對し、十字架の蔭には恐るべき惡の勢力が潜んで居るからである。かくの如く見るときは、宗教の眞體を價值保存の信仰にありと考へざるを得ないのである。

かの猶太人が基督を生むに至りたるはこれと同一の事情によるものである。大古以來猶太人は引續きアッシリア、バビロン、ペルシャ、マセドン、トレミー等の爲めに非常なる侵略と虐待とを受

け、かの羅馬が勃興したる時代の如き、猶太人は實に慘憺たる状態に沈吟してゐたのである。世の榮華は全く過去の夢となつてゐた。併しながら猶太人は自己の生に對する要求の強き國民であつて、如何にしても自己の生活を無意味なものに感ずることが能きなかつた。馬太傳第五章に

『心の貧しきものは福なり、天國は即ち其人のものなればなり。哀む者は福なり、その人は安慰を得べければなり。柔和なる者は福なり、その人は地を嗣くことを得べければなり……』

とあるは、自分等は數百年の間外人の殘虐なる壓迫に苦しんで來たのであるが、それは決して無意味なものでないであらうといふ猶太人の思想をよく示して居るものである。基督の時代にありては彼等の間に天國の觀念が著しく發達した。即ち猶太人は自己の生活を肯定する上に、一種の天國觀念を見出して、自己の價值を保存しやうとしたのである。かくして吾人の多くの經驗も將又多くの事實も、吾人に信仰の本質は價值の保存にあることを教ふるのである。

れは吾人の生活を支配しないと云ふ意味である。捨てられたものである。實に生命なき形骸の悲惨な最期である。

#### 四

基督教は一種の歴史的宗教である。而してオイケン博士は歴史的宗教の中心はその宗教の開祖なる人の人格であると云つて居る。此の言葉を基督教に應用するときは基督教の中心はやはり基督の人格である。

『そは置給ひし基礎の外に誰も基礎を置くこと能はざればなり、此基礎は即ちイエスキリストなり』(哥林多前書三ノ一一)

で、基督教の基礎は何處までも基督の人格である。さればとて基督の人格は、教會の教ふる教義に説かれて居るやうなものではない。三位一體の第二位で、或は雲に乗り、幽界に下るか如き人格ではないのである。基督の人格の偉大なる所以は、人間の精神、人類の生活の全體を包圍する力、若くは人類の内部より發現し之を支配せんとする一種

の力である。基督の人格と云ふも定まつた形にくられたものではない。神の生命の發現として見るのである。オイケンの所謂精神生活の現である。併しながらこれは基督の一言一行を指すのではなく、内的經驗であり、宗教意識であり、又その生命そのものである。これは時代歴史を通じて永遠に創造し、活動する生命である。これやがて人類を救ふの力である。

宗教には救の宗教と掟の宗教との別があつて、佛教、基督教は前者に屬し、猶太教、回教は後者である。そして基督教の永遠なる性質は救の宗教たるにある。今此の二者を單簡に説明せんに、掟の宗教は、人間世界の上に大なる力を有する神ありとし、此の神の定むる掟の尊奉の良否によつて或は天國に行き地獄に落さるるとするものである。此の思想は人間の善をなす力あることを認むるので、神は掟を與ふるのみ、善をなすと否とは人間にあるのである。救の宗教は之と趣を異にし吾人は上より來る恩寵によつて善をなし、これによつて別の世界に入るものと見るのである。



今日救の宗教として基督教の優秀なる點は、その人間生活に非常なる力を與へ、吾人の現在の狀態を内部より革新する力を有して居る點にある。

吾人の生活全體を内より信じ、外より包括して進化せしむるにある。人類の生活をして宇宙大の生活に進化せしめ、此の醜き世界を神の榮光に充ちたるものとせしむるにあるのである。宗教は限られたる生活と認めらるる間は必ず後るゝものである。併し精神生活あるところには宗教生活がある。

學問、倫理、道德、藝術には必ず宗教がある。そこに宗教の生命を認めなければ永遠の存在を主張し得ないのである。

之を要するに將來の宗教は、現在に於ける形のまゝを持続するものではなく、必ず進化するものである。只基督の人格の中に動ける生きたる力を確信するならば、眞の基督教徒と云ふことが能うるのである。

### 讀者諸君に告ぐ

△夏期中各地方へお出かけの諸君へは、郵券二拾錢お送り下されますれば、本社から直接何時にても雑誌をお届けいたします。

六合雜誌社營業部

アルベルト・シュワイチェルの基督傳研究の歴史を見て感ずることは、基督を客觀的に見る歴史上の人物として見るよりも寧ろ信仰の心の中に現はれて居るものである。肉の基督に非ずして、精神化せられたるものと見るのである。之を要するに基督教の現在の形態は將來に於て此のまゝ維持せらるゝものとは考へられないのである。

概括的に云ふならば宗教は内部の生命である。

これは云ふ迄もなく、單に生命と云ひ力と云ふ如き極めて抽象的なものではない、常に何等かの形をもつて現はれんとするものである。宇宙には大なる力がある、生命がある。併し單に生命として、力としてあるのではなく、或は山となり河となり、人間の活動となり、或は學問となり藝術となつて、現はれて來るものである。即ち形となつて顯はれるものである。此の意味に於て基督教の外形の如きも止むを得ざるに出づる必要條件であるが、併しながら此の外形は決して一定不變のものではないので、時代なり國民なりに應じて別様な形を現して來るものである。只宗教が生命であることを

失はない限り、それが如何なる宗教にても永久に存在すべき價值を有するものであると信ぜざるを得ないのである。

### 三

基督教には教義がある。これ即ち宗教を一の形として現はしたものである。オイケン教授は教會の教義ドグマは之を捨てゝ重きを置かずと云つてゐる。オルソドックス

正教派の人々より見れば實に驚く可き議論であるに相違ないが、宗教は教義ドグマそのものでないことは斷言し得ることである。宗教そのものが生命である限り、吾人各個の生活と極めて密接なる關係があらねばならぬ筈である。吾人の生活と何等直接の關係なきものは、吾人に對して些の權威を有せないものである。今かの教義を見るに、現代の吾人に殆ど没交渉なものが多し。これをしも尙維持しやうとするは宗教を守らうとするのではなく、却て教義を守るものと云はねばならぬ。

例之、かの三位一體説の如き、果して吾人の生活とどれ丈の關係を認め得るであらうか。或る教

會は之を信じない者は基督教徒でない」と云ふ。併しながら之を教ふる者、之を信ずる者が、己の生活の上に重要なものとして採り入れて居るかは頗る疑はしいのである。何となれば此の信仰と實生活との關係は極めて漠然たるもので、實は一でも二でもよいことである。これを案出したる人々には餘程の關係があつたに相違ないが、要するに之は机上の空論である。閑人の閑問題たるを失はない。直接に吾人の生活と交渉なきものは、永遠に存在すべき價值なきものである。又かの基督教の終末觀の如きも、現代人の頭には關係のない問題で、よし神學上の問題として趣味はあるとしても、宗教を生活と見る見地には關係のないものである。世の終りが來ると云ふことを如何程眞面目に考へて居る人があらうか。これまた永遠の價值あるものとは考へられないのである。彼等は徒らに形骸を捉へて生命を逸するものである。これが生命の發現であつた時代は既に已に過去のことになる。斯の如き問題は極めて自由に考慮すべき必要があるのである。かの魚の水に於ける如く、人

の空氣に於ける如く、吾人と宗教との關係が密接になつて居れば、吾人は之を捨て得ないのである。只ここに注意を要するは教義と雖もその時代の生命ある表象としては價值を認めねばならないことである。

現代科學の進歩は世界觀に大なる變動を與へた。かの地球中心説の如きは根底より覆されてその意義を失ひ、宗教の生命を保つ力を失つてしまつた。かの奇蹟の如きもゲーテは信仰の頂上なりと云つて居るが、原因結果により種々の現象を説明する自然法を信ずる吾人の頭には信ぜられないことである。奇蹟を以て基督は超自然的な力を有するものと信ぜしめやうとした努力は、舊時代に於ては大なる力となつて居たであらうが、現代に於ては最早永遠の要素ではない。時代と共に滅亡すべきものである。

かくの如くして基督教より永遠のものと、一時的のものとを引き離せば、残るところは少ないに相違ない。又論議に値しないと考へられて居るものの如きも、現代に於て勢力を失つたもので、こ



形は充分研究の價值あるものである。

本來宗教は一面極めて保守的なものである。例ば彼の親鸞上人の法衣、弘法大師の錫杖等を尊崇するが如き、基督教にても、舊教徒等が基督の時に用ひられた十字架の木をお守りのやうに尊崇する如きすべて教祖名僧についたものを大切にする傾がある。況や教義に於ては殊に此の傾向が著しいので、總て傳説的のもの迄も之を歴史上の事實なりと許して尊ぶものである。併しながら斯かる風潮を何時迄も同一の熱心を以て維持せしめ得るやといふことは大なる疑問である。時代は大河の如く流ると學者の言つた如く、あらゆるものは流るゝのである。時代に休息はないのである。と云へばとて只動くものではない。之は進化である。進化しつゝ動いて行くのである。勿論進化の中には變化も含まれて居るのであるがベルグソンの言へる如く、創造的に進化するのである。時態斯の如くなるに反し、獨り宗教のみが舊態を維持して行かうとするならば、進化に遅るゝことは必然である。古物を愛するは歴史の研究として價值ある

ことではあるが、歴史が單に古物の研究に止まるならば、實に奇態なものであつて、却てそれを繼ぎ合せたる時代を考ふことは極めて大切である。更に歴史を死物の連續に非ずして、生きたる精神の働きの進化として、生命の發展として見るときに歴史研究の價值が現はれるのである。其の歴史の進化に後れ、一時代を區劃して維持せんとするは愚なことである。

## 二

宗教も亦此の進歩に隨伴する必要がある。此の進歩に伴はないならば、よし久しき因襲の力によつて惰力的に勢力ある如く見ゆるも、實は形態のみ徒らに大にして、内部の生命の弱つたものとならざるを得ないのである。

基督教の實質の中には今日隨分古きものがある。思想の方面から云へば、古代希臘思想、制度としては羅馬隆盛期の制度等が今も教會の中に行はれて居る。全く時代後れのものがあるに拘らずこれを後生大切に守つて居る。これを以てしては

今日の青年には一の靈感だも與ふることが能きない。共鳴なく反響のないものである。又中世の思想

も今日多く行はれて居るやうに見える。今中世の特長を簡単に述べんに、中世は最も宗教的の時代であつた。哲學と雖も宗教の奴隸である。政治も宗教の支配の下にあつた。宗教の勢力に逆つて存在し得るものは殆どなかつたのである。かくも偉大なる勢力を有しながらその一面には一種の時代人心の疲勞を見逃すことは能きない。當時にありては現世に對して全然失望であつた。之を罪惡の如くに厭ふた。肉と靈とは甚しく相離れたものと見た。現世と他界とを遠くに引離してしまつた。従つて肉體を卑むこと甚だしく、肉體の慾望を非常な罪惡だと思つた。フランシスの如く有らゆる肉體の慾望を捨て、美しいと感ずること、美食すること、を罪と思ひ、美味なるものには故らに灰や砂を加へて食つた人が聖者と呼ばれるのであつた。他界に於ける現世以上の生活に渴仰した結果である。或は又トマススの如く彼岸は祖國なりと叫んで遁世的な考を抱いて居たものもあつた。世界

を輕視することによつて、天國に至るは無上の知慧なりと信ぜられて居たのである。

然しながら、現代人には肉體の快樂も罪惡ではない。現世の生活も罪惡ではない。彼等は肉と靈とを一致せしめ調和せしめやうとする。これにも拘らずかの親鸞の如く南無阿彌陀佛と唱ふれば極樂淨土に行くことが能きるなど、説くのは頗る現代に遠いものと言はねばならぬ。今かゝる分子を基督教より取り去るときはその大半を失ふであらう。單に共觀福音書に見るも基督の象が各異つて居る。パウロの手紙にあらはれたところも違ふのである。而して基督は實在したる人なりや否やと云ふ問題が起るのであるが、これは經典以外に歴史が少ないのであるから止むを得ないのである。獨逸のカールトフは一九〇二年に書を著して基督を歴史的人物なりと見ることに問題を起し、ドレーフは基督は神話の人物なりと主張して物議を起した。十九世紀に於て基督傳研究が持上つたのは彼は基督教の根本なるが故に、之を確めざれば基督教存在の基礎が危いからである。

てバフィン灣に達したるが如き然りである。又一五五三年、英國エドワード六世の命により印度に向ひたるウイロー及チャンセローの二人は全く宗教的のものであつたことは、その命令書に明らかである。彼等は航路を北東に取りたるため、遂にその目的を達しなかつた。之を要するに最初新大陸の發見を見るに至りたる端緒は宗教が重なる動機であつたことは今や疑を容るべき餘地がないのである。

後に經濟的の目的を以て熱帶地方に行きたる歐洲人はその多くが土着の土人を虐待したのであるが、土人を彼等の殘虐より救ひたるものが二ある。即ち一は天然の力で他は人の力である。かの熱帶地方の風土は全く歐洲人に適せず永住することが能きない。殊に此の風土の婦人に及ぼす影響甚だしく多くは不妊症となり、會々出産することありてもその子は至つて虚弱なのである。乃ち夫婦の永住は覺束ないのであるから皆一定の年限が來れば本國に歸つてしまふ。天の斯の如き氣候を熱帶に與ふる所以は決して無意味に非ずして、これ實

に土人を白人の虐待より保護する重要な武器の一である。亞弗利加のある地方の如きは土人二十萬人に對して白人二三百人に過ぎない程である。次に土人の保護に任じたるは基督教徒であつて、彼等は商人と共に入り込みて、よく彼等を教化し保護したのである。不幸にして白人は土人を虐待すると云ふ聲の爲めに、彼等基督教徒の功蹟は認められないけれども、彼等が堅き信仰の力によつて土人を保護し開發したことは著しき事實である。

かの社會主義の始祖と仰がれてゐるカールマルクスは、世界の物質的進歩は生活の便宜に従つて、政治上、道德上の改革も行はるゝものであると言つて、道德、政治の變動の主なる動機を主として經濟的關係に置いて居るのであるが、之れ誤れるの甚だしきものである。世界に於ける變動には宗教的の目的が多いことを忘れてはならない。余は今カールマルクスの學說の誤れるを指摘せんが爲めに、ここに以上の事實を借り來たつたのである。



# 將來の基督教

額賀鹿之助

## 一

基督教が他の多くの宗教に比して卓越せるものであることは一般に認められて居るやうである。今基督教と他宗教との比較を試むることは暫く之を措き、基督教が今日有するが如き意義、今日有するが如き價值、勢力が將來に於ても維持せられ得るものであるか、然らざるものであるかを考へて見たいと思ふ。

世界の三大宗教とも稱すべき佛教、回教、基督教の三者の中、基督教はその卓越せる性質を有するものゝ一であることは間違ないことであるが、基督教果して絶對の宗教なりや、若しくは基督教は最早完全なる宗教にして進歩の餘地なきもので

あるかと云ふに、未だ然りとは答へ難いのである。尙多くの發達の餘地あり、尙多く進歩する必要があるやうに思はれる。宗教が一處に停滯して、永久に舊態を維持して行くことは、宗教そのものにとりても有利でないのみならず、又不可能なことである。此の問題に關しては、多くの學者が研究して居るのであるが、かのオイケン博士の如きは、現在の基督教を以て進歩の絶頂に達し居るものと認めず、更に進歩の必要なり希望なりを有するものと云つて居る。尙此の方面に就て興味ある研究をした人は獨逸ハイデルベルヒ大學教授トレルチ博士である。同氏の此の方面の著書には『基督教の絶對性及宗教歴史』(一九一二年)『基督教の將來の可能』等があるが、基督教が今日示してゐる

新たなる發見によるときは彼は實際に航海したる人ではなく、上述の如く回教徒の壓迫を受けたるを以て、葡萄牙の勢力を西に向つて發展せしめんとした人である。彼は此の目的を以て、當時最も航海術に長じたる伊太利人に就て學び、葡萄牙の南方サハラ沙漠を越ゆれば一の富の國あることを知つた。ここに於て、ヘンリーは葡萄牙の西方アゾール群島、マデイラ群島及上述の富の國とを合せて之を基督教化し、基督教の一大帝國を建設せんとしたのである。かのナイル河の東方アビシニアは基督教國であつたが、所謂富の國より東に行きてこのアビシニアに達し、それより紅海を過ぐれば印度、支那に行くを得て、コンスタンチ、ノールを通過するの要を見ない。これが彼の大望であつたのである。

かくて彼はジブラルタル海峡の南岸キュタの總督となり附近を征服せんと試みたることはあるけれども、航海を奨勵したることはない。即ち最初西に向つて土地を廣めんとしたるヘンリーは、伊太利人の發見したるより以外の土地を發見しやう

とする心算はなかつた。セネガル河の流域に基督教帝國を建設したいのみであつた。彼の使用したる人も亦宗教思想の強い人であつたのである。後にセネガル河流域に移住せんとした人々が漂流して遂に亞弗利加の南端に達して、偶然の機會を以て一大航路を發見するに至つたので、決して計畫せられたことではないのである。

かくの如く、基督教國を建設せんとしたヘンリーの計畫が、新地の發見を惹起したるを見て、葡萄牙人は意外な處に土地を發展する餘地あることを知り、後に大計畫の探險を企圖したのである。かくて亞弗利加の南端を廻り印度に進みたる航海者が、宗教的目的を有したることは明らかにその日誌に残つてゐる事實で、バスコダガマの日記中には宗教に關する記事多く、彼が印度のカリカットに上陸するや、『余は基督教徒と黄金とを得んために來れり』と言つたといふことである。

### 三

更に、葡萄牙の艦隊司令官たりしアルブクアー

クはヘンリー以上に宗教的野心のあつた人てかの十字軍にて歐洲人が失ひたるものを獨力を以て恢復しやうと企圖したのである。即ち印度に行きゴアを占領し、それより紅海に入り一はアビシニアに上陸しこれと合同してナイル河の上流より運河を設け、河水を紅海に落して、埃及に於ける回教徒の位地を沙漠と化し、二には紅海の南エンボーに上陸し、メディナに行きてマホメットの墳墓を發掘しその棺を奪ひ取り、而して土耳其政府にエルサレムの還附を求むると云ふのである。然るに彼は紅海の惡風土の爲めに病を得たると、軍艦の根據地たりしゴアに暴動起りたるとによりその目的を達するに至らなかつた。上來述べ來りたる如く、彼等の活動が皆宗教的目的に基因するものであることは疑なき事實であつて、全く十字軍的である。少くとも主腦者の目的は經濟上の問題ではなかつたのである。

かのコロンブスも、發見せられたる手紙日記等によれば極めて宗教心の篤い人であつた。單に日本と云ふ黄金ある國に行く爲めならば、或は水夫

に殺害されんとし、行けども／＼島影だに認め得ないといふ絶望の中にありて、尙ほ且つ前進した程の勇氣は出なかつたであらう。併しながら彼の事業の主なる動機は宗教であつた。航海日誌の中には多く十字軍のことが記されてあるし、彼の用ひたる多くの參考書の中には東洋諸國には基督教を要求する國があることを記して居る。就中コロンブスが無上の參考書としたるトスカネビーの書物には東洋は基督教を傳播するには最も準備せられたる國なりと説いて居るが、これが彼の心を誘惑したことが書いてある。彼も亦十字軍的目的を持って活躍したのである。洋中の眞中に絶望せるときも、彼は同情者を神に求めたのである。彼は斷じて征服せらるゝことなしと信じて勇進したのである。以上の事實が文明の動機となつて從來に見ざる貢獻をなしたのである。

コロンブス以後、宗教的ならざるものも輩出した。かの英國のジョンカボットがコロンブスが西に進みたるに眞似て航路を北西にとり加奈陀を見たる如き、マーティンプロビッシャーが北に行き



# 文明史上に於ける基督教徒の一大貢獻

永井 柳 太郎

## 一

歴史家は大體に於て世界史を上古史、中古史、近世史の三に區分することに一致して居るのであるが、中古史及近世史の區劃を何れの時代に求むべきかに就ては、種々の議論がある。併し十五世紀の後半を以て中古より近世に移る過渡時代と見做すことに異論はないやうである。この十五世紀後半には引續いて社會的生活の上に革命的變化を與へた事件が起つたのである。

西歷一四五三年、コンスタンチノブル土耳其の爲めに侵略せられ、こゝに東羅馬帝國が滅亡するに至つたのは歐洲東部に於ける基督教國の衰亡を意味するものである。此の時に當り印刷術は發明せられて遂に文藝復興運動の導火線となり、續

いて發明せられたる火藥は戰術の上に一大變動を與へ、かくて封建制度轉覆の大動機となり、延ては諸侯の統一となりて近世國家の基が開かれるやうになつた。

併しなから、當時にありて強く吾人の注意を惹くものは新大陸の發見せられた事實である。一四九二年コロンブスは西班牙を發して大西洋を横斷し、亞米利加を發見した。次で五年の後一四九七年バスコダガマは亞弗利加の南端を廻りて印度に達した。此の新世界の發見は實に世界文明に非常なる影響を與へたのであつて、歐洲人が未だ知らざりし大陸を發見し、未だ見ざりし人種に觸れて彼等の活動は一轉して世界的となり、世界文明の端緒がこゝに開けたのである。

從來斯の如き偉大なる一大發見の起りたる動機

に就ては、多くは經濟的の解釋のみ與へられて、彼等二人は共に東洋に行きて黄金を得んとしたにあると斷定せられて居る。併しながら最近に於ける研究の結果は、新材料發見せられて新大陸の發見は實に宗教的の確固たる動機に出たものであることが明らかにせられたのである。今少しくこれが説明を試みたい。

## 二

新世界を發見したる航海者が、西班牙人、及び葡萄牙人なるか、さなくば之等兩者の援助の下にありたる人であると云ふ事實は、全く理由のあることである。土耳古人が小亞細亞より東羅馬帝國を襲ひ、コンスタンチノープル一四五三年に落城するに及び、その地方にありたる回教徒の勢力大に勃興し、基督教徒の商業上の根據は全く侵略せられたのである。本來この地方は歐洲人に大切な土地で、彼等の日常生活に必要な物貨はバルカン半島を通じて東洋より輸入せられて居たのである。殊に伊太利人の如きは商船を以て希臘、小

亞細亞地方に赴き東洋より物品の供給を受けつゝあつたのであるが、回教徒の勢力隆盛となり此の輸入道を遮斷せらるゝやうになつたので、歐洲の注意は輸入の別道を見出すことに向けられ、自然西方より東洋に向はんとすることがその中心になつたのである。又特に西班牙と葡萄牙とが、西方に注意を向けたるには別に理由がある。即ち回教は亞刺比亞に起り埃及を征服し早くより歐洲に侵入し西班牙半島は彼等の蹂躪する所となり（西班牙より北方に行くにはピレニースの高山を越えざる可からず、彼等はこれを敢てしてまでフランク人と戦ふの勇氣がなかつたので、そのことなくて終つた）回教徒に對する、西、葡兩國人の反感は深甚なるものがあつた。而して一四五三年、コンスタンチノープル陷落してギアナ府包圍せらるゝに至り、彼等は回教徒征服の必要に迫られて來たのである。即ち彼等が東洋に向つて進發したるは最初より宗教的であつたのである。

この根本の命令を發したるは「航海者」ヘンリーとして知られて居る葡萄牙の王ヘンリーである。

はセオリストである。單に事務に執掌し、業務に従事するものは甚だ多いのである、寧ろ先見の明あるものゝ、それを實務に應用する人を要すること更に大なのである。

第二に、米國人には凡て、商業に對しても、政治に對しても常に道德的眼光をもつて批評する傾向を有てることである。かつて米國に於て、金貨本位を取るべきか、銀貨本位をとるべきかの問題が持ち上つたことがある。而して道德を重んずる米國人の氣風は、この時に於て最も明白にあらはれたのである。即ち彼等は、かゝる問題でさへ、何等かの道德的の口實を見出すにあらずんば國民一般の同情を喚起することを得なかつたのである。

### 三

余は今、商本主義と道德主義とが米國に於ける争闘の中心となれりと言つた。而して實に今日、日米間に懸案となれる加州問題の如きも實はその争闘の圈内に入るべきものである。此際兩國民の

注意すべきことは、冷靜に、且つ忍耐をもつてその解決に努むべきことである。加州問題たるや實に一面より觀察すれば米人の商本主義の頂點を表はしたものである。併しながら、余は、米國人にはまた他面に於て、道德的良心の鋭敏なるものがあり、國際問題に於ても公明なる精神をもてるところを私に信ずるものである、今日こそは私慾に充ちたる人々の意見が行はれ居るが如くなれど、結局公明なる人の意志が一般に認めらるゝに相違ない。

商本主義と理想主義の争論は何れの國にもこれ有り。而してその如何に傾くかによつてその國家の運命は定まるものと言はねばならぬ。茲に於て一般人民、特に青年に向つて希望したきは、諸君が大なる注意をこの點に向けられんことである。

元來、青年はその本質上、理想に走るものである。その純なる心をもつて、正義に向つて直進するものである。この點に於て余は青年諸君に待つところ甚だ多いのである。

余はかつてスウィツランドに於て、ローンとアイ



ルの兩河が左右より流れ來りて合するところを見たることがある。ローン河は樹深き山を流れ、草繁りたる牧場を貫いて、清く静けく、悠然として流るゝ河である、然るに之れに反してアールは氷山の間を流れ、塵埃や雪や土を運んで濁流滔々として流るゝ河である。その勢に於てローンは實にアールの比ではない、故に普通の考へから云へば、言ふまでもなくアールがローンを呑んで、大河はこゝに無殘にも穢さるゝに相違ないのであるが、

事實は之に反してアールは却て、河の底を流れて、ローンの清流は悠然として靜かにその上部を流れ行くのであつた。

この二つの河流の争ひは、遂に清きローンの勝利に歸したるが如く、南本主義と理想主義は何れの國に於ても相争ふと雖も、靜かなる理想主義の遂に勝利を獲得すべきは余の疑ふ能はざるところである。

## △世界の一人

白鳥省吾著。象徴詩社發行

過去二ケ年間に於ける著者の詩三十三篇と散文詩十八篇とを集めたものである。「螢」「小さい靴」「手」「いのち」「幻想」など著者の傷々しい神の官能が心ゆくばかりなだらかに現はれてゐる。

概して氏の詩は外部から或る力を握み出すといふよりも、内部から内部からと湧き出て來るいのちの力そのものの流れのなかに氏自身が浸されつつ歌つてゐると言つたやうな落ち着きと寂し味とがある。顔へてゐるやうな氏の感覺は何時も敬虔な驚異の眼を睜つて靜かに太陽を見、森を見てゐる。『太陽よ。處女のごとく涙せよ……丘の斜面には、小犬がもののにほひをたづねて、まだあかぬ眼で泣いてゐる。』

敬虔な驚異の眼を以て自然に對する人にとりて自然は言ふべからざる美しさを持つてゐる。いのちの象徴としての自然は貧るほどの懐しさを吾々に覺えさせる。『びちびちびちと啼く雲雀、あがれあがれ高く……雪消えの山のいろは、空色に醸された酒』といふやうに著者の鋭い官能に觸れた自然は夢のやうな美しさを持つてゐる。氏が散文詩『生命の拜跪』に歌つてゐる『自分は今、どこに居るのだ。世界にたつた一人の自分は今、此處に居る、神秘の力が目覺めてゐる、たつた一度しかない刹那が燃えてゐる』といふ心持ちは私はどこまでも同感することができると思ふ。私自身の現在の心境からして氏の作品は言ひ知れぬ懐しさを覺えしめた。(價〇、六〇)

また或る外國人は言つた。『かつて一米國人と共にシカゴに行きしに、その米人は道にて見かけた人々を一々に指さして、彼は何億の財産を所有せりとか、彼は何萬の富を持てりとか云ひて、恰も吾々が他人の姓名を紹介するが如くてあつた、これ實に、如何に米國人が金錢の力に支配せられ居るかを證し得て餘りがある』と、

實に今日の米國の興廢は、金儲主義を採るか、理想主義をとるか何れかによつて定まるのである。それは丁度古代に於ける埃及、波斯、西班牙、羅馬の諸國の運命や、希臘、猶太の運命の様なものである。前者は商本主義であつた、國は富み、兵は強く、政治は昌んに行はれた、併しながら、彼等の目ざしたところは、たゞ自己の利益のためばかりであつた、自己の繁榮ばかりであつた。そして彼等は實に朝咲いて夕に萎れるはかない花の様に過ぎてしまつた。之れに反して、後者は前者に比して政治は甚だ振はなかつた、武力なども猶太の如きは全く無力であつたと云つてもいい、併し彼等は單に金儲をもつてその理想とはしなかつ

た、彼等は大なる理想をもつて居た、彼等は大なる思想をもつて居た。そしてその感化影響は二千年後の今日に至るまで決して消滅するときはない。

米國はたゞ金錢を追求すべきか、而してその爲めに亡ぶべきか、これ實に米國にとつて大なる問題でなければならぬ。ラスキンかつて言つたことがある。

『伊太利のミランの寺院には、六百年前にこの世を去りし聖者の死骸がある、その頭には金冠を被らせ、その胸には金の胸を纏はせて居る、併しながらこの死人は果してこの金衣を所持し居れりと言ひ得るであらうか、……』

## 二

さは言へ、米國とても全然拜金宗の國家であると言ふことは出来ない。拜金主義が米國に浸滲して居ることは否むべからざるも、併し米國人の一面には、否根底には理想的精神の本流の存するところはどうしても認めねばならぬ、建國の當時に於

ける移民は、彼處此處とあらしまはりたる海賊の様なものではない、ビュリタンの精神、バイエチストの敬虔、これ實に今日の米國民の祖先を支配せし大なる力ではないか、この祖先の血は實に今も尙國民の間を貫流して居るのである。ハーヴァード大學に於ける余の同僚の一人は

『米國民はたとひその外觀に於て拜金主義の如くなるも、その衷心に於ては理想主義の國民である、何れ兎も角、日常生活の活動を道德的眼光をもつて觀察する國民である』

と云つて居る。

米國が若し全然拜金主義であるとするならば、それは實に米國の國家興亡に關して重大なる問題と云はなければならぬが、上に述べ來りしが如く、米國は決して全然拜金主義ばかりではない、吾人は尙茲に大に樂觀を得べき二つの理由をもつて居る。

第一、米國に於ける今日の事業は益々膨脹發展して實に巨大なるものとなつて居るが故に、從て商工業、及び政治界に於て、その首領たらんと欲するものは、たゞの一時的計畫をもつては決して

成功することが出来ない、彼等には實に明敏なる先見と洞察とを要するのである。而してこの必然的要求は拜金宗を排して、道德本位たらしむる動機である。何となれば、彼等にして若し、將來のことは問ふところにあらず、たゞ現在をして自己に利益あらしめんか、將來に於ける彼等の勢力や首領權や得て望むべからざることは火を見るよりも瞭であるからである。

米國人の口癖は『彼は理論家なれば與すべからず、これは實際家なれば共に齒すべし』等と云ふことである。併し余は寧ろその精神を疑はねばならぬ、元來セオリストとは希臘語の所謂セオリアより來た言葉である、セオリアとは透視すると云ふことである、豫言すると云ふことである、部分的でなく、全體として見ると云ふことである、故にセオリストと云ふ本來の意味はたゞに言論家と云ふことでもなく先見の明ある人と云ふことである。この意味に於て余は寧ろプラクチカルな人よりも、先見の明あるセオリストの方を推奨したいのである。實際、米國が今日要するところのもの



## 五

此の意味に於て若し宗教を窮屈なものに感ずる人があれば、これ大なる誤であつて、宗教はかの遊戲と同じやうなものに過ぎないのである。勿論遊戲と云へばとて之が修得には大なる苦痛がある。只一方に之を補ふ或るものがあるために苦痛を苦痛と考へないのみである。古來これを道樂と呼んでゐるのは非常に面白いことで、現今は墮落した意味に用ひられてゐるが、本來は道を樂しむと云ふ極めて眞面目な高尚な文字である。凡そ物事は道樂でなくてはならぬ。情操に入れば即ち道樂になるので、宗教又實に然りである。宗教が重荷のやうに感ぜらるゝ間は、未だ眞の道樂になつてゐないのである。私の家庭に於いては宗教的の儀式じみたことをしない。祈禱の如きも日本本來の習慣もあるから強ひて行ふ必要はないと考へて居る。併しながら、相互の人格を重んじ、公明正大、愛を以て交ると云ふ點では私の家庭は精神的に宗教的たり得るのである。これ實に家庭にとりて重要な問題である。己の欲するところを行ふて則を越えずと孔子は言つて居らるゝが、宗教を信ずれば此の境地に遊ぶことは左程困難ではない。道樂には窮屈もなければ苦痛もないのである。思ふ所を行つて則を破らないのが宗教の意義あるところで、願くば之を信ずることが眞の道樂になるやうにしたいものである。音樂に親しむやうに宗教に親しみたいものである。

# 商本主義と理想主義

## 一

米國の產業界に於ける今日の急務は、その商工業を人道化することこれである。たゞに米國に於てのみならず、世界萬國何れの國に於ても同一でなければならぬ。商本主義なるべきか、將又、理想主義なるべきか、これ實に米國に於ける刻下の大問題である。

米國は商業中心の共和國である、米國民は商工業を本位として生活しつゝある人民である。それは強ち悪いことでない、併し單に金を儲け富を致すことのみをもつて、人生の凡てである云ふ事となれば、それは中々問題である。今日、米國に於て、女が若し良き妻になつたと云へば金のある

男のところへ嫁いだと云ふことである、男がもし良き婿になつたと云へば、金のある女の夫となつたことである。かくて米國にては、成功すると云ふことは即ち、その一生に於て金を儲けたと云ふことに外ならぬのである。

外國人にして、米國を訪問したるものが、米國をもつて商本主義の國となすは蓋し無理ならぬことと云はねばならぬ。かつて或る獨逸の漫遊者が米國を評してかう云つたことがある。

『この國の人民は、老いたるも、幼きも、男も、女も、悉く皆、富を追ふ爲めに生活しつゝある、彼等もしナイヤガラニヤガラの瀧を見れば、莊大とその美とに打たれて恍惚とするが如きことはなかるべく、寧ろもしこの水流の勢力を利用せば、果して幾許の富を贏かち得べきか』

と云ふことであると。

ピーボーデー

## 三

宗教を信ずと云ふことは、理屈ではなく、此の情操の力が與つて重きをなしてゐる。かの宗教を研究する人が、理屈より信仰に入りても、或る時期に達すれば全く之を捨てゝしまふことがあるのであるが、一度情操より入りたる信仰は容易に取り去ることは出来ない。私は基督教の學校に學んだのであるが、その以前に居た漢學塾に比し、人々の品性は遙かに高尚であり、他人に對してより深切であつた。私は之に動かされて基督教を信ずるに至つたので、最初から神の存在等と云ふ理屈を考へたのではない。野球を見て面白いと思つた如く、基督教を見て宜きものなりと感じたのである。今日自己の情操より基督教を信ずるやうになつた人は、かの幼時に圍碁を學んだ人が、よし中途にこれを抛棄しても尙且つこれに對する興味を覺ゆるを禁じ得ない如く、容易にその信仰は其の人の心から離れて行くものではない。宗教は之を情操の中に會得するに非れば徒らに之を研究するも詮なきことである。

かくて宗教は、主として情操の力に訴へて幼時より説いて行くことが必要である。基督教の家庭にありては極めて幼少の時より此の空氣の中に養育せらるゝが故に、その信仰は牢として動かし難いものである。西洋にありても彼の天主教徒が容易に新教に移らざる如き、又新教徒が容易に天主教に轉ぜざる如きは一に之が爲めである。

佛教は今日日本に於ては漸時衰運に向ひつゝあるのであるが、若し佛教にして古來基督教の如く安息日學校を設けて居たならば、今日の頹勢を來さなかつたであらう。之を有しなかつたと云ふ事實は、佛教を後世に傳ふる上に大なる不幸であつたのである。井上圓了氏は十歳位の時から黑白の争に親んで、遂にその弊害の大なるを知り圍基亡國論をすら著はされた程であるが、然も氏にして尙他人の之を闘はすを見ては、非常な興味を感じると云はれたことがある。宗教も亦實に然りである。幼時に刻まれた信仰の影を容易に拭ひ去ることはできないのである。

元來宗教の中には必ずしも美的ではないが非常に高尚な感情がある。基督教に於て一方に基督の如き一大人格を嘆美し、尊敬し、神の完きが如く完かるべしと言ひ、更に人類全體を兄弟とし、姉妹と見ると云ふ慈愛は實に美なる偉大なる情操である。吾人は斯の如き二の情操を宗教に見ることが出来る。若し斯の如き信念が幼時に植へ付けられて居るものならば、他日成人の後之を捨つると云ふことはあり得べからざることである。併しここに注意を要するのは、信仰はあつても教會に出ぬ人もあれば、他に確固たる信念を有して神の存在を否定する人もあるが、斯の如き人をしも宗教を離れた人とは云へないと云ふことである。又他方には人品と云ふことを忘れて墮落して行く人もあるが、これ即ち理屈より宗教に入りたる人であつて、情操よりしたものは云へない。音樂を好み、演劇に興味を覺ゆることが、常時變ることのないのは、一に情操になつて居るからで、吾人の宗教も情操より入りたるものであらねばならぬのは明らかなことである。かくして會得したる宗教の精神は生涯不變のものである。



のである。よし優劣の議論は成立するとしても好きな人には何處までも好きである。議論によつて之を動かすことはできないのである。私一個人としては運動が好きである。特に野球には大なる興味を感ずる。反-之かの柔道の如きは餘り私の注意を惹かぬ。これを實際に行つてゐる人には面白いに相違ないが、自己の感情の集中したものが好きになるものである以上、斯の如き好惡の別は止むを得ないのである。

又少年時代に一度強く刻み込まれた感情は容易に抜き難いものである。幼時に圍碁、將棋等を學んだ人は、他日之を中止しても、之に對する趣味まで消ゆるものではない。此の感情は子供の時より養はれて居るものであるが故に、傍らにありて、他人の闘技を見るのみにても云ひ知れぬ満足を感じるのである。この満足をしもその人の心より取り去ることは能きないのである。

『キリストの愛より我儕を絶らせんものは誰ぞや、患難なるか、或は困苦か迫害か、飢餓か、裸程か刀劍なるか』(羅馬書八ノ三五)

如何なる困難も如何なる危険も、尙わが基督に對する信仰を妨ぐる力はないと叫んだ此のパウロの言葉は、基督を左程に思はぬ人々から見れば奇異に感ぜらるゝに相違ないが、之を他の言葉で言つて見るならば、かの音楽や芝居に對する嗜好を捨てる人はないのと同じことである。壓制的に肉體を束縛するとき、或は形の上では之を引離すことが能きかも知れないのであるが、その人の心から之を動かすことは能きない。即ちパウロの此の絶叫は決して單なる大言壯語に非ずして、彼の感情が其處まで進んで居つた結果である。

二

更に一例を擧げんに、演劇、講談等に於て、日本人全體に心を動かさるゝものが二つある。一は赤穂四十七士の話だ、他は佐倉宗五郎の事蹟である。今此の兩者を比較するに、より多く世俗の歡迎を受けて居るのは所謂義士の話であるやうに思はれる。併しながら道理の上より見るとさは、前者の事蹟は生命の短かい話で、後者のそれは數百年間生き得る話である。今日より見れば到底四十七士の如き態度にはなり得ないので、一君主の爲めに多數の生命を犠牲にする如きは全く封建制度の產物である。反之一人がその家族を忘れて數千の危急を救つたと云ふ宗五郎の事蹟は、如何にも世界的であつて、百年二百年の後、世界の到る處に於いて人々を動かし得る話である。併しながら之は理屈であつて、事實は却て之が反對を示してゐるのは、吾々の心に働いてゐる感情の力が然らしむるのである。感情は實に奇しくも強き働をなすものである。

かくの如く感情には善惡の二方面があるが、英語にはその善き方のみを表現する言葉に *sentiment* と云ふ文字がある。邦語にはしつくり之に應合する文字はないのであるが、普通之を情操と譯してゐる。今この *sentiment* を辭書に就て見るに、第一高尚なる感情、第二優しく、しとやかな感情、第三、或は樂音に心を洗ひ、繪畫に恍惚として吾を忘れ、或は美しき自然に見入る等の美術的感情、第四知的感情などと云ふ意義がある。要するに感情が洗練せられて情操となるのである。

れて基督教は、彼等の身體に就て訓戒を與ふる必要がなかつたのかも知れぬ。「人はパンのみにて生きる能はず」と云つたのは、やゝもすれば、肉體が精神に勝つ様になるのを戒めたものだ。基督が、人の病氣を癒したことは明かであるけれども、自分で、病氣で苦んだと云ふことは聞かない。ペテロも、ヤコブも、ヨハネも、ボロロも皆身體が剛健であつたらしい。殊にイスラエルのサムソンの強力なることは、傳説に依つて明かである。信仰を説く前に身體の健康を説かねばならぬ。堅實なる信仰生活は、勇健なる心身に宿るものである。これは宗教生活の第一義である。諸君はこの夏に、水に遊び、山に登つて、筋肉を強壯にし、血液の循環を良くし、自然の默示に依つて、各自の靈性を訓練せねばならぬ。而して、自由な、活潑な、自然の生活をなさねばならぬ。晴れたる空にも、嵐の夜にも等しく、自然の妙趣を見出して、天來の光耀を讃頌するものは、溪流の音を聞きて、感激の涙を流す、ワーヅウオースの歌つた女ルセーの如く豊麗潤澤なる生活を送る人である。頑健なる意志も、硬直なる知識も、凡て美はしき情懷を以て純化し、これに圓味のある、柔かな、靈の宿るものとなして行くところに宗教生活の權威がある人工にて、作られたる學校、工場、商店より暫し自己の身心を開放して、大自然の懷に投ぜよ。水色漂渺たる海濱、蓋天の山巒、皆諸君の來るを歡び迎ふるのではないか。空山寂々として道心生ずと云ふ如く、大自然の幽趣は、到る處、諸君を驅つて、その奥妙なる生命に導き、自然の靈精を私語するであらう。

# 宗教生活に於ける情操の力

安部 磯雄

## 一

吾々の日常生活百般のことを考へて見るに、之を支配する主なる力となつて居るものは感情である。一見理屈に動いてゐるやうに思はるゝも、實は感情が先に立つてゐるので、理屈は多く後から附けらるゝものである。自己の周圍の人々の間にも自ら好惡の別が生じて來る如き、一に感情の働である。日常の習慣、一族の家風と云ふも、その多くは感情の支配を受けて居るので、さうなくては自己の感情が満足しないのである。かく云へばとて、良習慣といひ、良感情といひ、共に大に助長すべきもので、吾人が身を修むる上には是非共此の感情といふことに考へ及ばねばならぬことである。

凡ての物事、各々人によつて好惡がある。甲は演劇を好み、乙は角力を好む。これ全く自己の感情によつて斯の如き區別を生ずるので、兩者の優劣には議論はないのである。音樂の如き殊に然りて、其處には理屈を挟むべき何等の餘地もない。かの西洋音樂の豊麗なる和聲と、日本音樂の纖彩なる旋律とは共に吾々の心琴に大なる快き共鳴を與ふるものであるが、然も多くの人々に、より快き、より美しき感じを與ふるものは後者であるやうに思はれると云ふ事實は、理屈によつて然るに非ずして、一に感情によるのである。兩者の優劣が吾々を然らしむるに非ずして、只長き間の習慣が然らしむる



多な俗事を超絶して、全體としての自我の生活を見る必要があるのだ。これは、自然の力に觸るゝことに依つて始めて達せらるゝ。

### 三

ワーズワースの書いたペーター、ベルは實に不人情、不道德、極まる放肆蕩逸なる生活を送つて、英國を涯より涯と放浪せる勞働者であつた。勿論自然の情操の美に對しては寸毫の感動も持つてゐない男であつた。彼の眼には、緑の野邊も單に綠色とのみに映つたに過ぎぬ。ある日、山深く、迷ひ入つて不圖寂しい月影の流るゝ淙々たる川の岸邊に着いた。ところが、川岸の蒼鬱たる樹間に、何か黒い物が動いてゐるので、ペーターは驚いたが尙近寄つて見ると、それは主人に見棄てられた驢馬であつた。それで彼はこの驢馬に乗つて路を失つた山を出た。途中の肅寂な山院も、潺々たる溪流の音も、彼にとつては、何等の意義もなかつたのである。漸く山を離れて、或る町に着いたら、とある家から、小供が走り出て、突然『お父さん』と歡びの聲を舉げた。母も喜んで出て來た。併し驢馬は慥かに我家のものに相違ないが、何ぞ知らん乗り手はわが父にあらずして、見ず知らずの他人であつたので、驚愕と悲痛とて、母と子は地上に倒れ伏した。この有様を見てペーターは始めて、人間の愛情の美はしさに感動して、自然と人間とに横はる、靈しき神秘に驚歎して、これより以後は、生れ變つたやうな溫柔な、情の深い人となつたと云ふ話がある。彼の濁れる情操は、自然の愛の泉に洗ひ淨められたのである。自然より流露する道德程、眞實な崇高なものはない。吾人の性情は遺傳や境遇によつ

て、それ／＼異つて、愛情の深い人もあり冷酷なる人もあるが、等しく自然の洗禮を受くる時には、情操が純潔になつて、天來の美質を受くことが出来る。自然の幽興を鑑識し得るのは實に恵まれた人である。

日本人は自然に接して却つて身體を破壊することが折々ある。それは花に月に物見遊山と出掛けて、酒を飲んだり、その他種々の不自然なる享樂をなすが爲めである。自然と親しむには、心氣を崇高ならしめ、身體を強健ならしむることが肝要である。春夏秋冬自然の變化に應じて、體力の増進を計り、活力に充ちた生活をなすべきである。然るに概して、日本人は、身體は甚だ脆弱である。従つて、偉大なる發明も、著作も出来ないのだ。殊に我が國土を踏む西洋人が凡て、驚くことは、我國の婦人の身體の纖弱なことだ。これからの日本婦人はどうしても、活動主義に向はねばならぬ。家事なり其他色々の事業なりに、全力を注いで、從來の蟄居主義、依頼主義を打破して、勇健なる心身を保育すべき責任を有する。これ神の道と調和せる生活である。心身を強健にして生活し、常に向上の生活に努力するところに、熱烈なる宗教生活がある。凡てのものに、自ら進んで接し、力作して初めて、自我の力の深淺強弱が體現さるゝのであるから、最も明かに自己が表はるゝ時は活動の時である。最近、英國の婦人社會に、擊劍が流行した。彼等は、これに就いて知識の發達も、活動力も凡て肉體的條件に伴ふものであるから、身體を訓練して、始めて大なる知識上の進歩と、雄偉なる日常の生活が得られるのだと云つてゐる。由來西洋人は、原初時代に於ては、移動人種であつた。國から國へと、轉々として、移動して行くのであるから心身共に剛健でなければならなかつたのは、當然のことである。そ

夜中の沈黙に、さては木の葉を縫うて落つる雨の雫に大なる神の力を觀取せずやである。窓を訪ぬる鳥の聲々や、幹露はなる樹木や、鬱蒼たる森林や、緑の野邊の美と力とに感激して、自然の道德に順應して生活して行くところに宗教生活の眞諦が闡明さるゝのである。自然の現象は一として、吾等の情操を豊かにせぬものはない、自然の神來に對して何等の感應を有せざる人には、自然は常に堅く封緘された書物であるのだ。吾人は常に繁忙の裡に生活してゐるものであるから、山に登り海に泛ぶの自由を有せぬのである。而しながら、吾人の生命さへ常に潑瀾としてあらゆるものを感味する鋭敏なものであるならば、炎暑烈しき都會生活に於ても、小庭の一本の草にも、蜘蛛の巢にも、空飛ぶ鳥の翼にも、永劫無限の宇宙的生命の流動を見ることが出来る。多くの人々は雜草を甚く嫌ふ様であるが、地下に縦横に堅實なる根を張つて、蔚然として繁茂する時に、一種の情趣があるものだ。ことに雜草の中より名も知れぬ花をとつて、花瓶に入れて、その生命の呼吸を見る時には、野趣捨て難いものがある。宗教生活の特權は宇宙の動的勢力を認識することである。生命の活動其物に絶對の權威が宿るのである。寂しき日蔭の花に、小さき果實の核に、神秘幽玄なる靈力を肯定しなければならぬ。日夜吾等の目前に啓示さるゝ自然の靈光を敬仰し、その音樂に耳を傾ける時が來たら、吾人の自由の殿堂が建設さるゝのである。これ眞の宗教生活ではないか。この夏休暇に歸省する遊ぶに故郷の風物は、舊態依然として、凡てのものがつまらなく見ゆるならば、其人の生命は、粗硬で、貧弱であるからだ。その人の心さへ情味のある、潤ひのあるものであつたならば、ワーズワースの如く、たよりなき、路傍の一本の花にも、偉大なる宇宙的情操の囁きを聞き得るのだ。わびしき路傍の花にさへ、無限の

感興を喚び起すことの出来る人は、實に奥行のある、趣味の豊富な生活を送るものである。綠蔭薰風の夏の自然は、凡ての人々が自己の濁情を濯ぎて自然の洗禮を受くべき處である。吾人は神韻生動する名畫に接する時には、自づと沒我神遊の境地に誘はるゝのだ。奥妙なる自然の力を直截的に透察する時には、自己の生活は、大自然の悠久なる生活と結合するのである。かくて生の流れは白光を放つ。自然の情操と融合した生活は純一なる生活である。物質のみを追求し、これを以つて、人間生活の最高理想となすところに、人間本然の性情の美に對する侮辱があるのだ。常に物質の力に支配され、その制束を脱することが出來ず、醒醒するところに、禁囚の暗き運命に泣かなければならぬのだ。自然を乾燥した生命のない、機械組織に見るから外的な定虚な生活を送らざるを得ないのだ。

自然は吾人の生命の母である。人家稠密し、風塵萬丈の東京の下町邊に於て人が尙健康を維持し得るのは、天地到る處に充滿してゐる新鮮なる空氣の流動があるからだ。空氣に潜む大生命の氣息が吾々の生命を常に洗ひ清むるのである。それ故、比較的の小なる地域が尙二百萬人の人口を包擁して相應に彼等の健康を支持して行くのだ。大自然は、黒き煤煙も汚穢なる下水も凡て一掃して仕舞ふのだ。降り濺ぐ雨に、花辨に宿る零露に、大靈の呬きを聞くてはないか。大自然の風懷に接しては、何人と雖も、氣宇濶達、身體雄健となるを覺ゆるてあらう。俗世間の毀譽褒貶や中傷や非難等を一笑に附して、大なる向上の生活を歩むことを得るのは、自然の生命に飛び込むことだ。一生一代の人生に、瑣々たる俗事に醒醒し、心勞しなければならぬ理由は何處にあるだらう。今日のことは今日にて足れり、明日のことを思ひわずらふ勿れ」と云つた基督の言葉も要するにこの意味に外ならぬ。我々は種々雜



## 二

日本人は古より自然を愛慕し、鑑賞した國民であつた。併し、自然の本體を深く洞察して、其處より、自己の力の泉を覓むを眞摯なる努力的態度を缺いてゐた。自然の對象も亦實に狹隘にして、月、花、雪とかと云ふものに限られてゐた。且つ自然に對する主觀も極めて類型的であつた。故に自然より受くる感興も月並式なもので、生命の枯涸せる空疎なものとなつた。俳句などは和歌よりは比較的開放的精神を取つて、自然を廣く味到し、自然の妙趣に觸れ、人情の機微を穿つたものもあつたが、それにしても、題材構想は全く舊窩を脱することが出来なかつた。現代の文學も、また自然に對する態度は、偏狹で、人生を深く内省せしむる切實味に乏しいのは、自然に對する我が國在來の遊戲的、享樂的觀念の隋勢に依るのであらう。吾人は靜かに星を仰ぎ、海を眺めて、深く冥想に耽りたらんには、自然の靈光は電流の如く吾々の心裡に、傳はるのである。自然の活動を見る毎に吾人は、自分の生活を顧みるのである。醇精なる自然の聲は、吾人の生命を指導するものである。米國の詩人ローエル曰く、「誠實なる生涯は洵に完美なるものなり、而して、吾人の心を誠實にし、崇高ならしむるものは、單に自然を眺むるのみにても得らるべし」と。自然の核心なり發光する森嚴なる情緒は、誠實の象徴である。古代にありては、いづれの國に於ても、その宗教は自然崇拜であつた。我が國に於ても、この傾向が遺傳的に先祖より傳來して、今尙その痕跡を止めてゐる。太陽崇拜などはその通例である。希臘では、アポロの神は太陽を象徴シレポイズしたものである。この宗教的意識は、自然の崇高幽玄なる偉力

に對して一種の宗教的、敬虔なる情感を抱いたから生起したのである。されど基督教が起つてからは、基督の人格を崇拜する様になつて、太陽や木石の崇拜は衰微するに至つた。輓近の思想界に再び、宗教的形式こそ取らないが、自然を敬愛し、これより生活の根本基調となる生命を求めんとする傾向になつたが、教會本位の技巧的中世紀に於て、アシスのフランセスが日も、月も、星も、凡て、之れわが兄弟なりと叫んだことなどは、寧ろ珍とすべきである。ミルトンもダンテも、自然を歌つたが、所謂自然觀として、その中に自己の思想と情操とを包含したのは、十八世紀になつてからのことである。十九世紀に至つて、英吉利文學は、自然觀を最も濃密に表はしてゐる。希伯來の詩人の自然觀は、聖書の諸處に於て、見出さるゝのであるが、殊に約百記に散見する自然觀は崇嚴を極めたもので、詩篇中の自然を歌へるものと共に世界大學として數へられてゐる。日本人は風流を解する能力を遺傳的に有して居るが、この能力を支配する主觀的指導の貧弱な爲め、自然に對して享樂的遊戲的精神に陷つたことは再言するまでもない。自然を徹底的に味到し、その内部に潜在する雄大なる力を把握して、自己の生命力を崇高にし、生活内容に強烈なる活力を加ふる様なことはなかつた。山や、川や、海や、平原や、樹木に常住不斷の活動を續けてゐる大精神と同化した人は、始めて、自然の眞髓を了解した人である。自然は、剛健なる意志と純潔なる情操との母地である。吾人の常に活動する生活の素因を自然の生命より覓めねばならぬ。自然の雄偉なる生命と融合した生活は永遠に若き力を有するのである。眞の自由なる生活は、自然の偉力と合一した時にのみ達せらるゝものである。ウィッオース曰く、「自然の書を見よ、そは神の興ふる最大なる天啓なればなり」と。夜明の音楽に、眞



## 自然の愛慕

内ヶ崎 作三郎

一

凡そ生活の權威はその活動する所に存する。凡ての行爲或は業務の絶對なる所以は、吾人の全精力を注いで精勵するが故である。眞實なる自我の力は力作を他にしては表はれることはできぬ。生活内容の向上と充實とを求めむが爲めには、必ず切實なる努力に依らねばならぬ。活動は常に潑瀾たる生命の流れそのものである。宗教生活は自我不斷の改造である。動を欲し力を欲する所に宗教生活は存する。宗教生活は靜的な隱遁的な無活動主義にあるのではない。凡てのものを徹底的に味索し、自己の生活を絶えず擴大して行く、努力生活即ち宗教生活である。換言すれば宗教生活とは、眞實なる生活を不斷に創造せんとする人性の本然的努力に他ならぬ。されば眞實の一象徴である自然の生命の裡から、その生活の糧を索むるといふことも宗教生活の一大必要な事でなければならぬ。自然と人間との本然的美と力とを高調するもの之れ宗教生活である。自然の外貌から直にその心髓にまで貫徹して

そこより吾人の生活の根柢となつてゐる力を攫取するのは宗教的情緒である。自然の凡ての局面は皆それ／＼宗教生活には、重大なる意義を有してゐるのである。自然の物質的外形を靈的氣分に還えして、至純の生命を透察し、吾人の情緒はその根柢に於て、自然と同化せねばならぬ。即ち自然の様式と、氣分と、状態と吾人の生活徑路とを同一にせねばならぬ。故に自然の律動、即ち四季の交替は單に肉體に及ぼす外的變化のみではない。自然は凡ての部分に於て靈魂を顯はしてゐるのだ。現實を永遠に、神秘を實際に翻譯して、我々の目前に啓示するものは、自然の常住的創造力である。自然の秘密を闡明し、自然より崇高深邃なる神來を感受して、人格を深刻にし、生命を潑瀾ならしむるは宗教生活の特權である。清高なる山靈の光耀に驚歎し、煙波浩蕩たる大海の精氣に感動するもの誰れか幽遠微妙なる大自然の生命の活動を讚美せざるものがあらう。吾人の常操を潔うし、意力を勇健になすものは自然の氣息である。種々な事業や、若しくは家事の繁累の爲めに暑熱烈しき都門の塵寰より離るゝこと能はざる人と雖も、夏は居ながらにして、親しく自然に接する機會が多い。冬は外界と隔離し、戸を堅く閉ぢ、衣服を厚く纏ふのであるが、夏は凡て開放的に自然の懷に飛び込むのである。風も吹け、羽虫も來たれ、凡て大自然の生命は今吾人の心身を抱擁するのである。吾人の衣服も、蟬の羽の如く、薄衣となつて赤裸々に夏の自然と握手することが出来る。隅田河畔に歩を向けるならば、今日この頃の炎暑には、太陽に瀑されたる赤銅色の子供達が大河の流れを切つてゐるのを見るであらう。彼等は水の子である、自然の兒である。自然の懷に飛び込みて、精神を純潔にし、身體を剛健になすのは是れ宗教的の修養の一である。





KYO-BUN-KWAN



Hastings, J.—Encyclopaedia of Religion and Ethics. (1913) .....	14.00-.32
" "—The Great Text of the Bible Acts Romans. I-VIII...	5.00 .16
" "—The Great Text of the Bible, II Corinthians & Galatians. ....	5.00-.16
" "—The Great Text of the Bible, Ephesians to Colossians, .....	5.00-.16
" "—The Great Text of the Bible, Job to Psalm XXIII. ....	5.00-.16
" "—The Great Text of the Bible, St. John I-XII. ....	5.00-.16
" "—The Great Text of the Bible, St. Luke. ....	5.00-.16
Hermann, E.—Eucken and Bergson : Their Significance for Christian Thought.....	1.25-.08
Hogg, A. G.—Christ's Message of the Kingdom (A Course of Daily Study for Private Students and for Bible Circles). ....	1.00-.08
" "—Hymns of Worship and Service. ....	1.20-.08
Inge, W. R.—Faith and its Psychology. ....	1.25-.08
Jowett, J. H.—The Preacher, His Life & Work (5th Ed.) .....	2.50-.12
Kennedy, H. A. A.—St. Paul and Mystery Religions. ....	3.00-.12
King, H. C.—Rational Living.....	1.00-.08
Matthews, S.—The Gospel and the Modern Man.....	1.00-.08
McGiffert, A. C.—Protestant Thought Before Kant. ....	1.25-.08
Mackintosh, R.—Christianity and Sin. ....	1.25-.08
Mackintosh, H. R.—The Person of Jesus Christ.....	5.25-.12
Moffatt, J.—The Theology of the Gospels.....	1.25-.08
Moore, E. C.—Christian Thought Since Kant. ....	1.25-.08
Orr, J.—Revelation and Inspiration. ....	1.25-.08
Paterson, W. P.—The Rule of Faith (3rd Ed.).....	3.00-.12
Peake, A. S.—The Bible its Origion, its Significance and its Abiding Worth (5th Ed.) .....	3.00-.12
Peake, A. S.—A Critical Introduction to the New Testament.....	1.25-.08
Rashdall, H.—Philosophy and Religion. ....	1.25-.08
Rauschenbusch, W.,—Christianity and the Social Crisis.....	1.00-.08
" "—Christinizing the Social Order. ....	3.00-.08
Souter, A.—The Text and Canon of New Testament. ....	1.25-.08
Simpson, P. C.—The Facts of Life (2nd Ed.) .....	1.75-.12
Stoddart, J. T.—The Old Testament in Life & Literature.....	3.75-.22
27 Authors.—An Exposition of the Bible 1 Set 7 vols. ....	20.00-.72
Wilkes, P.—Missionary Joys in Japan. ....	3.75-.16



東京

教 文 館

銀座

(振替東京一一三五七)

六  
合  
雜  
誌



八

月

號

# 六合雜誌第三十四卷第八號目次

## 評論欄

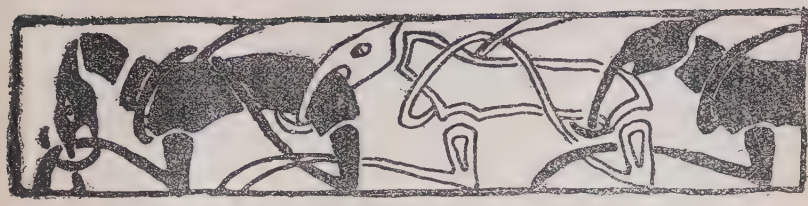
自然の愛慕	内ヶ崎 作三郎	二
宗教生活に於ける情操の力	安部 磯雄	一一
商本主義と理想主義	エフ・ヂイ・ピイボデー	一七
文明史上に於ける基督教徒の一大貢獻	永井柳太郎	二二
將來の基督教	額賀鹿之助	二七
宗教的眞理の特質	原口竹二郎	三四

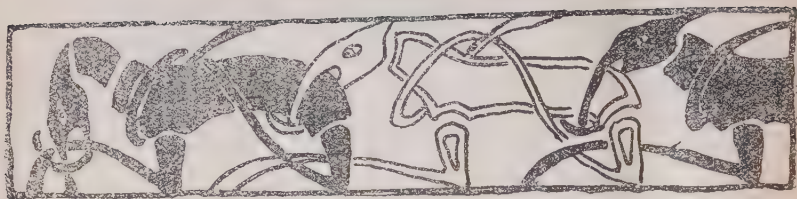
## 文藝欄

At Mount Fuji	岡田 哲藏	四一
西灘より(詩)	佐藤 清	四二
おち ぼ(詩)	山村 暮鳥	四七
山 梔の花(歌)	伊藤 寥々	五〇
信なき日(歌)	水野 秀雄	五〇
命日にうたへる(歌)	中山 直	五一

## △夏の大自然

△熊野の夏波	内ヶ崎 生	△地引の夜	井口 杜村
△栗駒山のみもと	目賀田 生	△埃の街から	太田 眞一





△若葉の海……………雄島濱太郎  
 △寢覺の床……………H N 生  
 ▲夏の日向……………う し ほ  
 ▲北國のまち……………佐藤孤葉  
 ▲錦江の夏……………佐藤敏雄  
 ▲山の寺……………嶺岸忠之助

ベルリンより

愛の伸展(感想)

最近の宗教哲學—トレルチに就いて

社會欄

道德政策上より見たる男女風俗の壞亂

一日二十四時間を如何に暮すべきか

夏の養育院

現代政治問題概論

婦人の王國

諾威に於ける婦人の地位

クララ・エツベル夫人 一七  
 △母の信條△百万圓にも易へ難き子の愛△風紀紊亂せる臺灣△戀病女性の犯罪者△巴里に於ける少年裁判所  
 △簡易生活合資會社△世界婦人の職業△婦人と軍劍△ウエストミンスターと婦人運動者△最近の不祥事△

時評欄

△數人語(觀潮生)

△基督教主義女子教育家を戒む(甲島生) △タゴールの夕(R.T生) △齋藤中佐夫人の死と強者の道德(めかだ) △宗教界亦革新せよ(星島) △宗教と政治(丘民生)

惟一館たより

新刊批評

新刊批評



## 清新なる

## 夏の趣味

## 社交界近

## 時の流行

は旅行の途次、汽車汽船に上るも避暑地の朝夕に於けるも、ライオン煉歯磨と親しむに在り。そも此煉の味や、極めてデリケートにして、實に現代人の氣分と相應するものあるなり。

は來客の接待振に、食後茶菓の後、含嗽のライオン水齒磨を脩むるに在り。此風今や旅館レストオランを風靡して、一般中流家庭の風尚となれり。

鋪 本 磨 齒 シ オ イ ラ

郎 次 富 林 小

屋 古 名 ・ 阪 大 ・ 京 東

# THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 403. August. 1914.

## CONTENTS.

Nature and Religion. ....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
Religious Sentiment. ....	Prof. I. Abe.	11
Commercialism and Idealism. ....	Rev. Dr. F. G. Peabody.	17
A Great Contribution of Christianity to History of Civilization. ....	Prof. R. Nagai.	22
Christianity of the Future.....	Rev. K. Nukaga.	27
Essence of Religious Truth .....	Prof. T. Haraguchi, M. A.	34
<hr/>		
At Mount Fuji.....	Prof. T. Okada.	41
From Nishinada ( <i>poems</i> ). ....	K. Satō.	42
Life and Light ( <i>poems</i> ) .....	B. Yamamura.	47
<i>A Summer Fantasy</i> . ....	R. Itō.	50
<i>Unrest of Disbelief</i> .....	H. Mizuno.	50
<i>On Memorial Day</i> . ....	N. Nakayama.	51
In Praise of the Nature in the Summer. ....		53
.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	53
.....	T. Iguchi.	58
.....	S. Mekada.	64
.....	S. Ōta.	65
.....	H. Ojima.	66
.....	K. Satō.	67
.....	H. Nihei.	68
.....	T. Satō.	70
.....	Ushio.	70
.....	C. Minegishi.	72
From Berlin.....	Rozan.	74
Fragmental Thoughts.....	G. Yoshida.	80
On Prof. Ernst Tröeltsch's Philosophy of Religion.....		
.....	Prof. H. Minami.	89
<hr/>		
Ethics of Sex. ....	T. Ichijō.	95
How Shall We Spend the 24 Hours?.....	Prof. N. Kishimoto.	102
The Poor Asylum in the Summer.....	T. O.	108
A Survey of Political Problems of the Present. ....		
.....	Prof. S. Yoshino.	112
<hr/>		
Woman's Kingdom. ....		117
Topics of To-day.....		129
Unity Hall Reports.....		135
Books of the Month.....		135

Editor Rev. Prof. S. Uchigasaki, Sub-editor G. Yoshida.

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

ウヰリアム、ジエームス原著 文學士 佐藤繁彦 共譯  
 京都帝國大學文學博士 西田幾多郎序 文學士 佐久間 鼎  
 文科大學教授

# 最新刊 宗教的經驗の種々

菊版正 函金入 五圓二 百廿二 頁錢送

何人にも一種の宗教的經驗あり、氣付かざるのみ宗教家は經驗に富むも理論に乏し、學者の宗教論は所謂美學者の美論の如し、獨りよ宗教的經驗の核實に觸れ、之が解釋を完  
 經驗と直覺とを缺く。西田博士の序言亦茲に及ぶ。ジエームスは天才肌の學者、人生の熱愛  
 うせるものジエームスあるのみ。此世界的名著ある故なきにあらず、原著既に二十有余版邦譯新に成る  
 者なりき。

京都帝國大學文學博士 西田幾多郎序 在大文學士 高橋里美譯  
 文科大學教授

# 最新刊 ヘルグソン「物質と記憶」

菊版クロース綴函入 全一冊五百頁 正價金二圓參拾錢 送料十二錢

ヘルグソン哲學は今や遂に西歐の思想界を變動し來つて又我が絶東國民景慕の標的となる。本書はヘルグソン三大名者の隨一として學者の齊しく推賞する所たり。而も氏の眞實が世界の認むる所となりしもの亦實に本書あるがためなり。篤學高橋文學士の心血を注ぎたる完譯新に成る。譯筆嚴正にして而も流暢明快也。内容すべて心理、生理等の正確なる事實に基き縱橫銳利の批判を加へて遠く科學の領域を立越え純粹經驗の新興地より「精神と腦髓」「意識と物質」「記憶と知覺」「質の世界と量の世界」の流るゝ時の世界と動かざる廣がりの世界と自由創造の世界と必然反覆の世界との判別點及び兩々交渉の過程を明かにし觀念論、實在論上の問題に對して最後の哲學的斷案を下せり。斯學專攻の士は勿論苟も近代思想を味はんと欲する者本書に依り始めて徹底的にして而も音樂的趣味に富めるヘルグソン哲學の眞髓に參するを得ん

(明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可)  
 (六合雜誌第三拾七號(大正三年七月一日發行)(每月一回一日發行))

〔本誌定價貳拾錢〕



明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可  
大正三年八月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十四年第八號

# 六合雜誌



八  
月  
號



夏期中の御來宿者を歓迎致候

高等 下宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一良

本郷區追分町三〇  
電話下谷 三三四六乙  
(追分電車終點ヨリ五分間)

●外國諸店へ告ぐ

一、本誌も諸店の熱心なる御勧誘によりて逐號購讀者の増加しつつあるは本社同人一同の深く感謝する處なり海外發展は本誌の最も希望する所なれば今後益々御盡力あらん事を切に奉希上候  
一、雜誌の發送は毎月一日を以て之を爲す若し不着の疑ある時は直ちに御報知願上候  
一、御送金の際は芝園橋郵便局を御指定被下度候

大正三年七月

六合雜誌社

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正三年六月二十日印刷納本  
大正三年七月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價 貳拾錢 稅共

發行兼編輯人 鈴木文治  
印刷人 山本與一郎  
印刷所 英合  
東京市芝園橋西側南町二十七番地  
株式會社 秀英

發行所

東京市芝園  
三田四國町

統一基督教弘道會

〒振替東京一〇〇〇三番

賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋  
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

# 新刊

沙翁傑作集 第六

# エニスの商人

洋装天金頗美本  
寫真版木版密畫  
數葉入全壹冊  
金壹圓卅五錢  
郵稅金八錢

## 坪内逍遙博士譯述

劇を口にする者にして沙翁を説かざるはなく沙翁を説く者にして人肉抵當裁判官の人口に膾炙し小學生徒も之を知らざるを恥辱とす而も其原人ロツク女裁判官の名は全世界を知らざるを恥辱とす而も其原作の完譯は未だあらず少く悲劇的底調なる滑稽趣味なるポエトリーを共に剩さず雅馴明快口創作物を讀む現代語譯は本譯を以て虚實の皮膜間も善く窺ふに足る骨は幾百年前の荒唐なる作中個々の人物は躍々たる肉塊と現じて今尙鮮かに生命を有す沙翁ども作中個々の人物は躍々たる肉塊と現じて今尙鮮かに生命を有す沙翁

既刊	
1	ハムレット
2	ロミオとジュリエット
3	オセロ
4	リヤ王
5	ジュリヤス、シーザー
大好評 何れも重版	
各壹圓卅五錢 郵稅各八錢	

發兌 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部 東京神田裏神保町 富山房 (實全國振替一・二・三番) 振替五〇一番 書肆

見よ光彩陸離たる本誌の新面目

# 修養世界

半年ケ年六分拾六錢  
一年ケ年一分圓廿錢

(七月號要目)

毎月一日發行  
一部共拾一錢

■東洋人に対するオイケン學の意義……………中島德藏

□參禪要談 狂禪老漢 □八大人覺論 和方溫興

▲法律と道德……………顧問 大内青巒

□修養話林 丸山小羊 □妄想の話 吳博士

■興禪護國……………法學博士 寬克彦

□佛教徒社會事業大會の記……………一記者

▲氷陵上の活作略……………主筆 菅原洞禪

□女流雄辯家……………滴露生 □偉人の面影……………海南小史

■自覺の徹底……………文學士 吉田靜致

□從容錄提唱……………大榮珍龍 □陽明學講義……………長谷川超山

▲佛邪二教と神道……………文學博士 井上哲次郎

□日記の中より 香巒女史 □赤穂義士 快心樓主人

■現代女子の身心健康法……………吉田彌生

發行所 東京 市 區 三 〇 七 番 善 坊 町 我 區 布 麻 市 京 東 替 振 東 振 所 行 發



# 新進自由思想家の好著!

著者	書名	定價	郵税	出版	版元
三並良	福音書大綱 (譯)	五〇〇	八	統一基督教弘道會	堂
安部磯雄	現代戰爭の理論(譯) 婦人の政治思想 應用市政論	八五〇 九〇〇 一四〇〇	二 二 三	統一基督教弘道會 北文館 日高有倫堂	館
内ヶ崎作三郎	人生と文藝 近代人の信仰 ロイドデョール 白中黃論記	一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇	二 二 三 三	統一基督教弘道會 前川文策閣 實業之日本 博業文館	社
神田佐一郎	登高自卑	五〇〇	八	統一基督教弘道會	館
向軍治	ハツ當り集	三〇〇	四	警醒社	館
岸本能武太	英語發音の原理	七五〇	八	北文館	館
今岡信一良	新神學(譯)	一〇〇〇	八	同	社
小山東助	久遠の基督教 光を慕ひて	一〇〇〇 三〇〇	八 四	警醒社	館
永井柳太郎	社會問題と殖民問題	一、五〇〇	一六	新興社	館
合著	進歩的宗教	三〇〇	八	統一基督教弘道會	館
加藤一夫	閣に輝く光	八〇〇	八	文明堂	館
淺田泰順	新譯律氏和聲學 (リヒタル)	一、七〇〇	一〇	淺田泰順	館

振替貯金にての御申込みは

東京市芝區三田四國町統一基督教弘道會宛に  
振替東京一〇〇〇三番

毎月一日十五日發行  
定價金三錢稅五厘

勞働問題の解決の先驅者  
友愛會の機關新聞

## 友愛新報

■ 次 目 近 最 ■

- 北海道より 鈴木文治
- 動物にも我師あり 江原素六
- 機械の進歩と適當なる使用法 二木靜齊
- 工場勞働要義 神田孝一
- 職工生活二十年の告白 暗涙生
- 法律問答 柳田國之助
- 自由文壇……會員 鈴木互清
- 聯珠 鈴木一鶯
- 友愛俳句 鈴木一鶯
- 働く乎飢ゆる乎 松本雲舟

發行所

東京市芝區三田四國町二

友愛新報社



# 六合雜誌

四百號  
紀念 五月一日發行

## 評論欄

- 宗教の公同性 ..... ロイド、トマス 内ヶ崎作三郎譯
- 最近三十年間に於ける政治思想の發展 ..... 浮田和氏
- 同 國際關係の發展 ..... 煙山事太郎
- 同 資本の集中と労働の團結 ..... 安部磯雄
- 同 婦人運動の發展 ..... 原口鶴子
- 同 教育思想の發展 ..... 中島半次郎
- 同 日曜學校の發展 ..... 田村直臣
- 同 天文學發展の一側面 ..... 一戸直藏
- 同 日本に於ける印度學の發展 ..... 武田豐四郎
- 同 生物學の發展 ..... 谷津直秀
- 同 神學の發展 ..... 三並良
- 我が國民性より見たる労働問題 ..... 鈴木文治
- 明治以後の文學思潮 ..... 片上伸
- A Parable ..... 岡田哲藏
- 道德と文藝 ..... 富永徳磨
- 新浪漫詩人の人生對藝術觀 ..... 山岸光宣
- 現代思想の倫理問題(オイケン) ..... 今岡信一良譯
- カントよりベルグソンへ ..... 野村隈畔
- 宗教と藝術の渾融 ..... 佐藤清
- 吾人の神觀 ..... シ・ジ・エルベ・ツ

## 文藝欄

- イーリアス發端(詩) ..... 土井晩翠
- いのちのながれ(歌) ..... 野口精子
- 労働の歌(詩) ..... 加藤一夫
- 來しかた(歌) ..... 吉良靜子
- 沈黙せる生命の神祕(感想) ..... 吉田絃二郎
- How I became Interested in Japan... Clay MacCauley
- まだユニテリアンをやめぬか ..... 岸本能武太

△本號定價一冊 金參拾錢 郵税一錢五厘

六合雜誌

見本進呈す 郵券三錢送れ

東京芝區三田

六合雜誌社

# 東亞之光

每 一 月 一 回 發 行  
 七 月 號  
 一 十 冊 二 金 冊 貳 拾 錢 四 郵 稅 一 錢 五 厘 共

◎帝王の學とは何ぞや

◎ゲエテの小説

◎オイケンの精神生活と修養

◎義經入夷傳説考(承前)

◎貝原益軒の倫理説

◎詩人としてのシュリー、プリュードム

文學博士 井上哲次郎

文學士 青木昌吉

三並良

文學士 金田一京助

文學士 深作安文

文學士 秋田柏舟

## 評論

◎道德は藝術なり

◎宗教的經驗を尊重せよ

一道德は主觀の所産、二如何なる意味に於て藝術的なるか、三  
 道德は偉大なる想像力を伴ふ、四道德的自由は藝術的自由なり、  
 五道德は徹底的藝術なり、

◎日本の商業道德について

◎詩句を話すことに就て(シモンズ)

◎新種形成に關する根本問題

◎婦人と科學

◎古神道の神々

◎海外思潮◎漢詩◎和歌◎俳句

文學士 有馬祐政

文學士 半田良平

文學士 阿部文夫

文學士 宮田修

法學博士 寛克彦

發行所

東京 本町 區 駒込  
 五〇

東亞協會

振替 〇 壹  
 口 〇 七  
 座 七  
 東京 七番

## △宗教的經驗の種々

佐藤 繁彦 共譯  
佐久間 鼎 譯  
星文館發行

個人の宗教的經驗を基礎として十數年前ギッフオード講演を試みたものはハーヴァート大學の故ウイリアム・ゼームス教授の *Psychologies of Religious Experiences* である。宗教心理學に於ては新紀元を劃したる名著である。我が國の基督教界及び思想界に於ても多くの愛讀者を有してゐる。此書はとうに翻譯せらるべくして、せられなかつたものである。文學士佐藤繁彦君同佐久間鼎君と協力して此名著の譯を企てられたるはその勞を多きとせざるをえない。ゼームス教授は小説家の筆を以て心理學を書き、弟ヘーリー・ゼームス氏は心理學者の頭を以て小説を書いたといはれる。ウイリアム・ゼームスは名文章家である。故に之を翻譯するは至難のことである。譯者の譯語は随分碎けてゐるが、時々難解の箇所がある。もう一息と望みたい。例へば次のはその一つである。

「吾人が神秘主義の問題に來ると、諸君は若しも自分が充分に説き得るとすると、全身水を浴びた様な深甚な浸漬を受けるであらう、自分の説くところは一寸した水洒きかもしれぬが、若しこれが諸君に影響し得るならば疑惑の冷かな銀光は久しい以前に過ぎ去つた事であらう、その疑惑といふのは凡て斯様な記載が斯様な他の記載を力づける爲の抽象的の話や修辭法に過ぎぬてはないかといふ疑惑をさすのである。」一八ページ。念のために原文と對照する。

When we reach the subject of mysticism, You will undergo so deep an immersion into these exalted States of consciousness as to be wet all over, if I may so express myself; and the Cold shower of doubt with which this little sprinkling may affect you will have long since passed away—doubt, I mean, as to whether all such writing be not mere abstract talk and rhetoric set down pour encourager les autres.

原文も六ヶしくはあるが、譯文が頗る妥當を缺いてゐると思ふ。

しかしこれは極端の例であつて、大體に於て理解し得らるゝ譯文である。左にもう一節を引いて見やう。

「ホイットマンが好んでよくやる事は近所の郊外を徘徊し漫步する事のやうに思はれた草や木や花や日向の並樹や空の變化する有様等を見たり、鳥や、コホロギや木の所に居る蛙やあらゆる種類の自然の音に耳傾けたりする事のやうに見えた、彼が此等のものから普通の人の得る所の出来ぬ快樂を得た事は明かである。」……さて此譯は原著の半分しかない。而して序文にも何のことはりが出てゐぬ。たゞ表裝の背に星が一つあるので第一巻かと思はるゝが、原書二十講中の前半十講を譯出したに過ぎぬ。第二巻が続出するの否かの挨拶もない。これは譯者のためにも書店のためにも遺憾に思ふのである。かゝる宗教心理學の名著は是非完結したいものである。(價二・二〇)

## △英雄の信仰

長沼賢海著・實業之日本社發行

頼朝、泰時、時頼、時宗、正成、尊氏、信玄、元就、謙信、信長、秀吉、義久、清正、正宗等外數十氏の名將政治家の信仰的生活を叙したるものである。日本武士の修養ことにその心靈的修養を知るにはよき手引である。武人が名刹を修したるは殺人犯の罪滅ぼしの意味もあつたであらうが、死生の間に出入したる武人は宗教的信仰を餘儀なくされたは面白いことである。古日本の信仰を顧みるには本書は有益なる参考書である。しかし新時代の人物は新しい否進歩した信仰を必要とするこの意味よりして本書は宜しく「古英雄の信仰」と題すべきであつた。定價一圓は安いものである。



ダ鵞  
ヌン尾  
チン浩  
オ氏  
著譯

# フランチエスカ

四總正郵  
六布價稅  
版極壹內  
約美圓地  
五裝五十  
百箱十二  
頁入錢錢

南歐の詩聖ダンテオが、情人名女優デューゼに之を獻じ、而てひと度彼女一座に依て實演せらるゝや、彼のユーゴーが『エルナニ』以來、比喩なきの大狂歡を喚起せるは、實に絢爛燃ゆるが如く、妖艷盡はさずんば止ざる此劇詩なり。『死の勝利』の中に粉糾として交流背馳せる諸相、即ち欣求と儉安、靈感と淫蕩、狂熱と冷笑、官能の暗示と理實描寫の精緻、心理解剖の深刻と煉熟せる情調とは『フランチエスカ』に至つて、渾然と一の不可思議なる情熱の熔爐に噴騰せられ、赫耀たる靈氣となりて無窮の蒼穹裡なる美の殿堂に冲せるなり。來れ、美を通じて絶對を把握せんとする人は。

ブ矢  
ラ口  
ン達  
ス氏  
著譯

# 十九世紀 文學主潮 移民文學

菊總正送  
版布  
特價料  
約製  
五美金十  
本二六  
百箱  
頁入圓錢

時事新報曰く：該博知識に於ては獨の批評家を凌ぎ、流暢なる文辭に於ては佛の批評家を凌ぎ、大膽なる觀察に於ては瑞典諸威の批評家を凌ぎ、周到なる社會的興味に於ては英の批評家を凌ぎ、此書の原著者ブランドスは實に十九世紀の生める世界的の天才にして其著書頗る多き中にも本書を含む彼が『十九世紀文學主潮』の古今に冠絶する名著たることは今更吾人の贅言を俟たざる所なり。翻譯は飽く迄も忠實を旨とし其一字一句をもゆるかせにせざる所に譯者の苦心を認むべく、明晰徹底明鏡に對するが如き言辭は譯者の才筆によつて遺憾なく描出せられたり……

替一  
振五  
口五  
座七  
東〇  
京番

發行所 新陽堂

東京  
高田  
小川  
石川  
川町



い叫びの蔭に、ともすれば氏自らが、自己の弱い心を叱してゐるやうな焦々しい言葉を聴くやうにも思ふ。それがまた私自身の弱い嘆喟的な心を叱してゐるやうにも思ふ。兎も角今日の思想界に色彩の強い氏の主張は色々な問題を吾々に提供してゐる。私は殊に眞面目な宗教家や思想家達にお薦めするに躊躇しない。(價〇・九〇)

### △ベルグソンと現代思潮

野村農昨著・大同館發行

唯物的な、機械的因果律に束縛せられたる考へ方が、長く續くと人間の精神はどうしても、之に堪へるとが出来なくなる。科學的と云ふ美名の下に長くの間支配した唯物的世界観が倒れるやうになつたのは、それが爲めである。オイケンやベルグソンの哲學が世人から持て囃やされるやうになつたのも、これが爲めである。然しながら世人はオイケンやベルグソンをよく理解して居るであらうか。從來の世界観に満足しないものが、彼等の哲學を知らんとする希望の方が寧ろ多いのではあるまいかと思はれる。此の時に當り野村君の此の著述あるは甚だ時を得たものである。特にベルグソンと時代思潮の關係は我れ等の先づ知るを要すべき問題である「現代哲學の意義」と題せる第一編では實在、價值、生命對哲學の問題が論ぜられて居る。是れ等は現今の哲學の中心問題である。第二編では現代思想とベルグソンの比較論があつて、新實在論、實用主義、新理想主義が論じてある。第三編ではベルグソンの形而上學が論じてあるのて認識の方法、相對的の見方、絕對的の見方、直覺的形而上學、直覺の意義及び價值、直覺の内容など一として須要の問題ならざるはなし。

我れらは此の書を読んで啓發せらるゝ所實に多い。此の點に於ては著者野村君に感謝せざるを得ない。然しながら著者の着眼點の然らしむる所ではあらうが、著者の提供する所は餘り所謂哲學の論法に關する議論にのみ偏してベルグソン哲學の内容の少くなきに失はすまいかと思はれる。ベルグソンは獨特なる自由論を有つて居る。こゝに内部生活がある。藝術との關係もこゝに成立する。意思の自由もこゝから論ぜられる。又人間心靈の活動は如何なるものであるかなど論すべきものは幾等もあると思ふ。そしてベルグソンは「創造的進化」やその他の藝述に於て之を論じて居

ない譯ではない。又これは獨り野村君に云ふ計りではないが、他人の説を引く時にはもう少し出處を明かにしてもらひたい。此の事は甚だ面倒なるのみならず、日本語の書物では脚註が洋書のやうに簡略でないから一層面倒が増す。けれども研究的の書物には是非これが入用だと思ふ。斯う云ふと僕は缺點をのみ擧げるやうであるが長處は固より充分にある。現代思潮からベルグソンを解せんとする著者の目的は充分明瞭に現はされて居るのには認むべきである。現今の思想界に關係せんとするものは、此の書によつて多大の利益を得ることは疑ふべきでない。されば僕は此の書を読書界に薦むるに躊躇するものではない(價一・三五)(三並)

### △移民文學

矢口達譯・新陽堂發行

譯者矢口氏が巻頭の序に言つてゐる通り「移民文學」の著者ブランデスは、時代を超越して未來にまで豫言者的の主張なり、思想なりを抱いてゐる人ではないであらう。しかしながら確かに彼れは過去を見、現在を攫むことに於いて最も巧妙な手腕と透徹な頭とを持つてゐる。少くとも彼れの批評の解剖刀は吾々の過去から現在に至る文藝思潮の因由、奔流の眞髓を攫むて吾々の眼前に明示するだけの力を持つてゐると思はれる。

「移民文學」は十八世紀に於ける歐洲の文學から根ざして、十九世紀前半に於ける歐洲文學の發展史解剖である。十八世紀に於ける帝國主義、オソドックスに對する共和的、浪漫的な自由解放の反抗は一貫して「移民文學」のメイン・カレントをなしてゐる。佛蘭西を中心として、更らに獨逸に英國に十九世紀文學は十八世紀の遺物的文學に對して、凄まじい反抗を試みた、その結果は一千八百四十八年に於いて新しきものの勝利となつた。ここに新文學の轉向點が生れた。移民文學は此の間に於ける錯雜せる文學思潮伸展の批評史である。ブランデスは此の間に於ける文學思潮界の群雄割據の状態を明かにする爲め、六つの異なる文學集團に區別し一個の六幕劇を描くやうな心持ちで筆を執つてゐる。といふのは、第一集團ルッソオからして、第二集團獨逸の半加特力浪漫派等からバイロンの影響時代、及び獨逸青年作家ハイチ、ベエルチ、グーツコーラーグマ、フイエルパツハ等に至る間の文藝史が明かに因果的關係を辿つて描かれてゐるのである。

さて何故に十八、九世紀に於ける文學の主張、換言すれば現代文學を生んだ此の革命時代の文學史を稱してフランデスは「移民文學」と名付けたのであるか。十八世紀に於いて佛蘭西の專制と相容れなかつた多くの新しい智識は、國境を這れて或は獨逸に、或は英國に、或は米國に幸ふじて彼れ等の生命を持続することができたのである。かくして當時最も進歩してゐた多くの佛蘭西人は、國內の亂を避けて多く海外に移民の生活を營みつゝ、その間に新しい現代文學の種子を蒔いたのである。これフランデスが「移民文學」といふ名の下に近代文學史の批評を試みた所以である。シャトーブリアン、ルッソ、ウエルテル、ルネ、オーベルマン、追放、古代藝術に對する新概念、「獨逸論」ブランド等編を重ねることと十五、吾等は具さに近代文學の由つて来る所以のものを知ることができ。而して「批評は一個の創作なり」といふ言葉は、ブランドに於いて、最も克く當て嵌つてゐることを想はずには居れない。蓋し彼れの文は非常に麗しい香を持ち、豊かな情調に動かされてゐるからである。

『ルッソの彫像は今日ゼーヴァ湖の狭い南方の一端に横はる一小島に立つてゐる。……二大山脈の間遙か遠方に諸君はモン・ブランドの眞白い雪を見分けるであらう。黄昏の頃となればかれらの山脈は黒ずんで、モンブランドの雪は蒼靄めた薔薇のやうに輝く。……これブランドのルッソを論ぜる一節である。矢口氏の譯と共に全般を推すことができやう。要するに近代藝術を學ばんとする人の必ず一讀すべき書であると思ふ(價二・〇〇)』

## △フランチェスカ

鶯尾浩譯・新陽堂發行

紫の葡萄が實つて、オレンヂの厚ぼつたい葉がさらさらと南の風に、生温い夢を見る郷土、そこに南歐の詩望ダンスデオが生れた。『フランチェスカ・ダ・リミニ』は一九〇〇年の彼れの作である。『死の勝利』を著して隆々たる盛名を贏ち得たる彼れは、更らに此の『フランチェスカ・ダ・リミニ』に於いて彼れの搖ぎなき地盤を堅めた。吾々は彼れの作を透して、彼れの衝躍眩くばかりなセンジュアルな美の世界を見出すことができる。夢幻的な享樂の世界それは實感の世界から生れた一を透して吾々は永遠の美と戀と生命とにあこがれて行く夢界の征服者ダンスデオの諧律的

な詩の餘韻を聴くことができる。『生命そのものゝ聲もて美が語つてゐる』とシモンズが評した『フランチェスカ』の物語は、此の作の女主人公フランチェスカ姫の父なるボレンタの館の場面から展げられて行く。第一幕に道化者を對手にして侍女達が、美し若武者バオロの噂をしてゐるのは、我が歌舞伎芝居の御殿物や、沙翁劇のそれに似たクラシカルな味がある。フランチェスカの兄オスタジオは僅か百人の歩兵を得んが爲めに、可憐なフランチェスカ姫をバオロの兄ジョヴァンニに與へんことを約する。ジョヴァンニは弟のバオロの美しさに似ぬ敵者の醜男である。オスタジオはバオロとフランチェスカを欺いて、彼の女をジョヴァンニの許に送る。彼の女はバオロこそ自分の夫であると思ひ込んだ男は、バオロにも似附かぬ恐ろしいジョヴァンニであつた。美しき若き二人の戀愛の悲劇はこの時から運命づけられてゐた。二人は何時しか心の世界に於いて相結んでゐた。ジョヴァンニの弟にマラテスチノといふのがあつた。彼れは獨眼の男であつた。彼れは密かに嫂フランチェスカの美に人知れずあこがれてゐた。しかも彼れはバオロが既に彼の女と相愛してゐることを知や、ここに恐ろしい悲劇の種子を蒔いた。彼れはお人良しの兄ジョヴァンニを怒らして終に二人の若き美しき戀人と戀人とを殺した。彼の女がバオロの胸に抱かれつゝジョヴァンニの劍に殺される日の夕暮れであつたらう。彼の女は高擡の窓を開けて大海原の黄昏を眺めた。其の上に一本の小蠟燭が點されてゐる。『明日、蹄の時にはお前達、その白衣の上へ眞黒な、襦を着てごらん。……』といふやうな彼の女の聲が聞えた。その夜であつた、音を立てないやうに馬の蹄を布で包んで我が家に忍び寄つて來たジョヴァンニはバオロと彼の女とを殺した。しかも若き二人の戀は永遠の勝利を唄ひながら去つた。譯は、そののい筆ですらすらと運ばれてゐる。只少し慾を云へば餘りクラシカルな言葉が間々出て來るやうだが全體として此の様な作には太だふさわしい譯し方だと思ふ。吾々は劇詩物の翻譯に對する苦心は殊に常に感ずる所である。譯者の勞を多としなければならぬ。夏季綠蔭下の好讀物としてお薦めする。(價一・五〇)△岡田、今岡、相原、吉田の諸氏また健在。

## 惟一館だより

△六月は各學校の試験があつたせい、月の初めの間は若い學生諸君の顔は少かつたやうに思はれた。それでもまた半ば過ぎてからは、例のやうに見知つた人、見知らぬ人の顔がぞろぞろ殖えて來たやうだつた。

△本月からは原田長治君が専ら内ヶ崎牧師を輔けて、傳道に従事して下さることになった。これから教會も一層眼ざましい發展をすることだらうと思ふ。切に兩氏の健康を祈る。

△本月の重なる説教は、五月三十一日、沈黙の象徵(内ヶ崎氏)、信仰の基礎(草場信義氏)勞働者を敬へ(鈴木文治氏)、市民道德論(内ヶ崎氏)。六月七日、人生轉機の数々(内ヶ崎氏)強者の態度(原田氏)、矛盾の生活(三並氏)。同十四日、國民の復興(内ヶ崎氏)、希望の生活(原田氏)、徹底か抱擁か(相原氏)等であつた。

△五月三十日、記者聯合會主催の市制刷新演説會を開く。隨感隨論 中島氣靜、市政改善の好機(石川半山)、市政改革論(武田芳三郎)、只一言(太田三次郎)、市民ありや(高木正年)廓清の好機(大谷靜夫)、廓清せよ(黒岩周六)、此機を逸すべからず(島田三郎)等の演説があつた。聴衆約六百數十、頗るの盛會であつた。

△六月十四日、日曜日の禮拜後、圖書室に於いて、原田氏の歡迎會を兼ね會員小山、上田諸氏の卒業祝賀會を開いた。

△六月十五日、第二十七回通俗講話會を開く。余が敬愛する人物(武田芳三郎氏)、自ら信ずべし(山路愛山氏)、廣佐官(中野默堂氏)等のお話しがあつた。來會者二百。

## 編輯の窓より

△新緑をたたへてゐる間に、私達は焦げるやうな七月の太陽を讀へなければならぬ時となつた。男性的な太陽の赤熱を讀へながら、私達は新しい生活の爲に、私達の生活の道を押し擴げて行かなければならぬ。

△青葉、光明、飛雲、六月の微風につつまれながら編輯しつつある吾々の雑誌が、草いきれする野原や、涼しい海邊や、または生活の資えかへるやうな巷のなかで愛讀者諸君の手に抱かれんことを想ふ時に、私は一種の淡い宿命を想はせられる。

△本月號には自然のスケッチを載せる筈であつたが、記事の都合で後に譲ることとしました。寄稿家諸君のお想しを願ひます。

△北海道から出て來たといふ六十五歳の老人が一日編輯所を訪ねられた。その老人は吾々の熱心な誌友の一人であつた。吾々は遙かに新緑のかほる北海の曠野を想ひながら、我が愛する老誌友の健康を祈る。

△三並良氏は近々オイケン哲學を出版せらるる筈。

△内ヶ崎氏は或は今月末一寸歸郷せらるゝだらう。

△鈴木文治氏は六月上旬から北海道を漫遊中であつたが、また近々九州地方へ視察に出かけられる筈。

△野村氏の『ベルグソンと現代思潮』が出た。頗る好評である。

△加藤君は鎌倉安養院に室を借りてゐる。餘程鎌倉が気に入つたと見えて、この頃は滅多に東京に顔を出さぬ。

△岡田、今岡、相原、吉田の諸氏また健在。



# 新刊批評

## △自我生活と文學 相馬御風著・新潮社發行

曩に「第一步」を讀んで、人と人の接觸、もつと端的な、もつと眞鍮な、全我的な生活を生きやうとする氏の熱烈な要求に動かされた私達は、本書「自我生活と文學」に於いて、一層氏の具體的な生活に對する主張を聴くことができた。人間生活！これ氏の思想の中心を貫ける生命の言葉である。氏は言ふ、「宗教も藝術も科學も道德も、乃至一切の現實世界は、私にとつてはただ一つの活動とししか見えない。人間生活！私には此の外に何もものもないのである。人間生活とは云ふものゝ、それは自我そのものゝ生活に外ならない。かくの如くして藝術の考察は、私にとつては人生の考察以外何もでもない。人生の考察は自我の自覺以外何もでもない。而して自我生活の自覺は、矢張自我生活そのものの外何もでもない。一切はただこれ自我生活の追求である。しかして氏は更らに氏の生活追求の心熱を以てあらゆる藝術、宗教、道德をも掩ふてゐる。藝術も宗教も、創造的自我生活の或一つの限られたる、假の名に外ならないのである。ここに於いてか氏は、從來の審美學者や一般の藝術家等が把持して來た美學上の約束や特殊の藝術的範圍に囚へられてゐた文學上の舊見を打破し去つて、極力生活の爲めの生活、生活の爲めの藝術を主張する一人である。氏の藝術に對する要求は端的である。簡明である。曰く「藝術も宗教も共に、同じく生活そのものゝ象徴であつて、之れを求め之れを創造することは、同時に生活の追求し生活の創造することである。」氏が引用してゐるツルゲーニエフの『その前夜』のなかの青年思索者ベルセーニエフとシュニビンとの對話に聽かれる「自分を第一のものにしたい」といふ彼れ等の自我に醒めやうとして悶えに悶えてゐた近代人の苦惱が、今やもつと具體的なものとして手近かなところに私達の生活を壓迫してゐる。氏は此の現代人の苦惱に打ち克つて、如何にして吾々の生活のエッセンスとしての藝術なり宗教なり、社會組織なりを求めやうかとする所の人々の

一人である。

さて私達に、私達の生活のエッセンスを與へるやうな宗教なり藝術なりは、今日ありのまゝの私達の生活を背景として生れ出るであらうか。今日我が邦の文藝が殆んど行きつまつて、一所に低徊してゐる所以のものは、要するにその背景たる私達の生活が餘りに貧弱であるからである。ここに於いて氏は生活内容の改造を主張するのである。而てその第一本として氏は吾々が「ロシアの女でも、ノルウェーの女でもない、本當の自分の女房の前に立たなければならぬ、鍛へに鍛へたクリスチヤニチーの歴史でなく驚くべき進歩した科學文明の中にでなく……何もかも混沌とした日本といふ小つぽげな、愚にもつかぬ國の住民、野蠻極まる政治々々の人民として……本當に考へ直して見なくてはならない。」ことを主張する。

爰に於いてか氏の生活の出發點は、「汝自身の實感に生きよ」といふことである。氏の求むる所は天才の藝術でなくして、凡人の藝術である。高尚な生活といふことよりは俗な生活である。「Crisis」の啓示に生きることでなくして「Man of Man」の叫びを繰り返しつつ生きることである。氏が生きんとする生活は Animal of Animal の呟きを呟きつつ生くるものゝ生活である。

抽象的、架空的、夢幻的、靜的、觀照的な生活に對して、氏はどこまでも實感的、科學的、動物的生活を高調する。嘆喟的藝術に對して氏は飽くまでも實感的藝術を欲求してゐる。斯様な心持ちから文藝を求め宗教を追ふてゐる氏がモンナ、ヴァナの夢を果敢なみ、メテリリンクを去つてトルストイに走るのは自然の行き方であると思ふ。

「本當の自分に歸る時」「現代藝術の中心生命」「藝術の生活化」「たゞわが生活のみ」「自我の權威」「實感に生きよ」「生の行進曲」「來るべき生活」「現代の問題」「表現の生活の眞意義」二巻に出てゐる等二十六篇は、退いて自卑するものは弱者である。進んで自らを讃美すべき意義を攫まうとするものは強者である。藝術家の生活そのものを眞に讃美し得るものは、先づ第一に藝術家彼みづからでなければならぬ」といふ氏の思想に一貫せられてゐるやうに思ふ。しかしながら同時に私は、氏の強い燒き付くやうな雄々し



努力奮闘す、是れ吾等の宗教である、信仰である。

太平洋沿岸に於ける基督教は先づその實際的運動に着手すると共に、同時に思想上に於ける飛躍の兆あるは甚だ愉快なることである。

然れども大久保真次郎氏のごとき老練の傳道者を失へるは誠に惜しめても餘りあることである。

田漸く色付かんとして刈手を失ふ。後進者正に奮勵すべき秋である。(甲鳥生)

## 抽象的議論とは何ぞや

近頃評論界に餘程抽象的議論を排するやうな傾向が見えて來たのは、我が思想界の爲めに喜ばしいことであると思ふ。かの單に空想を捏ね上げたやうな議論や、自己の感情に甘へたやうな議論は僕等に何のかかはりもないものである。然しながら僕等は抽象的といふ言葉の意義乃至性質に關しては、餘程慎重に考へて見なければならぬ。或る意味に於いて凡べての評論は抽象的といふことが出来るであらう。ただそれが僕等の實際生活に引き卸して來て眞實感を持つことのできるものである。

るか、否かによつてそれが所謂抽象的議論と否との區別を生ずるのである。

また或人にとつては抽象的、架空的な議論であるかの如く思惟せらるゝものも、論者彼れ自身にとりては眞實感の伴ふたものであるならば、それは彼れにとりては決して所謂抽象的議論ではない。又僕等が論者彼れ自身と同じ程度の理解力なり思索力を持つことが出来るやうになるならば、僕等にとりて彼れの思想は決して架空的なものではない。

昔キリストの宗教は當代の人にとりては、或は抽象的なものと想像せられたかも知れぬ。しかしそれはキリスト彼れ自身及び、今日の僕等にとりては彼れの思想は決して架空的、抽象的なものではない。(よし生)

## 街頭樹と屠牛競技の公開

東京市内に青々とした街頭樹を見るに至つたことは僕等が、常に東京市長に向つて感謝するところである。殊に坂谷市長は近く訓示を出して、市道の並樹に對する市民一般の愛樹心を養成せしめんとする企てを持つてゐるといふことである。僕等は市長の此の計畫に對して双手を舉げて賛するものである。

然るに之と全然反對に最も憎むべき、最も不快なる一事が大正博覽會當局者によりて企てられた。それは博覽會内動物會に於いて企てられたる屠牛競技公開であつた。僕はただ新聞の記事だけ

で讀むのであるから實際に企てられたか何うかは知らぬが、新聞紙の報ずる所では、屠牛競技を某屠牛場を借りて一般の人に觀覽せしむるといふことであつた。もし此の事が實際に行はれたのであつたならば、僕等は動物愛護の精神からしても、かゝる殘忍なる企てに對しては、當局者に問はなければならぬと思ふ（大野生）

## 單科大學と國民教育

新聞紙によりて發表せられたところに依れば單科大學案は公私立大學卒業生に同等の特權を與へ、且つ各學校當局者に學位推薦の權利を與ふるものの如し。これ大に吾人の贊同の意を表するところである。且つその豫備學年を三ヶ年とし、大學年限を三ヶ年以上とした點も差したる不賛成者あるべしと思はれぬ。然しながら豫科に於ける一級學生の定員を四十人以下となしたる如きは、教育法の理想としては最も適當なる考へならんも、今日我が國の私立大學に於ける實際狀態より見て、果して斯くの如き事が實行せらるべきことであらうか。

若し政府が年々數十萬の補助金を私立大學にも與へるといふのであるならば是等の事も實行せらるゝであらう。等しく國民教育の最高機關たる以上、政府自ら年々所要の補助金を私立大學にも下附するの覺悟がなければならぬ。（丘南）

△内ヶ崎氏から新刊批評の原稿が十冊分ばかり來たが、間に合はなかつたので來月號に廻すことにした。

△雜誌『未來』の第二輯が出た。クラシツクとしてのゴッガン及びゴッグ（田中）聖者及藝術家（山宮）ボヘミヤの詩（新人より（西條）ポオルエルレスの詩（新城）英詩（増野）その他川路、柳澤、齋藤、灰野、山田氏等の作がある。

△雜誌『十一人』の創刊號には牧水、紫蘭、鴨四郎、夕暮、信次、修郎、邦夫、歌吉、照夫、經一諸氏の作が載つて居る。

△雜誌『風景』には柳虹、哲哉、犀星、修、花葉、順、牧川、朱春諸氏の作がある。  
以上三誌の健全なる發展を祈る。

人より觀れば大に物足らぬ感があつたのである。然るに最近の消息は吾人を満足せしむるものがある。

第一に祝すべきことは組合、長老、外二派の合同計畫が熟しつゝあることで、若しこれが成功すれば基督教の傳道は一生面を開くであらう。吾人は遙かにこの計畫の遠からずして實現することを希望するものである。

第二に祝すべきことは、目下加州に滞在中なる綱島佳吉氏が、南加州組合教會總會に出席して、熱誠に排日問題に就いて辨じたるため總會をして左の決議案を通過せしめたことである。

一、米國大統領ウエルソン氏へ宛て、南加州組合教會第二十八回例會は目下日米兩國間に起れる國際問題に關し、基督教徒の立場より其圓滿なる解決を計らんことを期す。閣下に於ても基督教の趣旨に基き此問題を解決するに盡力せられんことを希望す。

一、珍田大使にも同様なる趣意にて鄭重なる書信を送ること。

一、日本の組合教會へ向つて、綱島牧師を當總會に派遣せられたる好意を謝し、日米問題の解決のために基督教信者の立場より盡力せられんことを期する旨を通知すること。

綱島氏が使命を耻かしめざりしのみならず、米

國基督教徒を覺醒しつゝあること誠に快心のことである。

最後に同沿岸に於ける宗教思想の方面にも顯著なる進歩が現じつゝあるらしい。近着の「日米」紙上に於ける帆足氏の宗教論のごとき大に注意すべきものである。もし沿岸に於ける布教者諸君がかかる態度をとられたらんには必ずや反響あるべしと思はるゝのである。試みにその最後の數節を抜いて論者に敬意を表する。

宇宙は絶間なく成長しつゝある若し宇宙に成長なくば、それは死物である、活物ではない。宇宙の森羅萬象は絶間なく成長しつゝある人間は其動物的生涯より層一層高尚な精神生活に向つて成長しつゝある。此成長は宇宙の創めより定まつた一定不動の目的或は企畫を實現する如きものではない。そは小兒が玩具の家を取立つる如く始めから建て得るべく決定せるもの、或は既に一度建てられて取崩したものを再び取立つるのではない。吾等の生涯は恰も畫家が一幅の繪を描く如く、最初から、よし一定の計畫あるも、其計畫は筆を下すに従つて其出來た丈けの結果によりて少しづゝ變更され、此變更された計畫を土臺として再び筆を下すが如く、計畫と實地と相互に影響し合ふて、最後に出來上つた畫は最初の計畫とは大に趣きを異にせるものとなる如く、吾等の生涯には宇宙の初頭から一定した理想あるではなく、日々の經驗によつ

て理想を組立て、此理想を標準として生涯の経験を積み、経験に従つて理想が變更する。

されば神なる吾等の理想は宇宙の始め（勿論宇宙に初めはあり得ない、若し始めあらば終りもなくてはならぬ）より一定のものではない。人類から云へば歴史的に、個人から云へば日々、の経験によりて發達すること恰も月影を攫まんとして水邊に近寄れば近寄る程月影が遠のくのと一般、吾等が眞善美の理想の一部を日々、の行動に實現すれば實現する程此理想は一層高尚になり往きて、永久に到達し能ふことは出来ぬであらう。斯くて人類は永遠に限りなき人格完成の努力により、限りなく進化向上するのである。

されば神は宇宙人生の原因（宗教的に云へば造物主）として背後に居給ふのではなく、人生久遠の理想として常に前方に居給ふ。それは人間を離れた特別の實在ではなく、人間の経験に内住し給ふ眞善美の理想である。それは人間一般が最も高尚なる眞善美の標的とする人生の経験其者であつて、人生から離れて考へ得らるゝ觀念でもなく、實在でもない。正義とか愛とか謙遜とか平和とか云ふ如きものは人生の経験を離れて存在するものではない。人生の経験に現はるる凡ての善きもの凡ての美しくきものは即ち神である。それが絶対であるか相對であるか吾等の知る處ではない、又知る必要もない。乍併夫婦の愛、親子の愛が實在である如く、社會の正義、人類の平和が吾等に必要である如く至善至美の神は人生に最も必要な實在である。又吾等の要求である。

斯て今日の宗教は人間の経験以上に超然たる神の宗教ではない。特種の制體（教會）特別の眞理や人格（イエス、釋迦、僧侶）の

みを崇信し、特別の日（日曜日）特種の禮拜を守る宗教ではない。今日の宗教は人間の宗教である、凡ての人は尊く、凡ての物は神聖で、凡ての時間は貴重である。神も松の木も共に神聖である。皇帝も百姓も共に神聖である。日曜日も土曜日も共に神聖である。凡ての日を清くし、凡ての物を大切に取扱ひ、凡ての人を敬愛する、是れが今日の宗教である。

又此世の生涯は來世の準備ではない、夫れ自身に眞實の生涯である。肉感的生涯は夢幻の生涯ではない、虚偽の生涯ではない、眞實の生涯である。吾等は此肉感的社會生活に於て、又社會生活を通じて、一層精神的に個人の人格を鍛練し、個人の人格を琢磨すると共に社會の福祉を増進し、世界同胞的の愛を實行する、是れ今日の宗教である。

古人の信仰は過去の歴史に現はれたものの、或は現はれしと彼等が信ぜしものを絶対の眞理とし、之を尊信し、或は其力によつて救ひに預かるてふ信仰であつたが、今日の信仰は過去にあらずして未來に繋がれて居る。吾等は絶対の眞理の存在を疑ひ、若し有之も其不可解なるを知れど、宇宙人生は時々刻々創造的に進化の過程を辿りて向上しつゝあることを疑はぬ。人生の肉感的生涯は六七十年の短時間に過ぎざるも、此短き生涯の内に自覺した個々人格の精神的存在は永久のものにして休止する處あるべきを思ふ能はず。吾等は外界の權威や理性の權能によりて確保さるゝことなきも、尙人道の美、人生の善、自然の平和、社會の幸福、宇宙の進化を求め、昨日よりも今日、今日よりも翌日は一層清き、美はしき、高尚なる、豊富なる世界同胞的の愛の共同生活を營まんと



の事業は公の事業なる事を深く感ぜしめよ、官吏と政治家も機會ある毎に自分の行動を説明せよ、公けにせよ。

全公開と云ふ空氣の如く健康に適する空氣は何處にもない』とは實に至言である。

ウィルソンは云ふ『黒幕の腐敗に二種類ある、直接の賄賂行使から成る極めて露骨なるものと、一つは意思を腐敗せしむる一層狡猾な一層危険なものとあると』。今は日本の政治家實業家にして其何れかの腐敗に囚はれてゐない者が幾人かある。今や二三犠牲者によりて其露骨なるの一つは漸く革新せんとして居る。然し其等の罪人を責むる多くの者は尙一層危険なる第二の腐敗に感染してはゐないか？

最早委員室の政治は止めよ、妥協の政治は止めよ、黒幕の活動は止めよ、政治家事業家との結託は止めよ、そして總ての手續き、經過を公表して進めよ、絶えず議論して大氣を淨めしめよ。議員や官吏や大規模の事業をして人民監視の前に活動せしめよ。そして法律の制定より總ての特權、保護、私利、秘密なる快樂を切り離たしめよ。然して公けの事に從事する者は自己の經濟的生活を社會に支配せしめよ、常に國民多數の公けの思想の中に、公明正義の流るゝを感受せしめよ。

これ日本の現下最も肝要なる事柄である、これ所謂ウィルソンの『明るくせよ』と叫ぶ聲である、海軍省を明るくせよ、宮内省を明るくせよ、各官衙を明るくせよ、御用商人との關係を明るくせよ、

選舉場裡を明るくせよ、議會の内外を明るくせよ、そして各人の心を明るくせよ、これ現状救済の根本的方法である。(星島)

## 政治運動の徹底

大隈内閣の成立以來、所謂非政友三派の合同或は提携が主張せられて、現今の政界は、二大政黨の對立を必要とする論議が盛んになつた。由來立憲政治は謂はゞ議院政治である、而して議院政治は國民多數の輿論を代表する政黨政治に外ならぬ故に一先づ帝國憲法を承認するものとせば、政黨政治は憲政の發達上必須の事である。而して政黨必要なりとせば果して二大政黨の對立を以て理想とするか或は小黨分立の方を可なりとするかは大いに議論の餘地があらう。英米に於ては二大政黨が發達して統一黨に對して自由黨があり、レバプリカンに對してデモクラットのある事はよく知れ渡つてゐる處である。之に反して大陸の諸國は小黨に分立してゐる。何れにしても政權を得て其政策を實施せんとするには、過半數の頭數を得るに非ざれば蓋し不可能のことである。

現内閣は非政友を標榜したる内閣である。政友會の愚劣なるは殆んど多言を要しない、然れども政友會は下院に於て過半数を占めたる最大多數黨である。故に之と對抗すべき大政黨の組織を主張するは決して不可なる事はないが、元來政黨は主義政見の一致したる者が便宜上結合したる團體であるから、其主義政綱を論ぜずして徒らに三派合同と呼び、二大政黨と號するは甚だ空虚なる事と謂はねばならぬ。斯くして愚劣なる政友會に第二の政友會を以てするは頗る無意味な事であらう。

政治に最も大切なものは其主義政綱の如何である。而して其政綱を忠實に實施すると否とは更に大切な事である。斯の如く政治の實績より之を觀察すれば、政治運動の徹底は要するに其人物の如何に依りて決する。議會は議員の人物により選舉は選舉人物により、内閣は大臣の人物によるのである。制度の改正は容易である、如何に任用例を改正しても其局に當る人物にして改造するに非ずんば到底好結果をあげる事は出来ない。即ち徹底したる政治運動は人物改造の運動でなくてはならぬ。吾人の聲を大にして宗教運動を主張する以所は此處にあるのである。

下院に於ける政友對非政友の爭鬭などは遠からず止めてしまひたいものである。更に重大な問題があるであらう。それは下院對上院の爭鬭でなく、てはならぬ。代議士は國民の選出したるもの故、其善惡は國民の責任に歸するのである。尤も現在の選舉權は餘り狹隘に過ぎて國民全體を代表する

とは云へない、更に――選舉權を擴張すべき事は是非とも必要である。斯くして下院が眞に國民を代表する時は、問題は國民對貴族の爭鬭となるであらう。英國に於ては、自由黨多年の宿案たりし愛蘭自治案も今年にて三度下院を通過したる爲めに、上院否認權に依り遂に法律となつた。斯の如くにして始めて國民の政治となることが出来る我國の一例をみれば、かの未青年者禁酒法案の如き多年下院を通過し、本年の如き貴族院の委員會迄も通過したるに拘らず、總會に於て否決した。是等は甚だ怪しからぬ事ではないか。吾人は鼓を鳴らして上院否認權を主張する者である。斯くして漸く政治運動は徹底的になるであらう(太田)

## 太平洋沿岸に於ける 基督教思想の發展

太平洋の沿岸即ちブリチッシュ・コロンビア、カリフォルニア等に於ける日本人の間には基督教が久しく宣傳せられつゝあるが、何分東部米國に比すれば思想上に於て二三十年後れてゐるので、吾

如く。日本の社會に何處にありても一般に論議せらるゝ事は甚だ少ないではないか、これが現在の腐敗の眞因ではないか。

ウイルソンは曰く『吾人が今日結核病を醫する如く、患者を悉く戸外に生活せしめて、病的政治を醫さねばならぬ。政治が常に暗室の中黒幕の蔭でなされる間は決して病根は絶ゆるものではない』

と然るに日本の政界は如何である。殆ど暗室の中に策され、秘密の中になされて居る。黨派の慣習は辯難、討議する機會を與へず、演壇は少數者の專有に歸せしめ、政黨の領袖と大事業家との間には秘密不淨なる同盟があり、軍人は、名を軍事機密に借りて私利を謀る。今日の海軍の腐敗は即ち此暗室政治の一結果に外ならぬのである。これを治するは一二の頭目犯罪者を罰したりとて到底病根は絶滅するものでない。制度方法を改めて、總てが公けになさるゝと云ふ事にいたらねば駄目である。事務の進行の經過が常に現はれて居なければ駄目である。政治家、官吏の仕事をする所は硝子張りの家でなければならぬと云ふ事である。

ウイルソンは曰く『若し諸君が遠き世界の果てに行つて自分の家の近所の人々が誰れも居ないと思つたら平常の規矩準繩を變へる時が来るに違ひない世に最も危険なのは誰れも知らないと云ふ事である、諸君はどうか常に隣人の間に居て貰いたいさすれば牢獄にいらざと濟むであらふ、これがある人々に取りては唯一の牢獄にはいらぬ道であるかも知れぬ』と

然り吾等をして常に隣人の前に行動せしめよ、海軍の問題にしろ、宮内省の問題にしろ、これを隣人即ち衆目の明かなる前に於て常に行はれて居たならば今日の腐敗は防げたであらう、恐多い事であるが今日の國民の多く宮中の腐敗を信じて居る、少なくとも疑念を持つて居る、其重なる理由は、九重の雲深く宮中の事はさつぱり一般の者に知られないからである、誰れだつて、田中前宮相の邸宅を見て、それが正當の金によりて造られたとは思はないだらふ、果せるかな、渡邊前宮相の突然の辭職となつた、それでも尙臺然辭職とあつて、多くの者は眞相を知る事は出来ないではないか。

ウイルソンは曰く『公開は政治を清淨にする一要素である、曲つた者を取扱ふにはそれが曲つて居るのを人々の見得る場所に持



ち揚げて見せるのが一番よい、さすれば自ら眞直ぐになるか、又見えなくなるであらふ、政治の腐敗を防ぐは、之れを暴露するのが最良の方法である』

と、曲つたものを無理に眞直ぐだと云つて上に置いてるのが今の日本の状態である。今や一部の現實暴露によりて漸く覺醒の曙光が見えて來たのは歡ぶべき現象である。然し此度のは曲り方が餘りに甚だしかつたので、人の目についたので、仕方なく曲れりとしたのであつて未だ眞に直曲を全々公けの前に判斷すると云ふ時期は來て居ないのである。吾等は只單に裁判官にのみ曲直の非判を任かしてはならぬ。

或は論者は、此度の如き海軍問題に、あまり國家の重要な地位にある人を要するは國家の對面上、いけないと云ふ。然したとへ其れが一時國家の損失を來すとも、對面にかゝはるとも、曲は曲、正義のためには、何等顧慮なく進むべきである。且て獨佛戰爭の時、佛の軍人デフューズは陸軍の誤れる判決のものに賣國奴の罪を負ひて流罪に處せられた、然し陸軍は其後、誤りなるを知りし後も、一旦國家として判決を下したる以上、國家の對面、威信に關する故取消しを肯んじなかつた。然るに國民の輿論は終に十年日子を費して漸く無罪と取消さしめた。曲を曲として國家の威信を保つよりも却つて此の如き事は佛國民の頼もしき事を知ら

しむるではない。海軍問題、宮内省の改革、其他どしどし曲は曲として罪人を追はしめよ。是れやがて國家の永遠なる勝利を期する所以である。

ウィルソンは曰フ『如何なる社會も自分等の疑つて見て居る政治機關と、大規模の事業との間に或る種の關係ある事を臆げながら知つて居る。若し其關係が公表せられ、公言せられてそれが如何に利用せられて居るかを知つたならば、其事件の上に眼を注いで、輿論でこれを支配するに些の困難を感じぬに違ひない』と。然るに悲しい哉、日本の大事業家の殆んど總てが皆政治機關と特種の關係を結びて居る事は臆けてはない、殆ど公然の秘密である三井や、川崎造船所や、室蘭製鋼所が既に其事實たるを證明して居るが未だ三つや四つの會社のみではない、たとへ其れが賄賂や其他の金錢關係が直接なにして、必ず何物かの利益交換が秘めて居る、前内閣が、滿鐵や東拓に政友會の重なる人に其椅子を分つたのも其關係を結ぶために違ひない、其他枚ければ限りなからふ、官民の共力は或は必要ならん然し其間の關係を明かにせよ、公けにせよ、曖昧秘密が腐敗の機會を與へるものである、陰蔽が輿論の支配を脱して墮落の基をなすものである、公





## 時評

### ウイルソンに代りて日本の

### 政界を戒むる文

近頃桑港の客舎に日米の平和と同胞の發展のため犠牲となつて斃れたわが恩師服部綾雄氏が、此度の旅中ホワイトハウスにて且てペリンストンに於て、教を受けし現大統領ウイルソン氏と國務卿ブライアン氏に會見せられた。そして餘程彼等の精神の偉大を感じられそして其偉大が基督の魂に起因せるを悟られて以來、旅中非常に聖書に親まれたさうである。歸心矢の如き中に尙在米邦人の精神救済のために努力を惜まれなかつたのは或は其れに動機してゐるならんとは、令息純雄君の語る所であつた。此話を聞いた私は一方最近歸來せら

れた青年會同盟幹事フィシャー氏より、『國務卿ブライアン氏は勿論立派なる大人格者である、然し惜しい哉、彼の政治家としての手腕は零である、彼の外交は失敗に失敗を續け引いては經濟界の不振を來たし今や彼の人氣は米國到る處皆無の有様である』由を聞いたのである。

人氣の皆無なる事は事實であらう、然し政治家としての手腕の零なるか否か少しく私の心に斷定し得なかつたので、これも新歸朝の政治史擔任の吉野大學教授にお尋ねしたのであつた。教授は曰く

『人氣は惡るからんも。そは一時的のもので經濟界に止まらん、何してもブライアンにしる、ウイルソンにしる、正義の爲めには眼前國家の利益を犠牲として顧みず、どしどし所信を斷行する點は實に偉大といはねばならぬ、ブライアンの外交政策は一時米國の損であらう、然し永遠の勝利たる事は疑を容れない』と私は此觀察を信じたのである。

然り税關改革に於ける彼等の態度を見よ巴奈馬運河通航料免除規定に於けるウイルソンの敎書を見よ、又近時米墨問題に對する彼等政策を見よ、實に正義のため一時の國家の利益を犠牲にして願

みず米墨問題に就て一面ウイルソン、ブライアンのなす所如何にも子供らしく。又學究的にして、些の術數なし、謀畧なし、只正義のため極めて單純に所信を斷行する所に却つて彼等の偉大がある、日本の政治家の學ぶべき所がある。

かゝる政治家を有する亞米利加は幸福である。

又かゝる政治家に國家を托して居る、人民も亦偉大なる國民と云はねばならぬ。

私は此尊敬する隣邦大統領ウイルソン氏をして、日本の現下の政略を具せしめんには、實に驚嘆する事と思ふ。暫らく私をしてウイルソン氏に代りて彼の稱ふる新自由主義を通して日本の政界を批評し戒ましめよ。

ウイルソンは曰く『政治は其進行する經路を悉く公にせよ、私人的會議や秘密な妥協を以て行ふべきものでない。鎖せる門戸の陰に動くが如き、機關の支配より脱せなければならぬ。私の機關を廢して公の機關を設けなければならぬ。正しき。政治の方法とは何ぞや、そは一般の論議すると云ふ方法に外ならぬ。公開せられて何人にも隱蔽せらるゝ事なく大空の中に持出して、正直な眼が之れを眺め判斷し得る様にしなければならぬ』と。

現在日本の政界の狀態は如何である。議會に於

ては、本會議よりも委員會の方が盛である。委員會よりも秘かなる待合の會合がより有力なる有様ではないか。多くの議案は少數黑幕の士によりて秘密の間に畫策せられ、多數の者は到底其經路を知る事なく只盲従の狀態ではないか。曰く秘密會、曰く妥協會、政黨に於ては如何である、政友會に二百の代議士あり。然し殆ど討議をなす事なく、少數幹部に絶對服従し、少數幹部は尙少數の人に動かされ終に一人の奪制となる。一體政黨社會に黑幕策士なるものがある。政友會に於ける岡崎邦輔氏の如き、同志會の秋山定輔、阪本金彌氏の如き彼等無論平議員より一等抜いたる人々である。然し彼等の活動は一つも一般の者の知る所たらず。公けの場に討論するでなく。只暗中飛躍のみやつて居るものである。斯かる慣習方法は、立憲的な態度でない。公明正大なる態度でない、腐敗は秘密の場所に蔓延し公の場所を避けるものである。實業世界に於ても、株式會社に株主總會あつて最高の機關となつて居る。然し總會は單に形式に止まりて常に少數者の專斷にきして居る、

## △飽食は健康を得るの

### 最良法

薬の利く利かぬを研究するよりも先づ病氣に罹らぬ方法を研究する事が最も必要となる。而して其方法は是まで研究せられて居る健康法を眞面目に實行するより外に道はない。それは先づ衣食住の手近な處から實行して行くがよい。其實行方法としては飽食暖衣するよりも飽衣飽食して身體を鍛練し、病に對する抵抗力を養ふと云ふとは最も必要となる。即ち所謂世の滋養分に富める食物を攝取して、健康である人よりも飽食なる食物をして而も消化と同化とによつて體內に多量の滋養分を造るの能力ある人は一層健全なる人である。何故食物ばかりは消化し易い美味なるものを食するよりも飽食する方が健康に必要であるかと問を起す人がある。一體食物には人間にとつて必要な部分がザツと五種類ある。第一は消化せられて人間の體内の物質となるべきもの即ち米、野菜、魚肉の類で、第二は其消化を助くる處の作用を爲す部分、假へば大根オロシ、生の野菜、味噌、澤庵等の中に存在する『ヂアスターゼ』と其他の成分

第三は消化し餘つた物を速に排泄するに必要な成分、即ち纖維皮膜其他の所謂不消化成分にて、これは便通をよくするに必要な成分である。第四は食物に味を與へ或は體內に於て新陳代謝を圓滑にせしむべき物質、假へば食鹽砂糖其他食物に味を附する特種のもの並に水、第五は骨等を造るに必要なものの小骨、豆、蒟蒻等に多く含有する物である。此五つの物質は美食の中には往々缺乏して居るものであつて、極めて微細に調理せられたる食物中には甚だ尠いものであるが、所謂飽食の中には此等の部分を残りなく含著して居るものである。

### △在外邦人の發展

目下海外各地に在留する本邦人の總數は三十三萬二千六百六十二人にして、前年に比し二萬八千六百廿九人、大正元年十二月末に比し凡五萬人の増加である。之を各國別にすれば北米(布哇を含む)の十六萬五千八百八十八人を第一とし、支那の十一萬二千五百六十六人に次ぐといふことである。このうちに幾割の婦人を含むべきかは未詳なれども、婦人もこの大勢に乗じて海外に職業を求め、もしくは新家

庭を造ることを忘れてはならぬ。

### △新文相の女子教育觀

五月二十日の地方長官會議にて一木文部大臣は教育に關する訓示を試みたるが女子教育に就いては次の如く言つた。女子教育の緊要なる所以は固より一にして足らずと雖も、賢妻良母の素を養ひ國家の要素たる家庭の生活をして健全ならしむるが如き、其の最も重要な意義の存する所なるが故に、女子の教育は一般に多智多能ならんを求むるよりは、寧ろ女子としての人格を涵養するを重しとせざるべからず。實科高等女學校設置に對しては慎重調査を重ね、以て學校濫設の弊に陷ることなく、既に設置したる學校に對しては、宜しく其の内容を充實し、教育の實績を擧げしめんことを期せらるべし。」

### △女醫と結婚

ロンドン市會はこの管轄の下にある女醫は結婚すれば廢業せねばならぬことを決議したので、色々の議論が起つた。デーリー・メールはこれ極めて常識的議論であると賛成しデーリー・ニュース紙上にてミス・ブラツクと云



ふ婦人は結婚したる女醫こそ女醫として最も適當なるものである、女醫よりこの特權を奪ふは圓熟したる技倆を施す機會を奪ふものであると反論した。日本にも何時かは斯る議論が起るであらうから、參考のためこれを掲げて置く。

### △英國に於ける酒場の

#### 給仕女

英國にて近頃酒場の給仕女の境遇に同情を寄する人々があつて輿論を起し、婦人實業會議が委員を擧げて研究せしめた。その報告によると、目下英國にてこの仕事に従事する婦人は二万二千人でその半數は十八才乃至二十五才である。三十才になれば自然と退職する。平均賃銀は一週十志乃至十二志である。衣類は割合に贅澤である。労働時間は一日十四時間、日曜日は幾分か短かい。一月に唯一度日曜を丸休みすることが出来る。肉體も精神も多分勞するは止むを得ない。色々な誘惑もある。而して前途に何等の希望と光明のない。職業である。良い酒場は皆無で、皆悪いもの盡くしてある。酒場を全滅させることは不可能である。よつて此處をなるとけ休息慰安の

場所としたいのは社會改良家の希望である。日本の宿屋の女中や料理の給仕女等の境遇を研究するも興味あり、且つ有益なることであらう。

### △婦人が投票する時は

四月上旬米國シカゴ市で市會議員の總選舉が行はれたのは最も注目すべきことであつた。北米合衆國にて市政の參與權を婦人に與へたるは同市を第一とするからである。選舉者名簿に登録せられたる婦人の七割は投票した。登録人名は十六萬四千人である。更に注意すべきは市會議員の婦人候補者は婦人投票の一部分を得たに過ぎず、皆落選したことである。又シカゴ市外にて禁酒法案が問題となりたる地方で同案に反對する六十%の男子投票者に對して七十%の婦人投票者は之に賛成し、約一千軒の酒場は何等の代償なくして閉店を命ぜられた。婦人の勢力の増大は誠に氣持のよいことである。

### △婦人の刑事檢察官

英國リヴァプール市にては多年間市監獄の女看守長を勸めたるヒュース夫人を拔擢して

同市刑事警察の檢察官に任命して婦人及び兒童の犯罪の證據を取り調べしむることになつた。同夫人は三十五才の寡婦である。シカゴ市では以前より婦人巡査を採用してゐる。婦人巡査のない時は若い婦人犯罪者は時としては男子巡査に千哩も汽車で護送されなければならなかつたのである。我國に於ても婦人看守と巡査と探偵を要する時が近づきつゝある

### △英國に婦人辯護士現は

#### れんとす

米國にては以前より婦人辯護士がある。英國でも是非この職業を婦人に開きたいといふ要求が生じて、婦人代表者が大法官ハルデン卿と面會した。ハルデン卿は大に婦人側に同情を寄せた。多分英國の辯護士組合が異議を申し立てずば早晚事實となつて現はれよう。

### △婦人教會の設立▽

英國チエッシャーのウォーラッセーに二百人程の婦人丈の教會が設立された。從來の教會は餘りに男子の管理の下に在りて婦人を無視した傾向があるから反抗したのである。牧師もベーカーといふ婦人説教者であるう。



## △虚榮心に富む海軍士官の

### 夫人

海軍收賄問題の裏面には海軍士官夫人連の虚榮が幾分か手傳つてゐるは事實である。ことに鎮守府所在地では夫人會ありて毎月數回會合して修養をするといふ表面の理由は立派であるが、内實は虚榮の展覽會のやうなものである。それかあらぬか舞鶴鎮守府にては斷然夫人會を中止したといふことである。美しい衣物を着せらるればそれで満足して夫の道樂などを苦にせぬ夫人達割合に此社會に多いとの世評、まことに氣の毒な人々である。

## △五十萬人の女工

我が國に於ける女工の數は年々二割の比例にて増加する。婦人問題は益々重大なるものとなりつゝあるのである。最近の統計によれば五名以上を有する工場等の女工の數は左のごとである。

十二歳未満	四、六八九、
同以上十四歳未満	三二、二五三、
同以上十六歳未満	七七、七五二、

同以上二十歳未満	一七一、三二五、
二十歳以上	二〇七、五七九、
合計	四九三、四九八、

此外に勞働人夫が約一萬あるから都合五十萬となる。職業の種類は生絲が百中三十六、煙草が四にて、その他製紙、モスリン、陶器、印刷、セメント、製紙、菓子、燐寸等である。

## △英國上院に於ける婦人參政權案

五月中旬英國上院は百萬人の婦人に參政權を與へんとするセルボルン卿提出の議案を討議して否決した。されどもカンタベリー大監督、ロンドン及びオックスフォードの兩監督とが賛成者であつたことは注意すべきことである。コートネー卿曰く婦人參政運動は最早抵抗すべからざる氣運に達したと。リットン卿曰く、英國にては獨身婦人の五割、寡婦の三割と既婚婦人の一割は生活のために勞働してゐる、而し法律は是等の婦人を支配し、若くは束縛してゐる、よつて參政權を與ふるは當然の事ではないかと。ホルデン卿は今や婦人の協力を得るに非れば解釋すべからざる多くの社會問題生じつゝあり、幼兒死亡や出産

率等皆然らざるはなく、何れも帝國的意義を有す。參政權運動者の戰闘的政策は好ましからざるも早晚投票權は與へなければならぬ。

濠洲及びニューゼーランドは先例を示してゐるではないかと。オックスフォードの監督は婦人運動の先覺者程投票者に適任なるものなしと論じた。されど議案は破れた。別項の大騷擾はこれに激したのではなかつたらうか。

## △婦人參政運動大騷擾

去る五月二十一日の午後、英國婦人參政權運動者等がバッキンガム宮殿外に演出した騷擾は驚くべき事件であつた。當日の婦人參政權運動者の意思は、直接に皇帝に拜謁選舉權獲得を請願せんが爲めであつた。此日バンカースト夫人は約二百名の參政權運動者を率ゐて午後四時前グロスヴェナーガーズから進撃した。當日宮殿の内外に配備せられたる巡查は約一千名であつた。バンカースト夫人は黒の服裝に、白い羽根をつけた黒い帽子を被り、隊の先頭の中央に立ち、蒼靄めた顔に決心の色を示して、午後四時先づ警戒線に突撃した。直ちに争闘が起つた。婦人政客等は豫て用意した體操用の棍棒を振り、或は錫の薄

葉又は卵の中に用意した眼つぶしを投げ、騎馬巡査を馬から引きおろし出来る限りの奮闘を續けた。勿論巡査も之に應じ、拳を揮ひ、棍棒を振つて撃退に努めた。ピンは飛び、衣服は裂け、鈕はちぎれて、警戒線附近は驚くべき大混亂の狀態を呈した。バンカースト夫を中心とする數名の婦人は遂に第一の警戒線を突破し多數の警官と争ひつゝ第二線に向つて突進した。併し此の警戒線より二三十碼の點に於て、夫人は巨人漢巡査の爲に輕々と抱き上られて了た。夫人を護衛してゐた左右の婦人運動者は棍棒を揮つて之を妨けたが、此等の婦人も遂に捕縛せらるるに至つた。バンカースト夫人は抱あげられた時『宮殿の前で捕縛されたのだ！皇帝にさう言へ！』と絶叫した。此の騷擾に於て捕縛せられた者は、夫人の外に五十六名あつた。其中に三名の男子があつた。婦人政客は力が盡きて敗れた。或者は負傷し、或者は昏倒し、捕縛せられた者は髪は亂れ、衣服は裂け、甚だしく疲勞してゐた。バンカースト夫人は直ちに其所からタクシーに乗せられ、撤水車に道を開かせて警察署に連れて行かれた。他の五十六名は翌朝パウストリートの違警罪裁判所へ護送された。

英國の婦人運動はあまりに過激となつて、或は名畫の毀損となり、家屋の放火となり、何となり、かとなりて一般國民に惡まるゝに至つて、ウツカリすると私刑に處せられないとも限らぬといふ電報が届いた程である。されども婦人のこの犠牲的態度には感服せざるをえない。日本の新らしい婦人などはまだ御話しにならない。共同生活位で満足してゐるとは局外者たる我々も泣きたくなる位だ。この記事はかゝる婦人達に三誦して貰ひたい。

### △壯烈なる女丈夫

六月中旬長崎縣下に暴風があつて溺死せる漁夫百餘名に達した。さて救助船が島原沖に向つた時、一人の女が片手に男の死骸二つを抱へ傳馬船を漕ぎながら救ひを求めてゐるのに出會つた。此婦人は五島の小濱村武藤けいといひ、二十五歳の年盛りで、夫及び他の一名と石炭を和船に積んで航行中、船が轉覆したので傳馬船に乗り移つたが、男二人は疲勞の極、海に墜ちて死亡したのを收容して、風浪と戦ひつゝあつたのであつた。九州の女はい。否日本の女性實にその人ありと誇り

てよい。

### △佛蘭西の妻君氣質

夫たる男子が妻に對する雅量を要求すると同時に、妻たる婦人には、夫の内助者たる實力の養成の心掛けを要求せざるを得ぬ。私何人にも知りませんの『で、妻たる道が盡せる時代は既に過ぎ去つてゐる。聞くところによると、佛蘭西には七百七十二萬八千八百五十四人の既婚婦人があつて、其の中二百六十八萬五千七百九十六人の婦人は妻たり母たると同時に、何か他に職業を持つて居るとの事である。それでゐてその夫たる人が何等の不便不都合を感じざるのみならず、廣く社會的に見る場合には妻たる人々までが斯く職業にも勉強して居るといふことは普ねく佛蘭西の男子に敵對の心を起さしめて大に男子を刺戟してゐるといふことである。のみならず佛蘭西の妻君は政治上にも非常に勢力があつて、農民の妻でさへも自分の夫に何々を投票せよなどとすゝめてゐるといふことである。日本の妻君も早くこのやうに夫の内助者となつて欲しい。

間には相互一致する點多く、從つて一の作業の成立する要件及其徑路を精密に洞察すれば餘他の作業に對しても亦其肝要の點を明にする事が出来る。本書の著者が自己の實驗的研究を乗算なる特殊の心的作業に限り、之に由り諸方面の材料を獲取し問題を解決せんとしたるは、乗算を以て身體的影響を受ける事比較的に尠く、之を心的作業の代表的のものと認めたるがためにして、著者が終始よく科學的實驗法を嚴守し、且其結果を量的に整理し、科學的研究者の態度を十全に維持し得たるは一に此資料の撰擇制限宜しきを得たるに由ると謂ふべく、此點に於て著者は此種研究に従事する者の好模範となるのである。

我國の心理學界及教育學界には著書頗る多しと雖も、本書の如く研究の周密、材料の豊富にして而かも眞面目なるものは比較的稀である。本書は學術上及實際上に有力なる貢獻をなしたる點に於て著しく吾人の注意を惹くと雖も、更に本書が吾人の感興を促して止まざるは、斯の如き學術上の好著作が婦人の手により發表されたる事である。婦人が歐米の學界に認承せらるゝ學術的著作をなした事は我國に於ては其例に乏しい。本書の著者原

口鶴子君が妙齡の一女學生として教室の一隅に、余が實驗心理學の講義を聴きたるは明治三十七八年の頃であつて。講義時間の終る時君は考深き多數の質問を提出するを例とした、殊に女子は學術上研究の能力を有するやの問題に就き君は日頃煩悶をして居つた。其後幾何もなく君は有名なるコロンビヤ大學に留學する事となり、少壯有爲の令名あるソインダイク教授の指導を受けて研究に従事し、ウッドウオオース及びキャテル兩教授の如き卓拔なる心理學者の教に親炙し、現代の心理學研究の精神を不識の裏に體得するに至つた。此間君は英、獨、佛語學の收得に尠からず力を致し、遂に外國文を以て其年來の研究を發表しコロンビヤ大學より學術研究に對し授與せらるゝ最高の學位を受領した。我國の女性にして此學位を得た者原口鶴子女史を以て嚆矢とする。

斯くの如く女史は其妙齡時代に胸裏に藏して居つた疑問を堅忍不拔の研究的實生活により遂に解決した。本書并に曩に米國に於て發刊したる英文の著書は共に我國女流の著述中の一新記録と認めねばならぬ。余は斯の如き價值あり興味ある著書を世に推奨するを大に

る喜とすると共に此書の發刊に對し多大の便宜を與へたる北文館主の好意を深く謝するものである。』

### △婦人消防隊の新設

日本海中の孤島飛島に女の消防組があるとかいふことであるが、此度山形縣西田川郡の念珠關村なる小岩川といふ所にも、青年女子の消防隊が設けられた。この村の男子は大抵出拂つて海上生活をし夜々疲勞甚しく熟睡するので、警鐘の音にたゞき起すも氣の毒たとして、この大英斷をやつたのである。誠に奥床しい事である。

### △子の多い婦人

大阪こども研究會の會員といへば何れも劣らぬ子福者許りだが、五人、六人の子持はマダ／＼小子福者の方で、七人、九人、十人、十二人といふやうな大子福者も随分澤山に擱ふて居る。所が其大子持ちの母アさんは必ず若い時に結婚した婦人に限るやうな傾向がある若いも／＼二十歳以前に結婚した婦人が非常に多い、手短かいへば早婚夫人が大子持になり易い資格があるかのやうにも歸納せられ



る。若い時に結婚した人に、子の多いのは當然のことだといふやうにも感ぜられるが、實は若い時に結婚した人が或年の間に産む子の數より、年の老つてから結婚した人が同じ年の間に産む兒の數の方がドウも少い。子福夫人中の多數の夫人の結婚年齢は大概二十歳以前で二十一歳二十二歳といふのが僅々一人二人に過ぎない、殊に注意を惹いたのは十六七八が多いといふことで、「十臺のお嫁さんには小豆の實が生るやうに兒が出来る」といふ昔からの諺も何だか意義ある言葉のやうに思はれる。従つて「出産」といふことをのみ本位にして考へるなら十七八で結婚さるのが自然の命令に合致したものだとも言ひ得る。勿論多いなかには少數の異例もあり、女子二十七八にして結婚して七人の子があるといふ例もあるがそれは非常に少いやうだ、そこで其大子持の夫婦の年の違ひを見渡すと十五六歳も差のあるものあれば、六七歳位のもあり、尙夫よりも少いものがある。けれども多く違ふて居る方が澤山にあるやうだ。今五人以上の子を持つた五十六組の夫婦の年齢の差を並べて見ると、

差十七(一人)、十四(三人)、十三(三人)、十

二(三人)、十一(四人)、十(五人)、九(二人)、八(六人)、七(九人)、六(七人)、五(四人)、四(二人)、三(三人)、二(一人)、一(〇)、▲同歳(二人)▲女一歳上(一人)

之を見ると多少の異例はあるとして大凡七八ツも違つて居るのが一番多い。のみならず多く違つて居る方に成績のよいのが多いやうにある。是等は新しい眼を以て考慮すべき點であらう。そしてモウツ面白い事は、之も少數の異例は別として、概して大子持には女の子が多くなつて居ることと玆にも何等かの神意が現はれて居るのではなからうか。以上は六月十五日の大阪毎日新聞の記事である。興味あるから採録したのである。しかし子が多いも望ましいが質も更に望ましい。凡庸の子女十名より非凡なる子女五名の方がいいではあるまいか。夫婦二人で四人の子があれば決して少ない方でない。高等教育を受くれば女子はどうしても二十二才になる。それで結婚には決して後れない。大阪こども研究會員が量に注意するのみならず、質を調査して報告せらるゝならば一層興味あることであらう。

## △六名の新女醫

過般執行されたる醫術開業實地試験に合格せる婦人は近藤りゑ子、前田みね子、小山りん子、佐々木よし子、齋藤輝子、岡本はつ子の六氏である。いづれも牛込區市ヶ谷河田町東京女子醫學専門學校の出身である。吾等は是等の人々の前途の祝福を祈るものである。

## △救世軍の新任女士官

此度六ヶ年の任期を以てロンドンの救世軍本部より我國に派遣せられたる同軍の女士官はアンダソン少將、フリクルンド大尉、ニーマン大尉、ハンセン中尉の四人である。ハンセン中尉はデンマルク人、他の三氏はスキーデン人であるとの事。此春の克己週間の毎夜一人の氣高い外國婦人士官が默然として帝國ホテルの應接室に控へてゐて、心ある人々の寄與を促してゐたことを記者は思ひ出すのである。日本の婦人のためにかゝる献身的活動婦人が外國より來る時、吾國の婦人連も覺醒しなければならぬ。



ことを論及せるに至り初めて肯定が出来る。其の後多くの學者が自殺者には病人が多いことを數字の上から確證してゐる。私の實驗調査によると四百四十三名の男(内四十六名は不明)の内三百五十五名は病者、女百五十二名(内三十七名不明)の内五十一名は病者にて、八十八プロセントの病弱者を自殺者中に見出した。さてその病名の重なるものを擧ぐれば。

	(男)	(女)
慢性軟腦膜炎	30 %	29 %
慢性アルコール中毒	30 %	
慢性内腦炎	13 %	16 %
心筋脂肪變性	12 %	11 %
淋巴胸線體質	12 %	16 %
月經		25 %
妊娠		23 %

次にそれらの自殺の道具を見るに次のやうである。

	(男)	(女)
溺死	四名	三名
銃死	一名	十七名
ASヒサン	一名	三名

ASヒサン……………一名  
の割合である。こゝに面白いのは女に中毒死の多いことであるが、これは私生兒を脱胎せんとして偶然中毒して死ぬのである。而して女は月經時及妊娠中に於て自殺の多くを出すのはその時期に於て女子は心身が最も多く病的に傾くものであるが故である。

これを要するに古來自殺の大素因なる如く考へられてゐた外因なるものは、極めて取るに足らぬものであるに反し、從來忘れられてゐた内因こそは自殺の最大動機なることが、事實上明確となつたのである。即ち自殺のハンドリングをベスチンメンするものは内に大にして外に少である。

此に於て自殺なるものの性質は闡明された。この救済の方法と實行とは他の人に譲るのである。兎も角近代醫學の進歩は種々なる方面よりして自殺が内部的な原因に歸することの多きを實證し得た。社會問題の一好材料であると思ふ。

# 婦人の王國

## △日本婦人の近業

哲學博士原口夫人の近著「心的作業及び疲勞の研究」

本誌々友原口竹次郎氏の夫人鶴子氏は日本女子大學を卒業し、更に米國コロンビア大學に於て心理學を専攻して「メンタル・ファティグ」といふ論文によつて哲學博士の學位を得られた。日本婦人によりて得られた最初の學位であらうか。此程同夫人は本書を邦譯し、更に増補して「心的作業及び疲勞の研究」と題した。約五百ページの大冊で、北文館より發行せらるゝのである。婦人の心理學の乏しいことは斯界の缺點であつた。原口夫人のこの勞作は日本婦人の頭腦の卓越なるを證明するものである。吾人は次號に於て之を詳評する機會ある

べきが、とりあへず、文學博士松本亦太郎氏の序文全體を掲げて、原口夫人の努力に對して多大の敬意を表するのである。

『從來の心理學は心の形態學的分解に主力を注ぎ、其活動に關する研究を閑却し、殊に心の概念的特徴を重視するの餘其具體的作用は措て顧みず、從つて心理學上の研究が吾人の日常の經驗と益遠ざかるの趣があつた。然るに最近に於て心理學は生理學其他の自然科學の研究法に影響され、心の條件的變化と時間的經過とを考察し、特殊的に心の躍動する狀況を攻究する事を試むるに至つた。近時諸學者の熱中する心的作業の研究の如きは此方面に屬する重要な研究である。心的作業とは一定の目的を達せんとして活動する複雑なる精神的過程なれど、多くの場合に於ては之れに生理的過程が參加して居る故に、心的作業は實は心身兩作用を具有する意志動作と解する事が出来る。吾人の日常の行動は大抵斯る意志動作の系列より成立するが故に、心的作業の攻究は單に心理學の新生面の研究として重要なのみならず、實際上の諸問題を解決するに缺く可らざる研究である。

心的作業の研究は斯の如く重要なに拘は

らず、我國に於ては之に關する著書極めて尠く、從つて此方面の知識が學界及教育界に普及して居らない。此時に方り本書の發刊に遭逢するを得たるは著者に對して吾人の深く感謝する所である。心的作業の徑路を規定する要素は種々なれど、學問上及實際上より見て最も重要なものは疲勞と練習との兩作用である。

本書は作業と疲勞との關係を中心問題として其研學討究の歩武を進め、先づ心的疲勞に關する海外諸學者の研究を網羅敘述し、次に著者自身の實驗の結果に移り、疲勞が心的作業に如何なる影響を及ぼすかを諸方面より詳説し、兼て疲勞が生理上に及ぼす影響、疲勞の感、個々人の疲勞性の相違等を調査した。殊に注意すべきは著者が自身の研究の結果を根據とし、諸學者の考説を洞察し、或は之を訂正し、或は之を増補し、周到なる用意を以て心的疲勞及作業の真相を闡明せんとして、苦心慘憺たるの狀を示して居る事である。心的作業は具體的の形を以てすれば、種々に分別するを得べく、是等に對する諸學者の研究は頗る多岐に涉るの觀あれど、要するに作業は何れも一種の意志動作なるが故に、諸作業

ふ。

これを泰西諸國に付て見るに本邦よりも餘程發達せる程度にあるやうである。米國イリノイス州に於ては私生兒の父は生れるから滿五歳迄の間に總計五百五十弗以上をその母に送るべき義務を課してある。マサチュセツ州、オハイオ州、ニューヨーク市等、皆大同小異の法律がある。コネチカット州に於ては最もよく私生兒の母を保護してゐる。その法律は、私生兒の父は私生兒妊娠中よりこれを保護すべき義務ありとしてある。獨逸にては、私生兒の父は母の地位に應じて私生兒十六歳に達するまで後見しなくてはならぬ。もしその時私生兒が自活の道を得ざる時は更に扶育の義務がある、又私生兒の父不明なる時は妊娠させ得べき期間内、女と關係せる男はその私生兒の父となるべきものと規定してある。要言するに、私生兒の父は單に私生兒の扶育費と扶育の義務とを負ふばかりでなく、妊娠前後の費用を拂ふ可き義務はあるものとする。

次にベビーファミング、里子虐遇も充分改善しなくてはならな

い。日本でも府縣令として徳島、青森、福井、廣島などでは多少これに注意して居るやうであるが、英國ではチルドレン・アクトで嚴重に監視してゐる。オーストラリアも同様で、米國ニューヨーク市では巡回看護婦を以てこれをなし、クリープランドでは特別看護婦なるものを養生して、里子と乳母、里親の間に仲媒の勞をとらしておくなど何れも同意周到なものである。果して日本はこの邊へ着目してゐるだらうか。

棄兒の行はれるは大抵夜中である。然るに日本などではその手續が至つて面倒なるがために極寒の際などは遂に嬰兒の死亡を見ることが屢々ある。これは早く改めたいと思ふ。ニューヨーク市には慈善局なるものがあつて、棄兒の發見と同時に此處に引きとりて世話をなし、後より手續をすることとしてゐる、これと同性賢の設備は米國にも獨逸にもあれど、米國に於て著しい發達を示してゐる。

次には私生兒を如何にして減少せしむるかの問題なるが、これは一方道德精神の發達より致す可きは勿論である。歐洲などの社會の暗黒面は凄いものであるやうに考へられるが、又一面には節操を絶叫する婦人運動の團體もあつて、有識の士は心

をこの方に用ひてゐる次第である。けれども人間の性慾は猛烈なもので容易に私生兒の產出を防止出来るものでない。然らば出來て了つた私生兒及び母は如何に始末するかを米國に見るに、なるだけ母子を離隔せしめぬやうにしてゐる。日本などでは愛情のつかぬさきにと母子を引き裂く法を取つてゐる。考ふる可き問題だと思ふ。そして米國ではその男女を能ふかぎり纏めて夫婦とならしめ、止むなくんば男の性のみだけでも附けて、ミッセス某と呼ばせ、多く田舎へ母子一所に奉公に出かけて幸福なる餘生を享樂させる方法を取つてゐる。和蘭では人口過多を救はんとして人爲的避妊法を醫者が教ふる法律が規定されてゐる。英國の文豪なるバーナード・ショーは『避妊は十九世紀の一大發見也。』と云ふてゐる。

呪はれたる畸形の私生兒は生れて自己を苦しめ、母を苦しめ、社會の害となる。

私生兒問題は實に大なる社會問題、國家問題である。經濟上より又社會上よりして此の問題は今後益々盛んに研究せらるることと思ふ。

## 自殺論

三田定則氏

自然淘汰は宇宙の大法則である。

然し生存競争は異種族及同種族の中にも行はれ、不適者は滅亡するのである。吾人はこの現象を見て一方にはその進歩の遅々たるに氣を揉んで、更にベフェルデルンし度く思ひ、又他方には劣敗者の慘狀を見て緩和したく感ずる者である。擬てこれらの哀れな劣敗者を救済するには如何にすべきか。と云ふに二つのアウフガーベンに接するのである。曰く事を未前に豫防すること曰く自然淘汰を和らげることである。然らば劣者とは何か、又の名を犯罪自殺者と云ふ。犯罪或は自殺の素因は何か。外因は氣候、習慣、酒、經濟其の他内因は感情的、先天的犯罪性、其れらの中間の性質等である。さて犯罪者と自殺者とは外部より見れば異つてゐるが、自己の義務を冒し怠る點より見るときは同じ物である。

古來よりの自殺に係る著作を見るに何れも哲學味を帯び、科學者とし參酌を許さぬもののみである。千九百年アーノルドが三百人の自殺者中殆んど半數は、精神か、身體かの、何れかの病的なる



試みんか。まづその血液の少量を取り充分に清淨ならしめ沈降反應をなさしめて後これを見るに、雌は陽性を雄は陰性の反應を示す。而して雄は多量の蛋白質を雌は少量の蛋白質を持つてゐることが見られる。そこで此度は三種の鯉（其の一種はレーダーカルペンといふので獨逸鯉といはれてゐるもの）に就て第二次の研究を始める。此度は經驗もあるので血液を八百倍に稀薄ならしめ、前次と同一の方法に依つてこれを試るに、雄は依然として陰性を呈するに雌は皆陽性中四尾の陰性を示すものに遭遇する。さて何故に雌鯉の中に四尾の例外を見ねばならぬのかと云ふ興味ある問題に就て尙ほも研究を進めて行くと、次の如き結論に到達する。即ち卵を抱ける鯉は悉く一尾の例外だもなく陽性であり、卵を持たざるものは皆ネガチーフである然らば何故に卵ある鯉の血液は陽にして卵無きものの血は陰なるやと突詰めて行くと、鯉卵と血液との間に重要な關係のあることを肯せななくてはならぬ。三月より七月までが鯉の生殖産卵の時期であるが、卵の中より一種の物質が分泌さ

れて、鯉の血液中に混流するといふことはもう何人も否定し能はぬ事實なることを發見する。この卵より出る物質をオブミンと名づける。オブミンは雄鯉の睪丸中にも含有されることを同時に發見する、獨逸に於ける一博士は、人間に於て母體に新生命が宿る時胎兒より一種の物質流出し母體の血液中に流れ込むものである然し母體中には巧妙にも一種の醗酵素が存在して、胎兒より發する物質を分解し去るものであると主張してゐる。これに就て見るも卵或は胎兒より一種の物質の湧出するは不可抗の事實であるが、魚類の血液中には分解されずして殘留するのである。目下は哺乳動物に於て研究しつつあるが、哺乳類に於てもオブミンは殘留するものではあるまいか？若し他日この疑問を明瞭にすることが出来たならば面白い事であると思つてゐる。

### 私生兒の處遇に就て

高田愼吾氏 私生兒

は母の胎内に平和に眠れる時より既に呪はれたる一個の生命である。浮世の風にあたつては罪なき

彼は『ててなし兒』の名の下に精神的にはた肉體的に悲惨なる鞭を受ける。その凄たり慘たる現狀を目撃しては、顔をそむけて思はず同情の血涙に咽ぶのである。今その一二の例を舉げて見れば、或日私の家を訪ふた見るから哀れを催す婦人があつた。彼女は一人の嬰兒を背に負ふてゐた。その語り出づる物語は涙に慄へて聞き取り兼ねたが、芝區の或る宿屋の女で不惑にも彼女自身既に私生兒であつた。そして或る社會的地位ある青年の誘惑のために、罪の子を産まされたが、初めの頃の親切に似もやらず、男は背を向けて彼女を去つて仕舞つた。『妾はどうせ日陰者ですから……』けどこの兒だけはせめて明るい世の中に出してやり度いのですが……』と泣くのであつた。

今一例も前例と同じく地位ある人にそそのかされて遂に私生兒を宿した若い女であるが『本當にあんな悪い奴は又と此の世の中にあるものでない……地の中へ生き埋めして、首だけ出させ、錆び々々の鋸でギシ々々ひいてやりたい様です。』と怨恨の柳眉を逆立てて男をうらむ紅涙を絞るのであつた。そして可愛さうにも程なく母子諸とも死んで了つた。これらは只私が遭つた一二の場合に過ぎぬので、廣い社會にはこれら私生兒を抱いて悲歎の暗に啣ち

泣くうら若い女は案外に多數あるのだが、羞ぢて暗々裡に葬られるので人目にたゞぬばかりである。明治四十三年度に於てすら正當ならぬ結婚に依つての出産數は十六萬二千某といふ驚く可き多數を示してゐる。英國では千に對して五十名は私生兒、ハンガリーでは半數は私生兒であるといふ。

これ等多數の呪はれたる私生兒は社會に出てて如何なる仕事をなすかと云ふに、棄てられては遺棄罪を構成し、知人の子として届出でられては戸籍法違反となり、他人に托されては『もらひ子殺し』の慘劇が時々演ぜられる。而して彼等は多く白痴か、身體怯弱者か、犯罪者か、病患者か、狂者か、その何れかであることは、世界各國の統計によつて明確である、故に社會進歩の上からいふも、人道の上から論ずるも、私生兒の處遇と云ふことは等閑視すべき種類の問題では無いのである。

故にこの救濟法としては民法を改良して、私生兒の父と母とに負はす可き責任の不公平を修正して母を保護し、嬰兒を心身ともに健全に赴かす様に養育し、父をして母及び私生兒に對する義務を明瞭ならしめんければならぬと思ふ。音に法律に於てしかするのみに止まらず、進んで衛生局、養育院等にも充分にこの精神に於て法律の旨を補佐して行つたならば可成の結果を見らと思

また頗る廣い。大にすれば神の道である。小にすれば治國の憲章である、之を放てば天地陰陽の化となり萬物成壞の源となる、之を捲けば一身一家の定款となり夫婦の和合となる。夫婦が同棲して性慾の情交に於て生活するは、夫婦の彝倫であつて人生の必然に生じたものである。克く相和するを以て徳の極致と爲すのである。それで夫の情交に於て性事は道德上神聖なるものである。

夫婦に於ては性事は愛である。この行爲なくして夫婦の道は保全され難く、人道は成り立たない。夫婦の道に於ては性事は當然の義務である。神は特に之を許し給ふのである。神は姦淫を嫌ふがために、一夫一婦の間に限り、之を大許する制度を設けたのである。人は夫婦の情交に基く性事によつて、男女生活の性慾を満たし、他に惡事を爲さず人格の修養に勵むことが出来るのである。此の理想的制度は萬人を律する普遍的水準であつて社會的生活の法則である。故に夫婦の性事は道德であつて風俗の壞亂ではない。善良なる風俗である。男女道德に於て最善最美の風教である。社會の道德的意識に於て我々は之を正義と稱するのである。

次に男女の情交は個人の自由に發したものでなければならぬ。暴行脅迫に依つて異性を強要することは甚だしい惡事である。故に夫婦の間でも、一方が一方の自由意志に反して情交を慫慂することとは悖徳である。暴行脅迫を用ゐて、夫が妻に性事を遂げたならば、其れは強姦猥褻の罪と同律に

風教壞亂の匪道なる行爲である。夫婦が端莊なる心を失ひ、一定の禮節を度外して、非常識行爲に進み、荒淫に流れ、好色を弄ぶ行爲も自己の人格を毀損破滅するに因つて風俗壞亂の行爲を作為するのである。貝原益軒が細目に亘る程度論をものして、夫婦の性事行爲に道德的制限を附したのは千古の達識であつた。

次に夫婦（相愛者）でない男女の情交行爲に就いて考察して見るに、これは最も明瞭なる風俗壞亂である。唯だこゝに夫婦とは必ずしも結婚者や戸籍の登録者を限つたのではなくて、一夫一婦の相愛者を指すのであるから、青春の男女が自由意志によつて契つた仲もやはり夫婦である。夫婦の情交は大倫であるから、一男一女が人生の愛を目的とする自由結婚による情交行爲は、男女の道德であつて善良なる風俗である。然るに人生の目的とする一夫一婦の共生的公約ではなくて、淫佚を唯一首腦とする一時の享樂から情交を爲すのであるならば、其の性事たるや最も憎惡すべき無道の行爲である。獨身の男子が有夫の女子と通じ、

獨身の女子が有婦の男子と通じ、有夫の女子が有婦の男子と通ずる姦通の種類は、皆なこの非倫の行爲で人格を損傷失墜すること最も甚しい。たとひ隱密の間に行つても、社會の正義に反し、男女人倫の大綱に逆いた行動であるから極めて風俗壞亂である。刑法第百八十三條には『有夫の婦姦通したるときは二年以下の懲役に處す其相姦したる

者亦同じ』とある。これは勿論さうでなければならぬ筈だが併し有婦の夫が姦通した場合には之れを問はずに置くのである。姦通罪を血縁の保護から論ずる古い學說に囚はれて、男女風教の保護から論ずる新しい道德政策論を傾聴しないのは立法者の大なる謬見である。(つづく)

## 科學と人生

記

者

### 性的反應の研究

兒玉豐次郎氏

科學の燦

然たる發達を見る現代醫學上の智識を以てするも、動物血液中含有さるる蛋白質よりして、雌雄若しくは男女の性的分類は不可能の事に屬する。のみならず極めて接近せる動物即ち野兎と家兎或は山羊と羊の如きもその血液中の蛋白質より

しては、これを識別するに由ないのである。然し若し研究の結果これをなし能ふに至るならば、男女の血液も鑒識されることであるから法醫學上甚大な好結果を來すばかりでなく、自然科學上の一大發見と稱することも出來やう。それでこの研究の手始めとして鯉及他の二種の魚類に就て實驗を



風俗とは社會民衆の行爲に關する因襲的習慣を表  
示して居るのである。習慣には千態萬様の形式が  
あるが之を道德上から劃分すれば二つになる。普  
遍的に奉遵すべき義務を負ふて居る肯定的習慣と  
嫌惡すべき義務を負ふて居る否定的習慣とであ  
る。前のは善習慣で後のは惡習慣である。法文に  
『善良なる風俗』と云ふのは此前の場合でその『風  
俗』と云ふのは道德上の風俗を指示したので同時  
に善習慣に於ける風俗の意味である。ところで  
『善良なる風俗に反する事項を目的とする法律行  
爲は無効とす』と云ふ法文の次第は、法律行爲は  
社會の道德的習慣に本づく道德行爲に違反する動  
機を目的とした行爲を法律行爲としては認承しな  
いと云ふのである。法律行爲を爲すには道德的觀  
念を酌量して爲さねばならぬと云ふ道德的教戒の  
意義を本條は包含して居るのである。今、『男女の  
風俗』と云へば民法で云ふ『風俗』の中の男女に  
關する風俗の意義になるのである。即ち男女に關  
する善良なる風俗又は其の反對の風俗である。そ  
れて『男女の善良なる風俗』と云へば、道德的判

斷上の成語で、男女の社會的生活に關して正邪曲  
直の價值標準から吾人の當然従はねばならぬ普遍  
的本務を規定した文字になるのである。内部には  
『性に基く男女の禮節』と云ふ人道上の法則が包  
藏されて居る。又法律行爲の目的に爲らないと云  
ふ事實をも含有して居る。隨つて『男女風俗の壞  
亂』と云へば是の人道上の法則に違反した惡行爲  
を指すことになる。又法律行爲の目的にならない  
と云ふ事實をも包有すると同時に、刑罰を行爲す  
る犯罪行爲にもなつて居る。即ち男女の情交に關  
して道德的制限又は法律的制限以外に出てた行爲  
が『男女風俗の壞亂』である。實踐道德學より之  
に定義を與へることが出来る。私の研究に依れば  
左の如くである。

男女風俗の壞亂とは男女の情交に關する行爲に於て反道德的な  
行爲、又は之を想像、開放、刺戟、挑撥する事物に關する行  
爲である。

この定義は二箇の觀念を包含して居る。甲は男女の情交に關す  
る行爲に於て反道德的な行爲であつて、乙は男女の情交に關す  
る行爲に於て反道德的な行爲を想像、開放、刺戟、挑撥する事物  
に關する行爲である。前者は行爲其ものに依つて社會的な個人

の人格を直接に毀損するために社會の正義を危害するに因つて風俗壞亂と云ふ行爲になるのである。後者は行爲其ものに依つて社會の風教（道德的制限内の男女情交）を危害するために風俗壞亂と云ふ行爲になるのである。

### 三

人には男女の性がある。人はこの個性によつて天分が定められて居る。男子は男子の個性により女子は女子の個性により茲に人生の意義が生じて来る。人生はこの個性の完全なる生活を追窮する生命の努力である。男子は男子の個性を満足するために、自己を進展させる理想の歩みである。絶えず自己を改造新更して萬全多福を企圖する憧憬である。自我の實現と云つても創造的進化和云つても理想的生活と云つても同義であつて歸するところ個性の最完隨一なる生活形式の本體に到達せんとする慾望である。この慾望は個性生活の本體であつて社會的共生の唯一機關である。末梢を本能に置いて中樞を理想に置いてある。自然は人間を男女に差

別してかかる有意的慾望の生活を開始せしめた事は尤も意味深長である。生物學では進化論から生殖分業に因つて説明して居る。宗教では之を愛の攝理に因つて説明して居る。道德でも此等の範圍を出でない。人に男女の性別の嚴存するは愛の生活の必要からである。自己の生命を一層完全幸福なる進歩的狀態に向上發展させるに必要な生殖分業上の生活である。男子が營養の攝取に従事し、女子が掬育家事に従事するは人生の最善最良なる生活形式に進達したる状態であつて共生機關の運用である。利己と利他の一致和合した理想的生活であつて社會的生活の典型である。男女はかくして個性の共生による完全生活に率由して、茲に普遍的なる人生の意義を齎すのである。而して個性と個性とが完全生活のために共鳴せんとする慾望が即ち性慾であつて愛は其の發露である。人倫の大本はこゝに生じ、男女の綱常はこゝに備はるのである。性慾に基く愛は男女道德の根幹であつて之を夫婦の道と謂ふのである。

夫婦の道は其の淵源するところ極めて遠く其の波及する範圍は

道德政策上  
より見たる  
男女風俗の壞亂

一條 忠 衛

一人居ては社會ではない。二人居て始めて社會である。こゝに生活の法則が生ずる。道德は生活

の法則である。人には男女の差別がある。男子のみては人間ではない。女子のみても人間ではない。男女は社會の各半面である。社會は男女あつて始めて人間を生ずる。人間の道は古來から之を人道と云つて居る。之を君子の道とも云ふ。君子の道は端を夫婦に發するもので、道德は男女の間に存する禮節に本源すると説くのが孔子や子思の見解である。孔子は之を仁と云つて愛であるといふ。子思は之を天命であると云つて、人の性で道で教であると縷述して居る。儒教は孝を重んず

る家族主義の道德であるけれども、一面から見れば男女の愛を重んずる個人主義の道德をも調和した上に樹立して居る。

基督教も同一である。イスラエル民族の家族主義と神人合一の個人主義の調節した上に教が成立して居る、神は天地創造の終に人間を男女の別に作つた。社會はこゝから生じた。人類は神の家族である。神の教は愛である。人道はこゝから生じた。人は愛を行つて人道の義人であれば、假令裸體の世界に住んで居ても男女の禮節は善美なのである。女子を見ても心に姦淫を懷くことは纖毫もない。社會生活の規定はこゝに克く實施されて道德は健在なのである。天國は此の土に建設されて、萬邦舉つて幸福なる長生の泉を汲むことが出来る。

然るに總ての道德が弛緩して社會生活の規定が著しく權威を失ひ、亂倫荒妄の行が流行して天下を陰府奈落の澆季に没落するものは抑も何に責縁

するか。識者はそれ／＼考察して怠らないであらう。實踐道德學の一分科なる道德政策論から視れば、男女風俗の壞亂が總ての道德を沈衰し淪亡する導火線である。道德上の罪惡は乃ち男女の禮節を紊亂することに胚胎する。人格の陶冶は男女の禮節に於て集大成されるのである。男女の禮節に於て身を修め得ない品性の未成品者は、假令一國の宰相に成つても家庭を齎ひ得ないは勿論、幾何の功績を國に爲しても同時に無數の罪跡を印して功罪償はないことは容易に逆睹することが出来る。

國家の興亡は如何なる時代でも、男女道德の礎石に遑因することは、史を繙いた者の等しく首肯する所である。淫逸遊興な時代は何時でも男女道德が頽廢して國家繁榮の秋である。素朴剛健な時代は何時でも男女道德が緊張して國家隆昌の秋である。一國の爲政は恒にこの道德史の指教する哲理に隨つて良策を講じ、其の最完の成績を期待せねばならぬ。國家の道德政策の不備は國民の無信仰と相對峙して國家の二大深憂である。政教は一致に出てねばならぬ。國家は國民の信仰を増進する政策を執ると同時に、國民は個人の信仰を以て國家に進獻しなければならぬ。政治が宗教道德と分離し、宗教道德が政治と隔絶して居る現代の我邦は、最も憂恐に堪へぬことが多い。現今に於ける道德界の不健康は恰か

も重態の慢性病に等しいものである。男女風俗の壞亂はその熱癆の患者である。男女禮節の非倫は其の病源である。説文に醫とは病の工なりとある。又醫は仁術なりともある。我々は自己の弱して居る社會に於て、思想の一角に於ても病菌の殘蹟すら在ることを許さない。我々は思想界の國手となつて之を滌穢凜滅する義務がある。本文は實踐道德學の理論に基いて道德政策論上より、國家百憂の本たる男女風俗の壞亂を精査して見ようと思ふのである。

## 一

『風俗の壞亂』と云ふ文字は我邦の法規上の文字であるが國に依つては『風教の破壞』とも『風教の侮辱』とも云つて居る。これは道德上の觀念に基いたもので社會の道德的意識（正義）を危害する意味である。現行民法第九十條に『公の秩序又は善良なる風俗に反する事項を目的とする法律行為は無効とす』と規定されて居る。この條文の中に『善良の風俗』と云ふ文字が出て居るが、善良と云ふ語は道德的判斷上の語で正邪曲直に對する價值標準である。善と云ふのも良と云ふのも俱に同義である。次に『風俗』と云ふ語があるが、



さも亦た確かに、直接タチアンの影響を受けて居るが（彼れはシリア人であつた）希臘語及び羅甸語の本文の如きも非常な影響を受けて居る。ゾ博士は彼のD寫本の如きはI校定本にタチアンの影響を加へて出来て居るものと云つて居る。否な彼の三型とも皆な彼れの爲めに混濁されて居る。それのみならず尙ほその他にも傍系に屬するもので、大なる影響をして居るものがある。例へば保羅の書翰がマルチオンの校定によつて大に變ぜられたことの如きものである。

斯くの如く寫本の本文は單に誤寫などにあらず、有力なる校定者の考へによつて變化されて居る。若し此の儘にして進んだならば、如何なる本文が出来上つて居るか分つたものでない。然るに幸にも早く之を防止したものが出た。それは彼のオリゲネス（二百五十四年に於て六十九歳にて死す）とその學派の賜であつた。彼れ等の研究の結果はH I Kの三校定本に到着して居る。そしてこの三者に共通な新約書本文の基礎は、オリゲネスの用ひたものと最も相似たものである。若し我れ等にしてオリゲネスの本文を所有するならば、事は簡単に済む筈であるけれども、それは最早知ることが出来ない。否な直接には知ることが出来ない。しかし間接には知ることが出来る。即ちオリゲネスの著書の中にあるものから組み立てて行くところである。さうすると原始本文に近かいものにして還元せしめることが出来る。ゾ博士は之を試みて居る。そして此の原始状態は本文が混濁され初めた以前には數十年の間固定して居たものである。

ゾーデン博士の研究は獨逸の特色を現はし、所謂密蜂の勞作である。我れ等にして彼れの著書を讀めば實に有益であると共に、敬虔の念に打たるものである。僕は他日細かに紹介する、考へてある。

## サンダランド博士の歸國

甲 鳥 生

昨秋渡來したる米國ユニテリアン協會の使節サンダランド博士は支那。印度、歐洲を経て先般ボストンに歸著された。同博士は自由基督教の外國傳道の急務について同市の一教會の集會に於て演説したること近著の米紙に報道せらる。

同博士は傳道の急を説き、吾人の心靈生活のためにかかる事業を要す。

利己主義は自滅の基にして、己れの命を失ひて初めて之を得、歐米に於ける正統的福音主義教會の發達は外國傳道の熱心によりて維持せられた。

自由基督教は何故にこの道を取らざるか。而して今やユニテリアン主義にのみ開かれたる門戸がある。吾人は他の信仰に友情的態度を持して外國に赴く。吾人は反對せずして助くるために行く吾人は教めると共に學ばんがために行く。吾人は佛教や儒教や印度教や回教のごとき尊敬すべき信仰を

破壊せんかためにあらずして、是等を刺戟し、且つ改善せんがために赴くのである。同博士が日本に於ける統一基督教弘道會が極めて小額の費用を以て、偉大なる結果を收めつゝあることを推奨し、又支那印度に於ても自由基督教によりてのみ接近し得る識者階級があることを高調した。

米國に於ける自由基督教は昨年始めて外國傳道に關する會合を企てた。この精神の勃興と共に米國に於ける運動に對する好個の刺激たるべきを吾人は疑はない。吾人米國に於ける自由基督教の覺醒の兆として之を祝するのである。

伊太利(殊にヴァチカンの圖書館は注目すべきものである)、ニュージーランド、魯西亞、オースタリヤ、スウェーデン、シユワイツ、スペインにもある。北米合衆國にも少數はある。又東邦諸國即ちエゲイッシ海岸の諸國には基督教の本源地として寫本が残つて居るのは當然である。即ちカルディチュアのアトス半島に散在する僧院やダマスコの回々敎院などにては新發見があり、その他希臘やトルコの僧院、カイロ、コンスタンチノーブル、或は希臘の諸州、マルマラ海、黒海、アソー海岸の都會に於ても幾多の發見があつた。

ゾーデン博士が發見した全部の寫本の數は福音書、千七百十六、使徒行傳及び一般書翰五百三十一、保羅書翰六百二十八、默示錄二百十九である。そのうちで本文を全部掲げて之に註釋を施したものもあるが、その數は福音書で二百七十七、使徒行傳及び一般書翰で五十三、保羅書翰百五十三默示錄で六十六あると云ふことである。寫本々文の使用されたものは合計二千三百廿八あることになる。ゾーデン博士は一々之を考證の材料に供し、そして本文を確定したものである。彼れの著書四卷のうち三卷は此の準備的研究を説明し、寫本の異同を辯じたものであつて、第四卷は之によつて確定された新約の希臘語本文と寫本の異例を脚註として示したものである。恐らくは斯學の研究者にとつて缺くべからざる參考書であらうと思ふ。ゾー博士は學校用として更に之を簡便にしたものを出版して居るらしいが、僕は未だ此の書を手にしたことがないから、此の方に就ては云ふことが出来ない。その標題は Griechisches Neues Testament. Text mit Kurzem Apparat となつて居る。

餘程複雑な研究の後ではあるけれども、それ等の事は暫らく云はず、ゾ博士の結論によると寫本の全體は結局三種に分かれて居る。それはH、K、Iの符合によつて區別せられる。Hは埃及地方に於て傳はつて居るもので、これはヘジヒウス（Hesichius）の校定する所である（三百年の頃）Kは多分アンテイオヒヤに於て出來た寫本で、これはその地の監督ルチアン（Lucian）の校定と稱せられて居る。ルチアンは三百十一年に殉教者となつたと信ぜられて居る人である。此の寫本は後ちビツァンツ（Byzanz）に於て採用せられたるを以て近代に至る迄専ら用ひられたる本文であつて、所謂 *Koine* 或は *Textus receptus* と稱せらるゝものである。この二種の校定本に就てはゾーデン博士の研究以前にも既に知られて居たのであるが、ゾ博士の功績と稱すべきは、第三型即ちI校定本を確定したとである。これはバンフィルス（Pamphilus）の校定したものでバレステナ地方に行はれて居たものである。彼れは三百九年に殉教者として死んだと云はれて居る。Iは他の二種のもの程に統一した型として残つて居ない。けれども此の類型に屬するものは多少發見されて居る。

ゾ博士の獨特の意見として提出せられたとは、此の三型が同一様に、そして皆な獨立して、新約書本文を確定するに用ゆべき證據となるべきものであると云ふとである。これは彼の英國でウエスコット・ホルトがKを唯だ第二位に置いたのなどは違つて居る。彼のIHKの三種は新約書本文の傳へられたる純正なる潮流をなすものである。然るに第二世紀以來、二三の有力なる傍系に屬するものがあるつたと認めざるを得ない。ゾ博士の説によると、その中でもタチアンの福音書調和が、最も大なる影響を及ぼしたもののみならず、又本文を大に攪亂したものである。最古のシリア譯新約書の如



歳である。丁度働き盛りであるのみならず、博士の如き實地と研究とを兼ねた人物は、今や極めて多事なる獨逸の宗教界に於ては有用である、大にこの手腕に待つべきものあるのに、甚だ残念であるとして、惜しまれて居るのは最もな次第である。博士は大學と教會とで非常に多忙なるにも關らず、著書も多數ある。その中でもホルツマンの新約聖書註釋にも一部分を書いて居り「耶穌傳に於ける最も重要なる問題」「源始基督教の文學史」などは僕等の記憶にも常に残つて居るものである。これ等は幸にして昨年完成した、しかし到底今此處に云ふ「新約の諸書」とは較べものにはならない。

此の書の第一卷は既に千九百〇二年に出版になつて居る。けれどもその序文を讀むと、豫備研究が七年かゝつて居ると書いてある。此の研究には多大の時間と金錢とが入る。費やす所の金錢は幾等であるかは書いてないが、金満家の一婦人があつて資を惜しまずして出した。そのお蔭で此の事業も完成に近かづいたと感謝が述べてある。著者も出版書店も第二、第三卷はまだその年の中に、第四卷はその翌年に出る積りであつた。僕等もさう思つて待つて居たものである。然るに第二、三卷はその年どころではない、四年の以後に至り出版された。第四卷は十餘年を経て、昨年漸く出來た。斯く出版が豫定に反したのは、研究がそれからそれへと極めて面倒になつて行つたからである。ソーデン博士は前後十八年を新約聖書本文を確定する研究に費やして居る。若し彼れにして之を完成しなかつたらば、再び何人あつて之に従事するかは甚だ疑はしい。幸にして彼れは此の大事業を了へて神に召された。是れ我れ等新約書を研究する者に取りて、せめてもの慰藉である。今完成した四卷の書は實に彼れの大なる遺業である。是を以て彼れの友人共は之を彼れならては成就せられまじき好記念物とし

て取り扱つて居る。彼れの友人ゲッチンゲン大學のブッセツト教授も四月のテオローギッセー・ルントシャ  
ウ誌上に於て此の「新約の諸書」を紹介して居る。僕はこゝに聊か希臘語新約書の寫本の事に就て述べ  
て見やうと思ふ。

## 二

希臘語新約書寫本の研究は、先づ第一に如何なる寫本が現今存在して居るかと云ふことから初まら  
ねばならぬ。ゾーデン博士の以前にも之をなしたものがあつて、その功績も亦た固より没すべからざ  
るものがある。例へば現今ライプチヒ大學の教授たるグレゴリー博士の如きはさうである。けれども  
ゾ博士は固より他人の研究で満足して居るものでない。自ら實地にその研究を繰り返し、足らざるを  
補ひ、誤を正して居る。然るに寫本を現今所藏する處は世界的になつて居る。ゾ博士は固より自ら旅  
行して研究したのであるが、助手も亦た多數で總計四十五人あつたので、この人名は一々記録してあ  
る。又餘り遠隔の土地なる時はその地の信用すべき學者に研究を依頼して、結果を報告してもらつて  
居る。

如何なる處に寫本が所藏されて居るかもゾ博士は詳しく記して、その番號まで載せて居る。歐洲で  
は各國の圖書館や博物館にある。ブリッセル、コッペンハーゲン、獨逸では伯林を初め十餘の都會、佛  
國では巴里の國民圖書館には随分多數の寫本があるが、その他にもある。英國ではブリチッシ・ムニ  
ムには多數あるが、唯だこゝ計りでないのみならず、個人として所有して居る者も若干ある。和蘭、

沈黙と暗黒と寂滅！そこに始めて眞實の生命が動き、眞實のち、ちが伸展する。

野よ日暮れよ高原よ風を止めよ、空と水と市街と悉く滅びよ、黝暗と死靜とが凡べての世界を支配せよ、そこに始めていのちの潮が高鳴り、の響きを傳へる。そこに始めて内なる世界のうごめきが始まる。

私は最後に一言附け加へて置かなければならぬ。それは沈黙なる言葉の内容に就いてである。沈黙とは必ずしも無意識、無争闘といふ意味ではない。私が強ひて沈黙を主張する所以は、ともすれば外に向つてのみ、いのちの伸展を索めやうとする私達の心は、やゝもすれば内なる生命の空虚を忘れ易いやうな傾向を多く持つことを杞れるからである。

沈黙は内に向つて挑める争闘である。沈黙は靈につける戦ひである。沈黙は我れに向つての争闘である。

社會、他我に向つて戦はれる争闘は時として絶ゆることがある。またその争闘の結果は必ず一種の悲哀感を誘ふて来る。我に向つて戦はれたる争闘は一步一步確實な進展開發の法悦を感じつつ、しかも永遠不斷の争闘を持続する。

沈黙は内なる世界の覺醒である。内なるいのちのうごめきである。眞に永遠なるいのちの伸展である。

此の半球が日暮るる時に、他の半世界が光明の世界を現するやうに、私達の心が外から内に向けらるる時に、私達の眞實の世界が私達の内に現じて来る。沈黙は内なる世界の光被である。



## 新約書寫本本文の性質に就いて

三 並 良

今僕の机の上には「この本文歴史に基き造くり上げられたる、確定し得らるゝ最古の本文の形に於ける新約の諸書」と云ふ標題も長い代りに、書物も大きいが、頁數も合計三千百餘頁より成れる希臘語の新約聖書がある。これはフォン・ソーデン博士が、多年の研究の結果を示せる希臘語新約書寫本の比較研究の跡と、之によつて確定したる希臘語の新約書の本文とを載せたる四冊の書であつて、獨逸語の標題は (Die Schriften des Neuen Testaments in ihrer ältesten erreichbaren Textgestalt, hergestellt auf Grund ihrer Textgeschichte) となつて居る。僕は此の書のことを就いて少しく語つて見たいのである。

著者フォン・ソーデンは自由主義の神學者として夙に鏘々の名あり、千八百八十七年以來、伯林のイエルサレム教會と云ふ大教會の牧師をなし、同八十九年よりは伯林大學の教授を兼任して居た人である。過る冬期には大學で新約聖書神學を毎週二時間づゝ講じて居たのであるが、不幸にして一月十五日地下電鐵に乗ずる際、乗り損ねて逝去した。博士は千八百五十二年の生れてあるから、享年六十三



劍戟の音を聴きつつ、私は遙かなる森の廢寺の前に立つて、老木の梢に梟の聲を聴いたり、またはうつろうつろとかげらふ正午の陽光<sup>ひかり</sup>を浴びたりするやうな怠惰な心を貪つてゐるのではないだらうか。

否、私は怠惰者の沈黙を守つてゐてはならぬ。私は劍を執ることを知つてゐる。街に出て闘ふことを知つてゐる。私達の生活そのものが争闘なしには、一日も一瞬も存在しないことを知つてゐる。生命が生活に表現せらるゝ時、それは不斷の争闘、開進、驀進、伸展でなければならぬ。

しかしながら静寂なる森のなかの沈黙！沈眠せるが如き廢寺の前の瞑想！そこに言ひ知れぬ、ち、からの歡喜を聴くことのできる私達の心靈を想へ！

人々が街頭に馳驅する時、それは人々にとりて眞實の生活であり、眞實の争闘であらう。しかしながら私が廢寺の前に立つ時、それは私にとりて眞實の生活であり得ないだらうか。そこに生の爲めの争闘がないだらうか。

私は争闘といふ字を餘り使ひたくない。争闘といふ言葉は私をしてむしろ消極的な、または強者に對する被征服者的の弱味を聯想せしめる。私達の内なる、いのちが眞實に充たされる時に私達は争闘なしに勝利者たることを得る。私達の生命が争闘また争闘によりて創造せられ、伸展せられるといふことよりも、私達の生命が内から自然に湧き出でることによりて、或は新たにたえず湧き出でることによりて伸展するといふことが、より多く眞實性を帯びてゐはしないか。

\* \* \* \* \*

私達は到底一種の宿命から免るることはできない。生命の發現、生命の創造生命の伸展すらも動か

すべからざる宿命の法則上に置かれたものではないか。いのちは伸展することが自然である、運命である。そして伸展するがままに伸展せしむるところに生命の實感が湧く。生命の潮が波立つ伸展を他にして生命なき生命の伸展を稱して争闘といふ文字を用ふることを假りに允すとして、沈黙せる私の内なる心霊は眠つてゐるのであらうか。静黙の扉前に立てる私の心は、街を駆けつつある勇ましい戦士のそれよりも深刻な、痛切な徹底的な争闘を争闘しつつあるのではあるまいか。

欺かれても宜い、それが迷ひであるならば迷ひであつても宜い、よしそれが夢であらうと、幻であらうと私は静黙の扉に立つて、私の内心に共鳴する驚異界のいのちの樂の音を聽かう。もしそのいのちが私のいのちを鼓舞するならば、もしその幻が私の生活の基調となつて、私の生活を根底から動かして行くものであるならば、それは私にとつて眞實である。現實である。私の個性が静黙の扉前に立つことによりて、眞實の自己を見出すことを得、眞實の生命を實感することができるならば、それこそ私にとつて絶對無二の現實でなくて何であらうぞ。

自然！そがつつめるあらゆる驚異！私は汝の永久に鎖されたる扉前に立ちて汝を崇拜する。汝の動哭が私の動哭であり、汝の生長が私の生長であらう、汝が私語る時に私が聽き、私が祈る時に汝は私に聽け！

私は永久に汝に面し、汝と語らう。沈黙せよ、沈靜せよ、そこに始めて汝と私との心と心とが共鳴の樂を發する。

森よ眠れ、白き翅の鳩よ眠れ、天空に眠れ、流れよ暗のなかに沈め！

がある。私達は扉の前に立つて内殿の光明や華麗や熱擾を想像してゐる。

生けるものは悉くその鎖されたる扉の前に立たされてゐる。或者は喇叭を吹き鳴らしながら扉を叩いてゐる。しかし彼れの耳には内殿の樂の音の餘韻すらも聞えない。彼れはただ、彼れが發した卑しい燥音の反響を聴くのみである。彼れはその反響を以て、内殿の樂の音であると想ひなす。彼れは街の人々の前に立つてその反響を繰り返す。彼れは角笛を吹いて「我れ天啓に觸れたり、内殿の光明を見たり、内殿の樂の音を聴けり」といふにちがひない。

騒々しき街頭の豫言者よ！

私は幾度かこのあはれなる街頭の豫言者であつたことを耻づる。ともすれば驕慢な私の心は、幾度か扉の前に立ちて内殿の樂音を聴き得たりと思つた。しかしかのプロミシユースのやうに天火を偷み得たと思つた私の炬火は他の何物の影をも照らすことはできなかつた。

また或る人々は最初から扉を背にして立つた。そして街を往來する馬車や自働車や都會の喧騒に話しかけてゐた。さうしてそれ等の人々は何時の間に巷の塵のなかに隠れて了つた。

賢き都會人と、力強き勇者のやうに！

\* \* \* \* \*

扉の前に立ちて瞑默してゐた私は、たびたび怯懦なる偷安者と想はれることもあつた。また私自身ともすれば争鬭の氣力なき自分を顧みてあはれに思ふこともある。しかし私は夢を夢みてゐるのではない。私が自然の殿堂の扉に立つ時に私はただかすかなる内殿の光りと、樂音を感ずるだけであるが、

私はそれだけでも充分である。私が二年立つてゐようと、或は十年立つてゐようと、或はその扉は永遠に鎖されてゐるかも知れぬ。人間はしかく運命づけられてゐる。しかしながら私はそのかすかなる光りのなかに、内殿のなかをこむる光明の本質と同じのちのちのあらはれが流れてゐることを知ることができる。縷のやうな細音のなかに、永遠のいのちから流れて来るちからの漂ふてゐることを知ることができる。私達は天空の星にまて翔ることはできぬ。しかしながら少かに吾々の世界に投げかけられた天空の星光を分折して、星そのものの本質を知ることができる。私達は一滴の雫は万滴の湖水に通ひ、一流の入江は万頃の海原に連なつてゐることを知つてゐる。

鎖されたる扉の前に立ちて、私の胸は内殿から流れ来るいささかなる樂の餘韻にへれてうごめく。靈しき殿堂のなかに鎖されたる神秘の力、そがうごめくいのちの高波は、やがて扉の外に立てる私の胸の高波となつて揺らぐ。内殿に溢れたる光明はやがて私の小ひさな胸底の暗を照して、さゝやかなる光明の世界を私の心奥に形作つてゐる。

勇敢な人々が街頭に立ちて争鬭を宣言してゐる時に、私は何といふ意氣地なしだらう。私はかの驚異につつまれたる殿堂の扉の前を離れることはできない。

私が眼をつむつて扉によりかゝる時に潮のやうに打ち寄せて来る内殿の驚異は、私の全身の血といふ血と同じ驚異のちからに波打たせる。私は沈黙しつゝ、瞑想しつゝ、そして靜かに内殿の神秘の樂の音に聽かう。

勇敢なる人々は、人と人との争鬭に彼れ等の生命いのちをかけて戦つてゐる。生の争鬭を争鬭せる人々の



瞑であることを悲しむ。しかも私は生命信愛の情調に乏しいことを餘り經驗しない。殆んど生の信愛そのものが私の生命であり、生活であるやうにすら考へることもある。生きて行く實在からして信愛の心を削つたならばその刹那に私達の生活といふものは滅びて了ふであらう。生命信愛の繼續——不斷永劫の——はやがていのちの流れそのものではないだらうか。私は何故に自己の生命を愛すべきかを知らない。しかし私は生命の信愛なしには一つ時でも生きて居れない。智慧の實を食はなかつた時のアダムにも生命信愛の念はあつた。否な、彼れは生命信愛そのもののちからに動かされてのみ生活してゐたであらう。

生命信愛の念は人類にあたへられた本然的情調である。更らに押し擴げていふならば、あらゆるいのちの表現の本然性である。栗の花はいのちの表現の爲めに、溫柔な微風に揺がれつゝ生の信愛に顫いてゐる。梧桐も、檜葉も、アカシヤも一様に同じいのちの懷しさに燃えつゝ、青い風を吐き、黄金の雲を抱いてゐる。

油のやうな大河の流れに六月の碧空が映る時、燕は輕やかな翅を叩いて、いのちの凱歌をたたへてゐる。蘆の間の割蘆鳥も、草原の牝牛もいのちの信愛に輝けるいたいけな眼を瞬いてゐる。

\* \* \* \* \*

草原のなかに突つ立つてゐる一本の樹に對して私は幾度か『友よ!』と聲をかけて見たいと思つた。今も私は、時々森に入つては眠れるが如き立ち樹に對して、彼れのためしひと物語つて見たいやうな氣がする。眠れる銀杏樹のなかに、沈黙せる老櫟のなかに、人間と人間との言葉が言ひ表はすことの

できぬ、不可思議な大きな力や、<sup>ちから</sup>理智や、思ひやりがかくされてゐるやうに想ふ。宇宙ができた劫初から、樹と樹とは物言ひ、鳥と鳥とは物語つてゐるのであらう。それは人間の知らない、また人間の眼に見ることのできぬ世界の言葉であるにちがひない。私の貧しい室のなかにも、私の古ぼけた机の上にも、どんなにか美しい、どんなにか光りに満ちた世界が表現されてあるのかも知れない。その世界が、蜜蜂や蟻の眼には感じられ、或は見られるのであるかも知れない。森のなかには、いのちの靈しさ、ちからが織りなした無數の驚異が秋夕の星のやうに漂ふてゐるのかも知れない。ただ私達のあはれな人間の眼には梢の頬白や、梢の白い天人椿の花弁のみが見られるだけであつて、それ以上のちからのあらはれは私達の意識には上らないのかも知れない。音や色彩ですらも私達の耳や眼に達するものは、物理學上の約束の内に限られてゐるではないか。私達は一定の範圍内の振動をのみ感ずることができる。その埒外に置かれたいのちの表現を知ることとはできない。

森といふ森、曠野といふ曠野は悉く眼に見えざる不可思議なものによつて裏まれてゐる。私達は紅い花瓣を發見した、白い翅の羽叩きを聞いた。しかしそれが何であらう。限りないいのちの表現としてそれはあまりに貧しい表現ではないか。かぎりもない美しさ、かぎりもない明るさ、かぎりもない幸福が自然といふ自然のなかに湛へられてゐるであらう。私達は少かに自然の窓を透して、かすかに洩れて来る法悦のさざめきや、靜かに漂ふて来る久遠の樂の音を聴くのみである。私達が見る自然——いのちの表現としての——は、ただ少かにその窓口から覗いてゐる一輪の花弁に過ぎない、殿堂の奥から流れて来る樂の音の餘韻に過ぎない。私達から永遠に鎖された殿堂、そこに私達のいのちの交響樂

わたしは今あなたの中に流れてゐる宗教の泉を、

その動いてゐるあなたの指と唇と眉とから、あくまでもうけいれて深く深くあぢはふ……

### 羅睺羅像（問答師作十大弟子の一）

兩手をかたく組みあはせて全くそれを前の袖に包み、

何か深く思ひさだめて動かうとはなさらない、  
しかも細目にあいた目と婦人のやうな唇とは、  
堅くならうとする全身のいきほひをかるめて、  
仰いてゐるとわたしの心にそそいてくる静かな生命、  
強い強い心を統御するやさしいなつかしい生命……  
わたしはただ仰いてあなたよりくるいのちにうるほふ。

### 光緑の窓から

△本號にも千葉掬香氏の『イスカリオテのユダ』を載せるつもりでしたが、執筆者御多忙の爲め、編輯締め切リ

の間に合はなかつたから遺憾ながら次號に割愛することとしました。

△『自然のスケッチ』は編輯上の都合で來月號に廻しました。誌友諸君の投稿を歓迎します。



# 沈黙の扉

— 感想 —

吉田 絃 二 郎

私の生活がどんなに苦しい時でも、私は、『私が生れなかつたら……』といふやうなことを想<sup>かん</sup>へたことは餘りない。私の生活に對しては、どれほど疑惑や失望を抱いてゐる際にても、私は、その生れたことを後悔するやうなことはない。少くとも生命を信愛しやうとする心だけは失はずにゐるやうに想ふ。

私が惑ふ時に、私が悲しむ時に、私は一層生命を勉はり、生命を信愛する心を覺える。もし私が自分て自分の生命を斷つことがあるとしても、それは私が自分の生命を疎んじた結果ではなく、餘りに生命に執着し、餘りに生命を信愛せんとした心からであるにちがひない。私は私が自殺をするほど眞劔に私の生を想ひ、私の生命を突きつめて信愛することのできないことをもどかしく思ふ。生を信愛する心と、生命を斷つ心とは、全然矛盾してゐるやうに見られるが、私にとつてはそれが矛盾してゐるとは考へられぬ。生を熱愛する私の情調と、生そのものを攫まうとする私の理智とが絶えず爭闘して、二つの間に溶けがたい隔りがでる時に、私は盲目的に生命を愛して行くか、或は自ら生命を斷たなければならぬ境に入るのである。私は餘りに愚かな私の理智を悲しむ。私の理智の眼が餘りに惑



あゝされど、そはたゞにわが生命の徒勞なりや。  
神よ感謝す。爾の殘虐を感謝す。

そは爾のその冷たきみてによりて、

わが幼くかつ空なる理智の抽象は

わが貧しき人生より奪ひ去られたれば。

われは今にして初めて悲しき人生の核心を味ふを得たり。

——まことにそはわれにとりて新しき世界なりき。

而して無限に尊くかつ大なる世界なりき——。

その核心にこそ、

生の至聖所はあれ。

そは、悲しみの極み。寂しみの端で。

——而してそれ故に歡喜の莊嚴。

血の滓のしたゝり——そのした゠りより咲ける花。

放散せられたる力——その力より匂ふ香氣。

殘忍が愛と握手するところ。

光が闇に口つけするところ。

甘味と酸味と相抱くところ。

まことにわれは

狂氣と痴愚と死との明日にもわれに迫り來るを思へど、されど神よ足れり。今來るも足れり。



# 奈良より

佐藤 清

## 磚

一枚の腰瓦の表にも、  
 夢のやうな天女の姿をさざみ、  
 或は萌え出づる春の草を、  
 或はむらさきの色さへ目に浮ぶ野菊の花を、  
 或はあざやかに照りはゆるかげさへ見ゆる大日向  
 葵を、  
 自由に自然にこころゆくばかりに刻めるにほひ、  
 一千二百二十餘年のまがきを越えて、  
 紙をも隔てず呼吸する呼吸さへきこえるやうに、  
 さざめる人のあもかげさへもさやかに見えて、  
 微妙に動く愛のしづくのしたたるやうに、

わたしのこころにしみとほりつつにじみゆく……  
 ああ、磚よ、磚よ、  
 やさしい心となつかしい指にとりあつかはれて、  
 いのちとよろこびと未來をそそぎこまれし日を祝  
 福せよ。

## 迦旃延像（問答師作十大弟子の二）

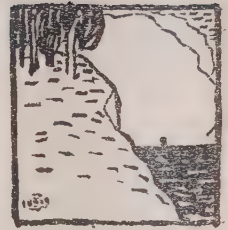
そのふるへてゐるあなたの兩手の指、  
 強い感激のために變動するあなたの眉、  
 あまりにはげしい心を言ひあらはそうとなされて  
 も、  
 どうしてもいひあらはせないやうなあなたの開い  
 た唇、——

り、噴水を設けたりして、小さい公園を形作つてゐる。殊に名高いウンテルデンリンデンの大通りに至つては、幅三十三間、人道車道の外に乗馬道まで區別して王城の前からベルリン大學、王立劇場、凱旋門を過ぎてチーアガルテンの公園を過ぎ、シヤロットテンブルヒを貫いてグリユチワルドに至る、其延長八哩といへば、驚くべきではないか。夫て昔はどこも馬糞が山の様に堆積してゐたといふけれど、馬車がすたれて自働車が多くなつた上に、夜中になると自働車で水を撒いて護謨雜巾で掃除して廻つてゐる。東京のことを考へると夢の様な話だ。

一體一口にベルリンといふけれど本來のベルリンは王城附近を中心として、スプレエの運河を挟んだ一部分に過ぎない。近年西にシヤロットテブル

グ、南にシエーネベルグの兩市が非常な勢で勃興して來て、全然ベルリンと融合してしまつたので、甚だ大きな町となつたので。従つて本來のベルリンは建築も舊く従つて小さい。そこに何となく落付いた澁味があるわけだが、西南の兩市に至つては建築の様式でも構造でも全然新しい。そして西南の町はづれへ行つてみると、今尙野原や耕地の面積を残してゐてとんでもない所にぼつり／＼と新しい建築をやつてゐるのを見るが、而も道路の設計は截然として將來の市街を示してゐる。郊外の擴張に何等の腹案もなく將來必ず反覆して市區改正をしなければなるまいと思はれる東京の當局者には一寸見せてやり度い。思ふに此の西南の方面には何處まで擴張されるか、更に十年の後に來てみたならば浦島太郎の様な思ひをすることであらう。

(未完)



## 殘虐の讚美

加藤 一夫

われは、神の『愛』なるが故に感謝せず。  
寧ろその『殘忍』なるが故にこれを讚美す。

見よ、わがこの頃の貧苦を——

また、わがこの身の病弱を——

われはこれをわが罪の結果なりとは信ぜず、

寧ろわれに在りて生くる神そのものゝ生める子  
なるを知る。

あゝ殘忍なる神よ、爾は

その自らの向上と成長とのために、

われを生活の安全より奪ひ、

われを世の常の道より拉し去れり。而して、

われはその險はしき眞實の坂を登らんとして、

陷阱と利己と鬭争と虚榮との

泥ふかき人間の情慾の沼地に陥りたり。

——神よ、これ爾の御手みでのわざなり。

徒らにわが脚はもがく。かくて

わが勞力は空しく、わが精力は徒消せらる。

——貧窮はその結果なり。

病弱はその子なり——

まことにわれはその自らの有りのまゝの姿を見る

とき狂氣と痴愚と死と——その何れか一つが、も

しくは凡てが

恐怖に充てる笑顏をもてわれを迎へつゝあるを知

る。

而して、わが弱さ心はそれにおのゝく。



新発見から初めた。日本を出る時まで少しも知らなかつたので、モスコウ滞留中フランスの雑誌でよんで初めて知つたわけだが、そこは自分の畑のものハハアあれですかといふ様なわけで夫から夫へと話してゆく。誰でもロシヤ人と初めて話す時にきつと話頭に上るのは戦後の日本人に對する感情だが、大抵は何あれは政治上の問題で國民の戦争でないといふ。さすが大きな國は違ふ。日本では山の中の百姓に至るまで誰しも皇國の興廢此一舉にありと考へないものはなかつたらうが、ロシヤにはどこと戦争してるのか、知らないものが澤山あつたといふのは事實に違ひない。S氏がはいつてきて話題は夫から夫へと轉じてゆく。ロシヤの戦後の經濟状態に至つては、實に驚くの外はない。前年度の如きは酒、煙草、砂糖などによる國庫収入が二十億、歳入剩餘二億を越ゆるといふに至つては、實に美しいわけではないか。戦後の創痍未だ癒えず、而も苦しい遺線をして、大部分を最も不生産的な軍備に費やさなければならぬ日本のことを考へると、實に寒心すべきである。

汽車は依然として茫漠たる平野を走つてゐる。どこまでいつても山らしい山はない。シベリアの荒野と違つてるのは見る限り能く耕されてゐるだけのこと。日本に居ては大陸といふ觀念は一寸も思ひ付けない。此日はスモレンスクを過ぎてから寢てしまつた。

あくれば卅日、此日も天氣がよい。汽車は同じ様な平野を走つてゐる。折々は小川の岸に枝を垂れてゐる柳楊も見えて、藁葺の本小屋、積藁、朝早くから百姓の男も女も畑に出て働いてゐる所など日本の田舎と少しも變りはないが、所々に美しい白樺の森のあるだけは、日本では見られない景色だ。

午後ワルソーに着いて、關谷氏と別る。こゝは乗換の面倒な所で、よくひどい目にあつたといふ話を聞く所である。而も乗換えずに同じ汽車でカリッシュまでゆけば何の面倒もないのを知らぬ人が多い。自分もモスコウへ来るまでは乗換えねばならぬものと思つてゐたが、鐵道院の切符ではどつちでもいゝ様になつてゐる。寢臺會社の出張所で

賣る切符の方が却つて不便だ。

ワルソーの停車場を出ると線路を挟んで要塞が並んでゐる。ドイツに對する第一線の防備ださうだが、露獨關係の破裂は時の問題だといふ一派の説を果して眞なりとすればこゝは第一に砲火を開く所であらう。

同室のロシア人が列車中のドイツ人に紹介してくれるので、何とやらいふ停車場で、此人とは別れてしまつたが、話相手は夫から夫へと殖えた。旅は道伴れ世は情け、全く世の中に鬼はない。日本人の様に汽車の中で向ひ合つてゐても、睨めくらをしてゐるものは他にはない。夜の十時を過ぎて漸くスカルシエルチツツエについた。こゝはドイツ領の停車場、こゝで税關の検査をすませてドイツの汽車に乗る。列車も小さいし、大分きたないが、兎に角言葉が通じるので何んとなく氣が強くなつた。又してもロシアの若い青年と一つ室に膝つき合をすることゝなつて、何くれと話す中にいつかうと／＼と寝てしまつた。

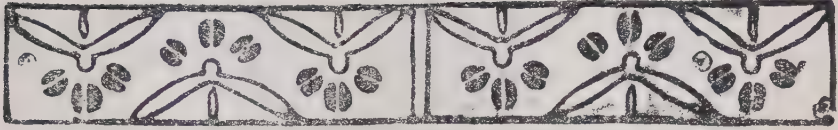
ベルリンと呼ぶ聲に目をさまされたのが翌る朝

の六時、アーク燈の眩しく照つてゐるゾオロギシエガルテンの停車場に降りて、出迎えてくれた友人の姿を見た時は思はずホット息をついた。

## ベルリン雜記

其の一、ベルリンの市街

ドイツが近代科學と工業の勃興と同時にヨーロッパの先進國の位置を奪つて、いづれの方面に於ても一頭地を抜くに至つてから、ベルリンも遂に世界的大都會となつた。其市街の整然として且つ清潔なことは、實にヨーロッパ第一と稱せられて居る。まだ他の大都會を見たこともない自分には。何ともいへぬが、何はともあれ何處から何處まで五層の高樓美しく立並んで、特に美術的の建築ばかりでもないけれど、窓やバルコンには毛氈をかけた様に草花を飾つてある。折々は其意匠に就いて懸賞をやるとやら、道路は鏡の様に滑かなアスファルトを敷きつめて少し大きな通りには人道と車道の界、又は車道の中央にこのこかしわや菩提樹の並木を植ゑて。大きな四辻には花壇を造つた



# 日光

伊藤 寥々

見さくれば木曾の大河の陽に白ふみどりを縫へり鳥とびてあり  
 かゞやかに溢れ漲るこの朝の尾濃平野の日光のいろ  
 しづしづと煙ぞのぼる朝の屋根いらか輝き青葉かゞやき  
 世の常の怒りと笑みと今日もまた相半ばして泣きも得ざりし  
 妻死すと夢みてわきし涙すらわくらはなれば嬉しかりけり  
 かくていよゝ悩み私かにやりがたし妻としあれど腹みち居れど  
 垂乳根の母につかへて悔なくばいかに我が世は嬉しからまし  
 自らを思ふおもひのいやはてはなべてのものを包みこそすれ  
 ほればれと沈みてものを思ふことに餓えて喘ぎつ幾日をか経し  
 あるかなる此身此魂猶こゝにはぐくまれ居り畏こいかなや



## モスコウよりベルリンへ

盧 山 生

淹留四日、名残は盡きないけれど、遊びに来たわけでもないのに、K氏に送られてプレスト停車場から、ロシヤの急行列軍に乗つたのは九月廿九日午後二時であつた。今日こそはたつた一人坊つちになることと覺悟をしてゐたに、何といふめぐりあはせか。向陵時代の友人S氏の令兄がワルソーまでゆかれるに同車することとなつた。世間は廣い様で狭いものとは、一步故國を外へ踏み出してみるとつく／＼感じることである。

シベリアの道中贅澤な萬國寢臺會社の汽車に慣れたものには、ロシヤの國有鐵道はどうだらうと思つてゐたが、存外奇麗で殆んど寢臺會社の列車

に變りはない。唯不便なのは車掌がロシヤ語の外通じないだけ。然し同室のロシヤ人がドイツ語を能くするので、非常に便利だつた、それでベルリンまでの坐席券が寢臺會社の半分に過ぎない。夫でロシヤ人といふものが兵隊などを見るといかにも恐ろしげだけれども、話をしてみると大抵は人のいい、何となく親しみ易い所がある。同室のロシヤ人はモスコウの化學試驗所長とかしてゐる人で、小がらなロシヤ人特有の小さい可愛らしい目付きをして、何かと話をして見ると十年前に鬼か狼の様に思つたロシヤ人とはどうしても思へない。話題は先づ丁度其頃評判になつた野口博士の



『えゝ』深藏は凄しく振反つて、慙う言つた許り茫然河面を瞞めて居た。

『何だべやまづ、とんだ事になつたもんだな』

慙う言つて二人は、堤防の上に佇んで等しく氷材の流れる河面を眺めて居た。其氷材が鎮礁の岬に突當つて碎けるのが、サラ／＼と澤山の銀貨でも玩ぶ様な音がした。

『ほんにとんな事になつたものだな』と二人は土堤を下りて、深藏と共に其邊を捜して居ると、其中に追ひ／＼近所の人々も駈附けて、色々と其所ら中を殘る限なく捜ねて見たが、それらしい手懸り一つ見附らなかつたので、一同はもはや歸らうとした時分に、德爺の脱ぎ捨てた草履を片方見附けた。それで愈々さうと分つた時には、平常心丈夫な深藏も眞蒼になつて卒倒しない許りであつた。其所へお綱も駈けつけて

『俺惡かつたや。言はねばい、事を言つたものや』と繰返し／＼涙に咽んだ。

人々は一先づ家へ歸つて、それから熊手や竹竿に、錨などをつけたものや、種々な得物を携へて再び出かけた。淵の氷を砕いて、種々に掻き廻して見たが、なか／＼德爺の屍は見附からなかつた。翌日は村の人が總出で捜ねたが、遂其日も德爺の屍は揚らなかつた。丁度三日目の日であつた。其日も捜ね、あぐんで、皆は引揚げて歸らうとして居る時に、一人の若者の投げ込んだ熊手の先には何やら手筈があつた。深く投げ込んで、靜かに引寄せて來ると、ガツと手許に響いたのは體に、熊手の爪が石に當つたのであつたが、それから後へ引釣つたものか、容易に上つて來なかつた。それが何うやら手筈が別だつたので、ウンと力任せに引寄せると、今迄何物かに支えられて居たのが、急にガクリ端れ

た様子で樂々と上つて來た。聽て着物の端が見えたので、其若者は恐ろしさと、嬉しさとで狂氣の様に聲を張上げて喚んだ。其拍子に急に熊手の指が折れてもした様に、ガクリと手許が輕くなつて、再び其物を水底深く沈み入つて了つたが、それから人々はその所へ一團りになつて、熊手を打ち込んで引き、打ち込んで引きすると、間もなくまた一人の腕に重味が懸つた。それに力を添へて、漸々引き揚げて見ると、それは正しく屍であつた。最初若者の熊手の先を嚙んだのは、徳爺の背負つた藥師様にあつた、石の地蔵であつた。徳爺はそれを太縄で叮嚀に身に縛つてあつた。而して其顔は、水腫れに腫れ上つて所々引搔かれた様な、創ついて徳爺の面影は見られなかつた。

其徳爺の屍がもつこで搬ばれて來た時には、深藏の家は男や女の見舞人で一杯であつた。

『俺惡かつたオや。あんな事言はねばいかつたのに、言つたりして惡かつたオや』

お綱は今搬ばれて來た許りの、仕事場のもつこの上にある舅の死骸の傍に立つて、それを取卷いて居る大勢の人に、恁う言つて高聲に泣き喚えた。

(大正三年五月二十日)

『お父<sup>と</sup>つあん、そな事がいん。俺また、そな事はねばいかつたのに悪い事言つて了つたおな。何卒氣にかけね<sup>エ</sup>でくないん、お父<sup>と</sup>つあん』と慰める様に言つたが、徳爺は根から、氣が引立たない様子であつた。此夜も宵から床に入つて寢<sup>やす</sup>んだ。暫時は寢つかれない様子で、風邪氣味の咳などをするのが聞えたが、家中はそんな事とも心附かなかつた。

翌朝、曉方徳婆が眼を醒して見ると、側に寢て居た夫の徳爺の寢床は殻になつてあつたので、大相早く起きたものと別に不思議がりもしなかつたが何氣なく徳婆はお綱に訊いて見た。

『何だべや俺<sup>おち</sup>——床に寢て居いんかや』

『居ね<sup>エ</sup>からや。大變<sup>ていへん</sup>早く起きたものだと思つたのさ』

『何だべや俺。其所にお父<sup>と</sup>つあん居しめい』

恁う仕事場<sup>には</sup>に居た夫に訊くと、

『居ね<sup>エ</sup>。何だけな』

深藏は仕事を止めて勝手口へ出て來た。

『お父<sup>と</sup>つあんが居ね<sup>エ</sup>としや』

『寢て居ね<sup>エ</sup>のか』

『床は其儘になつて居るげんども……』

『居ね<sup>エ</sup>のか』

『俺また、大變<sup>ていへん</sup>早く起きて何か仕事でもして居るのかと思つて居たのさ』母が言ふと、

『何そんな事無い』

深藏は上へ上つて、其寢間の邊を見廻して見たが、此時彼は急に恐ろしい感じに打たれたのであつた。

『どんな事もあるもんだな』

彼は何と言ふ事もなく、又草履を履いて仕事場へ行つて見たが、今迄彼が其所で仕事をして居たのだから、誰も居るべき筈はなかつた。それから彼は殆んど無意識にスタ／＼と裏の杉林の方へ行つて見たけれども、そんな氣色が見えなかつた。又茫然歸つて來て、茫然裏口に佇んで、昨夜夜中に降つた薄雪に、眞白く續いた野の遙彼方の藥師様の森影を眺めた時に、何故か彼は體中の血が一度に冷たくなつた様な、怖ろしい感じに襲はれた。彼は其時殆んど無意識に其森影を見かけて、道も撰まず一目散に駆け出した。

『何所さ行くだべや俺』

それを見たお綱は恚う言つて、怪訝さうに其畔道を駆けて行く夫の後姿を見守つて居たが、聽て等しく恐怖の感じに打たれて、それから前の庭先へ出て狂氣の様に喚き出した。其突然な叫喚に驚かされた前の勇二や、向ひの西吉などは何かと外へ出て見るのであつた。

それから此人々も、等しく藥師様の方へ深藏の後を追つて駆け出した。彼等が藥師様迄行つた時には、深藏は其後の海岸を往つたり來たりして居た。

『何うしゝた深兄』



『またお燭がつくめいか』とお綱は土瓶の蓋を取つて見た。『あゝついたく。さあ、飲まいんお父つあん』

お綱は不器用な手つきをして、杯に注いで男の前に置くと、

『俺、深と飲んで來たから澤山だわ』

『そんな事言はね<sup>エ</sup>で、いゝから飲まいん。お父つあんが寒くて來んべと思つて、角からお花に買はせたのだから』と強ひて『三十錢價買つたのだけつとも之しか來ねあんや。買つたの甘<sup>おめ</sup>げつとも高<sup>た</sup>けくつて分がねあや。それでもあれからとつてもうるせいくて駄目だしな。そら毎<sup>まい</sup>日の様に來つてば、酒造つたのねいが』つて。俺とくと怖<sup>おろ</sup>かね<sup>おつ</sup>てば、彼奴來つた』

聲を密めて半分は目で言はした。

『甘<sup>おめ</sup>いから飲<sup>の</sup>んで見らいんまづ』

『お父<sup>と</sup>つあん飲まいん——いゝから。俺も今飲むから』

と深藏に勧められて、徳爺は漸く其杯をとつた。而して深藏を相手に此晩は楽しく暮れたが、彼等は又難間に相遇しなければならなかつた。それは年貢の催促であつた。其時には奈何にも出來さと思つたのが、さし當つて見ると何とも思案に暮れねばならなかつた。

『ほんに何<sup>な</sup>づすんべや、俺<sup>おら</sup>。お父つあんが今少し辛抱すればいがつたんだげつともなゝまた』

お綱は何氣なく恁<sup>お</sup>う言ふと、深藏はそれをたしなめる様に

『何<sup>な</sup>だけな、今更そんな事言つて、貴様』

『そだつて、何づすんべや、俺』

『それや、何とか出来ねエ事あんめいてや』

『そんでも』

お綱は仕様があるまいと言ふ様な顔をして居た。此時氣毒さうな顔をして、二人の話を聞いて居た徳爺は、

『ほんに、俺、もう少し辛抱してればいがつたな。さうすれば貴様達にも心配かけず済むのだつたが』

『そんな事がいん、お父つあん』

深藏は父を慰める様に慫う言つた。

『それでもや——此の様に毎年不作許り續いて一年増しに非度くなつて行く許りだてや。一層俺見ていな年老つた厄介者は早く死んで了へばいゝんだげつともなア……さうすれば貴様達にも苦勞をかけねんだが……』

『そんな事がいん、お父つあん。今頃お父つあんに死なれて俺等なづすんだや』

『それでも何時迄生きて居たつて年寄つて碌な稼ぎも出来ねくなつたし、却つて長生すればする程貴様達に心配かける許りだてや』

『なんて、そんな事なんべや、お父つあんがや』

今度はお綱の方へ向いて『貴様また、あんな事言はねばよかつたのに』と言ふと、先刻より氣の毒さうな顔をして居たお綱は、此時益々悪い事を言つて了つたと言ふ様な氣の毒さうな顔をして

に行つた深藏の顔を見てひどく喜んで居た。今度も深藏の顔を見た時の徳爺の悦びは一通りでなかつた。莞爾して如何にも嬉しさうな顔を見せた。其嬉しがる様が子供に逢つた親と言ふよりは、親に逢つた子供の様な喜びであつた。常々村の者にも正直者と佛の様に思はれて居る、家康の繪顔に似て居るとして徳川と綽名されて居る皺の多い背の下つた顔には少しも牢屋に這入つて居る人の面影は見えなかつた。それでも、さう思つて見る所爲かして、深藏には此前に逢つた時よりは、面やつれがして頭の白髪迄も多くなつた様に思はれた。徳爺は冷たい格子に掴つて、寒さに戦ひながら聲を振はして『深や、俺、家さ行きてくなつたわ。とても寒くて堪へられねえおんや。あと罰金にでもして呉ねかわ』

憊う言つてホロ／＼涙を流して、聲を吞んで小供の様に泣くのであつた。それを見た深藏は堪り兼ねてワツと聲をあげて男泣きに泣き出した。看守は人情を知つて居るらしく、そ知らぬ風に物蔭に行つて居た。而して徳藏はそんな事には頓着せず涙聲に高く言つた。

『お父<sup>と</sup>つあんに苦勞かけて濟みいん。屹度さうして出られる様にしてやつから安心して居<sup>お</sup>らいん』

『何卒、さうしてけろわ』

『屹度、さうしてやつから安心してろお父<sup>と</sup>つあん』

『何卒、さうしてけろわ』

『屹度さうすつから』

徳爺は一緒に歸りたさうであつたが、それを言ひなだめて、歸りには好きな酒を引かけて見たが、

頭に許り上つて少しも酔へなかつた。

『何づしたつてお父つあんに許り苦勞かけては置かれねえ。』

お綱も涙ながらに慇う言ふのであつた。

『俺もさう思つてな、出られる様にしてやつからつて言つて來たのさ』

『そてがすとも、そてがすとも』

お綱は慇う言つて涙を拭いた。母は唯噎啼り泣いて居るのであつた。

年貢米にと思つて居た四五俵の米を賣つて、深藏が其父を迎ひに行つたのは、それから間もない事であつた。無事に出獄して歸りには又通りの茶屋へ寄つて、二人で甘く酒を飲んで、用意して行つた合羽を着せて、小雪の降る二里餘りの道を歩いて家へ歸つた時には矢張小晩方であつた。

『ほんに瘦せたぢやなア』と言つて徳婆は、メッ、メッ、泣いた。

『ほんに瘦せたぢやね』とお綱も眼を拭いた。

『なに何程がひどかつたかまた。ほんにお父つあんには苦勞をかけて濟まねえがつたちもな。今夜は酒でも飲んでゆつくり休まいんわ。ちゃんと先刻買はせて置いたから。お父つあん達寒くて來んべと思つて』

其所へ前の勇二や、向ひの酉吉なども喜びに來て呉れた。

『ほんに、とんだ苦勞したね徳アニ』

慇う言はれると徳爺は、何時もの人のよさうな笑顔を見せるのであつた。



お父つあんに』お綱は恁う夫に訊いた。

『逢つて來た。』

『逢つて來たか、そんでは』母も傍から訊いた。

『而して、何づして居したけ。變りいんけか。』

『變つてたけ』

『そんで、此前めいに行つた時よか瘦せてゐる居したけか』

お綱が氣遣さうに恁う言つて訊いても、深藏はそれには答へず何時もに似ず打ち萎れて居るので、何うしたものかと怪訝さうに其顔を覗いて見ると深藏は涙ぐんで居るのであつた。其れを見た母は唯うろ／＼して居た。

『何づか、うんと變つてゐる居したけか』とお綱が氣の毒さうに訊くと、深藏は此時堪へ兼ねた様にぼろ／＼と涙を爐の中にはふり落して大きな手で眼を拭くのであつた。

『ほんにお父つあんには濟まねエ苦勞をかけた。幾ら何でもお父つあんを何時迄もあ／＼して置かれね』

お花までが父の其悲歎の様子を見て泣顔つくつて居たが、お綱や母にも何うやら深藏の様子が呑込めないのて何う言つたならよいものか心迷ふて居るのであつた。

此秋の事であつたが深藏の家では自家用の少し許りの濁酒の密造を發覺された。それが公判で遂に六十圓の罰金を言ひ渡された。之には深藏の一家は、困難の淵に落ち入つた。六十圓と言ふ大金、作

でもよいなら兎も角、三十五年來毎年の不作續き、高い年貢を拂へば春迄の飯料も覺束ない程な今年の作に其様な不時の責めなどを果し得べき餘裕などはなかつた。それが誰か一人身を入れて苦役に服しさへすれば、六十圓の罰金も僅か六十日間できまると言ふ。此頃の不景氣に何う身を碎いても、一日一圓の働きは人一倍丈夫な深藏にも思ひもよらなかつた。それで深藏は自分自身の身を入れて其責めを果たさうとも思つて見たが、それでは尙家が仕方なかつた。刈入れた稻はまだ一本こかず、女、年寄り許りでは何うにも仕様がなかつた。さらばと言つて其六十圓の罰金を現金で果すわけにも行かなかつた。一寸の間に面窶れさへして深藏の顔は傍て見るさへ氣の毒であつた。父の徳爺はそれを見兼ねて恚う言ひ出した。

『奈何うせ俺は家に居たつて碌な稼ぎも出来ねエのだから、俺行つて勤めて來んべてやわ』

『そだつてお父<sup>と</sup>あなが』

深藏等夫婦は言ひ合はした様に驚いて恚う叫んだが、それと同時に『それがよい』と言ふ様な事を誰か此二人の心の中で叫んで呉れた者があつた。併し深藏は之にも心迷ふのであつたが何時しか其様に家内中の心の中に極められる様になつた。『盗み泥棒をしたのであるまいし……』と恚う言ふ様な氣持が家内中の心にあつた。而して徳爺も悪い事をした犯人として行く様な氣持ちはなく、孫の深次が兵隊に行つた様に政府の御用を果しに行く様な氣持であつた。家内も其様な氣持ちで見送るのであつた。而して徳爺は苦役に服する事になつた。

其後、一週間許りしてから差入れを兼ねて、面會に行つて見ると少しも變つた様子も見えず、逢ひ

病人等に糧を運ぶ、

彼女は閉ぢたり、運河にのぞむ窓と

月に向へるなべての扉とを。

## 祈 禱

わが意の門口に

うつしなされを憐みたまへ！

病める白き無爲に

わが靈は蒼ざめてたよりなし。

わが靈は蒼白と啜泣きに

うち棄てし仕業の中に立ち

閉ぢられし物の上にその疲れにし手は

たゞあだに慄ふなり。

また紫襦せし夢のつばやきを

わが心吐ける間を

わが靈は慄ひぞする！

蠟月の濕りたる光の中に

明日は寄るべなき百合の

おぼめける月の光の中に

わが靈の悲しき影のその手の外は

何物もえ生れぬ月の光の中に。



## 失言

齋藤 未學

午後になつて、霏々雪などが落ちて來たので、大降りにならない中に早く歸つて來ればよいがと、お綱は心配して居ると、深藏は漸々火點す頃になつて歸つて來た。

『あゝ——父あんが歸つて來た。——お花。——お母さん歸つて來したて』と姑にも言つて、『今歸つて來たのしか。寒がすたべ』とお綱は戸口に迎へて夫を勞つた。

『それ、お花、仕事場からもつて來てうんと焚いて父あんどこあてろ』

深藏は頸を縛つた手拭を解いて、毛布を脱いで、其雪を拂ひ落してから内へ這入つた。お花は仕事場から持つて來た澤山の豆殻を楯の上にさしくべた。

『ほんに寒がすたべ——あたらいんまづ』とお綱が慰めると

『ほんに寒がつたべなア』と母も言葉を添へた。

深藏は草鞋もとかず其儘爐に踏込んで、如何にも疲勞れた様にどつかと腰を下した。

『まだ、大降にならないからいかつたげつとも、何て寒い日なんだか今日。而して逢つて來したか、



□辻文學博士序 文學士 長沼賢海氏著 廣川畫伯裝幀意匠

好 著 成 る

# 英雄の信仰

發行所

東京京橋南紺屋町

實業之日本社

振替東京三二一六番  
賣捌 全國各地書店

□宗教を中心として觀たる吾國古今の英雄廿六人の活傳記成る  
□深刻遠大なる實驗的教訓は偉人の宗教生活にこれを見る

興味ある偉人

傳にして

比類なき佛教

研究の資料也

著者は宗教學の泰斗にして殊に佛教に關する造詣深し。久しく文部省圖書調査の任にありて蒐集研鑽せる材料積んで山を成す即ち一代の精力を傾倒して苦心大成せるもの本書也。源賴朝より初めて伊藤公に到るまで擧ぐる所總て廿六、その間別に「法の教」と題し古哲の述作中より訓言法語を拔萃して之を挿みたる用意の周到なるを見る。蓋し夏季の絶好の讀物。

幼き娘等の群半ば扉ををひらく！

われは牧場ある島に小羊を見る心地！

また氷河の上に美しき水草見るおもひ！

大理石の玄關に百合の花！

若樹の森に賑けき祭！

また氷の洞穴に東洋の草木！

聞け！ 水門を開かる！

海の汽船運河の水を掻きみだす！

あゝ、さあれ看護婦は火をぞかき立つる！

堤の美しき緑叢は火に燃え、

傷ける人乗せたる大船日光の中に揺るゝ！

王の姫等暴風雨の中に帆船出し、  
王女等失鳩筈の野に死なんとす！

あゝ！ 格子をな開け置きそ！

聞け！ 海の汽船なほ地平の方に汽笛を吹く！

或る人は醫生に毒殺され、

諸人敵の邸の饗宴をぞする！

包圍れし都市に大鹿！

また百合園に獸苑！

炭坑に熱帶の草木！

一群の綿羊鐵橋を渡り、

牧場の小羊悲しげに室に入り来る！

看護婦はいま灯を點し、

スエデンボルグ著 鈴木大拙先生譯

# 新エルサレムとその教説

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教説にして救済には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著

學習院教授 帝國大學講師 鈴木大拙先生著

# スエデンボルグ

天界地獄の遍歴者、神祕界の大王、古今獨歩の千里眼、神學界の革命家として世界の一大勢力を成したるスエデンボルグの性行閱歷思想、事業を詳述してこの奇傑の面目を躍如たらしむ

スエデンボルグ著 鈴木大拙先生譯

# 天界と地獄

歐米の思想家宗教家を驚倒せしめたる名著にしてスエデンボルグが天界及び地獄を遍歴し親しく目撃感得したる事實を詳述したる奇書なり

三六版箱入

定價六十錢

郵税八錢

三六判箱入

定價五十錢

郵税六錢

菊判和裝

價一圓五十錢

郵税十二錢

鈴木大拙先生著

禪の第一義 (三版)

定價一圓郵税八錢

〔中附六〕

東京小石川原町六丙午出版版社 東京小石川原町三三 鷄聲堂



七月號

定價一冊金二十五錢郵稅二錢五厘六冊郵稅共一圓五十錢十二冊三圓八十錢(前金)

# 講談俱樂部

中江藤樹

母の情

(新講談)

岡柳惟一

武士の家

(新講談)

稻岡奴之助

怪談

鏡山のお初

(新講談)

寺澤金風

清艶

戀の光秀

(新講談)

夢想兵衛

噫!

橘大隊長

(新講談)

東家樂燕

小金井小次郎

(俠客)

太郎團子平

(落語)

樂燕

寄席七寶

(加賀路)

大阪の演藝界

銀之助

演藝注進

藏讀者

文藝口繪

豐富

三星圓の特別大懸賞を募集す

九星運氣考

市村座のぞき山岡靜山

岩間小熊

鳥驚鮮人記

獨酌の女

赤クラブ(活動寫真)

根井髮結新三

權三

權三

權三

權三

うらみ葛の葉

(新講談)

大河内翠山

俠客天晴才次

(新講談)

武田仰天子

夕霧傾城戀物語

(脚本)

土屋紫吹

怪談生首しん

(講談)

鈴廼舍操

磯萍水

磯萍水

磯萍水

# 雄辯

第五卷第七號

七月號

定價一冊五錢五厘五冊一圓二錢五厘十冊二圓一錢八厘

○學生諸君の讓究を促す男爵後藤新平

▲眞の雄辯 鎌田榮吉▲愚劣なる生活 湯原元一

▲時局問題と國民道德 島田三郎

▲入獄の恩寵 小久保喜七▲最近の政局 上野甚平

○就職問題の解決 帝大教授 古野作造

▲歐米雄辯家 大原武雄▲ウエブスター 沼田文學士

▲山座と水野 評水亭

▲半生の雄辯 永川俊美▲名士逸話人の噺 評水亭

○時代觀 文學士 中村孝也

▲畫家牧野義雄 川島文學士▲口繪各學校演說會 望月紫峰

▲刺客西野文太郎 望月紫峰

▲慶應義塾雄辯家月旦 堀下演說會記者

○失望せる島田三郎 冬湖學人

赤垣と鹽山家 和田天華▲學生界逸話 各學校

▲亂醉浪人の慚死(小説) 武田仰天子

▲ぬれぎぬ(歌) 庄亮▲牧師館にて(續釋) 馬場隼夫

○愕堂集に見たる尾崎愕堂 横山健堂

大日本雄辯會

本日本雄辯會

定價一冊五錢五厘五冊一圓二錢五厘十冊二圓一錢八厘



週刊宗  
教雜誌

# 基督教世界

每週木曜發行  
一部 金五錢  
半ヶ年 金一圓二十錢  
一ヶ年 金二圓三十錢

◎本誌の創刊は明治十六年にして既往三十餘年の歴史を有する本邦基督教界最古の週刊雜誌なり

◎本誌の特長は進歩的基督教の立場より時事問題を評論し且つ最新の智識に依り斯教永遠の眞理を闡明するにあり

◎本誌には毎號教界先輩の說教、内外名士の論說と新進思想家の研讀と、清新なる宗教文學及内外教勢を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として聖書研究の手引として、信徒家庭の讀物として好適なる雜誌なり

◎本誌の編輯は宮川經輝、原田助、小崎弘道、渡瀬常吉、牧野虎次の五氏協力之に當り、小山東助、山口金作の兩氏每號執筆し、加藤直士氏は外遊中每號見聞記を寄せ其他在兩京の記者數名之を助く

本誌の見本は御申越次第無料進呈すべし

大阪市北區中之島二丁目四七

發行所

基督教世界社

振替貯金大阪參壹七參

# 新人十五週年紀念號

七月一日發行

社説壇

□ 教界の適者生存(當局の宗教に對する態度を論ず)  
 □ 敬虔の人(徳富一教翁の修養と人格とを論ず)

## 論説

□ 宗教の新意義(來らんとする宗教の時代を論ず)

□ 近代批評の基督教々義に及ぼせる影響

□ トレバル教授の基督論

□ 外來思想と國民性の完成(國民性に關する大論文)

□ 果たして異教主義の勝利か(異教主義者に對する大鐵槌)

□ 蘇峯の時務一家言を評す(樗火の鉄陳ストラクシイを粉碎す)

□ ミツシヨンスクールの論(ミツシヨンスクールの眞相を解剖し將來に對する經營策に及ぶ)  
 □ ロダンの藝術に現はれたる近代思想  
 文學士 藤田逸男

## 文藝其他

□ 晩秋のある夜(清新純潔なる創作なり)

□ 感想ニツニツ

□ 最後の夜(使徒ペトロを主題とする宗教小説)

□ アメネブルヒの丘(伯林郊外のアメネブルヒの景、そは何を語る乎)

□ 白百合(例により白百合の如き君の短歌)

□ 傳道三十年(日本傳道史の半面興味津津)

□ 高田岬安論(人物論評は今や教界興味の中心たり。高田氏の面目如何?)

□ 吉野教授以下の國人の時事評論は眞に天下唯一

定價 十 五 錢  
 本號 二 限 り  
 二 十 錢  
 振替東京一四〇〇五

新 人 社

東京小石川林町

青木健作  
 相馬御風  
 磯村青風  
 鹿子木員信  
 野口精子  
 海老名彈正  
 一 記 者

# 第二回基督教夏期講習會

■期日、七月十三日ヨリ十八日迄午前七時半ヨリ十時半迄

■場所、芝區三田四國町二、統一基督教會

■會費、金五拾錢也、一日分金拾錢也

講

師

- |                    |             |        |
|--------------------|-------------|--------|
| □現代政治問題概論          | 帝大教授<br>法學士 | 古野作造   |
| □文明史上に於ける基督教徒の一大貢獻 | 早大教授        | 永井柳太郎  |
| □現代のヘレニズムとヘブライズム   | 早大教授<br>文學士 | 内ヶ崎作二郎 |
| □宗教眞理の特質           | 早大教授        | 原口竹二郎  |
| □兒童保護事業            | 法學士         | 高田愼吾   |
| □基督教の終末觀           | ドクトル        | 杉浦貞二郎  |
| □刑法裁判の過去及現在        | 法學士         | 平澤均治   |
| □生物學より見たるベルグソン哲學   | 一高教授<br>理學士 | 高橋堅    |
| □現今の宗教哲學に就いて       | 二高教授        | 三並良    |
| □將來の基督教            |             | 額賀鹿之助  |

(入會は何人にてても差支無之爲念申添候)

主催 基督教同志會

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副  
長ハ目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)  
(本 八九八(私宅用)

## 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

## 院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一一番

## 南湖院

河野、高橋、兩副長ハ目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後  
入院、診後應需





# 「温室」より

(メエテルリンク作)

飯田敏雄 譯

## 病院

病院よ！ 運河にのぞむ病院よ！

七月の病院よ！

室内には火ぞ燃ゆる！

この時海の汽船は運河へと汽笛を吹く！

(あゝ——窓へな寄りそ！)

移住の民等宮殿を過ぎゆく！

われは見る暴風雨の中に一葉の帆船！

われは見るなべての船に家畜の群！

(窓をみな閉づるぞよけれ

外より人は匿されむ)

こを喻ふれば雪の中なる温室、

あらしの日寺詣でする女と道連れの心地、

リンネルの敷布の上に本草見るおもひ、

或は太陽の中に火災起り、

また、傷ける人等居る森を過ぐる心地。

あゝ、今はや月の光！

室の真中に噴水上る！

# てちだ先に朝來のンケイオ

再版  
オイケン教授原著。海老名彈正氏序。額賀鹿之助氏譯。  
版二吾人は尙基督教徒たり得る乎  
オイケン教授原著。文學士 今岡信一良氏譯。

□定價七拾錢  
□郵稅八錢

近

刊

現代思想と倫理問題

四六判新式装  
定價七拾錢  
郵稅六錢

(附錄・「宗教に歸れ」約四十枚)

第一高等  
學校教授

三並

良氏 著

近

刊

ルード・オイケンの哲学

四六判新式装  
定價七拾錢  
郵稅金六錢

(卷頭・原著者最近の寫眞を掲ぐ)

オイケン教授原著。加藤直士氏譯。

再

版

現代宗教哲學の主要問題

四六判美本  
定價壹圓  
郵稅金八錢

(附錄・フォン・フリーゲルの評論約卅頁)

(中附一)



振替五  
東京三番

警醒社書店

東京 橋町

兌發



ラザロ それで醜や不義や死の中に生命を見出すのは見る人の生命による外はありません。生命は

自分の生命です。則ち自分の生命を死の中に認めやうとする努力です。

アブラハム お前は詩人なそうぢやないか。お前の作つたものがあるなら見せておくれ。

ラザロ お耻しうございます。

アブラハム 耻かしいことはない。どれお見せ。

ラザロ (懷から一枚の紙を出す) ぢや一寸讀みませう。……

わがかよわきともしびの暗に消えゆくとき

おとなふ家の中にいと強くかゝやく光あり

わがかよわきいのちの遠くひきゆくとき

かへりゆく沖のかなたにいと強く流るゝ潮あり

アブラハム お前は死ぬ時も平氣で死んだのだね。

ラザロ でもあの刹那は實に何ともいへない驚異でした。餘り強い嵐に吹きつけられて口がさけな

い時のやうでした。

アブラハム でもこゝへ來た時は見違える程いき／＼してゐたぢやないか。

ラザロ そうでしたかね丁度あの日是一日食物をとらなかつたのです。多分その前の日も一日とらなかつたでせう。……夕方あの葡萄園へ行つて見ましたが、私にはそこにある葡萄の一房をとる勇氣さへなかつたのです。私は葡萄のかをりを嗅いでうつとりしてゐました。……私は餘程目が悪く

なつたと見えて……錯覺ぢやないんですが……まことにともる多くの灯が、ごつちやになつて火の玉のやうに見えたのです。それから強いあらしが身體からだの中に起つて來たやうに感じたのです。私はその時今讀みました詩を心の中で歌つてをりました。……

アブラハム　それから間もなくこゝへ來たんだね。……あれからお前はずん／＼強くなつたやうだ。

ラザロ　それがほんとうに不思議な位です。……私のやうなものであるのもあの世にをりました時には矢張氣がねや氣苦勞があつたのかと思ふと何だか變な氣がいたします。

アブラハム　あの世でほんとうに自由な精神に生きて行かうとしたりすると、すぐ氣狂扱ひをされるか、それでなけりあすぐ殺されてしまふのだ。……自分免許の紳士とかいふ者ども程俗物の極なんだからね。少しでも習慣や儀式に従はない者があつたり、そういふ自稱善人の御思召おしめがしにかなはなかつたりする者があれば、何の理由もなく、すぐ罪人視されてしまふんだ。……内側うちがはにある生命いのちだつたからあの世で生きてゐられたのかも知れない。……お前なども弱い生命いのちだつたからあの世で生きてゐられたのかも知れない。

ラザロ　私がこゝへ參る少し前から、あの世では随分いろんな争闘が行はれてゐるやうでした。

アブラハム　そうだ。たしか今夜の中に誰か又こゝへ來るものがあるとか言つてゐた。……（獨語）矢張殺されたいのだ。今夜の男は少し面白い男かも知れない。

ラザロ　どなたですか、殺されたりしたのは……

アブラハム　私も精しいことは知らないのだ……もう五時だ。おき來るだらう。



とへば病、死、廢滅、そういふやうなもののから私はいつも生き／＼したものを見出したのです。

争ひの中からも音楽や詩を見出さうとしたりしました。……勿論この通りの身體ですから私は争

ひなどは滅多にやりあしませんでしたけれど

アブラハム

お前はあの男の使つてゐる下男なんかに種々な目にあはされても何とも思はなかつた

のかい。

ラザロ

そりあ随分つらうござんした。

アブラハム

お前は乞食こじきなどをして何とも思はなかつたのかい、耻かしいとも何とも……

ラザロ

それは別に何とも思ひませんでした。

アブラハム

その點に就てはお前も無意識だつたのだね。

ラザロ

難有いとは思ひましたが耻かしいといふ氣は少しもありませんでした。……

アブラハム

物をやる者が輕蔑するやうな態度を示したりしあしなかつたかい。

ラザロ

そんな事があつたかも知れませんが、それよりも難有いと思ふほうが Predominate して

ゐました。

アブラハム

お前は随分身體からだがいけなくなつて、犬なんかに腫物の膿うみを吸すはせてたといふ話だね。

ラザロ

そんな事はありません。あれは何とかいふ、……一寸名を忘れましたが……誰か間違つて

傳へたので、肺と心臓と目が悪かつただけで、そんな悪い病氣ではなかつたのです。

アブラハム

そりあそうだらう。そんな病氣だつたらあの男が一日だつてお前を門の前に立たせて

あきあしなかつたらうから……

ラザロ　　そうですね……今でも私はあの時の自分の身體からだの事が思ひ出されます。私のうちにある生命いのちがじつと静まつてくると、それが非常に稀薄きはくになつて震へて來たものです。耳とたましいだけがうちに残つてゐるのだなと思つたりしました。それ程私の生命いのちは弱かつたのです。

アブラハム　　お前はそんな纖弱いよちい生命いのちでよく今日まで生きてゐられたもんだね。

ラザロ　　弱いよちいから生きてゐられたのでせう。これが強かつたらこう何時いつも Passive にばかり行けなかつたかも知れません。

アブラハム　　お前は死の中にも生命いのちを見出すと言つたね。

ラザロ　　え、申しました。

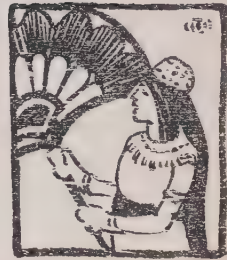
アブラハム　　それは矢張お前が経験したのかい。

ラザロ　　え、経験したのです。

アブラハム　　ほんとの愛といふものは醜みにくをも不義をも愛しなければならんてな事をいふものがあるそうですね。

ラザロ　　そんな事とは全く異ちがひます。醜みにくは惡わるみます。不義ふぎは惡わるみます。醜みにくそのもの、不義ふぎそのものに生命いのちはありません。死そのものゝ中に生命いのちがあるのぢやありません。生命いのちはたゞ生命いのちからばかり流れて參ります。

アブラハム　　それで？



## ラザロとアブラハム

佐藤 清

ラザロ お歸りなさい。今日はあ早うございましたね。

アブラハム あゝ……あの男は何處かへ行つたのかい。ゐないやうだが……

ラザロ いゝえ、あすここに休んでゐるのですが、少し腸胃に熱があると見えて、頻りに苦しがつてゐます。

アブラハム 水でもやればいゝに……

ラザロ 水をやつても何うしても呑まないのです。そのくせ水をくれ水をくれと頻りに言ふんです  
が……

アブラハム そうだらう、少し頭がわるい男のやうだから……

ラザロ それでも腹のわるい人ではないやうですが……

アブラハム 世の中にほんとに腹のわるい人なんてあるものぢやないよ。みんな人がよすぎるの

だ……それだから境遇のために負けてしまふのだ……もう少し腹のわるいといふと語弊があるけれ

ど……もつと／＼性格の強みのある人間が來ると面白いがな……此頃はそういう男は少しも見掛けない……お前は何うしてあの男の門なんか立つてゐたんだい。

**ラザロ** どうしてあの方の門<sup>かた</sup>なんか立つてゐたんでせうね、ほんとに……何でも私はあの方の家が餘程美しい建築であつたやうに記憶してゐます。前は一寸した湖水でその見晴らしの上にコリン<sup>ふう</sup>ト風の石造が立つてゐたのです。その丘<sup>やま</sup>が門のところまでずつと庭になつてゐて、そこには種々な<sup>いろん</sup>香りの高い花が咲いてゐたのです。私は夕方などそこを通つて行くと誰も人がをらないのです。私はじつとして其建築を見てゐると、時がたつのさへ知らずにゐる程でした。

**アブラハム** そんなにいゝ建築だつたのかい。

**ラザロ** それはほんとうにいゝ建築でした。……御主人よりも私の方が餘程よくあの建築から快樂を享<sup>う</sup>けいれてゐると思ふことが度々<sup>たびたび</sup>でした。

**アブラハム** お前はまだ unconscious religion という事を知らないのだ。そればかりぢやない。あの男の方では建築に就ては無意識でゐられる程にもつと他の事について意識してたのかも知れないのだ。

**ラザロ** そうかも知れませんが……しかしあの方が意識しない事を私が意識して鑒賞してゐられたと思ふと、それだけ私は幸福であつたのです。

**アブラハム** そりあそうだ。……お前の方が餘程幸福であつたかも知れない。

**ラザロ** 私は何時<sup>いつ</sup>もそういう風<sup>ふう</sup>にばかり考へるのが癖<sup>くせ</sup>でした。他人がいやだと思つてゐること、た



### FLASHES OF THOUGHT.

At night I study by light.  
Some limit is reached and I stop.  
I retire to sleep and lie down in the dark.  
Suddenly some thought never known before flashes out.  
So often limitation is surpassed in this way.

Why do these flashes shun the light and visit me in the dark?  
Or do they avoid me when they are sought and surprise me when I  
give up the research?

---

### A DREAM.

At night I dream a dream.  
The moment I awake I think it a splendid vision.  
Some poetry or philosophy seems involved.  
I get up and wash my face.  
The vision vanishes a common dream.

---

### WILL IT ENDURE?

Late at night, poetry arises in me.  
But I am too tired to record it.  
Wait till morning, my freshness will return.  
But will poetry endure with me till then?  
That is a grave question.

---

### THE LOST THOUGHT.

#### 1.

O the lost thought that was once mine!  
Do what I may, I cannot recall you.  
From what ream did you visit me before?  
Unto what region are you gone forever?

#### 2.

O the lost thought that was once mine!  
Gone as you are, are you not a thing of reality?  
If so, where is the dwelling place of your being now?

#### 3.

To Heaven are you returned?  
Or are you with some other mind on earth yet?  
Did some one treat you so carefully that you made your permanent  
abode in him?

## AT A MOUNTAIN PASS.

### 1.

I once was passing a mountain pass.  
The hills were clad in autumnal glory.  
Admiring the scene I went on.  
Suddenly I heard a sound of hatchet.  
“Cho! cho! cho!” it sounded.  
It came from the gorge below, but nowhere a shadow of man.  
It was all green, yellow, orange, and red leaves.

“Cho! cho! cho!” it continued.  
Then at the foot of an opposite hill, I saw a tree with yellow leaves  
inclining on one side.  
It fell and, at the space left vacant, a man’s head covered with  
*tenugui* appeared.  
There was the wood-cutter intruding upon the sanctity of hills, but  
at the same time animating the solitude with human presence.

### 2.

I came upon a precipice.  
The gorge was some hundred feet deep.  
A step missed, and one will be lost.  
I picked a broken piece of rock and threw it down.  
O how it jumped and jumped and jumped, as it fell precipitately  
smiting the rocky wall below!  
Amused I threw down more pieces.  
But some was caught, after a jump, in a hollow.  
Some made only two or three jumps and stopped.  
Some made a curb and ran away obliquely.  
Some, after splendid jumps, reached the stream far below.  
I began to feel that I was like Father Time in Maeterlinck’s  
“Royaume de l’Avenir,” starting the children to earth.  
For in the flights of these rock-pieces, I saw the symbols of human  
lives.

驗に若かない。一派の人々が實驗の宗教を力説するには私は飽くまで賛成である。が、この實驗より出て、教權に行くと哲學に行くとは、自ら二途あるやうである。實驗を得て一度正定聚に達したるものゝ、やがては現實生活の凡夫に歸りて再び行くところを失ふとき、經典や教權に飛び込むことの出来る人は、自己經驗を教祖のそれに影照して、その宗派の中に生命を見出すことが出来る。ことに於いてか、宗教的儀式は新らたなる生命を獲る。宗教にはどうしても儀禮の要求は離されぬ。基督教に於ける集會祈禱、佛教に於ける勤

行には、深遠なる根據がある。現今行はるゝ靜座法の如きもたしかにこゝをとらへて居ることゝ私を見る。しかるに、こゝに歸ることが出來ず、一般的意識現象の一として、冷やかに自己を見るに至る時は、その人は必然に思索の天地にさまよはねばならぬ。これ又、禁斷の果を食ひし人の止むを得ぬ報である。

註。本文用ゆるところの「神」の意義は必ずしも基督教の「ゴツド」を意味せず。吾人の崇拜の對象たる神靈體を指したものと解すべきである。(二九一四、二、一五)

4.

Whether in heaven or on earth, would you not sometimes look back  
upon me, as I look earnestly after you?  
Then what is the obstacle that interrupts us to meet again?

---

**FLESH AND BLOOD.**

I looked at a noon-day sun.  
A glance caught a fire-ball but the eyes evaded the sight at once.  
I shut the eyes and faced the sun.  
The eyelids seemed crimson red. Then it turned dark red.  
Suddenly bright orange flashed out, and then golden yellow.  
Such is the rich beauty of our flesh and blood.

---

**DREAMS OF FLIGHT.**

Formerly I often dreamed that I could fly in the air.  
Without any machine but simply by moving hands.  
What joy it was to go over houses, forests, hills, and rivers!  
And what pride to take aerial flight when all other people are  
strolling on earth!  
But after awakening my disappointment was great.  
I felt like a fallen angel.  
As such disappointment was repeated again and again, at last I  
began to feel assured in dream that the flight I was taking this  
time was not a dream as before but a fact.

After aeroplanes came into vogue and I saw them actually in the  
air, my dreams of flight disappeared for good.

Dreams and dreamy assurances are giving place to new reality.

---

**EVER NEW.**

When I see obstinate conservatism, I become disgusted.  
When I see renovations, I feel refreshed.  
But when I see some permanent values among constant changes, I  
am struck with admiration.  
Shakespeare in English, Goethe in German,—eternal strength.  
But are they not lasting, because they are ever new?

**Tetsuzō Okada.**



文は得なければならぬ。況んや、善導大師のいはゆる機法二種の深信、我身は現にこれ罪惡深重の凡夫、曠劫よりこの方、常に没み常に流轉して、出離の縁なきものと知り、而もこれをすて給はざる如來いますと深信することは、救済宗教の本質なるが如くにして、もし宗教成立するとせば、根本惡は缺くべからざる設定である。世の解脱宗教に於ても、果して吾人が本來の面目に於て、佛陀の當體であるか、神の本質を具へて居るものであるかは、未だにはかにこれを知らずとするも、神の本質あるものが、今迄これを知らず、佛陀の當體なるものが、それを自覺するに至るまでには、一種の轉機を経なければならぬと見做すが至當であらう。我生れながらにして絶對なり。我生るゝ時、既に神なりとの自覺を持つものもあるまい。自然の化育によつて、靈の眼はその急進と緩徐とを問はず、つぎつぎに開發するのである。もし一派の見解に従つて、人性は猶太教に主張せらるゝが如く、全く自然を滅することの出来るものでなく、全く神なる人なく、又全く自然なる人もなく

その道德的生活も宗教的生活も、要は有機的生活の特異の見解、狀態、經過にすぎず、全體の生活として見れば、一體なるところのものも表現の方面に於て、方向の差、力の入れどころ、方法の異のみとするも、道德は、どうしても人に守るべき規律を與へ、それが束縛の感に伴ふを免れない。尤も其の醇化せられたるものにありては、自然の温情をも生じ宗教の牙城にまで喰ひ入るものなしとはせず。ストア派の人々の中にはかゝるものを多く見るけれども、要するに道德は苦闘なりとは、倫理學者の揚言するところである。道德に於ては前にもいふが如く、宗教の滋味全くないといふのではないが、後者にあつては、そのよく發達したるものは、神に對する奉仕を決して束縛として感ずべきでない。厭々ながらの服従ではなくして、感謝の念、歡喜の心に伴ふを特徴とするは、既に述べたるが如くである。

されば、もし人間の活力にして無限に開發すべきものとし、その發展の經路に種々相あるとを許し、宗教的經驗は特にその顯著なるものとするな

らば、少くとも一段は一段と明かに、人間の睿智の躍進するその目醒ましき活動の跡として、決して輕視することは出来ない。こゝに宗教的經驗を力說する必要を認め、コンバージョンに宗教的重要な意義あるを知らなければならぬ所以である。さればとて、兼ねてもいふ如く、これを以て「悟」そのものとしてはならない。親鸞上人も「廻心といふことたゞひとたびあるべし」といふて、コンバージョンを重要視して居るにもかかはらず、煩惱具足の身を以て、悟を開くといふやうな生氣意な考を起してはならぬと警告を與へて居る。綱島梁川氏が一度見神の實驗をなして後、淨財問題とか、勞働問題とかいふ實際問題の解決に向ひつゝ、あつた傾向は面白かつた。もしあの人が今少し生きて居られたなら、どういふ風に見神の意義を解釋し應用するやうになつたであらうかとは、私には興味ある問題である。とまれ、コンバージョンに於ける悟の分子は爪の垢、毛髮の末までも行き亘らねば駄目である。況んやこの經驗は、全人格の變換であること勿論であるが、比較的青年期の

現象に屬する丈に、情緒的方面の勝ることを免れない。個人、國民、種族の宗教的價值を定むるに於て、第一の問題は、いかに彼等が感ずるかといふことではない。彼等の如何に信ずるか、いかに考ふるか、いかに行ふかといふことである。即ち彼等の宗教が情緒に於いて、いかに現るゝかといふことではなく、神の觀念が、いかに情緒を溢れしめ、行動を支配するかといふことである。感情は、宗教の最も深き機能であつて、哲學的、神學的形式は第二次的のものとせらるゝに、いふまでもなく根據はあるが、それはたゞ宗教の基礎にすぎない。その性質價值の決定せらるゝは、感情によつてゝはない。人は、その實行の要求にも、皆それゝ適當の地位を與へなければならぬ。加之、哲學的要求が、人と動物とを區別する所以なりとする以上、その經驗にも相當の哲學的根據は必然的に必要である。こゝに於てか、宗教哲學は起つたものと見るべきである。而も、實驗的基本なきものゝ空論なるはいふまでもなく、これぞまさしく宗教の眞偽の分るゝ所以で百萬の經文も一の實

ない。沉んや暴君とは尙更思はない。神は、たゞ麗はしい調和的世界の生氣ある靈である。人生に向つて恩恵深く極めて親切であつて、慈愛に富むとなす。これ等の人は、全く形而上的傾向がなく自己自身を反省するといふことを敢てしない。従つて、自分の不完全や罪のために苦しめらるゝといふこともない。さりとて、自から正しいとして居るのではない。全くかくの如き事を考へたことがないといふのが一層正しい。彼等の天性から來るこの子供らしい心は、この宗教心の發露に於ても、極めて樂天的である。そは、神を恐るゝことなく、嚴しき權威を感ずることもなく、神はたゞ親切と美との人格化のみであるからである。神の性格を人性の蕪雜不秩序の裡に見出さず、憧憬的調和的自然の中に見るのである。人間の罪といふことについては、彼等は恐らくたゞ僅かにこれを知るのみであらう。世界の根本惡といふやうなことにについては、考へた事すらない。苦はある、

しかしながら、それは彼等の平和を破壊することなくして自から神に近づく。而して、その時何等

内心の顛倒は經驗しない。全く精神的になるといふではないが、なほ且つ一種の満足を有し、心に崇拜の對象をも保ち、憧憬的興奮をも感ずる。

實に、ある系統に屬する人の間にありては、人は罪の自覺を有しない。彼等とても、殘酷の悪いことを知つて居る。貪慾の賤しむべく、飲酒の攝すべく、色慾の多く身を滅すべき、怠惰怯懦の改むべき、其他具體的罪に就ては、自覺を有し相當の煩悶をもなす。而して、一步一步その醜惡を除く去せんとする。さりながら、彼等は神に對する罪といふやうなことになる、とんと無智である。彼等のいふところを聞くと、かうである。

わしは、わしの生活に於て、随分悪いこともした。しかし、今もなほこれが止められない。けれども、わしは神を憎むの所存は毛頭ない。正義は最もこれを愛する。わしは失敗することもある。然らば再び試みるまでの事だ。さうわしを惡人扱ひにして呉れるな。わしは、わしの中にも多くの善があるのを知つて居る。

と。

スターバックはいふ、多くの自叙傳中に見る宗

教の煩悶は、其人物の性格をなすに殆んど缺くべからざるが如くに思はるゝ。しかしながら、早くから神の子であるといふことを教へ込まれた人は汝は善をなすことが出来ないものだと言へ込まれたものよりは、幸福であらう。元來、自由主義の人は、永遠の罰を知らない。人は即ち神聖なりと主張する。罪とは、充分に發達せざる人の狀態に附帶せる一つの病弊のみである。故にそれを苦にするは、却つてその病症を進行せしむるのみだ。數千年の後には、靈的にも、生理的にも、何人も罪や惡を感じないやうにならうと。かのアメリカに起りつゝありと稱せらるゝ社會的宗教の如きが即ちこれに類する。彼等は、單に神を以て社會的意識から成生したる理想的價值と見る。

罪とは困窮である。困窮とは貧乏である。而して、貧乏を救済するものは、たゞ收入あるのみ。

とは、彼等の常套語である。貧窮は變態を生ず、變態は罪惡である。人はたゞ常態となるべし。かく人を眞正の常態に復歸せしむるもの、即ちこれ

神であると。かくの如く宗教を見れば、宗教的意識は社會的意識に於ける理想的價值の分前を取るにすぎない。然らば、もしこの社會的意識に分け入らざるものありとせば、その人には宗教的意識はなくて可なる譯である。さればエームスは遊獵家孤獨者等、社會的關係を有せざる人は、非宗教的なる者とする。しかし又一方にては、これ等の人々と雖も、全然社會的事項に關與しない譯ではないから、眞に非宗教的たる人はないといふ。

かくの如き考は、近來諸方面に勢力を占めつゝあるやうである。さりながら、これは宗教の否定である。宗教の否定、吾人はなほ且つこれを辭しない。しかしながら、如上の見解の淺薄にして不徹底なるはいふまでもあるまい。ベンジャミン・キッドの如きすら宗教の機能を、その社會的進化論に於て、社會の超理性的意識に置いて居るではないか。シヨウペンハウエルの語を借りずとも、人は形而上的要素なくては生さされるものではない。形には囚はれずとも善い。しかしながら生命



(二)

## 八、感謝の念から起る必然的な努力即傳道的神

これから先、どうしやうかと力むものではありませんが、前には全くの無力で自己の小天地に拘束されて身動きも出来ぬやうであつたが、非常なる力が出て来て、この御慈悲の事に就ては、誰に劣つてなるものか、出来る丈、眞面目にもなりませう。粉骨碎身も致しませうといふやうな氣も致します。兎に角、何うかして、一生涯かゝつてもいひ表はして見たいと思つて居ます。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。(入信、歸結、)

かくの如き經驗はこれ丈の範圍に於て、眞實である。私は、たしかにこれによつて再生を経験した。これが私の人生觀、戀愛觀、處世觀の原動力になつて居ることは確實で、一切の生命の發展がこれから萌芽を發して居ることは、數年の後を経過してどうしても否定することの出来ぬ事實である。私の我執の本城はこの時に打破せられて、これから以後、私としては分相應に生長が速になつたやうである。私には、何にもかへられぬ貴うとき寶である。だから一時は、これを得たそのうれしまぎれに有頂天になつて傳道的精神に燃え

た。されどかなしい哉、それはなほ進むべき餘地のあるものであつた。眇たる私一己の經驗に過ぎなかつた。誠に、前に比較すれば、やゝよき生活をなすことの出来る身にして貰つたとは事實であるが、これが果して冷かに考へてどれ丈の價値を與ふべきであらうかは、慎重に考慮をめぐらさねばならぬ。ある宗教にありては(眞宗に於ける一念の救済を過重する一派の如き)この現象を以て殆んど宗教そのものとなすの風がある。否、私自身も一時はかく考へて、宗教そのものを體得してしまつた如き感があつた。しかも、自然の大法の嚴然たる、因果の理法の一毫も私するところなき、誠に秋霜烈日の感なくんばあらず、凜然として驚かざるを得ない。茄子の木にはついに胡瓜はならなかつた。忽ちにして一上一下、反動的悲痛の經驗は起りました。これは單に「門」であつて眞の靈化の状態に至らなければ、宗教の効能はないものである。たゞこれのみを重要視すべきではない。況んや一種の人々にありては、前にも一寸觸れて置いた如く、これなくして終る人もあるに

於ておや。事實に於て優秀なる人で眞の意味にては、神の僕たり佛の子であるにもかゝはらず、たゞ急激なる變化をなす事が出來ず、有神教にいはゆる天國の子供となること能はず、見えざるを想像することが不可能なるが故に、非宗教的だといはるゝ人も可なりとはいはれない。又茲に、多くの教育家、博愛家、愛國家等は、既成宗教の組織外に立つけれども、彼等自らを民族の苦痛のため、人生改良のため犠牲とすることを敢て辭しない。これ等も、傳說的宗教の意義によれば、無宗教者なりといはれても仕方がない。しかしながら、よし外部的に、便宜的信仰儀式に反對するとも、新らしき意義に於てこれを見れば、かゝる英雄的行爲には、何等かの精神的根據があると見做さねばならぬ。宗教はどう考へて見ても、形式のことよりは精神のことである。外見上明かに宗教に反せりと思はるゝ人で、却つて宗教的であることが往々にしてあることを忘れてはならない。宗教とは、生を得、又これを充分に表はさんとの要求にすぎないから、この要求さへ充たさるれば、

形式は問はないのである。而してこの要求は、凡ての時代を通じて、日々の糧のやうになくてはならぬものとして、今も昔も變らずに存在するのである。

されば、基督教中メソヂストの一派は、人は必ず一度生れ更らねばならぬとし、この變化を経験しなければ救済はたゞ神より豫約されたるのみであつて、事實に於ては受取られない。基督の犠牲は、かゝる形式の範圍内に於てのみ有効であるとするに反し、新教にあつても、急激なる變化を重じない宗派が多く、一步進んで聖教徒にあつては自己屈服、自己放棄の危機を確然と經驗しなくとも、基督の血を飲む聖晚餐の宗教的義務の履行が救済に充分であるとせらるゝに至つた。

ニューマンはいふ、

神はこの世に二つの民族を産めり。一生族と再生族と即ちこれなり。

と、再生族とは、明かなるコンバージョンの所有者なること勿論であるが、一生族と稱せらるべきものにありては、彼等は神を嚴格なる判官とは見

間の側からいへば、たゞ眞の自己屈服が最大の要素である。これさへ出来ればいいのである。しかしながら、眞に頭の下るのは、中々むづかしい。下りかけた時は、既に神の意志の働さかけた時だとも見ることが出来る。

## 今この心境を、少しく具體的に列挙するならば 一、宥免

私は、信仰もないのに、信仰のあるやうな風をしたことが心を苦めた、それは、佛に對して悪いのであらうか、人に對して濟まないであらうかといふことを考へ出す時に、……私は、人に對しても、佛に對しても、そんな區別はなく、偽善者であります。惡人であります。惡人に惡人といふ自覺が起る譯がない。惡人と知らして貰つたのも佛恩、之が氣に懸らぬのも佛恩あゝたゞ南無阿彌陀佛。(入信、二〇六—二〇七、)

## 二、神に向つての絶對の信順

今、實家の二階で筆を取る私の眼には、不思議や涙が湧いて仕方がない。五劫思惟の願といはうか、永載永劫の御苦勞といはうか、あゝ南無阿彌陀佛。斯くばかりの御慈悲、この上は、たゞ生かすなりと、殺すなりと、御心のまゝにせしめ給へ。出離の縁のなかつた私、助かる道のなかつた私、今はたゞ御慈悲に酬ふのでみある。(入信、二一六、)

基督我に於て生けるなり。我生けるに非ず。(ポーロ) シュライエルマツヘルの絶對歸依の感情。

たとへ、法然上人にすかされ參らせて、地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候。(噴異鈔)

たとへ、近角先生に欺かれて、地獄に墮ちたりとも、後悔はしない。あゝ、この御慈悲一つ、併し、今は私はどうしても地獄へ墮ちやうなど、は思へません。(入信、二〇二、)

## 三、無私の懺悔

今はただ感謝の念佛、懺悔の念佛のみである。懺悔は中々出来ないものである。樂なものではない。今迄の懺悔といふやうなものは、皆、言譯であつた。眞の御慈悲に氣がつかなければ、到底、懺悔も出来ないことだらうと思ひます。眞の懺悔が出来るのも、御慈悲あればこそ、世間ただ南無阿彌陀佛より外に、頼りになるものはありません。(入信、二二三、)

## 四、神若くは宗祖、自然人類と一體の感

一人して悦ばゞ、二人と思へ。二人して悦ばゞ三人と思へ。その一人は親鸞なりとの御言葉難有く存じます。親鸞上人の全人格は、今は自己意識に投入し來りて、默契融合些の間隔がない。あゝ私の心中には、親鸞上人が生きて居る。釋尊は既に歴史的人格でない。何ともいへぬ味である。上人の信仰と絶對的に同一信念なるを味うて居ります。近角先生のとも同一だ。私の信念に同慶して下さるのは先生だ。私のよるこぶ奥の奥を、先の先から、悦んで下さるのは先生だ。渴仰に堪へられぬ。(入

信、二一四、)

絶對の慈悲に氣がついて、初めて總てのものに感謝が出来る。この御慈悲がなかつたならば、私は何も出来なかつたのである世の中に頼りになるものは、ただ御慈悲一つといふことがよく味はれました。あゝ御慈新道の谷川の音、那須のそれとは變らねど、變り果てたるは我が心哉。(入信、二〇九、)

たゞ、私は斯ういふことだけをいつて置きたい。私は、人と話をするにも、ボビユラーな遣方では満足が出来ない。面と面と向き合ひ、心と心と相照さねば駄目なのだ、人づてなどで、自分の心が通ずるものではない。如來との交渉は面接でなければならぬ。直接に光に接しなければならぬ。直ちに聲を聞かねばならぬ。論理や理屈の仲介を許さない。佛の慈悲は、我にそを誘導せしめては、御心を休ませ給はぬとの御言葉、無限の法悦を感じる哉。我助からでは本願空しかるべし。親一人、子一人だ。佛心我心に寫つたといふを最も適當とすべきであらう。御慈悲を離して遠くに置くのではない。如何に大悲の佛いますとも、私が御心を受けねば、何にもならぬ。片思では駄目だ。

月影の至らぬ里はなけれども、眺むる人の心にぞすむ。

如來の光明は十方世界を遍照するが、念佛の衆生をこそ攝取し給へ。(入信、二一八——二一九、)

## 五、平安

嬉しさに騒ぐ胸は何うしても静まらない。尻はどつかとすわつて居る。何といふ落つきだらう。如來三昧といはうか、法悦の至極といはうか、何にも要らぬ、たゞこのまゝとは、この境で

初めていへる。何をやつても差支はないとは、この境で初めていへる。……かく御慈悲に氣がついて見れば、一切の心配事は皆消え失せた。何等の不安がない。全くの自由境だ。一切を捨てた。(入信、二一六、)

## 六、強烈なる愛情

一切を捨てたが、かの友はどうしても捨てられませんでした。愛にも色々の種類がある。徒らに盲情に支配されて、ねばつき居るを以て、其能事終れりとなす、小人の愛のみ。婦女子の愛のみ。今は、これをも捨つことが出来て、いふべからざる今迄ついぞ経験したことなき愛情が、彼等の上に湧きます。眞の弟のやうです、彼等から何物をも要求せざる愛である。これが眞の無我の愛ではあるまいか。凡ての欲求は充たされた。御慈悲に腹がふくれたといふのはかういふのを云ふのでせうか。初め二三日は、ただ心が躍るばかり、涙が眼に浮ぶのみ。……こんな喜びは長く續かぬかも知れぬ。而も、正定聚の位には既に入つたのである。佛の存在を議するを止めよ。極樂の存否をいふを止めよ。信の一念で、これ等のすべては解決せらるゝ。肉體終ると共に、絶對に人を愛することの出来る身にして下さるといふ。その模寫は、既に見せられた。よろこび何とも譬へられせん。(入信、二〇六、二二〇、)

## 七、信念の普遍性の確信。

然しながら、私のよろこびは、決して私一人の悦ではありません。私を中心として動いて居て哭れた一切の友達の上にも、何時かは屹度この心が傳はるだらうと確信します。(入信、二〇



大の苦惱の後、新生を得て、その喜ばしさをいひ表はしてはいはく。

何の理屈もなく私の苦みは何處へやら去つて、しばし茫然たるものがあり、私は初めは喜ぶことも知らなかつたが、後の涙は歡喜のそれか、少したつてから、南無阿彌陀佛が先生の後について軽く唱へられた。解つたなどゝはいはぬ。悟つたなどゝはいはぬ。何といつていゝか、とてもともいひ表はせませぬ。絶対の慈悲に氣付いたといはうか、氣付かして貰つたといはうか、心身脱落といはうか、復活といはうか、往生といはうか、救済といはうか、無我といはうか、純一無雜といはうか、宿緣開發といはうか、神を見たといはうか、佛に遇つたといはうか、天地轉動といはうか、如何なる形容詞を用うるも足らぬ。南無阿彌陀佛の外はいふべき言葉を持たないのである。佛があると思ふのだとか、信ずるのだとか、難有いと思ふのだとか、自分で悦ぶのだとか、そんなまどろこしい事ではない。たゞ南無阿彌陀佛。この御名の中に、斯く迄深き意味ありとは、ついぞ知らなかつた。其時の有様は、心も言葉も眞に及ばぬ。口に出せば既に私の偽善の雲に蔽はれてしまひます。私は、自分一人で樂んで居るより外はないのだ。曰く言ひ難しだ。一切沈黙を守らうかと思つた。今迄、自分一人で苦しんで居るより外はないと思つた身が、自分一人で樂むより外はないといふ、霄壤の差といはうか、雲泥の異といはうか、其悦、その變化、あゝ、我は如何にしていひ表はさん。人間の力では迎へ出来ないと思ひ

ます。(拙著、人信之徑路、二〇〇)

即ち、人が自己の意志を投げ棄て、より大なる生命に全く信頼した時の心境である。然り而して、その廻轉期に於ける精神狀態は、いふまでもなく苦闘であつて、現在の罪と理想的希求とは、まさしく正反對に立ち、其兩者のいづれが果して意識を占領せん、潛識に於てなごらに、しばしは争鬭の有様である。その苦みといふ、往々にして生か死かの境地にまで至る。我また曾てその境を自ら記したるものに、

之が續くならば、末はどうなるであらうと思つた。氣狂ひに大分近くなつて居る心狀で、少しも、自分の心が自分で制御することの出来ないのだから、之が永引くならば、發狂するだらうと思つた。自己は狂すれば幸だ。今の場合、死か、狂か、信仰かの三つより外に、自分の行くべき道はないのだ。信仰には囚はれてこの有様、死するには、それだけの氣力が要る。今はそれも消失して居るのだ。狂するを待つか、心の開けるを待つかそれより外に道はない。晝夜不斷百日以上之苦闘。狂せざるが寧ろ不思議な位ではないか。夜、床に入れば、苦悶の聲を張り上げて人をして恐れしめ、そはそはして家人をして了解に苦むの不安を懷かしめ、……かくの如き時は、如何なる墮落でも難かしい事はない。否、それも出来ない。……

かゝる場合、理想的生命は屢々忽然として、電光的に出生し、精神の自由と大悦とを與ふ。小我に死して、大我に生きたるものか。實に、人間の心ほど微妙にして、不可思議なるものはない。余の人間研究に一生を捧げて、敢て惜しからずと思ふ所以、このいみじき神秘の鑰のいかにしてか全く開かれたる時、その莊嚴のいばかりなるべきかを思ふからである。しかして、これは恐らく無限の彼方にあらう。とまれ、この新光の未來に於て、自己の意志は終末を告げ、心内に於ける光の王と、闇の力との争は、ついに打撻れて、神の意志は心の全野を占領したのである。嘗て弱かりしかども、今、弱からず。嘗て意志不定であつたが今は、堅き決心と、強烈なる意志とに誇ることが出来る。コンバージョンの進行に於ては、一派の論者によりては意志は價值のないものゝやうに思はるゝが、決してさうではなく、人の新生に入りたる後の強き力感、意志以外には到底考へられなない。心理學的に考察すれば、充分の重みをこれに置かねばならぬこと勿論である。

私には、今、非常に智慧の眼が開いてゐる。盲情に支配せられずに正邪の判断がつく。斷々乎として行へる。意志の力が猛烈に働いて居る。何物をも恐れぬ。あゝ、何といふても駄目だ信仰の餘瀝といふことが一番難有い。云ふはたゞ餘瀝のみ。行ふはたゞ餘瀝のみ。(入信、二一八)

こゝに一つの矛盾がある。それは、コンバージョンには前にも述ぶるが如く二つの要素があつて自己の屈服と神よりの恩寵との相合する時、神と合一して罪惡の自覺に忽然として、新生に突入するのであるから、この意志の働といふ、つまりは再生の意志であつて、餘程本質的で且つ神秘的風光を帶ぶるものと見なければならぬ。曰くいひ難し矣の感は、どうしても免れぬ。即ち、其意志は、無意識の信仰に方向を與ふるもの、換言すれば、潜在無識に於ける人間無限の能力が、まばゆさばかりのうるはしさを以て、光照するものであるから、神の意志を意志とするといふ表現法を用ゆるの決して無理ならぬを見る。全く没我の状態である。無我の經過である。こゝには個人意志は生きて居らぬ。「死して働く」この間の消息は、實に知る人ぞ知る。冷暖自知である。であるから、人

から共に全然的成功として歡迎せられた。

噫！かの巨大なる老人（トルストイ）は彼の夢想の實現を見るべく運命づけられてゐなかつた。政府が終にトルストイの豫言した如く革命を粉碎し得た時政府は何等農地改革の大計畫に着手するらしい様子がなかつた。機會は失はれた。而も早速戻つて來さうにもなかつた。若し外形上の成功といふものが偉大及び成就を量定する標準であるならば、トルストイの政治的乃至社會的傳道は何等彼の名聲に加ふる所がなかつたであらう。何となれば其は殆ど一個の全然的な失敗であつた。彼の排戰論は日露戰爭を阻止するに到らなかつた。革命に對する彼の非難は市街に於ける虐殺を止めなかつた。併し後世は、今日我々が當時のフロレンス人が何故ダンテ乃至はサヴォナローラ（Savonarola）の哭訴に耳傾けなかつたかを考へる以上彼の同時代の人々が彼の使命に傾聴したか如何かを熟

慮して歇まないであらう。後世の熟思する所は凡ての輿論を物ともしない男々しい人格の雄大な閃き。——罵詈譏の矢面に立つて人民の面前に人道の高遠な理想を捧げつけた巨大な老人の觀相である。トルストイが世界に與へた所のもの、而して彼が其爲に闘つた幾多の主張目的が全然忘れて終つた後も長く一個の靈感たるであらう所のものは實に其現示である。（此點は一九〇九年アウトルツト氏の淺薄な誇張的な論文の中に一寸論ぜられてをる）

モンテイグの言葉に

“Il y a des défaites triomphantes à l'envi des victoires.”

トルストイの如き夢想家の失敗は、實際的な政治家の成功よりも、一層建設的であり、又一層光榮あるものである。



## 宗教的經驗とは何ぞや

(下)

鈴木龍司

エームスやコウ教授の如きは、これらの現象を以て催眠状態の一種なりとするが、それら學者の説明はいかにともあれ、實驗上、いかなる通路を経るも、自己屈服の後には、必ず新生がある。自己否定の後には、必ず猛烈なる自己肯定が生ずる。この場合に於ては、前には客觀的に見られたる眞理が、今は自ら生活することが出来るやうにならざるを得ない。されば、コンバージョンに引續いて起るところのものは、不思議の感、眞實在と觸れたりとの感、輕さ心、よろこびの思、和平等の打まぢりたる新らしき感であつて、古き懸念、古き感情、古き怨恨など、すべて舊生涯に附屬して居つたものは、一切消失して、人格は全く打くつろぎ「心柔軟にして善心生ず」といふか、

油然として信仰の念は湧き來るのである。そは、智的活力の新なる勢もて入り來るに聞かれたる壇にても譬ひつべく、人は全く自己を世界的意志に投げかけて、必然的に眞理の受容者生活者となりその活力の機關となる。これをしも、新らしき生活といふ、眞實なる信仰といふ。しからば、即ち信仰とは、舊生涯と新生活との間の差異の内含的の認知であつて、言ひ換へれば、新らしき生活の背後をなすところの力である。この地この境、一切の不安、一切の騷擾、憂鬱、苦惱等は、確實の感と變じ、一層擴大せられたる生命の増進は開展せらる。

筆者自身は今を去ること四年前、齡二十四の秋かゝる經驗を得た。コンバージョンに普遍なる絶



便てふ根據の上に立つて問題を論議すれば、革命黨員の方法に對するトルストイの非難は一種の觀方に於ては十分聰明であり又深遠な政治上の智恵と政界の形勢に關する明確な洞觀に依つて力づけられてをる。叛亂は成功の大なる蓋然性がある時のみ正當視せられ得る。萬一其に對し壓倒してかゝるやうな不利がある場合には其は單に無用の殘虐に終り得るのみである。而して殘虐其自身が畢竟漸次勢力を得つゝある反動に終るのである。

無結果の革命は單に一つの暴動に過ぎなう。而して暴動なるものは其が成功した場合に於てのみ革命たるの威嚴を與へられる。世の中には自由の勢力と抵抗の勢力とを算定する革命的政治家の才能といふものがある。主として貴族及び大學教授から組織せられてをるロシア革命家はミラボーやダントンの如き人々を特性づけてゐた其政治家的材能を著しく缺いてをつた。(自分は拙稿「フランス革命中に於て此點を更に敷衍しておいた。マウリス・ペーリンゲン氏(Maurice Barin)は彼の名著「ロシア國民」中にロシア革命の同一な「教訓」を力説)法式や憲法上の教義に催眠せられ彼等は偉大なる政治的運動は畢竟宣言書や演説や乃

至は國民大會などに依つて決せらるゝものであると考へ込んだ。若し彼等の政治的洞觀力にして其熱情及び修辭的乃至は議會に於ける才能に匹敵してをつたならば、彼等は最初から人民に訴へ、軍隊に訴へ、而して教會に訴へたであつたらう。一九〇五年一月に於ける「血腥の日曜日」の行列は人民がゲーボン父老(Father Gapon)のやうな彼等の信任してをる首領に對しては何時でも相應するといふことを證據立てた。

あの *Эммануил Пашковский* 叛亂の異常な無法と成功とは——恐らく内亂史に於て唯一無二のものであらう——自分等の生命及び地位を犠牲に供することを決斷し又組織の天資を有してをる少數の勇敢な人々が彼等の企畫を成就し得ることを示してをる。併しロシア革命家は人民に訴へることを誤つた。彼等は軍隊を籠絡し損つた。而して彼等は教會内に勢力を扶植することを蔑視した。彼等は市街戰を闘はずして新聞社、政治上の秘密集會而して後には議會に於て戰闘した。(自分は議會文學に於ける速記録中に含まれてをる四冊の四ツ折判の「書卷(ロシア語)」位異常なる文書を知らない。)トルストイ

は最初から該運動の避く可からざる悲慘な結末の如何なるべきかを看破してをつた。全世界の新聞紙が革命黨員の主張原因に左袒し、彼等の勝利と皇帝政治の敗落とを豫言しつつあつた時、トルストイは該革命は流産に終るべく運命づけられてゐること、凡ての殘虐は無用であると、而して多くの智者は彼等の背後に人民を有してゐないといふことを明らかに看抜いた極少數の人々の中の一人であつた。

彼はロシアに於ては如何なる革命と雖も宗教的であり同時に經濟的のものでなければ到底成功の見込ないことを明らかに實得してをつた。宗教的革命は彼が既に過去廿年間叫び來つたものである。今や彼は經濟的革命の傳教に一身を委ねてをる。過去數年の間彼はヘンリージョージの作物と親しむやうになつた。而して今の所ジョージ主義 (Georgism) が彼に取つて濟度<sup>ヤルケシズム</sup>への唯一の道となつた。吾々は彼が一大經濟的改革を辯護するのは論理に根據するものであるか如何か茲てかれこれ論議立てする必要はない。前にも述べた如くトル

ストイを充分深く研究してゆく人は誰でもすぐ彼が論理的であるか否かといふ問題に煩はされなくなるであらう。眞實重大な問題は斯うである。彼が土地國有論<sup>ランドナショナルイゼーション</sup> (Georgism) を提げて立つた時彼は彼が普通其政治傳道に於てあつたよりも遙かに非空想的で又非夢想家であつた。何となれば若しヘンリージョージにしていつか公平な審問を受けるのであるとすれば、彼は他の何の國に於けるよりもロシア帝國に於て其を得るの、遙かによい機會を有つてゐたといふ事は容認せられなければならぬ。而して此は單にロシアに於ては他の何れの國に於けるよりも土地問題が一層重大であり又人民の九割は尙未だ小農の境涯に沈淪してをるからといふばかりでなく、更に又ロシアに於てのみ政府が斯の如き土地改革の大企畫を實行する力を有してをるからである。五十年前アレキサンダー二世が今日に於ける土地國有論の大計畫よりも更に一層紛糾し、一層大規模であつた農地改革を成就したといふことは記憶されてゐなければならぬ。而して一八六三年の改革は保守自由の兩黨

を表白せしむること。而して彼等の言ふ所を聞いた上は一階級或は一派ののではなく大多數の民衆即ち労働者の集團の要求に沿ふ所のものを充ててやるといふことが必要です。」——

(エールマー、マウド氏、二、五九四)

從來トルストイは未だ曾て獨裁政治に對し公然

敵對の態度を取つたことはなかつた。かの「戦争と平和」中に於てアレキサンダー一世が邪惡其物の權化たるナポレオンとの著しい對比に於て平和の天使として表現せられてゐるのは非常に意味深いことである。農奴解放後トルストイは偉大なる釋放事業の主功をアレキサンダー二世に歸して彼の助言者にも亦輿論の首領にも歸せなかつた。アレキサンダー三世の即位に際して彼は同情に充溢れた手紙を其遺兒(ア三世)に送つた。而して彼は一度も專制政府の根原に疑を挟むやうなこととはなかつた。晩年に到る迄トルストイは不知不識彼の交友なるロシア主義者(Shrophia)の影響の下に止まつてゐたとも言へやう。其等の人々は獨裁政治が世襲的家長的政體として尤もよくロシア國民の必要に適つてをり、又其が純粹な民主政

治に合致するものであると主張してをつた。確にトルストイは中等階級より成る代議政體に對してよりも寧ろ獨裁民主政體(立憲君主政體)に對して多大の同情を有してをつた。

彼の皇帝に送つた手紙に於て彼は初めて官僚政治の惡弊を摘發したのみならず——彼は獨裁政治の根原其物を有害なる時代錯誤なりとして之を否認した。

一九〇四年かの革命運動が爆發した時若し過激派にして皇帝に對する此公開狀の筆者が彼等の味方であり或は少くとも彼等に反對しないだらうといふことを豫期したのであつたなら其は恕す可きであつた。トルストイは不知不識又不本意ながら政體なるものは畢竟等閑視すべきものではなく善にしる惡にしる尤も重大視すべきものであると容してをつた。彼はロシアに於ける憲法上の變革は絶對的に必要であると認容してをつた。併し彼は望まじき終局を齎し得べき唯一の手段に出てやうとはしなかつた。外的生活の現實に就いて驚く可き感覺を有し又内的生活の實在に對して殆ど奇蹟

的な洞察力を把持した一個の思索家であつたけれども、一度彼は實際的な政治論を闘はずやうになり子供の如く觀察し論究した。再び吾人は彼の青年時代に於ける彼自らの認容を追想する。「私は政治家ではない。私には政治といふものが領解らない」。彼は幾十萬といふ官吏の賦與せられたる權勢を以て築き上げられた皇帝政治の如き怖る可き害惡は雄辯な公訴。宣言。及び「皇帝に對する公開狀」に依つて有効に處分せられ得ると考へた。之に反して革命黨員は斯の如き害惡は強暴な方法に依つてのみ除去せられ得べきものと信じてゐた。而して革命黨員自身の場合に在つては此等の方法は彼等の生命及び財産の勇敢な犠牲を意味してをつた。流血（殘虐）を極小にし成功の機會を増大せんがため革命黨員は、恰もロシア改革家が五十年前クリミア戰爭の慘禍後やつた如く日露戰爭に依つて癡痺した皇帝政治の一時的な虛弱を利用した。トルストイは強暴の故を以て彼等の行爲を攻撃し同時に又其言辭の無力なるは主として強暴なる行爲に依つて追求されなかつたからだといふ事

を忘れ無力の故を以て彼等の言辭を攻撃した。歴史はトルストイの如くロシア革命家を批判しないであらう。歴史は立憲民主黨員乃至は士官見習黨員を非難するであらう。併し其は彼等が強暴に過ぎ敢爲に過ぎたからでもなく又彼等が其行爲に餘り多く信頼し過ぎたからでもない。而して寧ろ彼等が其言辭及び宣言に餘り多大なる信憑を寄せたからである。

吾人が此革命の間に於けるトルストイの態度に就いて如何様に考へやうとも彼等の一時的勝利の其時期に於て革命黨の首領に對面するには男々しい勇氣と俗受（俗受）に對する絶對的な蔑視とを要した。而して彼は彼の勇氣に對して十分な料を仕拂はなければならなかつた。唯最近に到つてこそ其は主智主義者の理想であるけれども革命の全危機を通じて彼はロシア帝國内に於ける最も嫌惡せられたる人々の一人であつた。十八ヶ月間彼は荒野に教を説いた。併し誰一人として國家危急の秋に人望ある行路を踏み誤つた彼其人に耳傾けやうとしなかつた。併し全然道義的結果を棄却し單に利



の脚色があるに反し「復活」中には唯一つの脚色しかない。茲に於けるトルストイは古典的統一の法則に忠實である。(古典的統一の法則とは古典劇の三法規たる時、所、所作の統一をいふ。譯者。)

其と同時に吾々は政治的及び精神的材量の豊富に而喰はせられる。此小説が恐らく藝術に於ける彼の最後の企圖であらうと思つて、トルストイは當時彼の胸底に抱藏して居つたあらゆる實際的な大問題に關し、吾々に對して彼の最後の使命を與へやうと着意してをつた。性の問題、土地改革の問題、監獄改良の問題——現代の緊急な宗教及び社會問題——など悉く一篇の「復活」中に集中せられてゐる。

此小説の最後の部分は吾々をしてドストエフスキの「死人の家」を想起せしむる。最初の部分は吾々にヴィクトル・ユートゴの「噫無情」を想ひ出さしめる。ファンテンはマスロヴァの原型でありジャンヴァルジアンはチフリユードフの原型である。トルストイは「噫無情」に對して無限の讚美を有してをつた。而して「藝術とは何ぞや」の中に於て其は彼の標準に合致する僅少な作物の一つであ

つた。併しフランス小説(噫無情)の方に於てはジャンヴァルジアンの更生に何等の心理的説明も或は其準備さへも伴つてゐない。ジャン・ヴァルジアンは加特力の僧侶から忽然として神聖の啓示を受けた。而して終始一貫彼は決して彼の峻嚴な勇敢な男々しさから邪道へ踏迷ふやうなことはなかつた。尙且つ「噫無情」の中に描出されてゐる雰圍氣はデューマのどの小説にも見るやうに浪漫的で又非現實的である。此に反し「復活」に於ては吾々は精神的覺醒の徐々なる展開の徑路を辿ることが出来る。主人公及び女主人公共に依然としてあらゆる誘惑乃至は人生の複雑な勢力に屈服してゐる。ジャン・ヴァルジアンは超人的な土偶人形でありチフリユードフ及びマスロヴァはドコ迄も弱々しい苦み悶えてをる生きた人間である。一九〇二年一月彼は皇帝に對して一つの公開狀を書いた。其は當時ロシア國民がニコラス二世の治下に惱んでゐた壓制に對する峻酷な公訴狀であつた。

獨裁政治(專制君主政治)に關して彼等が未だ皇帝が自ら親しく

人民を統治してゐる信實なる地上の神であると信じてゐた間はロシア人に取つて其が自然であつたかも知れません。併し今や彼等が凡て斯ういふことを知つた以上——或は彼等が少しばかりの教育を受ければすぐ知るであらませう。——即ち先づ第一に善良なる皇帝は單に一つの幸福な偶然の出來事 (un heureux hasard) に過ぎない。又歴代の皇帝はジョン四世やパウロの如く妖怪<sup>モンスター</sup>乃至狂人であるかも知れず又實際然うであつた。而して第二に皇帝が如何に善良で且つ賢明であつたにしても彼は恐らく皇帝の身邊を圍繞する。國利民福といふやうなことよりはむしろ彼等自らの地位に關してより多く心を砕くやうな人々の手を籍りずして親しく一億三千萬の國民を統治することが出來ないといふやうな事を知つた今日に於て獨裁政治の如き實に不自然極まるものであります。皇帝は申されませう。皇帝は不偏なる善良な人民を彼の輔弼に選抜することが出來ると。然しながら不幸にして彼は其をなし得ないので。何となれば彼は僥倖に或は奸策に依つて皇帝の身邊に近づくを得。而して彼等の地位を簞奪しさうな者は凡て此を皇帝から敬遠することに小心翼翼たる數十の人物を識つてゐられるに過ぎないからであります。斯の如くにして皇帝は其の輔弼の臣を選ぶに生々した精神的な眞實文明で又公共事業に一身を挺するやうな尊敬すべき民衆よりせずして Beaumarchais の所謂「何にでも到達する凡庸で諂諛<sup>タレント</sup>の連中」 (Mémoire et rampant, et on parvient à tout) からのみせられるのです。獨裁政治は時代おくれの國家組織です。其は中央アフリカ邊の如き世界から切放された人民の要求に沿ふかも知れません。併し全世界に共通な文明に依つ

て不斷に日進月歩の實を擧げつゝある我ロシア國民の要求ではないので。其故斯の如き政體及び其に纏綿してをる一種の信奉<sup>オールドキシー</sup>ともいふべきものはあらゆる種類の暴逆、即ち攻圍の状態、行政命令に依る追放、死刑の執行、宗教上の迫害、出版物及び新聞紙の禁止、教育の敗壞、概言すればあらゆる種類の罪科及び慘忍な行爲に依つてのみ支持せられるのです。

斯の如きは從來皇帝の統治の行動でした。即ち皇帝が彼等の尤も正當な要求を「痴鈍な妄想」だと呼んで——其は全ロシア國民の憤激を喚起しました。「Admiral」の派遣委員に與へられた皇帝の返答を手初めにフィンランドに關する皇帝のあらゆる條令。支那に於ける強硬。其が却つて陸軍に於ける増師を伴つた海牙平和會議に對する皇帝の企畫。自治政府に對する陛下の檢束乃至は行政上に於ける專制政治の増大。酒精專賣の制度。即ち人民を破滅に陥らしむる毒酒を嚙<sup>くは</sup>ぐ政府に對する陛下の贊同。而して最後にロシア國民に取つて不名譽なるあの無意義な全然不必要な制度の廢止に有利な幾多の事例が陛下に示されてゐるにも不關體刑を保持しやうとせられてゐる陛下の頑迷。——一つとして然らざるものはありません。

脅迫の制度は人民を抑壓することを可能ならしめます。併し斷じて人民を統治するの道ではありません。實に我々の時代に在つて人民を統治する唯一の方法は親親<sup>フューダラ</sup>ら彼等の惡から善へ暗黒から光明への運動の劈頭に立ち而して又其目的に尤も近しい物象<sup>オブジェクト</sup>の獲得の方向へ彼等を誘導してゆくといふことです。

其を爲し得るがためには先づ第一に彼等をして其欲望及び必要<sup>ニード</sup>

如く理論に於けると同様、實行に於ても「聖貧を自分の伴侶」としたのであつたなら世界は彼を模倣やうとしなかつたであつたらうけれども少くとも彼の言ふ所を傾聴し又彼を聖列に加へたであつたらう。併しトルストイはアッシシのセント・フランシスではなかつた。彼はローマ舊教或はビザンチン教會の聖僧でもなく又一個の殉教者でもなかつた。彼は邪氣のない謙讓の天賜と絶對的な自己拒否の勇氣を缺いてゐた。随つて世界はその豫言者自身が完成し得なかつた所を完成しないといふので痛罵せられた事に對して正當に憤怒した。

彼の所信を實行しやうとしたトルストイの弱々しい動搖さがちな企圖が如何に彼を驅つて不正な回避の終りなき連續に導き又半喜劇的半悲劇的な自己撞着に奔らしめたかを發表するのは正に恩を知らざる者のなすべき事であらう。併し彼は單に自分一個を失敗に推詰せられたのみにとゞまらなかつた。——彼は他人をして結局は不幸に終るべく運命づけられてをる事業を敢てなさしめた。ロシア、英吉利、亞米利加諸國に起つた多くのトルス

トイ殖民地の中一つとして成功したものとはなかつた。エルマー・モウド氏——其人の證明は疑ふべからざるものであるが——は吾々に此等の失敗に關して悲む可き物語を告げてをる。

就中一層悲むべきはドウク・ポールの物語であつた。トルストイは此迫害されたる宗派に於て遂に自分の意に適つた基督教の使徒、即ちクエーカー教徒と共產主義者との理想的な結合を見出したと獨合點した。而してロシア政府が彼等を迫害すべく着々其歩を進めて行つた時彼はカナダへ彼等の卸賣的な移住を開始した。トルストイが全然其宗派の性質を讀損つたといふこと。此宗教的民主政體は實際に於て狂信的な極端な獨裁政治であつたといふこと。ドウク・ポールの首領ヴェラギン (Vergine) を目して全能なる上帝の體現であると信じてゐたこと。而して彼の發言は一語一語靈感的で且つ確實であつたといふこと。——此等の事が發見せられたのは時機既に遅しの憾があつた。彼等は納税を拒んだ。彼等は同等に極端なる單純生活の辯護者であつた。彼等は衣服を排

拒し又赤裸なる野蠻人の單純に歸らんことを決意した。加奈陀政府は終に彼等の實行出來さうにもない基督教的無政府主義の示威運動に止めをさした。

併しトルストイの如何なる傳記者と雖もドウク・ボールスの爲にした彼の不運な聖戰(十字軍)を峻嚴に批判するやうなことはあるまい。何となれば彼の最後の傑作は間接に少からず此聖戰に負ふ所があるからである。ドウク・ボールスのカナダ移住を幫助するには中々の大金が必要であつた。其金を獲る爲にトルストイは「復活」を書いた。其故此作は幾多の意味に於て一個の目的を有つた小説といふことが出來やう。其は一つの勇敢な宗派を迫害から救出するの目的を以て書かれ、又如何に人間の靈魂なるものが或る新生活に生れついでゐるかを啓示するの目的を以て書かれた。

「復活」の題目はトルストイに取つて得意なものであつた。大部分の彼の小説に於ては若干の人物が精神的覺醒の或る過程を通過する。彼の(改宗)以後彼はその「主人と勞働者」中に默的な慘忍な主

人が急に自己犠牲の基督教徒に變化することを描いた。「復活」に於て彼は一人の世俗的な我儘な貴族と墮落した賣春婦との新らしい蘇生を書いた。

「復活」は或る一つの目的を以て書かれたに不關而も尙ほ生々とした傑作たるを失はないといふのは斯種の小説に於て稀に見る例證の一つである。茲に再び吾々は藝術家と說教師との特種なる分離を見る。其一方は決して他方の中に没入してゐない。藝術家の方は吾々に彼の客觀的な人生の再現を與へ說教師の方は何等現實の相に牴觸することなくして彼自身の人生觀を物語つてをる。あらゆる下々の人物は。恐らくボビードノストセフの稍不器用な鳥羽繪なるトポロフの例外を除いて著しく眞實である。かのチフリユードフやマスロヴァでさへ決して讀者の胸に單なる假空的な人物としての印象をとゞめない。而してトルストイは強烈に彼等の變革に興味を有してゐたけれども、其がため彼は決して技巧や感情に依つて正道から踏み迷はさるゝといふやうなことはなかつた。

「戰爭と平和」乃至「アンナ・カレニナ」には幾つか



あつた。而して彼の無政府主義は其根柢を基督教においてゐると主張せられてをるから或は其を基督教の無政府主義と稱する事が出来やう。トルストイが國家を是認することを拒否したと全く同様に彼は法律法廷財産及び金錢の是認をも拒んだ。凡て此等の物は本質的に邪惡である。彼等を認めず彼等を幫助せず彼等を默過しないのが即ち吾々の義務である。吾々は陪審席に列することを拒み又納税及び徴兵の義務を拒否しなければならぬ。他方に於て基督教法の如く吾々は暴虐に對し暴逆を以て反抗してはならない。政治上の害惡に對する吾々の唯一の武器は吾々の受難及び長い忍従の據證である。愛及び四海同胞の法則の實行である。(トルストイの政論の尤も著しき代表は彼の「遺稿劇」間を輝く光の中に含まれてをる。)非常に透徹せる人生の相と確乎たる現實の把握とを有してをるあの素晴らしい巨大な精神こころがそれほど明かに背理であり且つ非實行的な理論を幫助したといふとは今日に到る迄一個の逆説パラドックスとして留つてゐる。實際の事實に徴して西歐諸國の智識は其を記決する事が出来ない、其を了解すべき者のロシア人では

あることは殆ど必然的と計つてもよい。而して吾人は茲に再び讀者の胸に次の一事を喚起しておかなければならない。即ちトルストイの政論はあらゆる微細な點に亘つて彼の身邊を圍繞するロシアの四圍の情況の產出物であること、而して又其見地から考察してソコに何等取立てゝ言ふ程の獨創がないといふ事である。

吾人が本書の緒論に於て指摘しておいた如く彼の基督教の無政府主義は典型的なロシア人の疾病である。近代に於ける主要な無政府主義者が多くロシア人であるといふことは單なる偶然の事實ではないバクーニン(Bakounine)の如き。クロボトキンの如き而して我トルストイの如き。ロシアが獨裁政治であり且又官僚政治であるといふのは單に其表面に於てのみである。事實上ロシア帝國は十萬の獨立した社會及び共和國の龐大な凝聚である。ロシア國民は政府の過多なるによつて苦まざるのみならず寧ろ其缺乏に悩んでをる。村落組合(Mit)に於ける村の長老或は自分の所有地に於ける地方の地主は同様に暴逆で且つ無責任である。

國家の權力は聊も感ぜられず其が寧ろ害惡として取扱はれてをる。其故ロシアの國民には何等市民たるの意識がなく又殆んど公共心といふものがない。個人の生活に於ては尤も完全なる紳士でありながら公人としては收賄なんぞするに聊かの躊躇もしない。一般のロシア人は依然として國家盲目である。而してトルストイの如き作家が此國家盲目なるものを一個の主義としての權威にまで引上げる。——此等は素より怪むに足らない。

無政府主義が根本的にロシア人の疾病である如く宿命觀及び災禍に對する無抵抗主義も亦同様に彼等の疾患である。如何なる種族と雖も彼等程人間の暴逆乃至は自然の慘酷に惱まされたものはない。(自分は一九〇五年スコットランド地理學雜誌上に發表したロシアの政況地理に關する自分の論文を自由に參照する) 火災は年々ロシア國民の本造家屋の五分の一を壊滅する。氣候は幾千といふ犠牲者を凍死するに至らしめる。かの「主人と下僕」中に描かれた悲劇の如き單なる日常の一出來事に過ぎない。飢饉は常にロシア小農の眼前に横はり帝國領土の廣大な地域を荒廢に歸せしめる。(ロシアは今正に一九一二年に恐るべき飢饉の苦境に陥つてをる)

飢饉救済は幾度となくトルストイの活動を促したロシアに於ける生活は敵勢に對する不斷の戦闘である。而も其戦闘に於て自然が勝つ。而して人間が優勝の地位を占めて居る所にあつてすら彼が其戰に捷つたのは唯長い間の苦惱と忍従の力に依つてのみである。此種族の力であり同時に其弱點であるのは實に此宿命觀である。トルストイがあれほど屢々而して巧妙に描き出したもの又彼が終に一個の宗教的教戒とまで讚美し至高な福音的美徳としたのは此受動的な併し男々しい抵抗である。

トルストイの多方面的な活動中、彼の社會及政治革新傳道位幾多の批評を蒙つた部分とはない。而して多くの批評は十分至當であると認められなければならなかつた。若し彼自身にして彼の實行を其所信と合致せしめたのであつたなら民衆も恐らく彼の峻酷な誣告に彼等の歩調を合せたであつたらう。彼は社會が自分の理想郷を實現せんことを欲し。然かせざる故を以て其社會を痛罵した。

若し彼がかのアッシシのセント・フランシスの

## 社會及政治改革家としてのトルストイ

井口 杜村 譯

吾人は今や或る最も異常なる傳記の最も異常なる時期に到達した。「クロイツェル・ソナタ」を書き終へてトルストイは殆ど中斷されずに活動してをつた三十五年間の文藝的生活を顧みることが出来た。今や彼は多數の作家が我事畢れりとて自ら満足し、而して又尤も奮闘的な作家と雖も多少疲労の色を見せ初めるべき年齢に達してゐた。併しトルストイは決して精神的困憊の如何なる痕跡をも表示しなかつた。此の時代に於ける彼の生氣の横溢。元氣の旺盛。熱情の熾烈乃至生産力の多方面は未だ曾て見ざる所であつた。彼は小説家たり劇作者たり教育家たり又神學者たるの資質を一個の農夫たり靴屋たり巡禮たるの資質と結合した。

失望及び失敗は彼の銳氣を殺がなかつた。病魔

と雖も何等彼に影響する所がないらしく思はれた。再三再四彼は死の門前に立ち世界の新聞紙は幾度か其訃音を傳へた。丹毒、肋膜炎、咽喉痛胸症は交々彼を衰弱せしめた。併し彼の恢復力は不可思議であつた。彼の軀體はあらゆる醫學上の豫言に裏切した。制御し難き意志は病魔に打克ち而して毎時彼は新らしく若返つて病氣から逃れ出て更に新經驗を味ひ新しい戰を闘はんと準備してゐるかのやうに見えた。吾人は唯次の一事を記憶すれば足りる。即ち彼が劇に於て其最初の然も非常に成功した試作なる「闇の力」を書いたのは漸く死に瀕した丹毒症から恢復する所であつた。此藝術家は殆ど最後まで傑作を出し續けたけれども——「復活」は作者が七十二歳の時漸く完結したのであ

つたが——トルストイが其晩年の廿年間世界の面前に立つたのは主に傳道師又は説教師としてであつた。歐米諸國は其國史の危機に際し漸次ヤスナヤ、ポリヤナに對し教導を仰ぐやうになつた。世界の各方面からの訪問客は此豫言者の荒廢せる住居に蟻集した。トルストイが一つの通信か若くは論文を出すに非ずんば或は又一つの公訴かそれとも抗議を提出するに非ずんば何等重大なる事件が起つて來なかつた。一八九五年彼は迫害されたるドウクホボールス(Donkhobors)の爲に一つの公訴を書いた。一八九九年彼は海牙會議に對し平和に關する通信を送つた。一九〇二年彼は皇帝に書を送り又勞働者に一つの通牒を發した。一九〇五年彼はキシチフ(Kishinef)の虐殺及び其當時ロシアに流行してをつた猶太人迫害に對して反抗の聲を放つた。一九〇四年彼は日露戰爭に對して抗議を宣言し同時にロシア國內に於ける革命運動を非難した。一九〇八年彼は軍法會議に對して抗言し又ヘンリージョージ(Henry George)及び土地國有論の爲に彼の戰鬪を繼續した。一八五四年の昔

に溯りトルストイは自分自身に就いて「俺は政治家ではない」と言つて居る。若し彼にして常に自己の分限を意識してをつたのであつたなら一層宜かつたかも知れない。何故なら彼は到底政治科學の眞要素を了解する事が出來なかつたからである。

彼に取つては社會乃至政治改革といふことは單に宗教的倫理の系數に過ぎなかつた。彼の思考では政治家の職務なるものは一個人の其等と異つてゐない。而して聚合動作は單に程度乃至は範圍に於て個人動作と相異してゐるのみで決して其種類に於て異つてゐるものではない。其故若し憎惡、貪婪及び不實が各個人に於て悪いものであるとすれば其等は國民に於て尙更好ましくないものである。

トルストイが何等かの論を有してゐたとすれば其は全く消極的であつた。彼は何等社會契約なるものを認めず又國家の存在其物までも否認した點に於て其師ルッソーと立場を異にした。トルストイの政治哲學は強烈な緩和せられざる無政府主義で



を忌み自己と外界との調和を豫想し、そのために人類の教誨に心を向けたのを見て、我々はトルストイの性格の驚ろくべき複雑さと、その度胸の廣濶さと、人生愛着の強さとを、覺らなければならぬ。トルストイ自家の俤を最も多く傳へてゐると云はれてゐる『アンナ・カレニナ。』のレウインは夫婦間の不調和、人生の無意義、雜務の殺倒に疲れて、殆んど自殺せんとした事があつた。これと同様の事はトルストイ自身の告白によつて我々は度々彼の上に見る。彼は絶望のあまりに自殺しやうとはした。けれどもまだ自殺が人生の意義を完成し徹底する物とは思へぬ。そして如何かすれば自殺する事の有り得る事を恐れて、彼は自分て繩やナイフやピストルを手近から遠ざけた事があつた。

即ちトルストイに取つて自殺は云はゞ徹底してゐるとは外面見を乍ら、實は人生愛着の度の弱い者のする事、反省と理解の不足な者のする事と見えたのである。彼に、あつて人生は愛を以つて結束すべきで、咒詛や嘲笑や冷罵や放擲をすべきでは

ない。すべての人類は神の子、神の分身、そして神の域、永久の完成を目標として小止みなき努力をなすべきだ。そして現世はその完成に到る僅かなる一プロセスだ。人類は飽くまでも之に執着して愛し育くみ、鍛へ守つて宇宙生命の擁立を謀らなければならぬ。人生に見切りを付ける事は無分別であつたのである。

かくて我々は彼の數知らぬ幾多の著作中に自殺者の少ないと共に、彼の一生が絶えざる人生との惡闘、自己との惡闘であつた事を注意しなければならぬ。身は富有の貴族に生れ、富と名望と、家庭の愛との中に老後を養ひ乍ら、『……今此の世俗的生活を去つて隱遁生活に入るのである。だから決して私を尋ねないやうに願ひたい。たとへ私の居所が判明しても、再び歸らない決心であるから、決して私の所に來ない様に願ふ。若しこれ迄私に何かの罪があつたら何卒赦して呉れ。私も亦自分に對する凡ての人の罪を赦す。終りに臨み、私の爲めに御身に加へられた悲哀に對しては、私の幾重にも謝する所である。』と云ふ雄々しい痛ま

しい遺書を遺して村莊を立ち出て、一寒村に漂浪者の如き死を死んだ事は、永久我々の眞面目に考へなければならぬ問題である。彼は永遠に何を求めつゝあるか？人生の眞意は永遠に人間の把握

し得ないものであらうか？

ストイシアンをも並びにエビキュリアンをも極力排斥したトルストイを我々は眞に尊敬しなければならぬ。(終)

## 讀者諸君に告ぐ

△夏期中各地方へお出かけの諸君へは、郵券二拾錢お送り下されますれば、本社から直接何時にても雑誌をお届けいたします

六合雜誌社營業部

爲たる姦通をすら、彼の女は暗黙の中に享樂する事を許さない直截な性格を持つてゐる。で隠せば隠し終せる關係を、又よし暴露した處で世間的名望に甚しい危惧を抱いてゐる、不徹底にして溫良なる好人物アレキセイ、アレクサンドロウイチは見て見ぬ振をしてゐるに拘らず、彼の女は進んで自ら世間的にその破滅を早めたのである。でその世間の不評と、ウロンスキイの冷淡さが彼の女の死の直接原因であつたのであるが、それにしてもトルストイは彼の女の周囲の人物をして死屍に鞭は加へしめなかつた。

彼の女の死は憤怒の死でもない。恐怖の死でもない。絶望の死でもない。復讐を孕んだ死でもない。冷嘲を導く死でもない。云はゞアンナの死は彼の女自ら肯定した、歸納的安易な死である。美の生活、愛の生活の徹底、若しくは彼の女自らの享樂的生活の完成であつたのだ。

トルストイの廿九歳の作である『球突探點者の思ひ出』に於ける自殺と、四十九歳の作である『アンナ、カレニナ』に於ける自殺とを比較して見る

と、作者の人生觀の甚しい相違を明かに觀取する事が出来る。前者は若い血氣な生活者の突進的自殺で、裏面には現世に對する不可解と絶望とがある。後者は怜悯な美的生活者の歸納的自殺で、裏面には作者の貴い道德的精神から出た肯定がある。

私は自我生活の徹底者に三様の種別があると思ふ。かうした抽象的な總括的な言葉は、解釋によつては如何様にも内容付けられ得て誤解を招き易い性質の物であるが、茲では私は世間普通に用ゐられてゐる、精神的（之に區別を與へるのを私は好まないが、正確を尊ぶ必要上區別すれば、理智的にも本能的にも）或は肉體上にも自己の性格の赴くまゝに忌憚なき生活を營み得る人で、これも單に、哲學的思想的のみならず、實行的に生活を徹底せしむる人の意味である。此の區別をなす原因はそれ／＼性格の相異による事は勿論である。

第一は自己解剖と社會的接觸の結果懷疑に陥り、人生に絶望し死又は狂によつて感覺的生活を終る人々、第二は第一と同じ態度で生活し乍ら人

生に絶望を感じず、よし感じたにしても感じたさへで放擲する事が出来ず、何等かの積極的意味でその對照——人生或は自己——を自からの理想に合する様に試み努める人々、第三は外面は稍々第二の性質の物に似てゐるが、内實は甚しい相違のあるもので、自己の生活を徹底せんために或は假面を被り、或は機智を、巧に人心を收攬し、他に惡感憎惡不快を抱かせない範圍で巧に自己の生活を遂行する人々である。かう云つて來ればトルストイが私の云ふ第二の種類に屬する人である事は何人も直に感じ付かれる所であらう。

トルストイが自殺は罪惡だと明言してゐるのはその數多い論文の何所にも見出だされない。けれども私は彼の『我が懺悔』並に多くの著作を通して、少なくとも彼が自殺を人生に意味を付けるものでないと思つてゐる事は感ぜられる。彼れの一生は永遠の眞理に向つての絶えざる苦しい探索で、それを誠實と云ふ色が貫ぬいてゐる。その誠實と、彼自らも呆れるばかりの圓滿ならざる主角多き彼の性格とを以て營む生活が、彼に甚しい不満、醜惡、不調和なものと人生を見せしめた事は元より當然である。その彼の求めた眞理、それに就いてソクラテスはかう云つてゐる『我々は只肉體の生活を離れる事によつて、離れる度によつてのみ眞理に

到達する事が出来る。』此の一句はトルストイに大なる疑惑であつた。彼は考がへた、眞理を愛する我等がライフに何を求むるか？肉體から自由になるため、そしてライフを含める惡に離れるため。して見れば、若し左様であるなら、何故我々は死の接近を喜ばないのだ？

その後彼は殘忍な反省の結果、死より（自殺も天命の死も含む）他に生きる道はないかと考がへ始めた。『我が懺悔』の中で云つてゐる。

『死によつて破壊されない人生の意義はあるまいか、若しあればそれは何だ？無限なる神との一致、バラダイスだ』と。

此の觀念が彼の一生を支配したモットオである。無限なる神との一致は疑ひもなく自己完成と人生の救済とを含んでゐるべきである。外界との接觸も或る性格の人に取つては苦痛でも呪詛でもない事がある。妥協的なイイジイゴオイングな人は之である。けれども何人とも調和し難い、手におへぬ火と水との兩性を持つたキャプリシヤスなトルストイに取つて、人生が苦痛と呪詛とを導くものである事は當然である。そして之れに對する自己の性格を惡魔的に呪つたに拘らず自殺



生えを感じなかつたのだらう。彼も死がすべてを解決する物だと思つたのではあるまい。只自殺に依つて單に重疊して来る世間的積苦を脱れ、永遠の忘却に身を投げた不徹底な生活法である。肉體的生活のみを知つて精神生活の意義を知らぬエビキユリアンである。一種の不具者である。

此の作に對する作者トルストイの態度を見ると、彼が主人公の自殺に何の不足も皮肉も感ぜず、却つてその自殺を正當と見、止むを得ぬと見、同情を以て扱つてゐるのが分る。

即ち此の作がトルストイ自分が或る時期に於いては明らかに肯定してゐた生活であつたと思はる。自殺を罪惡としてゐるキリスト教の教義を絶對に奉信してゐるトルストイに、自殺が如何なる形に於いても彼の賞讃と肯定とを買ひ得る筈はないけれども、ネフルドフの自殺を肯定した様な時期があつた事は確である。

今から思へば此の肉體生活から精神生活に移らうとしたトルストイの轉機も確に危険極まる時期ではあつたが、併し後年『我が懺悔』『我が宗教』を

書いた頃の精神的轉機に比してはまだ、彼の生活が一面ばかりであつたと思へる。

後年の轉機に於いてトルストイが

『肉體の生活は惡業で且つ虚偽である。故に生活の絶滅こそは我々の求め欲しなければならぬ善である。』と云つたソクラテス、又『世のあらゆるもの、愚者も智者も、富貴も貧窮も、歡喜も痛恨も、すべて皆虚榮で、且つ價值なきものである。』と云つたソロモン『苦痛、疾病、老衰、死の避くべからざるを知りつゝ生存する事は不可能である。我等は生活から脱しなければならぬ。生活の可能から脱しなければならぬ。』と云つた佛陀、

之等の先哲の人生觀を研究した時、それは丁度彼が新婚後の苦惱にさいなまれ、『家庭に何等の幸福もない。』と或る友に書き、夫人とは愛しつゝも互に理解し得ぬ模索的生活に窶れた危険な時であつたが、それでも尙此の人生觀に征服されず自ら神の存在と精神的天國の可能を信じて新生活を開いた様に、青年期の轉機にも、尙彼は自殺するにはその理性の冷靜が遙に強かつたのである。

私の知つた限りでは今一人自殺した人物がトルストイの作中にある。それは『アンナ・カレンナ』の題名の當の主人公たるアンナ・アルカデエウナ・

カレニナだ。

彼の女は一種のダンディイたるウロンスキイの態度の變化と、我が美が年と共に衰へて生活の快味を思ふ儘に味ひ得ぬ事を悲しんで、『初めて海水浴をしようとした時に覺えた様な感じを覚え。』『過去のあらゆる輝ける歡喜の姿を帶びて彼の女の前に浮び上がつて來る生を感じ、肩と肩との間へ首を引込めながら客車の間へ兩手を突いて、『何か知ら巨大な、無慈悲な物』のために頭を打たれ、背を轢かれ、『主よ、凡てを赦させ給へ！』と祈つて最後を得たのであるが、彼の女の死は怨恨はあるがさまで遺恨のある暗い死ではない。何所となし明るい感じを起さす。

一八七五年、トルストイがその友人フエワトに手紙を與へて、『私は今再び退屈な馬鹿々々しいアンナ・カレニナに縛られてゐる。一日も早くそれから脱れたい』と云つてゐる。それは丁度彼の一生の大變動たる轉機の前で、甚しい精神苦の旋風中に反側してゐた時であつたから、瞑想家レウ

インの衝動的なキャプリシヤスな生活法を憐れず思つて、此の作の遂行にさまでの興奮と興味とを持ち得なかつたのだと思はれるが、一面主人公アンナ・カレニナが作者の人生觀に生れた、即ちトルストイの哲學、若しくは理想から生れた人物でないのも一の原因であらう。

Vengeance is Mine, I will repay

と云ふ卷頭の言葉が、アンナ・カレニナの一生を前提してゐる通り、アンナの死は實は作者の道德觀念の遂行である。作者の社會觀察から得た一種の人物の型である。併しアンナの生涯は勿論、その死にも、作者が加へた冷酷なる批判罰責の影が少しも見えないのみか、かうした放肆な唯我主義者、生活享樂者に對する同情の博大が隨所に讀者にスキイトな感じを注ぎ入れる。アンナは愛のため、美のためには周圍のすべてを犠牲にするだけの雄々しさを持つてゐる。そして彼の女等の立ち入りてゐる貴族社會に彼の女とウロンスキイの間に起つた様な關係は決して珍らしくはない。その有りふれた事ではあるが、道德的には瀆冒の所

に生んで貰つて、自意識が出来て、自分勝手に自己の世間と云ふ者を造つた處で、それが全宇宙の生息に取つて如何程の變動であらう?』

自己の生活を尊重する人程此の疑問に逢着する事が多かつた。

私は靜かに考へて見て、トルストイ程此の疑問のために悩まされた人を知らない。

夥多しきトルストイの著作に一として此の疑問の出てゐないものはないが、殊に彼の自叙傳的小説、即ち『生ひ立ちの記三卷』『地主の朝』『復活』『アンナ・カレニナ』『球突採點者の思ひ出』『コザック』等に於いて我々の胸に強い刺戟を與へるのは、彼の忌憚なき自己解剖と人生の意義に就いての懷疑である。

あらゆる懺悔録の中で、最も價值のある、最も恐ろしい、彼の有名な『我が告白』は實に此の烈しい懷疑と、省察と、自己貶毀との絶え間なき連續である。それに拘らず彼自ら『省察不足』を歎ずるのを見ては、私は彼の誠實の何處まで深いのかに驚ろかざるを得ない。

假面と不徹底と惰性と欺満にふやけてゐる人生に、之等自己を殘忍に責む事を厭はない人々が生活して、その人の最後が自殺か癡狂かになるのは止むを得ない事である。ニイツェ、モウバッサン、日本では北島透谷などが自殺或ひは狂死の悲惨な最後を遂げた經路を辿れば、鐵拳で空氣を擲るにも似た齒ごたへのない人生に調和する事が出来なかつた、烈しい生活慾と、生の熱愛と、生の絶望との強い色を見る事が出来る。

或るトルストイの評家は『若しトルストイに冷靜な理性判斷がなかつたなら、彼は恐らく自殺したであらう。』と云つてゐる。愛するが故に人生を憎み、人生に絶望し、燃える様な熱罵と咀詛を全人類の頭上に投げて、超人の福音を宣傳し、超人生活の意義を謳歌したニイツェに較べて、トルストイは人生を愛する度に於いて少しも劣つてはゐない。

『幼年時代』の主人公イルテチフは僅か五歳の時『此の世は歡樂の町でなくて、寧ろ重い勞苦の時』である事を覺つたが、此の人生觀はトルストイの

最後まで彼に纏はつた影であつた。併しトルストイの熱愛と、誠實とは、彼の目に映つた人生に絶望する事を許さず、生活の悲愴を見れば見る程、之を救助しなければならぬと云ふ慾望を強めたのである。併し此の人生救済の願望の芽生えは、彼の恐ろしき轉機の後、人生が全體として或る完成に達せんとする過程にある事を覺り、現代の日常生活、この間に起こる撞着、煩悶、争鬭、は僅々その進歩の一犠牲に過ぎないと見、基督の福音を體得して生活態度の固まつた後の事であるが、それ以前、即ち『アンナ・カレンナ』、『家庭の幸福』を書いた當時、又、カウカサス、セバストポール等の漂流生活を得てペテルブルグの擾亂の渦中に精神的にも肉體的にも甚しい放肆な生活をしてゐた頃の彼は、自己批判の忌憚なきメスを自らに加へて、烈しい絶望の殺倒に苦しんだ人であつた。

『球突採點者の思ひ出』を讀んだ人は、主人公ネフルドフの痛ましい自殺を見たであらう。ネフルドフは疑ひもなく作者トルストイの反映であるが、彼は束縛なき放蕩の悔恨と負ひ切れぬ負債と

のために、遂に脱れる方法がなく、不安と動搖に苦しんだ揚句、採點者の眼を盗んで球戯店の一室で絶望のピストルを放つた。ネフルドフはその書置にかう云つてゐる。

『神は私に人間の欲するすべての物を與へた、——富、名譽、知識、貴き熱誠。私は極力自らを樂しまんとして、我が最善である坭土の中に身を沒した。私は何も不名譽な所業はしなかつた。私は不運でもなかつた。私は何等の罪業も犯してはゐない。しかも私も最も惡しき事をしたのだ。私は私の感情、私の知力、私の青年を崩壞して終つたのだ。』

『私は遂に此の低地から身を脱する事は所詮不可能だと云ふ恐ろしい確信に來た。私はもうそれを考へる事は止した。すべてを忘れて終ひたい。けれどもいやが上に私を惱ます此の救ひ難き悔恨は！かくて始めて私に自殺の念が芽ざした。』

薑餅を食ひ、火酒に浸つて終日寢臺に轉んで腐爛し、賭博に耽り、ジブシイに戯れた當時のトルストイは實に此のネフルドフであつた。

仔細に見て來るとネフルドフの自殺は、そして自殺以前の生活は、精神力と理性力とを忘れた感觸と肉體との跳梁である。ネフルドフは何故『考へる事は止』し、『忘れん事を願つた』後ですぐ自殺を思ひ付かないで、肉體を超越した精神生活の芽



ず。薄弱を免れず。奴隸たる我が主と違ふ。其罪に非らず。罪なし。唯其進や未だ實進に益せず。私を有せざるも、未だ救世主の本務を體せず。露然たり。然れども、大和の大業を地上に遂成するの力未だあらざるなり。

\*

\*

\*

\*

\*

○上より我を召す微言の聲あり。「起ちて我に従へ」と。之を聞けば仰がざるなし。之を仰げば感じて其愛の深を歎ぜずんばあらざるなり。あゝ我に力なし。如何して起たん。誠に主に従はんと欲せば、其力を下し給はざるはなし。

○上より召さるゝは事實なり。然れども我に在りて祈を要す。祈らざれば答へ給はざるは法なり。表現の嚴法なり。若夫れ内裏の至情に至りては、父母神<sup>チチニカミ</sup>常々にして我等微小の子女を思はれざるはなし。常々にして愛せられざるはなし。常々にして訓導せられざるはなし。養育せられざるはなし。常々にして我等が爲に萬物を備へて常々に有餘不足なく下し給はざるはなし。

○是れ我が救世の主なり。十字架の眞主なり。即

ち神なり。無限にして我等を無限に愛し給ふ。微妙に於て我等を微妙に慈み給ふ。父母<sup>チチニカミ</sup>なる神は、我等を一々其御心に寶とせらるゝこと、猶御心其儘の如くならざるはなし。只我等頑鈍にして御心の在る所を知らず、其恩愛を感じざるなり。至尊の御心は夫れ至順の愛なり。萬有に謙に従はる。我豈順に従に復歸して神に孝ならざるべけんや。○信は靈の祈に在り。祈は信に因る。唯信に因る、故に祈の實は能く其務を勤む。無我の務なり。有神の奉公なり。

○主に於て死するの信も亦必ずクライストに由つて起る。是の信や實體を以て起る。クライストの我が内にましまして我に賜ふに非ずんば、是の信我に起り來らじ。

○潔く我を洗うて白からしむるは、クライストの火(息)なり。清く我を潤ほして永へに悦ばしむるは、主の愛(情性)なり。凡そ我が暗黒の消散して光明の樂に高天に昇るもの主の火に於て愛せらるるの愛に由りて來らざるものあらざるなり。是の愛や活水にして平等に流る。神火充滿す。

# トルストイと自殺

兵 頭 棹 歌

一千八百二十八年八月二十八日、菩提樹で圍まれたヤスナヤ。ポリヤナの静かな村莊に生れて、一千九百十年十一月七日午前六時、生地から二百九十四露里を距てたアスタポウの寒村の驛長室で、悲愴な、併し彼自らに取つては極めて神聖な聖者のな死を死んだレオ・トルストイ伯の八十年の一生は、人類の頭上に投げられた、解かざるを得ない一塊の謎である。

トルストイは青年時代に自分の性格の缺陷として次の様な箇條を擧げた。

- 一、決斷不足、又は精力缺乏
- 二、自己欺瞞
- 三、非禮
- 四、不遜
- 五、機嫌買ひ

- 六、卑猥
- 七、模倣性
- 八、變心性
- 九、省察不足

人間が若し自家の性格に何等の不滿缺陷を感じず、碌々晏居としてゐられるものであつたなら、それは死にも等しい沈滞であらう。併し人間の根本特性として、只ありふれた意味にでも不満足の連續は何人も經驗する處である。古來自意識の強い人間、自己の生活を完成し様とする熱望に驅られてゐる程此の止むを得ない懊惱に苦しむ事が多い。

『人生の意味は何であらう？』『生れる、生きる、働らく、死ぬる、そしてそれは何だ？』『知らぬ間

一人をも洩さず、微妙を貫いて至大を極む。其貫くや十字架の杯に非ざるなし。十字架と云ひ、杯と云ひ形容の文字に非らず。眞實生命實體の實況なり。其苦樂敢て人の知る所に非らず。基督士督督阿一而二神。乃ち父乃ち母。全知全能。惟一恩愛の神。

\*

\*

\*

\*

\*

○聖降誕とは何ぞや。何目的なりしぞと問ふ。其問誠に重大なり。答は更に重大なり。言語を以て盡すべからず。先づ誠に聽者の新生命を其内部に得るを要するなり。

○然りと雖も聖降誕の最要點は即ち是なり。是れ最上至高なる精靈の此に現じて神の大匠となりし者。即ち最高なる造物者の實體なり。其身の貫徹する所、至上の神にして同時に最下の奴なり。徹上徹下、生命の生命、此の一身に集りて現ず。一點を用ゐて全體に亘る。即ち職人には、職人の職人を以て其中に共にし、奴隸には奴隸の奴隸となり、百姓には百姓の百姓にして、君王には君王の君王を以て臨み、以て世に奴隸なくして、世の君

王滅び、天子天孫オホササ（神の子孫）皆百姓と相共に大父母の一家に相樂むの日を實現するに至る。目的、行動、勞苦、一に皆最高神息の實體を以て貫く。

\*

\*

\*

\*

\*

○聖降誕の目的聊か其内容を窺へば、神の宮殿を人間に箇々に、全體に、新造して自ら其中に居て萬民と共に神の生命を樂ませ給はんが爲なり。聖降誕は正に此が爲なり。即ち萬有の人を新聞して神自ら其中に居て父母兄弟の恩愛を此に全うせさせ給はんが爲なり。萬有なる子孫をして神たる父母と宇宙の家庭に於て全く一に福樂ならしめ給はんが爲なり。

○即ち神は其御心を以て人の心の中に居り、其御靈を以て人の靈の中に居り、御身を以て人の身の中に達して人と共に意ふことあり、人と共に覺ることあり、以て共に動いて人と共に具體に永遠に樂ませ給はんが爲なり。クライストは神の實業の實體なり。其實體は、勞苦の杯即ち十字架に現じて人の心身中に充溢す。皆肉體の各部に亘りて微妙至らざるなし。

○クライストは、個人的に個人と共にし、社會的に社會と共にし、全世に亘り、微妙を極めて洩すなく、皆負ふて體して勞せらる。以て生命復新、神に大統して永遠に二而一に一となるの日に至る。神と人と皆親子兄弟の關係に、平等に永遠の安に安んぜんが爲めに勞せらる。至尊の今の時に於て其至尊の名を欲せられざる所以正に此に在り。

○クライストは、實質に於て學者僧侶等とは絶對正反なる百姓なり。クライストは、人間耕作の高等百姓なり。誠に實に磔刑に懸りたる至尊なり。

○夫れ之が爲の故に、人間從來暗黒なる私我は、神の審判に由りて根本より滅絶せられざるべからざるなり。夫れ此の暗黒なる私我滅して而る後我れは神の光に於て其光に光る。其範圍の萬靈と各々其箇體を確存して相抱き大和して神の御前に昇降す。箇體堅確各々眞體の聖座となりて、全體に於て永遠に相榮ゆ。

○地球は小なり。然れども、其小なる世界に於て神工代表の命ぜらるゝ者なからず。……正なれば至福なり。邪ならば禍の極。

○其福なるは何人ぞや。最高なる神息を體成する者なり。此等の言未だ世人の耳に親しからず。或は難解ならん。然れども是れ永遠より永遠に昇降す。是の人や尤も最下に立つ。

○動けよや、あゝ動けよや。然れども、單に奮うて止まざれば必ず亂る。其弊や猶止水を以て靜の體と爲して生民を腐敗せしむるが如し。動かずして其時を失ふは危し。其道に従はずして動く、亦誠に危し。心を靜にせよ。靜にして動かざるることなかるべし。

○夫れ天使は貴むべし。然れども普通天使は平線を巡廻す。猶吾人の世界を周ぐるが如し。其間亦山谷の高下を経るありと雖も未だ甚だ高に上らず。又敢て甚下に下らず。既に退かざるも亦進まず。進まざるに非らざるも高からず。其歸や概皆發歩の點に復す。憂なし。悦ばし。善からざるに非



○故に善を慾せば、必ず當に全く其心を神と人との開くべし。神に向つて開くは勿論なるも、其のみにては開くの實舉らず。又當に人に對して中心より満開せざるべからず。是れ神の光を受くるの實道なり。然り而して吾が所謂心を開くは、忘然心を放つとは極至に正反す。是故に凡そ神と人との對して其心を開かんと欲する者は、寤寐を通じて必ず神の嚴肅なる律法を嚴守せざるべからざるなり。

○語言宜しく其意味を有すべし。當に責任あるべし。世人の所謂謝罪の如き、赦免の如きは並に意味なし。詐言ならざるも、其何の意なるを知らずして用ゐる。輕薄の一證。

\*  
○凡そ大問題は、當事者に非らざれば其事を語らず。道は則ち論ずべきなり。故に答は一般的に限る。

○若し我等神旨を體して之を履めば、現在と現不在と共に相通じて一體となる。實體統一の原法に因るなり。億萬の民當に夫れ一なるべし。實體缺

くれば然る能はず。實體若し一なれば平生表面相知らず感ぜざるも一體なり。表面の相知らざるは、其時相知るの要なければなり。平生相感ぜざるは、平生相感ずるの用なければなり。兄弟も無用にして相接せず。父母の愛に於て愛し、皆其務に於て御旨に一なれば、宇宙の家中相足らざるあるなし。皆明にして安し。其示さるるに及べば、即時に相知り、即時に相感じ、御旨の成るに相共に皆興る。現不在も是に於て即ち現在となる。靈信の靈狀唯其時を以て宇宙に相通ず。活時の實用なり。

\*  
○凡そ心身善く自ら戰ふ者は開くるあり。自ら戰はざる者は開けず。閉づ。自らはとする者は、自ら戰はざる者なり。隱蔽す。閉塞の道なり。開進の反に在り。隱蔽も時に或は君子に似たるあり。其似たる、甚だ非なり。是れ小人の尤なる者。若夫れ義戰の士に至りては、或は中道を失ふことあらんも、然れども其力終に打破すべきを打破して其路を開かむ。其心の誠に在り。

○夫れ人、己の立つ所に立ち、其分を盡し、謙に

して能く愛し、和して小に進み、開いて長じ、前後左右皆家人の如く親睦ならば、是れ以て善戦の士たるを證すべきなり。能く道を履むの士なり。

然れども、戦あれば又休あり。一戦一休は勢の當然なり。不斷の實戦なく、不斷の實休あらじ。神戦の大軍に至りては、大終の榮日の此地に來格するまで、戦闘中瞬間の休息なからざるも、到底世人の睡眠の如きを得るあらじ。

○非常の功を立つる者は、非常の事を爲すの要あり。當に其非常の性質如何を觀るべし。

\* \* \* \*

○譬へば山に登るが如し。或は我が爲めにするあり。或は民の爲めにするあり。勞行同じと雖も目的相反す。非常の功は又必ずしも外見に由りて判すべからず。神の爲めに非常の事を爲す者は、必ず高に登らざるべからざると同時に又誠に最下に降りて非常の火洗を受けざるべからず。其務や世人の得て知る所に非らず。世の所謂事功とは極至に相反すればなり。神の爲に非常の事を爲す者世人固より之を知る能はざるなり。然れども信者は

誠に實に火洗を受けざるべからず。此に由らざれば神の一家に昇るを得ざるなり。死者をして死者を葬せしめよ。生者は生道に従ふべし。

\* \* \* \*

○世人之を知らざるあり。未だ知らざる者をして之を知らしめざることあり。亦御旨の存する所に依る。開新の法なり。隱蔽の反なり。

\* \* \* \*

○嗚呼高に上るべし。士や乃ち上る。其以上は無き乎。上りて其上なくんば、其高や眞の高に非らざるなり。之を求めざれば見えず。眞體は俗眼に向つて開かず。但、之を述むるに道あり。求めずして求むるの道なり。

\* \* \* \*

○嗚呼最高なる神息を得る者は夫れ誰ぞや。最高の神息とは其れ何ぞ。在地の者能く答ふるなし。然りと雖も至近に在り。茲に在り。乃ち神の救道なり。神の全赦なり。奴神基督の復活なり。乃ち主の前身なり。乃ち主の現身なり。乃ち主の未來にして永遠の身體なり。此の體や、宇宙を抱いて

○夫れ禱は大事なり。祈禱は必ず眞息の以下に於て在るべからず。總身是れ此の眞息に滿つべし。無我なり。有神なり。謙虚なり。謙の謙なり。唯御旨に従ふ。己に於て物絶對に無し。乃ち祈るべきなり。

○習慣は當に變ぜざるべからず。善變すべし。當に小に進むと共に大に進むべし。當に深に造ると共に廣く開くべし。

\* \* \* \*

○神は内なり。神は外なり。我が中に在り。又我が外に在り。高に在りて又下し。其光に明にして我が暗を照す。我れ我無きに至りて神は一に我を貫く。乃ち我れ箇人確立して萬民と一體なり。萬民箇體亦我の如し。皆神の肖像。皆眞體を其上位に安んず。萬民内外を貫いて共通す。箇々各々確存して私なし。我は彼に屬して彼は我に屬し二而一の生命光燦玲瓏ならざるなく、神氣靜に動いて清風永へに馨る。

○今と雖も神氣動いて神風生ず。奉公當に神風に從ふべし。故に公に奉ずる者は、其風の由來する

所を觀る。若し其私に従ふ者は風に驅られて公正の反に往く。或は自ら知らざらんも、恐らくは命を失ふに至らん。事に順に従はざる者は危し。筐籃を以て水を汲む如き多忙を爲す勿れ。

○寐ぬる時神に於て寐る者は福なり。寤むる時神に於て寤むる者は福なり。神に務めて神に休むは福なり。父母オチハハに抱かれて相共に皆抱く者は福なり。萬福なり。此の不自然なる自然界の氣は、吾人の心身を繞りて欺瞞す。常に現象を通じて我を晝夜に誘ふ。夢にあらざるも亦夢の如し。訓に云く、夢は眞に非らず。夢をば以て夢とすべし。眞實を夢の反に求めよと。若し眞を求めずんば、只夢のみを忌むも益なし。眞を求めて寤めて能く務むる者の誠に福なるに如かざる也。誠に能く眞を求めれば、乃ち安んじて神の懷に寐ぬるを得む。盖し恩愛に在ればなり。

○吾人爲す所として實學に非らざるべからず。實の實を求めて學ぶなり。物を離れずして物以上に在り。皆實學なり。求めて務むべし。其求むるや毫釐も私あるべからず。之を求むれば萬事茲に在

り。天地の職は我が臂中に係ればなり。乃ち起坐して以て日夜萬民の苦を負ふを能くすべきなり。

\* \* \*

○己立たんと欲して人を立つるか、亦た可ならざるに非らず。然れども知るべし我が爲めに人を立てんとするに非ざることを。蓋し神の爲に與に共に立つを要するなり。其道如何。若し人の能く立たんを欲せば、人をして神に於て自ら立たしめよ。爲めに其の立つ所以の道を講ずべし。之が爲めに努力すべし。故に人を立てんと欲する者は、必ず先づ自ら立たざるべからず。

○而して自ら立たんと欲する者は先づ自ら、其慾を殺すが爲めに、當に奮勵して其慾を抑制せざるべからず。是れ自立の第一要道なり。自ら其慾を根底より抑制すれば仆れず。自ら抑制せざれば仆る。或は之を抑制するも、若し根本より其慾を殺すを以て目的とせざれば、到底道に立つを得べからず。十年二十年三十年五十年の後必ず皆仆る。凡そ自ら以て限る者は、皆狭小にして輕薄なり。或は自重すと謂ふと雖も皆輕薄。慾の奴隸なり。

來世あらじ。

\* \* \*

○人の願は夫れ大ならざるべからず。眞の大慾なり。是れ即ち眞の祈願なり。故に吾人の大に欲する所當に求めて務めざるべからず。其之を求むるや毫も私に求むべからず。御旨の成らんことをのみ神に於て之れ求むべし。眞の祈願なり。是れクライストの赦息を快息し自ら満開して恩愛を以て億兆の生民と全然一となるに在り。實際クライストの下に伏して、クライストを抱いて、全然己をクライストに失ふに在るなり。

\* \* \*

○凡そ高を望んで限りあらば、是れ眞の高にあらず。更に改めて望を立つべし。夫れ我が望む所のもの果して眞なるか、將た眞に似て非なるか、其間吾人當に自ら學んで之を究むべし。他人に由るべからざるなり。

○凡そ欲する所大なりと雖も、若し其欲する所に於て微塵底も未だ私を離れざるあらば、是れ惡根にして禍の本なり。善に非ず。誠に危し。



來汚濁の情を脱する能はじ。故に豁然其心を開くべし。而して之を開くのは實は眞光を受くるに在り。開いて之を受くれば、明暗乃ち我が中に判る。父母兄弟嚴師嚴君ありと雖も皆我が爲めに我が隱蔽の心を開く能はず。他人は其力なし。人自ら開いて其審を受くるを願ふべきのみ。是の道や、過嚴にして或は悲觀の象なきに非ざる如きも、眞に人に主觀を興すの力を與ふるは誠に其れ斯に在り。○故に我若し眞に自ら修めんと欲せば、先づ其心を全く開き、自ら我が全部を神の御前に開張して、日夜嚴正に審判の至るを祈るべきなり。

\* \* \*

○吾人當に起ちて進むべし。其開ける心を以て四表に進むべし。自ら限るべからず。新生命の新なるは、人々相共に開けて新なるに在り。我が心能く開くれば我に來るの顔亦能く開けて新なり。我が言能く開くれば我に語るの言も亦開けて新なり。我が悦能く開けて新なれば我を悦ぶの悦も亦開け來りて更に新なり。我が樂能く開けて其新なるに新なれば、我を樂むの樂も亦開けて日に々々

皆新なり。德若し或は我に開けざれば、人の義も亦共に務むるなし。智若し、我に無私ならざれば、人の智も亦私慾に用ゐる。一人の萬人に關係する所、私我は感知する能はざらんも、其我を越ゆれば、其知識に明々ならざるはなし。

\* \* \*

○吾人は吾人に告ぐ。先づ自心自體を神眼の下に呈露せよ。先づ全く其心を開くべし。之を開く當に謙々として謙德に開くべし。傲慢にして試むべからず。敢て人の自由とする所を制せざるも、當に謙に開き、最下に下りて而る後昇るべし。是れ自然の自由を樂む所以なればなり。善意は必ず屈すべからず。心若し謙に開けざれば意志屈するあり。夫れ開新の意志必ず屈すべからざるなり。

\* \* \*

○神は、箇々の人に對し、特に密接せらるゝ所あり。其特密なる所、他人如何に至近なるも、與かるを得べからず。其度に於てや其人は神と獨り接す。他人知る能はじ。是れ固に人の最高點にして其貴尊なる所以なり。人たる者は皆神聖にして犯

すべからず。當に相尊むべきなり。其相尊むべく  
犯すべからざるが故に、人は皆相共に神に於て大  
和の生活を大成せざるべからざる也。

\* \* \*

○必ず恩愛を忘るべからず。恩愛に原して大赦を  
行はざるべからず。之を爲す有神無我ならざるべ  
からず。無我ならんと慾せば、慾を去らざるべか  
らず。怒を除かざるべからず。執りて勵行せざる  
べからず。クライストの奴隸たらざるべからず。

○思へよや。能く考へよ。思の思を致して考ふべ  
し。自ら其思を限る勿れ。感ずべし觸るべし。

感の感を求めて觸るべし。之を求むる其私に由  
りて求むる勿れ。皆神に於て神を思ひ、神に於て  
神に求むべし。

\* \* \*

○無限の神は、無限の實體を以て微妙に入る。微  
妙即ち實體。實體を以て光さざるはなし。故に無  
限の實は微妙の無限。微妙の實は無限の微妙。聖  
靈の體なり、眞實なり。

○故に人は小身なりと雖も、若し眞に奮うて神に

倣ひ、天下の大赦を行はんと欲せば、行ふべから  
ざる者あらざるなり。全赦の神微妙の眞を以て我  
と偕にせらるれば也。是の微妙の眞は、恩愛勤勞  
の生命なり。恩愛勤勞以て赦を遂成す。是の勤勞  
を外にしては生命なし。之を外にしては赦なく、  
救なく、神なし。

○夫れ全赦の道は勤勞して悦ばし、超然の悦なり、  
是の道や樂し。超然の樂なり。盖し皆恩寵慈愛よ  
りして之を執るが故なり。

\* \* \*

○開ける心は赦の門なり。之を開くは赦に入るな  
り。苦勞して望あり。吾人當に豁然己を呈し神に  
入りて爲に勞し、其赦息を思し、恩愛に因りて大  
赦すべし。難しと雖も亦樂し。

○夫れ全赦の活息は生命の力なり。即ち復活力。  
未だ十字架を越えずして超樂其中に在り。是の息  
や、超自然より自然に動き、又不自然の下に下り、  
全通して超自然に復昇る。是れ動いて止まず。至  
靜にして妙用言ふべからず。性一無限の恩愛なり。

\* \* \*

先帝の崩御について、皇太后陛下の崩御があり、ベストが起り、飢饉が行はれて居る。今や日本國民の額には憂愁の雲が深く垂れさがつて居る。この不景氣、この沈滞、國民を抑壓する力のみが徒らに跋扈して居る。あゝこの時、もし國民に偉大なる信念がなくんばどうして國民の進歩と幸福を得やう。

吾々は天人である。吾々は永遠の過去より永劫の未來に進んで行く永遠の生命者である。吾々は自己の價値を信じなければならぬ。そして新しき力に奮ひ立つて新なる生活に入らねばならぬ。即ち復活しなければならぬ。せめて、ネフリユウドフだけでなくとも、怠惰から甦らなければならぬ。優柔や放恣から復活しなければならぬ。夫婦の不和、親子の不和、親類の不和、友人の不和から甦つて新しい生活に入らねばならぬ。そして天地自然の復活と共に、願はくは吾々の人生をして復活せしめよ。そして自然と人生との復活の歌の合奏樂を聲高く、且つしらべゆかしく全世界に響かしめやうではないか。(統一教會に於ける復活日曜日説教)

子供は熱心に流水の様をみ、其の音を聞く。彼も亦河と共に動いて河から産れた様な感じがする。……………眼を閉ぢると色が見ゆる。青、綠、黄、赤、日光と蔭影……………之れから今度は廣茫たる平野、新しい草や薄荷の唄を含んだ微風の下に打ち戦ぐ麥や葦が見える、至る處に花が咲いてゐる、穀物の花や、罌粟の花や、黄の花、美しき景色である。空氣の爽かき、打撃つた草の中に伏したら何處によいだらふ。……………クリストフは喜んで、ほろ酔い加減になつた。河が流れゆく……………田舎の景色が變る……………今や流水の上に木立が差ししかかつて、その優しい葉は幼稚の手のごとく、水に浸つては動いてクル／＼と廻る。木立の村は水に映じてゐる。彼方には杉の枝があつて流れに沿ふ白壁の上に突き出たる十字架がみえる。彼方には岩があり、谷間があり、坂には葡萄が茂り、小松の林があり、古城がある。再び野が見える穀物、小鳥、太陽。(闇を破つて「三浦關造氏譯」)



## 神 火 靈

(新井奥達先生語録)

賊するの勢を馴致するなり。

○夫れ舊質の情たるや、活水神火を以て生るこの新性と相反す。新性は、神に熱して人に煖なり。舊性は之に反す。我に熱して人に冷なり。新は順に轉ず。舊は逆に轉ず。夫れ舊は或は人に向つて煖かなる如きあるも、然れども必ず我を以て先となす。我が爲めにするなり。畢竟我が爲を圖る。是れ急性なり。永く生くべからず。

○夫れ情は、人身に於て一字に現ずるも、其舊なると新なるとの因りて來る所其本を異にす。一は、神の恩愛に原す。一は、自個なる我に發す。

○吾人若し、ああ、只一念と雖も、人に對して其心冷淡に下れば、靈的の成長は必ず立ちとところに止む。心靈開けずして、進路今より塞がる。神の道の轉ずるに戻り、周圍の邪氣を吸收し、己を以て動いて廣く社會を毒す。識らず知らずも人間相

○故に吾人は、當に先づ其心を開き、人と煖悦にして、明に大終の目的を立つべきなり。而して目的既に能く立てば、當に其目的を其身に體して、己即其目的體となるに勉めざるべからず。若し大和を以て目的とすれば、己自身大和の人とならざるべからず。然り而して其目的を其身に體するは、己を克するに始りて主に從つて己の死するに成る。

\*

\*

\*

\*

○吾人若し戰つて己に勝たんと慾せば、先づ當に其心を開くべし。全く開くべし。敢て輕卒に我心既に開けりと思ふ勿れ。開けたる所ありと雖も、其隱蔽する所の猶萬々なるに非らずや。蓋し古より今に至るまで人間隱蔽なき者未だ有らざればなり。人は固より自力を以て玲瓏たる能はざるも、然れども、誠に明德を明にするに勉めずして、生



『救はれたり、されどたゞ一人』この電報を受けとつた辯護士は狂氣せんばかりに悲しんだ。有名なる説教者のムーデーは恰かもシカゴ市に滞在してゐたが辯護士の悲嘆をきいて同情に堪へなかつた。彼はスバツフォードを訪ねて且つ慰め、且つ祈つて、夜を徹して語つた。スバツフォードは幾分元氣を回復したが尙眠るとが出来なんだ。彼は徹宵室内を徐歩しつゝ悶々の情を抑えた。曉に近づく頃、彼は一縷の光明を認めた。して名高い讚美歌を作つた。

しづけき河の岸へを

過ぎゆく時にも

うきなやみの荒海を

渡りゆく時にも

心やすし

神によりてやすし

今や此歌は多くの人々に愛誦せられて慰藉の力となつてゐる。

その後辯護士は程無く世を去つた。さて未亡人はどうしたか。四人の愛子を失ひ、良人には先立たれた彼女は、餘生を宗教的事業に献げやうと決心した。彼はエルサレムに行つてアメリカン・コロニイを建てやうとした。それは一種の修道院の様なものである、一切の財産をも、位置をも、社交をも、歡樂をも、贅澤をも捨て、今少し眞剣な眞面目な生涯を送つて見たい、たゞ飲んで、食つて、生きて行くつまらない生活をするのでなく、もつと價值のある生き甲斐のある生活をして見たい。これが彼女の希望であつた。かくて彼女は同士の糾合に着手した。幾十人の同士は立ち所に集つて來た。彼女と同じ心持ちをもつて楽しい故國の樂園をすてゝ、眞面目なる生活に入らうとするものが數十人もあつた。これがもし日本であつたならば夫人の舉を嘲らないものが幾人であらう。私の知つて居る某宣教師は數年前にエルサレムを旅行した。そしてこのアメリカン・コロニイに三週間程宿つたと云ふ

とである。彼の語るところによればヨルダン河の東には殺人強盜の輩が出沒して危険この上ない。されどもアメリカン・コロニーの人々がその地に行くには別に護身用の刀劍もピストルも入らない。寧ろ是等の惡人輩にも歡迎されてゐるとの事である。仁者には敵はないのである。麗はしいアメリカン・コロニーの氣風ではないか。

而してこれ實に纖弱き婦人を粉碎すべき絶望と暗黒の中より甦つて來た永遠に對する憧憬の賜物でないか。

## 五

吾々は永遠を信じないわけには行かない。生の創造と躍進とを信じないでは居られない。そして吾々の一切の力は實に茲から生れて來る。もしこれ等のことが信ぜられないならば、また信ずることを望まないならば、個人としても、國家としても、その進歩の大半は消磨されてしまふ。翻つて考ふるに今日の日本の宗教や、文藝や、哲學や、教育は果してどれ丈けこの眞理を日本に植えつけて居るであらうか。もし彼等にして永遠の立場よりその職業に携つて居ないならば、甚だ寒心すべきものがある。日本は今や國民として復活しなければならぬ。宮内省の大官でさへ金錢上の疑惑に掩はれて居るではないか。かくの如くして政治に何の權威があるか。海軍の醜態は云ふまでもないが、堂々たる宗教の本山にして尙且つこの種の腐敗に陥つて居るとは何と云ふなさないことであらう。宗教の權威は何處にあるか。

は茲に於いて全く心機一轉した。彼は最早人生を呪ふとが出来なくなつた。正しき路に立ち歸つた彼は、遂にある町の市長となるまでに至つた。彼の後半世は天の使の様に美しいものであつた。

トルストイの『復活』も亦多くの暗示をもつて居る。ネフリユドフ公爵がカチユウシヤと云ふ別荘の小間使の貞操を破つた。彼女は遂に妊娠するに至つた。けれど彼はその後そのまゝこの女を捨てた。程經てある時公爵は殺人罪の陪審官となつた。そしてその醜業婦はまがひもなきカチユウシヤであるのを知つた。カチユウシヤの墮落の第一原因は公爵の誘惑に在つた。公爵は自己の罪を痛感しないでは居られなんだ。煩悶の極、彼は遂に自らの罪を贖はふと決心した。彼は控訴の手續をした、牢屋の中に行つてカチユウシヤに自己の罪を謝した。カチユウシヤは思ふ存分に公爵を罵倒した。けれど彼女も遂に公爵の誠實と愛情との爲めにだん／＼とその荒んだ氣分から救はれて行つた。彼女は最早酒も煙草もやめてしまつて、今一度、十年前の醇なるカチユウシヤに歸つて見たいと云ふ様な泌々とした氣分になつた。そして最早その時の自分でないと言ふに言はれぬい悲哀を感じた。公爵はシベリヤまでもカチユウシヤを追うて行つた。それは彼女と結婚して、今迄の様な放恣な贅澤な耻づべき生活から脱れて、農民の爲めまた平民の爲め。シベリアで新しい生活を送らうとしたからであつた。けれどカチユウシヤが公爵に對する愛をも捨て、國事犯人シモンソンと結婚するに至つたのは無理のない悲しい運命である。さうだ、もう十年前のカチユウシヤには復れない。彼女はたゞ今の境遇に於けるカチユウシヤとしてののみ新しい生活に入るとが出来るのである。シベリヤの雪の夜、犯人の宿泊する佗しい驛亭、復活祭の鐘の音が、恐ろしい沈黙を破つて響いた。——丁度それは十年前の楽しい復

活祭の時を思ひ出さしむる程に——二人は茲に全く新しい生活に入らんが爲めに最後の訣れをした。復活祭の鐘を相圖に、復活した二人は悲しい最後の袂を分つた。

この公爵はトルストイ自身であるかも知れない。トルストイ自身にも亦、人には語り得ない様な痛ましい過去をもつて居るかも知れない。けれどもネフリユドフ公爵もトルストイも勇敢なる復活者であつた。

西洋だつて随分道徳が頽廢して居る。けれども西洋にはまだ一縷の望みが繋つて居る。それは彼等にはまだ復活の精神が盛であると云ふのである。彼等は過ちを改むるに憚るとは無い。日本ではそれが足りない。復活しやうとする力が最早なくなつてしまつた様に、もしくは初めから存して居ないかの様に。

前非を悔いて新らしい生活に入るに勇敢なるジャン・ヴァルジャン、チフリユウドフ、トルストイ。その復活の力。それで十分である。たゞ日本の社會にはそれすらもない。

#### 四

チフリユウドフやトルストイを出した露西亞は特別な國だと云ふ人があるかも知れない。けれどそれは拜金宗の本國と目される米國にすらもあり得る。今より幾十年前のとてあつた。シカゴにスバツフォードと呼ぶ辯護士があつたが、その夫人は四人の子供をつれて英國へ遊びに行つた。然るに彼等の乗つて居た船が英國海岸に近いところで難破した。四人の子は溺死した。たゞ夫人のみが助かつた。



吾々の生命は如何に發達するか。吾々の死後は如何。それには色々の説があらう。然し吾々の生命は神の生命の片割である限り、それが亡くなると云ふことは決してない。それは永遠に進歩して行くものだと確信してよい。それは證明するとは出来ないかも知れん。然しまたこれを論破するとも出来ない。譬へば神の存在に對する信仰の様なものである。神の存在を證明することが六ヶしいとしても、もし神の存在を許さないならば、天地自然はこれを説明することが出来なくなつて来る。死後の生命がないと云へば、人間の活動は自然と鈍つて來なければならぬ。靈魂不滅の信仰は、花の色や匂を説明し得ないが、これを直覺し得ると同じである。朧月夜の麗はしさを説明するものが出来ないが、その美を直覺し得ると同じ事である。靈魂不滅の信仰は吾々の直覺である。また人間本然の要求である。

英吉利の小説家ウエルズの或る物語に、この下界に下つて來た天人の話がある。天人はこの世に下つて來たが着るものも食ふものもなかつた。そこで彼はその纖弱い腕をもつて働かなければならなかつた。そしてその勞働の報酬でもつて被衣を買うて僅にその身を纏はなければならなかつた。人々は彼の身窄らしい服裝を見て嘲るのであつた。かくてその天人にはこの浮世程苦しいところはなかつた。彼の唯一の望みは早く死んで天に歸るとであつた。而も彼は自ら意を決して死ぬを許されて居なかつた。或る時彼は一人の少女が大水の流れに溺れて死なうとして居るのを見た。そしてわれを忘れてその少女を救はんが爲めに身を躍らして水に投じた。かくして天人は遂に天に歸ることが出來た。

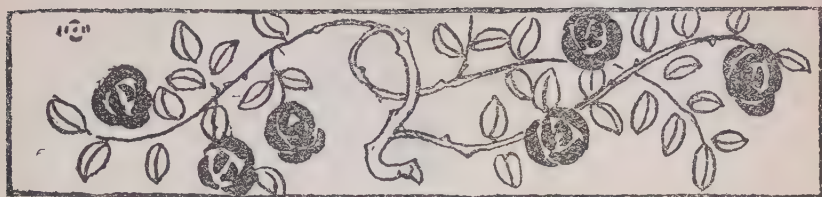
現世に生を享けて居る人々には色々の種類がある。富める英米に生れたもの、生活難の日本に生れたもの、同じ日本でも、或者は貴族富豪の家に生れ、或者は百姓勞働者の子となつた。或者は男、或

者は女、或者は天才、或者は凡庸。一面から見ればそれは實に不公平の極みである。正義は毫も行はれて居ない様に見える、けれど、吾々をして翻つて考へしめよ。吾々はみなこれ天人でないか。幾十萬年の歴史をもつて居るわれ／＼の生命は無機物、植物、動物の時代を通過つて來たのである。或時は山にかくれ。或時は河に潜み、或時は土の中に住んで居たのである。而してその源はこれを宇宙そのものに歸せねばならない。即ち吾々は神の懷から生れて來たのである、即ち天人である。

かの天人と等しく吾々はこの世に於いて苦しまなければならぬ。けれどこの世とても、老病死苦をもつてのみ圍まれて居るのではない。日月星辰は吾々を照して居るではないか。花鳥風月が吾々を樂しますではないか。泥棒や惡人の心の中にも神の片割が潜んでゐるではないか。かう考へて來るとき、この天人たる自己と、その周圍の明るい部分に氣がついて來る時、吾々の心靈は復活しないで居られやうか。

### 三

ユウゴウのレ・ミゼラブルの、ジャン・ヴァルジャンは、貧乏人で、泥棒であつた。彼は或るバン屋から一片のパンを盗んで獄に投ぜられた。放免せられて或る夜或る寺院に宿をとつた。そして彼はまたそこでわが心の惡魔の誘惑にまけた。銀の燭臺を盗んでそこを去つたのである。巡查に押へられて彼は再びその寺院に連れて來られた。然るにその時、僧正は何と云つたか。『それはお前にやつたのではないか。』彼はこの僧正の慈悲によつて無罪となつた。けれど赦さないものは彼の良心であつた。彼



# 人生に於ける復活の經驗

内ヶ崎 作三郎

## 一

北半球に居住する諸國民は概ね春には春の祭を行ふやうである。それは陰鬱な冬の永い壓迫から逃がれて、一陽來復、花笑ひ鳥歌ふ春の光の恵みを迎ふるの喜びを表白せんが爲めである。歐米各邦にもそれがある。日本に於いては三月や五月の節句、春季皇靈祭、彼岸等<sup>ひがん</sup>は春の祭と見ることが出来る。これ實に人心の自然の發露である。何故なれば吾々は最早、身を裂く<sup>つんぎ</sup>様な凧に襲はれることもなく、氣息も氷る様な冷たい空氣に觸れることもなく、霜柱や氷柱に、強ひて美を認めなければならぬ必要もなくて、膚さはりの可い春風に訪れられ、長閑な春霞の翼の中に温かく抱かれ、山吹、櫻、桃、紫雲英、蒲公英等が、鎖された自然の扉を破つて、吾々の眼の前に表はれて来るからである。かくて吾々は最早呪はれた世界に住んで居るのではない。慈愛に充ちた天地の懷に休んで居るのである。さう云ふ感じが吾々の心の中に起つて来る。これが春の感謝祭りの行はれる所以である。

基督の死は恰度冬の様な嘆きと悲みと失望と陰鬱と壓迫とであつた。然るにこの冬もさう長くは續かなかつた。彼の弟子達の胸には、急にまた春が甦つて來た。それは彼等が死の壓迫の墓場より基督の復活を見たからであつた。もしくは見たと感じたからであつた。その信仰の土臺の上に基督教の大建築が立てられた。四福音書の復活の記事には矛盾も撞着もある。併しその背景には偉大なる或者があつた。弟子の心の中に大なる幻の影があつた。主觀が客觀を生んだとも解釋が出来る

基督の如き偉大なる人格、もしくは豫言者は、假令その肉體が滅びても死ぬものではない。それは基督自らの確信であつた。また一時は絶望のどん底に陥つた弟子達の回復し得た信仰であつた。一體猶太民族は未來觀念に薄い人民であつた。彼等の現世的なところは、丁度よく日本人民に類似して居る。その人民に靈魂の永遠を信ぜしめ、未來觀念を鼓吹したのは國歩の艱難の間に生じたる世界終末觀<sup>エスカトロピー</sup>であつた。されど改革猶太教徒、即ち基督教徒の間に心靈不滅の確信を懷かしめたのは基督が甦つたと云ふ、一團の遺弟子のこの確信に基因するのである。今日より見れば基督の復活に對する弟子の信仰は幼稚であつたであらう。しかしそれは二千年以前のことである。その當時の人々の醇なる心には、それは潑刺たる信仰を生まないでは居られなかつた。

自然界の復活を祝ふ春祭と、人生の復活を讚美する復活祭とが、後の基督教に於いて一つとなつたのである。楽しい希望の光りにつゝまれた、最も光榮ある人生の祭祀！



# 洋書 KYO-BUN-KWAN 書

Apologetic of the New Testament by E. F. Scott.....	2.00—.06
Bible Doctrine of Atonement by H. C. Beeching.....	1.25—.06
Buddhism and its Christian Critics by Paul Carus.....	2.50—.08
Christianity and the Social Order by R. J. Campbell.....	1.75—.08
Church Universal: a Restatement of Christianity in Terms of Modern Thought by J. J. Lanier.....	2.50—.08
Efficient Church by C. G. Doney.....	2.50—.08
Ephesians by Prof. Caudlish.....	.75—.04
Evolution and Christianity by J. Iverach.....	1.25—.06
Exposition of the Apostles' Creed by J. E. Yonge.....	1.25—.06
Fact of Christ by P. C. Simpson.....	.50—.04
Future Leadership of the Church by J. R. Mott.....	2.00—.06
Holy Land and the Bible: a Book of Scripture illustrations gathered in Palestine by C. Geikie.....	1.25—.08
In a Wonderful Order: a Study of Angels by J. H. Swinstead.....	1.75—.08
In the Cloudy and Dark Day by G. H. Knight.....	1.75—.08
Joshua by Geo. C. M. Douglas.....	.75—.04
Judges by „ „ „.....	.75—.04
Man's Religion by F. B. Smith.....	1.50—.06
Manual of Christian Evidences by C. A. Row.....	1.25—.06
Manual of Church History by A. C. Jennings.....	1.25—.06
Manual of the Book of Common Prayer, Showing its History and Contents for the Use of those Studying for Holy Orders, and others.....	1.25—.06
Missions Striking Home: a Group of Addresses on a Phase of the Missionary Enterprise by J. E. McAfee.....	1.50—.06
Names of God in Holy Scripture: a Revelation of His Nature and Relationships by a Jukes.....	2.00—.06
Our Heritage in the Church, with a Preface by B. E. Westcott. by E. Bickersteth.....	1.50—.06
Principles and Methods of Religious Work for Men and Boys.....	1.50—.06
Religious Certainty by F. J. McConnell.....	2.00—.08
Ritschlain Theology and the Evangelical Faith by J. Orr.....	1.25—.06
St. Mark's Gospel with Introduction, Notes, and Maps by T. M. Lindsay.....	1.25—.06
St. Mathew's Gospel with Introduction and Notes by E. E. Anderson.....	1.25—.06
Textual Criticism of the New Testament by B. B. Warfield.....	1.25—.06
Theology and the Social Consciousness by H. C. King.....	2.50—.08
Theology of the New Testament by W. F. Adeney.....	1.25—.06

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

東京

教 文 館

銀座

(振替東京一一三五七)

六  
合  
雜  
誌



七

月

號

# 六合雜誌第三十四卷第七號目次

## 評論欄

人生に於ける復活の經驗……………

内ヶ崎 作三郎……………二

神火靈……………

記 者……………二

トルストイと自殺……………

兵 頭 棹 歌……………二

社會及政治改革家としてのトルストイ……………

井口杜村譯……………三〇

宗教的經驗とは何ぞや……………

鈴木龍 司……………四三

## 文藝欄

At A Mountain Pass……………

岡 田 哲 藏……………五五

ラザロとアブラハム(戯曲)……………

佐 藤 清……………五八

『温室』より(メエテルリンク)……………

飯田敏雄 譯……………六四

失 言(小説)……………

齋 藤 未 學……………六七

日 光(歌)……………

伊 藤 寥 々……………七八

モスコウよりベルリンへ……………

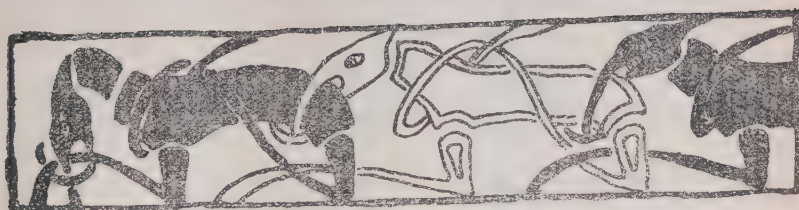
盧 山 生……………七九

殘虐の讚美(詩)……………

加 藤 一 夫……………八三

奈良より(詩)……………

佐 藤 清……………八五





沈黙の扉(感想)……………吉田 紘二郎……………八七

新約書寫本本文の性質に就いて……………三 並 良……………九五

社 會 欄

道徳政策上より見たる男女風俗の壞

亂……………一條 忠 衛……………一〇二

科學と人生……………△性的反應の研究……………△私生兒

の處遇……………自殺の内的原因……………記

者……………二〇七

婦 人 の 王 國

△日本婦人の近業△婦人消防隊の新設△子の多い婦人△六名の新女醫△救世軍の新  
任士官△虛榮心に富む海軍士官の夫人△五十萬人の女工△英國上院と婦人參政權  
運動大騷擾△壯烈なる女丈夫△佛蘭西の妻君氣質△飢食と健康△在外邦人の發展  
△新文相の女子教育觀△女醫と結婚△英國の酒場女△婦人が投票せば△女檢察官  
△女の教會

時 評

△イウルソンに代りて日本の政界を戒むる文(星島)△政治運動の  
徹底(太田)△太平洋沿岸に於ける基督教思想の發展(甲島)△抽象的議  
論とは何ぞ(若生)△街頭樹と屠牛競技(天野)單科大學に就いて(丘南)

■新刊批評……………■惟一館たより……………■編輯の窓より……………



煉製・水製は最も進歩した理想的の齒磨です。

ライオン煉齒磨

齒楊枝の毛尖に載つて、  
齒の隙間まで能く磨けます。

ライオン水齒磨

二三滴を水におとして、  
含嗽をする丈で宜しい。

煉製・水製は最も高尚で全く現代人の誇です。

東京・大阪・名古屋

小林富次郎

# THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 402. July. 1914.

## CONTENTS.

Experiences of Spiritual Re-birth in Human Life.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
Divine Fire-Spirit.....	O. Arai.	11
Tolstoi's View on Suicide .....	T. Hyōdō.	21
Tolstoi as a Social and Political Reformer.....	T. Iguchi.	30
What are Religious Experiences? .....	R. Suzuki.	43
<hr/>		
At a Mountain Pass.....	Prof. T. Okada.	55
Lazarus and Abraham ( <i>a dialogue</i> ).....	K. Satō.	58
"Serres Chaudes" (Maurice Maeterlinck)... <i>Translated</i> by T. Iida.		64
A Poor Old-Peasant ( <i>a novel</i> ). .....	M. Saitō.	67
<i>Tanka</i> . .....	R. Itō.	78
From Moscow to Berlin.....	Rozan.	79
From Kamakura ( <i>a poem</i> ).....	K. Katō.	83
From Nara ( <i>a poem</i> )... ..	K. Satō.	85
Fragmental Thouhgts.....	G. Yoshida.	87
<hr/>		
Prof. Von Soden on the Original Manuscripts of the New Testament. ....	Prof. H. Minami.	93
<hr/>		
Ethics of the Sex.....	T. Ichijō.	102
Science and Life. ....		107
<hr/>		
Woman's Kingdom. ....		113
<hr/>		
Topics of To-day. ....		120
Unity Hall Reports. ....		130
Books of the Month. ....		131

*Editor* Rev. Prof. S. Uchigasaki, *Sub-editor* G. Yoshida.

Published Monthly by the  
TÔITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAJ,  
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

# 現代思想界の權威

文學博士  
早稻田大學  
教授

波多野精一  
內ヶ崎作三郎

書簡  
序文

野村隈畔 先生新著

## ベルグソンと現代思潮

菊判上製美本 全壹册 正價 金壹圓參拾五錢 郵稅金十二錢

### 最新刊

今や世界の思想界はベルグソン哲學全盛の時代なり。殊に本國の佛蘭西に於ては彼の講演を聴くは社交上の必要條件となり貴婦人及び一般人士に至るまで彼の講筵に出席するといふ程の大流行となれり。然れども流行は往々にして皮相無意義に終り易し。徒らに舊を惡みて新を趁ひ何等深き根柢なき我思想界に於ては殊に此感を強くせずんばあらず。著者茲に大に見る所ありベルグソン哲學の流行を殊に意義あらしめ結實あらしめんが爲めに此書を著す。本書は現代哲學の意義をベルグソンと現代思潮との關係及びベルグソン哲學の眞髓を論ずること頗る精確を極む。若し夫れベルグソン哲學をして一時の流行物とせず自己思想の發洩たる血肉たらしめんと欲するの士は是非とも本書を一讀せざるべからざる也。

文學博士 小西重直 先生序 今西嘉藏先生著

## モントペツ 教育の原理と實際

製上判六四  
金價正

錢拾八  
錢八稅郵

〔明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可〕  
〔六合雜誌第三拾四年第六號（大正三年六月一日發行）（每月一回一日發行）〕

〔本誌  
一册定價貳拾錢〕

發行所 東京 市 神田 區 金 表 座 保 町 六 番 地 大 同 館



明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可  
大正三年七月一日發行每月一回一日發行

六合雜誌第三十四年第七號

# 六合雜誌



七  
月  
號



# 夏期中の御來宿者を歡迎致候

高等下宿

## 榮林館

館主 文學士 今岡信一郎

本郷區追分町三〇  
電話下谷 三三四六乙  
(追分電車終點ヨリ五分間)

### 本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共

●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く)  
●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く

### 本誌廣告料

特等	普通	普通
表紙二三四面	一頁	半頁
一頁	金貳拾圓	金拾貳圓
		金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候  
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正三年五月二十日印刷納本  
大正三年六月一日發行  
(毎月一回一日發行)

定價 貳拾錢  
稅共

發行兼編輯人 鈴木 文治  
印刷所 山本與一郎  
東京市京橋區西船場町二十七番地  
株式會社 英秀

### 發行所

東京市芝區  
三田四國町

### 統一基督教弘道會

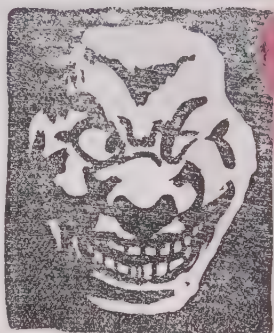
〒振替東京一〇〇〇三番

### 賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋  
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

六月初旬  
發賣豫定

JEAN CHRISTOPHE



ロマン・ローラン 原著  
三浦 關造 先生 譯

十九世紀の預言者がニイチエであつたとすれば、二十世紀の先覺者はローランのクリストフである。いかに嚴密なる人生問題の、雄大にして、而かも喜ばしい解決が本書に表現されたるかを看よ。かのエドマンド・ゴスが「二十世紀の産みだした最大高貴の傑作也」と激賞したのは、實に此物語である。これ眞に人生最大の興趣、現代の迷夢を破る一大鐵槌である。水晶の如きその文章——トルストイ以後唯一人と稱せらるゝ其内生命の擧出力は合せて、全篇に莊麗の神祕を添へて、人々をして驚き且つよろこばせ、且泣かしむるものがある。最も自己に忠ならむとするもの、現代最深の叫を聞かむとする者、新生命を獲得せむとするものは、佛蘭西は言ふに及ばず、今や世界智識階級の大なる注目を惹きつゝある本書を讀まれよ。

クリストフの叫を破つて

四六判美本  
價壹圓卅錢  
郵稅金八錢

賣捌は  
全國各  
大書林

東京橋本張町  
警醒社書店  
振替東京五三番

立憲青年黨機關雜誌

# 世界之日本

(錢壹拾部一金價定) 六 月 號 (錢廿圓壹金分年壹)

●大隈首相と語る(犬養輩眼中になし政綱の堂々たるを見よ) 少壯政客

●國民黨脫黨理由……高木正年  
◎急進主義……橫山雄偉  
◎憤激錄……坂本正雄

●犬養過去暗黒史  
▲高島炭抗労働者虐待事件▲彼は犬養生なり  
▲決闘を申込まれて遁走す▲陰險卑陋醜劣の人

○國民黨と犬養君毛崎法相○反省せよ島田三郎○犬養に説法する人  
を求む三宅博士○犬養は狐富田幸次郎○犬養局外觀向教授○與犬養報川淺知

●犬養  
○非首領犬養片桐大監○犬養は政海の暗礁謙吉小寺○現下政局と犬養態度浮可博士○噫! 憲政神杉中○偽醜惡犬養

●征伐  
○龍太郎○時局と犬養板垣伯○犬養木堂論山路愛山○公人とし木堂室伏高信  
○駄目なる木堂本城安太郎○犬養の暗黒武俠杉本○彼の生命は死滅吉田教授○彼の前途は絶望安部教授○遺憾至極黒岩周六○犬養を葬れ佐伯博士

●犬養征伐論  
▼何の國土ぞ▼彼は日本一  
▼富豪の寄生虫……立憲青年黨幹事長  
橋本徹馬

●二大政黨論……齋藤降夫  
◎選舉權擴張論……青年黨幹事長橋大河  
◎諸家の犬養評を評す……蓬萊山人

●時勢の置去りを食ふ政治家……社説

(後附六)

電話本局二五二四  
振替東京二六八四

發行所 東京 市 神田區 田七  
世界之日本社



# 新進自由思想家の好著!

著者	書名	定價	郵税	出版元
三並良	福音書大觀 (譯)	三、五〇〇	八二	統一基督教弘道會堂
安部磯雄	現代戰爭論 (譯)	八、五〇〇	二二〇	統一基督教弘道會堂
應理人	理想の政治論	一、四〇〇	三三〇	高榮文館
人	人生と文藝	一、四〇〇	三三〇	高榮文館
近代人の信仰	近代人の信仰	一、四〇〇	三三〇	高榮文館
白中	白中	一、四〇〇	三三〇	高榮文館
虞翁	虞翁	一、四〇〇	三三〇	高榮文館
内ヶ崎作三郎	近代人の信仰	一、四〇〇	三三〇	高榮文館
神田佐一郎	登高自卑	三、〇〇〇	八二	統一基督教弘道會館
向軍治	ハツ當り集	三、〇〇〇	八二	統一基督教弘道會館
岸本能武太	英語發音の原理	七、五〇	八二	文館
今岡信一良	新神學(譯)	一、〇〇〇	八二	同館
小山東助	久遠の基督教	一、〇〇〇	八二	同館
永井柳太郎	社會問題と殖民問題	一、〇〇〇	八二	同館
合著	著進歩的宗教	一、〇〇〇	八二	同館
加藤一夫	闇に輝く光	八、五〇	八二	同館
淺田泰順	新譯律氏和聲學	一、七〇〇	一〇〇	同館

◎振替貯金にての御申込みは

東京市芝區  
三田四國町

統一基督教弘道會宛に

振替東京一〇〇〇三番

労働問題解決の先驅者 友愛會の機關新聞

## 友愛新報

毎月一日十五日發行  
定價金三錢稅五厘

資本家より労働者へ

社説

■ 最近目次 ■

- 労働問題解決の一策 油谷治郎七
- 工場労働要義 神田孝一
- 電車はどうして動くか 小口柳太郎
- 友愛會々員に呈す 古川仲太郎
- 陸海軍工廠の大腐敗 暗涙生
- 米國海軍の禁酒令 記者
- 自由文壇……會 鈴木互清
- 聯珠 鈴木一鶯
- 友愛俳句 鈴木一鶯
- 働く乎飢ゆる乎 松本雲舟

發行所

東京市芝區新  
堀町卅一番地

友愛新報社



六月一日發行

# 創造

定價金廿五錢

▲自殺せる詩人のために

▲「青書」より

▲泡鳴氏に與ふ

▲新代生活の意味

▲新緑の朝

▲悲しき比喩

▲盲目になるまで

■面白く新内容更に充實せる六月號

■新らしき詩歌募集■

▲水より葡萄酒を

▲途品川にて上

▲南品川にて

▲父となりて

▲京都にて

▲自殺者の心理

▲毒葉の壹

高月靄之助

木村莊太

加藤朝鳥

中村孤月

人見東朋

相馬泰三

影山哲雄

尾瀬哀歌

秋庭俊彦

福士幸次郎

稻毛詛風

仲木眞一

清浦明人

相馬御風

發行所

小石川區雜司ヶ谷町

創造社

〔後附四〕

# 東亞之光

每一月一發行 六號 冊二十 金貳拾圓 錢拾四圓 稅拾錢 壹錢 郵稅 五厘 共

## 評論

- ▲古神道の神々 法學博士 寛克彦
- ▲ウキクトリアン、サルドウーの劇曲 文學士 淺野利三郎
- ▲社會問題としての北歐の禁酒運動 在獨文學士 上西半三郎
- ▲和歌 醫學博士 三浦守治
- ▲詩人としてのシュリー、ブリユードム 文學士 秋田拍舟
- ▲生命と宗教 文學士 高田儀光
- ▲若かへで 文學博士 佐々木信綱
- ▲江戸時代の勤王論に就いて(承前) 文學博士 三上參次

- ▲ウントの祖先崇拜論 文學士 桑田芳藏
- ▲奉悼(英詩) 文學士 松浦一
- ▲義經入夷傳説考 文學士 金田一京助
- ▲世に知られたる梵語佛典 文學士 萩原雲來
- ▲死せずとせらるゝ英雄(四月號志田學士論文を讀みて) 文學士 河野省三
- ▲死せずとせらるゝ英雄に就いて(河野學士の論文を讀みて) 文學士 志田義秀
- ▲奉悼十句 志田素琴
- ▲海外思潮 ▲選歌 ▲選句 ▲漢詩 ▲彙報

東亞協會

東京市本郷區駒込五〇

發行所

振替 東京七番

# 神學之研究

定價 一冊 廿錢 郵稅 四錢 六月 號 壹ケ 年金 壹圓 三十 五錢

基督教根本問題

須藤吉之祐

英國神學とドライワー

稻垣陽一郎

神秘教と聖保羅

太田靈順

リツチル神學と現代

日野眞澄

三位一體に就て

紀平正美

宗教心理學上の見地

上田只一

ヴントの宗教觀

三並良

禁欲主義と律法の價值

鈴木龍司

新著紹介三十種

研究會員

大賣捌店神田表神保町

東京堂

發賣所東京銀座尾張町

警醒社

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副  
長、八目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)  
(本 八九八(私宅用))

## 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

## 院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一二番

## 南湖院

河野、高橋、兩副長、八目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後  
入院、診後應需



## 惟一館たより

△芝公園の新緑に負けまいといふ氣でもあるまいが、惟一館の建て物が新たに塗りかへられたのが目立つて見えるやうになつた。庭には植木屋が入つて、五月の太陽に輝かされた新緑が見ちがへるほどの装ひをしてゐる。若い人ばかりの集つてゐるホールの空氣は内外相應じて、更らに明るくさして行きたいものだ。

△五月の主なる説教は四月廿六日、何の爲めの惡役苦痛ぞ（内ヶ崎）同夜、學生傳道演説會、心の改革（早大、紺野五平、覺醒の曙光（慶大、宮田城之助）、第三帝國とユニテリアン主義（高商、雀部進）、我が宗教生活（早大、上田榮吉）、廢物利用の人生（内ヶ崎）五月三日、過去の讃榮（内ヶ崎）、同夜、イエスの誘惑（原田長治）自己の意義（三並）。五月十日、光明への轉回（内ヶ崎）、信の徹底（原田）、舊道徳より新宗教（相原）。五月十七日、人生の波瀾（内ヶ崎）、五月二十四日、皇太后陛下奉悼會（内ヶ崎）諸氏であつた。

△五月十五日は例によりて、第二十六回通俗講話會が開かれた。鈴木氏の司會の下に、歐米細民窟の生活（生江孝之氏）、動物にも我師あり（江原素六氏）、孝子鐵九郎（教談・三浦榮堂）雪晴れ（琵琶薩摩絃風）等があつた。來會者二百五十。

△五月十七日夜は市政問題講演會を開く。東京市と社會問題（鈴木文治）東京市とベスト（内ヶ崎）、公私の別（武田芳三郎）、選舉人に告ぐ（松尾清次郎）市政雜感（森村左衛門）諸氏の熱烈な市政改革の講演があつて、時節柄聴衆衆議堂の盛況であつた。

△五月十七日午前、新たに入會せられた兄弟達の爲めに洗禮式を舉げた。それから引き續いて吉例により寫眞撮影の後、圖書室で懇話會を開いた。新たに入會せられた久松貞明、武田久子、小原みほ、花井五平、高木貞雄諸氏の祝福を祈ります。

△會員太田眞一氏は順天堂病院に入院された。一日も早く全癒されることを祈る。

△會友松尾孝輔氏の嚴父が亡くなりました。寔に御同情に耐へぬ。

## 編輯室より

△六月の新緑を讀へやうと思つたのは、恰度四百號記念を出さうと準備してゐる頃であつた。同人の二三人が芝の山内をそゝろ歩きの折、餘り輝かしい新緑の美に擧たれて、誰いふとなく新緑！新緑！の嘆美となつた。内ヶ崎氏が發案で新緑讚美號を出さうといふことになつた。そのつもりで原稿を集めることにしたが、五十嵐氏や吉江氏が進んで御寄稿下さつたのは感謝に耐へません。長崎あたりからまでも送つて下さつた方があつたが、生憎締め切り後で間に合はなかつたのは残念であつた。何れ次號に於いて發表するつもりです。

△五月九日午後六時半、神田青年會館に、本誌四百號記念講演會を開いた。前日あたりから眞紅に空した太陽は今日も紅かつたが會場が開かれるころになつたら、空は一面に曇り曇つて、風は砂塵を捲き上げ凄まじいやうな天候になつて來た。それでも會集は定刻前から押しかけて拍手の聲が方々で起る。内ヶ崎氏の開會の辭に次いで吉田絃二郎氏が「オスカ・ワイルドよりメテオルリンクへ」をやる。鈴木文治氏は巨軀を壇上に運んで「時代思潮と勞働問題」なる題下に、氏獨特の勞働政策を縦横に振り廻す。一般的教育の發達はここに、政治上にも經濟上にもあらゆる社會上にも覺醒せる勞働者の團結を生むだ：」と言つた風な調子で盛に拍手の聲を浴せかけられた。三並良氏は「オイケンの内觀論」といふので、一例を舉ぐれば從來の歴史の如きも單に客觀的な事實を客觀的態度で書いて行つたのであるが、吾々は本客觀生命の立ち場から、これを内觀的に見て行く必要がある」といふやうな、極めて學實な講演であつた。岡田哲藏氏は「我が斷片」の香ひを以て場内の聴衆をあつと言はせた。「電車の中の若い女」や「人間の耳」や「大沈靜の底から洩れて來るただ一つの手斧の音」や「がいかにも冷靜に、しかも底深く熱き涙を以て見る氏の態度がうかがはれた。頗るくば笑を以て氏の斷片を聴く勿れ。涙を以てこれに應へよ。内ヶ崎氏は「現代文化と進歩的宗教」安部磯雄氏は「來らんとする社會運動」を論ぜられた。共に定評あれば一言を附する必要があるまい。

!!著名大最の界世威權の壇文現!!

■ダヌンツイ才著 □鷺尾浩氏譯 ■(最新刊)

ス  
ラ  
ン  
ヂ  
エ  
ス  
カ

布總裝洋版六四

頁百五約數紙入箱裝美極

正價金一圓五十錢

● 郵稅內地 十二錢

羅馬の大劇場で熱狂の觀衆を魅惑したこの大戯曲『フランチエスカ』は、伊太利大詩聖ダヌツィオが、その絢爛の文辭と精鍊の情調との極致を盡して琢き上げた世界大戯曲中の寶玉である。纖細麗美の舞臺面と、靈的悲劇的雰圍氣と蟲惑的描辭結構とは讀者と觀衆とを問はず恍然夢幻の境に彼等を導かずにおかぬであらう。藝術の粹を味はむとする近代人にこの一卷をお奨めする。

●ブランドス著 ●矢口達氏譯 ●

菊判總布特製美本箱入紙數約五百頁全紙寫  
眞版六葉入 正價金二圓 郵稅內地十六錢

的狂熱  
迎歡大

十九世紀  
文學主潮

移民文學

千古未曾有の英傑ナポレオンが歐大陸を蹂躪したかの恐怖時代前後を背景として、歐洲文藝は如何なる發達を遂げしか。現に滿と絶つとより生れた藝術は抑も如何なるものなりしか。不なる建瓴境隨一の權威ブランドスは其の博達なる智識力と深銳代藝術の境隨一の權威ブランドスは其の博達なる智識力と深銳なる文藝最大名著にて其時代を縱橫無盡に解剖論斷したり。是正に現文藝最大名著にて其時代を縱橫無盡に解剖論斷したり。是正に探らむとせば、乞ふ本書に來り求められよ。

（後附）

振替口座東京  
一五七〇番

新陽堂

川石小京東  
州川豐田高

發行所

聲も聞えて來た。しかしながら彼れ等も人間であつた、眞實の人間であつた。明るい心と、食るやうな生の執着を失ふことのできぬ人々であつた。『自分は生きてゐた。そして生きて行かう』彼れ等が暗黒の底に沈むほど彼れ等は生命の光明を慕ふのであつた。『烙印も鎖も、彼の人間であることを忘れしめはしないであらう。それ故彼れは人情を以て取り扱はれなければならぬ。情けある取扱ひは、その神靈の姿の久しく蔽はれてゐる人々をも目醒めさせる。殊に謂はゆる「不運な人々」に對しては、情けある行ひが必要である』何うしても自己が人間であることを忘れることのできぬそこに人間の尊さが潜んでゐるのではないか。ドストエフスキはどこまでも人間性の尊さを攫むのである。

『生涯に一度、一度、而も唯の一度、彼れは自分の衝動によつて行はうと欲したのであつた』それが生憎社會の罪惡といふものであつた。そして彼れは人間としての尊い力までをも傷けやうとし、傷けられやうとした。吾等はいかなる人々の心奥にも潜んでゐる、信愛せんとする生命、伸びんとする生命、親和せんとする生命の力を遺れてはならぬ。『死人の家』全篇を通じて。荒寥たるシベリアに埋もれんとする『薄運なる人々』の心の底からあふれて來る人間性の尊さと美しさと懐しさと光明とを以て綴られてゐる。吾等は彼等が獄底に祝ふクリスマスの幽鬱な力のない唄を聴かう。キリストのやうなドストエフスキの心をもちて。

私が眼はもう見まい、私が生れたその國を。  
過ぎた苛責を受けるのが、私が罰でもあらうわい。  
梟は屋根の上で啼き、森の木魂を起すぢやろ。

胸は歎きに裂けます。いや／＼二度とは歸るこたあるまい。  
挿入しある五葉の寫眞は、本文の意を捉へさせるに宜い思ひ附きである。(價一・〇〇)

## △宗教論

シユライエルマツヘル著  
石原 譯  
内田老鶴圃發行

此の間岡田哲藏君が此の書物を批評せよとて、僕に與へられた。僕は之を手にして實は舊友に再會したやうな心地がした。それは僕が丁度廿年程前に「シユライエルマツヘル」と題する論文を書いたことがあるからである。その時には此の「宗教論」をプ

ンエル版で讀んだが、それを今度は日本語で讀み能うになつた。是れ實に我が讀書界の進歩であるが、固より石原君の勞力にも感謝しなければならぬ。獨逸でも此頃は幾種も此書の翻刻が出来て居る獨逸語としては文藝が舊くなくても居るし、獨逸人てさへ必ずしも讀み易いとは云はない此書が、斯く出版せられるのは、單に古いもの好きの爲てはあるまい。又シユ氏が近代神學の開祖と仰がれるから計りでもあるまい。彼の所謂「狂風激進」時代の自由を叫び、藝術の解放を要求し、ありのまゝ、直感を重んじたる等、一言以て之を云へばロマンチツクの傾向は、「宗教論」を産出したのであるが、丁度此の傾向は現代のと似て居る所がある。彼のヤートー牧師の如きもシユライエルマツヘルと比較されたことさへある。類似的時代は類似的の著書を要求するのである。従つて現代の人々が「宗教論」を讀むのは當然である。此書が初めて出版せられた時には、獨逸の思想界に忽ち大なる反響を與へた。之によつて心靈の憧憬に満足を得んとしたのである。ヘルムスと云ふ牧師の如きは正午頃から來客を謝絶し、此の書を讀み初めて夜半までに讀み了り、一二時間眠て實に翌日之を再讀し、そして彼れは「余の高尙なる生命の誕生時は實に此の時であつた」と叫んだと云ふ逸話さへ傳はつて居る。僕は此の書が我が邦に於ても亦た大なる反響を得んことを望て止まない。

譯文に就いても一言する必要があるかも知れないが、原文が舊式の文體である以上、翻譯の困難なことは云ふ迄もない。けれども開卷第一に「凡庸なる民衆を抽んでたる、現代の學術を蘇得せる人々に向つて、彼等がかくも輕侮し、無視しつゝある問題を提出し然かも其に對する意見を聽いて貰へるとは、固より豫期すべからざる望であり、又諸君の定めし驚異せらるゝ所であらう」と云ふ如きは、原文よりも一層煩冗なやうな氣がする「凡俗以上に出て且つ現代の智識にも通じたる人々に向い、彼等が全然等閑に附したる問題を提出し、その傾聴を求めるとは餘り突然な企てであり諸君が之に就て驚くことがあつても無理はない」ととてもしたらばいゝかも知れない。例へば石原君が Vernachlässigt を「輕侮し、無視し」と二重にしたのは多すぎるまいか。 neue artes Unternehmen を「豫期すべからざる望み」としたのは面白くない「望み」よりも「企」の方がいいであらう。



僕は一々正確な譯を望むのは無理かも知れないと思ふ。先づ大體に於て意見が通ずればこれにてあらう。此の點に於ては何處までも石原君の勞を多とすべきである。(價二・〇〇)(三並)

## △文明評論 第一卷第一號

日本基督教會に屬する柏井園、田中達、原戊吉、石田謙、白井胤録、逢坂元吉郎、齋藤勇諸氏の執筆する月刊雜誌にして、基督教の主義に基いて文明の評論を試みんと宣す。吾等はいふに、基督教なる記者よりなる雜誌の門出を祝するものである。創刊號としては紙質も體裁も印刷も上々である。全篇眞摯清實の態度のゆき渡れるは氣持よし。田中氏の宗教心理學、原氏の政論、石原氏のシララー論、白井氏のチエスタンの文學論、齋藤氏のコレレリツ々の老水夫行の忠實なる譯文、とり／＼によし。吾人は本誌が益々健全なる發達をとりて文明批評の木鐸たる實をあげんことを希望す。(一部十五錢、西大久保一三五その社)

## △沈黙の饒舌 内田魯庵著・丙午出版社發行

大正文庫の最終版として發行せられたるもの。本書は著近二三年間に物したる評論「自覺せよ若き女」、「醒めたる女」、「新らしい女」、「廢娼問題の不必要」、「藝者論」、「性慾研究の現在」、「錦繪としての日本」、「トルストイの話」、「移轉男」等二十篇を蒐めたり。その約半部は婦人問題に提供せられ、他の半部は文學者の見たる現代社會觀と言つた風な味がある。しかも之等の諸篇は著者自身の『生活の斷片である』。そして『悠ろいふ活きた問題にぶつかつて怠らず自分の頭腦を鍛鍊して行くのが自分の生活だと思つて』といふ自信を以て描かれたものである。新らしい女の運動に對する著者の思想は極めて積極的である。「若き女よ、自覺せよ。自覺の階梯として先づ智識を昂上せよ。高等女學校に満足するな。女嫁を以て女の究竟目的とするな。……爾の頭腦を充實堅確ならしめて人間としての女の位置を自覺して後初めて女の眞價を發揮する事が出來やう。」これ著者が先づ女に向つて叫ぶ覺醒の言葉である。女子解放、自由、凡てが女自身の實力のみがこれを要求することを得るのである。女自身が新運動を叫ぶ前に先づ女自身強からねばならぬ。自覺しなければならぬ。賢くあらねばならぬ。

若し男の不節操を悔ゆるならば、幾千幾萬の細君連は同盟して離婚を請求すべし。それだけの力を養つて置かなければならぬと著者は言つてゐる。更らに著者は男子に向つても、「新しき男」醒めたる男の出でんことを要望してゐる。即ち女に對する男の期待の革命である。即ち男子自身に「女を男の奴隸」とするやうな不量見を抱かないやうにすることである。

「トルストイの話」は人格方面から見たる彼れを最も器用に纏めたものである。これだけでもトルストイといふ偉大な半面が窺はれる。「移轉男」は議論らしくない議論で、最も面白く讀ませるものであらう。(價〇・八〇)

## △平民詩人 内村鑑三・畔上賢造 共著・警醒社發行

内村氏のワルトホキットマンと畔上氏のデニソン、ローエル、ホキツチャ、ウオーツラス、ブライアントの評論とを合せたるものである。内村氏の譯の一節を引用す。

『余は藥物に就て神を見、且つ神に聴く、然れども未だ少しも神を解せず、余は四六時中、一時として又一瞬時として神に就て或物を見ざる時なし。』

余は男と女との面に於て神を見る、又鏡に對し余の面に於て神を見る、余は神よりの書翰を途上に於て拾ふ、皆な神の手を以て署名さる、余は之を元の所に還す、それは余は何處に往くと雖も、尙ほ他に彼よりの書翰が時を定めて余の手許に達するを知らねばなり。畔上氏の譯文亦頗る力あるものなり。新緑の好時節近世の英米大詩人を讀むことに對して兩氏に感謝せざるを得ない(價〇・五〇)。

## △エリサベス・フライ 森田松榮子譯・警醒社發行

十九世紀 移民文學 矢口達譯・新陽堂發行  
右二著次號に讀る惡しからず著者のお宥しを乞ふ



聴くにあらず、天籟の聲を聴くと自覺したのである。

其の他犠牲の如き、救済思想、將た三位一體論の如き皆な、之を心理的に觀察する時は、その目的は超絶に向つて居ることが分る。特に我れ等の存在は時間的であるが、宗教生活はそのうちに久遠なるものを得んとするのである。これは實に不思議な要求であるけれども宗教の極致は人間をして此の域に達せしめる。宗教では決して久遠が分れて時間となり、時間が延長して久遠となつとは思つて居ない。久遠と時間との關係は、眞の實在と實驗的實在との關係である。ヨハナが「夫れ神はその生みたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し玉へり、此は凡て彼れを信する者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲めなり」と云ひ（ヨハナ傳三章一六）或は「この世と其慾とは消ゆるものにて、神の旨を行ふ者は限りなくとゞまるなり」（ヨハナ第一書二章一七）と云ふが如きも、その主眼とする所は久遠のうちに生くることであつて是れ決して基督教計りではない。あらゆる宗教の極致は皆な人をしてこの自覺に達せしめるであらう。

#### 四

斯う云ふやうに宗教心理學は實際、宗教生活は

如何なる心的過程を取るものであるかを明瞭ならしめる。されば宗教の眞理問題は心理學で説明が出来ないにした所で、或は宗教は唯だ體驗し得べく、理論上の研究で與へるとの出来ないものにした所で、心理的研究も亦た確かに有力である。人々に宗教に達する路を示すとも出来るし、又宗教が各々眞理問題を取り扱つて居るのを見ると心強くなるであらう。否な僕は特にさう思ふが、今日のやうに分裂して居る宗教も之を心理的に研究する時は大に整理がつきはしまいかと。宗教心理學は創始せられてより未だ卅年にはなつて居ないが、前途は實に多望である。宗教には斯の學問によつて尙ほ大なる光明が投ぜらるゝ時機が来るであらう。

# 新刊批評

## △死人の家

片上伸譯・博文館發行

虐げられたる人々の爲めに、薄運なる人々の爲めに、隠された人間性の尊さを發きたる者はドストエフスキイである。千八百四十九年、彼れは革命家としての嫌疑を受けて、ペテルスブルグの獄に下され、十二月二十二日シベリアへの流刑を宣告された。千八百六十一年赦されて再びペテルスブルグに歸つてから出した作品がこの『死人の家』である。全巻六百十八ページを通じて一貫せる筋の脈絡はないが『シベリアの荒漠たる地方の野原や、奥の知れない森林の眞直中で、折々人口千か二千の小ひきな町』がある。『家はすつかり木造で、非常に醜い。教會は二つある——一つは町の中央に、一つは墓地に。要するに本當の町といふよりも寧ろモスコフ附近の可なり大きな村落に類するものである』。こんなシベリアの或る一つの町に住んでゐるアレクサンダー・ペトロヴィッチ・ゴリアン・ニコフといふ一人の流刑人があつた。以前彼はロシアの地主であつた。自分の妻を殺した罪によりて十年の懲役をすました後で、彼れはこの淋しいシベリアの町に住んで、子供達に學課を教へては、いささかの生活費を儲けてゐた。『死人の家』一巻はこの不運なる囚人の筆になつた遺書を編纂したものだといふ體裁になつてゐる。この不幸な貴族を中心として集つたロシアのあらゆる階級からの囚人等の或時は獸的な、暗い、みぢめな、投げやりの生活、そしてまた或る時はまるで嬰兒のやうな無邪氣な、しやい、だ生活がドストイエフスキイ獨特の深刻な解剖刀に細かに刻まれて行くのである。しかも彼れの鋭利な解剖の心及が深ければ深いほど、吾等はその中に溢れて來る人間性の尊さ、美しさを見ることのできるのである。『實に人間は素直な動物だ』。彼の同囚の仲間二百五十人もみんな素直な動物であつた。靴直し、靴製造人、仕立屋、石工、錠前屋、鎖金師もみな不運なる素直な動物であつた。この素直な動物は一步

踏みちがへることによつて、一は聖徒ともなり、一は大罪人ともなるのであつた。實に大罪人とは「不運なる人」といふ意味に他ならなかつた。ドストエフスキイの罪人に對する同情はこの神の如く寛大なる見方であつた。「誰か先づ石にて撃つ者ぞ……誰か罪なしと言ふか」キリストの心はやがてドストエフスキイの心であつた。同時に彼れはどんな頑な心のうちにも、どんな傷られた心のうちにも人間性の尊いひらめきの潜んでゐることを見通さなかつた。獄の司令官少佐は、囚人等に疫病のやうに恐れられた、その厭な赤つ面に誰もかも身震ひした。しかもこの少佐でさへも一定の大トリゾルカの病氣の爲めに氣違ひになるほど彼れの犬を愛することを知つてゐた。またその少佐を殺さうとした囚徒の唇からは『主よ、我を棄て給ふ勿れ……我が憐れなる小さき兒等よ吾が小さき親しき兒等よ、吾等は遂に再び相逢ふことはあるまい』といふ人情味の濃かな祈りが洩らされた。

またその牢獄のなかにはダゲスタンから來た三人の鞆鞆人の兄弟がゐた。一番弟のアリーは二十二を越えては居らなかつた。彼れは自然のまゝに純一な心を以て育てられた青年であつた。彼れの大きな黒い眼はいつも親しみと優しい感情に燃えてゐた。『丁度今夜母親が夢に出て來ました。母親は私の爲めに涙を流しました。これがこの不運なる重罪犯人の唇から洩れた言葉であつた。』『爾言を憎む者を許せ』これがこの不運なる重罪犯人の最も好きな聖句であつた。

『悪い人間の間にでも、何か善いところがある』。まつたくさうだ『死人の家』！とドストエフスキイをして叫ばしめたシベリアの獄屋のなかにも尊い、あたゝかい人間性のひらめきが閃いてゐた。『或者は肩を擧め、或者は如何にも陽氣さうに「惡口を言ひ合つたり、拘りのない事を話し合つたりした。時にはまた自分ひとりの考へに耽つてゐるらしく唯獨りそこを歩い」』とゐる者もあつた。『此處は私の宣告された世界だ。否でも應でも、とにかくこゝに住まなければならぬのだ。人々はいかと思ふては悲しいあきらめをつけてゐた。どこからともなく「承知もせぬのに嫁入りさせた、わしが水車にゐた時に」やけくそになつた勢の好い唄の

ものでなく、實は大なる背景を有するものをその内に發見することが必要である。我れ等は斯う云ふものを内部に發見することは出来まいか。若しかゝるものが發見され得るならばそれは心理的であつて、同時に心理的以上である。カントはその

「純正理性批判」に於て此の如き内部的のものゝ存在することを云つて居る。是れ彼れの稱して先驗的 (transzendental) と云ふものである。若し之を宗教心理的に用ひればどうであらうか、と云ふことが今日の問題である。是れ實に彼のヴォエルミンの如きが宗教心理學に於て、先驗的心理的論法 (transzendental-psychologische Methode) を要求する所以である。そこで此の要求はヴォ教授が今迄の著述或は講演に於て、常に絶叫し來つたところがあるが、殊に昨年出た大著「宗教學と神學に於ける宗教心理的論法 (Die religionspsychologische Methode in Religionswissenschaft und Theologie)」に於て大に此の事を詳論して居る。けれども此のとはもう少し秩序的に説明するの必要があらう。

ヴォ教授は宗教心理學の問題として三種のもの

を呈出して居る。眞理問題、宗教的動機、宗教的傾向がそれである。

宗教心理學が果して眞理の問題に答案を與へ得るやは、疑問である。オイケンの如きは一方に於てゼームスなどの研究に尊敬を拂つて居るけれども、宗教心理學が眞理の問題に答案を與ふるの不可能なることを論じ、その點では之を心理主義と稱して攻撃して居る。ヴォエルミンも矢張り同じ意見を有して居る。けれどもヴォ教授は——是れ彼れが自家撞着に陥るか或は他に通路を見出さざるを得ざる點である——それでも宗教心理學は眞理問題を棄てることが出来ないと言つて居る。その理由として彼れは如何なる宗教にした所で、歴史的に團體をなして居るものは、皆なその信ずる所を眞理なりと思つて居ることを擧げて居る。けれども「眞理なりと主張して居る」のを見て、我れ等も亦た宗教を心理的に觀察すれば、直ちに眞理問題の解釋が出来るやうに思ふのは間違つて居る。是れ例へ我れ等に心理上必然であることでもそれが一般的に必然であると云へないのと同じことである。故にヴォ教授も亦た認めて居るやうに、心理學上からは唯だ眞理たることを要求して居る事實を認めて置くか、或は宗教哲學より眞理問題を取り扱ふことにすればいいのである。是に於て始めて先驗的になる。さうすれば此の眞理問題と動機と傾向とが、互に協力して宗教の本質を益々明かにして行くことが出来る。即ち動機や傾向にして宗教的眞理と關係しないものは、如何に宗教と關係があつてもその範圍外のものとして棄てなければならぬ。之に反

して宗教的動機や傾向と關係なき眞理は、如何なる眞理と雖、之を宗教より除き棄てねばならない。

### 三

斯くの如く宗教心理學上より宗教の本質を考へて得たる結果は何であるかと云ふに、それは以前のやうに、宗教を以て心靈の一作用、即ち智情意中の孰れかの作用に歸着せしめなくなつたとである。今日では多くは宗教を以て、人間のある全體的態度であり、そしてそれがあらゆる心靈的生活の統一的根柢に根ざして居るものとされるところになつた。それからその次ぎはヴントの如きが極力努めたやうに、宗教と神話、宗教と魔術の區別を歴然と立てるに至つたとである。特に此の着眼點よりして宗教歴史が勃興した時分に大に流行したる如き宗教起原説は排斥されることになつた。否な排斥と云ふよりも問題を明瞭にした。即ち太古野蠻時代に宗教が成立した有様より推して、今日の宗教を批評するとの理由なきことが明かにされた。宗教の起原は歴史的にも考へられるが、又刻々我れ等の心靈に生れつゝあるものとしても考へられ

る。宗教心理學は之を區別して而も双方共に心理的に攻究するものである。

ヴォベルミンは更に一步を進めて宗教的生活の目的を論じて居る。然らば此の目的は何であるか、彼れの説明によれば、此の目的は超絶である。あらゆる生活内容を絶し、その他の生活の範圍或は容積ダイアンクを超出したものである。是れ實に彼岸の世界を指示するものである。斯う云ふものが宗教生活の内にある。之を究明するが故にヴォ教授はその論法を先驗的心理的と云つて居るけれども、之れが果して尙ほ純粹なる心理學に屬するかは問題であらう。こゝに至つて問題は最早哲學に這入つて居はすまいか。

けれども此の如き心理的着眼點から宗教の現象を研究するとは決して無益でない。例へば天啓思想は皆な超絶觀によつて成立して居る。殊に宗教が内的になつた時に益々さうである。彼のイスラエルの豫言者の如きは皆な自分が超絶者によつて動いて居ると信じて居た。彼のアモスが「獅子吼ゆ、誰れか懼れざらんや、主エホバものいゝ玉ふ誰れか豫言せざらんや」と云つたが如き、又耶蘇が「天地の主なる父よ、此の事を智者、達者に隱して赤子に顯し玉ふを謝す、父よ然り此の如きは聖意に適へるなり」と云へるが如きは、人の聲を



千八百九十年代佛國の學者から初つて居る。假へば現在コレージュ、ド、フランスの教授たる Ribot や、エコール、フェチロンフェチロンの校長であつて、後ち現代主義者と云ふので學校は逐れ、今はブリュッセル大學の教授たる Hebert の如きがさうである。然し宗教心理學の大發展を促したのは北米であると言はなければならぬ。その發端をなしたのはスタンレー、ホール及びその門弟の研究であらう。しかしそれよりも著しい研究は Leuba や Starbuck や James 等によつてなされて居る。固より是れ等の刺激を受けたと云ふことは出来ないが、獨乙の方でも段々に此の研究に著手するものが殖えた。Wundt, Vorhoeft, W. Schmidt, Wobbermin その他多數の學者が之に従事して居る。米國ではホールの創刊した The American Journal of Religious Psychology and Education と云ふ専門の雜誌があるが、獨乙では千九百〇七年に創刊になつた Zeitschrift für Religionspsychologie と云ふのが一つあつたが、今年になつて一年一回の Archiv für Religionspsychologie と云ふものが出來た。前者はフオールプロットフオールプロット牧師と、精神病専門のプレスラウ博士が主筆をして居たが、今ではフオールプロットが止めて、柏林大學のルンゲルンゲエー教授が之に代り、心理學者のクレナムクレナム講師が之を助けて居る。後者はギーセン大學の教授コツフカーと、牧師ステーリン博士とが編輯して居る。

佛國の學者の研究は主として病理的の現象に注意した迄であつて、それ以上に出るゝとはなかつたらしい。米國のはゼームスの他は重に實驗上の事

實を集めるとにのみ傾いて居る。獨乙のは固より心理學的研究である以上、實驗を基礎としない譯には行かないが、進んで眞理問題にも心理學上から觸れんとして居る。其れ故に各國ともにそれゝ特色があるやうに思はれる。

スタルバックは問題紙を四方に配つて、多數の人々から宗教上の實驗の告白を得て、之を整理、分類して、人間の宗教的發達を研究せんとしたのである。その結果彼れは人間の悔改、歸依は青年の現象であつて、春期發動と大なる關係を有することを發見した。けれども獨逸の學者は之を以て獨逸の事情には全然當つて居ないとなし、米國でも用心して用ゆべき原則であらうと云つて居る。

特にスタルバックの「問題紙方法」はその答案の確實を疑ふの理由あるのみならず、多少異常あり、病的の發達をなしたるものが、答解を試みるもの傾きあり、正則にして平坦なる發達を遂げるものは之をなさざるのではないかと云はれて居るが、此の疑は至當であらう。そののみならず此の方法によつて見たる宗教は宗教そのものゝ精神的本質の

現顯ではなく、單に一般的、生物學的に生ずる表面の現象であらう。故にスタルバックの功績には没すべからざるものがあるにしても、それは唯だ一局部を示して居ることを忘れてはならない。

ゼームスが其の名著「宗教的實驗の種々」に於て主眼としたる所を簡単に云へば、現著なる宗教的實驗によつて、宗教的生活の特色を知らんとすることである。ヴントはゼームスが個人の宗教的實驗より出發するのを非難して居る。これでは歴史や宗教的集團が無視せられるからである。否なヴントの見る所によれば宗教は個人のみを觀察して居てはならない。従つて宗教心理學は民族心理學の範圍に屬し、歴史的宗教から出發しなければならぬと云つて居る。ヴントの云ふ所にも一理あらうが、それよりもヴォペルミンの非難の方が手ひどいであらう。彼れの云ふ所によると、ゼームスは宗教的生活の獨特な例證として、常規に外れた否病的になつた宗教性の特撰するに偏する危険がある。否なゼームスは確かに其の弊に陥つて居る。次ぎにゼームスは其の宗教生活の個々の例を、科學的對象物のやうに孤立さして觀察するから、それ等の例は全然歴史的連絡を失つてしまふ。けれども此の連絡を度外すれば、その特質は了解の出来ないものである。要するにヴォペルミンの非難の歸着する所はゼームスの着眼點が自然科に偏して、歴史的文明學(historische Kulturwissenschaft)を顧慮しないと云ふにある。特に之が爲めゼームスは宗教生活の歴史的發展を顧みることなく、個人的宗教心<sup>レリギオシティ</sup>を孤立せしめるが、

宗教心理學の公平なる態度は、どうしても時代々々の歴史的特質と宗教的生活の歴史的發展とに注意しなければならぬ。

之を以て米國の宗教心理學は、此の學問が當然提出すべき問題の解決を試みることにすら達しない。未だ準備的研究に従事して居るものであつて本論には這入つて居ない。従つて米國に於てすら神學が彼の宗教心理學に對して、多くは排斥的態度に出づるのも了解の出来ることである。

## 二

けれども僕の考へる所によると、神學は何時までも宗教心理學を度外視することは出来まい。前に云つたやうに宗教心理學研究は年々進歩する計りである。殊に今日の考へ方は演繹的でなくて、歸納的になつた。外部から内部に向はずして、内部より外部に向うのである。けれども唯だ内部ばかりに止つて居ることは出来ない。若し内部に孤立したならば、全體との連絡は消滅し、全く主觀主義に終つてしまふ。それでは學問など云ふものは成立することはない。であるから内部より出發はするけれども、それが唯だ内部的に限られたる

結せる勢力を如何にせんや。外に向つて伸びざれば必ず内に向つて爆發するであらう。吾人は實に之を恐るゝのである。さらでだに今の世の人は、皆自己の眞價力量に對する報酬の少きと、待遇の薄きことに對して、不平悶々たらざるはない。既に職業を得て居るものにして然り、況んやあり餘る智識も之を施すに所なく、經綸の大才も空しく槽檻の間に朽ちんとするものあるに至りては、誰れかは天を仰いで長嘆せざるものぞ。夫れも社會の誰れも彼れもが、平等に働き、平等に苦しみつゝあるならまだしも、横着にして立廻りに巧みな者は、大厦高樓に安臥して贅を擅にし、正直にして小心なる者は、常に陋巷に窮死するの有様である。生存競争の結果なりと言はゞ言へ、これ決して正當の競争の結果にはあらず。機會を倖僥する者は富み、風雲に際會せざる者は窮す。これ決して平等自由博愛公正を理想とする人類の心理作用に順應する所以ではないのである。

凡そ物其平を得ざれば則ち鳴る。外には生活の壓迫あり、内には理想の勃興あり、世に教育ある

階級の不遇に呻吟しつゝある程、危険なるはないと思ふ。日本の下層社會の自覺は尙未だし、戰慄すべき我國の階級闘争の端は、或は恐る、此高等遊民の間に發せんことを。外務の當局は何事を夢みつゝあるか。世界の到處に排斥せられつつある日本民族の將來を如何。樺太は严寒、滿洲は不毛臺灣は狹隘、朝鮮は瘠地なりとせば勢ひ領土の外に勢力の布殖を期せざるべからず。然らざれば遂に慘憺たる結果の來るは免れぬであらう。(鈴木)

### 服部綾雄氏の死

本年四月一日米國に於て客死せられた服部綾雄氏の葬儀が四月五日在米邦人の手によりて空前の盛儀を以て執行せられた。一千名の會葬者は故人の靈棺を擁して桑港サンマテオへ歩いた。吾等は遙に赤黄白の草花に飾られた黒塗の柩と、靜かな葬列者の歩みとを想像する事ができる。同氏が日本の國士として、基督者政治家として、海外雄飛者としての異境に於ける死は吾等に幾多の暗示を與へるものではないか。(R・S・T)



## 最近代に於ける宗教心理學

三 並 良

—  
過去三十年間に於ける神學界の進歩を考ふる時に、どうしても見のがし能はざるものには、前に述べた宗教歴史的觀察の外に、宗教心理的觀察があらうと思ふ。宗教歴史は材料を提供するものであるけれども、宗教心理學は之を心理的に取り扱ふて、過去を現在となし、我等の心に親しみをつけ、同情、同感を以て之を理解し得しめ、その眞理内容にまでも立ち入らんとするものである。此の如き任務を意識して起れる宗教心理學の經たる年數は恐らくは我が六合雜誌のそれよりも少くないであらう。

固よりその端緒を云ふならば、何事でも同じ事

であるが、宗教心理學も亦必ずしもさう新らしいものではない。アウグステイヌスの書いたものの中にもある。殊に獨逸の文學者や宗教家の書いたものの中には澤山にある。彼のシライエルマツヘルの著書、殊に彼れの「宗教論」が近年に至り盛んに出版せられるのは、その中に宗教を大に心理的に觀察した點があり、そして丁度その點が、今日勃興しつつある宗教要求の趨勢と共鳴するからであらうと思ふ——我國でも石原謙君が折角之を邦語に譯したけれども、獨乙の如き背景を有せざる我が思想界將た宗教界は之を解し得るや否や甚だ問題である。

けれども眞に宗教が心理學的に取扱はれるやうになつたのは、



るゝか否かは知らねど、少くとも陸海軍の計劃を統一して、國家の眞の必要に適合せしむるに足るものが必要ならぬ。國民も亦必要な費用の負擔は、決して厭ふ者ではないのである。

第三は言論集會結社の自由といふことである。大隈首相は言論の雄、民權の巨匠、流石に此點に注意が屆いて、其自由を尊重するの態度に出でられたるは大に可。從來に於ては以上の點に於て寧ろ專制國の觀があつた。憲法之を保障すと雖も法律之を禁じ、法律之を禁ずるにあらざれども、官僚之を阻むといふが如きもの比々皆然りといふ有様であつた。殊に下層社會の集會結社に對しては、一種の干涉さへも行はれ、官權の濫用と思はるゝことすらもあつたのである。夫れ言論は國民の噴火口、濫りに之を壅塞するは、寧ろ其爆發を刺激するものである。集會結社は自治運動の基礎、之を制止するは、憲政の根本を覆滅するものである。

要するに大隈内閣が、銳意民意を基礎とする政治を布かんとするは、大に吾人の多とする所、國民の信望も亦此點に繋がるべしと思はる。社會の發達、文明の進歩、從つて教育の普及が、一般に民衆的に趣かしむるは、防ぐべからざる時代の大勢である。而して之を利導し善導することが、立憲政治家の大任務である。大隈伯は時勢を達觀するの明を持つて居る。邦家頗る多事、伯の内閣の行為は、實に國運の前途を左右するの權威を持つて

居る。伯たる者亦恐らくは此自覺あるべきを疑はず。(鈴木)

## コムミッシン亡國論

予は此間森村市左衛門翁と會談したが、其時翁の追懷談に曰く、

予は明治の初年に陸軍の御用商人となつた事がある。當時の陸軍は軍務局と言つて有栖川宮様が總裁であらせられた。最初の御用は毛布三千枚を納めよといふので、早速それだけを納めた。愈々勘定を貰ふ段になると、總額三千圓の中三百圓足らない。そこで係官に向つて其理由を詰問すると、こゝへ納める商品に付ては凡て總額の一割づゝは引去るとになつて居るといふので、これは甚だ怪しからん、自分は此商賣で五分しか儲けて居ないので一割も差引かれては割に合はぬと大談判をしたが要領を得ない。そこで其足で直ぐに後藤象次郎伯を訪ねて、キツぱり御用人を斷はつて仕まつた。徳川幕府は其晩年に及んで賄賂公行柔弱奢侈で、朽木のやうに腐れて居た、爲めに書生連の運動で手もなく倒れたが、明治の政府もこんなさまで十年と保たんとぞと罵倒したのであつたが、お役人と收賄とは其頃が其通りであつた。今の政治家も實業家も一人として潔白なものがないと言つて可なりだ。唯だ濁流に染まなかつたのは板垣さん一人位のものであらう。コムミッシン問題も飽くまでも探索するとなる日には、廟堂の大官、

在野の元老悉く繩付となるであらうとの話であつた。我國に於ける收賄の歴史も亦久しい哉である。

此度大隈内閣が成立して、硬骨の臣八代中將海相に親任せられ、廉潔の士尾崎氏法相たり、相互に腐敗を抉摘し、不義を糾弾し、疾風迅雷耳を蔽ふに遑なきの慨あらしめつゝあるは、眞に快心に堪えざる所である。獨り海軍のみならず、これを機として或は本願寺問題、或は宮内省問題、曰く陸軍、曰く鐵道院と各方面に於て廓清の實の擧げられつゝあるは、吾人時運の到來せるを見て、欣喜雀躍を禁じ得ないのである。コムミツシヨンは商行爲に伴ふ商習慣で商人の間に於て之を行ふは何の不可なることを見ざれども、商人にあらざる者までもが、直ちに此濁流に投ずることは單に金錢を授受する問題以外に、種々複雑せる弊害を伴ふものなることは言説を須ひずして明かである。若し此弊風にして長く止むことなくば、眞面目に働く者はなくなるであらう。生産事業は衰ふるであらう。國は亡びるの外はあるまいと思ふ。懸鑑遠らず、支那は如何、朝鮮は如何、土耳其は如

何。斧は樹の根に置かる、實を結はざる樹は伐らるべしである。吾人は此天の啓示を眼前に見て、我國民全部が上下舉りて、新たな意義に於て、國家再造の爲めに、奮闘せんことを祈らざるを得ない。(鈴木)

## 移民政策を確立せよ

人口の増加は驚くべき率を以て進んで居る。現代日本は人口の過剰に苦みつゝあるのである。生活の困難は之れが爲めに來り、就職の困難も亦之れが爲めに來る。學生の試験難、教師の昇級難、官吏の昇進難も亦皆これより來らざるはない。道德の頹廢も、信念の墮落も、陰に陽に此人口問題を背景として起り來るのである。將來紛糾せる種々の社會的問題は、必らず人口問題を中心として起り來るべきを思はしむるのである。

然らば此過剰なる人口を如何に處分すべきであるか。吾人は如何にしても、海外發展を思はざるを得ない。北米か、南米か、南洋か、或は支那かいづれの方面とか其吐き口を求めねば、國內の鬱

次に外來思想が重んじられると我國の特長が忘却され、外國人が却て之を研究して丁ふ恐があるといふのも、杞憂に過ぎないと思ふ。往時の歐化時代の様に外國様式を崇拜して我國傳來のものを破壊したといふ様なとは、もはや再び今日では繰返されることが出来ない。日本の文學や藝術を研究して人々は若干の中にも隨分ある。尤も翻譯物が賣行よくては論語孟子の古書熱は少しく降りるかも知れないからコンなどは古本屋が云ふかも知れない。併し數年前に旺盛を極め今尙餘勢を保つて居る古書翻譯熱やボツケツト論語の流行などから見れば、今日の翻譯紹介はまだ狭い範圍なので從て輸入超過などとは云はれない。外國思想が這入つて來る間に、國民の特長を忘れ却て外國人に之を盗まれる恐があるなどいふも事實に當らざる杞憂に過ぎない。尤も日本古來の文學なり思想なりの研究の獎勵といふことは別事である。外國思想が這入たからとて其研究は勿論棄つべき筈のものでなく、又外國科學の研究法を取つて我研究の資とすることも出来る。此點からいへば外來思想も深く排すべきではない。最後に外事思想も本を洗つて見れば我國固有のものであり、ベルグソンやオイケンなど一向珍とするに足らないとは彼等の傲語する所である。併しそれが果して眞ならば何故其價ある眞理を今迄深く藏して放つておくのであるか。又彼を以て我國にありとするなら其の理由を詳論しなくては充分納得することが出来ない。只一二の類似點を外的に見た許りでは何等の意味を有するものでない。又古い時代に偉大な思想があつたとしても、夫れが現代の思想界に如何なる觸接的意義を有つて居るかを明かにしなければならぬ。只漫然と東

洋乃至印度哲學の偉觀を稱する丈では地中の寶を云々する様なものである。又其等在來の思想中に外國思想と類似點があつたといふ理由で後者を排斥する理由とはならない、寧ろ尙進んで比較研究なり根本的の批評なりを加へるべきであつて、それにしても外來思想は排斥されないことになる。

要するに今の時において思想界の超過輸入を叫ぶなどは全く正鵠を失した説であつて、之れは怯懦な保守的奴隸的思想に囚はれた宗教家道學者などの言である。今日我國の地方などが未開であるからといふなら外來思想を輸入するの要こそあれ決して之を排斥すべきでない。我國の立憲政治が振はないのも畢竟するに其立憲的精神なり之を生んだ外國思想を一般に了解しないことから生ずるのである。社會政策にしても社會の産業組織が外國と同じくなりつゝある今日では同じ問題が早晩起るべきであつて、其思想の研究又決して等閑に附せるものでない。また文藝に至つては、今の若い國民が世界的文豪の作物を味賞し得るのは寧ろ國民的進歩である、矜恃である。假令模倣であつても同感なものと同じ道を進むのは排すべきでない。單に讀者といふ立場からいつても、こちた



源氏物語や枕草紙許りに嚙り付いて居られるものではない。現代の生命に觸れたものを讀みたいのが當然でないか。斯く思ふと思想界精神界の輸入超過などいふことは餘り杞憂に失した説と斷ずる外はない。若し夫れ我國文明の特長性格並に將來に於ける使命如何といふに至つては自ら別問題である。余輩は只彼の怯懦にして淺薄なる思想超過輸入論者を訓ふるのみ。(菊川)

## 大隈内閣の成立

種々なる政海の波瀾曲折を経て、大隈内閣の巨船は其纜を解いた。八十に近き老翁、政權を離れること十七年後の今日に於て、此事あるべしとは恐らく伯自身も、豫期せざる所であつたらう。知らず、此老大船頭は今此政海に乗り出て、抑も如何の抱負あり、如何の使命を有するか。

大隈内閣は五月十五日を以て、十項に亘る政綱を發表した。言辭多くは抽象的にして、其實質を知るに苦めども、兎にも角にも大なる責任を感じ大なる抱負を以て起てゐることは伺ひ知ることが出

来る。項目は十個條あるが、其根本眼目は左の三點に歸すると思ふ。

第一は財政の整理である。抑も我が政府の歲計は、日露戦争以後、莫大の膨脹を來し、國民經濟と步調整はず、其結果破綻百出窮惑困迷を極めたのである。非常特別税は据置きとなり、人民は重税の爲めに苦しめること久しきに及んで居る。これを救ふことが、現内閣第一の使命でなければならぬ。此點に關して政綱には『政府は此目的を以て行政及び財政の整理を施し、且つ國民負擔の輕減を謀り、大正四年度以降の財政計劃と相俟つて之れが實行を爲すべし』と明言して居る。未だ實行に着手せられざるが故に其成果如何を危ぶむ人もあるが、吾人は切に其實に行はれんことを望まざるを得ぬ。これ眞に焦眉の急、輟鮒を救済する所以である。

第二は國防問題である。從來我國の國防なるものは、全く陸海軍の當局に一任せられ、議會は其豫算の提出に對して、殆んど一指だも染むることが出来なかつた。則ち國民の國防にあらざるして陸海軍の國防であつたのである。夫れも陸海軍の一種の意地と張合とよりして、彼れ一艦を増せば是れ一師團を増設すといふ風な傾があつた。然らば則ち國民は陸海軍の競争の爲めに、其必要なる生活費をも割いて、重税を負擔せねばならぬ譯である。これ決して立憲國にあるべき現象でない。此點に關しては『政府は深く内外の情形を察し、調査審究の途を設け、以て必要な計劃を立てんとす』と言つて居る。彼の所謂國防會議の如きものが設けら



また緊急ならずんばあらず。教學界の人或は曰はん。『一國道德の振作は凡庸俗吏の能くする所にあらず其の之を行ふには自ら人あり』と。然りと雖然らば問はむ。『今日の教育宗教家は何を爲しつゝあるや。』

一國風教を善導するに全力を傾注しつゝありと公言し得るもの果して幾何かある。若し教育家宗教家にして社會公共のため、其の職責を遺憾なく果たしつゝあらんには、焉んぞ現時の如き腐敗墮落を馴致するものぞ。近くは森村濫澤二老の如き天下の大勢、亡國の悲運に逢着するなきやを思ひ、老軀を提げて起ちしにあらずや。而も猶ほ教育家宗教家は健在せりと云はんとするや。

大隈内相固より吏僚の能く一國風教に爲すなきを知る。然れども宗教家教育家にして舊來の陋習を脱せず、偏見に囚はれ高邁の理想を以て己が天職に邁進せざる以上、而して、一般教育家等が政府萬能を信奉し、專制國家的教育家の舊套を脱せざる以上、政府の吏僚をして之に戒意せしむるは當然なりと云はざるべからず。

時勢は進轉せり、凡べてのものは社會的となれり、民衆的となれり。何ぞ獨り、宗教教育家の後るゝ事の甚しきや。吾人は教學界の猛省奮起を望むものなり。(高橋清吾)

## 思想の輸入超過とは如何

近頃思想の輸入超過といふ聲がちらほら聞える。思想は經濟界の法則に従つて見らるべきものであるか第一の疑問であるが、昨今我文藝界思想界に於て外國著名の文藝家哲學者の名が流行するに對する警告の様である。其の理由とする所を聞くと、第一外來思想が昨今の様にやつて來ては消化不良を起す恐があるといふと、第二外國思想に盲從して根本的研究がないといふと、第三には國民性が違ふのに外國文學など國民の利益にならなといふと、第四には外來思想を重んずると在來の特長が忘却されて滅亡する恐があるといふと、第五には外來思想もよく研究すれば東洋乃至我國在來のものゝ中に發見するとが出來るといふと等である。

併し吾人は思想界の輸入超過などいふことは未だ叫ぶに早いと思ふ。殊に飛行器が天を翔つて東西の交通も益々短時間頻繁となつて來た時勢に於いて、外國思想を輸入するのは萬止むを得ない。そして外國思想の紹介も往時の所謂歐化主義時代と異つて、幾分

でも面白いとか、現下の精神的要求に應じて居るとか、現代の缺陷を指摘補充するとかいふことがあつて爲されて居ると思ふ。外國産なら一も二もなく眞似るが良いといった様な、方便的歐化主義の結果とは餘程違つて居る。尤も中には徒らに五色の酒を飲むとか髪の刈方まで變へるといふ風のものもあるが、之れとて頑固な爺さんがチョン髷を保存してると對照して見ればよい程度のものだ。我國の思想界で消化不良を起す程に外來思想があるとは思はれぬ。又根本的研究が足らぬといふこともあるが、消化不良といふことは畢竟根本的研究に依つて補はるゝことであるから、若し不消化の輸入を恐るゝならば、*ドシ* 外來思想を歡迎して其正確な根本的な研究なり紹介なりを勤むべきではないか。殊によく近來の思想界を見ると必ずしも往年の如く生嚼りのものを吐きつらすといった風のものに限らない。偶には誤譯もあらうけれど兎に角原著の翻譯といふことまで行はれて居るのだ。即ち其學風が餘程著實に批評的的根本的になつて來て居る。評者の言は此點に於ては餘り正鵠を得て居らないと云つてよからふ。

次に國民性が違ふから外國文學など我國民の利益にはならないといふとも社會組織や頭の丸で違つて居る方面に向つてならはゞ知らず折角學校で多くの時間をさいて外國語を習つた青年が、世界の文學も知らぬ様では却て心細い次第であるまいか。一體外國思想の輸入超過などいふとは何を

標準として見たのか知らないが、現今盛に出版される外國文學の翻譯などはそう澤山に賣れるものでないといふのだ。中には大家の名著ならば版を累ねるものもあるが、一般からいへば甚だ少いといふのである。之はつまり外國文學の販路が未だ充分擴張して居らぬといふ證據で、従つて超過騒をするのは尙早のとである。又國民性が違ふといふが、科學思想が世界的になつて居る時には文藝乃至哲學上の思想も之に隨伴するのが寧ろ當然である。近頃聞く所に依ると*ドストエフスキ*の「虐げられし人々」を讀んだ或男が譯者昇氏の所にやつて來て、計畫中の罪惡を中止したことを告白懺悔して良心に立歸ることの出來たのは偏に此小説の御蔭であるといつて非常に感謝したそうである。之を見ても國民性が違ふから外國文學は日本人の心靈と沒交渉などといふことは成立ない。殊に現代の様に道德問題人生問題が世界共通の煩悶となつて居る時は、其思想を寫出した外國文學が我々若い日本人の心に共鳴するものがあるのは全く當然である。

か。又市政の腐敗紊亂を顧みず彼等の醜運動に誘惑せらるゝてあらうか。然らばこれは我が國自治制の全然失敗せる事を語るものでないか。吾人は東京市民のニューヨーク市民に恥づるに至らざらんことを望むのである。(嶺岸)

## 大隈内閣財政政策を評す

曩日發表せる大隈内閣の政綱は大體に於いて國民一般の異論を唱へざる所であるが、而も其の財政政策に至りては現閣の運命の半ばを決せんとする重大問題が含まれて居る事を思はざるを得ない。

抑も我國は十六億餘圓の外債を有し、年々八千萬圓の利子を海外に支拂ふ義務がある。かくの如く既に債務國たる以上、貨幣制度維持の必要から輸出超過國となつて、正貨の流出を調節するのが、經濟上、自然の原則であるのに、我國では貿易は連年逆勢を示し、物價は奔騰し、ために兌換制度の危機を叫ばしむるが如き憂ふべき現狀である。戦後經營を謬れる歴代内閣が公債價格維持のため或は外債募集を容易ならしむるがため、又は内國

金融界の激動を調和せんためにや、經濟自然の原則に反する在外正貨の制度を維持し、減債基金を設けては借金に借金を重ねて、内國經濟界の自然の趨向を妨げたのである。實に我國從來の財政政策は財政が國民經濟を壓迫する官僚的財政々策であつたのである。

翻つて現内閣の財政政策を觀るに、貿易逆勢の挽回、財政經濟の調和に其の基礎を置き或は財政公開をも辭せずと聲明する等、以て國民的財政政策の端緒を開かんとしつゝあるは吾人の最も愉快とする所である。乍然其の實施の點に到りては猶ほ未だ樂觀を許さざるものがある。今試みに述べんに。

第一、政府が聲明せる減税は如何なる種類のものなるや、且つ其の程度如何。租税の選抜及減税の程度其の宜しきを得ずこれを補充する的確公平の財源なきに於いては減税は單に一時世上を瞞着する空言となりはしまい。

第二、非募集主義は可なりと雖、政府は各種の事業費並びに特別會計を整理せざれば實際の効果如何と思はる。而して、非募集主義を標榜する以上、減債計畫は必ずしも必要でなく、各種の剩餘金を以て内國生産の増進を計り、たとひ之がため一部實業界より

怨嗟の聲起るとも、政府は敢爲邁進するの氣魄あるや。

第三、剩餘金の使途に關しては識者の一般に賛せざる所、政府は極端なる姑息退嬰に陥ゐるにはあらざるか。更に政府は行政税制整理を打切りたるにや。

第四、政府は如何なる種類の營業を民業に移さんとするや。其の拂下げには幾多の議論あるべしと思はれる。

第五、政府は絶対に外債を募集せずと明言して居るが、然らば今後の在外正貨制度は如何になるものにや。正貨の流出入を自然に放置するは經濟上の原則とするも、目下の如く歴代内閣の小刀細工で、變則の狀勢を呈し、貿易は輸入超過を續け、債務は償却せなければならぬ金融多端の時に、全然外債募集法に依る正貨補充法を廢する時は、其の結果は内國經濟界に大變動を來たすのは自然の勢である。政府はこの大勇斷を敢行するや否や。それともまた他に何等かの良策ありて、内國經濟界に大した變動を與へないでも對外債務を支辨するの良策あるや否や。この問題は現内閣に取りて重大難問である。

遮莫、大隈内閣政策の根本方針は貿易逆勢の挽回、經濟財政の調和にあるとせば、凡べての整理施設はこの根本的大方針より割り出されたものでなければならぬ。大隈首相は我が財政經濟の現狀を以て殆んど破産に近き運命に陥れるものとして心憂せられた人であるから、勇往直進、多少の犠

牲は拂つても、この頽欄を既倒に廻して貰ひたいものである。(高橋清吾)

## 國民道德に關する内相の

### 訓示に就いて

過日の地方官會議に於ける大隈内相の訓示中國民道德振作に關する一節あり、固より平凡なるものには相違なきも、また吾人の同感する所尠しとせず。群集に盲動する國民、輕佻放肆に流るゝ國民宗教心薄き國民、島國的根性を極端に發揮する國民、これ我が國現代の狀勢に非ずや。高位高官に居るもの忌はしき破廉恥罪に問はれ、所謂紳士紳商なるものは蓄妾を以て、又は美妓に親しむを以て自ら誇り、身敎職にあるものは或は弱者を以て自ら卑み、或は生命なき講義を以て獨り晏如たり。是れ我が現時の實狀に非ずや。噫我が風敎の衰頽せるや久矣。今にして之を救済するに非ずむば日本社會の運命知るべきなり。地方長官は一府縣萬般の政務を司る樞地に居るもの、彼等をして一國風敎の振起に注意を拂はしむるは我國の現狀



より怖ろしきものこゝに在り。即ち人心の根底に潜む黴菌である。故に人心の根本を廓清するにあらずんば、社會風教の廓清は望めない。實業政治の廓清は望めない。世の廓清を叫ぶものはより高く、より深く考へて、宗教、道德の立場よりこの大問題を研究せんことを吾人は希望するのである。(内ヶ崎)

## 時事問題と大學教授

近頃法科三十二番教室に於てあまり世間を騒がした問題にはあらねど兎も角時事に觸れたる討論會が有つた、題は本豫算の不成立の場合に特別豫算は獨立して成立し得らるゝかと云ふのである。即ち今年度の様に豫算は不成立となつた様な場合に即位大典の費用は特別豫算として成立するか、否かと云ふのであつた、政府は成立したものと同積極的斷定をなした、例により美濃部博士の積極論上杉博士の消極論がある筈であつたが、上杉氏は缺席で清水博士の消極論を聞いたのである、我輩

は今茲に論旨の内容をのべんとするものではない、當日の會何等の活氣ある會合ではなかつた、然し只、斯くの如く時事問題を大學の教授方が批判せられたと云ふ事が兼ねての我輩の主張に適つて嬉れしかつたのである、一體日本の大學の教授方はあまりに沈黙である、乃木將軍殉死の折り幾人の文科の其道の教授方が論斷せられたか、其大方の歸趣が定つた頃、其等に合ふ様に意見を發表せられた博士は有つた、谷本博士を彼は云ふ人があるが私は此點に就て實に同博士は豪いと思ふ。此度の海軍問題に就ても幾人の方が意見を發表せられたが、日本の如き幼稚なる新聞より、眞先に雑誌なり、パンフレットなり、大學の教授方に輿論を導く意見を發表してほしいと思ふ、淺薄なる新聞記者によりて指導さるゝ國民は煩哉である、此意味に於て私は新歸朝の吉野教授の活動を多とするものである、問題の起さる度に願くば大學教授よ、卒先して其意見を發表せられん事を、其機に際し望むて止まないものである。(星島)

## 自治能力の試金石

今度東京市に行はれんとする市會議員の選舉は單に一東京市の事件として考ふべきでない、實に我が國民の自治能力の試金石であるまいか。

我が國民は二千年の間專制政治の下にあつた。

始終被治者で一度も自治者でなかつた。二千年は自我否定の歴史であつて、自我發展の時は一瞬時もなかつた。明治になつて俄かに自治制度を布いても二千年間自我否定の國民、即ち被治者は忽ち自我發展の國民、即ち自治者になるものでない。

大隈伯が地方を視察して、自治制度は凡て失敗である、地方は今尙封建時代と同じことをやつてるといはれたのは全く其通りである。被治者と自治者とは其精神に於いて根本的に違ふ。自我の否定と發展との差がある。方向の變化でなくつて、轉換である、自我否定が轉換して自我發展とならなければ、自治制度は單に一片の形式に過ぎない。

最も奇怪なるは今日の模範村である。これ等の

村は村長の一人舞臺である。村民は唯命是從ふ政治的奴隸である。自治者たるの自覺がない。自治の模範村でなくて專制の模範村である。だから名村長一度去れば忽ち模範村たる實を失つて了ふ。村の政治は村長の政治でなくて村民の政治でなければならぬ。村長は單に村民の命に従ふ執行機關に過ぎないのである。

自治は憲政の前提である、基礎である。自治がよく出来なければ憲政は砂上の樓閣に過ぎない。一市町村を治め得ざる國民にどうして國家の政治が出来やうか。國民は國家の政治にのぼせる前に各自の屬する市町村自治の成功を求めねばならぬ。東京は社會的政治的教育機關が最も備つてゐる。名士の演説は何時でも聞かれる。新聞雜誌書籍に接する機會が多い。實驗の智識も得易い。不知不識の教育は田舎と比すると一世紀否數世紀進んでゐる。この東京にある市民が政治的自覺なく、自治者として資格がなかつたらこれ日本國民の自治能力の無きことを證明するものでなからうか。或は大都會は誘惑が多いと云ふが、この誘惑を退けるのが自治でないか。而して今度の市會議員選舉は市民否我が國民の自治者としての資格を試す時であると思ふ。

ニユーヨーク市民はタマニ派の惡政を一掃するために若き新市長を選んだ。我が東京市民は森久保一派の醜類を市議員より排斥し得ないであらう

ぞ接近するの太しきや。(甲鳥生)

## 根本的廓清を要す

明治の御代が去つて、大正の御代に入るに及んで、大正維新と言ふ言葉が流行した。然し實際に於て、その理想は容易に實現され得べくもなかつた。のみならず大正に入つて、多くの不祥事のみ起つたのである。西本願寺問題、名古屋の疑獄、警保局長の贋造紙幣問題等走馬燈の如く出現した。引續き海軍收賄問題、三井物産會社の重役不正事件、宮内官吏に對する嫌疑等新たなる火の手を添へた。斯る現象を見て大正維新論者は大なる悲觀を抱かざるを得なかつた。乍併勢窮されれば必ず通ず。大隈伯の出現は期待を以て迎へられした。伯の政綱十ヶ條は若し實行することだに出来れば、國家民人の爲めに祝賀せなければならぬ。されども八代海軍大臣の大英斷、即ち山本齋藤兩大將を豫備に、財部中將に侍命を仰付けたるは一代の人心を廓清することに於て、非常なる効果があるに相違ない。日本國民の良心は全く痲痺した

のではなかつた。尠くも八代海相の至誠と熱情との内にその本來の光を發揮したのである。これは單に海軍廓清の曙光のみに止まらず、社會人心の廓清を告げ渡る曉鐘の如く、吾等の耳朶を打つたのである。波多野宮相は 昭憲皇太后の御大葬を侍つて、宮内省の廓清を斷行すると傳へられて居る。多年國民疑惑の中心となつてゐた省内の空氣を、一新することが出来やう。實業界に於ても、無慶福を分つことが出来やう。實業界に於ても、無益の宴會を避けて謹慎の意を表するに至りたるは悦ぶべき現象である。西本願寺の法主光瑞伯が管長としての位置を辭するのみならず、爵位をも合せて返上せんとするの決心も、確かに日本の佛教界の惰眠を破るの快事である。西本願寺がその歴史と權威を楯にして暴威を振ひしことゝに幾百年、宗祖の大精神は殆んど地を拂つて消滅せんとするの時、第廿二世の法主が退隱せんとするは遅れたりと雖も爲さざるに勝つてゐる。他力門の佛教界はこれに因つて頓挫するか、捲土重來するか吾人は刮目して待たふ。何れにしても西本願寺法



主のこの英斷は日本の佛教に對して、甚だ意義ある行動なることを認めなくてはならぬ。更に吾人を悦ばしむるものは東京市政に於ける改革である。東京市政は久しく星享の衣鉢を受けたる常磐會なる團體によつて、權力を壟斷されたるの觀があつた。彼等は自己の利益のためには市民の權利を蹂躪して憚らなかつた。而して市民は今やこの事實を看破し、本月初旬の市會議員改選を期してこの團體を一掃せんとするの計畫を立てた。洵に痛快なことである。又隈伯を中心として非政友三派合同が出現されるかも知れない。かくて政界の新機運は端をこゝより發するかも知れない。

觀じ來れば大正維新の實漸く舉らむとするの傾向がある。然し乍ら一面に於て、人心の廓清を根底とし背景とするにあらざれば、折角の廓清も舊の空阿彌と成るの憂が無いことはあるまい。澁澤男爵森村翁などが數十萬金を提供して、自治團を組織し社會廓清の任に當らしめんとしてゐる。この志や嘉すべしである。されど甘い物には蟻が付き易いので、金が先きに立つ故に或は廓清の實を

舉ぐることが出来ないかも知れない。金は必要ないけれども更に必要なるは人物である。神の生命に充實したる人物である。名譽利達を度外視する人物である。この種類の人物現はれずんば、社會の根本的廓清はえて望む可からざるものである。現内閣は安部磯雄氏の評せる如く非新橋内閣であるかも知れない。殊に首相大隈伯は多年民間に於て風俗改良論を叫びたのである。乍併大正博覽會は藝者の餘興なくしては、開會式を行ふ能はず、その演藝館は藝者の應援なくしては、成立する能はず。又國を舉げて大喪の内に在るにも拘らず、吉原洲崎には花魁道中が堂々として行はるゝのを見るのである。而して政府當局者は見ざるが如く聞かざるが如く、言ふを要せざるが如く三猿主義を取るに至りては、吾人大いに失望せざるを得ないのである。人心の根本よりの廓清を計らねばこの種の矛盾を生ずるを免れないのである。

發疹室扶斯といひ、肺ペストといひ、腺ペストといひ何ぞ東京市民を脅すの甚だしきぞ。されど室扶斯菌より怖ろしきものこゝに在り。ペスト菌



つて、靈の深淵を知らなかつたと云ふことは、靈の深淵を知つて肉の深淵を知らなかつたドストエフスキイよりも劣つて居ると云ふ證據にはならない。何故なれば彼はエロシユカ老人と共に獸の心を知つて居たからである。肉の奥に秘んで居る或る力を感じて居たからである。そしてその力の持主は永遠でなければならぬ。

——たとひ、彼の如くそれを自覺し得ないで、恐れおのゝくとしても——。

トルストイの認識は、特にその宗教的認識は、餘りに道德的に陷つてしまつた傾きがある。彼にはメンジユコフスキイの所謂、極めて單純なる計算の結果として、無財産説を唱へ、慈善の不合理を語る様な特殊のなまた運命的な性格がある。彼の宗教には情緒や神秘の片影も認められないで、たゞ苦しい道德的の喘ぎばかりが聞えて居る。而も尙、それ等の一切をも眞實とするところの力が、彼の眞摯な態度の中に存在して居る。

意識的なトルストイは遂にその八十年の長い生活を苦しみ通して通して來たのである。彼は遂に眞の解決を得ずして悶死してしまつた。けれど無意識的な彼は最初よりして、基督教を信じない以前よりして、彼自らの運命的な生れ付きの上に、もしくは實生活の上に、實行的に解決されて居た。たゞ時々その力の弛むだ頃に、恐るべき惡魔の空洞に面した。靈肉の罅隙を見た。そして彼はそれを調和せうと努めたのである。

トルストイは絶對の愛を主張した。絶對の自己放擲を理想した。而して彼の努力と苦悶とは茲にその源を發して居る。けれど彼は果してよくこれを實行したか。否、否、斷じて否。彼はそれが爲

めに一生悶え苦しんだ。けれど茲にも亦、意識的な生活に失敗した彼は、無意識的な生活に於いて成功して居る。而してそれは彼の極端な利己心によつてである。最後まで行きつめた自己に對する愛によつてである。彼の誤りは筆をとつて生涯説教したとにある。説教の故に彼はその責めを負はねばならぬ。

トルストイの生涯はこの自己の眞實と、自ら捏ねあげた理想との闘争であつた。ドストエフスキイの生涯はその眞實の情熱と偽りの情熱との闘争であつた。そして私はトルストイの努力に於いて自己の鞭撻を見ると共に、ドストエフスキイの貧窮や放恣や行きつくところまで行かねばやまれぬ情熱に懷しい友達を見る。『人は心の命ずるまゝに生くるより外に仕方がない』と云つたドストエフスキイも亦、慥かに、そしてトルストイより自由に自己の眞實に生きやうとしたのである。そして彼はその行きつく處まで行きつくしたのである。

『エディプスに於けるソフォクレスの絶望と傳道の書に於けるソロモンの絶望とは、一見相似たるものゝ様であるが、實際に於いては全然相反せる兩極端を成せるものである。一方は向上であつて、他方は下降である。一方は始めてあつて、他方は終りである。佛陀のラリタ・ギスタラやソロモンの傳道の書に於いて、吾々は心靈の覺醒の聲を聞かずして却つて肉體の衰滅の聲を聞く……』『アツシシの聖フランシツが十字架の苦しみを受け(?)』アゾルの山の夢を見た後、太陽に聖顔を捧げた時の微笑は、ソフォクレスがエディプスの血腥い恐怖の後、酒と幸福の神なるディオニソスに讚美の歌を捧げた時の微笑を聯想せしめるではないか。』

而してドストエフスキイの悲しみはこのソフオクレスの な悲しみである。そこには生の呻きがある。生の緊張がある。けれど尙何處かに足りないものの在るを感じないでは居られない。

かくてこの偉大なる二人の天才も未だもつて完全であるとは云はれない。『聖殿の入口に對立して居る二大圓柱』に過ぎない。聖殿となるべきものは今後の人に求めなければならぬ。けれどその調和は果して如何にして求められるのであらう。私の考へてはミケランゼロとダ・ビンチとよりラファエロの生れるよりも、ブウシキンよりトルストイとドストエフスキイの生れたのはより自然で且つ眞實であると思ふのである。眞實は單位であるからである。混和して出来る様なものだとは思はれないからである。私達は第三帝國を待ち望むよりも第一帝國を回復するのを以つて眞個の努力としなければならぬのではなからうか。(加藤)

## 斯の如き影響あり

大隈内閣の財政々策は輸出額をして輸入額に超過せしめ、その差額を以て外債を償却するにあ

る。もし此事にして行はれ得べくんば大幸である。しかるに累月輸入超過の現象を呈するは志あるものゝ憂慮する所である。近頃事を以て某老實業家と談じたるに日米貿易に就いて悲觀説を聞かせられた。曰く米國は近頃何となく日本品を好まぬ様になつた。これは排日問題のためでない、昨年來我日本の宮中、宗教、政治、市政、海軍、實業等の腐敗の曝露が知れ渡りて今更のごとく日本國民に愛憎をつかしたのである。腐敗は何れの國にもあるはあれども日本國民が數十年間この腐敗を默認し來れるは餘りに見下げた國民だと驚いた。それで日本物貨まで嫌氣がさして、賣れ行きが遠くなつたのであるといふのである。海軍や三井の腐敗が斯の如き影響があらうとは實に驚き入らざるをえない。

日本が各國に失うたる信用を回復する道はたゞ正義公道を踏むべきである。八代海相の精神を下下の階級に貫徹せしむることである。かくして日本物貨は本來の顧客を見出すことが出来るのである。實業と道德と、相距ること遠くみえて、何



## 時評

人及び藝術家としてのトルストイを読む

自分は此の頃安部、森田兩氏によりて譯された『人及び藝術家としてのトルストイ』を読んで啓發さるゝ所が多かつた。自分の生活はまだ眞個のものが表はれて居ない。自分の生活にはまだ『自己の眞實』が實現されて居ない。けれどその自己の眞實の姿が自己のうちの何處かに秘んで居ると云ふとは自分には疑はれない。そしてその眞實とは靈肉の合致したる——もしくは靈肉を超越したる、或る渾沌の力である様に思へてならない。

過去に於いて自分は眞實の憧憬者であつた。(今も尙その態度を更むる必要を見ない、否、恐らく永遠にこの態度を更むるとが出来ないだらう)。そ

して多くの人々から、『然らば君の所謂、眞實とは何か』と云ふ質問を浴びせかけられた。『眞實とは愛でないか』と或人は云つた。『眞實とは智でないか』と他の人は主張した。『眞實とは靈でないか』と或人は訊いた。『眞實とは肉である』と他の人が答へた。然しながら、自分はこの眞實と云ふものを解明するを好まなかつた。眞實とは何であると云ふ定義を下すとを悦ばなかつた。何故なれば眞實とは分つべからざる單位であると思つたからであつた。

眞實のうちには愛もあらう、けれどもまた其處には憎みもなければならぬ。眞實のうちには智もあらう、けれどもまた、其處には忘却もあり、不明もあらねばならぬ。眞實は靈であらう。けれども亦、肉が眞實でないと誰が云へやう。眞實のうちには之等の一切が含まれて居る、けれど、それは之等のものをもつて組み立てられた奇木細工としての組織ではない、それ等の一切を渾融した分つべからざる單位としての一如でなければならぬ。然り眞實は飽くまでも眞實でなければならぬ、それは解體するとの出来ない不思議な一つの力である。たゞ、事に觸れ物に接して、その不思議な生ける寶庫から、愛が生れ、憎みが生れ、靈が働き、肉が動く。眞に眞實に生きて居るものゝ眼には其處に愛と憎みとの區別が辨じられないであらう、靈と肉との分裂が感じられないであ

いう。何となれば、それ等のの人にとつては、憎みもやがて愛であるからである、愛するが故に憎まなければならぬからである。また今、靈となつた眞實は、直ちにまた肉となる眞實であつて、そこに何等の矛盾をも撞着をも意識し得ないからである。

『獸は何でも知つて居る、馬鹿なのは人間だ。馬鹿だ、馬鹿だ』と主張したエロシユカ叔父はこの秘密を十分に意識して居たのであるまいか。

『よし總てではなくとも、少くとも人間の知らないことを知つてゐる。獸は人間が已に忘れて、どうしても思ひ出せないことを思ひ出す。獸はある種の直接な知力、或種の「善惡の彼方」に在る物接い視力、我々の粗雑な高慢な詞で「動物の感受」とか「動物の本能」とか呼ぶ透視の力を持つて居る』。

と解釋したメレジュコフスキイも亦、このある直接な力、善惡の彼方に在る恐ろしい視力を感じて居る人であらう。そしてこの力こそは、私の所謂眞實ではあるまいか。分つべからざる或る單位の力ではあるまいか。一切を含んで居て、而もそれ自らは無の様にある力！。

トルストイ及びミケランゼロが肉の深淵に靈を見たのに反してドストエフスキイ及びレオナルド・ダ・ヴィンチが靈の深淵を肉化しやうと努めた様に、自分のこの見方は、メレジュコフスキイの見方とは反對の方向から進んで行つたのかも知れない。一方は分つべからざる靈肉一如の單位より進み、一方は分裂したる靈肉のうちに單位を求めて進んだと云ふことに於て。けれど結局それは一つではあるまいか。少なくとも私にはそれが一つであつて欲しい。

眞個に自己の眞實に生き得るならば、そこに大なる力は生れ、靈肉は期せずして一つであらう。けれどこの力は容易に得られない。そしてそこに痛ましい靈肉の分裂がある。

この分裂したる靈と肉とを如何に處分するか。これ實に自覺した凡ての人の問題でなければならぬ。メレジュコフスキイの偉大なる努力は、この分裂せる二つの力を一元に歸せしめやうとする勇猛なる精進である。而して彼はそれを如何に調和したか。

メレジュコフスキイが、人及藝術家としてのトルストイ並にドストエフスキイを評論したのは、この問題に解決を與へんと欲したからである様に見える。何故なれば彼はトルストイの藝術家としての天才を認めて居るけれど、宗教家としての資質を疑ひ、また肉の心を知り抜いて居るけれど、靈のまことの表現を過つたトルストイを語るに急であつて、假令トルストイがその誤謬に沈淪してしまつたとしても、而も、飽くまで自己の信じて居る眞實に生きやうとした彼の偉大なる努力を割合に輕視して居るからである。彼は自己の眞實を誤想したかも知れない。けれど眞實に生きやうとしたその心は——その眞實は、決して永遠に誤ることはない。そしてそこにトルストイの最も偉大なる力がある。

トルストイ程、死に對して恐怖を覺えたものは少ない。彼はその懺悔錄に於いてこれを記して居る、アンナ・カレニナにもそれが表はされて居る。そしてそれは、メレジュコフスキイの指示した様に、如何に彼が靈の世界に縁遠かつたかと云ふことを表示して居る。靈の世界に住むものは肉體の廢滅に脅かされることを得ない。肉に住める人のみ死を恐れる。けれども、彼が肉の深淵を知



からであるが、云ふ迄もなく善い座席は高價で惡い座席は廉價である。尤も此等の座席は集會に際しては或る時間迄は有權者の爲めに保存せられて居るけれども、その時間を過ぎれば、誰れにても勝手に着席し得る様になつて居る。

ハーヴァード大學は四國にある諸宗流の凡べての教會に向つて年々規定の座席料を拂ふて、學生が各教會の集會に列し精神の修養を爲さんことを奨励するのである。大學は決して宗派の何たるを問はない。故にたとへば予の如きは、わざと別に何の教會にも屬することをせず、毎週日曜日になると色々の教會に行いて、様々の説教を聞いて、廻はつたものである。此の日曜日は組合派、次ぎの日曜日は監督教、又次ぎの日曜日はユニテリアン、又その次ぎはメソヂスト、又その次ぎはバプテスト、又その次ぎは天主教と云ふ様に、説教の聞き廻はりをした。

斯くして予の大に悟り得たことは、第一に、基督教の諸宗派はその教儀や儀式に於いて、殊にその枝葉の點に於いて、大に互に異なると云ふことであるが、又第二に、此等の相異の點があるにも係らず、大事な部分即ち基督教の中心點とも云ふべき點に於いては諸宗教が互に接近し一致して居ると云ふことである。又第三に、教役者は云ふ

に及ばず、一般の信徒も亦、他の宗派に對して極めて寛容の精神に富んで居て、野蠻な宗派争ひが比較的に少ないと云ふことである。そは餘り狭いことを云ふたりしたりする教會は、自然に學生間の評判が悪くなつて、爲めに全體に振はぬ様になつて仕舞うからである。

又第二に驚いたこと、云ふは、ハーヴァード大學そのもの、宗教的立場である。

ハーヴァード大學は世間からはユニテリアンの本山であるかの如く思はれて居るが、成る程今日の處では、ユニテリアン主義が最も勢力を持つて居ると云ふことが出来ようが、大學そのものは決してユニテリアン主義を標榜して居る譯ではなく寧ろ無宗派主義 Non-Sectarian である。故に大學では毎年數人の University Preachers と云ふものを定め、日割りを極めて各自受け持ちの間、日曜日の説教は無論のこと、毎日朝の學生の祈禱會の司會を爲し、且つ毎日時を極めて或る部屋に居り、學生に面會してその精神上又身の上萬端の事の自由相談に應ずることになつて居る。

例へば二月がユニテリアンの Peabody 博士の受持なら、二月は監督教會の Phillips Brooks 監督の受持であり、三月は組合派の Lyman Abbot 牧師の受持であると云ふが如きである。之等の諸宗諸派の牧師や監督は何を説き又何を教へるか。説教者こそ常に交替され聴衆は殆んど同一の大學生である。今日組合派の Abbot 博士の説教を聞く人々は前日はユニテリアンの Peabody 博士を聞いた人々である。されば説教者は何事を云ふべきか。餘りに狭いこと又餘りにツマラヌことを云へば、單に彼れ自身が聴衆の笑を買ふ計りでなく彼れの代表する宗派の品位を落とす譯である。故に説教者は自然に狹隘な事、偏僻な事は云はないで而かも價値あり有益なる事を云ふ様になる。斯くして基督教の要素と不要素とは自然に淘汰せられ基督教には宗派的の教儀の外に普遍的の眞理の存在することが明白になるのである。斯くして予は、基督教の種々様々なる解釋の奥に、宗教としての中心的事實が存在することが明白になつた。又凡べての宗派は枝葉に於いては相異なるも根本に於いては一致すべきであると云ふことが明白になつた。更らに之を逆に云へば、諸宗派の一致して居る部分が根本的な大切な部分で相異して居る部分は比較的に大切でない部分であると云ふことが明白になつて來た。

ハーヴァード大學の宗教的空氣は一般に此種のものである。更らにその神學後に這入つて見るに

更らに變りはない。宗教の文字や形式は餘り重んぜられないが、その代りにその實質や精神は大いに重んぜられて居る。眞理を愛し人格を重ずるの精神は、如何にも深く又如何にも強いのである。予は斯かる境遇に於いて滿四年の間日夜自由に又愉快に己れの持ち來たれる宗教上の疑ひを研究したのである。予はハーヴァード大學は實に殊更らに予の爲めに設立せられたものであるかの如くに感じた。斯くして予の多年の疑問は如何になつたか、廣く云へば宗教に對し又た狹く云へば基督教に對する予の最後の立場は如何。是れ予に取つては云ひたいことの多い問題であるが、今は多くを語る邊がない。予は今はい下の如く云ふて満足するの他はない。曰く「予は予が生れながらにしてユニテリアン主義者であると云ふことを發見した。今や予は安心して神の存在を信ずると同時に、自分がクリスチアンであると云ふことを公言するを名譽と思ふのである。」(完)

# まだユニテリアンをやめぬか

岸 本 能 武 太

予は兼てハーヴァード大學は、米國に於いては最も古い又最も有名な又最も勢力ある大學であると聞いて居た。加之云はばユニテリアン主義の本山とも云ふべき場所であると云ふ評判をも聞いて居つた。そこで予は私かに願ふて居つたは、同じ米國に行く程なら、無理であつても肩身を廣く感じ得る様な大學に這入りたい、又同じ宗教を研究する程なら、少しも束縛を受けない所で自由に又根本的に研究をして見たいと云ふことであつた。

それであるから予は始めからハーヴァード大學を心指して米國に行き滿四年間そのハーヴァード大學に於いて思ふ存分の研究を爲し遂げて明治二十七年に歸朝したので、學校の撰擇などに就いては始めから少しも迷ふ所はなかつたのである。さて

予がハーヴァード大學へ行くに就いての、便宜は如何と問へば、そは實に極めて少なかつた。予は固より同校には一人の知己をも持たなかつた。又學資としては、旅費をも何をもかてゝ加へて僅かに五百圓を所持して居たのみであつた。幸にして予が出發の少し前に Theodor Williams と云ふ米國のユニテリアン派の一牧師が漫遊の爲め我國に來て築地のメッロポール、ホテルに滞在すと聞いたから、此人を訪ふてハーヴァード大學の神學校の教頭に一通の薦書を貰つたのが同校への唯一の紹介であつた。組合派の宣教師で同志社時代からの予の恩師であつたグリーン博士の如きは、頗る心の廣く公平な人であつたのみならず、その男子は當時二人迄ハーヴァード大學の學生であつたに

係はらず。予がハーヴァード大學の教師へ紹介狀を與へられたしと乞ひしに、與ふべしと約束せられて置いて、さて實際與へられたりし數通の紹介狀は、ハーヴァード大學の教師への紹介狀ではなくて悉く組合派のアンドーヴァー神學校の教師への紹介狀であつた。そこで予は今に此等の紹介狀をばその儘に所持して居る。グリーン博士は申すに及ばず、その他の宣教師諸氏は予がユニテリアンの本山とも云ふべきハーヴァード大學へ行くを大に心配せられたのである。そこで予は明白に彼等に告げて云ふた。「諸君は眞理を傳へんが爲めに日本へ來て居らるゝのでないか。予も亦眞理を研究せんが爲めにハーヴァード大學へ行くのである。予が求めるは眞理であるから、眞理ならば何所から來ても之を取るが、又眞理でなければ、何所から來ても之を取らない。予に取つてはハーヴァード大學もユニテリアン主義も少しも怖わくもなければ又恐ろしくもない」と。

斯して予は遂にハーヴァード大學の人となつた。ハーヴァード大學の神學校に這入るに當つて予はその當時の數頭 C. C. Prentiss

博士に面會し明から様に告げて「予が當神學校に入學したいは *to enter* となる準備の爲めではなく、全く基督教に關する疑問を研究せん爲めである。予は多分一生を *Christian teacher* として送る積りであるが、今日の所 *Pastor* となるの意志はない。願はくばそれにて入學を許されたし」と云ふたら、博士は教授會に於いて相談せられた末に「それでよし」との返答を與へられた。古往今來ハーヴァード大學の神學校へ牧師にはならぬと明言して入學したものは予一人であらうと思ふ。

さてハーヴァード大學へ這入つて見ると實に天地が廣く空氣が自由に感ぜられた。萬事が豫想通りに、否、豫想以上に満足であつた。予は在學の滿四年間、一度も轉校したいとか不満足であるとか云ふ様な感じを起したことはなかつた。

・予がハーヴァード大學に這入つて、宗教上の事で先づ最も驚いた事が二つある。

第一に驚いたことは、學校の敷地の四圍に種々様々なる宗派の會堂が、互にその美と壯とを競ふて聳えて居ることであつた。而して此等の會堂に於いては、毎日曜日に説教や禮拜がある譯であるが、大學では毎年各教會に規定の金額を拂ふて、學生の爲めに座席を備へ置くのである。こは御存知の如く米國では一般に各教會の信者がその會堂に座席を年々規定の金額を拂ふて買ふ習慣がある



た。これが抑も今日の戦争の發端となつたのである。

一と度放たれた火は容易には消す事が出来ない。これが爲に運動の聲は漸やく高くなり従つて女子に對する嘲笑罵詈は益々激しくなり、遂に妙齡花の様な少女が鞭を取つて暴行を働き、貞淑柔順なる女子は粗暴となり、女としての本性を失はざるに至つた。是をしるも女子のみの罪と云ふ事出来やうか！是に於て今まで穩健な態度を持つた女子は急進黨となり、中途にして迷つて居た者は悉く參加する勢となり、男子が武裝して暴力に訴へた爲めに、遂々兩性の戦争は救ふ可らざる程度に大きくなつて來たのである。

五年前の十一月、運動者は空手にして議事堂前の廣場に集まつて、時の首相に會見を申込んだ。然るに官權は群衆と共に女子を取巻き罵り苦しめ、非常な騷擾を來した。爲に遂に「暗黒なる金曜日」の汚名を、人口に唱はるゝに至つた。斯く侮辱に侮辱を加へられた運動者は、最後の手段として直接利害の關係深き私有の邸宅を焼き、電線を切り、火藥を投じて、英國の上下を戰慄せしむるに至つたのである。實に數十年來の鬱憤の遂に迸つた

ものと云ふ事が出来やう。

## 六

さらば何故他の歐洲諸國に於て此問題が起らず、比較的立憲思想の進歩した英國のみに起つたものであらう？是英國の女子は尤も教育の度が高く、彼國の社會に於て既に必要な地位と實力とを持つて居るからで、即ち英國の女子にはこれを要求する資格があるからである。自己の權利を要求し得る英國の女子は寧ろ見識ある者と云ふ事が出来やう。

私共はこれを如何に考ふべきであらうか？

我婦人矯風會が年々歳々議會に提出する處の一夫一婦制の請願の如きも、たとへ何千何百の人名を署して、何遍請願しても男子の道德思想が根本的に改革するゝのでなければ、到底此請願の通過するゝ時はあるまいと思ふ時に、やはり根本の權利を要求する彼等英國の女子は、私達よりも一段進んで居ると思はせられるのである。

私共は決して暴行を賛同する者ではない。寧ろロイド。デョーヂの云つた様に、彼等に今少しの忍耐があり、以て雨滴石を穿つの、絶えざる努力に訴ふるの、より賢しき方

法であると思ふ者である。併しながら彼れ等が權利を主張する、其見識と實力とは認め度い、同情し度いと思ふ。尠なくとも私共は、これを嘲笑し度くはないと思ふ。何となれば權利を要求し得る者は強者で、更にこれを獲得する者は勝者であるからである。之に反して自己の權利を求めぬ者は弱者であり、之を失ふものは敗者である。更に／＼好んでこれを放擲する者に至つては自ら奴隸の境遇に身を賣る者と云つても大差あるまいと思ふ。

私共は此世界の何處かに於て、曾は弱いと咀はれた女性が強者となり更に強者ならんとしつゝある事を賀さなければならぬ。(終り)

## △イブセン未亡人 逝く

文豪ヘンリックイブセンの未亡人スーザンナイブセンはさき頃ノールウエーのクリスチアナにて七十七歳の壽を保ちて死した。イブセン夫人は名家の出、父は専門宗敎家にして讀書と瞑想とを好んだが別に獨創的人物ではなかつたされど彼はデンマルクの閥秀文士アンナマリア・クラークを娶るに及んで、彼女はスーザンナの繼母となつた。イブセン夫人の繼

母は大にイブセンを奨励した。

イブセンとスーザンナは千八百五十六年六月結婚した。翌年新夫婦はベルゲンよりクリスチアナに移りてイブセンはノールウエー劇場の支配人となつた。イブセン夫人はよく貧困と戦ふ良人を慰藉した。千八百六十五年の冬イブセンがマラリア熱病に冒された時、夫人はいとも懇切に看病した。彼の全快は頑健な體格のためばかりではなかつた。貧窮と戦ふこと三十年にして彼等是一個の家屋の所有者となりたる時は、新婚の夫婦のごとき上氣嫌にて家具や調度の買物をして廻はつたといふことである。

## △人道の愛人

北米合衆國のシカゴ市にジェーン・アダムス嬢なる社會教育に生涯を聖獻した婦人のある事は志ある人々の熟知するところである。アダムス嬢の主として力を注いだのは民衆主義と關聯して社會運動の倫理的方面である。嬢は千八百六十年九月イリノイ州に生る。ロックフォード學院を卒業して歐洲に留學した。千八百八十九年シカゴ市に於てハル館を開いて爾來社會事業の研究に従事した。著す所「民

衆主義と社會的倫理」、「平和の新理想」、「少年の精神と大都市」等皆名高し。最近一新聞紙が「合衆國に於ける社會的に有爲なる十二人の市民」の投票を集めたるに、候補者三千人中アダムス嬢は最高點に當選して「人道の愛人の名をえた。當選者中にはロジャベルト氏やエデソン氏等もあつた。とにかく是等の偉人の間に伍して第一位の榮譽をえたるは、アダムス嬢もえらいが、之を推したる米人も中々見識があるといはざるをえない。

## △南清の女丈夫

四月下旬の上海電報は吳魯蘭といふ女傑が支那政府の手に捕縛されたことを報じた。此女丈夫は支那江西省建昌府南城縣の富豪の娘で今年二十五歳の芳紀である。數年前下田女の實踐女學校に留學してゐた。その時數學の受持教師が成績が良くないからとて注意を與へたが、彼女は深く恥ぢたらしく、且つ大に決心して「此後は必死となつて勉強しますその證據に」といつて突然鉛筆削のナイフを閃かして自分の小指を切落した。十四年の十月支那の革命騒ぎが八ヶ間敷しかつた時彼女の姿がふらと見えなくなつた。友人間に

は屹度革命軍に投じたのだらうと噂してゐたが、果然北京で袁世凱の襲撃を企てた娘子軍中に彼女の名が見え、其後上海で幾度か演説會を催して支那婦人の覺醒運動を試み、近頃は女學校創立の計畫中であつたさうだが、此度袁政府に捕へられたのである。

## 『婦人の世界』の後に！

本誌誌友の方々の中には昨今大分御婦人の方も殖へてお出でになつたやうですし、なほまた時代の要求は、たしかに、斯やうな企てを必要としてゐることと思ひます。それでこれからは出来るだけ忠實に此方面の記事をも掲げたいと思ひます。誌友諸君の方からも、この問題に觸れたことでありましたら、御遠慮なく、此の欄へ御投稿なすつて下さい。但し投稿は一人二十二字詰五十行以内と限つて置きます。△原稿は「婦人の世界原稿」として本社宛お送り下さい。△原稿締切りは毎月十二日にいたします。△文章は凡べて口語體に書いて下さい。△御姓名は匿名でもかまひません。

# 婦人の世界

## 女子と參政權

田中久子

英國に於ける婦人參政權運動者の暴行は日に激しくなり、狂人である、ヒステリーである、猛獸の様であると云ふありとあらゆる痛罵の聲を浴せられて、今日に於ては既に知るも知らざるも共にこれを忌むこと蛇蝎の如くである。

彼等の或者は鞭を取つて人を打つた、火を放つて寺院を焼き私邸を焼いた、爆裂彈を投じた。と、若し其報道のみを聞いて居るならば、何人もこれを恐れずには居られない。けれども其共は唯徒らに恐れて居てよいであらうか？如何して彼等が斯様な事を敢えてする様になつたか、少しく考へて見なければならぬと思ふ。これに就いて同情あるロイド、デ

ヨイヂ氏の説や、米國人ローヴィック氏が自ら精細に調べた報道、若しくは彼バンクハースト女史等が自ら辯明する所によれば、彼等の此暴行は、これまで男子に依つて度々報道された様に、決してヒステリーのなる女子の我儘から出たものではなく、正當なる自衛の爲で、實に彼等周囲の境遇の產出したものである事、そして其内面に伏在して居る事情を精しく調べるならば眞に同情に値すべきものがある事を知るのである。

### 二

今日世界に於て婦人の地位の最も高く、參政權運動の尤も盛な處は、云ふまでもなく英國の二國である。何故英國であつたの騷ぎも起らず、英國のみこの恐ろしい騷ぎを起して居る

のであらう？英國の女子は米國の女子に比して性質粗暴、騷擾を好む爲であらうか？これに就いてローヴィック氏は云つた。『英國に今日の騷ぎの起つた原因は米國に於ては女子は初より男子の伴侶であり、既に同等の權利を有して居るに反して、英國に於ては女子は單に男子の補助者に止まり、些の特權を與へらるゝ事なくして、社會上の責任のみを負はせられて居る爲である』と。實に米國の或州では既に女子に參政權を與へ州會議員をさへ出して居るのである。米國の女子の才氣潑刺たるに反してこれまで英國の女子は家庭に於て最も柔順なる良妻賢母として知られて居つたのであつた。ビュール、ド、クルズンが其兩國の女を批評した中に『米國の女は智があり才があり、愛嬌も豊かである。併し英國の女の様な威嚴ある貴女の品位がない』と云つて居るが、實に英國の男子の理想が紳士である様に、女子は貴女を誇とする者であつた。

彼等運動者等は決して人の傳へる様な、所謂女壯士の黨、若しくは徒らに事を好む、野郎な烏合の衆ではなくして、其中には同國の花と云はるゝ貴婦人も、最高教育を受けた學者も、母も娘も凡ての女子を含んで居る

ので、且つ整然たる組織があり、機關雜誌をも有する、立派な團隊である。斯う云ふ條理を解する人々が身を擲つて、あれ程の騒ぎを敢てするに至つたのは實に容易な事ではないのである。決して發狂的の一時突發したものゝと認むる事が出来ぬのみならず、反つて同國に於ける何等か社會政策上の一大失態を認めなければならぬ。決して女子のみの罪ではなくして、男子自らも或責を引かねばならぬ問題ではなからうかと思ふ。

### 三

年來家庭に於て、男子の爲の善良なる補助者であつた彼等は、亦よく政治上にも有力なる補助者であつた。今日彼國の一般衛生が行き届き、各種の慈善救済機關が整ひ、あらゆる社會改良法が着々と好果を結んで行くのはこれ皆女子の力によると云ふ事は既に萬人の認めて居る處である。英國に於ては代議士候補者の妻は屢々候補者自身と同等に見られて居、英國の男子の中には女子の助によつて議席を得た者が澤山あると云ふではないか？斯うした仕事をする女子が國家の重要事件を知り、自治獨立の何物たるかを了解するのは當

然の事である。加ふるに現代の主我的思潮はあらゆる方面に流れて居る。是等の實力ある女子がこれに觸れずに居る筈は決してない。彼等は彼等の勢力に對して正に當然なる報酬を要求して居ると云ふ事が出来る。

### 四

此功績ある女子に對する英國の男子の態度は如何なるものであつただらう？ローギック氏はこんな事を云つて居る。「或見識ある英人が云つた様に、「自己の家庭以外には凡て自由を愛す」英人は、個人の自由を要求する女子に對して絶對に其態度を誤つたものである。

加ふるに同國に於ける結婚、親權、犯罪、離婚、相繼等に就いての法律は、凡て不公平に失して居ると云はれて居るではないか？即ち女子たるが故に、正當に相續し得べき權利を放擲せしめらるゝ事。表向親權を有する者は父親で、結婚法に依らずして子を設けた場合に負ふべき責任は母親のみである事。グラツドストンをして、「男子の爲のみを計つて、女子に對して極めて不公平」と云はしめた結婚法。同じ勞働に對する給料に、男女間甚だしい懸隔のある事、斯う云ふ事が女子をして權

利を要求せしめる根本の原因をなしたものである」と。

國家の仕事の半をなして居る女子が、其政府を構造する爲め幾分の權利を要求するのは當然の事ではあるまいか？

### 五

彼等が權利を主張し始めたのも既に久しいものである。バンクハースト女史の生國マンチエスターに於ては一千八百六十八年に既に此案を提出したと云ふ。數十年の間彼等は請願により、代表者を出す事により、書物により、演説により、ありとあらゆる手段方法に訴へて、根本的に自己を保護する權利を要求したものであつたが、更に其功を納むる事が出来なかつた。遂に首相に會見し、高等法院に訴へ、樞密院にまで申出たが、受くるものは愚弄と罵倒のみで、更に男子を反省せしめる事が出来なかつた。斯くして年を重ねる中に遂に千九百五年十月、バンクハースト、ケネーの二嬢が時の當局者に會見を申込んだのを、警官が暴力を以て斥けた。これを憤慨して街頭に集會を催した處、官權は安寧防害の條件を以て、遂に二嬢を入牢せしめるに至つ



夏の野を懐しいものと思ふやうになつた。

何のこだはりもなく、何の屈托もなしに眺めてゐた夏、それは追懷のうちに懐しい緑の夏となつて現はれて来る。

涙を知れる心、鞭打たれたる心に見る現在の夏は、言ひやうもなく尊いシーズンである。言ひや

うもなく驚異に充たされた自然である。しかもその夕暮れに見る緑の野、緑の蔭は秋よりも深い悲しみの涙を誘ふて来る力を持つてゐる。私は夢のやうな靄のなかにつゝまれた夕暮れの夏の木立と平原とを愛する。そこに最も深い自然の驚異と、私の淡い悲しみの追懷がひそむてゐる。

### 編輯の窓より

△井口杜村氏の「社會及び政治改革家としてのトルストイ」、兵頭棹歌氏の「トルストイと自殺」は次號に譲ることとしました。

△來月號からは「自然のスケッチ」といふやうな短文を掲げて見たいと思ひます。誌友諸

君の投稿を歓迎いたします。その地方地方の自然に對する諸君の印象なり感想なりを

お書き下されば宜しいのです。これも一人二十二字詰め五十行以内と限つて置きます。締め切りは

十二日と決めます。

# 夢の羽ばたき

野口 精子

天人の夢の羽ばたき音<sup>な</sup>のしろく五月の風のかほる朝かな  
軟かに親みまざる夏こちうすきしとねのうらのクリーム  
初夏や遠き生命につゞくなるかしこき自己<sup>われ</sup>を思ふこの朝  
白牡丹王の嬌奢<sup>をこり</sup>を初夏のこの日に見るもにくからぬかな  
綴り方母は歌よむ人とかく尋常二年はじめての作  
わかき日をたのしむことは天地も人もかはらず五月のこころ  
ほととぎす夜半の寢ざめに一針をいのちの底に刺してあとなし  
風かほり絹の音すれをわが髪にさく日となりぬ初夏の來て  
涙にもけがれありとかあらずとかいみじき事を聞けるものかな  
何ことの思はくありや夕暗にまぼろしをかく木苺の花

が何時までも長くつゞいたらばさぞ愉快だらうと何時も思ふ。けれども日本の太陽は餘りに熱い。随つて鮮な新緑は餘り長くつゞかない。さう思うと獨乙や佛蘭西のやうな處は羨ましい。此の綠色が殆んど夏中つゞいて居る。私は初め佛蘭西歸りの畫家が何ぜ、あんな鮮かな燃えさうな緑の並木を畫くのかと疑つたこともあつたが、彼の地を踏んで始めてその事實が分つた。私は私の庭を歩い

て何時でも獨乙の森を思ひ出す。獨乙の森を思ひ出すと、ワルトブルクの新緑を一處にくゞつてルツテルを追懷した獨乙の牧師や、ワイマルの公園の菩提樹の綠陰でゲーテ、シルレルを語つたロシアの婦人、綠に鎖されたイルム河の勝景を共に探つた一人の獨乙大學生は今何處に何をして居るかなどと云ふ事を思ひ出さゝれずには居られない。

## 靄につゝまれた夕暮

吉 田 絃 二 郎

新緑を讀へる私の心は直ちに限りもない追憶の悲しみを誘ふて來るのである。梧桐、楓、栗、檜葉、ハツ手、紫陽花、枇杷樹と幾らもない庭の嫩葉を見るごとに、私は遠い南の國の夏を思ふのである。明るい南の國の夏！しかしそこには暗い追憶から切り離すことのできない緑の野と、白い壁の家並とがある。

・ 剖葦鳥と鶉とが、また私の過去の夏を思は

せる深い印象として遺つてゐる。國境の山の向ふに阿蘇の煙が見えなくなると、幾十里の平原は一面の緑につゝまれて了うのである。筑後川の蘆荻の間には、かしこしい剖葦鳥の啼く音が快い怠惰の氣を誘ふて來る。お城の濠にのぞむだ樟の繁みからは、鶉の可憐な物語りが聞かれる。野良から晝食に歸つて來た男達は「今自家の田に鶉がゐた」といふことを大事件でも起つたがらゐる昂ぶつた

調子で話して聞かせる。私達は竿を以て息せき切つて水田の方へ走つて行つた。それでも一度だつて鰯を捕へることはできなかった。

棕、松、檜、樅、樺が一つ時に青葉して、國境の川の土堤は幾里も涼しい影が漂ふてゐた。飴賣りや、トコロテン賣りが終日その下に立つてゐた。琵琶弾きや、門付けが憩ふてゐることもあつた。私は蛇苺の實の爛れるやうに熟してゐる土堤にかけ上つて行つて、小鳥の巢を探して歩いた。笛を吹いて、蝮を呼び寄せる男の青い顔を、よく川岸の繁みのなかで見るともあつた。

この時代には夏は、私にとつて、たゞ譯もなく嬉しいものであつた。

私は久しく旅から旅と歩かなければならなくなつた。その間に見た夏はいろいろな形を以て私に現はれた。私は夏を明るいと思つた。嬉しいと思つた。しかし同時に、夏には秋にもまさる寂寞のひそむてゐることを知るやうになつた。

私は東京に出て來てからも、室のなかで本を讀むことのできぬ性であつた。田舎にゐたころ野原

に寝ころんで本を讀む習慣がついてゐた性であつたかとも思ふ。私はよく巢鴨から大塚あたりの郊外に寝ころんで、青い葉蔭を透して、雲の峯を見ながら本を讀むだ。自然の恩寵は青葉につゞまれた大地の上にこぼれてゐるやうに思はれた。涼しい風が吹いて來る毎に榊や栗の嫩葉が、よろこびにふるへてゐるやうにも思はれた。

しかし私はとぼとぼと夕方の麥畑や、森のなかをさ迷ふて歸るごとに、氣懶い悲しさや、不安の壓迫を感じない譯には行かなかつた。それは秋にも冬にも感ずることのできないほどの深い、そして執拗い寂しみであつた。失つた過去を悲しむ寂しみてあつた。新芽が出るころになると、肉體の舊い傷が疼き出すやうに、私の心もまた青葉ころの夕暮になると、失はれた過去のいろいろな物ごとの悲しみを以て疼くやうに思はれる。しかし何れにせよ緑の夏は最も懐しい人生の一表現である。切に生き甲斐のあることを感ずるシーズンである。私の心が明るかつた少年のころよりも、悲哀や、暗を感じてからの此のころの方が於以上



して今日見る様なものとなつたからでのとである。是れぞ、見真大師の遺跡として世に稱へらるゝものゝ一つである。今や初夏の天、萬樹悉く新緑の衣を着くるの候、余一夕此巨剎に散策し偶々名だたる銀杏の樹に達したから、樹下の石上に踞して瞻仰すると、恰も茁々たる嫩葉は此樹を裹みて鬱葱、しかも綠翠滴るが如く生新の氣は潑瀾として充溢して居る。更に左顧右盼すると境内の大小の樹木は參差として威な新粧を凝らし、濯々たる綠蔭匂ひ高く薫らないものはない。余は四季を通じて、自然の風物に接する毎に、宇宙大意識の靈光を拜するものなれども、初夏は一年中で、萬象が悉く清新の氣に充ち生生活動の光景を呈し、

從て大靈の面目躍如として天地間に活現するのを觀るが故に、取り別け之を好愛するものである。何の幸ぞや、余は今身を塵寰を絶せる此淨域に置き幽邃閑寂些の人籟なく坐ろに出塵脱俗の想あらしめたが、同時に眼前に、翠滴る若葉の新緑は采々として余の心身をば清新明爽ならしむるの感を深くした。あゝ、その剎那こそ、余の凡骨をして眞に羽化登化し悠々上天に遨遊する様な思ひあらしめた始めてである。願くは其剎那の感興と同じきものが間斷なく、長へに余の心にあらんとを。これ余の中心の忻求である。特に茲に之を記するのは此感興を忘れざらしめんが爲めである。

## ワルトブルクの菩提樹にまで

三 並 良

私の家は一寸小高い處にある。庭は南の方に百

坪計りある。その先きは往來て、それは庭よりも

一間半程低い。この先きは甲武線の鐵路で、電車や汽車が間斷なく通つて居る。その路は往來よりも更に一間も低くなつて居る。その先きの地面は私の庭よりも高い位であるが、そこには中野在の舊家で先祖代々農業をしてる大百姓の堂々たる藁家がある。此の家の周圍には五六十年も経つて居さうな杉の木があるが、その外十數本の樺や榎も天に聳えて居る。私が今の家へ移つて來た時に私の庭には一本の樹もなかつた。いや唯だ往來に沿ふて四本の櫻が植つて居る計りであつた。しかし百姓家の杉林は殆んど自分の庭つゞきであるかのやうに見える。のみならず如何にも閑靜で、之を眺めて居ると深山へでも行つたやうな心地になる。庭などのことに趣味のある友人が來て、庭へは背の高い樹を植えてはいけない、又垣根も高いのをしてはいけない。彼の向うの林を自分の庭のやうに見せるやうに、低い樹を植えろと忠告をした。それで私は家の前を空地にして置いて、その向うへは實用的に栗や、柿の苗を植えた。けれどもそれだけでは何んだか變だから小石川から持つ

て來た紅葉や檜の高さは三間位もあるのを四五本東側に、又西側には榎の樹を澤山に植え、中央には木蓮や百日紅を植えさした。然るに向うの百姓君は近頃祖先譲りの地面が騰貴して、大に裕福になり、従つて中々ハイカラになつた爲めか、藁屋根では承知しなくなつたと見え、杉林の半分計りを伐つて、そこに二階家を建てた。これでは私の豫算は全く違つて、低い樹の頭の上を越して二階家を眺めることになつた。けれども天然の生長は有り難いものである。此の夏は色々の苗樹がもうずつと延びたことが著しく分るやうになつた。初めに櫻の葉が出て、それから紅葉、木蓮、百日紅、栗、柿と云ふやうに段々新芽が出て、今では庭一面に晝猶ほ暗しとても云ふべき程になつた。風でもあると新緑の滴りさうな波が沸き出すやうになる。私は朝早く起きた時或る日の暮れ方などには庭に降りて新緑の茂れるなかに唯だ茫然として立つて居ることもある。日光は葉を照らす、その下までは射して來ない。その時の葉の鮮さは何とも云へない程いゝ。私は斯う云ふ鮮かな綠色

の景色に彷彿たるものが有つて、全く此頃は年中で一等好きな時だ、あゝそう／＼何時か緑さんに見せようと思つてつい忘れて居た」と藤樹は古い亞米利加の雜誌を取つて來た。

『今日これを紹介するは最も當を得てる、實に可愛い話で、緑さんは是非聞いてをくべき話だよ、日本の某博士の息子さんがフイラデルフィアのある學校に通つて居たんだ、ある日ミス・アンナとあるが此女の先生が各々の生徒に一等好きな色はなにですかと、質問を發した、處が向ふの子供達はレッドとかエローとか、色々に答へた中に只一人日本の少年某博士の息子は、グリーンと答へたそうだ、向ふではあまりグリーンを好かないものか、先生訝しがつて、なぜグリーンが好きなのと、問返した處が、其答へが實に愉快、こう云つたのさ、

I was born in the beautiful Japan, where it is always  
Green.

先生も詩人と見え非常に感じて、即座に一律を草して此少年に與へたと云ふ美しい話なんだ。

其詩がこれに載つて居るんだ、君一つ僕が讀むから、日本の新體詩風にでも譯して見たまへた』

『よし其れは面白い、但し君の讀方一つで僕の譯詩はどんなにもなるよ』靜夫は少々得意になつて頭を傾けた、藤樹が二三節讀むと靜夫は變な形の詩に譯す、

But why my boy, I asked him, why is that color best?  
his choice was unexpected.

と藤樹が二度ばかり讀むと、

思ひがけなき選びの色に

なぜあなたは緑が好きかと

不思議に思ひてたづねしに、

と、無い字までくつつけて、靜夫が譯して答へる、『待つて下さいほんとに美しい話ですから姿筆記してをきますから』緑さんも本氣になつて、筆を取つた、三人がかりで、やつさ、もつさ、で先づこんな譯詩が出来たのである、

『私の好きな色は緑です』と

可愛ゆき日本の少年は答へぬ、

思ひがけなき選びの色に

興味いよ／＼深くなりて、

『なぜあなたは緑を好くか』と

不思議に思ひてたづねしに、

長き黒き睫毛の中に

ためらひの眼ひからせて、

やがていらへに頭をあげ

『私の産れし本國は』

『何處も緑り』美しき

景色に富める國なりと。

可愛ゆき子供は東まなる

日本の國より來りしなり、

吾等は心より彼の眞心を

讀めた／＼んと思ふなり、

太平洋をへだつとも

各々眞心うち出して、

彼が祖國の記憶にまで

常に縁りを稱へん哉

かくして三人は何度も讀み返し、如何にも物足らぬ節が多い、どうせ譯詩だもの、と彼は話してゐる間に大分長くなつた。新緑晩春の日も漸く暮れんとした。

『オヤつい美しい話につりこまれて居ました、まだ用事が御座いましたに又母に言事ですよ』と笑ひながら持つて來た團子の皿を再び自分で包むだ。

『これは期せずして暫らく詩の國に遊んだ、どれ暗くならない中に僕も失敬しよう』と靜夫は先きにどん／＼出て行つてしまつた。

『さようなら有難う』と縁さんが歸らうとした時に藤樹の母も

出て來た、

『どちらが有難うか!』藤樹も門まで見送らんと立てば

『お前おうつりは』と母も話しながら出て行く、

『それでは又お出でなさい』

『ハ有難う』と縁さんが門を西に出て行つた時庭の新緑は夕日を受けて日を透かし金綠色に榮へ庭一パイに滴る様な濃き緑りの葉の上に、空の碧が映りて枝と枝にかけ渡した蜘蛛の糸の碧に黄に閃いている。

『縁さんの後姿は格別だな』と藤樹の母は暫らく後を見送つて云つた時に、丁度縁りさんは路を曲つて姿をかくした。

『あゝ心地よい新緑の夕』と藤樹は庭の上の方をぼんやり眺めて、暫らく門内にはいらふともせなんだ。(了)

## 銀杏樹の蔭

久松 黒 巢

余の寓居せる宿から、餘まり遠らぬ所に一つの名高い古刹がある。之を麻布山善福寺といふて居る。此寺の本堂の前の廣場の左の隅の方に、五六抱へもあらうかと思はるゝ程の古い大きな一本の公孫樹がある。此樹は俗に杖銀杏とか、逆銀杏と

かいはれて居るが、其由來は今から約六百八十年前の、かの親鸞上人が巡錫して此に在りし時、その携へる杖を地につけしまゝ地中に突き刺して立ち去りしが、其後幾許もなく、其杖に根を生じ芽を發し、癒て、それから枝を出し、段々と成長



## 牛舎の新緑

笥流露

新緑……唯かう思ひ浮べて見てさへ、言ひしれぬ爽快な感じが全身の血管を流れるやうに覺えたのは、去年までのことで、今では私の心に暗い悲しい聯想を伴ふ色となつて了つたのである。

急な山坂を轉び落ちる石は谷底まで止まらない。一度運命の絕壁から足を踏み外した自分は轉び轉んで、とうとう社會のどん底まで落ちてしまつた。

殆んど生きて行けなくなつた時、私は曾て經驗したことのない程強烈な『生』に對する愛着と骨肉に對する親味とを感じ、爪を剥いてもこの冷酷なる社會から骨肉を保護しやうと決心した。そしてその時はバンに代へらるる自己の能力としてはただ勞働力のみが残つてゐた。

『實に人間は素直な動物だ。何んなことにでも慣されて、しまふ者だ！』とドストエフスキーはいつてゐるが、全くの話で、自分も牛舎働きに來てから三日目にはもう大略周圍の空氣も、仕事の手順も飲込んで、絶えず頭を擡んとしてゐた自尊心も何時の間にか泣寝入になつてゐた。

ゼルシー種の綺麗な牝牛の乳を五六回消毒竈へ運んだ頃、漸く夜明となつた。この搾りたての牛乳は一種名狀しがたいフレッシュな香氣を發するもので、苦しい勞働の中に全く意外なこの慰安を發見して、下層社會には又この社會以外の者に決して知られぬ愉快があるものだと思つた。

仕事が一切済んだので、牛舎の裏の藁の山に凭りかかると、早起の小鳥が轉つてゐるのが濃い靄の底から聞える。水々しい纖弱な柿の若葉が青々と柔軟げに茂つてゐる。若葉から吐く香は、いつとりと靄に滲んで、ツルゲチーフの小説にでもありさうな心地よい平和なそして神秘的な軟であつた。

自分ながら零落したものだと思つたり、母や妹の事を考へて涙を落したり、突然何故社會は下流の者に感謝せなくて、虐げたり輕蔑したりするのか。下流社會即ち勞働者が無かつたなら社會は同時に滅びるのにと考へたり、他日勞働問題に就て小説をものしやうと企てたり、胸に浮ぶ事がいかにも斷片的で少しも纏つた一事を捉へてゐる事が出来なかつた。その時肉體的に悲境に在る者は、智能も同じく貧弱となるものであることを知つた。

柿の若葉の端から靄が露になつて落ちるのが潜々と泣くやうに見え、牛舎からは二十幾頭の牛が食事を欲しがつて、低く高く唸つてゐた。柿の白い花はほろ／＼と泥濘へ散つた。

私は新緑を見る毎に、この生活のどん底に苦しんだ私自身の姿を思ひ出さずには居られない。『零落——新緑』と云ふ連鎖は死ぬまで恐らく私の心から消えないであらう。

# 『いづこもみどり』

林 三 郎

『ア、こゝの新緑はフーカスよりエメラルドグリーンにすればよかつた』と獨語しながら學校から歸ると和服に着かへた島村藤樹は直ぐと、昨日から書きかけて居た水彩畫をやり出した。

『またスケッチをなすつて？これはお邪魔つ』と小庭の路次から突然はいつて來た近所の緑りさんは『不出來てすからほんの僅かはかり』と三越の印しある風呂敷に包んで來たのは蓬園子で有つた。

『これは面白い、新緑の候に緑りの蓬園子を緑さんが持つて來て下さるなんて、まるで詩的ですね——、どれスケッチは後にして、早速いたゞきましようか』と筆ををいた時に、

『あまり詩的だと却つて俗になるよ』と毎夕の様に遊びに來る靜夫君は今迄奥で藤樹の母と話して居たのが突然顔を出して、

『遠慮は偽善だ、どれ一つ』とまたゝく間にやつつけてしまつた。

『ほんとに俗になつてしまひました』と緑さんは切角藤樹に持つて來た園子を、わけもなく靜夫に食はれてしまつたので、呆顔して一本まいつた。

『俗な園子は無くなつても緑りの詩は盡きる事はないさ』

『實際緑りはいいよ、此頃朝鮮の觀光團が來て居るが、日本の變な文明よりも、風俗よりも、一番歡んで居るものは緑りだよ』と靜夫は快活な口調を以て盛に綠論を始め出した。

『そうだらふ、韓國の皇太子殿下が伊藤大師につれられて馬關に上陸せられた時に、最初に發せられた言葉は『あゝ何處も緑り』であつたそうだと藤樹もこれに利した。

『アーラ韓國の皇太子だつて』と緑さんはあまり眞面目に藤樹が云つたのが可笑しかつたので、急に笑ひくづれた。

『それなら何んと云ひます？』とぬかさず靜夫に問はれて、李皇子とか李太王とか何んとかあやふやな事を答へて居たが、やつと皆で李世子と申すのだと云ふ事がわかつた。

『綠りから面白い話が湧いたものだ、そんな事はさてをいて、僕は皆にもつと新緑の趣味を解してほしいと思ふ、それは櫻も立派だらう、だつて東京の花はあまり華花やかでねー、幾分か俗だよ、そこへ飲んだくれの聯想と來ると全くまゐつてしまふ』藤樹は櫻を呪ひ出した。

『よく云つた、僕も櫻には大に議論があるよ、一體昔の様に武士の日本ならいざ知らず、バツと實もなく散り果てる櫻の花を今日尙國民性の表現など、やれ學校の徽章だの、何會の標しなどにむやみに用ゐる事は僕はは大に問題と思ふ』とえらい元氣で靜夫までも櫻を呪ひ出した。

『議論はさてをいて騒々しい花時よりも靜かな綠りの方がどのくらゐ好いか知れない、格別東京の郊外と來たら、關西産れの僕等に取つては、たまらなく好いからねー、それに僕の好きな日向

經て不思議な姿をしながら、枝といふ枝を北へ向けて、今ではこの枝に新緑の若葉が再生の悦びを漲らしてゐる。前者はしなやかな伸びやかな、いかにも自由な風姿を空へ浮ばせて、重なり合つた若葉の陰から、黒い樹幹を所々に覗かせてゐる。曙の軽い風に鶉の鳴き聲が桧の若葉の間を流れ、高い榎の枝がゆれ、銀杏樹の葉がゆら／＼ゆれてゐる。

私はその伸びやかな安らかな榎の風姿を仰ぎ見た時、その勇ましい雄々しい銀杏樹の年經た容ちに接した時、いつも靜かな肅めやかな心持になつて、思はず机の前へ端坐せずにはゐられなくなる。長者に對する心持、老年者のゆとりある微笑に接した時の心持、そして懷しさと尊さとの入れまじつた心持で、自づと自分の心をも姿をも引しまらせ、同時に一種の安慰と易らかさを感じながら靜かに朝の一時間を過ごさずには居られなくなる。

若い緑の色調が喜びをこえ、年經た樹幹の自在な姿が力をこえ、そして人の心を自然の状態に立

ち歸らせてくれるのであらうか。その二本の高い樹からつゞいて一面の若緑、櫻があり、楓がある樺があり、栗の樹があり、みづぎがあり、どろの樹があり、榆の樹がある。それ等の木々が今は灰色空の下に緑の波をおさめて動かずにたゝなわつてゐる。

「綠葉にこもる默したる雷鳴」と詩人は歌つてゐる。その雷鳴は聲なく音なくいま緑の中をまろび歩いてゐる。恐怖を搔き立てる沈黙の雷鳴が押し靜められた綠葉の中に響きを起してゐる。その緑の大塊に向つて立つてゐる人の心に音無き響を傳へ、地の底より湧き起り大空へ向つて昇つて行く大きな聲が、緑の沈黙の中にたゆたつて人を引き込まうとしてゐる。その響を聞き得る人が、その緑の色に誘はれて果てなき國に入り込む人が、盡さざる生の喜びを受け得る人であるであらう。

この沈黙の破れる時、雲間から日の光りの射し込んで來る時、綠葉は一樣に頭を擧げて、千波萬波の哄笑を漂はせて、黄金の光りを競つて吸ひ込むのであらう。一團の緑が炎となつて燃え上がり

大空の紺碧と反映して、野は一時に新生の喜びに爆発するのであらう。その悦びを前に控えて、果

なき緑の王國は今深い默想に耽つてゐる。(五月十五日)

## 居留地と新開地と

石 田 樅 村

### 夏子の手紙

——Capehと入口に書いてある西洋人の舞踏會場を右に見乍ら、山手の静かな居留地を、新緑の生垣に添うて歩いて行きますと、纏て廣々として東京灣が見渡せます。あの青い海の色が若い男のさつぱりした氣持の様に、わたしの心の前に廣がつた時の嬉しさは此のまづい筆では書き盡せません。わたしは姑くじつと見とれて居ました。港には伊太利の軍艦が入つて居ました。

ふと絹擦れの音に振り返つて見ますと、西洋人の夫婦が腕を繋いで、其處から右へ曲る坂を下りてくじやありませんか。廣々とした海の景色から離れたわたしの眼には、何だか斯う窮屈な様な輕いくすぐつたさが映りました、が纏て其氣持よく動く二人の影も見えなくなつて再び四邊は靜かになりました。

兩方から蔽被つて來る新緑の葉蔭に包まれて、わたしはバラッルを姑く疊んで坂を下りましたが、鮮かに色どられた其淺緑の葉が太陽の光に燃えて目さむるばかりの美しさになつて居るのを、坂の下から眺め返した時、海を見たよりもつと強い感動にわたしの心は躍りました。其は靜かな色でなくて若い女の心を深くそ

して輕やかにそゝる様な色でした。若い心が戀歌を歌はずに居られない様な力強く香しい色でした。

然し、すぐ光景は變つて行きました。坂の下は新開地です。其處には西洋人の水夫など相手に随分いかゞはしい商賣をして居る女もあると云ふ事を聞いて居ましたが、とある瀟洒な日本造の家の庭先に、其らしい女と垣根越に笑ひ交して居る三人の伊太利水夫の後姿を見ました時、わたしの心からは、いつかしら新緑のあざやかな印象が去つて、其代り眞夏の人いきれ草いきれの印象が毒々しく入つて來るのを感じました。垣根は低い竹矢來で出來て居て、緑の植木の間に立つて笑つて居る女の顔には白壁の様にあつくお白粉が塗られて居ました——

△凡べて貧しきものの爲めに、夏が來た！

△凡べて貧しき心の爲めに新緑が生れた！

△凡べて驚異にあこがれつゝある我が爲めに！

△生命と倦怠と戀と愚かさを知る爲めに！



め、晩春の柔かい日光が透き通るやうな薄緑の葉に濾されて春温の煙るやうな木の下蔭をそゞろあるさする心の喜びは實に何とも云はれません。

花といへば赤い色を思はせるやうに、緑といへば青い色を思はせます。けれども新緑といふのは無論新らしい木の葉のあらゆる色を含めていふので、緑や青に限つたのではありません。緑の錦といふのは此の若葉の無數の色を一番力のある「緑」に統べさした名でありませう。新緑は紅、白、黄、紫等、花の有つて居る色を殆んど悉く備へて居る外に、如何なる花も有つて居らぬ一つの色を有つてゐます。緑です、青い色です。西洋では「青い花」(blue flower)と云ふ詞が「世に無きもの」の意味に使はれてゐますが、緑の色は實に葉のみの有する特權です。「緑」は造化が葉にのみ許して花に禁じた貴い色です。花に取つては禁色であり、葉に取つてはゆるしの色であります。あらゆる色を許されて緑のみを許されなかつた花は、如何なる羨みの眼を以つて葉を眺めて來たてせう、貧しいながらあらゆる色を許された上に禁色の緑を豊か

に許された葉は、如何なる誇を以て花に臨んで來たてせう。櫻が散つてから栗の花の香ふまでの五十日は、花に色の數々を盡さした上にゆるしの一色を誇る爲めの葉の季節のやうに思はれます。植物學者は花は葉の變形だと申しますが、さすれば葉といふ御母さんが自分に存在の意味を留むる爲めに此の一色を美しい子に惜んだのでありませうか。

吾等は無盡藏なる水や空氣を貰はぬやうに、多きに馴れて緑の葉を貰はぬやうになつて、ゐますが、緑の色ほど人に好い感じを與へるものはありません。そして其緑の色の生粹を現はしたものが新緑です。新緑は人間が緑の色に馴れて之れを輕んじやうとする心を驚かして、其の絶大の價値を覺らしめやうとする造化の御祭てはないでせうか。

家におのみ籠つてゐて殆んど旅行といふものをしたことのない私は、まだ大山、大河、大平野などに於ける大舞臺の新緑の美に打たれたことがあります。たださういふ景色で平生見ぬ戀にあくが

れてゐるのは、嵐山の新緑です。私は數年前、四月はじめの櫻の盛りに嵐山に遊んだことがあります。あゝ、あの櫻楓が常磐木の間に織り込まれ、長い枝を川の上に伸ばして、澄んだ淵に全き影を映し、淺瀬の白浪に青い影を酔かせて、渡月橋の上十町を装つた景色がどんなだらうと思ふと、そ

ろに胸の躍るのを覺えます。新緑は私に取つて實に花にもまさる喜びであります。野山の大きな景色は云ふに及びません、猫の額のやうな小さい庭の新緑でも、尙ほ自分の小さい心に盛り切れぬ喜びと感謝とを湛へて呉れます。

## 緑の沈黙

吉 江 孤 雁

雨氣を含んだ灰色の雲が緑の大塊の背景となり覆ひとなつて圓らかな天地を包んでゐる。果てなくつゞいてゐる緑の大波は、その雲の前に、その雲の下に、黙してしまひ、くすんでしまひ、何と考へてゐるのか、何を藏してゐるのか解らない深さを見せて、いつまでたつてもその緑の沈黙は破れさうもない。

その吸ひ込むやうな緑の深さ、その亂れざる緑の緊張、そして夢を追ふのでもなく、幻を求めるのでもなく、大地に固く根ざして、しかも大空の

下に黙して立つてゐる緑の巨人。先の日に幾千となき柔い手を舉げて、日の光の照り輝く中に、跳りつ狂ひつしてゐた若人は、今急に考へ深くなり一語も發する事を厭ふやうに、黙して頭を垂れていつまでも動かずにゐる。

私は毎朝近くの桧の林で鳴き立てる鶉つしの聲に目醒されて、二階の窓を開けることになつてゐる。開けて見ると郊外つゞきの連緑の林が、まだ醒め切らない緑の國を眼前に展開する。その連緑の中に一本の高い榎の樹と銀杏樹とがある。後者は年

わが味方は少なくとも、生命の數學は  
二二が四萬また四億なるをわれは知る。  
はたまた抑壓の力は如何に大なるとも、  
二一添作の五億また五十億なるをわれは知る。

### 東勝寺跡にて

一つの權力に對して、——  
他の一つの權力は起てり。君よ、  
何故にその一つをのみしかく憤るや。  
いかるならばそのいづれにも……  
讀ふるならばそのいづれにも……

### 讀者諸君に告ぐ！

△夏期中各地方へお出かけの諸君へは、  
郵券二拾錢お送り下さるれば、本社から直  
接何時にても雑誌をお届けいたします。

六合雜誌社



## 栗の花の香ふまで

五十嵐

力

自然を見る眼が暗いのでありませう、私が新緑の美といふものを心から感ずるやうになつたのは、自分で草木を手がけるやうになつてからであります。冬の中に寒肥などをやつて、花を待ち若芽を待つのもどかしい一日々々が夢のやうに過ぎて、やがて紅い、白い、黄色いいろ／＼の花が咲きます。而してそれが散ると、今まで堅く結んでゐた芽が段々にほぐれて来て、米粒大豆粒位の小さなボツチの裡から三寸五寸一尺二尺といふ水々しい若枝が伸び出します。数枚数十枚の透き通るやうな若葉が開けて來ます、木によつては尺にも餘る化けさうな巨大な葉が、丁度手品師が小さな空箱から大きな傘を幾つも出すやうに、幾枚ともなく現はれ出でて人を驚かしめます。凡そ植物の一

年間の生活の中で、新緑の時分ほどの驚異を現はすことはありますまい。而して其の驚異が一々吾等の平生の手當心遣に反應して來る所を見ると、一枚の葉の開ける所にも、一寸の枝の伸びる所にも、限りなき喜びが湧いて來ます。彼等の瑞々しい生長を見るのは、やがて頑是ない子供の福々しく太るのを見る心です。彼等の新らしく生長する姿を見ながら無駄枝馬鹿枝を剪み去るのは、子供の身體から疣瘤腫物を除き去つてやる心です。柔かな緑の匂ひを妨ぐる古葉枯枝を拂ふのは、子供の身體から髪を刈り、爪を切り、垢を洗ひおとしやる心です。而して彼等が舊塵をすつかり洗ひおとし、自然の風姿をほしいまゝにして、吾等を招くやうに枝を伸ばし葉を伸ばすところを眺



# 第三回基督教夏期講習會

■期日、七月十三日—十八日、午前七時—十二時

■場所、芝區三田四國町二、統一基督教會

■會費、金五拾錢也、一日分金拾錢也

講

師

文早大教授 內ケ崎作三郎

ドクトル 杉浦貞二郎

ドクトル 鹿子木員信

記讀實新聞者 松本 趙

法帝大教授 吉野作造

早大教授 永井柳太郎

法學士 平澤均治

法學士 高田慎吾

■講演の題目は次號に於て發表すべし、

主催 基督教同志會

寺僧が勤行の空しき鐘の音のみ。

幕府の跡は田園となり、

大官の住家は冷たき古蹟にのこり、

寺院を訪ふものは生活になやめる巡禮の客。

あゝ一切は逝く、一切は滅び去る、

——されどなげくを用ひず。

一切は行く、一切は進み行く、

戦ひつゝ進みゆく。見よ

この平和のうちにこそ新たなる戦のあることを。

さなり、昔も今も變らぬものは、人々をして戦は

しめたる

かの秘れたるある力なり。

あゝ生活の戦ひよ！

平和なる假装のもとに新なる戦を藏したる

平和にしてたゝかへる、戦ひて平和なる、

美はしき鎌倉よ！

われは安さを求めてこゝに來れるにあらず。

そは戦のためなりき。——生死を睹したる戦のた

めなりき。

## 生命の數學

そは多くの場合、定なる喧騒を意味するに過ぎざれば、

革命と云ふことばを吾はいとへど、而も

今やわがとるべき途はたゞこの一つのみ。

——成長を阻まれたるわが生命のために、

虐げられたるわが『眞實』のために。——

小さきわれはこれが爲めに憤る、

大なるわれはこれが爲めに哀れむ。

而して何れの聲も叫んで曰ふ。

——『革命の旗を翻らせ！』

革命の喇叭をふけ！』

あゝ、見えざるわが軍隊を

政治家の群に放たんかな、また

宗教家の群に、文藝家の群に、教育家の群に、

富めるものゝ群に、愚なるものゝ群に、

偽善者の群に、而して何よりもまづ

盲目なる時代思潮の流れに……

三月號要目

六合雜誌

四月號要目

〔中附六〕

- 第二十世紀の基督教
- 史家の見たる輿論政治
- 宗教の民主的傾向
- 憲政の精神的背景
- 政治の根本的理想
- 創造の世界
- 宗教の精神的本源
- 史影(ストリンドベルヒ)
- 監獄か學校か(對話)
- In Meetings
- 死の歎美者となる前に(感想)
- 靈界の偉人を憶ひて
- 銀座教會の内と外
- 冬の夜の對話
- 灰燼(小説)
- 歐洲見聞錄
- 白玉吟(歌)
- 時評(數篇)

内ヶ崎 作三郎  
浮田 和民  
安部 磯雄  
吉野 作造  
内ヶ崎 作三郎  
野村 隼  
三並 良  
千葉 掬香  
佐藤 清  
岡田 哲藏  
吉田 絃二郎  
星島 二郎  
石田 縦  
井口 杜村  
盧山 生  
野口 精  
同人

- 先人未蹤の道
- 個人主義者としてのイブセン
- ロシア文學に於ける杜翁の地位
- ノルダウ氏のトルストイ論
- 單純信仰と本文批評
- 史影(ストリンドベルヒ)
- An Air-Castle
- 富める人とラザロ(對話)
- 島の牧師
- 春(短歌)
- 山の雪(短歌)
- 歐洲見聞錄
- マグダラのマリアにまて
- キツクユウ問題の真相
- 婦人の力
- 念腹宗(靜座二年有半)
- 牛込教會訪問記
- 時評(數篇)

内ヶ崎 作三郎  
稻毛 詛風  
井口 杜村  
西宮 藤朝  
三並 良  
千葉 掬香  
岡田 哲藏  
佐藤 清  
目賀 多正  
伊藤 寥  
野口 精  
盧山 生  
吉田 絃二郎  
内ヶ崎 作三郎  
新渡戸 稻造  
岸本 能武太  
同人



禪の第一義

四六判箱入  
定價金一圓  
郵稅金八錢

鈴木大拙先生著

スエデンボルグ

定價五拾錢  
郵稅六錢

阿彌陀佛

定價卅五錢  
郵稅八錢

鈴木大拙先生譯

大内青巒先生著

禪  
の  
極  
致

定價六拾錢  
郵稅八錢

加藤咄堂先生和譯

和譯經摩經評註

定價七拾錢  
郵稅八錢

堂聲鷄三五三一京東替振社版出午丙六町原區川石小京東  
六町原川石小京東六八六一一京東替振



# 六合雜誌

四百號  
記念記

## 評論欄

- 宗教の公同性……………ロイド、トマス 内ケ崎作三郎譯
- 最近三十年間に於ける政治思想の發展……………浮田和民
- 同 國際關係の發展……………煙山專太郎
- 同 資本の集中と労働の團結……………安部磯雄
- 同 婦人運動の發展……………原田鶴子
- 同 教育思想の發展……………中島半次郎
- 同 日曜學校の發展……………田村直臣
- 同 天文學發展の一側面……………一戸直藏
- 同 日本に於ける印度學の發展……………武田豐四郎
- 同 生物學の發展……………谷津直秀
- 同 神學の發展……………三並良
- 我が國民性より見たる労働問題……………鈴木文治
- 明治以後の文學思潮……………片上伸
- A Parable……………岡田哲藏
- 道德と文藝……………富永徳磨
- 新浪漫詩人の人生對藝術觀……………山岸光宣
- 現代思想の倫理問題(オイケン)……………今岡信一郎
- カントよりベルグソンへ……………野村隈畔
- 宗教と藝術の渾融……………佐藤清
- 吾人の神觀……………シー・ジュー・エルベーツ

## 文藝欄

- イーリアス發端(詩)……………土井晚翠
- いのちのながれ(歌)……………野口精子
- 労働の歌(詩)……………加藤一夫
- 來しかた(歌)……………吉良靜子
- 沈黙せる生命の神祕(感想)……………吉田絃二郎
- How I became Interested in Japan... Clay Mac Cauley
- またユニタリアンをやめぬか……………岸本能武太

△本號定價一冊 金參拾錢 郵税一錢五厘

# 第貳期會員募集

●會長 南條文學博士 ●望月信亨  
●主事 高楠文學博士 ●大村西崖

會則書目無代呈

## 大本佛教全書

一ヶ月 特別會員 三圓五拾錢  
普通會員 貳圓五拾錢  
六ヶ月 以上 何れも割引の便法あり

本會は千三百年來我帝國の全思想界を支配せし佛珍什秘籍を蒐集、公文明史の遺迹と國民生活の精髓とを包括一大文庫を建設せんことを目大日本佛教全書四十八冊貳萬四千頁の出版を遂行して社會の嘆稱を専らにし更に云ふ迄も社會風教に志ある士は此機を逸す乞ふ速に入會とを。

これ 日本文明の結晶に信仰道德の根元也

(中附三)

電話新橋一七八二番  
振替東京四九〇番

佛書刊行會

東京市鍋町一區七



# 鎌倉にて

加藤 一夫

## 戦闘曲

頼朝の館——頼朝の墓。

北條氏九代の榮華——陰鬱なる東勝寺跡。

——そこに破毀せられたる高時の墓あり。

偉大なる日蓮の感化——濟度の力を失へる寺院・寺僧。

一千年の歴史は鎌倉に縮圖されたり。

われ茲に來りて人生の無常を嘆かず。

かへつてその流轉におそる。見よ。

昨日の力は今日の無力なり

今日の新は明日の舊さなり

——時は一切を破壊すれば——

生命は恒に新なれば——

平和なる鎌倉よ、

新緑の山の瑞々しさよ、畑の麥よ、そらなめよ  
なまめかしき豌豆の花よ！

溝の小唄よ、堤の月見草よ、蒲公英よ！

山を罩むる朝霧のこゝろよさよ！

街を掩ふ暮靄のかなしみよ！

かの劔戟の聲はとほに響かず

貝吹山にホラの音は鳴らず、——集めらるべき兵

士はなし。

響くものとは

空に充てる紙鳶のうなりと



高島平三郎著 再版

# 現代の心的革命傾向と

四六版

二百頁餘

クロース天金

定價八拾錢

送料八錢

青年に同情せる心的修養書として心理學上より懇篤明快青年に教ゆる處得易からざる好著たり著者此の書に序し曰はく蓋し社會は常に若かるべし老ひしむべからず之を爲すの道如何。常に新しき刺撃を感受し新しき環境に接觸して徐々に變化し不斷に活動するにあるのみ青年を尊敬し又自ら永く青年の心を失はざらんことを希望せり。云々

木村莊八譯著

最新刊

## 藝術の革命

四六版 六百頁餘  
挿畫 アート 四拾枚  
クロース 箱入  
定價 壹圓七拾錢  
送料 拾貳錢

近代藝術に基調となる繪畫の革命思潮は四項に大別して各流派の主張作家の各評傳遺憾なく譯載されてゐる。殊に著者の權威を以て世に問ふ後期印象派畫家評論は紛れもない個性の高唱を試みる。加ふるに四十枚の挿畫は讀者を驅つて奇蹟の天才ゴッホ、セザンヌ、又初め立方派未來派の色彩王國に忘我の人としやう。譯文は著者獨得の明快なる調子で押し通してゐる。挿畫に至ては多く言ふ必要もあるまい。兎も角早晚日本語で出来る可き筈であつた本が今出來たのである。

發行所 東京 東區 平河町 二〇九番 三陽堂 電話 二五八番 町



ロツバの他の大都會に行つても一寸見られぬそう  
な。音樂といへば誰もドイツを思ひ出す。芝居と  
いへば矢張り巴里の話をするけれど、ドイツの音  
樂も、名手は金に買はれてアメリカに渡り、巴里  
やベルリンの劇場も研究的の態度がないので、今  
ではロシヤの方がどうかすると、一步進んでゐる  
といふ様な話だ。ロシヤといふ國は實に不思議な  
國だ。

## K氏の家

淹留四日、今日はモスコウを出發しようといふ  
日になつて、午前某氏がK氏の家に尋ねて來た。

不思議にも夫は自分の舊友の兄弟であつて、同じ  
汽車で午後はモスコウを立つといふ。今日こそは  
愈々たつた一人て二日の旅路に向ふのかと思つて  
居たのに、世間といふものは實に面白いものであ  
る。

一體K氏の家は實に來客が多い。シベリア通過  
の日本人で、此家に寄つて厄介になつて行かぬ者  
は甚だ少ない。モスコウには領事館もある。二人

の案内人もゐる。けれども誰もいろ／＼な紹介や  
ら傳手を求めて此家に寄つて行く。若し芳名録で  
も備へて置いたら立派な宿屋の宿帳以上のものは  
出來やう。

K氏が領事館開館以前より此地に居るといふこ  
とも、通過の客の記憶に深くはいつてゐるので、誰  
もK氏の厄介になることになるのであらうと思  
ふ。けれどK氏は原商會の出張所を預つてゐて、  
實に忙しい人である。夫で一週に二回も三回も東  
西からくる御客様の送迎やら宿泊、見物の世話ま  
でせなければならぬのは實に氣の毒に感じた。

——自分も親類の片端といふわけで、三日も四日  
も厄介になつた一人ではあるけれど——之は勿論  
ロシヤの國內は特別に面倒で、不便であるからで  
はあるけれど、一體日本人は旅行に慣れてゐない  
で人に厄介になることをなんとも思はない。ヨー  
ロツバへ來ると何處のステーションへいつても日  
本の様に送迎の多い處はない。追々我々ももう少  
し旅行を簡單にする様にせねばなるまい。  
之に引きかへ領事館といふものは誠に吞氣なも

のである。モスコウにはたつた十數人の在留邦人があるだけで、夫も何かといふとⅤ氏の家に集つて来る。通過の邦人などは鼻もひつかけぬ——大官御通過の折は違ふ——領事殿は毎日晝寢をしててもすむ。夫て外交官といふものは、何も在留邦人の世話をするのが役目ではない、外交の手腕を振ふ大役目があるといふ。然らばロシヤ語でも研究して盛にロシヤ人と交際して御座るかと思へば、そうでもない様だ。或は寧ろなるべく早くこんな所は御免を被つて、パリーかロンドンへ逃げ出す準備をして御座る様である。之は何もモスコウに限つたことではない、何處の領事館でも——大公使館でも——同様である。成る程之では日本の外交も振はぬわけだ。一體外務省の方針が昔か

ら間違つてゐる。風采よりも、語學よりも、しつかりした人物を二十年でも、三十年でも、轉任させぬ位の方針で要所に駐在させたならば、もう少し面白いことが出来やう。歐米の外交官の表面ばかり——悪い所ばかり——眞似してゐては、到底いつになつても日本の外交は振ふわけはあるまい。自分はⅤ夫人に「若し自分に行政整理をさせたら、モスコウの領事館などは早速廢してしまつてⅤ氏に領事々務を囑托して、Ⅴ夫人に御化粧料をあげる」といつて笑つた。

自分は何もモスコウの領事殿に寸分の恨も抱いてゐるわけではない。豫て聞いて居つた通りの事實を、目のあたり見て、一寸此機會に失敬するものである。

其が美しい班のはいつた一本石だから驚く。そうして壁には名工の描いた宗教畫が、餘りに高くて薄暗くて、はつきり見えぬといへば、堂内の有様を想像することが出來よう。此御寺の前にアレキサンダー一世の紀念像が立てゝある。三世のに比べてはやゝ規模が小さいが、それでも東京ではとても見られない。其前に立つてゐる番兵が、一世當時の軍服を着てゐるのも面白い。兎に角斯様な思ひ切つた建築や、紀念像は、ロシヤの様な專制國でなくてはとも見られない。

モスコウの町に、もう一つ見逃すことの出來ない大きな建物がある。眞白なので何處からも目につく。夫は孤兒院だそうな。つい近くへは行く機會がなかつたが、大きなことは驚く。其他尙ほ名高いロシヤ風呂といふものがある。其獨特の設備も既に世に紹介されてゐるし、自分は行く機會がなかつたからこゝにははぶく。まだ二日や三日の見物では、モスコウを盡すといふわけにはいかないけれど、概していへばモスコウは統一のない所、東洋的な所、一―二世紀古い臭ひのする所

に言ふべからざる詩趣を覺えしめる。そうして之がロシヤでは最も近代的な都であると聞いて、何となくロシヤ人の性格を示す氣がする。

### サコリニツキの公園

モスコウ市街の見物も一通りはすみたれど、今日はサコリニツキの公園にでも行くべしと、F氏を案内に頼んで呉れたれば電車に乗つて行く。

公園といつても、町はづれにある大きな森林でいつの頃より斧鋏を加へない老樹の綠深き陰に縦横に道路を通じてあるだけのことなれど、殊に人工を加へないで田舎じみた別荘のそこゝに見ゆるのも面白い。柔かい下草を踏んで、人通りの少い奥の方へはいつて見ると、一鳥鳴かず山更に幽なりといった様な静けさ折々林の彼方の遊戲場からフットボールや、ローンテニスに興じてる聲が寂寞を破つてくるのでなければ、到底市外數歩の所にあるとは思はれない。夏は避暑地として、冬は氷滑りやスキーで賑はうそうである。

めぐり／＼て池のほとりに出ると、こゝにはカ

フエーもある。音樂を奏してゐる、ボートを浮べてゐる人もゐる。丁度日曜なので様々の装をした人達が散歩してゐる。こゝへ出ると矢張りヨーロッパだなどといふ感じが湧く。

一茶亭にはいると粗末な荒削の卓子を樹木の間にならべてあるだけ、瀧の川あたりの茶亭といつた様な氣がして、粗樸な主人の人なつかしい目付きも何んとなく親しみを覺えしめる。卓子の真中にサモワールをすえて、紅茶をのみながら話してゐると、やがて日も暮れてきたので宿へ歸つた。

## バルシヨイ座の一夕

ロシアは實に祭の多い國で、日曜の外に種々の神様の祭日がある。丁度此祭日や日曜にぶつかつたので、數多い博物館も見ることは出来なかつた。東京を出る時、N君が肩を叩いて「何よりも第一に藝術座を見られるのが羨ましい」といつた其藝術座も貸切りの日とやられて見る機會を失つた。(見た所が聲の見物解る筈はない)。幸ひK夫人の好意でバルシヨイ座の切符が得られたので、F氏に伴

はれて一夕の歡をつくすことが出来た。

芝居を二ツ三ツ外から見だが、いづれもギリシヤ式といふのだらう、圓柱と角ばつた家根の調和がよく出来てゐる。就中バルシヨイ座はモスコウ一流のオペラだといふことで、最も大きな建築だ、中は帝劇の二倍以上はあらう。そうしてギウツとつまつた觀客が、一寸帝劇では見られない人達ばかり。眩しい様に盛装した婦人の間にまじる男子は、皆イブニングなどを着てゐる。中にも目に立つのは正装の軍人で、之は到底日本では見られぬ體裁、ふいと自分は旅順口第一回攻撃の夜に將校連が、舞踏に夢中になつてゐたといふ話を思ひだした。

やがて幕が明く。ドン・キホーテをバレットに仕組んだもので、幕毎にいろ／＼背景の變化を見せて賑やかな舞踏をみせる。中にも何んとやらいふ女優のとりわけ目に立つ舞姿之一寸帝劇でも見られぬものであらう。そうして力強い音樂に至つてはいかにも貧弱な日本の音樂を嘲けられる様な氣がした。後できけば斯様なバレットは、ヨリ



# 悲しきまみ

伊藤 寥々

春の雪のしるき音して芽だちたる庭樹に麗ぐいたましき日や  
ことも無げに雪は降りけりさはあれど紅き木の芽は萎えて枯れけり  
ともすればこの天地になどてかく冷たきことの生れ來るらむ  
いみじきは心あのをく冷たさの事さながらに光り來る時  
あはれ皇太后宮かくろひませしこの日なり烏滸に静けきこゝろ悲しむ  
そのかみの麗はしかりしガリレアを今年も思ふこの日頃かな  
しのびくる若葉のかほり靄のいろ目ざめて仰ぐこの空ぞよき  
朝の日のそゝげる中に水盤の草のいのちのさやかにきかるゝ  
うつくしき矢車草をいけ居れる妻のうなじのはしき朝かな  
太陽のあかく鈍れることをのみ珍らしと見る悲しきまみかな

# さらばモスコウよ

廬

山

生

モスコウの市街はさすがにロシアの舊都だけあつて中々大きい。建物は無論、日本の倭少な小屋の様な家屋を見て居た目には、高荘なものが多くが、種々の様式がまざつてゐて、統一のない寧ろ古びた家の多いだけ、何ともいへぬ詩味がある。

道路も新しいものと舊いものと雜つてゐて、アスファルトの滑かな道よりも、浦鹽斯德て見た様なゴロ石を敷いた方が多く、自働車よりも、例の仁王の様な風をした馭者の悠々として走らせて行く馬車に似つかはしい。それから町の角に小さい御堂があつて、マリアの像を祭つてある所がある。

幾百となく蠟燭をともして、信心深い人達が十字を切つて禮拜して行く、自動車の上からも、馬車の上からも。かうなると基督教も佛教と全然異なる

所はない。次に町の中を歩いてる人達が、我々の想像してゐる所謂ロシア人ばかりでなく、種々の人種が雜つてゐて、寧ろ丈の比較的低い、髪も、瞳も、黒い東洋的の人が多いのも、何んとなく親しみを覺えしめる。けれどもモスコウは、ロシアの國內では最も近代的な所で、巴里の流行がドイツを飛び越してはいつて來るといはれてるだけに婀娜ッぽい婦人の姿もちよい／＼見受ける。さて此町で著しく目につくものは寺院で、數へつくせぬ堂塔伽藍の燦として、金色の光を放つに至つては、驚かざるを得ない。中にもサンソビーユール寺といふのは、ナポレオン撃退の紀念に建てたものとかで、すばらしい大きなものだ。堂内にはいつて見る、奈良の大佛殿にある様な大きな圓柱、

### かへつてきても

たつたひとりて出て行つて、

かへつて來ても…

かへつて來てもおなじこと、…  
否<sup>いや</sup>いや…

菜の花ぐもり、ちらり／＼と雨がふる、  
さきよりもつと淋しいこのるの圃に、

かへつて來ても自分の圃をたがやすに、  
助手のあらうはづはない、

ものほしそうな顔をして手を拱いて、  
ひとつしかない自分の圃を荒らすまい。

### しづかな涙のにじむやうに

しづかな涙のにじむやうに、

こころのおもてをくもらしてゆく、

青い水蒸氣のかげ…

他人のつめたい顔よりうける、

はげしい動亂のあらしは過ぎゆき、

ただ青い水蒸氣のかげ…

### 濃藍の海の色をそのままに

濃藍の海の色をそのままに、

峰より峰にそまりゆく夕ぐれのにほい…

やむとぎのないわたしの心臓の動悸のなかに、

餘り廣くもないわたしの職業のなかまのうちに、

けふも争ひと疑ひとぬたみがしのぎをけづる。

わたしは今はまだ明日を思ふ、明日だけがわたし

にかかる慰めとよろこびを與へるから…

わたしはかなり自然を愛してはゐるけれども、

猶それよりも今はもつと深く人間を愛したい。

### 涙

ひとりてゐると昔はよく流れたものだが、

此頃はすこしも涙などは流れあしない、

餘程の刺戟でも起らなければ、

夜着をしぼるやうなあんなあんないぢらしい、

なつかしいやさしい心などはもう起りあしない、

荒い荒い傲慢と剛情がいよ／＼強くなるとともに、

臆病と躊躇とがいつもそれに逆流をつくる、

わたしには破つて行きたいと思ふ心があるばかり

で、

自分の両手を振つて眞實に破つて行く力はない

……

わたしの心の奥に濃かににじむ愛の心をさへ、

からだと言葉をもつてあらはすことを知らな

いために、

ひとりで涙ばかり流してゐたが……

あんななつかしい涙などにはもう流れあしない。

## にがい唾

けふは一日わたしの口のなかににがい唾がたま  
る、……

新菊の白い花、路傍の青い草、はれ／＼しい海の

色、……

わたしの目には美しいかげがけふはしみ／＼映ら

ない、

口のなかにはにがい／＼唾がたまる……

にがい唾がたまるたんびに、

わたしはそれをどく／＼のみこんでゆく、

わたしの友よ、わたしのけふの幸福と自由のため

に、

わたしに關するすべてのとを干渉したまふ勿れ、

よしやわたしが陥穿の前に立せられたとしても、

そこに落ちる時にはわたししたつたひとりて落ちる

から、……

## 自我よ

わたしの自我よ、わたしはお前の奥の奥にある絶  
壁をさりくづさう、

わたしの惱める自我よ、わたしはお前の眞實を擱

まうために、お前の奥の奥にある絶壁をさりくづ

さう、

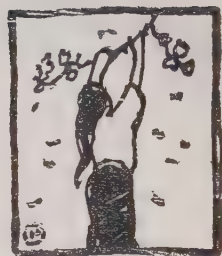
そしてわたしはお前の顔に壯嚴なる表情を見出さ

う、  
そして眞實をもつてお前を禮拜しやう。



デヨンはデユダの明放<sup>あけつはな</sup>しの少し動かない一眼を凝と視つめた。さうして一言も云はなかつた。彼れが其の注意を續けて居る中、デユダはこつそりと其處を逃げ出して、少し逡巡<sup>たぬら</sup>つたが、やがて戶外の黒暗々たる中へ消て仕舞つた。

満月が半空に上がった時、人々は戶外へ出た。耶蘇も戶外へ出でられた。デユダは自分の臥床<sup>ねどこ</sup>を按排した低い屋根裏から人々の戶外へ出懸<sup>でかけ</sup>るのを見た。月の光明<sup>ひかり</sup>で、何の人の白い姿形<sup>すがた</sup>も明るく明白と寫つた。さうして歩行すると云ふよりも寧ろ前面にある自分の黒き影へ滑り込むやうに見えた。すると急に其の人の姿が暗黒へ消失せて、さうして其の音聲のみが聞えるやうになつた。さうして人々が今一度月光の下に明瞭<sup>はつきり</sup>と表はれた時には、宛かも白き壁や黒き影、乃至あらゆるものが、夜の澄徹せる大氣中に於いてのやうに——彼等は沈黙<sup>なまつ</sup>て居るやうに見えた。殆んど總ての人が熟睡して居る頃、デユダは耶蘇の歸宅せられた靜な氣配を聞いた。家の内外とも靜寂として居つた。牡鷄<sup>をんどり</sup>が鳴いた。驢馬<sup>ねむり</sup>が睡眠を妨げられたかして、宛然<sup>なるで</sup>、日中のやうに、高かく、退屈したやうに嘶いた。さうして據所ないと云つたやうに徐々と沈黙つて仕舞つた。デユダは少しも眠むらなかつた。併し極めて竊りと耳を聳てゝ居た。月光は彼れの半面を照らした。さうして妙な風に彼れの明放<sup>あけつはな</sup>なしの大きな目に反映した。——宛も湖上の氷付た水面へのやうに。俄然彼れは何事か記憶出した。さうして倉皇<sup>いそがわ</sup>しく咳をせいて、それから毛むくぢやらの手で何處と云つて少しも病所の無い胸部を摩擦つた。ひよつかすると誰れしら未だ起きて居つて、さうして何をデユダが考へて居るかと云ふことを竊聞<sup>たひぎ</sup>して居るかも知れん！（一、終り）



雨

西灘より

佐藤 清

ひとりの旅の窓に、  
春の雨がさびしくふりかかる。

わたしのかよわいのちの上に、

くらいかけがかすかに落ちてふるへる。

心をとらなほしてしばらくそれを見つめてゐると

湧さちる泉の上に亂れ落ちる雨を見るやうに、

かよわいわたしのいのちもひた／＼と強みを帯び

て、

人知れず満ちくる力をひとり味ふ……

窓

雨がふる——海に、人家に、

小さい湖水に、畑の青い麥の穂に……

麥の穂に雨がふる、黒い土にも、

籬根にちかい桃の花にも、

湖水の上に雨がふる、土手の草にも、

うすぐらい反射の水をとりまいて、

雲母のやうな海の上に雨がふる、よくは見えねど、

いや、いや、海にかさなる空の上にも……

雨がふる、けふりの出ない煙筒に、

街道に添ふ人家のうへにも、うすぐらく……

ざる多くの足、空々らしい沈靜、——を追懷した。——や！怪物は飛び上つた！そら附着いた！そら纏結いた！のしかゝつて、さうして血汁を吸出す……少しもあの兩眼を瞬たさもしないで。何うしたんだらう？と見れば、耶蘇は沈黙つて靜坐して居られる。彼れは溫味の含もつて居る嘲をビイタアに呉れて、眉間を顰めて微笑して居られる。ビイタアはまだ章魚に就いて色々大袈裟な談話を續けて居る。すると一人づゝ徒弟達は、さも氣まりの惡るさうな面持をして、デユダの傍へ行つて、明輩同士の打解けた會話を始めたには始めたが——皆言ひ合したやうに、誰れも此れも、倉皇しげに、恰好の惡い態度をして後邊へと引き退つた。

只一人ツエベイの忤のデヨンのみは、執拗にもデユダに向つて一言も云はぬ。それからトオマスはデユダに對して何にか挨拶をせうかせまいかと躊躇逡巡して居る。が未だ決心が付かぬかして思案最中である。彼れは基督とデユダとが一緒に坐をトめて居るのを凝と注視して居る。さうして崇高なる神の美と古怪なる醜惡、愛に充滿して居る人と並はづれて大きな、少しも動かない、惛然とした貪婪な目を有して居る章魚との不思議なる接近對照が、不可解なる謎として彼れの心を壓迫した。彼れは力を含めて、其の滑々とした高い前額を顰めた。さうしてその双眸を渾身の力を含めつて緊張させた。彼れは左様したら、もつと好く周圍の事柄を明瞭に認識することが出来るだらうと想つたが。依然デユダは、實際に入つの間斷なく搖動して居る八足の章魚でありとの印象を受けるに止まつた。併し實際、そんな馬鹿々々しいことは無い！トオマスはよくそれを會得して居つたが、猶彼れは執拗にも前のやうに其の凝視を續けて居つた。

デユダは渾身の勇氣を集注した。彼れは今迄曲げおつた兩脛をまつすぐに伸ばし、緊張させて置いた。顎骨の筋肉を緩るめ、さうして精々注意して、かの凹凸の多い頭顱を明所へ突き出すべく始めた。無論、其の頭顱の不恰好のことは、今迄誰れにも了解して居つたのだが、デユダはそれが從來肉眼もて視ることの出来ぬ、或る厚い微妙なる面紗で透徹するとの出来ぬやうに蔽蔽されて居ると想像して居つた。併し今や宛かも暗黒な溝渠の裡から這出したものゝやうに、明瞭と彼れは自分の頭蓋と其の兩眼との不思議なる型をして居るのを自覺した。彼れは一寸躊躇つたが、斷然と自己の顔面の全部を暴露した。別に不思議な事も起らなかつた。ビイターは何處かへ出て行つた。耶蘇は手で頭部を支持へられて、さうして日焦のした双足をあちらこちらへと揺かしながら、默者に耽けつて居られた。徒弟達は何にか互ひ／＼に話し合つて居た。獨りトオマスのみは、寸法を取りにかゝつて居る裁縫師の注意を以て、嚴確にデユダを監視して居つた。デユダは微笑した。トオマスは其の微笑に應じなかつた。併し彼れはデユダの一舉一動を其の注視より洩らすまいと心懸て居つた故に、デユダの己れに對して試みた微笑は無論知つて居つた。併し黙つて視つて居つた。突然何にか不愉快の事がデユダの顔面の半面を畏怖した。その美にして純潔なる容貌と又雪白なる良心との上に一點の染汚だに無き愛弟のデヨンは、冷やかではあるが、その美しい目で、暗處から凝と彼れを注視して居つたのだ。他人と同様に歩行の出来る癖にデユダがデヨンの側に行つた時は、宛かも石と棒とを受けたる野ら犬のやうに索づられて行くやうな心地がした。「君は何故さう沈黙て居る。君の言葉は線細工の銀盤に盛られた黄金の寶果のやうだ。何卒、この哀れなるデユダに一つ惠興んで呉れ—



舞ふ。」

ビイタアが耶蘇の面をちらと視た時、耶蘇の目も此方を視られたもんだから、彼れは倉皇しく立ち上つた。「一寸待て」と彼れはデヨンに云つた。

今一度、彼れは耶蘇の面を視た。彼れは山顛から墜落るやうな險しい氣配で、デユダに近づいた。さうしてさも寛厚とした沈靜なる態度を以つて、

「さあ、此方へ私達と一緒に來なさい」と云ひながら、彼れはデユダの曲つて居る脊部を輕るくたたいた。さうして師父の方を態ざと見ないで、(無論、彼れは耶蘇の目が自分の上へ注がれて居るのを知りながら)斷然と次の言葉を太い音聲で付け加へた。その云ひ方は宛かも水が空氣を排斥するやうに一切の抗議を排斥した。

「一體、君がそんな醜惡い顔色をして居るのは、まあ何うでも可いことなんだ。早い話が、我々が漁獵に出かけて網を下ろす、時偶には君の面貌などよりもつとくつと醜惡い畏怖しい妖怪がかゝつて來るとがある。併し其魚が外見に似合ず、滅法美味く食へることがある。なあ己達神様の漁師としちや、其魚等が縱令へ刺棘があるからつと云つて又一目だからと云つて、只捨て、仕舞ふ理屈はない。私は一度タイレ(Tyre)で章魚を見たことがある。其奴はね、土地の漁人が捕獲したのさ。私は實に驚いちやつて、逃げ出さうと爲たんだ。ところが、土地の奴等は臆病者だつて私のことを嘲弄するのさ。それから少許食つて見なさいつて、私に少許ばかり呉れたのさ。私はもつと澤山呉れつて頼んだのさ——だつて滅法美味いもんだつたからね。ねえ御師匠様！貴方お記憶へてお居てせう。私がこ

の說話はなしを貴方あなたにしたのは。さうして貴方も御笑ひなすつた。そこでデユダ！君は宛然まろで、章魚たてだよ——  
半面の方丈は——。

と云つて、自分の冗談に満足して、大きな音聲で昂笑した。元來、此の漢子まことの談話はなしをする時には、其の口を衝ついて出る言葉は、實に力強くして、宛然まろで釘と一緒に打込まれたやうに反響する。又彼れが運動うごいたり又何にか動作しごとをする時には、その響きは遙るか遠方でも聞くことが出来る。さうして、何んな無感覺の事物たりとも之れに反響を起させる位だ。石甃いしだ、みは彼れの足下に踏み立てられると、磊がら々と動き出す。又戸障子の類はがた／＼と震撼する。其の周圍の空氣は驚怖を以つて震動されて怒號叫喚する。山頂に直立つて大聲を發するとすると、其の高山の奥底から木精返しを起させる。それから昧爽に湖上へ出て漁獵すさどをする場合には、彼れは未だ半ば睡眠ねむつて居る、滑々なめらかな水上へ小舟を漕ぎ廻ぐらして、極く希薄な朱明の光線をして無理やりに金色の細波をゆらつかせる。

かゝる爲人ひと、なり、かゝる行爲をする故に、ビイターは人から愛された。他の人々の面上には猶夜の暗黒なる陰影が蔽ひかぶさつて居る時でも、彼れの大きな岩疊なる頭顱づいり、開けばなしの胸部、さうして自由の發達に任せた太ふとく長い兩腕には、既に朝暉の光耀が輝いて居る。前に述べたビイターの談話は——確たしかかに耶蘇イエスに嘉納ダイナされたらしく見えるからして、今迄の何となく人を壓迫するやうな重くるしい空氣は自然ひとりでに消滅して仕舞つた。併し徒弟の中で、海邊に行つて實際正物の章魚を一目見たことのある人々は、其の極めて古怪な物象が、さも何んでも無いやうに、輕々しく此の新附の徒弟に當嵌められたには少なからず心配した。此等の人々はかの怪物の並はづれた大きな目、貪婪飽くことを知ら

爲にするところがあつてか、彼れは弱々しく振舞つた。デユダの音聲はとり止めのない不透明のものであつた。或る時には、それは強く男子らしく聞えるが、又或る時は甲高な裏枯れた音聲の、宛かも老女房の亭主を叱咤するそのやうであつた。其の裏枯れた調子が實に何んとも云へない不愉快な音響を人の鼓膜にひびかせる。時によると、随分人は彼れの言葉を腐蝕して居る木片と同様に耳底からひんめぐりたい感を起す。彼れの短い赤い頭髮は、その古怪な型をして居る頭蓋を隠蔽することが出来ぬ。其の頭蓋は襟のぼんのくどの處を鋭利なる刀物で二重に切裂き、さうして又それを後で結び合したかのやうに見える。であるからして、其の頭顱は一見したところ、四の部分に區別されてある。人に何にとなく不安心な——否驚怖の感を興させる。何故と云ふに、かかる頭蓋の裡面には、必ず静安や調和と云ふものは存在して居ないのみならず、それと反對に、屹度其處には血腥き残酷な争鬭の響が聞えるやうに想はしめるからだ。彼れの顔面も又頭顱と同様に二つの側面を有して居る。其の純黒な鋭い爛々たる一眼を有してゐる一面は、自由自在に屈伸運動することが出来、さうして直に無數の皺を波立たせる。又其の一面は、一點の皺も無く、のつぺりとして、圓滑くくて、他の一面と同じ大きさであるけれども、その始終開いたまゝの盲目の所爲で、馬鹿に偉大に看える。此の一眼は白つぽい薄い膜で蔽はれて居つて、晝夜ともに開放しのみして明暗ともに同様なる無關心を以つて之れを迎へて居る。併し其の直ぐ隣には極めて活潑な鋭利な仲間があるに依つて、それは決して全然盲目とは受けとられなかつた。

喜悅又は或る刺撃に衝動されて痙攣を作した時にあたつては、デユダはその健全な方の目を閉じ、

さうして頭顱<sup>かうべ</sup>を振る時には、他の盲目の方はそれと同様に動き、さうして沈黙<sup>だま</sup>つて目的もなく空を凝視<sup>つめ</sup>て居る。よく物事<sup>ものごと</sup>を了解洞察することの出来ぬ人々ですらも、デユダに對して居る時は、かう云ふ風な人間は決して善事をせぬ人であると云ふ鑒定を付けることが出来る。

併し耶蘇<sup>イエサス</sup>は彼れを自分の側近く召かれて、さうして一度は自分のすぐ隣席<sup>となり</sup>へ座を與へられたことがあつた。デヨン（かの愛弟なる）はさも不潔な物が近づいてでも來たかのやうに、はつと立上<sup>たちあ</sup>つて遙か離れて坐を卜めた。さうして師を愛慕して居る他の徒弟達も不得心な面持をしつゝ、下を向いて仕舞つた。併しデユダは平氣で坐つて居つて、さうして、頭顱<sup>かうべ</sup>を左右へかはる、く、かたむけながら、例の細い裏枯れた聲音<sup>こはね</sup>で其の身の病身であることの愚痴を並らべた。それから夜になると胸部が痛むと云ふことや、又は小高い岡の上へでも登り降りする際には、息切がすることとか、又は絶壁の上へても直立つた時には、氣が朦朧として來て、やゝもすると崖の下へ飛込みたくなるやうな馬鹿々々しい考が浮んで來て、之れを制するに困難を感じるなどと云ふ取止めのない愚痴をこぼす。それから病氣と云ふものは、偶然に發するのではなくして、これは永久の大法則の命令に照應せぬ行爲の結果であるとして云ふことを宛かも了解せぬかして、其他種々<sup>いろいろ</sup>と馬鹿々々しい不稽な事柄を持ち出だす。彼れはかう云ふ話を衆人の沈黙と不得心の面持との中に平然として、大きい手の平で胸部<sup>むね</sup>を摩擦<sup>あす</sup>りながら續ける。さうしてさも苦痛<sup>くる</sup>しげに咳<sup>せき</sup>さへして見せる。

デヨンは師の方を見ないで、自分と仲親<sup>なかつし</sup>のサイモン、ヒイタアに耳語<sup>ささや</sup>いた。

「君！あの虚言者<sup>うそつ</sup>には未だ愛想が盡きないのか、私はもう我慢が出來ん。私はもう他處<sup>よそ</sup>へ行つて仕



なざる御思召である、と彼等は付け加へる。

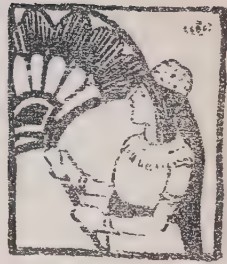
徒弟達の中では、誰れも此の醜惡い狐色の頭髮をした一個の猶太人（一寸斷つて置く。十二使徒の中、デユダ（た）が始めて基督の前に出た時は何時であつたかと云ふことを記憶ては居なかつた。併しデユダの方では、長日月の間、基督と其の弟子達の足跡を尋ねてあるいたのだ。さうして彼等の談話の仲間に加つたり、彼等の爲に細事を達してやつたり、或は又丁寧に辭儀をしたり、微笑を以つて迎へたりして師弟の機嫌をとらんと努めたのだ。時によると、徒弟達も全然彼れに親み熟れることがある。かう云ふ時には、彼れは彼等のものぐささうな凝視を逸れることが出来る。これに反して又或る時には、彼れは故意と彼等の耳目を刺撃するやうに突然と出張つて、彼等をして己れをば何にか普通以上に醜惡な、不忠實な、攢斥すべきものゝやうに焦心せしむることがある。かう云ふ場合には、彼等は頗る苛酷しい言葉を使用つて彼れを放逐する。すると彼れは一兩日の間は姿を隠すけれども、直に片目盲たる妖怪の技倆をあらはして、親切めいた、莞爾々々した調子で、世辭をふりまきながら突然と再現れる。

無論徒弟達の或る者の心中には、このデユダの基督の身近く近付きたいと云ふ所望の下には、何にか或る秘密な念願——或る邪惡狠毒な計畫が藏されて居ると云ふことが解つて居つた。

併しながら耶穌は徒弟達の忠告を納れられなかつた。彼等の豫言的の言葉は師の耳へは達しなかつた。かの極めて平靜沈着なる反抗の精神を以つて、——此の精神が平生自然に彼れをして世上の無頼漢や醜陋なる者共を愛好なさしめるのだ——彼れは斷然と自づから進んで、デユダの希望を納れて、

彼れを十二使徒の一人に加へられた。徒弟達は動搖した。さうして、い、い、いと口の中くちで不平を訴へた。だが耶穌は西山に控づく日の方に面を向けて、さうして茫然として——或は彼等の怨言かことに——或は又他の事に——耳を傾けて居られた。此の十日の間と云ふものは少しも風が吹かなかつた。さうして清朝なる大氣は、靜寂しづかに些ちとの物音ものおともなく、今迄と同様おなじように無運動と不變とを續けた。此の清く澄み渡れる大氣の底には、人や動物や乃至鳥類の種々雜々なる此の十日の間の鳴咽歎聲や、歡喜悅樂の歌謠や、祈禱や、呪詛等がやゝ保存されて居るやうに想れる。さうしてこれらの結晶したる音聲の爲に、空氣が斯の如く重く人を壓迫し、さうして見るべからざるの生を以つて浸濤されて居るやうに見える。今や太陽は既に西の山の端はに沈づまんとして居る。それは西の空を一面に火のやうに燃やし立てて、一團の火焰のやうに重々しく下の方へ墜落して行く。地上のあらゆるものは悉皆すべて其の方へ面を向けて居る。耶穌の駒こずみた面貌かほ、家々の壁、さては樹木の葉の如き——あらゆるものは、唯々としてかの遠方の可畏おそろしき沈靜の炫耀かがやきに反映して居る。今や白壁は赤壁と變じ、白き丘陵の上に建設たてられたる白き都も紅くれないの都に化せられた。

デユタの耶穌デイススの徒弟になりたいと云つて來たのは丁度其の時だつた！彼れは低く頭を下げ、腰を曲げ、さうして細心に又抑々よくとして彼れの醜惡みにくい凹凸おぼこの多い頭顱を前面へ突出してやつて來た。彼れはせて居つたが、自長せいは相當に高かつた。殆んど耶穌デイススと同じ位な高さであつた。併し耶穌デイススは歩行あるかれる際には、常に何事をか沈思默考しんしもくかうされる習癖があるからして、平生いっせい少しく屈身くつみになられる故、いくらか實際よりは低く見えられた。デユタは誰れの目にもかなり、壯健で骨組も岩疊に見えた。併し何にか



# 猶太以斯加略

(L. N. Andreyev : Gudas Iscariot)

千葉 掬香  
中根 一郎 共譯

—

耶穌基督はデユダス・イスカリオトが甚だ不良い風評のある漢子であると云ふことゝ、さうして彼れに關いては警戒をしなければならぬと云ふことゝに就いて屢々注意を受けられた。彼れの徒弟の中で、曾つて猶太に行つたことのある人々はよく彼れのことを知つて居つた。

又他の徒弟達も種々の方面よりして彼れの身上に就いて多ほくの噂を聞いた。さうして一人として彼れのことをよく云ふものは無かつた。善き人達が彼れの噂をする場合には、彼れを強慾な、狡猾なさうして偽善者で虚言を云ふ僻のある漢子と云つた。又不良らぬ連中が彼れのことを人から訊かれた時には彼等は次のやうな甚だしい言葉で彼れを誹謗した。

彼奴はいつも我々の間に立つちや惡事ばかり爲やあがるんです」とと彼等は云つて、さうしてさも憎らしさうに唾液を吐いた。「彼奴はいつも何にか自分一人で秘密に考へ込んで居るんです。彼奴は蝸の

やうにそうつと屋内へ潜り込みやがつて、そのくせ出る時には、聞えよがしの大きな音をさせやがるんです。ねえ、竊盜の間にも友達がありや、又盜賊の間にも伴侶がある。虚言者でさへも女房や子供がありまさら。さうして其奴達には眞實の事を話しまさあ。ところがデユダと来ちやあ、泥棒でも又眞面目の人間へ向つてても同様に冷笑を爲やあがる。——一體己のれの竊盜の事は棚へ上げて置きやがつて、おまけに彼奴は猶太中で、此上なし飛切りの醜惡い貌面をして居る野郎です。え、無論彼奴は我々の伴侶ぢやありません。あの狐色の頭髮をして居やあがるデユダス・イスカリオトの野郎め！」と不良い手合は答へる。かう云ふ返事をする手合とイスカリオトの間には、善き人々の目から看ると、別段これと云ふ大した差別相違も無い。猶、此の手合の云ふところに依ると、デユダは餘程以前に女房を捨てゝ仕舞つたのだ。さうして其の女は貧窮と艱難とに攻められて、デユタの遺して置いたほんの少し許りの荒廢て居る田畠を耕やして、細々とその生命を續がうと苦るしんで居るさうだ。それからデユダは長日月の間、目的なしに一つの處から他の處へ行つて、——段々遠方へ海から海を越して渡り廻つて、——種々雑多な人々の中に立混り、さうして何處でも行つた箇處々々では、虚言をついたり又は人を馬鹿にするやうな面貌をして見せたり、又はかのきよくした竊盜眸で何にか掘出物を爲たり、さうして其の跡へは極つて憎惡の念と争鬭の種子とを置土産にして、俄然に影を隠くして仕舞ふのだ。其の上に彼れはうるさい程人に向つて根掘り葉掘り物訊問をする。何とも云様のない憎らしい虚言つきの一眼の妖怪だ。それに彼れには子供と云ふ者が一人もない。これは彼れが悪黨だと云ふかてゝ加へた一つの好い證據である。つまり神様が其様云ふ者の雙を世間へ遺さないやうに



the author assumes that although the ancient patriarch depicted in the Bible has ceased from earth, his children and grand-children and their innumerable descendants, scattered throughout the world, in western Asia, the region of the Nile and Europe, and converts to new doctrines, (Israelites in Palestine, Christians in the west, Musselmans in Arabia,) have yet preserved through the centuries the sentiment of veneration for their common ancestor, Job. They have never ceased to cherish the story of his sufferings and spiritual experiences or to recall his discussions with his devout friends Eliphaz, Bildad and Zophar, all of whose names are perpetuated in their family history. One of these descendants, a modern Job, dwelt in a commercial city of the 19th century. His wealth and influence paralleled those of his Biblical ancestor; his vessels thronged the ocean, his representatives were to be found in every world-centre of business and his warehouses overflowed with rare and precious things. His enlightend patronage of art and letters brought him celebrity and honor, while his lofty personal character and beautiful homelife were still deeper sources of happiness. Suddenly, like his prototype in the Old Testament, he meets with a series of misfortunes and disasters. Stroke after stroke he loses in the short space of a few years his three sons and all his possessions. Retreating, crushed and in sorrow, to a modest dwelling, a new trial of his faith awaits him. His only daughter dies. For long days he remains stricken, dumb, without food or sleep, cut off from human companionship and sympathy, weeping and in despair. An old servant, Elihu, waits upon him in his solitude and misery.

After many days there come to visit him his three friends Eliphaz, Bildad and Zophar. They find him seated on a bench before the entrance of his dwelling; his bowed head supported between his hands. Silently, respectful of his sorrow, unwilling to intrude upon

## The Modern Job, the Son of Job.

The Rev. Etienne Giran, pastor of the French Walloon Church in Amsterdam, is one of the most scholarly, forceful and brilliant exponents of free and liberal Christianity in Europe, an eloquent preacher and a writer of literary distinction and charm. Keen in his critical insight, logical and fearless in his exposition of historical and philosophical truth, his colleagues in French Protestantism do not refuse him the tribute of their admiration, while they are often made uneasy by his advanced opinions and radical affirmations in the domain of religion and ethics. A number of interesting and meritorious books have already been produced by M. Giran, who is still a comparatively young man and has not reached the maturity of his intellectual and literary powers. Among his published writings are *Paroles de Sincérité*, a collection of discourses; *Le Christianisme Progressif*, an essay on Christianity and the modern conscience; *Le Christianisme Progressif et la Religion de L'Esprit*, a series of theses contributed to the Fifth International Congress of Free Christians at Berlin, in which the religion of the Spirit is affirmed against narrow Christologies and dogmatic assumptions; *Jesus de Nazareth*, a compact review of the career and teachings of Jesus in the light of modern historical and critical science, a work of much merit which the British and Foreign Unitarian Association has printed in an English translation. A recent work of importance, a historical vindication of Sebastien Castellion, the religious liberal of the 16th century, is entitled to fuller review hereafter.

Our present purpose is to call attention to a little volume of M. Giran of a philosophical-religious character entitled, *Job, Fils de Job*, an essay in the form of a drama on the problems of evil.\* In this work

---

\* *Job Fils De Job*, Essai Sur Le Probleme Du Mal. Troisieme Edition, pp. 147, Fischbacher, Paris.

the world. Human suffering is not his work. He wishes with all his heart to deliver man from pain and anguish. He works unceasingly to this end. But he is not an all-powerful God. Such a one would at once put an end to the in justice and evil of the world. But he is what is better; an all-loving God. The evil is not from him. It is incarnated in the nature of things. It reveals a world power that makes for unrighteousness and injustice, for pain and suffering. Christianity calls this power Satan. God can do no evil. He strives for us; is anguished for our sakes. He labors by our side for the ultimate liberation of souls. The cross demonstrates the impotence of God, but it also demonstrates his invincible love. This suffering God, this vanquished God, speaks to our heart. If we did not believe this of him we should despair of the ultimate victory of the Good.

The author here refers in a foot-note to Pastor Wilfred Monod's work "*Aux Croyants et œuvre Athées*," in which this view of Evil and Deity finds eloquent expression.

The third friend, Zophar, in his turn takes the word, and to his interpretation of the problem nearly half of the book is devoted. He opposes the theory of Eliphaz which legitimizes the apparent abstention of God by invoking his mysterious designs, and of Bildad who would excuse God's seeming indifference by affirming his impotence. He thinks Job does not justly ask for the divine intervention in his behalf. Miracles do not happen. Such an intervention as the heart often, in its weakness, desires of God would be a violation of the normal course, the appointed laws of nature. These laws God himself observes. There are limits even to his omnipotence. He cannot pronounce evil good, or confound the false with the true, or act in contravention of his own character or reverse himself. To say, however, that God is impotent, is to claim to know his nature and will, and that no finite being can do. We must believe him to be all-powerful and his will to be perfect. Why sin and evil and pain are a constituent part of the world we do not know. The origin of evil is equally hidden from us. Whether God is immanent or transcendent, who can tell? It suffices for us to know that he is all perfect, that he is Our Father. The evil in the world

his grief with vain words, they sit down and await his word. The silence is at length broken by the afflicted man, who speaks to them in moving terms of his distressing experiences, his loss of faith in God and a righteous ordering of the world. It is the same eternal problem of suffering of which his ancestor Job discourses in the Old Testament, but encountered under new and modern conditions and with a changed conception of the universe which demands a more satisfying interpretation of the Universe and the relation to it of both God and man, and a more rational philosophy of the mystery of good and evil.

With much expository skill and spiritual insight the author makes each of the three friends who now in turn, as in the Old Testament, essay to answer the challenge Job has made to their intelligence and sympathy, the representative of one of the schools of religious thought prevailing in Christendom at the present day.

First Eliphaz proceeds to unfold the current Christian and theological explanation of the problem of evil and the solace it seeks to bring to suffering and bereaved souls. An infinite and loving God has mysteriously ordained the evil to afflict us for our higher good. Therefore we must patiently endure it without murmur or misdoubt, as a discipline for our characters and for our eternal well-being. Job demurs to this view as only a method of evading the issue presented and of relieving both God and man from responsibility for it. Finally Eliphaz points him to the cross, to the mediatorial and atoning sacrifice of Christ, as the true redemption from evil and sin, and to the immortality of the soul as affording opportunity for the vindication of God's dealing with man, and man's eternal recompense for present suffering.

But Job remains unconvinced, and bitter in his arraignment of the ordering of things. Hence a second friend, Bildad, presents another line of reasoning. God does not wish or ordain the evil in



此の青年にやつた手紙の中に、「私がつと早く貴君を知らなかつたことは、悲しむべきことである。何故一生貴君に仕へることが出来ないか、私の未來は最早少ない。如何なるものも、吾等の友情を壞すことが出来ない」、といふやうなパッシヨネエトな文字を使つて、此の青年を崇拜し之れによりて慰めを得て居た。

ガバリエルは彼が死ぬるまで、彼の友として、死したる後も亦遺言を繼承した。

これを約言すれば大體に於て、世の中のことはこれを眞實な天才偉人の一生に求めねばならぬと思ふ。

世には虚偽が多い、天才の生活には虚偽が無い天才は眞理を觀る。眞の男性は偉人天才に求めら

れる。

「久遠の女性」は天才の一生に求めねばならぬ。何故なれば女性の特質を發揮させるものは天才だからである。ダンテのピアトリチエに於けるが如く、ダビンチのデオコンダに於けるが如く、ミケランヂエロのピアトリチエに於けるが如く、吾々は天才の一生中に「久遠の女性」を求めることが出来る。

女性の特質は本能とパッシヨンであつて、一種のフェータリズムのシンボルである。靜かなフェタリズムはキリスト教の特徴である。キリスト教が eternal-woman と謂ふ優しい態度を根底としてゐるのは、他宗教と異なる點であつて、數千年の間、人心を引いた所以である。(早大基督教青年會講演會)  
(文責在記者)

is therefore justified. It has its place and part and purpose. The world is not finished ; it is in the making. Its birth-throes are a part of its growth. All things are in movement and in evolution. Evil is undeveloped good. There is in reality no problem of evil, only a problem of sensation ; not what happens to us, but how we meet it is the real issue. There is an eternal dualism in man and in the nature of things, which, perhaps, is only the double aspect of a higher and unknown unity. God is ever true to himself. His will never varies and is perfect, his government is altogether righteous. He is the source of order, the fount of life, intelligence, beauty, goodness. He makes use of the blind, antagonistic, chaotic forces of nature, to develop the human soul and assure in it the victory of right over wrong, of good over evil, and of God over all. It is for us to make a wise choice of the providential instruments God has placed at our disposal and become copartners with him in building up a universe. When we devote ourselves to the good and the true it is God with us ; God in us, that gives us strength and assures the victory. Once men believed that to ameliorate the lot of man one must modify the will of God. Today we understand that it is the will of man that must be modified and brought into accord with the Divine Will and Purpose ; for in this alone true beatitude is to be found.

The discussion ends with the departure of the three friendly disputants and a kindly word from the aged survivor Elihu to his master. The latter, who has invited Zophar to come to him again on the morrow, sits in the evening sunshine. For the first time in many days Job finds the setting rays of the sun peace-bringing and beautiful. In opening his eyes to this outward loveliness God is revealing to him those spiritual treasures of which blind circumstances had for the time deprived him.

This drama of man's soul life, so strikingly conceived and depicted, is worthy of a large reading. It has reached a third edition in France. We understand that an English version has been made and is now awaiting a publisher.

C. W. Wendte

---

意志の克つた一生を以て、調和した藝術を作り、生活を作つた。

然るにミケランヂエロは生れながらの厭世家で女性的の人である。一生を通して死に度い／＼と云つて、而も自分の大きな天才に驅られ乍ら九十一歳まで生き延びた。此の二人共、一生涯清い生活を送り、妻を持たずに暮らしたのである。

「久遠の女性」といふ物が彼等の生活の中に顯れて、孤獨の天才を慰め、彼等の意志を溫め、其の天才を養ふに充分の力を與へた。

ベアトリチエはダンテの一生涯を慰めた女性である。音楽家ベートーベンにも戀人がある。之も「久遠の女性」の一つである。ダビンチの生活には有名なジオコンダが顯れて彼の晩年を飾つた。彼はジオコンダの肖像を四年を費して完成した。何故斯の如き努力が出来たといふに彼の女に對するインスピレーションが彼を驅つて此大作を爲さしめた。天才の一生は孤獨である。孤獨の境遇に顯れた女性は、彼にとりてどれ丈の慰めであり勵みであるかは想像が出来ぬ。

メレデコスキイの Forerunner に克く出ているレオナルドダビンチが晩年に對し、不遇なる生活を送り、最後に故郷フロレンスに歸りて、質素の生活をしてゐる時に、デオコンダと知り合ひになつた。デオコンダは或るフロレンスの有名な貴族の妻で三十餘才の人であつた。而してデオコンダが毎日の如くに畫室にやつて來て、一時間二時間もモデルになつて居る間は、彼が一生に得たる幸福な時間であつた。彼はデオコンダを慰める爲、其庭に泉水を造り、又は其水が落ちて硝子に當り微かな音楽を出すやうなものを考へて、彼を慰めたり、十字架の繪を與へて、彼の女を喜ばしたりした。又遠國から色々な音楽師を呼んで、彼の女に聞かしたりして、彼の女の顔の表顯の一つをも遁すまいとして、四年の歲月を費して完成した。彼の女自分は學もなく智も優れないが、ダビンチの天才の目を通して、始めて彼の女の美しい性格が顯れ世界的の繪をなさしめたのだ。

レオナルドから稍後れて、彫刻の天才ミケラン

ヂエロにも、同じ様な女性が顯れた。彼は九十餘年の間慰め人もなく淋しい生活を送つて來た。六十四歳に達し羅馬で或女に逢つた。其の女は四十餘歳で有名な貴族の妻であつた。夫が種々の放埒して彼の女を苦しめたにも係らず、忠實に夫の爲めに四十幾年を送つた。彼の女は夫の死後宗教に行つて自身を慰めた。

容貌の美しい女ではないが學問があり、性格が美しい、潔い女であつた。ミケランヂエロを常に慰め、それが爲め彼をして種々の彫刻をなさしめた。恰度其の時彼は六十六歳であつた。斯様に晩年に温い泉の様な同情者を一生に初めて獲た所の喜び、或は之れに伴ふ哀しみは想像することが出来る。彼の女は彼をして傑作をなさしめたのみならず、彼をして伊太利初めて以來の詩を作らせた。

斯く天才の一生には「久遠の女性」が表れて、彼を慰め勵ませる現象が表はれる。而して「久遠の女性」は自分自身で表はすことが出来ないが、男性の力に依つて初めて表はれるのである。いま一

つ天才の一生で、面白いのは、女性が表はれぬ時は、眉目秀麗な若い青年が表はれて彼を慰めることである。此時は男が變態をとり、「久遠の女性」と同じ用をなす。ソクラテスが晩年にヘドンを愛し彼の美髪を撫て靈魂不滅を説き乍ら、毒を呑んで死んだ。彼のヘドンに對する時の情は、一種の女性として愛する情があつた。

ミケランヂエロ、ダビンチにも之がある。ダビンチは眉目秀麗な弟子を愛した、初めはサライを愛した。彼の爲めに晩年のフロレンスの生活は、一週間に一フロリンと云ふ質素な生活をしたにも係らず、三フロリンにて薔薇色の新らしいマントルを作り、其の妹の嫁入り時には繪を賣つて十三フロリン出して結婚道具を買つてやつた。散歩の時には常に彼を連れ、死ぬるまで傍に置いた。彼がレオナルドに對するは一種の戀人の如き形をとつた。それで世の中の疑をうけた。

ミケランヂエロは六十四になつた時、彼を慰めた青年がある。それは彼が伊太利に住んだ時、貴族の青年ガバリエルを知り、彼を崇拜した。彼が





## 久遠の女性

中 澤 臨 川

「久遠の女性」はゲーテが初めて言つた言葉で、それが今日では世界的になつたものである。さて「久遠の女性」の意義は、如何なるものであるかと云ふことを考へて見度いと思ふ。

此の世の中には男と女、即ちヒゼセックスとハーセックスとの二つに分れて居る。ヒゼセックスは意志、理知を以て特質とするが、之れに反してハーセックスは本能、パッションに依つて特定される。しかも其の兩性は互に接觸して、一つの完全なる a whole を形造らんとするのである。

男性の標本は古來よりの偉人、天才といふ様人々に之を求めることが出来る。然るに女性は獨立して表はれることが出来ない。何となれば彼の

女には自分を守り立てる丈の力がない。

然らば、ハーセックスを求めて、何所に往くべきかと云ふに、偉人天才の中に彼の女が表はれた時である。

ニーチエ曰く『男は I will である。女は you shall である』。女は男を俟つて初めて表はれるのである。

兩性が合して完全なる全體を造る例は、イエスキリストが古來よりの善い例であると思ふ。

キリストの體には、男性といふものと、女性といふものが、相結びついて表はれて居る様に思ふ。

キリスト教の色彩が他と異なる點は、キリストの

偉大なる人格の内に求めなければならぬ。キリストは年若い奇麗な福音者であるやうに思ふ。此の若い彼をして悲しみの福音を説かせたと云ふ事がキリスト教が世の人の注意を惹く第一の點であると思ふ。惡口屋はキリスト教が若い奇麗な代表者を創つたのはカンニングデヴァイスであると言つてゐる。第二、キリスト教の特種點と考ふべきは彼の姿を想像する時に何となくもの靜かな、デザインされた宿命觀がある。意志も之を制御し能はざる一つの厭世觀がある。彼自ら悲哀の種を説いたキリスト、十字架に上つたキリスト、其の顔には打ち勝たれたる悲しみの思ひが顯れて居る。眞實のキリスト教徒は如何なるものなるかと言ふに其良い例として、佛國の畫家、フランス・ミレーを挙げやう。彼は生れながらのキリスト教徒である。彼の作にはエンデラスの鐘、及び、穂拾ひの二つがある。彼の悲みには一種の強いチャームがある。消極的の強いエネルギーがある。斯る人が born christian であると思ふ。

トルストイは生れながらの異教徒であつた。ブ

ラグマティックなクリスチャンであつた。ミケランデエロの作つた彫刻に「勝利」と云ふ大理石像がある。それは若い青年が裸體で立ち、其の脚下に老人の頭を伏せしめ、一方の手を舉げて將に彼を打たんとする。青年の手は慄へ、其の眼には悲みがある。此勝利者は哀みの爲めに彼を打つ事を躊躇して居る。彼は勝利者たると同時に敗北者である。之れはクリスチャンのシンボルと考へるとが出来る。

クリスチャンの本體とする所の消極的の宿命觀が、「久遠の女性」の特徴であらうと思ふ。ここに於いて此「久遠の女性」を尋ねて偉人又は天才の一生に求めなければならぬ。其の例として採り度いのは、文藝復興期の畫家、レオナルドダビンチと彫刻家のミケランデエロである。兩者は互に性格を異にする天才である。意志、理性が克つたのはダビンチで、情と本能が克つて居たのはミケランデエロである。ダビンチは生れ乍らのビュリタンである。實に彼は一生に蟲一つ殺したともなく肉食したるとなきビュリタンであつた。理智と

云ふ思想が、文藝界の一部に動きつゝあるのである。此の思潮の最も著しくなつたのは極めて最近の事で、彼のレオニード・アンドレーフは、此の最も大なる代表者の一人であることは確かである。

彼は其の「信仰」に於いて、神秘的な神の存在を明らかに否定してゐる。主人公なる牧師が奇蹟的な神の恩寵に依つて、或る死んだ一従僕を再び甦らせやうとして、神に熱心に祈禱し、

「汝起てよ」

と屍に命じたけれども、一度靈魂の去つた屍は再び甦へることが無かつた。斯くする事三度び、遂ひに屍は甦へらなかつたので牧師は茲に今迄の神に對する考へ、神に對する信仰の虚偽なることを自覺して、狂氣の如く教會を出奔し、路傍に倒れて死んだ。噫、神秘的な神は遂ひに此の宇宙には存在してゐないことが暴露された。

又彼の作「イスカリオテのユダ」なる一大長篇

中にも、「神は人間に近きもの、人間は神に近づくやう程近きものと言ふ清新なる觀念が明白に現はれてゐる。此の作及び彼の戯曲「アナテマ」に於いては、キリストは人間に不可解な奇蹟を行ふ事。否其の様子さへ尠しも見ることが出来ない。

惡魔に弄ばれて煩悶するキリストが描かれてゐても、奇蹟を行ふて人類の心を不自然に、虚偽に弄

ぶキリストは描かれて居ない。「アナテマ」のデ・ヴィット（キリストをモデルとした主人公）は叫んでゐる。

「俺を何うする氣なのか、考へても見るよ、俺は有り丈けの物を残らずお前等にやつたぢやないか、何一ツ残つてゐないぞ……奇蹟をせねばならぬわしは誰なんだ。氣を付けるよ……『土の山よ、パンの山となつて飢ゑてる者を喜ばしてやれと俺が言へると言ふのか、まア考へても見るがよい。……』俺は病身のヂューぢやないか」と。

又「イスカリオテのユダ」中の、ユダを作者は描くに當つて、キリストの所謂神秘的な神に非らざることを描寫してゐる。即ちユダがキリストを賣つた原因として、キリストは噂に聞いた如く、「土の山をパンの山として飢ゑたる者を救ふ」の奇蹟も行はなければ、手を觸つた許りで癩病患者を癒しもしないのである。其處にユダの失望があつた。キリストに對する疑惑があつた。

アンドレーフに依つて、神は奇蹟を行ふものでもなければ、人間から離れた雲の上に住んでゐるものでもないことが明らかになつた。神は飽迄も人間、吾々と同じ生活を續くるもの、吾々の日常

生活の中に存在するものであることが判つた。

要するに露西亞に於ける宗教は、其の政治と密接の關係を結んでゐる結果、社會の有ゆる方面に影響を及ぼしてゐる。生活から出發した文藝が、亦當然此の宗教とも密接の關係を有つてゐること

が何の不思議もなく、寧ろ其の影響が恐る可き形となつて現はれてゐるのである。露西亞文學を鑑賞し理解するに當つては此の宗教的背景を無視しては、到底よくすることが出来ないと言つてもよからうと思ふ。

### △佛書刊行會近況

南條博士を會長とし、高楠順次郎、望月信亨、大村西崖、三氏主宰の下に、明治四十五年五月以來續刊しつゝある大日本佛教全書は、去四月を以て第一期分四十八冊二百七十餘部一千二百四十餘卷二萬三千七百餘頁の刊行を了し、凝然の維摩經菴羅記、華嚴五教章通路記、普賢の法華三大部復真鈔、珍海の三論玄疏文義要、貞慶の唯識論同學、(古本)、快道の俱舍註法義、承澄の阿婆縛抄、その他、高野春秋編年輯錄、華頂要略、大谷本願寺通紀、聖德太子傳叢書、寺誌叢書、蔭涼軒日錄等の珍什秘典を收載したが、第二期に於ては觀賢の大日經疏鈔、凝然の法華經疏慧光記、勝覺經疏詳玄記、華嚴孔目章發悟記、普機の一乘開心論、護命の法相研神章、湛慧の成唯識論述記集成編、宗性の俱舍論明思抄、貞慶の因明々本抄、覺禪の覺禪鈔、其他、圖像鈔、天臺霞標、寺門傳記、東大寺雜集錄、本光國師日記、多聞院日記、悉曇叢書等續々上梓せらるべく、既に五月分として湛睿の五教章纂釋、敬雄の天臺霞標の二書成り、本月は東密の祕庫覺禪鈔及び證空の當麻曼荼羅註記、選擇密要決等刊行さるべしと云ふ。



條件を加へてゐる。即ちそれは藝術の普遍性である。藝術の普及である。彼曰く、

「眞藝術を其の眞造より區別すべく確固不拔にして誤る能はざる一の徴證の玆に存するものがある、所謂藝術の普及即ち是れである。今若し一人ありて他の一人の作品の前に立ち、自己には何等の努力をなすことなくして一の印象を得し、他の第二第三の人が感得する印象と一致結合せる感動を受けるを得ば、其作品や正に是れ一の藝術的作品たるを妨げないであらう」又曰く、

「藝術の主なる徳は、人々個々の間に蟠る一切の墙壁を排除し藝術家と公衆とを合致せしむるにある。

一作品に對し吾々が此感情を感得するならば、是れ此作品が藝術に屬するが爲めである。…其の普及の力は常に藝術必然の徴である許りでなく該普及の程度は又以て藝術の優秀であることの唯一の尺度である。

普及の程度愈々強大なるものは、益々藝術の眞なるものである。云々と。

斯くして彼は、難解朦朧たる近代藝術、例へば佛蘭西デカダン派の作品、殊にボードレー、ヴェルレーヌ、ゴーチエ、マラルメ、或は獨逸のワグネル、又は佛蘭西のポストアムプレツシヨンの繪畫等を假赦する處もなく抹殺し去つてゐる。個

人的に傾いて來た近代藝術は、一般の群衆に満遍なく鑑賞され且つ理解されることは愈々不可能となつて來たし、又それが正當であると認められて來た文藝界の趨勢に獨り反抗して、藝術の萬人に理解せらる可き普遍性を力説呼號したるトルストイの藝術論は何から原因してゐるか、と云ふことを考へて見るのが、吾々には重大なことであり、且つ興味深いことである。

彼が藝術に對して、一種の功利觀を抱いて居ることは、前にも述べた通りである。即ち藝術は宗教的知覺を表現し、萬人をそれに依つて結合するものであると云ふ説である。此處に吾々の疑問が起る。然らば教會に於いて結合することが最も有功であらうと思はれるのに、何故強ひて藝術を其の用具に用ゐる必要があるか、と。此處に於いて先づ吾々は、露國の教會の如何なるものであるかを觀察する必要がある。

抑々露國正教會は紀元第四五世紀以來の舊式の儀式を其儘に墨守し、少しも之を改むることなく、其の説教も禮拜も極めて形式的のものである。殊に祭典の多きと、賑やかなるとは、世界各國

其比を見ざる處である。其の祭日及び休日日數は殆んど一年中の約三分の一であるといふことである。

又露國正教會は、現在に於いても尙、十世紀の末に作つたスラヴ語の祈禱書をば、少しも改訂することもなく、依然として用ゐてゐる。如何なる國語でも八百年も経過する時は、幾多の變遷に依つて、不可解となり、難澁となるのは當然である。日本に於いて、源氏物語、平家物語の如何に現今の人々には難解であるかを知る者は、彼の十世紀末のスラヴ語の祈禱が如何に現在の露國人にとつても不可解且つ難解である可きかを想像するに難くは無からう。而も當時のスラヴ語なるものは極めて不完全なもので、現今の露國語から見れば、殆んど他國話の感ありと言はれてゐるではないか。

其の難解、不可解なる古代スラヴ語を以つて現今に於ける智識の程度の低級な人々に臨んで、何の效果があるであらう。何うして痛切な感動を與へ、熱烈な信仰的自覺を呼び起こすことが出来るやう。

斯うした教會をして、宗教的知覺を人類に與へしめることは、トルストイから見れば、樹によりて魚を求むると同じである。さればこそ彼は「宗教的知覺をもつて萬人を結合」することを、現代の教會に求めずして、藝術に求めたのも、故あることとなければならぬ。彼は又、藝術其もののみに

生きることが不可能な性格を有つてゐるのに、搗てゝ加へて、熱烈なる宗教的意識に高調してゐるから、それが忽ち一致して其處に功利的藝術觀を立てたのである。

## 八

抑々彼の正教會なるものは、神と言ふものをば、超人間的な、近づく可らざるもののやうに説く弊害がある。一面に於いて、多くの下級信者は智識ある者尠く、其の爲めに迷信に陥り易く、神と云ふものをば神秘的なもの、不思議な謎の如きものとして考へる癖が有るのであらうが、一方に於いて、説教者は、此等無智なる信者に説くに、其の弱點に付け込んで、不思議な謎のやうな、近付き難い權力者のやうな者を以つてするのである。さればインノセントな下級信者は、神には服従す可きものだから、一致融合し難いもののやうに考へ込んで了ふ傾きがある。

是等の反動として、神を地上に引下ろし、人間に接近したものは又人類は神に到達す可きポシビリチイを有つてゐるものだと

可くも無かつたのである。

茲に彼の政教混同に反旗を翻したヒューマニズムの思想は、一方に於いて、貴族及び地主に壓迫を加へられてゐる下級農民及び労働者等に湧然として同情を注ぐ可き傾向とはなつたのである。又眞のヒューマニズムから推して行けば、夫れは當然の行く路でなければならなかつた。而して、此處にも彼の露國三大文豪と並稱されるトルストイとドストエウスキイとツルゲーネフとは其の方面の大なる代表者である。

トルストイの數百頁に亘る(What shall we do?) 一卷は彼が農民及び下級労働者に對する熱烈にして冷靜な同情の結晶である。彼は此の一卷に於いて、都會文明の悲慘と、從來の經濟説の虚偽と、權力者の人民を壓迫する手段とを三段に説明し、且つ科學と藝術との眞使命等を深い洞察を以つて説述してゐる。

「農民は地上に於いて最も貴重なるものが直實であることを信じてゐる。自己の贖罪及び全國民の贖罪が唯一の眞實に在ることを信じてゐる。夫故に農民は世界に於いて最も多く正義を愛

する」と言ひ、又は

「吾々同階級——富豪社會、學者社會——の生活は私に取つて厭ふべきものとなつた許りでなく、有ゆる意義を失つて了つた。……然し農民の生活、生を創造しつゝある全人類の生活は其の本來の意義に於いて私の念頭に上つた。私は是こそ眞の人生である」と悟つた」(My Confessionより)又富者及び地主等を罵倒しては、彼は、

「吾人は吾人の中の何人も、彼が之を好むと否とに拘らず、彼が如何なる處に於いて如何に生活するとも、彼が毎日毎時間自ら人類に依りて行はれたる勞力の一部を剝奪しつゝあることを知る」。

「然れども自己の手を以て勞働せずして、而も一切の人類が平等なることを承認する所の近世の教育ある人類は、何故に彼等及び彼等の兒童(何となれば教育は啻だ金錢即ち權力を有する人間のみの受け得る所のものなればなり)のみが、其中の數百數千の人間は彼等をして教育を受けしむるが爲めに死滅しつゝある所の、數百萬の人間中にありて、安逸、怠惰なる生活を營み得る幸運兒なるかを説明すること能はず」(What shall we do?)より。

と萬丈の氣焰を吐いてゐる。又ツルゲーネフは其の「獵人日記」に於いて、壓迫せられたる農民生活を描寫してゐることは、今更述べ立てる必要もない。ゴーゴル、ドストエウスキイ等皆悉く農民の

味方でない者は無い。殊に彼の千八百六十一年の「農奴解放」の實行を見るに到つたのは、ゴールの力あづかつてゐることは、人の知る處、要するに彼等は政治的にも一の成功を収めたと言つてよい。此の原因を吾々は深く探る時には、明らかに近代露國基督教の缺陷から生れた反抗思潮であることを認めない譯には行かない。

## 六

又、皇帝は基督教を以つて、國民思想の統一を企てやうと利用したことが、其の政策から行つて其の正教の教義（殊に偏奇に曲解されがちな）及び其の政策から實行せられる政治的組織に少しても抵觸する思想を發表する印刷物は、新聞雜誌でも著書でも、悉く發賣禁示を命じ、印刷物を沒收し、或は其の著書及び寄稿家を容赦なく處罰するのである。所謂危険思想として、言論の自由を極度に壓迫するのである。されば、評論家文學者等は其の身を安全に保たんとすれば、勢ひ沈黙するか、又は諷刺的に遠廻しに發表するか二者其の一

を選まざるを得ない。直言直行は忽ち彼等を斷頭台に導くか、千山万嶽を隔てた西伯利亞の追放に餘儀なくせしめるか二者の何れかを覺悟しなければならぬからである。

茲に於いて、彼のチエホフの諷刺文學が現はれ、而して其の諷刺が單なる遊戲的諷刺でなくて、其の陰に恐る可き露國近代社會及び宗教、政治等の缺陷を包んでゐるのである。チエホフは同じく彼のトルストイと同一思想から出發してゐるとは言へ、トルストイの如く直言直行でなくして、飽迄もユーモラスに、飽迄も表面を或る種の蔽布で包んで、其の思想を發表してゐる點に於いて、著しい特色を持つてゐるものである。

## 七

トルストイは人も知る如く、熱烈なる基督教的藝術の宣傳者である、彼の英國のシャフツベエリイやラスキン等と主張を同じくしてゐる。藝術を以つて、彼は宗教的知覺を表現する唯一の機關であると言つてゐる。然るに彼は、更に夫れに他の



の如く、自らの實生活、現實的經驗から燃え出た處の噴火である、叫びである。彼が露土戰爭に一兵卒として出征し、戰爭なる者の如何に非人類的な非慘なものであるか、又は愛國心なるものの如何に虚偽にして、誤れるものであるかを痛切に感得して、其の胸から血を出して叫んだのは、凝結して、「四日間」となり、「士官と從卒」となつたのである。如何なる帝國主義、如何なる侵略的の人と雖も、「四日間」を讀んで、戰爭の如何に反人道的、悲慘なるかを痛感しない者は無いであらう。「士官と從卒」では、士官が戰爭、あの地軸も破らん許りの砲彈の音に、如何に破壊的な、如何に非神意的なるかを覺つて驚怖し、又從卒のニキタが、軍人生活の不道德な、壓迫的な牢獄に堪へ兼ねて遂ひに脱營して自分の村に逃げて行くことを夢みてゐる。其の士官の夢と從卒の夢とは、ガルシンが叫ばんとした聲である。

#### 四

さて、露西亞帝國に於ける政教一致の思想界及

び文藝界に及ぼした影響には未だ／＼恐る可き方面のあることを忘れてはならぬ。即ち露西亞は、政教一致に依つて、全人種の統一、及び愛國心を鼓舞することが出来たと云つても、其の結果一方には、鎖國的精神の生み出さるゝの弊害が生じないわけには行かなかつた。此の鎖國的精神は或は廣大なる國土に比して交通の便の發達しない事、及び土着の人民に對して、輕々に旅行せしめない政策等からも來てゐるのであらうが、一ツは彼の一種特殊な頑迷な宗教の力から來てゐると言つてもよい。

されば西歐諸國は四通八達交通に依つて、第十七八世紀から以來恐る可き文明が勃興しつゝあつたものが、獨り露西亞帝國のみが、此の文明に與かる事が少なかつたのである。唯古くビザンチン（東羅馬）の文明を吸收したのが、殘存してゐたに過ぎなかつた。處が彼の千八百年代に於いて、佛帝のナポレオンが侵入して、西歐の文明を齎らすや、今迄壺中の天地に跼蹐してゐた露西亞帝國の人民は突如として其の光輝に浴し、自覺する處があつたのである。茲に初めて目覺しい程の思想的活動が開かれ、ヘーゲル、シエリング等の哲學は言はずもがな、獨乙、佛蘭西、英國等の近代文明は潮の如く露國に於ける智識階級に押寄せたのである。

彼等智識階級。即ち新しき文明を吸収した人々には其の實生活の不完全なる事や缺陷の多い事が餘りに眼を刺激したので、彼等は自らの自覺に立つた理想に生活す可く、迎も許さなかつたのである。玆に於いて、此の自ら實生活に突入しやうとすることの悲慘を脱れて、或は人生を懷疑し、否定しやうとする傾向のある所謂「高等遊民」の一階級が生じたのである。彼等は貴族でもなければ農民でもない（内生活に於いて）と言ふ、露西亞には前古未曾有の一階級が生れたのである。露西亞十九世紀の偉大なる文藝は凡て此の高等遊民なる階級の所産である。此の高等遊民は二派に分れ一は生活を呪ひ、人生を懷疑否定せんとする者その他の一は、容易に改善し、救済す可からざる實生活を、激烈な手段に依つて、一舉にして改革しやうとする彼の虛無黨である。前者はツルゲーネフやドストエフスキイやゴール等が其の主なる代表者であるが、後者は人も知る如くクロボトキン其他無數の黨員が常に社會の有ゆる方面に手を伸ばしてゐる。此の過渡期に於いて、無智なるもの

は全然無智にして、昔のまゝの農民であるが、有識なる者は、世界の有ゆる文明思想を吸収した高い理想家である故に、其の懸隔は著しきものがあつて、現實と理想との悲劇が隨所に繼起するのであつた。近代露西亞文藝が如何に憂鬱的にして、悲劇的なものであるかは、此の事實に徴しても其の必然なる理由が解るではないか。余は敢へて喋々として是を玆に述ぶる餘地が無い。

## 五

又其他政教一致の更に甚しき弊害は、僧侶の官吏根性を帯びることである。白僧黒僧悉く社會上に一種の權威と勢力とを得んが爲めに、政府及び貴族に媚び、下級の農民を卑下するの傾きがある。殊に露西亞には上流階級と下級人民とを結合する處の、國家の中堅たる中流階級の人民としては無く、貴族と下民との意志の疎通を欠き、上は下を壓迫し、下は上に反抗するの氣風は失はれない。殊に一千八百六十一年、「農奴解放」は實行せられたと言つても、其の間の精神的溝渠は繕はる

主として、其國の精神的方面のみであるが、露西亞に於いては、獨り精神的方面のみならず、物質的、外的方面にも、驚く可き影響を與へてゐることは、著るしく、他の基督教國の社會と其の類を異にしてゐる點である。然らば此の國民の内外兩方面を支配してゐる露西亞の宗教なるものは、如何なるものであるか、又如何なる狀態に影響を及ぼしてゐるか、殊に其の影響の下にある社會から如何なる形を文藝に與へたかを略説して見やうと思ふのが、本論の目的である。

## 二

さて露西亞の國は、Orthodox church 即ち正教會であつて、もと羅馬教會から分離したもので、即ち希臘教會である。其信徒は露國內でも八千萬に上り、殆んど他の信徒の入る餘地が無いと言つてもよい。正教以外にもラスコル派とか、舊教とか、新教とか、アルメニヤ教とか、又は猶太教とか色々あるが、其の信徒は、全部合しても其數三千萬にも足らぬ有様である。然らば斯く此の正教

の盛んにて、無限の權威を把持してゐる理由は何であるか。

抑々露國程種々雑多な人種の集つてゐる國は珍らしい、主として、フィン人、韃靼人、スラブ人等であるけれども、其他に猶太人、獨乙人、ルーメニア等數へ來れば限りが無い。されば其の數多の人種を、露西亞帝國と言ふ一大觀念に統一することは仲々至難の業である、て代々の露西亞皇帝は此の正教を利用し、以て國教となして政治的色彩を加味し、宗教的統一を以つて、政治的統一をも實行しやうと企てたのである。従つて正教の勢力は政治的保護、否政治的權力の下に、無限の翼を張り伸ばした。

露西亞皇帝は政治上の主權者でもあり、且つ又宗教上の主權者でもある、正教の信者は、露西亞皇帝は神イエス・キリストの命を受け、代理者となりて、政治界のみならず、宗教界にも權力を把持し、信徒を保護し、宗教行政を司るものであることを信じて疑はない。されば信徒は皇帝を神とし、神のシムボルとして信仰してゐるのである。要するに露西亞皇帝の宗教利用政策が成功したと言ふべきである。然るに政教一致を以て、露西亞帝國の統一團結に於いて稍成果を收め、愛國的精神をば、廣茫たる露大國の隅から隅迄植ふ付けたとは、言ふものの、抑々基督教の教なるものは、一視同仁、有ゆる國民にも同情と愛をもつて對するのが本義である故に、一面に於いて、皇帝の政策に知らずく破綻の生じない譯には行かない。

此の政治に依つて去勢された基督教に反抗し、

眞の基督教の本義に徹底せんとして立つたのは、思想界乃至文藝界に於いては彼のトルストイ、ドストエフスキイ、及びガルシンである。

### 三

トルストイは自ら言つてゐる、「吾々には、福音書は、何時の時代に誰が書いたかと言ふ事は何うでもよい。吾々の福音書に價値を置くのは、其の内容である、其教訓の燦然たる光りである」。彼は有ゆる墻壁、有ゆる障礙を排斥して、赤裸々な基督の教の眞髓に徹底せんと叫んだのである。

彼の説に従へば、基督の教義の眞髓は、吾々人間は、如何なる人間でも、凡て同一に神の恩恵に浴し、有ゆる同胞を愛し、而して神と隣人との犠牲となるの精神に生きることとなければならぬ。殊に罪惡なことは、國境に依つて、又は人種の色分けに依つて、人々の待遇を異にすることである。此の主張からして彼は戦争、即ち國家的偏見からして生るゝ鬭争をば、蛇蝎の如く嫌つたのである。人間は如何なる場合、如何なる境遇にあ

るとも、「愛」を忘れてはならぬ「犠牲的精神」を忘れてはならぬ。而して是は絶體にして、普遍のものであると。

「自己一身の爲めに生活することは苦痛なり、何となれば、此の場合に於ては、人は嘗に其れに依りて幸福なること能はざるのみならず、全然存すること能はざる所の非現實なる一の幻影の爲に生活せんと欲するものなればなり。其は一の陰影を襲ひ且つ養ふが如し、生命は唯自己以外に於いて、他人に仕ふることの中にあり、自己の親近なる人及び自己の親愛なる人に仕ふることの中に非らずして（是れ再び自己の爲めにするものなり）自己の知らざる人々に仕ふることの中にあり、尙更に善きは自己の敵に仕ふることの中にあり。」(Meaning of life より)

トルストイの基督教の眞意義に立ち歸つたのは冷静なる思索と理性的結論とから來たものである。然るに、彼のドストエフスキイの博愛及び同情を宣傳したのは、反對に彼が止むに止まれぬ内部生命の強烈なる自發的噴出の結果である。先夫的な性格から、即ち反基督的な現在の宗教及び社會から壓迫されてゐたものが鬱積して遂に突發せざるを得なかつた先天性からである。然らばガルシンは又何うかと言ふに、彼もドストエフスキイ



## A DEEPER RELIGION.

There is a deeper religion

in doubt than in faith, in sorrow than in joy,

in strife than in peace, in self assertion than in sacrifice.

---

### TO BE GREAT.

The first step to be great is to see the follies of all who surround you.

Look clearly into the motives of all their doings.

Most of them are petty and mean.

---

### ITS POPULAR WAYS.

One of the popular ways to become great is to be absorbed in the Great Spirit.

That is the way of small fish swallowed in the mouth of a whale.

Another way to become great is to empty yourself and take in the Great Spirit.

"Ye are the temple of God," says the Bible.

The question is; "Are you nothing but food or house?"

Do you not yourselves want both food and house?"

Better change the propositions and make the Great Spirit both your temple and your food.

---

### ASSOCIATIONS.

Associations! Societies! Congregations! Communities!

Men who are not strong enough to stand alone compose them.

We are too much associations-ridden.

Urgent necessity is to get rid of them.

---

# 露國に於ける宗教と文藝との關係

西宮 藤朝

いことは明白である。

一  
如何なる國の社會に於いても、宗教と言ふ者を持つて居ない社會は無い。何等かの形式に於いて其の國の人民は、何等かの信仰を以つて居る。何故かと言ふに、人は凡そ、其の性<sup>ヒウマン</sup>質<sup>チエツ</sup>として、永く懷疑狀態に彷徨して居ることが不可能であるから。文明の開未開などは此の信仰を欲するヒウマン・ネエチユアを除斥するに何等の力を持つては居ない。人は曰ふ「宗教だとか信仰だとか云ふものは、科學の發達して來た近代生活には何等の必要が無い」と。此の言葉は、「現在及び過去の宗教を非難する」言質となることが出來ても、宗教そのもの、信仰其ものを否定する證言にはならな

然るに露西亞の國民程又、宗教心に熱烈なのは尠ないであらう。誰か「それは彼等の教化の程度が低い爲めだ」と言つてゐるが、必ずしも夫れが主なる原因ではない。寧ろ、彼等の歴史的慣習と沈鬱ならしめる露西亞の自然及び氣候と、偏屈なる政治的壓迫とから來てゐるものであると思ふ。殊に露西亞に於ける宗教は、政治と固く密接して居て、古代國家に於けるが如く、政教一致、即ち政治を行ふことゝ神の權威を示めすことゝを一途に結び付けて、區別をしない。

従つて、其の宗教が、一國の社會に及ぼす影響は實に恐る可きものがある。英國、獨逸、其他西歐諸國に於いて、宗教が及ぼす影響、及び領域は

### IN A STREET-CAR.

In a street-car, a young woman sat in front of me.

Not so very pretty but somewhat charming.

Too thin upper lip and too large frontal teeth, however, were drawbacks.

Now she turned aside, and behold !

As she breathed out in the cold air, her breaths from her nostrils seemed as two white rods, both several inches long.

Each time she breathed, these two rods were seen like the tusks of an elephant.

To tell the truth, wherever she goes, she carries with her these intermittent sprouts of air rods, though they are not visible except in a cold weather.

When she whispers to her lover's ear, these rods are striking against his cheek.

When she dines, they are touching the dishes like feelers of an insect.

Suppose she was ten-times more beautiful and charming, can you bear the woman with tusks under her nose ?

### DRESSES.

What are all the beautiful dresses you boast of ?

Only the carcasses of animals killed.

Think of the agonies of all those animals which supplied you materials of things you wear.

Your body from head to foot is covered of their death lamentations.

---

### STATUES.

Men turned into marble.

As if all their life blood left them.

Men turned into bronze.

As if they were scorched all over.

Lifeless corpses both, exposed to weather and human sight.

### IF THE DEAD AROSE.

If the dead arose and came among us, how surprised they would be?  
Many will say ; “ Why, I am entirely forgotten.”  
Some will say ; “ What ? Am I considered so small ? ”  
But the greatest astonishment will be the reverse ;  
“ Am I magnified so much ? ”  
And no one will utter this last more intensely than the founders of religions.

---

### OBTRUSION.

If praise is more obtrusive than blame, as Nietzsche said,  
how much more so is worship or prayer ?  
Then Buddha, Jesus, Mahomet ; no one has ever been more  
obtruded upon than they have been.

---

### SYMMETRY.

Preponderance of right hand over left has made us unsymmetrical  
beings.  
There balancing Nature has lost its balance.

---

Preponderance of stomach on the left side and irregular contour of  
intestine had already made our inside highly unsymmetrical.

---

### UGLY INSIDE.

To think even a supreme beauty has a ghostly skull beneath ; and,  
still worse, a snakelike intestine inside !  
Every sage too, a whited sepulchre !

---

### EARS.

Looking intently at one's ears, I feel how near is man to wild  
beasts.

---



度をさへなすものあるに至る。而して聴衆にその暗示が感化を及ぼすや、口々にアーメンを呼びハレルヤと叫ぶ。他より見れば、殆どヒステリーの如き觀を呈する、しかし、その本人にあつては一種外來の力を感得せるもの、如く最も合理的なる經驗となす。

スタンレー・ホールは曰く、

かゝる出來事は、誠にその想像力の極めて現實的なところに基礎を置くもので、終には信者の感情を傷け、時としては、精神物理的に組織の上に實際の Stigmata を印し、未だ曾て經驗したることなきほどの「あはれ」の感を喚起し、人性の根本をひっくりかへす。

と。

かくの如き場合に於ては、「あはれ」の情緒は最も高き要素をなすものとせらるゝが、一つの事を極度に強く觀念するは、その準備として必要と見られてゐる。例へば、釘が足の肉を刺しつゝあるを深く思ひつけ居れば、ついには足の甲に痛疼を感じ、眩暈を感じずるやうになる。この好適例は、聖者フランシスの場合であつて、彼は stigma の經驗に於て、基督その人と「あはれ」もよろこびも、全く同一なるを味うた。(つゞく)

『私の讀んだり聞いたところによれば、世には隣人に對する大いなる愛を利己心の一形式に過ぎないと説く人々がある。その中に一體何んな利己心があり得よう、それは私には到底理解することが出来なかつた。』

……………片上氏譯「死人の家」より……………

### EXTREME AVARICE.

In the street, I saw a group of mendicant monks.

By little pain they suffer in this world, they would purchase a life  
of eternal bliss.

No greater avarice then these !

---

### EMANCIPATION.

Some cedar trees in a big forest said ;

“ We are tired of our monotonous life here.

Emancipate us, O forest, and let us go to the city.”

The god of the forest pitied them.

But as they were obstinate, the demand was granted.

Now they stand in a busy street, deprived of all branches and leaves  
and covered with dust,—as telegraphic poles.

---

### ELECTRIC LIGHTS.

Ye electric lights that now so profusely illumine the night of the  
cities !

Where had ye been all hidden before man discovered you ?

---

### LAST NIGHT.

After the lapse of a year she came again from the north island.

She visited me last night and we had pleasant talks.

To-night my lamp burns just as last night, but she is not.

I listen to catch footsteps by the window but there is no sound.

The chair she sat on last night is vacant and there is vacancy in my  
heart.

O the last night that brought her back after a year !

And the to-night that brings not her back after a day !

Tetsuzō Okada

に一體になつた時に起るところのものである。この最も著しき例は、昔からオーガスチンのそれであるとしてられてゐる。ポーロも亦顯著であつた。ルーテルはいはく、

我一僧侶なりける時、肉の衝動、憎惡、憤怒、猜疑の感に打たれては全く投げ出さるゝが如き空虚の感に打たるゝがつねなりき。こゝに於てか我は自己の良心の安靜を保つべくあらゆる試をなしたり。されど、それはすべて無効なりき。色欲と肉の望みとは、常に襲來せり。いかで我心安んぜんや、我は、つねに罪に呪はるゝの身なる哉。あはれ、神聖なる教團に結ばるゝも何の益かあらん。凡ての善業功德、一も我心に効果なし。肉は精神に反し、精神は肉體と闘ふ。實にポーロのいひけんが如く我の欲する事は一もなす能はず、欲せざることは却つて之をなすとの思ひは、つねに我を苦めたり。あはれ我はかくの如くに憐れにおのれを苦めながら、なほかつ、自己を脱すること能はず我は肉を持つ、されば、我は全く罪なきこと能はず。終に、我は肉に宣戰を布告せざるを得ざるなり。

スタウピッツはいはく、

我は千度に過ぎて、よりよき人とならんと神に誓へり、されど嘗てその誓の實行せられしことはあらざりき、今日以後、我は決してかくの如き誓をなさざらん。我は既に、經驗によりてその實行の能力なきことを知りたればなり。神にして恵を垂れ給ひ、基督の御名によりて我に在るにあらざれば、我はすべて

の誓、諸の善業を以てするも神の前に立つ能はず。又親鸞上人はいはく、

いづれの業もおよび難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし。

と。かくの如き深重なる罪惡觀に立出す。何等かの轉機を見ずしては濟まない。われならぬ力の救済にあづからざるを得ざるは當然である。こゝに救済宗教の根據があり、コンバージョンの強みがある。

かくして、とかくの議論あるにもかゝらず、コンバージョンは、宗教的意識、否人間靈性の開發途上に於ける、一特質たることを失はない。而して、その最も特色とせらるゝ點は、幸福の感をもたらず大悦である。ヒルティはいはく、

神靈の近きに現前したりとの感は、實にたゞ經驗なるべし。この靈の存在と親近の感、一度經驗あるものにとりては、打消し難く明に、譬ふるに物なき幸福の感なり。おゝそれよ、この土のいづれの感とも異りて、特別なたゞ一つの可能なる感のみならず、最良にして、而も缺くべからざる神の存在の證明なり。

今、スタートバックに従ひてこゝに導く動機を擧ぐれば、

- 一、極度の恐怖
- 二、一身上の重大なる事件
- 三、利他的動機の高潮
- 四、道德的理想の極處
- 五、痛苦、罪惡の自覺
- 六、偉大なる感化
- 七、社會的現象

等であつて、これ等より惹起せられたる種々の心境、不完全、不純粹、無價值、墮落、罪の意識、新生涯を渦仰しての煩悶、神より遠ざかりたるの感、神を呼ぶの祈禱、懷疑の念、確信に反抗せんとするの意志、意氣銷沈、憂鬱、不定不安、依るところなき心等は、打つて一丸となつて經驗の背景と共に、理想的生活に呼應し、そのあるものは、肉體的感覺を伴ひて益々罪の意識を高める。かく理想境と現實の不完全との對比は、忽ちにして、激烈なる覺醒を促し、人をして新生を餘義なくせしむる。

されば、精神的困厄に陥れる人を救濟せんとす

る場合に於て、眞の宗教家ならば、徒らに甘言を以てこれを慰むべきではない。自己を救ひ給ひし如く、他をも亦救ひ給ふべしとの信順を、如來に全く捧げてその心境の開展を待つか、然らずんば、罪になやめるその人を捉へて、罪の恐るべき報を心に書きて彼自らを投げ出させ、神靈體と比較して罪の黒さを自覺せしめ、その間の罅隙をぬきさしのならぬやうに、徹底的ならしむるの殘酷を敢てするが一番いい。

されば、この方法論が極端に進むと、ついにはアメリカに於けるリバイバルズムのやうなものになる。これは一種の教育事業にも代らんとするほどの勢力であつて、彼等の説教の特色は、平常用ひらるゝ神學的教義の意味を、殊更力強く刺激的に述べて、人心に異常の感動を與へ内部生活を激進せしむるのである。そしてその場合には、多く身に親しき表象を用ゆるを常とする。十字架と王冠、地獄極樂、家庭の思出、等はいかに偉大なる効果があるか。説教者は出來得る丈多くの功績を上げんとして、甚しきに至つては、俳優の如き態



ある。上に述べるところの状態、人心の有様が、即ちミスチツクである。しかるにミスチズムスはミスチツクの不健康且危険なる墮落であつて、人類の歴史にては概して衰微の日に現はるゝものである。されば、ミスチズムスはあらゆる過度を意味し、神經過敏を表はすにいたる。神自身の如く、あらゆる智慧の原理、萬物の始めてあり終であるミスチツクと混同してはならぬ。

かくして神秘的經驗とは、要するに、見えざる神と、直接に交通せんとする努力及びその結果である。これ平常の意識とは絶斷的なものであるから、その状態に入らなければ、眞味を解すべからず、従つて研究に甚だ困難である。偕、この状態に入るには種々の工夫がある。或は觀念を凝らし、斷食をなし、苦行を修する等、その信念の異なるによつて變ずるが、そのあるものに至つては、人工的心狀にて獲得せんと勉むるもの少くない。印度では、この訓練修行は極めて古くから瑜伽(Yoga)といふ名によつて知られて居る。瑜伽は、人が神と合一する經驗で、*Yogi*といふ義である。之を實行する人は、*Yogi*であつて、總ての愛着を離れ、三昧境に入り、狭き理性や本能で知ることの出来ない事實に面接して、所謂諸法の實相を見る。

そこには何等我といふ感覺なし。

而も、心意は活動して止まず。

何の欲望も起らず全く不安より放たれたり。

我なく他なく、この體そのものもあらず。

この地この境、眞理の光明は赫耀として投照す。

こゝに我等は、あるがまゝの己を知る。

平安也。不死也。有限なるものはすべて、善も、惡も、皆我れより離れたり。

而して我は、梵即普遍的心靈と合一す。

とは、ジエームス教授のこの境をいひ表はしたる言葉である。この三昧境から出づるや、人はその身耀けるものとなり、全人格は變し、その全生命は光輝に充つ。印度の婆羅門僧の中には、かくの如き經驗をなしたりといふものが甚だ多い。

そこには月も照さず、又暗も見えず。

寂者はそこにて自ら知り、寂黙によりて智者となる。この境は、つねに言説の及ぶところでないといはれてゐる。されば黙していはず、たゞ眼を閉づるのみ。mona 黙は、やがて Muni 牟尼である。釋迦牟尼は、その一人であつて而も最も大なるものである。

言説の及ぶところでないとは知りながらも、なほ何とかいつて見たいのが人の子の心である。あちらこちらの學者のいつたところを参照して、これより少しく説明を試み。狭いところに跼束して居つた自己が、廣々としたる信仰の天地に解放せられたる時には、

吾人は一切の有情と一なることを感ずる。これ宗教的實驗の特色であつて、吾人はこの時、宇宙の生命の流れに棹し、人と人、人と自然、人と神とは一となり、萬物たゞこゝに融合す。ニイチエの如きは信仰をもつて一種の凝固となして居るといふことであるがこの統一の状態、汲めどもつきぬ生命の泉となるべき状態を以て、こゝには信仰といふ。一切の教理的信仰に於ても、皆これが窮極の目的であつて、その神學的基礎は後からのことである。信仰状態に於て、人は初めて大なる力を感得し、宗教的教權に對する基礎もこゝから出て来る。實にや、信仰の目的は多に於ける一である。複雑に於ける單純である。もしそれ、その情緒的方面に至つては、其經驗が驚くべきものなればなるほど、説明し難く、而も打破し難き確實性を保つものである。

而して、この心的現象は、スターバックの説に従ふまでもなく、しばしば青年期に起るところのもので、人生に對する根本的態度を決定する必要上、大抵は、十歳から二十四五歳までの間に遭遇する。即ち、小兒の無邪氣なる世界觀の、大人のそれに移らんとする時に多く、精神的直觀力は既にやゝ出來上つて、而もなほ頻繁なる印象を受容するに適したる時である。これを生理的にいへば身體の發育最もよき時期であつて、春機發動期とこれとは、同時現象とさへ見られ、トルストイの

場合の如く大分年若いからのもあるが、三十にして起らずんば、一生經驗なくして濟むともいはれてゐる。この場合、男子は智力意思の關すること大なるが故に、内部より規定せらるゝこと多く女子は感情生活が旺盛なるを以て、外壓に制せらるゝことが強い。これら男女に係らず、各人の特質、肉體上の組織の相異は宗教生活に大いに關係するところ深く、特に、罪惡の感の如きは體覺(organic feelings)のいかんに因ること多く、單なる精神上的の現象にあらずとする説にも確に實驗的の根據がある。

この新らしき生命の獲得、これは又轉機(Inversion)と呼ばれるが、しからばいかにして起るであらうか、儒教にも既に道窮まれば即ち通ずるとか、人の一大事因縁に觸れた時、せつばつまつてぬきさが出來なくなつた時、そこに一大飛躍があつて、生命の躍進を感ずるは普通に知らるゝ通りである。今、これを神學的にいへば、吾人の罪惡觀の至極と神の恩寵のやるせなさとは、こゝ

して、善良なる生活こそ、まことに神に到るの道なり。神を恐るゝは智慧のはじめなり。デビニチーは、永久の光明の力の旺盛するところ、そは、恰も太陽の如く、常に光を與ふるのみならず、又熱を發散し、生氣を加ふ。斯くして、吾が救主はその至福に於て、心の清きものに降臨す。

吾人は、いかにしばしば、考ふることなしに、推理することなしに、結論に達することありしよ。而して、その時その際、いかにしばしば、吾人の智慧は、彼方より與へられたりとの感に打たるゝこと多きよ。されば、いと憐れなる光の影を與ふに過ぎざる空論的哲學體系の、決して、清められたる靈に於て輝くところのものとなることは

出來ない。故にデビニチーを文書の上に求めんとするは、死骸の中に生命を求むるにも等しい。この中に眞理はその跡を止むるかも知れない、而も決して活きては居らない。神の事を正しく知り、味はんには、どうしても吾人の衷にある神聖の原理即ち直觀の力に待たなければならぬ。眞理の光明は、清められざる靈の中には輝かない、心の清からざるもの遂に神を見ることは出來ない。これに於てか、眞理を發見せんとするものは先づ清

き心もて求めなければならぬ、明晰なる頭腦も惡しき心には何かせん、かくいへばとて、余はある一派の見解の如く、人間の理性を否定しやうといふものではない、そはやがて、已れを否定するのみならず、神を否定するものである。神聖なる神の啓示を否定するのである。正しき智慧、これを除いて理性もなく、神もない。宗教の要素とせらるゝ自己の否定も、それ自らの利慾を去り、神に對する全き服從、奉仕、やがて眞正に自己に生くるに外ならぬ。

されば、彼等宗教的經驗を得たるものにおいて、其經驗は個人的疆域を越え、有限に於て彼に屬せるものは自ら廢りて、強制力ある高き統一の感がある。神を切實に求むる人にありては、かくの如き經驗は、それ自らにて證明に充分であつて、彼は、その光を燭し、彼は、その新らしき力を得。太陽出てゝ何ぞ闇黒を云々するものあらん、氷の冷たきをたゞあげつらうものあらば、誰かその愚なるを笑はないものがあらう。水のつめたきは、飲みてたゞこれを味うべきのみ。火のあつきは、觸れてただ自らこれを知るべきのみ。彼にありては、既に議論の域を超えてゐる。美術家に何ぞ美の實在の證明が要らう。戀に悩める若人に何の愛の價值を論ずるの道があらう。朝な朝な神と共に起き夕な夕な神と共に臥す人に、どうして神の存在を證明することが必要とせられや

う。いかなる證明も決してこの疑問に答ふることは出来ない。世の終りまで、たゞ人は、信仰に於て歩むべく、たゞ人は、その行為を眞實にし、光榮の神の信仰に於て生くべきである。この内心の神秘的經驗を、實體論的證明や心理學的説明を以て解せんとするが如きは、その間の消息を全く了解しないものといはなければならぬ。

元來、神秘なる語は、希臘語のミュオー或はミユエオマイから來たものである。ミュオーは通例閉づる（特に眼を）の義に用ひらるゝが其の哲學上の意義にては、終る、或は死すの意である。ミュオマイは、宗教的秘密、特に佛教でいへば極樂淨土といふが如きエリジウムの秘密に入ることである。埃及及び希臘の如き、原始的宗教思想にあつては、秘密といふことは、最も重要なものであつた。而も、かゝる時代に於ては、隠れたる自然の中に働く無限不可思議の力は、我等の肉の眼にては見るべからざる秘密なるが故に、諸神の生活或は逸事等、即ちその表象であるとして、これを劇に仕組、或は人をして扮装せしめて崇拜の中心とした。

しかしながら、秘密といふことは、たゞこれ丈

で濟む簡單なものではなかつた。この眞意は、實に、「死はなし、永へに破滅はあらず」と、いふことであつた。人の世で呼んで以て死となすところのものは、短き間歇、しばしの休止、或は寧ろ、生活力の減少衰微に外ならず。眞の生命の本源は乾燥することのあるものでない。「外見の死の中に生命の破滅すべからざることを知る」とは、これ等神秘主義の教理を、最も簡単にいひ表はせるものである。而して、この秘密に參することは自然的皮相的見解の吾人に教ふところと全く相反する。この場合、吾人は現象世界から退き、あらゆる實在の深みに下らなければならぬ。換言せば、吾人は、吾人の物的眼を閉ぢ直ちに靈眼を開かなければならぬ。即ち、眞に秘密の意義を理解するためには、感覺的及物質的世界に死ななければならぬ。故に、神秘の状態、秘密の語はミュオーの意味に呼應し、その觀念に適合する。序に、英語のミスチズムは獨逸の譯語ではミスチックである。而して、獨逸語ではミスチスムスといふ語を用ゆるとミスチックを用ゆるとは、大に區別が



驗を得た人にあつては、それは眞理の正しい知覺として認むるの外なく、吾人の言語にては傳へ難き實在の啓示として、信念から除き去ることを得ない。これがこゝに宗教的經驗について、少しく辨じて見たい所以である。

ジェームス及び其一派のいふところに従へば、人は、實驗上部分的自己セルフの集合である。これが互に相争ふことあるに至れば、それは變態であるが、平常の場合に於て、いつも統一あるものではない。之を他の言葉にていへば、讀書、食事、歩行等、行住坐臥のわれらが經驗は、離れ易き繼續の下に活力が積み重つたにすぎない。されば、自己が眞に自己を意識するは、大いに精力の増した時か、衰へた時にその成長を感じ減退に氣がつくのみで、全體としての自己を知るは、極めて稀であるといはねばならぬ。つまり、人は遭ふところの一切の經驗より成立せらるゝものだが、常には、其一面を自ら知り得るのみで、事實に於ては、たゞ漠然たる人格の感じを有するのみである。かくの如き人格は、さりながら常にその統一點を求めて止まない。これ、人心至奥の渴仰にして、宗教の出立點である。宗教は、斯くしてその人格の精神的精力が、あれやこれやの活力の中心點を得て、全體的自己、統一ある自己を見出した時の現象である。これを稱して又信仰の獲得といふ。

ブラットは述べていはく宗教信仰の中には三つ

の階段がある。その一は、原始的盲信時代であつて、何等の疑ひ惑ふところなく、聖書又は宗教的教訓の權威を、そのまゝに把持することである。その二は、智的信仰時代であつて、彼等は相當の議論理由を楯として、たとへその根據が頗る疑ふべき餘地ある時でも、甚だ力あるものとする。第三は、神秘的經驗を重ねるもので、神に於ける信仰、宗教的生活の歸依の依つて以て起るところのものは、誠に神の現前の經驗に歸せらるゝ。少年時代のリバイバル、くしくも起れる神子の自覺、嘩曝の確證、又は壓迫よりぬけ出てたる心氣揚々の瞬間に於て感得する精力の昂上、之等は最高眞の宗教的意識の發現にして感情的神秘的經驗は、理性や教權以上に重きをなし、智的信仰や傳說的信仰とは大いに趣を異にす。

かくの如くして、宗教的經驗を得たる人々は、そがいかにして起つたかを知らないかも知れない。而も彼等は最早自から盲にあらざるを知る。其色合は種々あり、青色は青色。白色は白色である。色によつて價值判斷を爲すことは出来ない。

即ち、何とはなしに眞理を握つたやうな感を持ち或は、全體の眞理を確と所有し、之れに依つて、一足飛に實在に觸れたとの確信を持つ、かくの如き場合には、彼は自己と實在との間の無限の道を、一步も行くことなくして測量してしまつたのである。彼は、智慧の對象と面接し居るを想ふのみならず、自己の主觀の橋を起へて、客觀と合一し、絶對的存在の無限にしてその内容の極めて豊富なるものの中に、關與する事を得る。宇宙の本質と一なりとのこの直接の感覺は、實に驚訝すべき一現象であつて、科學でも、美術でも、哲學でも、苟も、その眞面目にして根本的創始的なものに至つては、之れによつて説明しなければならぬ一種の神秘的經驗である。

即ち宗教的經驗とは、内部的の眼に見えざる精神的境界ありとの確信である。感覺的經驗の單なる所産ではなく、渴仰の對象の確實、見えざるものの證據をしかと握つたといふのである。この心境には、自然の美はしき藝術、いひ知らぬ音樂の高き匂ひに、いづこともなくさまよふが如き意識の

移入あり、その最高の瞬間にありては意識は消失せるにあらず、而も複郁たる思想は入り來りて我れや人、人や我れ、その何れを別たざるが如きものがある。詩人は、多くその著作に於て、感情にもあらず智識にもあらぬ、一種の經驗を述ぶることがあるが、これらの感は、その何れの一つよりも富めるものであつて、智慧の根本、洞察の本源吾人が自らを全體と共に、一として持ちたる時に起るところのものである。實にメーテルリンクのいひけんが如く、われらが衷には、推理の境を越えて、特獨の處に關係する一境がある。そは未來の驚異に備へ、われらが不完全なる所得に越え、有限を超えて、より優秀なる所に住むことを可能ならしむる。プラトン派の人も、内心の光に大いに重きを置き、之を以て精練せられたる理性と同一視して居る。この點に關し、最も明瞭なる説明はスミスの麗はしき説教である。彼はいはく、

神の智慧に到る眞正の道及びてだてなる、デイベニチイは、神についての智識よりは、寧ろ神聖なる生活なり。そは口舌の説明によりてよりは精神的感覺によりて了解せらるべきものに

が無い。主人と雇人との關係に於ても、官と民との關係に於ても、亦さうである。交りはハートの交はりでなく、定められた機械的のものである。

智識の上で定められた公情よりも、私情を尊重したい。罪を犯したものは多くある。しかも過つた思想から犯した罪が多い、多數の人のあやまれる觀念の爲めにどんなに多くの人が犠牲になつたかわからぬ。

故によそ行きのツルースよりも、自分自身を根底とするハンブルなツルースに入りたいと思ふ。とらはれない生活をしんみりと味ひたいと思ふ。自分自身の生活をもつと、しつかりとした内容で自由な生活を續けたいと思ふのだ。大なることの

みを尊重せず小さい事にもその意味を認めて生活したいと思ふ。廣く淺くよりは、小さく深くやりたいと思ふ。外に大ならんとするよりも、内にしつかりした生活をしたい。人は小さい事をあろそかにしがちだが、思想感情の一致するのは、日日の小さい行ひにある。華美なものもいいが、しつかりした、充實した歩みをあゆみ出さねばならない。思想の爲の生活ではなく、現實の爲めの生活である。人間の接觸が稀薄になるよりも、卑近な生活にも溫かい接觸ある生活を送りたい。自分のしつかりした歩みをあゆむために、あらゆる外部よりの壓迫を免かれんとする爲に自由なる生活を欲するのである。(文責有速記者) (早大基督教青年會講演)

ここ (死) に澎湃たる大洋が始まる。

ここ (死) に光榮ある冒險が始まる。

メエテルリンク

# 宗教的經驗とは何ぞや (上)

鈴木 龍 司

狭き意味の合理主義の立場を取る人は、何事も確定的に論理的に證明せらるゝものでないと、満足しない傾向があるが、人には直観といふ働、即ち理性の穿鑿する境地より深き根底から來るところの偉大なる力がある。而して、これ等の心光は新らしき赤兒のやうに突如として吾人の上に顯現する。時に合理的主義者の意見と相反する事があるかも知れないが、人智の淺薄なる論理的細工よりは、世の眞を穿つ場合が甚だ多い。元來、合理論者の弱點は宗教に關して論ずる時に最も明に表はるゝ。宗教的機能を智識とか、感情とか、意志とかいふ分立的なるものに歸する者はあまりに行はれないが、人的現象の本質を集めたる能力經驗の深き力より出でて努力行爲の目的となり、その

興味、その理想の發源地となつて、すべてのかなしき深刻、眞面目に於て人を動かすところの個人的宗教は、神學よりも宗教組織よりも根本的である。教會は、一度打立てらるゝや直ちに傳習の上に第二義的のものとなる。而も、この教會の創立者といはれる人は皆すべてその力を獨創的に神との直接の人格的觀念に發して居る。超人間の教祖佛陀、基督、マホメットはいはずもがな、聖者といはれ、菩薩と呼べるゝ人々は皆かかる經驗なきはない。かくの如くして、宗教的現象はどうしても經驗に成立して居る。故に、これを正當に了解せんとするものは自らもこの經驗に參し、我等の直接經驗を立脚地として見なければ、到底その眞を知ることは出來ない。ところが、一度宗教的經



しさや不安が、着いて來はしないかと思はれます。兎角一種の觀念を作り其のために活動するのが最も高尚な様に思はれる。自分の理想と生活が一致する程嬉しい事はない。觀念が日常生活の地盤に建たぬ時は不充分ではないか。私は今ドストエフスキイの小説を思ひ出す。それは『罪と罰』である。主人公はラスコーリニコフといふ大學生で貧乏な、着る衣服も無く、空想してゐる間に貧民と接觸し、又高利貸の老婆と遭ひ貧者を苛めるのを見て是を殺さうとした。『其れは善である、社會的善である、其れに依て自分は満足されるであらう』と思つた、そして老婆を殺したが満足はしなかつた。彼は自分の思想上の満足を得んがため考へた。『老婆を無くする事は多勢を救ふ事になる。彼の女を殺せ。命を奪へ。そしてお前の全生涯を送れ。』と。そして何か満足が來ないかを彼は考へて居た。彼は觀念狂であるから大きな事をした人の事を空想してゐる。彼れの妹が兄が後悔して居ない様を見て、『貴方は人の血を流したてはなにか』と責めるが、『あらゆる人が其の血を流して

ゐる。其れは瀧の如く流れてゐる。人々はシャンペンの如くに其れを飲んでゐる。世間の人は其れを流す人を人道の恩人と呼んでゐる。自分の行爲は世の中の英雄豪傑が爲した事と同じだ。何故自分の行爲が悪いのか』と、彼は傲然と答へながらも一種の不安が彼の頭の中にある。絶えず怖ろしさが身に着き纏ふ。

此ラスコーリニコフの行爲をメレヂコスキイが批評して『ありふれた違法の形式に因つて起るもので利己心からでなくて、理論的觀念から行つたものである。人間の生命も人道も何でも無い。即ちラスコーリニコフといふ大學生の爲した事は昔の人の爲した事に變らぬ。彼等は人類の恩人だ』と言つてゐる。

或る觀念から出發した行爲に何故彼れは満足が出來なんだか、何故悔恨恐怖の念が起つたか其れが一の問題ではないか。彼は正義の觀念を持つてゐた。併し其れが彼の生活を根底として正義を築いたのか、或は自分の意見を外にして思想其物を論理的に出したのか判らぬ。

同じ例はツルゲネーフの作にもある。主人公は同じく大學生で貧乏で社會主義者である。自分の思想が熟して來て一種の革命が起つて來ながら其れを行ふ時には一種の疑ひが起る。一人で靜かに熱心に考へて居る時に心の底に倦怠がある。どんな底から實行しなければならぬと思はぬ。つまりぬといふ念が常に着きまゝとふ。主人公ネッダーノフの仲間が社會主義を唱へて流されたり、種々の目に遭ふのを見て自分でも色々の事をしやうと思つて百姓の間に傳道するか乘氣にならぬ。頭が熱する心が冷たい。自分の行爲が凡て虚偽であると自覺して自殺してしまふ。貴族である彼は貧民と彼との間にヂスタンスがある事を知る時に彼の思想と行爲とは常に矛盾して居た。ラスコーリニコフとネッダーノフの二人の生涯を見る時に吾々が陥り易き問題があると思ふ。此の生涯を思ふ時、大なる渦が卷いてゐる。天下國家を憂ふる人は、先づ自分の身の始末が付かなくなつた人であると思ふ人もある。天下の爲に興奮して居るのは自分が構はれなくなつたからなのだ。

吾々の眞に考へなければならぬ事は果して天下國家であるか、自分の生活であるか。我々の考へなければならぬ事はノーブルなそしてグレートなツルースであるか、ハンブルなスモールなツルースであるかといふことに成つて來る。畢竟自分に生命ある眞理を求めてゐるのである。ネッダーノフ、ラスコーリニコフ等は満足が出來ぬ。いやしい小さい生活を土臺にしてゐるからだ。彼等の思想はよそ行きて通用の出來ない眞理だ。天下の爲め國家のためと云ふも私情をはなれて忠義が出来るか。大石は忠の觀念から出たか、私の感情から出たか。個人的愛着が彼等の行動をなさしめたのだ。乃木さんの自殺は忠義の觀念からか。先帝陛下との個人的愛の結果の死ではないか。個人的關係をのぞいてあんな事が出来るか。人は自分のことを是認せんとする癖がある。私情の爲めでは無いといふことが、自分の行爲を是認させ様とするが、はたして私情は公情より卑しいものであらうか。昔しの人のやつた忠義の行ひには、個人的愛があるが。今日は機械的關係があるのみで熱心な愛情

て興起せよ。若夫れ人或は其心賤劣にして、生活  
を併せて、自然界の下に輪廻せば、夙夜勤勉痛く  
勞働すると雖も何か有らん。其人格の墜落するは  
自然の勢なり。

○抑も忍耐は必要なり。忍耐して時を俟つは誠に  
肝要なり。然れども忍耐は、實務を離れず、實務  
に由りて、豁然超自然の光に向つて時を俟たざる

べからず。是れ誠に忍耐の忍耐たる所なり。

○舊質（濁物）の我が中に存するもの、之れ如何に  
して消滅するや。活水神火の洗に由るなり。神の  
愛なり。神の慈なり。神の赦なり。神の救なり。  
皆活水神火に非ざるなし。實洗なり神の實體の行  
動なり。

『過去は過去なり』と吾人は云ふ、しかしそれは誤りである、過去は常に現在である。『吾等は過去の重荷  
を擔はなければならぬ』ことを悲しむ、しかしそれは誤りである、過去が吾等の重荷を擔ふのだ。

— メエテルリンク —



## 自己に眞實なる生活

相馬御風

此の間早稻田大學々長洋行見送のため新橋に行つた。其の時恰度僕の友人の橘君も學長と隨行するので、其の場に居合せたが、偶々僕は妙な事を考へた。

其の時新橋は人で一杯で何處に高田學長が居るのか、何處に橘君が居るのか大勢の人がごだくして誰が送らるのか何人が送るのか更に見當が付かぬ。學長も橘君も何處へ出發しつゝあるか、判らんでうろ／＼して居る様を見て、社會的に活動する人も偉いが、斯ういふ風で送られると如何に淋しいかと思はれる。私等の旅行する時には見送る人は二三の友人しか無いが、うちとけてシンミリと語る事が出来て非常に楽しい。送られるにも眞に心が打ちとけて話をすれば誠に嬉しい。友

と雨でも降る夜にシンミリと別れる時はローマンチックですが、多數の人に接觸すると、接觸點が稀薄になつて他をしつかり意識しないでぼんやりした中に出かけてしまふ。こんな混雜な別れを経て横濱に行かば、遠い旅へ出かける意識も判らず非常に寂寥の感に打たるゝであらう。吾々が社會的に活動するといふ事を世間的の人が新橋を立つ時の様にするならば無意味なものである。自分が相手とする世間と自分との間が此の如く稀薄であるならば無意味であるまいかと思ひました。

吾々は廣い舞臺で騒ぎがちであるが、外的に廣く大きく生活する事が、果して其れ程偉い大きなものであるか否かは別として、機械的に生きて行く事が偉いかも知れぬが、何時かは其人の心に淋



迫を受け、其總害虐を受けざるはなし。

○其極に至りてや、惡魔も亦主に屬す。惡魔の我等の主に屬すること猶我等の主に屬するが如し。時至れば惡魔も亦皆救はれむ。萬魔怒りて主に反すと雖も主より逃るゝ能はず。主の救の手玆に在り敵すべからざる也。洋々たる生命の水は九百原の下に下ると雖も活流して枯骨を蘇生せしめざれば止まざるなり。萬魔其現實の溶解せられ、其元種子救はれて、神の本旨に更に實體に於て新に生る。斯く至尊の主上は、又最下に降御して終に宇宙の萬生を父母の一家に上引して永遠に共に樂ませ給ふ。若し此の自然界の或は悲慘なる迫害を通じても眞に超自然の御所に參ぜんと欲する者、其道明に夫れ知るべきなり。

○夫れ道は十字架なり。十字架は人道なり。即ち天道なり。天人合一の生道は十字架なり。聖々々なり。一點苦めば全道苦む。一界悲めば萬界其の悲を同じうす。之を同じうせざる者は非道なり。

嗚呼斯の道や。降りて玆に在りと雖も光々燦々として萬面玲瓏の天に昇る、其必由の門戸は我が主の十字架なり。夫れ十字架は活人なり。虛號に非ず。十字架は無我の爲に其自體に於て率先する活人なり。同時に又無我の爲に其自體に於て殿後する活人なり。是の活人や眼光燦々曾て萬里の針尖をも失はし。

○其實體たるや、尤も其奴隸然たる所に在り。クライストにして若し奴隸然たらずんばクライストに非らず。救世の志ありと雖も無用の長物を免れじ。僧侶一輩と亦何ぞ異らん。クライストのクライストたるは、其奴隸然たる受難の所に在り。其餘の善美は、此世に於ては、所屬の如し。故にクライストは、正に僧侶の反に立つ。最高奴を以て自ら任ぜらる。救贖惟一の實體なり。

○ああ根本病なり。兄弟ありと雖も之を安んずる能はず。朋友も慰むる能はず。妙樂天界よりするも益なし。然らば則ち此の時に當りてや之を如

何。ああ之を如何。唯我が主に於て死する一正道あるのみ。主に於て死せば主に於て生る。能く主に於て生する者今幾人ぞ。若し其私なければ皆能くす。

○十字架を負うて主に従はんと欲する者は當に一切其所有を賣りて貧者に與ふると共に、中心より誠に其十字架の任を悦ぶべきなり。樂んで奉事すべし。

○主に於て當に全民を救ふに盡すべし。天下皆貧ならざるなし。己れ釐毛の私なくして主の爲めに天下を救ふに盡すべし。其政に在りて可なり。其教に在りて可なり。日々己が立つ所に於てして可ならざるはなし。其外を求めじ。政を行ふ者固に正しくして、毫も私財を有すべからず。教を施す者誠に直くして毫も毀譽の念あるべからず。標準は神に在り。神なり。方針は正しく神に向ふ。

○萬事を主に捧げ、萬惡を己に負うて主に従へば、必ず小兒に新に生る。至小の兒なり。然れども小兒當に夫れ成長すべし、故に人は當に大人に至るべきなり。(進小と矛盾か矛盾に反す) 十字架の道

乃ち然り。

○人は必ず其私を圖るべからざると同時に、又自ら安んじて福の來るを俟つべからず。必ず當に起ちて戦ふべし。己の爲に戦ふ勿れ。己を惡み己と戦ひ、而して己に勝つべし。若夫れ己を惡むことを惡む者は、此の範圍に非らず。其自由とする所を以て暫く自由にせよ。然れども、己を以て持するを得るは、個人冬季閉鎖の間に止まる。神の春季漸く四方に臨めば、頑我の情も亦皆永釋せざるを得じ此の時に及べば、黑白自然に人々に分析せらる隱す能はざる也。

○時至らざれば物長ぜざるは自然なり。何ぞ獨り人に至りて然らざらんや。其私を以て助長するは、不自然にして其身に禍す。故に吾人は當に興起して天時の至るを俟つべきなり。善戰は其中に在り。自ら興らずして徒に神を恃むべからず。徒に神を恃むは、自ら仆るゝ所以なり。神に由らずして自ら興らんとするは、亦た自ら仆るゝなり。神の法なり。神に於て興起せよ。自ら其私を殺し

永へに續かざる蓋し故あるなり。若しクライストの杯を飲んで生民に甘露を與ふるを得ば、慘血復何ぞ傷まんや。終に福となる。痛苦の深は實に道の生民に達せざる所に在り。世人の暗黒なる所に存す。苦痛形情一ならず。忍耐も亦苦杯なり。神は人と忍耐に偕にせらる。忍耐の忍耐は神に在り。神其内より下向して、人をして共に向上せしむ。

○人は専ら當に神の生命に生くべし。クライストに於て生命すべし。誠にジイサスに學ぶべし。夫れ人を無限に愛し、其の愛を以て尊嚴自ら重んぜし人ジイサスクライストの如きは、天地を極めて有らざるなり。然り而して此人や實質に於て百姓なり。光づ苦杯ニガキサツキを全世界の爲めに飲み、其の全民に全赦を下して民の中なる荒穢地を開拓し、之に播くに新生命の種子を以つてして之を培養し、其をして實を結ぶこと既に此世に於て百倍六十倍、或は三十倍、各々其所に其類に適して成長せしむ。而して其或は遂に適せざる惡地は別に掃淨して他日の播種に備へしむ。

○生命の成長は常に内より始む。上より降りて又昇る。凡そ旋轉開新の道は皆上昇なり。其降るは即ち其昇る所以なり。是の道や我より生ぜず。我を以つて長ぜず。必ず神に由る。我は當に小に進み謹んで是の道を履むべきなり。攻守の勢今日共に堅く持續せざるべからず。

○我等は既に自然界に來れる者。今よりの勉強は、斯界を通じて超自然に達するに在り。今より更に斯界に向つて進むべきに非らず。世の君王たるは我が目的に非らず。我等の願は神に於て神の衆民に事へんと欲するなり。神に於てせずして敢て民に接せず。神の道に於て斯民の爲に苦勞を厭はず。其道に勞して共に忍耐す。斯界を通じて無私となり、與に共に超自然に昇らんと欲す。一切無私となりて唯神の命に之れ従ふは、是れ我等の目的なり。

○或人問うて云く、國防之を如何と謹んで答へて

曰く、國防の本は世界防に在り。世界防の本は宇宙防に在り。然り而して宇宙の防禦は、先づ絶對に我が心を開くに在り。暗黒を寶とする者は永遠の光明を受くるを得べからじ。

○ああ苦痛も廣し。深し。大なり。苦痛は必ずしも病態なる感觸の上に止まらず。最高の苦痛は、清淨健全なる新生命を有する人に在り。其此世の百邪と戰觸する所に於て存す。是れ尤も痛切に苦む。世人の知る所に非らず。

○夫れ道は順なり。故に教は順なり。父母神チ、ハカミに順なる生活を力行せしむる、之を教と謂ふ。本教なり。其外部を政治となす。政教豈二道あらんや。皆神に順なる生活を上下に達する人道なり。

○人、本、順なり。此世不幸にして不順に陷る。之を救ふ必ず順を以てす。至順を以てせざる可らず。至順は神の性なり。太古不幸事の此世に起りし時、其時早既に聖降誕の神思ありて定る。原因界

に於て既に降誕の始を作したりき。基督士救贖身の始なり。後年(二千年前に至り)——ジイサスの身に於て其降誕せられしは、實に基督士救贖身の一要點の其緊要時間に此世の人類に接觸せられしもの、即ち救世神の一要點の一顯現に過ぎざりき。蓋し時の緊要にして又事の至要。誠に一點を以て萬事を永遠に貫く要道なりき。當時ジイサスクライストとして知られたる身は如此し。誠に實に神の救贖身體の一點の顯現なりき。

○我等の神、救世主は、始の降誕より今に至るまで、十字架を負うて間斷あらじ。此極より彼極に至るまで、一貫萬徹同情共感、勤行相任じて尤も重を極む。最下不具の婢奴に及ぶまで、一をも洩さず、之を擔ひ之を扶けて宇宙の爲に自ら勞苦せらる。(此世の爲は即ち宇宙の爲)全世界の爲に其個人を通じて内外より勞苦せらる。凡そ人の勞苦する所、主は其中に於て相共にせられざるなくして尤其極に至る。凡そ人の侮辱、窘迫、害虐せらるる所、主は其中に於て其總侮辱を受け、其總窘



なり。信人の外に大和なし。大和は謙和と二にして一なり。永遠の生命に係る。

○人若し我を批判するあらば、宜しく心謝して自ら省みよ。必らず我を益するあり。蓋し人の生や過を免れず。其故一にして足らず。必しも惡ならず。或は同情に出づ。又眠覺めて自省の嚴ならざるに因る。一にして足らず。我果して神の爲めに神に於て生くるか我將た些少と雖も私の圖あるか、其間自ら嚴察を缺くに因りて誤る。人の過や、其故一にして足らず。人の我を攻むる必しも故なしと限らざるなり。我若し最謙に下り、正順の心を以て批判を其受くべきに受くれば必らず益す。大和に進むの力となる。宜しく心謝して聽くべし。何ぞ一念だも其私を起すべけんや。若夫れ徒に人の攻撃を避け又拒む者は、是れ物を擁して物を絶つ者。開新の罪人なり。攻撃は、吾人謙に於て寧ろ歡迎すべし。生命由りて長ずるあり。

○大道目的明々なり。我が道は先づ大和にあり。故に進むあらば大和に向つて進むなり。明々なら

ずや。然るに若し或は和を知りて表面に和するも、クライストに於て共に包容するなくんば、生命に長ずるに由なし。主の謙に反すればなり。生命なる大和は、必ず名々クライストに抱かれてクライストを抱く實生活に於て成る。謙に生れて謙に成る。

○吾人は神の一家中なり。現不現皆共にす。兄弟多し、姉妹衆し。皆大父母の小子供なり。若し現在に於て一人あり。其私を以て肯て他と叶はずんば、衆他亦之和する能はざるは、是れ法中の勢なり。然らざるを得ず。憐むべく又恐るべし。其和合必しも千年後能くすべからざるに非ざるも、其今日の損如何ぞや。日程は明日を待たず。今に在り。常に此日に於てす「孝子愛日」<sup>チャム</sup>。神に孝なる者は、是の故に兄弟の爲めに此の日を之に愛む。

○永遠の開新は必ず是の微妙の道に由る。救世の神の道なり。是の道や針孔の間を通る猶無限の如

し。其來るや物の以て禦ぐべからず。其力は靈に在り。而して微塵に由りて天地を築き、至纖を用ゐて神人を貫く。人の情性の永へに開新する所以なり救はるべき者は是の故に、其時達すれば、假令逃れんと欲するも逃るゝ能はず。招引せられて皆定命の貴郷に入る。

○我等此世に生れし者は、其國法上に於ては、無罪なりとも、生來其心身體制の實質に於て、遺傳的に又自業的に皆不潔を免れず。綿々累々、一般に又特殊に、此世と關係せざる者あらざる也。若し我れ絶對に世の息を息せずば、清と雖も得て世に在らじ。汚世に居て其汚濁に勝つは、是れ誠に眞息の神戰なり。凡そ在世の人は、比較上稍々清と雖も生來皆濁濁なり。綿々たる遺傳其原因なり。クライストの火に於て之れ洗はる。

○天下兄弟病に苦む、我豈獨り免れんや。天下の氣に於て我其病息を息す。一局部の消毒は、吾が天下の心を輕快せしめず。世俗の醫法は毒々の移轉に過ぎず。世の學問宗教皆然り。ああ、萬方の

濁濁は是れ我が不潔なり。萬方若し昭明ならば我與に共に清淨ならざるはなし。故に我の救はるるは、必ず世の救はるゝに由りて成ると同時に、世の救はるゝは、又我が救の成るに待つあり。故に一人を忘るは天下を忘るなり。而して天下を思うて我務を盡さざるは、一人をも善く愛せざる事實となる。

○活水即ち靈火の、我等全體に達する時、神の心は、恩と法とを以て貫いて萬有の人に開く。一人より億兆に達し。億兆を通じて一人に至る。是れ救なり。乃ち赦なり。無限樂園の富、無數宮殿の美、夫れ然る後燦々躍々、定命の自由に從つて興る其の興るは何國ぞや。我等の中に新に構築せらるゝクライストの天國なり。

○今や人の病むある、類多し。同情に因由するもの亦少しとせず。遠近淺深其情固より異なるあり。赦者と被赦との關係なる多し。其事に當らざれば知らず。故に達人の病を觀るや、悲喜共に世人と反するあり。悲情は終に大慈に吞まらる。慘々の涙

中よりも、科學の中よりも、現代文明の中よりも、眞理は悉く攝取しなくてはならぬ。宛然金米糖の種なる芥子が砂糖の内に轉つて、何時の間にか麗はしき結晶體と成るやうに、吾等の心靈は、一切の眞理の中に轉がつて麗はしき眞理の結晶體を現出し、かくして宗教的生活は、間斷なく進歩發展するのである。これは即ち極みなき生活である。創造的進化である。宗派心を超越したる大精神である。凡て眞なるもの善なるもの、美なるものを排斥せざる生活である。統一的生命の生活である。此處に無限の歡喜がある、悅樂がある。希望がある。

自己の本心に於て、信仰も希望も無きものとすれば、現代は失望落膽すべき時代であらふ。且つ、一年を隔てて再度の諒闇を迎へたる國民は、愁嘆して不安を覺ゆるのであるが、吾人は現代に對して悲觀を抱くものでない。徒に悲觀するものは、自己の内心に何等の確信と希望とを有せざる者である。吾人は容易に悲觀せざるものである。現代の休微の中に將に來らむとする大いなる時代の光明を認めざる者である。宗教改革の時は近いた。吾人が踴躍して突進す可き秋は來たのである。



## 不 求 是 求

（新井奥彦先生最近の述作「不求是求」を僕に恵まる。謹讀して僕の感銘したる章節を手録して同志に頒つ。内ヶ崎作三郎）

○大和は人なり虚號に非ず。大同和化する有信の人なり。夫れ大和と謙和とは二にして一なり。謙ならざれば大ならず。吾人大和を以て目的とすれば、其學ぶ所知るべし履んで大和に至る、是れ謙和の道なり。履んで大和に至らんと欲せば、日夜謙下に立ちて務めざるべからず。謙々として大和に至るの事を以て事とするなり。吾人の務其れ知るべし。大同和化の信人を成すに在り。

○夫れ大和は人なり。人の外に大和なし。人を離れて道あらじ、吾人信じて大和を祈願す。信人茲に化成せむ。大和の事業は謙和を以て大和の人を

成すに在り。

○大和と謙和と二にして一なり。謙和は自個獨り成るべからず。神に於て人と和して茲に謙の大和となる。神に於て眞に人と和する必ず謙に由る、謙和豈容易の事ならんや。謙和以て大に至る、大和の事業固に容易に非ざる也。

○苟合は神の道に反す、故に和せず、何ぞ況んや大和をや。苟合は心なし。有れば私なり。謙に反す。故に大和に反す。苟合は私なり。私にして信なし。故に傲る。夫れ信なくして傲る、是を以て樂まず。暗雲常に良貴を繞ふ。天下の詐僞は皆此に由る。人は謙々大和に至りて而る後茲に始めて人となる。大和は人なり。大同和化する有信の人



知らぬが、創造とは非常に宗教的な言葉である。宇宙人生は神の生命の間斷なき創造に因つて存在する。吾人はこの大生命の進歩と發達を賛翼するために生活するのである。故に吾人に獨創の思想が生じ獨創の實行が生ずる時は、即ちこれ吾人が宗教的になりたる時である。神人合一の妙境は此處に在る。さればベルグソンの創造的進化が歡迎さるる時代は、決して無宗教の時代でない。

現代は現實に非常なる興味を有する。中世紀の人は未來に憬れて、現在に顧みなかつたのである。彼等は現實の務めを果たすことをせずして、只管未來の淨土を欣求したのである。現代人は敢て永遠の生命を否定するのではないが、永遠の生命を現在に於て、最も深く味はむとするのである。即ち、生の緊張である。未來に憬がれて、現在を忘れたる中世紀の人が、宗教的であつたとすれば刹那々々の現實に忠實にして、時の流れの内に永遠を求めんとする。現代人は如何して無宗教といへやうか。

現代に於ても、戦争は止まない。バルカン戦争が未だその餘燼を治めざるに、米墨は相鬭ぎ、アルスター問題は將に英國に内亂の血の雨を降らさんとしてゐる。されど大體に於て、人と人との關係は、中世紀に比べては親密となり、好意と同情とが増したのである。随つて宗教の争は減少し、社會事業も勃興するに至つた。或は愛國婦人會となり、或は赤十字社となり、或は濟生會の事業となつたのである。かくの如き現代は、前代に於ける最も宗教的な時代に比しても、決して非宗教、無宗教の時代といふことは出來ないのである。

吾人は以上の理由に基いて、宗教改革の將に來らんとすることを豫言する者である。吾人は斷言する、改革を要するは實に佛教神道のみに止まらない、基督教も亦改革を要するのである。夫れ眞理は永遠に進歩する。進歩せざるものは眞理でない。經濟に進歩がある、法律に進歩がある。政治に進歩がある。何故に宗教にのみ進歩がないか。勿論事柄は、歴史的に發達するものであるから、過去に對しては、尊敬を拂はなくてはならぬ。されど吾人は、過去に對すると共に、將來に對しては、新なる努力を試みることを忘れてはならぬ。基督教も改革を免れないのである。十六世紀の宗教改革は、近代の天文學、物理學、地質學、化學、生物學等の發達せざる前の產物であつた。ルーテル以後四世紀の間に、人文は驚く可き發達をなしたのである。二十世紀の人心は、最早や十六世紀の思想を以ては抑壓することが出來ぬのである。神觀、基督論、及教會制度の如き、皆新たな解釋を試みなくてはならぬのである。吾人の宗教的感情を充分に云ひ現はさざる讚美歌の如き、悉く改正を要するのである。今は處女降誕説や、奇蹟や、肉體の復活を口にすべき時代ではない。二十世紀の文藝復興は、斯る形式を悉く打破して仕舞つた。只心靈のみが打破されずして残つた。靈犀一點の光である。この光こそ、宇宙大生命の光れる表現である。この光を輝かしむることを稱して宗教的活動と云ふのである。舊約全書は猶太國民の宗教的實驗の記録である。新約全書はイエス及びその使徒等の生活及び教訓を蒐めたるものである。皆共に吾人の貴重なる聖典である。吾人は今日もなほ聖書の中に現はれたる眞理によつて動かされる。しかし眞理は聖書よりも大なるものである。眞理は聖書にのみ現はれてはゐない。吾人は聖書以外の眞理をも攝取するものである。佛教の中よりも、儒教の

セクスピアの劇を観たのである。若しその當時かの劇場に行かば、天下の人は悉く此處に集りたらんとさへ思はれた。されども倫敦中央のセント・ポール大寺院に赴むけば、其の本堂の教壇には、白衣を纏へる僧ありて、テンダルの手に由つて英譯せられたる聖書を朗讀し、その下には、眞面目にして敬虔なる善男善女が、一團となつて神を讚美してゐるのである。若し同じ人が、かの劇場より此の寺院に來たりしならむには、天下の人は悉くこの内に集つたかの感があつたであらふ。それ人は自由を欲する、けれども良心の聲は壓へることは出来ない。良心の權威を認むるところの自由にして、始めて神聖なる自由である。良心なき自由は、眞の自由ではない、放縱である、我儘である、自暴自棄である。南歐に於ける文藝復興に對し、北歐より宗教改革の聲が起つたのは怪しむに足らない。已に思想の自由を得たる人々は、腐敗したる宗教家と、時勢後れの制度とを見るときに、手を懷にして傍觀は出來ず、奮ひ立つて改革を叫ばねばならなくなつた。若し文藝復興を兄とすれば、宗教改革は弟であつた。文藝復興は大いなる運動の前半にして、宗教改革は其の後半であつた。今日日本に於て文藝復興の大運動に觸れて思想の開放と自由とをなし得たるものは、從來の宗教と、其の制度と、其の代表者とを見て果して手を懷にして、傍觀することが出來やうか。又偽善な道德家と、根底なき國民道德とに對するとき、如何にして無關心の態度をとることが出来るか。西本願寺の墮落はこれ何の狀ぞや。此は常に佛教の問題にあらざして、國民的大問題である。中世紀に於ける羅馬教會の墮落が、ルーテル、メラニヒトン、カルヴィン、ツィングリイなどを生みしとせば、現代の日本は確かに、宗教改革家を生まねばならぬのである。西本願寺は日本に於ける羅馬教會ではないか。その制度に於て然り、

その組織に於て然り、その教義に於てすら相類似するところがあるではないか。吾人は本願寺の墮落を以て十六世紀の羅馬教會のそれに勝ると思惟する多くの證據を有してゐるではないか。本願寺の墮落は、偶々以て、天下の宗教改革者を奪ひ起さしむる一刺戟でないか。

## 五

人或は現代を以て、懷疑的、物質的にして、大なる精神運動の勃興は斷念せねばならぬといふかも知れない。しかし吾人は必ずしもこの論に同ずることは出来ない。現代人は必ずしも懷疑的でない。懷疑とは凡て未解決の状態にあることである。現代人は幸か不幸か、生活問題の壓迫のために、働らなくなつては食はれぬ時代に生れ合はせたのである。即ち現代は暢氣な生活を許さぬ時である。皆努力奮闘して以て生を保つてゐる。そしてその努力奮闘の中に始めて、大なる慰安を見出すのである。中世紀の人は働かずに、僧院の内に閉ぢ籠つて、祈禱と瞑想とを事とした。現代の人は巷に立つて働き叫ぶのである。その掌よりは血潮したたり、その額よりは膏にじみ、その眼よりは涙下るのである。何れを以て宗教的となすべきぞ。怠惰なる隱遁者をしも宗教的であるといへるならば、勤勉なる労働者は、猶更宗教的ではあるまいか。試みに現代の生活を見よ。あらゆる階級を通じて労働の精神は勃興してゐる。労働とは即ち汗を透して現はるゝ處の吾人の祈禱ではあるまいか。又現代人は獨創的精神に富んでゐる。何れも新工夫をなし新機軸を案出せんと努めてゐる。敢て舊き模範に則うとはせない。近頃は「創造」と題する雑誌すら發行されてゐるが、其の發行者は、その意味を解するや否やは



驗したことの無いある力に遭遇して、空想をのみ呼吸したる者をして、地上の實生活を實驗せしめ、未來にのみ憧憬したる者をして、現在の生を享樂せしめた。一方に於てはこの力のために賢明なる階級の頭腦は、殆ど改造せられた。彼等の頭腦を、十重二十重に包む表皮の一枚一枚は、剝がれ行くかのやうに覺えた。新緑の頃に、舊き裕衣を脱ぎ捨て、仕立がけの裕衣を着た様な氣分となつた。一切の事相にのみ捉へられたる人が、今は眞髓を考へ且つ談ずるやうになつた。平凡なる吾人の實生活の内に、量る可からざる神秘を發見するに至つた。否、日常生活の一舉手一投足は總て神秘なるものとなつた。勿論一部分文藝の士は多く享樂の徒である。彼等は感能の強き刺戟にこよなき快感を感じるのである。彼等の或る者は、肉の戰に勞れて、激烈なる神經衰弱に罹り、跟々踏々として世を渡りつゝあるのであるが、彼等は人生その物に對する哀れなる敗北者なることを忘れてはならない。されども如何なる名將軍も犠牲者なくして勝利は得難い。これは實に止むを得ない事である。この混戰の結果まづ思想の自由は得られたといつて差支ないのである。日露戰爭のごとく隨分高價な勝利であつた。先人の說に拘泥することなく、舊き權威のために壓迫されずして、彼等は自由に自己の思想を思索することを快とするやうになつた。かくして哲學は復活し、オイッケンやベルグソンは盛に紹介せられ、評論せられ、思潮そのものに對する識者階級の興味は大いに膨興したのである。海軍の腐敗、實業家の不正、及び官吏の收賄を、現代の文藝復興に結び付けたるは、適當な論法でないかも知れない。されどもこれらは皆、時代思想の副産物ではあるまいかと考へられるが故に、斯く論じた次第である。

## 三

文藝復興期の人物は、皆多方面なる活動家であつた。例へば伊太利のレオナルド・ダ・ヴィンチェの如き、政治、繪畫、彫刻、音樂行く處として可ならざるはなかつた。ミケランゼローの如き、畫家にして彫刻家を兼ねてゐた。英國のウオター・ローリーの如き冒險家にして海賊の首魁、詩人にして歴史にも筆を執つたのである。フランシス・ベーコンは法律家にして、哲學者、兼ねて廷臣であつた。この時代の人は働いて疲かるゝことを知らなかつた。現代の日本に於ても、諸方面に活動する人を見るてはないか。現内閣の首相大隈伯の如き政治家、著述家、兼教育家にして、しかも雜誌を計營し、常に外國の來訪者を迎へ、社會のあらゆる事業に關係して、更に疲勞を覺えないのである。實業界に於ける澁澤男の如き、實業、政治、社會教育の多方面に活動しつゝある。目醒ましいといはざるを得ぬ。徳富蘇峰氏の如き、新聞記者にして政治家及び策士を兼ねてゐる。森鷗外氏の如き、陸軍々醫總監として、傍ら創作及び翻譯に筆を絶たない。その活動は勇ましいといはざるを得ない。その他斯る例は外にも多いのである。これ吾人が日本現代の思潮が歐洲文藝復興期の其れに類する處ありと、斷ずる所以である。

## 四

英國に於ける十七世紀の文藝は演劇全盛の時代であつた。倫敦の高襟連中は、競うてグローブ座に

た。そして只管形式の埒を越えざらんことをのみ留意して、そこに何等個性の充實なく、創造も無かつた。要するに眞實の努力が不足してゐたのである。明治の新政は、政治上の自由を齎らした。政治上の自由は同時に法律上の自由となり、新らしき文化に酔ふたる人心は、舊道德と舊信仰とに満足することが出来なくなつて來た。故に彼等は、宗教と道德を無視して、否、表面にはそれらを尊敬する如く見せ掛けて、袖の陰にて笑ひつつ、破廉恥な不道德な行爲を敢てしたのである。

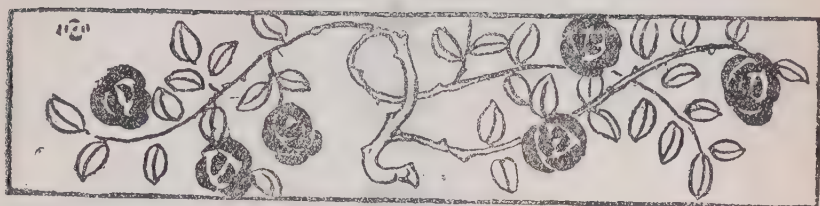
王政維新は、主として士族の手によりて成就された。兎にも角にも、士族は日本國民中最も永く且つ嚴しき訓練を経たもので、一種の理想を鼓吹された階級である。彼等の思想は、舊思想であつたかも知れぬ。されども彼等は其の中に生命を見出した。否、彼等が獻身的の熱心を以つて、舊道德その物に生命を鼓吹した。日清戦争頃までは士族の理想は嚴として存したのである。然るにその頃より、實業社會が俄然その頭角を擡げて來た。彼等は實に士農工商中、最も輕蔑せられた階級であつた。

されども『時』は魔力である。明治新政三十年の間に、彼等實業家は時勢の要求に應じ、着々としてその地盤を造りつつあつたのである。彼等は時代の經濟的要求に應じて現はれたる階級で、國民生活の實權を掌握するに至つたのである。『利益』これが實業家の標語であつた。利益の前には彼等は凡ての物を犠牲とした。彼等は賄賂を行使した。彼等は猛烈なる競争を試みた。彼等は官僚と結托した。金を欲する者は金を以つて招き、色に溺るるものは色を以つて捕へた。爵位も、武勇も、名譽も、悉く黄金王の前に屈服した。かくて黄金萬能の時代が出現した。昨年以來、海軍の腐敗となり、三井物産會社重役の不正事件となり、宮内大臣の免官となり、西本願寺法主の管長辭職となりたるなどは、

皆時代思想の產物である。一部の軍人と官吏とは、表面はなかなか忠君愛國家の如く見せ掛けたのである。而かも裏面からは、私利私慾を擅にしたのであつた。彼等は惡しき意味に於ける思想と行爲との解放を實驗したのである。彼等が口に唱ふる忠君愛國は、彼等の心に對しては何等の權威をも有しては居らなかつた。或は大手を振つてコンミッションを懷にし、或は妻妾をして盛裝せしめ、或は子孫のために美田を買ひ、或は王侯の如き邸宅を構へなどしたのである。彼等は知らず知らず文藝復興の潮流に、捲き込まれたのである。

これと時を同うして、歐洲の新思想が傳へられた。ニーチエーや、イブセンや、モーバッサンや、シヨールや、トルストイや、ワイルドや皆深き印象を日本に及ぼした。英文學が十五世紀に於て伊太利文學、十八世紀に於いて佛蘭西文學、十九世紀に於て、獨逸文學、二十世紀に於て諸威や、魯西亞の文學の影響を受けた如く、最近數十年の日本文藝は、著しく歐洲文藝の影響を受けたのである。一體歐洲文藝は古き歴史の背景を有し、その背景あつて初めて、前記の諸文豪が現はれたのであつて、この背景を研究せずしては、十分に歐洲文藝は理解することが出來ないのである。然れども、文藝の勃興はかかる廻遠いことはして居られなかつた。古き印度と支那も、又古き歐洲も、否日本それ自身すらも充分に知らざる青年文士は、争うて泰西諸文豪の靴の紐を解いたのである。彼等は盛んに名著の翻譯をした。彼等は實に詰らぬものまで翻譯をした。しかしながらこれは大勢であつた。壓へきれない大勢であつた。日本の思潮界に於ける大嵐時代ストルムウントドラングであつた。日本の青年の思想は非常に動搖した。或は本能満足といひ、或は肉の開放と呼び、或は自然主義と稱したが、兎に角、日本の青年が、これ迄未だ經





## 文藝復興より宗教改革へ

内ヶ崎 作三郎

### 一

現代の思想を大體より考ふれば、文藝復興期と言ふことが出来やう。今日は個性が自由と、開放とを要求する時代である。歐洲では十四世紀より十五世紀に掛けて、文藝の復活があつた。それは思想の自由の要求であつた。それは久しく檻の内に捕はれたる野獸が、自由なる空氣の中に放たれたる態度であつた。當時の南歐に於ける實際道德は紊亂を極めたものであつた。宗教及び道德の權威が疑はれたのである。人は只管に自己の慾望を満たすために働いたのである。彼等には藝術的良心は有つたかも知れないが、道義的良心は甚だ缺乏して居つたのである。趣味の人は乏しくはなかつたが、實行の人を缺いたのである。感情の人は多かつたが、果斷の人が少なかつたのである。己れの慾望は重んずれども、他人の慾望は輕じたのである。利己と利己とが衝突したのである。貪欲と貪欲とが格闘したのである。情慾と情慾とが挑み會ふたのである。斯く

して肉慾の天國が現出せられ、斯くして舊き一切の物に對する信仰は忘却せられ、人心は動搖に動搖を重ねた。若し道心堅固にして敬虔なる清教徒ピュリタンにして、この状態を眺めたりしならんには、世の終りは近づき、人の子雲に乗つて審判の座に着き、喇叭の聲喧しく鳴り轟くと思つたかも知れない。

萬象は流轉す。因果の廻る小車は、永遠より永遠に亘りて、その廻轉を歇めない。或る人の言ひたるが如く、人生一切の事相は、總て循環小數である、容易に割り切れない、否、割り切れない處に、人生の妙味がある。文藝復興が、そのみにて終りたりしならんには、餘り面白い運動ではなかつた。然し乍ら、そは宗教改革を導き出したのである。思想の自由は、矢張り良心の自由を促したのである。因らばれたる思想が、先づ長夜の眠より覺めて、その友なる良心を呼び起したのである。近代の歐洲文明は、斯くの如くして、その華々しき舞臺の幕を開いたのである。文藝復興のみにては、近代の政治の進歩を促すことは出来なかつた。社會問題を解釋することは出来なかつた。宗教改革のみにては近代の新文化を創造することは出来なかつた。近代人の内容豊かな精神生活は創り出されなかつたのである。文藝復興と宗教改革との兩者に、長足の進歩をなしたる科學思想が加つて近代歐洲文明は生れ出てたのである。

## 二

我が國現代の思潮は泰西に於ける文藝復興期のそれであることは、曩いにしへ言つた如くである。明治維新に至るまでの我が思想界は、政治、道德、宗教、文學、美術など皆囚へられたる思想の上に立つてゐ

# ■ 教文館と洋書 ■

## Century Bible

(1.25 *sen* each, post. 06 *sen*)

- Bennet, W. H.—Genesis  
 ” ” ” —Exodus  
 Kennedy, Ars.—Leviticus & Numbers  
 Robinson, H. W.—Deuteronomy Joshua  
 Thatcher, G. W.—Judges & Ruth  
 Davies, T. W.—Ezra, Nehemiah, Esther  
 Peake, Q. S.—Job.  
 Davison, W. T.—Psalms Vol. I.  
 Davies, T. W.—Psalms Vol. II.  
 Martin, G. C.—Proverbs, Ecclesiastes, Songs of Solomon  
 Whitehouse, O. C.—Isaiah Vol. I.  
 ” ” ” —Isaiah Vol. II.  
 Harton, R. F.—Minor Prophets I.  
 Driver, S. R.—Minor Prophets II.

## Library of Standard Biographies

(.50 *sen* each, post. 08 *sen*)

- Boswell, J.—Life of Johnson  
 Bourrienne, F.—Memoirs of Napoleon Bonaparte  
 Lockhart, J. G.—Life of Sir Walter Scott  
 Maxwell, W. H.—Life of Wellington  
 Southneys, R.—Life of Nelson  
 ” ” —Life of Wesley

## New Tracts for the Times

(25 *sen* each, post. 06 *sen*)

- Barry, C.—Literature, the Word of Life or of Death.  
 Ellis, H.—The Problems of Race-Regeneration.  
 Horton, R. F.—National Ideals & Race-Regeneration.  
 Meyer, F. B.—Religion & Race-Regeneration  
 Newsholms, A.—The Declining Birth-Rate  
 Saluby, C. W.—The Methods of Race-Regeneration  
 Scharlieb, M.—Womanhood & Race-Regeneration



東京

教 文 館

銀座

(振替東京一一三五七)

六合雜誌



六月號



# 六合雜誌第三十四卷第六號目次

評論欄

文藝復興より宗教改革へ

内ヶ崎 作三郎 二

『不求是求』より

記 相馬 御風 一三

自己に眞實なる生活

鈴木 龍司 二五

宗教的經驗とは何ぞや

岡田 哲藏 三八

A Deeper Religion

西宮 藤朝 三九

露國に於ける宗教と文藝

中澤 臨川 五〇

久遠の女性

中澤 臨川 五〇

The modern Job, the Son of Job

C. W. Wendte 五九

文藝欄

イスカリオテのユダ (アンドレエフ)

千葉 掬香 六〇

西灘より (詩)

中野 一郎 共譯 七一

悲しきまみ (歌)

佐藤 藤寥 七四

さらばモスコウよ

伊藤 山 七五

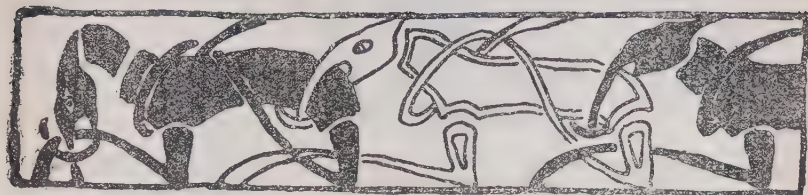
鎌倉にて (詩)

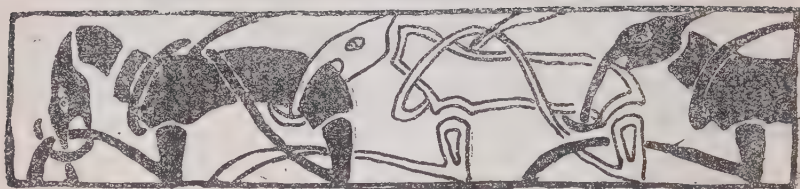
盧山 夫 八〇

## △新緑をたたへて

栗の花の香ふまで

五十嵐 力 八三





緑の沈黙	吉田孤雁	八五
居留地と新開地と	石田樅	八七
牛舎の新緑	寛流	八八
いづこもみどり	林三郎	八九
銀杏樹の蔭	久松黒巢	九一
ワルトブルクの菩提樹にまで	三並良	九二
靄につつまれた夕暮	吉田絃二郎	九四
夢の羽ばたき	野口精子	九七

社會欄

女子と參政權	田中久子	九八
婦人の世界	記田	一〇一
まだユニテリアンをやめぬか	岸本能武太	一〇二

時評欄

△人及び藝術家としてのトルストイを読む(加藤)	△斯の如き影響あり(甲鳥)	△根本的廓清を要す(内ヶ藤)
△時事問題と大學教授(星島)	△自治能力の試金石(嶺北)	△大隈内閣財政政策を評す(高橋)
△國民道德振作に關する内相の訓示に就いて(高橋)	△思想の輸入超過とは如何(菊川)	△大隈内閣の成立(鈴木)
△コムミッシヨン亡國論(鈴木)	△移民政策の確立(鈴木)	最近代に於ける宗教心理學
新刊批評	惟一館たより	編輯室より

安心して使へる齒磨

ライオン齒磨

信用して買へる齒磨

■ライオン齒磨には粉製・煉製・水製・

子供用と四種あります。それぞれの

長所があつて、容器も亦いろいろで、

慈善券附小袋入・大袋入・特大袋入・

箱入・瓶入・罐入・押出し管入とあり

ます。

■ライオン齒磨の粉製は専ら家庭徳

用向で、煉製は實質外觀總てハイカ

ラ向に拵へてあります。水製は食後

寢前又口熱の時に最も宜しく、子供

用は他に例なき親切な思附です。

# THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 401. June. 1914.

## CONTENTS.

The Renaissance and Reformation. ....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
Fragmental Thoughts.....	Anonymouse.	13
Live faithfully to the Self.....	Prof. G. Sōma.	21
What are Religious Experience? .....	R. Suzuki.	25
A Deeper Religion. ....	Prof. T. Okada.	38
Interrelation between Religion and Literature in Russia.....	T. Nishimiya.	39
Eternal Womanhood. ....	R. Nakazawa.	50
The Modern Job, the Son of Job.....	Dr. C. W. Wendte.	59

"Judas Iscaliot" by L. N. Andréyev....	Translated by K. Chiba.	60
From Nishinada ( <i>poems</i> ). ....	K. Satō.	71
<i>Tanka</i> . ....	R. Itō.	74
First Impression of Moscow. ....	Rozan.	75
At Kamakura ( <i>poems</i> ).....	K. Katō.	80

In Praise of Green Leaves. ....	Prof. T. Igarashi.	83
.....	Prof. K. Yoshie.	85
.....	J. Ishida.	87
.....	R. Kakelhi.	88
.....	S. Hayashi.	89
.....	K. Hisamatsu.	91
.....	Prof. H. Minami.	92
.....	G. Yoshida.	94
<i>Tanka</i> .....	Mrs. S. Noguchi.	97

Woman's Suffrage Movement. ....	Miss H. Tanaka.	98
Why am I still an Unitarian?.....	Prof. N. Kishimoto.	102

Topics of To-day.....	106
Books of the Month.....	129
Unity Hall Reports.....	132

editor Rev. Prof. S. Uchigasaki, B. G. Sub-editor G. Yoshida.

Published Monthly by the  
TÔITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,  
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.



●東京帝國大學文科助教教授 文學士 宇野哲人先生新著●

最新刊發賣

支那哲學史講話

菊一全冊正金價 入箱本美製上最判 錢拾五圓壹 錢二十金稅郵

本書は上古より清末に至る迄の支那思想の概要を極めて平易簡明に叙明述して最もよく要領を盡くせるものなり。特に清朝に於ける學術思想の變遷が如何に暗々裏に革命を惹起するに至りしか支那の新人の思想は如何なる傾向を帶ぶるか著者の最も留意せし所にして從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依て補足せられて亦遺憾なし。本書は又附録として一々原文を掲げて直ちに堂奥を窺ふの便に供し亦著者の議論の根據あるを知らしむ。要するに初學者にも専門家にも座右に缺くべからざる絶好の新著なり。

（學校斯學研究者及文檢受験者が必備の參考書）

●稻毛詛風 市川虛山共著●

正價金壹圓貳拾錢 郵稅八錢

忽再版

ベルグソフ哲學の真髓

六四冊全 本美製上最判 頁百五約數紙冊壹全

（明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可）  
（六合雜誌第三拾四年第五號）（大正三年五月一日發行）（毎月一回一日發行）

〔本號に限り金參拾錢〕

發行所 東京市神田區表神保町六番 大田同館

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可  
大正三年六月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十四年第六號

# 六合雜誌



六  
月  
號

# 御來宿者を歡迎致候

高等  
下宿

## 榮林館

館主

文學士

今岡信一郎

本郷區追分町三〇

電話下谷 三三四六乙

(追分電車終點ヨリ五分間)

### 本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵税共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵税共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵税共
●海外は郵税一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

### 本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正三年四月二十日印刷納本  
大正三年五月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價  
臨時拾錢  
稅共

發行兼編輯人 鈴木文治  
印刷所 山本與一郎  
東京市芝區三田四國町  
株式會社 秀英 合

### 發行所

東京市芝區  
三田四國町

### 統一基督教弘道會

### 賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋  
◎警醒社◎敎文館其他全國有名書店

振替東京一〇〇〇三番

# チブス流行とヨーグルト

腸内傳染病流行時にヨーグルトが如何に貴重なる飲料であるか、整腸劑とし

て如何に殺菌力強きか——傳染病研究所技手目黒氏の研究報告に依ればコレラ菌はヨーグルト菌純粹培養中にて貳分間後には死滅しチブス、赤痢菌は十分間にて其影を止めぬ云々——ヨーグルトを常用すれば胃腸を健全にし傳染病を未然に防ぎ、消化機能増進新陳代謝調製萬病の源なる腸の自家中毒を除去する文明的滋養強壯牛乳製品であります

## 博覽會と愛光舎

第二會場冷蔵庫内に牛乳の瀧あり二六社主催通俗衛生博覽會内に電氣で牛の乳を搾つて御觀覽に供して居ります且一合の牛乳か如何なる順序を経て皆様の口に入るか眞に愛光舎の牛乳が安心の出来るかを模形并に活動寫眞にて御供覽に入れて居ります衛生を重んじ哺育に注意なさる人は一度御覽になる必要があると存ます

日本一の上等牛乳——山羊乳——バター——クリーム——ケフィヤ——ヨーグルト

市内朝夕配達

神田三崎町一ノ六

愛

光

舎

電本一三〇三 四三一四番



# 東亞之光

一冊金貳拾錢郵稅壹錢五厘  
二十冊金貳圓四拾錢郵稅共

每月一回 每日一發行  
五月號

▲時代思想の謬見を破す

文學博士 井上哲次郎

▲士族論

西田敬止

▲ゲーテの小説

文學士 青木昌吉

▲バラセルサスの戯曲的構造に就いて

文學士 渡邊庸三

▲現今獨逸思想界一瞥

文學士 若守義孝

▲希臘印度展覽に於ける佛教美術の印象

文學士 吉田修夫

評論

▲「外來思想と國民生活を評す」前號宇野學士  
の「王陽明と朱陸二子との關係を讀む」現今洋  
畫界の弊風ニツ▲再び婦人問題の將來を論ず  
▲人間の見世物を廢せ

▲江戸時代の勤王論に就いて

文學博士 三上參次

▲オイケン的美的個人主義

文學士 菰田萬一郎

▲英語聖書の歴史(承前)

文學士 齋藤勇

▲ヰキクトリアン、サルドウーの戯曲

文學士 淺野利三郎

▲東北凶作地の狀況

文學士 大野正一

選歌 彙報 其他

發行所

東京市本郷區駒  
達千駄木町五〇

東亞協會

振替 東京七番  
振替 東京七番

■ 毎 月 一 回 ■

# 創造

■ 一 日 一 回 ■  
■ 發 行 ■

## 鱧はもの皮かわ

- ▲ 天才と永遠の女性 (評論)
- ▲ 他人との交渉 (感想)
- ▲ 殺氣 (詩)
- ▲ 女王と鍛冶屋 (詩)
- ▲ 愛と戦 (詩)
- ▲ 鴛鴦 (戯曲)
- ▲ 結婚の朝 (戯曲)
- ▲ 自我と創造 (評論)
- ▲ 新代生活 (感想)
- ▲ アニウタ (小説)
- ▲ 悪者 (小説)
- ▲ 愛の力と自由解放 (評論)
- ▲ 毒藥の壺 (感想)

中澤臨川 木村莊八 加藤介春 本間久雄 人見東明 福田夕咲 秦田豐吉 加藤朝鳥 中村孤月 長澤武男 兵頭掉歌 片上御風 相馬御風

■ 内容に充實せしむる五ヶ月 ■  
■ 新しき歌の寄稿を歓迎す ■

一九一三年の初頭の文壇に傑作と評されたる上司小劍氏の「鱧の皮」以下の小説數篇を收めて今や之の書出づ。之れ悉く作者が爛熟の最高潮に達せる藝術的所産なり。定價六十錢

發行所 東京 市 小 石 川 區 創 造 社 (定價 金 廿 五 錢)

三四町林川石小京東

新 人 社

五〇〇四一京東替振

大附錄 政治

基督 對する宗教

教 十 宗教

回 講 の使命

演 其 帝大教授 吉野作造

三 原始基督教

月

號

□ ベッドレー論(人物月旦)

□ 有終の美を爲さしめよ

□ 歸居(チエーホフ)

□ 新道德と基督教

□ 拍谷村を訪ふ記

□ ツレーリッヒの基督論

同志社教授

□ 復活の信仰(教壇)

□ 税吏マタイ

□ 予が見たる石井先生

□ 新文相に寄す外數篇(時評) 同

□ 伯林まで

Y S

生

記 者

社 說

寺 田 智 重

法學博士 浮 田 和 民

石 田 貞 藏

日 野 直 澄

海 老 名 彈 正

稻 村 茂 樹

西 内 天 行

人

定 價

一冊十五錢

半年八十五錢

一年一圓六十

五錢(郵税共)

賣 東 京 堂

捌 東 海 堂

所 警 醒 社

所 北 隆 館

# ◎新進自由思想家の好著！

## ◀ 次 取 書 圖 ▶

著 者	書 名	冊 數	定 價	郵 稅	出 版 元
三 並 良	福音書大觀 (譯)	一	五〇〇	八〇	統一基督教會
安 部 磯 雄	現代戰爭理論 (譯)	一	八五〇	二四〇	統一基督教會並 同志者の著すと に同志者の著すと ころのものなれば 本社は地方讀者の 爲に、特に取次の 勞を執るべし、郵 税は本社に於て負 擔すべければ定價 のみを送らるべし
内ヶ崎作三郎	人生と文學の信仰 近代人の信仰 ロイド・デ・ヨール 白中黄記	一	八〇〇	一二〇	警 醒 社
神田佐一郎	登高自卑	一	五〇〇	八〇	統一基督教會
向 軍 治	ハッ當り集	一	三〇〇	四〇	警 醒 社
岸本能武太	英語發音の原理	一	七五〇	八〇	北 文 館
今岡信一良	新 神 學 (譯)	一	一、〇〇〇	八〇	同 社
小山 東 助	光を慕ひて	一	三〇〇	四〇	警 醒 社
永井柳太郎	社會問題と殖民問題	一	一、五〇〇	一六〇	新 興 社
合 著	進歩的宗教	一	三五〇	六〇	統一基督教會
加藤 一 夫	闇に輝く光	一	八五〇	八〇	文 明 堂
淺田 泰 順	新律氏和聲學	一	一、七〇〇	一〇〇	淺田 泰 順

上記の書籍は我が  
統一基督教會並  
同志者の著すと  
に同志者の著すと  
ころのものなれば  
本社は地方讀者の  
爲に、特に取次の  
勞を執るべし、郵  
税は本社に於て負  
擔すべければ定價  
のみを送らるべし

東京市芝區三田  
六合雜誌社

◎振替にの御申込みは

東京市芝區  
三田四國町

統一基督教弘道會宛に  
振替東京一〇〇〇三番



## △四百號紀念號の後

六合雜誌は本號を以て四百號に達し、不完全ながらも、此の記念號を公にすることを得たるは、吾等の大なる喜びである。本誌の創卷は實に三十三年前のことであつた。當に基督教界のみならず

一般の雜誌界に於いても、先驅者たるの光榮を有するのである。されど本誌の歴史には、幾多の波瀾あり、盛衰あり、起伏あり、伸張があつた。最初本誌は、植村正久、田村直臣、小崎弘道、平岩愼保の諸氏に依りて經營せられた。後横井時雄、金森通倫、海老名彈正の諸氏執筆し、殊に大西博士は本誌の爲めに獻身的勞役に服されたのである。博士の夭折は本誌經營の困難も一つの原因であつたとも稱せられる。本誌はその當時既に宗教上の自由主義、進歩主義の傾向を著しく代表してゐたが、終にユニテリアン弘道會の手に歸するに至つた。而して佐治實然、神田佐一郎、村井知至、岸本能武太、安部磯雄の諸氏努力し、殊に安部磯雄氏は暫く編輯主任として社會問題を提げて天下に

呼號したるは、一時の壯觀であつた。安部氏その任を辭せらるるや、廣井辰太郎、三並良氏等中心となつて、本誌の編輯に従事せられたのである。明治四十五年の一月より吾等同人編輯の任にあたるに至つたのである。

されば六合雜誌は過去三十三年の歴史に於いて日本に於ける基督教思想の、進歩發達を體現したものである。即ち正統的信仰を、以て始まり、やがて合理的基督教となり、社會的基督教となり、または神學的基督教となり、今日は實生活に立脚して、哲學、文藝、社會問題、を通して進歩的基督教の唱道者たるに至つた。

されば吾等は此の記念號を公にして、吾等の抱負を天下に訴ふると共に、過去三十年の間、本誌の爲めに努力せられたる諸先輩の功德を讃へ、更らに本誌を轉機として一飛躍を試み、同志諸君の要望に副はんことを誓ふものである。(内ヶ崎)

# !!著名大最の界世威權の壇文現!!

■ブランドス著◎矢口達氏譯■

## 十九世紀 文學主潮 移民文學

千古未曾有の英傑ナポレオンが、歐大陸を蹂躪したるかの恐怖時代前後を背景として、歐洲文藝は如何なる發達を遂げしか。不滿と絶叫とより生れたる藝術は仰も如何なるものなりしか。現代藝術評壇隨一の權威ブランドスは其の博遠なる智識力と深銳なる達觀力とを以て其時代を縱横無盡に解剖論斷したり、是正に現文壇最大名著なり。窮極する處を知らざる藝術の最深淵を探らむとせば、乞ふ本書に來り求められよ。

著イル・ルー・エビ  
譯氏達口矢

### 不朽の癡

四特正小  
六製價包  
判美八內  
總本十地  
箱五八  
布入錢錢

●載摘評批●

大阪朝日新聞曰く……オスカ・ワイルドの筆致によく似てゐる不斷美に牽引されて靈から肉へ肉から靈へ隣れにも迷ひ迷ふ悲壯と謂はうか歡喜と言はうか血に塗れてにこりと笑つての美しい生活を眞夏の日光を受けて紫金に輝く様な鮮やかさで書き流したもので美の爲なら五千石も何のそのと云ふ眞面目な強い憧憬が溢れてる云々!

●菊正稅郵  
判價內  
總地  
布金  
製二十  
美二  
本圓  
入錢

發行所

東京  
高田  
小石  
川町

新陽堂

振替  
五五  
口七  
座〇  
東京  
番

## 故キリストリーブ博士の事ども みなみ生

獨乙の神學界が近年に至り頻りに多くの名士を失つたのは惜しむべきところである。僕の記憶に留つて居る丈けでも、數年前にはブライデル、ホルツマン教授の相次いで逝くあり、又昨年は實踐神學の碩學なりしドレーヴス教授やヤートー牧師の永眠するあり、今年に入りては伯林の教授にして牧師なるフオン・ゾーデン及びゲッテンゲン大學のブッセツト教授の兩氏逝去、最近にはキリストリーブ博士永逝すとの報知を得た。殊にキ博士は直接我邦にも關係の有つた人であるから、少しく思ひ出づるまゝを書いて哀悼の意を表したいと思ふ。

キ博士は獨乙派の宣教師となり、スピンチル博士やシュミードル教授の後繼者として去る明治廿五年十月に我邦に渡來し、そして全卅二年の三月迄、約六ヶ年半我邦の爲めに働いた人である。然し博士は外國人が直接傳道の局に當るは、到底不可能のとである、従つて不利益のとであると云ふ考へで、さう云ふには從事しなかつた。そして外國人として最も適當であると考へた青年の教育、特に神學校の教授の任に當つた。此の事は實に氏が自己を知るの明を有して居たとを、最もよく證するものである。博士は獨乙の神學や文學に精通した博學、多識而も犀利な批評眼を有する

學者であつた。此の點に於ては我邦に渡來せる幾百の宣教師中多くその比を見ないであらうと思ふ。その得意とする所は純正哲學、宗教哲學で、獨乙文學、殊にゲーテ研究には造詣深きものがあつた。多くは獨乙派の「新神學校」に於て教授をしたけれども、臨時には



帝國大學の文科に於て獨乙文學の講義をしたとも度々あつた。明治卅二年歸國の後は一寸の間、田舎で牧師をして居たともあつたが、それは博士の志望でなく、直ぐにマールブルク大學の圖書館に奉職して學生の顧問となつた。後千九百十年に至り同一の位地を以

て、伯林の普國王立圖書館に轉任した。此の館長はハルナツク教授が任ぜられて居るが、有名な圖書館である。キ博士は日本に在住せる時にこそ、之を顯はすの餘地を有さなかつたが、非常に名文を書く人で、獨乙人の某博士が日本の古歌、俳句を獨譯して一寸名を出したが、その譯文は随分な惡文であつたのを、實はキ博士が殆んど悉皆書き直す程に、筆を入れたものである。かゝる才筆と博識とは歸國の後、博士をして公務の餘暇幾多の著述に従事せしめた。尤も大著としては未だ出なかつたけれども、關係した雜誌などは皆有名なものである。即ちプロシヤ年報、獨乙月報、基督教世界、神學年報などで、又著書としては「現代の文明と日本に於ける傳道の任務」「殖民地の政策と傳道」などがあり、米國で有名なラルフ・ワルド・ド・トラインの New Thought を翻譯して數卷を出し、且つ此の翻譯は大に成功したと見えて十版程にもなつて居る。

博士の名聲は今や益々擧り、その學識も大に認められつゝありしに、年末だ五十二の、云はゞ若盛りに當り、去る三月、汽車中にて卒中發し、永眠されたるは、實に惜しむべきところである。博士の夫人は有名な彫刻家ドントルフ教授の女にして、日本に於て生れた一子マコト・キリストリーブ氏と共に健在である。



## 惟一館なより

## 編輯室なより

△四月は悲しい思ひ出の多い月となつた。月の十一日といふに皇太后陛下の御崩去が發表せられた。吾々國民は、先帝陛下を送り奉つて、幾何もなくこの國民的大悲哀に遭はなければならなかつた。吾々は切に我が皇室の上に豊かなる祝福のあらんことを祈るものである。

△四月の主なる説教は、三月廿九日、進歩の原動力（内ヶ崎氏）國民性改造論（鈴木氏）改新の第一歩（三並氏）、四月五日、春の希望（内ヶ崎氏）心霊の生長（内ヶ崎氏）、四月十二日、人生に於ける復活の經驗（内ヶ崎氏）十九日生命の共鳴（内ヶ崎氏）メニテルリンクの未來觀（吉田氏）宗教の第一義（今岡氏）等であつた。

△十二日の夜は、皇太后陛下奉悼式を舉げた。會衆多數、しかもいと靜肅に更け行く春の夜の悲哀に、皇太后陛下の御高德を偲び奉つた。

△十五日の通俗講演會は御大喪中につき休むこととした。

△原田長治氏の嚴君が亡くなられたことに對して、吾等は深き哀悼の意を表する。

△我が教會に在りて多年、日曜學校長の職を勤められた山本與一郎君が今度慶應大學を卒業して、大阪に赴任されることゝなつた。そこで十九日午後同君の爲めに圖書室で簡易な送別會を開いた。吾々は同君の將來に多大の希望を囑するものである。

△日曜の朝の三並良氏の聖書講義、内ヶ崎氏の舊約の連續講義も熱心に連續されて居る。

△この頃は教會の方は大分婦人の方の色彩が強くなつて來た。昨年あたりまでは僅か七八人の婦人の方が見えてゐたが、この頃は婦人席は何時も満員といふ有様である。眞面目な宗教味が若い婦人達の間に擴げられてゐるは非常に頼母しいことである。たゞ何處かの牧師が、「統一教會に行く」と地獄に落ちるぞッ」と言はれたさうだが、これでは日本の基督教會もまだまだ心細い。

△いよいよ四百號記念號を出すことになりました。過去三十幾年間の本誌の歴史は、我が宗教界、思想界の發展に對して、少くとも一つの刺激であつたと思ひます。本誌が社會に提供した暗示なり光なりは極めて小ひきなものであつたにちがひありません。しかしながらそこには常に變らぬ一貫した生長伸展の眞面目な努力があつたことを信じてゐます。四百號記念號を出しますと共に、私達は更らに微力を奮つて我が宗教界、思想界の爲めに何等かの貢獻をいたしたいと思ひます。しかして切に愛讀者諸君の御同情を祈るものであります。

△記念號を出しますについては、執筆者諸君が御多忙中、態々多大の勞力を割いて下さつたことを深く感謝します。尙ほ内ヶ崎氏が殆んど御一人で、諸方面に奔走して原稿をお集め下さつたことを合せて感謝します。

△別に豫告いたして置きました通り、本月九日（土曜）午後六時半から神田青年會館で、四百號記念講演會を開くことになりました。豫告の外に更に或は同人の「感想」なども述べることになるかとも思ひます。愛讀者諸君は是非お出でを願ひます。

△内ヶ崎氏の「白中黃記」は賣れ行きが宜しいさうで、若溪會から成り立つてゐる少年書類調査會では氏の同著を推薦した。

△鹽澤昌良氏、小山東助氏、千葉掬香氏方々の原稿が間に合はなかつたのは寔に遺憾でありました。

△何時もペーヂを増した時には、編輯者は妙に祟られるものと見へて、昨年メニテルリンク號を出した時は四十度の熱發で苦しめられ、今度もまた氷嚢を頭の上につるしながら此の稿を了へました。生活もこゝまで行けば少々悲惨な感がします。

△菊川四郎氏は久しく關西地方へ出張中であつたが、この程歸京しました。



せるものに外ならず。人は自ら罪を犯し、破滅に陥れり。此破滅論より人を救ふが宗教の目的なり。宗教は自然の力の束縛より人を切り離し、その靈を自らに由て動かして、神と一つに合はせ神の無量の聖と愛と平和の中に住ませ、かくて靈の生命を萬衆の花の如く咲きも残らぬ圓滿境に抛へんとするものなり。耶蘇基督は此の生命を救へる者なり。……耶蘇は人を圓滿の生命に到らせんとして活動せるなり。吾人も頗る同感を表すべき見解である。十字架に對して精利なる解の後に著者は下のごとく評語を加へてゐる。「然れども在來の十字架信仰は誤れり。基督十字架に死したる故に、我等の罰除かるといふは道理に於て誤れり。正義なる神が、基督の義を事實義ならざる惡人に嫁して之を赦すといふことあるべからず。……特に劣等の品性の人種が此信仰の基督教を奉する時は不信者よりも却つて惡しきまゝにて終るもの多し。是れ基督我に代りて罰を受けて我は赦され、罪の結果より免るゝなりと信する故に、全く安心して横着となり、惡を行ふて平然たるに由る。彼等は神の靈に充たされ、基督の内性を分與せらるゝことを忘れしる也。我國の在來の基督教會の如きは此信仰に中毒せられ居れること一方ならず、之が爲に信者の精神に新生命なく、その生活に聖なく、其心に清新の氣なし。幾年、經るに進步の勢死止せるは當然なり」。所論一々吾人を首肯せしむ。

さて著者は人としての基督を研究して遂に人以上としての基督に到達した。基督は無二にして人類の匹を絶すと見ざるを得ない次に久存の基督の事實がある。よつて基督は單に人に非ず人以上の存在ならざるべからず。しかるに半神なるものなきに基督は神でなければならぬと結論した。何故に基督は人類中最も豊富に神を實現したるもの、即ち神の子の長兄と見做すことは出来ないであらうか。基督が神自身であるといふことゝ、神の生命を人類中最も豊かに有したといふことは全然同一ではない。しかし説明よりいへば前者を以て合理的であると同ぜざるをえない。されど著者は他に對しては寛容にして「苟くも基督の事實を認め、其救ひを確信するものをば、基督の徒として待たざるべからず」と斷つてある。著者は「基督を純然たる人とする宗教は實際上活力貧弱なり、……近代にてもユニテリアンが大に振ふべきに振はざる所以のものは缺くる所茲に在ればなり」といふが、これは考物であ

る。英米に於けるユニテリアン主義は比較的新しき運動である。又目下は何れの宗派も寛大となりて韓宗の必要が殆んど無くなつたのである。例へば英國教會の黨派中にはユニテリアン以上の自由主義者がある。日本の諸教派の中には自由主義の多いこと驚くべき程である。ユニテリアン主義の使命は必ずしも宗派として大を成さねばならぬのではない。名を欲せずして實を求むるのである。而して實に於ては多くの宗派中に無數の同志者を有する事實を閑却してはならぬ。この種の判斷は富永君より開くは豫想外である。平凡なる宣教師などのいふ口吻ではない。

著者は最後に神の觀念を提出した。新案ではあるが、順序宜しからざることと思ふ。矢張最初に之を提出するが適法であらう。強て基督を神自身にしたる故にかゝる事となつたのであらう。とにかく本書は近年稀に見る神學界の大著である。その説明頗る進歩的にして而も敬虔なる信仰を立脚地となす。著者の犠牲奉仕の平常生活を知る吾人は一般の敬意を以て此書に對せざるをえない。本書が多くの基督者及び基督教研究者に愛讀せられんことを望む。若し索引ありたらんには一層便益ありし事なるべし。(一六〇S、U生)

### △パスカル感想錄

前田長太譯 洛陽堂發行

佛の哲人パスカルの感想錄の譯文の公にせらるゝは記者の喜びとする所である。數學者にして深遠なる宗教的性質を藏したりしパスカルは現代より願みれば何となく床し人物である。次の數節によりて原著者の思想と現象とを紹介す。

『基督教は實に奇怪なり、人に向ひ、其の賤しむべく、憎むべき者なるを説くと同時に神に醜肖するの志を起さしめんことを命す若も此の如き權衡を取らざれば斯く人を向上せしむるときは、徒らに虚傲を逞しうするに至り、斯く卑下する時には、甚しく卑賤に陥らしむに至らんとす。』

『基督教に於ては吾人に善を行ふ資格なしと思はしむる程の墮落をも説かざれば全く惡を免除せらるゝといふほどの聖德をも説かず。』

『基督教ほど人間の性に適する宗教はなし、人はいつにても失望にも陥り、虚傲にも陥ること叶ふ二種の危險あるが故に、恩寵を

受けることも、又之を失ふことも出來うる二種の可能性あることを説くものは實に同教なり。(價一・一六〇)

### △小泉八雲

田部隆次著・早大出版部發行

世界的文豪にして日本文化の紹介を試みたる我國の恩人ラフカデオ・ハアンの傳記である。恐くは十九世紀の文豪にして小泉八雲先生のごとく變化あり數奇なる生涯を送りたるものはない。希臘人を母とし、愛蘭の軍醫を父として、アイオニア群島中に生れ、或は中學の英語教員となり、遂に遊歴して、遂に日本に來着し、或は中學の英語教員となり、遂に遊歴して、遂に日本に來着し、日本人を妻とし佛葬式にて葬らる。この事實でも面白い傳記の主人公たるに適してゐる。一體文人は主觀的生活をやるので、傳記の材料となるものが少ないが、小泉先生の場合は然らず、實に取り扱ふべき多くの材料がある。田部隆次氏は愛弟子の一人として六年間の刻苦を積んで本書をなす。讀んで興趣の盡きざる者あるは怪しむに足らない。全部口語調なる最もよし、本誌の讀者は閑骨て一二回同氏の筆に接したるを記憶せらるゝであらう。記者は文學として之を讀者にすゝむ。(價一・一八〇)

### △理想の村

石田傳吉著・大倉書店發行

農村の荒廢衰微その頂上に達して識者皆之を浩嘆するの時、一道の光明を齎すものは本書である。著者は明治三十六年以後挺身して農村改革救済の急が鋒となりて今日に至りたる先覺者である。茲に理想村明星村の發端より進歩及經營を説く。之を讀めば地獄に沈みたる貧村が天國の如き状態に變ずる有様愉快何とも名狀しがたし。しかも著者は用意周到にして之を小説體にしたれば、讀んで倦むことなく、自然に讀者をして著者の理想に首肯し賛成せしむるやうにしたるは巧みといふべし。記者も故郷の不振を嘆ずる一人であるが、本書を卒讀して大なる光明に接したる感がある。本書の理想は報徳主義を二十世紀化するにあり、尊徳翁の遺訓を擴充したる所、著者の見識である。ことに附するに諸家の訓言、有益なる各種の統計、挿畫及び全國理想村數百の長所の紹介を以てしてある。農村經營者には缺くべからざる良書である。

菊版千數百ページの大冊であるが、一氣にして讀むことをうべし。(價二・二〇)

### △基督教大意

田村直臣著・警醒社書店

十七八歳の青年に基督教の大意を理解せしめやうといふ著者の理想を實現せんとする四六版二百四十ページの冊子である。一卷を五十二章に分ちて毎日曜に一章宛を讀まさんと仕組んである。第一篇基督教の本源、第二篇基督教神觀、第三篇基督教宇宙觀、第四篇基督教人間觀、第五篇基督教神觀、第六篇基督教救濟觀、第七篇基督教人生觀、第八篇基督教來世觀に別つ。宗教心理學に熱心なる著者のこととよく教育的に出來てゐる。宗教育の好參考書である。(價〇・五〇)

### △藝術の起源

本間久雄譯・早大出版部發行

フィンランド大學美術教授イルジョ・ヒルン氏は斯界のオリソリチである。本問氏の譯は文藝復興期に比せらるべき大正思想界の要求に應じたものである。本書は藝術と實生活との關係を論ずる者である。由來文藝の士は實生活を高調するに拘はらず非常にと之を限定する傾向がある。著者は之に反して人生の各部と藝術との交渉を論ずる所、今日の日本思想界を刺戟することが少くないで一切の藝術の作品は千種萬様であふけれども、そこには一個の共通した要素がある。藝術の作品は、自分の中介に依つて、藝術家の持つ心持、又は種々の心持を表現する。藝術の作品は表現せんとする衝動から生れる。蓋しその衝動たる、感情それ自らの如く原始的なものである。いかなる人も、自動的に自己の快感を高め、自己の苦痛感を脱れやうとするものである。藝術家とは即ちその快感の感情に表現を與へる、直接的な行為に依りて自分自身にかくの如き快感は苦の感情を喚起させるもの、脱れしめるのみならず、他人にも同じやうな感情を喚起させるものである。であるから自分の種々の氣持を他人に傳へやうとする欲望が自分の心に萌すことは藝術品を造る上に於ける最も單純なる、又最も原始的なる誘因であるといはねばならぬ。而して又、この目的を實現する方法として、藝術品創作上の種々の努力が自反射の出路から、吾々は一箇の思慮深き創造に導かれるのである。(價一・八〇)

戀愛に對する態度、結婚に對する態度に、悲痛なるしかしながら最も理智的な解決といふやうな感じを起させる。眞に親愛せんが爲めの争闘、眞に愛する者の爲めの犠牲、母のやうな愛の心を抱いて戀人の幸福を祈る女心、かう言つた風の感じが、涙なしには居れぬほど私達の心を衝いて来る。ドストエーフスキイは人心のどん底を汲む大なる作家の一人であることが知れる。最後に譯者の忠實なる譯振りと、苦心とを、我が翻譯界の爲めに謝する。(價・上下二卷にて二二〇)

### △ウキンダーミヤ夫人の扇

鵜沼直譯・不老閣發行

オスカア・ワイルドの作品中サロメに次ぐ傑作であつて、一八九二年一月十四日倫敦に於て初めて舞臺に上つてから、今日では米國に於いてすら盛に演ぜられつゝあるといふことである。ウキンダーミヤ夫人が自分の夫ウキンダーミヤ卿に對して自然に愛情を失つて、アウガスタスロートン卿に心を移しながら、尙ほ夫人は彼の女の夫とイレチ夫人の間を疑つてゐる。イレチ夫人は當時一般社交界でも、淫らな婦人として擯斥されてゐるのである。ウキンダーミヤ夫人はイレチ夫人をまるで自分の仇敵のやうに悪んでゐる。しかし世間からは捨てられ、蔑まれてゐるイレチ夫人は、彼の女の幸福を犠牲にして、しかも飽くまでも世間の罵詈を一身に浴びて、ウキンダーミヤ夫人の幸福の爲めに、自分の身を暗黒の底に捨て、行く極めて薄運な、傷ましい女の犠牲を描いたものである。サロメの主我的なるに對してイレチ夫人は飽くまでも、運命の前に諦めることを知つた可憐な女である。(價〇・六〇)

### △太陽の子

福士幸次郎・洛陽堂發行

全世界を失つて彼自身の靈魂を獲たといふ自覺の下に立つた一青年の眞摯な叫びである。「ああ、崩れ掛けた壁に、日光の漂ひの輝かしく、又痛々しい、單色の顫動……」と歌つた時代の著者は類癡、嘆咏、憧憬の詩人であつた。「白の微動」、「鏗」、「落葉」、「窓から」等はその色と氣分が現はれてゐる。それから「南の海岸」、「記憶」、「忙し沈黙」、「薄白いともしび」に至つて凡てを否定し逃避してしまひたいやうないらくしい氣が染み染み味はれる。しか

も作者はその深い沈黙、暗黒、懷疑の世界から一躍して、そこに大日輪の男性的偉大と強力を嘆美するに至つた。「ボヘミアンの歌」、「あらし」、「航海の歌」、「ひかりを慕ふ歌」、「山上の火よ」、「ああ平原のかたに」、「白い蛆蟲の歌」、「男性の歌」等如何に氏が努力的な前進的な人であるかを示してゐる。「世界中の人が苦しむ顔をしてゐる、自分は烈しい羞恥の心が起る、自分は斯うして居られない、斯うして居られない、ニイチエは超人と普通人を比較して普通人を猿として笑つた……」こんな風な氣分のなかにも、悲愴なしかし男々しい氏の態度が偲ばれる。自分は飾り氣のない氏の赤裸々な詩を愛する。(價〇・九〇)

### △ニイチエ

久津見藤村・丙午出版社

超人哲學の巨豪フリードリヒ、ニイチエの人格と彼れの思想の輪廓とを描きたるもの。今より十年前盛に唱へられたニイチエは昨年より今年に至りてまた盛に我が邦の思想界を賑ふことになつたニイチエの研究はまだ大に努力の餘地があると思ふ。著者の此の企ては時機を得たるものと言はなければならぬ。殊に彼れの哲學の凡てに就いて一々研究することはなか／＼困難である。著者が詩人的要素、反性格の哲學、不道德家の尊號、英雄的行動、無神の生活、迷宮の現代人、發狂問題、否定と肯定の峯、一切の破壊、超人の時代、ツアラッストラ等九十頂を掲げてニイチエを論ずることの詳なるは、初めてニイチエを知らんとする人にとりても好參考書たるべし。(價〇・九〇)

### △基督教の根本問題

富永徳齋著・警醒社發行

基督教界の新進學者中に夙に識者の矚目する所であつた富永徳齋氏の新著である。菊版七百數十ページの大著にして、恐らくは邦人の筆になりたる最も注目すべき神學書の一つである。吾人は本誌々友の刻苦精勵によりてこの名著の完成を祝せざるを得ない。

著者は全體總論中に基督教を次のごとく辯護してゐる『基督教は滅ぶべきか。否、基督教は宗教其物を最も完全圓滿に成就するものなるが故に、人間の靈魂の存続する限り亡びざるべし。抑も宗教は人が有限意識より無限意識に化せんとすること。人の靈



は自然の中より醒めて自らを意識し、他を意識し、自らが他に囚はれ居れるを意識し、全く他より蟬脱したる無限の境地に入らんと志す。此れ宗教なり。……基督教は最も完全圓滿に此宗教的實質を成就せしむるものなり。否、基督教が實にその宗教的實質なり。故に基督教はたとひ舊來の觀念を打破せらるゝとも、此實質あるが故に、決して全然掃蕩せらるゝことなしと斷言するを得べき也」。

第一篇基督教の本質に於て、「耶穌基督に依りて神と合一すること」を以て、その本質と斷定する。然らば耶穌に依りて神人合一するとは何ぞや。「第一に耶穌は自己の人格に於て神人を合一し、之を自覺したり。第二、耶穌の行爲また彼の神と合一せるを示す第三、耶穌の感化の極めて強きも亦其人格の絶美を示し、神と合一せるを證す。耶穌は自ら神と合一して神人合一を世の中に行はれたる實の事とせしが、自ら合一し、且つ之を自覺したるのみならず、又人類を神に合一せしめたり。眞に神人合一の意識は耶穌基督に依て世界の中に確立せり」。第二章基督に由る神との合一にこの點を詳述してゐる。

第二篇基督觀念は第一章知られたる基督、第二章基督の人格、第三章基督の事業に分ちて詳論して餘蘊なし。著者は基督中心の宗教を力説すれどもその説明は極めて進歩的である。著者の復活論を開け。

「復活の信仰も今日我等より見れば、基督教宗教の中心眼目に位するものに非ず、之がありしとても、無かりしとても、基督教宗教の圓滿完成の上に何等影響する所なし。……基督は殺されたれど、その人格は消滅せず、又深く天に閉ぢこもらず、弟子の間に在て活動し、永遠界に入りて神と偕に存在すといふが復活の信仰の精神なれば此信仰さへあらば其に可なり。されば基督が實に復活せしや否やは、我等には生死の問題ならず、さればとて基督の復活は史上の事實ならざりしと否定し得るか。……されども眞に研究の精神ある者には、此問題は然かく造作なきものに非ず。復活の信仰は如何にもして最初の基督教徒の信仰なりし也。……然り復活昇天は疑問なりといへども、弟子が此經驗に由て捉へたる眞理は千古不易なり。即ち基督は殺されたれども、其人格は儼として存在し、基督教徒と交通し、之を動かすといふこと也」。

第二章「基督は人なり」は熟讀すべき好文字である。しかし三百十五ページに耶穌無罪説を論じてユニテリアンの人々に當る所、之は敵ない所に矢を放つ感がある。現代の進歩せるユニテリアン主義者はかゝる事を論ずる暇を有せないものである。三百二十一ページに「耶穌の品性は理想の品性なりき。曾て歴史に存せし一個の人物に、人の理想が現はれ居れりといふこと、又吾人は此の古の人たるものを理想として生活せよといふことは一見あるまじき事の如し。且つ斯くする時人類の進歩は停滯し果てやと危ぶまるゝも理あり。之もユニテリアンの人々など常に口にする所なるが、吾人の理想とする耶穌は史的耶穌と共に久存の耶穌なることを記憶すべきと共に、然も現在の耶穌に相違なければ、淺きに考ふれば此の憂なきに非る如きも、事實に於て然らずと申す人々は餘りない事と思ふ。富永君の如き少壯學者でもユニテリアン主義に對しては随分偏見があるやうなり。ゼームス・ドラモンドやカーペンター博士等の著書を繙かれたいものである。所謂正統派には多くの異なる思想家あるごとく、ユニテリアン主義者の中にも多くの差がある。漫然としてユニテリアンの人々などいふは著者のために惜むべきことである。この點に於て著者は矢張り囚はれてゐる人であると評さなければならぬ。僕は深く之を惜しむ。

續いて「耶穌基督の人格は神の内性の顯現」の章がある。暗示に富む議論である。著者は耶穌の人性は神性であるといふ結論に達してゐる。かかる論法であれば、多くの進歩派基督教徒も異論はないことであらう「基督教の事業」を論ずる章も亦精微を値す。著者の罪惡觀は如何。

「罪とは咎むべき性質のものをいふ。人は靈の生命を有しながら其にふさはしからず意志することなり。若し靈の生命なかりせば人には罪なし。何となれば、靈なき者は動物にして、萬事自然の力に驅られ行くなれば其實は自然にこそ歸すべけれど、動物をば咎めんやうもなし。然れども人は靈なり。靈に由て自然以上に出づるを得べく、自然以上に出てゐたる面目を保つ者なるに、自ら選んで、之を爲さず、却つて自然の力を放つて靈の上にまで支配を及ぼさしめ、自ら之に従つて歩む。……即ち罪となるなり。吾人には事實上選擇の能力あり、これ罪の基なり。罪は自己の犯



# 新刊批評

## △處女地

相馬御風譯・博文館發行

近代ロシア三大代表作家の一人ツルゲーチフ五十八歳の時の作品である。ロシアの農民制度及び地主生活に對して彼れが懷いてゐた憎惡の念は、荒漠たるロシアの廣野を吹いて來る西歐の自由思想と結んで、こゝに彼れをして、終生愛國者の革命家たらしめたのである。彼れは母國を捨て、巴里にその一生を送らなければならなかつた。しかも尙ほ彼れはロシアを忘るゝことはできなかった。ロシアを愛するの念は彼れの終世を貫いて變らなかつた。「ルーデン」の父と子「煙」の處女地、悉く彼れが當代の露國を愛ふる豫言者の絶叫である。譯者が巻頭の「はしかき」に述べてある如く「彼が如何に彼の時代のロシア社會について、又その社會特有の思想狀態について、更にそれらの辿り行くべき運命について、熱心な且冷やかな觀察者であり批評家であつた」かといふことを知れる。しかしながら此の作は單に時代批評家としての彼れを見ることよりも、人生批評家として、或は人生哲學者としての彼れを見、彼の生活せんとしたる生活或は彼の主張したる生活を味ふことが私達にとりて意義深いことであると思ふ。革命の焰、細民救済の主義に燃へてゐるチツターノフ一人の生活を顧みるも私達は色々な暗示を與へられる。一八六八年の春の或る日の午後である。扉が開いた。……一寸した帽子を冠り、腋に一束の書物を抱へた二十三の青年——チツターノフ其の人が這入つて來た。彼れの室には「ロシアのメフィストフェレス」と呼ばれてゐるパークリンやその他の若い革命派の男女が集つてゐる。パークリンはチツターノフを「ロシアのハムレット」と呼んでゐる。チツターノフは熱するがしかし思ひ切つて仕事をやることの出來ぬロシア國民性の一面を表してゐる。彼れは貴族の庶子として生れた。彼れは極端な社會改良家である。貴族のロシアを覆して、貧民のロシアを建設すべき主張を持つてゐる。しかしながら彼れは一面に於

いて貴族的な生活の暢々した、快さを感れることはできない。彼れの貴族的な血統と感情はやゝもすれば何處までも彼れの主張を裏切らうとしてゐる。彼れはアレキサンDRINSKY座の貴族席に坐つて、周圍の着飾つた人々や、勳章を飾り立てた將軍達の間で自分があることを想つた時に、何となく氣が安まらないことを自覺した。彼れは自分の服裝の醜さ、不潔さを感じずには居れなかつた。間もなく彼れは家庭教師としてシブヤーギンといふ貴族に伴はれてS國——州に出かけて行つた。そこで彼れはマリヤンナと戀に落ちた。彼れは革命黨の一人として改革者の一人として農民の生活を知る必要があつた。彼れは農村を訪ふて彼れ等細民の窮狀を目撃した。しかしそれは決して彼れに親しみを與へるものではなかつた。「二階建の不景氣な石造の商家や、圓柱の立並んだ寺院や、居酒屋などを見て過ぎた。ふと開いた入口からむつとするやうな生溫かい毒々しいアルコールの臭と燈火の赤い閃光とが流れた」。酒の奴隷となつたロシアの農民は彼れが想像してゐたやうな懷しいものではなかつた。更らに工場に入つてそこには『至る處怠慢と不潔と汚穢の印象を起すものばかりであつた。此處に破れ窓があるかと思へば彼處では壁が剥がれ板目が弛み、戸があぐり開いたまゝになつてゐた。』彼れは一つの理想を築き上げてその理想のなかに生活してゐた。曰く革命、曰く農民救済、曰く細民の爲めに！しかし彼れ自身の内心の要求は、飽くまでも貴族的な光明、華爛を忘れることはできなかった。彼れは觀念の世界に於いて平民の友たらんことを欲した。しかし彼れは農民と共に同じむさくるしいベッドに寝ねには、あまりに明るいあまりにセンシメンタルな貴族的な神經を持つてゐた。こゝに彼れの生活の悲劇が起つた。『花をもて我を飾れ』と言つた彼れは確かに、夢に生きてゐた詩人であつた。彼れはビストルを以て自殺した。『窓は白く塗られたり。女は去れり……』彼れの分裂せる生活はこれと終りを告げた、彼れは實際牢獄を恐れて死んだのではなくあつたのであらう。私達はツロミーンからも、マリヤンナからも、パークリンからも色々な生活の意味を示される。しかし私はここに陳ぶることができぬ。譯者相馬氏は最も熱心なツルゲーネフ研究者であると同時に、生活に對して最も眞剣な態度を

持してゐる人である。吾々は色んな意味に於いて、眞摯にそして新らしき生活の道を切り拓かんとする人々に敢て一本を薦める。  
(價一・〇〇)

## △虐げられし人々

昇曙夢譯・新潮社發行

ドストエーフスキイの数ある作品中で、最も傑れたるもの一つとして讀まれてゐる「虐げられし人々」を讀んで、私は色々なことを考へさせられた。作は彼れが十年の囚しシベリヤ追放や軍隊苦役の後になつたもので、さうぬだに深刻な彼れの心境は、人生のあらゆる悲惨罪惡、殘忍のどん底までも見究めずには置かない所の鋭さを持つてゐる。ワーニヤといふ青年作家(作者自らであらう)の口を通して語らるゝ、侯爵の若い息子のアリオシヤと、美しい女ナターシヤの苦しい戀愛である。青年作者ワーニヤはナターシヤを愛してゐた。しかし何時の間にか、ナターシヤは若い侯爵アリオシヤを愛してゐた。ワーニヤは自分の苦しい心を抑へて、ナターシヤをアリオシヤに與へる。若い公爵は意志薄弱の青年である。彼れはナターシヤを愛しながらも何時の間にか、カーチャといふ可憐な女を愛してゐた。ナターシヤとカーチャとは自分等の戀人なるアリオシヤの爲めに、自分等の戀愛を最も賢く運ばなければならなかつた。戀愛の爲めには最も戀しい老父母をも捨てたナターシヤは、また眞實の戀人アリオシヤの爲めには、アリオシヤを捨てなければならなかつた。彼の女は悲惨なる戀の犠牲者となつて、アリオシヤの幸福を祈つた。作の全體を通して、私達を最も強く動かすものは、ワーニヤの傷々しい志と、アリオシヤの犠牲の心であるが、ネルリといふ可憐な少女の運命ほど淡い、そしていたましいものはない。アリオシヤの父なる公爵は嘗て外國で一富豪の娘を娶つて、巨萬の富を奪つた。そして娘との間に一人の女を儲けたが、殘忍にして貪慾なる彼れは、不幸なる母子を棄て、立ち去つた。チルリは實に侯爵の女として生れ、しかも生るゝと直ぐ冷たい人生の風に吹かれて、終には橋頭に立つて食を乞ふの不運に陥つた。ネルリの祖父イエレミヤ・スミットはアゾールカと呼ぶ一定の衰へた犬を伴れては毎日ペトロブスクの街頭を歩きながらも、彼れに背いて走つた娘と孫を忘れることが出来なかつた。しかし冷酷な運命は

どこまでも彼等三人の上に冷酷であつた。チルリの母が先づ斃れ祖父が死に、愛犬のアゾールカも死んで了つた。チルリは強慾なる一婦人の手に暗の底に墮落されるやうな羽目になつてゐた。青年作家ワーニヤは、彼の女にも亦猷身的な愛を注いで、彼の女の虐げられた運命から救つてやらうとした。しかし社會の毒手、强者の無慈悲に踏み躪られ虐げられたのはたゞネルリのみではなかつた。ナターシヤも、ナターシヤの兩親も、ネルリの母も、またはワーニヤ自身までもがそのうちの一であつた。侯爵や、アリオシヤやカーチャが花やかな生活の境に進んで行くにつれて、此のあはれた虐げられた人々は、更らに更らに絶望の淵に迫ひやられるのであつた。ネルリは間もなく死んで了つた。ナターシヤとその兩親はペトロブスクを去つて旅に出なければならなかつた。

「虐げられたる人々」が與へる印象なり問題なりは幾つもあるだらう。私はこゝで一々話すことはできない。しかしその全體の作を貫いた基調はいふまでもなく自分の幸福、自分の運命を踏みにぢられた人々の傷ましい生活である。狂暴な風雨が草木を蹂躪して行くやうに、社會的權勢を握つてゐる上流の人々は、何の躊躇もなしに、可憐なる社會的弱者を虐げつゝあるのである。社會的の强者は、踏みにぢつたる弱者の不幸なる運命を土臺として、更らに新らしい獲物に向つて毒手を伸はすのである。踏みにぢられ虐げられたる弱き人々の唯一の運命、唯一の道德は犠牲である。自己を捨てることである。虐げられたる老人も女も男も少女も、相擁しては彼等の薄命を諦めなければならぬのである。而て勝ち誇つて行く暴君等の凱旋を見守つてゐなければならぬのである。さらに「虐げられし人々」が與へる印象は、虐げられたる人々の間に、殆んど莫迦莫迦しいまでに強い根を張つてゐる頑迷なる道德である。世間體といひ、義理といふやうな考へである。ナターシヤの父や、ネルリの祖父が、その娘に對して抱いてゐる愛憐と憎しみの矛盾である。ナターシヤの父が、ワーニヤや自分の妻に隠れてまでナターシヤの窓の燈を慕ふて行く心持ち、イエレミヤ・スミットがネルリを通してあはれる娘に注ぐ一父としてのやさしみ、一としほ頑なな道德の深い矛盾や悲慘を想はせる。最後にナターシヤとカーチャのアリオシヤに對する心は、吾々の

思ふ。

立憲政治は云ふまでもなく言論政治である。國民皆言論家にならなければ眞の立憲政治は來らぬ。言論の束縛我が如く甚しくあつたなら立憲政治の形式あるも其實は專制政治である。我が國に言論の自由がないから雄辯の發達がない。一のグラツドストーンなく、一のブライアンないのである。内閣の乗取りが元老の指圖により、多數黨の妥協によつて行はれて、言論によらない内は、立憲政治といふことが出來ぬ。吾人は眞の言論政治の一日も早く、我が國に來らんことを望んで已まない。

(嶺岸生)

## 協力して立て

日本は今や危機に瀕して居る。一大試煉は吾人の頭上に下つて居る。孰れの方向を見るも權威は地に墮ちた。足のうらより頭に至るまでやまざる所なく、其の心はつかれはてた。何とも言へない一種の頹廢的空氣が漲つて居るのではないか。近代人は新しく神秘を味ふことを知つた。然し神秘の

前に敬虔な心を以て跪くことを忘れた。確に國民の心は腐つて居る。收賄事件の如き其の表證である。

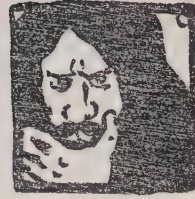
宗教家の天分は何であらう？此の世の腐敗を淨め洗ひむとするものに生命を吹込むことであるまいか。個々人の靈を救ふことであるまいか。人、若全世界を得るとも其の生命を失はば何の益あらむや。日本は今や生命を失はむとして居る。日本の要求するは古びた教義や儀禮でない。生命夫の者である。

或人が『基督者とは、基督は神の獨子なるを信じ、彼の足跡に従ふ者をいふのである。ユニテリアンは清淨な、正しい人であるかもしれない。が彼は基督者ではない』と言つたのに對してライマン、アボット氏が適切なことを答へて居る『君の定義はセンチュリーにもウエブスターの辭書にもないことだ。が基督者とは何を意味するかは興味ある問題である。基督が人を弟子として招き給ふた條件は何であつたらう。感情的實驗や、智的信仰でなかつたことは明である。彼がゲネザレ湖邊

に漁夫を弟子となし、エリコの村に税吏を従へさせられたのは、決して、彼等が三位一體説や、代贖の説や基督の神性などを知つて居たからでない、唯、彼等はイエスの權威に動き、一切を捨て、従はむとした熱心を嘉し給ふたからである。基督に弟子となる條件を知つて居ることでない、眞理を知らむとする小兒の如き打開いた心と熱心とである。基督者とは基督に従つて彼の事業を此世に行ふ弟子の謂である。基督者とは主の凡の他の忠實な弟子と協力して働く兄弟姉妹である』と。古い教義、其は古人の依つて立ちし信仰から、自と、

出来上つた形式である。今日は單に其の形骸を固守して居るべき時でない。生命は刻々に新なるものを生むて行く。吾人は其の本源の生命を握らねばならぬ。今は決して教義教説の異なる故に小黨分裂すべき時でない。開放した心と熱心とを以て、無條件に基督に従ふ同志が結束して立つべきのである。舉つて新なる生命を斯國に注入すべきである。吾人は古の豫言者と共に聲を合して國民の前に絶叫せねばならぬ『汝等は神を忘れた。神の道を棄てた。然らずむば此の不幸を見なかつたであらう』と。(目賀多)





時

評

## 憲政の一進歩

大隈内閣に就ては、世間兎角の批評を聞く。然れども吾人は大體に於て、憲政の進歩なりと認めるに躊躇しない。或は其大臣の顔觸如何を云々して、桂内閣の再現といふ、桂内閣と僅かに頭首を異にして居るに過ぎぬといふ。けれども頭首を異にして居ることは、則ちこれ大ひなる變化ではないかとも言ひ得るであらう。吾人は別に大隈内閣の爲めに辯ずるものにあらずれども、伯が民間にあること十有七年、其蓄積し來れるところの潜勢力を傾けて、今、時局收拾の大任に當る。其老來の意氣を壯とし、其經綸に對して重大の囑望を抱かざるを得ない。況んや一方の政友會が、多年政

權を擁して順境に馴れたる結果、往々にして横暴に流るゝを目撃するの時、たとへ純政黨ならずとも、準政黨内閣の出現は大に歡迎するところである。政黨内閣の出現が、最も立憲的なりと理解せらるゝの今日に於て、純政黨内閣は甚だ望ましかことなれども、過渡の時代に於ては、又如何ともなし難き所であらうと思ふ。

定期が、臨時か、兎にも角にも來るべき議會は解散の運命を免れぬのであらうが、解散後に於ける總選舉が實に觀物である。此の總選舉に於て、始めて國民の政治的識見の進歩如何が檢せらるべきであつて、若し此機會に於ても、眞民黨の敗るゝであらう。此際に於ては、伯大隈は必らず一方の民軍を率ゐて、馬を陣頭に進めざるべからず。一黨の議會に絶對過半数を占むるは、却つて憲政の腐敗を來すに過ぎざるのみ。二黨對立の好望なるはいふまでもない。然らば則ち同志會も、國民黨も、中正會も悉く解散して、打つて一丸となるべきである。此際に當つて注目の價あるは、大

養氏の進退であるが、氏にして若し同志會に對する私情の故に、其舉措を過るべくんば、氏の政治的生命否、國民黨の生命も亦絶滅に歸せざるべからず。余は實に氏の自重を望まざるを得ない。

政治的、社會的の腐敗の簇出は、甚だ壓感に堪へざれども、更に他の一面に於て、純潔至正の分子の出て、廓清の事に着手しつゝあるは、快心の極みである。物寢まりて又通ず、吾人は必らずしも悲觀の要はないのであらう。一陽來復春風水の一時に至らんもの、穴勝ち吾人の空想にあらざるを信ず。要は國民の努力如何にあり。(鈴木生)

## 言論の自由時代來る

今度の内閣で最も特色あることは大隈伯が總理大臣兼内務大臣となられたことである。伯は嘗つて政治は我輩の生命なりと言はれたが、今まで政治で失敗しても言論を棄てなかつた處から見ると伯の生命は寧ろ言論であつたやうである。

山本内閣は桂内閣よりも言論の自由を束縛したやうである。山本攻撃のために發賣禁止さるゝこ

と萬朝報は七回、二六新聞は實に二十六回の多きに上つた。大隈伯主宰の新日本の如きでさへ二回の發賣禁止を命ぜられた。

殊に二六新聞の如きは對人的で其經營者に復讐するが爲めに發賣禁止するに至つては、保安警察權の悪用亂用も言語間斷である我國にては言論の束縛あるのは、單に政變騷擾の時のみでない。平時も言論の自由ないのである。殆んど轡を嵌めぬ許りである。其該博深遠なる學識を以て一世を指導して行かねばならぬ大學教授は、言論の自由を有しない。官吏は口なきが如くである。何か云ふと忽ち免の字である。學校の擬國會さへも二三年前から止められた。かくの如き言論束縛の甚しきは世界中日本と露國位であらう。

然るに今や言論を以て生命とせらるゝ大隈伯が總理大臣兼内務大臣となつたのであるから、言論の束縛壓迫は少くも事實上一掃せらるゝに違ひない。自分の雜誌が發賣禁止さる位だから、無論さうだらう。然し私は單に伯の時代のみ言論の自由あるのみでなく、嘗つて發行停止權を廢して單に發賣禁止とした如く更に一步を進めて何等か具體的法律として言論自由を保證して貰ひたい。これ言論を以て生命とせらるゝ伯の當然の義務であると

表面に現はれた明治以後の文學の主なる潮流は前に言つた通りリアリズムであつたにしても、そのリアリズムも最初はまだ摸寫といふ程の意味を出でなかつた。極淺い上つらな寫實の意味を多く出でなかつた。この幼稚なリアリズムに深みを與へ、眞實を追求するといふ心持ちを與へたものは廣い意味でロマンティックな精神の力である。人生に對する熱情と疑惑との力である。現實の人生を甘んじ安んじてゐるやうな、おもしろがつてゐるやうな心持ちから、外面的に見てゐるに過ぎない幼稚なリアリズムに物足りなくなつて、何ものか深い限りないものをその中に求め様といふ熱情と、疑惑との心持ちが強くなるに隨つて、リアリズムそのものも亦た生きた開眼せられたものとなつて來た。初期のリアリズムの作家の多くが、どこか平らかな安らかな心持ちで、おもしろがつて人生を見てゐる傾きを有つてゐるに對して、その當時の青年文學者殊に詩人の間に流れてゐたロマンティズムの一派が、一層清新な自由な氣風を文壇に行き亘らしめたことは、最も重大な意味を有

つてゐる。紅葉あたりを中心にしたリアリズムは明治文學中のある意味では代表的傾向ではあるがしかしそのリアリズムには、深い疑惑も熱情もない。コムプラセント・リアリズムである。而して紅葉中心時代のロマンティックな青年詩人等は、明らかに當時のリアリズムに反抗して、やがて來るべき新時代を開くことになつたのである。日清戰爭後の時代には勿論リアリズムの傾向に立つて、更に一層の深みを求めた青年作家も出てゐるが、しかしその大體の傾きは觀念的であつて、その當時のリアリストイックな青年作家の間にも、眞の心の底から迸發するロマンティックな熱情と疑惑とは乏しかつたと言はねばならぬ。所謂深刻といふものも、所詮ある觀念に教へられて、人生の暗面に外から題材の上から眼を向けたといふに止まつてゐた。日露戰爭後の文學は、この外面的リアリズムの傾向があき足らずとせられて來ると同時に、ロマンティックであつて前時期の詩人風の文學者が、その熱情と疑惑との嵐を経た批評的精神から、忌憚なく眞實の人生を見ようとするに至つ

たものである。紅葉中心時代のロマンティシストであつた獨歩藤村花袋等が、この時代の代表的作家となつたといふことは、確かに意味のあることである。ロマンティシズム嵐を経ない、心の嵐を経て來ないリアリズムは、コンブラセント、リアリズムか、たかゞ觀念的深刻小説の程度にしか行かないことを自のづから語つてゐる。同じ意味に於いて、ニーツエの紹介は、たとひニーツエその人の紹介としては淺薄皮相のものに過ぎなかつたにしても、評論界のロマンティシズムとして、最近文學の傾向を促進する一つの力であつたことを認めなければならぬ。

要するに明治以後の文學は、外面的リアリズムの提唱に初まつて、漸次にリアリズムが内面的に發達して來たあとを示してゐる。而してその外面的リアリズムを、内面的生命のあるものとしたものは、人生に對する熱情と疑惑との精神、大體に於いてロマンティシクな精神の力である。もしロマンティシクといふ言葉が誤解を伴ふなら、人生の無限を追求する徹底的精神と言つてもよい。こ

の精神の深まつて來たあとが、明治以後の文學の發達の歴史である。日露戰爭以前に於ては、この徹底的精神（その當時のロマンティシズム）と、リアリズムの精神とが、離れゝゝになつてゐたが三十八九年以後になつて、この二つの精神が抱合して、現實の人生の底深く眞實を探究するといふ心持ちになつて來た。漠然たる感情の無限を求めたロマンティシズムは、確實な現實の中に深い眞實を求めようとし、外面の現實に甘んじてゐたリアリズムは、その内に限りない意味を感じようとするやうになつた。最近のリアリズムの底を流れる精神はこの二つの抱合した心持に外ならぬ。

而もそのリアリズムも、更に一層自由な深みのある無限の生命を求めようとしてゐる。ある意味ではリアリズムの轉化ともいへるであらうし、またある意味ではリアリズムが一層徹底し一層深まるといふことにも見られるであらう。しかしその名づけかたや見かたはどうあらうとも、その根底中心を貫くものが、生命の無限を信じてこれを求める精神であることにはかりはない。





## 明治以後の文學思潮

片 上 伸

最近三十年間の文學は、とりも直さず明治以後の新文學である。坪内先生の『小説神髓』が出たのが丁度明治十八年で、今から三十年以前に當つてゐる。『小説神髓』は單に日本の文學批評上に藝術論上に一つの新紀元を開いたものであるのみならず、明治以後の新文學思潮の源とも見るべきものである。文學批評が文學界に重大な意味を有つやうになつた起源もこの一卷にあるとともに、明治以後の文學を一貫する思潮を最も早く指導したもののこの一卷である。

明治以後の文學は、この十八年前後を創始時代として、現在に至る三十年の間に、凡そ二つの著しい變轉期を経て來てゐる。その第一は二十八九

年頃、日清戰爭の時代、その第二は三十八九年頃日露戰爭の時代である。この二つの變轉期を境として、前後三時期に分けて見ると、現在も亦た確かに一つの變轉期に在るやうに思はれる。而してこの三十年の間に經た文學上の變轉進歩のあととは明治文明の諸方面の現はれに比べて、可なり深い根底を潜つて來てゐる。

『小説神髓』は言ふまでもなく専ら小説に就いて説かれた文學論である。明治以後の文學も、その中心勢力は大體に於いて小説であると見ねばならぬ。而して『小説神髓』に説かれた眼目は、心理的觀察、解剖描寫の主張である。また作者が「敢てあのれの意匠をもて善惡邪正の情感をば作設く

ることをばなさず唯傍觀してありのまゝに模寫する心得にてあるべきなり」といふ客觀的態度の尊重説である。而してこれ等の主張が、最近凡そ十年の間に起つて來たナチュラリズムの主張に外ならないことを思へば、その間に直接の傳承影響は必ずしもなかつたにしても、明治以後の新文學を一貫する思潮が最も廣い意味に於けるリアリズムであることは明らかである。勿論その中間の時代は必ずしもリアリズムの傾向ばかりで一貫されてゐるとは言へないが、しかも大體の上から言へば、『小説神髓』によつて早く既に唱へられたリアリズムの傾向が、幾多の變遷と發達とを経て、最近のリアリズムの傾向となり、それが又さらに漸く一轉化を求めてゐると見るのが至當である。

『小説神髓』以後日清戰爭後に至る凡そ十年の間は、大體に於いて啓蒙時代準備時代である。徳川末季の一種の頽唐趣味、戯作臭味の脱け切らない時代で、文壇の先達は、言葉や文章の方面から、精神覺悟の方面から、やがて起るべき新文學の種

子を扶植するとに力めた。あらゆる方面から新しい要素を攝取したり、新しい試みをしたりして、後の新文學の爲めに邪魔を除き道筋を立てた時代である。即ちイギリス、ドイツ、ロシア、フランスなどの外國文學も初めてこの間に紹介せられその一方では自國文學、即ち近松西鶴などの新研究が行はれ、戯作臭味を脱した眞の文學が漸く認められるほどになつて來るとともに、文章の方面では言文一致の試みが現はれて、だん／＼その地步を占めて來るし、また新體詩といふ新しい様式の文學も行なはれて來るといふ次第であつた。

日清戰爭の後になると、前時代から芽ざしてゐた現實的傾向が、更に一步を進めて、小説壇では實社會の觀察心理的描寫、といふやうなことがよほど明白に意識せられて來て、何等か人生の深み眞實さを求める心持ちを加へて來てゐる。一葉の出したのも丁度この時期の間である。その一方で詩壇では文學界一派その他のロマンティズムが最も鮮明にこの時期を色どつてゐる。

要であつたのである。基督教信徒に取つては彼等が基督教を信ずるは、それが即ち眞理を信じ正義に従ふので人の當さに爲すべき當然の事であるので、裏面から見ればこれが即ち眞正の孝行であり又忠義であると考へられたのである。當時予に取つても此邊の消息はおぼろげながら追々に分つて來たが、さてそれならばと云て、大迫害でも起つて來て、基督教徒は悉く磔刑にでも處せられると云ふ様なことになつたら、その時予は天をも怨みず又人をも怨みず、從容として死につくことが出来るであらうか。當時十六七歳であつた予に取つては此の決心又此の覺悟が容易には出來なかつたのである。

然るに此等二つの最大困難も又その他の色々な困難も皆打ち勝たれて、遂に予は洗禮を受けることになつたのである。洗禮は受けたがさてその後にはける予の信仰は如何と云ふに基督教は、宗教的に精神的に又道德的に考へて、慥かに人心に徹底し、その琴線に觸れ、人性に満足を與へ社會に裨益を來たすものであると云ふことは、益々明白に分つて來て從つて此の點に於いて基督教が神道や儒教や佛教に優さる所以も愈々明白になつて來たに係らず、基督教の所謂教儀即ち *Doctrines* に至つては愈々困難を増加

して來た。

明治十七年の夏には予は同志社の普通科を卒業することになつたので、英書は略ぼ自由に讀める様になつた。基督教の證據論や其他基督教に關する書物も多少讀んで見た。又 *Mili* の宗教三論や、*Sponser* の不可識論や *Darwin* の進化説をも伺ふて見た。斯く一方に於いて何んでも正統派の基督教の教儀を維持し又信奉して行きたいと云ふ意志と努力とのあるにも係らず、さし引き勘定した處では所謂基督教の教儀に關する予の疑問は益々氷結して如何ともすることが出來ない様になつた。何だか基督教は風前の燈の如く、又將に覆らんとする大厦の如く、孤城落日、四方八方に強敵を受けて、今や將さに破滅せんとして居る様に思はれた。當時予は丁度數へ年二十歳であつたので、最早何か一生の専門を定め方針を極めるべき時機になつて居るとは感じたものゝ、予は己れの信仰問題に於いて未だ安心を得て居ないので、それが氣になり心に懸つてどうしても、外の事は何事をも考へ

たりしたりする気分にもなれなかつた。夜も晝も氣にかゝるは神の存在である、基督の神性である、聖書の無謬である。そこで予は明治十八年の四月に遂に再び同志社の神學科に入り、三年間神學を専門に研究することに決心した。予が此の決心をしたのは、決して牧師にならうとか傳道師にならうとかの考へからではなく、全く神學上の疑問を晴らしたい。出来ることなら安心に基督教を信じたいと云ふ一念からであつた。

同志社の神學校に這入つてから三年の間予は随分熱心に勉強した。心理學も倫理學も哲學も組織神學も聖書批評も基督教證據論も、出来る限り研究して見た。然るに讀んだ書物が惡るかつたのか、教へて呉れた教師が惡るかつたのか、將又教へを受けた予自身が惡るかつたのか、全體には宗教に關する疑問に就いても、又特別には基督教に關する疑問に就いても、成る程或る方面から考ふれば多少得る處が無いでは無かつたが、どうしても予が心の底に安心が出来なかつた。衷心に満足を感じ得る程徹底した結果に到達することが出来なかつた。

つた。斯くして三年の科程をも終つて、明治二十年の夏は同志社の神學科をも卒業したのである。

神學校は卒業したが、予は傳道に従事する意志は少しもなかつた。予は實に所謂基督教に對して傳道に従事し得る程の確信がなかつたのである。

故に此の上は如何にかして一度海外に飛び出して今少しく深く又自由に、一方には宗教哲學 (Philosophy of Religion) を修めて宗教そのものの本質を究め、又今一方には比較宗教學 (Comparative Religion) を學んで諸宗教の價値を比較して見たいと思ふたが、何分貧書生のこととて獨力で洋行が出来る筈もなく又予を知つて助けて呉れる人もないから、此の志を貫く方法はトテモ急には見出し得られぬと悟つた。そこで予は取り敢えず教師となつて多少の貯金を爲し以つて徐ろに己れの素志を貫かんと決心した。

斯くして中等程度の學校に於いて教鞭を執ること滿三年。此の間に於いて予は父母の國を去つて、米國ハーバード大學に遊ぶべく準備を怠らなかつたのである。(つゞく)



ので、究屈な様な變チキな様な感じがしてたまらなかつた。朝は毎日祈禱會に出席せねばならぬとか、毎日三度の食事前には神に感謝をせねばならぬとか、日曜日には買ひ物をしたり又旅行をしては善くないとか、會堂へ行かねばならぬとか、曰く何、曰く何と、云ふ様な風で始めは餘程妙に又變に感じた。併かし慣れると云ふと妙なもので、段々月日が立つに従つて校風に慣れて來た。それのみならず終には一方に於いて英語の勉強が面白くなつたと同時に、又他の一方に於いては基督教の性質も略ぼ分かつて來たので、入學から一年半の後、即ち明治十五年二月に洗禮を受けて基督教徒の一人となるに至つたのである。

併しながら予の斯く洗禮を受けて教會に這入り得る迄には少なくとも十數回の信仰上の試験を受けたのである。品行上の試験もあれば又信仰上の試験もあつた、智識上の試験もあれば又決心上の試験もあつた。神の存在、神と萬有との關係、基督の神性、聖靈、三位一體、奇跡、豫言、復活、默示、聖書の無謬、罪惡の起源、基督の贖罪、信

仰、悔改、靈魂不朽、天國、地獄、天使、惡魔、祈禱の効力、教會の成立、洗禮の意義、晚餐、新教と舊教との差別、新教の諸宗派の起源、等に至る迄委細の試験を受けて、始めて洗禮を受け得ることとなつたのである。

予は此等の試験に及第した。斯くして予は受洗した、受洗した當時は、予は少なくとも所謂正統派の基督教徒の有すべき信仰を持ちたいと自ら努めたと云ふことは事實である。併かしながら既に受洗の當時から予の心中には種々様々な疑惑の種子が蒔かれて居たと云ふことも、亦争ふことの出來ぬ事實である。さて予が洗禮を受けるに至る迄に於いて基督教に關して持つて居た最大困難とも云ふべきものが二つあつた。一つは神の存在如何と云ふ問題であつたが、今一つは死を甘んじて基督教を信ずると云ふ決心であつた。

第一の神が有るか無いかの問題に關しては、予は非常な困難を感じ又煩悶をしたものである。而かも今日から顧みて考ふれば、予が困難を感じたのは、所謂正統派の基督教の神觀念即ち予等が當時斯く信ずべし信ぜざるべからずと教へられたる神に對してであつて、決して神そのものに對しての困難ではなかつたのである。

たとへば六日の間に天地萬物を創造した神、ユダヤ人にのみ救主を下だし他の人類の亡びに陷あるを顧みない神、アダム、エヴァが罪を犯したと云ふてエデンの園から兩人を放逐した神、人類が善を爲したとて忽ち喜び又惡を爲したとて忽ち怒り悲む神基督に於いて身代はりの罪を罰するにあらずれば、人類を愛し恵むことの出來ぬ神、基督の贖罪によらねば我等の祖先をも又釋迦とか孔子とか云ふ様な聖人賢人をも救はぬ神、基督を信ぜぬものをば地獄に落とし入れて永遠の苦しみに逢はすべき神、人類に夥多の疾病と苦痛と災害と艱難とを與へつゝ。而かも自ら全智全能至善至愛と稱する神は、予に取つてその存在を信ずることの最も困難であつた神である。予は屢々宣教師の子供などを見るに際して私かに彼等を羨しく感じた。予は常に思ふた、予等が日本人に生れたのが無限の不幸である。西洋人の家に生まれ彼等の如く幼時から神の存在を教へられ、且つその存在を信じて成長したらんには神の存在を信せんが爲めに斯くまで苦勞はせざるべきにと。

又第二の困難即ち死を甘んじて基督教を信ずると云ふ決心も、随分出來惡くかつたものである。最近二三十年間に於ける時勢の變化は實に非常なものであるから、今日の青年諸君に取つては單に昔話の様に聞えるかも知れぬが、予等が基督教を信じた時代に於いては、實に此の種の決心が必要

であつたのである。今日でこそ基督教を信ずるに何の妨もなく又迫害もないが、今から三十餘年前と云へば、まだ都會の辻に建てられて居た切支丹邪宗門云々の公札が取り去られてから、間のないことである。當時は基督信者は一般に世間から蛇蝎の如く嫌はれ且つ種々様々に迫害せられた時代である。既に予が同志社に遊學するに當つても予の母親は之に反對し、爲めに親族會議が開かれ、予は決して基督教を信ぜぬと云ふ條件のもとに、ヤット同志社行を容された位である。當時一般に行はれた反對は、基督教は人を親に不孝に又君に不忠に成らしめると云ふ考へであつた。當時は實に死を甘んずる程の決心がなければ、基督教を信ずることが出來惡くかつたのである。基督教が果して眞實に人を不忠不孝の徒とならしめるか否やは別問題として、當時の時勢から考へて見ると當時の基督教徒には慥かに親からは不孝の徒と思はれ君からは不忠の徒と思はれても、之を甘んじて否、單にそれ斗りてはない、自分は殺されても構はぬ、基督教を信ずると云ふ程の勇氣が慥かに必



## まだユニテリアンをやめぬか

岸 本 能 武 太

數年前に早稻田大學を卒業した或る人が、去る頃久し振りにやつて來て、色々話の序いでに、云ふには「あなたはまだユニテリアンをやめになりませぬか」と。予は實に驚いてあいた口がふさがらなかつた。ユニテリアンと云ふものはしかく無造作に或は之を信じたり又或は之をやめたりすべきものであらうか。成る程今から丁度十年許り前から數年聞予は芝にあるユニテリアン教會から分離して居つたことはあるが、その當に一時的のことであつたのみならず、單に一のユニテリアン教會から離れて居つたまでのことで決してユニテリアン主義をやめたと云ふことではない。將來と云へども予はユニテリアン教會から離れるかも知れ

ないが、今日考へ得る限りでは、予は決してユニテリアン主義そのものを抛棄することはあるまい。そは予がユニテリアン主義を信奉するに至つたには、深い基礎と強い理由のあることで、決して一朝一夕のことでもなく又一時の出來心からのことでもない。予は實に當に我國のユニテリアン主義者中最も古參の一人であるのみならず、寧ろ予は生れながらのユニテリアン主義者であると自ら信じて居る位である。乞ふ予をして少しく己れの過去を談して、ユニテリアン主義に對して予が如何なる關係を有するかを明らかならしめよ。

予が我國に於けるユニテリアン運動に關係する様になつたのは明治廿七年の夏予が米國から歸朝して後間もないことで、丁度今

から廿年前のことであるが、予はその時、我國に於けるユニテリアン主義の中堅とも云ふべき「先進學院」の講師になつたのである而してその後今から十年前即ち明治三十七年の秋から同四十二年の夏迄滿五ヶ年の間は、前にも一寸云ふた通り、ユニテリアン教會からは離れて居たが、これは教會の財政に關する意見の衝突に原因したので、決して信仰上主義の變動を意味したものではない。斯く予が實際我國のユニテリアン運動に關係する様になつたのは廿年以前のことであるが、それよりも尙數年以前のこと即ち、明治廿三年の夏ハーヴァード大學留學の爲め米國に向つて横濱を解纜した時には、予は信仰の實質に於いて既にユニテリアンであつたのである。否、更らに遡つて考へて見れば、それよりも尙數年の前即ち明治十八年の春再び同志社に歸りその神學部に入學した時否、それよりも更らに遡つて明治十五年の春二月五日に安部磯雄君その他と共に、京都の今出川教會に於いて新島先生から洗禮を受けて始めてクリスチャンとなつた時に、既に内心に於いてユニテリアン主義の傾向を持つて居たのである。早く云へば、予は生れながらにしてユニテリアン主義者であつたと、今日も尙深く自ら信じて居る次第である。

予が洗禮を受けて始めてクリスチャンとなつたのは、明治十六年のことであるから、今日から數ふれば實に三十三年以前のことである。當時予は同志社の普通科の三年生であつたが、當時既に基

督教徒となるに就いては予は種々の困難を感じ又煩悶を實驗したるものである。

予が郷里岡山から始めて京都の同志社へ遊學することになつたのは、實に明治十三年九月のことであつた。元來予が同志社に行く様になつたのは別に同志社が基督教徒主義の學校であつたから之を望んで行つたと云ふ譯ではなかつた。予は生れ付いて手先きが器用なたちであつたのと多少工夫がよいと人にも云はれ又自身もそう信じて居たので、今日の工科大學の前身である工部大學に入學したいと思ふて居た。然るに予の姉の婿に坂東直記と云ふ人があつた。此人は當時岡山の有志家の一人で、中川横太郎氏などと共に、岡山市の公共事業の爲めに多少盡力をした人であるが、基督教徒を同市へ輸入することにも與つて力のあつた人である。或る日の事此の坂東が予に向つて若し同志社に行きたいならば學資を出してやるとのこととて、予は父母や親族と相談の上俄かに行くことになつたのである。さて同志社に行いて見ると、何んだか萬事が餘りに宗教的であり基督教教的である



Ocean. My imagination had a most interesting time in playing with these strange changes in the world.

It can be easily understood, then, that when, in the near future, my father received from somewhere some great volumes, "The Narrative of the American Expedition, by Commodore Perry," I was eager to know what was in them. Those books marked a sort of epoch in my relation to the world, and, distinctively, to Japan. The distant parts of the globe became, for the first time, real things; but that mysterious country called "Japan," I read about as I had read of the "Arabian Nights" and of "Robinson Crusoe." The books abounded in pictures, some of them color-print reproductions of Japanese drawings. I remember, vividly yet, the impressions made by one gorgeously colored sheet representing a river ferry somewhere, across which ladies with the strangest faces and most wonderful costumes, that I could have imagined, were being borne on platforms lifted high on the shoulders of men who wore no clothes.

The whole scene was like a glimpse of some wizard's land; the faces were those of men and women, but of the queerest features possible. I took it all as literally, true, then.

I was equally impressed with a reproduction of a Japanese picture of wrestlers in action. And when I read in the text of how these huge masses of flesh sprung at each other, and were clinched with a heavy thud and then struggled for the mastery, I sat and wondered, and wondered over a people who could be composed of such weird, delicate, almost unearthly creatures as the women who were being carried in their gorgeous robes across a river, and of men who were the monstrous masses of flesh and fat which clashed upon each other in a wrestling struggle. How I wished then that I could go to Japan and see these magical human beings!

In all probability,—I now think,—much of the unreal impression that is still abroad in the world about Japan and the Japanese people, originated in, and has been sustained by, the descriptions in early foreign books about this country, in which there were many reprints of the peculiar artistic creations, which were then everywhere to be found on sale.

At any rate, I began to be particularly interested in Japan through the wonderfully fascinating pictures, unlike any I had ever seen elsewhere, which met my child-mind in the great volumes which told of the "Perry Expedition."

I was well prepared, therefore, to pay special attention to all particular news about Japan when, in after years, they came up in my experience.

The next noticeable event in my relations with this country happened when I had become a college student.

In 1860, I think it was, I heard of a Japanese Embassy having appeared in New York; and of the gorgeous clothes they wore; of their odd hats, and their shoes; and of their beautiful swords. I remember, too, that there was so much popular interest in the sort of theatrical display they made everywhere, that some shrewd merchants named articles of their merchandize after "things Japanese." There was a particularly good cigar put on sale, called "The Tycoon;" a fine cigar made of choice Havana tobacco, very fragrant as a cigar. Hosts of people bought those cigars not only because they were for a while the fashion, but because they were very good, too.

Of course, all this interest in Japan was of a trifling kind; and it does not account for what, in time, became a profound sympathy with Japan, and brought me to this land to become one of its warm friends and fellow-workers. My childish and boyish attraction to the country and its people, merely prepared the way in my mind for the serious interest that came afterwards.

It was in 1870, or a little later, when I lived near Boston, Massachusetts, as minister of the Unitarian church in Waltham, that my earnest interest was aroused. A close friend of mine, Mr. Gilbert Atwood, had been given the care of the finances of a number of young Japanese who were attending schools then in Eastern Massachusetts. At Mr. Atwood's house I met several of these young men. I realized then what, of course, I had come to know by that time, that the Japanese were really human beings, essentially like myself; and that they were, as a nation, making wonderful efforts towards putting themselves into intimate relations with the rest of mankind; and to carry forward the science, arts, government and social development which mark the world's advancing civilization.

I felt, then, a strong desire to join with the Japanese in doing this work. And Mr. Atwood asked me whether he should not recommend me for a position in the educational institutions in Japan. I wished to accept his suggestion, but circumstances were such then that I could not well leave America. However, that experience deepened my interest in Japan greatly, and gave me an intelligent understanding of the work that the Japanese had begun to do in their new period of international intercourse.

So it was, that my real and worthy interest in Japan began. And when in 1889, I was invited to be one of those who were to be sent to this country in answer to the request of some important Japanese, that the liberal and rational phases of the Christian religion be represented here, I was in position to come. I gladly accepted the commission to come which was offered me by the American Unitarian Association. now twenty-five years ago.

そは生命の神秘を見失へる吾等の生活は、餘りに絶望的であり、倦怠であり、暗黒であることを知るからである。暗と絶望の力は絶えず私達の周圍を取り圍んでゐる。私の心眼が、生命の神秘を直覺すると同時に、私の周圍の絶望と暗黒とが一掃せられて、そこに私は生長し行くものゝ懷しき世界を見ることができる。そこに光被せられたる生活が現はれる。

こゝまで私達の生活が進んで來て、初めて私達は眞實に雄々しい人生のヒーローとなることができる。しかしながら現在の私の生活は決して光被せられた生活でも、生命の觀喜に咽ぶほどの生活でもない。私はたゞ刹那的に生命の神秘に觸れて内なる我と外なる我の二つが、生命伸展の火花を散らす瞬間を見守るだけである。私の生活の周圍が暗と絶望に取りかこまれてゐる。しかも私は暗夜にたゞ一つの星のきらめきを待つが如き希望をもちて、暗黝なる私の生命の沈黙に面して、生命

の神秘を待つてゐる。私は一刹那の星の閃の爲めに、幾夜の暗黒の底にありて、大空を仰いでゐる確かに一刹那の閃光である。しかし刹那的の閃光に、永遠の光耀を直覺することを得るが故に、私は更らに來るべき刹那的の新らしき閃光を待つてゐる。若し私の心眼が更らに發展して、刹那的の閃光より更らに擴大せられて永遠持久の神秘の光耀に浸されつゝあることを自覺するに到らば、私の生活はそこに宇宙的の生命そのものとして生長するであらう。私の生活は絶えず宇宙生命の光耀そのものとなりて伸展するであらう。

沈黙！沈黙！そして靜かに生長し行く自我の内に生きよ。汝の内の世界が眞に生命の神秘に驚き生命の伸展に躍り、不斷の更生に生きる時に、汝は汝の外の世界が光被せられ、伸展し行くことを知るであらう。

## How I became Interested in Japan.

By Clay MacCauley.

When the first number of this Magazine was published, nearly thirty-four years ago, I was already greatly interested in Japan. I was minister, then, of the Unitarian "All Souls, Church" in Washington City, in the United States of America; and among the regular attendants at our Sunday services were His Excellency, Honorable Kiyonari Yoshida and Madame Yoshida. Mr. Yoshida, at that time, represented the Government of Japan, at Washington; and he found our church to be so congenial to his own way of thinking, that he rented one of our pews and became a regular attendant. He, with various members of the Japanese legation who also frequently came to our church, became friendly personal acquaintances of mine.

During that period, one of the members of the Legation died, and I was called upon to conduct the funeral services; a duty which brought me yet closer to my Japanese friends and greatly strengthened my growing interest in this country and its people.

But these facts, of a time already far in the past, do not tell anything of how my special interest in Japan began. That experience goes far back of my Washington ministry.

I can remember a time, much farther away, when I used to hear a great deal of Europe and of Africa, and of India and of China, but nothing at all of Japan. And then, I can remember a time when I used to hear about a strange people, who lived shut up on some islands near the coast of China, who would not allow any one to visit them; who were dangerous to any foreign sailors who happened to be shipwrecked on their coasts; and who ought to be required to open their country to the rest of the world. Of course, as a child, this talk meant very little to me.

I heard later of the starting of a naval expedition under Commodore Perry, to go to Japan. All this was mixed up with news about the discovery of gold in California; and the crowds of people who were going to the Pacific coast; and the growth of trade with China, and the importance of free and safe navigation of the Pacific



生の伸展、生の擴大——不斷不絶——の神秘的實在の力と一致する刹那、私達の生活は、決して引き摺られ行くものでもなければ、生き甲斐のないものでもない。生の神秘——そこに私達の生活者としての特權、生活者としての矜持、生活者としての希望が湧くのである。

絶望的であつた私達の生活が眞に生の神秘を直覺した刹那に、私達の歡喜は涙に咽ぶ歡喜である。これがである。神秘を直覺した私達の生活は悉く生命を慕ふ涙によりて淨められたものである。若し生命に對するその人の憧憬が涙に淨められたものでないならば、若し生命に對するその人の愛撫が涙を有つたものでないならば、それは未だその人の心が人生に對して充分の敬虔を拂ふことを知らないからである。その人は眞に人生を味つたことのない人である。人生のどん底に下つて、人生の暗黒と、罪惡と、絶望とを味はつたことのない人である。若し私達が眞に人生の矛盾、相剋、倦

怠、絶望の實際を正面して捉んでゐるならば、

私達の心は、生の神秘に面する時に、殆んど歎歎くほどの懷しさを覺ゆるであらう。失はれたる小羊を索ね得たる刹那の牧者の心は、決して歡喜、希望、充實といふだけの觀念を羅列したわけでは言ひ表はすことはできない。彼れは殆んど、それが悲しむべき事實であるか、或は歡ぶべき事實であるかをさへ辨へぬであらう。彼れはたゞその小羊を抱いて、小羊に頰摩りするであらう。泣くであらう。彼れの心は、充たされたる生命の確實性に對して生命を愛撫する熱き涙の快さをもみ覺ゆるであらう。しかしそれが歡喜であらうか？希望であらうか？

一疋の小羊を失へる牧者の心は、やがて生命の神秘を直覺し得ぬ人々の心である。失へる小羊を得たる牧者の心は、やがて生命の神秘に蹲ける人々の心である。そこに悲哀なく暗黒なく、ただ生命の伸展を慕ふ心が、嬰兒の如き心をもて、只管自己の生命の凡べてを生命の神秘そのものに委ねやうとする努力である。

涙！涙ほど麗しきものはない。私達の生活の凡へてが涙で淨められなければならぬ。愛すること憎むこと嘆美すること、怒ること、笑ふこと、その凡べてが、涙によりて淨められたる時、私達の

憎しみも、愛も、嘆美も眞實のものとなる。涙に濕されたる罪惡は、涙に乾きたる善行に優ること幾倍である。若し私達の一生が如何に、光榮あるものであらうと、如何に自己に忠實なものであらうと、或は如何に偉大なるものであらうとも、その人の生活が涙を以て淨められてゐないならば、未だその人は眞に生きた人ではない、眞に偉大なる人ではない。私達は私達の生活が如何に小ひさくとも、暗くとも、如何に汚されてゐやうとも、私達の生活が絶えず生の神秘に對する咽ぶか如き涙のうちに濕されてあらんことを欲する。そこに人性の美しさとやさしみが生れる。

勝利のうちにも敬虔な涙を忘れてはならぬ。失敗のうちにも敬虔な涙を遺れてはならぬ。生の神秘にあこがるゝ思慕と敬虔の涙なき、宗教、文藝、哲學は、たとへそれが如何ほど聲高き角笛をもて宣言されやうと、それは私にとりて、何のかかはりもない。私が求めてゐるものはそんな文藝でも思想でも宗教でもない。私達は如何にして最も強く、最も明かに、最も確かに生の神秘を把握することができるか。生の絶えざる伸展に浸されて、潮の如く伸展し行く自我の生長に對して、私達は何れほど敬虔な思慕の涙を瀧ぐことができるか。涙は生の凡べてを淨うする。そこに宗教も

文藝も思想も私達の生活の一表現として價值あるものとなる。

沈黙せる生命、内なる生命の豊かさとは眞實に生の神秘を把握し得たる者、換言すれば生そのものの、根本的伸展と一致したる、個的自我の伸展、生長、擴大に他ならない。私達の自我が於多く生の神秘を把握し、於多く生そのものの伸展を直覺するほど、私達の内なる生命は大きなものである眞實なものである。眞實に生きる人とは善人といふ意味でもない。道德家といふ意味でもない。大宗教家大事業家といふ意味でもない。唯自己内心の奥底から湧き出づる生命の神秘と、時と處とを裏むあらゆる自然の生命の神秘とを直覺しそこに人生に對する彼れの敬虔な出發點を發見し得たる生活の人々である。彼れが悲しむ時、宇宙的生命が悲しみ、彼れが愛する時宇宙的生命が愛する。彼れは絶えず新しき自己を造りつゝ、舊き自己を破壊して進む。内から内からと湧いて來る彼れの新生は更らに更らに新しき生命の神秘に向つて慈母を慕ふ嬰兒の如く慕進し行く。彼れは生命の神秘を戀ふことなしには一刹那も生きてゐることはできぬ

れほどの歡喜と緊張を感じてゐるであらうか。

私達は常住絶えざる法悦を抱いて私達の生活を味つてゐるであらうか。私達は生活に對して常に滿々たる希望を抱いてゐるであらうか。不平、不満、倦怠、絶望、憎惡、嫉念、少なくとも何等かの不充實感が私達の生活の多くの時間と内容を彩つてゐまいか。殊に私達の生活が最も頹廢的な緩慢な生活に墮し易い一つの主なる原因は、誰から無理強ひに壓し附けられるともなく壓し附けられる淡い運命觀に陥つた時である。そしてこれ等の運命觀は自己の小ひきな力、——寧ろ無力——を發見した時に、姑息な偷安策として多くの人の選擇する一つのあはれな人生觀である。

しかしながら自己の力を信ずることの強き天才そのものと雖ども、一種の宿命的羈縛から遁れることはできぬ。たゞし天才が自分の生活を押し擴げ行く自己の力の、強き大さを感じる刹那に、彼れの宿命感、變じて神秘感或は嘆美感となるであらう。力弱きものゝ人生はその運命觀が、いつまでも運命觀であるに止つて更らにそのうちから神秘、嘆美の世界を見出すことをしないのである。應病な彼れの兩手は、未知の境を押し開くだけの勇氣を有つてゐないのである。彼れは徒らに宿命の扉の前に立ちて、灰色な彼れの生活を泣くのみである。

私達はその扉を壊らなければならぬ。私達は驀地らに生命そのものゝなかに跳び込んで私達自身私達の周圍の悉くが神秘に呼吸し、神秘に生きつゝある實相を攫まなければならぬ。メテルリン

クは私達の死は冒險である、試みてあると言つた私達の死の後には光明であるかも知れぬ、永遠の自由な伸展であるかも知れぬ、兎も角、死そのものの實際は、死の門をくぐるだけの冒險なしには味はれない。私達は私達今日の眞實の生活に味到せんが爲めにも、私達は何等かの冒險を試みることにしには、目的を達することはできない。

生活の冒險とは即ち生活の破壊である。生活の絶えざる破壊である。然しながら、その破壊は更生の自然の結果としての破壊でなければならぬ。更らに新たな自然、更らに新たな生命が内から外に向つて溢れ出でんが爲めの破壊でなければならぬ。舊き自我の罅は、新しき自我の伸展から生ずる自然のものとなければならぬ。自我の伸展が自然的であれば、自我の破壊も亦自然的でなければならぬ。随つて私達の更生も破壊も共に希望と光明とでなければならぬ。私達が破壊に對して悲哀を感じ、絶望を感じる所以は、まだ私達の破壊が自然的のものとなつてゐないからである。

破壊に無理があるからである。私達は先づ外部的の破壊を企て、後に新しき生命を注ぎ込もうとすればこそ、そこに充たされざるものの悲哀や、空望を感じる寂寥があるのである。私達の自我が内から外に向つて、流れ出づる時に、私達は生長伸展の歡喜をこそ覺ゆれ、破壊の悲哀を感じる筈はない。先づ私達は内なるものゝ伸展力を強うせなければならぬ。私達は新しき芽を養はなければならぬ。舊き葉はひとりでに落ちん。

然しながら實際私達の生活が、眞に何れほどの希望や光明やに光被せられてゐるだらうか。私自身にとりては、過去二十幾年の生活の一刹那と雖ども、眞實の光明や希望さながらの生活を味ひ得たと意識されたことはなかつた。無論嬉しいと思つたこと、楽しいと思つたこともあつた。そしてその法悦ぞの光明が大であれば大であるほど、私の意識的生活から遠ざかつて行つたものであつた。それは決して如實に味識せられ、把握せられた歡喜でも光明でもなかつた。

人生はそれほど光明あるものであらうか、楽しむべき所だらうか。幽暗な懷疑の影に脅かされた私の心は何時も斯く思ふのであつた。しかし不思議なものの力は、何處までも生に面して覺ゆるいらいしい執着を忘れさせなかつた。生を逃避しやうとする心と、生そのものゝなかに抱かれ、浸されやうとする心と、それが

いつも私の心に涯しもない不安の影を顫はしてゐた。

私はまた時として「悲しむこと、焦々すること、が人生の眞實であつて、喜ぶこと、落ち着くといふことは人生の虚偽ではあるまいか」といふ疑念をさへ抱いてゐる。過去を振り返つて見て、私の心が暗く、悲しく、絶望的であつた時ほど私は自分の生活に對して眞面目であり、敬虔であつた。

要するに過去の私の生活は決してヒーローイックなものである、肯定的なものでなかつた。恐らく私の全生涯がぢめぢめと暗い陰に濕つたものであらう。深い海底の動物は光りを恐れるといふが私の生活もそれであるかも知れぬ。しかしかやうな寂しい私の心の半面には深き生と光明の執着がある。私の内心の要求は、尙つと光りある、強者的な生活に憧憬れてゐるやうにも想はれる。確にさうだ。私が深い暗の底に沈むて行けば行くほど、私の心は光明ある人生の存在を確かめるやうに想はれる。絶望的な人生がまた幾度か私の眼の前に、光被せられたる生活を想ひ泛べさして来る。私は何時までこの矛盾、この錯誤に悶へなければならぬのだらう。しかも私が遁れやうとして何うしても遁れることのできぬ生の執着は、それが神秘を直覺する時に最も深い懷しみを感ずるからである。直覺の上に現はれたる生の神秘は、法悦でも悲哀でも、暗黒でも、疑惑でもない、限りなき伸展、生長、光耀である。

私達の絶望、自棄、頹廢的生活が、一とたび



# 來しかた

吉 良 靜 子

底知れぬわが悲しみを語ること日くれの海におこる大浪  
わが戀とわがよろこびのいやはての日かや風ふき砂ほこりたつ  
動きなき地をひた／＼とふむ時もひとりなればか物のかなしき  
眼をとぢよわが行くあとに追いつがる老ひたる父もわかき弟も  
人の行く道をゆかんとまづ先きにすゝむわれこそつまづきにけれ  
ひなの子はおちすらし日の暮れてみちゆく事を人のきらへば  
春のかぜ袂なびかせ行きすぎぬかるきものよとあざけるがごと  
みかへれば皆茫漠の冬のごとつめたかりきなわが來し方は  
此の心物につかれてうと／＼とひるもねむるか物忘れする  
夜な／＼を君がふきしく笛の音に身もくぢかれんばかり悲しく



## 沈黙せる生命の神秘

— 感想 —

吉田 絃 二 郎

生さんが爲めに、凡べて眞實に生さんが爲めに！何といふ大きな神秘だらう。刻々念々小止みなく生長し行く生命のどよめきに裹まれて、伸展され、擴大されつゝある自己の生活を想ふ時、人はたゞ渾然如一の神秘の前に蹲かなければならぬ。

神秘は常に沈黙である。沈黙は無限なる生命の神秘を湛へてゐる。理智の饒舌と！野の百合花の一片の沈黙と！

分拆し分解し行く智識が終にたゞ一片の概念的形骸に執し了る時、而も生命の神秘は、私達の直覺の一境にさながらの實相を顯現するではないか。

直覺とは何であるか。渾然たる生命と生命との燃焼ではないか。生命は沈黙の裡に伸展し、燃焼

の間にその實相を顯現する。生命は一にして多、多にして一なる顯現にありて、自我を創造し、自然を創造する。自我と自然とあらゆる顯現が如一の生動を感ずる時、自我とあらゆる事相が融然として一脈一體の呼吸を感ずる時、そこに生命の神秘を感ずることができる。

直覺の妙境は悉く生命の神秘そのもの、燃焼に自己の生命の燃焼を感ずる所である。あらゆる藝術、あらゆる宗教、悉く生の神秘に對する驚嘆、嘆美の念から生れて來ないものはない。

私達は自己の生活に對して忠實ならんことを欲する。私達は自己の生活を喜ばんことを欲する。しかしながら私達は、眞實私達の生活に對して何

キイよ。

あゝその日！

かつて罪の間はれざりし時代ありき、  
道念の日の未だあけやらぬ世に。

いつかまた罪を責めざる時は來らん、  
道念の日の眞晝の光かじやかんとさ。

人々よ、罪に酷なる今の社會を、  
まことの道に歩めりと思ふや。

飢えたる故にパンの一片を盗みき——而して彼は  
罪人なり  
借金を返さんが爲めに金を盗みき——而して彼は  
罪人なり  
美はしきが故に女を愛したり——而して彼は罪人  
なり

さなり、そはまことに罪人にてあらん——さ  
れど

いとほしく、また、あはれなる罪人よ！  
爾は、殘忍なる生そのものゝあはれむべき犠牲者  
なり。

而して冷酷なるされど大なる生そのものゝ眼に  
は——  
爾の罪は消え、たゞ彼の眼に憐憫の涙のみやどら  
ん。

あゝその日！その時こそ  
道念の光は全宇宙を照すべし。

## 反抗

莊嚴なる悲哀よ！

空洞の冷さにおのゝくが如き恐ろしき寂莫よ！

何故にさはわれを不意打するや。

見よ、われは今暗き路次を獨りさまよへり。

さなり、ひとり、たゞひとり。

限りなく大なる宇宙にたゞ一人。

わが眼の前には一切を押し流さずんば止まざる驚  
くべき怒濤は渦捲き流れつゝあり。

——歴史と人生とを浮べて。

而して視よ！

われは今それ等の一切の力に反抗して立てり。

われは今、その潮流を溯らんとしつゝあり。

あゝ見よ！

われをわが骨の髄までも知り盡せりと思へる君よ！

われはたゞ個々の現象に對つて小さき反抗の聲を掲げつゝありと思へるや。

君よ、然らず。

われの反抗しつゝあるものは人生の流れそのものに向つてなり。——されど

この大なる敵に對してわれ自らの如何に小さきや。

この戰に勝たんにはわれは餘りに自らの力の足らざるを覺ゆ。

而してわれは孤獨ひよりなり。君すらもわれにあらず。

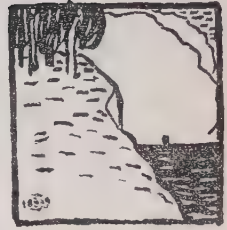
おほ、莊嚴なる悲哀よ！

おほ、嚴肅なる寂莫よ！

されどわれは尙信ず——われは人生よりも偉いなりと。

而して寂しき平靜よ！





## 勞働の歌

加藤 一夫

勞働につかれ果てゝ歸り來るも、  
わが四疊半には、われを慰むべき何人も待ちて居  
らず。

六ヶ敷書物を讀まんには、餘りにわが神經は疲れ  
たり、  
面白き書物を讀まんとするも、そを買ふに足る金  
の餘裕をもたず。

眼を閉ぢてものを思はんとすれど、あゝ琢木よ、  
わが胸にも亦、  
考ふべき何物の湧き出てぬまでに、わが生命の泉  
は枯れ果てにけり。

寂しさを訴へんにも、それを聴くべき何人もなく、  
われはたゞ無限に廣き、暗き虚空の一角に立つ。

まことや、わが生は悲しく、わが心はさびし——  
されど、  
われは今、われ自らの脚にて立ち、われ自らの手  
にて働らきつゝあり。

キリストの權威を笠に被て、われ以上の尊敬と信  
任とを受くるにあらず、  
われはたゞ弱く汚なきわれ自らを提げて人の世に  
たてり。

今にしてわれは知る、そは餘りにわれにとりて贅

澤にてありしを、

——食はわが職業に得て、さて心ゆくまでわが藝術を樂まんとせしは。

われに在りては——生くることそれ自身にて、已に大なる事業なりき、

藝術を特に大なることと思ひしことの、あゝ何ぞ愚なりしよ。

われはたゞわがまことに生さんことを欲す。

わが生をして、より美はしきものとせんことを欲す。

——而して、われはわが生を信愛せざるべからず。

### わが胸の血は君に躍る

行きつくるところまでは、行かざるを得ざる君の運命のために、

——それ故に君はかなしかりき。わがドストイエフスキイよ。

『何者か、いゝものをわれに與へ見よ、われはわがこの忌はしき性質をもて、それを汚し去るを誤らず』

それ故に君は金を愛したれど、金は君を嫌らひて逃げて去りにき——わがドストイエフスキイよ。

愛の殘忍をもて、殘忍なる生と戦ひ、殘忍なる愛をもて、愛の神に反抗し、靈魂のくらやみを掘り、罪惡の深みを探り、一つのわれをもて一つの他のわれを征服せずんばやまざる、弱くして強き戦ひの子——わがドストイエフスキイよ。

わが胸の血は君に躍る。

わが意識せざるまことのわれは君を知りてわなゝくを覺ふ。

——偉なる、されど哀れるわがドストイエフスキイ

アトライデース・アガ멤ノン獨り心に憤ほり  
不法に彼を退けて更に罵る言荒く

『老者の爾とく退され、水師のほとり徘徊の  
影はた再び推參の姿我にな見せしめそ。』

金笏及びアポロンの祭司の冠何かある、

故山を遠く隔て來てわがアルゴースの宮の中

花なす姿衰へて閨を掃ひ機に寄る

其時未だ到らずば少女の絆放たれし、

され、行け、われを怒らしそ、身の平安を求めなば』

斯く彼宣す。——老祭司恐れて命に従ひて

只默然と言葉なく波濤の岸をたどり行き

孤影淋しき老の身の聲ふりあげて訴へぬ

髪美はしきレイトウの産めるアポロンの靈神  
に、

『クリーセーはた神聖のキーラを鎮め、テチドスを

守り玉へる銀弓のスマイントイス聞し召せ、  
神慮の嘉みし給ふまゝ宮を飾りしことあらば、  
はた牛羊の肥えし肉祭り捧げしことあらば  
我がこの祈願納れ玉へ、我に涙を流さし、  
ダナイー人を銀弓の神矢放ちて射玉へ』と。

斯く彼祈る。アポロンその哀願を納受しつ  
被包の簞、白銀の弓を肩にし憤然と

オリインポスの雲白き峻嶺驀地に馳け下る。

見よ今威神の双の肩勁箭から高鳴りて

怒に乘じ物凄く暗夜の如くかけ來り

向ひて立てるアカイヤの水陣目がけ一の矢を

切つて放てば銀弓の弦音鳴りて凄じく

驟馬の數々足はやき狗の數々先づ斃し

更に鏃の鋭さを射て軍兵を打斃す、

山なす屍焚燒の火焰鎮まる暇無く。

# いのちのながれ

野口 精子

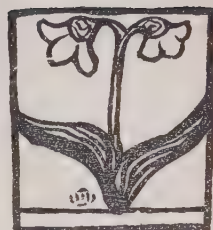
我母の知らざるなやみ自覺などいふ子となりしさばかりのため  
よろこびかうれひかいまだ名を知らず溢るる生命ただそれをのむ  
糸柳小雨にぬれてしつぽりと舊き女のためいきをつく  
無邊にも此悲しみはちらさまし春の夕べの白き星影  
帝王の驕りならねど我歌に不老の奇藥ほしき春かな  
よきほどに濕り合ひたる心こそ戀といはましはなつすべなし  
若き血の熱き涙のそのままに花はちれかし思出のため  
藪椿毒あるあかき汚れたる血など思へり心重き日  
櫻散るかろき心のひらめきの悲しとも見えうれしとも見え  
此こゝろ空虚なれども何物の入るをゆるさず氣疎き日かな



るにある。予は則ち此精神を基礎として、制度設備に於て、紊るべからざるものが、定められざる以上は、宛ら火山の屢々燃ゆるが如く、鳴動、爆發の頻發するが如く、紛擾、爭議の起ることも亦免るべからざる所と信ずる。予の主張は或は餘りに理想に偏して居るかも知れぬ。又其歸結は永遠

の未來に於て到着すべきものかも知れぬ。更に又獨り日本のみの問題でないかも知れぬ。けれどもこれは予が確信である。予は此確信に向つて奮闘を試みつゝあるのである。工業裁判所の制度も、紛議調停局の設備も、皆此大精神より生れ來るべきである。

本誌三月號に譯載したる、ハーバード大學名譽總長エリオット博士の「廿世紀の基督教」は米國に於いて、大問題となつた。論難攻撃容易に盡きる氣色はない。然るに日本に於いては、雜誌「新日本」の思想紹介欄に於いて言及せられただけで殆んど何等の反響を見出さぬ。多くの基督教週刊雜誌はこれを看過したのである。或は默殺せんとする狡猾手段を取つたのかも知れぬ。されども輿論の盛なる今日に於いて公然の反對なきは承認を意味するものである。日本の多くの基督教思想家は、エリオット博士の進歩的見解に賛成したと見做しても差し支へはあるまい。反對せざるものは一種の味方である。基督教的思想の進歩も寛容的精神の發展も共に祝すべきことである。吾等は本誌記念號に於いて、エリオット博士の論文は、何等の抵抗を受けずして日本の宗教界を征服したと公表し得ることを以て満足する。



イーリアス 發端 土井 晚翠 譯

詠せよ詩神ペーライデース・アヒロイスの無慙の怒り

アカイヤの民に無量の難來たし

冥府に幾萬英雄の魂遠く降らしめ

其屍をもろ／＼の野犬と鳥に投げ與へ

餌食と爲せし本末をもとすゑ（ツオイイスの神意かく成りぬ）

初めは大王アトライデース及び神武のアヒロイス

誹謗の言葉口にして瞋恚の争起せし日。

孰れの神靈誘ひて二人の不和を醸したる、

彼れレイトウとツオイイスの子。——アトライデー

ス其祭司

クリーセイスを耻しめて神大王に憤りいぢどほ

軍旅の中に惡疫を下して多く民逝さぬ。

是より先にクリーセイス愛女を救ふ贖の

數々具して快舟のアカイヤ水師訪ひ來り

飛箭銳ひせんきアポロンの祭司頭に捲き馴るゝ

「ステンマ」纏ふ黄金の笏携へて全軍に

特に兄弟元戎のアトライデースに請ひ求む。

『嗚呼大王アトライデース又よろひ鎧善きアカイヤ人、

オリインボスの高さより神靈君にプリアモスの

都城の破滅凱旋の幸さちをあはせて恵めかし、

君は愛女を身に返し、其贖を受け納れよ。

飛箭銳きアポロン、ツオイイスの神子かしこし』と

アカイヤ全軍之を聞き皆一齊に聲揃へ

祭司を崇め珍寶の贖得んと諾へぬ。

る。消極的には『長いものには巻かれろ』といふのであつて一種の諦め主義である。これは我が國民は古來率ゐられ、導かれ、治められたる國民である習慣性に依るのであらう。職工自身の問題であつても、職工其人が自身の手に依つて解決しやうとはせず、他の人の解決して呉れるのを待つといふ有様である。何か不平があつても、お上で何とかして呉れるだらうと言つて居る有様である。これは勿論職工其人のみを責むることは出来ぬ。我が國の自治体の發達せざる、憲政の振はざる、職として其原因を茲に有するのであつて、眞に國家的の深憂大患と言はねばならぬ。

斯くて觀じ去り觀じ來れば、我が國の勞働者には全く一の長所も美點もないやうである。其弊害は深く國民性に根柢を有して、到底根治の道がないやうである。果して然るべきか。然らば則ち我が工業界の前途は絶望である。工業界の前途にして絶望ならば殖産致富は到底望むことは出来ぬ道理である。殖産致富にして望むべからずとせば、興國進取は遂に空中架樓に終らねばならぬ。果して然るべき乎、

否、否、予は決して絶望にあらざることを思ふものである。勿論非常なる努力が必要である。日本國民上下を擧げて、一大奮闘を試みねばならぬけれども努力さへするならば、起死回生の道は決して絶無にあらざることを信するのである。第一に予は日本國の上に天祐の豊かなることを信ず

る。第二に國民性の進化を信ずる。第三に勞働者其人の進歩發達を信ずる。否、勞働者其人は漸く自覺の度を高め來つて、向上の意氣の燃ゆるを見る。たゞ一時の過渡期としては、其自覺が眞の自覺にあらざりて、或は生意氣といふやうな噓哨を受けるかも知らぬが、それは決して永久に亘つて然るべきではないと信ずる。健全なる勞働團體も追々と確立するであらうし、勞働者の自治的訓練も、次第になし遂げ得らるゝことと思ふ。況んや時運正に一轉、一般社會に於ける民衆的傾向の著しきものあるをや。選舉權の擴張も必ず實行せらるゝであらう。工場法の施行も必ず實現せらるゝであらう。其他勞働保險共濟制度も必ず整備せらるゝに至るであらう。内外自他相俟つて、必ず勞働者の境遇上進するの時が來るに相違ないと信ずるのである。熟せる果實は落つる時がある。冬の後には春來る。雪や氷が解け初めれば、誰れかは春風春水の一時に來るを疑ふものぞ。

最後に唯一の問題が残る。然らば我が國の勞働問題は、如何なる方法に於て解決せらるべきやといふことである。これは最も興味ある問題たると共に、頗る至難なる問題である。世に主從情誼論又利權平等論なるものが行はれて居る。主從論者の唱ふる所に依れば、我國は古來上下の關係は一種の情誼に依りて結ばれて居る。これ我國特有の美風であつて、將來の勞働問題も、此美風に依つて必ず圓滿に解決せらるべきであると。一理ある説ではある、けれども時勢に暗き説である。此説の有力なるべきは、單に小仕掛生産の場合に限り主人と雇人とが互に相理解し合うて居る時に限ると言つてよいと思ふ。大量生産の形式の下に、大多數の人々が群集して居る所に於て、これが適用を求むるも、所詮出來ない相談と言はざるを得ないのである。

然らば次に利權平等論者の説くが如く、一切の問題はたゞ權利義務の關係に依つて解決すべきかといふに、必ずしも然らずと信ずるものである。勿論大會社大工場といふ風に、多人數を相手とする場合に於ては、規則なり、制度なりを設けて、秩序的に凡ての問題の解決せらるべきは、理の當然であるけれども、日本人は

由來涙脆い國民である、感情に動く國民である、人生意氣に感ずる國民である。義理と人情に依つて鍛へられた國民である。此涙や、意氣や、感情や、義理や、人情やは、確かに超理論的のものであつて、我國の勞働問題の解決に關しては、此一點を看過する事が出來ぬと思ふ。

然らば則ち結局解決の途は如何といふに、人格的平等主義の立場に於て相愛扶助の精神を以て解決せらるべきものと信ずる。勿論其之れに達するの道程に於ては、或は慘澹たる悲劇も演ぜられるであらう。それは固より保證の限りでないけれども、どい、の、つ、ま、りは此點に落着かざれば、完全に解決せらるべきでないと確信するものである。人格的平等主義とは、主人も從者も、貴族も平民も、乃至資本家も勞働者も、人其自身に於て本來の懸隔あるにあらず、皆これ神の子たるの點に於て、宇宙の根本生命を父とする點に於て、平等なるものなりとの思想である。換言すれば則ち四海同胞の思想である。此根底の上に立つて、互に思ひつ思はれつ、支へつ支へられつ、利益あらば利益を公平に分配すべく、損失あらば損失を共同に分擔するのである。所謂利害を一にし、禍福を等しうす



いといふのも、皆近眼的特質の然らしむるところである。労働者の會合を催しても、酒食の饗應でもあるか、又は餘興澤山とかいふ場合には、溢れる程に人も集まるが、普通の講演會などの場合には甚だ少い。一つは智識慾の缺乏からでもあらうが、一つは確かに耳からよりも口からといふ現金主義の發露である。

或種の労働團結に加入するにしても、他人の勧誘の結果、勧誘者の顔に對して入會するといふ如きものが多い。従つて其勧誘者なり、紹介者なりが轉職轉住するか、若くは退會するやうなことがあれば、何といふ考なく、俺も我れもと退會する。其代り勢力ある者よりして勧誘される時は、否應なしに悉く加入するといふ有様である。限られたる工場内に、單調な労働に日々夜々従事して居る故でもあらうが、其見聞は甚だ狭く、其感情は極めて切那的である。従つて輒もすれば偏見固陋に陥り、本能的衝動を暴露するのである。

第四に我國の労働者は、兎角事物に倦み易く、忍耐性、執着力に乏しいのである。油紙のやうで容易に火は付くが、ペラ／＼と直さに燃え切つて仕舞ふ。一面から言へば、誠に淡泊で、コダハリがなく、執拗でないことは、たしかに美質である

が、併し何しろ直さに倦きて仕舞ふには困る。従つて人をして容易に大事を共にすべからずとの感を抱かせる。喋々しいは冷め易いと言はれてるが其の通りである。或一事に向つて熱心に運動して居るかと思ふと、何かしら障礙に出遇へば、忽ちにゲンナリして、直さに抛棄するのである。何處までもバリ強く、シンネリムツツリとして、五年でも十年でも、辛抱して成功し抜くといふやうな者は、恐らくは千百人中唯一人であらう。

#### 四

第五に、日本の労働者は品性が尙甚だ劣等なるを免れぬ。勿論これは労働者丈けてない、各社會を通じて此嘆なきを得ないが、理想的見地よりして之れを見れば、特に労働者に於て甚しいといふことが出來ると思ふ。此頃はたしかに善くなつて居る、善くなつては居るが、まだ／＼悪い分子が多い。

飲酒者の多きは勿論、賭博を弄び、醜業婦に近づき、不義理の借金をする、工場を欠勤する、友人と喧嘩をする、買喰をする、

節制が足らぬ。消極的方面に於ても此通りであるが、更に積極的方面に於ても、責任を重んぜず、約束を守らず、善事を愛し、眞理に服従するの熱が足りない。廣く社會公共の事に心を向けるでもなく、深く思を國家の將來に潜むるでもなく、ただ空々寂々として、日を消し月を送るのである。予は最近に某理髮店に於て理髮をしたが、其際廿歳前後の青年理髮師が、頗りに『床屋は下品でいけません』とこぼすのである。予は床屋は人の頭を扱ふ仕事だから高尚でないかと言ふと、『兎に角昔から下品な仕事と通つて居るから、女が惚れないで困ります』と答へた。以て彼等社會通有の心理の一斑を覗ひ知るべきである。

従つて彼等がタマの休日を通すの場所は、先づ以て活動か矢場か乃至酌酒屋である。現に右理髮師の如きも、得々として前夜酌酒屋で四圓五拾錢の遊興をなし、それを信用借に借りて來たと話し、予の目前に於て衣類數點を風呂敷包とし、之を弟分の徒弟に托して質屋へ曲げた。予は此光景を目撃して、彼等の前途を思ひ心を寒うするを禁じ得なかつたのである。

第六には一體に我國の勞働者が技術の點に於て劣等なることである。これは一面無理のないことである。工業の勃興以來日も尙淺く、技術教育も充分に普及せず、容易に熟練を積む餘裕はない。けれども事實上、不熟練であるといふことは拒む事が出來ぬ。従つて少し面倒な機械の据付とか、

製作とかいふことになる、勢ひ高給を拂うて外國技師又は外國職工を招聘せねばならぬ。勿論我國の職工中にも優秀な人々は、隨分立派な發明などもし、又は有益な改良法などを發見もして居る。けれども多數は尙職業に對する趣味を解せず生活の必要上止むなく働いて居るに過ぎないので従つて技術の進歩改良に腐心しやうといふ考も起らず、ただ營々として機械を使ひ、又は使はれつゝ一日又一日と過して行くのである。吾人は其境遇に對しては、滿腔の同情を禁じ得ないのであるが、更に進一步の工夫あらんことをも、併せ望まざるを得ない。

## 五

最後に我が勞働界の通弊ともいふべきものを擧ぐれば、我が國勞働者の多數に依頼心甚だ強くして、自治能力を缺いて居るといふ點である。

依頼心の強いといふことは、換言すれば則ち事大主義だといふことになる。積極的方面では人任せ主義で、自分自身の力を以て問題を解決せんとせずして、他人の力に頼らうといふのであ

而して又労働問題の惹起するのは、工場労働者に多くして、手工的労働者に見ること少いのである。何となれば後者は團体的に労働するよりは、個人的に労働すること多く、職工間の関係も親方と徒弟、兄分と弟分といふ風に情誼が結ばれ、雇主と労働者との間も亦、主従情誼の關係に支配さるゝこと多きが故である。

然れども勿論多數共同的に勞働する場合、即ち以上の關係に變化を生ずる場合には、屢々工場労働者に見るが如き、同盟罷工類の現象が起り得るのである。

——然るに工場労働者は手工労働者の如く、技術の習得に多年月を要せず、従つて親疎の關係に大差あり、労働其物も亦個人的よりは團體的に之を營むことが多く資本家に對する關係も純然たる經濟關係に基くから、往々にして衝突沙汰が起るのである。起ることは起るのではあるが、併し肝心の職工其人は、近代の工業の勃興につれて、漸次に他の階級——農民、商人其他——より移つて來た人々であつて、生え拔きの労働者ではない、労働階級に永く安住の意思なく、腰が甚だ据らないのである。則ち生活の必要に迫られて職工になるのであるから、彼等は労働者として、労働者の階級を向上せしめやうといふ考が乏しい。寧ろ望むところ

ろは自分個人の安住であり、發達である、競うて足を洗はう／＼として居る。或る職工問題の研究者は『日本には未だ眞の職工なし、今あるものは皆假の職工のみ』と言つたのは、蓋し至言と言はねばならぬ。農商務省の統計に依れば、我國の工場労働者の一業への平均就職年限は、二十二ヶ月に過ぎぬ。以て一般を推するに足る。何事も過渡の時代、産業革新の過程にある若き日本としては或は止むを得ぬかも知らぬが、兎に角に此一點は確かに我が労働界の一特質、否一大缺點と稱することが出来やうと思ふ。

—

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●  
第二に日本の労働者は著しく感情的である。感情のなるが故に、巧みに之を利用すれば、以て労働争議を緩和することが出来るが、之れが逆に出来れば甚だ險惡となるのである。尤も感情的であるといふ一事は、穴勝労働者にのみ見るべき特質ではなく、これは思ふに我が國民性の一大特質であらう。火山の國民とか、ラテン民族的とか言はれ



るのは、要するに此特質のことを指したものであらう。是れ則ち我が國民に詩歌あれども科學なき所以であらう。

此一二年來の政治運動を見ても、吾人は此感を深うする、感情の赴くがまゝに、群衆心理の導くがまゝに、家を焼き人を殺す、けれども多く永續することはない。寄せては返す白浪の、パツと來てはサツと退く、誠に淡泊なものである。お祭騒的に、一時は狂熱の高潮に達しもするが、其熱を持続することが出来ない。かゝる特質は殊に勞働者に著しく發揮されて居るを見る。皆が皆といふではないが、勞働階級にある多數の人々は、凡ての點に於て不幸の境遇にある人々であつて、特に教育の點に於て然るを見るのである。我が八十萬の工場勞働者中には、無學な人々も少くない。手工的勞働者の中には、更に夫れよりも割合が多いのであらう。

従つて低級の教育を受けたる人々に通常見るが如く、其行動は甚だ理性的でないのである。激し易く、怒り易く、誤解し易く、又猜疑し易い。常識を以つて律し難きもの、比々皆然りといふ有様である。之れが指導統率の任に當る人は、よく其コツを呑み込まねばならぬ。其心理に通ぜねばならぬ。巧みに其機微を掴むものは成功し、然らざるは失敗す。これ我國多數の勞働者は、冷靜に理

性に從つて行動するにあらずして、尙且つ「ペラシメー」馬鹿にしてやがらあ」に依つて行動するが故である。此の一點又我國の勞働問題を研究する人の深く留意せねばならぬところである。

### 三

第三に我國の勞働者は、多く甚だ近眼的である。勿論此特質は教育程度の低いといふことゝ相關連するのであつて、或は其の一面であるといふも不可がないか知れぬが、前掲の特質は主として感情の一面、此第三の特質は主として、知識方面のことであるから、區別して觀察することが出来ると思ふ。近眼的とは、思慮が周密ならず、遠い將來の考なく、眼前の欲望の爲めに、たゞ本能的に行動するに過ぎざることをいふのである。現在の苦痛を犠牲としても、未來の幸福を希ふといふのではない。未來のことなどは餘り眼中に置かずに、偏へに眼前の利益、快樂、幸福にのみ囚へられるのである。我が國の勞働者が一ヶ所に足を止めないで、轉々とするといふのも、貯金する者が少ない

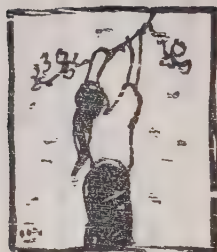


ricee, 1895)等の如きである。

然るに此の派の研究は益々進んで行つた。例へばハイトミユルレルの「保羅の洗禮及び晚餐禮」(Heitmüller, Taufe und Abendmahl, bei Paulus 1903)或は同人の「耶蘇の名に於て」(Im Namen Jesu, 1903)の如き、又はブリュクナルの「保羅神學の紀元」(Brückner, Die Entstehung der paulinischen Theologie 1903)或は同人の「死して且つ甦る神なる救世主」(Der sterbende und auferstehende Gott theilhaft in den orientalischen Religionen und ihr Verhältnis zum Christentum, 1908)ヤン・テの「保羅」或は同人の「福音書に於ける救世主秘事」(Wrede, Paulus, 1904; Das Messiasgeheimnis in den Evangelien, 1901)ブライデレルの「元始基督教的信仰の耶蘇觀」(Pfeiderer, Das Christusbild des urchristlichen Glaubens in religionsgeschichtlichen Beleuchtung, 1903)ヤン・デン・ベルクの「福音書の物語に及ぼせる印度の影響」(Van den Bergh van Eysinga, Indische Einflüsse auf evangelische Erzählungen, 1904)但し此の問題に就ては既に哲學者の

ザイデルやドイセンの研究があつたのである。

聖書の注釋としてはグレッツスマンやグンケル其他の學者が協力し出した舊約書及びブツセット、グンケル等の學者が協力してヨハンテス・ヴァイスの編纂した新約書が此の派に屬し、ヴァイテルの「新約聖書神學」(Weinel Biblische Theologie des Neuen Testaments, 1911)もそうである。又叢書としてはブツセット及びグンケルの編纂する新舊約の宗教と文學の研究(Forschungen zur Religion und Literatur des AT's und NT's)で千九百三年以來既に十九卷出て居る。そして「神學の研究」の第五卷二及三號に譯出されたるグンケルの「宗教の比較研究に照されたる新約聖書の内容」はその中の一卷である。又「宗教歴史的國民叢書」(Religionsgeschichtliche Volksbücher)の如きもいろいろあつて、千八百四年以來既に八十卷程出版されて居る。又雜誌としては、千八百九十七年以來フツセット及びハイトミユルレルの編輯するTheologische Rundschau が此の派に屬するものと做すべきである。



## 我國民性より見たる勞働問題

鈴木 文治

一

我國に勞働問題ありやと問はゞ、或は然りと答ふべく、或は否と答へ得るであらう。然りと答ふる點より言へば、我が勞働社會に於ても、亦上下の確執、雇主と使用人との衝突、工場主と職工との紛争が屢々起るからである。否と答ふる點より言へば、我が國には未だ勞働階級の確立なく、勞働團體の形成なく、勞働者其人にも勞働者たるの自覺が甚だ淺薄であるからである。此意味に於て眞の勞働問題なるものは、未だ起つて居らぬとも言ひ得ると信ずる。然らば將來ともに、我國には勞働問題は起らずに濟むかと言ふに、これは否と

答へざるを得ない。予は此數年來、我國數千の勞働者有志と共に、勞働團體を組織して居るものがあるが、其實驗の立場よりして、少しく我國の勞働問題に關して卑見を陳じやうと思ふ。

第一に先づ我國には勞働を卑む遺風存在するに依り、未だ眞の勞働階級なるものなしといふことである。これも勿論一口には言へないので、所謂『職人』と『職工』とを區別して見る必要がある『職人』といふのは、我國に於て古くより存在する手工的勞働者の謂であつて、例へば大工、石工、土工、土工、左官、疊職、瓦屋といふやうな人々「職工」といふのは、近代に於て新たに勃興したる機械勞働者、工場勞働者をいふのである。職人なる階級が階級的に存在したることは拒むことが出来ぬ。従つて予が茲に眞の勞働階級が存在しないといふは、主として工場勞働者に限るのである

ば當時耶蘇のみの抱いた思想ではなし、之を遠くバビロンの宗教に求めるとも出来る。或は其他の宗教とも關係を有するかも知れなう。

基督教會で晚餐禮や洗禮が、基督教の特産のやうに考へて居たのは、イスラエルの宗教が割禮をイスラエル國民と神との特別契約のやうに思つて居たのと同様である。然るに割禮はセミチク人種一般に於て敢て珍らしい習慣でないことが分つたと同じやうに、晚餐禮も洗禮も古代に於て類似の儀式が他にもある。特に「基督の名」を呼ぶ時には奇蹟的威力があると信じたなどとは、所謂「名の信仰」で、基督教の古代には他にも行はれ居たとてある。これ等のとほは僕之を本誌三百四十二、三號に於て「晚餐」及び「基督の名に於て」と題して論じて居るから、別に茲に之を詳論しない。吾人が此の結論に達したのは、是れ皆な宗教歴史的觀察の賜物であるとは云ふ迄もない。

此の觀察を更にボーロの研究に及ぼした名著は彼のダイスマン教授の「保羅」である。彼が標題に尙ほ「文明的、宗教史的概論」と加へて居るの

でも、その意見の存する所が窺れやう (A. Deismann, Paulus. Eine Kultur- und religionsgeschichtliche Skizze) ダイスマンの保羅觀は必ずしも非難のない譯ではないが、確かに特色はある。彼れがボーロの特質を、難解な論客たる神學者とせず、信仰の勇者とし教義家たるよりも神秘者としたのは、珍らしい見方と云ふ程でもあるまい。否なダイスマンの特色は他にある。彼れはバレスチナ、希臘等の地を自ら踏査し、自然の風景、基督教徒の信仰生活、舊き碑文などによつて保羅を解釋せんとするものであつて、實際の生活を見ず、唯だ註釋書を山積せる書齋裡の研究にては物足らずとするのである。

此の如き宗教歴史的觀察は、基督教を双對的に考へしむるものであつて、その絶對性を奪ふものである、と云ふ非難がないでもない。けれども今日、以前の教義學が云つたやうに基督教を天啓の宗教となし、他の宗教を非天啓或は惡魔の造つた宗教なりとするとは、最早時代遅れの説であつて、

そんなとて宗教の絶對性が定まるものではない。吾人は宗教と云ふものは人の心に生きて、恰も清水が泉源から湧き出して居るやうなものだと思ふ否な此のとは近代の獨乙に於てはシュライエルマッヘルが之を喝破して以來、宗教思想に一大變動を起した程のものである。今日オイケンが思想界に崇教せられるのも極力此の點を高調して居るからである。されば吾人にして宗教生活を知らんと欲せば、敬虔なる信仰家の内部生活を知らなければならぬ。それは教義や批評や、碑文や聖書ではない。之等によつては内部生活から出たもの、その結晶が見えるだけである。森羅萬象は千種萬態それ／＼の趣を見せて居るやうに、天下の宗教を併べて見ると、復たそれ／＼の趣がある。此の現象に對する吾人の態度は、彼の現代藝術界の印象派の態度でなければならぬ。吾人が過去の遺物に對する時に、そのものゝ内から新しい色彩を見、新しい音調を聴き出し、彼れをも我れをも生かして、力と美とを生ぜしめなければならぬ。是れ實に今日の神學に於て宗教歴史派の力

むる所であつて、確かに有益なる一大進歩と云はなければならぬ。

(二) 最後に此の派の代表的著述の如何なるものであるかを述べて置かう。けれどもその内容を詳しく紹介するとは、こゝには不可能である。

若しその發端から云つたならば、必ずしも新らしくはない。けれども神學の一派として宗教歴史派なるものが出來たのは、千八百八十年代のことである。その紀元を開いたとも云ふべきは、グンケル教授の「聖靈の働」(詳しくは Wirkungen des heiligen Geistes nach der populären Anschauung 1888) ブッセット教授の「耶蘇の説教」(詳しくは Jesu Predigt in ihrem Gegensatz zum Judentum, 1892) ヨハンネス・ヴァイス教授の「神國に關する耶蘇の説教」(Die Predigt Jesu von Reiche Gottes, 1892) グンケル教授の「創造と混沌」(Schöpfung und Chaos, 1895) ブッセット教授の「アンチクリスト」(詳しくは Der Antichrist in der Überlieferung des Judentums, des neuen Testaments und der alten K



ぼした感動を象徴的に現はしたものであると云ふやうに論ずるのである。

(ロ) 此の如き聖書批評は勿論必要である。けれども今日は更らに一步を前に進めて居る。聖書批評はその研究が聖書本文の以外に出て居ない。云はゞ鎖國的の研究方法である。總てが世界的になつた今日では之れは餘り狹隘である。聖書それ自身より更に足を外方へ踏み出さなければならぬ。此の自然の要求から宗教歴史的研究が起つたのである。

宗教歴史的研究の方法を基督教に用ゆる時は、其の全般に及ぼすことが出来る。新舊約書は勿論のこと、教會歴史——教義史や禮拜の歴史なども加へて——も、教義も此の着眼點の下に置き得るのである。然らば斯う云ふ研究が何故起つたかと云ふに、それは泰西の學者の眼界が廣くなつた當然の結果である。所謂東洋の古代の文明國民、殊に埃及人やバビロン人、希臘人の歴史が大に明瞭になつて、意外にも古代既に業に、偉大なる文明

を有して居た國民があつたと云ふことが知れたからである。是に於いて例へばイスラエル民族の宗教に關する學說も亦た大に變化した。即ち以前にはアラビヤの古代や或は回々教以前の民俗宗教を知つて居た丈けであるから、イスラエルの宗教の發端をも亦た此の標準によつて計つた。従つて甚だ低級な原始的宗教と思つて居た。然るに彼の古代の文明國は既にイスラエル民族が國家を形成するより以前に存在し、且つイスラエル民族とは常に交渉があつたことが分明になつた。之れが爲めイスラエルの宗教に關する考へも變つて、その初めの水準も餘り低くはなかつたらう、と思はれることになつた。例へばウエルハウゼン一派の考へでは、舊約の詩篇はイスラエルの宗教史で云ふとさう初期の作でなく、ずつと遅い。即ちバビロン俘囚以後の作者のやうに云つて居つたのであるが、今や吾人はバビロンにも埃及にも既に業に舊くから、同種類の詩歌があつたのを知るやうになつた。従つてイスラエルの詩篇もさう後世のものと考へてもよからうと云はれるやうになつた。

或は更に他の例を取つて云ふならば、神は天に住  
い、天地を造り、之を支配す、とはイスラエル宗  
教に初めからあるのであるが、此の思想は古代の  
産物でない。古代はもつと元始的であるとされ、  
彼の觀念を古代イスラエルの宗教から、除くを以  
て正當となす學者もあつた。然るに今や吾人はイ  
スラエル國に隣れる諸文明國民も亦た最高の神を  
以て天上の神となし、且つ創世紀を有するを知  
るやうになつた。然らばイスラエル國民も亦た同  
じやうな宗教思想を既に舊くより有つて居たとす  
るに不都合はあるまい。彼の數年前に大問題とな  
つたバーベル對聖書（聖書）の爭論も、同じ方向を示して  
居る。例へばノアの洪水の話は既にバビロンの古  
代にあつたのではないか。若しさうすればイスラ  
エルの傳説のみが、獨り存在する權利はなくなる  
他國の歴史に交互の關係があるに相違ない。固よ  
り之が爲めに、イスラエルの宗教の特色を無視す  
る譯けてはない。それは反て重大視せられるのは  
當然である。斯う云ふやうに四方の同じ現象との  
關係を考へ、互に類推するのが現代の特色と云つ

てもよからう。換言すれば以前の聖書批評的方法  
が更に進歩して宗教歴史的方法となつたのであ  
る。

（ハ）更に吾人は新約聖書に移つて之を考へて見  
い。こゝでも今日は批評的研究を止めたのではな  
い。それは無論必要であるが、更に一步を進めて  
宗教歴史の觀察をするやうになつた。例へば耶蘇  
の降誕物語は純粹に猶太教の地面に生長したもの  
であるや否や。之を研究するのは單に福音書の本  
文を批評するだけでは分らない。或は釋迦の傳記  
も調べなければなるまい。猶太の隣國の宗教も研  
究しなければならぬ。さうすると大に光明が投  
ぜられる。或は耶蘇の説教の中心問題は何であつ  
たらうか、之を研究するにした所で、唯だ單に「天  
國は近づけり」と云ふとが、耶蘇の説教の冒頭に  
あるからと云つて、それを中心思想と信ずる必要  
はない。冒頭は序論であつて、本論たる必要はな  
い。然らば天國とは何じや、之を倫理的にも或は  
末世的にも考へるとが出来る。末世的な考へなら

獨創的な、外國語に翻譯しても我が學界の誇りとするに足るやうなものは残念ながら一つもない。若し我國で神學が進歩したとても云ふ事實があれば、それは外國の神學が澤山取り入れられたとか、前よりは分るやうになつたとか云ふ意味になるであらう。けれども若し外國の神學に就て之を考へて見るならば浦山敷いことには、實に多大の進境を此の三十餘年間に見ることが出来る。勿論餘り多くつて茲に全體を云ふことは出来ないが、その中で僕が平常興味を有つて居る二つの事項に就て少しく書いて見やう。

### 一、宗教歴史的論法

イ、三十年程前には漸く「聖書批評」と云ふことが盛んになつて來て居る。けれどもその時代には未だ澤山に此の種の著書が出來て居た譯ではない固より彼のストラウスの有名な耶蘇傳は千八百卅五年に出たのであるから、それは大分に舊い。

當時ストラウスの耶蘇傳問題に就ては甲論乙駁、大議論が沸騰したものであるが、その時、未だ自分には喩を容るゝの素養なしとして、傍觀して居た

彼のフエルデイナント・クリスチアン・パウルの福音書に關する研究は千八百四十七年に出た。ハインリヒ・ホルツマンの共觀福音書は千八百六十三年に出版された。其の他ホルステンやワイツゼンケル、ウエルハウゼンの著書なども段々に出るやうになつた。その中でもロイスの「聖書の歴史」は千八百八十一年に出て居るが、ホルツマンが多數の學者の共力を得て出して居る「新約書の註釋書」は千八百八十九年に始まり、カウチの「舊約書」は千八百九十年から始まつて居る。そして是れ等の書物は皆な聖書批評を專一に努めて居るものである。

然らば此の聖書批評と云ふものは何をするのであるか。その事を一寸一言述べて置かう。

聖書批評と一言に云ふけれども、之を大分すると凡そ三つにすると出来る。即ちその一は集結批評である。その意味は、現在の聖書は多數の書物より成立して居て、各書とも皆な神の啓示を記録したものだと自稱して居るが、果してその云ふ通りであるか。古人は如何なる着眼點より此の諸



書を神の啓示と考へたのであるか。此の考へは今日も尙ほ正當と認めるとが出来るかと云ふやうなことを批評的に研究するのである。その二は本文批評である。即ち吾人が今日有する聖書の本文は果して何等の誤謬なく吾人に傳つたものであるかと云ふ着眼點から、先づ本文を確定する必要がある若し誤謬ありとせば、之を正し批評眼よりして正當なりと考へらるる本文を作るとになる。その三は歴史的、文籍的批評である。此の批評によつては傳へられたる本文は果してその著者と做されて居る者が眞に作つたものであるか。又何年の頃に出来たものであるか。後から書き加へた文章は混つて居ないか。何處で書かれたものであるか。或は色々の原書があつたのを編者が打つて一纏めにしたものならば、その色々の原書を再び本文によつて區別するとか、又は記事は果して歴史的に眞にあつたことを其の儘書いたものであるか等の問題に就いて研究することである。

彼のカウチ教授の出版になる「舊約聖書」の如きは、斯う云ふ聖書批評の盛んであつた結果とし

て出来たことが、一目瞭に分る。各書に序文の様に附けてある説明には、上に云つた問題が論じてある。又創世記などを見ても原書の區別が傍註のやうに記してある。即ちPとかUとか或はJとかの文字はそれである。英語の翻譯には所謂「着色聖書」と稱して此の原書の區別を色分けにしたのなどがある。或は新約に就いて云ふならば最も古い記録は今の馬可傳の前にあつた「舊馬可傳」と耶穌の説教を集めた所謂「説教原書」(Q)であつて、今の三福音書は多くの材料を、それによつて著述したものである。今の馬可傳は大體の舊馬可傳により唯だ耶穌の歴史を物語らんとしたものである。馬太傳は馬可傳とQと及びその他多少の材料によつて著述したものである。路可傳も亦た馬太、馬可、Q及び特殊の傳説に基いて著述されたものであると云ふやうな議論である。或は更に他の一例を取つて云ふならば、耶穌の死んだ時に地震があつたり、日蝕になつたり、或は死人が復活して墓から起きて來たと云ふやうなことが書いてあるが、それは小説である。耶穌の死の人心に及



いふ思想がある。至善の人性を無限大に擴げたのが即ち耶蘇の神である。

吾人は何處に於てか人類最善の性質を發見し得べき。耶蘇を措いて他に之を見出す事は出來ぬ。

之は基督教會が不斷に把持し來つた信念である。

耶蘇基督に於て人は己が姿の最高示現を見た。而して同時に神は亦自己の完全なる天啓を見たのである。神を知るには、基督を知らねばならぬ。耶蘇の行事、教訓、苦、死を見て、人類は基督に似

た神の觀念を要望する。自然より人類へ、人類より基督へ、基督より神へ——豊富な充實した神の觀念は此道筋を辿つて進むのでなくてはならぬ。斯くして吾人は宇宙遍滿の心靈として永遠に活動し、萬物に内在して己を創造し、人類に現身し、特に基督教會が一千九百年の間、神の全き示現として渴仰し來つた第一人者、即ち人の子にして又神の子たる耶蘇基督に現身せる神の觀念に到達するのである。

愚かさを度しまやかになげきつゝ獨りあるごと  
春の雨ふる

小さき名を欲りする我れかひたすらに蚯蚓のや  
うにあはれなる我れ

蝙蝠の扉に立ちけらし夕されば人をも戀ひし人  
をも泣きし

.....ゆふしほ.....



## 最近卅年間に於ける神學の發展 (上)

三 並 良

六合雜誌の第一號は明治十三年の十月に出て居る。四六版六十四頁の雜誌で小崎弘道氏が編輯長印刷者としては田村直臣氏が署名して居る。中村敬宇先生は祝詩を寄せて居るが、其中には「世間雜誌日圖新。讒謗無根觸律頻。豈若茲編論教道。

導人覺路度迷津」など云ふのがある。それから高橋吾良氏の論文は「論宗教與理學之關涉及其要緊」などと題してある。餘程まだ漢文調を脱して居ない時代と見える。然し當年の六合雜誌の同人はハイカラ揃ひであつたのであらう。その時代の植村正久氏の宗教論、小崎弘道氏の哲學論、高橋吾良氏の佛教攻撃論などは誰れしもの記憶に残つて居るであらう。けれども時代は遠慮なく過ぎ去つた

本誌も度々主筆を代へ、或は立場も變つた。それもさうであらう、創刊以來既に卅五年の歳月が経つて居る。僕の如きは當時はまだ東京にだつて出ては居なかつたし、又基督教徒でもなかつた。

此の過去卅餘年の間に起つた神學の進歩を書くのが僕の分擔であるが、さう思つて鐵筆を把り、原稿に對つても餘り書くことがなさ過ぎて困る。神學と云ふけれど神學とは甚だ抽象的な名詞である。手もなければ足もない。若し神學なるものありとせば之を代表する神學者がなければなるまい然し我邦には學者と稱するに足るべきものがあらうか。何か著述らしい著述をして居るものがあらうか。あるはあつても片々たるものに過ぎない。

其身體と爲し、神を其心靈とする絶大なる全一の一部分たるに外ならず』と云ひ、又他の言葉にて『世界は神の身體にして神は世界の心靈なり』といふのは、全く化身の思想を言ひ現はしたものである。人心の機微は指頭よりも眼睛のうちに、眼睛よりも語言舉措の裡に能く現はれる様に、宇宙遍滿の心靈、神は岩石河海よりも野の花、空の鳥に、更にまた人間のうちに能く現はれて居る。人を觀て、神を知るのは即ち是があるが爲めだ。人間本具の靈即神、是が聖書の劈頭に神が人を其姿に形どつて創つたといふ語の眞意である。此語は人に關しても教へるのみでなく、神に關して教へる處がある。若し此語を取つて人間を大きくした神の思想を反映するのであるとなすならば、蓋し論者の眼光未だ紙背に徹せざるが故だ。此語は決して、外形を云ふのでなく、神と人との根本的に似通ふ處を暗示するのである。故に、神を知らんとせば人を知らざるべからず、全體は一部より大きく、神は人よりも大きくあらねばならぬ。

### 三

人とは何ぞやといふならば、其本來の特性はバルソナリチーであると答へる。バルソナリチーには、記憶、意識及び意志が渾然たる調和をなして活動して居るといふ意を含んで居る。併し吾人は神とバルソンといふ事が出来るが。耶蘇は『神は靈なり』と言つた。而かも基督教會は神のバルソナリチーを主張し來つた。思ふにバルソナリチーの觀念を神に適用するの可否は、バルソナリチーといふ言葉の意味の如何にあるのである。若し此語を以て別々な個人、即ち、我は我、君ではない君は君で、僕ではないといふ限られた人の姿といふ意に取つて、直ちに神に轉用せんとするならば其は誤りである。且つ夫れのみならず、斯の如き性質は決してバルソナリチーの主要な特色では無い。バルソナリチーの特色、否總て生物の特色は今の様な爾我相剋ではない。自ら進んで自己以外の物を攝し來つて己に同化して成育を營む點にある。吾人が神にバルソナリチーを適用し得るのは

之が爲めである。換言すれば、神は總てを包擁する生である、心靈である。萬物を無に沒了し去るのてなく、之を創造し、作り上げてゆくのである。

人心には二つの恒常的な特色があつて、これは從來神の性質と見做されたものである、即ち善と愛とが夫れてある。ヘブライの豫言者<sup>プロフェット</sup>は神の義を絶叫した。彼等にとつては、神は善の極致であつた、至聖者であつた。世には、神の善を肯定するのを笑ふ論者があつて、神は生である、而して善とか徳とかいふものは生の關する處でないと主張する。併し是れは思想の混亂を示すに過ぎない。若し善と徳とが、習慣に服従するといふ意義に解するならば、之を神に加へるのは、唯閑葛藤に過ぎない。併し自分は道德を以て人生の保全力と見る。成程道德には創造の力はない。併し創造せられたる最善の分子を保全する力は確かにある。故に此力は又完全に神にもなければならぬ。生の活動は決して新なる創造の方面にのみ限られては居らぬ。最善なるものの保全も其重要な働きの一たるを失はぬのである。

神の愛といふ事も古めかしいと云ふ人がある。若し愛が或る母親の爲すが如く、單にその子を傷け痛めぬやうに庇護せんとするセンチメンタルな情愛に過ぎぬならば、之れを以て神の性質を定義せんことは甚だ不充分たるを免れないのである。

併し斯の如きは愛の總てではない。愛は本來創造的のもので、我あるは、即愛のためである。愛は唯保護するのみでなく、我等の迷へる時には正路に導くものである。柔和忍辱が愛の總てではなく、發しては大折伏ともなる。然り、神は愛である。神は愛であるが故に、生は愛であるが故に。

以上は神の父である根本的意義であらうと信ずる。耶蘇は「天に在す父に」祈れと弟子に教へたが、之は神と無限の心靈、萬物の創造主、人類の父として見よとの義である。又父を我に示し玉へと請はれた時には、我を見しものは父を見しなりと答へて、己を神と一にし、又人類を一にした。又或時は、汝等天の父の完全<sup>まうたま</sup>が如く、完全<sup>みづか</sup>かれと教へた。神が父であるといふ耶蘇の觀念には、創造者、上帝、保護者、愛する者、生命の賦與者と



の結果、如何なる斷案に達したかといへば、先づ第一に、「神は一也」といふ事であらう。科學の教へる所、哲學の主張する處に顧みて、吾人經驗の差別界の背後には一の根本的事實、何か遍滿の本質、何か普遍の無限な生、自然界と其因果律を超越し、總てを包容して餘すなき精神、目的の存在する事を信ぜざるを得ない。

第二は、神は萬物に示現するといふ事である。

全宇宙は即ち神の顯現であるといふ思想である。

ブラトーは天體の均調一糸亂れざる裡に神を認めた。イスラエルの詩人は、颯風に其聲を聞いた。

耶蘇は野の花空の鳥に其攝理を觀じた。若夫れ、ゲーテに至つては天地に神を認め、神に天地を認めた。彼にとつては天地は現象の生滅去來ではなく、實に靈の全體であつた。テニスンは、一枝の花をさながらに解し得るなら、神人の何たるをも又解し得べしと歌つたのである。

第三に確定せられた新案として認めなければならぬ事は、進化論である。科學者哲學者は、吾人が生活する世界の特色は、進化する、即ち發達

し、生長し、進歩するといふ事を確信して居る。

宇宙は未到の完全を望んで進んで行く、彼方の目標を覗つて走つてゆく。形式の相違はあるが、總ての科學、天文、地質、生物、心理の科學は皆斯の如く主張する。而して吾人、眼を宗教の歴史に轉ずると、こゝには神の思想が漸々進化して來た事を認めざるを得ない。吾等の祖父の神は孫の神ではない。アブラハムの神とポロの神には大なる徑庭が在つて存する。ポロの神觀はアブラハムの神觀よりも博大で豊富であつた。吾人の神觀にも亦進歩の認むべきものがなくては適はぬ。故に吾人は歴史の教へる所に傾聽すると共に、今は過去に勝れると思はねばならぬ。過去の宗教的實驗を重ねずると共に現在の宗教的傾向に敏でありたい。

果して然らば、吾人は那邊に神を求むべきであらうか。其は人間深甚の經驗の裡に求めるのである。而して、吾人が新に神を見出さんが爲めには吾人が生活しつゝある現代の最善な思想に觸れて其指導を俟たねばならぬ。現時を支配する思想は

何ぞと問はゞ其れは「生」である。科學者哲學者藝術家は一樣に「生」といふ經驗の大事實の觀照に我を忘れて居る。「生」の力は、物質的の形式に透徹し、物質に統一を與へ、生長し、繁殖して、決して孤立したものでなく處としてあらざるはない極めて強大な顯微鏡下には吾人の想像も及ばぬ極微な生物が寫し出さるゝのである。

神は活ける神で、此萬物に透徹する生の力は即ち神であるといふのが實に今日の思想である。

併し此「生」は吾人何處に見出すのであるか、原始質細胞の中に最も能く現はれて居るのか、原始的植物の中にか、空の鳥にか、將た、海の魚にか宇宙遍滿の生を吾人は何處に如是に見出す事が出來やうか。謂ふまでもなく、宇宙の實相は其最下の顯現に求むべきでなくして、其最高の顯現に求めねばならぬ。此生々展開してゆく宇宙の裡に神を見んとするならば、吾人は眼を其始に向けるのではなく、其歸結に向けねばならぬ。無意識な細胞の中には神の姿は如實には現はれて居ない。吾人は如何しても、思考し、意志し、感ずる處の人間

の心の中に求めねばならぬ。地上に於て、進化の最高階段に立つ者は人間であるなら、吾人の知れる限り、十分なる神の姿は人間に求めざるを得ない。斯く觀じ來ると、神は宇宙遍在の神で、決して、宇宙を遠離した沒交渉な神でなく其裡に一貫して活ける神であることを知る。詩人の語を借りるならば、「神は夕陽の光の中に、海原の音の中に、生ける風の中に、青空の中に、人の心の中に住む」のである。活眼を具した者には、物として神の姿の現前せぬはないが、其最も明確に十分に現前して居るのは存在の最高形式、進化の過程が我等に教へた最高經驗——即ち人類である。之は決して或種の汎神論、例へば所有差別を同一線に還元して、一顆の石にも、一本の木にも、人心に現はれたと同じ神を認めるやうな一種の汎神論とは違ふ之は創造的進化である。神は萬物のうちに沒して了ふのではなく。萬物は歩一步進化しつゝ神の性を現はす者と見るのである。

併し此の神の内在なるものは、化身の觀念に於て極致に達して居る、古人の所謂『萬有は自然を

# 吾人の神觀

シー・ジェー・エル・ベーツ

## 一

時の古今を論ぜず常に人類の心を動かし來つた

問題は如何と問ふならば、先づ指を神を如何に見るべきかといふ事に屈せねばなるまい。何人も此問題に對して曖昧な態度を永く執る事は出來ぬ、蓋し此問題は、吾人が性情の奥底に觸れ、且つ吾人の至高な想像を動かす力を有して居るからである。神といふ觀念には一種獨特なる動的能力があつて、吾人に精力を分ち、又生氣を與ふるものである。吾人に對して第一義的の價值を有するものは實に神の觀念であつて、安心とか道德的品性とか行爲などの問題は畢竟するに第二次的のものたるに過ぎぬ。神の觀念が人の生涯を作り上げてゆく原動力である事は、其を以て無上價值を有し、否、所有價值判斷の標準となし來つたのを見ても解る。生涯の安危存立休戚運命までも一に懸つて

神といふ觀念にあると確信し、此故に生き、活動し、奮闘し、死生を賭して恐れなかつたものは一々擧ぐるの繁に堪へぬ。

神の觀念を安んじて把持せんが爲めに祖先の墳墓の地を後にしたアブラハムの如き快男兒はいくらもあつた。自己良心の命は即ち神の聲なりと觀じ去つて異郷漂泊の苦を辭しなかつたビルグリム・フアザース一行の如き熱信兒も多くあつた。神といふ觀念から流れ出した不退轉の勇氣は發して大なる國家を建設する事業ともなつた。

又、己が神の觀念を廣く宣布せんが爲めには忍び難き骨肉の情を忍び、愛する故山にも暇を告げた男女は數ふる事は出來ぬ程である。彼等はあらゆる障礙をも破碎し去つた。死をも甘受して世界の涯までも彼等の神を傳ふるに至つた。十九世紀の大事業は何であるかといへば、實に歐米の教會に滲薄した宣教運動である。數千の男女は各地に



出掛けて行つた、數千萬の費用が注ぎ込まれた——此事業は、年を追ふて擴大して来る。此事業が掲ぐる精神界の波瀾は澎湃として全世界を浸して居るのである。

此事業の背後には何が潜んで居るか、此事業の由つて以て起つた動機、又此運動の目的は何であるか。商業では無論ない。領土擴張でもない。必ずしも世界の平和でもない。人道主義からでもない。然らば果して何であらう。曰く、徹頭徹尾、神といふ觀念——之がその背後に活躍して居るのだ。商業の手段は安全になり、範圍の擴大も其結果として来るであらう。平和も追々と確立せられやう。人類の愛も必ずや深くなり、人類同胞の意義も一段の廣汎を加へて來やう。併し如上の事は只結果として伴ひ來るもので、この大事業の根本動機は實に神といふ一語に盡さる。而して其目的とは此神を他に宣示するに外ならない。

今日の日本が當面の急は何か。そは神に對する興味の復活である。一步進んだ神觀である。謹嚴な態度を以て、神の要求する處を考へる事である

神の召命に喜んで應ずる事である。神の意志に全私の要求を認むる事である。何れの民族にして、偉大深遠な神の觀念なくして、眞に偉大なる邦家を永久に建て得たものがあらうか。

## 二

併し、如何なる民族でも皆神の觀念は有つて居た。吾人が今日考へて見なければならぬ事は、吾人神を信すべきかといふ事ではない。廿世紀の今日、過去何千年の經驗に徴し、科學哲學の確信に基き、文藝、宗教の本能に顧み、現時の道德的要求に慮ばかつて、吾人は果して神を如何に觀すべきか——是が最大緊要事である。

吾人は科學、哲學、文藝等の主張を度外に措いて神觀を懷く事は出來ぬ。人類の思想が進展してゆくうちには、何か必ず確かなものを得る。吾人が拒む事の出來ない永久的の斷案を作り上げてゆくのである。過去の大思想家は徒爾に思索したとは吾人如何にしても考へる事は出來ぬ。處で、神の本質に關して、今日までに試みられた人類思索



とは、他の一切のものより引き離され、無意識の流れから引上げられて吾等に與へられた意識生活の刹那——即生すること以外のことであらうか。藝術はそれ自らが生である。無意識の生活といふ盛んなる流れに壓倒されてゐた生物より吾等の性質を變じてその流れを支配する生物たらしめることが其能である。

更にランサム氏はいふ。道義とは價値の法則である。それは各個人に従つて異なり、其人の性質と境遇に依て各個人に定められたものである。如何なる藝術家でも、又如何なる人でも、道義を道れない。又其藝術家の所有してゐる道義といふものは其藝術家の人生觀に決定的の影響を及ぼす一となるのであらう。若し全く道義とは關係がないと信じ得る程に批評的でない人があるならば、かく信じ得る力こそ彼の作品に道義上の價値を與へるものであらう。藝術家の意識生活は藝術品そのものであるから、彼の手に同時に意識となり表現となりつゝある所の生の刹那に不忠信ならざる以上は彼れの人格を變へることは出来ない。彼の人格それと共に彼の道義は既に包含されてゐるのである。いかなる不正直も彼のヴィジョンを害ひ、増進しつゝある玲瓏透徹を以て喜びとすべき所の其結晶は常に不透明となる。藝術家が道義に反抗する原因はそれ以外に見出すことは出来ない。

思ふに生は則ち自我の本質であり、自我そのものである。即ち吾等言ふ所の深き意味の宗教である。鋭くいふならば無意識圈内に横はつて眠つてゐる力は未だ生といふには足らないので、吾等の意識の鋒先(きりぎりす)に突き破られる刹那が則ち生である。

發見が則ち生であり、意識そのものが則ち生である。ランサム氏の言葉を借りて言へば其の刹那をすべての他のものより引き離し得る力であり、此の力は刹那の中に永遠を味ふことを得しむる力である。宇宙は人間の意識を通じて其無意識より脱せんと努力しつゝある生の力である。生は生物としての本質的の活動であり、本質的なるが故に、生の意識の鮮明の度の加はるに隨つて自我以外の局部表現なる生に對する意識をも深く廣くすることが出来るのである。此の生は則ち意識的活動であり、愛と、力と、驚異の源泉であり、死滅に對する征服であり、舊に對する新の反抗である。價値ある無意識は此の意識的經驗の刹那といふ一線を越えた所でなくして存し得ない。斯る強烈なる生、自我の本質、宗教を表現するに當り我等は此

本質と表現の間に一絲をも挿むことなからむを要求するのである。吾等は本質としての生——即宗教と、表現としての生——即ち藝術の渾融を要求するのは則ち現代及び來らむとする新き精神界に對する熱き憧憬に外ならないのである。

古代より現代に至るまでのすべての宗教は其表現を爲すに際して藝術家の良心を失つてゐたことが多かつたのではないか。時代々々に變化し、進化し、或は全く方面を轉換したかも知れぬ。其本質が何かの理由のために或時代の固定せる表現の方法のために固定されてしまつたが故に、進化したるべき筈の本質までが其流動を阻止され進化することが出來ずにしまつたのではないか。又此本質を表現すべき筈の藝術が當然表現すべきものを表現せずして表現のために表現を爲すといふやうな無意味なる方向に流れてしまつたが故に、墮落せる藝術が却て純粹なる藝術なるかの如き要求を爲すに至つたのではないか。しかしながら十九世紀末より此世紀にかけての藝術は殆どすべての方面に於て其本質を表現せんとする努力のあらはれ

てあることは否定することが出來ない。現代の宗教が全く其古い衣を脱いで眞に偽らざる表現の道に來り得るか何うかは別問題としても、現代の宗教が新たな力を掴まむとしつゝある努力も亦認めずにはゐられない事實である故に、彼等が單なる宗教藝術といふやうな文字に對する先入主を棄て、又その成立宗教の形式より更に深き自由なる内生活に移り、そして其表現としての生即藝術に對しては更に強烈なる道義を以てそれを創造し得るやうになるならば、現代の凝固せる宗教が多少なりとも流動して生の意識を與へ得るに違ひない。現代の宗教が常に新しく生命あらんためには少くとも此藝術的道義心即本質と表現に對して更に眞面目なる態度を持して行くことが無ければ、宗教は單なる虚偽の戯れと墮するより外はない。又表現のための表現といふことが無意味のこと、すれば藝術は深き意味に於ての宗教をば本質としての表現でなければならぬ。兩者は平行論に於ける靈肉の關係であつて、不可分の生そのものに對して與へらるべき名稱である。

あり、いつもその役に立つものであつて、求むる時に拒絶することはない。』しかしこゝにいふ説はカントの美感は無關心であるといふ説に迷はされたもので藝術の條件と作用を取違えたものである。……一の藝術品は二人の藝術家の間に出来た合作である。私は此二人をば參考のために『語る人』と『聞く人』といふ名をつけておかう。しかしながら我々の普通言ふ所の合作となる前にそれは『語る人』獨りで作られる獨立行爲である。彼は最初の創造者として今住んでゐる所の印象の流れから或物を引き離すのである。恰も彼れはその汪溢を留めて暫くその流れを引きとめたかの如くである。彼れは太陽や月の進行中それを引き留め、たゞしばし世界が世界と彼れの存在の刹那に依て彼に與へられた盛んなる印象に體現されて世界が不動となつて其前に立つてゐる。此一刹那を彼れは他のすべてのものより引きほどく。此刹那に於ける彼れに對する世界と宇宙をばライフよりも鮮かに記憶する。そして其記憶の鮮明なることはそれ自身が藏してゐるものより外に、前とか後とか

上とか下とかいふものを持たせぬことに歸する。彼はその刹那をばその含んでゐる意味と一緒に切り離す。其結果として起る所の透明なる輝きは恰も彼れが俄かに反對流を引き留めたので、流れは混亂せる運動の不透明を失つて、玲瓏透徹となつたやうである。彼は其刹那をば自己の意識を以て圍むことに依て引き離す。同時に他の刹那はあちぎれた面帷をそれと共に取去りつゝ遁れ去るのである。……刹那の選擇といふことがある。そして其選擇は道理にかなふものではなくして刹那自らのために決定されるものである故に、『語る人』はインスピレーションを受けたやうな氣がするのである。其刹那を遁してしまつて不完全な理解といふ役にも立たぬ分捕品と一緒に千萬の他のものを結びつけるやうなことはせずして、その刹那の過ぎ行く時には、其刹那は階音となり、身振となり、言葉形或は秩序ある色彩等となりて顯はれ、彼れを惑はし心を奪ひ誘かして無理にもそれを捕へさせやうとするのである。その刹那の過ぎ行く時二の節調が聞え、意味深き腕のやうなものがそ



の洪水の中から動き出し、眠れる者の如き言葉の  
 亂雜が彼れの心を驚かし、未だ描かれざる畫中の  
 幽靈が彼れの眼をさます。之等のものは則ち質物  
 である。彼れは之等のものを捕へて失うまいとし  
 て注意深く耳を傾けて其音樂の残りを得んとす  
 る。そして洪水の中からその身振が刹那そのもの  
 と思はれる形をば目を定めて引き出し、壞れやす  
 い言葉をきれ／＼に壞して腦髓の中で繪を造る。  
 もとの斷片と何か矛盾するものや其斷片の性質が  
 決定しなかつた所のものを以てその更に遠い形  
 を豫想することをしてそれを妨げぬことが願であ  
 るから、彼れはその一刹那が彼れに與へた質物を  
 自由にうけ出させる。彼れはそのもとの約束に忠  
 實ならんことを求めるだけである。藝術品の最初  
 の創造に於ける『語る人』の道は發見の道である  
 彼は無意識或は半意識の生活の流れから捕へ來つ  
 た所の印象の斷片の最大の意味を知ることに従事  
 する。彼は其印象の全體をば深奥完全に意識する  
 ことに依て自分のものとなさんとしつゝあるのて  
 ある。かくて之を『聞く人』は『語る人』が石や、

音樂や、繪畫や、言葉を以て言ひあらはした所の  
 ものから『語る人』が自らのものとした所の人生の  
 斷片を再築し、それに就て有してゐる意識を自ら  
 も與へられんと試みる。しかし之は精確にいふな  
 らば不可能のことで、『聞く人』は『語る人』の不精  
 確な翻譯者に過ぎない。しかし吾等は不確かにも  
 彼れは刹那が與へてくれた質物を自由に受用させ  
 るに成功してゐるといふこと、彼の作品は矛盾し  
 てゐないのであるからそこに包まれてある原の靈  
 感<sup>スピリション</sup>に忠實であるのだといふことを知り得る。か  
 くて吾等は若しそれが可能であるなら確かに又信  
 じてゐることだが合作に於ける彼れの分前は申分  
 のないものであると信ずるやうになるであらう。  
 それで吾等の美に對する判斷は、若し或變ずべか  
 らざる事實が宇宙或は吾等の體質中に變化される  
 ならば、吾等は完全なる表現、即ち本質と全く融  
 合してゐる表現に與かりつゝあるのであらうとい  
 ふ信念に依るのである。そこで藝術のための藝術、  
 先づ表現の完全といふことが考へられる。しかし  
 ながら此本質と全く離合してゐる此表現といふこ



れども、シヨウやバリヤ、トマスの言ふべきことを見んとして行くものが漸次増加してゐる。そして彼等の見んと欲する劇が善く演ぜられるといふことは想像するに難くない。立派な俳優の人格が極めて強烈なるアツビールをやるといふことや、普通の見物人の過半数はあの俳優とかこの俳優とかいつて單に俳優を見るために赴いてゐるといふことは私もよくわかつてゐるけれども、私はパンの中のパン種が大きくなりつゝあつて、人々は以前よりも劇の中にある問題や意味を論ずるやうになつてゐるといふことを主張する。劇そのものを深く考へるやうになつたといふことは近代の舞臺には三四十年前の偉大なる多くの俳優がなくなつたといふことに起因するのである。今日舞臺に立つものの、中にあの卓越せる人格者なるフォレスト、ブース、クツシュマン、アーヴィング、ゼツフアソンといふやうな人々はもう見られないのである。かの偉大なる俳優等は現代語を以て書かれてある劇に對しては何等の興味をも持つてゐないのであつた。彼等は全く善い新しい劇を作らずして昔の劇を演ずることを以て満足したのである。……劇に於ける此進化せる變化の中に失はれた唯一のものは昔の細工の多い喜劇の傳説である。今日の俳優は之と全く異なつた種類の劇を演ずるやうに練習してゐるのである。修飾の少い、傳説の少い、一言でいふならば細工の少ないものを演じてゐるのである……』

演劇に對してかういふ轉向を與へたものは名優の凋落といふことも其一原因ではあらうけれども近代劇そのものが與へた刺激感を除外することは

出來ないであらう。こゝに今更らしくイブセンやシヨウと言はなくとも、又彼等が如何なる文藝上の主義を取つてゐたかを論ぜずとも、彼等が生に對する態度はラスキンの所謂近代主義にあらずして中古主義といふものに深き意味に於て似てをりその目的とする所は内的生命の意識、覺醒、爆發であり、生そのものの、中に深き共鳴と同情と抱合とを有することを以て藝術の根柢となしてゐるのであつて見れば、我等の要求してゐる渾融せる宗教と藝術とは現代及び更に來らんとする時代に向つての空なる憧憬ではなくして一步一步築かれつゝある根柢ある熱求であるといふことが出來やう。よしや宗教といふものの藝術といふものの、原始の狀態が我等が今この兩者に對して燃ゆるばかりに感じてゐる要求とは極めて掛け離れてゐるものであるにしても、我等は此新しき要求を以て新しき生命の開拓發見に従はなければならぬ運命を持つてゐるものであるといふことを意識せずにはゐられない。

自我は生命の局部分表現である。自我は生きてゐる。

るが故に、即ち生命を持てゐるが故に、神秘であり、驚異であり、不可透である。この神秘なる生命は肉體と精神の媒介を透して自我として顯現してゐるのである。この生命は無意識の中に深く潜在してゐるから之を呼び醒し、意識の尖鋒を振て常に之を掘つてゐなければならぬ。自我を形成する生命は周圍のすべてのもの、中から——自然人間一莖の草一滴の露の中からも生命を發見して之を愛し、それと同化し、そしてそこに溢る、宇宙の生命を觀得して氣樂の感到達し得る力である。更に其生命を求めて自我の奥に入り込む時にはそこに働く所の觸るれば摧けつべき程に見える愛する意志の力と、それに伴ふ喜びの湧躍のうちに、自我の生命が他の枝より切り離された葡萄の枝にあらずして、その底には更に殆ど所在を絶したとも思はれる程の愛の力と喜びの湧き溢れるのを感じるのである。

すべての自我、自我ばかりではない、すべての現象の意味は現象そのものに限られてゐるのではなくして、その見えてゐるよりも更に神秘なる内容意味を有する生活を持つてゐるのである。我

等は此深くして遠く、しかも力と愛の泉なるものを求め、且つ餐はんことを欲するのである。時にはそれを妨げ、破り、汚す自我の悲劇をも痛切に味ひつゝ、或はそこに起る争闘、苦悶、敗戦をも回避せずして痛感しつゝ、たゞ一筋に深くこの神秘なる自我の生命の滾沸の中に常に目醒めてをらんことを欲するのである。そして此生命的經驗は我等の生活の本質であり眞の意味に於ての宗教である。我等は此生命的經驗がそのまゝ自然なる表現となり化身とならむことを要求するのである。我等はそこに宗教と藝術の渾融の状態を描き得るのである。

## 五

更に私は『藝術のための藝術』に對する『生のための藝術』のことをもう少し知るために暫くランサム氏の語る所を聞かう。オスカア・ワイルドは藝術が人生の模倣するよりも人生が藝術を模倣すると言つてゐるが、ホイッスラーは更に嚴肅にかう言つてゐる。『丁度鍵盤がすべての音符を藏してゐるやうに自然はすべての繪畫の色と形に於ける要素を藏してゐる。そして藝術家はすべての美味にして愛すべきものの中に……之れを聯合する暗示を見出す。かくの如くして自然は常に其財源で

めに羅馬に赴いた。彼は其室の一方に基督の支配したまふ神學の世界を畫き其他方にアポロの支配する詩歌の世界を畫いた。其處から又其時から以太利の智能と藝術とは其衰頹期を劃するのである當時の基督教の大本山なる宮殿の裝飾をするために、當時の基督教藝術家の第一流の代表者として赴いた彼は詩歌及び哲學の精神の中に神學のインスピレーションと同じく神のインスピレーションを見出す程の宗教心も獨創力も持つてをらなかつた。却て彼れは信仰的のものと同列に空想的の創作を引揚げたのである。歐洲藝術の運命はかのヴァチカン宮殿より流れ出で、それは斯くの如く衰頹の起源を劃した彼の卓越せる技術に依つて興された。彼及び彼の同時期の作家等の作品が到達したる技巧の完全と形體の微妙とはそれを以て一切の藝術家の主要の目的とならしめたのである。それより以降技巧は思想よりも尊重をうけ、美は眞實よりも尊重をうけた。かくの如く中古主義の藝術に於ては思想が第一であり技巧は第二である。

第二である。前者に於ては眞が第一であつて美が第二である。後者に於ては美が第一であり眞が第二である。中古主義はラファエルまでに及び近代主義はラファエルから降つて今日に至つてゐるのである。そしてラファエル前派は此近代主義に逆行して中古主義に歸らんとする努力であるは言ふまでもない。彼等はどれ程細いものであつても自然からたゞ自然からばかり一切のものを製作することに依て得られた唯一の原理を持つてゐるだけである。此妥協を許さない絶對唯一の眞理を持つてゐるのである。

ラスキンが宗教と藝術に對して一切か皆無かといふやうな態度を持してゐるのは果して妥當な判斷であるか否かは私の疑とする所である。ラスキンは兩者の間に截然たる區別をしてしまつて、一を以て他を屈服させねばならぬやうに言つてゐるけれども、又中古主義の藝術は皆そうであつたことは事實であるかも知れぬけれども、又ラファエル前派が宗教の下に藝術を屈服させやうとしたのであれば彼等も獨創力に缺けてゐることはラファエルと其選を共にするものではないかとも疑はれぬではないけれども、彼等が深き意味の宗教と眞を第一として技巧を第二とするといふことに目醒めたとするならば、それは中古主義に歸らんとする努力といふよりも寧ろ近代主義の中に破れたる新しき中古主義であり、

新様の運動といはなければならない。彼等が我等の要求せんとやる如き近代の獨創的宗教をその中に盛つてゐるか、或は單なる中古主義の復興に過ぎないかは深く茲に論ずることは出来ない。たゞ我等が現代及び來らむとする時代の藝術に要求するものは單に中古主義の復興といふやうなことではなくして、その深き獨創の宗教或は生命を表現する藝術でなければならぬ。宗教が藝術を屈服させるといふやうなことではなくして、兩者は全く渾融の状態をとるべきものでなければならぬ。中古の宗教と近代の宗教との間にはラスキンの言うた宗教と藝術の區別程の差異があつた。

しかるに近代の宗教の本質と藝術の本質の間には斯ういふ區別を見出し得るや否や頗る疑しい。宗教は藝術を使用するのでなくして宗教が藝術の中にあらはれたのであり、藝術は宗教の道具となるのではなくして、宗教藝術の本質なる生命の自然なる表現であり、化身でなければならぬ。我等はたゞ其本質なる生命を呼ぶに宗教なる言葉を用ゐる、其表現或は化身を呼ぶに藝術なる言葉を用ゐたいのである。其本質なる宗教或は生命とこゝにいふ所のものは勿論成立宗教を指していふのではない。個性の根柢に存する生活の中に滾沸してゐる生命をいふのである。現代に於ける宗教の表

現は禮拜であり、儀式であるけれども、之が果して我等の把握せんとする或は把握しつゝある新き生即ち宗教の適當なる表現であるか。我等が今切に求め、固く把握し、強く培養せんことを欲する新き生命を表現するには更に全く新しい表現の道を見出さなければならぬ。我等の宗教の表現の道は今のところ自己の獨創なる製作、即ち藝術による外はない。宗教と藝術の渾融を期する我等は現代の宗教が行ふてゐる禮拜のかはりに各自の藝術の製作を以てせんことを主張するものである。

#### 四

昨年十一月一日發行のリテラリ・ダイジェストはニユーヨルク・サンに載せたブランドル・マツシユ  
ー氏の演劇に關する意見を轉載してゐる。

『彼等新時代の俳優は興味豊かならむと試みてゐる。彼等の大多數は眞實ならむと試みてゐる。文藝上の眞といふことは生命の外部的事實の描寫を指すのではなくして、内部生命に忠實なものである。彼等の把握せんと試みてゐるのは實に此内の生命である……二拾五年以前には人々は大概或俳優或は或一團の俳優を見るために劇場に行つたのであるが、今は極めて少數のものであるけ



藝術である。

## 二

オスカー・ワイルドは其『虚偽の衰頹』といふ書の中にかう言つてゐる。『藝術は決して其自身以外の如何なるものをも表現はしない。藝術が獨立の生命を有することは恰も思想の然る如くであつて、たゞ自己の道に於いて純粹に發展するのである。』と説いて、藝術といふものは其時代の再現ではなくして、寧ろ其藝術の價値を判斷し得るは其次の時代であると説いてゐる。しかしながら之は獨立とか、時代とかいふ觀念の内容に隨つて如何やうにも解釋の出来る言ひ方であつて、獨立といつても、時代の再現といつても、絶對的でない以上、全く之と反對の意見がたゞぬことはないであらう。彼は更に第二の點を論じていふ。

『一切の惡藝術は人生と自然に歸つてそれらを高めて理想とする所から起る。人生と自然は藝術の粗雜なる材料の一部として用ゐられ得ることもあるが、それらのものが藝術に對して眞に役に立つものとなる前に、それらのものは藝術上の慣習に翻譯されなけ

ればならない。藝術がその想像の媒介物を棄てるや否や一切を棄てたも同然となるのである。方法としては寫實主義は全然失敗である。すべての藝術家の避くべき二つのものは形式の近代化と問題材料の近代化である。十九世紀に住んでゐる所の我等に對しては此時代以外ならば何の世紀も藝術に適する問題である。唯一の美なるものは我等に無關心なものである。』

今之をラスキンが『美術講話』の中に言つてゐることゝ比べて見ると稍面白い。『どんな國の藝術でも之れは其社會的・政治的・道義心の代表者である』と言つて、しかも此點は最も大切な點であるといひ『いかなる國の藝術でも、或は一般の生産的・形成的の力といふものは、皆その倫理的生活の正確な代表者である』、或は『藝術の爲し得る最高のことは高尚な人間の存在の眞の像すがたを爾の前におくことである』と説いてゐる。オスカー・ワイルドは更に言ふ。『藝術が人生を模倣するよりも人生が藝術を模倣する方が更に多い。』更に進んでいはゞ『自然も亦藝術を模倣するものである』。

## 三

今私はラスキンがラファエル前派に對する見解

を考へて見やう。ラスキンの説に依ると、此派の人々はラファエルを以て中古主義と近代主義の分水嶺に立つてゐると考へるのである。今羅馬帝國の滅亡までを古代主義と名づけ、それより十五世紀までを中古主義と名づけ、それより今日までを近代主義と名づけて、そして古代主義の代表者としてはレオニダスを選び、中古主義の代表者としては聖ルイスを選び、近代主義の代表者としてテッリッ卿を選んで見ると、彼等は或點を除いては多くの差異はないけれども其宗教的感情に於ては著き變化を認めずになられない。即ち古代主義は異教の信仰を以つて始まり、中古主義は基督に對する信仰を告白するに始まりてその繼續に存し近代主義は基督を否認するに始まり、その繼續に存してゐるのである。すべての中古の藝術が宗教的であり、すべての近代の藝術が世俗的であるといふことは此兩者の間を區分する最も著い事實である。中古に於ては宗教が第一の目的であつて個人の贅澤や快樂は第二であつたのに、近代に於ては個人の贅澤や快樂が第一の目的であつて、宗

教は第二になつてゐる。若し宗教が第二になるとすれば、それは全く無意味に歸せしめられたことで、神に第二の場所を獻げるといふことは何物をも獻げないといふことと同じである。之に反して宗教が第一となれば、宗教が全部となることであつて神以外のものは無意味のこととなるのである。故に中古の藝術は宗教に囚はれた藝術であり、近代の藝術は囚はれてゐない藝術である。兩者の區別は明暗の如く截然たるものである。そして此兩者の間に斯ういふ變化の起つて來たのは一千五百年頃である。基督の生涯のかはりにバカスやヴェナスその他のものが續々書かれるやうになつたのである。更に別の方面から考へて見ると、藝術の全體の目的が道德的教訓である時には第一の目的は眞であり美及び美より起り來る快樂は第二となる。之と反對に道德的教訓のすべての形式を失ふ時にはいふまでもなく美を第一の目的としたのである。さてラファエルが死んだのは三十七歳の時であつたが、彼れは二十五歳の時、法王ジュリアス二世のためにヴァチカン宮殿の裝飾を爲すた

るのである。エリア、サムエル、イザヤ等の豫言者より基督、保羅に至るまでの宗教的情緒の表白は實によく之れを語るものと言はなければならぬ。それより以後の世紀の宗教の變化を考へて見ても、そこに哲學的考察殊に科學的研究の斧が加へられるに隨つて、宗教は益内部的となり個性的になつたといふことは爭はれぬ事實であらう。

宗教は其情緒の表白として古來種々の儀式を有してゐる。儀文

は時に靈を殺すといふことがないではないけれども、宗教的情緒は情緒として内部的存在に留まるべきものでなく、それが表現となるといふことは極めて自然なる創造であり、又宗教性の本来に根ざす所のものと言はなければならぬ。宗教的儀式をば單に外部的人工的第二的偶然的として一概に排斥し去ることは出来ない問題は我等の宗教感情が何れ程切實に自然に表現されてゐるかといふことである。神の内在や、生命としての神を高調する宗教が古代或は中古の宗教の表現に比してどれ程の新しさを示してゐるか、新しい酒と見える酒は果して眞に新しい酒であるか、新しい靈は其新しい酒のために既に準備されてゐるか、之等の問題は別としても、兎に角現代の宗教界の一角に自己の生命に徹してそこから過去の人々の求めたすべてのものを把握しやうとする渴望と努力の顯はれてゐることは明かであらう。我等は今宗教が一大轉機に臨んでゐることを認めずにゐられない。長い間科學や哲學の

ために苦められてゐた宗教が漸く其立脚地を自覺し來つて、更に確實なる基礎と根柢とを自我の生命の中に求めてゐるといふことは爭はれぬ事實である。

更に藝術のことを考へて見るに、由來藝術は勢力の餘慾がある所から起るものであつて、遊戲の一形式であると言はれてゐる。即藝術は無關心なる創造慾に其源を置くものである。しかしながら藝術發達の跡を考へて見ると、それが社會的實用の要素を含んでゐるといふことは又爭はれぬ所である。勿論こゝでいふ所の實用とは淺薄なる教訓的傳道的といふ意味が含まれてゐるばかりではなく藝術としての獨立の地歩を占めつゝ、そこより及ぼし來る社會的影響をも含めてゐるのである。リボー氏は美的感情の進化を論じて、原始的には極めて人間性を持つてゐたものが進化するに隨て自然の全體を包含するやうになつたのであるといひ、自然に對する憂が起つたのは近代であるといふやうに説いてゐるが、私の考では藝術の起原は矢張り自然と人生の關係に於て見出さなければならぬと信ずる。宏壯の感の如きものは無關心と

いふやうな單純なものでなくして寧ろ多くの心的葛藤を斷絶したる後の平安なる心である。宏壯の感は美感の起源ではないかとさへ私には思はれる私は此點より藝術と宗教の起源をば同一の源に歸し得るのではないかと思ふ。古代の詩歌や、神話などは宗教を中心とせるものであり、又それらのものは宗教を離れては存在し得なかつた形跡は歴然たるものである。

若し私の以上の觀察が是認されるならば、藝術は初自然力に對する恐怖心即宏壯の感の表白として顯はれたものであるが、漸次人智の進むにつれて、其宗教的感情に愛、歎美、渴仰といふやうな要素が加はるに隨ひ、宗教的感情の表白としてのみ存在してゐた藝術が漸く其獨自の地歩を占めて來るやうになり、自然を愛し、歎美する藝術が起るやうになつた。之までは實際的の宗教感情と手を携へてゐたものが、漸く餘裕が出て來て、藝術はこゝに宗教を離れて初めて一種の遊戲の形として、今日までは宗教的實際的のものを内容としてゐた藝術が勢ひとして表現のための表現といふやうなことを以て藝術の本質と考へる傾向を生ずるやうになり、その顯はれとして藝術のための藝術といふやうな主義さへも起るに至つたのである。しかしながら本來藝術は實際的内容を主として始まつたものであるから、如何に表現すべきやといふことよりも、何を表現すべきやといふが多く、藝術の視ひ所でなければならぬ故に、社會的境遇の變遷に應じて或は生に對する憧憬を表白する浪漫主義となり、或は生に對する焦燥せる要求、批評、暴露を目的とする寫實主義、自然主義、神秘主義となるのであるが、近代の藝術殊に文藝に於ては、一方に生のための藝術といふことが強く提唱されると共に、他方には藝術のための藝術といふ主張も可成強く唱導されるやうになつた。ニイチエ、トルストイ、イブセン、ショウなどの人々が種々の主義形式を以て表現としてゐるに拘はらず其いづれもが視つてゐる所は生そのものである所から考へるならば、之等の人々の藝術を生のための藝術と名づけることが出來やう。他方はボードレール、ホウイツスラー、オスカール・ワイルド等の



つてカントの哲學はその價值を減じたといふやうなとはなく、却つてベルグソンに依つてカントの意義が明かになり、隨つてその價值も増加したのである。カントの眞意義はベルグソンに由つて初めて、眞正に發揮されたといふとが出來やう。カントが問題として假設的に認定した物自身を我々

の眼前に明瞭に展開して、その生々しい力と芳烈な色彩とを如實に示したのである。我々はベルグソンの哲學的天才を大に多とするものであると同時に、カントに對する敬慕の念を益々深くするものである。

△豫約購讀者諸君に告ぐ▽

本五月記念號は特別號とし、紙數を増加し、定價金參拾錢と致しましたから、既にお拂ひ込みの金額中より金拾錢だけ控除仕ることになります。右御承知を願ひます。

六合雜誌社營業部



## 宗教と藝術の渾融

佐藤 清

宗教と藝術の關係を論ずるには、兩者の起原發達の過程を研究して、其間を脈絡してゐる兩者相互の影響を考へ、そして兩者現在の關係に説き及ばねばならぬのであるが、私が茲に企てやうとしてゐるのはさういふ摯實なる研究の跡を追はうとするのではなくして、兩者の關係の中に求めなければ眞に自己の求むべきものを見出すことが出來ぬと信ずる要求をば、今宗教と藝術の渾融の中に投げ出さんとするに過ぎないのである。

原始宗教の心理の要素を構成するものは種々あるけれども、宇宙の不可知神秘なる力に對する恐怖の念、それにも人種風土の差に依て種々の變化はあるが、兎に角深き畏怖の念を始めとして、漠

然たる不安に至るまでの種々なる恐怖の感情がその主調をなしてゐることは明かである。人智漸く進むに隨て宇宙の間に存する秩序に氣がつき、隨つて神は宇宙をば物質的にも道德上にも支配するといふ觀念を抱くやうになり、因果應報の念が人々の心に起るのである。之に伴うて感情の上にも變化が起り、さきには宇宙に對してたゞ畏怖の念に驅られてゐたものがそれに對して驚歎、信任、愛といふやうな感情を交えるやうになり、宇宙の客觀的實在と考へてゐた神といふものも道德的觀念の發達につれて内在的となるのである。即ち宇宙に對する畏怖、驚異、讚歎に根ざしたところの宗教感情は漸次その對象をば客觀的・外部的のものから一轉して自己の精神内部に見出すことに依り、そこに最も深き精神生活を營まんとするに至

にありとした。二律背反は畢竟物を外部から理知的に見るが爲めに生じたものであつて、若し實在の内部に滲透する時は二律背反は如何にして生じ、如何にして調和せらるべきか、容易に理解される。我々が物を外部の視點から眺める時は二箇の反對した態度が同様に可能となる。何となれば外部の視點の異なるに随つて我々の認識態度が變ずるからである。然るに直覺に由つて具體的實在の内部に進入する時は視點はないから勿論我々の態度に二個以上の相反を生ずる理由はない。實在と渾一的に融合して居るから、それは唯一であり絶對である。例へば『灰色を見ない人は何うして黒と白とが互に透徹共存するか、想像だも出來ぬ。然し一たび灰色を見たならば、如何にして同一の灰色を白と黒との二種の着眼點から見るとが出来るか、容易に了解される』やうなものである。故に『直覺に基礎を置いた學説はそれが直覺的な程度に應じて、正しくカントの批判を免れて居るのである』とベルグソンは言つて居る。

## 五

かくの如く同じく哲學上の二律背反をさけてその混亂を防ぐ爲めに、カントは理性批判の哲學を建て、ベルグソンは直覺批判の哲學を創設した。カントは世界を全く現象界に於て理解しやうとし、ベルグソンは絶對界即ち持續に於て認識しやうとしたのである。蓋しカントは悟性の立場から絶對と相對、無限と有限、自由と關係等の二律背反を峻別し、ベルグソンは直覺の見地から相對界の種々のアンチノミーを同じく理解し調和した。かく二者の哲學は一見全く相反して居るやうであるが、實はさうでない。カントの哲學を一步進めるとベルグソンの哲學に飛躍せざるを得ないと予は思ふ。何故かといふにカントは悟性の獨立を確執する間は、物自身に就て立言する權利はないが、ベルグソンのやうに物自身即ち流動的實在を認識せんとすれば、何うしても悟性の形式を超越して他の能力に依らねばならぬからである。即ち悟性の作用は現象界のみに限定されてあるが故に、實在界に對する他の作用の存在を肯定せざるを得ないのである。而してカントは世界を現象界のみとせず、その背後に本體界あるを認めて居つたのであるからして、悟性作用の外に本體認識の能力の存在するをも亦默認せざるを得なかつたのである。

然らば斯かる能力は果して如何なるものであらうか。それは勿論判然とあるといふとも出來なければ、又無いといふとも出來ない。だから明かに規

定するわけには行かぬ。然れども若しありとすればそれは感性的であるとは出来ない。何となれば感性は與へられたものを綜合する作用であつて、現象に對するものであるから。又それは悟性といふとも出来ない。何となれば悟性は空虚な關係形式を取扱ふものであるから。然らばそれは感性和悟性との結合であらうか。若し然りとすればそれは既に感性でも悟性でもないであらう。即ち非感性的直觀であらう。言ひ換へれば感覺と意識との對立なくして、而も豊富なる内容を把握する力であらう。

原始的な生産的な想像力であらう。而してこの想像力は知的直觀或は直覺的悟性と名くることが出来る。物自身を把握するは即ちこの想像的直觀である。かゝる想像力を人間が有し得るをカントは認めて居つた。然れども彼はこの能力を深く探究しなかつた。唯問題として提供したに過ぎなかつた。何となれば人間の認識は證する所、凡て感性的であると信じたから。されどこの問題はベルグソンに於て遺憾なく解決された。即ちベルグソンはこの生産的な想像力即ち知的直觀を根柢とし

て、本體（實在）の形而上學を建設したのである。言ひ換へれば現象界の認識に於けるカントの理性批判に對して、實在界の認識に於ける直覺批判を創設した。而してこの本體即ち物自身をベルグソンは純粹持續と名け、直接經驗の感覺（感性的ならざる）と同一とした。故に實在は純理論のいふやうに悟性形式の抽象化に依つて到達すべき最後のものでなく、却つて感性直觀よりも前にある最前のものである。即ち悟性によつて認識さるゝものでなく、悟性認識を可能ならしむる根本である。だから直覺哲學は是迄の哲學のやうに概念から實在に行くのでなくて、實在から概念に行くのである。而してこの持續的な實在は創造的進化である。永久の傾動である。我々はこの實在の内部に透入するときは、哲學上のアンチクシーは自ら消滅する。又種々の爭論も起らないのである。之れ即ち實在から概念の世界を見るが爲めである。かくの如く見て來ると常にカントの哲學とベルグソンの哲學とは決して矛盾しないのみならず、互に和補綴して居るものである、ベルグソンに依



的に取扱つたものであるといふ評を免れない。それはベルグソンが屢々言つた如く、確かに普汎數學の枠内に進入したものである。元來形而上學は經驗を主とするから數學よりも遙かに不確實である。經驗を離るゝに従つて言ひ換へれば先驗的になるに随つて、形而上學はますます確實性を有する。故に全く先驗的判斷を爲す所の數學や幾何學に近けば近く程、普遍的客觀的妥當性を生じて来る。而してこのとは上述の論法から云へば、益々物自身を遠く離るゝに隨つて言ひ換へれば極端まで象徴を押しつめて行くに隨つて、それは數學的となり先驗的普遍的となる。而してその到達した所は純粹の現象界である。即ち實在から最大の距離の所にある世界である。

#### 四

若しカントの哲學が全然現象の形而上學、即ち象徴論であるとすれば、それは物自身を把握するベルグソンの實在の形而上學とは、殆んど雲泥の差異があるやうに思はれる。カントの哲學はベルグ

ソンの爲めに全くその價值を失つたかのやうに思はれる。然れどもこは大した差異はない。むしろベルグソンの直覺哲學はカントの理性哲學の上に於て初めて建設さるべきものである。若しカントが「純粹理性批判」に於て、悟性作用を現象界に限定し絶對認識の僭越を抑遏しなかつたならば、ベルグソンは直ちに直覺哲學を創建し得なかつたらうと思ふ。經驗論や純理論に對する建設の事業は、カントもベルグソンも略ぼ同一である。唯前者は消極的に後者は積極的に建設した迄である。

カントが形而上學を純粹の象徴論となしたのは、決して世界を現象界のみと思惟したからでもなく、又直接經驗を無視したからでもない。彼はベルグソンと同じく經驗論も純理論も共に認識論上不完全であるとして、それ等を超越した原理を發見したのである。經驗論が心理狀態を分析して認識の進化的過程、即ち發生の研究から實在を説くの妄なるを看破し、純理論が概念的認識から實在を説かんとするの非を辨駁し、我々の悟性認識は資料として感覺を要するけれども、それを規定するは全く先驗的判斷であるとして價值の觀念を入れ、而して判斷の可能な範圍は現象界のみであるとした。出發點としての直接經驗の感覺も、到着點としての物自身も共に認識論上の限界概念であつて、何等の内容も供給するものではない。唯それ等は消極的に思惟さるゝに止まつて

認識とはならない。斯くの如くカントは資料としての感覺と本體としての物自身とを認めて居るが、その性質に就ては少しも言明しなかつた。蓋し思料がなければ悟性認識が不可能となり、物自身があれば世界は現象界のみとなつて了ふ。何等の實質も根柢もない數學的世界となつて了ふ。だから勿論之等を否定するとは出来ない。唯限界概念として立し得るのみである。

然らばカントは何故に直接經驗たる感覺と物自身（この二つはつまり同じもの）とを認識論上の限界概念としたか。彼は何故に人間の認識能力を悟性のみに限定したか。この問題の主意はベルグソンと全く同一であつたが、カントとベルグソンとは反對の方向を取つた。即ちカントもベルグソンも哲學上の種々なるアンチノミー（二律背反）を防遏せんと苦心した結果、カントは悟性の獨立を主張し、ベルグソンは直覺の絕對を主張した。蓋し何れにしても同一の旨意に外ならない。即ち悟性の獨立は直覺の絕對を暗示し、直覺の絕對は悟性の獨立を豫想してゐる。（こゝに獨立とは現象認識の獨立）。何となれば悟性の認識を現象界即ち象徴界のみに限定し、その實在把握の不可能を認めた點に於てカントもベルグソンも全く同一であ

るからである。更に言ひ換へれば悟性の獨立は、直接經驗乃至物自身を限界概念とし、その積極的認識を全く他の異つた能力（もしありとすれば）に委せて、自らは謙遜して現象界に止まつた爲めに、ベルグソンの直覺の絕對は初めて可能となり意義あるに至るのである。ベルグソンはカントが悟性の外に認識能力を否定したと非難するけれども、絕對に否定したわけではない。蓋し哲學上の二律背反を防遏し悟性認識の成立を可能ならしむるには、何うしてもカントは悟性の獨立を主張せざるを得なかつた。而して悟性はその先驗判斷の性質上、物自身に對してはそれを限界概念と爲さざるを得ないのである。茲に悟性の獨立とは現象界の認識に於ける意味であつて、他に物自身を把握する能力を否定する意味ではない。假りに直覺なるものがあつて實在を認識したとしても、それを我々の思惟認識とするものは、矢張り悟性であるとしたのである。

ベルグソンは之に反して二律背反を防遏する爲めには、悟性の獨立よりも直覺の絕對を主張する

べきもの（所與）、それは非常に細微で殆んど思惟するとの出来ない直接の經驗を研究せねばなるまい。

### 三

カントはこの直接に經驗する感性内容を深く考究しなかつた。否殆んど彼はこれを不問に附して居つた。勿論それは我々の認識對象とならない、言ひ換へれば思惟の形式に這入つて來ないからでもあらうが、兎に角存在するとだけは事實である。

この點は普通の哲學者よりも却つて一般人の常識の方がより理解してゐる。カントも亦この直接經驗を認めて居つた。けれども彼は悟性の獨立を高調した爲めに、その内部に深入りするとが出來なかつた。單に物自身として我々の認識の限界としたのである。故に彼はこの經驗内容の存在を認めたとに依つて、單に形式的概念から實在を説明せんとする所謂純理論の弊を脱するとが出來、他方には經驗論の眞理を採用し得たのであるが、この直接經驗たる物自身を認識の限界概念となし、悟

性に從屬する感性形式から研究を始めた爲めに、矢張り經驗論の眞意を體得出來ないで純理論の範圍内に止まつて居たやうな感じがする。だからカントは先驗的な形式の資料として感覺を認めたが、その感覺は既に理知化せられ概念化せられたものである。而して彼は悟性と感性とを對立せしめたが、それは根本的に異なるものでなくむしろ感性は悟性に從屬したものの、悟性の低級の作用として存するものである。言ひ換へれば感性の作用たる直觀<sup>アンシャウング</sup>は、物の性質を如實に把握するものでなく、悟性作用の對象となるべき物の形式（即ち數學的形式）を構成するものである。故に直觀は思惟作用の第一歩といふことが出來やう。その形式（即ち時間空間<sup>ツァイトraum</sup>）は勿論物又は物の性質ではなくして、物の量の關係である。その外面的皮相である。それは決して形而上學の對象となるべきものではなくて、科學や數學の對象となるべきものである。だからカントが獨立の先驗形式とし、思惟の構成した概念でないと言つた時間及び空間も、矢張り結局我々の思惟の作用であると主張する、現代獨



逸のマルブルヒ學派の説は正當であらう。ベルグソンも亦同一の批評を下してゐる。即ちカントの所謂直觀は直接經驗ではなくて、認識の對象としての理知的經驗である。言ひ換へれば、感覺的直觀或は、理知の範圍に屬した直觀 (Sensuous or intellectual intuition) である。決してそれを超越したものである。故にこの直觀を根柢とする科學は、凡ての部分に於て同一同質の客觀性を示すのである。それは實在又は生命を擯して居らぬ。生命を把握する直觀は、非感覺的或は理知の範圍を超越した直觀 (Suprainsensuous) である (Creative Evolution, P. 380)。

カントの直觀は感性的であつて物自身の内部に滲透する直覺でないことは、ベルグソンの評した通りである。而してこのことはカント自身も確かに認許する所であらう。何となればカントは物自身を我々の認識生活の限界概念としたからである。言ひ換へれば直觀は物自身又はその性質を捕捉するものでなく、物が我々の感性内に現はれた形式の意識である。則ち本體ではなくて現象で

ある。更にかゝる直觀を抽象化し關係化する悟性は、たゞ現象の世界則ち我々の心像に現れた寫象の世界のみを規定するものであつて、物自身の體系を規定しないのである。だからカントの先驗的といふのは即ち現象性といふ意味である。それは全く同一意義の交互概念 (Wechselbegriff) である。カントの意に依れば物自身の内容を經驗するものは、決して先驗的普遍的ではない。先驗的普遍的でない限りそれは形而上學の認識對象とすると出来ない。故に形而上學の對象たるべきものは、唯物の現象即ち先驗形式のみに限るのである。悟性はたゞこの形式のみを取扱ふ。

カントの哲學は以上の如しとすれば、それは實在の形而上學でなくて自然界の形而上學、即ち科學的形而上學であることは明白である。カントの立場からすれば物自身たる實在の哲學は、到底積極的成立の理由を有せない。それは消極的に假定するのみである。ベルグソンの語を藉りて言へば、カント哲學は徹頭徹尾形而上學的象徵論ともいふとが出来やう。兎に角物の表象たる形式のみを數學



等かの歴史的意義を發見し得る我々は、全然歴史上に別種のものと思惟することは出来ない。然るに或種の人々は、ベルグソンを以てカント以上の大哲學者となし、カントが非常の努力で大成した理性批判の哲學を根柢から破壊して了つたかの様に考へて居るが、果してそうであらうか。カントの哲學はベルグソンに破壊せらるゝ程、そんなに無價値な薄弱なものであつたらうか。たとへベルグソンの爲めにその根柢を轉覆されたとしても、それが爲めに歴史上全く價値がないと云ひ得るだらうか。勿論ベルグソンはカントに比して觀察は豊富、論法は銳利、根柢は堅固であるかも知れぬ。彼は確かにカントの深く意識し考察しなかつた所を、より明瞭に認識して居る。併しそは工夫に於て一步の進境があるといふ丈けて、全然嶄新であるといふ意味ではない。唯ベルグソンはカントを根柢（語弊はあるが）とし、カントが臆ろげに意識して居つた思想を深く探究して、それを明かに表現したといふに過ぎないではあるまいか。尤もこれに到達するには廣い科學的根據もあつたとであ

るが、たゞ是れだけでは所詮駄目である。カントがその楷梯となり指針とならなかつたならば、ベルグソンはその哲學を建設し得なかつたらうと思ふ。

ベルグソンはカントの批判哲學を重く見てゐない。のみならず獨斷論や懷疑論や觀念論等と同一の價値に引き下して居る。何となればカントの哲學も是等の哲學説も、その到達した結果に於ては全く同一であるからである。即ち『かの懷疑論や觀念論や批評論等凡て吾人の知力は「絶對」に到達する能力なしとする學説は、畢竟たゞ概念の固定性を以て實在の動性を再構成するとの不可能なるを證明して居るだけである』（An Introd. to M. P. 39）。この見解から見るとカントの「理性批判」も同じく、是等の學説と同一の假定（そは形而上學的根據としては全く謬見）を有してゐる。『流動的實在を把握するには、固定の輪廓を備へた概念を以て出發しなければならぬ』といふ假定が即ちそれである。故にカントもあの時代の謬つた科學的思想の影響に由つて、『我々の知性（即ち悟性）はたゞ

先驗的な形式の内へ、一切の可能的經驗を詰込むとの外に何事も爲し得ぬ』ものと考へたのである。その結果は形而上學の成立に對する懷疑又は否定となり、プラトーンのイデイの哲學を普汎數學的性質のものに改譯する必要が生じたのである。だからカントの「純粹理性批判」の我々に教へる所は、つまり次の事に過ぎない。『即ちプラトーンの觀念を物とすれば不正當だが、之を關係と見るときは正當である。而して斯くの如くして一度び既成の觀念を天界より地上に引き下すときは、プラトーンの主張した通り、夫は確かに思惟及び自然の共通基本である』と(An Introd. to M., P. 72)。

このカントに對するベルグソンの批評は當つてゐる。結局我々の悟性が實在捕捉の能力ないことを證明したのである。即ち他の凡ての學說とその結果に於て大に優る所も見えない。併し之が爲めにカントの哲學を無價值となし、他の學說と同一に見做すとは果して正當であらうか。たとへ結果に於ては同一であるとしても、その認識の過程中に何等かの價值又は暗示がないであらうか。カント

はベルグソンの評した通り悟性の絶対認識を否定したと同時に、他の別種の能力をも絶対的に否認したのであらうか。言ひ換へればベルグソンの言ふやうな直覺の存在を全然否定したであらうか。之は一考を要する問題である。カントは經驗論や純理論と同一の結果に落着いたとしても、そは他の無意識的に或は偶然的に到着したのとは違つて、自ら意識的に即ち批判的にかゝる結果を限定したのである。自ら限定する以上は胸中何等かの精算がなければならぬ。そは今我々が深く鑿穿する必要はないが、兎に角カントは意識的に悟性の絶対認識の不可能なることを認めたのである。されど彼は本體となるべき「物自身」の存在は否定しなかつた。これは確かに矛盾であらう。然れどもこゝに問題の解決はあるまいか。カントはこの矛盾を脱却する爲めに意志の要求から説明しやうとしたが、遂に認識論の範圍外に脱線して了つた。要するに意志の要求といふとも、純粹に主觀的のものといふとは出来ないから、再び認識論の範圍に歸つて悟性作用の材料となり要求の根源となる

# カントよりベルグソンへ

野村 隈 畔

## 一

先年來朝された獨逸のヤコビ博士は、『ベルグソンとシヨウベンハウエル』といふ題で、統一教會の「オイケン研究會」に於て講演されたことがあつた。その講演は三並良先生の翻譯に依つて本誌昨年の三四兩月號に連載されたのであるが、予はその時非常の興味を以て博士の講演を聞き、且つその譯文を熟讀した。殊に博士がベルグソンとシヨウベンハウエルの言葉を一々引用對照して、兩者の相似を論せられた點は面白く讀んだ。併しこの講演に於ては唯學說や比喻の用ひ方の似た點のみを主として述べられたもので、學說上の深い系統に就ては餘り論及せられなかつた。唯ベルグソ

ンは嘗てシヨウベンハウエルの哲學を熟讀したとあり、且つその師ラヴェソンを通してシエリングの哲學に私淑したとや、シエリングとシヨウベンハウエルとは共通の根本を有すといふ點から、多少歴史的關係を明かにされたのであるが、猶深く根本に這入つて純哲學史の上から、問題の系統的關係を論ずる迄には至らなかつた。予はベルグソンとシヨンペンハウエルの相似點のみならず、その差異點をも詳しく説明し、且つ一步遡つてカントとベルグソンとの比較を試みられたならば、一層興味が深かつたと思つた。而して單に相似點や差異點を敘述するとも面白い研究ではあるが、問題の史的研究は殊に必要であると思ふのである。

予はベルグソンは果してわが國の元良博士のやうに、カントの『純粹理性批判』を二十回も繰返して熟讀したか何うかは知らぬ。隨つてその影響はいかなるものであるか、或はカントとベルグソンの間には如何なる師弟關係の歴史があつたかは知らない。併し哲學史の上から見るときは、言ひ換へれば哲學問題の歴史から見るときは、カントとベルグソンの間にはショウペンハウエルに於けるよりも、もつと深い關係があると思ふ。ベルグソンの哲學史上に於ける位地の確定には、いろいろ複雑した條件もあるだらうが、要するに根本の條件はカントとベルグソンとの哲學史的關係の如何にあると思ふ。我々は假りにショウペンハウエルの哲學を忘れたとしても、ベルグソンの哲學とカント以前の哲學との關係を知るに左程困難ではないが、若しカントの哲學を抜きにしたならば、その以前の哲學とベルグソン哲學との關係、及びベルグソンがカントの理性批判に満足出來ないで、新たに形而上學を建設した理由が全く理解し得なくなるのである。

勿論歴史を超越して否それを無視して、ベルグソン哲學を偶然に發明された獨得のものとして解するときは格別であるが、斯ういふ獨斷をさけて眞實なる發達の意味を知らうとするには、何うしてもカントとの比較研究を蔑視することは出來ない。況してヤコビ博士の謂つた如く、『ベルグソンはその精神生活に於て既に遠くに或は近くに發見さ

れたもの、或は發見されやうとして居つたものを發見して、より詳に且つより明かに説示したものに過ぎない』とすれば、猶更その歴史的發見が必要となつて来る。しかし此にはベルグソンの哲學史上に於ける地位を決定しやうとするものでもなく、亦カントとベルグソンとの詳細な比較研究をやらうと欲するのでもない。かゝる大なる試みは時間の餘裕がないのみならず、第一予の研究そのものが到底堪へ得ない所である。唯極めて大まかに兩者の史的關係の一端を述べて見たいと思ふのである。

## 二

若しベルグソンが過去に何物も比較さるべき者のない程、全然嶄新なる哲學を產出したとせば、是れ全く哲學史上未曾有のことと甚だ不可思議な現象である。ヤコビが言つた様に、斯ういふことは到底考へ得ないことである。たとへばベルグソン自身が人間の認識的生活に、絶對の價值を有する哲學を創設したと確信し得ても、その哲學に何



他人の爲めの活動に集中されて居る。然るに斯種の活動は人の靈魂の爲めよりも寧ろ其の外部的幸福の爲めである。——即ち生活其の者の爲よりも

寧ろ生活の境遇の爲めである。内部的諸問題は單に第二義的に考へられる事多く、且全體としての人格は動もすれば無視される。斯種の社會道德は、人間社會に好意といふ者の存在する事、而して此は外的活動に依つて發達する事を信ずる、且つ始めから道德なる者の存在を豫想して居る。さうながら、それは内部的苦悶を鎮靜し得べき何物をも與へぬ。又人心に存する暗黒なる、粗暴なる、且つ熱狂的な分子を征服し得べき何物をも與へぬ。更に此の種の道德は如何なる葛藤と熱望とが社會的生活よりして必然的に生起するかを十分に理會して居らぬ。即ち勢力と權威との爲めの争闘、虚榮、及び不眞實が直ちに社會の各人の間に生起する事を無視して居る。社會道德は甚だ樂天的な人間觀を與へるけれども、屢々經驗に矛盾する。従つて社會道德の功績は或る特殊の點に於て如何に偉大であつても、問題の取扱法が餘りに淺薄であ

る。それは道德に對する何等確固たる基礎を與へぬ。且つ道德を創造せずして寧ろ豫想して居る。

要するに、今日の道德は甚しき混亂と多くの葛藤とに掩はれて居る。別々の發展はあるけれども、其等が互に相交又し且相反對して居る。或種の道德が其の主要なる原動力となす者も他種の道德に取りては單なる弱點と思はれる。舊式道德の内部的精神的特性は新式道德に依つて主觀的空想として否認される。而して後者の間斷なき活動は其の反對者に取つては單に外部的事業に對する集中とよりは思はれぬ。全體としての生活が其の最深なる方面に於て不安定な者になつた。吾人は最早外部的生命より來る道德的衝動を以て満足せぬ。吾人は互に他を妨害する事に依りてのみ自己の特色を完全に發揮し得るが如き諸道德、即ち絶對的に相違せる諸道德の間に彷徨して居る。斯くては全人生に對する道德の勢力は必然的に減殺されざるを得ぬ。従つて反道德的運動に對する攻撃は減退し、其の種の運動は淺薄なるにも拘らず地歩を得て來る。是に於てか、嘗ては人類の疑問なき所有

たりし道徳も一個の難問題たらざるを得ぬ。今や道徳は其の高御座より人間を支配せずして、却つて人間の意見と選擇とに服するに至つた様である。

斯くの如くにして生起せる事態は益々堪へ難き者となる。道徳の力が微弱になれば、人生は有力なる衝動と向上力と統括的目的とを失ひ、且つ內的無意義及び解體の危険に陥る。即ち人生を維持して活潑健全ならしめる鹽分に欠如するが故に、外部は如何に華美を極むるも、内部は廢頽を以て襲はれる。吾人にして若し全力を揮つて此の危険

に抵抗しようと思はゞ、科學の應援に依つて、現代の特徴たる不安と無集中とに打ち勝ち且つ道徳全體に對して十分なる承認を與へなければならぬ。而して之が爲めには、依つて以て首尾能く此の解體を食ひ留め得べき見地を發見する事が最も肝要である。

されば吾人は第一に、如何にして斯る見地を得べきかを考察しよう。

(譯者附記。右は遠からず單行譯書として出版せんとするオイツケン著『倫理と現代思想』の第一章也)

業はすべて個人意志を抑壓し且つ破壊をさへ試みるだらうけれども、どういふ心持で其の事業を成すか、即ち事業に對する愛情に依るか、それとも、賤しい利己的動機に依るか、明に問題である。どんな小人でも、最大なる工業的技倆を有し得る事勿論である。而して事業は成功を目當にし、事業家は其の成功の如何に依つて判斷される。即ち事業家の内部生命と全人格とは不問に附される。吾人は單に一組織體の部分に過ぎぬ、吾人自身は何物でも無い。而して事業が専門的になればなる程、又個人の能力の狭小なる部分を働かす様になればなる程、益々左様である。加之、斯くして成立せる團結は單に其の共同事業に限られて居る。人々は其の事業に依つて如何許り密接に團結するにしても、個々人の主義及び信念は、よし絶對的に相反せぬ迄も、甚しく相違し得る。今日の人々が互に黨派を結んで相敵視するは、主として社會問題に於てである。而して特定の一面——即ち事業の點に於ては、生活の倫理的發展を見得るけれども、吾人は其處に正義及び人道の内部的基礎を掘ゑる

事を得ぬ。此種の道徳は内部的の溫みを欠くが故に、全人格に訴ふる事を得ぬ。

此の點に於て社會道徳は事業道徳に優る事萬々である。何となれば、社會道徳は人と人との直接關係より起るからである。茲にても亦昔から知られて居る者が、唯新しき形式と、強き勢力とを得たのみである。人は特に其の活動を及ぼす同胞との關聯に於てのみ發展する事を得るとは昔からの信仰である。併し現代思想——即ち人と人とは不可見の世界に對する共通關係に依つて（神若くは一切を貫く理性の支配に依つて）ではなく、唯經驗世界に於て現に營みつゝある共同生活に依つて結合されて居るといふ現代思想に依つて社會の觀念は改造された。而して斯る現代思想の指示する所によれば、個々人は單に其の生活過程に於て相會同するのみならず、寧ろ最初から互に相依屬する。即ち他者との共同生活は各人に取りて根本的に必要な事である。而して現代の社會學は、無數の統計に基きて、個人の性向及び幸福が全體の事情に依屬するの消息を明にして、大に如上の觀念



を發展させた。社會學は一切の進歩は——個人に取りてさへも——社會全般の改善と不可分離なる事を證明せんと試みる。従つてそれが努力の主要目的は社會全般の改善である。且つ、現代の社會學は萬人の生活及び行爲の連帶性を主張する。斯くの如くにして個人は、自己の個人的利害を超越して、全體の幸福の爲に努むべき活動に對する有力なる動機を得る。且つ他者の幸福の爲めの事業——利他的行爲に於て人生最高の價值を發見する事に對する有力なる動機を得る。

傳來の社會的生活の形式は根本的に變化する事を得べく、否變化せねばならぬといふ信念の勃興に依つて、如上の社會的倫理は一層の發展を遂げる。以前には、社會組織は特に貴族的性質を帶び、生活指導の權は少數者の手中に存した。少數者のみが充分に一切の能力を發展し、且つ十分に地上の財貨を占有する事を得、一般人は單に其の一部分を享受し得るのみであつた。然もそれさへ恵まれたる少數者の恩恵であつた。而して此の區別は神意若くは不思議なる運命の結果として嚴存する者なるが故に、到底人力を以て之を變更する事は不可能だと思はれた。然るに自己の能力を自覺せる現代人は、決して此等の事實を不可變更だとは思はぬ。斯かる區別を滅却し、『すべて人面を有する者』(『フイヒテ』)をして生の享樂と事業とに參與せしめん事は、誠に現代人が壯美なる事

業となす所の者である。

吾人は今如上の問題を一切の方面より解決し盡すの可能を論じようとも思はなければ、又此の問題によつて生起する諸の葛藤を討議しようとも思はぬ。然しながら吾人は斯種の運動の有する有力なる倫理的刺戟を否定する事を得ぬ。即ち弱者を強くし、向上的精神を鼓舞し、不正義に反抗し、出來得る限り不幸を根絶し、且つ人生の幸福を増進しようといふ熱望は斯種の運動の結果として起つた。吾人は茲に豊かな溫みと力と、強き責任の感と、且つ他人の權利に對する認識とを發見する。如何なる他の道徳力も社會的觀念ほどに強く今日の人々を支配するものは無い。此の事は立法に於て、教育に於て、且つ人と人とのあらゆる關係に於て皆左様である。此の觀念は利己主義に反抗する。而して世界歴史の如何なる時代に於ても嘗て見られなかつた程に、多くの人道的行爲を生んだ。

併しながら斯程まで嘆美すべきにも拘らず、茲にも亦內的缺陷の存在は明である。生活も道徳も



的感化が薄弱になつて來て居る。加之、宗教的道德の性質及び要求に對して多くの反對論が提供される。人の努力と其の境遇との密接なる關係の故を以て、且つ生存競争の高調の結果、斯種の道德は餘りに穩和、餘りに軟弱、且つ餘りに主觀的だと思はれる。従つて屢々一層嚴酷なる且つ男性的なる道德に對する要求が起る。即ち宗教的倫理は全人生を改造するに足る丈の力を有するとは思はれぬ所よりして、何者か其れを補ふに足る丈の者に對する要求が勃興するのは當然である。

すべて高級なる文明の時代に在りては、宗教道德は理性道德に依りて補足せられ且つ完成されて居る。而して理性道德は主として哲學者、即ちストア派乃至カント及びフイヒテに依つて開展された。此處にては道德は超越的神意に發せずして人間自身の合理性より起る。而して此の合理性は人をして一個の普遍的法則を認識せしめ、且つ自覺的に其の法則に服従せしめる。斯くしてのみ人は完全の域に達する。而して此種の道德は強くて男らしい。且つ自尊獨立の精神を勵まして遙に日常

平凡の生活を超越せしめる。道德的思想の科學的發展、及び本務若くは良心等の諸概念の明確なる構成は實に此の理性道德の賜物である。而して此等の諸概念の故を以て理性道德は依然として現代をも支配して居る。併し啓蒙時代に於けるが如き主導的地位を占めては居ない。理性を以て精神生活の確固たる基礎となす思想は最早一般には採用せられぬ。且現代人に對しては殆んど勢力を有せぬ。現代人は官能世界に對する自己の從屬（自己は官能世界の一部である）を意識する事餘りに深きが故に、全然官能世界より脱却して自己の優等能力を主張する事を得ぬ。理性的人生觀は強い自我中心の人格には適はしからうけれども、現代に於ては其種の人格は甚だ稀である。

若し道德にして不可見の世界に對する信仰より分離する事が出來なければ、——宗教道德にしても理性道德にしても——その現代の諸運動及び諸問題に密接する事を得ぬ。然るに人生最近の發展は現實可見の世界より得たる貴重なる動機を道德に供給し、且つ特種なる新道德形式をさへ造るに至つた。而して其の動機は一方現代の事業より、他方現代の社會より起るのであるが、兩者とも何も新しき力をあらはしたのでは無く、唯現代的生活の事情よ

りして著しく其の意義を發揮したのに過ぎぬ。

すべて眞に眞面目な事業は其の目的に徹底せんことを欲する。そは其の目的を目的自身の爲に尊重し、且つ其の目的を取扱ふに目的自身の要求に依らんことを求める。従つて人は自己の個人的私見及び性向を超越する。事業は近代に於て始めて、教育及び道德的修養の要素としての完全なる發展を遂ぐるに至つた。何となれば今や事業は漸次個人より獨立するに至つたからである。そは全人類共通の問題となりつゝある。且つ事業其れ自身の大なる複合體が出来つゝある。例へば現代の科學は即ち斯種の複合體である。そは最早個々人の力に依らずして、それ自身の力に依つて構成される。科學は個々人の果すべき事業の道程及び方法を命じ、問題を提供し、且そが解決の手段を示す。即ち全體の運動より分離しては、個人の努力は無効である。全體の運動に参加するといふ所に人生は明瞭なる論理的性質を帯びる。何となれば、個人は全然自己を全體の要求に服従せしめなければならぬからである。個人は自己の意志及び欲望に

關する一切の事物を抑壓せねばならぬ。個人は自己の努力は人類の努力の總和の部分なる事を感じ、且つ其の總和を増進する事を以つて自己の最高満足としなければならぬ。個々の勞作者は來り且つ去らうけれども、代々の勞作に依りて、宏大的なる科學の堂宇は絶えず大きくなりつゝある。ベコンが言へる如く、『多くの者は過ぎ去らん、去れど科學は生長せん』。

科學に於て眞理なる事は人生の他の方面に於ても同様に眞理である。即ち現代は偉大なる複合體を各所に勃興せしめ、其等の威力を以て個々人を掩うて居る。此の事は特に工藝事業に於て左様であるが、更に國家組織に於ても、學校其他の教育事業に於ても同様である。而して凡て此等の事業は、要するに、文明及び教化と稱する包括的概念——即ち人は其の事業に依つて世界を超越するといふ觀念に於て相一致する。

斯くして強き道義力の茲に生起する事は當然である。而して此の論理的要素なくしては、即ち絶えず全體に参加し、服従する事なくしては、現代文明は決して今日の如き發展を遂ぐる事を得なかつたのである。然しながら吾人は事業道德が内的制限を有するの事實を否定する事を得ぬ。成程工

き自己脱却の可能を疑ひ、且つ自己保存の本能を承認するの傾向が存する。従つて此の種の壓迫よりの脱却は望まじき者とは考へられぬ。何となれば不斷の争闘と競争とは生命と進歩との爲に必要なる者であり、且つ此種の争闘の緩和は必然的に生命力の消耗だと考へられるからだ。

道德は更に行爲に對して、自主的且つ自發的ならん事を要求する。外的壓迫若くは器械的習慣の下に爲されたる行爲は直ちに其の道德性を失ふ。而して自主と自發とは或種の自由選擇を離れては成立し得ぬ。然るに此は現代に於て一般に全實在の支配者だと考へられて居る因果律と矛盾する。因果律が人心を支配するの事實は遺傳及び社會的環境遇の勢力の洞察に依りて益明かになつて來た。而して人間が自發的且つ自主的決斷力を失ふと共に、舊道德も亦其の存在を失ふ。

又、道德は、現代生活に在りては、そが以前享受したる地位と評價とを維持する事困難である。

以前には道德は常に獨特の意義を以て装はれ、且つ内部生命のあらゆる他の顯現以上の地位に置か

れた。而して此の確信は重大なる歴史的意義を有する時代に於て最も強く顯はれて居る。『人若し全世界を得とも、其の靈魂を失はば何の益あらんや』てふ基督の言は何人も承知して居る。同じ信念が最も偉大なる古代哲學者と最も偉大なる近世哲學者、即ちプラトールとカントとに依つて哲學上の言葉で言ひ顯はされて居る。プラトールは曰ふ、『地上地下一切の黄金も徳より尊からず』。カントは曰ふ、『若し正義滅亡せんには、人は此の世界に住む要なからん』。

道德的行爲の絶對的優越性に關する如上の信念は、吾人の内部生活に階級を劃せん事を要求するけれども、是れ現代生活の許さざる所である。何となれば現代生活は一切の向上心と努力とを生活過程促進の目的に従屬せしめるからだ。あらゆる行爲は此の目的に達する手段として評價される。

従つて道德も人類の幸福の手段としてのみ存在し得る。然るに道德に對する斯種の侮辱は道德の絶滅を意味する。尤も現代は全然かゝる反道德的運動に依つて支配されては居らぬ。單に二三の思潮



が絶對的に倫理的要求を否定しやうとして居るのみだ。若し今日、道德にして一層確實に建設され、且一層明瞭に組織されたならば、如上の思潮は決して今日の如く其の勢力を得、且つ流布する事を得ないだらう。道德の敵をして益々増長せしめるものは、道德的諸理想（未だ曾て今日の如く強く認められた事の無き諸理想）の間に於ける結合の缺乏である。

時には互に相交又し且相反抗するけれども、今日吾人の遵奉すべき道德は少くも四種類ある。即ち

宗教道德

理性若くは内在的觀念論の道德

事業道德

社會道德

宗教的道德及び理性道德は前代より傳來せる者で、内的思想世界より起る。事業道德及社會道德は現代の特産で、現實可見の世界に於ける事業の結果である。而して下に説明する如く、古風の兩道德形式と新式の兩形式とは互に相對應する。

最も有力なる道德は依然として宗教的道德——吾人に取りては、基督教と連結されたる道德、即ち倫理的救済の宗教である。世界を超越せる神意に立脚する基督教は、道德的行爲を以て、人間の

勝手な選擇や目的よりも遙に高遠な者とする。基督教は全然道德的行爲を一切の自然的性向と區別し、且つ一切の外的行爲より引き離して、純然たる精神的性質の者とする。基督教は人の運命を其の道德的本務に對する態度と關聯せしめる事に依りて、行爲に對する最も有力なる衝動を供給する。而して基督教の有する覺醒力と向上力とは個人的範圍に止まる者でなく、廣く人類の大社會にも實現されて、其處に一種の精神的氛圍氣を生ずる。而して假令個人の靈魂は其事を意識せぬにしても、此の氛圍氣は依然として力強く個人の靈魂の上にも作用する。斯の如くにして宗教道德は今も猶ほ吾人の上に勢力を有する。一切爾他の道德は斷へず宗教道德に依つて補はれ且深めらるゝ事なくしては、其が現に有する力をも失ふ。

然しながら、吾人は今日宗教道德の優越性が屢々論争されるといふ事實を無視するわけには行かぬ。人間が宗教の世界に依つて包圍されるといふ事は最早當然の事では無く成り、従つて其の道德



# 重要なる宗教及哲學書

Atkinson, L. W.—The Story of Paul of Tarsus. A Manual for Teachers. 1910.....	2.00
Atkinson, L. W.—The Story of Paul of Tarsus. Directions for Home Study. Paper.....	.50
Bate, J.—Cyclopaedia of Illustrations of Moral and Religious Truths. Alphabetically arranged. 15th Ed. ....	3.75
Bergson for Beginners. A Summary of his Philosophy. With Intro. and Notes by D. B. Kitchin. 1913. ....	2.50
Burgess, I. B.—The Life of Christ. For the Use of Classes in Secondary Schools and in the Secondary Division of the Sunday School. ....	2.00
Burton, E. de W.—Four Letters of the Apostle Paul. A Short Course. 1908. paper. ....	.55
Burton, E. de W.—The Founding of the Christian Church. 1904. paper. ....	1.00
Burton, E. de W.—Studies in the Gospel according to Mark. ....	2.00
Butterfield, K. L.—The Country Church and the Rural Problem. The Carew Lectures at Hartford Theological Seminary 1909.....	2.00
Carver, T. N.—The Religion Worth Having. 1912. ....	2.00
Chamberlain, B. H.—The Invention of a New Religion. paper. ...	.15
Chamberlin, G. L.—The Hebrew Prophets or Patriots and Leaders of Israel. ....	2.00
Dahlke, P.—Buddhism and Science. Tr. by the Bhikkhu Silacara. 1913. ....	3.75
Dahlke, P.—Buddhist Stories. Tr. by the Bhikkhu Silacara. 1913. ....	1.75
Cook, E. A.—Christian Faith for Men of To-Day. ....	2.50
Elliot, H. S. R.—Modern Science and the Illusions of Prof. Bergson. With a Preface by Sir R. Lankester. 1912. ....	2.50
Houghton, L. S.—Hebrew Life and Thought. Being Interpretative Studies in the Literature of Israel. 1907. ....	3.00
Hoben, A.—The Minister and the Boy. A Handbook for Churchmen engaged in Boy's Work. ....	2.00
Martin, A. W.—Great Religious Teachers of the East. 1911.....	2.50
Mathews, S.—The Church and the Changing Order. 1913.....	1.00
Morgan, C. L.—Instinct and Experience. 1912. ....	3.00
Roy, E. le.—A New Philosophy Hemri Bergson. Tr. from the French by V. Benson. 1913.....	2.50
Selleck, W. C.—The New Appreciation of the Bible. 1907.....	3.00
Vaughan, Father B.—Socialism from the Christian Standpoint. 10 Conferences. 1912.....	3.00
Wallis, L.—Sociological Study of the Bible.....	3.00

## 丸善株式會社

目丁四町勞博筋橋齋心市阪大  
町西上多博市岡福

目丁三通區橋本日市京東  
ル入へ西町屋麩通條三市都京



## 現代思想と倫理問題

ルドルフ・オイツケン  
今岡信一良譯

前代に在りては、道德以上に、尊く且つ確實だと思はれた者は無かつた。道德はあらゆる人生の疑惑と争闘とのたゞ中に求められたる避難所、即ち城砦であつた。而して啓蒙時代に於て特に左様であつた。人々は傳來の宗教を信ずる事漸く薄くなつたにも拘らず、一層深く道德を保持するに至つた。事物の眞髓を闡明せんとする形而上的思索及び理論的努力に對する反抗は益々盛になつたにも拘らず、依然として道德は一切の葛藤を超越せる且つ何事に對しても尊貴なる者として歡迎された。そは全人生を安定せしむるアルキメデスの樞軸と思はれた。

然るに現代に於ては、道德は如上の確實性を失

ひ、且つ現代の人心を襲ひつゝある解體の波浪に巻き込まれて居る。前代に在りては道德に對する精緻なる概念及び科學的定義が論點であつたけれども、今や道德の根本觀念其者が問題となるに至つた。『現代科學の啓示と現代生活の要求とは道德の基礎を破壊し、且つ舊き意味に於ける道德の成立を不可能ならしめゝに至つた』とは今日多くの人々の信ずる所である。舊道德は、吾人の向上心が個人的利害を脱却し、且つ何者か一層高遠なる者に歸依せん事を要求する。従つて一見善行爲と思はれる事でも、そが利己の動機より發したる場合には、最早何等の道德的價值をも要求する事を得ぬ。然るに現代生活に在りては、一般に斯の如

主筆 加藤直士

週刊

# 基督教世界

每週木曜發行  
一部 金五錢  
半ヶ年 金一圓廿錢  
一ヶ年 金二圓廿錢

◎本誌は日本組合教會出版部の經營する所なれども、同時に我邦進歩的基督教全體の機關たることを期す

◎本誌は明治十六年の創刊に係り三十年の歴史を有する基督教界最古の週刊新聞なり

◎本誌の編輯は加藤主筆の外、小崎弘道、宮川經輝、原田助、渡瀬常吉の四氏熱心其任に當る

◎好評噴々たる本誌の特長は基督教の立場より常に時事問題を評論し且つ最新の智識を以て斯教永遠の眞理を闡明するに在り

◎每號主筆の社説と、教界先輩の說教と、内外名士の論説と、新進思想家の研鑽と、清新なる文學と内外宗教界の出來事及び教勢一斑を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として、傳道用冊子として、信者家庭の讀物として、最も好適なる出版物なり

◎百聞は一見に若かず、見本は御一報次第進呈すべし

發行所 基督教世界社 大阪振貯口座 三七一

大中之阪市北區  
丁目二丁

# 祝六合雜誌四百號

辯護士  
松尾清次郎

事務所

（東京市芝區三田小山町九番地）  
電話 芝四四九七

住宅

（府下荏原郡品川町字南品川千四百七十六番地電車青物横丁下車（セームス坂上淺間臺））

每月一日十五日發行  
定價 金三錢稅五厘

勞働問題の解決の先驅者  
友愛會の機關新聞

## 友愛新報

發行所

東京市芝區新堀町卅一番地

友愛新報社

全力集中主義社 說

最新目次

- 工場勞働要義神田孝一
- 勞働問題解決の一策 油谷治郎七
- 英國ヨーク市外近郊の模範工場 生江孝之
- 法律問答 柳田國之助
- 職工生活二十年の告白 暗涙生
- 白 慟く乎、飢ゆる乎 松本雲舟
- 爲他爲我 葵々齋柏葉
- 自由文壇 鈴木一鶯
- 友愛俳句 鈴木互清
- 聯珠競技 鈴木互清
- 家庭欄
- 技術欄
- 會報
- 寫真



久津見 蕨村 先生 新著

# ニイチエ

四六判美本

定價九十錢

郵稅 八錢

最も早くニイチエを日本に紹介したる人は久津見先生なり最も深くニイチエを研究したる人は久津見先生なりニイチエを祖述してその著書の發賣を禁止せられたるものも亦實に久津見先生なりとす蓋し邦人のニイチエを解するもの先生の如きは未だこれあらざるべし本書は先生がニイチエに對する全理會を傾倒して極めて明快にニイチエの全豹を描出したる名著にしてニイチエの性格、ニイチエの事業、ニイチエの思想、ニイチエの哲學、ニイチエの世界觀、ニイチエの人生觀、ニイチエの理想の各章、爛熟の想を行るに奇峭の文を以てし人をして世界の哲聖ニイチエの前に立ち親しくその説を諦聽するの感を起さしめずむば止まざらんとす

眞人偽人

久津見 蕨村 先生 著  
定價一圓  
郵稅八錢

現代八面鋒

久津見 蕨村 先生 著  
定價八十錢  
郵稅八錢

丙午出版 雞聲堂

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副  
長ハ目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)  
(本 八九八(私宅用)

## 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

## 院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一二番

## 南湖院

河野、高橋、兩副長ハ目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後  
入院、診後應需

内ヶ崎作三郎氏著

人生と文學

定價八十錢  
郵税八錢

同

近代人の信仰

定價一圓廿錢  
郵税十二錢

小山東助氏著

久遠の基督教

定價八一錢  
郵税八錢

同

光を慕ひて

定價卅四錢  
郵税四錢

富永徳磨氏著

基督教新解

定價八十錢  
郵税八錢

同

基督教の根本問題

定價一圓六十錢  
郵税十二錢

加藤直士氏譯

我懺悔

定價四十錢  
郵税六錢

同

現代宗教哲學  
要題

定價一圓  
郵税八錢

右の外尙新進思想家、宗教家の著書尠からず。弊店發行圖書目錄贈呈いたすべければ、希望の方は往復はがきにて御申込を乞ふ。

▲發兌

東京橋尾張町  
振替東京五五三

警醒社書店

■高島平三郎先生著

菊版四百頁餘總クロース箱入  
定價金壹圓六拾錢送料拾貳錢

忽再版

心理學上  
より觀たる

日蓮上人

或人著者に向つて第二の高山たれと勸告するや余は第一の高島にして足ると答へたるもの實に著者の抱負なり著者の日蓮を論ずるや先づ心理學上より之を解剖し次いて四方八面より其

人格其信仰其特色其事業其感化及び其世界統一の理想を發揮す世の日蓮研

究者は必ず先づ此書を讀破せざるべからず

■發行所

東京麴町區平河町五ノ三六  
振替東京二〇九一四番

洛陽堂

電話番町  
四二五八



過去と未來とを生命とする藝術家が、豊富なる内的生命を有しつゝも、なほ只だ獨り現實の中に立てるは、恰も繼子の如きものである、人生の上に支配者として立つなら藝術家をして悲劇的葛藤に陥るゝものである。藝術家と雖も、生ける人間である。生きたる人間である以上、現實の世間は凡ての人に與ふる所のものを以て、彼をも亦誘惑する。生の焔は詩人の中にも亦燃ゆるが故に、孤獨の支配者として、遠く隔れる孤れ小島の殿堂の中に、美に仕ふる僧侶たるを以て満足することは出来ない。彼も亦人として、この現實の人生の中にあらんことを欲するのである。「閱歷」と題する詩にかう歌ふてゐる。

「いひあらはし難き郷愁が聲低く泣く、

人生を慕ふ我が精靈の中で泣く。

恰も大きい船に乗て、

黄い帆をあげて、西に向て、

黒ずんだ、青い海の上を、

生れた町のほとりを過て行く者の如く泣く。」

併しこの現實の人生に對する渴仰は只だ一時的

のものである。これ現實の人生は眞の人生でない、我々人間の有するものは價值あるものでないといふ根本思想に對する一種のコントラストたるに過ぎない。詩人は自らも亦凡て人生の不可抗の法則に支配さるゝものなることを知てゐる。「白き扇」の中にかういふてゐる。

「人生は其自身の中に不可抗の法則をもつてゐる。萬物にはすべて其報がある。愛の上には愛の苦痛がある。成効の幸福の上には之に到達する迄の無限の疲勞がある。判斷力が高まれば感受性がにぶる。感受性が燃えて來れば精神がすさぶ。而して全存在の報は死である。これは詩人も亦服従せざる可らざる一般人間の運命である。この人生は只だ活動寫眞に過ぎない。目の前を輕く滑り行くものである。之を攔うとしても、指の間から逝げてしまふ。我等が生ける時幸福と思ふものも、五色の燦爛たる夢より形造られたる無に過ぎない。幸福！人生！實現！皆夢に外ならない。之に反して、夢は淨化されたる現實であり、現實の眞であり、現實の美である。この人生を夢に置き換へ、夢の眞に淨化し、向上せしめて、始て平凡なもの、日常のものは、新しいもの、より大なる價值を有するものとなる。詩人にのみ聞くを許されたる人生の寶はこゝにあるのである」と。

# 平民詩人

内 畔

村 上 共

鑑 賢 著

三

ホキットマン・テニス・ローエル・ホキツチャウ・ウルツオ  
スブライアント等六大詩人の生涯と、思想と、其重なる作  
品とを丁寧で紹介し、精嚴に評論す。(各詩人肖像入)

高貴の匂を有し、平民的色彩に富める六大詩人の評論紹介は一の創作である。「平民詩人」巻中、自由の空氣、純潔の思想、清高の氣分に充ちて溢れんとしてゐる。装幀は華美を避けて、燃ゆるばかりの草色を用ゐ、價格亦平民式を失はず、晩春唯一の伴侶として此書をすゝめたい。

定價十五錢

(郵稅六錢)

カーライル

畔上賢浩譯述

クロムエル傳 下 卷

■ 定價六十錢

■ 郵稅金六錢

警

醒

社

東京 京橋

尼張町

書

店

振替東京  
五五三

く。

「我々はたゞ一の空間である。此空間の中で幾千の夢が五色の光彩を放て遊戯してゐる。恰も噴水から常に新しい、常に見知らない水滴が幾億となく迸り出るが如くである。すべて我等の統一といふものは雑色の假象に過ぎない」と。

又「皇帝と妖婦」の中で皇帝が歎じていふには、  
「朕は人間の運命を見ること、恰も噴水の飛散するを見るが如く、冷淡に平氣であるのが悲しい」と。

ホフマンスタールは「英國風」といふ小論文の中に此噴水觀を更に極端にのべて曰く。

「實際互に相連絡のあるものは世の中にならない。我々の周圍のものは凡て、浮び漂えるもの、名稱の多いもの、本質の無いものゝみである。而して其背後には實在といふ物凄い深淵が横つてゐる。凝結せるもの、與へられたるものを探すやうな人は、常に虚空を掴むに相違ない。萬物は絶えざる運動をしてゐる。然り萬物は噴水の閃が現實的であるといふ程度に於て現實的である。幾億の水滴が落下し、又幾億の水滴が新に迸り出る、あの噴水が果して現實的であらうか。我々を欺て噴水と思はせる我々の眼を以て、我々は人生を見なければならぬ。されば人間の動作活動が美であるとしても、其は幾億の水滴が一刹那凝結したやうなものに過ぎない。一度上つて又、沈んで行く噴水に過ぎない」と。

詩人は人生の上に支配者として立て、之を超越すれば人生は詩的創作の材料となるものであるが、未だこれ只に粗雑な原料たるに過ぎなくして、其自身には價值無きものである。創作的精靈が此原料に選擇を施して、然る後に始て眞正の存在物を形造るのである。彼は「詩と人生」といふ感想文の中にかういふてゐる。

「詩より人生へは眞接の道がない。人生から詩へも亦眞接の道がない」と。

又「文學雜話」の中にかういふてゐる。

「若し詩が何事をか爲し得るとすれば、其は即ち飢え渴えたる者の如く、此現實世界と夢幻世界との形象の中より、最本質的のものを吸ひ出すことである。例へばお伽話にある鬼火が、到處で黄金を見出さうと探すやうなものである。」と。

從て彼は藝術に從て、眞に現實的のもの、永存的のもの、眞の存在するものと見るべきものは、人生其の者でなしに、人生の詩的新創造であると思つてゐる。これが人生の再現人生の淨化である。鏡の中の映像となつて始て事物の本體が明になる。從て譬喩なるものは詩に缺く可らざるものにし

て、これが詩の眞髓本質である。詩なるものは譬喩的表白から成立てる一の形成物で、動作といひ、人物といひ、これ皆種々の譬喩から形造られたる一の譬喩に過ぎない。言語も亦同様である。言語の譬喩的性質を常に悟れるものは、只だ詩人のみである。詩人が譬喩を以ていひあらはすものは、決して他の方法で、即ち譬喩なしに云ひあらはすことが出来ない。たゞ人生其者のみは同じことを表白し得れども、これ只だ粗材にして價值がない。斯くの如く表白を重ずるが故に彼は又かういふてゐる。

「表白に關する知識は、人生の威力に對して、我々を慰むる。人生に關する知識は、表白の複雑なることに對して我々を慰むる。

從て表白と人生とは互に相結合したものである。これは天分に乏しきものをして益々退歩せしめ、天分に富める者をして益々進歩せしむ」

斯くの如く、凡ての事物の最善のもの、最内部的のもの、最本質的のものを詩的形象に形造る時は、「各の完全なる詩は豫感であると同時に、現實であり。憧憬であると同時に成就である。」併も此の如く觀察し、此の如く創作し得んが爲には、藝術家

は小兒の如く純潔なる眼と、公平無私なる感受性とを有さなければならぬ。「たゞ藝術家と小兒とのみが、人生を有の儘に見るものである。彼等のみは人生を全一として解釋し得る唯一の人間である。彼等のみは生と死との價值を云々し得る唯一の人間である。彼等は事物に名を與へ、又言語に内容を與ふる。」「小兒と藝術家とのみが、詩の眼を以て萬物を見るものである。此詩の眼は常に萬物を始て見た如く、わだかまりなく、鮮かに見る。萬物に伴ふて其實在の不可思議をも共に見る。小兒に取ては萬物是一個の象徴である。詩人は此象徴以外のものを見ることが出来ない。」

ホフマンスタールは斯の如き キンダーリッヒ 小兒魂を慕ふの念。「この若々しい心持に對する郷愁。小兒の眼を以て人生を見るといふ、今は既に失はれたる無邪氣に對する憧憬。單純に對する憧憬。あきらめに對する憧憬。靜かに滑り行く生に對する憧憬。」これ等のものは自分等の根本的情調であつてこれは奧太利の詩人の特有物であるといふてゐる。



然し道德の現象、即ち善なる行爲とされてある個々の行爲と文藝とは衝突する場合があるべきである。個々の道德行爲は社會の場面場面で變遷し、其の場面場面で人類の幸福となるべき行爲をして行くのであるから、今まで善とされて居た行爲も、もはや善でなくなつて居る場合に、社會は尙其を善と認めて居る。文藝家の感ずる所の美は、もつと深い根本的のものであるから、そんな個々の道德行爲に照したら相容れないものも起るに相違ない。然しそんな衝突は文藝家ばかりにあるのではない。宗教家にも哲學者にも、道德家其自身

の中にすらある。又さういふ場合には單に個々の道德に反することがあるばかりでなく、宗教の個々の觀念や習慣にも反することがある。それは構はぬ。唯だ道德の本體とでもいふべき、人類の幸福といふことには、文藝は反すべき筈のものでなく、又反してはならぬ、其は美を現はしたものでなく、眞の文藝でないのである。

私は美學や文藝には素人であるが、素人から考へた文藝對道德の問題はこんなものであらうと思ふ。

# 新浪漫詩人の人生對藝術觀

山 岸 光 宣

獨逸文壇に自然主義が全盛を極めた時に當て、シュテファン・ゲオルヂ一派が新浪漫主義の運動を起して、彼等の所謂「現實を誤解し來つた價值の皆無な自然主義」に對して、新しい感受性と新しい製作法の上に、所謂精神的新藝術を創造せんと企てた。此派が見たる藝術と人生との關係はホフマンスタールの作物に最もよく之を窺ふことが出来る。

抑も人生が藝術の内容となり、對象となるには、先づ人生が夢の中に融けて、然る後に始めて藝術の中に其影を映じ來るものである。實世間の萬事萬物が、恰も夢に於けるが如く、其醜惡を失て、而して後に始めて藝術となる。人生とか實生活とかいふものよりは、人工的の言語といふ大藝術品の方が遙により大なる價值のあるものである。詩人はすべからく此大藝術品に熱中すべきである。

藝術家としての詩人は、決して人生の中に立つべきものでない。其故に吾人日常の出來事を取扱ふ文學、傾向の爲めの文學は藝術としては價值無きものである。

又人生の傍に立て所謂傍觀的生活をなすことも時として不可なるに非るにあらざれ共、眞正の藝術家は人生の上に立て、人生の支配者たるべきである。彼がゲオルゲを評した中にかう曰ふてゐる。

「彼は人生を制御し征服した。其故に日頃擾亂に慣れた我々の感覺にも奥深い殿堂に入たやうな、落着を與へた。恰も一孤島のやうに沈黙の深淵によつて、人間の道と永遠に離れてゐる殿堂の中に我々をおくものである。」と

元來人生其物は何等固定的のもの、永存的のもので無い。掴むことも出來ず、反て絶えず交代し變化し行くものである。ホフマンスタールは屢々之を噴水にたとへてゐる。彼は「白き扇」の中に曰

る。柔和とか剛毅とか果斷とか、其所に應いて居る。其は其だけのことが分る人でなければ、見ることが出来ぬ。従つて現はせぬ。其が分つて其を現はす人がえらい。其所になると美はもはや思想である。文藝家自身の方の内に在る思想を現はすのである。其の思想のないものは現はせぬ。此れは寫生とか寫實とか云ふこととさへ同じである。

寫生寫實は成程自分の感覺する所の美を有のまゝに現はすものであらう。然し子供が移し繪を嘗めて紙に移すのとは違ふ。一體その景色なり事實なりが美しくして繪になる文になると思ふのが、既に其中に己れの思想を見て居るのである。だから既に題の選びやうに由て其人の價が分るのである。其の景色事實の中に自己の思想する美があるとして、其の美を現はす。さうでなければ其は文藝ではない。それでつまり文藝は美を現はすのであつて、其は思想を現はすのである。思想でない美はよし有ても最も劣等なるものである。

## 五 文藝と道德

美が思想に屬し、文藝は左様いふ美を現はすものだとするれば、茲に道德との關係も幾らか分つて来る。若し文藝が唯だ移し繪たるに止まり、文藝

者が唯だ刷毛たりペンたり又は寫眞のレンズたるに過ぎざる器械であるならば、其は唯だ書き唯だ作つてよろしく、何等道德など、交渉はないであらうし、道德問題などは全く問題にならぬであらう。然し以上のやうに文藝は思想である、而して思想は人格の内のものである上は、道德は問題にせぬを得ぬ譯である。もし其の人格が道德の高いものであるならば、其は人類の幸福を害するやうな事や物をば決して美と感ぜないのは明である。

其人の美と感ずるものは、道德に照してまた善なるものに相違ない。つまり美といふ形式を構成する要素の中に、初から善も這入つて居るから、全く大丈夫なのである。また物や事を見ても、之を理想化して仕舞ふ、即ち其の中に於て自己の美を觀て取るのである。だから之を現はすときには、其所に善なる美が現はれて来る。例へば獅子を畫くとする、唯だ之を有のまゝに見たら何も美はないかも知れぬ、然し美術家は獅子に於て自己の理想して居る勇氣の現はれを見る。其の目で獅子を見て之を寫す、其の爛々たる目、其の地破れの如

き口、其の焰の如き鬣など、みな其の現はれとなるので、之を左様見ゆるまゝに寫すのである。暴風雨の如きも一の大きいなる力の現はれとして之を見て書くであらう。又悲惨を書く場合は、其に耐へて居る人格の美を現はす場合もあらうし、悲惨そのものの力を現はし、敬虔の心を發揮して居るものもあらうし、或は教訓的に反省を促すやうなものもあらう。一個の裸體畫でも、そこに思想を示すのが本當と思ふ。其を唯だ思想なしに寫すから失敗するのである。私には美とはどうしても離れないやうに思はれる。美が全く客觀のものならば、或は離れるかも知れぬが、少くも文藝に顯はす美は主觀に屬するものであるから、其の品性の發露である。

然し狭い心は多くの美を見落して居る。何か一々明に實利を生ずることではなくては書くも無用の業であるなどいふやうな見解を持て居るものは、未だ以て美を語るに足らないのである。そんなことに懸念はいらぬ。唯だ自己が美と感ずるものを現はしさへすれば善い。さすれば其の中に善はお

のづと籠つて居る筈である。文藝者は天地人生に自分の思想を衣せるのである。又自分の思想せる天地人生を創造するのである。實際の虎や狼は美でないかも知れぬ、然し文藝者の造つた虎や狼は美である。其も其の筈其は虎や狼の形をした文藝者の思想だから。

惡にして美なるものがないか。若しあらば惡なるものを現はしても善い筈である。然し私は惡にして美なるものはないと思ふ。勿論品性の低い文藝者は品性の高い者から見て惡なるものを美として描いてある。然し其は致し方がない。其の本人が其の品性に由て美と感じたのである。彼は其以上に用事が出来なかつたのである。故にいくら責めた所で其の品性が變らない以上は其以上のものは出来ぬ、但し社會の幸福といふ標準から考へて、之を責める權利は社會にはある。官憲の如きものも勿論その權利を持て居る。だからそんな文藝者は社會の制裁をは受けざるを得ぬが、自分に取つて美だと思ふ所を現はしたのなら、精神的には罪はないとせざるを得ぬ。然し是は低い文藝者の事で、若し高い文藝者が惡を描くならば、其は必ず善の陰として映つたものゝ形であるから、其の暗闇たるほど、人をして惡を忌み善を念はしむる力がある。私は文藝が眞面目に美を現はすならば其は必ず道德に合つて居るし、惡なるもの其自身に美はないと信ずる。それで文藝は道德を目的として居らぬが、道德と合ふて居ると思ふ。



いふ、或る型の顔を美といふ。どうして左様いふ特殊のものを美といふのであらうか。美感の起原については色々の憶説を立てることが出来やう。

或は目の感じ耳の感じを特に刺激するものを快く感じて美といふものが起つたのであるか。左様いふこともあるに違ひない。我等は董色は目立つから美しいと感ずる、色の白い顔は目立つから美しいと感ずる。然し耳目を刺激しても天狗面をば美しくいとは感ぜぬ所を以て見ると、全く五官を刺激するから美しいといふ感じが起つたとは思へぬ。或は實用に利のあるものを自然快く感じて美といふ感じは其から起つたと考へられる節もある。

我等の一代に實利にならずとも、祖先の世に長く實利に適したものであるから、我等は自然遺傳に由て、そんなものを快く感ずるに至つて居るのかも知れぬ。美人といはれる女の事に付て考へても、或は我等の祖先が代々の經驗に於て、さういふ型の顔や容子をした女子が、何か氣前が優しいとか、惻巧であつたとか、子供が多く生れるとか、そんな事を知て來たので、無意識の内に左様いふ型の女子に付て快い感じを抱くに至つたのであるかも知れぬ。其他この種のこともあるであらう。然し凡ての美感が實利か

ら起つたとは言へぬ。花の如きは實利にならなくても美しくいと感じられて居る。或は又聯想の作用で快いと感ずることから美感が起つたのかも知れぬ。例へば知らぬ所で琴の音を聞く、曾て家に在て母や妹が琴を奏したことを思ひ出て、當時の幸福を聯想する、そこで快感を覺える、或は古都の跡に來てその消えた榮華を聯想し、一の快感を覺える。美の感はさういふ所から起るものもあるに違ひない。或は又心の統一の活動から來て居るのかも知れぬ。

我等は單調の繼續には堪へ切れぬ、然るに變化がある、我等は混亂をば厭ふ、然るに統一がある、そんなものに對して快く感ずる。其から起つたとも言はれる。然し又我等の理想に合ふ所から美を感ずる點も大いにある。今一度人の顔の美に付て言へば、其には單調でなく變化があり、變化多い中に統一がある所なども美な所以であらうが、然し我等の理想に合ふ形だから美なのである。其の理想は、動物と同じ狀態から進むだらしい人間の顔は動物と最も遠ざかつて居なくてはならぬ、さりとて全く人間らしからぬものとなつては可けない、目も鼻も口も人間らしくて其が洗練されて居なくてはならぬ、斯ういふ所にある。此の理想に

合ふ顔を美とする。此等が人が美感を有する起原であらうと思ふ。此等は皆な美の生ずる起原となつて居ると思つて差支がない。決して其の一つのみが起原とは言へぬ。

そこで人が天地の現象、人生の事實を判斷して美だとする其の心の形式は、自分の内から發する欲望や、外から來る印象や、色々の因子に由て彫り成されたものであるから、或人の美感は或る方面から來た要素を欠いて居る。人に由て美と感ずる對象が異ふ。例へば野蠻人は意匠を施した緻密な模様でもある衣服よりか視覺に識別し易い赤とか紫とかの衣服を美と感ずる。田舎者はピアノやヴァイオリンには餘り耳を傾けぬが、廣告の音楽隊でも來ると村を虛うして聞きに出る。

然らば其の差別は單に差別のみであつて、其には優劣はないのであらうか。美感にも矢張優劣があるらしい。パツと目を眩惑する色の衣服よりも、矢張其の形を非常に整へてあり、其の模様には意匠が凝らしてあり、其を着る本人との映り具合などまで一々考へて、作つてあるものゝ方が本當に美なるに違ひない。廣告音楽隊の音楽よりもピアノ、ヴァイオリンの奏曲が甚だ妙なるに違ひない。其等後の方のものは即ち人間が靈魂を働かせて作つたも

のであり、從つて唯だ耳で聞かず目で見ず、心で味ふべきものである。野蠻人や田舎者はまだ其を味ふほどに靈が作用しないから分らないのである。

それで美は思想化されたものほど高等のものであることを認める。靈の活動たる思想の多く籠つて居るほど高い。又精神の籠つた美を感得することの多く出來る程優等な人物である。

文藝家は美を現はすものだと言たが、矢張文藝家にも劣等の美をしか感得出來ず、劣等の美をしか現はせない者がある。唯だ無暗と刺激の強い色を塗り立てゝ子供や野蠻人の歡迎を受けて居る美術などは其であらうと思ふ。文學でも唯だ人間の淺い感情に訴へ、泣かせたり笑はせたりを主眼として居るものは其であらう。劇でも唯だ耳や目を惑はすに止まるものは其であらうと思ふ。靈の活動の籠つて居る美を現はすほど矢張えらいに違ひない。

例へば一個の顔を畫くにしても、或人は唯だ其の色その澤の美をしか感じないかも知れぬ。又或人は之に形の美、線や角の調和の美を認めるであらう。其だけが其の顔の美だと思へば其を現はすであらう。然し顔には尙其以上の美がある。即ち人格の美であ

仕舞つて、人類の幸福を失ふのである。それで孝を百行の本とし、其の孝を行ふ一の途として、交通の不便な時代であるから、斯ういふことを道德とした。

然し我國などは全く國柄が違ふし、其のみならず今日の如き時代に於ては、そんな事を言て居やうものなら、却つて人類の幸福を害することになる。そこで父母在す時は遠く遊ばすなどいふことは今日では善てはなくなつた。斯く道德には種類が多く、また變遷がある。

そこで一方には保守的思想は棄てなければならぬ。多くの人々は道德の箇條を以て、直ちに終局の善として仕舞つて居る。だからどういふ場合にても、何時でも、之は必ず行はなければならぬ、之に違ふものは何でも惡だと判斷するのである。

是はどこにもある。儒教の人などは論語や大學の教の箇條を、其のまゝ今日に行はうとし、其が行へないと時代を咒ふが常である。猶太教は舊約の律法の箇條を萬世不易と信じた。基督信徒も聖書の中の箇條的教訓について左様いふ風に信ずる者が多く、何事彼事聖書の句を引き出しては、行を律

し、判斷を下して居る。然しそんな筈はない。聖書の中の句と句とに既に矛盾があるものである。

基督教の道德の如きは唯だ愛を行はうとするのが根本の目的である。愛は即ち他人の幸福を求めることである。此を目的として行ふから、時には右の方の途から行爲をすることもあり、左の方の途からすることもあり、若し目的とする所を見ずして、唯だ行爲のみを見たら、全く矛盾したことであつても、一旦目的を披いて見ると、直に其が一致した行爲であることを見出だすのである。基督は決して道德の箇條を示されなかつた。唯だ愛を與へた。其の愛を時代により事情に由りて行つて行くのが基督教道德である。斯ういふ考へ方は私は先年の著書にも説いて置いたが、ホルの『教會内部に於ける基督教道德の歴史』にも左様言てあるし、ピーボディなども同じやうに考へて居る。老人などの慷慨には、昔の道德の箇條が其のまゝ今日に行はれて居ないといふことが多いが、其は無理な注文で、實は昔の道德の箇條の目的として居た善は今日は他の道德箇條を用ゐて遂げら

れつゝあるのである。だから今日の人の行爲を批判するにも、此の根本の所から觀ねばならぬ。

其と共に他方には道德箇條が永久的でないからとて、道德其物を疑ひ、道德は唯だ其の場面々々の人間の作つたもので、善といふは何も根底のないものだ、唯だ其の場面のものゝ幸福なるべき途として、其場面の者が思想し定めたる觀念の實行に外ならぬといふのも間違ひである。成程道德の箇條は浮動的であるが、其等の箇條は、其の場面の者共が、如何にせば人類の幸福になるかと考へ、其に従つて行つた行爲であるから、其の根底には何時の時代にも、如何なる所にも、人類の幸福を目的とするといふ一貫したものである。茲が道德の本體ともいふべきもので、箇條的行爲は其の現象である。其て矢張善といふものは在るのである。

道德については此れだけ考へて置いて、文藝の方に移らう。

#### 四 文藝及び美

文藝と私の謂て居るのは單に詩や美文や小説や劇やの類ばかりではない、其等をば私は矢張文學と概稱して仕舞つて、文藝といふのは、其等文學と藝術即ち繪畫彫刻建築音樂などを一緒にした名である。然らば其の文藝とは一體何か。靈の生命の發現たることは言ふまでもない。然し道德も靈の生命の發現で、道德は靈の生命が善を意志することだとすれば、文藝は其と對して靈の生命が

如何に現はるゝことであるか。私は矢張文藝は美を現はすことに外ならぬと思ふ。茲に美といふのも、凡て審美的感情を誘ひ又之を満足させるもので、其中には壯嚴といふものも滑稽といふものも含まつて居て、單に美の本部のみを言ふのでは無い。

所が此の美といふものは何か。此れが又頗る六かしい問題のやうである。然し兎に角我等が美くしいと感じ壯嚴だと感じ又可笑しいと感ずる、其の對象が美である。美は客觀的にも必ず實在して居る筈だと私は思ふ。神は無限の心であるから、美を理想して、之に従つて天地を造つたに違ひない。それで我等が感覺せずとも、天地は其自身で美なるものであらうと思ふ。然し其はどうでも可い。美は我等人類の美だと感ずる所のものである。我等の心の或る形式に合ふものを美といふのである。

我等の心に左様いふ形式が出來て居るのは何故であらうか。我等は梅の花を美といふ、春の月夜を美といふ、或る繪を美といふ、或る建築を美と



があるかも知らぬ。然し私の幸福といふのは、所謂ハッピーネス(愉快)ではない、私は寧ろ幸福といふ字を日本風の意味のものとする。即ち人類が其の生命の全部、肉體にも靈魂にも内含する力を展開して、其等の力が一として壓迫もされず埋没もせず萎微もせず浪費もされずして、全然活きて用をなすことの出来るのが私の謂ふ幸福である。唯だ快とか苦痛とかいふ感情は、實際道德行爲の目的となつて居ないし、よし又假に快感が目的であつたにしろ、其は人類の極めて幼稚なる時代に於て純然其ばかりであつたのであつて、今日の人は決して其を目的として生ぐべきものではない。そこで私等は幸福を善とするが、其は單に一個人の幸福ではない、人類の幸福である。何故一個人の幸福が善でなくして人類の幸福を善とするかと言ふに、一個人の幸福は終局的のもてない、其の證據は一個人の幸福を充たすことを目的として行動するならば、其を目的とした行動のみでは其の目的とする一個人の幸福も得られないのである。之に反して人類の幸福を求めるといふことに

なると、他をも自をも包むだ幸福であるから、決して矛盾の起らない侵されない自己の幸福も得られる。勿論人類の幸福を求めると言ふからとて、普通言ふ所の犠牲とか獻身とかを凡ての場合に振り舞はさなくとも可い。普通の場合には自己及び自己に近き者の幸福を求めることが即ち人類の幸福となることが多い。唯だ我等の目的とする所を自己の幸福より以上何物もないものとせず、其の天井を除けて仕舞つて、人類の幸福といふことを一番の上に置いて、此の全體を目的として行動すれば間違ひが無いのである。

斯く人類の幸福が善であるが、然らば其の人類の幸福とは如何なるものであるか、人類の生命の全體の開展とはどんな事であるか、此等は具體的にどんな事を目的として行動すべきかと云ふになるとまた六かしい。然し人類は歴史を持って居る。人類の歴史は人類の生命の開展の歴史である。人類は其の生命の内に含むて居るものを次第に現はして用<sup>はた</sup>らせて來た。如何にすれば人類の生命は展開するかはおぼよそ分る。我等は今日我等の立て居る所に於て、我等の考へ得る限りのものを考へ、其を實現すれば可いのである。

善が斯ういふものであるから、法律説の言ふや

うに善は神の命令でなくてはならぬ、至上命令でなくてはならぬ。則ち善は人に向つて實行を強ひ促して居なくてはならぬ。何となれば神は自分の性格に従つて天地を造り人を造り、自分の性格に従つて之を發展せしめて居る、天地の創造と發展の下に在る原理は神の性格の原理と同一である、人間の幸福といふことも其であるから神の性格の原理と合ひ、神の目的とする所であるは明である。此原理が則ち法である、人は此の法に従ふ此れ善なる行爲である。此の原理此の法律は直覺することも出来る筈である。何となれば人は左様いふ原理で出来た天地間に生れて居るのである、彼の心は生れながらにして此の原理と調和して居るから、其の意志が此の調和を保つて動く間は平安で、若し之と矛盾して動く時不安を感じるのは當然である。且又人間に遺傳もある、先祖代々行つて天地の原理と合ふ故に矛盾を感じなかつた行爲は、自然正しいと直覺されるに違ひない。

### 三 道德の箇條と道德の本體

人類の幸福が善であつて、其の善を目的として

行動することが道德であるから、道德には種類もあるし變遷もある。道德は決して單様なものでなく、又決して固定したものではない。同じ行爲をしても一は善で他は惡なことがある。互に矛盾したことであつても、共に善なことがある。或時代には善であつたことが他の時代には惡となることもある。

例へば他人に物を與へるといふことは、人類の幸福を加ふることになる場合がある、甲の人物が飢ゑて居るから食物を與へた、乙の人物が凍えて居るから衣服を與へた、丙の人物が窮して居るから金錢を與へた。皆な人類の幸福を加へた。其れて人は直ちに綜合を試みて凡て人に與へるといふは道德であると結論する。然し丁なる人物が戊なる人物を殺したいから君の持て居る毒藥を與へよと要求する。其の場合に、若し與へるとは善なる行爲であるからと謂ひ、之を與へるならば、其に由て人の命を失ふのである。人類の幸福を害する。それで同じく與へる事であつても、一は善であり、一は惡である。更に他の例を取て考ふるに、昔は父母在す時は遠く遊ばずと言つた。支那は古より一度も完全な國家といふものゝ現はれた事がないと言はれる位の所で従つて家が一番終局の完全な社會であつた。従つて家を維持し發展させることが支那人に取りては人類の幸福を致す所以であつたのである。若し其をしなかつたならば、支那人は社會といふものを全く根もなくして

## A PARABLE.

Philosophy, Science, Art, Politics, and Industry.

All these were once the passengers in a ship called Religion.

In the course of navigation, they reached an island.

Allured by its enticing scenes and tired of long sea life, they all landed.

After strolling here and there, they went in search of treasures on hills, mountains, fields, and valleys.

The crew alarmed tried to call them back, but they heard not.

At last even many of the crew left the ship and landed.

And the poor old ship was carried away by the waves.

Now the passengers, laden with various treasures, have come back to the shore, only to find their ship no more.

What shall they do?

Can they, by some means, call back the old ship that is gone?

Or must they build a new ship with new materials that they have gathered?

---

### ORTHODOXY.

#### 1.

Orthodoxy: What is the ground of its pride?

Is that revelation? Is that authority?

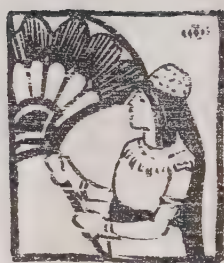
What is revelation without human interpretation?

What is authority without our agreement?

When liberal minded people renovate the interpretation, or when they deny the agreement, what follows?

#### 2.

The old persecute the new, only because the former are yet numerous than the latter.



# 道徳と文藝

富 永 徳 磨

## 一 問題の重要

道徳と文藝とはどういふ關係を有て居るものであるか、どういふ關係に置くべきものであるか。文藝は道徳の僕たるものであるか、又は相對立せるものであるか、又は同一體の二つの顯現であるか。此の問題の解決如何に由ては、文藝家自身も文藝の製作に於ける目的態度が異つて來るし、社會も文藝を鑑賞し又は之を評價する標準が異つて來るし、政府の獎勵や監督の方針もまた改まつて來るのである。然し此は非常に六ツかしい問題であるが、私は内ヶ崎氏からの課題により、此の問題を私の目下思ふて居る境界まで開拓して見たいと思ふ。

## 二 道徳及び善

道徳と文藝の關係を考ふるには、先づ道徳とは何ぞやと云ふ事から決してかゝる必要がある。道徳とは善を目的として動く所の行動である。即ち善をしようと思ふてすることである。此のしようと思ふことがないならば、たとひどんな行動であつても、其には善惡の意味がない、道徳ではない。斯ういふ種類の道理は、苟も倫理について多少の智識ある人の皆な知つて居る所である。

所が其の行爲の目的となる所の善とは一體どんなものであるか。此れが甚だ六かしい問題なのである。之に付ては色々説がある。其を一々列べることは必要があるまい。然し私は思ふ、善とは人類全體の幸福であると。私が基督信者でありながら善について斯ういふ定義を下すのを或は怪む人



### NO IMITATORS.

No Jesus after Jesus of Nazareth.

No Judas after Judas Iscariot.

But in Christendoms, numberless Peters, Johns, and Pauls.

Great are Jesus and Judas who proved themselves unapproachable  
and cut off all imitators.

---

### WIDE DIFFERENCE.

Jesus is a religious genius.

Christ is a religious ideal.

A genius is limited and temporary.

An ideal is unlimited and eternal.

There are Jesus-worshippers.

There are Christians.

Wide difference between the two.

---

### TRUE CHRISTIANS.

Who are true Christians?

The mighty in the pursuit of human ideal.

Among them are Baruch Spinoza, Galileo Galilei, Charles Darwin,  
and Friedrich Nietzsche.

---

### NON-CHRISTIANS.

Who are Non-Christians?

The blind worshippers of the Bible.

The obstinate adherents of creeds.

The narrow sectarians. The persecutors of truth.

Many of popes and bishops, and large number of pastors and  
missionaries.

---

When the scales are turned, things change entirely.  
Orthodoxy or heterodoxy is nothing but a difference in number.  
And what care we of number in matters of spirit?  
Is not one genius more valued than tens of thousands of common  
people?

---

### FOUNDED ON NUMBER.

Popular Christianity has become a religion of councils and conferences.  
Forgetting the way of its founder, they established their creeds by votes of majority,—the method in which a poor head is of equal value to a superior head.  
“Our religion vulgarly stands on number of believers,” said Emerson.

---

### COUNTER-ATTACK.

In the great spiritual war, the Europeans are the vanquished.  
Little Palestine is the victor.  
Now the Europeans claim that the evangelization of the world is their heavenly mission.  
The vanquished have forgotten the defeat and are trying to become victors.  
If we Orientals are defeated in this war, we shall be the vanquished of the vanquished.  
Europe, however, supplied Greek Philosophy to Jesus-worship.  
Without that, there could never have been Christianity.  
That was a sort of counter-attack in the spiritual campaign.  
Now History is repeating itself.  
We Oriental minds are carrying on another counter-attack.  
And the result, we pray, will be a New Christianity.

法を用ゆるに到れり。故に物理學、化學、數學、心理學等の補助を受けること多くなれり。嘗ては生物を殺しアルコール等の保存液に入れざれば研究し得ざりしに、今日は死せるものは役に立たず、生かし置きて其顯はす活動を見るなり。

## 二

過去三十年に特筆すべきは、實驗發生學 (Entwicklungsmechanik) の勃興なり。單に發生を記載するのみならず、實驗法により發生の原因の一部を變化し其に對する反應を見るなり。

又生物に於ける種々の現象を、數學的に研究する生物數學 (Biometrics) の發達も、實に過去三十年間にあり。

遺傳學 (Genetics) の如きも、此期間に長足の進歩をなせり。即ち一九〇〇年にメンデルの法則發見せられ遺傳も亦數學的の法則に従ふものなるを知るに至れり。此メンデルの法則は一八六〇年

代に、ブリュンの僧メンデルの實驗し得たる結果にて、小き市の博物の會報に掲載せられしものにて、一九〇〇年までは學者間に知られず、從て此方面の研究も過去十三四年に非常なる進歩を爲せり。其結果或は其に關聯して人種改良學 (Eugenics) も發達せり。

心的方面にも亦少からざる進歩ありて、比較心理學所謂之れなり。

又哲學の方面より生命を論ずるものも少しとせず、近時此傾向の益進歩を見る。

應用の方面にも莫大の進歩を見る。原微なるバクテリアなどを培養する原生動物學 (Protistology) 發達し動物にては特別に原生動物學 (Protozoology) なる一部非常に發達す。

水産學海洋學等に關聯し海中或は湖中に生棲する浮游生物を特別に研究する浮游生物學 (Planktology) も亦過去三十年間中に發達したる學科なり。

## THE PURE LAND IN THE WEST.

### 1.

After the golden glow of sunset, Venus shines in the west.

How beautiful and serene is the evening !

While East in the morning shows Coming, West in the eve tells  
Going.

In the former energy is born, in the latter it takes rest.

Our longing, however, accompanies the eve.

### 2.

The ancient Hindoos imagined the existence of the Pure Land in  
the West.

To them it was the Paradise of all Buddhas.

In this, did they mystify their western home land from whence they  
had emigrated in the unknown past ?

Or had they some later communications with the lands of Parsee  
deities, of Olympic gods, of Jehovah and of Allah and their hosts ?  
Either of these might have been the case.

But quite apart from history, the contemplation of evening alone  
could have led them to the imagination of the Pure Land in  
the West.

---

## ETERNAL EXISTENCE.

### 1.

However small, am I not a part of the universe ?

Without me the universe is incomplete.

I must be existing from eternity to eternity.

### 2.

If so, I must have been somewhere in the universe before my earthly  
existence.

O where was the homeland of my past self ?

### 3.

Also I must live somewhere in the universe after my worldly life.

O where is the elysium of my future being ?

Tetsuzō Okada.



ない。我等印度研究に志す者は大正年間に於て眞度研究』を完成すべき義務責任を有してゐるのである。(大正三年四月十五日記す)

### △三太郎の日記

阿部次郎著

東雲堂書店

明治四十一年に筆を起して大正三年に至るまで六年間の著者の感想、評論四十篇、及び最後に附録として、「若きゴーホ」と「ゴーホの藝術」を蒐めたるもの。著者はその序に於いて『自分は自分の心から愛し且心から憎んでゐる過去のために、墓誌を書いてやりたい心持で』この集を公にすると云つてゐるが、讀む人々にとりては、悲哀から憂愁に、希望から失望に、失望から自信に内的生活の道を開拓して進む悲慘なる近代人的生活に對して偽らざる告白ともなり、暗示ともなるであらう。『社會を嫌惡するは余が生活の一面に過ぎない。人類を嘲笑するは余が感情の一面に過ぎない。眞正の希望は社會と融和し人類と親愛したいのである。自然と社會と自己と、三面協和するに非れば吾人の生活は遂に全きを得ない。一切を包容する底知れぬ心を思ふ時、余が心は羞耻と憤懣とに躍る』これ作者の偽らざる人生と自然と自己とに對する態度であらう。

『出家とならずに、魂の救を得られるかどうかは疑問である。少くとも俺一人にとつては』。何といふ傷ましい叫びであらう。眞實に生きたが爲めに、しかしながら吾々は先づ食はんが爲めに胡麻化的な生活を營んでゐるのではないか。三太郎の唇を通して洩るゝ彼れの内心の叫びは新しき時代人の懊惱である苦悶である。内容に對して装幀には尙ほ少し何とか工夫して欲しい。偽らざるコムフェッションとして好著を得たことを喜ぶ。(價一・〇〇)



## 最近三十年間に於ける生物學の發展

谷 津 直 秀

### 一

生物學の著として吾人の現今所有するものは、實に紀元數百年のものなり。然れども獨立の學科として生物學 (Biology) なる名稱を初めて用ひしは、不思議にも一八〇二年に二人あり。一は獨逸のメレピラス、他は佛國のラマークなり。共に定義して生命の科學と云ふ。

然るにいつとは無しに、生物學即ち英語にてバイロロジは、動物學植物學を合併せるものを稱することとなり、獨語のビロギーは生物の生態を研究する學科即ちエコロジの異名となれり。

眞に生命の科學としての生物學は、實に過去三

十年間の產物と云ふも過言に非らず。

三十年間と云へば明治十七年 (一八八四年) なり。ダーウキンの「種の起原」出版後二十五年生物學者の目的は生物の系統を探究するに在り。化石學、比較解剖學、比較發生學等よりして、生物の類縁を見出し、先祖を假定しミツシンク・リンクの何れにありやを究むるに齟齬として他の問題を顧るに遑なき有様なりと。

今日は生物に共通なる根本的性質を研究の主眼となし、生命其ものの研究に意を注ぐに到れり。嘗ては解剖學的にして今日は生理學的なり。而して養生理學的となる傾向あり。従て其方法にも變化ありて昔日の如く觀察にのみよらずして、實驗

るもの。

四、會期 毎月一回(第四土曜日)但し七八兩月は休會、一九兩月は懇話會とす。

五、役員 幹事二名任期半年(一月及び六月交替)

斯くて會が成立したから吉田修夫、鈴木宗奕兩文學士が最初の幹事となり、翌月から次の如くに例會が開かれた。

△四十二年二月二十七日の例會

一、勝論同異句義に就て

椎尾 辨 匡 氏

△四十二年三月二十七日の例會

一、ヨーゼフ・ダールマン博士 (Joseph Dahmann) の次の講演。  
Gandhara, das Geburtsland des  
osiatatischen Buddhismus.

△四十二年四月二十四日の例會

一、念佛に就て

大島 泰 信 氏

△四十二年五月二十三日の例會

一、歐米に於ける佛教研究

鈴木 大 拙 氏

△四十二年六月二十六日の例會

一、肉食妻帶

伊 藤 成 治 氏

△四十二年十月三十日の例會

一、大藏緣起に就きて

常 盤 大 定 氏

△四十二年十二月の例會

一、ドルネルの宗教哲學綱要を評す 鈴木 宗 奕 氏

其後久しく中絶してゐたやうであるが、明治四十五年に印哲教學會の名稱の下に復興せられ時々集會が催された。

△明治四十五年三月十五日の例會

一、現圖曼荼羅の大成

吉 田 脩 夫 氏

△明治四十五年五月十日の例會

一、眞言宗兩部大經に就いて

權 田 雷 斧 師

△大正元年十月七日の例會

一、アメスの宗教心理學

今 岡 信 一 良 氏

△大正元年十一月八日の例會

一、北方佛教に特有なる梵語の解釋

荻 原 雲 來 氏

△大正元年十二月十六日の例會

一、新福音を述ぶ

宮 崎 虎 之 助 氏

△大正二年一月二十四日の懇話會

一、傳道事業

姉 崎 正 治 氏

△大正二年二月二十六日の例會

一、中と圖とに就て

矢 吹 慶 輝 氏

△大正二年四月二十三日の例會

一、宗教哲學の問題(研究法)に就て

鈴木 宗 奕 氏

同會最近の事情は未だ聞かぬが益々印度研究の爲に努力しつつあることは疑を容れぬ。

京都大學の文科に於ても明治四十三四年頃に印

度宗教學會が組織せられ、東西相應じて印度古文  
明の光輝を發揚することになつたが、此會の消息  
は藝文誌上に詳記せられてあるから茲に略する。

又此頃東京帝國大學内に設立された梵語學會は十  
一例會を重ねた後大正元年十一月頃印度哲宗教學  
會に合一されたが本年に至つて再び獨立すること  
となり、去る二月開催の第十二例會に於ては同大  
學梵語講師荻原雲來氏が『悉曇論』を講演された。

小生も此の會の末席に列して高教を仰ぐことにな  
り、この四月例會には『ヘブリュー語化せる梵語』  
に關して小研究を發表する考である。尙印度研究  
の一學會として紹介せねばならないのは豊山大學  
に於ける密敎研究會である。眞言密敎は佛敎内の  
一派であるけれども、婆羅門敎印度敎その他印度  
のあらゆる信仰儀式を攝取してゐるから、密敎を  
十分に研究するには印度波斯支那日本等に關する  
智識を要する。此點から觀れば密敎研究會は密敎  
を中心とせる印度研究の學會なりと言ひ得る。

此會は明治四十三年九月二十五日に小石川區大  
塚坂下町豊山大學講堂に於てその發會式兼第一回

研究會を開いたのであつて、左の規則の下に活動  
してゐる。

△豊山大學密敎研究會規則

第一條 本會を名けて豊山大學密敎研究會と稱す。

第二條 本會は密敎の研究によりて學界及び宗教界に貢獻するを  
目的とす。

第三條 本會は豊山大學に關係あるもの及び本會の趣旨を贊助す  
るものを以て會員とす。

第四條乃至第十條(省略)

同會は毎月一回研究會を開く外、毎年四回雜誌  
「密敎」を刊行して會員の深奥なる研究を發表して  
ゐる。本年四月には「密敎」第十二號が公刊される  
筈である。

本年二月八日に豊山大學で開かれた第二十九回  
例會がその最近の集會であつて、島地大等師が當  
日「智證大師の顯密觀に就て」講演せられた。

以上概説した處によると我國にも印度研究を目  
的とする學者や學會が相當に存在する様に見える  
けれども、到底歐米の學界に於ける印度研究の盛  
況と比較することは出来ぬ。日本に於ける印度研  
究は明治年間に於て漸く其準備を終つたのに過ぎ



一、講演なし。

△第二回例會(四十二年二月六日)

一、佛教哲學の研究法に就きて

△第三例會(同年三月六日)

一、勝論の要點

來賓

一、梵劇起原論

△第四例會(同年四月十七日)

一、古代印度の葬式

一、余の吠檀多教觀

一、大小乘の關係に就きて

△第五例會(同年五月八日)

一、大乘經中維摩經の内容

一、古代印度の靈魂觀

一、瑜珈(Yoga)の思想に就きて

一、梵劇雜感

△第六例會(同年六月二十六日)

一、梵詩『歌の牧人』(GitaGovinda)

△第七例會(同年九月二十五日)

一、順世外道に就きて

一、馬鳴時代より溯りて佛滅年時を

論ず

△第八例會(同年十月十六日)

一、豊前に於ける佛教史料

一、不動明王(Achala-natha)を論ず

紹慶密應氏

椎尾辨匡氏

武田豊四郎

福井四郎五郎氏

逸木盛照氏

馬田行啓氏

白石芳留氏

傳泰觀氏

林隆興氏

小森彦次氏

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

福井四郎五郎氏

白石芳留氏

白石芳留氏

白石芳留氏

白石芳留氏

志手環

武田豊四郎

△第九例會(同年十一月十三日)

一、涅槃の意義を論ず

一、涅槃の語源及び原始佛教の涅槃を

論ず

△設立一週年記念大會(同年十二月十一日)

一、梵劇ヤクラモールワシー(Yakumoraqi)

△第十例會(四十三年一月二十九日)

一、婆羅門族の結婚風俗

一、瑜伽哲學と禪宗との關係

△第一回講習會(同年二月三月各土曜)

一、論題 梵教聖詩無二論甘露(Avaimakuranda)

秘釋

論師

△第十一例會(同年三月五日)

一、薄倖の印度詩人ツカーラム(Tukaram)

△第十二例會(同年三月二十六日)

一、煩悶の梵詩人伐撻呵利(Bhartrhari)

△第十三例會(同年四月十六日)

一、印度教育史論

△商羯羅大師祭(同年五月七日)

一、梵教の商羯羅と佛教の商羯羅

一、商羯羅と印度佛教

林海音氏

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

宇佐玄雄氏

白石芳留氏

白石芳留氏

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

武田豊四郎

福井四郎五郎氏

福井四郎五郎氏

白石芳留氏

馬田行啓氏

一、商羯羅阿闍梨と龍樹菩薩 武田 豐四郎

△第十四例會(同年六月十一日)

一、佛典に所謂牽羅(Sutra)に就きて 白石 芳留氏

△第十五例會(同年六月二十七日)

一、チャイタニヤ大師(Chaitanya)の梵教

武田 豐四郎

△第十六例會(同年十月二十九日)

一、ダーラー、シコー皇子(Dara Shikoh)の哀史 武田 豐四郎

△第十七例會(同年十一月二十七日)

一、第六世紀の北印度を論じ併せてカンニンガム將軍の所説を駁す 白石 芳留氏

△設立二週年記念大會(同年十二月十日)

一、講演なし

△第十八例會(四十四年一月二十八日)

一、奈良平安朝に於ける神佛二教の交渉 志手 環氏

△第十九例會(同年三月十一日)

一、サダーナンド、ヨーギーンドラ師(Sadānanda Yogindra)の梵教 福井四郎五郎氏

△第二十例會(同年三月二十五日)

一、梵教に於ける靈魂四態論 武田 豐四郎

△第二十一例會(四月二十九日)

一、禪定と安般(Ānāpāna) 白石 芳留氏

其後の報告は略するが、最近の會合は大正三年三月二十八日土曜に開かれた第三十二回例會である。

### 三

早稻田大學に印度學會が生れてから一箇月も経ない内に東京帝國大學内に印度學會宗教學會と稱せられる一學會が組織されたのは、印度學發達の爲に慶賀すべき次第である。

明治四十二年一月十六日第三土曜日午後五時に、東京帝國大學哲學科中印度哲學宗教學兩科に關係ある教授高楠順次郎博士講師村上專精博士講師常盤大定學士及び大學院在學生十數名が大學構内第二學生控所に集合し、印度哲學宗教學兩科に關する學會創立のことを議し、次の諸項を協定した。

△帝國大學印度宗教學會規定

- 一、名稱 印度學會宗教學會と並び稱すること。
- 二、目的 印度學及び宗教學に關する研究。
- 三、範圍 印度哲學及び宗教學の教授、助教授、講師、大學院學生、研究科學生、卒業生及び會員二名の紹介に依

此頃佛教哲學の史的研究の必要を唱ふる聲が學者間より起つた。文學士大西祝氏も其一人である。

明治二十三年には村上專精師が吉谷覺壽師の後を襲ふて東京文科大學印度哲學講師となつた。又多年獨逸に留學せし井上哲次郎氏も此年歸朝して文科教授に任ぜられ、比較宗教及び東洋哲學史と呼ぶ一の新しい講座を開いて佛教婆羅門教等を講ずるやうになつた。翌年には米國エール大學に東洋哲學科が新設せられ、森田某氏が孔教論印度論理學等を擔任することとなつたのは奇現象である。

佛教々理史の研究が極めて盛大となつた明治三十年に於て高楠順次郎氏が歸朝した。

氏は二十三年二月に日本を發し、オックスフォード、キール、ベルリン、ライプチヒ諸大學に於て梵語印度哲學等を修得し、彼地に於て觀無量壽經及び南海寄歸內法傳を英譯して歐洲學界に研究資料を提供した。

翌年には佛國の梵語教授レヴィ氏 (Sylvain Lévi)

が俱舍論の研究及び翻譯をなす爲に印度を経て日本に來られた。

後に印度學の泰斗となつた松本文三郎、姉崎正治二氏は、此年文科大學講師に任ぜられ、松本氏は直に印度哲學研究の爲獨逸へ三年間の留學を文部省から命ぜられた。

翌三十三年三月三十一日に姉崎氏は獨逸キール (Kiel) のドイッセン教授 (Paul Deussen) に就きて印度其他の哲學宗教を學ぶ爲出發した。

此年京都大學内に京都哲學會が起つた。

印度研究の開拓者たる故マックス、ミュラー博士を紀念する爲に、現存大藏經其他の古典によつて東洋諸國の哲學宗教神話傳説言語文學地理歷史美術工藝風俗等を研究しようとする帝國東洋學會の組織されたのも此年の十一月である。翌年には岩崎久彌男が巨金を投じて購求した處の故マックス、ミュラー博士の藏書全部を東京帝國大學に寄贈した。此藏書を購入することを得たのは博士未亡人と懇意であつた英國ゴードン夫人 (Mrs. Gordon) の盡力によるのであるけれども、日本人

の多くは夫人の好意を知つてゐない。

夫人は法花經大意及び大乘起信論の英譯者たるリチャード博士 (Richard) の親友であつて、現時に至るまで日本に在住して佛教と基督教との調和的研究や眞言密教の考究に意を注いでゐられる。

帝國大學ではミユラー博士の藏書をば『岩崎家寄贈マックス・ミユラー文庫』と名けて永遠に保存活用することとした。

此年西派本願寺佛教大學の高輪學報と帝國東洋學會の會報とが發行せられた。

三十五年二月二十二日には織田得能氏が佛蹟參拜宗教視察の目的で印度に向ふた。

此年の九月四日より一週間に亘つて萬國東洋學會が獨逸國ハムブルグ府で開かれたから、委員澤柳政太郎、三上參次二氏の外姉崎正治、白鳥庫吉、渡邊海旭、荻原雲來諸氏が列席した。三十七八年日露戰役當時は印度研究に關する著しい事件はなかつた。三十八年六月五日に京都大學内に文科大學が設置され、後には關西に於ける佛教研究の中心となつた。

此年松本文三郎、松本亦太郎、狩野亨吉、桑本嚴翼の四文學博士は京都文科大學教授として赴任した。

四十一年十二月十九日土曜日には小生が福井四郎五郎、海野辰治、白石芳留、逸木盛照、林隆興諸氏と共に佛教より獨立して汎く印度文明を探索することを目的とする早稻田印度學會を組織した。左にその綱領を擧げやう。

#### △早稻田印度學會綱領

第一章 本會は早稻田印度學會 (Waseda Indological Society) と稱し本部を早稻田大學内に置く。

第二章 本會は印度諸般の文物を探索して東西思想の融和と新文明の建設とに貢獻するを目的となす。

第三章 本會の會員及び事業等に關しては別に細則を設けて之を規定す。

單に印度の宗教的方面にのみ固着せず、あらゆる印度の事物を考察しようとするのが此會の特色であるから、日本に於ける印度研究の諸學會中純乎として印度學<sup>インドロジ</sup>研究を標榜してゐるのは此會のみであらう。

今日に至るまで七年に亘つて早稻田印度學會のなした事業を略記しよう。

#### △第一例會四十一年十二月十九日



た後明治十二年に有名な印度研究者フリドリヒ・マックス・ミュラー博士 (Friedrich Max Müller) に就いて梵語及び印度宗教を研究した。明治十四年に博士が二師と共にオクスフォード府を去つてモールズエルン丘上に閉居し、無量壽經及び金剛般若經の梵本を英譯した時、二師は博士の口譯を筆受した。此年の九月に二師は博士と共に萬國東洋學會に列席し、博士と分れて巴里に遊んだ後十一月オクスフォードに歸つた。

然るに笠原師は不幸病を得て明治十五年九月歸朝の途に就いたが、療養効なくして翌年七月十六日三十二歳を以て故山に没せられた。笠原師の如き忠實なる印度研究開拓者を失ふたことは、日本の學界に於ける無上の損失である。

二師留學當時の事情は、明治卅二年七月十三日發行南條文雄編纂笠原遺文集を一讀すれば明白である。

南條師は明治十七年頃無事歸朝して以來印度研究の發達に奴力せられた。

二師の留學中であつた頃、我國では紀伊國和歌

の浦法福寺住職知空師の令息北畠道龍師が單身歐米諸國及び印度を遊歴する壯圖を企てた。道龍師は蘭語及び獨逸語を學んだ後明治十四年冬佛教及び國家に貢獻する爲海外に遊び、オルデンベルグ氏、マックス、ミュラー氏及び露國人ベトペーフバトリッチエ教授等の如き有名な印度研究者と會見し、殊にオルデンベルグ氏と佛教の輪廻説を談論した。

師は歐米よりの歸途更に印度半島に入り、千辛萬苦を経て佛教の諸靈地を訪ひ、大聖釋尊正覺成道の靈地たる佛陀伽耶 (Buddha-gaya) に於て左の國風を詠じた。

年を経て名のみ残りし加耶の里に

今日御佛のあとを問ふかな

斯くて師は明治十七年一月二十四日に無事歸朝せられた。日本の佛徒にして入竺の壯圖を企てたのは眞如法親王以後では道龍師を數ふべきであらう。日本人の現代印度に關する智識が道龍師の入竺によつて擴大されたことは疑を容れない。道龍師の見聞談を門人西河偏稱長岡洗心二人の筆記し

た北畠道龍師天竺行路次所見三卷が明治十九年七月に出版された。此書の第三卷には印度略史、印度に入るの路次、日本の桑門印度に入る果して誰れか矯矢とする、ボンバイ港アデレッツフェ氏の話、釋尊墳墓偵尋の話等を記し、佛蹟の寫眞數葉を加へてゐる。

## 二

明治十七年一月二十六日には東京帝國大學内に哲學會が設立された。此會は井上圓了、井上哲次郎、有賀長雄、三宅雄次郎、棚橋一郎諸氏が其先輩たる加藤弘之、西周、西村茂樹、外山正一諸氏と相談して起したもので、發會の際原坦山、島地默雷、北畠道龍諸氏の如き僧侶も入會を諾した。

此會が間接に印度研究の發達を助けたことの大なりしは、其講演中印度學に關するものの多かつたことによつても知られる。

左に設立より五箇年に亘る哲學會講演中で印度學に關するもののみを列記しよう。

△第二回例會(明治十七年二月)

- |                 |                       |       |
|-----------------|-----------------------|-------|
| 一、法の說           | △第三回例會(同年)            | 嶋地默雷師 |
| 一、印度哲學と諸學と徑庭ある說 | △第四回例會                | 原坦山師  |
| 二、依正二報          | △第七回例會                | 神原精二氏 |
| 一、佛教と理學との關係     | △第十二回例會               | 寺田福壽師 |
| 一、印度哲學中數論の綱領    | △第十三回例會               | 南條文雄師 |
| 一、佛教哲學一斑        | △第廿四回例會               | 高橋五郎氏 |
| 一、洛日克と因明との異同    | △第二十七回例會(明治二十年二月二十一日) | 西村茂樹氏 |
| 一、印度哲學の要領       | △第三十四回例會(同年十一月廿一日)    | 原坦山師  |
| 一、印度哲學勝論の概略     |                       | 村上專精師 |
- 右の如くにして佛教婆羅門教が新進の學者によつて研究されるやうになつた。
- 明治二十年には南條文雄師が印度に留學せられ、又同年九月十六日には井上圓了氏が哲學館を創設した。翌年には政治宗教視察の爲に圓了氏が歐米巡歴の途に就いた。

ることや、太陽研究に關することも何れも萬國協  
力事業となつて居る。天文と密接な測地學も萬國  
の委員會がある。而して我日本が之等に如何なる  
努力をなし得たかと言ふに天文の方では新發見の  
報を貰ひ得る様になつた外には其他一つも萬國協  
力に加つて居らない。測地學の方丈は加入した。  
而して其結果は木村博士の發見をも生んだのであ  
る。余は重ねて言ふ我國民は政府のみに産業に於  
ても學術に於ても其發展を期待して居る間は文明  
の幼稚な狀態である。國民自身が自ら文明を増進  
して行き、政府は其統轄者で又友である、其指導  
者でない時代までにならなければならぬ。今日我

國內でも若き人々は漸く醒めて來た様に思はれ  
る。今一段の進歩を見る爲めには學者は超然主義  
をすて、國民主義をとり世界主義の下に努力し、  
孤立主義をすて、諸方面が相携へて一大系統の下  
に世界と共に研究する精神を持すべく、他の方面  
の人々にも亦此神聖なる學者の目的の爲めには充  
分の助力を乞ふべきである。又資産家等は自己の  
資産をば私産とは思はず、公益の爲めに自己の自  
由意志で處理すべき公産であることを心得置く  
べし、併し其所有者の自由意志は大に尊重すべき  
は勿論である。

# 日本に於ける印度學の發展

武 田 豐 四 郎

一  
歐米諸國に於ける印度學(Indology)研究は第十八世紀に入つて漸くその端緒を開いたのであるけれども、忽ちの間に驚く可き進歩發達を遂げ、今日では到る處に有名な印度學者(indologists)を見得られる程盛況を呈してゐる。

わが日本には欽明天皇即位十三年即ち西曆紀元五百五十三年の往古に佛教が傳來した爲、國人の印度に關する興味や知識は昔より極めて深かつたのに係らず、印度學研究の現狀が歐米諸國に及ばざることの遠いのは遺憾至極である。

然かし過去の日本人は陳腐な材料と舊式のメンツドとを以て印度を研究してゐたのであつて、歐

洲學者の有するやうな新らしい材料に接することの出來たのは明治維新後十有餘年を経てからであるから、研究の進まなかつたのも無理はない。

今日の日本は印度研究の準備を成し得たのに過ぎない。眞の研究は今後のことに屬する。今維新以後今日までの間に我が國が印度研究に關して如何なる準備を成したかといふことを述べて見よう。

我國に於て佛教及び印度文明を梵語原本に依つて研究する端緒を開いたのは南條文雄笠原研壽二師である。二師は英語をロンドン府に學んだ後梵語及び印度宗教をオクスフォード府にて研究すべき命令を大谷派本願寺本山から受けて明治九年即ち一千八百七十六年に英國へ留學し、英語に通じ



更に萬國天體寫真圖を世界の大天文臺協力の下に遂行するの道を開き、南天の星につき其距離や、スペクトルや、視線速度等を研究せしめた功勞は偉大なものである。之と共に記すべきは米國の大天文學者グールドが南米アルデンチンの政府を勧誘してコルドバに開いた天文臺の活動も大なるもので實視して得た星の目録には喜望峯のと同等的なものがある。其他既述のグリニチの活動もボツダムの活動も政府の事業であるが、國民の活動が米國に於て著しき聲をあげた。ハーバード大學の天文臺がピケリングを臺長にあげてより恒星天についての組織的研究は年一年と其活力を増大して、最近數十年にあげた結果は各方面に及び新發見の夥しきこと驚くべきものがある。北半球の天は勿論のこと南半球にもアレキイバに支部を置いて盛に材料を集め、恒星の光度の測定及變光星の分布と其觀測、恒星のスペクトルの分類及各星のスペクトルの決定、視線速度は勿論種々の結果は此天文臺の誇である。かくて古來稀有の現象と思はれた新星の出現は此天文臺の研究から割合に普

通の現象となつた。而かもピケリングの天文臺には他に見るが如く大望遠鏡なく大天文學者も多からず、數多の寫真用望遠鏡を使用し數多の女子計算者を使用して此大事業をなして居る。猶ほ米國の市民的努力は國立の海軍天文臺を蔽ふてリツク、エルケスとなり、又ウイルソンとなつた。リツクは恒星の視線速度に關する方面では世界第一と云はねばならぬ、而して此結果は現臺長ケメル氏の力によるものである、此天文臺も南天研究の爲めにサンチアゴに支部を有して居る。

エルケスの活動はヘール氏の努力によるもので彼は其太陽研究を進める上に自らシカゴに一天文臺を設けて多數の研究をなした。が其熱心はエルケス天文臺をゼネバ湖畔に設くるに至り北米の諸天才を集めて各方面の研究に力を盡さしめた。自らは其發明の分光太陽寫真儀に依て太陽研究に進歩を與へた、然るにエルケス天文臺を以てするも尙ほ足らず遂に南加ウイルソン山上に今日世界に於て最も注意を引きつゝある太陽研究所を得るに至つた。此の如く、進歩の勢につれて資産を與へ

つゝあるのは米國の市民である。或は往々にして聞く米人は拜金宗の人なりと、然し言ふ人々は自ら心中を省るべし。拜金の徒にして進歩に金を投ずること此の如きものありとせば、拜金宗も大に獎勵すべきである、之を笑ふ人々は其努力其清廉を以てして一層力を盡すべきである。

余は米國が市民的努力を早くも天文に向けたと云ふたが、天文に限らず之は一般に世界の風潮となつた。今日では至る所其方向に進んで居る。蓋し至誠を以て世界の爲め、國家の爲めに盡すのは政治家、實業家、商業家、學者何れも然あるべきである。學者の研究するや、其自由意志による、實業家の資を作り之を費すこと亦其自由意志によるべし。而して何れも至誠を以て動くものならんか、互に其得たる所を語りて人類の進歩の爲めに盡すべきである。學者は資産家に研究の何たるか又如何なる必要を感じつゝあるかを告ぐべし、資産家は又其財を私すべからず。自由意志の下に最も社會の益となると自ら信じ得る所に其財を使用せしむべし。而かも此傾向は今日我邦に於て幼稚

である、學者も資産家も共に覺醒を要する。

天文學の進歩には財力の助を要すること如斯なる時に當り、最近三十餘年間に一個の不思議な天文實驗所のあることを述べたい。これはグロニンゲンにある。天文臺ではない、實驗所で自ら觀測結果を產出することが出來ないが以前に喜望峰天文臺撮影の寫眞板をかりて其結果を出したので有名となつたカプタインの創始したもので彼れは其長である、其後彼れは宇宙の構造を研究するには此く／＼の研究をなすべしとの大なる案を發表して世界の各天文臺に其材料を集めることを依頼し、今はヘールの太陽研究所の客員ともなつて此大問題の爲めに努力して居る。

記して此處に至れば宇宙の大問題の解決は世界的協力を要するものであることゝ推量されるであらう。此世界的協力は最近三十年に非常に發展した。恒星の目錄は獨逸天文學會の創意で世界的協力事業として尙續いて居り、寫眞恒星圖の方も此十數年盛に従事され今尙忙はしい。新發見を報ずる萬國同盟や、天體曆に關することや、時に關す

國にはハツギンスの外にロツクヤーありて太陽研究を開始した爲めにグリニチ天文臺の如きも一八七三年から従來行ふて來た方面の外に太陽の黒點の觀測や分光器的研究や其他のものを開始するに至つた。茲に於て新天文臺は子午儀や時計等を以て唯一の武器とする状態から一轉して集光力の大きな屈折及反射望遠鏡を備へ且つ之に不思議な結果を齎した分光器や、光度計や、寫眞器を備ふることゝなつた。

望遠鏡の口徑は其集光力を示す一の標準である爲め、其發展を考ふるに今日に至るまでは一八四五年に作られたロツスの口徑六呎の反射望遠鏡を凌ぐものがない。併し大さのみが決して其能力を示すものでない。其レンズ又は鏡の性質の良否による。先づ屈折望遠鏡で言へば一八八四年に露國ブルコヴァに三〇吋の大望遠鏡が出来て世界の天文學者を羨ましめた。其レンズが仲々良好なものである。然るに一八八九年には四千數百尺のハミルトン山上に設けたリック天文臺に三六吋の大望遠鏡が備へられた。而かも之として世界最強と稱せ

られたのは數年に過ぎずして一八九七年には四〇吋のエルケス大望遠鏡となつた。是等は有名なレンズ製造家クラークの力で出來上れるもの、其大家が今や此世の人でない。其後巴里で五〇吋のレンズを磨いたけれど、天文研究用に役立つたことがない。大望遠鏡は最近十數年の間に所々方々に出來たけれども、遂にクラークの最大のものを越さない。一方に於て反射の方は近來著しく増加した。コンモンの三呎のものは其後リック天文臺の購ふ所となつて今も尙クロスリー望遠鏡と稱せられ天文の研究に偉大な貢獻をなした。一九〇八年にはウイルソン山上に口徑五呎のものが設けられ、其結果に甚だ目星しきものがある、其後同天文臺で口徑百吋のものを製造し昨年出來上つたが、一時は其結果良好ならずと言はれたが、再び使用し得るとのことが報ぜられたけれども、之についての詳しき報告は未だ公にせられない様にはれる。昔時の反射望遠鏡と異り今日のは其集光力が非常に進歩した爲めに百吋のものが實用に供せらるゝ日には驚く可き發見があるであらう。



天文臺の發展としては大望遠鏡の設置は勿論のことなれど、子午環にせよ其他のものにせよ精密に而して樂に仕事の出来る諸器械の備附が大切であり、其上其時／＼の科學の大勢に伴ふて新研究を行ひ得る様なものでなければ今日一等の天文臺と稱することが出来ぬ。曾てブルコヴァに露帝が大仕掛けの天文臺を設けよと命じ、其結果として一八三九年に十五時の大望遠鏡が据付けられた際帝は之を見て臺長に「之でお前は満足か」と問はれた時に、彼れの「一寸の間は」と答へたことは有名な話であるが、如何なる設備も科學の進歩の著しき今日には「一寸の間」丈間に合ふ所のものである。而かも時々刻々の進歩に後れざるべき爲めには巨額の資を要する。地球上の各國は政府に於ける財産を豊富ならしめつゝあるも政府の仕事は手廣い、従つて露帝の如くに世界一の天文臺をとのお仰せは今日何處の政府でも發したものが無い。之に反して人民の聲は高くなると共に彼等の世界的に盡す努力が増して來た。天文臺てふ一面丈を觀察するも二三のものを除けば多數は一個

人又は若干の市民の努力によつて活動を示し得たものである。今此盛時までに至れる間に大仕掛と云ふよりも寧ろ天文學の進歩に貢献したてふ觀點から天文臺の各地に設置されたる有様を一寸述べませう。

#### 四

天文學が北半球の天にのみ其研究對象を求めて居た時代は宇宙の大問題にふるゝことが出来な。之を南天まで擴張するに大なる貢獻をなした天文臺は大ハーシエルの息ジョン・ハーシエルの南弗の喜望峯に於ける觀測等に由來し一八二〇年に創立された喜望峯に於ける英國の王立天文臺である。而して此天文臺が所謂新天文學にも力を加へ、此學の進歩に重大なものとなつたのはギル即ち今年世を去つた大家が臺長となり近世的設備をば時々刻々進めて來た爲めであつた。彼が寫眞を用ゐて天空上の星の位置を決定し得るのみならず、洩れなく星を網羅した其永久記録を作り得ることを發見して南天の星の大目錄を完成せしめ、



歩し今日も尙ほ其建設の眞最中である。依てこれから彼の重な仕事を少しく述べて置く。彼れは元來音樂家であつたが、天文學に興味を感じて借りた小望遠鏡を以て満足せず、器械的天才に助けられて自ら反射望遠鏡を琢磨すること四百三十に及んだ。其間彼は是等の中成功した種々のものを用ゐて天躰を觀測したが其最初のものはオリオン星雲の見取圖であるとのことである。彼れが始めて己が觀測をフィロソフィカル・マガジンに發表したのは年齡四十二年の時である。而かも其後三十九年間に發表した論文の數は夥しく而かも其中には大部のものも澤山にある。其全集は四ヶ折の大冊二部として今日天文學者の珍藏する所となつて居る。彼をば發見者と見るも天王星の發見を始め惑星の衛星等數多あり、其他二千五百の星雲、八百六個の重星などは其如何に勤勉であつたかを思はしむる。而かも尙ほ彼は宇宙構造の研究の爲めに天空にある星數を見極めんと欲したので天空を四回も望遠鏡で檢査し三千四百個の部分に之を向けて其際鏡内に映じた星數を算した、實に驚くべ

き根氣である。而して以上の發見や觀測は一大目的の秩序的研究所の自然的結果及其副産物であつた。

### 三

餘りに長きに失する爲め、彼れの研究の筋道を記載し得ないが、彼は恆星の固有運動を利用して曾てトビウス・マイエルの注意した太陽系の運動を事實に由つて檢査し吾等は太陽に伴はれつゝヘルクレス座中の一點に向ふて進行することを證し得たことや、天空調査から宇宙の構造につきて事實に基いた説を建設し得たことや、恆星の光度に就いて始めて科學的大研究を行ふたことや、星雲や星團等につきての研究や、双星中に物理的關係のある所謂連星のあるを證し得たことや其他の研究は何れも星辰天文學の根柢を築くのに大切なものであつた。勿論今日に於ては彼れの研究結果の中其儘採用せられぬものもあるが、其研究が其創意が後人に開拓されて今日の盛を來した所が甚だ多い。然るにハーシエルの研究と方向を異にせる

天文學の研究方法は彼の晩年に現はれて來た。ワオラストンが太陽のスペクトルに暗線を若干見出したのは一八〇二年のこと、其後フラウンホーフェルのスペクトル研究は太陽及恆星にまでも及んだ。而かもスペクトル分析法の愈々有力な武器となつたのはキルヒホッフが一八五九年に其原理を鮮明したのに始まる。此キルヒホッフこそ新天文學に取りて忘るべからざる人である。

尙ほ新天文學研究の武器や此方面の基礎となつた事實を列べ立てると、太陽面の黒點がシュワベの研究によつて十一年餘の週期で變化する事實（一八五一年發見）の知れたことや、寫眞術の次第に天文學に應用さるゝに至つたことや、種々の研究に際して天空の模様を示す恆星圖就中一八六二年に完成したアルゲランダーの大恆星圖の出版や、ハッギンスやフォーゲル等の考案によつて次第に天文學に導かれた分光器や、其他のものである等及其他のことが原因たり結果たりて漸次新天文學が開展して來たのである。かくて愈々最近三四十十年の天文學的研鑽時代に入つた。三十年の天文

學の發達を簡単に記すとしても此は餘りに大なることと之れには小くとも數百頁を要すること故、天文臺を中心とした若干の事實を回想して多少其進歩をしのぶ手段としやう。

天文臺は古代から人類に重視され、埃及の金字塔の如きは或る學者に天文臺であるとさへ言はれて居る。支那の天文臺、朝鮮の天文臺も何れも其時代から見れば進歩した設備のものであつた様に思はれる。最新の代に天文臺が如何に發展して來たかと言ふに、今日萬人に知らるゝ英國グリニチの王立天文臺はフラムステードによつて創立され其後永く星の空に於ける位置を測定するに力を盡して居た。然るに今は既に閉ぢたが一八五六年にハッギンスは星の分光學的研究をなす爲めに一小私立天文臺を開いた、彼れは數年後大に活動を開始したが、恰かも其時に獨逸のフォーゲルが有名なポツダム天文臺創立の任に當つた。此二人は新天文臺の創始者とも云ふべきであるが、而かも其時には佛國でもジャンセンありて太陽の研究に力を盡し、米國にもヤングありて同じ研究をなし英

トの嘆賞した「星の空」に深き感想を抱きて、無限の星辰界につきて論ずる天文學の趣味を有識者間に傳へんとするにあるのであらうと思ふ。此は余も常に考へつゝある所であるにより、天文學に對する同君の同情に對しては天文學專攻者たる余が默して止むべきではないと思ふたのが之を草する其二の理由である。今一は最近三十年前後の天文發達史と言はれた時に、西洋に於ては此間に天文學が驚く可き發展をなしたことを思ひ、我國の現狀を觀じては常に感じて居る所を今更の樣にも一度心裡に映じて天文學のみでない、一般に吾等青年の振起すべきことを感じ其所信の一部をも吐露したいと思ふたのが其理由の三である。

## 二

天文學の進歩てふことを回想するに、先づ第一に感ずることは一つの大發見に到達するまでに如何に多くの人々が大發見者の爲めに其材料を運んだかである。能く一將功成りて萬骨枯ると言ふが此は戦場のみのことでない、時々刻々此活社會に

平和の間に行はれて居る。併しこれを見て將の功をけなすのは間違つて居る、似て非なる將はいざ知らず眞の將には將として尊敬すべき所がある。要は將を見ると共に卒を忘れざることである。以下述ぶる所に於ても將のみを記すも而かも其裏には卒ありこれなくしては天文學も今日の進歩を來たすこと能はざりしことゝ、又それ等の能力の如きも時としては人々に持囃さるゝ將よりも大なるべき人もあることを記憶せられたい。

コバルニカスの地動説が當時思想界に大變動を來したことが能く知られて居るが、此説を宣傳した大勇者はガリレオ其人で、彼れの偉大なことが普通の人々には其割合に知れて居らぬ。彼れは智あり勇あるものであつた、力學は言はずもがな種々の器械や其他の研究が天文學否科學の基礎となつて居る。彼れは其信じた地動説を主張する上に於ては如何なる權威をも恐れなかつた。今日立憲國民の至誠とか赤誠とか自稱して衆を恃んで空を叫ぶ人々とは如何なる差であらう、勿論今日は一致團結世界的に大事をなすべき時代ではあるが、

其實此の如き大業をなすにはガリレオの如き熱誠を有し自信を有する人々を要することを忘れてはならぬ。ガリレオの望遠鏡は天文學上天空の研究に驚く可き武器を與へた、即ち一六一〇年以後の天文學は此點に於て特に著しき進歩を來し新發見が續々として發表された。而かも又一方には古き問題たる天躰の運動てふことはチホ・ブラーへ、ケブラーを経てニュートンに至りて茲に一大法則の下に統一せられ、万有引力の發表となつたことは普く知らるゝ所である。茲に於て昔時屢々天空に怪光を發して人々を驚かした所謂ハリー彗星の如きも、其真相を探知せらるゝに至つたことは人々をして暗黒界を脱して光明の世界に入らしめたものであつた。但し茲に注意す可きは此時代からして西洋の天文學者が位人臣を極めるとも言ふべき尊位から平民の位置に引き下らされたことである。而かも此は自己の努力して研究した爲めであつた。迷雲に蔽はれた時代には天象は人々の運命を司配し、向上を欲する人心は天象を讀み得る天文學者にすがつたのも無理ならぬことで天文學者

は又星占家として時人の尊敬を集めた、而かも今や雲の晴れた所を見れば天文學者の手には星占家としての武器が欠けて居るのを見極めることが出來た。かくして天文學者は一種の平民として今日まで存續し來つた。

以上述べたのは天文學の過去帳の一部分で、而かも吾等の特に記さんとする最近三十年の仕事の緒論である。さてこれから愈々近代の部に入らんと思ふが、其門前には是非記して置くべき二大人物が立つて居る。これは佛蘭西のラブラースと英國のハッシエル(元來獨逸の人なるが)とて、前者はニュートンの引力則を天躰の現象に應用し、天躰力學を大成した偉人で、後者は自ら大望遠鏡を製造し大宇宙の構造を洞察せんとし大事業をなし所謂星辰天文學を創設した人である。前者は一七四九年に生れて一八二七年に逝き、後者は一七三八年に生れて一八二二年に逝いた。ラブラースを以て所謂古天文學即ち天躰力學は其大要に於て完成し其以後の人々の研究は比較的に言へば枝葉に過ぎぬ。ハッシエルの創設した部分は其以後益々進



に多忙を極めて居るのである。

然し基督教會は子供の爲めに、青年の爲めに充分の設備をして、彼等をして罪人ならしめざる様に餘り力を盡して居らないのは事實である。

今日の教會は結核性の病人に重を置いて幼き子

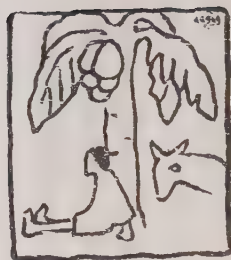
供には目を留めないのである。日曜學校事業は積極的働である。惡人を未然に防ぐ事業である。瘡すと云ふよりは造り上げる事業である。十五年此の方世界到る處に日曜學校事業の効興し來りたるは大なる理由があるのである。

### △婦人解放の悲劇

伊藤野枝 譯 東雲堂發行▽

エンマ・ゴールドマンの「婦人解放の悲劇」、「結婚と戀愛」、「少數と多數」、及びエレン・ケイの「戀愛と道德」に、エンマ・ゴールドマンとエレン・ケイの小傳を加へて一冊としたもの。その序文に於いて平塚らいてう氏が言つてゐるやうに、今日世界の婦人運動には二つの潮流が流れてゐる。一つは英米に於ける婦人運動であつて、他の一つは主として獨逸人等によつて導かれてゐるそれである。前者は性を無視した男女同權論や、政治的權利の要求に世界の耳目を驚かしつゝあるものである。それに比べて後者は戀愛を問題の中心として、先づ人間として、女性としての立ち場から、女性としての眞實の生活、新しき生活を見出さんとする立ち場である。一が外部的であるに對して、一は内面的であり、思索的である。

私達が婦人問題に對する態度は無論後者でなければならぬと思ふ。女性が女性として生くることは、やがて人間が人間として生くることのできる唯一の途でなければならぬ。而して婦人問題の當面の事項は、如何にして「人は自分自身であると同時に他の人々と一つになり、全人類と深く感ずると共に各自の個性を維持してゆけるか」といふことである。本書は少なくともこれ等の問題に對して、眞摯な新しき婦人の悲痛なる宣言を傳ふるものである。眞に生きんとする女にも男にも敢て一本をすゝむ。(價〇・六〇)



## 最近三十年 天文學發展の一側面

一 戸 直 藏

### 一

先達てのこと偶然内ヶ崎君に會した時六合雜誌が第三十幾年に當り特別號を出す故、天文學に關し最近三十年の發達を記した一篇を寄稿せよと依頼された。自分は此重大な使命を果し得る程の素養を缺いて居り、加ふるに自らも「現代之科學」の主幹として可なり多忙で余の研究に要する時を除いた大部分の時が其爲めに占領されて居るが爲めに充分調べる暇をも有せないので一吋躊躇はしたが直ちに思ひ直して快諾した。と言ふのは眞面目な世間向きのせぬ雜誌をば一定の主義の下に繼續するのは仲々困難であることが近頃自分の心に

深く刻せられて居る、然るに六合雜誌とか東洋學藝雜誌とか三十年も以前から我國の進歩の水平線から一步進んで人心を指導して來た。勿論其兩誌ともに三十年の間には多少の消長があつた様にも思はるゝが、しかも大體に於て其主義方針を維持して居るのは余の常に感服して居た所である。今其一なる六合雜誌は内ヶ崎文學士其他の盡力で衰へた元氣を恢復して精神界に勇進して居り今第三十幾年を祝せんとして居る。余は其祝意を表せんが爲めにと思ふたのが筆を取る其一の理由である。六合雜誌とは云ふものゝ近來は科學の方面に餘り注意を拂はない此雜誌に内ヶ崎君が天文學に就いて記さんことを求めらるゝ、これ恐らくカン

曜學校は一種の傳道場所と見做されて居つたのである。

今日も尙斯く思ふ者は教會に多數を占めて居るのである。日曜學校なるものは宗教々育の場所に於て飽迄も適當なる意味に於ける學校である。再言すれば子供の有して居る宗教性に對して適當なる宗教々育を施し品性を創り上げる場所である。斯くの如き進歩せる思想に達したのは近世の心理學の賜物と云ふて可いのである。近世の心理學の進歩が日曜學校の教授法に一大革命を來たした事是否む事能はざる事實である。

## 六 兒童の宗教と青年の宗教

基督教は單に救濟的宗教ではない、教育的宗教である。基督は單に救主であるのみならず、倫理的教師である。基督者の品性は決して一夜造りに出来るものではない、品性は賜物に非ずして努力して得るものである。數回の説教を聞いたからと云ふて夫れて基督者になれるものではない。基督者の品性を造るには、造らる可き材料が入用であ

る。其の材料があつて始めて修養をなし、又訓練を重ねて基督者となるのである。

種子を蒔きて後苗が生じ次に穂となり熟して遂に穀物となるのである。此の順序は動かす可からざる、生物界に於ける法則にして又靈界の法則である。神は不變なる御方であるが人間は進歩的なるが故に人間の心理が進歩するにつけ神に對する信念が一步步と變化して行くのである。故に宗教には子供の宗教あり。青年の宗教あり、又大人の宗教があるのである。

小學校を経ずして大學に這入る能はざるが如く子供の宗教を卒業せずして決して青年の宗教に入る事は出来ないのである。日曜學校に幼稚科あり幼年科あり少年科あり、又青年科のあるのは進歩的人間を規則的に教育するに必要であるからである。日曜學校は飽迄も心理の法則に従ひ、子供の宗教、青年の宗教、大人の宗教を教ふる場所である。

## 七 リバイバル對日曜學校

リバイバル心理と燒打心理とは同一の心理的方

法に依ると云ふ近世の群衆心理學者の議論は日曜學校事業に一大革命を來たしたのである。個人の心理狀態と群衆心理狀態とは同一なるものではない、群衆の心理は感情が全心を支配し、理性は恰も其の役目を失したるが如き狀態に陥るのである家を燒き人を殺したる後其の理由を聽くと雖も答ふる能はざるは群衆せる時の性理狀態は感情のみにして理性は皆無であるからである。又群衆は確かに傳染病の如く一人より一人と傳染するものである。一夫吠ゆるが如く一人泣けば百人泣くのである。

リバイバルの時一人泣いて罪を悔ゆれば十人も百人も泣いて罪を悔ゆるのは理性の働に依りて悔ゆるに非ずして感情に依るのである。故に一人より一人と傳染するのである。リバイバル信者の危険なるのは此の理由に依るのである。今日基督教會に出入の激しきは教育された信者が鮮いからである。リバイバル方法と日曜學校の主義とは全然正反對の地位にあるのである、いくら傳道々々と叫んでお祭り騒ぎをしたからとて夫れて日本は基

督教國とはならないのである。日曜學校は個人を對手に個人の心理狀態に従ひ、第一に理性を動かし、第二に感情を燃やし、第三に意志を鞏固にして健全なる信者を養成するのである。日曜學校が非常に重視せらるゝのは此の理由に依るのである。

## 八 積極的事業なる日曜學校

教育學者ホルン氏の云ひし如く此の世の人々は山の頂より落ち來る負傷者に對して非常な熱誠を以て其の救助に吸々として居るのである。夫れ禁酒會、夫れ矯風會、夫れ囚人保護會、夫れ廓清會とて救助に於ては金力も、人力も其の方面に捧げて居るのである。

然し目を開いて山を視れば山の頂には其の落ち來る人々に對して落ちない様にする何の設備もないのである。此の世の人は消極的働には熱心であるが積極的働には余り熱中して居らないのである實に愚な事ではないか、基督教會も罪人の救はれんが爲めには非常な熱心なものである。夫れ集中傳道、夫れ大舉傳道、夫れ共同傳道と云ふて非常



傳道の大使命を自覺する様になつたのである。今日數萬の傳道師が全世界に傳道する様になつたのは日曜學校事業の大なる賜物であると云ふても決して過言ではない。

第二は今日の普通教育の組織は其の源はレエキス氏の日曜學校にあるのである。レエキス氏が日曜學校を創立せし當時英國の下流社會はいろはのいゝ字も知らない者が多數を占めて居つたのである。又下流社會の兒童の教育に目をつける者は一人もなかつたのである。レエキス氏の日曜學校は普通教育の先導線となつて教育社會を震動せしめたのである。

歴史家グリーン氏が「英國の普通教育の制度はレエキスの日曜學校に負へる處多し」と云ふて居る言葉を見ても日曜學校が今日の普通教育に偉大なる感化を與へたる事は明白なる事實である。

### 三 宗教的革命と兒童

ルuterの宗教的大革命は兒童を中心として起つたのである。「罪の爲めに結核性となつて居る大

人を良くするは老年を馴らす方が遙かに易い」と云ふたのはルuterである。ルuterが宗教的大革命に従事するや第一に兒童の爲めに教理問答を作りて兒童を教育するは革命の根本的事業である事に着眼したのはルuterのルuterたる處である。今日舊教派の輩が大人よりも兒童に重を置き教育の爲めに大金を投ずるのはルuterの兒童中心の教育法に刺戟せられルuterよりは猶鋭き武器を持つて反抗を試みた結果である。

又ウエスレーが兒童に着眼しレエキスの日曜學校の制度より普通教育の部分を除去し日曜學校をして單に宗教々育の制度に更へ教會内に日曜學校を設く可き規則を作つたのである。今日世界にメソジスムの勢力ある所以はウエスレーが兒童を教育の中心點にしたからである。歴史家が「メソジスムは兒童のリバイバルである」と云ふたのは實に眞を云ひ現はしたる言葉である。

### 四 兒童本位の教育

百三十年の歴史を有する日曜學校は宗教々育の

原理に於て又其の方法に於て根本的の革命をなさざる可からざる時期に到着したのである。其の主なる動機は近世に於て教育界に於ける大發明なる兒童に原因するのである。

今日迄兒童とは小なる大人である、又大人とは大なる兒童なりと云ふ間違つた考を持つて居つたのである。然るに三十年此の方長足の進歩をなしたる兒童學は大人と兒童とは全然其の性質の異なる事を發見したのである。從來の教育法は常に日曜學校の教育法のみならず、普通の學校の教育法に於ても大人本位の教育法であつたのである。大人が斯く考へるから兒童も斯く考へると思ふたのである。此の大人本位の教育法を根本的に革命せしめたものは兒童本位の教育法である。兒童の成長發達の順序に従つて宗教々育を施さざれば兒童を教育するに非ずして却つて兒童を殺すものであるとまで自覺する様になつたのである。四と五の數をも數える事の出来ない三四歳の子供にも十誠を諳記させんとしたるが如き、又哲學者も理解する事の出来ない三位一體の教理をも兒童の頭に悟ら

せんとしたるが如き、又子供にも大人にも同様に罪人なりと自覺させんとせし如き非教育法に依つたのである。斯くの如き大なる誤は兒童本位の教育法に依つて根本的に革命せられたのである。

## 五 神らしき兒童

「幼子の如くならざれば天國に入る事能はず」と宣ひし基督の教訓は悲しい事には永い年月其の眞意を誤解されて居つたのである。人は皆罪人であると思ふ時は子供も均しく皆罪人であると思ふて居つたのである。子供は生れながら罪人に非ずして神の子である。其の子供の内には神らしきものがあるのである。或る者は此の神らしきものを呼んで良心とも云ひ、神の光とも云ひ又神の焰とも云ふのである。

近世の心理學者はこれと呼んで宗教本能と云ひ又宗教性とも云ふのである。佛者はこれと呼んで佛心と云ふのである。此の宗教性なるものに適當なる刺戟を與へる時は其の宗教性に對應して神を信ずる宗教心が起つて來るのである。今日迄日

くは文學的の立脚地から、教育の新生活を見出さんと訪めつゝある人々である。此の思潮も我國に於て、人格を尊重すること十分ならず、國民を國家の方便とし、官僚主義により、劃一的に人を作らんとする弊及び教師は知識を傳達する技師にして、教育は知力主義に傾ける弊に中れる所ありて、次第に迎へ入れられんとする傾が見ゆるかくの如く最近三十年間に、種々の教育思想が起りつ仆れつして一面から見れば我國在來の國學や漢學を本とする舊思想が存して居り、他面から見れば西洋より入り來れる新思想が迎へ入れられて居り、それが未だ調和融合して居らぬ。而して其西洋から入り來つた思想は、スベンサーのは知力主義の教育を高調したから次にヘルバルトの品性養成の思想が迎へられ、其ヘルバルトの教育學は個人の養成に偏して居るから、次にウイلمانナトールプ、ベルグマンなどの社會意識を與ふべ

きことを主張する思潮が迎へられ、其の社會的教育學は教育の目的論に重きを置いて所説空漠に失するから、教育の方法論に重きを置き、親しく兒童の性質に就きて實驗を試み、其上に確實なる教育上の理法を打ち建てんとする所の實驗教育學が迎へられ、同時に又社會的教育學は社會に重きを置いて人格の自立的目的を認めぬから、人格的教育學が紹介されたやうに見ゆるけれども、西洋に是等教育學上の諸の思想の起つた由來や關係は、必ずしも其の如き順序になつて居らず、今猶諸種の思想が相對峙して其主張を争つて居る。

此内外に亘れる諸種の思想を攝調して、我國に一の新なる教育思想を立て、之を以て實際の教育をも改め、我教育をして歐米に劣らざるのみか、之と對立するものたらしめんことは、今後に努めねばならぬ所の重要な事業である。

# 最近三十年 日曜學校の發展

田 村 直 臣

## 一 日曜學校の起原

日曜學校の起原に就いては多少の議論はあるが今を去る百三十年前英國グロチエスター市に於てロバルト、レーキス氏に依りて設立せられたる日曜學校を以て最初の日曜學校なりと云ふは殆んど輿論なりと云ふて差支はない、日曜學校事業は基督教歴史に於て比較的幼稚なる現象である。最初の日曜學校は其の性質に於ては寧ろ教會の貧民學校と云ふて可いのである。

今日も英國の上流社會の人々は日曜學校を卑見するのは此の理由に依るのである。レーキス氏はビン製造所に働く哀れなる子供を本位として日曜學校を自費を以て開始したのである。其の教へた

るものを見ても單に學校教育に非ずして宗教と普通教育との混合體を教授して居つたのである。其の學校に於て聖書も教へ又讀方も教へたのである。斯くの如き小なる起原を有する日曜學校が歴史家の言を借りて言へば「電光の如く」全世界に輝き實に驚くべき長足の進歩をしたのである。

## 二 日曜學校事業の感化

兒童の教育を等閑に附して居つた基督教會はレーキス氏の日曜學校に依つて永き眠より覺醒されたのである。第一に日曜學校は聖書に對する興味を非常に惹起し、其れが動機となり遂に聖書會社又書類會社をも設立せしめたのである。其の結果として教會は信仰の復興となり、傳道心は勃興し



面から見れば氣質鍛練品性養成の主義を立て來りて、我國教育の一轉機を劃したのは森文部大臣であつた。森氏は明治十八年十二月、官制改革を行ひ各省の卿を廢して大臣を置くに及んで、初めて文部大臣に任ぜられた人で、識見高邁、努力絶倫、慥に明治の教育に一新起元を開いた。但し森氏は此以前米國に公使として駐劄し、一通り歐米の大勢に通じて居つて、保守派の者よりは國教を蔑如する如く見られ、其の爲め暗殺の危禍を買つた程の人で、固より守舊固陋の思想に雷同するものでは無かつたが、大體より言へば國家主義を取り、強き品性を有する國民を作らんとした。而して氏の計畫の下に、東京の文科大學内に教育專攻の特約生を募り、獨逸よりヘウスクネヒトを聘して之が講師とし、獨逸の教育學風を導く道を開いた。ハウスクネヒトはヘルバルト學派に屬せる人で、其教を受けた人々が、ヘルバルト學派の品性養成の學說を我國に擴げ、此說が一時教育社會を風靡した。

明治二十三年十月三十日に下し賜はつた教育勅

語は、我教育思想の動搖して居つたものに、天皇の意志を以て一定の形を與へ給うたものと見奉るべきであるが、之は其中にも宣うせ給へる如く、皇祖皇宗の遺訓を本とし、一面歴史的事實に立脚し、而して他面古今に通じて謬らず、中外に施して悖らず、一切の教學、一切の宗教と相容れざる如き事なき教旨を示し給りたものであれば、之を保守固陋の見地から見、偏狹なる國民道德を示し給うたものゝ如く解釋し奉ることは、一方に偏し過ぎたるものである。西園寺侯は文部大臣となつて餘程此傾向を矯めんとする意があつたが、在職久しからずして十分に其意を果すことが出来なかつた。

二十六年に井上毅氏が文部大臣となり、大に國學の精神を鼓吹したのは、守舊思想に一大聲援を與へたが、二十七八年に於ける日清戰役の勝利も亦我國民の自覺を促し、國民的一致を尙ぶ思想を高めた。

かゝる傾向に裏書きをするかの如く入り來つたのが、ヘルバルト學派を、個人的教育學を唱へし

ものとして攻撃して起つた社會的教育學派である。此學派の人は、何れも個人よりも社會を重く見、其個人といふも畢竟は社會的影響に依つて人と爲れるものであると、兩者の有機的關係を重く見、個人は社會の進化に役立つ所に其價值があるので、之が人生の目的、従つて又教育の目的であるねばならぬ、個人の智識完成も、其社會に役立つが爲めに計らるべきもので、之は第二義の事であるのに、ヘルバルト學派の如きは、此第二義の事を第一義とせりと攻撃して居る。此學派の重なる人は、ウイルマン、ナトールプ、ベルゲマンの如き人々であるが、ウイルマンは其信ずる羅馬加持力教會の信仰を本とし、ナトールプはカントの哲學を本とし、ベルゲマンは經驗科學を本として、かゝる説を立てゝ居る。此學派の所説が我國に盛んに紹介せられたのは明治三十一二年頃からであつた。

三十七八年の日露間に於ける世界的戰爭の勝利は、又更に我國民の自覺を強からしめ、我國民道徳を以て宇内獨特のものゝ如くに考ふるに至り、

教育上國民道徳の涵養といふことが八ヶ間敷なつたが、之を餘り強く説き過ぎるに對して一部の反抗も起つた。

明治四十年の頃から、一方には兒童心身の狀態を實驗的に調べて教育上の確固動かすべからざる科學的法則を見出さんとする所の實驗教育學が紹介せられ、他方に個人には自立的のそれ自身の目的があつて、決して國家社會の方便なるべきものにあらずといふニイチエの思想を汲める瑞典の女傑エレン・ケイの個人的教育學の思想が紹介せらるゝに至つた。

更に大正の年代に入りて、個人の内省直覺の力を覺まし。創造力を重んじ、自立的の精神生活を見出さしめて自然生活に支配せられず、更に國家社會に率ゐらるゝよりは寧ろ國家社會に對して人格の權利人格の威嚴を高調し、國家社會を率ゐ行くが如き人格を作るべき人格的教育學の思潮が紹介せらるゝに至つた。かゝる思潮の主張者は、獨逸の哲學者オイツケンや、教育學者フェルステル等であつて科學的立脚地よりは哲學的宗教的若し

實現すべきものであると絶叫して居ります。婦人  
 參政權運動に同情してゐるルーズベルト氏の如き  
 も同様の説をなして居ります。ル氏は女子が家庭  
 で働いた餘りの力を以て社會に活動するといふこ  
 とは決して悪いことではない。併し女子は家庭に  
 居つて子供を育て次の時代を作ることに依つて最  
 も能く己れの天職を全ふするものであると言ひ、  
 故ハウ夫人の如く澤山な兒供を立派に育て然る後  
 社會に活動する人は吾が理想の婦人であると言つ  
 て同夫人をばいつも激賞して居ります。

## △ 耶 穌 傳

左近義弼譯 聖書歐譯社出版▽

本書は題して耶穌傳と云ふけれども、普通は四福音書の共觀と稱するものと同一である。今日「傳」と云へば批評的に根柢を据ゆる必要があらう。僕には標題に多少の疑義がある。けれど四福音書の新譯としては著者左近君に多大の尊敬を拂うに躊躇する者でない。由來聖書の改譯は我が基督教界多年の宿題である。然るに所謂「聖書改譯委員」なるものは一昨年シブゼーの夏、僅かに馬可傳を出したるのみにして、爾來何をなしたるのだから分らない。多數の委員よりも獨特の識見を有する左近君の如きが、獨力之を企つるのが寧ろより成功をなすであらうと思ふ。特に君の如きはヘブル、ギリキ兩語には造詣深く、此の點に於ては當今我國に於て第一流であるから、最も信ずるに足るのを悦ぶ。唯だ君の批評點立場に至つては多少の異議はないでもない。四福音書は富士山を眺望するに春夏秋冬、晴雨朝夕の景色を異にするのと等しきのみと、遠景即實相と安心するところが出來やうか。歴史的態度はこれ等變化ある現はれの奥にあるものを究めるのではあるまいか。従つて左近君の云ふやうに聖書全體を詩歌と見て、それに永遠不朽の實在が寫し出ださると考へられやうか。詩歌と史實との關係はどう解すべきものであらうか。こゝ等は左近君が餘り詩人的に考へて、歴史批評家的に考へて居ないやうに思ふ。けれども之れは君が緒言に云つて居る所に關して云ふので、本文の翻譯に至つては未だ一々精讀するを得ざれども、剛健の筆力よく原文の意味を再現せしめ、從來の漢譯を基として邦譯した筆力の缺けたるものに優る萬々であると思ふ（價一・八〇）（三並）

## 最近三十年 教育思想の發展

中 嶋 半 次 郎

今より三十餘年前と言へば丁度明治十六七年頃に當るが、此頃は一般社會に歐化主義と國粹主義とが相争つて居た時代で、教育の方面では、英のスペンサーの知力教育主義と儒教並に國學を本とする品性養成主義とが相争つて居た時代である。當時の歐化主義は固より歐洲人の人生觀や其社會組織の根本を究めて之に倣はんとしたので無く、唯皮相の文明を學ばんとしたもので、教育方面に於て、英のスペンサーの教育論を以て、英國廣くは歐洲一般の教育思想を代表したものゝ如くに見たのは是又皮相の見解であつた。スペンサーの教育論が近世の科學的精神を其本とし、殊に十九世紀に起つた進化論を取り入れて社會有用の人を作るべき知力主義功利主義の思想を高調したのは、

英國の一部の教育思想、廣くは歐洲一部の教育思想を代表したものと見る事が出來ぬにはあらざるも、實際多くの英國人間に行はれ居る教育思想は、獨立自尊の品性を爲せる所の紳士の養成を目的とし、其爲めには古典と宗教とを重んずる人文主義宗教主義を取り、人の知力を練るより寧ろ品性を練るを教育の第一義とするにあつた。當時我國から英國に留學した人もあつて、其れ等の人々がかゝる教育思想に養成せられながら、歸り來つて之を鼓吹することを務めなかつたのは、大勢に押されたものか、若しくは其識見努力の足らなかつたのか、何れにしても意氣地なき次第であつた。此相反撥して居つた二大潮流の後者の方に身方して、社會的方面から見れば國家主義、人性の方



動といふものが必要になつて来る。

然り而して北米合衆國の如く一般に婦人を尊重し自主獨立を標榜する處に於ては參政權運動は着々功を奏して大統領選舉する權利こそなければ西海岸諸洲に於ては婦人が投票權を有し州の政治に容喙することを得る様になつてゐる。最近の報道に依ると市俄古といふ大きな町を擁して中米に雄飛して居るイリノイ州も女子に參政權を與へ、爲めに女の敵である所の酒は早晚イリノイ州に賣ることは出来ぬ様になりはせぬかといふことである。エムバニア、ステートと言はれる紐育州に於ては女子が參政權を得る様になることは時日の問題だと言はれて居る。兎に角全米國を通じて女子が參政權を得る様になることは餘り遠き將來のことではあるまいかと想像せられます。

### 三

女子參政權運動と相前後して女子は社會の各方面に亘りて男子の領分を蠶食するに至つた。學校も中等教育以下のものは殆んど彼等のものである。

る。教會は殆んど全部彼等のものである。看護事業は彼等のものである。商店は彼等のものである。慈善事業も亦半ば彼等のものである。此頃は新聞雜誌に關係し著述を業とするものも大分出て來たハーバード大學の教授ミユンステルベルヒ氏は米國では男子は物質的富源の開拓と政治的生活に追はれて居つて又精神的方面のことを顧みることが出来ないのに反し女子は學校を卒業しても讀書に耽り研究を積んで居るから米國の精神的文明は女性に依て代表せられんとするの傾向があると言つたのも無理ないことであります。今女流名家の一二を擧ぐるならば、市俄古にはゼーン・アダムス。ミセス・ヤング。今夜(四月十四日)來朝せられたミセス・メサー等の女傑があります。ゼーンアダムスが天下の女傑であることは皆人の知る所である。ミセス・ヤングは現に市俄古といふ世界屈指の大都の學校管理委員長であつて、兼て米國學校教師會の會長である。教師會の會長に撰舉せられた時に之が相手となつたのはコロムビア大學の總長バットラー氏であつたが、競争の結果バツ

トラー氏が負けたといふことである。紐育にはミス・デービスと言つて今度犯罪人懲治局の局長になつた人がゐる。華盛頓の中央政府にはレスロップといつて現にチルドレンス、ビューローの頭をしてゐる婦人がある。之等の婦人が貰つてゐる俸給の高は我國の内閣總理大臣の俸給とつつかつに行く位であらうと思ひます。右の如き次第でありますから米國などに居りますと男子と女子との間に一體全體どんな社會的區別が存在するのであらうかと疑はれる位であります。

#### 四

斯の如くに婦人運動は或國では殆んど其極度に達して居ります。茲に起つて來る問題は、婦人は果して社會的に活動して男子の競争者たるを得るか競争者たるべきものか、男子と女子の天職は自らしにして存在するにはあらざるか、女子が參政權運動を起すに至つた抑々の動機は彼等が從來餘り男子に踏み付けられて居つたから、又自治の道を立てねばならぬ様になつたからでありとすれ

ば女子の權利が認められ自治の道が立つた今日無理に男子と競争せずともよいではないか、女子の天職は矢張り夫を助け家を守り子供を育てることにあるのではないかといふことである。昔し帝政時代の羅馬の婦人には米國の婦人にも許されてゐない様な自由が許されて居つた。爲めに不羈放縱に流れ大に墮落した。其て基督教（殊にポロの教）が這入つて來て女は社會に飛び廻るものではない。内に引き込んで居るべきものであるといふことにしてしまつた。それで近世の女が社會に出て競争しては男の上に立ちて文明に貢獻する事も出來ねば、内に入つて次の時代を作る子供も育てることも出來ぬとなると或は羅馬の女の覆轍を踐む様になりはせぬか。之等は今日の女子が大に考へねばならぬ問題である。否婦人運動の最近の傾向は之れと大部其趣きを異にした様である婦人の運動の先驅者の一人であるエレン・カイの如きは最近の著婦人能力の亂用なる書中に於て女は世の中へ出て男子と競争すべきものでない。男子を愛し男子を社會的に活動せしむることに依つて自己を

# 最近三十年婦人運動の發展

ドクトル、オブ、フイロ  
ソフイー(コロムビア大學)

原 口 鶴 子

## 一

同じく婦人運動といつても北米合衆國や瑞典の如くに此の方面から見て非常に進んでるのもあれば、加特力教諸國の如くに甚だ遅れてるものもある。世の中には誠に多種多様である。それなのに之等諸國に於ける婦人運動の進歩を僅かな頁に書き盡せとの御注文は少々無理ではあるが紙數がないとならば致方はありません。

故バウルゼン教授は其名著獨逸教育史に於て若し歐羅巴の文明を教育の上から見るとならば三時期を區劃することが出来る。第一は上古の時代で此の時代に於ては個人は國家のために有用なる人物となるために教育され、中古時代には個人は教會

の御役に立つ様に教育され、近世期に於ては人は自分自らのために教育せらるゝ(Das klassische Altertum bildet das Individuum für den Staat, das Mittelalter für die Kirche, die Neuzeit für sich selbst)様になつたと申して居ります。近世になつてから人は一般に人格といふものは人間社會に於ける價値の中心で又其の製造所であるといふことに氣が付きました。即ち人格といふものがなかつたならば例へ客觀的に價値なるものが存在して居つても、其はあつてもなくつても同じ様なものであるといふことに氣が付きました。従つて是迄に於ては見る事が出来ない勢ひを以て生を慕ひ生に憧れ已れの權利を主張する様になりました。斯の如き考は始めは男子の間にのみ起つたものであつ

たが最近に至つて女子が又此の考へにかぶれて來て男子と同じ様に自己の生命を尊重し、自己の權利を主張する様になつて參りました。之が今日婦人參政權運動が起るに至つた重なる原因の一つであります。

## 二

婦人運動なるものが起つた第二の原因は申す迄もなく近代に於ける生活の困難と産業制度の變革である。昔しは工場などいふ便利なものになかつたために衣食住一切のこと、殆んど皆手先きで行はれた。其て男が之等一切のことを引き受ける譯には行かぬから五六十年前迄は男が山野に出て衣食住の材料を得て來れば女は家に居て之れに人工を加へ或は食物となし或は衣服を拵へたのであつたが、今日では工場といふ重寶なものがあつて女の手を煩はさないでも結構生活が出来る様になつて來た。日本ではまだそうでもないが歐米の大都市例へば紐育の如き處に於ては金と體さへあれば一向に不自由を感じぬ。先づバツエラー、アバ

ートメントといふ様なものを借りる。そして一週いくらか金を出せば家の中を毎日掃除に來て呉れる。其て自分で室内を掃除する必要はない。であるから朝顔を洗つて外へ出れば三軒と歩かない中に飲食店がある。こゝにある朝食の如きは五十年前には金満家の家にでもなかつた様な贅澤なものがあつて、而も安直に喰べられる。朝餉を了つて仕事場へ行くに當つて電車の停車場へ行くと以太利人希臘人などの靴磨きが待つて居る。仕事場の近所に外套はちろかシャツ靴下類に至る迄賣つてゐる家が軒を並べて立つてゐるから生活上何一つ不自由を感じない。故に男子は此物價騰貴生活困難の世の中に何を苦んで妻子を支へんやといふ様な氣になる。之は誠に自然の勢ひである。斯の如くにして女子は家庭といふものから放逐せられるに至つた。家庭から放逐せられるれば女子は勢ひ自分で自治の道を立てなければならなくなる。職業を得なければならなくなる。財産を得なければならなくなる。之等の事を成しとげるには法律から改正して行かなくてはならぬ。茲に於てか參政權運



一八九三年	一、七八六、七八八
一八九八年	二、一〇七、〇〇〇
一九〇三年	三、〇二五、〇〇〇
一九〇七年	三、二五九、〇二〇
一九一二年	四、二三八、九一九

更に米國に就て見れば、其處にも労働團結の趨勢は明に現はれて居る。米國にては『米國労働同盟』(American Federation of Labor)と稱する團結が最も有力なるものである。其外に Right of Labor と稱する團結と Industrial Workers of the World と稱してサンデカリスムを標榜する團體があるけれども、其會員數に於て『米國労働同盟』に及ぶべくもない。今此『米國労働同盟』が過去三十年間に於て發達したる有様を示せば左の如くである。

年 號	會 員 數
一八八五年	一二五、〇〇〇人
一八九〇年	二二五、〇〇〇
一八九五年	二八〇、〇〇〇
一九〇〇年	五五〇、〇〇〇
一九〇五年	一、五〇〇、〇〇〇
一九一〇年	一、五五〇、〇〇〇

一九一二年 一、七六〇、〇〇〇  
以上陳べた所は單に労働者團結の一方面を示したに過ぎない。然し労働組合の組織は今や廣く各文明國に行はれ居る所の事實であつて、其の勢力の如何に偉大なるかは各國に於ける労働組合員の數を見て知ることが出来る。萬國労働組合本部の調査したる所に據れば一九一二年に於ける労働組合員の數は左の如くである。

英國	三、八一三、九七三人
佛 國	二三一、八〇五
白耳義	一六九、一四四
和蘭	一三九、〇一二
丁抹	一二一、八六六
瑞典	六〇、九七五
フィンランド	二三、八三九
逸	三、三一七、二七一
墺太利	五三四、八一
ボスニヤ及ヘルチエゴヴィナ	五、五二三
クローシヤ	八、五〇四
匈牙利	一一一、九六六
セルヴィヤ	五、〇〇〇

ルーマニヤ	九、七〇八
瑞西	八六、三一一
以太利	八六〇、五〇二
西班牙	一〇〇、〇〇〇
合衆國	二、四九六、〇〇〇
合計	一三、〇九四、四九〇

これによりて見れば現今の勞働者組合の下に團結せる勞働者の數は約一千二百萬人である、然し文明國にして前記の統計表に洩れて居るものがあつて。例せば南阿の共和國ツランスヴァールは殆んど十萬の勞働組合員を有して居ると言はれて居る。ニュージランドにも約六萬の組合員があり、加奈太には十六萬人ある。露西亞に於ける組合員數は精密に知ることが出来ないけれども、一九〇五年には二十四萬六千の組合員があつたといふことだ。前記の統計表に於ては佛國の統計が缺けて居るけれども、一九一一年に於ては百二萬九千二百三十八の組合員があつた。此等の數字をも計算の内に加ふれば、歐米諸國に於ける勞働組合員の總數は一千三百六十八萬九千餘人となる譯だ。尙

ほ前記の統計表にある一千二百萬の組合員が一九一二年に於て納めたる會費は九千九萬九千一百〇五圓で、勞働組合の支出は七千二百十六萬九千一百四十圓であつた。

前記の統計表に列記したる十九ヶ國に於ける男女勞働者の總數を概算すれば慥に七千萬人を超ゆる様である。此全數に比すれば勞働組合に加入せる勞働者の數は僅に五分の一に過ぎない。然し何れの國に於ても勞働組合は殆んど宗教的熱心を以つて團結の福音を宣傳しつゝあるから、來らんとする三十年間に於て七千萬人の勞働者は殆んど全部團結するに相違ない。若し資本家が續くまで財力を以て威壓せんと試みれば、サンデカリスムの精神は七千萬の勞働者を鼓舞して大々的反抗運動を起さしむるであらう。今より三十年後に於ては財政的封建制度が尙ほ其存在を繼續し得るや否やは實に大疑問である。然し過去三十年間の資本の集中と勞働の團結とが如何に發達せしかを見れば吾人は今後三十年間に於ける勞働運動の歸結に就て多少の暗示を得る事が出來ると思ふ。

結の自由が保障されて居るから、労働者も聯合を企て、財閥に當ることが出来る。今日に於ける労働問題の真相を知らんと欲するものは資本の集中と労働の團結といふ此二大中心に注意せねばならぬ。嘗にこれは労働運動に於ける二大問題であるのみならず、今日の政治問題、經濟問題、社會問題、教育問題、宗教問題も悉く此二大問題を中心として廻轉して居るのだといふことも出来る。

歐米諸國に於て資本の集注と労働の團結が驚くべき發達をなしたのは過去三十年の事である。何人も此發達を見ては社會問題の趨勢といふことに考へ及ぼさざるを得まい。吾人は左に過去三十年間に於ける世界の大勢を數字的に陳べて見たいと思ふ。

## 二

先づ資本の集注といふことより説き起さんに、零碎の資本を集めて株式會社を組織するといふ極めて簡單なることすら比較的近世の發明であつた。一七七〇年の頃アダム・スミスは『株式會社と

して成功し得るものは單に銀行、保險、運河、水道の如き器械的仕事をなすものに限る』と言つた位だ。然し百四十年後の今日に於ては如何であるか株式會社の經營し得ない事業といふものは一もないといふ有様である。然し資本の集中は單に株式組織に止まらなかつた。最近三十年間に於て株式會社は更に聯合してツラストを組織することゝなつた。各國の政府は多少此運動に妨害を加へんとしたけれども、競争よりも合同が有利であるといふ原則が動かぬ限り、如何なるものもツラストの大勢に抵抗することは出来ない。米國は實にツラストの本場である。而して第一に出現したるツラストは彼の有名なるスタンダード石油會社であつた。其ツラスト組織を採るに至つたのは一八八二年(今より三十二年前)で、資本金は一億弗であつた。一九〇〇年及び一九〇一年の兩年には四割八分といふ驚くべき配當をなしたため、額面百弗の株は八百四十二弗にて賣買せられたのである。此外に代表的ツラストと稱すべきものが二ある。即ち九千萬弗の資本金を以て一八九一年に設立せら

れたる米國砂糖ツラスト會社及び資本金十一億弗社債三億四百萬弗を以て一九〇一年に設立せられたる合衆國鋼鐵ツラスト會社である。一八九九年の統計に據れば合衆國に於けるツラストの數は三百五十三で、資本金は合計五十八億三千二百八十八萬二千八百四十二弗であつた。更に一九〇五年五月米國の『評論の評論』雜誌の言ふ所に據れば資本金は既に百億弗に達した様である。此の如く三百乃至四百の大名が米國に割據して政治家や新聞記者を買收し、宗教家や學者を藥籠中のものとし、以て國民を支配せんとするのであるから、政治が腐敗し宗教が權威を失ふのも無理はない。我國に於て廣くコムミッシヨンの行はれて居るのも全く財力の壓迫に基因するものであることは吾人が大に注意せねばならぬ所である。

若し此財政的封建制度が永く繼續すれば國民の大多數は少數の財閥に征服せられて、社會は再び行詰りの情態に陷るに相違ない。然し資本の集中が行はるゝと同時に勞働の團結が行はるゝことゝなつた。慥に一條の活路は此處に見出さるゝので

ある。勞働者の運動が盛んになつたのも最近三十年のこととて、吾人は今數字に據りて其一端を示して見よう。

英國に於ては最も早く勞働者の團結が行はれたのであるが、今彼等の組織せる消費組合の統計を示せば彼等の發達が如何に急速であるかを知ることが出来る。今一八七二年に於ける成績と四十年後即ち一九一二年に於ける成績を比較すれば左の如くである。

	一八七二年	一九一二年
組合數	九二〇	一、五一九
會員數	三四〇、〇〇〇人	二、七六〇、五九一人
資本金	三、三四〇、〇〇〇磅	三五〇、〇〇〇、〇〇〇磅
賣上高一三、〇〇〇、〇〇〇磅	一、六〇〇、〇〇〇、〇〇〇磅	
純益金	九三五、五〇〇磅	一二、〇〇〇、〇〇〇磅
獨逸は社會黨の本場である。社會黨の發達は間接に勞働者團結の發達を示すものであるから、左に過去三十年間に於ける社會黨の發達を示すことにする。此數字は總選舉に於て社會黨が得たる投票數を示すものである。		

年 號

得 票 數  
一八八四年 五四九、九九〇



の様な人があるし、政治家ではルーズベルトあり佛の下院議員デットル・コンスタンなどがあるが、純然たる文筆上の著作で以て頌表せられたものは、伊國のテオドロモチタと奥のストテル男爵夫人とである。モチタは伊國の文豪で其著述には「十九世紀の戦争内亂及平和史」あり、又彼には平和主義の雜誌「國際生活」がある。ストテル男爵夫人の著書で以て、ストル夫人の「トム爺の小屋」が奴隸廢止の運動史上に占めると同様の地位を平和運動の歴史上に占めてる所のもは、小説「軍備撤廢」である。これが初には出版方を引き受けるものがなくて困つた程のものであつたが、其一度、世に問はるゝや非常なる感動を世間に與へたのであつた。夫人の交際と其熱心なる説とは、ノールベルを平和主義者たらしむるに力あつたものと稱せられて居る。夫人は現に奥國の平和協會の會頭で又ベルンの萬國平和協會の副會長である。

之を要するに今日までの所、平和をすすむるために提出せられた考案は色々あるが歸着する所左の五個條に出てないのである。一は萬國の共同に守るべき國際法典を編纂することである。二は各國間の勢力の均衡を絶へず保持し、或一國をして卓出せしめぬ様にするのである。三は萬國の聯邦制度を立することである。四は各國の一切の紛争の原因を除去し、即軍備の擴張を止めることである、五は常設の義務的仲裁々判所を設けて一切の國際問題をば法律的にさばくことである。而して平和會議は此最後のことを提言して終に容れられなかつたのである。目下の所は此問題の前途はまだ／＼遼遠であるけれども、甚、不可能とせられた難問題のどし／＼解決せられて來た歴史上の事實に照し、又共同文明の驚くべき進歩から見て吾人は多大の希望を此運動の將來にかけるものである。



## 最近三十年資本の集中と勞働の團結

安 部 磯 雄

兵力を基礎とせる封建制度は倒れて、自由平等を標榜する政治組織が建設せらるゝことゝなつた。兵力は最早一個人若くは一階級の私有ではななくて、純然たる國有である。従つて吾人は今日兵力の爲に壓迫を受くるといふ場合が甚だ少ない。此政治上の成功は全く民主々義の賜であると言はねばならぬ。

然し吾人は全く封建制度を脱却して居るのであらうか。否々決して左様でない。恰も前門虎を拒んで後門狼を入るゝといった様に、今日吾人の眼前に封建制度は再び容を更へて現はれて居る。別

言すれば政治的封建制度が倒れて經濟的封建制度が起つて來た。前者が兵力を基礎としたるが如くに後者は財力を根據として居る。彼の三百諸侯が兵力を以て平民を壓迫した様に、今日は三百のミリヨナリーが財力を以て貧民階級を支配して居る。今日は慥に財政的封建時代であるといふて差支ない。然し軍隊的封建時代と財政的封建時代との間に一の著しき相違點のあることを忘れてはならぬ。前者に在りては政治的平等主義が認識されて居なかつたから、平民が徒黨を組んで權力階級に當るといふことが至難であつた。此の如き陰謀が露現すれば大名は兵力を以て一撃の下にこれを滅したのである。然るに後者に在りては個人に團

て、一八八九年の巴里の會が其第一回の會合であつた。此會ではジュール・シモンが議長であつた。初には世人は之を馬鹿にしてかゝつて居たのであつたが、しかしながらその効果が着々として顯はれて來て國と國との間の蟠まりを排除するにえらいさゝめがあつたものだから後には世界の立憲國は皆舉げて之に賛成し、代表員を出すに至つたのである。此聯合會の決議を本國に齎し歸つた議員達の努力で以て幾多の仲裁條約が締結せられた。

一八九四年日清戰爭の際には、聯合會はオランダに其參會を催して常設仲裁々判所設立の宣言を發したし、日露戰爭の折にも亦セントルイスの年會で之が必須なることを決議したのであつた。國際法議會の方は全く學究的なのであるが各國議會聯合會は同じく私的制度ではありながら、實際的行動に重きを置き、其決議を以て各議員はそれその國の輿論を動かし、政府を動かし又は議會獨立の權能を以て立法的に仕事を仕様と云ふのであるから、現代の平和主義團體としては恐らくは最大なる勢力を有して居るものである。

各國政府は、これまでとても、度量衡とか、赤十字とか貨幣とか郵便とか版權とか云ふやうな或特殊の事柄に付ては代表者を出して會議したことは幾度となくあつたけれども、平和主義の一般の問題に付て會議を營んだのは一八九九年の所謂平和會議を以て始とする。ロシア帝は一八九六年のブダペストの各國議會聯合會に初めて其一官吏をやつて傍聽せしめたが其官吏の報告は大に帝を動かしたと云ふことである。ともかくも帝は一八九八年八月米西戰の最中に平和會議を開催せんことを列國に向て發議した。その目的とする所は二つである。戰爭を豫防することは一つ、萬一、開戰となつた曉には出来るだけ其慘禍を輕減することが一つである。さて一八九九年の五月から七月まで海牙で以て之が開かれたが、其第一の目的には列國は原則としては賛成であるけれども、其手段として豫算と常備兵額とを制限することには反對なものが多くそのため終に成り立たなかつたが第二の目的に於ては成功して重要な條約案宣言案が議定せられた。仲裁々判の手續きをきめたもの

其一つであつた。しかしながら此仲裁々判は義務的のものではなかつた。

第一回の平和會議は、或理想家の夢みて居つたほどの結果は得られなかつたにしろそれによつて各國政府の代表者が一堂に會し互に意見の交換をしたものであるから、此舉が人類の其共同の利益のためには步調を揃へなければならぬと云ふことを鼓吹するにあづかつて力あるものであつた。そこで一九〇四年に米國が更に第二の平和會議を開かんことを唱へたが第一會議が露國の發意であつたのだから之を露國に譲り露帝の發起で之が一九〇七年に海牙に召集せられることになつた。參列國は世界の五十餘の獨立國の中の四十五に達し、會期は四ヶ月を超へて、其間に又色々の條約や決議が議決せられたのである。此會議では軍費の制限や義務的仲裁々判の制は成立せず、大體に於て戰爭豫防のための手段方法は第一回の時と同じく失敗に了つたのであつた。其時の議決して以て次回の會議は來年あたり召集せらるゝ筈になつて居るのである。

### 三

さて又一私人にして近世の平和運動の發展に多大の貢獻をして居るものとしては吾人は先づプロツホとノーベルとを挙げざるを得ない。プロツホは波蘭の人で、海牙の第一平和會議の開かるゝ前年に彼が前後八年の星霜を費して著した六卷の大著述「將來の戰爭」を公にした彼が得意の經濟上の見地からして將來戰爭が實際廢れざるを得ざるの理勢を有することを説いた。ノーベルは瑞典の人でダイナマイトの發明で以て巨萬の富を作つた化學者である。彼の一八九六年に歿するや遺言して其遺産二百萬磅を學問や藝術のために大功ある人物に與へんことを提供した。而して彼は右賞典を受くべきものゝ中に常備軍の縮少又は廢止に又は平和會議の設立若くは獎勵にすべて國際友愛の誼に向て最大の努力をなした人を挙げたのである。これまで詮衡の結果として此平和に關する賞典を受けた個人は十有餘人であつて、其中には、國際法學者としては佛のルノール、和蘭のアツセル



# 最近三十年國際關係の發展

煙山專太郎

## 一

現代の世界には各國を支配しつゝある所の二つの潮流がある。一つは、國民的潮流であつて、他の一つは國際的潮流である。前者は特殊主義分立主義であるし、後者は一般主義統一主義である。前者は遠心力であつて後者は求心力である。各國にはそれらの歴史傳説あり、特別な物質上の利害があるものだから、他の國々と融合調和するところが益々困難であつて従て一面から見れば競争は國際の常態であるかの様に思はれるのである。即列國は經濟上に政治上に互に銘々の利益權利を伸長せんと努力し、寸時も油斷をすることがないのである。然るに此遠心的な自己中心主義に對し

て又各國の民心を動かして居るのは人類と云ふ高尚なる意識のはたらきである。宗教の教からでも哲學の理屈からでも識者は國際の經濟上政治上の競争からして戦争の様な忌まわしい現象の醸生せらるゝを見るに忍びず、列國の人民が互に平和に其生を完うし、生活の幸福を平等に頒つに至らんことを切望する様に至つたのである。軍備の撤退仲裁々判部の設置と云ふ様な色々の考案は此國際的人類的潮流の生み出した者である。フランス革命が立した主權人民にあるの大原則からして起つて來た所の國民主權の考は、十九世紀二十世紀の間に於て歐洲に澎湃たる國民的の潮流を捲き起さしめ列國は従て他に備へんがために、軍備の充實擴張に忙殺せられる様になつたのだから、一方か

ら見れば狭い歐洲の地面と人民とは日にまし分化に分化を重ねるの有様を實現するに至つた。であるから歐洲各國の識者は、此遠心的自己中心主義の弊に堪へずして、盛に平和主義を唱へ出し、此運動は別して一八七〇、七一年のブラシア、フランスの戦役が中歐の此兩大國に一點も調和の隙間のない所の深い敵愾心を植ゑつけ、兩國の軍備の擴張がひいて他の列國の擴張を促し、列國の人民が重い負擔に苦むに及んで一時に勢力を得るに至つたのである。それ故に平和運動の歴史の上では一八七〇年の普佛戦役は正に一時期を始める所の一大事件であつたと云ふべきである。過去三十四年間に於ける此國際的運動のいかに發展し來つたかを概観せん爲めこゝには一二の私人的運動と平和會議を叙し、なほ之に附帶して、平和運動にあづかつて力ある所の二三の人々の事業を簡単に紹介し様と思ふ。

## 二

平和運動は、私人の運動として始まつたもので

ある。各々の國家が公然之にあづかるに至つたのは極めて晩近のことである。私人の運動として第一に擧げなければならぬものは國際法議會の仕事である。それは一八七三年にベルギーのガン市に創立せられたものであつて、公の性質を有せぬ所の純然たる學術的の集團である。列國の國際法學者の集まりである。其目的は私人間に於ける法律知識の機關となり、以て國際法の進歩を計り、國際法學の一般原則を作り且之をひろめ、國際公法をば次第に經典として編纂するに至らんことにある。ブルンチユリーとかマンチニーとか云ふ碩學は此協會の事業をすゝむるに力のあつた人達である。此の會は其國際法學に對する功績を認められて一九〇四年ノーベル賞典を授けられた。

それからこれ亦私的團體として列國議會聯合會と云ふものがある。これは一八八八年の十月に佛國の下院議員若干と英國の下院議員若干とが巴里に相會した時に英國の一議員の首唱で以て成り立つた平和主義を標榜する列國下院議員の聯合會である。毎年場所を更へて集會することになつて居

究的若しくは翻譯的にして、これが爲めに心血を注ぐの熱烈なく、而して人民一般には、たゞ舊來の盲從思想あるのみで、所謂文明諸國に於ける民主思想の發展がないからして、立憲政治が今に至りて尙ほ成功せざるのである。これを成功せしむるには、過去三十餘年間に於ける政治制度の進歩に等しき政治思想の發展を要するのである。政治思想の發展は無形の感化を要するもので、政治制度の革新の如く、容易なものではない。歐米では政治思想の發展が先きに立ちて、政治制度の改革が後に行はれたるに反し、日本では政治思想の發展を見ざる間に、政治制度の改革を成すことが必要であつたから歐米の政治的進歩とは、逆行してゐるのである。政治思想の發展にかざる政治制度の改革は、皮相的にして、形式に止り、精神なく、生命なきものである。今後は政治制度の變革よりも、先づ政治思想の革新を必要とするのである。これにはなかく年月を要する。仍り政治制度の革新に要したると同一の年月、もしくはそれ以上の歳月を要するものと考へなければならぬ。

政治制度の革新は中央政府の強制權で實行が出来るけれど、政治思想の革新は先づ國民一般の精神から改めなければならぬ。これは強制權で出来ることでない。國民一般の輿論を作り、國民一般の自覺を要するのであるから、六千萬同胞の多數意志に基かねばならぬ。此の多數の意志が、政治の何たるを解し、人民自ら政治を左右し得べきことを確信し、また此の確信を斷行するに足る組織をなし、組織的に永續して、政治的活動をなし得るやうになる時機を待たねばならぬ。これは單に歐米の政治學說又は歐米に行はるゝ政治主義を翻譯輸入するのみでは不可能である。國民一般の思想が、道徳上、經濟上、または宗教上に覺醒し、而して立憲政治の意義を了解し、民意輿論を發揮して、立憲的に運動をなし得るやうにならなければならぬ。平生は政治に冷淡で、政治を忘却し、一旦事變に遭遇して、俄かに逆上し、暴民の騷擾を惹き起すが如きは未だ國民に政治思想の根柢なきことを證明するものである。

方今我國の狀態は專制時代より漸く立憲時代に

移らんとしつゝある場合であつて政府は今に壓制を事とするから人民の方でも群衆運動などが起るのである。是れは歐洲諸國では百年以前にあつたことである。今日立憲時代の歐米には人民の大會はあるが概ね靜肅にして規律ある運動をなし警官又は軍隊の出動を要することは稀である。日本國

民の政治思想は歐米人民に比して少なくとも百年ばかり後れて居る。而かも政治は日本國民の長所の一つであるに猶且つ百年後れて居るとすれば其他の事に於いてまだ／＼何百年後れて居るか分らぬ。

## △不 朽 の 戀

矢 口 達 譯

新 陽 堂 發 行

不可思議なものなから、夢のやうに、煙のやうに湧き出てゝ來る美しさが、音楽を聴くやうな懐しさの筆致で描かれた物語集である。嘗てオスカ・ワイルドがその傑作サロメを獻けたといふビエール・ルウィイは飽くまでも、オスカ・ワイルドに似た美の歎美者である。巻頭「不朽の戀」はアフロダイト・アスタルト寺院の巨きな無花果の樹々の下蔭に生れた類魔的な氣分に充ちた傳説を根據として描かれた、強い咽ぶやうな官能の小説である。花と影とに裹まれたるナイル河の畔の古都に、世界の涯々から集められて來た若い女達の執拗な戀愛である。「レーダ」「ビブリス」共に春宵の灯を追ふ人々の幻のやうな傳説的小説である。その他本書には、「新しき歡樂」、「ホーゼルの丘」、「女と木偶」の六篇が收められている。とりとり作者特有の象徴的な唯美的な情調に充たされたものである。一度自然主義的傾向から追れ出た我が國の文壇は、今日寧ろ各個々の人々が色々な方向を求めて、新しき藝術を開拓しやうとしてゐる。本書の如きは確かに、吾々に、不可思議な世界のなかに永久的な藝術の香ひと生命とが溢れてゐることを暗示するものである。「不朽の戀」以下長短六篇の小説を讀んで得た印象は、熱帶的な官能の強い刺戟のなかに浸されたエビキュリアン肌の青年の謎のやうな悶へや、美しい、しかしどこまでも強烈な慾望と我執とに燃えてゐる綠葉の陰の女が造る美の幻や、聖境の香華につゞまれた女性達の物語る夢の世界、美の世界である。人類の歴史は二千年の進みを誇つてゐる。しかし美しき女のなやみ、戀愛、執着、そこに何の變化があらう、進みがあらう。薔薇のやうな作者の詩のなかに、さゝやかな諷刺のとげが潜んでゐるのも面白い。譯者の潤味豊かな筆は最も好適者を得てゐる。敢て新しき官能と美と幻の藝術を愛する人々に一本をすゝむ。(價〇・八五)



## 二

斯く政治上の實際は、明治十四年以後今日に至りて、舊日本と新日本との大差を生ずるやうになつた。明治十四年以前政府の威力は、非常なものであつて、國務大臣は勿論、地方長官に至るまで、その權柄の盛なること、舊時の大名と異ることなく、常人自身に於いても、また世間一般に於いても、彼等を普通の人間とは思はなかつた程である。然るに今日、地方長官は勿論、國務大臣に至るまで、陛下の忠臣たると同時に、人民の公僕たらざる可からざることを自覺するやうになつたことは、非常な變化である。外形上此の間に於ける政治上の發展は、歐洲諸國が百年間に於いて成就し得たる革命を僅かに三十餘年間に成就したやうなもので、世界の眼を驚かすに足るものがあつた。

## 三

之に反して、過去三十餘年間に於ける我が國政治思想の發展は、甚だ貧弱なるものであつたと言

はねばならぬ。歐洲諸國が過去百年間に於ける政治上の革命には、甚だ根柢の強固なる政治思想の發展があつたのである。これに反して、日本の政治的革新は、國民的政治思想の發展に根據を置かず、唯少數なる識者の指導により、歐米の根柢深き政治思想から湧き出てたる政治制度の外形のみを採用したのである。佛國革命の大原則は、自由、平等、博愛の理想に基き、人は皆な平等に作られ、天より奪ふ可からざる權利を賦與せられ、政府はその權利を保護する爲めの方便なりといふ思想が、少數識者の間に湧き出てたるのみならず、多數人民の間に蔓延し、その結果十九世紀の前半期に、歐洲大陸諸國の專制政治を一掃することゝなつた。同時に英國の憲法的改革は功利主義に基き、最大多數の最大幸福を理想とし、政治宗教、經濟、諸般の事々物々一として、此の原則に反するものを一掃し、社會を改造すべしとの思想が英國の上下に通じ、第十九世紀の前半期に行はれたる諸般の大改革を斷行せしめたのである。然るに我が日本に於いては、翻譯的に之等の思想を少數の識者

が唱道し、未だその思想の民間に根據を据ゆるに至らざる間に、世界の大事變に遭遇し、國際的競争に全力を傾注し、而して歐米の新傾向なる社會主義及び帝國主義に接觸し、今は殆んど國民一般に何等の根柢ある政治思想を認むることが出來ない状態になつてゐる。

佛國大革命によつて現はれたる自由、平等、博愛の理想を解せざる人民に、立憲政治の價値は解るものでない。また最大多數の最大幸福を主義とする英國人の常識なくして、民衆政治の効力は擧るものでない。そこで我が國に於いては、今日、日本國民が祖先傳來固有の政治思想のみ實際に現はれて、未だ立憲政治及び輿論政治の實が少しも擧らぬのである。西洋の議會政治を摸倣し、西洋の政黨組織を描寫したけれども、その實源平或は南北朝時代の政治的模型を脱すること能はず、藩閥及び官僚系統は自ら亡滅を招くまで政權を繼續せんとし、時勢の必要に應じ、新政策を計畫し、または新人物に政權を委任するといふ考を持つてゐない。政黨者流も亦、たゞ政府を攻撃し、政府に

迫つて政權を譲らしめんとするのみで、何等國民の政治的教育をなし、眞に國民の輿論に基きたる新運動及び新政策を開始することを努めず、たゞ藩閥打破、官僚征伐、政黨内閣を呼ばはるのみで、その實、眞に人民を思ひ、人民の爲めにする誠意誠心なく、たゞ政權に近づき、一時の功名を博せんとするのみで、一向國民の利害得失と、直接の關係を持たぬから、今にその政權を得ることが出來ぬ。故桂公の如きは、濟生會を組織し、又その政綱中に、社會政策をも掲げ、政治家として政策上に、新機軸を出されたけれど、これ亦眞に國民の爲めを思ひ、國民の爲めにしたのでなかつたら、たゞ形式だけに止まり、折角の名案も、何の効果を奏することが出來なかつた。

#### 四

我が國に於て過去三十年間政治上の大進歩あつたにかゝはらず、その内容は甚だ薄弱にして、立憲政治が、專制政治を去ること遠からず、たゞ形式のみに止る所以のものは、識者の政治思想は學

と比すれば、それは吾等の信仰の鳥羽繪もしくは嘲弄であるかも知れない。

## 六

然らば宗教は、生垣或は土塀をもつて圍まるゝとの出来ない實在である、それは純潔の高上、善の熱誠、神聖の精神、眞理に對する熱情、定義のあらゆる障壁を超越したる大氣の如くに通過し穿透するところの、高尚にせられ、且つ熱烈なる生命である。それは事物に關するたゞの信仰に非らずして、それをもつて吾等が事物を受け納れ、かつそれに對する精神である。そは一つの態度である。心靈の感受と受容である。人生の永續するところの利害を撰擇し、捕捉し、變形せしむる神意の熱力である。

そは至高至聖の面前に於いて、敬虔にして信仰深き心掛である。そは『價值保存の信仰』である。そは道德的義務の神聖である。超靈と交通する嚴肅と歡喜である。——そはそれによつて吾等が自らを超越して永遠の靜默なる衷心より自然と人と社會とを冥想する想像の大歡喜、即ち偉大なる氣分である。宗教は全人を満足せしむる爲めには、自らを教理に翻譯するのを努めなければならない。而して教理は獨斷的信仰とは全く異りたるものである。然し宗教は先づ第一に一個の教理ですらもあらずして、高尚なる道德的、及び智的努力、ならびに、深く満足するところの感情と永遠になるところの全靈の一種の風氣フレイメントと氣質とである。吾等が神聖なる感情の純潔なる熱烈は、時に道德的熱誠の白熱的情熱、知識的欲望の端嚴なる清淨に襲はるゝ時、吾等は宗教的であると云ふとが出來やう。而して是等は不可知論者に聖徒の資格を與へるとが出来るものである。その昔、教へられし如く神は靈なれば、彼を拜する者は靈と眞とを以てせねばならぬ。

# 最近三十年間に於ける政治思想の發展

浮田和民

— 551 —

過去三十年間に於ける日本の政治の發展は偉大なるものであつた。但し明治の初年から明治十四年國會開設の詔勅が出るまでの日本の政治は、王政維新とは言ふものの、その實たゝ歐米の文明を輸入し、泰西の制度を採用するといふだけのことであつて、大化革新の方式と異なる所はなかつた。たゞ大化の革新は氏族封建制度を廢して、唐制の中央集權となし、又唐の文學藝術を輸入し、明治維新は諸侯の封建制度を廢し、歐米の中央集權制度となし、泰西の文物を摸倣採用するに過ぎなかつた。大化の革新も、明治の革新も、少數貴族の指畫策になり、人民は唯政權を有する少數貴族の指

導に盲從するのみであつた。而して少數貴族にしても、朝廷に於いて志を得ざる者は何等民間に於いて、驥足を伸はすの餘地を見出すことが出来なかつた。たゞ此の點に於いて明治維新以後、一の新現象を發生し來つたのは泰西の政治思想に影響せられ、武力に訴へずして、政府及び人民を動かす、國家の革新を促さんとするの機運を生じたことである。此の機運の發展して、大にその効果を現はすに至りたるは、明治十四年以後であつて、その結果、内は憲法發布、議會開設の斷行となり、外は條約改正、日清日露の二大戰役となり、内外に於いて帝國現今の地位を占むることゝなつた。これは事實上に於いて非常なる大進歩である。



は見出すとである。生ぜられたる傷痕にあらずして、満足したる世俗的空虚、もしくは失敗したる遊蕩者の嘲笑を残すところのものは、斯くの如きものである。』

實にや、世には崇高にして豊富なる不信仰あるが如く、窮乏にして吝嗇なる信仰がある。世には平凡にして無價値なる獨斷的信仰があるが如く、その眞髓に於いて靈的にして高尚なる不可知論がある。また曖昧なる言語に托するには餘りに多くの雄辯を有するが故に、消極的にあらずして積極的の靜默を守るクエーカァー教徒のあるが如くに、神學上の獨斷的信仰條の如き、かゝる卑しむべきものを認容するには餘りに信仰と靈性とに充つところの、必ずしも非基督教的ならざる不可知論がある。

故ヘンリー・シヅェキツクはかく云つた。『もし吾は一つの神を信ずるやと訊ねらるゝ時は、實は余は知らずと答へるであらう。即ち吾々の知れる宇宙に於いては、道德的秩序即ち、あらゆる事物を善き目的、及び善人の幸福に導くところの知慧と仁恵との至高の原則の存するを信ずるのであるか、若しくは、單に希望するのであるかと云ふとを知らない。余は慥にしかあるべきとを希望する。されども余はそが果して證明せられ得るものであるかを考へない。余の言ひ得る凡ては、宇宙の起原に關する反對の説明は、余にとつては賞讃すべきものとは考へられなと云ふとである。而して如何なる他の條件に基いても、人生を承認し、もしくはこの信仰の基礎に立つの處は、余自らの行爲の合理的系統を建設するとが出来ないと云ふとである。余にとつての義務は物質界の如く眞實なるものである。勿論それは同一なる方法に於いて理解するとは出来ない。されども世界の道德的支配に於ける余の信仰が消滅したりと假定せば、義務に關する一切のわが明瞭なる智識は渾沌たるものとなる。さて余は義務に

對する不信仰にまで自らを服従せしむるとは出来ない。實にもし余はかくするならば、余と完全なる哲學的の懷疑論、もしくは眞理に對する全然たる不信との間の最後の障壁が除去さるゝと余は感ずるであらう。それ故に、余は時としては吾神を信ずと獨語する。然るに時としてはまた余はこの信仰が眞であることを望むと云ふより以上のとを語り得ない、而もそれは然かあるが如くに行動せねばならず、また行動するを欲するのである。』

## 五

吾人の推量にして誤らないならば、信仰を公言する基督者が、もしこれと等しく公平無私であらば、彼等も亦殆んど同一なる精神をもつて答へるであらう。されど、かゝる態度は氣高く、かつ本然的に宗教的でないと云ふと出来る。宗教のこの大なる團結行動に於いて、吾々の全心全靈が僚友として慰藉せんが爲めに、飛び出づるところの人とは、その心靈が熱誠をもつて人生の偉大なる價值と理想とを理解する人々である。吾等をして云はしめよ。茲にその同胞を愛し、彼等の幸福の爲めに冒險し、苦痛を忍び、恐らくは彼等の救済の爲めに七顛八倒の苦痛を経験し、その心靈は人道の高尙なる熱誠によつて擴大せられ、刺戟せらる、勇しく且つ靜默に失敗し、また彼の死屍を踏んで人類が勝利に進むとが出来さへすれば永遠に沈淪するをも辭せざる一個の人ありとせよ、『靈と眞とに於いて』内部的宗教を求めし基督が、かゝる人々を拒否するとは考へられるか。吾等は如何にかして神を信ずることが出来やう、而も尙、大に人類を信ぜないと出来る。而してかゝる不可知論者の人道的熱誠

無限にして且つ永遠の實在を代表する。それ故にそれは尙も狹隘にして排他的の意義に使用せらるゝには餘りに莫大なるものである。

のみならず、それは嚴重なる意味に於いて、有神のならざる宗教が存在する。比較宗教の研究は幾多の例證を供給する。佛教はその古典的な實例である。東洋思想に少しく通ずるところの人はゴータマ及び彼の多くの弟子の生涯は、驚くべき程、純潔にして靈的な生命——即ちそれに對しては基督自らも次の如き言葉を用ひ給うたであらうと考へざるを得ざる生涯である——『吾等に背かざるものは吾等の味方なり』

遮莫、かゝる遙なる邦土に例を探ぐる必要はない。何となれば、近代英國の文化は、他の點に於いてはかくも異なる、マシユウ・アーノルド、クロツフ、リチャード・ジェフリース及びヂョーヂ・メレデスの如き、甚だ親しき人物の典型を供給するのである。牡鹿が谿川をもとめし如く、ジェフリースの心靈は土と、海と、空との交通より彼に來るところのその深き感情の雨露を得んとして渴望する。ある程度に於いては、吾等は凡て彼の如く感情的に汎神教的の態度を共有するのである。草や、木や、雲や、彼の指の間に碎かれたる土そのものすらも、彼にとつては同胞であり、彼の心靈に對して眞實の消息を齎したる宗教的社會であつた。彼の宇宙的感情は極悅狀態に達した。彼は彼の生命の猛烈なる熱情をもつて自然界の美と徳と活力とが、彼の精神にその秘密を傳へんが爲めに、また彼等の生命に色と、香と、喜との或る部分を彼自らのものになさんが爲めに、彼一流の祈をさへげたのである。凡て彼等の精力は、莊嚴及び美麗より或者を攝取して、それを彼自らに集め得んが爲めに、また、神よりも無

限により高き、言語に絶したる存在に觸るゝを得んが爲めに、忘我の境に入りて祈つた。

シエレーの如き詩人、及び以上列記したる他の文豪は、より高尚なる信仰の爲めに反抗の精神を表白して居る。彼等が通俗宗教を否定したのは、彼が普通の一神論よりも貧弱なるものを信じたからでなく、その熱心が、より高き宗教に達せんとし、また一層嚴肅であつて一層畏るべき、即ち神よりも無限に高き、言語に絶したるその實在に憧るゝためであつた。

#### 四

基督者がティ・エツチ・グリーンと共に、次のとを承認するの用意なきとは甚だ遺憾である。『宗教、即ち神を求むる道德の恐れなければならぬ敵は、熱烈なる無神論者ではない。かゝる無神論は往々にして、自ら誤解する一種の宗教である。そは神を覓めつゝあれど、自らを宗教的と稱ぶところの無學及び恐怖に對する立腹の餘り、古き名のもとに於けるその對衆を承認するを敢てしない。そは靈的生命を限定し、且つ曲解するところがあるかも知れない。而も尙、その高貴の源泉は瀆されずに残つて居るのである。吾等の危険はそこから生ぜずして、陰にその精力を殺ぐ冷淡の遅々たる坑道から來るのである。そは神及び義務を否定せずして、無視するのである。そはこれ等のことに關して自らを煩さうとはしない、而して事實的事柄を、吾等の知るがごとくに知るとの不可能なることを知るが故に、そを放棄せんとする新しき口實を見出して居るのである。子供の如き信仰の美はしき額より、天真の美を取り去り、多く疑ひ、屢々失敗すれども、尙信賴しつゝ、神を覓むる爲めに（かくの如く神を覓むる



## 二

汝の誤謬を承認して、汝は進んで汝の定義を修正し、且つ擴張せよ。而してそれ故に汝の新しい信條は明かに汝の新しい精神の文字の範圍内にあつて、今は汝の精神に戻るところのものとならう。彼は汝の獨斷的信條の符牒を繰返すことが出来る、されども彼は汝の宗教と聯想することの出来る生命の神聖なる氣分を表現しない。彼は汝の定義と完全に一致するが故に、汝は今や彼を汝の信仰の典型及び代表者として受け入れなければならない。

多くの基督者は、彼の宗教觀を基督教にのみ制限せんと欲する。されど『基督者』と云ふ術語は、相軋する幾百の宗派によつて發せられたる、數多の意義を有てる言語である。然し彼をして基督の凡ての公然の隨從者を含むやうにその適用を擴大せしめよ。されども今や彼は、信仰を表白する基督者の團體以外に宗教的人物のあるとを知つて居る。是等の人々は祈の精神に充ちた神聖なる人々であつて、その多くは、基督の心を有つて居ながら、自ら基督者と稱せないのである。根本的宗教の範圍より斯る人々を排斥するは、基督自らも認容し給はなかつたとを爲すのである。

『凡そわれに「主よ！主よ！」と云ひ居る彼、必ずしも天國に入らじ。されど天に在る、わが父の意を爲し居る彼なるべし』(馬太七の二一)『かくてその手を彼の弟子等の方に伸べて云へり、見よ！わが母！わが兄弟等！そは誰にても天に於けるわが父の意を爲す程の者ぞ』彼ぞわが兄弟、わが姉妹、わが母なるべければなり』(馬太一二の四九、五〇)

而して吾等は路加傳十一章に於いて、群衆の中より、聲をあげてイエスに物言ひし或る婦人の崇拜的熱誠に就いて記されたる劇的出來事を記憶する。幸福なるかな、汝を宿し、胎！幸福なるかな汝の吸ひし胸！されどイエス言へり、然り！されど寧ろ幸福なるかな、神の言を聽きて守り居るところの彼等！』

而して神の子の言葉は人類、殊にその心には甚だ近きものである。排他の名としてイエスの名を用ゐるは基督教を一派に墮落せしめ、一宗に沈降せしむるのである。それによつて吾等は吾等の主の精神を痛ましめ、吾等の主を十字架につけ、基督の縫目なき上衣を今一度裂くのである。

### 三

されども宗教はその最も寛容的なものですらも、神を信ずる人々によつてのみ味はれ得る一種の精神である。然しルートルの次の語を茲に思ひ出すとは甚だ適はしいのである。

『神とは人があらゆる善をもつて自ら供へ、且つあらゆる必要に應じて隱家を見出すとである。故に一つの神を有するとは、心底より彼自らを信じ、彼自らに頼るとに外ならない。その眞偽は問はず、神を造るは心情の信賴に外ならぬとは、余の屢々繰返したことである。信賴が正しければ汝の神は正しい。もしこれに反して信賴が虚偽で不正なれば、正しき神は存在しないのである。』

然らば、宗教は神を信ずる人々の所有に屬すと斷言するとは、正統的新教の見地より見ても、吾等を助けずして、却つて吾等を邪道に迷はすものである。また神と云ふ言葉は普通の言語に於いては、



# 宗教の同性

英國 ロイド・トマス

内ヶ崎作三郎 譯

## 一

宗教はその性質上、定義を許すには餘りに深遠なる實在である。生命の宇宙に對する一精神及び一態度として、それは精確なる論理的言語を避くる。それは觸手し得べき命題に物質化するを得ざる程、定形のない、漠然たる、多くのものを含有する。それは一種の透通力を有する雰囲気、もしくは、人生の普通の形體を變形し、光飾するところの、神秘的な霧靄である。それは繪畫の美や、音樂の感情や、詩歌の餘韻の如くに、捕捉するとの出來ない、また、品性に於ける特色ある要素の如く精妙なるものである。その存在するところには常に一種の總計または全一がある。故に吾等は殊更にそが甲であり、乙であること云ふことを得ない。それは生命を包むところの受矯と薰香であり、意志の一性質、變化を惹き起す氣分、憧れ行く意識、完全の祈願、心靈の交通、永遠と無限とに共鳴する心意の一狀態である。かくの如く吾等は、百千の變化ある章句をもつて宗

教を説明するとが出来る。けれども、それは依然として『曙の霞のうちに閃めく高殿』の如くに、形容すべからざる最後のものとして残存するのである。定義するは、たゞに區別するのみに止まらずして、限定し、除外するものである。吾等が吾等の心意を、宗教の精確なる境界に齎らさんと試みる時には、次第に背進し行くところの地平線に向つて船を進め、或は達すべからざる大空の碧色に觸れんとして風船を揚げんと試むるが如きものである。如何となれば、宗教は、人間の普遍的なる心靈の、より高き經驗であつて、特殊なる實例の如きは、それに比すれば『われ進めば永遠にその端が消えゆき、而も、それを通じて先人未發の世界が閃めきわたる弓形門』に過ぎないのである。

人ありて宗教の事柄を定義し、除外せんとせば、彼はその刹那に於いて一種の偏頗不公平にして、不可能なる事業に従事するのである。汝試みに汝の心意の宇宙に存する一切の價值あり、高尚なるものを含有し得んが爲めに、大にして且つ見事なる圓周を描け。こは宗教であると汝は云ふ。而してそれによつて汝は更に『これ以外には眞の宗教なし』と云ふとを含むのである。されどもやがて汝は明かに且つ非常に宗教的なる一の人格と相對するところがあらう。汝はかゝる人を靈感及び支撐として、汝の傍にあらしめんことを欲するであらう。而して彼は汝の友人及び同盟者たらずして、汝の宗教の同情以外に除外されなければならぬと云ふとを感ずるのは堪へ難いであらう。けれどもたとへ廣大にして寛容であつても、もし汝の定義の條件に照らすならば、汝は實際、彼を破門したのである。彼は汝の心情の範圍に屬する人ではない。然しながら、その範圍以外の人として見做すことは、汝の信仰の公同性に對する一種の侮辱たることを汝は知る。





六合雜誌  
第四百號紀念號

## ◀ 新刊及新着洋書 ▶

Adams, John—Latin (Self Educator) .....	.50—.08
Backhouse & Bland—Annals & Memoirs of the Court of Pekin. 8.00—.12	
Baldwin & Newton—Familiar Operatic Classics .....	.20—.04
„ —Familiar Song Classics.....	.0—.04
„ —Standard Folk Songs .....	.20—.04
„ —Standard Patriotic Songs.....	.20—.04
„ —Standard Popular Songs .....	.20—.04
Davidson, J.—Talks with Young Men .....	1.00—.08
De Forest, J. H.—“Ema” .....	.10—.02
Eucken, R.—The Life of the Spirit .....	2.25—.08
„ —The Truth of Religion .....	6.25—.12
Foster, C.—First Steps for Little Feet .....	1.50—.08
Forsyth, P. T.—The Work of Christ .....	1.00—.08
Gordon, S. D.—Quiet Talks About Jesus .....	1.25—.08
„ —Quiet Talks on Home Ideals .....	1.25—.08
„ —Quiet Talks on Power .....	1.25—.08
„ —Quiet Talks on Prayer .....	1.25—.08
„ —Quiet Talks on Service.....	1.25—.08
„ —Quiet Talks with Workers .....	.50—.06
„ —Quiet Talks with World Winners .....	1.25—.08
Gregg, J. R.—Shorthand.....	3.00—.08
Gulick, S. L.—The American Japanese Problem.....	3.50—.12
Humsun, K.—Shallow Soil .....	2.70—.12
Jones, E. G.—The Ascent Through Jesus Christ .....	1.00—.08
Keller, C.—A Village Romeo & Juliet .....	2.00—.08
Mathews, S.—The Gospel & the Modern Man .....	1.00—.03
Menzies, A.—History of Religion .....	2.50—.08
Merriman, H. S.—With Edged Tools.....	.35—.06
Moffat, J.—Expositors Dictionary of Poetical Quotations .....	5.25—.12
Muir, M. M. P.—Alchemy .....	.50—.06
Parker, Sir.—The Trail of the Sword .....	.35—.06
Rauschenbusch—Christianizing the Social Order.....	3.00—.12
Watson, J.—The Life of Master.....	1.00—.08

東京

教 文 館

銀座

(振替東京一一三五七)

## てみ虔 皇太后陛下の崩御を悼み奉る

### 御 製

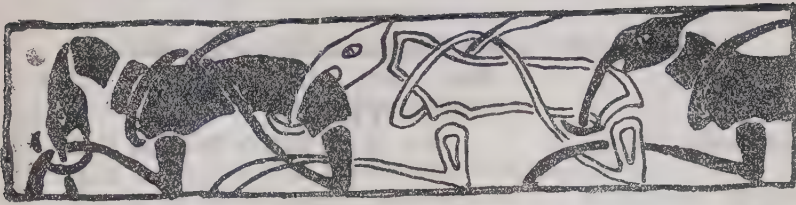
ひとりのみ思ふ心のよしあしも照しむくらむ天地の神  
淺しとてせけば溢るゝ川水のこゝろや民の心なるらむ  
むらきもの心にとひて恥ぢざらば世の人ことはいかにありとも  
君と民こゝろの道にうつさはやいつもかはらぬ松のみとりを  
とりくにつくるかさしの花はあれとにほふ心のうるはしきかな  
みちのくに鳴きやゆきけん郭公今年はこのしけしともなし  
國のため痛手おふ身をうつしゑに見るに涙そもよほされける  
四方の海みなはらからと睦ひなは世に波風は立たしと思ふ  
大やしまみうつくしみの廣き世は波の千さとも隣りなりけり  
大宮のうちにありても暑き日をいかなる山か君はこゆらむ  
あやにしき取りかさねても思ふかな寒さおほはむ袖もなき身を  
日の本のうちにありても慈しみとつ國までも及ぶ御代かな  
大宮の火桶のもとさむき夜にみいくさは霜やふむらむ  
高嶺をも底にうつして山水のひきゝに行くを心ともかな  
とりくにつくる簪の花よりも香ふ心の誠をそおもふ  
人の見ぬ時とて心ゆるひなく身の行ひを守りてしかな  
我身には堪へらき事も人のため思ひはかりてつとむへきかな

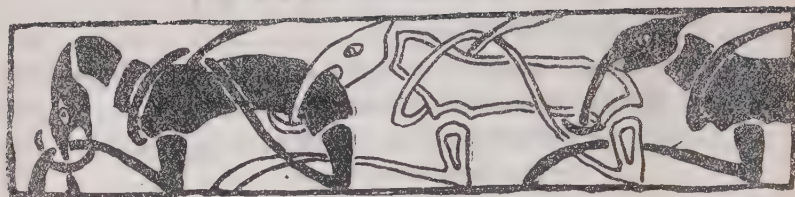


# 六合雜誌第四百號記念號目次

本欄

宗教の公同性	ロイド・トマス	二
最近三十年間に於ける政治思想の發展	浮田和民	一一
同 國際關係の發展	煙山專太郎	一六
同 資本の集中と勞働の團結	安部磯雄	二一
同 婦人運動の發展	原口鶴子	二六
同 教育思想の發展	中嶋半次郎	三一
同 日曜學校の發展	田村直臣	三五
同 天文學發展の一側面	一戸直藏	四一
同 日本に於ける印度學の發展	武田豐四郎	五一
同 生物學の發展	谷津直秀	六一
同 神學の發展	三並良	一二一
同 我が國民性より見たる勞働問題	鈴木文治	一二九
明治以後の文學思潮	片上伸	一六〇
A Parable	岡田哲藏	六六





道德と文藝……………富永徳磨……………六七

新浪漫詩人の人生對藝術觀……………山岸光宣……………七七

現代思想と倫理問題(オイケン)……………今岡信一良譯……………八一

カントよりベルクソンへ……………野村隈畔……………九〇

宗教と藝術の渾融……………佐藤清……………一〇一

吾人の神觀……………シー・ジェー・エル・ベーツ……………一二四

文藝欄

イーリアス發端(詩)……………土井晚翠……………一三七

いのちのながれ(歌)……………野口精子……………一三九

勞働の歌(詩)……………加藤一夫……………一四〇

來しかた(歌)……………吉良靜子……………一四四

沈黙せる生命の神秘(感想)……………吉田絃二郎……………一四五

How I became Interested in Japan……………Clay MacCauley……………一五一

まだユニテリアンをやめぬか……………岸本能武太……………一五四

△同人時事評論△新刊批評△惟一館たより▽編輯たより△……………

本號には四百號記念講演會豫告及び入場券挿入しあり……………

外 人 へ 日 本 本 日 へ 介 紹 せ る た し へ  
 世 界 的 文 豪 へ 見 せ せ せ

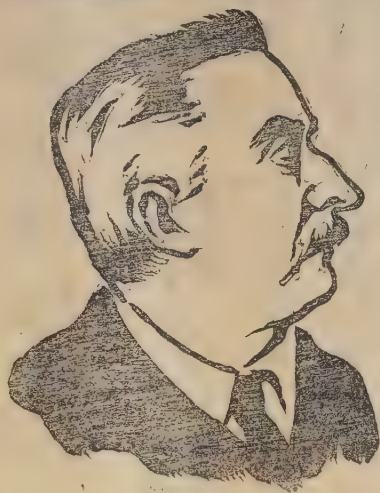
新 刊

小泉八雲夫人校閲 田部隆次著

(岡野畫伯裝釘)

# 小泉八雲

菊版布製全一冊  
 紙數五百三十頁  
 寫眞版十八葉入  
 正價金壹圓八拾錢  
 郵稅金拾貳錢



LAFCADIO HEARN  
 (雲 八 泉 小)

●自ら「日本人以上に日本を愛す」と  
 言つて日本の爲めに十五年を捧げ十三部の傑作に  
 よりて日本の紹介、辯護、解釋を務めし世界の文  
 豪ラフカディオ・ヘルン又の名小泉八雲の「事實は  
 小説よりも奇」なる事蹟を讀め。  
 ●英人を父とし希臘人を母とし希臘に生れ、幼に  
 して父母に別れ英國と佛國に成人し米國に立身し  
 最後に歸化して日本臣民となり佛  
 教を以て葬られたる最初の西洋  
 人なりし此の世界的奇人の面目を見よ。

●その著書二十餘種歿後其文名益々上り今や一部  
 の原稿數萬圓を以て市場に取引せらるゝに到り  
 し、盲目に近き片目の文人が如何なる努力修養を  
 積んで一步一步世界の文壇に於ける其地位を占む  
 るに到りしかを知れ。  
 ●著者は忠實に此天才の一生を普く江湖同好の諸  
 君に語らんと欲す。

發兌

東京牛込早稻田  
 振替一一二三番

早稻田大學出版部

(賣)

神田東京堂 京橋北隆館其  
 日本橋至誠堂 大阪盛文館他



# THE RIKUGO-ZASSHI.

A Special Number in Commemoration of No. 400.

May, 1914.

## CONTENTS.

Catholicity of Religion .....	Rev. M. A. Lloyd Thomas, B. A.	
.....	<i>Translated by</i> Rev. Prof. S. Uchigasaki, B. G.	2
<i>Progress in Japanese Thought and Life during the last 30 Years</i>		
On Political Thought.....	Prof. K. Ukita, H. G. H.	11
On International Relation.....	Prof. S. Kemuriyama, B. G.	16
On Capitalism and Union of Labor.....	Prof. I. Abe.	21
On Woman's Movement. ....	Mrs. T. Haraguchi, Ph. D.	26
On Educational Thought. ....	Prof. H. Nakashima.	31
On Sunday-School.....	Rev. N. Tamura.	35
On Astronomy. ....	Dr. N. Ichinohe.	41
On Indiology.....	Prof. T. Takeda.	51
On Biology.....	Dr. N. Yazu.	61
On Theology.....	Prof. H. Minami.	121
On Literature.....	Prof. N. Katagami.	160
Japanese Characteristics and Labor Problem...	B. Suzuki H. G.	129
How I became Interested in Japan.	Rev. Clay MacCauley, M. A.	151
<hr/>		
A Parable.....	Prof. T. Okada.	66
Morality and Literature.....	Rev. T. Tominaga.	67
Neo-Romanticism View of Life and Art. ....		
.....	Prof. K. Yamagishi, B. G.	77
Modern Thought and Ethics ( <i>R. Eucken</i> ) .....		
.....	<i>Translated by</i> Rev. N. Imaoka, B. G.	81
From Kant to Bergson.....	W. Nomura.	90
Unification of Religion and Art. ....	K. Satō, B. G.	101
My Conception of God.....	Rev. C. J. L. Bates, B. A.	124
<hr/>		
Iliad. ....	<i>Translated by</i> Prof. B. Tsuchii, B. G.	137
Tanka. ....	Mrs. S. Noguchi.	139
Labor and Revolt ( <i>poems</i> ).....	K. Katō.	140
Tanka. ....	Miss S. Kira.	144
Fragmental Thoughts.....	G. Yoshida.	145
<hr/>		
Why am I Still an Unitarian ?.....	Prof. N. Kishimoto.	154
<hr/>		
Topics of To-day.....		164
Books of the Month.....		168
On the late Pfr. Dr. Max Christlieb. ....	Prof. H. Minami.	174
Unity Hall Reports.....		175

editor Rev. Prof. S. Uchigasaki, B. G. Sub-editor G. Yoshida.

Published Monthly by the  
TŪITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,  
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.



三月號  
目要

六合雜誌

四月號  
目要

■第二十世紀の基督教  
史家の見たる輿論政治

■宗教の民主的傾向

■憲政の精神的背景

■政治の根本的理想

■創造の世界

■宗教の精神的本源

■史影(ストリンドベルヒ)

■監獄か學校か(對話)

■In Meetings

■死の歎美者となる前に(感想)

■靈界の偉人を憶ひて

■銀座教會の内と外

■冬の夜の對話

■灰燼(小説)

■歐洲見聞錄

■白玉吟(歌)

■時評(數篇)

内ヶ崎 作三郎

浮田 和民

安部 磯雄

吉野 作造

内ヶ崎 作三郎

野村 隈畔

三並 良

千葉 掬香

佐藤 清

岡田 哲藏

吉田 絃二郎

星島 二郎

K、Z、K

石田 縦村

井口 杜村

盧山 生

野口 精人

同

■先人未蹤の道

■個人主義者としてのイブセン

■ロシア文學に於ける杜翁の地位

■ノルダウ氏のトルストイ論

■單純信仰と本文批評

■史影(ストリンド・ベルヒ)

■An Air-Castle

■富める人とラザロ(對話)

■島の牧師

■春(短歌)

■山の雪(短歌)

■歐洲見聞錄

■マダダラのマリヤにまで

■キツクユウ問題の真相

■婦人の力

■念腹宗(靜座二年有半)

■牛込教會訪問記

■時評(數篇)

内ヶ崎 作三郎

稻毛 諷

井口 杜村

西宮 藤朝

三並 良

千葉 掬香

岡田 哲藏

佐藤 清

目賀 多正

伊藤 蓼々

野口 精人

盧山 生

吉田 絃二郎

内ヶ崎 作三郎

新渡 戸稻造

岸本 能武

K、Z、K

同

■智慧と勇氣と幸福とに渴せる日本の思想界に薦む

文學士 阿部次郎著

●紙數六百頁布裝國入  
●定價金壹圓送費八錢

# 三太郎の日記

自己と人生とに信頼を失ひたる暗黒と疑惑の時代より漸次にその信頼を恢復し遂にやみがたき生命の渴望に向ひたる三太郎の力強き心の開展の記録なり。弱くしてやがて強き人間の心を示せる書なり。この書を心讀するものは純撲にして雄々しく熱烈なる神に近づかんとする人間の姿を見るべし。その他著者の人生と文藝に對する評論隨筆及附録として若きゴオホ、ゴオホの藝術の二篇を添ふ。新思想界最初の烽火なり。

平塚明子序 伊藤野枝譯

●菊半截三百頁美本  
●定價金六十錢送費六錢

# 婦人解放の悲劇

■附録エンマゴルドマン小僧

婦人を解放せよ、婦人よ自覺せよ、といふ叫びは漠然と聞へる。けれども眞實なる解放とはいかなるものなるかに就て我々は眞に理解ある忠告をきかない。この書、エンマゴルドマン、エレンケイニ女史の婦人問題論四種を譯輯し、混沌たる日本婦人の前途に一道の光明を與へんとするものである。

■五月號出來

生活と藝術

毎月一回一日發行

定價 一冊 金拾八錢

三ヶ月分金五十四錢

(前附三)

發行所 東京市本橋區物九番地 東雲堂書店

安心して買へる齒磨

ライオン齒磨

信用して使へる齒磨

■ライオン齒磨には粉製・煉製・水製・

子供用と四種あります。それぞれ長所があつて、容器も亦慈善券附袋入・箱入・瓶入・罐入・押出し管入といろいろあります。

■ライオン齒磨の粉製は専ら家庭徳用向、煉製は實質外觀總てハイカラに出来てゐます。水製は食後寢前又は口熱の時に最も宜しく、子供用は他に例なき親切な思附です。

# 六合雜誌四百號記念講演會

▲場 所 神田美土代町三丁目青年會館

▲日 時 五月九日(土)午後六時半

## 講演者

- 來らんとする社會運動の暗示……………安部 磯雄
- オイケンの内觀論……………三 並 良
- 最近の感想……………岡 田 哲 藏
- 現代文化と進歩的宗教……………内ヶ崎 作三郎
- 時代思潮と勞働問題……………鈴 木 文 治
- 演題未定……………野村善兵衛
- 演題未定……………加藤 一 夫
- オスカア・ワイルドよりメエテルリンクへ……………吉田絃二郎

## 注 意

上の入場券を切り取り御持參あれ然らざれば  
別に會場實費として金拾錢を申受けます。

六合雜誌四百號  
記念講演會  
入場券



# 新味横溢る歐米紀行

早稲田大學  
教授文學士

内ヶ崎作三郎先生新著

〇〇中版美装口繪寫真版入  
定價七十錢郵稅八錢



△人種的僻見を超越せる黄人の觀たる白人の世界……………

博識にして能文、新進自由思想家として令名噴々たる著者、歐米に遊ぶ事數年、各國を歴訪し、萬人と交遊し、社會の表裏、民性の對照、文化の現勢、東西人情の機微等に關する隨感隨錄積んで此書を成せり。感想あり、評論あり、諷刺あり、教訓あり、批評獨特、觀察深奥、見聞廣汎、筆致輕妙、新味横溢、眞にこれ得難き歐米紀行なり。

△世界現代文明の縮圖！内ヶ崎先生快心の作の名に背かず

△萬里の異境に天真流露るせ先生の風采、紙上に躍如

〔明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可〕  
〔六合雜誌第三拾四年第四號〕〔大正三年四月一日發行〕〔毎月一回一日發行〕

〔本誌〕〔定價一冊貳拾錢〕

發行所 東京 南橋 實業之日本社出版部 振替 東京 三番 賣 捌 全國各地書店

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可  
大正三年五月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十四年第五號

# 六合雜誌



五月號

四百號記念

# 注意!

一、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

二、本誌は従前は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今回内部の整理と共に每號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御諒承下され度候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合は芝區三田四國町二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御註文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申上ぐべく候

七、定價は内容の改善發達と共に下表の如く改定致候間御承知下され度候

## 本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

## 本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候			

大正三年三月二十日印刷納本  
大正三年四月一日發行 (毎月一回一日發行)

定價 貳拾錢  
稅共

發行兼編輯人 鈴木文治  
印刷人 山本與一郎  
印刷所 株式會社 秀英  
東京市芝區三田四國町二十七番地

## 發行所

東京市芝區三田四國町

## 統一基督教弘道會

## 賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋◎警醒社◎敎文館其他全國有名書店



未信者は充分なる基督教の知識を得て、其生命に包まるべし  
信者或は愕然として驚く所あるべけれど、信仰上新生而を拓かむ

■定價 壹圓六拾錢

■郵稅

内地十二錢 臺灣二十錢 朝鮮、清川錢

■菊判洋布製七百頁餘

富永德磨先生著

基督教の

根本問題

□基督教果して信じ得らるか。現代の人は如何に之を信ずべきか。其を知らむとする人には無二の好著也。

□其説明の親切、詳細なるは、本邦人の創作にかゝる類書中最初の大冊なるにても知らるゝ也

□著者は教流、學派より全く獨立せる人。在來の觀念は形式すてに亡びぬとなし、豊富なる材料を最も公平に批判、攝取し、獨特の創見を以て現代人の經驗に基き、基督教觀念の組織を新たに樹立し、問題の徹底的解決に努めたるもの本書也。

□舊き信仰に疲れたる人々は之に由て、新經驗を感じ、新生命に觸れ、不斷の向上進歩をなすべし。

●發兌

東京京橋尾張町 警醒社書店  
振替東京五五三



一 日  
發 行

# 神學之研究

一 冊  
廿 錢

四 月 號 要 目

キクユー問題の真相は本誌に明なり

社會的神觀

費 府 巴 テ ン

基督教の統一性

今 治 露 無 文 治

サムソンは太陽神

牛 津 ベ ル ム ー

羅馬に於る基督教成功の秘決

萊 殿 大 學 教 授    レ    ー    ク

律氏神學と現代思想との關係

同 志 社 大 學 教 授    日 野 眞 澄

道德と宗教

巴 里 プ ー ト ロ ー

基督教と倫理

ケ ラ ム ケ    レ    ー

神子の福音

ハ レ ド プ シ ャ ッ

新著神學書三十種の批評を紹介あり

（後附四）

發 賣 所

購 壹 圓 參 十 五 錢

東 京 座 銀 橋 區 警 醒 社 振 五 替 五 東 三

# ◎新進自由思想家の好著！

## ◀ 次 取 書 圖 ▶

著 者	書 名	冊 數	定 價	郵 稅	出 版 元	上記の書籍は我が
三 並 良	福音書大觀 (陀譯)	一	三、五〇〇	二四〇	統一基督教會	統一基督教會員並
安部 磯 雄	現代戰爭理論 (婦人の理想)	一	八五〇	一二〇	博文館	に同志者の著すと
内ヶ崎作三郎	英國より祖國へ (人生と文藝)	一	一、〇〇〇	一二〇	北文館	ころのものなれば
神田佐一郎	近代人の信仰 (ロイドデヨール)	一	一、三〇〇	一二〇	同 社	本社は地方讀者の
向 軍 治	登高自卑集	一	五〇〇	八〇	統一基督教會	爲に、特に取次の
岸本能武太	英語發音の原理	一	三〇〇	四〇	警 醒 社	勞を執るべし、郵
今岡信一良	新 神 學 (譯)	一	七五〇	八〇	北 文 館	税は本社に於て負
小山 東 助	光を慕ひて	一	一、〇〇〇	八〇	同 社	擔すべければ定價
永井柳太郎	社會問題と殖民問題	一	三〇〇	四〇	警 醒 社	のみを送らるべし
合 著	進歩的宗教	一	一、五〇〇	一六〇	新 興 社	東京市芝區三田
加藤 一 夫	闇に輝く光	一	三五〇	六〇	統一基督教會	六合雜誌社
淺田 泰 順	新律氏和聲學	一	八五〇	八〇	文 明 堂	
	譯 律氏和聲學	一	一、七〇〇	一〇〇	淺田 泰 順	

◎振替貯金

にての御申込みは

東京市芝區  
三田四國町

統一基督教弘道會宛に  
〒振替東京一〇〇〇三番

# 創造

毎月一回

一日發行

目要るな新清の號月四るせ新一目面

- ▲運命と主我的精神 (感想) 清浦青鳥
- ▲Sの二等卒時代 (小説) 木村莊八
- ▲別れて棲む妻に (感想) 加藤朝鳥
- ▲「青書」より (小説) 木村莊太
- ▲戀こころ序詩 (詩) 人見東明
- ▲議會傍聽 (詩) 齊藤與里
- ▲老學者と放埒な青年 (詩) 福田夕咲
- ▲處女の誇り (詩) 加藤介春
- ▲桃色の封筒 (小説) 大塚杜人
- ▲ロシアの新劇壇 (感想) 尾瀨衷歌
- ▲嬰兒と戀と南瓜 (小説) 佐野袈裟美
- ▲毒藥の壺 (感想) 相馬御風

清浦青鳥	詩歌	望月哲雄
木村莊八	川本宇生	大熊信行
加藤朝鳥	高山辰三	田邊若男
木村莊太	石川才三郎	津端修
人見東明	磯ヶ谷紫江	美川康
齊藤與里	高山喜三	高鹽背山
福田夕咲	上村千草	青木しげ子
加藤介春	南くに子	
大塚杜人		
尾瀨衷歌		
佐野袈裟美		
相馬御風		

(後附二)

戀こころ

獨自の世界を創造して踴躍を自由に試みつゝある人見東明氏の第二詩集なり。詩百五十餘篇を収め、齋藤與里氏の装幀、木村莊八氏の挿畫十數葉を以てしたる最近の快著にして、三百五十頁の美本絢爛眼を射るか如き新刊なり。定價七十錢

發行所 小石川區 創造社 發賣所 東京 東表 神保町 田町 東京堂



# 新 年 號 要 目

永遠に若き心 内ヶ崎作三郎

オイケン哲學の

認識論的基礎 三 並 良

自我燃焼の歎美……………吉田總次郎

生の創造と信仰……………稻 毛 詛 風

創造の世界……………野村 隈畔

モゼス(戯曲)……………佐藤 清

イーリアスの

一節……………土井 晩翠

ロイドデョールデと

社會政策……………廣 木 文 活

I do not sing……………岡 田 哲 藏

紅い花(戯曲)……………吉田絃次郎

宗教の獨立……………安 部 磯 雄

政治の根本的理想 内ヶ崎作三郎

史家の見たる輿論政治……………浮 田 和 民

二十世紀の基督教……………エリオット博士

宗教の民主的傾向……………安 部 磯 雄

史影……………千葉掬香譯

歐洲見聞記廬……………山 生

監獄か學校か……………佐藤 清

オットワイニンケル

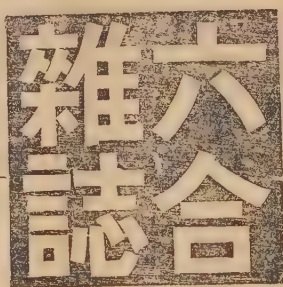
に與ふる(詩)……………佐藤 清

宗教の精神的本源……………三 要 一 良

創造の世界……………野村 隈畔

In meetings……………岡 田 哲 藏

憲政の精神的背景……………吉 野 作 造



三 月 號 要 目



## 惟一館なより

△三月はまた二月に引き續いての政治季節であつた。内閣が瓦解するかもしれないかの焦點に國民の興味が牽き着けられてゐた。それでも教會の方は、靜かに生命から生命と新しい光明を索むる人々の平和な空氣を漂はしてゐた。

△三月の主なる講演、説教は三月一日の、光明の曙（内ヶ崎氏）帝大學生四氏の傳道演説。三月八日の、男女學生と金錢問題（安部磯雄氏）現代日本の憂患（原田長治氏）第一義（三並良氏）。三月十五日の、キツクユウ問題の意義（内ヶ崎氏）、社會と宗教（相原氏）人相論（岸本氏）、二十二日の勞力の整理。新國民道德論（内ヶ崎氏）及び早慶大學々生諸氏の演説等であつた。

△十六日にはまた例によりて、第二十五回通俗講話會を開いた。人種改良の話（鈴木文治氏）、赤心の力（益富政助氏）、日本晴れ（中岡默堂氏）の講話があつた。聴衆百五十、頗る盛會であつた。

△二十二日午後弘道會の總會を開いた。先づ役員會の決議によりて、相原、仙田、星島、太田、小山、高橋、吉田諸氏の入會を承認した後で、いよく總會を開いた。安部會長の司會で役員の改選や二三動議が論究せられた。松尾清二郎、相原一郎介二氏が新しく委員になつた。尙ほ弘道會員會費は年三圓と定め、特別會計として、地方遊説、傳道の補助費に充つることゝした。

△日曜の朝かの三並氏の聖書講義、九時半からの内ヶ崎氏の舊約の連續講義も倍々佳境に入つた。誰でも御隨意な時にお出で下さい。

△日曜俱樂部の討論會はなか／＼盛である。惟一館の廊下に大きな掲示など出して示威運動におさ／＼怠りない。矢野さんの音樂の稽古はこの頃急に人數が増した。

## 編輯室なより

△いよいよ春らしい春になりました。東臺の櫻花を雲と見る日も旬日のうちになりました。私達の一步一步が確實に、そして眞摯に、永久の未來へ未來へと、敬虔な心を持して、生命の道を拓いて行くことを想ふ時に感謝に耐へません。豫告いたして置きました通り來月は四百號記念號を出す運びになりました。本誌發刊以來幾多の執筆者諸君及び愛讀者諸君の御同情を深く感謝いたす次第であります。就いては記念號には、同人總出にて、大に奮勵いたすつもりです。

△内藤濯氏は都合により、同人たることを斷られました。

△野村氏は牛込拂方町二二宮崎方へ、加藤氏は麻布櫻田町八六海田方へ移轉した。

△内ヶ崎氏は父上の御病氣で一週間ばかり歸郷して居られた。

△鈴木氏經營の友愛新報は倍々好況で、本年内には一萬部發行の程度まで發展させる豫定。

△吉田氏は相かはらず引ッ込んで、死の問題ばかり考へてゐる。

漸次 *Misanthropist* になりさうだ。

△内藤氏から心のふる里に歸つたやうな心持ちで、この春を味つてゐるといふ消息があつた。

△内ヶ崎氏のロイドヂョールズは倍々賣れ出した。氏の白中黃記も好評のうちに賣り出された。

△三並氏はこの頃ベルグソンの「創造的進化」の獨譯を、神學部で講じて居られる。氏のオイケン哲學概論は本月末發行の豫定。



め、社會共者の教達をも計る如く人を教育せねばならぬことを唱ふる。

第八。教育の原理を實驗で定むるといふ如き立場を取らず、之を人格の交渉に本づけんとする立場を取つてゐる。

第九。作業教授も藝術教育もそれが人格の養成に觸れて來て始めて價值があるから、人格的教育學は其基礎を作り、其原理を示すものといふ關係に立つてゐる。(八九十三—七頁)

第三篇のブツデ著「ルドドルフ・オイケン」の哲學を本とせる中學校教育學の根本なる建設の試み」の解説は甚だ有益である。オイケンの人格觀は如何。

「吾等の精神生活をして完全に、自由に働かしめんが爲め、換言すれば人格をして完全に向上せしめんが爲めには吾等は先づ自己の生活中に於ける自然的要素を抑へ、以て單に自然としての存在物たる以上に、人格としての實在を換言すれば自立的の精神生活を營み得る眞實の人格とならなければならぬ。而してその爲めには他人の經驗は何等の役にも立たぬ。只自己の直接經驗を根柢として努力するの外はない。

著者は第四篇にケストチル著「精神生活の要求する社會制度及び教育制度」を第五篇にはフェルステル著「學校と品性」とを第六篇にはリンド著「人格的教育學」を、第七篇にはイツチル著「教授論」等を解説し、最後の第八篇には人格的教育學に對する批評を總してある。

吾人は本書によりて吾人が十數年間實行し來れる教育上の主義は殆んど人格的教育學と符節を合する感がある。本書は獨り教育家によりて讀まるのみならず、宗教家にとりても必要な參考書である。吾人は中島氏がこの好著を社會の要求に應じて公にせられたる勞を謝し、且つこの思潮は日本教育界を風靡せんことを希望する。(價一・八〇)

## △宗教の本質

ブーセツト著・大川周明譯・隆文館發行

本書は原書の序文に明なる如く、嘗て著者がハノーファーに於て試みた八回講演を出版した者で、複雑なる宗教現象を宗教史的見地より最も簡潔に且手際よく取扱つた者である。最も嬉しい事に

は同じく原書の序文に著者が、アウガスチンの語を引用して、唯神と靈魂とを知らんと欲すと明言せる如く、本書は飽く迄も敬虔眞摯の氣分に充實して居る。而して東大宗教學出身の篤學者たる大川氏の譯文は力と溫みとに充ち、毫も譯文たるの痕跡を示さぬ加ふるに、譯者は原書に示された諸參考書以外に日本語にて書かれたる諸參考書をも附記して初學者の便宜を圖つて居る。日本譯書は原書以上の宗教名書二十餘篇を挿入して大に光彩を添へて居る。但し惜しい事に紙質の悪い爲か、甚だ鮮明を缺いて居る。要するに、本書は譯者の指摘せる如く、東洋意識に對する理解に於て缺くる所あれども、其點を除いては最も完全に近き宗教學書である。而して譯者が其序文に於て最も力強く筆致を以て論ぜざる如く如上の缺點は我國新進の宗教學者に依つて補はるべき者である此點に於て大に我國宗教學者を覺醒せんとする譯者の希望は必ず實現されるだらう。思ふに譯者の如きは其第一人者たるべきては無からうか。切に自重を祈る。(價一・一〇) (今岡)

## △三人

吉江孤雁譯・早稻田大學出版部發行

露西亞現代の文豪マキシム・ゴルキイ、一九〇二年の作である。イリア・ルチフといふ山林の村を追はれて都會に入り込んで來た少年と、ヤコブといふ空想兒と、パシユカといふ少年放浪者の小ひきなグルーパの悲惨な、物語りである。ヤコブは小羊と呼ばれた頭の大きい子であつた。パシユカは監獄に入つてから、詩を作ることを習つた。ゴルキイ彼れ自身の少年時をつくりだらうと思はれる。約六百頁のものだが、すら／＼と面白く讀み終はせる。血と、罪惡と、暗と、寒さに鎖された露西亞の香ひの高い作品である。(價一・四〇)

## △ブランド

中村吉藏譯・東亞堂發行

イブセンの名著ブランドは初めて中村君を通じて日本譯を有するに至つた。これは日本文壇のために祝せざるをえないことであるイブセンの名作中個人主義の極端に主張せらるゝは本書である。

「神は諸君を塵埃の中より高く引上げんとし給ふのだ」

「我々自身のうちに神の新らしく生るゝ時機の熟した若い世界が



がある。

「あなたは地上に神のみます場所を汚して、了つた神が貴方に貸し與へられた靈魂を殺して了つた。」

「最上の愛は憎むといふ事だ」

「犧牲は一切は無力といふことを」

是等の警句に由りてもこの劇に於けるイブセンの思想を垣間見ることが出来る。北歐個人主義の覺醒である。現代の眠れる人心には一種の刺戟劑となるであらう。譯文も忠實にし、流暢である

(價一・二〇)

## △生ひ立ちの記

伊原元治、大澤章  
田中耕太郎、植野勲 共譯・興風書院發行

獨乙の Kugelgen と云ふ人の Jugenderinnerungen eines alten Mannes を譯したものである。著者のとに就ては鴨外氏の序文にも十九世紀に於ける獨乙知名の畫家ととか、或は「余は不幸にして此の書の著者に就いて、詳細な事蹟を述べるとが出来ぬ」とあるだけであるが餘り有名な人ではなかつたらしい。父も畫家であり、自分も畫家であつて、千八百二年ペーテルスブルクに生れ、それから以後父のキューゲルゲンと共にドレーズデンに移り、父が千八百二十年ド市の郊外に於て變死する迄、約十八年間のことを書いたものである。丁度此の年間は獨乙に大變動が頻發した時であるから、記事には變化が多い。然し屋外には如何なる暴風雨があるにした所で、それで家庭までが攪亂されてはならない。こゝに歐洲の國家組織の根柢がある。國は如何に亂るゝとも、再び之を改築するの要素は、こゝに教養せられつゝある。若し世人にして此の間の事情と文化の如何に醸成せらるゝものなるかを知らんとせば此の書は良伴偈である。否な此の書は確かに獨乙文明史の一部とするに足るものである。譯者は四人ながら一高以來の同窓であつて、今尚ほ大學に於て獨法を學びつゝある秀才である。元來譯者が自分の修養と語學練習の爲めに翻譯をしたのを、一高卒業紀念として出版するに似たのださうである。分業かも知れないが千頁に近きものの翻譯が成し遂げられたことを賀せざるを得ない。そして云はゞ若殿原が響を連ねて初陣と出かけた、その幸先を祝するのである (價一・七〇)(三並)

## △婦人解放論

西川文子著・中央書院發行

新眞婦人會の中心として活動する西川文子夫人の婦人に關する研究である。從來この種類の多くの著述は男子の述作に係つたものだ。然るに此書は流石に婦人の立場より觀たる評論なれば、男子の氣のつかぬことに説き及ぼせる點が多い。婦人の自覺、性慾問題男女交際論、結婚論夫婦論母と子、獨身論、婦人と社會、不品行亡國論、運命論の十章に別つが、題に似合はず、頗る眞面目な建設的の著述である。ことに著者が直接に實見したる興味ある例證に富む。不品行亡國論のごとき極めて痛快である。運命論は短かといへども著者の半生の涙の痕を偲ばしむ。新眞婦人會は東北凶作救済のために數百圓を募金した。中々活動してゐるものがある。婦人問題は永遠の問題である。本書は有益なる參考書である婦人自らも大に利する所があるであらう。(價一・〇〇)

## △基督教の根本問題

富永徳磨著・聲醒社發行

基督教界の新進學者中、夙に識者の矚目する所であつた富永徳磨氏の著書菊版七百數十頁。恐らく邦人の筆になりたる最も注目すべき神學書の一つである。細評次號にて。(價一・六〇)

## △ウキンダーミヤ夫人の扇

鶴沼直譯・不老閣發行

オスカ・ワイルドの作中サロメと並べ稱さるゝ脚本である。しかもサロメに比して、現實味に際つた、極めて人情味の濃ひの漂ふものである。我が翻譯界に此の好譯を得たることを喜ぶ。細評次號。

△藝術の起原(本間久雄譯)基督教大意(田村直臣)次號にて細評



# 新刊批評

## △白中黃記

内ヶ崎作三郎著・實業之日本社發行

題を見た丈では極めて角張つた名であるが中は或人も言つたやうに甚だ九い事が書いてある書物である。黄人が白人の中に旅行し、漫遊し觀察したる印象を輯録したものである。本書には七十の興味ある物語等がある。最初の二篇「東洋文明の淵源」と「東西文化はやがて統一」とは本書の總序のやうなものであるが、「トルストイそつくりの老乞食」から奇想天外の記事となり、「少女が呉れた石竹の一束」「煤けた顔と眞黒の手」「古學府の傳説と奇譚」「蠻人氣質を失はざる紳士型」「首相に獻ぐる勞働者の熱誠」「大學生に包圍せられたる老偉人」「英獨對抗と天使のほゝゑみ」「夜霧で思ひ出す祖國の風景」「老いても幼兒、學者にも涙」「處變れど變らぬはお國自慢」「婦人運動の色々様々」「カーライル博物館に巡禮の日本人」「歐洲に於ける日本語の勢力」「見識ある英國の勞働者」「歐洲の歴史を語るラインの巨流」「意氣を尊ぶ獨逸の大學生」「高價な洋行と安價な留學」等教訓と暗示とに富む記事が連続する。著者の自序に曰く「僕は隨所に友人を見出した。小兒あり婦人あり、老人あり、軍人あり、學生あり、教授あり、文豪あり、政治家あり、いづれも皆僕と親交を結んだ。空氣と空氣と會釋するがごとく、水と水とが流合するがごとく、僕は極めて自然に是等の人々に接した」

要するに白中黃記は歐米人の人情觀察録である。彼等の自由な閑氣な親切な態度は能く此處に現はれてゐる。又著者の人好きする性質は彼等をして十分に胸襟を開いて談笑せしめた。從來の歐米旅行記は默せる人々の記録であつた。これは快活に談笑して來た人の追懷記である。慥かに本書は歐米旅行文學に於ける新しい貢獻である。(價〇・七〇)(五、五、生)

## △信仰の歸趣

高田道見著 佛教館發行

嘗て著者が通俗佛教新聞紙上に掲載したるものを、更に増補して一卷となしたるもの。主として通俗佛教の信仰を鼓吹せんが爲めに著はされたものなるが故に、その文體も極めて平易にしかもその組織も問答體として初心者の研究に便にせり。現在佛教の大觀信仰の目的、信仰の立脚地、諸宗信仰の誤謬、本教信仰の主體、釋迦中心の佛身觀等章を重ねること三十四、約七百頁に亘りて、現身佛を本尊とせる佛教觀を高調せり。著者が此の點に着目せるは大に吾人の意を強くするものである。單り佛教者と言はず、基督者に於いても、今日まで多くの信徒が誤りたる信念は即ち、その教祖を全然超人間的のものとしたる點にあつた。今日基督教社會に於ひても、イエスを以て神そのものなりとなす迷信家の多いは數すべきである。佛も耶穌も畢竟吾々の人格の向上歸趨すべき最後の點を象徵してゐるものではないか。吾人は釋迦そのものたり。或は耶穌その人たることを得る可能性を有してゐるそこに人間の尊嚴がある。更に吾々は耶穌、釋尊を超越することの可能性も恐らく賦へられてゐるであらう。著者が法王教を説く所以は恐らくはこの點に存するならん。要するに吾人は佛教界に著者の如き新見地に立つ人の出でたることを喜ぶ。最後に吾人は著者が基督教に對しては尙ほ一度冷靜な研究的態度を取られんことを希望する。但し一概に基督教と言へど、それは千差萬別の内容を含んでゐるからである。著者が若し吾々自由基督教徒と談ぜられんか、著者の新佛教と吾々の神觀と餘りに相近きを發見してであらう。兎も角佛教者にも基督教者にも好個の參考書である。(價一・九〇)

## △海の夫人

島村抱月譯 早稻田大學出版部發行

一八八八年イブセンが六十歳の時の作で、「人形の家」を出してから九年目に當る。日本に於いては、先き頤養衛座の人々に依りて演ぜられたので、殆んど一般の人に紹介されたやうである。イブセンの作としては、象徴的、神秘的、ロマンチックな色彩に勝つたものである。若て「ノラ」を讀んだ人は、是非本書を讀んでイブセンの婦人問題、結婚問題、戀愛問題に對する解釋を聞かなければならぬ。挿入の寫眞板は氣の利いた思ひ附きなり。體裁紙質共に美。(價〇・九〇)

## △ロダンの藝術觀

木村莊八譯・洛陽堂發行

此の書の原書は Paul Groll の編した *L'Art-Anguste Rodin* 其の英譯から更に重譯したものであらうである。此の現代の大藝術家の意見が會話辭に甚だ面白く且つ平易に述べてあり、その上多數の挿繪が入れてあるなどは特色に足るに足り。内容は甚だ豊富であるが、その中にも「藝術にある動き」の如き、或は「藝術上の神秘」の如きは、我々の宗教哲學的の所見と共鳴する所があるのは甚だ愉快である。我々が云ふ本源的生命へは宗教からしても、藝術からしても矢張り立ち歸らなければならぬのである。例へばロダンは「藝術はライフを他所にしては存在するものが出来ない。ある彫刻家が、喜悅なり悲哀なり、其他なりの心持を寫し出したと思ふ時にも、先づその人に、自分の呼び起すべき生きてゐると云ふを如何して造るか、それが解つてゐなければ、我々を動かすことは出来ない」と云ひ、或は「無限界、永遠界、限りなき智恵と愛……に對して。我々の自意識に衝動を與へる物がそれである。但し嚴密なる認識論的の批評を加へたならば、純哲學者ならざるロダンには弱點があるかも知れないが、今や藝術も宗教も同じ本源的生命より湧き出し來るものとする我々にとりて、彼れの意見は大に參考とすべきものがある（價一、五〇）（三並）

## △自然主義か理想主義か

鹿子木員信譯 叔山書店發行

オイケン博士の有名なノーベル演説を鹿子木博士の譯したものである。オ博士の説は毎々述べたから別に云ふ必要もなからうが、此の演説では最も明瞭に其の意見が窺はれるし、且つ譯者は之を出版するに際し「はしがき」として現今哲學界の狀況をも畧説して居るから、大に參考の便も得らるゝし、且つオ博士の意見の背景も分る譯である（價〇・四五）（三並）

## △人格的教育學の思潮

中島半次郎著・同文館發行

著者は我國に於ける教育學の研究に不満を抱いて獨乙に亘りて勉學したる篤志家である。著者は獨乙に於ける人格的教育學に於

て共鳴するものを見出した。人格的教育學の特色は左の諸點にある。

「第一に人文主義に對して言へば人文主義の趣味品性を練り、完全なる人品を練らんとするには反對せず、寧ろその精神は取り入るゝもその人品養成の理想を必ずしも友人に求むることをせず、寧ろ深く自己を省察して自己の中心生命を見出さんことを要求し、十分に現代の思潮に觸るべきことを奨めてゐる。又人文主義は教授に於て文學的哲學的の要素を多く含んでゐる古典を重んじ、訓練に於ては教權に服従するを尙ぶが、人格的教育學派は教授も近代的にし、訓練は自由の服従といふことを主張してゐる。

第二、實科主義には正反對。實科主義は實例を重んずるが、人格的教育學は理想を重んじ、實利主義は人を機械的に見るが、人格的教育學は人の品位を重んずる。實科主義は人の智識技能を發達せしめ、物質的欲望を達することに成功せしめんことを希ふが、人格的教育學は人の情意の方面を練り、精神的獨立の力を得しめて人間の品位を高めしむる如く教育せねばならぬことを主張してゐる。但し實利を人格で統率することは之を獎勵してゐる。

第三、人格的教育學は決して個人主義でなく從つて國家は個人的人格、其個性を尊重することをせねばならぬ。

第四、ヘーゲル學派に對してはオイケンには殊に其國家主義と知力主義に反對し個人的人格を重んじ、其情意をも練り、全人格を完全に練らねばならぬことを主張する。

第五、人格的教育學の主張者は多く人の精神を靈知的のものと見、ヘルバート派の説く如く觀念の要素からのみと見ない。

第六、社會的教育學は人に社會的智識を有せしめ、社會に順應して之を進歩せしむる如き人を作らんとすることを目的とするが、人格的教育學は個人の自主自由の權を重んじ個人の天才特性を伸ばさしめ、社會に従ふよりは寧ろ之に對抗し、社會を自己の理想に従はせて率へ行くが如き人を作らんとすることを主張する。

第七、個人的教育學派に對して言へば個人の自主自由を重んじ、其天才特性を伸すべきことを主張する點については同意するも、其如く何處迄も個人を個人としてののみ見、社會は個人の意志目的を達する機關の如くには教へず個人と共に社會その者の目的を認

する。これ等の問題は今に初まつたことではあるまい。既に十年も廿年も以前からの問題であらう否な一局部の問題でなく、如何なる場所にも行はれて居る事實であらう。或は攻撃せらるゝ者も、するものも、共に犯して居る罪があるかも知れない。病は國民の膏肓に入つて居るかも知れない。

こんな時に當りて唯上調子に空騒ぎをした所で大いして利益があるものでない。要は國民を根本的に導く事が大切である。國民全體が根本的に革新し、悔改しなければならぬ。若しも免れて慚なさやうな心得で騒いで居るやうなものがあつたらば、それこそ國家の一大事である(柏葉)

## 我國政治史上の新紀元

武士は食はねど高揚子を歌ひ、金錢を穢らはしきものとして人にやるには必ず紙に包んだ、現ナマをやるのは大侮辱を意味して居た、我二千五百年の歴史は金錢蔑視の歴史である。この國民をして白晝街頭列を作り減税の旗押立て、練り歩かしめたるは何故ぞ。これを以ても我國の租税の重き

こと知るべきでないか。けれども他の一面より見るときは我が國民も今や經濟的覺醒をなし始めたのである。道德問題外交問題、憲法問題のみを考へ來た國民は經濟的問題をも考ふるに至つたのである。これ我國政治史上の新紀元ではないか。

私は經濟的覺醒をなした國民でなければ眞に立憲政治は行はれないと思ふ。立憲政治は人民各自の意見の賛否によつて政治を行ふのである、意見を有するには沈着なるを要する、然らざれば雷同し暴民政治となる。經濟問題は道德問題や憲法問題などの如く感情を以て決することは出来ない。冷靜に沈着に考へなければならぬ。そののみならず經濟は國事の凡てに關する。故に經濟問題を考へないものは眞の政治がわからぬ。經濟問題に起原を有する英國の議會政治は憲政の花である。自由平等正義を以て起つた佛國の憲政は暴民政治となつた。我國政治史上の新紀元たる國民の經濟的覺醒減税運動は大に尊重して考へばならぬ。閭閻打破、海軍廓清よりもこれは價値あるものではないか。この未曾有の運動をして有意味になさしむるには三つの注意を要する。

第一にこの運動の擴張である。今度この運動をなしたのは、東京、大阪、神戸の如き大都會にのみ行はれて全國一齊になされなかつたは遺憾であつた減税は國民全體の問題である、一部人種の問題でないに農夫は簞をさて、商人は前垂をかけな



から。減税を論ずるに至らなければだめだ。

第二は組織的運動をなすことである。たゞ亂雜にさわぐは立憲的でない。暴民政治である。示威運動といへば巡查と喧嘩することゝ考ふるやうてはだめだ。第三は永續である。由來我國民は噴火山的一時的である。議會が開けるときのみ政治運動をやつて議會が閉ると政治を忘れる。議會のない時は政治運動の休息の時でなくつて準備の時である。政治家はこの間に遊説しなければならぬ。コブデンは雨滴の石を穿つをみて奮發し七年間運動してかの穀物條令を廢した。減税運動は一朝一夕では出來ぬ。

減税運動は今年失敗したけれども來年は捲土重來して其目的を達しなければならぬ。

然らざれば民力疲弊産業不振を如何するか。

(みねぎし生)

## 單に海軍問題のみかは

宗教家も教育家も道學者も、みんな眠つてゐる。腐つてゐる。耶蘇教の傳道師はミツシヨンの月給

を貰ふだけが能てもあるまい。佛教もさうだ。神道もさうだ。要するに彼れ等はたゞ口の人ばかりだからだ。彼れ等は迷へる一疋の小羊を鞭打つことをすれど、ライオンの前に蹲くだけのことを知つてゐる。現下日本社會の腐敗は海軍問題のみではない。あらゆる社會といふ社會が腐敗してゐるのだ。精神的に腐敗してゐるのだ。日本國民全體に徴が生えてゐるのだ。學校の小使を見よ。社會の小使を見よ。僕は嘗て本郷赤門の前に立つて帝大の小使に案内を乞ふたことがあつた。また近く海軍省に到りて案内を乞ふたことがあつた。而て兩者の小使が何れも傲慢な態度と、言辭を以て僕に對した。僕はそれだけで、その門の中に潜んでゐる人々の精神的價值が何れだけのものであるかを考へることができた。日本國民全體が赤門や海軍省の小使のやうに傲慢になつてゐるのだ。(TX生)



の府にして斯くの如しとせば、我等は言の出づる所を知らぬ。青年子弟を毒するもの果して幾許ぞや。

獨り怪む、我國の宗教家は、何故に何時までも爾く緘黙するのであるか。官吏糾弾する能はず、實業家糾弾すると能はず、教育家糾弾する能はずとせば、よく之を糾弾挾摘して、國民を警醒するもの、宗教家を措いて何處にかある。今日の宗教は決して教會の宗教、寺院の宗教にてあるべからず、これ路傍の宗教、工場の宗教、實生活の宗教ならざるべからず。しかも今日我國民の實生活を殆んど根柢より蕩搖しつゝある問題を雲煙過眼に附して我れ不關焉として居るが如きは、これ實に宗教家の天職を蔑視せるものにして、宗教家自身も亦時代病に罹れるもの、宗教其物は遂に自滅の外はあるまいと思ふ。殊に基督教の諸家、最も公平にして自由なる立場にある諸家にして、沈黙緘口殆んど木像の如く、土偶の如くなるは何ぞや。國家の進運は其軌道を逸し、國民は其方向に惑ひ、迷へる羊は天下に充滿するにあらずや。此時にし

も奮起せずんば、諸家は遂に方便宗教家、講壇宗教家たるの嘲を免れぬであらう。『爾曹は地の鹽なり、鹽もし其味を失はば何を以てか故の味に復さん、後は用なし外に棄てゝ人に踐まるゝのみ、爾曹は世の光なり、山の上に建てられたる城は隠るゝことを得ず……』と、あゝ夫れ基督の聖訓を如何。(鈴木)

## 選舉權の擴張あるのみ

政治の改革も、政治道德の發達も、結局は選舉權の擴張あるのみ。現在の制度の下に於ては、要するに金のあるものが勝つ。選舉區民に候補者の人格を鑑識するの明あるでなく、買収を排斥するの信なき間は、何うしても代議士の優良は、出来ない相談である。五萬十萬の黄金を撒布する位では到底物の役に立たぬやうに、有權者の範圍が廣大さるゝに、至らざれば、選舉界に於ては黄金萬能を許さざるを得ない。黄金に依つて當選を贏ち得たるものは、又自づから黄金に依つて動かされるこれは理の當然であつて、代議士の多數は尙政治

的仲買人たるを免れぬ。商人は利害に依つて進退するものであるからして、到底立憲政治が理想的に行はれやう道理はないのである。

我國に於ける代議士の背信の甚しきは、實に面憎き程である。けれども一旦代議士にして丁つた以上は、解散でもない間は、四年間は保證付で挺でも動かう道理がない。金と酒と道樂と、此三つの責過具にかゝつては、主義も節操も滅茶々になつて、何處を風が吹くといふ有様である。言論と人格とを抜きにした代議士に、民意の代表とか、立憲的行動とかと言つても、それは寧ろ言ふ方が無理である。

これは何うしても制度其物を改めてかゝるより仕方がない。制度を改めてかゝれば、如何なる狡兎と雖も、容易に欺かれやう道理がないので、國運の前途を開き、眞の理想國を建設せんには、第一は選舉權の擴張である。ならうことなら、普通選舉まで一足飛に飛ぶべし。普通選舉の弊害も勿論あらうが、國民の政治教育の進歩する丈げでも儲け物である。普通選舉は一舉にして行ひ難しとい

ふならば、せめて教育の程度に依つて擴張するも可なりである。眼に一丁字のない野人も、一定の租税を納めれば權利があり、大學の卒業生も否教授も、納税上の要件を具備せざれば權利がないといふ、そんな沒道理な話があるものでない。國民は聲を大にして叫ぶべし、而して政府と議會とに向つて要求すべし、一度にして成らずんば再びせよ、再度して成らずんば之を三度せよ、五度七度十度、飽くまでも素志を貫かずんば止むざること英國婦人の參政權運動の如くすべし（尤も暴行の點はあまり感心しないが）。遂には志を達するの機會があらう。我國の政治の改革はこれより出立するの外はあるまいと信ずる。（鈴木）

## 先づ石にて撃つ者は誰ぞ

海軍問題や、コンミッション問題にて、天下は實に騒然たる有様である。騒然たるのは當然である。然しながら之を思ふと、我等は嘗て耶蘇が「汝等のうち罪なきもの先づ石にて撃つべし」と云はれた言葉の、如何にも嚴として響くやうな心地が

犠牲の象徴であると、併し流石は田島氏もさうは云ひきり得なかつたものか、直ぐにまた附け加へて云つた。「そこで今日の問題は基督に撰ばれ、基督の犠牲の精神を吹き込まれたものがどれ丈か犠牲の精神を發揮して居るか」と云ふことである。實行しなければ鳴る鏡や響くネウハチの様なものである」と。

序に氏の説教を終りまで紹介する。氏は更に進んで『新しい女』を論じた。

『昨年あたりから、切りに新しい女のこと論ぜられる、これ併し歐羅巴道徳頽廢の反映に過ぎないのである。それが最も著しくバアナアドショウやイブセンの戯曲にあらはれたのである。そしてその反動が日本にまで流れ込んで來たのである。これは全く利己主義である、俺れが主義である。何でも彼でも俺れでなければならぬのである、道徳も宗教も、凡ては皆この俺れの情慾を満足さすものでなければならぬのである、肉慾の爲めてなければならぬのである。さうでないものは一切破壊しなければならぬと云ふのである。今一つは基督教の感化の結んだ果實である。即ち男も女も共に同じ人格者である」と云ふ基督の教が漸を追うて歐洲の人心に泌み渡つた結果である。而して日本の新しい女とは何であるか。彼等はたゞその皮層のみ學んだのである、惡い

方面をばかり眞似したのである。

然し氏にして傳道會社の月給も貰はず、眞に人生の辛酸をなめたとすれば、氏の様な説教が出来るであらうか『君はたゞプリンスブル丈けを與へることが出来る。併し多くの要求や興味はプリンスブルでない、實生活そのものである。そして君等の實生活には少しも興味が無い』こんなことが直ぐ私達の胸の中に浮んで來る。

終りに今一度繰返して云ふが、犠牲献身の精神の源泉を説くにあたつて三位一體の神のことなどは元より何の力もないが、何故もつと基督の人格をはつきり描き出さなかつたのであらう。吾々は實際基督教の偉大なる力を得たひと望んで居るものである。その力の秘密はどこにあるのであらう氏の云つた様に、自分の力にあらず、修養によらず、たゞ基督の犠牲にあるのだらうか。然らばその基督の犠牲から流れて來る力がほしい。併し私は茲に自分の感想を附け加へておくならば基督の十字架は實に彼自身のためであつた。彼自身の最も深い自身の爲めてあつた。(K・Z・K生)





## 時評

### 宗教家何ぞ遲疑する

方今に於ける政界紛擾の狀態は、獨り政友會に於ける未曾有の現象たるのみならず、宗教上、道徳上より見て、殆んど許するに辭なきの有様である。堂々たる帝國の宰相にして、白晝賊をなすものと疑はれ大官紳商又續々として逮捕される。況んや忠良なる軍人すらも、繩付として收監せられ其影響の及ぶところ測り知るべからず。然も此非行を蔽ひ、内閣を擁護する者、また實に少きは三千圓、多きは一萬圓を懐ろにして、多數横暴を押通して居ると噂される。此爲め某政黨の本部は八十萬金を支出したといふことである。國民の選良

として參政の府にあり、罪惡を糾明すべき者既に斯くの如し、然も其黄金の出所を詮索せば、更に第二第三のシームス事件を惹起すべしといふが如き、驚き呆れるの外はないのである。今の世、正人何處にある、義人何處にある。國民道德の標準何處にある。世は全く力ある者が勝つのである權力を握れる者が勝つのである。勝てば官軍敗れば賊、忠君愛國も何もあつたものでない。

驚くべき無道德の世である、驚くべき沒理想の時代である。此儘にしても推移して止まらずんば、日本は恐らく亡滅の外はあるまい。問題は獨り海軍に限るものかは。陸軍にもあらう、大藏にもあらう、遞信にもあらう、否、一切の官省關係に醜聞なきは殆んどないと言つてもよい位ではないか。殊に驚くべき伏魔殿と目されつゝあるは、宮内省である。宮内省の官吏、如何に理財に巧みなればとて、勤人の給料で容易に家も藏も建つべしと思はれぬに、其内福は實に廣大なものであるのと。それも亦宮内大臣とならうものなら、一年に何萬何十萬の餘徳もあると聞く。萬民敬仰の中心



を撰ばなければならない。今の牧師は先づこの態度からしてきめてかゝらなければならないのでなからうかと私は思ふ。

蓋し田島氏が若いものを引きつけ得ないのは、その餘りに舊い著むした聖徒的性格である。また時代思想に同情と理解を缺いた頑固な思想そのものにある。同時にまた年のとつた人々の牧者となる丈けの重味のないのは、その餘りに單純な善良な品性と、實生活の如何に慘憺たるかを實地に知らないお坊つちやん臭いところにある。

然し今の宗教家のうちで田島氏程、單純で素朴で實實な人がまたとあらうか。多くの人は彼をもつて好人物だと思ふ、その批評の裏には、幾分馬鹿にした様な意味の含まれて居ることは云ふまでもない。然しながら私は彼の單純を愛せざるを得ない、その素朴を敬せざるを得ない、その實實を嘆賞せざるを得ない、

\* \* \* \*

田島氏の説教の主意は、人々及び國家の救は基督の十字架即ち犠牲の精神そのものにある。われは基督のこの犠牲の生活によつて感奮興起するものであると云ふのであつて、日本に基督教が傳つてから以來何十年の間、多くの人々によつて入り代り立ち代り説かれ説かれたところの種類のものであつた。

田島氏は基督の犠牲は非常な力を我々に與ふる

と云つた。けれど氏は決してその献身犠牲の精神に富んだ基督の人物を描き出さないのである。かくて我々はたゞ基督の犠牲と云ふ言葉丈けを知つて即ち外廓だけを知つて、未だその内容を語れないのである。感奮しやうとしたつて、しやうがないのである。併しこれは田島氏一人の缺點でない今日の牧師の殆んど凡てはこの誤謬に陥つて居る今日の説教はたゞ言葉の説教である。抽象的なタームの連續である。内容と實質とは彼等のものではない。

『此の間私は陸軍の青年將校と一緒にゐた。そして談話々宗教のことに及ぶや、端なくも日本の團體の問題にわたつて行つた。そこで私は云つた。日本では、馬鹿に祖先崇拜と云ふことを高調するが、もし宗教學者にして誤つて居ないならば祖先崇拜は宗教發達の第三番目の階級にある即ち第一は石や岩や木やさうした一切の自然物を生きて居ると思つて、之れを信じた時代、第二は生殖器を拜んだ時代、そして第三が即ち祖先崇拜の時代である。こんな幼稚な宗教をもつて國体云々と云ふのは合點が行かない。私の考へでは日本の國体は決してそんな幼稚なものでない。献身犠牲の精神こそ日本國体の精華である。あなたは何う思ひますかと私はその將校に訊ねて見た。すると青年もそれには異存はなかつた。そこで私は云つた、然らば問ひますが、この精神は發

しては忠となり、顯はれては孝となつて二千五百年の歴史の柱石となつたが、その源は何處でありますか、人間よりか、天よりかと、答へて曰く、人からでもない、天からでもない俺からだ。私は重ねて訊きました。然らば君は戦争に於いて非常な勳功をたてたとする、然るに論功の行はれる時になつて、君は何等の表彰せらるゝところがなく、却つて君のお蔭で戦つた君の部下が金鷄勳章をもらつたとしたら、君は果して感謝することが出来るであらうかと。青年將校は何とも答へになりませんでした。

私達はまたシーメンス事件を話した。そして私は曰つた。私は三位一昧の神を信ずるものである。三位一昧と云ふことは神學上では勿論六ヶ敷いことであるが、私は私の實驗上よりこれを信ずる。即ち世界が未だ渾沌たりし時、神の中に父と子と聖靈があつて父は子を愛し子は父に孝をつくしたのである。神おのれの形に従ひて人をつくりたりと聖書に書いてあるが、即ちこの神の中に於ける忠孝の犠牲の大精神に像どつて造つたのである。そしてこの目に見えざる併し始めより行はれて居る神の忠孝の精神が吾々の信ずる基督の精神に表はれて罪人なる吾々のために十字架の苦しみを受け給ふたのである。もし私にしてこの父なる神の恵みと子なる神の精神をもつて居なかつたならば、そしてもし私が海軍將校の地位に置かれて居つたならば、恐らく私は彼等以上の惡しいことをして居たに相違ない。

而も幸にしてそんな心の起らないのは全くこれ自分の力によるにあらず、修養によるにあらずそれはたゞ犠牲の力によるのである。そしてこれ實に日本國體の花たる献身犠牲の精神と一致しない

だらうか。犠牲の精神は實に茲から生れなければならぬ。

かくて牧師は、それを聴いた青年が驚愕した。こゝとや、その様な基督教ならば日本に於いても差支がないと云つたことや、あなたの基督教は日本化した基督教だと云つたことなどを語つた。そしてその日本化と云ふことに就いて辯解らしいことが述べれた。

『一體世界の文明は一つは東洋に、一つは西洋に發達したのである。そして今やこの二つは接觸しつゝある、西洋文明である基督教が東洋に來て何等の貢獻するところがないであらうか。もし基督教が日本の俗衆に媚びん爲めの日本化ならばそれはもとより基督教の墮落であるが、日本の文明に貢獻せんと欲しての日本化と云ふことならば決してわるいことはない。——』

かくて氏はこの十字架の大精神をもつて日本に貢獻すべき最大なるものであるとして、この精神のない道徳は悉くみな偽善であつて白く塗られた墓に過ぎないと論じた。

『かくてここに一つの實際の問題が起つて來る。然らばその證據は何處に在るかと云ふことである。吾々は答へるであらう「來りてわが教會を見よ」

隨分思ひ切つた大宣言である。牛込教會は献身

體と精神が調和したと云ふ意識があらはれる。斯くして精神は丈夫になる、自信は強くなる。怠惰者は活動者となり、亂暴者は徳行家となり、短氣者は辛抱家となり、卑怯者は大膽家となり、憂鬱家は快活家となり、又厭世家は樂天家となる。是

れ悉く腹力法利用の結果で、「念腹宗」の御利益は先づ肉體に始まつて次ぎに精神に移り、凡べての衆生を濟度して、未來と云はず今日只今平和極樂の境涯に住せしめるものである。夢忘るべからざるは念腹の一事であらう。(大正三年二月一日)

けふ  
今日もまた貧しい麵麴を嚙ちりけり神の子なれば良民なれば

誤譯誤植一年半の編輯に島の椿を思ふころかな  
大學のブロフェツサアと緣日の女乞丐と男やもめと

躑躅咲さぬ櫻となりぬ氣懶さのつゞく頃かも孤獨となれば

自我！自我！大きな聲の反響の淋しかりけり孤獨になりて

ゆふしほ



## 牛込教會訪問記——教會訪問記其の五

ほんとうから云へば日本基督、組合、メソヂストと、各々その代表的な教會を訪問して來た私は今度は築地の三一教會あたり、聖公會の代表教會へ行つて見なければならなかつたのであるが、何

だか餘り成熟し過ぎた所謂元老株のお説教をばかり聞いた所依か、少し若い人の話を聽いて見たくなつた。

何處へ行かうかと思案をした結果、差し當りまづ牛込拂方町の、日本基督教會を訪ねることにした。それは何も、特別に田島牧師に着目したわけではないが、見渡したところ、若い牧師の中にもこれはと思ふ人もない、それに、この教會なら、女子學院の女學生も來れば、早稲田に近いから、

早稲田の學生なども集つて來るであらう、さうすれば、他の教會よりも活氣と生命が溢れて居なければならぬと思つたからであつた。

ところが行つて驚いたときには、集まつて居ると云へば、西洋婦人の監督のもとに引率されて居る女子學院の女生徒の一隊と、その外には僅か十名内外の男女が出席して居るばかりであつた。而も女子學院の生徒と云つてもほんのまだ乳くさい少女の群に過ぎない。若い牧師で、米國に六七年も學んで、そして今、明治學院の教授をして居る田島氏は、何故もつと聽衆を引きつけないのであらうか、私は先づ第一にこの疑問に打つ突からずには居られなかつた。

若し若いものを引きつけないとが出来ないならば、年のとつたものを引きつけることが出来ないだらうか、どうせ今の世の中でその何れをも引きつけることは困難のうちにも困難であらう。若いものの指導者になるか、舊いものゝ慰め人になるか、その何れか



バを飲むが如き僅かの動機でもよい。併しよく考へて見ると、人は決して全然靜乎として居るものではない。殆んど何時でも何所か動いて居る。

寫眞を寫す時の一例からてもよく分る。況んや前の靜坐姿勢は身體の動搖に最も便利な姿勢であるから、一旦腹に力が這入ると愈々動搖は自然になつて来る。腕にても足にてもウンと力をいれて見よ、直ぐビリ／＼と動き出すではないか。靜坐の動搖はわざと動くのではない。自然に動くのである。併し自然とは云ふものの決して無意識ではない。たゞ無意思である。故意に動くのではない。だから何時でも止めようと思へば止めることが出来る。此の無意識と無意思とは決して混同してはならない。

### 靜坐を練習して

靜坐を練習して何時でも腹に力が充實する様になると、「我れ即ち自分」と云ふものが腹に在ると云ふ意識が出来て来る。人即ち「我れ」は一體何處に居るのであらう、肉體の内何所かに在るに相違ないが、丁度何所に在るか、誰もそれを知ら

ない。併し私は自分が腹に居ると云ふことの意識を持つて居る。さうなると人には隙がなくなる。

何時でも油斷がなくなる。虚に乘せられると云ふとがなくなる。何時どこから攻撃されても横鎗を突込まれても平氣でそれに應對することが出来る様になる。靜坐に伴ふ利益は色々あるがその二三を示さんに著しく恐れが減じて来る。たとへば此頃のと夜中に私の近所に火事があつた。庭のすぐ向ふが焼けて居る。内の十四才になる一人の娘が眼を醒まして何事だと聞くから、近所が火事だと云ふて聞かした。元來大抵の女は年を取つて居ても火事だと云へば直ぐブル／＼慄へ出して怖はがるものであるが、この少女は平氣な様子で居たから、試みに怖はいかと尋ねたら「怖はくない」と答へた。震へて居るかと問ふと震へて居ないと返事した。そこで何故ふるえないかときくと少女は「岡田式をやつて居るから」と答へた。こは私の内では毎朝六時半から七時迄三十分間づつ家内中で靜坐を練習して居るので、その効果の現はれたものであらう。また岡田式をやると疳癪などが容

易に起らなくなる。ムカ腹をたてると云ふのはやつぱり隙があるからである、自分の居所がきまつて居ないからである。然るに靜坐法をやると「我れ」と腹とが同居して来るから云はゞ我には腹と云ふ番人がついて居る譯になる。そこで怒る前には先づ腹に相談をしその許可を得ねはならぬ事になる。世間では「膝とも談合」と云ふが、これは「腹と談合」である。昔から怒るとを「腹ふくる」とか『立腹』とか「腹が立つ」とか云つて怒りと腹との關係は如何にも深い様である。岡田式には云はゞ腹は常に立ち通してあるから何か頓かに腹が立ちたいと思ふてもそれよりも先きに腹は立つて居るので、もう既に立ち遅くれの状態で、疳癪は自然と立ち消えになるのである。また靜坐の結果として辛抱がよくなる。忍耐力が強くなる。たとへば歩く時にも脚で歩るかないて腹で歩るくから、腹が疲れるまでは脚は疲れない。又岡田先生の如きは、三十分でも一時間でも目ばたきをしないで居られるさうである。それは腹で目をあけて居るからである。目では出来ぬ辛抱も腹では容易に出

来るのである。相摸をとつても劍術をしても手や脚でやらないで腹でやると忍耐が出来る従つて上手にもなる。字を習ふにも書を描くにも同じである。踊るにも、泳ぐにもミシンを使ふにも自轉車に乗るにも、何をするにも、乎をするにも腹に力を入れると入れないとして非常な相違になる。ものを擔ぐにも肩でなく、腹で擔ぐと重いものが久しく擔げる。風をひいて鼻がつまる、腹に力を入れるとすぐ開いて来る。故に鼻や耳や咽喉や従つて頭の惡い人々には、「腹力法」即ち腹に力を入れる靜坐法」は實に非常な効能がある利益がある。常に腹に力を入れるには常に腹を忘れない様になければならない。その爲めに腹を念ずるとの必要が起るのである。始めの内は、一日に幾度と云ひたいが、一時間に幾度も、腹の力が抜けるから、ドッコイこゝだと思ふて、ウンと腹に力を入れるがよい。斯くして段々念腹を忘れぬ様になると、その効驗が著しくなつて来る。肉體は何時の間にか病氣を忘れて、健康になり、我等は遂に肉體そのものあるをすら忘れて仕舞う様になる。肉

る。

### 靜坐の姿勢

常に腹の力を抜かさぬと云ふことが靜坐の目的である。靜坐はこの姿勢を得んが爲めである。この姿勢に伴ふ腹部の筋肉感覺 (muscular sensation) を會得せんが爲めである。而かも單に靜坐の時のみこの姿勢に適へばよいのではなく、事更らに靜坐をせぬ時にも、姿勢を崩す様では、未だ十分とは云はれないが、靜坐をせぬ時の事は後廻しにして、先づ靜坐の方法を話さう。さてその靜坐をする時の姿勢は如何であるか。先づこれから述べねばなるまい。先づ踵と踵との距離が三四寸位になる様に深く足の裏を重さねて、臀部をその上に載せて坐るがよい。手は一方の指全體で他方の指を握つて組み合せ靜に膝の上に置く。眼を閉ぢ口を締めて、息は出入共鼻から細く靜にすべきである。大切なことは尻を成るべく後方に突き出して、少し中腰になり、膝の間を少しあけることである。そして下腹に力をいれて十分に膨らかし膝の間に落す心持ちになる。その時には鳩尾の邊

を成るべく凹まさない。肩をはつたり胸を出してはならない。寧ろ猫背になる様に兩肩を下げ胸をすぼめなければならぬ。そして腹の力が抜けぬ様力をいれながら、腹を念ずるのである。始めの間は直ぐ苦しくなるが、直ぐにやめてはならない。辛抱して出来るだけ長く坐らねばならぬ。始めには直ぐシビレが切れるがその時は例の念腹をするのである。シビレに氣が付く時は既に必ず多少腹の力が抜けて居るに相違ない。故に「こゝだ」と思ふて腹を念ずれば、シビレの方は自然に忘れて仕舞うと實に妙である。又暫くするとシビレに氣が付く、そこで又腹に力を入れる斯くして段々進む時は自然にシビレは切れぬ様になつて三十分でも一時間でも又二時間でも辛抱が出来様になる。否、別に辛抱せずとも後には平氣に坐れる様になる。否、一步進んで坐るのが樂になる、心持ちよくなる。辛抱が變じて自然になり、辛抱が變じて愉快になる。

### 身體の動く理由

靜坐をやつて居る人々を見ると手や頭を變に動



かして居る。それは何の爲めであらう。或人は此の動搖を元來靜坐法に關係の無い偶然的現象だと云ふて居る。福來博士の如きはこれを精神統一の缺乏の結果でヒステリー患者や精神病者の場合の通り自動作用であると云つて居る。又速水學士はこれを暗示による觀念運動であると云つて居る。成る程多くの靜坐實行者の中には、單に模倣的に動いて居るものもあらう。自己催眠の結果で動いて居るものもあらう。又ヒステリーの舞踏病的に動いて居るものもあらう。又觀念的暗示の結果で動いて居るものもあらう。併し此等は決して岡田式靜坐法に當然伴ふべき身體の動搖とは云はれない。若し此等斗りが岡田式に伴ふ動搖の全體であつたならば、如何にも身體の動搖は偶然的現象と見るが當然であらう。併し此等の外に岡田式靜坐法の當然なる隨伴物と見るべき動搖がある。即ち前に云ふた靜坐の姿勢をして下腹に全身の力を籠めると、身體はジンジンと或はブルブルと、何所となしに震へて来る。これが動搖の最初の必要條件である。

斯く身體の動くのは腹の力と比例して自然に動いて來るのであるから、腹に力が多く入れれば身體の動き様も亦自然ヒドクなる譯である。故に若し靜坐をしても動かないと云ふ人があれば、それは力がまだ眞個に這入つて居ないからである。その證據には、私は今日迄隨分多くの人々の身體を動く様にして來た。早い人は三十秒遅い人も二三分間で動く様になるので、今日迄の處で一人も動かなかつた人はないと覺えて居る。而かもその方法は暗示でもなく、模倣でもなく、精神作用でもなく單に機械的方法であつて、たゞ腹に力を入れる要領をさへ教へればよいのである。

精神が統一して、全身の力が下腹の點に集まると云ふとが、肝要である。靜坐の姿勢として下腹に力を入れると、身體は丁度玩具の達磨の様になる、だから一寸した刺戟や動機でもこれに加はるなら直ぐにプラ／＼と動く様になるのである。さらば此の刺戟や動機は何處から來るか云ふに、心臟の搏動もその一つであらう。呼吸に伴ふ胸の動搖も亦その一つであらう。マタ、キの如き又ッ



通しとなると、決して容易でない。それには練習がいる。修養が必要である。と云ふて別に六づかしいことではない。その方法は短簡である。

先づ第一に下腹を成るべく大きく丸くして前に出し、全身の力を臍下に籠めて強く張るのである。そしてそれを瞬間でなく一時でなく、始終やるのである。朝眼が醒めると同時に直ぐ腹にウンと力をいれて終日それをゆるめない様に、夜寝る迄張り通しにして居るのである。腹を忘れると力が抜ける。そこで腹を忘れない爲めに何時も腹を念ずるのである。腹を念じてさへ居るならば、決して力が抜けると云ふことはない。そして屹度極樂に達することが出来る。念腹宗は確かに肉體と精神とを兼ね救ふ宗教である。そこで私はこの宗教を念腹宗と名づけたが、同時に此の念腹宗の題目をもこしらへた。それはかうである。ナムハラ、ナム、ハラ、ハラハレ、ハレハラ、ハラミツタ、ハラハツタ、ハラハリタヤ、ウン、ウン」

新渡戸先生は第一高等学校の校長であつた時、曾て學生に、『君達は何か苦しいとか悲しいとか云

ふ様な場合に逢ふたら、こゝだと思ふて辛抱せよ』と、教へられたと云ふことである。それは實に面白いこと又有益なことだと私は思ふ。併し唯「こゝだ」と思ふ計りでは、まだ不十分な點がある。私は更らに進んで『こゝだと思つて、腹を念ぜよ』と云ひたく思ふ。常に腹を念じて腹に力が這入つて居れば、恐らしそうなことに出逢つても恐ろしくなる。腹が立ちそうな場合に出くわしても腹が立たなくなる。暑い時にも暑くなくなる。寒い時にも寒くなくなる。苦をも感ぜず又飢をも忘れる勇氣が増す。辛抱がよくなる。たゞ困難は練習をしないと、折角腹に力を入れてもその力がすぐ抜けてしまふ。どうかするとすぐ他の事に氣を取られて、腹はお留守になつて仕舞う。故に腹を念ずるとの練習が必要である。此の事斗りは克己と奮闘とをもつて練習しなければならぬ。それを

する一つの方法は、下腹をシツカリ帶でしめるがいゝ。そして卅分間位靜座し、その間決して腹が弛まぬ様即ち帶が弛まぬ様に稽古をするのである。又私は宅の小供と約束して、何時でも私の腹をお

して見て、もし腹が弛るんで居たならば、その度毎に五錢づゝ罰金を與へると云ふことにした。』これは云ふ迄もなく、油斷なく腹に力をいれて居る工夫の爲めである。斯くして一昨年夏は三ヶ年斗りの間に合計五十五錢をしてやられたのである併し其後は油斷がなくなつたので、もう小供の方からやめてしまふ様になつた。斯くして今では何時省みて考へて見ても、殆んど腹のゆるんで居ることはない様になつた。試みに十分でも二十分でも私の腹を押して見て御覽、ゆるまぬとは直ぐ分ります。たゞ困難は二三分間も押すと押す方が弱つて、息を切らし汗をかいて中止するとである。

### 呼吸との關係

成る程岡田式でも呼吸のことを云はないではない。併し呼吸よりも腹力を重んずる。是れ腹に力をいれると云ふことがその本領であるからである。腹に力をいれて、決してそれをゆるめない様にせねばならぬ。腹を念ずるは全く之が爲めである。息を吸ふても吐いても、腹は常に同じ、状態で張り切つて居なければならぬ。腹は常にきめて置か

れねばならない。呼吸と共に腹がペコ／＼動いてはならない。普通の呼吸法では息を吸ふ時に胸と腹とをふくらし息を出す時に腹をへこますのであるが、此種の呼吸を深くすると云ふとは身體のためから云ふても決してよくない。餘りに深くすると卒倒するものが多いではないか。

岡田式の呼吸は逆であると云ふが、成る程その通りで、息を吐く時に腹を張るのであるから、逆であるに相違ない。併し斯く逆にするのは、決して目的ではなく、云はゞ常に腹の力を抜かぬ自然の結果である。試みに息を出しながら腹に力を入れて見よ。腹をふくらかすより外に方法はあるまい。だから始めの内は息を吐く時に腹をふくらかす様に稽古をするのである。併しそれは呼吸が目的ではなく腹力が目的である。何時も腹に力を入れて居る爲めには、どうしても自然に所謂逆呼吸をする様になるのである。だから呼吸の事は餘り考へないで、自然にまかして、油斷なく腹を念じ腹の力を抜かぬ様にさへして居れば、何時の間にか不知不識の間に呼吸は逆になつて居るものであ

とは云へない、従つて今はまだ私の考へを發表するの期ではない。岡田先生の云はるゝ處によれば肉體の方面のことは靜法坐に取つてはほんの「いろは」に過ぎない、初步に過ぎないで、靜坐法の本領は精神の修養にある。それには三年もしくは五年の歲月を経なければ、その眞味を解することは出来ないものである。私はその時を待つて居る。努めつゝ待つて居る。今はその時に至る道中である過渡時代である。私の人世觀や宇宙觀が終に如何に落ち着くか、今日の處未定の問題である。

### 念腹宗の謂はれ

岡田式靜坐法を「念腹宗」と云ふのは、私がつけた名稱である。岡田先生の關り知られぬ名稱である。念腹宗は念佛宗からもぢつて、つけたのである。それはかう云ふ理由からである。元來「セイザ」は、これを靜坐とも又正坐とも書く、現に私達の出席して居る牛込の會では正の字を用ひて居るが、他では靜の字を用ひて居る所もある此等はどちらでもよいが、嚴重に云ふと何れも當を得て居ないのである。何故なれば岡田式、はたゞ

坐つて居る時にのみ行ふべきものではなうて、立つて居る時にても、歩いて居る時にても常に行ふべきものであるからである。又三十人五十人百人のものが一堂に集つて坐つて居る時にても、正しく靜かに坐つて居るものは少數であつて、大多數の人は頭を動かし手を振り宛然、狐つきの様な連動をしたり、呻つたり叫んだりなどして、實に可笑しい又一愉快な狀態である。だから或人々などは、その光景を見て、まるで狐つき若しくは狂人同様だと云つて、靜坐をするをやめてしまつたと云ふことである。故にこれは靜坐法よりも寧ろ動坐法若しくは狂坐法とふのが本當である。併かし斯る會合に於ける大多數の人々の姿勢は、目を閉ぢ、正しく坐り、一方の指全體で他の手の親指を握つた兩の手を下腹のところにあき、そしてその手でトン／＼寧ろ強い位に腹を打つて居るのであるされば靜座法は鼓腹法と云つてもよい。支那人の言葉に「鼓腹擊壤」と云ふことがあつて、これは欣喜を意味するものだと言ふが、實にその通りで鼓腹は實際愉快なものである。けれども



又岡田式の主眼とするところは、下腹に力を入れる。と云ふことであるから、力腹法又は腹力法と云つたら良いかも知れない。併し同時にまた考へて見ると、岡田式の目的は決してたゞ肉體のことばかりではないので、精神の方面が寧ろ主眼であるから、そこで私は一層のこと遂にこれを宗教的に念腹宗と命名して見たのである。

### 腹は力の無盡藏

普通の考へでは腹と云ふものは何だか下等なもの卑劣なものとなつて居るが、實は不思議なもの靈妙なもの、神秘なものである。腹は身體の中心である。常にその位置が全體の中心にあるばかりでなく、極めて彈力に富み、伸縮自在である。普通の考へでは腹はたゞ消化の機械に過ぎないのであるが、私の考へでは腹は力の倉庫である。人間の力の全體は實に腹の中にあさめられて居ると云ふて良いのである。身體の局部に散在して居る力は弱いものであるが、凡てを下腹に集注する時は非常な力となつて非常な活動をすることが出来る様になる。腹に力がこもつて居ると云ふことは牛

や馬を見てもわかる。牛馬の力の大部分はその腹に籠つて居るのである。殊に牛に於いてはさうである。牛は腹の太つた程、力がつよいのみならず辛抱がよい。此の辛抱のよいと云ふ事が大いに考ふべき點である。又相摸とりなどでもその力の強さと腹の大きさは多くの場合に於いて正比例をして居る様である。よくあの人は「膽が太い」とか「腹が大きい」とか又「胸が座つて居る」など、云ふが、實際、腹の大きい人が偉いのである。而かもこれは常に肉體の上に於いてのみならず、精神の上に於いてもその通りであらうと思ふ。大事業が大腹から出る様に、大思想も亦大腹から出るのはあるまいか。今日の教育を受けた我等は「頭で考へる」と思ふて居るが、漢學者などは皆「腹即ち臍の下で考へよ」と教へ來たつたものである

### 常に腹を念ぜよ

一口に腹に力を入れると云へば、何でもない事の様であるが、それがなか／＼容易に出来ないものである。それも一寸の間の事なら誰にも出来るが、一時間も二時間も、否朝から夜迄力の入れ



なる少しの障子の隙間から洩れて来る風にさへ寒  
胃を催すと云ふ様なことになつて、私はいつも病  
人の様な感じがして居た。他人の家庭に招待さ  
れて饗應をうける、直ぐ胃がわるくなる集會など  
があつて西洋料理でも食ふと直ぐ下痢を來たす。

そこで胃散の空罐が山をなす程たまると云ふ様な  
始末であつた。夜間眠られない、肩がはる腰が痛  
い。按摩をとる。そうする是が習慣になつて按摩  
の笛さへ聞こえれば呼び寄せると云つた様なこと  
になつた。肉體は斯く難破船に似て居たが精神は  
まだ大變に衰へたと云ふ譯ではないので、その頃  
の私は、肉體が病氣の間屋であつた爲めか、精神  
と肉體とが全然別物であつて、離れ／＼になつて  
居る様な感じがして居た。靈肉の分裂と云ふ痛ま  
しい状態に陥つて居たのである。

### 靜坐法が予の身體に及ぼした影響

然るに今から二年三ヶ月前に初めて岡田先生に  
就いて靜坐法をやり出すや否や、私の氣分と生活  
とは共に一變した。身體は非常に健になり精神も  
亦著しく爽かになつた。前の分裂に引きかへて靈

肉調和の愉快を味ひ得る様になつて來た。胃散は  
その後は一つも吞まない。按摩をよらすことの必  
要もなくなつてしまつた。昨年 of 下半期には、咽  
喉を焦いてもらうつた爲めに廿五錢の醫料の外、  
醫者の厄介になる必要は一切なかつた。斯く當に  
健康を快復したばかりでなく人生の終はりに近い  
五十歳近くになつて身體がめき／＼と發達して來  
た。腹の周圍の如きは五吋も太さを増して來た。

昨年の春のと、予が四年間も留學して色々世話に  
なつた米國ハーバート大學の教授ビーボディ博士  
の來朝された時、或る夜會に列席しやうとして久  
しぶりに燕尾服を出して見たが、小さくて着られ  
ない併しもう時がさし迫まつて居るので、どうに  
も仕様がなから、ヅボンの腰のまわりやチョツ  
キの胸のまわりを破つて無理に着、小さくなつた  
シルクハットを頭に無理に押し込んで、電車に乗  
つたところ、暫らく行くとどうも苦しくて氣分が  
わるい、どうしても辛抱がしきれないので途中で  
電車からとび降りて、急いで宅へ歸つて來ると家  
人は私の顔色の蒼白なのを見て驚いて、葡萄酒を

飲ませて呉れるやら寢床を引いて呉れるやら大騒動と云ふ様な滑稽を演じたことさへある。私は背丈だけは僅か五尺二寸計りで寧ろ小男であるが、體量は今十八貫目ある、これを靜坐法實行以前に比較すると正さに三貫目の増加である。そは私はそれ迄に十五貫目以上あつたと云ふ記憶が一度もないからよく分ります。それなら身體が重くて困るか心臓の工合が悪うて困るかと云ふに決してそう云ふとはない。私のは脂肪肥えとは違ふから、歩くにも甚だ輕快であり、手足は固より全體の力量も大變に強くなつた。先達でも早稻田の學生達がやつて來た時に、數十人の中の一強靱な青年と腕押しをやつて見たが、私は易々とその青年に打ち勝つことが出來た。私は實に今日程肉體を輕く感じたとはなく、又精神を爽かに感じたとはない。一方病氣が良くなつて、肉體を重荷の様に感ぜぬ様になつた計りでなく、他の一方には實際積極的に肉體が輕くなつて歩くと云ふよりも寧ろ始終飛んで居るか或は滑つて居ると云ふ様な感じがして居る。

靜坐法の精神に及ぼす影響も亦大なるものである。私は一體宗教學を専攻したものである。従つて倫理學や哲學や心理や社會學や文學等にも多分の趣味をもつて研究をつゞけて居るものである。然しながら今日から竅へて見ると如何に凡べての態度が一變し來たつたかと感ぜざるを得ない。今日では私は何を考へるにも靜坐法を通して考へる様になつたのである。宗教や哲學のことは言ふに及ばず、社會問題や經濟の問題の如きに至るまで、一切靜坐法と云ふ眼がねを通して見る様になつた。青い眼鏡を懸けて物を見れば一切が青くなる様に、靜坐法と云ふ眼鏡を通して見る私の眼の前には、今や新しい世界が表はれて來たのである。私は今迄も色々のことを考へたり、云ふたり、書いたりしたのであるが、それ／＼局部的になつて居て何等の統一もなかつたかの様な氣持ちがする。即ち今迄の處では考へが離れ／＼に置かれた團子の様でバラ／＼であつた。それが今では靜坐法と云ふ串で貫かれて串團子の形になつて來たのである。併し精神の方はまだ私には奥義に達した

ふのではない。美はしい着物を着てはならぬと云ふのではない。たゞ夫れ等のものに執着しない様にならなければならぬのである。それ等のものに囚はれない様にしなければならぬのである。先達ても若い華族が私のところへ来て、爵位を返上しやうと思ふと云つたので、私はその人に答へて云つた。『何も返上するには及ばないぢやないかそれよりも爵位があらうが、なからうが、そんなことに頓着しない様にならねばならないぢやないか。君はまだ爵位にまけて居るな。併しもしそれが邪魔になるなら返した方がいゝ』爵位が悪いのではない、たゞその爲めに高慢になり、他人を見下

げるからいけないのである。犠牲とはそれ等の物を悉く捨てゝしまふと云ふことではない。たゞそれ等に執着しない様に、自分の一切を御用のために献げますと云ふこの心持ちである。最も根本的に自分を御用のためにすてますと云ふのである。自分そのものを献げることである。そこに初めて眞の力が出て来る。私は繰り返して云ふ。女の力はバツシブな力である。目だゝぬ力である。隠れたる力である。そしてそれを養ふのは各自の精神修養で、結局はあらゆるものを、自分自らを、天の命ずるまゝに神に献ぐることであると。

## 念 腹 宗

岸 本 能 武 太

今や岡田式靜坐法なるものは非常なる力をもつて全國に擴げられつゝあるのみならず、殆んど、日本人の生活に一新紀元を劃さんとするが如き觀を呈して居る。これは決して忽諸に附すべきものではない。凡べて吾々の生活に發展と改善との力を與ふるものは眞面目にこれを研究し、且利用すべきものである。私が屢々靜坐法のことについて語るのも亦この理由に外ならぬ。

### 靜坐法練習以前の予の狀態

私は元來決して病弱な性質と云ふ方ではなかつたが、今より十二年程前に、餘り激烈に活動をした爲め中耳炎にかゝつて三年間も病床に就いたことがあつた。それからと云ふものは身體が全體に衰へて、雷に耳ばかりでなく、全身が何となく病

氣勝ちで、始終不愉快でたまらなくなり何を考へるにも、何をなすにも、直ぐ自分の身體の弱いところが氣になつて、今後はとても人生の荒海の航海には耐へられない様な氣がして居た。最早や自分の身體は一つの難破船である、Human of Wreckである。と云ふ様な感じがして居た。耳のわるいは神經に障つて實に不愉快なものであるが同時に健康にも害になる。靜乎として居なければならぬから運動が出来ない。運動が出来ないと胃がわるくなる食物が不消化になる。食物が不消化になれば遂に神經衰弱を起すと云つた様な風でさうなると何だか精神も肉體もいぢけて來て、常に暗澹たる憂鬱な日を送らねばならなくなる、少しの病氣にても直ぐに藥の助けを借らねば氣が濟まなく



よつて吾々は心の働きを感じることが出来る。けれど吾々はそれによつてその人の性質そのもの——人格の實質そのもの——を知ることは困難である。それはどうしても、働かない容貌の靜體に待たねばならない。動體は第二次で靜體は第一次でわる。

斜に意見しやう、弟を叱つてやらうと云ふことは第二次である第一次はさう云ふ考へを起さない無爲の感化である。私は先達で梅川忠兵衛の芝居を見た。見て居て如何にも馬鹿らしく感じたが併しそこに非常に有益な教訓を得た。あの忠兵衛が、改心しやうとやゝ決心のつきかけた時分に、町へ出て行くと、自づと常に行きつけの色町に向ふ。ところが辻占賣りが来る。思ひかへして元の途に歸へる、また自然と色町に向ふ様に、幾度か迷つて居る。それは能く人情を表はして居ると私は思った。もし辻占賣の女が『忠兵衛迷つて居る、よせ』と責立てたならばどうであらう。恐らく忠兵衛の心をひきこめることが出来なかつたであらう。プラウニングのビツパ・パツセスの二少女が、一年たど一回のクリスマス・イブに、朝早くから家を出て麗かな日をあびつゝ森に散歩しながら無意識に歌つた歌は、人殺しの恐るべき犯罪をとがめ、人の女房をつれて飄落しやうとした男女の心持ちを蹴さしめたのである。こんな力は、弱いと思はれる女の方に多いのである。

私の書齋の前に梅がある。毎年今頃になると花

が咲き鶯が来る。私はこの歌が非常に好きである  
かれはてししかも花さく梅が枝に

聲をもたてず鶯のなく  
聲をもたてず鶯が鳴く。實にいい。

### 隠れたる力

爺さんや婆さんが一切をすてゝ子供や若いものゝ世話をする。その力は世間には聞えない。けれどそれはラディユムの光線を放射する様に小さい一家から聞えない聲をもつて歌つて居るのである耳あるものは聞くことが出来る。それは要するに心の底の働きである。

プロクターのステューデントと云ふは詩は私の愛吟の一つである。その詩中の學者は迷懷して言ふ様『私は宇宙に遍滿して居る美を窮めんとして晝夜もわかず、讀書をした。すると、そこへ妻がやつて来て、『餘り勉強して身體にさわつてはいけません、おやすみなさい』と云ふ。私はそれをうるさいと云つて叱りつけて尙も讀書をつづけた。

私はまた人類の歴史を窮めやうとして一心不亂に萬國の歴史を繙いて居る、その間に妻は美しい

花を机の上において行く、私はそれをうるさい、花に用はない、いるのはインクだと云つて叱りつけた。

私はまた宗教の眞理を窮めやうとして、瞑想三昧に耽つて居ると、小さい足おとがコト／＼と廊下に響いて自分の可哀い子がやつて来る。私は折角精神集注して超然主義を考へて居たのにと思ふて腹立しくて耐らなかつた。

けれど私は此處に年を取つたのに、宇宙の眞理も世界の歴史も宗教の眞理も、何も解らない。然るに今はもう、お休みなさいと云つてくれる妻もなければ、花を置いて行つてくれる人もないそしてまた可哀い小さな足音も聞えない。沙漠の中に獨りおきざりにされた様で何だか恐ろしくて堪らない。そして、もう以前の様に骨を折つて勉強する力もなくなつてしまつた』と。その時にはわからなかつた婦人の力。その時にはうるさいと思つた婦人の力。何ぞしらん、それは彼をして學問せしむる力であつたのである。そのうるさい女が居なくつて彼れの學問する元氣もなくなつてしまつたのである。中村敬宇先生は、死ぬ時に『夫人をよんでよく學問をさしてくれた』と感謝したと云ふことである。

### 犠牲の眞義

婦人の力はかくの如き隠れた力である。そしてその力は實に偉大なる働きをなすものである。そこで私は結論として世の中の男子に對つて云ひた

い。男子よ。われ／＼は兎角、女の力の微妙なことを知らない。眞の女の力を知る耳も目もない。

われ／＼は鳴かぬ鶯の聲をさく様にならねばならない。勉めて此の婦人の力を知る様にならなければならぬ。私は又女に對つて云ひたい。女よ。

あなたは人を驚かしてやらうとか、世の中の人に目だつたことをしてやらうとか、何々會の會長になつてやらうとか、或は運動だとか説教だとかやつて見やうとか、或は或る人の向ふをはつてやらうとか、如斯ことの爲めに動いてはならない。それは淺薄な考へだ。そんな動機から起つたことには何等の力もない。何故なれば人生のあらゆる問題の解決は犠牲より外にないからである。

小我に囚はれて居る間は何もならない。そんな考へはみな小我の考へである。耶蘇その弟子に教へて偉いものにならうと云ふものは凡てのものに使はれるものとなれと云はれた。名を得やうとするものは駄目である。

けれど、名譽が悪いと云ふのではない。富貴が悪いと云ふのではない。美はしい着物が悪いと云

つて嘲つた。けれどこれは決してさう弱い力ではない。眞に強い力は打ちたく方にあるか、擲かれる方にあるか。擲かれても擲かれても打ちこはれない力の強さを知つて居るものはまことに少いのである。

基督教を信ずると愛國心がなくなると云ふ非難は随分以前から加へられて居る。けれど英國や佛國や獨逸の様な基督教國はどうであらう。そこにはジツト潜み隠れたる力がある。そしてそれらの國をして強からしめ盛ならしめて居る力は實にこの潜み隠れたる力にある。それは軍艦よりも軍備よりも強い力である。この力によつてそれ等の國は保たれて居ると云つても差支がない。それは即ち基督教の受け身の力である。私はそんな力を日本にも欲しいと思ふ。日本を救ふ力はこれより他にはないと思ふ。國防とか軍艦とかは華かな愛國心である。私達の様に少しばかりの月給を貰つて居るものもその四分の一を税として納めなければならぬ。そしてそれは忠君愛國の爲めとは云へ民の力を疲弊せしむることもあらうし、又其

税金の使途は悉く正當なるや否や近頃の風説に據るも絶對的に信用を置けない如である。

### 人格の放射力

この潜んだバツシブな力は、不知不識の間に、それを外部に放射するものである。そしてその力は實に偉大なものである。

八年前であつた。私は文部省の命を受けて石川縣へ教育視察に出かけたことがある。その時縣知事や視學官と共に或る女學校に參觀に行つた。校長に案内せられて或る教室に入ると、そこには廿名許りの女學生が居て、倫理の質問をして居た。その時一人の女學生は或る驚くべき質問をした。『自分の親であつても、妻や子を捨てて顧みず、道樂ばかりするものなら、これを刺殺しても差支えがありませんか』と云ふのである。若い教師は答辯に窮した。そこで私は『それは面白い問である、もし許されるならば私がお答へしたい』と云つて、一場の感話を試みた。あとで聞けば其の娘は確かに實際問題に差し迫まつて居つたのである。併し茲に先決問題がある。それは即ちその女房なり娘なりの平常の生活如何であるかと云ふことである。もし娘や女房に侵すことの出来ない或る人格の力があるならば、彼れの一言はどんな偉い結果を持ち來すか知れないのである。

平生修養ある人の云ふとは非常な力をもつものである。たとへばラヂイウムが一種の力を放射す

る様に。又運動があれば自然と熱が起つて来る様に分子や電子が常に動いて居る様に。ヘラクリタスも云つて居る凡ゆるものは流れると。石塊でさへその分子が運動して居るのである。従つて生きて居るのである。まして所謂、生物に於ては尙更である。人間の血球は盛んに運動して居る。そしてそこから一種の光を放射して居る。だから昔しから云つて來たアウラ(後光)と云ふのも實際あることかも知れないのである。人の思想も一種の波動をなして外部に射出して居るであらう。そして所謂、以心傳心と云ふ様なことも起るのであらう或る人の前に出れば何とはなしに或る一種の人格の力や溫かみを感じるものである。

### 婦人と感受性

人は鼻の作用を多分に失つて居るのは事實である。殊に近頃の人は尙更にさうである。香を聴くと云ふ様なことは殆んど出来なくなつた。近頃は茶道の師匠でさへ出来ない様である。ソクラテスは『俺れはお前達の嗅ぐことの出来ない天の匂ひを嗅ぐ』と云つたと云ふことは面白いことであ

る。法華經などにも、二里三里さきの匂ひを嗅ぎ、腹の中の子の男女を嗅ぎわけると云つた様なことが記されてある。その様に人格にも一種の匂ひがあるそしてその匂を嗅ぎわかる力が人にある。特にそれが女にある。そんな感受性が女に多い。

### 無爲の感化

けれど、放射して感化してやらうとか、感服させてやらうと云ふ様な考へがあつたならば駄目である。その時には人格の匂ひも消えてしまふ、放射の力も衰へてしまふ。

うつるとは月も思はずうつすとは

### 水も思はぬ廣澤の池

でなければならぬ。自分の美しいのを見せてやらうと思つて、お白粉などをベタ／＼つけたならばその女の美は却つて損はれる。

シヨウベンハウエルのフイジオグノミには、人の容貌ほど性質をあらはすものがないと云つて居る。面にも似合はないなどと云ふのは、その人自身の見方が誤つて居たことを證するばかりである。表性は顔の筋肉の働きてある。そしてそれに



社の人を訪ねて来て、會社では今度、貴君の功勞に報ひんが爲めに、三萬圓の謝禮しやうとして居るが、貴君はこれを受けて呉れるであらうかと云ふ交渉を始めた。勿論それはコンミツションでも何でもなかつた。正當なものであつた。そこで友人はお禮を云つて快よく請け入れる旨を答へた。すると隣室から夫人の聲で「もし、ちよいと」と云ふ言葉が洩れて來た、何事であらうと思つて行つて見ると、夫人は云つた、熱に浮かされて何事か明白りとはきかれませんでした、あなたは何か切りにお辭儀をして金を頂いて居るらしいが、どうかそれだけはよして下さい、お金が必要なら此のダイヤ入りの金の指環を差上げますからつかつて下さい」友人もさすがに恐縮して、その指環はかへし、さて自分の室に歸つて、「折角ですが、そのお禮をうけるうけないは私に相談しないで、會社の方の自由な行動をとつて下さい」ときつぱりと答へてしまつた。婦人の力は偉いものである。

物理學などから云へば力とは何か働らきをするものである。働らきのないものには力がない。それが表はれて初めて力となるのである。けれど眞實を云へば力とはたゞこちらから働くものばかりではない。働きかけられた力に抵抗するところのものも亦力である。

たとへば私の能動的な力はこれを或る器械によつて、壓したり引いたりする力を計算することが出来る。かりにその力を十斤の力

とする然らばこゝに一つの陶器の鉢があるとする。そして私は自分の力をもつてこれを打つて見るとする。その時、この鉢が壊れたならば、鉢の力は十斤よりも少いことになる、もし破れなかつたならば十斤よりも強いことになる。この様に自分からは働かない静體にも力があることが知れる、それを計ることも出来る。

世の中がよく保たれて行くのは、この二つの力が平均して居るからである。多くの人は打ち壊はす力を知つて居る。併しそれに耐へて行く力の存し居ることを知つて居るものは極めて少ない。もし世の婦人にしてこの受動的な抵抗力を自覺して居たならば、恐らく今日の如く新聞を賑はすことが出来なかつたであらう。夫が賄賂をとらうとする時、夫人が一寸待つて下さい。私は自動車もいりません、爵位もいりません、どうかそんなことをして下さるな、と云つたならば恐らく夫の不正をも止める力があつたであらう。然るに今日の夫人はさうでない。自動車も欲しい、金の指環も欲しい、いくらでも取れる丈けお取りなさいである夫婦其稼ぎである。だからあの様な忌はしいことが起るのも無理はない。成程今日の自然主義の青年が悪うであらう、けれども婦人にしてその

袖を引つ張りに来る青年の手を拂ひのける丈けの抵抗をもつて居たならば、決して此様な腐敗は見られないであらう。男子の十斤の力に對して女の抵抗力は五斤しかないからである。

### 婦人の位置

婦人の開放だとか、婦人の參政運動とか云つた様なことが近來しきりに唱へられて、婦人の力を國家に及ぼさうとする様になつた。少くも國家と云ふまでには至らずとも社會に及ぼさうとする様になつて居る。そしてそれは確かに西洋などでは成功して居る。日本などでも教會だとか、友人の團體だとかの小さいサークルで働くこと位は認められて居る。愛國婦人會の如きもさうである。併しながら婦人の力の最もインテンシブに働くのは家庭である。家庭は、女と云ふ、——男に對する女と云ふ純粹の人格としてよりは、寧ろ家庭の、或る特殊な位置、たとへば夫とか、兩親とか子供とかに對した或る位置に於いて、女の力の最もインテンシブに働く處である。力は相手がなければ用をなさない。

國家に對しても社會に對しても團體に對しても勿論女の義務はある。けれど女にとつて最も大切なことは家庭である。これを遁れて色々の仕事をすると云ふことは無理なことである。

女の位置を高めることは誰も賛成なことである。先達でも或る婦人記者が來て、婦人運動に對する感想を語れとあつたが、私はそれにかう答へておいた。即ち、勿論それには餘り感心の出來ないこともあらう、併し何しろ千年も女を虐待したのであるから、執念強い女はこれに復讐を加へなければ止まないであらう。吾々はこれを阻んではならない。

たゞ眞にその意志を實現するのには少くとも百年の歳月を要するものと思はねばならない。その過渡期を能ふかぎり美しく保つて行きたいだけである。婦人をして眞の位置を獲得せしむる爲めに百年間はその準備の爲めに費さなければならぬ。然らばその準備はどこでするか。それは家庭である。家庭を離れた婦人の國家的もしくは社會運動は反動に反動を生んで、反てその實現の日を遅れしむる恐れがある。

### 受け身の徳

基督教の道徳には隨分、受身な徳がある。忍耐の徳である。ニイチエはこれを奴隸の道徳だと云

して幾何ぞや。今を去ること數十年前ポストンの聖公會に屬する大宗敎家ヒルツプス・ブルックスが日本を訪れたる後、彼れのトリニチー教會に於て揚言して曰く、「日本は聖公會の三十九ヶ條の信條を要せない。たゞエス・キリストを日本民族に與へよ。」日本に於ける聖公會の宣教師及び傳導者が此の先覺者の言を味はゞ思半ばに過ぐるものがあらう又所謂福音主義も四百年前の宗教改革時代の傳說的信仰個條に囚へらるゝことなく彼れ等心眼を開いて宇宙人生の神秘に對せよ。彼等は天地間

の生ける神秘を見ずして教會歴史に現はれたる小なる奇蹟にのみ囚はれてゐるのである。彼等かくして日本の思想を統一するを得べきや。眞の福音主義はかゝる偏狹なるものではない。眞の公同主義はかゝる排他的のものではない。キックユー問題の日本の基督教會に與ふる暗示は甚だ大なるものがある。保守主義も進歩主義者も此の問題を閑却せざらんことを望む。

(Kikuyu はアフリカ語にてキックユウと發音するのだそらである)

## 婦人の力

新渡戸 稻造

私の友人の中に、地方である會社の重役をして居る人がある。私とは二十年來の知己で意志の強固な心がけの正しい男である。會社の重役になつてから、その會社の改革をはかり元員の淘汰を斷行したところがその淘汰されたもの共が彼に恨みを抱いて種々の妨害を加ふるに至つた。一人の青年があつて、この上は國に歸るより外仕方がないから旅費を貸して呉れと彼に申込んだ。彼はその要求を拒んで貸すことは出来ない併し國へ歸るとならば進呈すると云つて、幾許の金を紙に包みノシをつけて青年に與へた。すると青年は、もとより金を借りるのが目的でなかつたものであるから自分は乞食でない、人を侮辱するにも程があると云つて、いきなり懷中して居た小刀を出して彼に

斬りつけやうとした。そんなつまらぬ死方をしては堪らないと思つて、私の友人はその場を逃げようとしたが、生憎、盆栽に躓いて途中で倒れてしまつた。青年はその上に跨つて刺さうとして居るところへ、かねてより怪しいと思つて、ひそかにその氣配をうかがつて居た夫人が、大きな刀をもつて應援に來た。けれどその刀が餘りに長かつたので抜くことが出来なかつた、女の力は弱いものである。しかし到頭、青年の後ろにまわつて、青年に抱きつき脊中に思はくかみついた。青年は思はず手を緩めたのだ、私の友人はその小刀をもぎとることが出來た。女の力は強いものである。

この人が會社の用で夫人同伴で東京に來た、ところが夫人はインフルエンザにかゝつて彼れの隣室に病臥して居た。或る時、



のものに徹底せんとし、西方は眞理體現の道を求めんと苦心して居る。アフリカは風土氣候に於いて著しく東方教會に影響を及ぼした。西方教會は制度組織信條の教會である。東方教會は直理と信仰と直覺との教會である。

さて吾人日本の基督教徒は、たゞに東方教會と云はず極東教會を建設すべきである。然らば吾人は如何なる教會を建設すべきであるか、吾人は勿論ザンジイバアの監督ウエスト博士には同ずるところは出来ない、併し同時にまたキックユウ同盟の基礎信條にも重きを置かない。信仰は香の匂の如きものである。花の香の如きものである。月の光の如きものである。風の戦ぎの如きものである。文字をもつてこれを律することが出来ない。もし信仰個條を作るとすれば、わが佛尊しと云ふ我田引水主義を主張する外はない。何れの時か教會の大合同を實現することが出来やう。即ち、信仰に於いては自由、制度に於いては合同主義を理想する自由公同主義の大精神の實現せらるゝ時、始めて基督教各派の大合同が實現さるゝのである。日

本に於て、佛教の中に宗派の多いことは人これを知る、然しながら佛の宗派は時を異にして日本に傳へられ發達したのである故に、左程不自然ではない。基督教會内の各宗派も、歐米に於いては日本の佛教と同じく時の次第を経て發達したものであるが、日本及び東洋の諸國に齎らされたる時は悉く皆殆んど時を同ふして居るこれ甚だ不自然なる所以である。今や歐米の有識者は宗派の存在に退屈して居る。日本の識者は更に深くそのことを感じて居る。米國に於いては近頃、信仰及び教義の統一を目的とする新なる運動が起つて、三人の代表者が英國諸教會に遊説の爲めに派遣されて居る。然しこの運動は基督の神性を認めたる教派のみを糾合せんとするものである。新神學もしくは進歩的基督教を除外せんとして居る。彼等の精神や嘉みすべきも、彼等は未だ時の休徴を知らないものである。自由基督教はその數に於いてこそ少なりと雖も、その質に於いては決して侮るべからざるものである。

近頃ある外國宣教師と談じたるに、日本の牧師

及び傳道師は宣教師以上に猛烈なる宗派心を抱くに至つたと云つて慨嘆して居た。即ち日本の傳道者は出藍の譽れを得たものである。故に濟度し難きは宣教師にあらずして却つて日本人である。今や日本にも教會同盟あるひは共同傳道の如き大運動が計畫されつゝある。キックユウ事件は何等の暗示と教訓とを與ふるであらう。眼あるものは見よ耳あるものは聽け。

## 八

從來宗教に對して一種の迷信があつた。それは熱心なる宗教心は偏狹にして排他的なる妄信と並行しなければならぬといふことである。されば所謂大宗教家なる者は多くは主我的自己中心的にして、容易に他の説を容れず、又は協力せず、何處までも「我が佛尊し」主義を固執したのである。これに反して自由主義進歩主義の宗教家はやゝもすれば自己の信仰を失ひ、確固たる信念なく常に動搖しつゝあるが故に、他人の主義信仰に對しては、全然無關係の態度を執るものが多かつた。さ

れば宗教上の熱心は保守的頑固者流の獨專するが如きものと思惟せらるゝに至りたるは止むを得ざることでゐる。吾人の見る所を以てすれば兩者共に非なりである。宗教的正信は宗教心を狭くするに非ずして、深くすることによりて到達し得るものである。宗教的正信の標準は人を愛することである。神の大生命と協力することである。この生命を擲まず、この愛を感ぜずして宗教を口にすることは、宗教の賊である。眞の宗教は人の心を暢かにし、ふくらかにし、溫かにすることである。然るに宗教的信念を楯にとつて忽ちに宗教の排他的態度をとるはこれ宗教の本旨に悖るものではないか。吾人はザンヂバーの監督に恨あるはこれが爲めなり、讎つて思ふに日本の聖公會も亦往々にしてザンヂバーの監督に類似するものがある。彼れ等は日本の基督教同盟に加はることすら躊躇してゐる。又教會同盟も甚だ包容的性質を缺いてゐる。自由主義、進歩主義の基督教をすら除外せんとしてゐる。除外せられたるものは何等の痛痒を感ぜざるも排斥したる教會同盟そのものの損失果

る。タイムス新聞を始めとして、倫敦の重なる新聞紙は何れもこの問題の爲めに多くの紙面を割愛して居る。そして議論紛々として容易にその歸趨するところを知らない。この論争を機會として、もし高派の主張にして容れられざらんか、高派の或る部分は羅馬加特力教會に復歸するの恐れがある。兎に角、これは吾人にとつては、何等痛痒を感ぜざる問題であるが英國々教會に於いては一大事件となつたのである。由來英國人は極端に走らざる長所を有するが故に、この難局に處しても必ずや折衷妥協の道を見出すであらうと期待されるのである。常識より判斷すればこの場合吾人は同盟の主張を正しいことと思ふ。英國々教會はもと約四百年前、英國の國民性を體現して表はれたる教會制度である。羅馬教會に慣れる人々をも新教徒として残り得るが如き國民的教會である。由來英人は哲學者にあらずして歴史家である。英國々教會が今日も尙、使徒繼承を誇り、或は加特力主義を誇るが如きは吾人の解する能はざるところであるが、一方には低派を許し、他方では高派の存

在を承認するが故に、甚だ屈伸自在なる教會である。然らば、アフリカに於ける野蠻人に對する傳道政策上低派の二人の監督が他の新教各派と提携握手するが如きは時勢の要求上止むを得ざるところとして、默認しさへすれば差支へないことでないか。然るにザンジイバアの監督が杓子定木の教會法文を笠に着て、平地に波瀾を起すが如きは吾人その意の存するところを知るに苦しむのである。

## 六

一體アフリカは基督教會の鬼門である。異端問題は何時もアフリカに源を發する。第一回の異端問題は紀元第三世紀に起つた。カルセエージの監督セント・キブレアンが迫害の爲めに墮落した信者を教會に復歸せしめたる時に物議を醸したことがあつた。第四世紀にアレキサンドリア教會の長老アリウスが三位一體の第二位に對する論争を惹き起して、アサナシウスと、幾時代に亘れる大衝突を續けたことがあつた。今を去ること約六十年



前に、監督コレンソウの異端事件が起つた。コレンソウはケンブリッヂ大學出身の一秀才であつた。彼は獨立不羈の思想家であつた。千八百五十年に彼は南アフリカのナタールに於ける英國々教會の監督に任ぜられた。彼は豫言者にして傳説に囚はるゝことを好まなかつた。彼は羅馬書の註釋に於いて、贖罪や、永遠の刑罰や、基督教の二大聖典に對する從來の解釋に反對した。その當時漸く盛ならんとしつゝあつた高等批評の戰士として、彼は斷然モーゼの五經及びヨシア書の逐語的靈感説を否定した。今日に於いても、尙頑迷固陋の神學者の多き時代なれば、その當時に於けるコレンソウが誤解されたることは想像するに難くない。彼は英國及び南アフリカに於いて危険なる異端として敬遠せられ、遂に英國々教會より僧籍を奪はれた。法律は彼の味方であつたが、彼の同僚の監督の眼よりは破門せられ、ナタルの監督として後任者が選ばれた。コレンソウは、靈的眞理に對する吾人の理解は必然的に發達しなければならぬものであつて、基督教眞理の眞の源泉は人類がこれ

を受け得るに従つて益々多くその神秘をひらき得べきを語つた。探險者バタンレエはナタールに於いて、コレンソウの教會に出席したるに、勞働服を着たまゝの士人の禮拜に列つて居るのを見て感服したと云ふことであつた。また彼はヅウルウ土人の爲めに辯護の勞をとつた事もあつた。今日よりコレンソウを追懷すれば時代思想の變遷また大なる哉である。今日は英國々教會内に於いても舊約聖書逐語的靈感説を信ずるものはない。さればアフリカに於ける第四回の出來事なるキックユウ問題も今後五十年を経ば愉快なる出來事として多くの人々によりて追懷さるゝことであらう。この偉人誕生百年紀念日はキックユウ論諍の蘭なる去る一月下旬に起つたとは誠に意味深い暗合であつた。

## 七

何故にアフリカは異端問題の源泉となるのであらう。蓋し東方教會は眞理そのものを追求し、西方教會は眞理の體現に重きを置く。東方は眞理そ



メソヂイスト派、浸禮派、會衆派、スコッチ長老派等である。同盟の基礎となるべきものは次の條件である。

一、信仰及び實際の最高の法則として聖書を忠實に認容すること。使徒信條及びニカヤ信條を根本的基督教信仰の一般的表白と認むること。殊に神の言葉として聖書の絶對の權威を信ずること。人類の赦罪の根柢として吾々の主基督の贖罪的死を信ずること。

二、同盟内の諸教會の間には共通の會員制度を認むること。

三、二大典即ち洗禮（兒童の洗禮は必ずしも必要ならず）及び聖晚餐を定時に執行すること。

四、教會の組織の共通なる形式を定むること。

#### 四

この條件は吾人の立場よりすれば甚だ保守的なものであつて、一々賛成することが出来ない。

然しアフリカの此の地方には進歩的基督教の傳道が行はれて居ないし、また土人の低き知識を標準として考ふれば、前記條件にて同盟の成立したるは兎に角一の進歩と見なければならぬ。

協議會の最終の日に於いて、代表者一同はキツクユウの長老教會に於いて聖晚餐式を行つた。英

國々教會の低派に屬する二人の監督、即ち、ウガンダアの監督ウイルス博士、モンバツサーの監督ビエル博士、の兩人は英國々教會の祈禱書に基き同教會風の聖餐式を行ひ、會衆一同は平和と希望の光に照らされつゝ和氣霽々の中に解散したのである。この報一度英米宗教界に傳はるや、基督教界の大同盟がやがて實現せられんとする徴候としてこの運動は祝せられたのである。

然るに同地方のザンジバア教區の監督ワトソン博士なるものが、突然公開書を發してウガンダアの監督及びモンバツサーの監督の行爲をもつて英國々教會の精神と抵觸したるものであると云ふ攻撃を發表するに至つた。ワトソン博士は相當なる神學者である。年もまだ五十に達して居ない。千八百九十八年以來アフリカに布教し、千九百一年より八年に至るまでザンジバアに於けるセント・アンドリュウ學院の校長であつた。彼は大學傳道會社に關係して居る。この傳道會社は蘇格蘭の長老教會に屬するデヴィッド・リヴィングストンの創始にかゝるものであるが、後に高派宣教師の

根據地となつたのである。即ち、英國々教會内に於ける高派對低派の争である。人も知る如く、高派は英國々教會内に於いて羅馬加特力教に近いもので儀式典例に重きを置くのである。低派は儀典よりも聖靈の恩寵を高調する一派であつて、最も英國々教會に接近したるものである。高派は上流社會の宗教であつて、低派は中派以下の階級に勢力を有して居る。

## 五

ワトソン博士の前記同盟の基礎條件に反對するところを列舉すれば次の如きものである。

- 一、それはセント・アサナシアス信條と普通に稱はれて居る信條を含まない。
- 二、それは堅信禮の儀式及び聖餐禮を含まない。
- 三、それは赦罪の儀式及び聖餐禮を含まない。
- 四、それは監督制度を含まない。
- 五、それは聖晚餐式を執行するが爲めに殊に俗侶なるものを供給しない。
- 六、それは嬰兒洗禮の規則を含まない。
- 七、それはこの同盟に加入したる新教の四大團體によつて已に承

認せられたる如き一般的の意味の外には普通的教會もしくは諸聖徒の交りを知らない。

これ等の反對理由は吾人自由基督教徒の目より見れば甚だ無意味なるものゝ如くに見ゆるが、而も同時にまた、同盟の條件、即ち福音の義務的條件——聖書の絶對的權威の如きを主張するに對しても、等しく反對せざるを得ない。もしもワトソン博士が英國々教會の高派を代表して、たとへば羅馬加特力教の宣教師と同盟したと假定せよ、而して法王の至上權や無謬說や、聖母の禮拜や、諸聖徒に對する祈禱式等を附加條件としたとせよ、ウガンダー及びモンバツサーの監督は、果してこれに反對しないであらうか。吾人より見れば誰か烏の雌雄を知らんやである。然しながらザンジイバーの監督は今年勿々わざ／＼英國に歸つてこの問題をキャンタアベリの大監督に提出した。その爲め英國宗教界の大論争となり、非國教各派は殆んど異口同音にウイルス博士及びピエル博士の立場を承認して居る。されども英國々教會の説は分裂して、或はこれに賛し或はこれに非難を加へて居

普及と、理想の向上と、平和の維持とを實現したが、殊にこの野蠻豪味なる、赤道直下の熱帶國に於いて著しくその効果を見るのである。争鬭と殺戮と無智との錯雜紛糾したる暗黒の國は今や學校や、病院や、官署が設立せられ、産業は奨勵せられ、平和は維持せられ、貿易は振興せられて、天日の赫々たると共に、地上の光明の益々その度を増すに至りたるは、これ實に幾多の基督教宣教師の努力と貢獻とに係るものが多いのである。デヴィッド・リヴィングストンに就いては、人多くこれを知るが故に、改めて茲に語るの必要がない。英領東アフリカの中央ニアッサ湖の附邊、海拔八千尺の高地、赤道直下を南に去る約一度の地にキックユウと云ふ都會がある。此處に基督教を植ゑ付けたのは博士クレメント・スコットであつた。彼は臨終の床より起き直つて最初の土人信者に洗禮を施したと傳へられて居る。彼が死んだ時には土人は穴を掘ることだにも拒んだと云ふ事である。第三の英雄的傳道師はウィリアム・アフリック・スコットであつた。彼は死に垂んとして居る一

黒奴信徒を見舞ふ爲めに生憎大出水中であつたシユッレー河を三度も泳ぎ渡つたと云ふことであるかくて幾多の義人の尊き血潮の結果として、基督教は着々として擴布せられつゝあつたのであるが先き頃、一つの困難なる事件が生起したのである。同地方には多くの基督教の宗派が同時に宣教せられてあるので、土人は大に戸まどひせざるを得なかつたのであつた。たとへばニアッサ湖水の方には英國々教會の高派の後援になれる大學傳道會社なるものがあつて、盛に莊嚴なる儀式をもつて蒙昧なる土人を訓練して居るかと思へば向ふ岸にはリブイングストン傳道會社があつて、清教主義に基いて土人を訓練して居るのである。その地に於いては安息日は非常に嚴重に守らるゝが、大學傳道會社の勢力範圍内に於いては嚴重なる安息日は正午を以て終るのである。浸禮教會に屬する土人は聖公會に屬する信者に向つて、眞正なる基督教徒たるには浸禮をうけなければならないと大言する、末世の福音派は眞正なる基督教徒は第一日即ち日曜日の代りに、第七日即ち土曜日を安

息日として嚴守しなければならぬと揚言する。かくの如くに基督教の主義主張に統一がない。土人の中には疑惑の生ずるものが起つて來るのは決して怪しむに足らないのである。

### 三

基督教に對する他の困難は、同地方に於いてマホメット教の旺盛なることである。マホメット教には思想や制度の分立がない。且つその道師は非常なる熱心をもつてアフリカを風靡して居る。マホメット教も等しく真理の一體現であれば、その擴張發達は決して呪ふべきものではない。然し以下述ぶるが如きことは何うしても考へておかねばならない。即ち同教の行はれて居る國に於いては兒童の死亡率が非常に多いと云ふことである。今日マホメット教國に於いては約八千萬人の兒童がある。然るにアルゼリアに於いては、その死亡率は出生兒の六割に達し、ミラレーオチーに於いては五割、埃及にては七割五分、土耳其にては五割モロッコにては七割五分と云つた割合である。た

とへば埃及に於いては千九百十一年に七萬四千人の出生兒があつたが同年に於ける十二歳以下の死亡兒は二萬二千人に達して居るのである。またベルシャに於いては十人の出生兒中たゞ一人のみ廿歳までの壽命を保ち得て居るのである。これ抑も何によつて然るかと云へば、男女道德の頹廢の爲めに、惡疾が流行して居ることが重なる原因である。マホメット教の説くところには無論幾多の真理が藏されて居る。然しかくの如く實際上の社會的惡弊を認むる以上は基督教の傳道團隊は聯合して、これと戦ふことも必要であるかも知れない。然るにマホメット教は結束して立つが故にその勢力は實に大なるものであるが、基督教は宗派又宗派と分立して争つて居るが故に、その社會的勢力が甚だ薄弱であることは云ふまでもない。

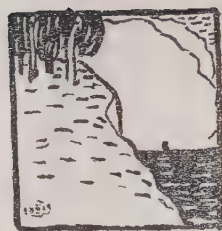
故に同地方に於ける基督教各派の代表者は昨年六月、キックユウに協議會を開いて、出來得る限り傳道上一致協同の方針をとるべきことを討議し遂に教會同盟が出現したのである。これに參加したるものは英國々教會内の低派ローヤルに屬する諸教會、



## ▽本誌四百號記念號(五月)豫告△

本誌三十有餘年間の成長を記念せんが爲めに、吾等は過去三十有餘年間に於ける政治思想(浮田和民)經濟思想(鹽澤昌貞)教育思想(中島半次郎)國際關係(煙山專太郎)社會運動(安部磯雄)生物學(谷津直秀)文藝思潮(片上伸)倫理思想(藤井健治郎：交渉中)美學思想(深田康算：交渉中)神學の研究(加藤玄智)勞働問題(鈴木文治)天文學(一戸直藏)日本の基督教教會(岡田哲藏)神學の研究(三並良)の進歩に關する諸家の評論を揚ぐると同時に、更に近代文藝に於ける基督(千葉掬香：五十頁の長篇)最近の感想(小山東助)才イケン哲學(今岡信一良)才オ・ローマンチズム(山岸光宣：交渉中)詩一篇(土井晚翠)歐米自由基督教の現状(内ヶ崎作三郎)感想(シイ・マコーレー)カントよりベルグソンへ(野村隈畔)道德と文藝(富永徳磨)宗教と藝術の渾融(佐藤清)散文詩一篇(加藤一夫)評論一篇(相原一郎介)短歌(野口せい子：伊藤寥々)小説一篇(吉田絃二郎)等錦上花を添へんことを期す。紙數一倍半に増加の豫定。

昨年一の秋以來、英國思想及び宗教界に一大實際的問題が突發した。即ちキックユウ問題である。これは日本の思想界宗教界とは、一見何等の交渉を有せない様にも思はれるが、この問題の背景をなして居る種々なる事相を研究するならば、矢張り茲にも日本及東洋諸國の問題と考へることが出来るものがある。また現在の歐州文明の宗教的背景を知ること、吾國の知識階級にとつて、決して無意義ではない。吾人が今、この吾人とは全く關係なきが如き英領東アフリカに起りたる一事件に就いて讀者の注意を喚起せんと欲するは、實にこ



## キックユウ問題の真相

内ヶ崎 作三郎

れ等の理由によるのである。

### 二

東アフリカに二千四百萬英方里にわたる英國の領地がある。東は印度洋に對し、北は近くアビシニアに接し遠くサハラ沙漠を隔て、エジプトに聯なる。西はコンゴオ自由國に連り、南は獨領東アフリカに隣する地であつて、嘗て十九世紀の偉大なる宣教師デヴィッド・リヴィングストンによつて開拓せられた所である。人口は約三百萬あつて、その中印度人二萬五千人、歐洲人三千人、——うち數百人はボオア人である。

基督教の外國傳道は多くの場合に於いて文化の

哀であつた。しかし彼れはその悲哀の裡にも生命の微搖せる美の顯現を嘆美することを遺れなかつたこの考へ方は極めて東洋的な香を有つてゐる、それだけ私達にとつては、染<sup>ハ</sup>染<sup>ミ</sup>と共鳴する所が多い。コムゼンシヨナルな考へ方であるかも知れぬが、私はつく／＼オスカア・ワイルドの敬虔な心持ちを懷しく思ふ。彼れが謂ふ刹那的享樂は決して輕はずみな上滑りの幻想的なものではなかつたと思ふまた彼れは冷たい理智の上に立つた人々の批評的態度でその刹那刹那の生の表現に對したものではなかつたと思ふ。彼れはその刹那刹那の當面の生の光耀そのものに對して、貪るほどの執着と咽ぶほどの渴慾と歔<sup>ハ</sup>泣くほどの大歡喜を抱いてゐたにちがひない。

彼れは何處までも現實の美を忘れることは出来なかつた。彼れは光明の美を貪つた。しかしその陰に顫ける黝暗の美をも嘆美するだけの敬虔な心を持つてゐた。彼れの眼には暗黒も腐爛も罪惡すらも美そのものとして映つた。追憶によりて過去を現在に齎<sup>ハ</sup>すことのできる罪人は、悔恨を知らぬ正しさ人々よりも或は神そのものよりも於偉大なる人生味の鑑賞者であつた。彼れにとつては現前するあらゆる事象の變化、發生、頽廢、暗憂、倦怠、爭鬭悉く生の麗しき光耀に浸されてゐた。花嫁の如き心を持ちて來るべきキリストを待つ新人の心は、現前の時を現前の新しき心を持つて貪れるだけ貪り生さることであつた。刹那の裡に永遠の生命を見出し、刹那の法悦に永遠の生命を把握することは只現前刹那の宇宙的神秘に、宇宙的生命に、宇宙的驚異に自我生活そのものゝ悉くを燃燒する人々にのみ待たなければならぬ。その戀人に贈られたる雪花石膏<sup>アラバスタ</sup>の瓶を壊つて、香高き油を埃にまみれたキリストの足に塗つたマグダラのマリアの心持ちはオスカア・ワイルドのこの現前の美的生活の最も詩

化せられた刹那であつた。私はバリサイやサドカイの賢い人々よりは、愚かなマグダラの女の純な心を懷しく思ふ。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

私はこの頃オスカア・ワールドのあの狂ほしきまでに現實刹那の美から美、悲哀から悲哀と憧憬れてゐた心持を想ふて美ましくなつた。私達の心は何故にかほどにまで冷たいのだらう。私自身の心が一ツの頑な殻のなかに、冷たい己を抱いて顫へてゐるではないか。私達は宜い加減な概念に組み立てられた社會といふものから去つて、先づ私自身を想へることを習つた。自我そのものゝどん底まで突き入ることによつて、自我そのものと、社會と凡べてが解決さるゝ日を待つてゐる。しかしながらやゝもすればさらぬだに頑なゝ私達の心は、自我！自我！と叫ぶ聲の悲壯な諧律に惑はされて何時の間にか、自分の周囲のあらゆる人を、あらゆる事相をまで白眼視するやうな傾向になつて來はしなかつただらうか。偏屈な私達の心が更らに偏屈になつて來はしなかつたか。それで私達は尙一度振り返つて、私達が自我主張に入つた第一歩の日を考へて見る必要がありはしまいかと思ふ。それは私達が自我！自我！と叫ぶ時に何れほど純な心を持してゐるかといふことである。私達は自我に醒めなければならぬ。自我に生きなければならぬ。しかし聲を大きくして自我を主張する前に、最つと自我そのものを確實に攫まなければならぬ。そして私達の生活の背景なり、生活そのものゝ内容なりが擴大され深くせられなければならぬ。若し私達が攫まへてゐる自我、思念してゐる自我が大だ不明瞭なものであり、不確實なものであり、偏狭なものであつたならば、私達の自我主張に何の權威があらうぞ。私達は自我の尊嚴を獅子吼する前に、最つと確實に、しかも黙して自我そのものを攫まなければならぬ。さうしたならば私達は聲を哽らして自我を主張することの代りに、恰かも春の和光が嫩葉を育てるやうに、暢やかに胸まれて生長し行く自我の法悦を見ることができるであらう。

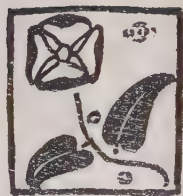


割愛してしまつた。殊に丁度屋内手入中で二階全部を見ることが出来なかつたのは甚だ遺憾であつた。

### 其の三 雀ヶ岡

九月ももう末であるけれどさすがにまだ冬には早く、二重の硝子窓の外には暖い日があ寺の塔に輝いて鶯が輪を描いてゐる。今日は土曜といふので午後から五氏夫妻に伴はれて雀ヶ岡見物に出かける。電車に乗つてモスコウの郊外に出ると別荘風の家が疎らに列んでゐて、牛飼も見えぬに、先頭の牛につれられて行儀よくノソリ／＼と歩いてゐる牛の群。どこへ行つても郊外の趣味は同じことである。

雀ヶ岡といへばすぐにナポレオンのモスコウ侵入を思ひ出させるけれど、さまで高い山でもなく道灌山といった風の丘陵に過ぎない。殊に雑木林の趣など甚だよく似てゐるが唯白樺の美しい幹が目立つ。水道の貯水池の上に物見台が出来てゐる。石の欄干に腰かけて見渡すとすぐ目の下を流るゝモスコウ川が蜿蜒として流れゆく彼方には、モスコウ市街が煙につゞまれて丁度バノラマの様、クレムリンの王城、サンソービウール寺の塔、其他數へつくせぬ堂塔伽藍さすがに道灌山では見ることの出来ない眺めだ。そうしてナポレオンが此岡の上に立つて東の間の歡喜にほゝゑんだ其瞬間を思ひ出すと何ともいへぬ悲壯の感じが湧いてしばらくは低徊去る能はざらしめた。やがて美しい森の下路を逍遙して山を下ると、間もなくモスコウ川の岸に出る。こゝから發動機船に乗つて下つて行くと芦の間をこぎ廻るボート、森の間に見ゆる離宮、物騒なロシアの中に居るといふ感じはちつとも起らない。雀ヶ岡はモスコウを見る者の必ず見物すべきものゝ一つで、而も甚だつまらない處だといふことを聞いてゐたが自分には忘れられぬ印象を與へた。



## マゲダラの MARIA にまで

——感想——

吉 田 絃 二 郎

人に人を裁く権利がないといふ事は、人に他人を批評する権利がないといふことになりはしまいか別言すれば人は他人の生活に對しては批評する権利がないといふ事になるのではないだらうか。殊に過去の時代が遺して置いた或る偉大なる偶像の影に立つた人々から、現在の自分の生活を批評せらるゝ時ほど不快なことはない。

私は世のなかの賢い批評家となるよりも愚かな嘆美者となりたい。私は賢い宗教家となるよりも、貧しい思索者となりたい。愚かな嘆美者と貧しい思索者は少くとも彼れ自身に於いては、眞實に自己の生活の行くべき道を求めるだけの敬虔な心を失ふことはない。

自然が造つた自然界の一つとして彼れの敬虔な嘆美に値しないものはない。事相の悉くは祝福されたものでなければならぬ。オスカア・ワイルドが罪惡そのものにすら、美が潜んでゐると想へた心持ちは量りがたくないと思ふ。「私は享樂といふ享樂を経験した。私は私の心靈の珠玉を酒杯のなかに投げ込むだ。私は笛の音を慕ふて櫻艸の小徑を下りて行つた。……その花園の他の半ばは仍り私に對してその秘密を持つてゐた」。オスカア・ワイルドが言ふその半ばの花園の秘密は享樂に對する悲

な廣間を幾つか過ぎると皇帝の御座所がある。御座の兩側にある石柱はボンペイから發掘したものだとか、室の入口の戸にはハンドルに徑三寸程の紫水晶が箝めてある。寢室から便所まで拜見して薄暗い廊下を通るとやがて舊王城に入る。

舊王城の方は大分に古びてはゐるが、一切の裝飾が東方趣味に富んでゐて大分埃及、波斯あたりの香がある。官廷内の禮拜室、眞暗な會議室、即位式の晚餐場は甚だ小さいが婦人を入れぬとかいふこととて高い所から女官などのぞく様に出來てゐるなど何んとなく初めに見る新館に比べると却つてロシヤといふ感じを味はせる。アレキサンダー一世の室には寢臺やら何やら昔のまゝに置いてあつて、バルコンに出るとモスコウの市街が一目に見える。王城の前を流るモスコウ川の兩岸にぎつしりと建てならんだ街衢、中にも目につくものはそこゝに聳えてゐる寺院の塔、奈翁侵入當時此の室に起臥して絶えず此バルコンからモスコウの市街を見下してゐたかと思ふと無量の感慨に打たれざるを得ない。

王城の拜觀を了つてモスコウ川の畔に出ると、川に臨んでアレキサンダー三世の記念碑が建てゐる。巨大なる銅像をめぐつて廻廊の如き建物がある。其の天井には歴代の帝王をモザイクで描いてある。さすがに立派な記念像である。東京の銅像のことを考へるとうら恥しくなる。

記念碑の前の寺院の角に大きな破鐘が置いてある。奈翁侵入の當時焼落ちたものだとか、其まゝ往來においてある所が實に面白い記念になつてゐる。

## 其の二 トレチャコツフ繪畫館

モスコウでは非見たいと思つてゐたのはクレムリンの王城と、トレチャコフ繪畫館と藝術座の芝居とであつた。トレチャコフ繪畫館といふのは、トレチャコフといふ金持（元は仕立職だつたといふ話だ）が個人で聚集したものを無料で公開してゐるのである。建物は比較的小さいが内容の價值あることは豫て聞いてゐたが、一見實に垂涎三尺の感あらしめた。さすがに斯道の趣味を解する人が聚めると見えて、新しいもの舊いものいろいろの派のものが陳べてあるがいづれも面白いものばかり。

殊にヴェレスチャギンの戰爭畫に至つては、此の繪畫館を措いて他では見ることの出来ないものである。寫眞版では度々見てゐるけれど原畫を見るのは初めて、殊に描寫の極めて緻密にして、思ひ切つて原色に近い色をつかつてあるに關らず少しも俗氣のない筆に至つては實に豫想以上。露土戰爭、韃靼人の風俗などを描いたものが澤山あるが、名高い骸骨の塔に鳥の群れてゐる畫の如きは、鬼氣人を襲ふて何人といへども戰爭の悲慘に思ひ到らざるものはあるまい。嗚呼一將功成つて万骨枯る。而も奈翁一世の偉業今果して如何。自分は敢て非戰爭主義を説くものでないけれど四海皆同胞といふ理想が實現されて平和を樂しむ日の一日も早く來らんことを切望するものである。そうしてトルストイの百卷の非戰爭論よりも、寧ろヴェレスチャギンの一幅の畫の前に立つて痛切に無道なる帝國主義悲慘なる戰爭の結果を説教せらるゝ感じがした。惜むべし彼尙未だ老ひざるに彼が蛇蝎の如く忌める戰爭の犠牲となつて一代の理想と才筆とを抱きながら空しく旅順口の藻屑と消えたのである。そうして自分は此一大非戰爭論者を従軍せしめて恣に其才筆を振はしめたロシヤの雅量には感服せざるを得ない。此の他自分をして覺えず歩みを止めしめたものが澤山あつたが、生憎先を急ぐ人達と同行したので



のだ。どうぞ今あすこへ行つてさとしてくれ。

**ラザロ** 御覽なさい、一人の豫言者が息子さんの前に立つてゐます。そしてこゝにゐらつしやるあなたを見つめました。そして今あなたが仰有つた言葉<sup>おつしや</sup>を耳にはさんだやうです……息子さんにその事を言つてゐます。あれこちらを指してゐます。

**富める人** 息子は言ふことを聞いたらう。言ふことを聞いて歸つたらう。

**ラザロ** まあ、歸るところですか……あれ杖でその人を撃つ所です。息子さんはこちらが見えないのでせうかねえ。こちらからはこんなにはつきり見えるのに……

**富める人** 私にだつて見えないのだ。息子<sup>むすこ</sup>に見える筈はない、あゝあゝ……

# △舞臺衣裳繪葉書……メエテルリンクの青い鳥……

である。我が國の新しい劇境が、ややもすれば一頓挫の悲境を現せんとしてゐる今日、兩氏が新しき劇の氣分なり、象徴なり、音樂的諧調なりを、繪葉書の上り織り込むて行かうとした試みは、新人の企てとして太だ面白いことであると思ふ。これによつて一般の人々が新劇に對する趣味を養はれることもできやうし、また芝居道の人々が何等かのフレツシユな刺戟を享けるにちがひない。今度刊行された第一輯はメエテルリンクの青い鳥の人物の扮装、衣裳、舞臺面等である。そのうちで「ミテイルとデイルテイル」、「妖婆殿舞臺面」はとり分け氣持が宜い、因に第一輯は全部賣り切れ。近々再版を出す由。(九段つるや書房出版)

△「ノラ」の再演と「アグラゼーヌとセリゼット」上場 四月十三日から七日間、上山草人氏の近代劇協會は第八回興行をやることになつた。「ノラ」は鷗外氏譯を用ひ、アグラゼーヌとセリゼットは兩雀氏の譯を用ふる由。ノラとセリゼットは孔雀氏、アグラゼーヌは浦路氏が扮する。

# 歐洲見聞錄—モスコウ見物— 盧 山 生

## 其の一 クレムリン王宮

モスコウには、朝鮮人の朴といふのと、外國語學校出の佐藤氏といふのが、絶えず急行車の着く度に、停車場に出張して、邦人の案内其の他一切の世話をして呉れる。ドイツ語もフランス語も、況んや英語の如き殊に通じない此の町では、案内してくれる人がなくては一步も外へ出ることは出来ない。自分は佐藤氏に伴はれて、先づクレムリンの王宮拜觀に出かけた。

大分に古びて餘り大きくもないモスコウ大學の前を通つて、王宮の裏門から入つて行くと、兵營の様な建物が立列んでゐて、路傍に奈翁侵入當時の數百の分捕大砲が、門前に並べてある。ぐる／＼と廻つて正玄關を入ると、金モールの制服を着けた男が、外套や帽子を預かつて呉れる。大きなホテルにでも入る様な氣がして、宮城といふ感じは薩張り起らない。すばらしい大理石の柱の間を通つて、我々の靴で踏むには勿體ない様な絨緞を敷いた階段を上ると、アレキサンダー三世が百姓の代表者と會見してゐる額などがかけてある。現今も尙ほ一年一回、此の宮城に百姓の代表者を招待せらるゝといふことである。セントゲアルギーの室といふのは、此の名の勳章を貰つた者の謁見室とやらで、大理石の柱に受勳者の名を刻み楣間に勳章の模型をかゝげ、窓掛、椅子など皆此の勳章の綬に型どつた布地で作つてある。其次の室も何とやらいふ勳章の室で、所々に記念品や、献上品を飾つてある。斯様

富める人

そりあ、そうは言つた。しかし私は天國へ行つて見たいのだ。

ラザロ

行かうと思へば何時でも行けます。

富める人

ちつとも行けない。この通りだ。

ラザロ

歩いて行けば行けます。行らつしやい。

富める人

いや、歩けない。

ラザロ

たゞ足を揚げさへすればいいのです。あなたはそれを爲さらない。だから歩けないのです

富める人

私はどうも苦くなつて來た。四方に火が燃えて來て、私の全身をとりまいてゐる。ラザロ、ラザロ、一口でもいいから水を吞ませてくれ。髓の中が燃えつくやうな熱い。腸が煮えくりかへるやうだ。

ラザロ

あなたのまはりには火も何も燃えてはをりません。たゞあなたの身體のうちに少し熱があるだけです。そんなにあわてなさらずに、ちつとしてゐらつしやればすぐなほります。

富める人

ちつとしてはゐられない。口の中に火がはいる。

ラザロ

そう騒ぐと却て苦しさが増すばかりです。今水をあげます。

富める人

どうぞ一杯でもいいから早くあぐれ。

ラザロ

さあ幾杯でもお上りなさい。之がコップです。よござんすか。コップをあなたの唇にあてますよ。

富める人

ありがたう。どこだ。

ラザロ 早くあがりなさい。

富める人 ちつとも水がないぢやないか。

ラザロ コップを傾けて召しあがらなけりあ、水があつたつてないも同然ぢやありませんか。早く召しあがれ

富める人 早く水をくれ。苦しい。

ラザロ どうもこれは無理だ。

富める人 私はもう絶望だ。けれど私の息子<sup>むすこ</sup>だけでも私のやうな境遇には陥らせたくない。どうぞ私のことを息子<sup>むすこ</sup>に知らせてくれ。そして天國へ行けるやうな人にしてくれ。

ラザロ 御覧なさい、あの世がこゝからよく見えます。あれ、あの大理石の階段の上から、今あなたの息子さんが細布を着て葡萄園の方へ歩いて行く所です。

富める人 どれ、どれ、私には見えない。ちつとも見えない。

ラザロ もう葡萄園へ行らしやいました。何か隣の地主と話をしてゐます。まあ、口論です。あなたの息子さんが地主の片頬を張り飛ばしました。

富める人 息子が口論してる？ 全體<sup>はたけ</sup>どうしたのだらう。

ラザロ 境界線問題<sup>けいかいせんもんだい</sup>らしいです。圃<sup>はたけ</sup>のうしろにゐる小作人共はどうもあなたの息子さんの方が無理だなんて言つてゐるのが聞えます。

富める人 ラザロ、ラザロ、やはりそれは私の真似をしてるのだ。私と同じことをしやうとしてる



富める人　こんなにもや／＼してるものがお前さんには見えないのかい。

ラザロ　見えますよ。何でも見えますよ。邪魔になるやうなものは何も無いぢやありませんか。

富める人　私の方が下だから、私にはお前さんの方が見えないのだらう。

ラザロ　あなたが下だなんて……私の方がずっと下ですよ。あなたの方が上ですよ。ずっと上ですよ。

富める人　私の方が上かな。そんならずつと見下ろされる筈だな……お前さんの顔までだん／＼

ボンヤリしてくるやうな氣がする。全體アブラハムは何時歸つて來るのかな。集會つてどういふ集會かお前さんは知つてゐるかい。

ラザロ　自分のうちにある生命を更に意識によつて掴みとらうとする人々が一緒に集つて一種の精神修養をしてゐるのです。あれ第一の鐘が鳴ります。

富める人　私には聞えない。

ラザロ　第二の鐘が鳴ります。海の底から湧きかへる歌のやうな旋律の風が吹いて來ます。雲雀と

泉のさゝやきです。

富める人　私にはちつとも聞えない。

ラザロ　第三の鐘が鳴ります。足音もなく林の中をとほる木精です。あゝ皆しののめの歌をうたつてゐます。やはらかい日光、ふるへる木末、まばたきする露、祈の聲です。

富める人　お前さんのいふことは、私にはちつともわかりあしない。私はどうして其鐘の聲がきこ

えないのだらう。

ラザロ あなたは眞空の世界に立つてゐらつしやいます。

富める人 眞空だつて？眞空つて、全體どういふ意味かな。

ラザロ 眞定の世界では、どんなに鐘を鳴らしても聞えるものぢやありません。

富める人 こゝは眞空ではないぢやないか。私は充分呼吸してゐるつもりだが……

ラザロ その空氣のことぢありません。靈氣です。靈の空氣です。

富める人 そんなにごまかさんでもいゝよ。空氣でなくつて靈氣だ？靈氣でなイレキのことかい

……それにしてもお前さんは何故その集會へ行かんのかな。

ラザロ 行つても行かなくても自由意志によるのです。

富める人 それで天國の規則に違反せんのかな。

ラザロ アブラハムもこゝには規則なんかないと言つたぢやありませんか。こゝでは行かうと思へ

ば何處へでも行ける。しやうと思へば何でも出来る。要求があればそれが皆充されるです。

富める人 わしだけは駄目なのかな。

ラザロ あなただつて、誰だつて、どこにも制限なんかありあしません。

富める人 ところがわしには何も思ふやうにならない。

ラザロ なつてゐるぢやありませんか。さつきあなたはいつまでもこゝにゐると仰有つたぢやあり

ませんか。

# 春

伊藤 寥々

われながら幼く笑みてなみだしぬ大天地に春來ればにや  
春の夜のくだつがまゝにいとかるくはしき思に入りしひとゝき  
千よろづの灯影ことゝ地に落ちて静けし雨の夕のちまた  
ほのかにも浅きみどりを吐き初めし街の柳の下をしぞ行く  
白梅の梢のみ見る鳶色の丘のかげにぞ佇みてゐし  
人の世の歡びに似てありとしも覺へぬさまに梅匂ひ來る  
大ひなる歡びなげきはた惑ひ會て有たざるこの小さき魂  
口にふくめば密柑の汁のひろぐれりおどろきさめて活くるしばらく  
創りなす己が世界といふことを考へつゝもねぶりゐたりき  
争ひし後のしゝまに見るごとき思ひにありて書も讀まばや



## 富める人とラザロ

(二月號よりつゞく)

佐藤 清

富める人 アブラハムは何處へ行つたのかお前さんは知つてゐるだらう。

ラザロ アブラハムは集會に行つたのです。御覽なさい、向うの廊下を歩いてゐます。あの廊下の

突當りに階段があるでせう。あれを登ると高い塔が見えるでせう。あすこへ行つたのです。

富める人 私にはよく見えない。こゝからはよく見えない。あの柱が邪魔になつてちつとも見えあし  
ない。

ラザロ 柱なんかないぢやありませんか。

富める人 お前さんと向うの間には何も無いやうだが、私とお前さんの間に何か太い柱のやうなも  
のが立つてゐて邪魔になつてしやうがない。

ラザロ あなたと私の間にだつて、何も立つてゐあしないぢやありませんか。私の方からは何でも  
はつきり見えますよ。



ありますかね』と言つて氏は話續けられました。

『私が此處から三里程ある波浮といふ所に居た時分です。或日海岸を來ると一人の青年がうろろしてゐるのです。其の舉動がいかに怪しいが未知の人だから言葉もかけずに通り過ぎました處がてす、其人が後からやつて來て此夜一晚私の家に泊めて呉れまいかと言ふのです。それでとにかく宿を貸すことにしたので、すると此度は何か此邊に職業がないでせうかと言ふのです。どんな職業かとさくといふといふそれから私が世話をしてね初は人の荷を運ぶことなどをやらして居ました、後では其の當時波浮に居つた宣教師の家に書生に入りました、處が非常に忠實でね、いかにも愉快さうに働くやうになつたのです、それから終に神戸に行つてあすこの神學校を卒業しました、今は但馬で牧師をして居ます。其の人はね實は苦學して愈々中學を卒業するといふ間際に酷い脚氣に侵されたのです其が失望の原因となつて此島に死なうと思つて來たのだ。それから又こんな人もありましたよ。私が山の湯場といふ所で或晩

傳道演説をやつたのです。處が其處に一人の青年が居て盛に酒をあふつて居ましたそして私を慘々に罵倒したので。處が其の翌日です、私が山を下りて岡田で演説をして居るとね、其の青年が突然やつて來て非常に謝罪するので、そして自分の事情をすつかり打ち明けたのです。其の人は一高の生徒でした。失戀したのですね。そして煩悶の舉句あの煙を目がけて來たのです。そして湯場を酒を呑んで居たのは愈々噴火口へ飛込まうといふ前の晩であつたのです。其が私を罵倒し乍らも一婦人の歌つた讚美歌にひどく動されたのですね而て耶穌の福音を聞かうと言つて謝罪つて來たのでした。其人も二年程私の所で傳道を助けて居ました。今は國に歸つて居ます、茨木の或る富有な家の次男か三男です。今は二三人の子供ができましたさうですが時々手紙をよこしてくれます』此處まで話して氏は感慨に堪へないやうでした。又同氏によつて救はれた或青年の如きは大島から更らに南方三十里も隔つてゐる三宅といふ三里四方の小さい島に傳道に従事して今では信者が百名

近く居るさうです。元村には又『天國の婆さん』と通り名のついて居る七十三と七十五になる姉妹の婆さんが居ます、其は熱心な耶穌信者で朝な夕な神を讚美し祈の生活を送つて居るさうです。梨畑を作つて居るので夏になると學生がよく買に行くとさうです。何も耶穌教の話をするわけがないが多くの人其の單純な信仰に動かされて來るさうです。教會を出たのは十時すぎでした。それからすぐ岡田に向ひました。山路を歩みながら私はいろんなことを考へました。今より二千年前ナザレのイエスによつて叫ばれた神の聲が今此の東海の一孤島に反響し幾多貧しき者の友となり惱ある者をいやし望なき者に生命の水を與へて居る。

いろんな新思想は都會を中心として渦を卷いて居ます。しかも宗教の生きた力は却て人の知らない山峽や島も通はぬ島影に浪打つて居ます。而て絶ずいのちの凱歌を奏して居ます。大島の山には椿の外に櫻が澤山あります。陽春三月花は島を埋むるのでせう。大島は確に詩の國歌の國です、私共は時々あのユートピアを想起させる原始的な天地に接してあのが不淨の心を洗はねばならないと思ひます。

此の日東京に行く船があるといふので急に歸ることにしました。宿の主婦は別れを惜むて海岸まで來て『また御座らんしやい』といふ。村の人は大勢岸に立つて私共の船を見送つて居ました。

# △早稻田大學基督教青年會……

……は四月十七日より三日間、神田青年會館で講演會を催す。思想問題、原口

竹次郎、相馬御風、片山伸、島村抱月、中澤臨川、内田魯庵、(十七日)、政治、社會問題永井柳太郎、田中穂積、田

川大吉郎、大隈伯(十八日)宗教問題、杉山重義、海老名彈正、内ヶ崎作三郎、安部磯雄、向軍治、岡田哲藏諸氏の講

演ある筈。

した。御飯をたべてから私共は元村に出かけました。路には椿の花が澤山散つて居ました。海には綿のやうな靄が懸つて伊豆も相摸も見えません。道端の林の中で若い男は木を切つて居ますそして名も知れぬ小鳥が頻に囀つて居ました。元村につくと先、大町桂月先生が來て居ると聞いたので初めて同先生を訪ねました。そして大島の歴史上の話をしてもらひました。それからT君を千代屋に訪ねると『今誰か使をやらうと思つた所だ今日は三原に登らないか』といひます。私共は可なり疲れたが同意しました。村の端に貯水池があつて其の傍に『三原山登り口』と書いた棒杭が立つて居ます。其處から私共は山路にかゝりました。見上げると山は牛の背のやうに突立つて居ます。兩側の樹木は皆葉を落した椿ばかりはあの濃緑色の葉の茂みの中にボタリ／＼と血を落したやうに紅い花をつけて居ます。路は段々細く急になつて來ます。林の中ではよく女が木を伐つて居ました。『杖を一つ作つて呉れませんか』と言ふと『あー』といふ其の聲がいかにも音樂的でやさしく響くの

です。中腹の見晴の佳い所て麓の方を見下すと村の家は少さく澤山群つて居ます。遙るか向ふの黄い芝生に蔽はれた平原のはてはドス黒い岩になつて其が純白の波を嚙んで居ます。海は一面靄に包まれて居たが富士は丁度其の中に浮んでるやうに白い頂をチョツト見せて居ました。私共は息をはずませながら爪先上りの路を辿りました。いろんな鳥が澄切つた明るい空氣の中に心持よく囀つて居ました。頂上まではよく木が生えて居ますが登りつめると私共は驚されました。光景が一變しやうとは豫期しなかつたからです。外輪山の中は一面灰色の荒涼たる沙漠です。一間あき位には内輪山の方へ短い棒が立てゝあります。それを目あてにサクサクと砂を踏んで行くとO君は『かう杖を持つて歩くとモハメットのやうじやないか』といふ。T君は丈が低く肥つて居る上に寝捲を着て居たものだから『山賊の親分のやうだ』と言つて私共は笑ひました。内輪山の麓には大きな熔岩が澤山轉がつて居ます頂に上ると中は噴火口で一面水蒸氣を吐いて居ます。煙の間々からは黄色に硫黄



の滲<sup>にじ</sup>りついた岩や赤黒い怖しい熔岩が其處此處にはみ出しているのが見える。私共は三人とも啞<sup>お</sup>のやうに黙<sup>だま</sup>つて中<sup>なか</sup>を見詰<sup>みつめ</sup>ました。一種物凄い力が地の底から私共を威壓するやうな感じが致しましたそれから頂上は風が烈しくて吹き飛ばされさうです。私共は其處で用意の辨當をたべてそこそこに元來<sup>もとより</sup>し道を引返しました。歸りは一時間位で宿屋に着てしまひました。其夜は元村に一泊することになりました。宿屋の風呂は二三日前牛乳を湧<sup>わ</sup>かしたとかで變な香がして居ました。其夜おそく九時頃でした。芝居があるといふので見に行きました。酒倉を借りて演<sup>や</sup>つて居るのです。狂言は『不如歸』で私共が入つたときは浪子臨終の場です。片岡中將は暫時感慨無量の體<sup>てい</sup>てしたがいざ幕となると軍服の儘椅子を運んだり何かして居ました。死んで行く浪子も悲嘆にくれて居る中將もお幾も皆滑稽に出来て居るが村の女衆は大方涙を拭て居ました。宿に歸つたのは十二時頃です。濤の音は終夜烈しくありました。

\*

\*

\*

\*

翌<sup>あつ</sup>る日も海は荒れて居ました。富士は朝日をうけて紫に匂ふて居ます。すぐ向には伊豆半島が手にとるように見えます。十二三になる女中が潮の香が漂ふ欄干に寄つて何か話し合つて居ます。『伊東はあすこの岬をまがつた所愛<sup>とこ</sup>ちやんは何<sup>なに</sup>をしてるでせう』など言つて居る處を見ると二人とも伊東から奉公に來たのでせう。海一つ隔てゝ友を戀しがつて居る心根は傷<sup>いた</sup>ましくも又哀れなものでした。T君に別を告げて私共は直ぐ教會を訪ねました。土間には腰掛が五つ六つ並べてあります、部屋には西洋人の油繪や寫眞が二三枚懸<sup>か</sup>つて隅<sup>すみ</sup>の方に少さいオルガンが一つ置かれてありました。牧師は年の入つた白髯の肥太つた方です。初對面の挨拶がすむと私共のために興味ある來歴談を下さいました。氏が島に渡られたのは十二年も前のことです。其時分には集會をやつても石を投げる者などが澤山あつて随分危険なこともあつたさうです。C君は『此間伊東で聞いたのですか此島に死なうと思つて來て先生の導<sup>みち</sup>さで救はれた人もあるさうですね』と訊くと『さうです十二三人も



奴です』と言つて不興氣な顔をして居ました。私共は其の夕方案内の女を雇ふて岡田へと二里の山路を辿りました。其の女は見目容姿の美しい女でした。私共の荷物を頭の上に載せてさつさと行くのです。同じやうに頭に物をのせ牛を牽いて來る女に度々出逢ひました。其の度毎彼女が優長な言葉交はしました。山には椿が紅く咲いて居ました。C君はいろんなことを彼女に話しかけました。私は其の後について行つたが彼の女が村の牧師のことを話すのを聞いて時々涙をこぼしました。自分は今ほるばる、島の路を歩むて居るそして此處にも亦老いた牧師が居るのだなと思ふと言しれぬ感に打たれたからです。今まで伊豆の山々を染めて居た夕照が次第々に薄らいでゆくと急に肌寒くなつてきます。行手の空には星が一つ二つあらはれ青い光を放つてまたゝいて居ます。麓の方を見下すと白い靄に包まれて居るが底の方に海は蒼くひかつて居ますそして何處からともなく濤の音が微にふるへて來ます。爲朝はこの島に流されて幾日か忙しい生活を送つたてせう。思へばそれも遠

い昔のことです。此頃は又よく珍しい石器が掘出されるといふから、こんな孤島にも餘程古くから人が住んで生れたり死んだりして居たのだと思ふと今自分が蹈むて居る路も何となく懐かしいやうな氣が致しました。

岡田に着いた時には日はとつぷりと暮れて居ました。茅ぶきの家が薄暗の中にゴロ／＼と塊つて立つて居ました。村の後は高い崖で海は直前に靜に擴つて居ます。どの家の障子にも灯が赤く煌いて丁度油繪に書いた伊太利の何處かの町を連想させます。宿屋の主婦は丈の高い細面の利口さうな女でした。私共のために餅などを持つてきて焼てくれました。村は山に圍れて居る爲か海は極靜かて浪の音も聞えません。其の夜は安らかに夢を結ぶことが出來ました。

翌朝目醒めると鶏は其處此處の家で鳴て居ます長閑な朝明けです。戸を繰ると港の中は風で居ますが遠方の淡い靄の下には白く波の穂頭の立つのが見えます。海の香は冷く顔をうつのです、私は

新鮮な旅の心をしみじみと味ふことが出来ました。外に出て含嗽くわくをしてると例の絞りの手拭を髪に捲いた若い女が銘々桶を頭にのせて水汲みに行きます。『丁度桶が歩いて居るやうだ』と言つて私共は笑ひました。

晝の中は東京の友人が親切に送つてくれた歌の雑誌などを讀むてくらししました。前の家では四つ五つになる小供でせう。時々覺束おぼづかなげに鳥の歌をうたつて居ました。側には母が針仕事でもして居るのでせう。折々低い聲で其の節廻しの拙い所を直ただしてくれてるのを耳にしました。

男達をとこたちなら千ヶ崎沖の潮の早いのを

止めて見よ

其の中にはこんな歌もありました。

夜になるとすぐ近所の校長先生を訪ねました。爐端ろばたには年の老けたお婆さんが坐つて居ました。六つばかりになる御子さんが奥の方に走つてゆくと、しばらくして先生は目を擦こすりながら出てこられました。顎あごに髭ひげのはえた血色こころのいゝいかにいかにも丈夫じやうぶさうな方でした。先生はよく水を呑みながら村

の話をして下さいました。此處には大した金持も居なければ食ふに困るといふ者も居ないといふこと、村からはこれぞと言つて偉おごい人も出て居ないが訴訟沙汰一つ起らないし、家は開放あひだしにして出かけても何なん一つ盗ぬすまれることがないといふことでした。私共が歸らうとすると餅を食つてゆかないかと言はれる。辭退すると先生は『實は今日新年會で少し酔つて居るものですから失禮でした』といはれました成程御話最中いかにも寢むさうにして居られました。私共こそ酷ひどく失禮したと思ひました。宿に歸ると隣の部屋には客が三人許り泊とまつて錢ぜになどを算へる音がします。其は三味や胡弓を弾いて旅から旅へさすらひゆく哀れな藝人の群むねでした。床につくと何處どこの家からかバイオリンの音が浪の音に混まじつて咽しやぶやうに流れて來ます。其は私共の少年時代を想起おもひおこさする古い歌でした。私の心は妙に動かされて遅くまで寢られませんでした。夜半烈しい雷雨がありました。

翌朝は晴れて障子には明るく日光が射して居ま

のぼりゆけ、走りゆけ、いと深くしみとほれ、  
わが弱き視神經聽神經、  
骨と肉との根原にふかくしみとほれ、  
全身の血管の節々をめぐりゆけ、走りゆけ、  
一滴もわが外に失ふ勿れ、  
こぼるる勿れ、やぶるる勿れ、  
夜毎に睨がふ盗人のずるき目を忘るる勿れ、  
盛んなるリズムよ性の力よ、  
微妙なるわがうちの組織の中に氣狂をうたへか  
し、

いのちと春とよろこびを小躍しつつ叫べかし、  
盛んなるリズムよ、性の力よ……

### わが妹よ

わが妹よををしかれ、  
われらの生れし日のやみを思ひ出す勿れ、  
かなしきいのちのほのほを搔きたつる勿れ、  
わが妹よををしかれ、  
おん身の成熟せる葡萄の汁をつぶす勿れ、  
おん身の全身に漲るリズムをそこなふ勿れ、



## 島の牧師

目賀多正一

わたしや大島御神火そだち  
胸に煙はたえやせぬ

C君と大島に行つてきてからもう一月餘になる  
のですが、彼の、空には白い雲が光つて、岸は波  
に烟つて居る島の光景が忘れがたく目にちらつ  
くのです。伊東を出た船は二時間許りかゝつて元  
村に着きました。岸は浪が荒れて居ました。人の  
話によると時々舢舨がきかないことがあつて眞向  
に島の家を見ながら恨めしくも沖の方へとまつた  
引つ返さねばならないことがあるさうです。私共  
は幸ひでした。二三度ボーボーと寂しい汽笛をな  
らすと小さい舢舨が出て來て私共を運んでくれま  
した。岸には大勢人が出て居ました。其の中には  
黒い總々した髪を紺の絞りの手拭で捲いた女も四

五人交つて居ました私共は船で懇意になつた青年  
企業家T君と千代屋といふ旅館の二階に休みまし  
た。障子をあけると白布をつけた富士は伊豆相模  
の山々を脚下に踏まへて中天に屹立してゐます。  
波は岩に碎けて怒號をあげて居ます。それでも何  
處かに牛の鳴く聲が聞えます。T君は早速村の女  
を呼んで大島節を歌はせました。其は眞白に白粉  
を塗つた厭氣のさす若い女でした。『おまへ地のも  
のか』と訊くと『さうですよ』といふ。二三度歌  
はすとT君も厭になつたと見えて、銀貨一枚を渡  
して追かへしました。T君は『あれは他から入込  
むで來た女ですよ達磨と言つて漁夫の生血を吸ふ



# 日清生命保險株式會社



社長  
中野武營

東京丸の内

二重の配當  
を得られよ  
詳細は保險  
案内あり

勞働問題の解決の先驅者  
友愛會の機關新聞

毎月一日十五日發行  
定價金三錢稅五厘

## 友愛新報

### 最新目次

- ▲生意氣論 社説
- ▲工場労働要義 神田孝一
- ▲婦人の力 新渡戸稻造
- ▲英國ヨーク近郊の模範工場 生江孝之
- ▲法律問答 柳田國之助
- ▲労働問題要領講義 鈴木文治
- ▲働く乎飢ゆる乎 松本雲舟
- ▲ラヂウム物語 記者
- ▲講爲他は爲我奏々齋柏葉
- ▲家庭欄 ▲自由文壇
- ▲聯珠競技 鈴木亘清
- ▲友愛俳句 鈴木一鶯
- ▲會報

發行所

東京市芝區新  
堀町卅一番地

友愛新報社

## 西灘より

### 湖水にうつる青い煙

丘の上の湖水にうつるひとすぢの青い煙、  
青い青い空よりも青い煙、  
日光のうちふるふ朝風のひびきとともに、  
ああうちなびく、うちなびく、音もなく……

### 愛らしき大いなるけもの

ややしはし主人の手をのがれて、  
土手ゆくわれとならびてあゆむあの牛、  
ふとみづからの引きずる手綱を踏みて、  
しづかに草枯れのうへにとどまれり。

佐藤 清

あとを追うて走り来る主人よ、  
この愛らしき大いなるけものを、  
しかる勿れ、  
またそのかたき鞭をあげて、  
むちうつなかれ。

### 性の力

わが微妙なる本能を織りなす力、  
盛んなるリズムよ、性の力よ、  
絶ゆる勿れ、破るる勿れ、  
一滴もわが外にこぼるる勿れ、  
わが弱き脳髓に心臓に、

# 帝國文學

第四

卷十二

四月號

郵稅 一錢 五厘

定價 金二 十錢

△二つの道 (評論)	石坂養平
△講演旅行 (小説ハムッソ)	西澤富則
△海鷗 (戯曲、チエユホフ)	伊東六郎
△女流作家の心境 (評論)	川島風骨
△小説家としてのシヨウ (評論)	石本笙
△劇場論 (評論イェツ)	山宮允
△心と心 (詩)	江中多羅葉
△太陽と紅雀 (詩)	澤木茂正
△三月の劇場 (時評)	久米正雄
△三月の文壇 (時評)	山田檳榔

大日本圖書株式會社 京橋 銀座

主筆 加藤直士

週刊

# 基督教世界

每週木曜發行  
一部 金五錢  
半ケ年 金一圓廿錢  
一ケ年 金二圓廿錢

◎本誌は日本組合教會出版部の經營する所なれども、同時に我邦進歩的基督教全體の機關たることを期す

◎本誌は明治十六年の創刊に係り三十年の歴史を有する基督教界最古の週刊新聞なり

◎本誌の編輯は加藤主筆の外、小崎弘道、宮川經輝、原田助、渡瀬常吉の四氏熱心其任に當る

◎好評噴々たる本誌の特長は基督教の立場より常に時事問題を評論し且つ最新の智識を以て斯教永遠の眞理を闡明するに在り

◎每號主筆の社説と、教界先輩の説教と、内外名士の論説と、新進思想家の研鑽と、清新なる文學と内外宗教界の出來事及び教勢一斑を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として、傳道用冊子として、信者家庭の讀物として、最も好適なる出版物なり

◎百聞は一見に若かず、見本は御一報次第進呈すべし

大坂市中區北島二丁目

發行所

基督教世界社

大阪三軒橋口座三



内田魯庵先生新著

〔大正文庫〕第十二編

# 沈黙の饒舌

三六判 美本  
定價 八拾錢  
郵税 八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈黙の境中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を説き生活の難易を教ふその言の懇切なるその論の穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評して咄哉と云はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參ずる能はざるもの

『大正文庫』 十二冊 にこれ 全部完成す 書目進呈

東京振興堂 出版 丙午 石川町六 小原町八 川原町六 石川町五 小原町三 東京替振 小東替振 石川町一 川原町三 町五 六 堂聲鷄

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副  
長、八目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)  
(本 八九八(私宅用))

## 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

## 院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一二番

## 南湖院

河野、高橋、兩副長、八目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後  
入院、診後應需

## AN AIR-CASTLE.

A literalistic friend called on me one evening. He had been planning with a few other friends to start a new magazine. The prospect seemed favourable. The name of the child to be born was the only problem left undecided.

Now in this country, there are so many magazines devoted to literature. Some are of many years' standing; but many are quite new, for recently the Muses have begun to bless us abundantly. Here they are:—

“The Imperial Literary” and “Art and Literature,” representing two Imperial Universities; “The Waseda Literary” and “Mita Literary,” issued from two private universities; “Life and Art,” “Creation,” “New Tide,” “Poetry and Prose,” “Drama and Poetry,” which speak for themselves; “White Birch,” an organ of some sons of nobilities; “Blue Leather Boots,” often confounded with blue stockings, an organ of so-called new women; the meteorological “Stratus,” and the astronomical “Pleiades”; the architectonic “Pagoda” and the mysterious “Black Splendor;” “Heart’s Flower” and “Cuckoo,” more typically Japanese; “Mosaic,” “Miracle,” “Holy Grail,” very decidedly Occidental; and still others as “Ego,” “Mask,” “Door,” “Silver Bell,” “Coral,” “Snake’s Tongue,” and even “Ruins of Beauty” with some visitors.

“What new name to compete with these?” I asked my friend.

“What do you say to ‘Chorus’ or ‘Nocturne’?” he said.

“To me,” I answered, “the one seems rather noisy and the other too lonely. If a foreign name is preferable, why not go back to the fountain head of Occidental literature?” And I suggested the name “Calliope,” the eldest of Muses, or “Apollon,” representing Light and Life. He said he would think about it and left.







### THE YOUNG AND THE OLD.

In an old fashioned school, the professors became highly dissatisfactory to the students. The latter invited the former to a sociable meeting, as they called it, and there they told how great their grievances were. Then a great commotion continued for days. Meetings and conferences were repeated. There was a great deal of talk about punishment, apology, resistance, protest, arbitration, concession, or compromise. I was reminded of what Bernard Shaw said ;

“It’s all that the young can do for the old, to shook them and keep them up to date.”

Certainly there was much shock in this case. But as to the up-to-date effect it is more than doubtful.

---

### CHURCHLESS CHRISTIANS.

I am not without sympathy with the so-called churchless Christians. For it is true that there is no perfect church on earth.

But I pity them when their perpetual pride is ;

“God, we thank Thee, that we are not as other Christians are.”

---

### FIFTY CENTS TO CROSS THE PACIFIC.

An American family who had staid in Japan for several years were to return home. There was a Japanese girl, Miss Suye, living with the family. She was now bidding farewell. The little Miriam of the family asked why O Suye San did not come with them. Miriam had long thought that her favorite Japanese was one of the family though clad in Japanese clothings. On hearing that there was no money for her to cross the Pacific, the little girl said, “I have fifty cents.” She had received these fifty cents before from her father as a reward of her special good conduct, and now she would give her precious treasure to take her friend over the Pacific. All present shed tears.

After a few days, he dropped me a card, saying that the plan had failed because of disharmony among the promoters. So it proved another example of Aesop's milk maid or another castle in the air swept away in a blast.

Perhaps the Muse and the God, seeing the danger of their names being misused, were angry at the audacity of men and sowed the seed of dissension among them.

---

### GEOGRAPHICAL.

#### 1.

Opening the maps of the world, I wonder to find how every nook and corner of it is inhabited.

"Wherever you live, there is your capital," says our proverb.

What immense number of capitals on earth !

Yet how many of these are left unvisited by travellers !

How many, uncared for even by geographers !

#### 2.

When a great battle is fought, a small river or a hill in unknown Manchuria attracts the world's attention.

Because of religious controversy, a little town of Kikuyu under the equator becomes widely known in civilized world.

I wonder if there be other places waiting for some events in order to become notorious.

#### 3.

Though the conquering races change the colours of maps, the names of places given by the natives usually persist against foreign influences.

So even the Polynesian dialects compel the recognition of the whole world.

## 山の雪

野口 精子

山の雪わづかにものの彩をなし光るもよしや三月となり  
録金の光流すと黒髪を解けば春めく日の匂ひかな

春の雨氣鬱の人は見て泣きぬ草の芽立ちの悲しきがため  
湯上りのぬれ髪を吹く春の風櫛のさばきの水に似て吹く  
七つ八つ星をかこみて月暈すダイヤの光る花櫛に似る

花笠に玉のかざしの星光る春のよき夜を躍るうす月

山櫻朝の木立にうぐひすの啼く日つづきて白き一輪

大膽に戀など語る人となり君に會ふ日をあやしとぞする

自からの心に信の置き難き寒さもだえのつづく此頃

氣病ひに臥して半日思ふこと熱と氷といづれもよろし

### TWICE IN LIFE.

Twice in life we are most tenderly cared for ; when we are born and  
when we die.

With so much care we are ushered in and out the world of mankind.  
For these special favours we have to work hard all our lives.

---

### LIFE FORCE.

Mysterious Life Force !

A negro-lad loves a negress-lass.

Nay, more, a he-crocodile loves a she-crocodile.

Let romantic worshippers of Love consider this.

---

### FOOD.

Why such and such particular cattle, fowl, or fish were destined to  
be my food ?

What large number of cattle, fowl, or fish are consumed before  
man's own fate arrives ?

---

### AN ANTICIPATION.

After a day's task I lie down.

The sleep is welcome when I am tired.

When my life's task is done, shall I feel like this and welcome  
death ?

Tetsuzō Okada.



て城壁の上へと上つた。其處には既に祭司の見習共が立て居つて、さうして市街の方を眺めて居つた。

……奴は捕まつたのか？ ……

……えつ、反亂の教唆者として捕縛されました。奴は其の徒弟達に衣服を賣つて刀槍を購へと命  
令けたもんですから。 ……

……では武器を所持して居つたのか？ ……

……刀劍が二本あつたさうです ……

……ではもう宣告終になつたのか？

すると、裁判所の門前に雲霞の如く集つて居る群集から新らしく叫聲が起つた。——始めの中はよく  
聞きとれなかつたが、段々と明瞭になつた。

……磔殺にしろ！ …… 磔死にしろ！ …… と群集は叫んだ。

……刑罰としては磔殺は少し酷烈過ぎはせぬか？ ……

とカイヤパスは云つた。

……否と ……

一人の見習は答へた。

……彼奴の徒弟の中のサイモンとかペイタアとか云ふ奴が劍を抜いてマルクスと云ふ雑兵を斬つ  
たのです。 ……

……うむ。左様か。もうそれ以上の證人は入らん！ ……

……だが、彼は左様云つたさうです。「汝の刀劍を鞘に納めよ。如何とならば刀劍を採る者は刀

劍と共に滅びんと……………」

……それは大に困難かしい教理だ……………」

とアンナスは云つた。さうして壁下へ降りて行つた。併しながら。

……磔殺にしろ！——磔殺にしろ！……………」

と云ふ民衆の叫聲は猶止まなかつた。

(其の二、終り)

## ■精神生活の哲學 オイケン

得能文 弘道館發行

オイケンの哲學の翻譯の成るもの相續くは誠に喜ぶべきことである。波多野宮本兩氏の譯あり、加藤直士君の譯あり、三並良氏の譯あり、茲に得能氏の譯が現はれた。本書はオイケン哲學の大精神を言明したるもの、*Ein führung in eine Philosophie des Geisteslebens* 即ちその原本である。本書オイケン自らが言明する如く「哲學を全體として會得し、且つ主要なる諸問題に就て、如何に精神的生活の切實なる要求が人間を哲學に向はしめるか、又同時に哲學が如何に多くを人間のために成就したるか、如何に哲學は人間に缺くべからざるものであるかを示さんとするものである」第五章幸福の問題三百十ページに曰く「若し我等の内面にある精神性が單に人間の產物であるならば此精神性より一種獨特の世界を築造し、人間存在に意義と價值とを獲得し、同時にまた大幸福を獲得すべき希望は消え失せねばならぬ。斯くなれば一切の作業と勤勞とは失はれ、否定が終に勝利を得る。故に茲に残る唯一の途は精神生活を獨立の世界として理解し、取り扱ふことである。斯くてこそ初めて我等の生活に内容を得、然らざれば必ず陷るべき空虚よりは是を救ふことを望み得るなれ。我等の存在は此等の關係を發して徒爾なる樂みと調和とに變形せぬ。却つて先づ存在の衝突と矛盾とが一層大きく耐へ難くなるやうに見える、取り得るならば、ここに勇んで戦を始め得る。然る時は我等の生活は無益でなく、たとひ一切が十分明かに現はれざるも、或る重要なものが我等の生活に於て成就せらるゝことは實に確かである。」之を以てオイケンの精神生活の根本を知ることが出來やう。同時に此引用文の示すごとく得能氏の譯文が如何に親切で、明晰で流暢であることが解る。譯者の用意周到なる注意は本書の首尾を通じて一貫し、讀誦の際快感を與ふ。オイケン博士この秋は東京を訪れらるゝとのこと。本書を讀んで同博士を迎ふるも興ある事であるう。(價一・五〇)

……人は市民の義務を放擲にする權利があるなんて云はなんだか？……………

……御師匠様の御仰るには、「人は先づ第一に神の王國と正義とを求めよ」と……………

……彼奴は勞働者に向つて彼等の業務を放棄して仕舞へと云はなんだか？……………

……御師匠様の御仰つたのは、「我に來れ、總て勞苦して重荷を負へる者よ」と……………

……さうして彼奴は世界を征服して仕舞ふなんてことを云つたか？……………

……御師匠様のお仰つたのには、「汝等、此の世にては患難に遇はん、されど頼もしかれ、我れは

この世に勝てり」と……………

大祭司は少しく疲勞れて來た。

……此の漢子は先刻から私の見聞したところでは、一つも私の質問には答へては居らん……………

……御師匠様は精神と眞理とで返事をなさる。併し貴方は肉と文字の上とで質問をなさる。我

々は同一の精神に屬して居らん……………

……私には全然了解らん……………

……「神は我れをして、貧者に福音を宣へしめ、心の碎けたる人を醫さしめ、虜には免しを、瞽者

には見ゆることを告げしめ、又壓へられたる人を解きて自由ならしめんが爲に遣しめ給ふ」

と……………

……こら青年！ 貴様の喋べつて居る馬鹿／＼しい御詫は些とも貴様にも又貴様の師匠の補助に

もならんぞ、……………

……汝等人々に祝せらるゝ時は禍なるかな、さうして、惡より離れんとする人は又その餌となる」と……………

大祭司はアンナスの方へ振り向いた。

……迦利利人を我々の掌中に渡すのは此奴ではないわい！……………

……未だ他に一人居る。まあ聴きなさい！御前の名性はイスカリオットと云ふか？……………

……否、私の名性は約翰と云ふ……………

……よろしい。門外へ出なさい。——そのイスカリオットと云ふ漢子を此處へよこして呉れ。一寸待つた！たつた二つの言葉で「生」の意義に就いての御前の師匠の教を聞かして呉れ。……………

……「死は正しき者に對しての一つの幸福なり」と……………

と何の考へもなく歸翰は答へた。

……「生」其の物が幸福ぢやないのか？……………

……「死に依りて生を得る」と……………

……いやもう十分だ。行けく……………

併し大祭司は、今聞いた言葉を彼れ自身の口頭で云つた方がよく了解が出来ると思つたかのやうに、度々それを繰返して云つた。

……「死は正しき者に對しては一つの幸福なり」と……………

突然市場の方とさうして裁判所の方から群集の喧噪が聞えた。アンナスと大祭司とは何事かと思つ



とヘロデ王は氣色ばんで云つた。

……私はエソウの未裔と云ふエドマイテ人さ。さうして私の母親は、世間から非常に輕蔑されて居るサマリタの婦人さ。……………

總督は一寸しまつた事を爲たと氣が着いた。それ故に彼れは彼れの日常携帯へて居る公杖で三度び床をたいた。すると、一つの大きな上蓋がギイと啓いて、さうして種々と羅馬人の嗜好を表はした食物を山の如く積んだ食卓が持ちこばれた  
ヘロデ王の面色は晴々しくなつた。

\* \* \* \* \*

祭司達の集つて會議を催ふす一室には、大祭司のカイヤバスとアンナスとが直立つて、さうして極めて熱心に談合して居る。

……そこで、何うしても此の災厄は免れることが出来ないとなると、さうして皇帝陛下の立像が神殿中の一番神聖の場處へ建られることになる、さうして又萬一それに對して反抗をするか又は一撥でも起さうものなら、我々は瞬間く間に殺戮されて仕舞ふとなると、もう己を得んから、神様へ何にか一つ犠牲を捧げるのだ、さうして我々一同の替りに其奴が死んで呉れるんだ。……………

……至極御道理だ。何にか一つ特別な贖罪の犠牲が必要だ。——丁度踰越の祭日も近づいたものだから——ではあの迦利利人を犠牲にしようよ……………

.....よからう！　だが犠性は純潔ではなきやいかん。迦利利人は純潔かな？ .....  
 .....純潔なること羊仔の如しだ .....  
 .....では彼れは自身の肩上に色連人の罪過を擔ふかな。彼奴の血鮮て我々は罪惡を免れることが  
 出来るかな。併し誰れが彼奴を我々の手中に渡すかな？ .....  
 .....彼奴の弟子の一人で、今門前に立つて居る奴がさ。 .....  
 .....其奴を門内へ呼ばう .....  
 後に福音の傳道者と呼ばれた約翰が門内へ引張りこまれた。さうして大祭司は彼れに訊問を始めた。  
 .....何前はち前の師匠の事に就いて何う云ふことを話して聞かせることが出来るか？ 彼れは摩西  
 の律令を破つたか？ .....  
 .....私の御師匠様は其の戒律の文字を事實に爲すつたんだ .....  
 .....そこで御前の師匠はどんな新しい戒律を我々の神聖なる律令の上へ加へたのだ？ .....  
 .....「汝等互に相愛せよと」 .....  
 .....あの漢子は猶太人の王だと云つたか？ .....  
 .....私の御師匠様のお仰つたのは「我が王國は此の世界のそれとは異ふ」と .....  
 .....彼奴は息子や嬢に其の親達に反抗させはしなかつたか？ .....  
 .....御師匠様の御言葉には、「我れよりも自分の兩親を愛慕すること多きものは、我が弟子とす  
 る價値なし」と .....

……ああ！や、大祭司來て居るな！……何にを彼處ではあんなに爭擾て居るのだ？……  
 ……あれは迦利利人がとう／＼腕力に訴へて神廟から金貸共を逐放つたのでムります……  
 ……へロデ王の奇異の念は昂上した。

……私は其の漢子を一見したいもんだが？……

……其漢子はもう他處へ參つて仕舞ひました……

……大祭司！一體其の漢子は何者なのだ——え？救世主でもあるのか？……

……そんなことは無論信じられません——極く貧窮の木工の悴で、少々頭腦が狂つて居りますか

い……………

……では豫言者か？……

……彼は人民を煽動したり法律を破つたりして居ります。さうして非常な大食漢で、大飲酒

家、始終神様を汚瀆して居ります。さうして自分で神様だとか亦神様の子だとか云つて宣

告あるくのでムります……

……ふむ。誰れか確實に彼が其様な事を爲たり又は公言つたりしたことを見聞いた證人でもある

のか？……

……はい。あるにはありまするが——其の申す事柄が何うも撞着したり矛盾したり致しまするの

で……………

……では何にか確しかな口上のよく符合する證人を探すのだなあ。！そこで大祭司！我々はこゝ

に一つ他の事を相談せんけりやならん。君も知つての通り、羅馬の元老院は、今度皇帝陛下を神様に御祭り申すことに一決し、さうして其の尊像を神廟中に建立することになつたのだ。君はまあ何う想ふ？……………

………はい。申す迄もなく我々は皇帝陛下の御仁恵の下に生活して居るのであります。が併しこの嫌疑事柄が實地に行はれまするやうになりますと、我々は往古のマカビー人のやうなことを爲して死なすばなりません！……………

………では死んで仕舞へ！……………

大祭司は返事をする前に一寸考へた。

………私は一つ議會を招集して、さうして皇帝陛下の御思召を傳へて見ませう……………

………うむ。さうして呉れ。それから逾越の節會の來ん中に、例の迦利利人を屹度私の面前へ連れて來るのだ。——私は彼れに會つて見たいから。……………

………承知致しました。……………

………では行き給へ……………

鄭重に辭儀をして大祭司は別を告げて歸つた。

………一體、あの人種は箸に棒にもかゝらん食へない手合です。……………

と總督のピラトは云つた。一寸他に談話の小口が見出得なかつたものだから。

………私も又其の箸に棒にもかゝらんイスラエルの人間さ。……………



否。まづたく別人です……………

………では二人居るのかな！……………

………左様。今度のはそのもう一人の方です……………

………だが、二人とも同じ様な經歷を持つて居るではないか！ 先づ彼等の出生に就いてのあらか

じめの詮宜——丁度古代の神話にあるペルセウス、又は實際の人物としてはあのプレトオの

様に、神様の子供だと云ふ妄言があるではないか！ 何にか種々と相違した人物を捏造したも

のてはないか！……………

………否。全然其様錯雜はありません……………

………さうして、彼の名性は？……………デオスワ……………ヂエセエ？……………

………其の漢子の名前は、ヂイサスと云ひます。さうして其の幼年の時は、埃土のヘリオボリスとレ

オンボリスとて暮したさうです……………

………では彼は屹度魔法遣ひか道士だらう。どうだらう、君、此處へ呼んで來て、何にか一つ變つ

た面白い事を演て見せては呉れんかしら？……………

………其の漢子の居處を搜索のは極めて困難なので……………と云ふのは、彼は今此村に居るかと思ふ

とすぐにもう他の村へいつて居るのです。……………併し今大祭司に訊ねて見ませう……………私は

あの老人を官邸へ呼んで置きました。さうしてもう階下に待つて居る……………

………君、何故あの神廟の庭前で、あんなに爭攘て居るのだ？……………

……人民は皇帝陛下の御像を神殿中の最も神聖なる處に建立しようとして居るのです……  
……はあ、成程！我々の睿聖文武の皇帝陛下は宛然狂人と同様にカブリの島で御暮しになつて居る。さうしてあの甥御のカリグラどんの爲に始終責め苛噴れて御出でになる——ねえ、君、自分の妹に生ました忤が甥と云ふことが出来るなら——さうして今ぢや一柱の神様におなりなさるのださうだ。はゝゝゝ……

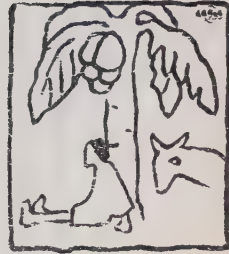
……アンテオクス・エビイバネスはツエウスの像をあの神殿の最も神聖なる場處へ建立させました……併しツエウスは眞實の神ですからなあ。そこであの畜生のタイベリウスの像を建立しようとする、無論一争動は持ち上る……

……總督！何うしたらいいだらう？まあ大祭司を此處へ呼ばう。……

總督は屋下へ降りて行つて、大祭司のカイヤバスを連れて來た。

ヘロデ王は目を閉じ、さうして其の双手を胸の上へ組み合せた。彼れはあらゆる仕事を以つて其の嗜慾逐求の障礙物視した。さうして平常なるべく簡短にそれを片付けることを好んだ。總督が大祭司と一緒に屋上の露臺へと立ち復つて來た時には、王は座睡から目を覺ました。が併し自分は自分が何處に居るのやら、又今迄何に就いて相談をして居つたのやら、全然忘却して仕舞つた。總督は一步前へ進んで、ヘロデ王に生氣を付け、さうして其の相談の議題に彼れの注意を向けさせた。

……神廟中に何にか争亂があるさうだ……  
……とは彼れの最初の言葉であつた（彼れの座睡は多少其の争亂で邪魔されたものだから）。



## 史 影

(By August Strindberg)

千葉 掬 香 譯

### 其の二 羊 仔

猶太の藩王ヘロド・アンテパスは其の國民の中に大分動亂の兆候があると聞いて、首府耶路撒冷に來た。彼れは其處へ羅馬より派遣されて居る總督のピラトの官邸の客となつた。彼れは前日の夕より引續きて彼れの爲に特に催されたる剣闘の勝負を見物し、それより徹宵て飲縱の宴會に列した爲に、今朝は遅く迄寢て居つた。——彼れの起床を待つて居つた主人のピラトは、待疲勞れて、屋上の眺臨臺へと出た。

其の眺臨臺より見渡すと、モリヤの山巔、神殿、ザイオン、太衛の宮廟等を重なるものとして、聖なる都は一眸の下に開展して居る。北西と西との方角には、シヤアロン一帶の谿谷が地中海の沿岸迄宛轉として伸長して居る。それは丁度五哩の遠方で、晴天の時には宛然一條の紺青の絲を牽いたやうに見える。

東方に當つては、橄欖山が山一面に葡萄の畠や、橄欖、無果花、さては蔦蔦香等の密林や其他種々雑々

々の果樹に被はれて、廣々と崛起延長して居る。其の麓にはケドロン清流が流れて居て、其の兩岸は鬱蒼と繁茂せる月桂樹や、桤柳や又は楊柳等の灌木矮樹で春の裝飾を施されて居る。

總督は落着かない様子で、度々神殿の前面の廣庭を望見する爲に勾欄に依りかゝつて佇立して居る。神殿の前の廣い空地には、大勢の民衆がさも繁忙しげに動き廻り、俄ち一團をなすかと思ふと、又バット四散て今度は又以前に倍して大きな一團を型成る。

やつとのこととて、ヘロデ王は起床て來た。彼れは寢過した爲に、其の双眸は充血して居る。彼れは總督に極めて簡短な挨拶をし、さうして、宛かも何にか談話でも始めやうとするやうに椅子に腰を下ろした。併し彼れは自身の云はんとするに適當なる言葉を見出すに困難を感じた。彼れの頭はがつくりと項垂れて、さうして何う云ふ風に談話の端緒を引き出さうかと思案してはたとゆきつまつた。何故と云ふに、前夜よりの徹宵の譚樂は、彼れをして一體何の爲に此處へ來たかと云ふことを全然忘却せしめたからである。

總督は談話の端緒を引き出すことに助力した。

……御打合せなさい。貴方の胸中一杯でさうして心中は非常に御心配でせう……………

………え？ 何んだつて？……………

………我々は昨日あの民衆を煽動する奇怪な奴に付いて御相談をして居つたのです……………

………うむ、さうだつた！ 私は無據處なくあの約翰と云ふ漢子を斷罪に處せと命令したのだ。あの漢子は又蘇生て爭亂まはつて居るのかな？……………



近き原因がある。即ち前號の時評欄に「神學研究勃興の兆か」と題し、僕が書いたものゝ一節に就き「神學の研究」の主筆杉浦貞二郎君から、左の如き書面が來た。

六合雜誌三月號の時評欄中大兄の神學雜誌を評した文中に、神學の研究も神學評論も、『兩雜誌共に聖書に關する論文が幾つもある。須貝君の「山上説教の神學」の如き……これ等の議論も結構であるが、我國の神學雜誌としては本文批評を度外視するとは出来ない。彼の論文の如きも本文批評の基礎の上に立つべきものであつて、之を度外視したならば、沙上の建築に過ぎない。然るに本文批評に着手した論文が一つもないのは甚だ遺憾に思はれる』とある。

處が三並君、彼の須貝の論文は大層な本文批評の上に立つて居るもので、須貝は山上説教を悉く分解して研究して居る。而して其結果は同論文の初めにある緒論である。須貝が本文批評の結果として編み直したものは其第三頁に出て居る通りである。

併し三並君、本文批評上の議論は希臘語を用ひたものが多くあるので、一般讀者には牧師連中でも大抵は之を解し得ないのである。故に我『神學の研究』でも出來得る丈には之を避けて居る併し之を無視するのではないが、今云ふ通り讀者の理解力を疑ふて居るからである（併し時には其見本位は見物させてもよいと思ふ）

兎に角、右に云ふ須貝君の論文の結論は、一寸目立たぬから大兄も見落されたのであらうが、詳細に書けば長篇の一論文と爲し得るもので、且つ須貝君の此の本文批評には獨特の點もあるし（彼の緒論の邊は先年『神學士號』を取る時に書た論文の一節であらうと僕は考へて居る）歐米人の燒直しの如き者ではないから、何か序の節に一寸僕は『神學の研究』が『六合雜誌』の讀者に下だらない雜誌の様に思はれたくない、六合雜誌上に『沙上の建築』でなかつたことを認めて置いてくれ玉ふとを得ば幸甚である。

そこで僕は一寸之れに答へる必要がある。固より杉浦君も「彼の須貝君の論文は大層な本文批評の上に立つて居るもので、須貝は山上説教を悉く分解して研究して居る。而て其結果は同論文の初めにある緒論である」と云つて居る。さうすると杉浦君も彼の須貝君の論文が研究の結果であると認めて居るけれど僕の問ふ所は結果でなく、研究そのものである。若し「大層な本文批評の上に立つて居る」ものならば、或は須貝君の「本文批評には獨特の點もあるし、歐米人の燒直しの如きものでない」ならば、其批評そのものが聴きたい。唯斯くの如き保證でなく事實が見たいと云ふので

ある。殊に神學を研究する雜誌ならば、それ位はしてもよからうと思ふ。

僕が云ふ迄もなく、普通人は「山上説教」と稱へるけれども、此の如き説教を耶穌がしたかどうかは問題である。勿論須貝君も耶穌がこんな説教をしたのではあるまいと考へて居るらしい。「山上説教は多分此の如くにして弟子等の頭に殘つて居つた教訓を組織的に纏めて、これに特殊の歴史的背景を附したものであらう」と云つて居る。けれどもこれでは不明瞭な點がある「教訓を組織的に纏めたもの」と、之に「特殊の歴史的背景を附した者」とは同一であるや否やと云ふとである。又須貝君の論文では、此の「教訓を組織的に纏めたもの」と及び同君も云つて居る彼の「Q」即ち「説教原書」との關係従つて「馬太も路可も此のQをその福音書の主なる材料として用ゐて居る」と云はるゝが、これは既に組織的になつて居るのを

其儘に用ひたのが、或はQのを組織的にしたのかも不明瞭である。

殊に彼の所謂「山上説教」なるものは馬太にも路可にも出て居る記事である。然し須貝君はこれの中「何れが説教の本文の（僕云ふ此の場合、説教の本文とは何を云ふのであらうか。Q本文のとか耶穌の自ら語つた教説か、或はその他のものか）原形に近いかと云ふとになれば、問題が少からず複雑になつて來る」と云ひ、或は唯だ單に「余は嚴密な研究の結果、次の如き山上の本文を編み出した」と云ふのみである。僕の聽かんと欲する所は問題はどうか複雑になるか、どんな嚴密な研究があるかと云ふとである。若しもその手續が示されなければ僕から見ると、獨斷論にしか見られない矢張砂上の建設にしか見られない。勿論須貝君が他に大なる研究があるとは悦んで信じたいのである。

究せざるを得ない。さうすると疑問は山ほどある殊に根本的には、福音書に傳へらるゝ史料によつて耶穌の人格が充分分るか、と云ふ問題がある。

福音書の文字やこゝに記せられる材料は、云はゞ骨格のみではないか。これにどうして肉や血や、否生命がついて来るかは大問題である。耶穌傳研究者や、基督教の神學者は此の問題を多く考へて居ないやうに見えるのは、僕には不思議でたまらない。僕にはこれ等の史料は恰も代數の式のやうに思へる。H + H = に似たものと見える。要するに概念で表はしたものは皆なさうであらう。彼の教義のやうなものは殊にその甚だしいものである。式はたとへ同じでも此のxなりyなりの價は定つて居ない。「基督は我等の爲めに十字架に死んだ」と云つた所で實は何の事だが分つて居ない。「基督」とはxである「我等の爲めに」とはyである。「十字架に死んだ」とはzである。價は定つて居ない。然らば斯う云ふものが、單純な信仰であらうか。若しさうであつたならば「單純な信仰」とは「内容のない、形式的信仰」に過ぎないもので

ある。

けれども血も肉も生命もない形式的の信仰で、誰が満足しやう。金森君だつたつてさうではないのは分りきつたのである「哲學上の議論をしたり神學上の批評もやつて見たが、だめですよ」とは此の消息を漏らしたものである。然るに哲學上の議論や、神學上の批評がだめであるからと云つて矢張りその結晶とも見るべき知識上の形式なる教義に歸着するのは矛盾である。僕が何時も云ふ通り、こゝでも形式や概念（教義）を溶解、還元して、それ以上或はその背後にある本源的生命に歸らなければならぬ。斯う考へるのが論理の正鵠を得たものである。さうすれば哲學や批評を輕蔑する必要は少しもない。大にその補助を借る必要がある。而もそれ以上に出るとが出来る。然らば此の考へ方から見れば信仰とは如何なるものであらうか。

僕は信仰でも矢張對象を我等の意識の外に置いて、これと對するやうな態度を取つてはいけな

と思ふ。意識するものと、せらるゝものと區別はあつても、その對立が内部になければならない。

我等の内部に、我等よりも以上な、優勢な、清淨な力が這入つて來て働き、此の力で、我等の本質が益々理想的になり、神聖を増すと意識するのてなければならぬ。こゝに實に本源的生命がある。これが分裂しては哲學にも、藝術にも、道德にも、何にもかにも此の生命が這入つて、その力となり生命運動とはなるのである。故にオイケンは信仰に就て「信仰とは單なる承諾ではない。信仰とは全存在の向上である、向上の欲望である又斯くの如き向上が神的生命の力によつて確實になることである」と云つて居る。我等が信仰とは精神的の力、生命であると云ふのは、これが爲めである。

そこで僕は石井十次氏に色々の信仰上の動搖のあつたのは、矢張り此の本源的生命に觸れんとする努力であつたらうかと想像する。氏は獨創力にも富んで居た人であらうが、周圍の教義的に結晶

して居た、そしてそれに全然満足はやうしないけれども、然し何時も半ばは結晶して居るものしか示し得ない信仰を見せつけられるので、自分にも根柢が据らないやうな觀があつたのではなからうかと思ふ。最近になつて所謂「單純信仰」に復歸したかのやうに見えたのは、體力の衰へたのが精神に影響したものではあるまいかと思へる。それも、その少し以前に氏がニーチェとかベルグソンとかの思想に親しみ、殊にニーチェは眞の基督教徒であると喝破せられしが如きは、如何に偉人の本源的生命と生命とが相觸れ、互に共鳴するものがあつたかと思はれる。實に信仰とは此の本源的生命に觸るゝことである。否それを我等の生命とするのである。我等は先づ此の源頭に立つて、歴史や教義を見なければならぬ。

## 二 本文批評に就いて

此の問題は固より前に述べた事とは何等の關係もない。唯だ便宜上併べたまでである。然し僕が此の問題を我が誌上で論ずるやうになつたのは



處に云ふ必要もなかつたかも知れないが、こんな譯で近頃出た石井氏に關する記事を讀んで居るうちに、氏の信仰や、その動搖の事なども幾等も書かれて居る。それらの中に救世軍が出て居る「ときのこと」に山室軍平君の書いた「石井君と金森先生」と題する一文がある。之を讀んで僕は「單純な信仰」と云ふ問題に逢著した。そして此の事は必ずしも石井君や金森君若しくは山室君のみの問題ではない。もつと廣い世間一般の問題ではないかと思つた。そこで之に就て少しばかり見を述べて見たいのである。

## 一 單純なる信仰

彼の山室君の文のうちには「金森先生は神學上の立場の變つた爲め宗教界を去られ、石井君は又其後單純なる最初の信仰を離れて、暫く立場に動搖を來たされた様なことがあり」とあり。それから金森氏が石井君に送つた手紙の中には自分の信仰に就いて「石井君よ、僕はもう、すべて世の中の議論や理屈をすて、單純なる最初の信仰にたち

かへりました。

神は愛の天父である事。

キリストは私のために十字架に死し給ふた事。

私は罪人中の大罪人である事。

私はたしかに死後には罪のために地獄に落つべき筈である事。

今は救はれて天國の民たる事。

以上の單純なるキリスト教の根本眞理を僕は今更の如くに信ずるやうに成つた。是まで隨分哲學上の議論をしたり、神學上の批評もやつて見たがだめですよ。我々を死より救ひうるものは、そんな議論や、批評ではない。以上の根本眞理の深さの見えなかつたことを、只ちどろいて居るのみ」と書いて、こゝにも單純な信仰のとが云つてある。そこで僕の問題はA「單純な信仰とは如何なるものであるか」B「信仰と議論及び批評の關係」と云ふやうなどになつて來る。

(A) 僕は何も金森君を相手どつて議論をする積りではない。唯だ便利の爲め、氏の用ゐて居るとを

借用するまでであるが、君の文によつても單純な信仰とは、「神は愛の天父、基督の贖罪、人間の罪惡、死後の罰、救済」が單純な信仰の内容であるやうに見える。然し單純とは復雜に對する言葉である。然らば復雜なる信仰とは如何なることを云ふのであるか。金森君の文章には明瞭に此のことが書いてないけれども「哲學上の議論をしたり、神學上の批評をする」とが少くとも、復雜な信仰の部に屬するやうである。こゝに問題がある。

神の天父、基督の贖罪、人間の罪惡、死後の罰、救済などの如きとが、何等の哲學も批評もなくして悟れるものであるか、問題である。僕は少くとも、今日諸種の思想上の問題の、輻輳して居る現代人の心には、さう單純には行かないであらうと思ふ。神は愛の天父であるとは、間違ひてないにした所で、現實界を見ると、神の愛に反するやうに見えるとは澤山にある。こゝに既に疑問は起るまいか。基督の贖罪にした所で、そんなとが元來出来るものかと云ふ疑問もある。私は罪人でありとするも、此の罪とは果して如何なる性質のもの

かと云ふ疑問もある。死後の生活や、救ひのとて等しく疑問は相等にある。彼の教義學なる六ツケしい書物は皆な之を議論したものではないか。是れ等は決して單純な問題ではない。若し之を單純に信仰するとあるならば、此の場合には「單純」とは「盲目」の意味になつてしまふ。明瞭ではないが、何等の疑問を容れず、さうだとする、否なさうだと信ずるとになる。

(B) 是に於て我等の議論は更に一步を進める。即ち問題は「信仰とは、ある一定の事柄をさうだとするとであらうか」と云ふことになる。若しさうであるならば實は純乎たる知識問題に屬する。若し知識問題に屬すとすれば、是れ議論や批評が關係するどころのとてなく、議論や批評の本舞臺ではないか。議論や批評の本舞臺であるならば、疑問や懷疑が續々として出てくるのも當然である。

餘り問題が廣いから、基督に關するとのみに止めて置くが、基督の贖罪を信ずるにした所で、さう云ふ問題が出たらば、我等は到底彼れの歴史を研



## 單純信仰と本文批評

— 近事二則 —

三 並 良

世間一般から教界の偉人として認められて居た岡山孤兒院長石井十次氏は永逝された。誠に惜しむべきとである。僕は相濟まない譯であるが、石井氏とは一面識なくして了り、またその事業に就ても餘り深くを知る必要がないと思つて居たのである。これは僕が青年の頃氏の行動に就て大なる反感を抱いたからである。石井氏は彼の孤兒救済を一生の事業としたミラーに感服し、その轍を踏んだと云ふとであるが、僕もさうだと見て居たところがある。所が此のミラー氏には、僕は大いに感服し得なかつた者の一人である。ミラー氏は日本へ來てその信仰を説いた、祈禱の効能を説いた。そ

れが僕には感服が出来なかつたのである。彼れ云ふには、孤兒を救済するにも祈禱する（それには不服はないのであるが）その説明によると、孤兒に與ふる一片のパンすらもなくなつた時にも、決して人に依頼して食物や金錢を求めたとはない密室に這入つて熱心に祈禱をした。すると祈禱の終らざるに、戸を叩いて品物なり、金錢なりを贈るものがある。祈禱の力は實に偉大なるものであると説いて居た。僕はこんな効能論は實に賤俗な迷信だと思つて、少くならず不快の念を勃發された。若しこんなことが信じられるやうならば、彼の宗教革命時代に於て謝罪券を買へば、地獄に行

つて居る父母とか祖父母とかの罪も宥される。謝罪券を買つた錢が、金箱に落ちてチリンと鳴ると同時に、地獄の門はガタンと音して開らくと、カトリックの賣僧が云つて居たのと同じやうな氣がした。僕は祈禱の効能が斯くも露骨な外部的のものであるとは、どうしても考へるゝが出来なかつた。

その上ミラーの此の説き方は、祈禱の効驗も説くと共に、矢張り自己の孤兒院を廣告する方法だとも思つた。ミラーは固より意識的にさうしたのでないにしても、聽く者にはさう云ふ感を起させた。ミラーと云ふ人は慈善家である、人に依頼せず神に依頼して居る人である。故に彼れは直接自分に依頼しないにしても、助けずに棄てゝ置いてはならないと云ふ心を起させるのである。ミラーは神に禱るやうで、實は人に求めて居るのである。世間は實に廣い、そして廣い世間は案外、慈善家に富んで居ると示して居るのではなからうかと思つた。斯う云ふ譯で、僕はミラーの淺薄なのを冷笑して居た。そして彼れを學んだと云ふ石

井氏のとを聞いて少しも感服する氣が起らなかつたのである。

次ぎには、石井氏が孤兒院の孤兒を率ひ、音樂隊などを用ひて、寄附を求めて歩いたとにも大なる反感を抱かざるを得なかつた。これは前の祈禱主義と如何に相容れるものかは問題であるが、僕には當時僕の古郷などに、石井氏が音樂隊を連れて來られた時分に、そんな純理的な考は起らなかつた。唯だ何んだか乞食のやうなことをする人だと思つた。これでは傍路に小兒と共に坐つて、錢を乞ふ者の態度と少しも違つたとはないと云ふ惡感が生じたのみで、古郷の老人などは皆な感心して居たのに關らず、僕のみは冷笑して居たのであつた。

斯う云ふ譯で一度青年時代に、僕の頭に映じた石井氏はとうとう終りまで、僕に親しみがなくて濟んだ。然るに氏が永逝の後、氏に親炙せられた諸君の感想を聽いて、敬服すべき點も大にある人のやうに思へる。若し傳記などでも出たならば讀んで見たいと思つて居る。——これはまあ、此



ムブトンである。

之を要するに、トルストイの思想及び藝術よりして見れば、彼は高等頹廢ハイアデセレエトとも見る可き一種の病氣である。彼の思索過度、及び其の矛盾に於いて、其のマニアの徴候であることは明瞭である。是等の徴候は、頹廢病の根本的資格を構成するものである。と。

扱てトルストイの「自然に還へれ」の叫び及び彼の農民生活に對する見解には、吾々も多少の異見はあるが、何れにせよ、彼の叫びに偉大な權威のあるのは、其の叫びは單なる興奮や空想の所産ではなくて、彼自らの精神生活其のものから絞り出されたことである。之に對するノルダウ氏の批評は極めて常識的である、現狀維から出發した漸進説である。トルストイの農民生活の讚美は内生活の基調としたのであるがノルダウ氏の非難は外生活の形式基調としたものである。だから、トルストイの農民生活讚美に對する彼の批評は、亦だトルストイの説の中心思想に突込んで居ない、吾々が彼の立場に於ける彼の説を聽かんと欲するも

のは、斯うした政治家的、又は經濟家的批評でなくしてトルストイの農民生活を讚美するやうになつた考察の、心理學的又は生理學的關係である。彼がトルストイの禁欲主義に加へたる生理學的批評は、僅かに吾々の要求を充たしてゐるものであるが、尙多少の不滿がある。何故かと言ふに、トルストイの禁欲主義を以つて一種のマニアであるとするには、彼は餘りに考察や觀照が秩序正しく、理性が確然としてゐる。ノルダウ氏は其のマニアと整然たる理路との關係を明らかにして居ないことである。

又更に彼は、トルストイの思索の過度とその思想の矛盾を以つて、高等頹廢病の徴候であるとしてゐるが、是は獨りトルストイのみに關するものでなくして、古よりの精神的偉人は何れも具備してゐるものである。精神的思索の低き者より見れば、精神的思索の高き者程、思索過度の如く見られるのであらう、又それが當然であらう。然し乍ら、偉大なる人間程、思索の多量に堪へ得るものであるとすれば、其の偉大なる人間には何等の過度でもなければ、重荷でもない、況んやそれを以つてマニアであると斷ずるに於いてをやである。又たトルストイの思想の矛盾に於いてもさうであ

る若し矛盾を以つて、頽廢病の徴候であるとするならば、彼のバアナアド・シヨウ氏が「サニチイ・オブ・アアト」中に於いて、氏をこそ其の病人であると言ふ可きである、と言つた言葉に眞理を見出さなければならぬ。

余は氏のトルストイ論に就いて、微細に亘る時は、尙幾多の論す可き多き點がある、又たトルスト

イの説に就いても、論す可き箇處は多くあるけれども、其は他日にゆづり、是を以つて筆を止めて置かうと思ふ。唯彼のノルダウ氏の吾々に何物かを齎らしたのは、彼が生理學的觀察よりして、不完全乍らトルストイの一面を示して呉れたことである。

### ■トルストイ宗教小説集

小西増太郎著・警醒社發行「名曲」クレエツェロフ・ソナタ・主人と僕、罪の泉源の三篇を收めたるもの。三篇とも巨人トルストイの婦人觀宗教觀は最も良く此の偶意小説に現はされてゐる。これをトルストイの純粹なる論文に比して、却つて彼れの眞諦がうかゞはれるのである。譯者の原文に忠實な譯振りは嬉しいし。かし尙ほ少し簡勁にあつて欲しいと思ふ點も仄見えた。兎も角吾々の生活に對して、考へさせられるところの多い作である。(價〇・八〇)

### ■聖歌新曲

淺田泰順著・警醒社發行、著者は作曲に對して殆んど熱狂的な執着を抱いてゐる人である。内藤濯相原一郎介有田四郎諸士の歌を加へて、我が樂界に新しき讃歌集を得たることを欣ぶ(價〇・二〇)

又、怠惰漢が怠惰の結果として貧する者にほどこそは深い不道德である、即ち賑恤である。浮世の生は生存競争であるがキリストの生は自己存在の犠牲である。と。

ノルダウ氏は是を駁して曰く、賑恤或は同胞的分配に表示せられる同胞の愛は、深く觀察する時は斯麼愛ではない。最も單純で、最も原始的な愛情は、自己衝動である。健全なる人は、他人の同伴れとなる事を欲し、多分の苦痛を費やす事なくして、其の同伴れを無意識に自己に引寄せる事を努力するものである。又健全な人は、他人の苦痛を見る事をも自己の苦痛とする、其の苦痛は自己の興奮の程度に従ひて、大きくもなれば、小さくもなる。されば自己の苦痛を排斥する慾望によりて、他人の苦痛を救済せんと努方する。他を愛するのは自分を愛するのだ。同情も犠牲も要するに此の自己満足に外ならぬ。然るにトルストイは、凡てアンセルフエシユでなければならぬと言ふのは、其の妄や甚しい。

又彼トルストイは、此の同情や愛や自己犠牲やの結果の如何なるものなるかを、彼の小説「アルバート」や「ニコルジユドゥ公ルサヌの日記より」の中に於いて、明らかに示してゐる處に依れ

ば、悲惨な境遇に沈みつゝある人に同情し、其の結果、反つて被同情者の反感を買ひ、又は反抗に逢つてゐるではないか。

是れ彼が誤れる人道主義の矛盾である。此れは何處より來れるか、と言ふに、彼は他人の要求や慾望の無い處に、同情や愛を強ひるにあるのである。其の重大點を自覺しないからである。同情でも愛でも犠牲でも、其を被る人其人の要求及び慾望に合致して初めて、眞の同情となり、愛となり犠牲となる。

此の人道主義の批評は、ノルダウ氏のトルストイ論の中で、最も生彩を放つてゐる箇處である。眞の同情や愛は要するに自己満足から出發しなければならぬと觀破したのは、動かす可らざる眞理である。此處に於いて、個人對個人の或る調和的契合點が見出さるゝのである。此の一點は個人主義の最も重大な一屬性であることを忘れてはならぬ。

然しノルダウ氏の駁論にも少し冷靜に考察すべき點がある。氏は同情や愛を被る人其人の要求や慾望に合致して、初めて眞の同情となり、愛となる、と云つてゐる條である。他人に對する同情や愛は自己満足に過ぎないと唱へたる氏にして、何等の考察なく、斯うした説を言ひ得るか何うか？

其間何等かの矛盾又は推論上の缺陷がないであらうか？ 同情や愛は自己満足に其の出發點を置く限り、その被同情者の要求や慾望を絶對に其の對象の權威を認めなければならぬ理由がない。假令其の要求や慾望と一致することあるも、又一致しない場合もあらう。彼のノルダウ氏が舉げたトルストイの前二小説は勿論の事、更に例せば、父は自己満足よりして其子を物質的に豊富な生活を送りうる實業家に仕立てやうと強ひる時、若し其の子が假令物質生活に貧弱であつても、精神的に幸福な藝術家に志望があつた場合、此の親の子に對する愛、及び子の慾望の二者を如何に解釋すればよいのであらう。此の際親が、自己の最も好まざる藝術家に子を仕立てやうとすれば、自己の幸福觀及びそれより出發したる自己満足感を犠牲にしなければならぬ。吾々はヒウマニズムの價値を認めつゝも、尙深く考察しなければならぬ點は無數にある、獨りノルダウ氏のみでない。

又トルストイに従へば、人間の幸福を得るにはヒューマニチイに立脚しなければならぬ、ヒューマニチイとは個人の結合である

が、此の結合を最も甚しく阻害するは人類の慾望、殊に肉慾的快樂や肉慾的愛である。幸福の道は獨り、科學や理性を斥けて、「自然に還へる」に在る。されば吾は農民生活に於いて、最も人類の幸福を見出だすことが出来る。人々は此の文明の汚點や腐敗の集合たる都會を去つて、田舎に行かなければならぬと。

ノルダウ氏は駁して曰く、トルストイは吾々の經濟的要求を無視したものである。分業は文明制度の最も進歩した組織である。若し人間が悉く農民となつた曉は何うであらう。トルストイは、彼のルソウの「自然に還れ」の語を曲解したのである。吾々の緯度では、「自然に還へれ」の語をトルストイの如く解せば「饑餓に還へれ」と言ふことを意味する。人類の禍慘を治すは「自然に還へること」ではなくて、齊然たる組織に於いて、自然と戰闘するに在る。

又トルストイの肉慾を斥け、更に結婚をさへ罪惡としたのは、一種の病氣である。即ち頽廢の諸種の病患中、戀愛に關する時には、其の性的中心點を失ひ、其の結果色情狂的に向ふものと、憎色的に向ふものとあり、トルストイの如きは後者に屬するものである。確かに此のバソロジカル、シ



り、特に「トルストイ論」の一章を採りて、其の概略を示めし、聊か余の愚見も後に加へて見度いと思ふ。

彼はトルストイを論ずるに當りて、その藝術的作物の藝術的價值を對象としないでそれよりも寧ろもツと端的な、所謂トルストイズムと言はるゝその人生觀の諸論文に表はれたトルストイの思想を對象としてゐる。諸論文とは主として、“Short Exposition of the Gospel” “What to do?” “My confession” “My faith” “About my life” 等の事である。

是等の諸論文に表はれた思想の中、農民生活讚美の批評から初まつて居る。トルストイは初め、「余は何故生きて居るか？」と云ふ疑問を起した。彼は此の疑問を解く可く、先づ科學に趣いた、處が科學は「生命とは無感覺な惡魔である」と云ふ解答を與へるに過ぎないので、彼は科學には全然失望せざるを得なかつた。斯くて彼は再び生きて居る人間生活に立戻つて、眼を四週に配つた時ふと其の眼に止つたのは、下級の農民生活である。彼等は、何故生きてゐるか云ふ疑問に苦められることもなく、毎日、孜々營々として勞働し、苦痛し、然も尙、人生の目的に關しては全く平靜で、樂しげである。其の所以は、全く單純なる信仰の賜物である此處に於いて、トルストイは初めて覺る處あり。是こそは我が行

く可き路である、我が探る可き生活である、先づ此の單純なる信仰に立歸へらなければならぬ、と叫んだのである。

然るにノルダウ氏は是を駁して曰く、是れトルストイの專斷である、獨合點である、Saltum of religious thought である。彼等下級農民の多くは單純なる信仰に依つて生きて居るのではない、その人生の目的に關して平靜であり、樂しげであるのは健康の賜物である、彼等は自分自身の力で生きて居るやうに感じて居る、彼等は有ゆる生理的機能に於いて、生活力の表現に於いて、又有ゆる瞬間に於いて、何等かの満足を感じて居る、唯、單純なる信仰はその樂天主義オプティミズムの偶然の產物に過ぎない而して又、幼年時代より無意識に教込まれて來た習慣的結果である、それに、その無思索な信仰は、其他貧と無智との產物である、ポテトを食とし穴倉を住とし、入浴を採らない爲めの結果である。

此の生理的觀察は可成興味もあり、又眞理も含まれて居るが、實に峻烈なものではないか。トルストイの農民讚美をば、數言にして轉覆して居る

の觀がある。此の觀察は然し、ノルダウ氏の方がより多く正當であると思ふ。抑々露西亞の下級人民は、極めて信仰に厚く、歐洲中殆んど其の比を見ない、而して其の信仰たるやトルストイの所謂「單純なる信仰」にて、深き思索と思想の背景がない故、唯習慣的、傳統的に流れ易いのは當然の事である。習慣的、傳統的の信仰は、自己の生活の徹底境より湧き出た信仰でない事は明らかである。従つて「人生の目的問題に關して何等の交渉がないのである。然し、ノルダウ氏が、之を貧の產物であるとしたのは、吾々がくみすることが出來ない、何故なれば、貧することが、人をして、或る徹底境に導く、人の心的過程が徹底境に到れば、非常に強烈にて、又非常に根強き信仰の光明を得るか、又は其の反對に強烈にして、根強き人生の疑癡か否定に陥入るか、二途其の何れにか必ず到着するものである。彼等に彼等「ムジーク」は、其の何れにも行かず、單純なる信仰を持つてゐるのは、貧に徹底したのでもなければ、又其の信仰を以つて、人生の或る重大要求を満足せしめ

てゐるのでもない證據である。従つて貧の產物ではない。然し彼等の樂天主義の偶然的產物であることは、ノルダウ氏の説の通りであらうと思ふ。又彼等は人生の目的問題に關して平靜であり、樂しげであるのは、その生理的關係及び、彼等が眼前一尺の要求に満足することを以つて足れりとする樂天主義の結果であるとしたのは、氏の生理學的觀察の賜物である。

## 二

トルストイの説に従へば、各人間は、皆一人イグレートマンの孤ソリタリ立スタンディングした人間だと考へて生きてゐる、甲と乙と、乙と丙と相互に隔離した生活を營み、各意のまゝに相異つた生活の形式をもて生きてゐると考へてゐる。が其實は然らず、各人の生活は皆共通點に立つて生活してゐる、眞の生活は、其の源泉として「父ゼファアザ——神ゴッドでも、靈スピリットでもよい——」の意志を認める處の生活である。斯くて各人の生活は結合せられ、單なるばらばらに離れた木の芽でなくて、一切の木の芽が統一せられた一本の樹木である。各人間は其の意味に於いて、其の生活を共分してゐる。されば我が同胞を愛せ、反抗するな、批判するな、殺すな、自己を犠牲にしても他を救済しなければならぬ、而して單に賑恤することなく、同胞的分配プロパティエリイをしなければならぬ、外套を二着所有する者は、一着も所有せざる者に與へよ、

法律に服従すべからざる事を鼓吹した。全ロシア帝國內に於てトルストイのみは法律以上にあつた。彼の身體は壓倒者に對して神聖化せられて居つた。唯彼のみ自由なる臣民の權利を享樂した。彼一人思想及び道念の自由の全き汚蝕より全ロシア國民を救ひ得た。四半世紀間彼はロシアの道義的乃至宗教的信念であり而して又實に文明世界の信念であつた。

右の一篇は自分の目下翻譯中なる英人チャールス、サロリア氏原著「トルストイ傳」の卷頭に掲げられた緒論である。サ氏は倫敦帝室史學協會の名譽會員で又エディンバラ大學フランス部門の學長である。全篇を通じて此傳記の特色とも見るべきは純文藝的といふより寧ろ政治的及宗教的立脚地より此巨人を論評し解剖した所に在る。尤も其は比較的といふに止つてゐるかも知れない。

譯者

△前號豫告欄に本誌四百號記念號は四月とあつたのは、五月の誤りですから訂正して置きます。尙ほ加藤玄智氏は過去三十年間に於ける「神道研究の進歩」、加藤直士氏は「基督教文藝の進歩」、相原一郎介氏は「統計より見たる宗教の進歩」を記念號の爲め寄せらるる筈であります▽

# ノルダウ氏のトルストイ論

西宮 藤朝

## 一

第十九世紀後半期即ち近代文藝の著しい特色とも言ふ可きは、人生に對して何等かの懷疑觀くわいぎん、否定觀を抱き、其のどん底の地下室から、或る者は辛うじて、とつて着けた信仰に逃れやうとし、或者は益々悲哀と苦痛の深淵を底深く探り行かうとし、又或者はそを逃れるに、浮世の歡樂を以つてすると云ふ工合な空氣が、何處にも漲つて居るこゝとである。是が、文藝其物のみに表はれた單なる現象でなくして、文藝作物の對象であり、質料である人間生活の、近代文明が特に產出した相である。即ち文藝の眼を蔽ふて見ても、此の世相は依然として吾々の前に存在するのである。

然し近代の學者にして、此の世相の病弊其ものを研究した者は數あるけれども、此の世相の洞窟に深く探入つた處の思想家なり、藝術家なりを冷静に研究した學者は餘り多くない、殊に生理學的見地から研究した學者は尠ない。我がマックス・ノルダウ氏は此の尠ない中の唯一人である。氏は、獨逸の醫學者にして且つ刑事學者たるロムプロヅウ氏の系統をうけた、矢張り獨乙現代の生理學の大家である。氏は生理學の該博なる立場より、近代文藝の病處を抉摘する事、縱横無盡、有ゆるものを自己の俎上に明かにせずんば止まざるの慨あり。是が爲めに、近代文藝家が、自ら知らざりし病源を、氏に依りて自覺せしめられたと言つてよい。是より、余が茲に、氏の著書「頽廢論」デゼテュエンション「中よ



同と聯合に依つてのみ人生の難事が解決し得る。

かの際涯爲きロシア大平原に何等の高低もなきが如く其社會狀態に於てもソコに何等の不平等もない。貴族なるものは宮廷の貴族であり高貴なる人は宮廷に附屬する皇帝の廷臣 (dvorianin) に過ぎない。ロシアは英吉利或はプロシアに存在せるが如き獨立の貴族を産出しなかつた。ロシアに於ては長子相續權なるものがない。ソコには實に貴族の群集が存してゐるのである。ロシアには三百のガリツイン貴族と (Galitzine) 二百のツラウベツコイ貴族 (Troubetskoy) とがある。併し貴族は何等政治上の勢力を賦與せられず其獨裁君主の前には彼等は悉く平等である。

トルストイの特種な無政府主義は此亦スラヴ精神の特性である。スラヴ民族は從來政治的組織に對して驚くべき無力なる事を示した。かの皇帝專制の事たる偶々以てロシア國民が自治の能力に乏しき一證左たるに過ぎない。國民の政治的理想は農業上の社會主義に由つて寛和せられた世襲的家長的政府の理想に止つて居る。

西歐人の思考に取つて不可思議と思はるゝトルストイの哲學の特長は例へば「クロイツェル、ソナター」中に發表せられて居るが如き婦人に對する彼の態度である。而も此態度は又今日尙ほ東方及び禁慾主義を讚美したビザンチン教會の支配下に止つてをる一種族の態度其物を反映したものである。——即ち希臘教會 (ビサンデン、或は東方教會) の禁慾主義なるものは妻帯の牧師は之を僧侶の下位に貶し獨身の僧侶に對してはあらゆる高級の威嚴を留保せしむるのである。

トルストイを讀んで吾々は先づ其凡ての作物はロシア人民の爲に書かれたといふ事を領解する。或點に於てロシア文學は全人類の智的歷史上唯一無二のものである。其は著しく英雄的文學である。ロシア文藝家は思想の人であると同時に實行の人である。彼は靈魂の救濟者である。彼は使徒たるの天職を行ふ。恰も十八世紀に於けるフランス書の如く十九世紀のロシア出版物は主なる而して殆ど唯一の政治と社會上自由解放の秘鑰であつた。ロシアに於ける書籍は新聞說教壇の地位を纂

奪した。即ち専制政治の下に在つては新聞紙は箝口せられ教會は一回の榮幸に其天賦權を售り而して輿論なるものが存在しないのである。

凡そロシア文藝家の傳記程佗しき悲慘な單調な而も同時に人を動かし光榮あるものとはない。

殆ど凡て此等の人々は著しき類似を有して居る。

噫如何に悲痛なる殉教傳であらう。農奴制の罪惡を、膽に攻撃し第一人者の一人たる彼ラヂシエフ

(Radischev) はカザリン大帝の爲めシベリアに追

放せられやがて自殺を餘儀なくせしめられた。プ

ーシキン (Poushkin) ヲレルモンツフ (Lermontov)

は決闘で死んだ。グリボイエドフ (Griboiedov) は

凶手に斃れた。ロシアの最も偉大なる批評家ビエ

リンスキ (Belinski) 大哲學者サロポフ (Sal-

oviov) 及び最大小説家たるチェーホフ (Tchekhov)

——此等の人々は凡て慘酷なる氣候の爲に若年にし

て此世を去つた。ヘルツェン (Herzen) サルチコ

フ (Saltikov) チホルニチエフスキー (Tchernitch-

evsky) 及びクロポトキン (Kropotkin) は悉く國

外追放に處せられた。ドストイフスキー (Dostoi-

evski) は鑛山勞役に宣告せられ——*damnatus ad m-*  
*etalla*)——彼の盛年を彼の所謂「死人の家」で費消  
した。其他プレンシエフ (Pleschev) ヨサノフ (Pis-  
arev) マキシムゴルキー (Maxim Gorki) は何れも  
獄に投ぜらるゝ身となつた。而して仔細に觀察す  
れば一つの例外だになく彼等は悉く警察に依つて  
追跡された敵視せる政府の下に貧窮と餓死の生活  
に運命づけられて居るのである。

斯の如く目覺ましき殉教者一團、此自由に對する  
苦闘の中に於てトルストイは實に榮譽ある地位を  
占有して居る。彼が獄に投ぜられなかつたのは事  
實である。彼は唯氣息奄々たる教會の破門。即ち  
今や既に精神的でなく又何等の權威でもない所謂  
宗教的權力の威嚇を蒙つたに過ぎなかつた。

然しながら此迫害の免除こそ實にトルストイの  
天才及び彼の怖るべき勢力に對する尤も顯著なる  
貢税であつた。如何となれば彼は恐れざる大膽豫  
言者的の情熱を以つて筆を取つた。暗澹たる政治  
的反動時代に於て彼はあらゆる罪科を摘發した。  
彼はロシア國民をして徴兵に應ずるを拒ましめ又

ine) 科學にメンデリエッフ (Mendelieff) 音樂に  
チャイコフスキ (Tchaikovsky) 哲學にソロヴ  
イオフ (Solovieff) を出した。而して就中彼國は  
我々に生々した美の啓示と人生の新らしき解釋と  
を齎した不滅なる大文豪の一團を産出した。

斯の如き偉大なる文學者の一人を論評する事が  
即ち本書の目的とする所である。トルストイは單  
にロシア作家中の尤も偉大なるものなるのみなら  
ず彼は又尤も典型的な尤も代表的な作家である。

シエークスピアが英國民の代表者でありダンテ  
及ギョーテが伊太利乃至獨乙民族の聲であるが如  
くトルストイは實にロシア國民約一億五千萬の命  
である。如何なる他のロシア作家よりも彼は我々  
をしてロシア魂及ロシア情緒をより早く理解せし  
むる事が出来る。彼は我々をしてロシア文學が世  
界に貢獻した特別の賜物を是認せしむる。

是はトルストイ流の天才の特性を探索すべき場  
所でもなく又吾人は此緒論に於て本書の結論を豫  
期せんと欲するものでもない。唯吾人の目的とす  
る所は彼の人格及びその作物に於てロシア精神の

典型たる或種の著しき特長に注意を呼び起せば十  
分なのである。

吾々をして驚嘆せしむるトルストイの第一の素  
質は彼の非凡なる獨創力——即ち彼が全然傳説乃至  
踏襲から自由であること——彼が如何なる教旨如何  
なる信仰と雖も縱し其がシエークスピア、聖書バイブル  
フランス革命或は理想的社會主義の信念であるに  
せよ單に其儘では決して是認し又は受け納れない  
と言ふ事である。此絶對的獨創の資質は殊にロシ  
ア的である。凡て西歐諸國の人は其ローマン加特  
力教たると伊太利文藝復興たると乃至はルイ十四  
世時代フランス王國の傳説たるとを問はず意識  
的に或は無意識的に各種族の智的精神的の遺産を  
形成する此等大いなる過去の傳説に影響せらるゝ  
所があるに相違ない。彼等の尤も革命的思想家と  
雖も尙ほ且つ此等の煩瑣なる影響より脱出する事  
が出来ない。ヴォルテールヴォルテールは何等の權威も傳説を  
も認めなかつた人でありながら古典劇の三法規た  
る時タイム所プレイス所作フエクションの統一に深く信ずる所があつた。  
かの帝王神權説を否認したダントンやロベスピエ



ルも尙ほ未だ希臘羅馬共和國に於ける靈感的政治思想乃至はブルターク中の諸英雄に信を措く事を止めなかつた。

斯の如き歴史的傳説に對する執着は全然ロシア人の關知せざる所である。此處には生命なき過去の壓迫と言ふものがない。ロシア帝國の穢れなき處女地は一千二百年の灰燼を以つて混淆せられてゐない。荒涼たるローマ、カンバグナの數平方哩にはロシア・チエルノツイオムの幾十萬平方哩に於けるよりも尙ほ多くの歴史を見出す事が出来る。ロシア人の心は今後正に來るべき未來に向けられ過去より現在に亘つてあつた事物には向けられてゐない。其れ故ソコには吾々がトルストイの如き典型的ロシア人に於て限り無く讚美する其勇敢其過去の論結を受諾し得ない素質及び其外觀上の生氣といふものがあるのである。

トルストイは彼の哲學中其無抵抗主義に於て尤も頑硬である。而も其が又ロシア人特有の主義である。ロシア民族は厄災に對する彼等の苦闘に於ていつしか東洋流の宿命論或は寧ろ基督教的忍從

を習得した。ロシア人は如何にして不可避の災禍に堪へるかを知つてをる。若し彼が如何にして生くべきかを知らざる場合には常に如何にして死すべきかを辨へてをる。彼は又如何にして運命に對するストイック的な勇敢な抵抗に反對すべきかを知つて居る。

トルストイの他の獨特な態度はあらゆる種類の英雄崇拜を否認すると云ふ事である。如何なる文人と雖もトルストイ程絶えず偉人の感化を否定した者はない。其の根本の點に於て彼は、其他の場合では甚だしく共通點を有して居つたカーライルと全然分離せざるを得なかつた。又彼位に頑健に民主的な作家としてはなかつた。併し斯の如き英雄崇拜の拒否、偶像破壞主義なるものは再び著しくロシア的である。所詮ロシア人は民主々義者乃至は社會主義者として生れ出たものである。かのミール(Mir)即ち村落組合は疑ふべくもなくロシアの制度である。幾十代幾百代の間多くの農夫は彼等の小なる社會主義者の共和國の住民であつた。ロシアに於ては個人は殆ど無勢力である。協



# ロシア文學に於けるトルストイの地位

井口 杜村 譯

廿世紀はロシア國民の世紀であらう。併しさうなる以前先づ獨乙の國境より支那の國境に至るまで氷に閉された白海の沿岸よりヒマラヤの亞熱帶的山脈に至るまで地球と人間の住み得べき土地の四分の一は三億の同一人種に依つて占有せらるゝてあらう——之れ即ち歷史上未だ曾て見ざる文明的人類の尤も怖るべき聚合である。既に此大帝國の兩極は西はバルチック海より東は太平洋（原文のまゝ）に至るまで我地球上最大最長の鐵道たる交通線路に依つて連結せられて居る。凡そスラヴ民族位悲惨な過去を有し而も赫々たる將來を運命づけられてゐるやうに思はれる人種とてはない。數世紀間ロシア國民は韃靼人に對して基督教國の城砦であつた。而して彼等は國內に於ける壓制政治

の犠牲となることに依つて漸くアジア外敵の虎口を逃れる事が出來た。彼等は週期的に峻酷なる凶獸の支配に服從した。彼等は常に無慈悲なる氣候の支配下に屈服せしめられた。而して斯の如き訓練は弱者を排棄し強者をして益々強者たらしめた。二千年後の今日遂に其強者が彼等の遺産相續に來りつゝあるのである。

かの鈍<sup>つゝ</sup>さ而も確かなるロシアの歩みは歷史上尤も印象深き現象の一つである。而して今日それが過去に向けられてゐる如く我々人類の視線が未來に向けらるゝ時機に到達すれば今日學生がローマ帝國の史詩を教へられてゐるやうにいつか彼はロシア民族膨脹の史詩を教へらるゝであらう。フランス王國の大歴史家たるサン・シモン（Saint-Si-

mon) は吾々に斯く告げてをる。二世紀以前ロシア帝國の建設者は憐れにもヴェルサイユ宮廷に迎へられんことを懇願しながら敢なく拒絶せられたと。ルイ十四世は半アジア的民族の野蠻なる酋長歡待を肯ぜなかつた。然るに今日は果して如何であらう。ルイ十四世の後繼者はビクター大帝の後嗣に其友誼を乞ひフランス農夫の貯蓄は幾億萬となくロシア農民國の開拓に使用されつゝあるではないか。ロシア政府は時に一時的の阻止に悩まざるゝ事があるかも知れない。併し何物もロシア國民の發展を止むる事が出来ない。成程彼等に落ち来る厄災は何れも其帝國内での出來事中巨大なる割合を占めて居るに相違ない。併し其災害が如何程我々の想像を刺激するとも何等ソコに永久の痕跡を止めず又かの巨人の發展を阻む事の出来ないのは吾々の一般に認むる所である。戦争と飢饉疾病と疾病——是にも不關毎年二百萬即ちスコットランド全人口の二分一の生靈がロシア帝國に加へられつゝある。毎年幾千方哩の廣大な土地が農業及工業の爲に開拓されて居る。千九百五年著者は北

から南へ東から西へ縱横にロシア全國を經廻つた。而して其の際彼國は到る處死活問題にもがいてゐる事を目撃した。凡ての政治的又は社會的組織は解散を以つて脅迫せられてゐるやうに思はれた。五年後著者は再び其恐るべき激變の跡を訪れた。然るに夫の巨人は既に其傷害から恢復してをつた。幾多の誹議すべき濫費の連續にも拘はらず彼は其帝國々庫を再充し商工業は興進し到る處豊富なる繁榮の吉兆を認め得るのであつた。

又ロシアの進歩は單に其政治經濟的の活動にのみ極限せられてはゐなかつた。道德的智的の進歩も亦大いに驚く可きものがあつた。五十年前に在つては國民の九割九分は未だ全く無智の狀態に沈淪し九割は農奴の境涯に生存してをつた。アレキサンダー二世の勅令は西歐民族が基督教及び革命の力に由り一千年の歲月を要して遂行した所を僅にペンの一動を以て成し遂げた。農奴解放後未だ六十年に充たざる今日ロシアは幾多の藝術幾多人間の精神的活動に於て重要な地位を占めつゝある。彼國は繪畫にヴェレスチャギン (Verestchagin)

ものの、それは決してニーチエの「超人」程徹底したものではなかつた。従つて彼の社會觀は決して極端な貴族主義ではなく或意味では寧ろ民主主義といふべきである。「ブランド」も「ビヤギント」も「ロズメルスホルム」も「人民の敵」も一面から見れば到底極端な個人主義の不可能を描いたものと見ねばならぬ。更に彼は「ボルクマン」に依つて社會と妥協したとさへいはれ、「小アイヨルフ」のアルマースの性格發展史は纏て彼自身の性格發展史だとさへいはれてゐるではないか。彼が實生活上社會に處する態度も性格としては著しく個人主義的な點はあるが、主義としてはそれ程明瞭に自覺的建設的具體的であつたといふ事は出来ぬ。然し乍らそれ丈彼の個人主義は抽象的で、アイデアリストック乃至ローマンテックである。彼が到底徹底的に其行く所まで行き得ずして懷疑的絶望的態度にさへ出て居るのは蓋し件の具體的積極的一面を缺如する結果に他ならない。彼の個人主義は氣分態度乃至理想としては比較的に強烈な徹底したものであるが具體案乃至實行的方面に於ては之

に伴ふ事が出来なかつた。換言すれば彼の要求及理想は現實化するに程餘の距離を有して居たために彼の中心主義たるオール・オア・ナツスイングも其思想に徹して居た程實行の可能性は薄弱であり、嘗ては蛇蝎視した妥協の精神も年と共に次第に實行上に於てひそかに撤回採用せねばならなかつたといふ矛盾に陥つたのも之がためである。かくはいふものの彼は遂に個人主義者である。自我尊重者である。ヒュネヤー曰く。

「汝自身の自我に忠實なれと沙翁はいつた。然し乍ら彼以來イブセン程悲劇的強度を以て之を主唱したものはない。」と更にマツクフオルは曰く「然しイブセンにとつては個體の獨立といふことは凡てである——こは結婚に於ても友誼に於ても亦同様である。」と。

之れを要するに彼の個人主義は其内容に於て著しく要求本位理想本位であつた。従つて破壊的方面が實行上の大部分でもあり、それだけまた現實に於いては失望落膽煩悶はあつたが、然かも尙理想的方面に於て樂天的であつた。「ノラの奇蹟やオスワルドの太陽や蘇生の日といふが如きは比し

く皆件の樂天的建設的理想方面を暗示したものに他ならぬ」とリーの云つてゐるのも即ち此點を指すのである。彼の個人主義は彼自身の内生活からしぼり出される叫聲であり彼自身の獨自な性格の表白であるだけ系統的ではなかつた。従て彼の主義は彼の人格と生活とから離れ得るものでない事は勿論である。換言すれば、彼の個人主義は到底生活態度として若しくは生に對する氣分乃至性格の表白としての個人主義である。強烈な生活の肯定、獨自の自我生活の追求、俗衆の愚蒙に煩はされざる高尚な精神的生活に對する憧憬、舊套に泥まらずして偏へに新らしい氣分と態度とで生さる向上的な努力生活に對する思慕、刹那だにゆるみのない嚴肅な緊張した自覺的生活の懊惱、何ものにも従へられず、小さくとも狭くとも確實堅固な自由

意志的積極的生活に對する要望、華々しき驚心駭目に價する様な深刻強烈な經驗に渴する貪婪心、これら各種多様な要求理想欲望憧憬等の中心となり根柢調となつて到る所に彼の云爲行動乃至人格に影響を與へたものは即ち自我尊重の念から自づと發源する個人主義的氣分乃至態度である。一言にすれば彼は個人主義の主唱者ではなくて性格乃至態度の人としての個人主義者である。更に吾々の所謂全一的な然し乍ら急進的な破壊的な個人主義者である。我等はアズサッチに具象的に彼から與へらるる所は少い。然し乍ら彼から來る暗示の力と効果とは永遠に盡さない。斯かる點に於て我ヘンリック・イブセンは嚴密な意味に於て問題の提出者であつた。先驅者であつた。偉大なる個人主義者であつた。



るのではなく、現在の腐敗した社會を救ひ、之を改善せんが爲めに先づ之を罵り之を破壊しようとしたのに過ぎなかつた。肯定の爲の否定、建設の爲の破壊、少くとも肯定し建設せんことを要求しての否定破壊であつた。此意味に於て彼は最忠實な社會改良家でもあり「人民の味方」でもあつた。嚴密な意味でのアルトルイズムの人でもあつた。

只彼が衷心炎々として燃ゆるが如き對社會的赤誠を有し乍ら、尙且エゴイストと見ゆる所以のものは何所迄も彼が「各自我、各個人の存在價值の保持増進」を唯一直線ユニタリヤスの目的とし、先づ第一に自己を思ひ所謂功利を度外視し人格價值を物質價值の上に置かうとしたからである。彼は此見地から近親を犠牲にして迄も、自己の第一義欲の充足に努力した。母を捨て妻子を見殺しにして迄も自己に徹しようとしたブランドの天職はオールオアナツスイングの主義を標榜して荒廢萎靡した社會に一脈潑刺たる清新の生氣を與ふるにあつた。可憐の女性を悶絶せしめて一家を領奪したリベツカの目的とする所は各個人の生存の意義と價值とを高め

んとする企圖を實現せしむる爲めにロズマーを奮起せしむるにあつた。自己存在の意義及價值を確保せんが爲めには有爲なヤンガーゼネレーションの進路を阻害するをも顧なかつたソルネス衷心の志望は、一般人間に幸福安樂な住家を建てて與ふるにあつた。戀人を賣り妻を欺き子を贅にせんとしたボルクマン畢生の事業は天下の富を増進するにあつた。兄に背き郷黨に背いて正義の獅子吼をしたストツクマンは社會の根本的病毒を除かんとするのが主眼であつた。

イブセンの眼中には斯くも常に社會があつた。而かも其根柢となる第一義的要素は自我の尊重であつた。事若し一度此一義に抵觸すれば彼は只其保存増進の爲めに驀進し奮闘した。そして茲には絶對的意義及態度以外何ものもなかつた。彼が此境地にあつて最厭惡したのは妥協であつた。オールに非ずんばナツスイングあるといふ彼の徹底的態度は正しく件の妥協を厭ふ精神の表白に他ならない。彼は其程自覺的、自重的、自敬的、即嚴密な意味での個人主義的であつた。彼は如何なる所

に於ても自己尊重に伴ふ一種のプライドを失はなかつた。自己の主張や意志を曲げ、自己の品位を傷けて迄他人の歡心を買ひ、之と調和妥協し、俗と共に歩調を整へるには彼は餘りに自己意識が強く餘りにプライドに富んで居た。彼は自己主張の阻害される所に於ては萬人を敵として戦ふ事も辭しなかつた。彼は自ら「人民の敵」を以て任じた事さへあつた。嘗て彼は「社會の柱」と仰れたビョルンソンを嘲笑輕視して次の様に云つた。

「我等は自説を擴める爲めに働けとの貴言は勿論正しい。然し乍ら知的前衛戰は決して身邊に多數を集むる事は出来ぬ。多數は恐らく十年間に嘗てドクトルストックマンが公會で保持した立脚地を占めてあらう。然し十年間にドクトルは停滯不動ではない。少くとも私自らでも不斷の進歩を自覺する。之迄創造して居た地點に今は可成の群集が立つて居るが私は最早其處には居ないと。」

自己のみ高しとする時に於て他人は眼中にないと同じく、我は最尊しと思ふ時にも亦他人はない。ノラは「先づ人とならねばならぬ」といふ自覺の下に夫も子も在來の一切道德をも捨て、行くべき所に慕進したてはないか。ノラは夫婦乃至親

子の愛情をさへ其自我尊重の念のために犠牲にする事を悔いなかつたてはないか。

## 五

以上論ずる所に從へばイブセンの個人主義はニチエの如く根本的積極的なものではない、彼は出來得べくんば衆個人即全社會を自己と同様に尊重し向上せしめんとした。從て初頭より只一人の天才者偉人を生まんがために萬人を其犠牲とするものではない。(たとひ「ブランド」中に其思想が現はれて居るとはいへ。)只若し自己が天才なり偉人なりと自覺し其完成せんとするに際し、社會乃至衆個人が其目的到達上妨害となるが如き場合に於ては之を犠牲にするも辭しないといふ如きもので、社會乃至衆個人の獨立的存在の價値を認め其を包括し得る底のいはば「多元的個人主義」とでもいふべき社會を理想としたのである。彼は自己に對する程社會に對して個人主義的態度を徹底せしめたものでない。勿論彼はニユーアダムの出現を憧憬し少數者は常に正當也」と絶叫しては居る

めの藝術とかいふ事は到底彼の堪へ得る所ではない。彼は藝に遊ぶよりも先づ自己を批判し、自己の生を解決せねばならなかつた。彼の藝術が即ち彼の生活であり、藝術家としての彼が即ち人としての彼であつた。イブセンは實に偉大な藝術家の人であつた。彼の作物が人を威壓する權威を有するのは蓋し之が爲に他ならぬ。(尙彼が藝術家としての自己と人としての自己との間の扞格に對する煩悶は「蘇生の日」等を中心として論じて見たいが今は省くこととする。)

ゴッスは成功者としてイブセンに優るものはユゴー一人のみだといつて居るが彼の晩年の俗的武功を以て輕々しく幸運兒となす事が出来まい。勿論彼は天才ではあつた。然し彼は一面に於て異常なる努力奮闘の人であつた事を忘れてはならぬ。彼の前半生は寧ろ涙と汗と嗟嘆とにたゞれ切つた悲惨闇黒なライフであつた。彼が示すに足るべき學歷なくしてよく不朽の文豪たり得た原因の一半は、其の不撓の向上的精神——己を永久に自己の手で造つて行く精神に歸せねばならぬ。「瓶の中の衰弱した蠍が果實を穫て再び奮起する」態度こそ實に彼の生涯であつた。彼には奮闘し活動する事を他にしてライフはなかつた。そして所謂奮闘活

動といふ事は彼の場合には内的精神的意味に於て優つて居た。彼がブランドスに與へた手紙に「眞に必要なものは人間の精神の革命である。」といつてゐるのは此邊の消息を語るものではないか。彼に於ては單に樂天とか厭世とかと抽象的形式的に人生を決定する事は出来なかつた。彼が不斷に懷疑し乍ら怯疑に止り徹する事も出来なければ又不斷に肯定し解決し乍ら尙安立にも徹し得ず、迷つては悟り、悟つては又迷つて永久に懊惱して居た所に彼の藝術家としての、將た人としての眞價がある。即ち彼のリアルライフはオールでもナツスイングでもなくワンからマキシマムの間を永遠に徂徠するに他ならなかつた。彼にとつては悲しみも喜びも懷疑も解決も凡て單なるベッドの上の瞑想ではなくて自我の衷底、生命の核心を震撼する所の全我的活動であつた。彼が如何許自我の全的、獨立的、自由的、積極的、奮闘的、男性的、向上的活動を翹望してあつたかは「ブランド」乃至「人民の敵」を繙くものの直ちに注目する所であらう。不孝不義と罵らるるエルハルトすら強い信念



と不屈の意志とを以て自己の是とする所を敢行してゐるではないか。「少數者は常に正者也。」といふストツクマンの言は『自己は正者也。』と還元してのみ始めて其眞意義を發揮すると見ねばならぬ、そしてストツクマンは勿論イブセン自身でなければならぬ。茲に彼の自我尊重者即ち吾々の意味する如き個人主義者としての面影が極めて明瞭である。

イブセンは勿論社會を以て全然無價值なものと見たのでない。否大に其積極的價値を認めて居た。彼は一面強い個人主義者であつたと共に、他面ソーシヤマン、若くはマン・オブ・ワールドであつた。件の矛盾は彼は「人民の敵」であり乍ら尙非常な蓄財家であつたといふ事實に依て容易に立證し得る所である。彼が勳章を下げるのを喜んで第七十回の誕生祭や諸座席に於ける動作などに徴しても彼が社會の人たる一面を窺知する事が出来るではないか。従て彼は社會を知らずして社會を離れたのではない。否餘りに之を知り過ぎたからこそ其醜惡を忍び切れないうて、又其害毒から避けんが爲めに止むなく之を離れ去り、之に反抗し、之を破壊しようとするに至つたのである。自我の尊重乃至自我價値の増進、之がイブセンにとつては唯一最高にして且一切である。彼は之を進んで取るか然らずば退いて守らねばならなかつた。従てたと如何許少くとも此一義に災を蒙らせ累を及ぼすものは凡て彼

の敵である。そして親も兄弟も朋友も時あつては此意味に於ける敵であつた。自重の人、自省の人、自力の人たる彼にとつては出來得る丈獨思獨行する事が其中心目的を貫徹する上に最も好都合と見えたのである。彼の鋭い眼中には勿論骨肉も朋友も知人も社會もあつた。然し乍ら其等は價値に於て到底自我と匹敵すべきものではない。自我のみ唯一にして最高の價値である。然かも彼は斷じて我利滔々のエゴイストではない。彼の作物の一部は社會劇とさへいはれて居る。彼は常に社會を思ひ社會を改善しようと憂慮して居た。

然し彼の理想とした社會は現在のものと非常に相違して完全な獨立自由の個人の自覺的團結に依つてのみ組成し得る底の社會であつた。従て彼の現在社會に對する態度は自己をそれに適應調和せしめるのではなくて、其構成要素たる個人の價値を高め却て社會を自己に従はしめ様とするにあつた。即ち社會を一個のリアリテ<sup>インデペンデント</sup>・アズ・サツチとして對するのではなく其個々の個性に對するものであつた。従て彼は自己に對してハードマンであつた如く他人に對しても亦ハードマンであつた。彼はカントと共に一面オールデストロイヤーであつた。然し乍ら彼の目的は破壊者に徹し止るにあつた。



之を保存實驗完成しようといふ生の第一義欲の發現であつた。ジュリアンは云ふ。「して汝自らは何をなしたか、」聲「なさねばならぬことを。」ジュリアン「何故なさねばならぬか。」聲「我は我自らであつた。」と斯く彼は「皇帝とガリラヤ人」の中に語つてゐるではないか。更に四十三歳の折の書簡にも「自己に處するに正直信實な事が肝要である。……之を爲し彼を行ふと決心するのはなく我は我自らであるから爲さねばならぬ事をするのだ。」ともいつて居る。彼にとつて自己に忠なる事を他にして道德はない。従て一切の道德的評價は只自己に處する態度の正不正、乃至信不信に依てのみ妥當性を有するのである。自我を敬し、自我に忠實に、自我の眞價を出来る丈完全に實現する事を他にして人生の意義はないのである。文學といひ藝術といふも、要するに此一義に交渉し關聯せしめてのみ意義も價值もあるのである。彼はピョルンソンの五十年誕生祭に際して語つた。

「自我を實現せんために人生を送る——自分にとつては、之が人間の能ふ最高境地の様である。」と

從て彼にとつての最大罪惡は自欺であり、自己に對する不忠實であることはいふ迄もない。彼は此の罪惡から離れ、此罪惡を排せんがために終始回顧反省内察の痛苦を嘗めねばならなかつた。斯くして彼は遂に社交を捨て友を離れ獨を愼む事を專念せねばならなかつた。彼が孤獨生活に偏した事を以て直ちに所謂利己主義者であると斷ずるが如きは輕率も亦甚しい。ブランデス曰く

「だからイブセンは自身祖國の子、全體の部分、團體の頭首、社會の一員とは考へて居ない。彼は只彼自身天與の個性であると考へ且彼が眞に信じ眞に尊敬した一事は人格である。此の自然的一致共同からの脱離に於て此の精神的自我の脱離に於て其所に彼が成長した所の、スカンジナビアンヒストリーの時代を歴々と喚起する所の或物がある。此點に於てキエルケガールの影響が最も明瞭である。……イブセンの如く凡そ解放された個人の權利と力を信ずる人、若しくは彼が其の當初に於てなした如く彼を圍繞する世界と戦ふ事を自ら感ずる人は何人と雖も群集に就いて好意的見解を懷く事が出来ない。人間輕侮の念が彼の若い時代に於て發達した事は明らかである。」

四

自我尊重の人は自意識の強烈な人である。自意識の強烈な人は自我と他我との間に横はる區劃を最明瞭に認識し得る人である。従て輕々しく一視同仁をいふ事が出来ぬ。我尊重の人にとつては全我的活動に非ずんば可能的最大の沈黙孤獨のみが唯一の徳である。全に非ずんば無である。従て容易く市井俗輩と談笑嬉戯して矛盾も撞着も感ぜぬ如き無神經鈍感にはなり得ない。イブセンは此間の消息をローマからビオルンソンに送つた書中に漏して居る。

「自我を全く匿す處なく打明けん事を望む人々と親密に交際する事の出来ないのは私の缺點であると信じて居る。私は「ブレテンダー」のスカードと同様な感情を持て居る。赤裸々にされるのは堪へ得る處ではない。個人的交際に於ても心内の深き深みに横はり眞の自己を構成するものについて不精確な表白をなし得るのみである事を意識する。だから私は寧ろ自我を構成するものを閉鎖しようとする。これ即ち時には互に離れて相見る所以である」と。

自我尊重の人は他我中に反映する自己存在の價

值的意義に對する注意は非常に鋭いものである。

イブセンが「盲目的に稱賛されるより理解される事が一層重要だ。」といつてゐるのも此理に基くに他ならない。即ち彼に必要な客我即ち社會は自我實現の場所としてでなければ自我實現の正しき認識者としてのみ始めて計算に入るべきものである。

自我を他に於て少くとも自我と交渉なくして社會はナツスイングである。彼は孤軍奮闘的なブランドスを勵す語にいつたてはないか。「威儀堂々たれ。威儀は斯る攻撃に備ふる唯一の武器である。眞直に前面を見よ！」と。眞直に前面を見よ！何といふイブセン的な個人主義的態度の人の語であらうよ。

自我尊重の人は其當然の結果として眞摯嚴肅な人でなければならぬ。斷じて遊びの態度の這入るべき餘地があり得ない。一舉手一投足も忽諸に附し得ない緊張した態度こそ自我尊重の人の眞實の生き方である。イブセンは實に生涯を通じて終始一貫眞剣であつた。全我的であつた。不斷に懷疑し分裂し乍ら尙且其の底潮となれるものは強深大な肯定的要求乃至統一の傾向であつた。彼の藝術は生の爲め従て自己の爲めの藝術であつた。否自己實現の全我的活動としての藝術であつた。遊びのための藝術とか藝術のた

た。換言すれば彼は充實した價值生活、獨自の自我生活を生きながらために偉大なる其個性を提げて單身社會と戰つた「人民の敵」であつた。革命者先驅者であつた。彼をイブセンの人としての個人主義者とするは未だ當を得たものではない、彼は彼自身個人主義者であつた。其個性、其生活、其主張の凡てを一貫する基調は全一的急進的な個人主義的態度の緊張であつた。斯かる意味に於て彼は個人主義者としての旗幟が最鮮明なものといふ事が出来る。

### 三

イブセンは少年時代から孤獨の人であつた。彼が獨りを樂む事を好んだのは「ブランド」及小妹ヘド・キツヒの言に徴して知る事が出来る。「彼は小兒の時から孤獨な非社會的な人で、他の遊戲に交るといふ様な事もなく、寒くてうす暗い臺所傍の小室に閉籠り終日讀書するのが習慣でした。そして私共凡てに對して不愉快な同情のない人で、それから私共は出来る丈彼を引張出さうとして色々

勉強の邪魔をしました。たとへば石や雪玉などを彼の室の壁や戸に打つけると、彼はたまり兼ねて遂に出て来るが、然し格別怒りもせず、又遊びもせずに私共が遠く隔たるのを見て再び又直ぐ自分の室に閉籠るのが習てした」とヘド・キツヒは語つて居る。彼の孤獨性を證する他の事實は二十七年間故山を捨て、放浪生活を敢てした事、乃至彼の朋友父母兄弟との交情である。此評家の言に従へば彼の其親兄弟や友人に對する態度が餘りに極端に利己的であつたと難ぜられる。然しそれは果していふが如く所謂利己一片の動機から出たものだらうか。如何にも彼は其父を顧なかつた事が三十年に及び、其最愛の妹をも他人の如く遇し、父が死んだ時さへ其異母兄に手紙を送つて他年兩親に盡して呉れた事を感謝し且從來家に手紙を出さなかつたのは奮闘生活のために書く暇がなかつたからだと申譯をして居る程であるし、妹に對しても「こちらからは手紙をやれないがまあからはドシ／＼送つて呉れ」といつた事があつたり或は恩誼ある友人を他人の如くに遇した事も少くはな



つた。そして「朋友は厄介なものだ」ともいつて居た。彼の友人中最仲のよかつたのはブランドスでビョルンソンは數年間仲達の間であつた、子供自分には教師のヨハン、ハウゼンと小妹ヘドウィヒとしか相手はなかつた。藥師屋に徒弟となつて居た時には婦人達から「怪物の様だから好かない」といはれて居た。

更にイブセンは寡言沈黙の人で他人に遇ふ事すら嫌つて居た。殊にミュニヒやドレスデンに居る時はそれが甚しかつた。有名な「イブセンの窓」なども此一證である。で面會人のある場合には大抵妻君に辭らせるのであるが若しどうしても聞入れぬ場合には彼自身玄關に出て來て「ビツテ、ウムアルバイツルエ」といつた。ミュニヒ時代に或一貴族が自分の戀愛問題について彼に助言を求めに來た時、イブセンは唇を嚙み、例の眼鏡の下で大きな目を輝かし乍ら、低いけれども激しい聲で「歸つて寢ろ！」と怒鳴つたといふ事である。彼は又招待される事が嫌ひであつたが然し子供や妻君には招待に應ずる事を奨め、そして彼等が招

待から歸ると其會の模様などを詳細に聞く事が好きであつた。彼は家庭生活に對する興味が極めて薄く其作をする時などは自分の室内に妻君以外何人も入れる事を許さなかつた。ゴッスは彼を評して「彼の心は垣を圍した市」だといつて居た。彼は實に孤獨の人であつた。

「彼は自己の眞のライフを其作中に見出した……彼は家庭にあつて常にホームレスチスを感じるに慣れた。今や彼が富者となつた時すら家屋敷畑や土地を持たうと望んでは居ない。彼は人民と別離してどんな會とも又黨派とも關係する仕事を持たず、新聞雜誌にすらさうであつた。實に彼は國の内外を問はず孤獨の人である。」

とブランドスの言つてゐるのは此點を指してゐるのである。

斯かる點から見れば彼は一見純粹の利己主義者ともいはれよう。然し乍ら彼は決して所謂利己主義者ではなかつた。彼が親兄弟や友人に薄情であつたのには相當の理由があつた。よし之なくとも彼は更に一層大きな原因を有して居た。それは彼が絶大なる天職の自覺及その實現であつた。彼の中心思想は實に自我の絶對的價值を認識し且つ



つた。然し乍ら彼は自己の思想乃至生活の内容及形式に對して自ら「個人主義」と銘打つたのである。い事はいふ迄もない。

今我々はイブセンの個人主義となるに至つた原因を彼の個性及境遇の二面から見て行かうと思ふ。

## 二

彼が一八二八年より一九〇六年迄の八十年間の生涯、殊に「ブランド」を出版した六六年後の半生は世界文明史上にも極めて特色ある十九世紀の後半全部に亘つて居る、といふ丈でイブセンの時代の大勢が那邊にあるかを想像する事が出来る。

トルストイ、ワグナー、ニーチエ等の思想が偉大なる勢力を有して居たのも此時代である。唯物思想、社會主義、懷疑乃至虛無思想、自然主義的思想、個人主義的思想の流行したのも此時代である。所謂世紀末のあらゆる極端な思想傾向が各方面に横溢したのも此時代である。此時代に於て彼の如き性格を有し彼の如きライフを経て來たイブ

センが革命的個人主義的態度乃至思想を持するに至つたのは當然である。然し乍ら彼をして個人主義者たらしめた動機は寧ろ彼の母國の状態であるといはねばならぬ。

從來諸威の社會は自由が道德的秩序の基礎であり、個人の善良な本能が政府でも警察でもあつた。此等の特性は其種族性から來たばかりでなく却て其主因は環境乃至生活法にあるといはねばならぬ。彼等は沈黙慈慮であつた。彼等の生活は「自顧」の生活であり高貴を愛し偉大を愛した。然して更に瞑想的想像的な國民であり従て迷信も深かつた。そして其天候や風土は一層彼等の獨立、自由、自顧の念を助長した。然るに十九世紀半頃に獨乙の善良でない分子が混入して中等社會の腐敗墮落の原因となり遂に上流をも侵すに至つた。自由獨立や高貴の精神、道德的本能、剛毅な意志が漸次廢れ行いて不誠實な表面的な功利本位な附加雷同的な卑劣な、一言にすれば俗物ヒョウモノが次第に増加して其勢強く到底救ひ難き危機に陥るに至つた。

件の滔々たる惡風潮に對して正義の戰を宣したのがイブセンである。彼の母國に對する本務は先づ新理想の建設よりも舊套の打破であつた。更に先づ現實の曝露であつた。沈滯腐敗萎靡壞爛した醜惡な現實社會及個人生活の暗黒面を最峻烈に徹底的に一般公衆の目前に而かも赫々たる白日の下

に曝露するのが彼の第一任務であつた。そして彼が非難痛罵の當面の對象は獨逸の分子の最多量な中等社會乃至所謂紳士紳商といはれる様な社會の代表的方面であつた。彼は形式的な、お儀式的な、只形だけ整つて居る中庸といふものこそ眞實の意味に於ける——常人が美德とさへ見る——罪惡の源泉であると見た。冷靜な消極的な義務とか服従とかいふものを仇敵の様に罵つたのは之がためであつた。斯くして彼はいよ／＼挑戰的態度となり妥協を呪ひ廻避を冷笑し空名に囚はれるものを非難し妻子によつて自己の安立を得んとするものを卑下し戰を恐るものを指彈した。此の邊の消息は「ブランド」や「人民の敵」や「建築師」や「ヘダ・ガブラー」や「ノラ」などを讀むものゝ直ちに首肯し得る事實である。殊にノラの家出はヘルマの俗物根性の所謂中庸本位の在來道德を嫌惡した好適例である。イブセンは斯の如く先づ舊套打破の名の下に盲闘せねばならなかつた。然し乍ら次第に積極的方面に進んで來た。エリスは曰ふ。

イブセンは只一人暗中に直立した。彼が外的自然の方面には無

關心に人生問題に没頭したのはビュルンソンが生國の夏を代表するのに對して諸威の峻烈な冬の夜を表すものといふべきである。然し彼の勢力、思想、本能は暗黙裡に發展して漸次人心の奥底に徹し遂に世に識認せらるるに至つた。」と。

破壊に次いで表れたものは建設であつた。然しイブセンは遂に要求の人、懷疑の人、破壊の人であつた。彼の建設的方面は只暗示的に出てゐるのみで具體的には現はれて居ない。然し乍ら其根柢はハイヤー、ペターライフに對する向上及要求であつた事は明瞭である。健全強固な自由にして高尚な意志の上に理想の第三王國を建設しようとした事は明瞭である。これ彼の作風全體を通じて一味の樂天的思想のただよつて居る所以である。

彼の天性を解發して個人主義者とせしめた外因は正しく彼の悲慘な生活と故國の狀態乃至當時の時代思潮であつた。然して彼の個人主義は第一に破壊的急進的に出て我々の所謂全一的建設的方面に十分到達する事の出來なかつたのは彼の性格乃至彼の時代によつて限定される當然な事であつた。彼は先づ態度の人としての個人主義者であつ

い宗教の爲めに少からず妨害せられてゐる。けれども吾々は憂ふるに足らないのである。吾々は水先案内者である。開拓者である。鶏口となるも牛後となる勿れ。寧ろ吾々は鶏口とならんことを欲するものである。

舊教、佛教、寺院、教義、これ皆中世紀の遺物である。吾々は今や何人も試みなかつた新しい生活に向つて進んで行きつゝある。吾々は冒険者である。吾々に對する一切の迫害も誤解も吾々は喜んでこれを迎へんと覺悟してゐる。ポーロが外國傳道を初めた時も、ザヴィエーが東洋傳道を始めた時も、新島先生が日本傳道を始めた時も、そこには希望の喜びがあつたと共に、艱難患苦と疑惑もあつたのであらう。けれども彼等には止むに止まない冒險的熱誠があつた。

廿世紀の劈頭に生を享けたる吾々も亦た熱誠と冒險的精神とを以つて努力するならば、先行者の大決心を理解することが出来るのであらう。アブラハムの心持も、ポーロの精神も、ザヴィエーの勇猛も、新島先生の希望の光りも、悉くみな吾々自らの心の寶となり力となるのであらう。吾々の背後には、吾々を前へ！ 前へ！ と推し進めゆく人々の心靈雲霞のやうに群り圍んで居る。喜び勇め！ 吾々には大なる力がある。勝利の冠冕は既に吾々を待つて居る。（講演筆記）



## 個人主義者としてのイブセン

稻 毛 詛 風

ヘンリック・イブセンをして一躍文壇の明星た

らしめたものは「ブランド」である。そして彼の哲學、特に個人主義的思想を最徹底的に、且最も高い調子と鮮かな色彩とで表現したのも亦「ブランド」一巻である。然して個人主義者としてのイブセンの根本特色乃至獨自の生活態度は、左に掲げた「ブランド」第一幕の結末に於て牧師ブランドの言である。

『ライト・ハーテッドとフエント・ハーテッドとロング・ハーテッドの三重の同盟と私は戦はねばならぬ。私は自分の使命を知つて居る。即ち此三つを倒す事に依て「世界苦」が癒される

のだ。そしてそれが私の使命だ。若し此の時代が件々三者を先づ墓中に埋没し得るならば世界の疫病は除かれるのだ。我魂よ、武装せよ！ 汝の劍を抜け！ 天嗣達に對して戦はんが爲めに！』と。

然して斯くの如きブランドの挑戰的態度こそ正しくイブセンの對社會的態度であつた。即ち彼の態度は凡て自覺的積極的白熱的一言にすれば徹底的であつた。茲に社會革命家としての彼の眞面目がある。即ち彼は思想内容に於ても、態度に於ても等しく個人主義の旗幟の下に、腐敗し切つた生國乃至墮落し切つた母國俗衆に對して戰を宣し、否その長い全生涯を戦ひ續けたものといはねばならぬ。此意味に於て彼は正しく「人民の敵」であ



を自覺しなければならぬ。そしてそこに大なる努力がなければならぬ。今日實業界に於ける成功者は少なくない。然し彼等は決して安閑として居て、あれだけの成功をしたのではない。驚くべき努力と勤勉とがその奥に秘んで居るのである。靈界に寶を積むのも同じことである。努力なくしてその結果を得ることは出来ない。

概して日本人には未來の觀念が薄すい。日本人の一つの誇りは宵越しの金を遣はないと云ふことであつた。成る程、朝に道を聽いて夕に死すとも可なりと云ふことには眞理がある。然し同時にまた、吾々の生命は永遠に續くものであることを考ふるならば人生の見方が餘程變つて來なければならぬ。日本には五十年後のことを考へ得るものはない。政治家もさうである。教育家もさうである。實業家も亦さうである。

イブセンを英國に紹介した文壇の新人アーチャー氏は近頃倫敦の或る新聞紙上に、廿一世紀の初めの日に印度の總督が議會に於いて、デョールヂ九世の勅語を讀むと云ふことを書いて居る。その勅語は、英國が印度を治めたのは、印度を占領せんが爲めではなかつた、印度をして獨立せしめんが爲めであつた。而して今や印度は獨立し得る力を得た。故に英帝は今茲に印度の獨立を宣すと云つた様なのであつた、そのことが空中電報で報じられると書いてある。

また小説家ウエルスは英國のある雜誌に『千九百七十年』と云ふ小説を書いて居る。五十餘年後のことを想像したものである。アーチャーにしてもウエルスにしても、彼等は決して現在で満足しないのである。彼等の考へは常に未來の中に跳び込むのである。前へ、先へ、上へ、と云ふ熱誠は彼等の

中に燃えて居るのである。然るに日本人にはこれが足りない。

## 五

それは何故であらう。蓋し今日の日本の文藝家には冒險的な態度がないからである。宗教的信念に缺けて居るからである。そしてその爲めに現實に囚はれて居るからである。何と云ふ先見の明のない、意氣地のない、前進の喜びのない日本人であらう。彼等には先人未蹤の地に進みゆく愉快が解らないのである。開拓者の前途は茫々として際限がなく、その途は困難をもつて充されて居るかも知れない。従つて寂寞は彼等の心境を襲ふかも知れない。けれども幸ひに印度の月桂詩人タゴールの詩を讀め。

『若し誰も爾の召命に應ぜずむば、たゞ獨り、たゞ獨り爾の路を進め。若し人皆爾を畏れて爾と語ることを欲せずば、おゝ爾不幸なるものよ、爾自身に對して爾の悲みを訴へよ。若し荒野を旅して人皆爾を棄てゝ爾に叛かば、彼等を念とせずして、荆棘を踏むて爾の足を爾の血に浴せしめよ。而して全く翻然として勇邁せよ。若し暴風の夕、爾のために燈光を捧ぐるものなく、人皆爾のために戸を閉さば、失神する勿れ。寂しき愛國者よ、その時は爾の胸より一本の肋骨を取出して之に點火せよ。而してその光に従へ、その光に従へ。』

この印度詩人は即ち家人と親戚とより絶交せられ天涯の孤客となれる青年愛國者を慰むるものである。

今や日本に於いては、古い宗教がその墮落の極に達して居るので、新しい宗教運動すらも、その古

基督教を信ずるが故に父母、兄弟、親類から誤解せられ、疎遠せられ、迫害せられる。それは悲しいことである。けれども亦吾々にとつてはそれ故に面白いのである。世間から迫害せられ、基督教界からは異端視せられる、それ故に甲斐があるのである。平々凡々な生活から跳出して生命がけの生活に入つたのである。何たる光榮であらう。非基督教國に生れて、基督の旗幟のもとに馳せ參ずる心持はシヤクトンの死を決して南極に向ふと何等相異つたところがあらうか。吾々の先祖は基督教的生活の經驗をもつて居ない、吾々は今、この先人未蹤の地に進んで居るのである。彼等には解らない新しい生活に出發し邁進したのである。

例へば吾々の親類縁者は吾々に向つて詰問するのである。『そんなことをして何の得になるか。その爲めにお前の給料が殖へるか、その爲めにお前の富は増すのか、その爲めにお前は肩書を得るか。』彼等は唯物質的見解の下にのみ生きて居る。然し吾々には別の世界がある。

吾々は今からして宗教運動をしても、恐らくはそれ等の何者をも得ないであらう。けれども吾々は尙確信する、これによつて吾々は子孫に健康を遺すことが出來ると。明晰なる頭腦と、鋭敏なる良心と、至醇なる感情と、それ等は皆、吾々の子孫に傳へられる寶であらうと。我々が今からして自分の心靈を養つて居ると云ふことは大なる事業でなければならぬ。

嘗て亞米利加に於いて一狂人の手記になる遺言狀だと稱するものが公開された。それは後に至つて、或る辯護士が書いたものであると云ふことが判明したけれど、兎に角、餘程注目すべきものである。それにはかういふ意味のことを云つて居る。

『自分は今其世を去る。自分には何一つとして子孫に残すものはない。自分の遺し得るものは唯やましからざる良心と、美はしい感情と、強い意志とである。そして、恩恵ふかき太陽の光線と新鮮なる空氣と、水と、健康を保つ運動と、これが即ち自分の遺産の全部である。』

何と云ふ意味の深い遺言狀であらう。吾々が基督教を信ずるのは常に煩悶を醫さんばかりではない。吾々の子孫を通じて大生命の力を顯はさんが爲めである。偉大なる人格を出さんが爲めである。吾々にして、もし、この宗教的精神と修養とによつて、美はしい家庭を作るならば、吾々の子孫は正にアブラハムの子孫の如くに榮えるのであらう。

百數十年の間を経たる今日に於いて、ジョナザン・エドワーズの數多き子孫に一人として屑がない。この一人の心靈が堅實にして醇朴であつた爲めに、彼の子孫は見えざる恩恵を蒙つて居るのである。獨逸に放縱な一人の女賭博師があつた。その女の子孫は凡てみな墮落せる不頼漢ばかりである。これ果して何を教ふるのであるか。

吾々はたゞ個人のために生きて居るのではない。人類の連鎖として生きて居るのである。子孫を生み出すと云ふことは人生に於ける大なる目的である。哲學も、科學も、文藝も、宗教も、人生の永續と云ふ立場から見れば、實に大なる事業である。

#### 四

故に吾々が今この宗教生活に入つて居ると云ふことは、人類の永遠の目的のためであると云ふこと



一體吾々はみな先人未蹤の地を踏んで行くのである。吾々が呱呱の聲を揚げて此の世に來つた時はまだ知らない世界に第一步を踏み出したのであつた。そして自分の少しも知らなかつた人を父とよび、母と呼ぶのである。それから學校に行く、その學校がどんなものであるかを知らないで行くのである。中學に入るのも、官立學校に入るのも、私學に入るのも、學校を出て職業を撰ぶのも、この先はどうなるかなどと云ふことを知らないのである。凡てみな冒険である。病氣になつて醫師の診察を受けるのにも、その醫師に任してしまつて自分の生命が、その醫師のためにどんなことになるかと云ふことも解らない。一切は冒険である。婦人が結婚する。結婚は一種の冒険である。その夫や、舅や、姑や、親類のどんな人々であるかを知らないのである。ことに婦人は結婚すると、今迄の友達との交情が薄くなつて、良人の方の友人と交らねばならない、全く俄かに別の世界に入つて行くのである。自分の交際社界や、血をもつて繋がれた父母兄弟から離れて、自分と何等の關係のなかつた別の世界に入るのである。これが冒険でなくて何であらう。結婚は喜ばしいことである、けれどまた或る意味に於いては悲しいことである。どうしてこれを決心するか、そこに非常な信仰を要する。富籤をひく様なものだと言はねばならぬ。電車に乗るにも、汽車に乗るにも、そこに危険がないとどうして云はれやう。何時衝突するかも知れない、何時鐵橋が墮ちるかも知れない。乗車は即ち冒険である。税金を拂ふ、この税金はどんなに悪用されるかも知れない、それでも信じて拂ふのである。そこにも冒険がある。吾々が夜間睡眠中に何時火事や地震が起るかも知れないのである。富士山が今一度どんな大きな爆發をして東京の全市が灰燼の中に埋るかも知れないのである。それでも吾々は安心して熟睡するのであ

る。實に大膽不敵と云はねばならぬ。思うて玆に至れば一切のことは冒險である。吾々の生活は信仰がなくては一日も活きられないのである。寔に吾々は自分でも知らないで居る信仰の勇士である。みんな無意識に信仰生活を送つて居るのである。それが意識的にやる様になれば實に偉大なる事をなすに至るのである。コロ、ホルムを嗅いだが爲めに生命を失ふこともある。けれど人々はその危険を冒して手術をうけるのである。またやつて見やうとするのである。實に偉大なる事業である。神の力を與へられた人間であるからこそこんな大事業がなされるのである。神の支配する宇宙人生を前提としてのみかゝる大膽なる行爲が結論となるのである。

### 三

これから出立して考へるならば、宗教的信仰の眞髓が解る。人々が眞に宗教の眞髓に達し得ないのは、彼等が唯雜誌や、書物や、説教によつてのみ宗教を知らうとするからである。吾々の日常の生活が殆んど凡て暗中の飛躍である如く、宗教の生活にもその暗中飛躍が必要である。それをやつて見ると案外早くわかるかも知れないのである。

從來日本に於いては、各種の信仰生活が實驗されて來た。儒教だとか佛教だとか基督教だとかそのものはあつた。けれど彼等は未だ自由基督教の信仰をもつて生活した者は甚だ少ない。自由基督教徒と云つても、新しい科學と哲學とを攝取して日常生活に應用して行かうとし出したのは更に新しい經驗である。吾々は先人未蹤の地を踏んで居るのである。

けに、單身騎馬に跨つて、ウラルの連峰を横斷してシベリアの原を踏破した。その時の日本人の血はどんなにこの壯舉に躍つたことであつたらう。福島少佐騎馬旅行の歌と云ふ軍歌などが盛に行はれたものである。

冒険をやつた人でなければその冒険の興味を解さない。近頃の冒険と云へば先づ南北兩極の探險であらう。ところが北極の方はたゞ一面の氷の山と靄とばかりで、何も別に珍しいものがないと云ふ探險者の報告によつて、左程人々の注意を引かない。それに反して南極の方は益々人の好奇心をそゝつて居る。さきにスコット大佐の探險がありサア・アーテスト・シャックルトンの探險があつたが、今また復びサア・アーテストの再度の探險が準備されつゝある。彼は先づ地理上の研究を積んで、西半球のワデル灣より南極に上陸し、横斷して東半球のロッス海に出やうとして居る。目下彼は發動機と推進機とを附けた櫓や、防寒用の衣服や、糧食や、犬などの蒐集に忙はしくして居るのみならず、また學理を應用した科學的設備には細密なる注意を拂つて居る。ある新聞記者が、サア・アーネストに、何の爲こんな危ない探險に二度も出かけるのであるか、一通りは南極にも達して居るし、スコット大佐の如きは凍死したてはないかと問ふと、彼は答へて云つた。その心持ちは實際冒険した人でなければわからない、自分の今歩いて居る地は未だ曾つて何人も踏んだことのない地だと思ふ丈けどもどんなに愉快であるか知れまいと。一面の霧、そしてその中から露はれて來る氷の山。何人も吹かれたことのない雪の野の空氣、太陽の光線とその色彩、珍らしい動物、見なれない景色、寒さや飢と戦ふ恐るべき喜び。それは實に實見者にのみ許されたる歡喜でなければならぬ。

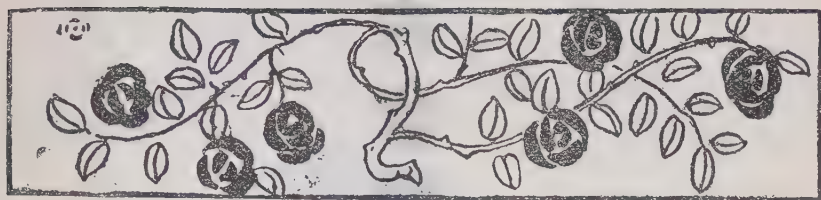
二

冒險を行ふところの決心、希望、抱負、それには尊いものがある。もし冒險がなければ人生には進歩がない。先祖の蹤んだ道をのみ歩いて居るならばそこに進歩は永遠にない。ある程度まで冒險的態度は何事に於いても必要である。

サ・アーテスト・シャックルトンはスコット大佐の死んだことを知つて居る。だからその危険はよく／＼承知して居るのに相違がない。そこで彼はもとより十分の準備をして居るであらう、これで大丈夫だと云ふ確信をもつて出立して行くであらう。併しそれにしてもどんな危険が彼の一行を待つて居るか知れない。彼等はどうしても萬事を運命に任せて行かなければならないのである。

イスライルの先祖アブラハムはセミテチック人であつて、ハランと云ふアラビヤの北部の高原地に住んで居た。然るにその土地には人民が非常に増加したので、生活が甚しく困難になつた。宗教的信念に厚かつた當時の人には、何事にも神の命令と云ふ宗教的色彩を帯びしめて居た。彼もまたこの一事によつて、これは他の場所に移住せよと云ふ神の命令だと信じた。聖書には、彼はその行くところを知らずして出立したと書いてある。彼は實に自分の生命を賭して移住を始めたのである。妻子眷族、天幕、駱駝、それ等のものを携へて一大冒險が始められたのである。その時彼は實に七十五才であつたと傳へられて居る。その時代の人の七十五才は今日の人の五十才位のものであつたかも知れない。しかし何れにしてもこれをなすことが出来たと云ふのは牢乎たる確信がなくてはならぬ。





## 先人未蹤の道

内ヶ崎 作三郎

### 一

歴史を讀んで非常なる興味を感ずる所以のものは、吾々自身と最も深い關係のある多く人々の生活に於ける波瀾曲折を観ることが出来るからである。而してその歴史の中にも特別の興味と注意とを惹くものは建國史である。

吾々の祖先は何處より來り、如何なる動機により、また如何なる艱難辛苦のもとに國を建てたか。かう云ふ疑問は吾々の好奇心をそゝつて、言ふべからざる感興を促がすものである。吾々が古典を通じて古代史を知らんとするのは、吾々の建國史を知りたいからである。日本の上古史の如きはまだ／＼十分なる研究が積まれて居ない。それは學者達が眞實なる研究を發表し得ないからである。吾々は深くそれを遺憾に思ふ。

吾々にしてもし祖先の難義苦勞に涙を灑ぎ得るならば、そこに愛國の至情が起らざるを得ない。吾々の今住んで居る土地や、國家や、社會や、制度は、凡て是れみな、吾々の祖先等が血を流し、生命を捧げて、初めて造りあげられた

製作であつて、また祖先よりの最も大なる繼承であるからである。

しかしながら吾々が建國史に興味をもつ所以のものは嘗にそればかりではない。他に存する今一つの大なる原因は、建國の冒險的性質に歸せねばならぬ。蓋し冒險の危険であることは言ふまでもないが、その危険のうちには、また人に知られざる快味と悅樂とがあるものである。多くの人々によつて旅行され、その旅行記なども多く出版されて居る地に行くのは餘り面白いものではない。然しながら、誰も行かない先人未蹤の地に旅行するのは非常に愉快なことである。何人も知らざるものを其處に發見するかも知れないからである。世界開闢以來、何人の手にも觸れられなかつた無盡藏の寶庫が戸を開らいて待つて居るかも知れないからである。美はしい山水、珍しい風俗悉くみなその旅行者にとつては新しい啓示でないものはない。

郡司大尉が千島の諸島を探險に行つた時、滿都の人々は彼を隅田川の岸邊に送つたではないか。近頃はまた白瀬中尉の南極探險に對して、多くの義捐金は積れ、國家的國情は彼の上に降り注がれた。これ皆、冒險そのものに人の血を湧かすものがあるからである。

リヴェングストーンが阿弗利加の内地に深く踏み込んで基督教の傳道をなしたと云ふことは一つの大なる冒險でなければならぬ。萬人は彼の殉教的精神に感憤興起した。然るに彼が内地に深入りしてから久しい間何の音沙汰も無くなつた時に、人々はまた彼の安否を憂へて止まるところがなかつた。その時に當つてスタンレーが身を挺してリヴェングストーンの搜索に行つた。その時のスタンレーの人氣は非常なものであつた。早や二十四年前の事であるが、福島少佐(今の中将)が獨逸からの歸りが

# 新 着 洋 書

Kennedy, H. G.—St. Paul & the Mistery Religioos. ....	3.00
Lloyd, A.—Everyday Japan. ....	3.00
Miles, A.—The Bravest Deed I Ever Saw. ....	2.50
Miller, J. R.—Come Ye Apart. ....	1.20
"    "    "—In Green Pastures. ....	1.20
Moffatt, J.—The New Testament, A New Translation. ....	3.00
Morgan, G. C.—The Teaching of the Lessons for 1914. ....	.50
Morrison, G. H.—The Weaving of Glory. ....	2.50
Nicoll, W. R.—The Expositors Greek Testament Vol. I—V. ...	8.50 each
Nicoll & Stoddart—The Expositors Dictionary of Texts Vol. I—II.	
.....	12.50 each
O'Neill, H. C.—The New Encyclopaedia. ....	3.75
Orr, J.—The History & Literature of the Early Church. ....	1.25
Patterson, R. J.—Catch-My-Pal. ....	.50
Peake, A. S.—The Bible its Origin, its Significance. ....	3.75
Rowlands, A. H.—The Right to Believe. ....	.50
Siekiewicz, H.—Quo Vadis (A Tale of the Time of Nero). ....	1.00
Smith, D.—Unwritten Sayings of Our Lord. ....	1.25
Smith, G.—Bearing & Sharing. ....	.50
Steele, S.—Childrens Action Songs. ....	.50
Stevenson, R. L.—Dr. Jekyll & Mr. Hyde. ....	.25
Stoddart, G. T.—The Old Testament in Lift & Literature. ....	3.75
Strauss, R.—The Parents Book. ....	1.75
Thomas & Geddes—Problems of Sex. ....	.35
Whishow, C. M.—Being & Doing. ....	1.25
E. F. G. Series.	
Truslove, E. H.—English Dictionary. ....	.50
—French Eng., Eng. French Dictionary. ....	.75
—Latin English Dictionary. ....	1.00
Stokes, E.—New Pocket Eng. Italian, Italian Eng. Dictionary. ....	.75
—New Pocket German Eng., Eng. German Dictionary. ....	.75
—New Pocket Spanish Eng., Eng. Spanish Dictionary. ....	1.00
Barwick, G. F.—The Pocket Remembrance. ....	.75

東 京
教 文 館
銀 座

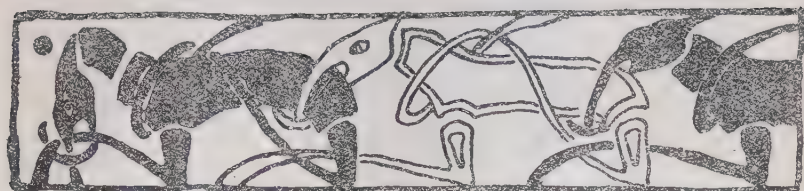
(振替東京一一三五七)

# 六合雜誌



四  
月  
號





# 六合雜誌第三十四卷第四號目次

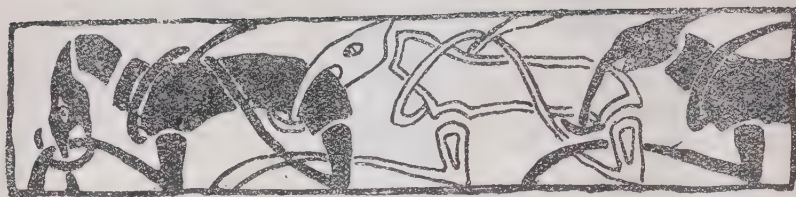
## 評論欄

先人未蹤の道	内ヶ崎 作三郎	二
個人主義者としてのイブセン	稲毛 詛風	一三
ロシア文學に於けるトルストイの地位井口杜村譯		二六
ノルダウ氏のトルストイ論	西宮 藤朝	三三
單純信仰と本文批評	三 並 良	四〇

## 文藝欄

### 史影

山の雪(短歌)	野口 精子	六〇
An Air-Castle	岡田 哲藏	六四
西灘より(詩)	佐藤 清	六五
島の牧師	日賀多正一	六七
春(短歌)	伊藤 寥々	七四
	ストリンドベルヒ	
	千葉掬香譯	四八



富める人とラザロ（對話）……………佐藤清……………七五

歐洲見聞錄（モスコウ雀が丘）……………盧山生……………八一

マグダラのマリアにまで（感想）……………吉田絃二郎……………八五

社 會 欄

キックユウ問題の真相……………内ヶ崎 作三郎……………八九

婦人の力……………新渡戸稻造……………九七

念腹 宗（靜坐二年有半）……………岸本能武太……………一〇七

牛込教會訪問記（教會訪問記その五）……………K Z K……………一一九

時 評 欄

△宗教家何ぞ遲疑する（鈴木）△選舉權の擴張あるのみ（鈴木）△先づ石にて撃つ者は誰ぞ（柏葉）△我國政治史上の新紀元（みねぎし）

惟一館たたり……………編輯室たより……………新刊批評……………

ライオン歯磨は

品質の勝れる  
人氣の盛なる  
販賣額の多き  
價格の廉なる

點に於て

世界一！

總ての點が世界一

# THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 399. April, 1914.

## CONTENTS.

Virgin Soil in Human Life. ....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
Henric Ibsen as Individualist. ....	S. Inage.	13
The Position of Leo Tolstoi in Russian Literature. ...	T. Iguchi.	26
Comments of Max Nordeau's View of Leo Tolstoi.....		
.....	T. Nishimiya.	33
Simple Faith.....	Prof. H. Minami.	
An Open Letter to Mr. T. Sugai. ....	Prof. H. Minami.	40
<hr/>		
"Leontopolis" ( <i>August Strindberg</i> ).....	Translated by K. Chiba.	48
<i>Tanka</i> . ....	Mrs. S. Noguchi.	60
An Air-castle.....	Prof. T. Okada.	64
From Nishinada ( <i>poems</i> ).....	K. Satō.	65
A Romantic Travel to Ōshima. ....	S. Mekada.	67
<i>Tanka</i> . ....	R. Itō.	74
The Rich Man and Lazarus ( <i>a play</i> ).....	K. Satō.	75
First Impression of Moscow. ....	Rozan.	81
Fragmental Thoughts. ....	G. Yoshida.	85
<hr/>		
The Kikuyu Question and its Significance.....		
.....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	89
Power of Woman. ....	Prof. Dr. I. Nitobe.	99
On <i>Seizahō</i> .....	Prof. N. Kishimoto.	107
Ushigome Presbyterian Church and its Pastor. ....	K. Z. K.	119
<hr/>		
Topics of To-day.....		123
Books of the Month. ....		128
Unity Hall Reports. ....		132

Published Monthly by the  
TŌITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,  
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.



著者	書名	冊數	定價	郵稅	出版元
三並良	福音書大觀 (譯)	一	三、五〇〇	八〇	統一基督教會 梁江堂
安部磯雄	現代戰爭理論 (譯)	一	八五〇	二二〇	博文館
内ヶ崎作三郎	英國より祖國へ 人生と文學 近代人の信仰 ロイドデョールデ	一	一、〇〇〇 二、五〇〇 二、〇〇〇 三、〇〇〇	二二〇 一八〇 一二〇 二〇〇	北文館 警社 同英閣 前川
神田佐一郎	登高白卑	一	五〇〇	八〇	統一基督教會
向軍治	ハッ當り集	一	三〇〇	四〇	警醒社
岸本能武太	英語發音の原理	一	七五〇	八〇	北文館
今岡信一良	新神學 (譯)	一	一、〇〇〇	八〇	同
小山東助	光を慕ひて	一	三〇〇	四〇	警醒社
永井柳太郎	社會問題と殖民問題	一	一、五〇〇	一六〇	新興社
合著	進歩的宗教	一	三五〇	六〇	統一基督教會
加藤一夫	闇に輝く光	一	八五〇	八〇	文明堂
淺田泰順	新譯律氏和聲學	一	一、七〇〇	一〇〇	淺田泰順

上記の書籍は我が  
統一基督教會員並  
に同志者の著すと  
ころのものなれば  
本社は地方讀者の  
爲に、特に取次の  
勞を執るべし、郵  
税は本社に於て負  
擔すべければ定價  
のみを送らるべし  
東京市芝區三田  
六合雜誌社

Library of the  
 PACIFIC UNITARIAN SCHOOL  
 FOR THE MINISTRY  
 Berkeley, California

# 六合雜誌



四  
 月  
 號

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可  
 大正三年四月一日發行(每月一日發行)

六合雜誌第三十四年第四號

京都帝國大學文學部

文學博士 松本文三郎先生三大名著

# 佛典の研究

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー也多年その蓋書を傾けて研究せられたる佛典已に幾十種加ふるに輒近燉煌その他に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先人未到の新説なりとす佛典の眞偽を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

# 増補 宗教と哲學

本書全篇十有四章まづ筆を「釋尊は何を説きしか」に起し「宗教と道德」「研究と信仰」等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在るとを説明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

# 彌勒淨土論

彌勒淨土と阿彌陀淨土とは實に佛教の淨土思想を代表しつべき二大信仰にして又實に二大勢力たりしなり然るに其の半面は阿彌陀淨土の闡明によりて光輝を放てるあるにも拘らず他の半面は彌勒淨土の埋没によりて今尙ほ暗黒に歸せりこれ豈佛教史上の一大缺點にして又實に佛教界の一大恨事ならずや松本博士こゝに見るありてその專攻する學科の立脚地より彌勒淨土の由來淵源を詳論し茲に佛教の淨土思想研究は完璧を成せり今にして何人か又此の新研究を味はずして恣に佛教の淨土思想を談せんとするものぞ

菊判箱入

定價九拾錢

稅八錢

菊判箱入

定價七拾錢

稅八錢

菊判箱入

定價一圓

稅八錢

〔後附六〕

東京小石川區原町三三 丙午出版 社版出午丙 東京小石川區原町三三 堂聲鷄



# 東京帝國大學宗教講座の參考書るた一大名著譯

獨逸ゲッチンゲン大學教授 **ブツセツト氏** 著  
文學士 **大川周明** 先生譯

再版

## 宗教の本質

宗教名書二十葉入

三上知治畫伯裝釘  
菊判三百六十餘頁  
總布綴箱入美裝釘  
定價 金壹圓拾錢  
小包料 金十二錢

宗教の本義本質は最も明快に論斷せらる

譯者曰く 紛糾を極むる宗教生活の事實を斯程まで手際よく取扱ひ得た學者は尠く、化の跡を忠實に辿りつゝ、凡ゆる重要な宗教現象を殆ど洩なく摺撫して、宗教進極めて明瞭な概念を與へる點に於て、總て此類の著作の間に高き地位を占め得る者である、吾等は教授が其所有する豊富なる材料を、吾等が要求し得る限りの公平と同情とを以て取扱はれた學者的態度に對して、心の底から敬意を表せざるを得ぬ云々。

文學博士 桑木嚴翼先生著

●現代の價值(再版) 金壹圓參拾錢 小包料十二錢

文學博士 桑木嚴翼先生著

●時代と哲學(五版) 金壹圓貳拾錢 小包料十二錢

文學博士 松本文三郎先生著

●宗教と學術(再版) 金壹圓參拾錢 小包料十二錢

文學博士 加藤玄智先生著

●宗教講話(三版) 金九拾錢 小包料八錢

ルツソー原著 三浦關造先生譯

●人生教育(六版) 金壹圓六拾錢 小包料十二錢

トルストイ原著 小田賴造先生譯

●人道主義(三版) 金九拾五錢 小包料十二錢

法學博士 浮田和民先生著

●倫理的帝國主義 金貳圓五拾錢 小包料十六錢

三博士 二大家合著

●最新思潮講話 金壹圓 小包料八錢

東京 隆文館  
（三五八東京替振）



▲泉斜汀 共編  
▲原穂村

△四拾餘名の大文豪と天下の名山山水△

新刊

現代名家  
文集

一人一景

▲四六版美装  
▲三百五十頁  
▲正價金五拾錢  
▲送料金六錢

盡

「春在本書已十分！」

てね尋を春日

明治大正の文壇に鬼才を以て鳴れる四十餘名の大文豪が特意の筆を提げて海内の名勝古蹟は云ふも更なり弘く海外に至る迄雄大の絶景を探り各特色ある觀察と非凡の麗筆とにより寫し出されたる偉大なる藝術品なり。されば本書一卷を手にして明窓淨机に誦すれば心は遠く白雪流水の間に馳せん。若し夫れ旅行者の伴侶とすれば現代の名家と手を山紫水明の境に携へて逍遙するの感あらん。

發行所

東京市麻布區我善坊町  
振替東京二三〇七四番

修養世界社

# 注意！

- 一、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候
- 二、本誌は従前は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今回内部の整理と共に每號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御諒承下され度候
- 三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候
- 四、若し郵便爲替にて御送金の場合には芝區三田四國町二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候
- 五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御註文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に（前金切）と押捺致候間早速御送金可被下候
- 六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申上ぐべく候
- 七、定價は内容の改善發達と共に下表の如く改定致候間御承知下され度候

## 本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
●海外は郵稅一冊に付金六錢（清國を除く） ●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く			

## 本誌廣告料

特等	普通	普通
表紙二三四面	一頁	半頁
一頁	金貳拾圓	金拾貳圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候		
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候		

大正三年三月二十日印刷納本  
大正三年三月一日發行  
（毎月一回一日發行）

定價貳拾錢  
稅共

發行兼編輯人 鈴木 文治  
印刷人 山本 與一郎  
印刷所 株式會社 秀英 舍

## 發行所

東京市芝區  
三田四國町

## 統一基督教弘道會

〒振替東京一〇〇〇三番

## 賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋  
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

差支ない。午前十時よりの禮拜説教の出席者は昨年十月頃よりメツキリ増して百名を超えることが度々ある、殊に婦人の出席者が多くなり、時には四五十名に達することがある。統一教會が着々として教會らしいものとなりつゝある有力なる證據である。

此度日曜俱樂部なるものが設けられた。朝拜後圖書室にて一服づゝの粗茶を喫して別れること、折々時事問題の討論會をやること、時々團體にて視察に出ること、一月第三日曜日の本所のトンチル長屋の神祭には男女四十九名の團體をなして行つた。得る所が多くあつた。此俱樂部は慥かに教會生活の一發展であらう。

一月二月は講演時節と稱すべき。殊に安部磯雄氏の如きは市内の各種の講演會に出席せられ、又他の教會をも應援せられた。前橋の公娼廢止二十年紀念會にも赴かれた。恐らくは一、二、兩月にて幾十回の講演を試みられたことであらう。

△内ヶ崎氏も繁忙を極めた。一月下旬より約一ヶ月間の早稲田と統一教會以外の講演を數ふれば憲政講演會、青山女學院、慶大基督教青年會、慈惠院基督教青年會、戊申婦人俱樂部、啓成會例會、國民道德講演會、中央會堂土曜講演會、通俗講演會等て眼が廻る様に忙がしかつた。しかし兩氏とも頑健にして容易に疲勞を回復された。

△二月十六日、第廿四回通俗講話會を開く。愉快に世を渡る法(内ヶ崎氏)、飛行機の話(永野八郎氏)、鎌倉日歸り(中岡默堂氏)の講話があつて、終りに川口章吾氏のハローモニカを聴いた。來會者百七十名。

## 編輯室より

△愛讀者諸君の厚き同情によつて、本誌が倍々社會のあらゆる階級の人々に對して、その主義とするところを廣く宣ぶことを得るのは、感謝に耐へない次第であります。一月號の好況に次いで二月號は更に良好の賣れ行きを呈したといふことを聞きました、編者も聊か安堵いたしました有様であります。厚く寄稿家諸士及び愛讀者諸君にお禮を申し上げます。

△別に豫告をいたして置きました通り、今年の五月號は本誌の四

百號に相當いたしますので極めて地味な、しかし質に於いて一層洗煉せられた雑誌を拵へて見たいと思ひます。

△富永徳馨氏の「道德と文藝」稻毛詠風氏の「個人主義者としてのイブセン」新渡戸博士の「婦人の力」海老名禪正氏の「日本民族の新使命」岸本能武太氏の「念腹宗」等は次號及び四百紀念號に載せていただくことにしました。

△千葉柳香氏は、爾今毎月本誌の爲めに御寄稿を快諾せられた。

△岡田氏の英文の後半は遺憾ながら、次號に譲りました。

△内ヶ崎氏の「ロイド・デョールヂ」は再版になった。同氏の「白中黄」は近日實業之日本社から出版される筈。

△野村氏はベルグソン哲學を書き上げました。

△鈴木氏は芝區新堀町三十一番地へ移轉しました。

△得能文氏譯オイケン「の精神生活の哲學」に對する内ヶ崎氏の批評を本誌に掲げる筈でしたが、紙面の都合で、來月に廻しました。

譯者並に内ヶ崎氏に對してお詫びをいたします。

△小西増太郎氏の「トルストイの宗教小説集」淺田泰順氏の「聖歌新曲」の批評も止むを得ず次號に譲りました。

△二月號本誌掲載の、三並氏「本源的生命」論中第三十六ページ第十六行の、「併し若しさうすれば直ぐに人間以上のものになる」の人間以上は、人間以下の誤りにつき、こゝに訂正して置きます。



小兒科

東京市神田區裏猿樂町

(電話長一八〇〇  
本局一五五二)

# 延壽堂病院

小兒耳鼻咽喉科

醫學博士

三輪

信太

郎

醫學士

井上

吉之

助

ドクトル  
メデチーネ

向野

野

督

慈專醫學士

田澤

信四

郎

醫學士

山崎

開

二

醫學得業士

中西

正

道

金澤醫學士

生橋

一

郎



し。「何等大胆なる宣言ぞ。恐くは論者は十八世紀のディーズムを以てユニテリアン主義と見做すのであらう。本誌巻頭のエリオット博士の論文を讀まば思ひ半に過ぐるものがあらう。本誌の白眉として推奨すべきはシー、ジエー、エル、ベーツ氏の「生としての基督教」である。これは近代思想に十分なる同情と理解とを有する見解である、信仰である。「神は活ける神である。不斷の活動、不斷の自己分與、不斷の自個啓示、而して其目的を實現するために、自個實現に應じて生起する無限の變化の裡にあつて、尙其特性を保つが——是が吾徒の呼んで以て神となすものである。」とはエリオット博士の意見とさへ衝突せぬ。ベーツ氏は恐くは日本メソヂスト教會に於ける最も有望なる新人である。吾人は同氏が母教會に對する大なる使命あるを自覺せられたい。もし日本メソヂスト教會の思想が此點に一致せば、同教會は更に一進歩を現するであらう。神學評論が此種の論文を引き續き掲載せば前途有望といはざるをえない。(一冊代金二十五錢)

### ■青年期の心理及教育

和田琳熊譯・警醒社發行

米國クラーク大學總長スタンレー・ホール博士の著「The Youth, its Education, Regimen and Hygiene」を譯したるもの。本書が殆んど世界的の名著としての價值は定評あるところ、今これを日本の教育界に提供することは大に有益なことである。第一章少年期、より起して筋肉及び運動、産業教育、青年の過失、社會的理想の生長等收むる所悉く青年教育の根本問題を穿ち得たるものである。譯文亦簡勁、敢て一本を薦む。著者の思想の一斑を左に紹介する。

「著者は一個の心理學者として、感情は純粹智力よりも尊いものであるといふ事を益々深く信ずるのである。そして婦人といふ者は神の御手から來た者であると思へば婦人に對する愛情が益々熱烈になつて来る。之は著者一人の感想であるまいと思ふ。余は加特力教徒がマリヤを崇拜するのを非常に羨ましく思ふ。昔し博士達に拜まれたといふ聖母マリヤは、カルデア人の天文學を知つて居たであらうか。又埃及語、バビロン語などを學んで居たであらうか、そんな事を尋ぬる者は一人もあるまい。

吾輩は又、マリヤが今日の多くの婦人の様に婦人の目の上にある色々の束縛を痛嘆したであらうと考へる事は出来ない。然るにマリヤが過去數世の間、人類に崇拜せられた理由は、彼が男子よりも一層人間らしく、愛情、慈悲、無私の熱誠、及び直観力等に富んで居て、大に婦人の光榮を増したからである。吾人は此光榮あるマリヤといふ理想を見て、人間が眞の婦人であるといふ事は藝術家、雄辯家、大學教授、或は専門家であるといふことよりも、どの位完全であり、又神聖であるかといふ事を知ることが出来る。のみならず人間が男子であるといふ事は紳士、哲學者、大將、大統領、或は大富豪であるといふ事よりは一層偉大な事であるといふ事も之によつて知る事が出来る」(第十一章女子教育の一節)

### ■泰西思潮

千葉鑛藏編輯・警醒社發行

ハリソンのハアバート・スペンサー論、ベルグソンの生と意識、デニムスの戦争の道德的代用法、シェンの道德と文藝等七篇を収めたもの。曩きに本誌に於て紹介したる眞面目なる企である。今回再版を東ぬるに至つたことは、編者及び我が讀書界の爲めに賀すべきである。(價〇・五〇)

### ■紳士必携ポケット世界地圖

開成館發行

獨逸のタッシュエンアトラス、英國のハンディアトラス等に倣いて其の形を小にし、携帯に便にし、能ふ限り圖面を擴大したる手頃のものである。單に旅行用として重寶なるのみならず、座右に置いて、世界的社會の運動に注意を怠らざる人にとりて缺ぐ可からざる著である。一般地圖に加ふるに地勢圖を加へたるも可、殊に卷末の世界統計一斑、世界地名索引等は、日常世界の地理的智識の最も簡便なる補助たるべし。(價一・二〇)

### ■生物の世界

石川千代松譯・大日本文明協會發行

ウォーレス博士の「the World of Life」の翻譯である。博士は人も知る如く世界の動植物地質學の大家として、またダーキント並びて進化論者としての世界的の學者である。詳評次號。

## 惟一館たより

△二月は東京に於ける政治季節であつた。政談演説が毎日毎晩の様に開かれた。統一教會にてはこの月に於て春季特別講演會を開いた。時節柄いかゞと思ふてゐたが、豫想外の成功であつた。

△二月六日(金)夜の講演者は額賀鹿之助、海老名彌正、内ヶ崎作三郎の三氏であつた。額賀氏はオイケン(の)の基督教觀と題して、精神生活を力説し、海老名氏は「日本民族の新使命」に就いて語り、最後に内ヶ崎氏は「生の宗教」といふ内容豊かな講演をやつた。聴衆二百六十餘名、盛會であつた。

△七日(土)の夜は三並良氏源發的宗教について語られた。山室軍平氏は實驗の宗教について述べる筈であつたが、故石井十次氏の葬式のために日向迄旅せられて間にあはなかつた。武田芳三郎氏代りて「ザーカイの發心」と題して演ぜられた。最後に内ヶ崎氏は「永遠の求道者」といふ一時二十分間程の長講演をやつた。聴衆百六十餘名。

△八日(日)は朝から雪空であつた。禮拜説教の題は「良き政治の根本」であつた。八十名程の會衆があつた。本號の内ヶ崎氏の論文はその筆記である。正午頃より愈々本降りとなつた。かゝる處へ矢島樺子女史よりは風邪のために婦人講演會に出られないとの斷りが來た。午後一時頃には新渡戸博士は元氣よく御出下された。この雪では聴衆が少なからう、セレクト、フイー(選良の小數者)だらうなどと言ひ合はしてゐた。さて開會の午後一時となれば雪を銜いて来るは、また、く間に禮拜堂は三百以上の聴衆を以て溢れた。内婦人は百三四十名、自餘は男子の聴衆であつた。會は戸板女史の司會の下に開かれた。矢島女史は男子貞操論について述べらるゝ筈であつたのだ。残念であつた。止むを得ず内ヶ崎氏俄かに代理をつとめた。新渡戸博士のは約一時半に互りて婦人の力と題して、婦人の牽制力に就いて趣味溢るゝばかり、又暗示と教訓に富む説教的講演をされた。雪を肩して出かけた聴衆も大に満足したことであつた。午後四時半散會した。教會員は新渡戸博士を爐邊に擁して色々面白い談話をやつた。新渡戸博士

の講演は加藤一夫君が筆記した。來月號の本誌を飾ることであらう。

夜になりて大雪となつた。講演會の最終夕は大きな打撃を蒙つた。聴衆は百名弱であつた。吉野作造氏は「憲政の宗教的背景」に就いて論理明晰なる快辯を揮はれた。安部磯雄氏は「宗教の民主的傾向」について有益なる講演をせられた。いづれも本誌の異彩となつた。前者は鈴木君が筆記し、後者は加藤君がやつたのである。最後に内ヶ崎氏は「態度の決定」と題して聴衆は肉薄した。三夜の講演會にて四十三名の志道者をえた。帝大、早大、高商、慶大の學生及び會社員等が重なる人々である。

△十二日の夜統一教會圖書室にて志道者の懇談會があつた、銘々の所信を語り合ひ、面白い會合であつた。集るもの約四十名。木曜夜六時よりの靈交會は益々盛で、毎度三四十名の來會者がある。内ヶ崎氏はその都度新約全書の一巻宛の梗概を説き、要所を講述してゐる。昨秋馬太傳より初めて今はローマ書簡の大半を終へた。續いて茶葉を喫して懇談、讚美歌の稽古もあるし、祈禱、默禱もあり、討論もある。一風變りたる集會である。

十五日の日曜には二十名の新入會員の入會式を嚴肅に行つた。これで教會員は二百十名となつた譯である。相原、三並、岸本の三氏は牧師を助けた。引き續いて紀念撮影、歡迎會、食會があつた。統一教會にては一月最終の日曜日に總會を開いた。過去一年の仕事を調査した。役員の改選があつた。岸本能武太(役員會長)、高橋清吾(副會長)、原田長治(日曜學校長)、岡村寅次郎、目賀田正一(會計)、治部茂、太田眞一(記録)、戸板關子、蘆澤茂子(接待)の諸氏が當選した。

△二月の統一教會の説教題目は「自由と奉仕」、「人生の純化」、「未踐の道」、「二十世紀の基督教」、「後繼者の自覺」、「以上内ヶ崎氏」、「念腹宗」、「岸本能武太氏」、「國民道德論」(鈴木文治氏)、「シユライエルマツヘルの宗教觀」(岡田哲藏氏)等であつた。特別講演會のは重複をさけて錄さない。

統一教會の日曜の朝は午前九時から日曜學校があり、同時に三並良氏の耶穌の教訓についての聖書講義があり、九時半から内ヶ崎氏の文學としての舊約全書の連續講義がある。誰でも來會して

れ如何ぞ。

京都法科大學の諸教授、始め脱兎のごとく、終りは處女のごとし。これ所在地の感化か。大山鳴動して鼠一匹とはそれ之れをいふか。卿等は割合に壯語す。而して今日何の狀ぞ。吾人は卿等を買ひ被つたのであつた。卿等の地金漸く現はる。徒らに人騒がせをして恬として恥るなきか。

英國々教會に未曾有の論争が起つた。低派ロー・パーティに屬する二監督南阿非利加のキクユーに於て非國教徒の宣教師と會して聖餐を守れるを違法として高派ハイ・パーティの一監督が反對したるが抑々の火の手である。吾人日本の進歩宗教家より見ればその愚や及ぶべからず。吾人は次號に於て一同人のこの事件の真相に關する詳論を發表せんとす。

岡山孤兒院長石井十次君終に永逝す。新日本の博愛家は五十一歳にて夭折した。日向茶臼原の農園と二千の孤兒は永しへに此偉人を記臆するであらう。晩年自由基督教に類似したる信天教を唱道した。吾人は君に於て有力なる勢援者を失うたるを惜しむ。(寸鐵生)

## △科學概論

シドニー・ギユリック著・警醒社發行

あらゆる學問が狭く専門的にのみ深く入つて行く時に、他の一面に於いては、吾人はその専門的科學に對して、これに關聯する他のあらゆる科學を普汎的に知るの必要がある。京都帝國大學の講師ギユリック博士がこの點に着目して著はされたるものが本書である。即ち哲學、宗教、神學、美學、倫理學に就いて各部門的に論じ、しかも相互の科學的關係を述べたる好個の參考書である。嘗て、同志社大學に於いて「エンサイクロペディア」なる題下に、著者が講じたものなるが故に、其の分類の方法等も極めて系統的である。書中、一々參考書を掲げ、卷末また概括的附表及び索引等を載せて、飽くまでも學究的の細心なる注意を怠らざるは、著者の勞を多とせねばならぬ。(價一・六〇)

## △シユライエルマツヘル宗教論

石原謙譯・内田老鶴  
圓發行

近代文藝叢書の第三篇として見はる。この世界的名著の譯出せられしことを喜ぶ。次號にて詳評を期す。(價二・〇〇)

## △紺青の夜

岩井綠汀著・仙臺シヤルル社發行

著者は仙臺に於いて郷土藝術の爲めに「シヤルル」を發刊してゐた若い北國の詩人である。十二ヶ月間の病院生活に、著者が想ふたこと、感じたこと、それが悉く死の恐怖と生の執着、葛藤を以て彩られてゐる。藝術品として見るといふ氣分よりも、直接自分自身が病院のベッドの上に水色のカーテンを絞つて、雪の山脈や、灰色の空に見入る心地がする。「病み死ぬるべき生命ぞといちじくる感ずる秋となりけるかな」「病みぬれば生命ことさらいとほしく人もかはゆく颯るゝわが秋」「五月きぬ玻璃器のなかの慈姑の芽すくすくびて水を吸へるも」。以てその内容の一般を窺ふことができる。(價〇・六五)



# 新刊批評

## ■ 第一歩 相馬御風著・創造社發行

最近の著者の評論「單調を破らうとする努力」「生命力の直感」「新しい第一歩」等十篇及び「毒藥の壺」を合せて一卷としたもの。私は「單調を破らうとする努力」に於いて詩人御風氏を想ひ、それ以下の評論に於いて評論家としての氏を想ふといふやうな感じがした。單調を破らうとする氏の努力は更らに進んで生命力の直感に入つた。生命力の直感に氏は驅つて新生の第一歩を踏ませた。「お互にどん底から觸れ合ふやうに努力しなければならぬ。好い加減な妥協や分割では到底満足して居れないほどに御互に接觸し合はなければだめだ。あらゆる價值あるものは期せずしてそこから生れて来るに違ひない」そして私はその「人と人の接觸」に於いて、氏の燃えるやうな、苛立つた心持ちを味ふことができた。

私達はお互にどん底から觸れ合はなければならぬ。しかし何時も私達の心に悲しい影を投げかけるものは、人と人との間に何等かの隔りが造されてあることである。私達は涙を眼に湛へながら、なほ自分と他人との間に設けられたメデイウムを見なければならぬのである。私達は常にこの悲しみを痛切に感ずる。しかし私達は尚ほ一步進んで赤裸々な自我を、純なる自我の實感を絶対に尊重し信仰する「自我そのものを以て、あらゆるものゝ個別的生命に接觸して活きて行かなければならぬ。これが氏の要求する新生活の過程である。

概念的な、外部的な、物質的な文明生活に對して、氏は飽くまでも「純眞なる自我本位の生活」、内部から湧き出た文明生活を説いてゐる。而して自我の生命は、何ものに對しても新しく自我の生命を吹き込むだけの力と熱と執着と欲求とを抱いてゐるのである。「宗教も藝術も科學も政治もあらゆるものゝ悉く自我の中心生命に還原しなければならぬ」のであるといふのである。之を要するに氏の自我生活の眼目は「中心生命の自覺——自我相互の接觸

個人生命の結合——無限新の創造」である。「毒藥の壺」に至つては一層氏の泣かんとして泣き得ざる愛せしとして愛し得ざる苦痛がある。「私は腕力のやうな力を凡ての方面に欲する。人間の力のうちで腕力の如き確實な力はない。何等の説明を要しない力を私は欲する。」私は氏のこの心持ちを傷ましくも思ふ。(價〇・五〇)

## ■ 神學評論 第一卷第一號・神學評論社發行

日本聖公會に屬する神學者と思想家とが「神學の研究」なる四季評論を公にしてゐるが我が國の思想界に貢獻する所が少くはない、ことに清新なる思想と寛容なる態度とを示す所に長所がある。しかるに茲に日本メソヂスト教會に關係ある青山學院と關西學院との兩神學部とが協力して神學評論といふ新なる四季雜誌を發行するに至りたるは吾人の大に歡迎する所である。論說の目次は「現代に於ける反理性運動」高木神學博士、「保羅と希臘思想」松本益吉、「基督教的三位一體論の總論」ペリー、「時勢と我等の責任」ウェンライイト、「暗示及暗示感受性の研究」山田惣七、「約翰傳著者の知識論」吉崎彦一、「アモスとホゼアまで」青木澄十郎、「生としての基督教」ベーツ、「人類の連帶的統一性に於ける基督の地位」小畑久五郎等である。その他解説及批評、思潮等の諸篇がある。附録として左近義彌氏のイスラエルの豫言者(翻譯)がある。好文字である。高木博士の論文は先づ序説が長くして結論が物足らぬ感と與ふる。松本氏の論文は最近の高等批評を承認してゐる。且つ「余等日本に生れたるものはここに東洋思想の精粹を傾けてイエスの心に接し何らかの新しい解釋を加へて世界の大流に注ぎたいものである」と同氏は結んでゐる。かゝる思想がメソヂスト教會内に動きつゝあるは興味あることである。ペリー氏の三位一體論の總論は更に吾等を動かさない。殊に氏がユニテリアン主義の近代に於ける發達に暗きことは驚くべしである。今日のユニテリアン主義は決して孤獨の神を信せず、又説かない。その脈管中に人類の血精を進らしめ、其心臓に社會の引力を貯藏せしめ、社會的有機體の一部分たるの喜悅を以て至上的の喜悅となす所の近世人はユニテリアン孤獨の神觀に接して戰慄せざるを得ざるべ



せざるを得ない。唯だ惜しむらくはこれ等の小冊子が譯出された丈けては、獨乙にこれ等の著書が出たのは如何なる神學研究の氣運に由つて居るかに分らない。これらは皆な研究の歴史的背景がある。連絡がある。我等の願ふ所は我國の神學の獨立と、これ等外國の研究を組織的に了解するところである。けれど兎に角にこれ等の雜誌によつて、神學上の努力が現はれて來たのは賀すべきである。(三並)

## 文藝家と思想家に檄す

文藝に對する青年の趣味今日の如く深く且つ治きは日本文明史上に注目すべき現象である。見よ新しき多くの雜誌は毎月美はしく店頭を飾る。或は三號雜誌に終るもの少からざれども、倒れたる後より更に起り來るもの相繼ぐ。慥かに一壯觀である。劇ことに新しき劇、近代劇に對する社會の好尚も侮るべからざるものがある。多くの劇團は小黨分裂のため共倒れの氣味がないでもないが、興行毎に相當の觀客を引きつけてゐるではない

か。又哲學に對する一般の趣味も著しく行き渡れるやうである。オイケンとベルクソンは實業界や、政治界や、工業界の少壯者にすら何等かの影響を與へつゝある。かゝる現象も甚しい珍しいことといはざるを得ない。

されど文藝も哲學も、もう一層の實勢力を振はんがために一轉向を試みねばならぬ。文藝も劇も哲學も要するに翻譯の流行に過ぎぬ。一種の歐化主義の跋扈に外ならぬのである。然らば何を以てこの回轉を試みるかと問はゞ文藝も劇も哲學も一方に於ては現代の實生活に觸れ、或は之を背景とし、或は此處に材料を求め、または之を批評することゝを力めねばならぬ。かくするは文藝と哲學の俗化でなくして社會の新方面を文藝化し、もしくは哲學化するのである。文藝と哲學とが此種の機會に乘ずるを忘るゝは決して得策でない。

英國の文豪中シヨウ、チエスタトン、ベロツク、ウエルス等の絶えず時事を論ずるはいふ迄もない。ガルズブウオーゼーもベーカーも皆時代の活問題を捉へてゐるではないか。佛の文豪アナトール

ル・フランス 先般ロンドンに趣き英、獨、和、白等の社會主義代表者と共に彼の主義を發表した。

丁抹の批評家ブランドスも英國に客となりて、貴族院の大雄辯家ローズベリー卿まで評論するを敢てした。米國の小説家 ウィンストン・チャーチルはその近著に於て基督教會内の新聲を代表した。されば歐米社會は一日も文藝を疎遠することが出来ぬのである。哲學者も然り。オイケンは時事評論集を刊行したそうである。オックスフォードのシラーもコロンビアのドウエーも時事問題を閑却したことはない。

然るに我國の文藝家は何の狀ぞ。この政治季節に際して民論沸騰の今日の趨勢を如何に觀察しつゝありや。我國の倫理學者哲學者は刻下の問題となれる海軍收賄問題を如何に考察しつゝありや。

文藝家此活問題に觸れず、思想家默して語らざる時、民衆やむを得ずして立つ。終に新聞社の襲撃となり、電車の破壊となり、交番の焼打となる。

これ民衆の責任のみにあらず、警視廳の責任のみにあらず、又文藝家と思想家の責任ではない

か。(S. H. C.)

## 時事評語

海軍腐敗の真相益々曝露せんとしてゐる。忠君愛國の化身を以て自任する軍人社會の道德割合に振はざること明々白々である。而して現内閣はこの責に任ぜんとしない。天下の士風頹廢する偶然でない。

政友會の多數を頼みて專横を極むる惡みて餘あり。されども國民黨立憲同志會及び中正會の三派の合同運動往々にして一致せず、誠に千秋の恨事である。あゝ民黨を卒ゐて小數黨の威を示す人々なきか。

政友會三多摩の壯士を、囂集して自ら護衛すればこれに對抗する九州の壯士團體をなして上京したと傳へらる。暴力と暴力との對抗これより益々甚しからんか。言論によらずして腕力によるの事となつた。憲政の進歩この爲に害せらるゝことを

して榮轉した。這間の消息を解せる者は曰く『フォーム』と、巡查の逃亡相繼ぐと稱せらるゝもの、恐らくは虚妄であるまい。待遇は薄し、勤務は激しいし、況んや上命下服の關係は厳しく、服務規律に縛られて居る。『巡查を十年もすると頭が駄目になる』と言つて居る。事實に於ても、特別優秀な人は別として、退職者の多くは官衙會社等の門衛守衛として餘生を送るが常、輒もすれば巡查を止めるが最後、多年の辛勞一時に發して、遂にボツクリ天折する人もある。妻子眷族の豊かなる生活に至つては、固より思ひも寄らない。社會問題は寧ろ茲に存すると思ふ。(ふみはる)

## 神學研究勃興の兆か

實際傳道に多忙なる我が基督教社會は、神學の研究などに勢力を分つことは不可能なるらしい。

神學校で教へることすらも、動もすれば實際を目的とすることに囚はれて居はすまいかと思はれるこれは固より過去數十年、我邦に基督教が傳道せられるやうになつた以來の傾向である。僕等が駿

河臺に居て「眞理」と稱する雜誌を出した頃でも、餘り神學を説くので大に反對を受けたものである。その後時代は變つたけれど神學の疎外せられたことは依然として變らなかつた。然るに今僕の机の上に二つの神學雜誌がある。一は從來年に四回發行し來つた「神學之研究」が近頃隔月に出るやうになつたもの、又一は新たに青山學院を中心としたメソジスト一派の諸君によつて發行せられる「神學評論」である。何だか甚だ頼母しいやうな氣がする。就ては神學の方面に先鞭をつけて、その貢獻も認められた獨逸派は、今頃何をなしつつあるのであるか。若し今にして覺醒せずんば、彼等の事業は過去に屬し去つて、現在にも將來にも何等關係する權利なきものとならざるを得ない。今や我が宗教界も亦た一新時代を劃しつつあり、發足點を新たにしつつあるのであるから、駿河臺時代を懷ふて、彼等の爲めに、一掬の涙なからざるを得ない。

偕て内容を兩雜誌の最新號によつて、比較してみると、兩者共に編輯の仕方は、極めて似て居る。

論説や、新著の紹介の具合やら皆な似て居る。けれども「神學の研究」の方が、年齢から云つて先輩であるだけに「神學評論」が一步先んぜられたものと云はざるを得ない。それに前者の宗派的ならずして、非常に多く自由な研究を紹介するのに比して後者が如何にも宗派的なのは、何んだか今の時勢に遅くるゝこと甚だしいやうな氣がする。

「神學評論」巻頭の高木君の「近代に於ける反理性運動」は三分の二以下は何んだか少々もの足りないやうな氣がするが、現代の思潮を總括した所に面白味がある。君は反理性運動に厭き足らずして「宗教の範圍より理性を排斥するとは出來ぬ」と云つて居る。僕は勿論これに同意するが、之を讀んで世論は様々になるものと感じた。僕等が嘗て「眞理」で批評論を主張した時などは、宗教を合理的に説かんとするものだとして、オルソドックス派から随分と非難を蒙つたものである。それが今や青山學院の構内に合理運動を主張する博士があるのを見て、聊か意を強うするのである。けれども僕は宗教を全然合理的にのみ説明せんとするのは

誤りであらうと思ふ。近時の反理性運動にも眞理がある。(この見解は僕に取つては昔も今も變つては居ないから殊更らこゝに説明する必要はあるまい。) 反理性運動と反理性運動との本源に生命運動がありはすまいか。これが吾等の宗教でなければならぬ。

兩雜誌共に聖書に關する論文が幾つもある。須貝君の「山上説教の神學」(「神學の研究」) 松本君の「保羅と希臘思想」吉崎君の「約翰傳著者の知識論」(「神學評論」)の如きがそれである。これ等の議論も結構であるが、我國の神學雜誌としては本文批評を度外視するとは出來ない。彼の論文の如きも本文批評の基礎の上に立つべきものであつて、之を度外視したならば、沙上の建築に過ぎない。然るに本文批評に着手した論文が一つもないのは甚だ遺憾に思はれる。

殊に「神學の研究」にはシュワイツァー博士の「耶穌は精神病者なりや」或はグンケル教授の「宗教の比較研究に照されたる新約聖書の内容」の如き小冊を譯出して載録したのは甚だその勞を多と



に存すると思ふ。況んや總監の更迭毎に、其の方針を二三にするので、一層社會の猜疑を深からしめるのである。例へば騷擾を鎮壓し、騷擾者を逮捕することは、警察本來の作用であるが、それでも之を以て直ちに内閣曲庇の不神聖なる動機に出づる行動と看做して仕舞ふ。従つて折角の骨折も全く精神的には無價値のものとなる。これは甚だ遺憾のことであつて、警視廳存在の本來の目的を失ふ道理である。勿論從來の歴史が悪いのであるが、是非改める必要がある。世の警視廳廢止論なるものも、警視廳其者又は警察其者を無用とするにあらずして、制度の改正を叫ぶのであらう。

第三には巡查の待遇を改めて同時に更に優良なる者を擇ぶといふことである。巡查の待遇が其勞力に比較して極めて薄いことは、論なきところと信ずる、夫れも明治の初年頃までなら、一種の名譽職として、相當の人物も喜んで奉職したてゝあらうが、今日の如く、社會の萬事が資本化され、物質化されつゝある時代に於て、薄給を以て能者を得んことは、畢竟出來ない相談である。巡查の

質はたしかに年々變化すると思はれる。従つて人民と事を構ふることも多くなるのである。巡查になるものは、多くは生活難の結果、一時の腰掛か、若くは年金目當に辛抱するといふ譯であつて、安んじて其天職を喜ぶものは極めて稀れだ。多少の氣骨あるものは、其階級制度の峻嚴なると、其他の情弊の甚しいのに憤慨して、去つて他に赴くが常である。従つて誠心誠意警察の爲めに働かうといふやうな者は、恐らくは全員の十が一であらう。斯くの如くして、よく警察の實效を期するは、要するに木に縁つて魚を求むるの類である。

以上三項は、警察制度改正の眼目であつて、若し遂に其實行を期し得ずんば、内は良警官の不平となり、外は國民の怨府となつて、警察は到底其効果を發揮するに由なきに至るものであらうと思ふ。(鈴木生)

## 下級警官の辛勞

今年の政治騷は、去年にも増して激しいやうである。政府黨が多數を占めて居るので、容易に城

が陥落しないからであらう。眞面目に憤る人もあらうし、政略する人もあらう、又煽動に乗つて騒ぐ彌次馬もあらうが、何様、拔刀、斬傷、殴打、捕縛、投石、檢舉と、物騒な事が引續く。警視廳當局の行動もさることながら、下級警官の辛勞は、眞に同情に値するものがある。

巡查の職務は、平素に於ても可なりの激務である。二十四時間交代であるとはいへ、出勤退出往復の時間、早出後退の時や、演武、會合、非番召集等の時間を控除すれば、殆んど休息の時間がないといつてもよい位。其勤務中といへば、一時間の立番に、一時間巡回、次の一時間が休憩となつて居るが、其休憩の一時間さへ、本署に遠い交番では往復の時間を差引かれるので、僅々十分二十分に過ぎないこととなる。いはゞ當番日の二十四時間は、不眠不休で働く勘定である。そこへ持つて行つて各所持區内の戸口調査といふものがある。これも怠らずやらねば區内の動靜が分らなくなる。況んや寒天の密行、熱時の偵羅、雪の朝、風の夕も職務を廢する譯には行かないのに、かゝる

非常の場合には、今日も非番勤務、明日も非番勤務と、連日連夜引出されて、息つく暇も無い有様、誰か警官難を嘆ぜざるものあらんやである。

今度の場合に於てもさうだ、拔劍したものも、斬りつけた者も、巡查その人には相違なからうが、それは決して巡查が勝手に暴行を働いたのではない。やれと命じたものがあつて、其命に従つて行動したのだ、たゞ手となり足となつて、機械的に働くに過ぎない。巡查も人である、血も涙もある、某署の警官の如き、某の日議院より歸る山本伯を警衛せんが爲めに、朝の八時より翌日の午前二時迄も立ち盡したといふ。巡查と雖も民の聲を知り、誰れか好んで無辜の人民を斬らんや。

それもよしとして、暴行事件が問題となると、何時も處分される者は、下級の警官である。今度はさうでもないやうであるが、去る三十八年の焼打事件の際の如き、市内某署の署長は部下に訓令して『暴民と見たら用捨なく叩き斬つて仕なへ、責任は一切自分が負ふから』と、而して正直に此訓令を奉じた者は免職され、訓令した署長は昇進

に翔つた。そしてそこには、到底も見盡せない野の神秘が潜んでゐることを知つた。そこには味ひ盡せない驚異が一片の枯れ葉のなかにも顫いてゐることを知つた。生に執着する貪濫な慾求がこゝから湧いて來た。

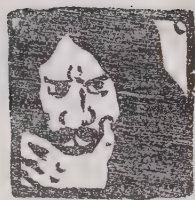
私は何處までも生きてゐたい。何時までも生きてゐたい。そして一日一日、刹那刹那の私の生活が、盛れるだけ盛られた神秘の生活でありたい。味はれるだけ味はれた生活でありたい。

私にはこの世界に生きて行くことが幸福であるとか、さうでないとかいふやうなことを考へる餘裕はない。私はたゞ生といふ絶大な權威の前に、生といふ峻嚴なる神秘の前に、自ら敬虔の心をもつて、蹲かなければならなくなつた。私は時として生といふものを憎む、それだけ生に對する私の執着、私の愛は強くなつたことを意識する。

私は死が何であるかを知らない。幻滅であらうと、更生であらうと、暗であらうと、光明であらうと、それは現在の私にとつては齊しく強い反抗心を醒させる呪咀である。私は極度まで生の神秘を歎美する。それほど私は死の恐怖を感じずには居れない。

眞實に生の神秘を感じた時ほど死の恐怖が強く意識せられることはないやうに想ふ。生きよ、生きよ何處までも。何時までも生きよ。神秘から生れて、神秘に生きて、そして神秘に死に行く、私の生活！そして今生きたこの刹那が最大最深の神秘であれ！

ハルシニアであると言明しなければならぬ私達の生活法はまだ眞實の生き方ではない。野の花を見よ。空の鳥を見よ。私達が生きてゐることを見よ。



## 時評

### 警察制度改正の急務

近年來一種の風潮として、群衆心理を利用して、政治運動をすることが流行して來た。其度毎に人を傷け家を焼き、電車を壊すといふやうな暴行が行はれ、取締る方でも厄介であらうが、一般市民は實に迷惑を感じるのである。そこで僕は警察制度を根本的に改正するの急務を感じるものであるが、試みに私案二三を提供しやう。

第一に根本的改正の方策は、警察權の獨立を計ること、恰も司法權の如くするものである。制度の上に於ては警察機關は、自治體の一作用となつて居て、司法權と相連絡し、又は行政執行機關としての活動をなして居るやうであるが、事實に於

ては屢々高等政治の一機關となつて、上の者の命に依つて如何様にも行動して居るといふ有様である。これは中央と地方とを問はずして存在する弊竇であつて、これでは警察は人民の爲めに存せずして、一部特權者の爲めに存するか如き形となる。然も其費用は人民各自の上に負擔せしめられるといふならば、天下かゝる馬鹿々々しいことがあるものか。警察權をして獨立せしめよ、而して他の何者の權威に依るも動かざらしめよ、これ改正の緊要眼目である。

第二には警視總監をして、名實共に事務官たらしむることである。制度の上に於ては明かに事務官である、地方長官に屬すべき職權の中、特に東京府に限りて警察權の運用に關する事務を擔當して居るものである。併し乍ら事實上は一種の政務官であつて、内閣と進退を共にして居る。従つて如何に公平に職務を執行せんとしても、勢ひ所謂我黨内閣掩護の態度に出づべく、又さる命令を受くることなきを保せず、且つ世間も亦一般に閥族の走狗と見て仕舞ふのである。百弊の原因は茲



れて泣いた。私は過去の神秘界から未來の神秘界に向つて一足飛ぶに跳び込もうとしたのであつた。しかし意識の世界は私に足もとの草、草の花、露、そして流れの呟きに、私の注意を喚び起した。空を見よ。地を見よ。そして爾自身を見よ！

これ私が驚異に裏まれ、驚異に喘ぎつゝある現實界の神秘に、私の生の凡べてを意味ありと想つた第一日であつた。

私の周圍を取り巻いてゐる若い人々が、生命！生命！と叫ぶ聲を私は聞いた。そして雄々しくも生命の創造に向つて驀進する人々の叫喚を聞いた。或る人々は既に生命の本質、生命の方向、生活に對する私達の立ち場、態度なりを知り盡し、決し盡したのであらう、生命表現の革新に向つて相争ふてゐる。私は雄々しい私の周圍の人々が羨ましい。

このあはれなる幻想者を見よ！

私は私自身に向つてこんなことを言つて見たい。隣りの人々が驀然らに自我の發現！個性の發揮を叫ぶ時に、何といふ淺猿しいことであらう、私は終日小川の畔に立つて、さゝやかな流れの音に、幻影を追ふてゐるのではないか。

人は個性の尊嚴が傷けられた時に争闘するといふ。私は自分の幻影が搔きみだされた時に、言ひ知れぬ寂しさを感じる。私は何時この神秘を追ふところから追れることができやう。私も私の周圍に對して争闘を挑むことがある。そして私が明かに私の主張の上に勝利の冠を贏ち獲たと想ふ時ほど、私は寂しい思ひをさせられたことはない。争闘そのものが、悲しい、神秘となつて現はれる。彼れと我れ

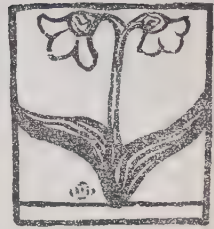
とを裏む神秘の海の面が、むざ／＼と人間の我執の爲めに擾されたることを悲しまないでは居れない。私は争鬭の勝利を獲て自ら満足するほどの強い自我を有つことのできないのを悲しむ。

私の歩みが遅れても宜い。尙少し、私の内を、私の周圍を見てゐやう。しかし私はたゞ見るといふことだけではならない。私は一步一步を確かに歩いて行かなければならぬ。それが私の創造である。そして創造の刹那に私の觀照がその凡べてを裏むでゐなければならぬ。創造をも觀照をも岐つべからざる一境、そこに神秘、驚異の世界が生れる。

私は野の花の悲しみ、嫩葉の悦びを私の胸に直覺するまでに到らなければならぬ。私は私の周圍の人々に對して、憎惡の念を抱くことができる。何故私は草や花に對して憎惡の念を覺えないのであるか。暗の背景なき所に光りなきが如く、憎惡の背景なきところに眞の同情、理解、抱擁、愛撫といふことはない。私は人間に對すると同様に花に對しても、草に對しても、先づ憎しみを持たなければならぬ、そこに始めて私は、伐り倒されたる野末の老木を悼み、低頭れたる四月の花を戀ふるだけの理解が生れるであらう。私がペンを走らせながら、窓の硝子窓を通して、隣り境の櫓の梢に見入つてゐると、その一と葉一と葉が私に何か話しかけてゐるやうである。私は<sup>めし</sup>盲いたる私の心を悲しむ。私はあまりに不可思議な生の表現の事相に對して、驚異の眼を瞠らないでは居れない。

驚異！神秘！私と、私の周圍と、そして生きとし生けるものゝ不可思議なる顯現！

神秘を想ふ私の心は、生に對する執着を喚び起した。私は驚異の眼を瞠つて人生の旅路をさ迷ふた。古巢を忘れた野の小鳥は、日の暮れんことを杞れて満身の生命力を翹に込めて、縦横無盡に翔り



## 死の歎美者となる前に

——感想——

吉 田 絃 二 郎

死の歎美者となる前に、私は生の歎美者とならなければならぬ。しかし私は餘りに生の歎美者たらずむが爲めに、死を恐るゝ者の一人となつた。

死の恐怖！死の脅威！あらゆる生の現實刹那の一つとして、死を豫想することなしに味ふことのできないほど、私の心は死を恐れてゐる。私が生の永遠を想ふ時、沓々として死の暗が前方の眺めを塞いでゐる。私が刹那々々の生の微搖を凝視してゐる時に、生の一つ一つの痙攣的微搖にすら死の神秘的な影が去來してゐることを感ずる。

死は絶えず生さんとする意志、生を味はんとする心の殆んど必然的な隨伴者として、私の全生活の裡に如一の神秘的な背景を作つてゐる。

私は生の擴大、生の確保、生の進展から生ずる争闘、不純、分裂を悲しむが爲めに、死を歎美するが如き臆病な時代もあつた。死が何であるかを顧る遣はなかつた。たゞ無限より無限に亘れる黝い神秘的な世界を想像して、そこに永遠に沈黙せる私の生の墓場を築いて見たのであつた。

小鳥が巢を離れて初めて緑の野を翔るときに、彼れはその古巢を懷ふであらう。その巢立つた梢を

記憶してゐるであらう。

私が生の世界に一步を踏み入れる前に、私は或る神秘的な世界を歩いてゐたのではなかつただらうか。空の鳥は古巢と梢とを忘れてゐないであらう。しかし私は嘗て私が歩いてゐたであらう神秘的な世界の一つの記憶をも持つて來なかつた。しかし私の心の何處かに、私が過ぎて來た神秘界の餘韻が顫へてゐるやうに想ふこともあつた。私が太陽の街耀かな光明に照さるゝ時にも、神秘的な靈的な存在が、私の動くところに、私が歩むところに、一つの雰圍氣を作つてゐるやうに想はれた。それは未來が齎したものでなくして過去そのものゝ執着が、私を引き戻さうとしてゐるやうであつた。私は生といふことを想はず、死といふことを想はず、たゞ過去の神秘界を追ふ幻想のローマンスに生きてゐることもあつた。夕陽の西に入るごとに、私は國境の山の向ふに、あの紅い雲の下に、私の過去の世界があるやうに想はれてならないこともあつた。

しかし私は何時までも、懷ひ起すことさへできぬやうな過去の神秘界をのみ憧憬することはできなくなつた。

爾、先づこの世界を見よ！

これは私が初めて幼稚な意識を賦へられた日の何ものかの叫びであつた。

私は餘りに不純な、餘りに擾しい世相に、私の耳が裂かれ、私の眼が眩んだと想つた。意識の世界は凡べて私の心から過去の神秘界を忘れさせて了つた。私はこの暴虐な世界を見るに耐へなかつた。

古巢の記憶を破壊せられたる私の心は、現在の世界に目をつむつて、そして來るべき世界の神秘に憧憬



さなければならぬのだらうか。基督から眼をひ  
らかれたる盲人が嚴然として『われはたゞわが眼  
のひらかれたとを知る』と云つたとか

『砂糖の甘いこと、鹽の辛いこと、火の熱いこと、入浴の愉快  
なこと、音楽の爽快なこと、飯のうまいこと、家庭の團樂の樂  
しいこと、何人もこの經驗を否むものはない。それと同じ様に  
神の存在とか祈りの力とか信仰生活の價值とか云ふ様な基督者  
の實驗は何人も拒むことが出来ない。花は蕾より、果は花から、  
實驗は事の確かなことを證する。

と云つた様な言葉の遊戲が重ねられるのである。  
『花は蕾より、……』とは抑も何を意味するの  
だらうか、私には一向にわからなんだ。もうそれ  
でいいのかと思へばまだ一つの例證があげられ  
た。それはシムブソン博士が僕の最大な發見はク  
ル、ホルムの發見でなくて基督を發見したことだ  
と云つたと云ふことであつた。

吾々は實驗の力の偉大なることをさへたくはな  
いのである。それをさくために三十分も時間を費  
すのを惜しいと思ふのである。たゞさへたいのは  
實驗そのものである。牧師はたゞ外廓を語つたの  
である、その内容に就いては少しも語らないので

ある。苟も牧師たるものは誰でも信仰の實驗をも  
つて居る筈である。その信仰を生活の上に體驗し  
て居る筈である。吾々の知りたいのはその實驗の  
内容である。牧師は何故自分の實驗を語らなかつ  
たのであらう。けれど内容を全く語らなかつたと  
云へば私の偏見であるかも知れない。牧師はまだ  
以下の様なことを語つて居るから。

『ステイブンスンは少年の頃には非常な虚弱な質であつた。殊  
に夜分になると咳が出て非常な苦しみをした。彼れに一人の誠  
實な乳母があつた。彼をねんごろに勞はつて、子守歌をうたひ  
ながら寒い一夜を看護の爲めにあかすこともあつた。或時人の  
寝しづまつた頃に乳母は二階の窓のところに彼れをつれて行つ  
て背をさすたり子守歌をうたつたりして居た。すると樹の森  
を透して彼方の家の窓にも灯が見えた。乳母は云つた。あの窓  
の中にも坊やの様な苦しい人が居るのかも知れないのだと、彼  
はそれをきいてどんなに心づよくなつたか。自分と一緒に苦し  
むものが居てくれると云ふこの一事の慰めの力、ステイブンス  
ンはその美はしい追懷を美はしいペンをもつて記して居る。

牧師の語つた實驗の内容はまた同じく千變一律  
であつた。自分のなやみを他人から慰められる、  
たゞに他人ばかりでない神から、キリストから、  
慰められる。それは非常な力であると云ふに過ぎ

ないのである。

『人間の同情にさへ非常な力がある。されど更に大なる力のあ  
る同情は父なる神及び救主エスの同情である。』

かくて牧師は、ガリラヤの湖水の中で波浪の爲  
めに悩んで居た弟子の前に基督が表はれて、『我な  
り恐るゝなかれ』と云つたことや、エスがラザロ  
の死んだときに同情の涙を流したと云ふことや、  
ツルゲネーフの散文詩にもあつた様に思ふが、ロ  
シアの傳説として、或る貴族が死にかゝつて居た  
乞食に何か與へやうとしたが、牛憎少しの持ちあ  
はせもなかつたので、たゞ眞心こめて『わが兄弟  
よ』と云つて手を固く握つた。その言葉がその同  
情が乞食に甦りの力を與へたと云つた様なことか  
ら、君とは神から『わが子よ』と云はれるのだと  
云つた様なことを際限もなく語りつゝけた。

これによつて見れば牧師の謂ゆる實驗の内容と云ふものは、他  
人及び神又は基督から慰められると云ふことである。然らば私は  
この内容に就いてもまた批評しないでは居られない。もし基督者  
の信仰の實驗と云ふものがこの種のものであるならば、私達は如  
何にその無價値なものであるかを思はずには居られない。一體、  
他から同情を得やうとか、慰めてもらはうとする心ほど意氣地の

ないものではない。基督者は何故そんなシミツタれたことをばかり  
考へるのであらう。今や人類は三才の兒童ではない、人類は既に  
大人になつて居る。自我の自覺などと云ふことは、色々の非難は  
あつても、眞にその自覺に達したものは決して少々でない。かく  
の如く一人前の人間になつた人類が、何故自分の悲哀を自分で處  
理することが出来ないのであらう。何故自分の犯した過ちを自分  
の力でそれを幸ひに轉ずることが出来ないのであらう。何時まで  
も自主獨立の生活に入られない様では人間も駄目である。一體基  
督者には去勢された人間が多いのはこの種の下らない慰安哲學を  
牧師から注入されたからに相違ない。昔しはそれでもよかつたか  
知れない。併し今は時代がそれを許さない。今の多くの牧師は、  
各自が自覺して、奮闘し努力して自立しなければならぬ様にな  
つて居る現代の世相を知らない。此様な、しい信仰生活を遂つて  
行くなら今に基督者は全く世の劣敗者とならなければならぬ。  
他にも苦しんで居る人があると思つて慰められたなどは殆んど兒  
戯に類する慰安である。牧師は『孤獨ほどつらいものはない』と云  
つたが、恐らく牧師は孤獨の何たるを解して居ないのであらう。  
自分一人病身だからとて孤獨であらうか。あの様な慰安は自分一  
人損するのがいやだから、誰か損をする友達がほしいと云つた様  
な極めて利己的な卑しい心持ちである。而もその慰めや同情を死  
んだ基督に求めたり、神に求めたりするなどは餘りに現代人の心  
を知らなさすぎる。それに就いて論ずるには紙面が足りないが、  
私はたゞこの一言を述べておきたい。神は貴君方が考へて居るよ  
りは案外無慈悲な方であると云ふことを。(E・G・K)

ば銀座教會の人達ちは眼を丸くして屹驚仰天するかも知れない。けれどそれはその何れをも知つて居る私には餘程興味の深い問題である。

私が教會の入口に立つた時は、可哀らしい日曜學校の生徒がドヤ／＼と出て來るときであつた。割合に服裝の奇麗な中流社會のお坊ちゃんお嬢さんらしいのが四五十人、カードをさげたり、愉快さうに話し合つたりなどしながら出て來るところであつた。

出てしまふのを待つて、私は先づ會堂の階下を巡つて見た。直ぐ左側は教員室や事務室らしい。突きあたりが大きな講堂らしくピアノ（であつたと思ふ、その時には氣をつけて見る氣が起つて居なかつた）が備へつけられてある、若いかたがそれを彈いて居た、山本邦之助氏の頭が薄暗い室内で輝いて居た。立派な腰掛けが大分澤山並べられてあつた。廊下を左に、それからまた右に、すると兩側に小さい教室があつた。日曜學校としては、日本では最も完備したものであらう。設備の完全である様に教授も完全であらうか。私はこゝへ來ることの餘り遅かつたのを悔んで居る。

禮拜室は何處かと一人の青年に訊くと、二階だと教えられた。

二階の上りたてには禁酒會事務室と云ふのがあつた。安藤太郎氏はこの教會の會員だと思ひながら禮拜室のドアをあけると、牧師が今聖書の何とかを讀んで居る最中であつた。何と云ふ建築の様式かしらんが自分には初めて見る禮拜堂であつた。バルビツトの方が扇方になつて、一番上層がオルガンでその下が牧師の講壇、そしてまたその下に一つの柵が環らされてある。その内部に

一脚のテーブルがあつて、その上に妙なものが二組×形に組まれてある。何であらうと考へて見てもわからなかつたが、後でそれは獻金を集める杓の様な袋であると云ふことを知つた。腰掛は赤黒い天我蔭の布をはつた、ふつくら氣持ちのいいものであつた。

外側から見たところ、この建築は餘り美術的なものでない、今にあの石が古くなつて蔦でもそれに纏ひ付いたらもつといふものになるかもしれないが、さう大して感心する程でもない。けれど内部は可なり氣持ちがいい、美的であると云ふよりも、他の貧乏教會などに比べて比較的贅澤をして居ると云ふところが。棕櫚竹の二鉢は可なり金をかけたであらうが。その割に會堂の美觀をそへては居ない。それよりも時々西洋草花をでも飾つてほしい。

私の入つて行つた時分は四五十人の會員が席に着いて居た。婦人の方がずつと少ない。牧師は聖書を讀み終へて、祈禱をなし四百六十二番の頌榮を歌はしめ、それからまた聖書を讀み、讚美歌を命じた。私は鵜飼牧師が先達て夫人に先立たれたと云ふことを誰からかきいて居た。さう思へばその温厚な顔に寂しさ、が刻まれて居る様な氣もする。私はその様な人に同情をしなければならぬ。けれどまた、説教に對しては遠慮のない批評をしなければならぬ。それを目的にやつて來たのだから。私は鵜飼牧師と一度も語つたことはない、ま

た牧師について誰からもきいたことはない。だから私はたゞその説教の思想に於て批評することが出来るばかりである。誰に對してもこの歴訪記ではたゞそれだけのことをすれば足りるのである。

聖書を読みやめた牧師の第一聲『只今読み上げましたる』はおかしかった。浪花節語の様な口調ではなからうか。聖書のテキストは『われはわが信ずるものを知る』(提一ノ十二)であつた。説教の主題は『不變不動の基礎』と云ふのであつた。

不變不動の何の基礎であらうか。多分不動の信仰の基礎と云ふのらしい。そしてその基礎は何であらう。殆んど一時間に近い牧師の説教の内容は要するに次ぎの一語につきる。『不動の基礎は實驗である』。

牧師は實驗の力と云ふことを力説したのである。力説したと云ふよりは淳々として説いたのである。あとへあとへ出て来る證明は餘りにくどくどしくつて、私達の様に苛々したものには堪えられない程の怠屈であつた。牧師は先づ口を開いて云ふ、

『現代の特長は人々が皆神經質になつたと云ふことである。何時も不安な心持ちで世渡りをして居る。一寸往來に出てもその人々は忙はしさうに右往左往して居て、不安な色はその顔にあらはれて居る。自動車が出る、電車がやつて来る、馬車がかかる、少しも油斷が出来ない、何時そんなものに衝突するかしらんと云ふ様な不安のたえる時がない。そしてそれはたゞ外部ばかりでなく、内部にもこの不安がある。それは神に對する敬虔の念の薄くなつたことだ。』

けれど信者の立場はそれとは違ふ。強固だ。『われはわが信ずるものを知る』この一語は如何に大なる力を與へることであらう。ポーロには實に一點の疑惑もなく、實驗的に基督を知つて居たのである。彼れは空論を語つたのではない、實驗を語つたのである。この様に實驗から出た言葉には一種の深い力が秘んで居る。』

牧師はかくて實驗の信賴すべきことを説き初めた。たとへば南米に行かうと思へば先づ彼地を旅行した人に訊くであらうとかまた、牧師が夫人を失つた時に最もよく力ある慰めとなつたものは自ら不幸を経験した人の言葉であつたとか云つた様なことが續々と語られた。實驗が力あるものだと云ふことは一言でいへば承知が出来る。そのわかりきつたことを何故その様にダラ／＼と説いてさか



井氏が大阪に事業の本據を据えんとし、保育所を建設し夜學校を設けたるも其基因は義太夫淨瑠璃にあつたと云へば笑可しいが全くそうで有つたのである。石井氏はよくほんとの心中をするのは大阪の人である、義狭は大阪が本場である、こう云ふ所からあの様な事業が産れたとは一寸信ぜられない様な眞實な話である。

石井氏の人情觀は其聖書の講義にも随分穿つた説が多かつた。石井氏の山上の垂訓の講義を聞いたものは實に活ける基督の説教を聞く様であつたと云つて居る。人情的で最も振つた説は、ユダが何故基督を賣つたか、あれ程堅きユダが僅々三十金で基督を賣る筈はないあれは戀敵のためだと随分思切つた事を云はれた事が有つた、即ち、エスの足に千金の價する香膏を塗つたベタニヤのマリヤにユダは戀して居たのであらふと云ふ説である。穿ちすぎた處もあらんが、此様な調子の約翰傳の解説などは、兎ても専門家の企て及ばぬ生きたものを捕へて居られた様であつた。

石井氏の救濟事業は孤兒のみに止まらず、幾人

の人が家庭の混亂、身上相談を持ちかけて、これを平和に導き救を與へられたか、何んで必親展と云ふ書狀の來ない日はなかつたと云ふ事にしても察せられる。

色々話し出せば際限もなし、石井氏の友情。石井氏の家庭、又其本事業に就ての幾多の逸話、美談、困難の話、何時か機會を得てお話したいと思ふ。私はこゝに今迄石井氏の人格をあまり知られなかつた方に對しては、甚だ要領を得ざる事と云ふ様に思はれるが、要するに只明治の産む一大人傑として、至誠至愛常に神のインスピレーションによりて動き絶倫のクリエーチブフォースに依りて事業をなし、死すまで奮闘を續けた一個熱烈なる基督信徒としての石井十次氏の事を、此後多くの人の研究して其學び得る處の物をとらへて、而して彼の殘したる基督教主義の純農生活、理想村の建設完成に一層の興味と力を添へられん事を切望して此筆を擱かうと思ふ。

## 銀座教會の内と外

——教會歴訪記その四——

雪もよほひのした低い空が、どんよりと曇つて居る、しかし連日の好晴に、乾燥しきつた空氣に多分の濕氣の雜つた、何とも云へぬいゝ氣持ちのする二月八日の朝である。私の乗つた電車は外濠

の流れに沿うて走つて居た。數寄屋橋の線路の交叉點でありて、尙少し東に向つて進んで行くと、川に沿うた片側町の右側に、日本ではちよつと見られない程奇麗な構造の教會がある。私はその教會を訪うたのである。大きな建物が彼方此方の近所に聳えて居り、緩かな川の水面からは春霞の様な水分を吐き、古ぼけた小舟が靜かに繋がれて居る、もしこれで電車が通つて居なかつたならば、どんなに靜かな平和な土地であらう。教會は川を隔てゝ有樂座や帝國劇場と對ひ合つて居る。私は屢々有樂座の二階の窓からこの教會の建物を眺め

て居た、そしてこの二つを——教會と劇場とを——對照して見て、色々のことを考へて居た。今朝も亦、少からざる興味をもつて、今度は教會の入口から劇場を眺めて立つて居た。

教會と劇場。ヒュウリタンの血はどれだけ劇場を拒んだであらう、たゞに卑しめたばかりでなく、それを當面の敵として惡魔として、ウエスレエの思想の流れを汲んだこの教會の人達ちは相對峙して居るこの劇場に對して、どんな感情をもつて居るか私にはわからない。けれどそれは決して好意のそれでないことは推量すると云ふよりも知つて居ると云つた方が當つて居ると云ふことはたしかである。劇場に集る人々はまた、輕侮の眼をもつて教會を見下して居るのは云ふまでもなからう。けれどそれはその本質に於てしかく相敵視すべきものであらうか。何れも共に眞實に生きんとする人々の努力ではないか。

たゞ、今の私の興味は、この劇場と教會との何れが果して人の生活に眞の生命を吹き込んで居るだらうかと云ふ疑問である、かう云ふことを云へ

に、私は西郷が基督教を信じて百姓になつて居る様な人であると答へた事があるが、確かにそう云ふ人であつた。

靈火に燃えて常に奮闘せる石井氏は、一方非常に政治的手腕の有つた人で、實際日本の政治にも通じて居た一人で、常に周囲の活きたる社會にあつて、只事業として慈善事業を取つたので、其政治的手腕は孤兒院の經營にも色々な方面に現はれて居る。慈悲深い人、愛の人、至誠の人、意志の人であつた石井氏は、それらの何れよりも今一層強く持つて居られたのは前にも云つた如く、創造クリエイティブの力であつた。其事は各方面に現はれて石井氏を研究するに最も面白い方面であると思ふ。事業の經營に於いて寄附金の募集に於いて、或は宗教の傳道方法に於いて、各々其創造力を發現して居られた。事業經營に於て例へば、三代教育法と云ひ、滿腹主義とか、家族主義とか、孤兒院の十二主義と云ひ、又子なき親に親なき子を托する里子制度と云ひ、數へ來れば總てが皆左様であつた。寄附金募集の方法としても慈善音樂會と云ふ物を日本

に初めて行つたのは石井氏であつた。多くの慈善團が其方法をまねて多少の弊害をかます頃には、最早新らしい方法を創造されて居たのである。

宗教界に於いても、東洋傳道とか、底拔傳道とか、其他色々な方法を創造された事は數多い、然し新らしい物を常に創造して行き、古きものは思切つて棄てられた結果、往々人に誤解をまねいた事もあつた様であるが、此の性質は石井氏の大なる部分であつて、常に活々として宇宙の生命に觸れた方で、然して一度神の啓示によりて動き出すや、行く處まで行かずば止まらず、實にめざましい變轉、創造をされたもので、其最も大なるものは、廿五ヶ年も居て孤兒院の基礎をすえたる岡山を引拂つて、所謂獨立自營を宣言して日向の茶臼原に全部を移して純農民生活に移つた事である。

又此の特性は信仰生活に於いても常に現はれて居つた様である。時には石井氏を取りまく周囲の人が茫然とする様な事も度々であつた。例へば安部磯雄氏が米國より歸朝後大に自由基督教を宣傳せんと石井氏と共に約して、いざ其の綱領を發表したる際は石井氏は大にこれに反對し、安部氏をして岡山に居堪えられぬ迄に反抗された事があつた。然し其事たるや決して友誼に薄いのてなくして、一度燃え來りし靈火の前には、如何なるもの

をも焼きつくさねばやまぬ信念の焔が有つたからで、一昨年頃再びユニテリアン主義に復歸し、私に統一教會に入會をすゝめられた際は、久々斷りの意味を以て病を押して巢鴨に安部氏を訪ねられたのであつた。そして安部氏の留守であつたにもかゝらず、これで十數年來のわだかまりが取れて氣分がすつかりしたと云つて居られた。そして日向に歸つて自ら信天教を創設して、去年の二月十一日紀元節の晩、信天教の憲法を發布した、其後の私信に

現今茶臼原の新緑の世界御目に入れ度候茶臼原目下養蠶の大戦争中に御座候、猶去る二月十一日紀元節の晩茶臼原に於て憲法發布式をいたし候

#### 憲法

- 一、天は父なり人は同胞なれば互に相信し相愛すべき事
- 二、天父は恒に働き給ふ我等も俱に勞働す可き事
- 三、天恩感謝のため我等は禁酒禁煙を實行し收入の十分の一を天倉に納むる事

(附言)十分一は茶臼原天國民の單税にして小作制度を廢せり、天倉にては公税、衛生費、教育費、土木費、宗教傳道費、養老費、救濟費等を出すものなり、

此憲法三章は本年の評議員會にて承諾を得、永遠に茶臼原の憲法にして即ち信天教の根本信條に御座候御就考被下度候信天教にして活ける天父の教へたまいしものならば此教は遂に今天下を導くに足る可し、然らざれば自然に枯れ果つ可きものと存じ候星島君は唯天をのみ相子として御進軍いたされ度候

然し右の信天教も死なれる頃は大分變つて居たかの様に聞いた。先夏日向を訪問した際にしきりと「ニイチエ」を研究されて居たが、どうもトルストイよりニイチエの方がもつとクリスチャンであると言はれた事を面白く聞いたが、其後ベルグソンの論評を私が病床に讀んでお聞かせした際にしきりに、そうだ／＼如何も私の性質とよく合ふ、活きてると云つて居られた。是を要するに石井氏の信仰は外觀的には安部氏の云はれし如く信用があげなかつたと評し得るかも知れない。

然し私共は、石井さんの心のどん底に基督がはいりこんで、其基督より湧き出づる力を組織立つてこれと説明し得ず、又説明出来る様なものでなかつたと思ふが、只方法の千變萬化したもので遂に基督を活かしてわが内に働かしたと云ふ事に就ては終始一貫の信仰の人で有つたと云はれると思ふ。石井氏は又人情の至微を穿つて居た方であつたと思ふ。其義太夫の好きで有つた事は、終に斯界の達人呂昇をして基督教信者たらしめた事でもわかる。石



私は如何しても單に慈善家と云ふタイトルを以て石井さんに冠せたくない。私は石井さんは常に一種のインスピレーションによりて動いた方て其れに持つて産れた絶大なる創作の力で常に何物かをクリエートせなければ止まぬ人であつたと思ふ。

此二原動力に加ふるに至誠あり、精力ありて、斯くの如き大業を創設されたものと云ひたい。そして其れが重に慈善事業に向いたのは血氣盛りのコンバーシヨンの時代に丁度其れにブツついたので、若しあの時政治の方面にコンバーシヨンの道を開いたならば確かに大政治家であつたに違ひない。若しあの時實業に使命を感じられしなれば大實業家で有つたに相違ない。然り孤兒院の政治に就ても又其實業的成功に就て見るも、確かに左様斷言出来るのである。

石井さんが常にインスピレーションによりて動き、實に止むに止まれざるの力に押され、其處に發奮自己のクリエーションを遺憾なく實現された事は、其履歷によりて見るも明かに推知する事が出来るのである。

其の初め岩倉右府暗殺の嫌疑を受けて、鹿兒島監獄に五十一日の幽囚の身となりし時、一夜奇夢に無罪放免を夢見、其確信を得

獄中緝きし孟子の 天將大任於是人也 必先苦其心志……云々の一節を讀むに至り、天籟の聲これならんと嚮に天授の大任あるを自覺したる如き。

又當時明治の聖典と崇められし中村敬宇先生の西國立志編を讀み其第十二章第九編『バウンス靴を補いながら收金なき貧兒を教へし事』の記事にいたり非常に感激し其日の日記に

予此文を讀みて感ずる所あり、嗚呼バウンス 何人ぞや、己れ補靴工にして而かもかくの如く貧兒の教育に汲々たり。吾曹あに此事を聞いて、たゞ演劇を見る如く輕過すべけんや、予は他日必らず予を裨バウンスに効はしめ玉ふの日來ることを信ずるなり云々、

と書きしが、種々の動機は天授の大任は正に此業にありと、心機開展の過渡期にありし石井氏は、岡山醫學校卒業間際に遂に爆發、斷然醫書を燒きて決心を表白したのであつた。孟子を讀み、西國立志編を讀みて、左迄に感激する人が若し熱烈火の如きバイブルに接したら如何にして靜止せらるべき。性來の至誠愛心熱情にバイブルを以て火付けられし石井氏の孤兒救濟以外、日本の基督教界に功獻せし事は實に大なるものと云はなければな

らぬ。

### 三

聖書を通じて来る神の啓示は、石井氏の胸に入りて鐵の如き意志と、燃ゆる如き信仰の焔となり、これぞ神の使命なりと止むに止まれざる力に押されし勇猛心は如何なる難關をも突破して成就せしめねば止まなかつたのである。石井氏の初めて用ゐし聖書には到る處に筆を入れ、何月何日斷行とか服従と書いてあり、たまには血判のしてある節もあるのである。神を信ずる事篤きが故に、時々人に無鐵砲の如くに思はれた事も多かつた。其最も大なる例は先年東北に大飢饉ありし際、石井氏は病みて富山縣立病院に入院して居つた。視察員の報告に接し悲慘なる東北の狀況に同情堪えず、病を忘れて色々に考へ居る際、突然幻影に基督が多くの子供を籠に満たせるを見て同情心は突發して、視察員に幾十人にも収容せよの電報を發した。當時三百人位の收容の設備なきに、突飛なる院長の計畫に皆々心配せしも、人を助けとせず、

神の助けのみを信じて決志貫徹思ひこんだら極端まで實行する石井氏の事業になどて天祐なかるべき一回二回と、百人、二百人と送り来る孤兒貧兒は忽ちにして千二百名になつた。不思議にも家出來、夜具集り、天下の同情孤兒院に集まりて、無名の四千圓を發端に多額の寄附もあり終に世界的孤兒院と稱せらるゝに至つたのである。

「カーライル」は偉人とは人生の神聖なる意義に體達したる偉大なる靈魂の謂である、即此意義を眞傳し、これを歌ひこれがために戦ひ、これがために奮闘する使命を帯びて、堅忍不拔の氣象を勵まして最後の勝利を得る、これが即偉人であると云つて居るが石井氏はどの方面より見ても確かに偉人と云はれる人であつた。前云つた様な事のみ舉ぐれば、熱烈にして其容姿はいかにもキビしくして居るかの様なれども、決して決して然らず、悠々迫まらず、終り迄質朴單純一田舎漢として其の何處となくボンヤリとして捕捉する事の出来ない深みあり、沈黙な口よりゆつたりと腹の底より出づる太き聲は一度耳にするによりて、其の偉大至誠の人たる事を感じしむるのであつた。孤兒院の出身者と收容者二千有餘名と其他色々な關係の人々より、「お父さん」となつかしがるるあの愛の満ち／＼たる溫容の姿は正に明治の一人傑たるを證するものである。

或る人が私に石井さんはどんな方だと問ふた際

# 靈界の偉人故石井十次氏を憶ひて

星 島 二 郎

## 一

書くなり話すなり私の出来るだけの力を用ゐて  
 少しでも多くの方に、あの偉大なる人格を紹介し  
 たいと勸めて居る事は平素私の交つてゐる友達か  
 ら、又星島の石井論かと云はるゝまで、公開の演  
 壇でも兩三度石井十次論を試みた事がある。私は  
 石井氏の生前から、何時か石井十次傳をものした  
 らと思つて居たもので、今となつて何年かゝつて  
 満足なものが出来るか知れないが、益々切に左様  
 思ふ次第である。文筆の達者な色々な人により多  
 くの石井傳が産れてほしいと思ふ。石井氏を慕つ  
 て先夏日向に訪れた際に、此の希望をのべて明治  
 十八年から一日も欠かさずに書かれて居た日記感

想録を是非讀ませて載きたい、否頂戴して私の親  
 族に出版費を出す人あれば、一つ出版さして戴き  
 たいと願つたら、面白い事を云ふものだと病床に  
 ほゝ笑まれながら、まあそんな事は死んでからに  
 しよう……讀む事は讀んでも……と暗黙の承諾を  
 得たれば、石井氏の居室に宿つて居た私の十日の  
 間、夜々大に拜讀した。そして自分の石井觀と照  
 らし合せて益々興味深く至愛至誠の權化の人たる  
 事を切に感じた事であつた。石井十次傳の完成と  
 共に私は是非日本宗教界のため、靈界のため、又  
 文學界のためにも、又多くの人の石井研究のため  
 に出版公開さしていただきたいと思つて居る。

一月七日であつたか私が發熱三十九度病床に呻  
 吟して居た際、突然日向より「インチョウヤマイ

オモツタ」と云ふ電報に接した。でも私は決して死なれるとは思はなかつた。其の夕私は今迄見た事のない石井さんの洋服姿を夢見て、益々其確信を強くした。果せる哉見舞の返電に「スコシオチツク」の報が來た。其の後二月號の六合雜誌編輯を締め切る頃、私は郷里に歸り、又も病みて床に就き、色々に日向の事、石井さんの事を想ひながら先夏より是非寄贈したいと思つて居た「アンゼラスの鐘」の主意文を筆記してもらつて稿したわけであつた。

併し其れが出版された頃は既に石井さんは此世に居られなかつたのである。あれ程に思つて居た私の『アンゼラスの鐘』、去年日向でお別れする際、『そんなに思つて下さるなら一つニコライの鐘を打つに何んでも譜があるそうだ、それも研究してをいて下さい』と云はれた。其言葉は今に耳底に残つて居る。然るに遂に其アンゼラスの鐘の音が、未だ茶臼原原頭に響かない前に石井さんは幽明遠く逝つてしまはれた噫々。

遠き以前の物語り、近く日向に於ける理想の村に就ての色々の憧憬れの會話、昔に聞いた石井さんの人情觀、近く聞いた人物評、宗教界觀察、彼を思ひ是を思ひ、實に溫情湧くが如く今こゝに雜誌社の命を受けて何か纏つたものを書かんとしても萬感迫りて取

止めがつかない次第である。

## 二

私は今長く順序を追つて石井氏の一生をこゝに寫す事は出来ない。それは將來の石井十次傳にゆづりて想ひ出す儘を順序もなく書きつらねて見たいと思ふ。私の眼には石井さんのタイトルとしては岡山孤兒院長とか、慈善家とか云つた様なものは石井さんの眞價から見てもあまり相應しいものではないと信ずる。其れは彼れの重なる事業として、孤兒貧兒の救済に終生を費したに相違ない。然し其れが全體ではなかつたのである。勿論石井さんは天性憐みの深い人であつた事は、七八歳の頃近所の貧家の子供が祭りの日、繩の帶をしめて他の子供達からかはれて居るのを見た時、直ちに自分の締めて居た博多の帶と、取替へて他の子供達をアツと云はせた事で、既に現はれて居る。其十八九歳の頃少しにても自分の學び得た智識を專有するに忍びずとなし、朝晩學校を創設したる如き、既に／＼彼の將來を卜したものである。然し



な彼女に知らしめるのは實際罪な事だらうと考へてゐた。併し苟も自分の妻である以上相互死活問題に關して全然無知の狀態に拋棄して置くといふ事は夫として如何にも冷淡な、又愛情の乏しい仕打ちであると思ひ返した。「そんなら今日まで十五年の長い間彼女と一緒に生きてきた理由がわからん。たゞ同じ飯を喰ふて同じやうに働いて同じ床に寢た。それだけで婢といふのか知らん。それが世間でいふ夫婦といふものならこんな可笑しい而してつまらんもんはない。さうや、俺はどうしても彼女に悉皆打ち明けてやらう。俺と一緒になら彼女も悦んで泣いたり苦しんだり怖がつたりしてくれるやらう。俺は到低彼女と別々になつて生きて行かれん。彼女の方でも知らんて浮いてるより知つて苦しむ方が餘つ程宜えに違ない。さうや、明日は一つ悉皆打ち明けてやらう。」「淺吉は急に言ひ知れぬ心の平安と法悦に我知らず幽かな微笑を洩した。彼は枕元のカンテラに火を點け、杉皮張りの薄べらな戸を押して戸外へ出た。雪はもう歇んでゐたけれども、空には星なく、北風が寒さうにびゅう／＼と泣いて居つた。風の爲に危く吹き消されやうとしたカンテラの火を巧く身體で被ひながら、彼は用を足して駆け込むやうに家の中へ戻つて來た。彼の内心の平安は未だ依然として續いて居つた。カンテラを枕許において一度自分の床へ足だけ突込んだ彼は、弱いカンテラの光に照されてをる自分の妻子の横顔を瞥見して二度床から這ひ出ながらカンテラを高く擡げて、じろ／＼と二人の寢顔を見守つた。母も子も同じやうに血色が悪かつた。そこには弛い粥ばかりを啜つて居る傷ましい營養不良の痕跡が歴然と認められた。二人は又同じやうに檢束なく口をあんぐり開いて居つた。黄色い前齒の間から吐き出す彼等の息は如何にも弱く、而して急しかつた。殊に母の顔面には此世の生活に勞れ果てた寂しい敗

殘者の俤が宿つてゐた。彼女の苦しい呼吸は直に生活其物に對する苦悶の聲のやうにも思はれた。「オ、お前等は生きて死んだ。淺吉は思はず斯く咳いた。」「何んぼ嘘でもよい。俺は斯んなあきぬの顔を見て如何してあの事を打ち明けられう、彼女にして見りや嘘で悦ばされてとるより本統で泣かされてる方が宜えかも知れん。併し本統で泣かしてやるのにや彼女はあんまり勞れ過ぎとる。俺はもうあれより淋しい彼女の顔をよう見て居らん。嘘やない、本統にお前等は生きて死んだ。」「急にカントラの火が消えた。板壁の破目からはほの白い外の雪が寒く眺められた。淺吉は大和屋から恵まれた薄い古蒲團に身震ひしながら暗黒な三人の來るべき運命に就いて深い思ひに沈んだ。

のは一人とあつたもんやない。今度の索道でも中途でもうあかん／＼ツて言はれとつたのに、あの若旦那が下市や方々でど偉い演説をやつたので今迄の様子ががらりと變つてとう／＼あんなよい景氣になつたんやさうな。何とぞア感心なもんやないかえ、淺さん。」

淺吉の方では露程も知つたやうな色を見せず如何にも感服したらしく一々あきぬの話に點頭しながら、雪の坂道を一步一步慎重深く下つて行つた。併し彼女の淺薄な議論を耳にする迄もなく、淺吉は夙に大和屋父子の一廉の人傑である事、殊にその若い當主の非凡なる才能に心を打ち込んで感嘆敬服して居るのであつた。

「さうするとあの索道は矢張りあの人達の力でなつたものと言へる。而して其爲に俺等が從來の生業を失ふ。飯が食へん。死ぬ。俺等が死ぬ。俺等を誰が殺す。誰が俺等を……」

「淺さん。淺吉が危なく右足を踏み外して左の高い崖から落ちかけたのに驚いてあきぬは強い鋭い女の聲で夫の注意を促した。

「淺サンもう直やさかい辛抱して何卒確乎歩いてや。今こそ本統にもう助かるまいと冷ツとしたぜ何ぞ豪らう考へ込んでるやうなア。」

「いやあきぬ一寸とも心配はしておくれな。別に何にも考へなんぞしてをらん。唯先前言ふたやうに昨晚寒うて一寸も眠られなんだもんやさかい。ひよつとするとどうも足の先に力が入らんだけなのや。淺吉はどこ迄も此内心の苦みを自分一人の胸に秘めておかうとしてあきぬにはなるだけ、之を感じづかしめる動機を與へないやうにと苦心した。併し不知不識の中に其問題に就いて痛く自分の腦漿を

絞つて居るのであつた。

「でも大和屋の旦那が——あの慈悲深い親切な大和屋の旦那がみす／＼俺等を見殺しにする。そんな事は如何しても考へられん。そりやどツかに間違があるに違ない。併しあの世間の評判が萬々一本統やあつたら。そしてあれだけの噂を全くの嘘とも思はれんし。さうすると矢張あの人達が俺等を……イヤ、そんな阿呆なことがあるもんかい。」

淺吉の頭は單に個人個人としての大和屋の父子と、索道問題と結び付けて聯想する彼等とに對して常に相矛盾せる二重の解釋の爲に混亂せしめられた。彼は今度の天災に對する大和屋一家の溫い隔てのない同情心を想ふ時、自分の考への餘りに我儘で利己的なのに裏心深く自ら愧ぢざるを得なかつた。併し其懺愧の念のすぐ後から自分でも慄へ上るやうな彼等に對する呪詛の聲が自分の心のどん底から響き出るのを痛感した。「さうや。此頃俺等を特別に勞つてくれるのもありや、全くあれがあるさかいや。考へて見りや今日らもあんなに澤山色んな物を下さるわけがない。ン、わかつた。彼奴等もどうせこの五月迄の命やさかいちつと大事にしてやつてくれ位の大旦那からの心付けやらう。こんなもの澤山貰ふて早ふ殺されるより何んぼ苦ても宜え。俺等此儘で荷持して一日でも長う生きてゐたい。あゝ斯んな物。ぶち碎いて終たらうか知らん。」淺吉は時に斯んな事迄獨言つた。

二人は漸く家に着いた。其夜淺吉は亦殆ど一睡すらも出来なかつた。併し其は外界からの寒さの爲ではなく、内心に鬱積せる懊惱の結果であつた。彼は此怖るべき生活上の苦悶を單に自分一個の胸底に秘めおくべきかといふ問題に就いて頭の中を無茶苦茶に混亂せしめられた。初めの中は此事を小膽



へては索道工事の竣成する曉迄、一生懸命に働けばあの貯蓄をまた元の甘圓にするのは全く不可能の事でもなさうに思はれた。彼は愈々多年の我が生業を棄てなければならぬ時機に際會すれば其時例の貯蓄の幾部分かを以つて、割のよい土地を買入れ、少くとも一家を支へ得るだけの食糧だけ自ら給し得るやうにと、確實な胸算定を立てゝ居つた。併し彼の家は焼けた。彼の全財産は今や悉く一堆の灰燼と化し去つた。其の中には彼等の生命の父のやうな僅少の蓄貯から割愛して新調した父子三人の正月衣裳も交つてゐた。彼等は今たゞ其命を繼ぐためのみに少くとも残された貯蓄の過半を抛たなければならなかつた。おきぬは全く失望して了つた。淺吉は其以上限り無き不安と恐怖の念に襲はれざるを得なかつた。

「然うして見るとあの索道は俺等の生命を奪るやうなものや。そして其恐ろしい索道を一體誰が拵へる……」淺吉の眼には急に猜疑と忿怒の焰が輝き初めた。

「おきぬ。」

彼は自分一人で其名を言つて見るのが如何にも怖ろしい氣がして何か思ひ出したやうに後の妻を呼んで見た。

「横川で索道の會社の重役さんで誰々やお前知つてゐるか。」

「あア。」

おきぬはいそ／＼として軽く答へた。

「妾知つとるとも。併し言はんでも大抵分つとるやらう。一寸當てゝ見よ、人數は皆ンなで三人やさ

かいなア、」

「三人かい。そんなら直に當るわ。まア紀の國屋の村長さんに、西崎屋の若旦那に、それから……ン、さうくあの花内屋の……」

「イヤ違ふ違ふ。」おきぬは花内屋といふ夫の聲を聞いて相手の話の終るのも待たずに其を遮つた。

「そりや大違ひや。一番肝心なのが抜けとる。あのそら……」淺吉はおきぬが自分の身で言つて了ひさうなのを押し止めて「待つた、待つた。一番肝心なのがぬけとる。はてな。ン、あれか、龜屋の旦那やらう。さうや。さうや。」と獨合點をして見た。彼は心の中では十二分に承知してゐながら斯んな出鱈目を並べ立てゝ居つた。彼は自分自身の口から「大和屋の大旦那父子」と言ふ事が唯もう怖ろしくてならなかつた。彼は全く知らぬ風をして其を巧くおきぬの方から言はせるやうにと心を惱ました。

「貴夫一寸呆けとるなア。何ぼ何でも大和屋の大旦那を忘れるちゆう法があるもんかえ。」

「エ、……ン、さうか、淺吉は態と愕きの胸を抑へて平氣らしく之に應じた。

「あんまり知り過ぎるとるもんやさかい、つひど忘れしてなア。さうく大和屋の大旦那にあの若主人さん。でも如何してあの方々が覺え出せなんだのやらう。」おきぬは夫の健忘性を嘲けるやうに、而して自分の見聞の博いのをさも誇り顔に斯う言つた。

「大和屋は身財こそ未だ西崎屋や花内屋に及ばんちう事ツちやけど、彼家の父子程よく出來てる人達はない。其中でも今の若旦那と來たらそら偉いもんやさうな。妾はもう大和中で一番やと思ふてる。あんなに賢こうて、其癖妾等のやうな下々の者にまで細い事に氣を懸けて下さる。あんな人ちゆうも

ことはないでせう。」叔父に其味方たるべく話相手を餘儀なく促された彼は、流石に金満家らしく平氣で斯んな相槌を打つた。

「併しまアさう急かずに相互にもつと實際の事實に就いて充分攻究して見ると宜えやらう」此話には初めから大して興味を感じてゐなかつたらしい當家の老主人は、大和屋の大旦那を初め、若い連中が未だ一片の空想に過ぎない索道問題を、宛然、明日からでも其の運動に着手するらしく夢中になつて騒ぎ廻つて居る態度に慊らず、彼等の熱情に外面上如何にも好意を有つてゐるらしい冷水を浴せかけた。「兎も角此問題は一つ眞面目に考へて見やう。時にお前サンは近い中に郡役所の方へ出張するのやないか。若し郡長に會ふたら、今日の大體の趣意だけ話してあいたら宜えやらう。」大和屋の大旦那は兄の冷談な様子は露程も意に介せず、甥の村長を凝視して斯う言ひ含めておいた。涼みの會合は其儘索道問題を持ち出さなかつた。其れ以來大和屋の父子は日夜此の事を考へつゝけた。殊に計數に明らかな若主人は其弱年に似ず、如何にも着實な而して老熱な思想を懷いて居つた。彼は廿五萬圓説を根據としてあらゆる内外の利害問題を考慮した。其結果此事業は將來非常に有望であることを確信し得た。殊にそれが横川村百年の利福であるといふ事を想ふ時、事業好きな彼は全身に漲る踴躍の情を禁じ得なかつた。爾來三年は夢の如に過ぎた。彼等はあらゆる困難と闘ひ、障礙を突破して漸く自己の計畫に對する希望の曙光を望み得た。就中大和屋父子の努力焦心は人々の共に公認する處であつた。廿五萬圓に對する應募額は殆ど卅萬圓以上にもなつた。今日迄卑下すべき私情の爲め只管其事業の成功を妨げんと企ててゐた村内の某々有力者も、今は既に此大勢に逆行し得ず、自ら進んで其株主となるやう

になつた。會社側は昨年の十月東京のある有名な會社と契約を結び、晩くも本年の五月下旬までには全部竣工する運びに立ち到つた。而してかの淺吉の心を傷ましめるものは實に此問題に外ならなかつた。

「どう考へ直して見てもこの五月中には屹度索道がつく索道が出来たら……」彼は又しても言ひ知れぬ恐怖の念に打ち慄へるのであつた。索道が出来たら……一體それが如何したんや。どうせ出来るもんやないか。……併しあれがつくと下市と横川との荷物は悉皆……」

淺吉は、もう此れ以上自分の小さい胸の中では考へつゞけて行く事は出来なかつた。彼は過去一年間索道問題と自分達の生活といふ事に關連して、可成り頭を苦しませた。比較的綿密な計數の頭を有つて居る彼は、從來以上に支出の節約を計り、萬一の場合索道の竣成と共に多年慣れ來つた荷持の生業を棄てなければならぬ破目に立ち到つても、俄かに見苦しい周章狼狽を敢てする必要のないやうに豫め、之に處する大體の方針を定めておいた。斯くして彼は當時自分達の所有してゐた僅かばかりの貯蓄をして、その年末まで少くとも廿圓位に増加せしめ度いものだと思つて居つた。彼等の生活に取つてこれだけの貯蓄を作るといふことは、決して一と通りの苦勞ではなかつた。併し彼等夫婦は、人一倍に立ち働いた効だけあつて、去年の末頃にはどうかかうか廿圓足らずの貯蓄が得らるゝやうになつた。彼等は此中の幾らかを割いて親子三人の正月着を作らなければならなかつた。斯くして廿圓の貯蓄も今は既に十二三圓を餘すに過ぎなかつた。それでも此だけさえあればせめてお正月の三ヶ日だけは仕事を休んで氣樂に雜煮の汁を啜る位ひの事は出来るだらうと安心し切つて居つた。淺吉の考



は、例に由つて親類同士の涼みの催しがあつた此部屋に此當家の老主人父子を初めとし、大和屋の大旦那父子それに今では此近邑廿四ヶ村での第一長者と稱へられて居る西崎屋の若主人と、都合五人、全く他人入らずの會合であつた。紀の國屋、西崎屋の若主人は共に大和屋の大旦那と叔父、甥の關係に立つてゐた。親族の寄合にてもあまり顔出ししたことのない、花内屋の當主は、例に由つて今夕の常にも其姿を見せなかつた。此四家は横川村での最有力者であつた。村内で如何なる新事業を興すにしても若しそれが多少でも資本を必要とする性質のものであつたならば、彼等の後援助力なくしては、到底其成立すら望み得なかつた。彼等の話題は又しても例の地方産業の開発、而して其根本問題として先づ交通運輸機關の完備といふ一事に落ちて行つた。丁度此話に實がいつて來た頃であつた。當時村長の名譽職を享けてゐた紀の國屋の若主人は、ふとした機會から貨物運輸を目的とする横川下市間電氣索道架設問題の一件を擔ぎ出した。一座の者は思はず顔見合せて、彼の突飛なる提案に一種の輕い苦笑を禁じ得なかつた。けれども凡て或事業の成立する場合にそれとなく當事者の胸に感ぜらるゝ或種の暗示——冷やかに苦笑を洩してゐながらも何となく全體の考へが其方へ惹き付けられて行く——彼等は今其暗示をうす／＼感得したのであつた。經驗に富んだ年長者の前で自分の意見を發表する時、何人も痛感するおづ／＼して逡巡の苦を味ひながらも、かの村長は二三の實例に基いて其の提案は決して無謀の空想でない事を辯證した。

「私高野の索道に就いても一寸調べて見たけど、横川では第一水力が十分利用出来るんで、あれなんぞよりもつと資金がかからんと思ふ……」大和屋の若旦那も急に乘氣になつて「從兄サンそれじゃ

一體どれ程の資本があつたらえ、心算ぞい」ひどく急ぎ込んで先方の未だ話し終らぬ中に愈々具體的の質問を初めた。「私の計算ジャ、無論大分大雑駁には相違ないが——」村長は多少躊躇して「まあ廿五萬圓ありや大丈夫だと思ふが」と明瞭言ひ切つた。

「え、廿五萬圓。」彼の従弟は自分の豫想したよりずっと少額なのに愕いてかく反問した。一座は暫らくの間沈黙に陥つた。彼等はそれ／＼自分の頭の中で其事業と、其資金とを結び付けて或は悲觀し、或は樂觀した。併し大勢が稍悲觀的に傾いてゐるらしいのを看て取つた村長は、如何にも自信に充ちた口調で一座の沈黙を破つた。

「廿五萬ありや澤山さ。私は未だ廿萬でも結構やと考へとる。」

今迄村長と自分の息子との問答を黙つて聽いてゐた大和屋の旦那は、もうすっかり細かい勘定までやつて見たといふ顔付で、

「さうやのう。若しお前さんの言ふやうなら、横川だけでも出來ぬ事はない。併しさうせんでも下市で十萬大阪其他の有志者で五萬募集すりや、あと十萬だけ此方で引き受けたら宜えわけやないか。」と多少得意氣になつた村長の方を振向いて話しかけた。

「のうさうやないか。それに此村で十萬も六ヶ數いと言ふのなら、せめて五萬だけ引受けりや殘部は下市でも、大阪でも、俺が請合ふて募集して見せる。」今度は隣りに坐つてゐた西崎屋の若主人を顧みて彼はさも眞面目らしく斯く揚言した。

「さうです。全く叔父サンの仰被る通りや。なんぼ此の村が貧乏でも高が五萬の端金位は出せん



灰

燼

井口杜村

今淺吉の頭を極度に苦しめつゝある索道問題と言ふのは、此の數年來横川村の有力者間に、提唱せられたもので、最近に到つて急に其計畫が進捗したものであつた。横川村は全く宗義通りに山間の一僻陬であつた。併し吉野杉を以つて天下に有名な此地方の山林業を初めとし、鑛石、石灰、石材等の天産物はなか／＼豊富なものがあつた。殊に近來數年間に於ける此村の發展は、人々の共に驚嘆する所であつた。葉書切手類賣下所が一躍して郵便受取所となるや、年ならずして三等集配局に昇格し、現今では既に電信はもとより公衆電話も架設せられ、尙進んで、特設電話の設置も今は單に時日の問題に過ぎないといふ有様である。其の他尋常高等の小學校は無論の事、巡查駐在所、登記所など數年前と全く其面目を一新した。銀行、村役場も日ならずして此村に設けられるであらうとは既に此近隣に於ける一般の世評である。然るに唯一つ此村の駸々乎たる文明に歩調を合し得ないものがあつた。其れは交通の不便即ち交通運輸機關の不備といふ事であつた。横川の村はもと海拔二千五百尺の高地に位してをつた。而して不満足ながら村民に凡ての重要な日用品を供給するのは、西北五里の彼方に

ある下市の町であつた。而も横川から下市迄五里の道程は決して坦々たるものではなかつた。横川から彼町へ行くには、少くとも峻嶮な四つの峠を越さなければならなかつた。而して此路は逆も荷車などの通り得るものではない。淺吉等の屬して居る荷持にもちの一團いちだんは斯くの如き事情の下に、横川下市間の貨物を運搬すべく發生した荷車代りの生きた器械に過ぎなかつた。彼等の賃金は此間一貫目に就き五錢といふ極めて低廉なものであつたけれども、之に由つて蒙る横川村民の負擔は決して左程少額のものではなかつた。彼等は米、石油、其他一切の日常必須品に對し少くとも一割五分乃至二割方の賃金を仕拂はなければならなかつた。此が一年後に示す決算高は一寒村の財政上より見て決して冷淡な樂觀を容す筈のものではなかつた。けれども其れ以上天災及び人爲の爲め屢々不可欠なる日用品の運搬輸入を杜絶せられ隨つて村民全體の不便尙ほ惹いては生活上の不安に襲はるゝ事遙かに局外者の豫想以上であつた。而して之が爲め横川村に於ける凡ての生産事業が其の天産物の豊富なるにも不拘、微々として振はなかつたと言ふ事は寧ろ當前の結果であつた。既に斯の如き事情の下にある以上如何に計算に疎い横川の村民でも多少村の將來を慮り其向上發展を希望するからには、茲に何等か文明の利器に依つて、此の缺陷大損失を補足しやうと焦慮するに到る事之亦自然の成行と見なければならなかつた。此村のあらゆる有力者は初めて立つた。有識具眼の士は屢々眞面目な會合を催した。併し無智淺慮な地方人民の常として利己以外更に大局を達觀するの明なく、折角の奮起會合でありながら之に由つて彼等は終に何の得る所もなかつた。

然るに今から丁度三年前、夏の或る夕暮であつた。大和屋の大旦那の兄に當る紀の國屋の奥座敷で



兄『妹、おまへは其小鳥

おまへの胸に宿めずには

「静か」でなくて「淋し」からう

妹『あゝ兄さん……

小鳥の聲の失せた様に

あなたが世から消えたなら

兄『おまへは一寸淋しからう

妹『底知れぬ程淋しいわ

何うして其が一寸でせう

兄『「淋しい」事はしばしの間

其のみ女は知ツて居る

妹、男の歌を聞け

静かな静かな夜の歌——

死の様に眠る眞夜中

静かに聞く暗の吐息

生きて起きて蠢く者は唯我思

電燈の光に輝く本よ智恵の巻

白い紙に浮く文字が大空の流星の様に

またラジュームの光の様に

蒼ざめた夜の心に戦々と照る、

と見る本の上、塵の様な小蟲の歩み

其蟲に比ぶれば巨人の様な男の小指

思ふ事なく觸れる一觸れ蟲の崩壊

血もなく骸もない其跡はたゞ

人をして考へさせる夜の重い

沈黙の壓迫——

「あゝあの蟲は今何處へ？」

つひさッきまで元氣よく

此本の上を歩いた蟲が……」

妹『淋しいわねえ……』

遠い静かな眞夜中を

死んだ小蟲のあと追ふ心……

兄『静かだなあ……』

妹おまへに解るかへ

(三、二、十)

## △六合雜誌四百號記念號豫告▽

來る四月を以て、本誌は第四百號に達することゝなりました。愛讀者諸君と共にその發展を喜ぶものであります。最も古き歴史をもてる本誌、最も進歩せる宗教を標榜して立てる本誌は、この記念號に於いて、我が一般思想界及び宗教界に對して何等かの更に新しい暗示と刺戟とを提供したいと思ひます。

# オット・ワイニンゲルに與ふる

佐藤 清

ああわがさよきオットワイニンゲルよ、  
をさなさわが念頭ねんとくにふかくさざみこまれて、  
終生しうせいけしがたき記念きねんとなれる君よ、

われは今君いまきのわれに働はたらきかけし感化かんくわの力と、  
わがかなしむべし淋さびしさ愛あいの経験けいけんと、  
いまやうやく目醒めさめんとするわがうちの生命いのちの力  
とを、

ふかく反省はんせいしてわが生せいの行くべき道みちに迷まよふ。

ああかの無意識むいしきのうちに限りなく繁殖はんしよくするもの  
よ、

彼等かれらはその斷片だんぺんに於おて汚けがるるごとく見ゆ、

されどわがさよきオットワイニンゲルよ、  
彼等かれらはやがて新しき生命いのちとよろこびに生きかへ  
り、

盛さかんなる意識いしきの火に燃もゆるを見よ。  
生殖せいしよくの打勝うちかつべからざる羞惡しうおの念ねん、  
童貞どうていと獨身どくしんの洩もらすべからざる嬌慢きやうまんの心、

われはそのいづれを慕したふべきかをみづから知れ  
り、

されどかの生命いのちに反抗はんかうするものの寂寥せきりようと、  
生命いのちを信しんじてそれを愛あいするもののよろこびを思おもふ  
時とき、

われはいまそのいづれの道を選ぶべきかに迷ふ。

ああわがきよさオットワイニンゲルよ、

ペートーヴエンのやどれる旅舎の一室に坐り、

そのシステムを貫かんために死せし君よ、

われもまたわがシステムにしうねく従ひ、

ふかくうちに食ひいるにがさいたみを忍びたり、

されど君よわが靈は今しののめの風爽かに吹來る

如く、

わが本能とともに新しくめさめて、

生命よりはなれて生命に生命にするは、

全くわれに不可能となりぬ、

しかもわが生命のめざめは遅し、

しづかにうちより湧きおこる力をまたん。

## 冬の夜の對話

石 田 樅 村

妹『ねえ兄さん……』

小鳥が啼いて啼き止むと

氣味わるい程靜かだわ、

小鳥は何處へ行つたてせう

向の森に朝ツから

囀って居た小鳥らは……

埒は何處にあるのでせう

でもあの森じやないことよ

枯木の胸はつめたくて

小鳥は何處へ宿るでせう



箱根山でも通る様な気がする。路傍に歐亞境界の石碑がある。さてこゝから初めてヨーロッパかと思ふと新しい感じがする。

ウラルの山を越ゆる頃、朝からの雨は雪となつた。冬のシベリアを想像して見るとさてもく恐ろしい。

ウラルの山を越ゆればまたしても千里の曠野、歐露にはいつてから大分土地も耕作されて居る様ではあれど、日本のせゝこましい田舎に比ぶれば矢張り茫漠としたものである。

廿五日の朝サマラに着く。ここは中央アジアへの支線の岐れ路、タシケントにゆく一等大尉はこゝで別れを告げて行つてしまつた。地圖を展げて見ると、さても巨人の擴げた掌の大きなことよ。

汽車は尙西へ西へと一望限りなき平野を走つて行く。畑に山の様につんだ西瓜のいかにも甘そうなので、とあるステーションで百姓の子から買つて見ると中々甘い。少し大きなステーションには大抵百姓の子供が乞食の様な風をして洗足で牛乳や菓物を賣りに來てゐる。言葉は通じぬが、金を見せて買ふ。夫でも構内の店で買ふよりは廉い。トルストイやツルゲネツフの小説で自分には御なじみのロシアの百姓といふものを、親しく見るのも亦少からぬ興味を起した。殊に面白いのは、大きい停車場には必ず料理店が附屬してゐて、近村の人達の集まる所になつてゐるから、種々の風俗を見ることが出来る。

此日の午後ウオルガ河を渡つた。流れゆく末は黒海と聞いてゐるが、洋々として海の様な河心を見

ては、どつちへ流れるのか解らない。

九月二十六日　けふは愈々九日の長い汽車旅行も終りを告げてモスコーにつくといふので、誰も彼もまだ明けぬ中から騒いでゐる。イルクツクまでに四時間遅れたれど、イルクツクからは石炭を焚いた故か（驚くなかれ、シベリアの急行車では松薪を焚いてゐる）豫定の時間に着くことゝなつた。やがて御寺の塔の金十字が朝日に輝いて見える。

モスコーといふ聲は口から口に傳へられて、誰も子供の様に窓から遠く見える市街を眺めてゐる。ナポレオンのモスコーへ侵入した時も恐らくこんな心持であつたらう。

九時十分といふにクルスクといふ停車場に着いた。K氏の夫人が出迎へてくれたので、同行の人々や汽車の中で懇意になつた人達に別れを告げた。言葉のまるで通じぬ悲しさには荷物の世話やら何やら一切K夫人の厄介になつて、自分は人形の様に馬車に乗せられてごろ石を敷いた往來を走ること二十分許り、K氏の宿に着いてほつと息をついた。

停車場を出て町に行つて見ると、新しい殖民地といった風の家が、雜然として立列んでゐた、一體こゝは支那領の筈だが、どれもこれもロシア文字の看板があげてある。こんな廣い／＼所があるのに、自分は他郷に流浪して唯其生を貪つてゐる支那人に、國家的觀念のないはこれを見てもすぐ解る。そうしてロシアの放膽な經營策は隨處に之を見ることが出来る。こゝばかりではない、何處へ行つても停車場の構内の廣さ、殆んど其意を解するに苦しむ程である。

さて朔北の野原を吹いてくる風が身に沁みる様なので、散歩も出來ず、歸つて來てみると汽車は中々出そうもない。殊に修繕をしてゐる様子もないに至つては、實に吞氣なものである。車室に入つて手まねで買つて來た粒の一寸もある葡萄を試みてみると、其味のいゝこと甲州葡萄の比でない。更に町の中で買つて來たパンとバターに至ては、到底日本では見ることも出來ないものである。葡萄は尤論クリシャあたりから來るものだらうが、バターに至つては此地方の產物、其外炭礦などもあるといふことである。若しも勤勉なる國民の手に委せられたならば、期年ならずして相當の收益を擧げ得ることであらう。シベリアは決して全然不毛の地ではない。

翌日も汽車は終日荒寥たる平野を走つて居る。果てしなき草原、折々牛羊の群を見る他、山もなければ森もない。今更にシベリアの廣さに驚かれる。

九月二十一日、まだ明けきらぬ五時頃、イルクツクといふ聲に呼びさまされて床を出づれば、窓外霧深くしてバイカル湖の、壯觀を縦にすることが出来ない。バイカル湖畔馬に水かはんと壯語せる人達に、四晝夜の長い道中を見せたら何んといふであらう。

こゝて愛嬌のいゝ車掌に別を告げて、他の列車に乗り換えることゝなつた。六尺豊かな荷物運搬夫（赤帽ではない白い前垂掛をしてる）が争つてやつて来て、大きな鞆を二つ三つも輕げにさげてゆくのを見ると、日露戦役の結果がどうも奇蹟と外思はれない。

（五） イルクツクよりモスコーへ

イルクツクを出てから話も大分盡きてきたので、車室に閉ぢ籠つて雜書を読んだり、飽きれば紙片を切つて遽かにつくつた將棋をさして暮らした。室の中は溫いが、外はなか／＼寒い。

廿三日の夕方オムスクに着く。中々大きな町が見える。こゝからロシヤの一等大尉が我々の室に割込まれて來たので、大分狹苦しくなつた。軍人には似合しからぬ優しげな人で美しい妻君を伴れてゐる。途中所々で兵卒を見たが、牛馬の様に荷物汽車に積込まれて呆然としてゐる。概ね無智にして唯命之れ従ふといふに至つては、實に理想的の兵隊といふべきではないか。日露戦争の結果は全く將校の無氣力に由るといふのは蓋し真相を得たものであらう。

廿四日 朝チエリヤビンスクを過ぐ。ここも中々大きな町、停車場の構内に寶石細工を賣つてゐる。餘り美しいので偽物とは知りつゝも、大抵一つ二つは買はされる。

此日午近くなつて汽車はウラルの山谷に入る。山は高からねど一高一低、松林の綠に交る紅葉の色



## IN MEETINGS.

Once several friends met.

They began to guess who was oldest, who was next, and so on.

I said to them, "You all belong to Time-limitation,  
but I to Eternity."

Saying this, I stepped out of the group.

---

In a meeting every one present was introducing himself.

Each told who he was and what his profession was.

My turn came. I said ;

"My name is a mere symbol and means nothing.

My profession is twofold.

That as a citizen is beneath me ; it is not worth telling.

That as a man is above me ; I am too humble to name it.

What I really am is a question no philosophy has yet solved."

---

In a meeting, some one who had a handle to his name was to speak.

But as he did not come in time they asked me to take his place.

Very soon one who had some worldly fame came in.

Immediately they preferred him and ignored me.

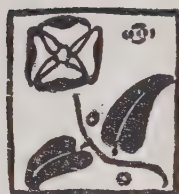
As I was free from a title or a fame, I was freed from babbling.

---

Once the Christians of the University met.

It was found there were unusually many zoologists among them.

Perhaps their study of animals made them grateful for the  
superiority of mankind.



## 歐洲見聞錄

—その二—

盧 山 生

### (四) ハルビンよりイルクツクへ。

ハルビンを出てから汽車は唯荒漠たる朔北の大平原を走つて行く。見る限り秋草離々として處々に水草を追ふて住む土民の群を見る外、村落一つ見えない。さて之からこんな所ばかり七日もつゞくのかと思ふと、さては長い旅路といふ考が湧いてくる。幸ひに九人も同胞が集つたので退屈しない。殊にハルビンからの食堂車には、日本語を多少心得たボーイがゐて、食事の度に笑はすことが多い。一體シベリア鐵道の最も有力な旅客として、日本人は見逃すべからざる位置を占めて居る。一週三回の急行車に往返日本人の居ないことはない。のみならず前週の如きは二十七人も乗り合したといふではないか。若しシベリア鐵道を歐亞連絡の最捷徑として國際的交通機關に供しやうといふならば、日本人のボーイを一人置いてもいい筈である。けれども現在でも二三年前の物騒な時代に比べると、餘程よくなつたのだそうである。殊にロシアの經營の下にありては兎に角、之でも満足すべき方なのであらう。

翌日の午後マンチュリアに着いた。食堂車の車軸が破損して四時間位は待たねばならぬといふに、

## SUN AND MOON.

The far-off sun and moon often seem quite near us.  
We imagine we can almost reach our hands to them.  
No wonder that the ancients thought they were made solely for  
mankind or worshipped them as their familiar gods.

---

## THE LAST DAYS.

Seeing snow-covered fields or ice-bound seas, shall we not imagine  
the last days of life on earth?  
What is civilization then? National greatness? Industrial  
prosperity?  
What about all histories and biographies?  
And all sorts of human knowledge?  
“Philosophie, Juristerei, Medicin,  
Und, leider! auch Theologie.”

Who on earth will find, to save all these, “le feu pour réchauffer le  
Terre quand le Soleil sera plus pâle.”

---

## APOTHEOSIS.

“He is a god.” “He is a god.” “He is a god.”  
The multitude say. And he becomes a god.

---

## PREDESTINATION.

A virgin with a child, a Governor out of Bethlehem, “Out of Egypt  
have I called my son.” “He shall be called a Nazarene.”—  
all these had been the fulfilment of prophecy.

If they had been angeologists, dissecting higher beings, would  
their envy have turned them to Anti-Christians ?

---

## WE AND THE STARS.

We look at the stars.

We think they also are looking at us.

We even imagine they are an audience sitting together in the  
firmament and watching us play.

But, in truth, not a speck of this little earth does reach them.  
They are totally ignorant of our existence.

We call the stars by various names.

So the Greek mythology has passed over from Olympus to the  
heavens.

Some astronomers who are no more on earth are immortalized in  
the firmament.

But what the stars themselves care of such gods and men ?

Further we group the stars in constellations.

We think they are close neighbors whispering to each other.

But does each star of the Great Bear, Orion, or Andromeda pay  
any attention to other stars of the same constellation ?

So we are not at all seen by them.

They care nothing of the names we give them or of the classifica-  
tion we make of them.

Still we sing songs to them as if they are our good friends.

---



### DOCTOR OF DIVINITY.

Doctor of Divinity. What an awful name :  
Even the highest human intellects ought to shrink from it.  
Nay, it seems almost a sacrilege to be so called.  
And why is it that many who bear the name are so ignorant or  
behind time ?  
Did Devil invent the name to be conferred on such mediocre heads,  
thereby to ridicule Divinity itself ?

---

### ATTRACTION AND REPULTION.

The Alpine peaks never advertize themselves.  
But there is no end of alpinists.

Resounding trumpets, preachers preach in the streets.  
And the people turn them deaf ears.

---

### TENDER IDEAS.

We Orientals used to pray for the spirits of the dead.  
In Judaism, seniors gave blessings upon juniors.  
In either case religion went astray from being an individual matter.  
But how tender are these ideas !

---

Tetsuzō Okada.

There can be no prophecy without predestination.

If all these things had been predestined, what of the Sermon on the Mount?

Did Jesus open his mouth and teach just as it was predestined?

Did every word come out of him as from a gramophone?

---

### LAZARUS.

No one knows where was Lazarus during "the four days."

Neither is there any record of what he became afterward.

But surely he was not taken away like Elijah.

So he was raised from death only to die again.

---

### TRIFLES.

For the gods of polytheism it may be worth while to be concerned with rewarding or punishing the dead in the future world.

But will Great God of the Universe trouble himself with such trifles?

---

### FATHERHOOD.

By experience I realize the imperfection of fatherhood.

Think how little of your offspring is really yours.

Christians are proud of their doctrine of the fatherhood of God.

But I do question that.

God must be immensely more than "Our Father who art in Heaven."

---

て成るだけ足早あしばやにそこを通つて行くのです。

南 私などは随分ひどい事をしたのです。旅に出てゐる間に下宿の娘と關係が出来まして子が生れたのです。丁度その時日清戦争が起つたものですから、看護卒を志願して支那へ高飛びして、そのまゝ行方ゆくへを暗くらましてしまつたのです。そういう私でせう。それがまあ典獄ぢやありませんか。ハハハ。

西 行爲だけではありません。私共は或決心をしてゐるのです。言ふまいと心をさめてゐるのです。

それを破つて或ものが監獄へ行くのです。それを破らない或ものは學校へ行くのです。

南 或者は囚人となり、或者は典獄となるのです。囚人と言つても餘り不名譽でもないのです。典獄と言つても餘り名譽でもありません。

西 教師と言つても餘り名譽でもないでせう。

南 しかし典獄よりはいいでせう、ハハハ。

西 教師も時とすると看守や巡査の役目をつとめることがあるのです。うつかりすると探偵の役目までつとめなければならん學校もあるのです。私の友人のをります學校では、教員が遊廓を検査に行くそうです。

南 教員が行くのですか。

西 そう言つてゐました、實に人格を侮辱したことだつて。

南 實に驚くですな。

西

私も巡査になつたといふやうな氣になつたことがあります。或日クラスへ行つて見ると、教壇のテーブルの上に唾がしたゝか吐いてあるのです。私はおこつてしまひました。そして一時間騒いでやつと白狀させたのです。その次の時間に行つて見ると又唾が吐いてあるぢやありませんか。私は白狀させやうと思つてどなつても今度は誰も言はないのです。仕様がなから全體のものを皆残したのです。暗くなつても言ひ出すものが無いのです仕様がなから其日は一旦かへしました。それから引つゞき一週間残したのです。しまひの日には生徒が皆苦しがつて騒ぐのです。騒ぐところちがそれを制するのです。私はあとでは涙がこぼれそうになつたのです。實に残酷だ。私もそう心の中に思つたのです。しかしどうすることも出来ません。實に監獄か學校かです。

南

そういふ酷い生徒もあるのですかな。

西

私の學校は校長が偉いから他の學校のやうなことはありません。私の友人のゐる學校などは實にひどいそうです。生徒が學校へ來たらもう校内から一步も出ることは出来ないのだそうです。

そして生籬は皆針金が植えてあるのだそうです。生徒はそれを鐵狀網といふのだそうです。便所は皆外からガラスがはめてあるのだそうです。生徒が四人で教員が看守です。校長は典獄といつた風なのです。

南

それであなたは私と同じやうな囚人になつたやうな氣におなりになるのですね。



て理解し、尊重し、愛重して行けばいいのです。互に倚り頼んではならない。互に並び立つてゐなければならぬ。自分の重荷のためにつぶされても、他人にその重荷を嫁けてはならないのです。私共は皆獨創の人格者でなければならぬ。人を眞似てはならない。他人を模寫したり、翻譯したりしてはならない。……それから、人といふものは大概ほんとうの事を言つてゐるのです。よし偽といふものがありましても、存意の偽といふものは極めて少いのです。ただ一つのことだけは言はないといふだけです。

南 何だか私もそんな氣がします。御話を承はつてゐると……

西 私幼ない時から行爲に關して、それから、愛に關して、深い決心と感銘を與へられてゐます。そしてそれが私の生活の Keynote になつてゐるのです。

南 それはどういふのですか。あさしつかえがなかつたら仰有つて下さいませんか。

西 卒直に申上げるわけには行きません。學校の點數をお知らせするやうには參りません。あなたは毎日監獄へ行らしつて、どんな風にお感じてですか。

南 私は時々囚人を見て、自分が典獄だといふことを忘れることがあります。

西 それはどういふ事ですか。

南 私自身が囚人ぢやないかと思ふ時があるのです。そういう時は氣がポツツとして來ます。

西 まあ——お待ちなさい。

南 どうなすつたのですか——そんなに吃驚なすつて。

西 吃驚<sup>びつくり</sup>したのぢやありません。さわられたので傷んだのです。

南 私が何にかさわつたのですか。

西 そういふわけではありません。……私は學校にとりましてさへ自分が監獄にゐるのぢやないかと思ふことがあるのです。

南 まあ、あなたが……どうしてそんなことをお考へになるのですか。

西 まあ、お聴きなさい。私の八年通ひました小學校の隣が監獄になつてゐたのです。中學校の時も隣が監獄、高等學校の時も隣が監獄になつてゐたのです。大學だけは本郷でしたから監獄は見なかつたのですが、學生生活を終へて此中學校に赴任して見ると、また隣が監獄ぢやありませんか。

南 ハハハ、それぢや全く監獄か學校か、てすな。

西 私は毎朝監獄の前を通ると、きつと櫛のやうな黒い帽子を被<sup>かぶ</sup>つて、袖口<sup>そでぐち</sup>に金筋<sup>はい</sup>の入<sup>はい</sup>つてゐる看守が、嚴然と黒い扉<sup>とびら</sup>の前に立つてゐるのです。そして私がそこを通ると、ジツと私をながし目に見るのです。或時は又囚人が皆黙<sup>もく</sup>つて門の前の草をとつてゐるのです。うつかりすると、道の真中<sup>まんなか</sup>にぞろ／＼立つてゐることもあるのです。

南 そんなことは滅多<sup>めった</sup>にないでせう。

西 滅多<sup>めった</sup>ではありませんが時々<sup>ときどき</sup>あるのです。そういふ時は、自分は學校へ行くのぢやなくつて、そこへ行く自分ぢやないのか、矢張りあゝいつた風の色の着物<sup>きもの</sup>を着て、黙<sup>もく</sup>つて、人々の嘲<sup>あざわら</sup>りをうけて、生活すべき人間ぢやないのか、そんな風に思ふのです。そして一種の恐怖に襲はれるのです。そし

だん／＼髪が白くなつて、その年になると死んでしまふ、てなことを言つたのだそうです。それから東の頭脳にはいつも二十二歳二十二歳といふ考が脅迫觀念となつて、すべての生活を支配したのです。死といふ暗い觀念がいつもその小さい心に巢くうて、それを食いつくそうとしてゐたのです。そして拾七歳になり、拾八歳になり、拾九歳になつても、不思議に白髪は生えないのです。二拾一歳になつても、二十二歳になつてもやはり身體は丈夫でしたが、學問を本氣でする氣はなかつたのです。そういうしてゐるうちに、東京に參るやうになりましたので、東京の繁榮は東の迷信を破るに充分であつたのです。東は殘念がつて、あのことさへ無かつたら、自分はずっと愉快な生き／＼した生活を送れたらう、しかしもうとりかへしはつかないと言つて歎いたのです。

## 南

まあ、そういう不思議な經驗をもつて、人知れず悩んでゐる小供もあるのですかね。

## 西

大概の小供等は……いや小供等だけぢやない、大概の人々はお互に何か人知れず黙つて背負つてゐる悩みがあるのぢやないでせうか。皆言はないでゐる、何でもその外のこととは皆言つてしまふけれども、その一つだけは誰にもあかさない、あかすことの出来ないものを持つてゐるのぢやないでせうか。そしてそれがその人の運命となるのぢやないでせうか。

## 南

そうかも知れませんな。

## 西

私共は其人の話を聞いて其人の判斷をしたり、其人の行爲を見て其人の判斷をしたりして、すぐ其人の價値を定めやうとしてゐます。又そうして定めてしまはないと承知しないのです。しかしそれは正當な判斷とは言へないと思ひます。私共は人の價値を判斷して、あの人はこう、この人は

こうといふ風に、物品に定價をつけるやうに行くものではないと思ひます。

南

そりあそうです。

西

私はこう思ひます。其人の言ふまいと心をきめてゐる其事を私共が明かに衝きとめることが出来れば、私共は其人の全部を知ることが出来るのぢやないてせうか。あの人は eccentric だと言つて人は嘲笑します。理解も何もあつたものではありません。あの人は傲慢だ、あの人は selfish だ、あの人は無慈悲だ、無責任だと、臆面もなく他人を攻撃します。そういう人々は自分の心に對してさへ理解のない人なのです。私共は皆口に出しては言へない經驗、他人に言つてしまつてはならない強い決心、ただ自分に語つて自分のみが慰めてゐる悲い意志を持つてゐるのです。私共の日常生活、私共の舉動容貌の光や陰影までも、皆この沈黙の中から湧いてくるのです。淋しい、淋しい生命の奥から湧いてくるのです。お互にこの沈黙の生命に通ずる道は、ただお互の生命を理解して、沈黙するより外はないのです。

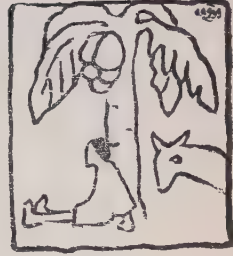
南

どんなに深い友情を取交はしてゐると思つてをりましても、靈と靈は忽ち別々の道を歩いてゐるのに氣がつくことが屢です。

西

私は思ひます。他人の同情がないことを怨んだり、攻撃したりする位愚かな憐むべきことはありません。私は他人の同情を言葉に於て、物に於て求めることをば滿身の力を振つて憎惡したいのです。私共は自分より外に知ることの出来ない悲い意志と生命に對して他人の同情を言葉に於て、物に於て求めるよりも、その寂寥、孤獨——獨創の生命を共に荷うてゐる他の人々をば、沈黙に於





# 監獄か學校か

佐藤 清

## 文學士西

幼ないやはらかな頭腦にうけた印象といふものが、その人の一生涯の運命を決するやうなことになるのです。勿論その人の性格がその人の運命を造るといふこともほんとでせう。しかし遇然の出來事がその人の運命を決めてしまふといふことも事實です。意識の鋭くなつた時代にうける境遇の力に負かされるのは、その人の弱いためであるかも知れません。しかし意識の萌しかけてゐる幼ない頭腦を一度支配したものがあつたと、或時期までは、そのために支配されて行くのです。そして其勢力のために自分の運命が決定されつゝあるといふことに氣がついた時は、もう既に遅いのです。とりかへしがつかなくなつてゐるのです。それでも強い意志を持つてゐる人なら、そこからでも矢張り自分の性格の力に依て、更に自分の新しい運命を開いて行けるでせう。大抵のものはそこまでは行くことが出來ずに斃れてしまひます。

## 典獄南 私も御同感です。

西　そうです。私の友人に東といふのがありました。學校は同じ田舎の學校でしたが、東は私など

よりは三年もさきから學校にゐたのです。そして私と同じクラスになつたのですから、随分まあ後  
れた方なのです。東京に參りましてからは學校の様子も違ふやうになりますし、同じ講義に出席す  
るにいたしましたも、滅多に顔を合せることも出来ないやうな仕末でした。その時分は別に學年試  
験といふものもありませんし、ただ語學試験があるだけなのですから、お互にどんなに進歩してゐ  
るのか全くわからなかつたのです。そしてとう／＼三年過ぎてしまひました。所が驚くぢやありま  
せんか。その東が論文で先頭を占めたのです。そして口頭の試験も見事に通過して、銀時計といふ  
所までは行きませんでした。随分人を驚かせたものです。

南

そりあ驚きますな。

西

て、私は、その翌日一緒に喜ぶつもりで東の下宿を訪問したのです。東は大層喜んでいろんな  
話をいたしました。そして自分の少年時代のことなんか語り出したのです。東が言ひますには、實  
に人生といふものは恐いものだ、僕はもう少しすると、自分の生命を自分で斷つやうな事になつた  
かも知れなかつたのだといふのです。どうしてそんなことがあるのかと聞きますと、まあ聞いてく  
れたまへと言ひながら、顔を暗くして語つたことを約めて言つて見ますと、こうなのです——

南

何だかこわいてすな。

西

何こわくも何ともないのです。それはこうなのです。東がまだ七歳位の時だそうです。東の家  
に法事か何かで來てゐた一人の坊主が、幼ない東の顔を見て、運命を見てやるとか何とか言つて、  
頻りに何か考へるやうな様子をして、お前さんの生命は二十二歳までしきあ保てない、十七頃から

……夫れは誰ですか？ ……

……オオガスト皇帝陛下だ ……

……其の方はアブラハムの血統ですか？ 又はデギド王の一族ですか？ 左様ではありますまい。さうして其の方はイザヤが豫言したやうにこの世界へ平和を持つてお出でになつたのですか？ 其の方の領分は廣大で、さうして無限の平和が來ませうか？ 皇帝陛下は確に平和主義の方では居らつしやらん ……

……イスラエル人！ もう別離れよう！ 君は何んと云つても今日では羅馬帝國の臣民だ。だから羅馬から來る贖罪で満足せにやならん。他にはもう無いのだから ……

と云つて羅馬人は去つた。

希伯人は妻の傍に立ち寄つた。

……メリイ ……

と彼れは呼んだ。

……デオセフ ……

と妻は答へた。

……靜に …… 小兒が眠つて居ますから ……

(其の一終り。續く。)

# 白玉吟

野口 精子

二月ふにがしやすてに心はくれなひの衣きぬを着きるなり紅梅こうばいの咲く  
 ちらほらと白梅はくばいかほる曉あかつきの目さめ清くも春は來にけり  
 春の雪紅梅こうばいに降ふるうつくしきもの例たとへの第一だいいちに置く  
 何事ぞ思ひに餘る大だい世界せかい雪降る夜半よなの水のささやき  
 天上の旅行く心地白しろ玉たまをふみてわが立つ雪ふかのみち  
 雪の後空の晴るれば天地あめつちを波は璃りもて張りし箱はこと思ひぬ  
 あな寒し二月の朝を浮うき雲ぐものおとす涙か霞あられたばしる  
 行く水に茶ちや碗わんかけなど打うち沈しづむ冷つめたき春の光ひかるきさらぎ  
 雪あかし月つきまたあかし白しろ絹きぬにまかれて心夜遊こころよあそびをする  
 知らざりし罪を覺おぼへて心冷ひゆ懷くわい爐いろの灰はいを白雪はくせにまく



と妻の方へ振向きながら希伯來人は云つた。妻は返事の替りに軽く其の頭を下げた。希伯來人は亦羅馬人に話しかけた。

……イスラエル人は埃及から珂南の方へと漂泊して來ました。併しバビロンの占領になつた後、彼等の一部分は又もとの埃及へと歸つて來ました。それは御存知だらう……

その事は私も知つて居る。

さうして此處のイスラエル人は幾千人と云ふやうに人口も増加て來て、さうして大きな伽藍や寺院を建立した。ほら遠方に見えるのが夫れさ。其様云ふ事柄も知つて居るかね？

……えゝ、少しは知つて居ます。ぢや彼處も同様羅馬の領分ですか

……無論。今日では何處でも羅馬の領分さ。シリヤ、珂南、希臘、埃及、日耳曼、ゴオル、ブリテン……この世界は皆羅馬の領分さ。——Canaan の神託の通り……

……左様かも知れん。併しこの世界は我々の神様が先祖のアブラハムに約束なすつたやうに、我々イスラエル人に依つて贖罪されるのです……

……私も其の傳説は聞いたこともあるが、——併しさし當つては、羅馬は其の神託の通り世界を領有して居る。君も又イスラエルから來たのか？……

……左様です。他の人と同様に沙漠を越へて來ました。さうして家内も小供も一緒に連れて參つたのです。……

……子供を？——さうか！何故君達希伯來人は其様に多數小兒と一緒に連れてあるくのだ？……

希伯來人は沈黙<sup>だま</sup>つて居つた。併し彼れは羅馬人が其の何故と云ふことを既に承知して居ると云ふことに氣が着いたものだから、さうして其の羅馬人が慈愛に富んだ人のやうに見受けられるものだから、彼れは斷然其の何故と云ふことの裡に竊<sup>ひそ</sup>んで居る眞實の事を話さうと決心した。

……それはかう云ふ理由<sup>わけ</sup>です。ヘロデ王が或時<sup>あるとき</sup>、東方の賢人達<sup>かしこひたち</sup>から、猶太人の眞の王様は其の國のベスレヘムと云ふ處で降誕<sup>うまれ</sup>すると云ふ豫言を聞いたからです。そこで王様は他日自分をあしのけて、新に王位に就く者が興ると云ふ危険と畏怖<sup>おそれ</sup>とを除かうと云ふ目的で、其の處の近來生れた總體<sup>のこらず</sup>の小供を皆殺戮<sup>みな</sup>して仕舞ふと決心したのです。丁度 Pharaoh が此處<sup>ここ</sup>で我々の先祖の最初の子供を殺戮したやうにです。併しモオセスは埃及の羈絆から我々の先祖を獨立自由にする爲に神様の御仁惠<sup>みめぐみ</sup>で助かつたのです……

……ふむ。すると、誰れがこの猶太人の王になると云ふのだ？……

……神様の御約束になつた救世主です……

……君はもう此人が生れて居ると信ずるのか？……

……私<sup>わたくし</sup>には解<sup>わか</sup>りません……

……いや私<sup>わし</sup>にはよく解<sup>わか</sup>る……

と羅馬人は云つた。

……彼れは確<sup>たしか</sup>に生れて居る。彼れは全世界を支配し、さうして一切の人間を彼れの統治の下に置くだらう……



# 史影

(By August Strindberg)

千葉 掬香 譯

## 其の一 (Leontopolis)

沙漠を通過する行客の一隊は、上古の埃及の一市街なるヘリオポリスの東方に崛起して居る小高い岡の上に一夜の野營をはつた。其の一隊の中には澤山の人が居つたが、彼等は總て希伯來人であつた、彼等はバレスタインから駱駝や驢馬に騎つて沙漠を越へてやつて來たのだ。——丁度幾千年の昔、彼等の祖先が通過した同じ沙漠を越へてやつて來たのだ。

黄昏の朦朧とした光の中、かたはれ月の極めて淡い微光の下、野營の火光が無數に見える。さうして其の焚火の傍には、男子達が清泉を汲んで來るのを婦人の群は兒童達と共に待つて居た。此の沙漠にこんな澤山の小兒が集つたと云ふことは、ついぞ今迄に絶無の事であつた。さうして此の澤山の小兒が丁度今寢かし付けられやうとする間際であるから、其の泣聲は野營の一隅から他の一隅へと響き渡つた。野營は宛然廣大なる一個の育兒室のやうだ。併しやがて就眼前の澡浴も済み、さうして小兒達は各々に其の母親に添乳して貰つて寢る、と、其の泣聲も段々止み、さうして竟に全然靜寂

となつて仕舞つた。

亭々たる鈴懸の樹<sup>シカモワ</sup>の木根<sup>きのね</sup>に腰をかけて其の幼兒に乳<sup>ちち</sup>を吞ませて居る一個の婦人がある。すぐ其の側に一個の希伯人<sup>つゝたつ</sup>が直立て、エニシダの小枝を驢馬<sup>ばば</sup>に食せて居る。彼れはやがてそれを濟<sup>す</sup>ませると、岡の上の方へと登つて行つて、さうして北の方角を眺めた。一個の外國人——其の衣服の様子で判斷すると——羅馬人？——が其處<sup>そこ</sup>を通つた。さうして樹下に幼兒を懷いてそれに乳房<sup>ふく</sup>を含ませて居る婦人を凝<sup>ちつ</sup>と視た——宛かも其の人數を勘定する様子で。希伯來人は不安の様子を示した。さうして羅馬人の注意を婦人から移させやうとして彼れに談話を試みた。

……一寸伺ふが、あの東の方に見えるのが太陽の都ですか？  
……其の通り……

と羅馬人は答へた。

……ぢやあれは Bethshemesh<sup>ベスシメッシュ</sup> ですかあ？……

いゝや違ふ。あれはヘリオポリスだ、希臘人も羅馬人も皆彼處<sup>みなあそこ</sup>で學問したんだ。プレートオも彼處<sup>あそこ</sup>に居つたことがあるんだ

……レオントポリスの都も又此處<sup>ここ</sup>から見えますかな？……

……此處<sup>ここ</sup>から北の見當<sup>けんたう</sup>で二哩<sup>ばか</sup>許<sup>きき</sup>り先にほら其の塔の頂上が見えるだらう……

……ぢや彼處<sup>あそこ</sup>は我々の先祖のアブラハムが其の昔訪<sup>た</sup>づねて行つたことのあるゴオシエンの土地だ。さうして又ヂエコブが其れをアブラハムに遺して置いた處<sup>ところ</sup>だ。……



山東青島

# 青島山學院

## ◎神學科

一、本科、別科ノ二科ニ分チ、別科生ハ學歷、信仰、性格等凡テ規定ノ手續ヲ經タル者、本科生ハ中學校及ビ同等學校卒業生ニシテ都會ノ推薦等凡テ規定ノ手續ヲ經タル者ニ限り各入學ヲ許ス  
二、本科、五ケ年、別科ハ三ケ年トス  
三、專門學校令ニ依リ認可ヲ經、徵兵猶豫ノ特典ヲ有ス

## ◎高等科

一、本科、豫科ノ二科ニ分チ中學校及同等各種學校卒業者ハ無試験ニテ豫科ヘ、本科ヘハ試験ノ上各入學ヲ許ス、豫科ハ一ケ年、本科ハ三ケ年トス  
二、英語科中等教員及ビ實業界ニ出デントスル者ノ爲メニ英語ヲ主トシテ須要ノ科目ヲ教授ス、卒業生ハ文部省ノ中等教員無試験檢定ヲ受クルコトヲ得  
三、今ヤ各私立專門學校卒業生ニシテ就職難ヲ訴フル者多キニ係ラズ、本科卒業生ハ教育界、實業界各方面ニ重キ信任ヲ受ケ需用最も多シ  
四、專門學校令ニ依リ認可ヲ經、徵兵猶豫ノ特典ヲ有ス

## ◎中學科

一、中學校同等以上ノ認定アリ卒業生ハ無試験ニテ判任官採用、一年志願兵タルコト、又各高等學校、專門學校、海陸軍諸學校ヘ入學ノ資格ハ勿論、官公立中學校ト凡テ同一資格ヲ有ス  
二、一學年ヨリ米國男女教師懇切ニ英語會話ヲ教授ス  
三、土地乾燥、空氣最モ清鮮ニシテ衛生上可絶好ノ適地ナリ  
四、在學生ハ兵役ヲ猶豫セラル

## ◎生徒募集

神學科 若干名、高等科、本科、若干名、同豫科五十名、中學科第一學年 百五十名、入學者ハ本院ヨリ入學願書用紙ヲ交付ス、入學試驗ハ四月六日午前八時トス規則書入用ノ者は郵券二錢送附ノ事

のである。こゝには何等互に相傷うとはない。互に相助ける、否な宗教の極意の一致を感ずるのである。さればオイケンが「自由の最高能力は隷屬の最強意識を包含す」と云つたのは甚だブラドックスのやうであるが、眞理であらうと思ふ。

斯う云ふ考へ方をするのが、僕の云ふ本源の生命に溯るとである。さうすれば議論で分らないとも解決がつく。さうであるから我儕は何時も生命の本源に溯りたい。と云つて固より歴史的の發展や理論を輕蔑するのではない。それは尊重する。けれども解決は本源でしなければ出来ないことがあると云ふのである。否なさうしないと眞の解決が出来ないのみならず生命もない。その理由は恐らく、本源には神的生命が常に噴出して居るからであると思ふ。これに觸るれば神の生命は、我儕の生命の中へ流れ込んで来る。さうすれば我儕が神を離れやうとしても離れられるものではない。信仰を時には弊履を棄つるが如く棄つるものもあるが、それはまだこの生の本源に觸れなかつたからである。

### △未 來 第一輯 東雲堂發行

自然主義の桎梏を破つて、吾々の精神の自由な生長、吾々の生活の無限新の更生の爲めに、新しい藝術を生まんとする人々の新しい企である。女性（露風）手を伸ばせ（柳虹）雪景（健）「知見」の塔（允）狂氣（和一）鶏頭（八十）空（嘉香）詩歌の象徴（イエーツ・允譯）緑に搖るる空へ（庄平）智慧樹（三良）等二十餘篇他に山田耕作氏の作曲「すすりなくとき」を載せたり。内容體裁ともにフレッシユな感じの宜い、年四回刊行の雜誌である。細評次號に…… 價〇・六〇……

# 神戸関西學院高等學部生募集

●在學生徵兵猶豫特典有

●出願四月四日正午迄

文科一年

(哲學科、英文學科社會學科)

商科一年

(甲部 乙部)

神戸市外

私立 關西學院高等學部 (電話三〇長一七二〇)

▲無資格者ノ爲メ別科ヲ設ク  
▲學則及貸費規則郵券貳錢送付又來校  
▲六日、七日英語及人物試驗施行

(中學校指定校卒業生)

(社會學科ハ政治法律ヲ主トス)

(中學校指定校卒業生)

(甲種商業學校卒業生)

凡五拾名

凡九拾名

勞働問題解決の先驅者

友愛會の機關新聞

毎月一日十五日發行

## 友愛報新

定價金三錢 税五厘

發行所

東京市芝區新堀  
町三十一番地

友愛新報社

■次目號近最■

親心ある工場主  
工場労働要義  
日々的心得  
英國ヨーク市近郊の模範工場  
婦人の力  
法律問答  
労働者組合の規則  
日給一圓の職工年俸數千圓の  
工場主任となる  
自由文壇  
聯珠競技  
學問と常識  
友愛俳句  
家庭欄  
會報

社田孝一 稅  
神居喜九馬  
棟江孝之  
生渡戸稻造  
柳國之助  
山縣憲一  
服部金太郎  
鈴木互清  
記木一篤

(見本は御申込次第贈呈す)



僅に一ケ年で佛教の大系が學び得られる

▲佛教研究法

東洋大學教授  
日蓮大學教授

島地大等

▲日本の佛教

東洋大學教授  
豐山大學教授

野黃洋

▲佛教概論

加藤咄堂

▲歐米の佛教

宗教大學教授  
帝國大學講師

渡邊海旭

▲印度の佛教

帝國大學講師  
ドクトル

荻原雲來

▲佛典の解説

帝國大學講師  
文學部

常盤大定

▲支那の佛教

東洋大學教授  
豐山大學教授

境野黃洋

▲禪學要義

加藤咄堂

# 佛教講義録

購金一ケ月分(二冊)  
三ケ月分(三冊)  
金一圓五十錢  
六ケ月分(六冊)  
金一圓五十錢  
一ケ年分(十冊)  
金五圓五十錢  
東修金五十錢

讀金一ケ月分(三冊)  
三ケ月分(三冊)  
金一圓五十錢  
六ケ月分(六冊)  
金一圓五十錢  
一ケ年分(十冊)  
金五圓五十錢  
東修金五十錢

料金一ケ月分(三冊)  
三ケ月分(三冊)  
金一圓五十錢  
六ケ月分(六冊)  
金一圓五十錢  
一ケ年分(十冊)  
金五圓五十錢  
東修金五十錢

▲法華經講義

東洋大學教授  
日蓮大學教授

島地大等

▲宗教學綱要

眞言大學教授  
文部省  
學士

道玄

▲觀音の研究

東洋大學講師  
釋

清潭

▲佛教綱要

眞宗勸學故島

地默雷

▲佛教美術談

帝國大學講師  
文學部

中川忠順

▲基督教綱要

慶應大學教授  
日本大學教授

廣井辰太郎

▲太子御像解説

故平子鐸嶺

▲神道綱要

日本弘道會  
講師

足立栗園

僅に五圓五十錢で佛教全書が整へられる

三月十五日第一號發行 當日までの購束修不要

(中附七)

社版出午丙

東京 石川區 原町 六八  
小東 區 一六  
京東 區 五二  
替東 區 一六  
電東 區 八〇  
話東 區 六八

所行發

結完年ケ一滿



# 帝國文學

第十二卷

三月號

定價  
金二  
十錢

郵稅  
一錢  
五厘

- |                          |                         |                   |                        |                  |                             |                  |                   |                       |                       |                     |                     |
|--------------------------|-------------------------|-------------------|------------------------|------------------|-----------------------------|------------------|-------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|---------------------|
| △特に藝術的と云ふこと(評論).....石坂養平 | △誤られたるイブセン(評論).....片山孤村 | △蘇生(小説).....上野竈太郎 | △美術品と文學(フルジエ).....後藤末雄 | △魔術(イエツ).....山宮允 | △戯曲クライストの最後(ボオレンツ).....成瀬無極 | △鬱幽(短歌).....山田檳榔 | △空の彼方(短歌).....細谷明 | △戯曲海鷗(チエエホフ).....伊東六郎 | △藝術座について(時評).....灰野庄平 | △二月の劇壇(時評).....久米正雄 | △二月の文壇(時評).....石坂養平 |
|--------------------------|-------------------------|-------------------|------------------------|------------------|-----------------------------|------------------|-------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|---------------------|

大日本圖書株式會社

東京

銀座

座

主筆

加藤直士

週刊

# 基督教世界

每週木曜發行  
一部金五錢  
半ケ年金二圓廿錢  
一ケ年金二圓廿錢

◎本誌は日本組合教會出版部の經營する所なれども、同時に我邦進歩的基督教全體の機關たることを期す

◎本誌は明治十六年の創刊に係り三十年の歴史を有する基督教界最古の週刊新聞なり

◎本誌の編輯は加藤主筆の外、小崎弘道、宮川經輝、原田助、渡瀬常吉の四氏熱心其任に當る

◎好評噴々たる本誌の特長は基督教の立場より常に時事問題を評論し且つ最新の智識を以て斯教永遠の眞理を闡明するに在り

◎每號主筆の社説と、教界先輩の説教と、内外名士の論説と、新進思想家の研鑽と、清新なる文學と内外宗教界の出來事及び教勢一斑を滿載す

◎本誌は信仰修養の糧として、傳道用冊子として、信者家庭の讀物として、最も好適なる出版物なり

◎百聞は一見に若かず、見本は御一報次第進呈すべし

大坂市北區  
中之島二丁目

發行所

基督教世界社

大阪  
大坂  
三軒  
口七  
座三

内外教育評論編輯所編纂

(本文菊判六百二十頁)

増補

新版

文部檢定  
中等教員  
受驗指針

一冊定價金壹圓

小包送料金八錢

但清朝臺樞は郵送料金拾貳錢

漫然たる受驗指針書に非ず本社記者が既往數年間檢定試驗委員數十家を歴訪して得たる結果を分析總合して先づ受驗に對する注意及委員諸氏の注文を述べ之に排するに最近合格者の眞面目なる實地經驗談を以てし「如何なる參考書を如何なる順序に讀むべき乎」「其參考書中受驗に最も値價あるものは何々か」「其の研究法は如何にすべき乎」「實地は如何にして研究すべき乎」「時間は如何に利用すべき乎」「試験問題解答の實際如何」「口答試験の實際如何」其他研究上受驗上如何なる注意を要する乎」等受驗に關する一切を闡明して殘す所なし。

本書載する所音樂手藝の二科を除ける全科目に及び附録として教員免許令、最近改正檢定試驗細則。最近三箇年本豫備試験問題集及購讀の便を計れる參考書目錄を添えたり。眞にこれ受驗者の一大羅針盤たり一大燈明臺たるべし。若し夫れ本書が指示する受驗學風の弊、聽て現教育界の弊の如何なるかは單に受驗者のみならず一般教育者の亦悉知せざるべからざるものならん乎。

發行所

東京本郷區駒込千駄木町  
振替東京一二七三〇番

内外教育評論社

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副  
長、八目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)  
(本 八九八(私宅用)

## 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

## 院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ 一一番

## 南湖院

河野、高橋、兩副長、八目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後  
入院、診後應需



がある。斯くポーロは信仰を以て神を見、愛を以て人間に對して居る。これが彼れの眞實の生活であつた。此の眞實の生活は豫定論など、稱する乾燥したものではない。豊かな生命である。我儕はこの生命に共鳴したのである。

#### 四

そこで我儕はもう一度前に歸つて論じて見たい。眞實の生活は水の流るゝが如く動き、火の燃ゆるが如く生きて居る。決して概念を重積したやうに冷然として固結しては居ない。而て流るゝのは自ら流れて居り、燃えるのは自ら燃えて居るのである。けれども此の流れ、燃えるものを見ると、否な比喻を廢めて事實を云ふならば、意識の活動を直接に見ると、そのうちには自己より遙かに勢力あり、偉大であり、高潔であり、神聖であるものが見える。一言にして云ふならば我儕は茲に神を見るのである。斯うなると我儕は神を外方に置いて之れと對立しては居ない。神を我が意識の中に取り込んで居る。けれどもさうかと云つて、我が意識即ち神とか、或は神は我が意識の創作するものだとか云ふのではない。意識の中にはあるが、意識の以上のものであり、意識に先きだつたものに相違ない。けれども我儕は神を我儕の意識のうちに見て居るのである。そして我儕の宗教意識の盛んな時には、我儕はこの神と渾然として一になるのである。——之を前に云つた豫定論によつて考へれば神は我儕の外に在つて我儕を左右して居るのではない。我儕は神の力が我儕の意思の根本に動き、そして我儕の力となつて現はれると思ふ。我儕の自由の活動盛んなれば、神の力は益々我がうちに増加すと感ずる

# ■萬人興望の名著生る

京都帝國大學講師  
同志社大學教授

シドニー・ギエリック先生著

〔好評嘖々〕

## 科學概論

■菊判布製五百頁

定價壹圓六拾錢

■小包料 十二錢

萬朝報逸早く本書を評して曰く。

人間が個人的にも社會的にも幸福に向つて進まんが爲には廣く諸科學の性質及關係に就て、正當なる知識を獲得するを要するとの見地より試みたる一種の講演なり。まづ科學の概念より入りて、次に哲學を説き、諸科學分類の歴史を檢し、一轉して宗教及神學の要を云ひ、美學、倫理學に言及し、さて如上諸科學の範圍關係を明かにし、且つ之を概括せり。繁簡に就ては多少の異論もあるべけれど、刻下の日本人に對しては、殊に意味ある述作として謝すべし。

シドニー・ギエリック先生著

### 獨逸神學略史

定價 一圓廿五錢  
郵税 八錢

〔中附一〕

元 版

東京 東尼  
橋町 京張

警 醒 社 書 店

振替 五三  
東京 東尼  
番 京

その身の危きをも意としなかつたとは人の知る所である。アウグスチンとてもさうである。彼れが北アフリカの故山に歸り、多數の子弟を教育するの如何に懇切なりしぞや。此處に將來千有餘年の間、教會を支配するの勢力は涵養せられたのである。ルッテルとても亦たさうである。彼れの一生は自ら犠牲となる決心を以て進んだてではないか。彼れの傳記のうちより唯だ一事を擧げんに、彼れがウォームスの國會に招致された時はどうである。彼れ往かんか、その危きこと累卵の危きよりも甚だしかつた。多くの友人は彼れを諫めて往かざらしめんとした。然るに彼れは「假令ウォームス市の屋根の瓦ほど惡魔が居らうとも我れは往く」と稱し決然として往つたてはないか。

彼れ等は一方に於ては豫定説を取つて居る。然るにその行動を見ると、自らよく決斷し、自己の責任を自ら負うて立つて居るではないか。これはどう云ふものである。我儕は豫定論などと稱する抽象的の學説を提出して、議論を上下するが故に遂に底止する所がないやうになる。吾人は一步を進めて豫定論の發源した精神的活動を知らなければならぬ。さうすると六ヶ敷い議論をなさざるも忽ち共鳴する所がある。思ふに基督教の教義に於ける豫定論は、ポーロに出てたりと云つて差支はなからう。之を以てポーロに就て更に少しく考へて見たい。

ポーロの豫定論は實に峻刻である。彼れは云ふ「神は憐まんと欲ふ者を憐み、剛愎にせんと欲ふ者を剛腹にせり。されば爾が我れに云はん、神何ぞ尙ほ人を責むるや、誰れかその旨に逆ふとをせんと。嗟人よ爾が何人なれば神に云ひ逆ふや、造られし物は造りし者に向ひて、爾が何故に我れを斯く造りしと云ふべけんや。陶工は同じ土塊をもて一の器を貴く、一の器を賤く造るの權あるに非らずや」(羅

馬書九章十八—廿一」と。是れ絶對の豫定論であつて、神は陶工が同じ土を以て器具をその意の儘に造るが如く、人間を支配し、人間は唯だ黙して之れに服従するの義務あるのみである。何ぞそれ殘酷なるやと叫ばざるを得ない。

けれど我儕はポーロが此の如き豫定説に到着した徑路を考へて見たい。彼れは實に猶太人である。そして愛國心に富んだ人であつた。然るに大多數の猶太人はどうである。殆んど全部は皆な基督の救済に與らざるものではないか。彼れは之を見て斷腸の思に堪へない。彼れはその國民が神に背くを見ても之を惡むとは出来ない。否益々之を愛するの情に燃えた。然るにポーロを以て見ると、基督の救済に與る者は猶太人のみではない。否な他の諸國民も亦た之れに參加するのである。否な恰度猶太人がその與へられたる救済を排斥したとが一轉して世界の人民が一般に救済に與る因縁となつたのである。さすれば猶太人は亡びながらも神の豫定であるのだとなして自ら心を安んじたのである。我儕は主智識的方面からポーロの見解を批評するとは幾許でも出来る。然しそんな必要はなからう。我儕が此の學説即ち豫定論の前にポーロの精神に生きて動き出したもの、換言すればその直接なる精神活動が知りたいのである。

それは何んであらうか。彼れの愛心である。その國民に對しあらゆる善さとを希望する愛である。その國民に對しあらゆる善さとを希望する愛である。同じ心を以て諸國民に對する愛である。人間に對する愛と福音に對する熱心とが相集る時には燃え上らざるを得ない傳道心になる。然し唯だこれのみではない。これ等のものは實に奇しき力である。此の力の底には秘密がある。此の秘密の後には神



るであらう。先づ銀座、金の指環、金圓の供給、湘南の佳人、小包郵便等數多の記號を列擧するであらう。次ぎにこれ等の名稱の間に、種々の關係をつけて、何等かの連絡を求むるであらう。指環と金圓との間には經濟的關係をつけ、余と郵便物の間には社會的關係をつけ、そこで余と佳人との間には友情關係をつけて一般的の法則を立てるであらう。かくの如くして科學者は余の單純なる一行爲を理解し得たと思惟する。然れどもかゝる説明は余の行爲の本質を少しも理解してゐない。之れは單に行爲の一般形式に過ぎない。

我儕もこの説明には同意する。科學者の分解は決して行爲の本質を理解し得ない。本質は生命そのものが形成して居る。その如く教義も亦た宗教それ自身の本質を理解し得るものではない。宗教の本質たる生命を捕捉し得るものではない。だから我がうちに燃えて居る生命は生命の形式たり、死骸たる教義とは沒交渉になるのである。

### 三

然らば如何にせば可ならんか。詳言せば宗教の源發的な、潑刺たる生命が握ざられやうか。我儕は一方に於て自己の宗教的に動く精神の生活を尊重すると共に、他方に於て教義となつて居る歴史的宗教を度外視するとは出来ない。歴史的宗教の教義は幾百千年の間に、斷えず進歩して來たものである。若し我儕にして、之を度外視するならば、我儕は幾百千年以前の原人に似たものにならざるを得ない。恰度過去の發展を度外視した未來派の畫は小供のぬたくつた畫に似るやうに、自然に歸れと云ふ自然

主義の行爲は野獸に似た所があるやうに。しかしそんな退化的のどが出来たものでない。けれど我儕も亦た宗教の教義を還元して見たいのである。云はゞ蛾が繭を破つて動き出すやうに概念を破つて、その概念が最初成立した、即ち精神の生活と接觸する處にまで溯りたいのである。さうすると其處に概念的な教義はなくなるが、その代り宗教の生きた本源がある。此の本源は聽て矢張我儕の宗教的生命の本源である。さうすれば教義となつた宗教が我儕と對立しては居ない。還元せられ、生命となつて我儕の内部に取り入れられるのである。——けれども斯う云ふ議論は餘り抽象的であるから、明瞭を缺いて居る。是を以て例を擧げて考へて見たいが、例を擧げるとなると、幾らでもある。否な宗教の教義は皆な例になる。故に唯だ一例を擧げるとにする。

豫定説と非豫定説或は自由説は、古來基督教會の大問題の一である。豫定説によれば人間萬事悉く神の定め給ふ所である。されば人間の意思に依つて自由に決斷して行ふとは一つもない。斯う考へると人間に自己の行爲と云ふものは一つもない。若しこれなしとせば善をなすも、惡を行ふも自己の責任ではない。従つて道德の破壊になる。若しさうすれば人間は何の酔狂ぞ、自ら好んで奮勵努力しやう。然るに不思議なのは、基督教會の歴史に於て最も活動的の大人物であつた。ポーロの如き、アウグスチンの如き或はルッテル、カルヴィンの如きは皆な豫定論者であつた。そして粉骨碎身、教に殉ぜんとしたものである。

例へばポーロの如きは、若し神の意思ならば彼れ自ら奮つて傳道せずとも、福音は廣まるべし、となして落ち付いては居なかつた。陸に海に各地を遍歴して教へを説いた。否な幾多の艱難辛苦、否な

命あるものはどうしても固結のうちに囚へられることは出来ない。必ず此の束縛を突破する。そして新しい生命の發展が再び發端から繰り返へされるのである。生物的生命と精神的生命とは同一に論ずることは出来ないが、互に類推アナロギとすることは出来やう。精神の產物でも年月を経る間には、必ず老衰もしやう。固結もしやう、或は囚れもしやう。さうすると更に斯う云ふものは老衰した、固結した、そして囚れた產物となつて、遂に初め之を生んだ精神に累を及ぼし厄介物となる丈けて、何等の親しみもないものとなる。茲に於て、精神に親しみが出来るのみならず、活潑溌たる運動あるものとならん爲めには、再び生活を本源から初めなければならぬ。即ち蛾が蛹を破つたり、動き出すことが必要である。

## 二

在來の宗教は、我儕には餘り親しみが無いやうな氣がする。神さびた宮の前には心自ら尊嚴を感じなければならない、それは今の宗教に對して起る心ではない。莊嚴、幽邃な自然が與ふる神韻インスピレーションである。寺院には、徒らに佛像が名工の手腕を嘆賞せしむるあり、僧侶の袈裟の華美なるに驚かざるゝのみである。我儕の心靈と宗教そのものの交渉は殆んどなしと云ふも敢て不當でない有様である。

基督教に於ても矢張り同じことである。基督教は我邦に於ては未だ何等寺院、教會の莊嚴の誇るべきなく、又僧侶、牧師の衣服の眼につくものはないから、それ等は別問題であるが、その主要事件として取り扱れたる教義に至つても亦た我儕には何等の親しみも生じない。三位一體を信じなければ地

獄へ行くと云はれた所で、或は晚餐式を受けずに死ぬれば罪が宥されない云ひ聽かされた所で、そんなことは南洋の御伽話を聞く位にしか思はれない。何んて昔しの人はいこれ等の教義の爲めに、死ぬるの生くるのと大騒動をしたのか、大會を包圍して威壓したものであるか、殆んど之を解するに苦しむ位に没交渉になつた。

然らばこれ等の教義、即ち三位一體論とか、基督論とか、洗禮、晚餐式とか云ふことが、何故に斯くも我儕に親しみのないものになつたか、没交渉になつたか、と云ふに、これ等のものは皆な固結したものとなつて、我儕の外部に、我儕と相對立して居るからである。これ等のものゝ中へ我儕の生命が浸み込んでも行かず、又我儕の生活の中へそれ等のものが浸み込んでも來ない、換言すれば同化、渾一の作用がこゝに行はれないからである。

教義は言葉から成立して居る。言葉は概念を現はすものである。言葉や概念は固より無用なものではない。然しこれは第二次的セカンダリーのものである。此の第二次的のものが出來る以前に第一次的のもの、否源發的のものが存在しなければならぬ。それは生命或は生活そのものである。之を言葉に依て概念的に組み立てたのが教義である。然らばこゝに重要な問題は、この概念の中へ生命そのものが少しも殘る所なく入るや否やと云ふとである。之を議論で決定するとは物自身の性質上出來ないものである。

前等の誌上に野村君が次ぎのやうな面白い例を出して云つて居るから之を借用する。

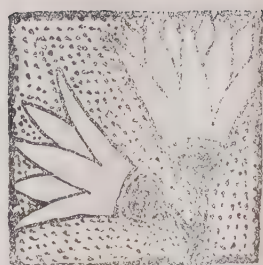
余が銀座の街頭から金の指環一個を買ひ求め、之を小包に託して湘南の佳人に贈つたとせよ。この行爲は單純で而も不可分割のものである。然るに科學者は余の行爲を分解して、いろ／＼に説明す



る。社會の革命者、先驅者となるとが即ち自己生活を眞實にし偉大にし新しくする所以である。

最後に我々の内面的要求即ち價值意識は、普遍的なりや否やに就て余の意見を述べておく。こはよく論ぜらるる問題であるが、普遍的といふ意味が、凡ての人の要求が同質であることならばそれは間違ひであらう。蓋し同質であるならば、個性の自由は無意味になるから。若し普遍的でないといふとが、到底一致しないといふ意味ならばそれは亦間違ひであらう。蓋し一致しないものならば、何も他人に向つて主張する必要はないから。我々は自己の要求を物質や草木に對して主張しない。唯人間に向つてのみ主張する。マホメットは唯人間に向つて劔か貢蘭かを叫んだ。是れ即ち我々の要求は各々異なるも拘らず、亦互に流通し感應し得るが爲めであるまいか。恰も陽電と陰電とが互に結合してそこに火花を發するやうに、我々の異なる要求が他に接觸するとき、そこに感應融合が生じて生の飛躍と創造の光りとを感じ得るが爲めてなからうか。異なるものが融合して成長し發達するは生の本性である。たとへ人間でも何等の感應もないときは物質と同様である。ピラトは基督の眼に一塊の物質として映じたであらう。故に彼れに向つて眞理を説くのを認めなかつたのである。

斯かる意味に於いて我々の要求は本來普遍的のものである。一體我々が自己の要求を表現し主張する所以は、生の普遍性に基因する。生は常に永恒ならんとし普遍ならんとする衝動である。要求の表現とは即ち客觀化である。要求の主張とは即ち普遍化である。言ひ換へれば客觀的に普遍的にならうとする、更に言ひ換へれば客觀的普遍的意味を創造せんとするのが即ち我々の根本生命である。斯くして我々は自己と感應し得る人々を欲求する。而してかゝる人々が多くなればなるに、益々自己の生命の成長と進化とを感ずるのである。眞の意味に於ける道德や宗教は、この要求の發現である。



## 宗教の精神的本源

三 並 良

甚だ月並的の云ひ様ではあるが、現に存在するものには、その由來がなければなるまい。必ず何等かの變遷史がある。殊に生命を有するものに至つてはそれが著しくなる。更に人間に至つては、自己の歴史を自ら意識するやうになつて居る。然るに何故かは別問題として、生命を有するものは必ず老衰するのである。然らば老衰した結果は枯死であるか。枯死のやうにも見えるが、更に新しい生命が發展するとも云へる。例へば蛹が化して蛾となるやうに。そして蛾の生んだ卵は再び新しい蠶の虫となつて生活を始めるのである。但し卵が最も先きなものであるか、或は然らず、蠶虫がさうであるか、否な蛹であるか、蛾であるか、と云ふやうな舊い問題もあるが、僕には何んだか動いて居るものが、固結して蛹になつた點に、面白味がある。否な固結して、そして更に蛾となり、それが繭を破つて動き出し卵を生むのが面白い。茲に一種の精神的なるものを指す比喩があるやうな心地がする。生

於ける衝動の自然的な、殆んど無自覺的な、一切の利害を離れた美的表現である。だから趣味は到底理知的行爲と調和しないものである。偶々調和するとがあつてもそれは偶然である。何故なれば趣味は純粹の美的意味であるから。若しそれが自意識を惹き起すときは、内部に潜在する衝動が忽ち表面に躍動して、絶對の權威を振ふのである。美的意味は變じて道德的宗教的意味となる。理知も社會道德も全くその統制力を失つて了ふ。故に若し個性を評價すとすれば、根本衝動の發現としての趣味そのものが、唯一の對象たるべきものであらう。

## 五

若し我々の生命は要求であり要求は意味であるとせば我々の生活は意味の眞實な表現として價值があり又その意味表現の眞實なりや否やに由て價值が定まる。だから、物質的廣表に由り或は理知的關係に由りて、生活の價值を判斷せしが如きは虛妄と云はざるを得ない。例へば長命を保ちて物質的快樂を充分に享受したとか、凡ての社會的事業に關係して種々貢獻を爲したとか、又は世界各國を活動して莫大の富を獲得したといふ條件で、眞實の生活を爲し得たといふとは出來ない。又一生の間何もしないで獨立の生活で終つた爲めに、或は學者のやうに一室に籠つて、讀書に一生を送つた爲めに、價值の少ない生活を爲したとは斷じて言へないのである。何故なれば量の生活と、意味に基づく質の生活とは根本的に同一でないから。要するに生活の内容は、個性の要求即ち價值意識に由つて定まるものである。かゝる見解よりその人に何等の要求もなく意味も感じない生活を強ふるといふとは、そ

の人の内面的生命を殺すものであるといふとが出来る。個性とは衝動的に意味を欲するものである。若し意味を自己の肉體に認めないときは、最早やその肉體は個性のものではない。之れを根本的に轉換するも破壊するも、個性の自由なる絶對權利である。生活に意味がないときは、勿論その生活を否定する權利がある。何故なれば個性の内面的意味は絶對であるから。故に哲學や宗教を修めた者に生活に困るなら農夫にても職工にてもなれば好いと云ふのは這般の消息を解せぬ者の言である。

我々は内面的意味を赤裸々に自由に表現せんと欲する。而して赤裸々に自由に表現したとき、初めて生の充實と進化和幸福とを感じる。生の充實を感じる生活にして初めて我々に價值がある。理知はたゞ斯かる生活を指導しリフヘインするに於いて僅かに價值がある。然るに我々が内面的意味を、何等の裝飾も被蔽も着けずに、赤裸々に表現せんとするとき、種々の困難と衝突が起こる。習慣や道德や家族や社會との衝突が起こる。何故なれば是等の形式や形式に囚れた社會制度は凡て我々の擴大し進化した意味を赤裸々に表現するに不充分のみならず、時として全く矛盾するともあるが故に、それを全く轉換するか或は突破して、新しい表現法を大膽に創造せねばならぬからである。我々の要求は常に進歩し成長するものであるが、習慣や社會道德は保守的であつて、一定の形式に凝結する傾向が甚だ強い。之れは一面から見れば止むを得ないともあるが、之れが爲めに一般の進化を妨礙すると亦決して尠くない。だから是等を突破するとは却て容易な事でないのみならず、社會一般から誤解され易い。否時としては自分でさへも、その破壊の價值を疑ふとがある位である。故に眞實な生活を生きやうとすれば、一種の革命者とならねばならぬ。自己に對してのみならず、社會に對しても同じであ



次に解決的行爲に就て研究するに、これは元來人間の本源的行爲ではない。第二義的の派生的行爲である。即ち我々が物質を工具として活動する上に於いて、或は環象を對象として征服する上に於いて、一層利益あらしめ且つ容易ならしむる爲めに必要な、物質及び環象に對する知識の獲得である。言ひ換へれば純客觀的法則の發見である。この發見は固より人間の行爲であるが、併しそは創造ではない。元來存在するものを明かに把握したに過ぎない。例へば亞米利加を發見したコロンブスは、決して阿米利加を創造したのではない。又我々が二に二を乗じて四を得ても、決して四を創造したのではない。或は四を二分して二個の二を得ても同じである。なぜなればかゝる行爲は主觀的要求の表現でないから。即ちこの場合我々の態度は、全く變つてゐる。内面的本源的要求といふものを深く隠して、客觀そのものとなつてゐる。従つてその行爲は何等の意味乃至價值を現はすものでなく、たゞ必然的法則を示すのみである。コロンブスが阿米利加に航海したのは、阿米利加そのものに意味を有つたからでなく、地理學上の必然法則を信じて行つたのである。又二に二を乗じて得た四は、何も我々の内面的意味ではない。たとへ四を欲しなくても四は必然的に現出するのである。凡て斯うした一切の解決的行爲にあつては、創造といふのではない。創造は自然の結果でなくて、狂熱的な意識が欲現したものである。之を要するに實現的行爲も解決的行爲も、共にその理知の作用である限り、深く根本的な實在の鼓動に接觸してゐない。隨つてそこに潑刺たる生の進りが現れない。創造的活動は是等を全く超越したものである。

## 四

然るに翻つて人間の本源のともいふべき活動を見れば、所謂生命とはいかなるものであるかが解るであろう。例へば愛する場合、自己を主張する場合、或は事物を評價する場合の如きは、最もよく生命のうごめきが發現する。それは既成の目的概念を再成する實現的行爲でも、個性を没却した解決的行爲でもなく、全く絶對としての個性全體が稍々挑戰的突進的態度で躍動する。この場合個性を動かすものは、關係とか原理とかいふ理知の体系でなく、個性それ自身である。言ひ換へれば全人格を爲してゐる衝動的な根本要求である。是に於いて創造の光りが閃めく。我々が愛するといふのは、愛せんとする既成の目的を實現するのでもなく、又愛の對象物の自然的法則を發見するのでもない。全我の努力が全く新しい特殊な意味を對象の上に創造するのである。この意味は、生命的なもので個性の全要求である。而してそれは絶對であるから關係や觀念や法則等一切を超越し、他のものと根本的に異つてゐる。我々はたゞこの絶對の意味に由つて生きてゐる。又この意味に由つて我々の生活は、充實し擴張する。故に生命は畢竟するに内面的意味である。生活は意味の表現である。

衝動的な内面的要求は決して單純で器械的な本能ではない。又は一時の出來心できごころでもない。それは過去の經驗や理知の覺醒に由つて、絶えず大きくなり深くなり純化されリフハインされたもの、個性の全體を支配し個性の全色彩を形成する衝動である。この色彩は常に趣味となつて現れる。趣味と云へば何か遊戲的道樂的な極めて表面上の氣分のやうに考へるが、決してそんなものではない。深い内部に

るにしても、明瞭で論理的な體系知識が動機で、書き現はされた文章がその結果だと考へ易い。然れども、かゝる體系知識がいかにして我々の思想内に生じたかを考へると、更に深い根柢を發見する。實際我々が文を草するとき、何等の觀念も體系知識もないのが普通である。たゞ何かの刺戟に依つて卒然として筆を採る場合が多い。或は書いたものが餘りに論理的に出来上つた爲めに、却つて不充實の感を起すことがある。又たとへ明瞭な知識があつても、わざと筆を採らない場合もある。要するに知識そのものは必ずしも行爲を將來するものでなく、又行爲の唯一の動機でもない。嚴密に云へば知識そのものも、一種の表現的象徴である。その根柢には、衝動が潜在してゐる。

凡そ理知的の行爲は二種の形式をとつて現れる。即ち、實現的、行爲と解決的、行爲である。前者は主觀的目的を豫想し、後者は客觀的法則を豫想する。前者は道德的意義を有し、後者は學理上の意義を有する。共に嚴密な意味で創造的行爲といふとは出来ない。なぜなれば二者とも反復的であつて生産的でないから。之れまで道德的行爲と云へば、必ず目的行爲でなければならぬと考へられ、随つて價值判斷の對象は行爲よりも目的にあると思つた。尤も科學上から理知的評價を下すとは、之より外に正確な道はあるまい。然れども理知的評價と、もつと内部に突込んだ根本的評價とは、全く別種のものであるとを忘れてはならぬ。理知的評價はいかに正確に目的と行爲とを對照して、その關係及び効果を捉へたとしても、それは要するに形式に過ぎない。況してその確實は決して數學的確實ではない。たとへ數學的確實を得たとしても、目的觀念とそれを創造した内部の意識とは必ずしも一致しないものである。又我々は明瞭な目的觀念を構成しても、そのまゝ實行するものでもなければ、また實行さ

れるものでもない。偶々目的以外のとを、全人格の内部に潜在し、而も常に充滿してゐる偉大な衝動に由つて、大膽に爲し遂げるとがある。この場合殆んど何物の抵抗をも顧みない。又一切の理知的權威は後へに堂々たる有様になる。かゝる時に於いては目的觀念も行爲も嚴密な評價的對象となるとは出來ない。或は又いかに目的通りに實行しても、その結果は決して同一のものが現れない。之れ自然法の不完全な爲めか、はた我々の理知の不完全な爲めか。何にしても二者全く同一なとは極めて少ない。

今假りに目的は行爲の動機であつて、行爲は目的と質に於いて同一なる表象であるとすれば、その結果は何うであらう。ベルグソンはかゝる結果を、全然器械的であると評して居る。何故なればそこには何等の自由も創造も持續もないから。自然界の特調はその空間的な同質的な反復的な運動にある。この器械的運動と前述の結果とを比較しても何等の差異を見出し得ないであらう。何故なれば、斯うした場合に於ては、目的と行爲とは全く同質であるから。即ち言ひ換へれば創造ではなくて同質の反復であるから。我々の目的觀念は異質の創造力でなく、たゞ一種のモデルである。行爲はこのモデルをそのまゝ寫したものである。即ち我々は或る行爲を現はさん爲めに、その行爲と同一の目的を構成する。だから(イ)質の目的からは、矢張り(イ)質の行動しか現れない。『同一のものが同一のものを再成する』といふ器械的法則は、人生にも適用し得るとになる。かゝる器械的運動に自由のないとは勿論である。之れ全く人生の根本的な實在を抜きにした議論である。



と言ひ得るだらうか。而して亦是等の行爲の價值判斷は、何を標準とすべきか。從來倫理學者の説いたやうに最大數の最大幸福を標準とするか。併しそは如何にして計量すべきか。或は自然の理法又は社會の安寧を標準とすべきか。然れども人間は何故に自然の理法に服従せねばならぬか。何故に社會の安寧を目的とせねばならぬか。理法や安寧はたとへ客觀獨立の絶對權威であるとしても、嚴密な意味に於いて、かゝる權威に服従するのが眞の個性と言ひ得るであらうか。或は *Summum bonum* 即ち最上善を標準となすべきか。併しそは我々の經驗内に這入り得るものであらうか。是等の標準は凡べて外界に求めたのであるが、翻つて個性自身の内に求めたら何うか。或る人は圓滿なる自己實現を標準とし、或る人は最大の幸福を標準とするであらう。然れども圓滿なる自己實現とは、いかなるプログラムであるか。最大の幸福はいかにして認識すべきか。要するに空想に過ぎない。是等幾多の標準は説明の便利上、學者が任意に一定の視點から假定したものであつて、何等絶對の根據はない。たゞ徒らに吾人の考察力を浪費するものである。

若し價值意識が眞の生命であり、價值意識(凡ての假定や外界の法則を超越したもの)を有する意味に於いて、個性が絶對であるとすれば、一切行爲の價值の標準は、勿論個性の意識そのものでなければならぬ。この意識を離れては凡てが全く意味を失つて了ふ。何故なれば一切の行爲はこの意識の表現であつて、意識と行爲とは密接不可離のものであるから。だから一切の行爲はたゞこの絶對意識に由つてのみ、その眞僞を判斷さるゝ。又この意識にのみ眞の意味がある。凡ての行爲は勿論他人や社會に對しても、何等かの意味があるに相違ない。されどそは直接この絶對意識に關係しないのである。

又前にあげた幾多の標準に依つても、個性の行爲を判斷するとが出来ぬともない。是等の標準には皆それ／＼の眞理がある。然れども猶無數に標準があり得る。故に到底極まる所がないであらう。要するに空間上から見た相對的の判斷であつて、絶對的ではない。言ひ換へれば少しも個性の價值意識に觸れないものである。たゞ個性の意識のみが絶對的判斷を爲す。然らば價值意識とは何であるか。

## 二

人生は知行の合一であるとか、理想及び實現の不斷の連續であるといふとは、從來の解釋であつた。この解釋は理知の方面から云へば眞理である。理想は知識であり、實現は行爲である。我々の行爲は何等かの知識即ち目的を豫想し、知識は又何等かの行爲を將來するものである。若し我々の行爲が何等の目的も豫想しないとすれば、それは自然的動作即ち空間的運動となつて、個性の表現といふとが出来ないであらう。而して我々の知識は經驗から生ずるとすれば、經驗が無限である限り知識も無限に變化し進歩するであらう。随つて行爲も亦無限に變化し發達するであらう。これは理知の立場から見れば必然である。然れども少し内部に這入つて考へて見ると、そこに今迄見えなかつたもの、言ひ換へればまだ我々の思想とならないものがある。或はそれは永久思想とならないものかも知れぬ。思想でないから勿論思想に依つて認識するとは出来ない。兎に角我々は過去の長い經驗から、凡て思想となつたもの、言ひ換へれば最も明瞭で且つ論理的な觀念のみが、確實に存在して居るやうに考へる習慣を養つて來た。故にその結果明瞭な思想が行爲の動機であると思惟する。例へば筆を取つて一文を草す

闇は幾變轉するも可。政黨は幾度か離合するも可。千轉萬轉亦可なりである。ヘチキスといふ鳥は火中に焼かれ、而も再び生命を得て高く天空に飛び上るといふてはないか。國民的理想、憲政の大精神がこの昏迷の中より徐々として、而も秩序正しく現れつゝあることを吾人は信ずるのである。この故に政府がいかに惡政を布くも、政治家がいかに不徳不義を行ふも、吾人は望を失はぬのである。詮方つくれども望を失はぬのである。吾人は理想と生命とを握つて居る。宇宙の生命吾人を呼ぶとき、吾人は其の招ぎに應じて、この愛この生命を鼓吹し、政界の刷新を計らねばならぬ。政治屋が如何に喋々喋々するも吾人は黙して自重して居る。而して吾人の自重には確信がある。これでは駄目である更に努力せねばならぬといふ決心がある。眞に此の心、一騎當千の心を以て直接間接、或は筆により、或は舌により、神國建設の機運を一日も速かならしめたいと思ふのである。吾人はこの大正の時代に日本國に生れあひしことを神に感謝する。何の幸か吾人は此の不完全極まる過渡期にあつて、此國民の爲め何ものかを貢獻することが出来るのである。自我の要求が此處にあれば、自我の擴張も亦此處にある。今日は神の道を辿る者にとつて非常な時である。ポーロがエペソの人に與へて『我が兄弟よ主及其の大なる力に賴て剛健なるべし。なんぢら惡魔の奸計を禦がんために、神の武器を以て裝ふべし。我儕は血肉と戰ふに非ず、政また權威、また斯世の幽暗を宰る者、また天の處にある惡の靈と戰ふ也、この故に神の武器をとるべし。これあしき日に遇ひて敵を禦ぎ凡のことを成就して立たん爲なり』と言つた言葉は吾等にとつて意味深いものである。吾人は常に此の雄大なる精神を以て人生の途を歩まねばならぬ。かくして始めて政治の改革が行はるゝのである。

# 創造の世界

——意義及び價值論——

野村 隈 畔

## 一

余は個性論に於いて、眞の生命は最もよく個性に顯はれ、而して個性は數學的に或は化學的に不可分割でなく、その絶對渾一性に於いて明かに個性たる所以が發揮され、この絶對渾一性は畢竟價值意識に基因すると述べた。之を要するに、生命や個性や乃至個性の活動一切は、價值意識を離れて到底理解するとが出来ない。活動の自由といふとも、創造といふとも、皆この絶對なる意識に由つて初めて可能である。蓋し自由は個性より生じ、個性は價值意識の表現であるからである。是に於いて價值意識は、眞の生命であることが解る。

人間は活動し批判し撰擇するの自由を以つて居る。然るにこの活動や批判や撰擇は、抑々何を意味するであらうか。而して是等の行為の意味は何處にあるであらうか。そは知情意の圓滿なる調和に求むべきであらうか。然らばその圓滿なる調和とは果して如何なるものであらう。又そは外界に永遠に存在する理法の發見に求むべきであらうか。即ち科學者や數學者のやうに、自然界に先在する因果律を探究することに、人間行為の意味を求むべきであらうか。然れどもこれ自由活動をなす人間の創造



なしに國防問題を論じ、教育問題を論じて居るのである。何處に潑刺たる生命の閃きがあるか。歐米に於ても此の力は缺けつゝある。從來宗教は迷信が多い爲めに、上中流社會から見棄てられる、下層社會に對しては同情がないから斥けられる。そして獨逸などでは社會民主々義が勢力を得て來たのである。しかも精神的宗教は未だ起らない。人民は何の爲めに生きて居るかわからないのである。其の結果自殺が多い。併し日本は尙ほ獨逸よりも自殺が多い。これ要するに生に對する興味がないからである。そして又近來歐米では階級戦争といふものが激しくなつて來た。資本家階級と勞働者階級とが絶えず軋轢して居る。彼等は神の使命を荷つて各々其の道を守ることを知らない。資本家は相當な報酬を拂はねばならぬのに、それをしない。勞働者は賃銀さへ得ればそれでよいと考へて居る。又歐米でもさうであるが今や自己中心主義が滔々として吾が日本を風靡して居る。天下國家のことは如何様であつてもよい。私腹を肥せばよい。自己の黨派の利益を計ればよいといふ風である。公共的精神は極めて稀薄になつた。國民大會が現れたとしても其は一時の附焼刃である。一時の仇浪である。

日本の政治問題は眞に困難なる問題である。いかにせば此の政治を改革するを得べきか。要するに根本は人間である。先づ個人を改造せねばならぬ。個人の心靈をして更に自由ならしめ、これをして宇宙の根源なる神の生命に結び付けなければならぬ。其處に不盡の生命の泉が湧いてくる。其處に吾等の希望が甦つてくる。人間は神の中に生き、神を通して生き、神のために生きて居る自覺に達せねばならぬ。この人生觀が確立するとき、人生の背景は眞に廣大なものになる。此の主義を把るならば十字架につけらるゝも吾、世に勝てりである。耶蘇の一生は實に此の主義のためであつた。故に假令

は身十字架上にあつても尙望を將來に繋ぎ喜んで最後の呼吸を引きとられたことと思ふ。

世に基督教政治學はない又あるべき筈がない。基督教は生命である。其の理想は愛である。愛と生命となるが故に、狹隘な學問の型の中に入れることはできない。然しバン種となつてあらゆる物の中に入込んで、これを膨らし、これを理想化してゆく力がある。基督教の生命、其の愛の精神がもう少し日本の政治家の靈魂の中に内閣諸大臣の心の中に、各省官吏の中に選舉民の中に理解されむことを余は切に願ふものである。黨派の争は政見の争、主義の争とならなければならぬ。内閣を造るも主義の爲め、内閣を去るも主義の爲めなければならぬ。此處に初めて雄大なる政治的理想が生れる。

英國や亞米利加の政治は不完全であるかもしれない。然し基督教の生命が政治家の心の中に深く潛んで居る。そしてよく此を理解し消化して居る。この故にグラットストーンや、リンコンやロイド・デョールズの如き大政治家が現はれるのである。今日日本に斯の如き大政治家のなきはこの生命、この愛の精神を理解するもの甚だ少きに因るのである。亞米利加は龐大な國である。それ故國家に餘り重を置いて居ない、随分我儘をやる。之に反して英國は四面海をめぐらす島帝國であつて、よく日本に似て居る。従て民族的精神が強い。公共心が仲々發達して居る、吾國の如きも其の忠君愛國の精神は比類なく盛である。吾等はこの社會奉仕の精神を聖化し、理想化してゆきたい。基督教の生命を以て、其の愛の精神を以て、之を刺戟し、之を指導し眞に偉大なるものたらしめたいのである。かくして日本民族は英國民族の如く公明正大なる人種として世界に雄飛し其の文明史上に何ものかを貢獻し得るであらう。此の確信あるが故に、目前に突發する政界の狂瀾怒濤の如き更に驚く所でない。内

の勧めに依て佛蘭西、伊太利等に旅行した。其の間彼は何をなして居たのであるか。決して閑散な生活を送つて居たのではなかつた。彼は其の間に立派に次議會のため勞働保險案を作つてしまつた。

全く我を忘れ一身を國家民族に捧げて悔ざる人でなければ政治はやれない仕事である。今日の日本の政治家は皆所謂政治屋である。眞の政治家は曉天の星の如く寥々たるものである。彼等は何のために政治をやつて居るのであるか。彼等は終に利益問題と離るゝことが出来ない。平氣で買収されて居る、かくの如き公明正大ならざる政治はなくなつてもよいのである。

#### 四

政治を根本的に改革するには國民大會では駄目である。焼打事件などは尙更いけない。結局佛蘭西革命の眞似をするにすぎない。かゝる改革は何の役にも立たないのである。眞の善き政治は其の根源に溯つて教育と宗教の上に立たなければならぬ。先づ人民はもう少し聰明にならなければならぬ。抑も政黨とは何、人民の權利義務とは何、其他外交問題財政問題の如何なるものなるかを知らなければならぬ、然らざれば假令グラッドストーンやロイド・デョールズの如き政治家が日本に生れたとしても理想的な政治は到底行はれないのである。先づ政治教育が一般に普及せねばならぬ。そして國民の正義公道に對するもつと生々した感情が湧いて來なければならぬ。次に宗教である。宗教はいかなる方面に於て政治に貢獻するか。吾人の中より流れ出づる生命が宇宙の大生命と觸れ合ふ所に宗教が生れる。其處に限なき喜びがある。大なる確信がある。生の深い意義がある。今日政治家といはず、多數

の人々は何の爲めに生きて居るかわからない。彼等にとつて生は退屈なことである。喜んで生きて居るのではない、仕方がないから生きて居るのである。生は彼等にとつて重荷である。何の爲めに代議士になつたか、食はむが爲めである、選舉費の回復の爲めにはコムミツションを取るも恬として恥ぢない、今日臺閣に連るものにして神の使命を帯びて、吾此の任にありといふやうな、雄大な精神を持つてゐる者は果して幾人あるであらう。止むを得ないからやつて居るのである。誰もやらないなら己がやると言つたやうな調子である。何處に至誠があるか。我國に於ける從來の宗教は迷信が多かつた。そして眞の宗教は排斥されて居た。實に玉石混淆の有様である。而して教育からは全く宗教を取去つたから迷信はない。然し其の結果前に推してやる力がなくなつた。理想が消え失せて了つた。此處に於てか余は疑はざるを得ない若し神なく理想なくむば何のための努力、何のための人生であるか。森羅萬象一切は不可思議、無意義のものとなつてしまふ。政治何するものぞ、社會の改良何事であるか。故にカントも理論を以てしては證明が出来ないが、實際問題では神を立てゝゆかねばならない。實に此は實際的理性であると言つた。プラクティシエーショナル。單に吾等の心の中では神の存否を疑ふもよい。然しこの我は今肉體をとつて儼然地上に立つて居る。天地宇宙に生命なく、目的なくむば、この我は何處より來たのであるか。若し理想なしとせば、政府に收賄事件あるも差支ないではないか。惡事をなすも何の妨ぐる所がある。何のための政界刷新である。何のための日々夜々の努力であるか。實際に於ては到底正義人道を推立てゝ行くむでなければ人生は成立たぬのである。今日日本に最も缺乏して居るものは前に推してやる強い力である。此の力がないから仕事に油がのらない。仕方がないからやるのである。仕方



を退いても政治家や實業家には容易になれると思つて居るが、これ大なる迷信である。余は信ずる、政治の局に當るものは宗教と等しい確信と人格とを有する者でなければならぬ。政治は決して宗教に譲らない。公平無私の精神と神の生命に従ふ雄大なる決心がなければ、理想的の政治家にはなれぬものである。

### 三

グラッドストーンはオックスフォード大學を卒業した時は宗教界に入らむと決心した。人は罪の巷にさまよひ、神の國は未だ地上に來らざるを思ひいかにかしてこの方面に一臂の勞を竭さんとし、長い手紙を親に送つて其の賛成を求めた。然し父は不同意であつた。そして時勢の要求は彼を驅つて政治界に入らしめたのである。然し彼は宗教界に居ると同じ状態を持して、政界に活動したのである。彼は教育宗教に興味を有し、此等によつて人民を指導し、政治を理想的に行つたのである。オックスフォード、ケンブリッジ兩大學を非國教徒の子弟のために開放して從來の束縛より脱せしめ、ウェールズ國教會を廢止せんとし愛蘭に自治を與へんとし、或はホーマーを研究し或は自ら宗教論を公にすることをした。實に彼は雄大なる精神的背景を後にして政治を行つたのである。又今日英國自由黨内閣にて最も人望あるはロイド、デヴォールズ氏である。彼も亦少時一度は宗教界に身を投ぜむとしたが伯父の反對にあつて終に果さなかつた。然し政治をなすは宗教界にあつて講壇より説教をなすと同じことである。二ヶ月前彼はクリッシスに於ける自由黨の會合の席上に於て『世の中では大臣程幸福なものな

い、彼は常に心持よい日光の中に浴して居るやうなものだといふ。然し事實、彼は絶えず險惡な天候と戰つて居るのだ。日光といふが、彼等は其の暑さを忘れてしまつて居る。蚊軍の襲來を忘れてゐる、名譽利達を求むるなら、政治家程割の惡もいのではない。巨萬の富を貯へることなどは思ひもよらぬことである。時には激烈なる反抗も忍ばねばならぬ。何を苦しむて余は政治家を以て甘じて居るのであるか。一身を此國、此民に捧げむ爲めてある。吾人政治家は人類の祭司である。』と斷言した。流石は大英國民の代表者の言である。かゝる大政治家を有する國民は幸福である。彼は數年前豫算案を議會に提出した時之を通過させむとして四時間半の大演説をやつた。餘り長くなるといふので二時間許り經つとき十五分の休憩をなしたにすぎない。これ有名なる平民演説である。

今日の日本の大藏大臣は何分の演説をなすのである、十分か二十分でないか。豫算案を議決するにも一日か二日で済ましてしまふ。英國では數週乃至數個月もかかる。何となればこれ實に國民の豫算である。一日二日で決すべき筈のものでない。そして其は單に議院の中に於てのみ掛引すべきものでない。國民の前に出て堂々と其の意見を發表せねばならぬ。アスキスもやれば、バルフォーアもやる。そして廣く國民の賛成を求めねばならぬ。其が立憲政治である。人民の前に來つて其の意見を發表せざる政治家は不忠實なる政治家である。日本の政治家は凡てこれである。唯に現内閣のみと言はない。前内閣然り、前々内閣も亦然りである。これ實に國民を無視したる内閣と言はねばならぬ。要するに政治の根本を理解せざる者が政治を行つて居るのである。ロイド・チョールデは豫算案を提げ遍く國中を演説して歩いた。處が其の爲めに全く聲を涸らしてしまつた否全く聲を失うた。そして彼は醫師

## 二

政治家といふものは國民に對して重大な責任を負うて居る、個人若し人を殺傷せば直に罰せられる。個人として他人の家宅に侵入し、強制的に其の財産を徵收することはできない。然しながら國家政府は個人に刑罰を加へ、之を捕へて牢獄に繋ぐことができる。或は之を戰場に出し、彈丸雨飛の中に立たしむることが出来る。個人關係は單純なものであるが、個人が集り國家を成すと、其處に一種超人間的態度が出来る。之が即ち一國の主權である。此の主權が發動するとき、個人の生命財産も其のなすがまゝである。此處に於てか問題は六かしいのである。個人としては他人の財産を取上げることが出来ない。然し一度一國を料理する位置に立つ時それが出来る。それで政治家は非常な責任があるといふのである。彼等は國家を動かし、主權を發動させ、個人の生命財産を左右するの權能を有して居る故に、其の局に當る者は責任甚だ大なりといふべきである。人若し一國の政治に參與する國務大臣、若くは代議士となつたなら、最早個人ではない、個人以上の態度をとらねばならぬ。

政宗の名刀は達人之を有するによつて、能く其の敵を斬る、三才兒童をして之を持たしめば危險この上もない。政治は甚だ危險なものである。世に政治程危険な職業はあるまい。故に平々凡々の士は能く其の任に堪へる所でない。夫は超個人、超人間、宇宙人生の根源より湧き出る生命の刺戟をうけ、其の依托によつて政治は吾が天職なりてふ大確信を有する者でなければ、到底政治家にはなれるものでない。いかなる國に於ても政治家の理想は此處にあるのである。

昔猶太の政治は悉く神意に則るといふのであつた。モーゼの法典も、豫言者の訓戒も、凡て神より出づるものとせられて居た。エホバ宣はくといへば、非常に力があつたものである。祭政一致はユダヤの特色であつて、其の政治思想は尙何ものかを世界に貢獻するであらう。之に反してギリシヤの政治は個人の判斷と個人の良心とに基いてなすといふので神などいふものは認めなかつた。然し聰明な人でなければ政治はやれないものであるとせられて居た。プラトンは其の『共和國』の中に、理想の國には三階級あつて、第一は哲學者、第二は武士、第三は商、若くは農民であると言つてゐる。實にプラトンの理想郷に於ても最も尊ぶべき中心人物は哲學者である。即ち頭腦の最も發達した聰明な人でなければ政治はなせぬものであるとされて居た。又支那に於ては王道に則らずんば君臨する能はずと言つて居た。王は三といふ字を縦に貫いた形である。即ち天地人三才を貫くといふ意味なさうである。かゝる人にして初めて人民の指導者たり得るといふのが支那の政治の根本である。其が日本でどれだけ實現されて居るか、今日日本の政治家、院外運動者其他一般國民は一國の政治家を目してしかく重大なるものと信じて居るか否か。成程政治家は皆國の爲めを思ふて居るだらう。皆愛國の士であらう。然し今日愛國者と稱するものの中には不純なるものがある。やゝもすれば私腹を肥さんとして居る。わが政權を握るは神の生命を代表し、日本を理想的に治むるにあるといふことを考へない。自分が大臣になれば何か甘いことがないか、何か自分に都合のよいことがないかなど、考へて政治をやつてゐるやうに思はれる。日本の政治はこの故に振はない。眞の政治家になることは大業である。宗教家になることゝ差異はない。然し世の中では宗教家になることは異常なことに思つてゐる。そして宗教界





## 政治の根本的理想

内ヶ崎作三郎

昨年二月は桂内閣に對して熾んに輿論が沸騰し、燒打事件さへも惹起して、終に内閣の瓦壞を來したのであつた。今年は無事であらうと思つて居たが、又々減税問題や海軍問題で輿論を喚起し、諸處に國民大會が開かれ、現内閣攻撃の聲が喧しくなつた。其が終に十日の彈劾案となつて議會に現れたが政友會多數の爲め脆くも聯合軍の敗に歸してしまつた。然し妖雲は尙天を掩うて居る。憲政の前途甚だ不安に堪へないのである。

近來國民は政治に關して比較的多くの興味を持つやうになつた。國家の外交問題、財政問題等に對して國民の注目が著しくなつてきた。此は確に喜ぶべき現象である。吾人は常にこのが家庭の有様に就てなにくれと焦慮し、其の幸福を祈るものである。又自分の郷里のことをよく考へる。況んや吾人が住む國家を思はざるわけにはゆかない。此の國家あるが故に、吾人は存在する。吾人の背後に此の國家なくむば、吾人の存在はないのである。如何に個人主義が其の暴威を逞うし、如何に自我中心主

義が熾な今日と雖、一國の政治に對し、社會の生活問題に對して考へないわけにはゆかない。これ絶對的個人主義の成立たぬ證據である。絶對の自我中心主義などいふものはあらう筈がない。

一國の政治は實に困難なものである。政治は單純なものでない。教育、宗教、文藝、實業等は皆一局部の問題であつて、事必ずしも困難なわけでない。然し國家政治となると、一切の問題が其の中に含まれる。國民の生活問題、國防問題、教育問題等が皆政治圈内にあつて渦を卷いて居る。小さい谷川の水を堰き止めて其を汲みとるやうなわけのものでない。實に狂瀾怒濤である。之を指導するは容易なことではない。昔から理想的の政治家は甚だ少ない。何となれば政治ほど困難なものはないからである。今日の日本の政治は如何なる理想を以て行はれて居るか。第一に國體中心の主義がある。次に儒教、即ち孔孟の教によつてはぐまれた理想がある。之に加ふるに西洋の政治思想が這入つて來て居る。而して西洋の政治思想は極めて複雑なものである。其の中にはヘブライの思想もあれば、ギリシヤ、ローマの思想もある。更に近代社會主義や無政府主義的思想さへもある。實に東西古今の學說が雜然として日本の政治思想を形造つて居るのである。此間にあつて吾國民は二大戰爭を経過し、巨額の國債を有して居る。人民は或は戰時特別税、或は營業税其他の間接税を少からず負擔して居る。世界中恐らく日本位重税を課せられて居る國民はなからう。そして外交では對支那、對亞米利加の問題がある。更に朝鮮臺灣の問題も殘つて居る。之に加ふるに東北の凶作、櫻島の爆發がある。前に敵あり、後に亦敵あり、正に國家多難の秋と言ふべきである。此の國船を操縦して誤なからしむる舵手舵取は抑も誰であるか。

擧げんとして失敗し、一度は氏を動かして自己の利便を計らんとして失敗した。若し米國の國民が、メキシコや、日本の國民の如くてあつたならば、一介の學究たる氏は、到底大統領になることは出来なかつたであらう。然らば僅かに河一つを隔てたる米國と墨國と、其國民に於て大なる差異あるところのものは何ぞや、曰く、宗教的信念に依りて養はれたる、偉大なる國民的精神、則ちこれに外ならぬ。

#### 四

思ふに、立憲政治の本義は、國民が其政治上の主動力となることであるが、併し其政治を善良の方面に導いて、完全なる發達を遂げしむるには、偉大なる精神の人格が、起つて國民を指導することを要する。併しそれも亦、國民自身が偉大なる國民なれば、必ず其中より偉大なる人格を生み出すに相違がない。一度偉大なる人格が起つて、其所信を赤裸々に發表する時に、國民其者が眞に偉大ならば、直ちに其聲を解し、其聲に動かされ、其聲に同情し、其聲に響應するであらう。國民に此力あれば、たとへ一方に煽動する者があつても、他に偉大なる人格が現はれる時には、國民は必ず煽動者を捨て、偉大なる人格の聲に合せて、正義の聲を發するのであらう。『民の聲は神の聲なり』といふ諺があるが、若し國民に確信があるならば斯くいふことが出来るのである。神の聲高く響き民の聲之に共鳴するならば、一切の惡魔は忽ち影を消すべきである。米國の政治にも腐敗分子がある。例へば紐育のタマニールホルの如きは、長く同市の市政を壟斷して、罪惡の淵叢の如き觀があつたのであるが、忽ち起つた正義の聲の爲めに、朝露の如く脆くも消え失せて了つた徑路の如きは、米國の政界に於いて、

如何に正義公論が響應する所大なるかを示して、頗る面白いものである。而して紐育の市政に就て、侃々諤々の意見を發表した一青年は、一躍して市長となつた。これはたしかに米國民の精神の根柢に、一の偉大なる精神の横はつて居るを證するものである。若し東京市民にして、紐育市民の如き偉大性があるならば、常に東京市政の改善に就て、高邁の識見を發表して指導して居られる安部磯雄氏の如きは、疾うに市長の椅子に座るべき人である。若し斯くの如くするならば、よく市の腐敗を一掃するも困難でないと思ふ。國家の政治も亦然りである。例へば米國の如きに於ては。大統領は殆んど國運を左右するの力あるものであるから、國民は何れも大統領の選出に就て自己の勢力を振ふを怠らない。然るに大統領にして、未だ曾て其人格に於て非難を受けたものがない。これ宗教に依りて養はれたる偉大なる精神に、共鳴する所のものが國民の心にあることを證するものである。

此精神的の根柢あるにあらざれば、憲政の發達は之を期するに由なしと思ふ。日本の現状は殆んど手の付けられぬ有様である。之を救済するの途は二あるのみ。一は急激なる方法なりと主張するものがある。二は憲政の背景たる國民精神の教養である。差當りの策としては、或は内閣に總辭職を勧告するの途もあるう。けれども結局は、精神的教養に依るにあらざれば、萬全の策ではない。昨年二月の政治的運動は果して如何。根柢なき運動は、要するに砂上の樓閣である。大風吹き大雨降る時には、忽ち倒壊するに至るであらう。吾人靜かに國家の前途に就て想ふ時に、差當りの事は之を差當りの人に委して、吾人の職分としては、退いて徐ろに、國民の精神的教養をなすの外なきを感ずること、頗る切なるものがある。



如く人民と直接交渉ないやうであるが、然も腐敗はない。多少はあるけれども、併し一國の高官が營利會社に關係し、秘密の間に事を決して、之を國民に知らしめざるが如きことはないのである。現首相ビートマンホルイツヒ氏の如きは、ビスマルクの面影ありと稱せられて居る。勿論其力量才幹に於て、ビスマルク程ではないかも知れぬけれども、其國民を敵として、斷々乎として所信を行つて行くの概に至つては、佛人も稱讃を惜まぬのである。公明正大にして天下何者も恐るゝ所なきの態度は、官僚政憲とはいへ、實に見上げたものである。これ何が爲であるといへば、國民に權威があるからである。監督を充分にして居るからである。國民の精神が確乎として居るからである。然るに不幸にして、我國に於ては、國民に權威がない。閥族獨り政權を爭奪するのみである。故に事多くは隱微の間に行はれて、然も國民は種々の美名の下に、煽動せられて居るの感がある。若しも國民にして眞に確固不拔の大精神あらば、妄りに他人に煽動せらるゝが如きことは、あるまいと思ふ。此點よりして見れば、日本の憲政運用法は、頗るメキシコに似て居る。或は支那に似て居る。特にメキシコに比較して、興味多さを覺えるのである。而して米國を隣邦として有するメキシコの憲政史は日本に幾多の教訓を與ふるものである。

### 三

メキシコは、西班牙より獨立以後約九十六年、憲政實施以來九十年になるが、毫も憲政の實が擧つて居ない。徒らに紛紜に紛紜を重ねて居るに過ぎない。如何にも制度に於ては、國民が主となつて

居るが事實に於ては、却つて二三閥族の政權爭奪の具に供せられて居るのである。之れ則ち國民に一の欠けたるものがあるが故である。恰も日本の國民が、或は長閥を攻撃し、或は薩閥を攻撃し死力を盡して奮闘して居るが、其攻撃の精神は甚だ結構であるが、一つ欠けたるものがあるが故に、常に、誰れかに利用されて居るが如き有様である。若しも我國民に更に遠大の理想と高邁の識見とあらば、今一步先きをやつて居るだらうと思ふ。メキシコも亦然り、今より九十年前、一人の豪傑の爲めに、憲政の理想は蹂躪されて、紛争今に至つて止むときがない。爾來大統領の變ること六十餘人、勿論憲法中止中に大統領が更迭したるのであるが、更迭といつても順序を踏んだ更迭では無論なく、暗殺暴力を以ての更迭である。歴史に依つて之を見るに、常に黒幕になつて糸を引くものがあるが如く見える。最近に於ては、デアス權勢を専らにし、マデロの爲めに滅ぼされたが、マデロは又ウエルタの爲めに亡ぼされた。而して國民は常に其何れかの與黨である。然も其結果は——其名は美なれども——二三閥族の利を圖るに過ぎぬ。右六十餘人の大統領中に於ても、無事に生命を全うしたのは、極めて少數で、其中四十餘人は反對黨の爲めに殺されて居るのである。日本に於ては餘り血を流すやうなことはないが、輕佻なる國民を煽動して、以て政權の爭奪をなすこと、頗るメキシコに類するものがある。

然るに其隣邦である米國は如何。これも愚民政治など、評する人もあるが、又著しくデモクラチックではあるが、然も國民は妄動して、二三野心家の喰物となるやうなことはない。最近十數年の例に徴して之を見るも、歴代の大統領は、少くとも品格の上に於て欠點がない。ウキルソン氏が大統領の候補を爭つた時なども、米國の金權黨は大なる失敗を演じて居る。則ち一度はウキ氏を排して他人を

後暗いところのあるのは事實らしい。西洋に於ても、政治上に後暗い事は決して絶無ではない。例へば先年のマルコニイ事件の如き然りて、英國の藏相、海相、大審院長とでもいふ人々が、マルコニイ會社と結託して、株式市場に於て、暴利を博したといふ嫌疑を反對黨より蒙つたのであつた。然るに此際疑惑の焦點となつたロイド・デョルヂ氏の如きは夫人の小遣帳の如きものまで公開して極めて公明正大の態度に出た。従つて事件も忽ちに解決された。又昨年獨逸に於てクルップ會社事件なるものが起つた。これには勿論多少の秘密はあるけれども、其根柢は極めて淺いものであつて、たゞ低級の少數者が、多少のいたづらをしたといふに過ぎなかつた。佛國の海軍には秘密があるといふ、而して其利權の爭奪は直ちに政權の爭奪となつて、内閣の更迭となることも多いのであるけれども、其我國程でないことは明かである。米國の政界にも確かに腐敗の分子はある。併し乍ら一方に腐敗の分子あれば、他方に廓清の力も絶大なるが故、其腐敗は決して系統的ではない。

斯くの如く觀じ去り觀じ來れば、世界の一等國中、政治上に於て秘密が系統的に行はれて居る國は、殆んど我國のみなりといふも、決して過言ではないと信ずる。あゝ、憲政施行以來二十五年、今に至つて尙ほ斯くの如きは、勿論當局其人の責任は大であるが、畢竟、政治の監視を怠つた國民怠慢の罪に歸せざるを得ない。罪惡が段々系統的なるが故に、政界よく二三の正人ありとするも、よく廓清の効を奏し難いのである。予は此狀態を以て、恰も支那に類して居ると思ふ。予は先年數年の間、彼地に滯留して熟々其政界腐敗の實狀を觀得し、其國勢の振はざる宜なる哉と思つたのであるが、今にして想へば、一概に支那を罵ることも出来ない。支那の政治家は、上下とも噓言と秘密とに満ち、若し

其一角でも切り崩さば、忽ち全體の腐敗が曝露するやうになつて居る。則ち病既に膏肓に入れるものである。指端や爪先位の療治では駄目であつて、是非共大手術が必要なのである。我國に於ても、新聞紙上等にて承知する所に依れば、腐敗の根源は海軍の内部、政府の内部にあつて、然も頗る系統的にして、根柢深きが如く感ぜられる。勿論幾萬國民の熱血は、よく如何なる結果を見るやも測られぬが、兎に角今にして罪惡の根源を除去するに努めざれば、憲政は大破綻のみと觀ぜざるを得ない。

## 二

然らば其腐敗は何に因つて來るかといふに、それは國民に權威がないといふことにある。所謂憲政の發達には、國民が本となつて、監督して行くことが必要である。監督よく其効を奏する時に於て、政治が公明正大となる。公明正大は則ち立憲政治の理想である。それには何うしても國民に權威がなければならぬ。然るに我國に於ては、國民に權威がないどころか、却つて他の權威に盲従し、或は逆まに使はれて居るといふ有様である。國民に權威があるならば、必ずしも國民が主とならなくも憲政の運用は出來るのである。其適例は獨逸である。

獨逸は歐洲立憲國の中心にありながら、其國民は政治上の主人公ではない。政治上の主人公は何處までも皇帝であつて、皇帝を中心としたる官僚の一派が、政權を壟斷し、政治の局に當つて居る。首相の更迭も民意の如何に依るにあらずして、カイゼルに對して責任を負ふのである。獨逸の政治は國民と官僚と相對峙して居るのであつて、恰も以前の日本の如くである。之を超然内閣といふ。斯くの



そんなことは人民の方でも政府を敵視する様になるのは無理のないことである。

然らば政府と人民とが互に手を携へることの出来る爲めにはどうしたらよいのであるか。それはまづこの一種の障壁を除くことである。外的な壓迫的な態度を捨てることである。政府自らが先づその撤廢に着手すべきである。政府が先づ我を折るべきである。何故なれば政府は決して人民を治めるのではないからである。政府はたゞ人民の代理である、公僕である。

立憲政治の根柢はこの精神の上におかねばならない、立憲運動もこの精神の上に立たねばならない。西洋に於いては文學も政治も經濟も凡てこの民主的になつて居る。西洋がさうなれば日本も勿論さうなるべきである。併し西洋ではその思想の根柢を基督教が指導して居ると云ふことを忘れてはならない。日本はたゞその結果を眞似て、その原因を忘れて居る。此の時に當つて基督教の運動をやること云ふことは非常な任務をもつて居る。

今度の問題の如きは火事の様なものである。それに對する運動はその火事を鎮めんとする消防にすぎない。われ／＼の根本的努力は、かゝる火事を起さしめない様にするにある。毎年／＼この様な火事が起るならば、それに應ずる保險會社もなくなるであらう。憲政運動の根柢にはこの民主的精神がなければならぬ。

# 憲政の精神的背景

吉 野 作 造

## 一

此頃は恰も政治季節に際會して、或は海軍問題、或は憲政問題と、政治上の議論が喧しいのである。憲政實施以來二十五年、人間五十とすれば正に其半生を過した今日に於て、斯くも磊々の聲を聞くは、抑も何事を語るものであるか。過去四半世紀間に於ける政治の成績如何を想ひ來れば實に慨嘆に堪えざる次第である。予は海軍問題の真相に付ては何事も知らぬけれども、兎に角立憲政治の上に秘密あること自身が、既に憲政に成功せざることを證明するものであると信ずる。苟くも國民と政治を共にすと言はゞ、斷じて秘密あることを許さないのである。正々堂々、無色透明、八面玲瓏たるに非ざれば、憲政の本義に適へりと言ふを得ないのである。然るに日本の政治は事毎に秘密又秘密である。驚くべき立憲政治もあつたものである。我々政治學者として、政治の實際を研究せんとしても、西洋のことはよく分るけれども、日本の事は毫も分らない。何の故に内閣が更迭したのであるか、何の故に種々の問題が起つて來るのであるか、一切五里霧中、雲を掴むやうである、頗る了解に苦むのである。これ即ち日本の政治が秘密主義に基く結果に外ならない。

然るに今や漸く雲霧は霽れた、秘密の最も大なるものが曝露せんとして居る。兎に角海軍の高官に

あらう。もしこれが、友達ちの様な關係で、何時までも互に尊敬し、つゝしまやかにして居るならば決してその様なことはないだらうと思ふ。

壓迫的態度、これこそ政府對人民の親密を損ふものである。親と子とを背かすものである。夫婦を別れしめ家庭を紊すものである。

## 五

以上は個人の權威に目ざめたる、また眞實の愛を體得したるものゝ立場よりして、日本舊來の道德思想に對する反抗の聲である。私はどこまでもこの外的の抑壓態度に對つて反抗せざるを得ない。けれど基督教の精神は單に玆につきるのではない。基督は『われ平和を出さんとて來れるにあらず、却つて刃を出さんために來れるなり』と云つて、盛に革命思想を鼓吹したけれど、同時にまた、彼れ程平和を望んだものはない。彼れは平和の君と稱されて居る。

私はかねてからかう云ふことを發表したいと思つて居た。即ち私は決して徒らに政府に反抗せんことを欲するものでないと云ふことである。理由もなく政府を攻撃したのではないと云ふことである。たゞ私には人として判斷することを許されてある、故に私は政府を批評することが出来る。攻撃したのは政府の施政や態度に缺くところがあつたからであつて、もし善良な政府が成立をしたならば私は衷心から極力これをたすけてやりたいと思つて居るのである。

政府と人民とが相互に結んで共に力を盡すことの出来る時が來るであらう、また來らねばならない。

アメリカの動物虐待防止會ではその會員は、動物を虐待して居るものを見付けたならば、警官と同じ權力を使用することが許されてある。即ち警察權の一部が人民に與へられて居るのである。かくして政府の目のとどかない所に於いては人民がその代理をつとめることが出来る。即ち政府と人民の協力である。かう云ふことは日本では出来ない。

またアメリカなどでは、街に植えてある樹に害虫がつくことがある。その時には小學校の生徒をかり出して或る時間の間、これが驅除につとめしめることがある。さうすると市が多額の金を拂つて人を雇はなくてもちよつとの間にその目的を達することが出来る。而もそれによつて子供の時分から、市の爲めに力を盡すべきものであると云ふ公共の精神を養ふことが出来る。

## 六

日本などでは随分租税の滞納者が多い様である、けれどこれをもし一度でなく、少しづつ位に分納する様にすれば左程困難なことはないかもしれない。併し税務署のお役人だけではそんなことは容易に行はれない、そこで人民の方で委員でも拵らへて時々を集めてまわると云ふ様にでもする必要がある、さうして政府と人民とが扶け合ふことが出来るのである。

けれどそれは決して今日の様な政府の態度では行はれ得ることはない。政府は人民を敵視して居るのである。横柄な面つきをして人民を見下して居るのである。一種のひがみ根性をもつて人民に接して居るのである。政府者と人民とは全然別の世界に住んで居るかの如き態度を持して居るのである。



か。決してさう云ふことはない。親が子を尊敬し子に親切をつくしてやる、丁寧な言葉をつかふ、それが爲めに子が親を侮蔑するであらうか、斷じてそんなことはない。その様な家庭には不幸と云ふものはない、平和と美との消え去る時はない。もし不幸にして私の親が私に對して壓制や干渉を試みるならば私は決して親だからとて有りがたくは思はないであらう、思はうとしても思はれないであらう。子の權利を愛し、その人格を尊崇してくれるものでなければ如何に親だからとて私達はそれに絶對の服従をさしづることを得ない。地震、雷、火事、おやぢ。これは日本在來の諺である。けれどそれは忌はしい諺である。壓制的倫理の行はれた昔の社會ならよいかもしれないが、今日の社會には通用しない。

基督教文明の立場から云へば、男が女を壓制する權利は毫も存しない。夫と云ふ名に何の權利があるか。その名の爲めに威張り得る所以がどこにあるか。男も女も、人格としての價値に何の相違もない。在來の習慣上、夫が妻に對してゾンザイな言葉遣ひをすることは直ぐには矯正し難いかも知れないが、それとも全然矯正しなければ基督教の理想は徹底しない。夫は妻に、親は子に、政府は人民にどんな壓制を加へてもいゝと云ふ様な思想のある限り立憲政治の行はれたことは決してない。立憲政治とは即ち民主政治のことである。

#### 四

而もこれ等の不道理が今日も尙依然としてわが國の上下に公々然として行はれて居るのは遺憾であ

る。私は先達て平塚明子女史の『獨立について兩親へ』と云ふ文章を讀んだ。此文章は大分世間の注意を惹いたと見えて、或る婦人雜誌の如きは極力これと交戦して居る。併し私はこれを讀んで見て實に同情にたへないものがある。女史は云つて居る。私が今度奥村博氏と一緒に家を持つと云ふことに就いては兩親が賛成して下さらないことはよく承知して居ますが、どうしても斷行します。自分のためにさうしなければなりません。併し私は夫婦などと云ふことは好みません、夫と稱んだり妻と呼ばれたりなんかすることを欲しません。また法律で定めた形式によつて是認されることを好みません。と。多くの人はこれを見て驚くであらうけれど私はそれに同情する。今の日本の社會では夫と云ふ名は妻を逆對し無視することの出来る特權である。その様な不道理の爲めに壓迫されて居るものは、夫とか妻とか云ふ名前さへ嫌ひになると云ふのは考へられないことでない。女はそこまで自覺して立たねばならない。けれど私は結婚の形式がいらないと云ふのではない。私はわれ／＼の決心と態度の如何によつては、この形式に女史の考へて居る様な内容を盛ることが出来ると思ふのである。私は民主的思想に反對するものはどこまでも打破しなければならぬと思つて居る。けれど形式をまで全然打破しなければならぬとは思はない。夫婦關係がその様になればどんなに愉快なことであらう。

正月の太陽に正宗白鳥氏の默闘と云ふ小説がある。夫婦が結婚後すぐ飽いてしまつて、つまらない／＼と考へる様になつて行く筋途を大膽に描寫したものである。私は多くの人々が多少ともこの様な經驗をして居ることと思ふ。その原因としては、お互が識らずして結婚したこともその一つであらう。また夫は妻を見下し、妻も夫の缺點や弱點を見出して來て尊敬の念が消え去つて行くこともその一つて

の神は恐ろしいものでなくて、それは實に愛の神である。保羅は羅馬人に贈つた書簡の中にこう云ふことを謂つて居る。『爾曹のうけたる靈は最早恐れを抱く靈にあらず、アバ父よとよぶ子たるものゝ靈なり』これは實によく基督教に於ける神と人との關係をあらはして居る。かくて基督教にては、人は神を恐れはしない、併し神に親しむのである、信賴するのである。人は勿論、神を畏れなければならぬ。併し最早恐れる必要がない。たゞ神の價值と性質そのものを尊崇し信愛すればよいのである。この兩者外部的と内部的、壓迫的と自發的はやがて國家の政治組織にもあらはれたのである。藩閥政治は即ち前者に屬し、平民政治は即ち後者に屬するのである。

この神人の關係は、たゞに政府對人民の關係に止まらずして、親對子の關係、夫對妻の關係にも表はれて居る。そして日本在來の思想や習慣では、悉くその前者即ちコケオドシ的、壓迫的なものであつた。その思想によれば、妻の徳はその理非の如何を問はずにたゞ夫に盲従することであつた。夫の徳は全く我儘な壓迫を妻に加ふることであつた。親の權威は子の人格を認むるの要なく、子の義務は絶対の服従を親にさしづることであつた。官は尊く民は卑しく、官の威嚴はたゞ無道の威壓強迫によつて民を抑壓することによつて保たれ、民はたゞ恐れおのゝいて官の命これ従ふてなければならなかつたのである。それは人民の幼稚な時にはよかつたかも知れない。併し已に成長した、自我の權威に目ざめた人民にとつては寧ろ恐るべき禍根である。民主的傾向の思想は滔々として流れて居る。そして基督教が輸入されたとき日本にもやつて來たのである。

## 三

ジョージ五世の即位式が行はれた時分に、英國に居て親しくその光景を觀て來た私の友人から、私は次の様な美はしい話しをきいた。即位式の當日國王と皇后とは行列と共に倫敦市中を練り歩いて居られたが、私の友人の立つて居る近所まで、その行列の先登がやつて來た時分に、友人の近くに居た一人の小娘が、何を思つたのか急いでその道路を横ぎつて向側へ行かうとした。もしこれが日本ならば不敬だとか何だとか云つて非常なことになつたに相違ないが、英國では決してさう云ふことはなかつた。それを見るや否や、巡查はその行列に向つて止れの相圖をした。行列はバタリと止まつてしまつた。するとその小娘の母は他の一人の子をつれて小娘を追うた。相圖が再び行はれて行進は再び始められた。私はその話しをきいて涙が出るまで嬉しかつた。日本ではなぜそれが出來ないのであらう。この様に一人の人民のために行列を止めることが國王の尊貴を傷けるであらうか、否、々、斷じてそんなことはない。寧ろそれによつて國王に對する敬愛の念を高めるのである、自發的に衷心の深い満足をもつて國王を尊崇するに至るのである。伯林では、皇帝は何等の警護をも伴はずして馬車で市中を通行される、すると通りかゝつて居る勞働者などはわざとその前にすゝみよつて皇帝に敬禮をさしげる、皇帝は一々それに向つて答禮をされる、併しそれが爲めに皇帝の尊嚴は損はれたか。否、斷じて否。

親が子に對しても同じことである。親と云ふ名のもとに子を壓迫しなければ親の尊嚴は保たれない





## 宗教の民主的傾向

安 部 磯 雄

基督教の行はれて居る國はみな平民政治の行はれて居る國である。英國でも米國でも佛蘭西でもみなさうである。たゞ獨逸だけは幾分官僚的、藩閥的なところがある様であるが、それとても日本の藩閥などとは比較にもならない。それ等歐羅巴の諸國に於いては實に、『民の聲は神の聲』なのである。それは何故であらう。興味のある問題である。特に今日の如く政治上の變動ある時に於いては。

蓋しそれは基督教そのものに民衆的傾向があるからである。從來、宗教的信仰や思想が國民の日常生活より社會國家の組織制度にまで及ぼした影響は随分強大なものであつた。基督教國に平民政治の行はるゝに至つたのもまたこの理由に外ならぬ。

宗教の團體にも、民主政治の行はれて居るのもあれば壓制政治の行はれて居るものもある。そしてその別は何處から來たかと云へば、それは神觀もしくは佛觀の相違によるのである。その神に對する人間の關係如何によるのである。宗教にはその要素として必ず神に對する崇敬と云ふものがある。そし

てそれには二種の形式がある。一つは外部的の權威をもつてコケオドシ的に抑壓的に出るものである。他はかゝる外的な強迫によらずして、たとへば價值そのものをもつて内部自發的に信從せざるを得ざるに至らしむるところの實質的なものである。この神と人との關係はやがて宗教上の平民政治と專制政治との別を生んだのである。そしてそれがひいて國家の政治組織にまで及んだのである。

## 二

宗教に於けるこの二種の關係は吾々の眼の前にすぐに表はれて来る。たとへば日本の寺院に行つて見るならば、吾々はそこに一種の敬愛の念に襲はれるであらう。併しそれは果して何の爲めであらう。金色燦爛たる阿彌陀像の爲めである、その前にともされたる蠟燭の爲めである、靜かに立ち昇る香のほひの爲めである。さう云ふものでもつて信心を惹き起さうとする一種のコケオドシである。また吾々をして神殿に行かしむるならば、矢張りそこにも、謂ゆる『何事のおはしますかは知らねども：』と云つた様な莊嚴な感に打たれるであらう。併しそれは果して何の爲めであるか。第一はその位置にある。蓋し殆んど凡ての神宮は樹木の鬱蒼として繁茂して居る森の中にある、またそれには本殿と拜殿とがあつて普通のもの中々容易にその本殿に近づくことが出来ない様になつて居る。かくて一種壓迫的な感じが自然と起らざるを得なくなる。日本在來の神々のうちには荒神あらがみと云ふのがあつた。それは恐ろしい神であつてその神の怒にふれたならば、必ず恐るべき神罰を蒙らずんばすまない。これ等は皆コケオドシである、外部的、抑壓的である。ところが基督教にはそれが無い。第一、基督教

片皮相の形式的忠君愛國主義や、偏狹なる國家主義を振り廻す時勢ではない。漢の高祖、ビスマルク、ウィルヘルムの如き政治的天才も國民の意向を基礎とせずして天下に驥足を伸ばすことは出来ぬ。故に將來の政治家は人民を指導し、人民を教養し、人民の味方になり連帶責任を自覺し、輿論の歸趨に着目する丈の頭のないものは全然政治家たるの資格を缺いて居るものと云はねばならぬ。

### 三

上述の理で、各國割據的獨立的なる歴史は全然史的眞價を失つたものである。世界各民族の消長は一つに混融して、東西文明の發達があるのである。木曾の深山幽谷に發する清水が別れ別れて東西南北に奔流し、互に背向して其間に何等の關係もなかつたものが、等しく太平洋に注ぎ去つて全世界を圍繞する汪洋たる大海に互に相合すると同様に、東西文明の潮流は混融して全世界の海岸を洗ふ一大海洋となつたのである。歴史の根底にもこの一大潮流が貫徹して居なければ噓である。十九世紀までは列國の歴史は何等の交渉と關繫もなく、只漫然と羅列して萬國史であると云つた時代であつた。現代に於て支那、印度、亞弗利加の内地の狀態も其背後に世界文明の消長を看取するに非れば、よく其國勢を理解したものとは云へぬ。世界文明の一大主潮を看過しては各國の歴史は實に空疎となるのである。例へば正義道義の觀念などは兩洋相同じである。國論の沸騰を來たし、内閣の運命に關するまでになつた今回のリヒテル事件の如きは、正義の尊重すべきことを世界に向つて宣明したものである。正義の内容に於ては日本も獨逸も一身同體である。時の古今、洋の東西を問ふべきではない。互にこ

の點に於ては握手することが出来る。凡てが世界的なるこの時勢に於て、基督の紀元でなく世界共通の紀元を定むることも面白いであらう。即ち千八百九十九年を以て和蘭のヘーグ市に於て開催せられたる第一回の萬國平和會議を以て紀元元年となすべきである。科學の長足の發達は新世界を現出し、交通機關の進歩は世界各國をして比隣の思ひあらしめた。この際に於て吾々は眞に自覺し、努力し、偏狹なる國家思想に囚はれずして、卓厲風發の意氣を以て、世界民族の發展と世界文明の潮流を指導することが必要である。吾々は標準を過去の制度に求め、之に戀々たるべきものではない。過去の習俗に囚はれて踳阻逡巡するは、文明史的活躍の機を捉ふることが出来ないものである。歴史は國民の經驗と生活と活動とを語るものである。それ故に個人が歴史の創造者である。カール・ライルの云ふ様に歴史は偉人の記録である等と云ふ時代ではない。國民生活其物が歴史であるのだ。故に吾々は歴史の要素の原動力となる必要がある。吾人の理想とすべきは日本の現代の歴史、否、世界在來の歴史に超越し、世界各國の文明を合融して、新なる有意義の世界文明史を創造すべき使命を有することである。これ即ち史上の第三帝國である。故に何事に於ても世界的なることを要する様になつた。政治家も、學者も、世界の認識するものでなければならぬ。同時に正義も輿論も世界的なる事を必要とする。要するに世界の文明を指導し、人類の進歩に貢獻し、新なる世界史を産み出すことに於て吾人の大なる義務と責任とを感じるのである。

（早稻田史學會に於ける講演歴史の新意義の概要、文責記者にあり）



希伯來は神の樂園に於ける、アダムとイブとに依つて人類の歴史は始つたとしてある。この時代に於ては歴史の中心は神であつて、それは神の經綸の記録である。不思議なる神の活動の歴史、即ち神話を知ることはこの時代を知ることである。第二は帝王の時代で、支那に於ては唐の武王や漢の高祖である。日本にありては神武天皇より天智天皇の頃に至るまでの歴代の天子の御代であらう。西洋に於ても、埃及や、羅馬や、其他の諸國は近世に至るまで、凡て帝王の歴史を有して居た。この時代に在ては歴史の全部をなして居るものは帝王である。帝王の治世とか經綸とか云ふものは歴史の主要なる要素で、同時に史實の根本問題であつた。

第三は近世に入つて、政治家の時代である。世界史上に於て、最近三四十十年間は政治上の實權は帝王より政治家の手に委せられたのである。政治家はその驚くべき手腕を揮つて、その經綸を行ひ、國內を統御すると云ふ、何もかも政治家の技倆を信賴する時代である。日本に於てはこの現象を遠く鎌倉時代に求むることが出来る。即ち武家政治で、武人が政治の樞機に參與し、國家の主權を握つた時代であつた。明治維新の大業も政治家の手に依つて斷行されたのである。岩倉、木戸、大久保と云ふ政治家が陸續輩出して、現代の日本を建設したのである。以上述べた通り歴史の進化の過程に截然たる三時代が劃されてある。

## 二

さて次に來るものは何であるか。所謂第三帝國の時代である。自分の見地を標準として云ふと、十

九世紀までの史家はまだ、完全なものではないと思ふ。その一大缺點は政治家偉人の歴史のみに着目して人民の歴史、即ち國民史と云ふものを全く等閑に附して居たことに存する。社會全般に亘る事柄を史上に記載すると云ふことは比較的に忘却して居つた様に思ふ。偉人豪傑の歴史は歴史の全部ではない。彼等の行爲が全く全國民の行爲とは言ひ難い。我々が今日古代の國民性や國民一般の状態を想像し得るは纔かに小説稗史の類に依てゐる。偉人豪傑の傳記を以て一國民の歴史なりと稱するとは全然歴史の眞意義に反する。それでは價値の甚だ稀薄なものである。故に今日の歴史は世界各國民の歴史であるべきで、歴史は人民に依りて形成され、人民の爲めの歴史でなければならぬ。將來の史家も宜しくこの點に着眼すべきである。政治家萬能論も最早や愚者の迂論に過ぎぬ。ビスマルク、カプー、伊藤公、桂公をまつり込んで騒ぎ立てた時代は疾くに過ぎ去つて仕舞つた。如何に伊藤公、桂公と雖も人民を度外視し、國民の輿論に背戻しては、到底自由に政治壇上に於て、一國の人心を攪し、充分その手腕を發揮することを許さぬ。予が親友徳富蘇峰氏は其著『時務一家言』に於て、國民の政治、輿論の政治には吾々にも別に異論はないが、我々は現在の日本國民に於て其輿論の價値を不幸にして見出すことが出来ぬ、予は往年桂公に依つて一仕事せんとせしが、突然公の薨去に遭つて一頓挫を來し失望の外はないと云つて居るが、この一大蹉跌に會つた彼の心事は眞に同情に堪えない。併し何んと云つても眞の政治は國民の政治であることは萬世不變の眞理である。少數の閥族政治は、善良なる立憲政治に對する一大敵であることは知れ切つた話である。國民の輿論を認めざる少數の頑冥不靈なる藩閥主義者に一國の政治機關を專斷されてたまつたものではない。現今の状態は最早や一

切の第一流者を網羅して悉く吾人の宗教觀を支撐する。これ等の感化は靜默にして、示威的ではない、併しながら有効である。これ等は吾々の側に於ける努力と犠牲なくして働きつゝある。即ち時代の精神は既に吾等のうちに在るところの信仰を宣傳する上に於いて、元氣ある集合的行動を吾人に要求するのではないか。されば吾人は吾人の重んずるこの教理を注意して吾人の子孫に教ふべきこと、又亞米利加の生活の移り行く境遇が許す範圍内に於て宗教的寛容、自由、及び單純の中心として既に設立せられたる諸教會を將來に維持し、且つ安全ならしむること、また信者の有望なる群集が結合せらるゝ所には常に新しき教會を設立すること、又人類の間に協力的善意を獎進する爲めにあらゆる公共的の善き目的を有する運動に熱心に參與すべきこと、また吾等の牧師の完全なる教育の準備の爲めに盡力すべきこと、而して彼等は都會に於けると等しく地方に於いても威嚴を失はざる給養を得るやうに注意すること、また吾人の爲めに輝くところの光明を認めたる他の宗派の牧師及び平信徒を吾人の教會に歓迎すべきこと、また基督教が比較的知られざる外國に於ける志道者の前に吾人が理解するが如く基督教の福音を提供すべきこと、凡べてこれ等のことを實現すべく大なる決心を爲なければならぬではないか。

# 史家の見たる輿論政治

浮 田 和 民

## 一

人類がこの世に生存してから已に何萬年を経て居るか甚だ不明瞭なものであるが、連綿たる人類の歴史は近來になつて新らしき意義を以て解釋せらるゝ様になつた。在來の歴史は頗る割據的なものであつて、支那は支那、印度は印度と云ふ風に、支那の歴史は印度の文明を度外視して純然たる一國內の記録で、充分史的價值を有して居たのであつた。日本の文明の背景にも充分支那印度の文明の要素はあるが、維新前まではこれ等の民族の交渉を不問にして日本の歴史は立派に成立し、存在する價值を有して居つたのである。西洋は流石早くより國際的發達をなして、諸外國との交通も開發して居つたので、他の民族との交渉關係は比較的密接して居つた。コロンブスの亞米利加大陸發見なども、この例と見るべきであらう。併しこれ等の關係も、今日から見れば薄弱であることは云ふまでもない。要するに十九世紀、否二十世紀の初頭までは、各國の歴史は割據的獨立的で、他國との交渉、即ち世界の趨勢との關係を説いたものではなかつた。

歴史を溯つて見ると三つの相異つた時代が劃然と存在して居るやうに思はれる。言ふまでもなく、歴史の開闢は神代に於て始まる。即ち支那は三皇五帝に於て始まり、希臘は諸神の黃金時代に於て、



## 六

科學と政治の進歩も苟くも教師及び模範としてのイエス觀に有害なる結果を及ぼした事はない。諸種の科學はあらゆる科學者が深き敬虔の念を懷く豫言者と殉教者と英雄とを有する。文學及び藝術にも大作家ありて、その作物は幾世紀の後まで残存して永く精選せられたる人心に深き感化を及ぼすであらう。ヘブライ民族及びヘブライの歴史と傳説との驚異すべき所産たる、イエスは宗教の至高の教師である。彼の教訓は世に知られざりし一地方の言語と零雰氣にありて、彼の聽者たりし單純なる人民の群によりて不完全に傳へられて、やがて大なるギリシヤ、ローマの世界に於て腐敗したれども、爾來人類の歴史に於て一切の最善の根底たることを證明した。この人格に對して人類の愛情と尊敬とは彼の教義の周圍に異教より集まりし雲霧が徐々として一掃せらるゝに従ひて、常に高まりつゝあり、且つ常に一層大なる溫度と光輝とを以て照してゐる。

將來の教會はイエスの人格を愈々尊敬し、十九世紀の間、その歴史的結果によりて證明せられしごとく、彼の教訓の異常なる性質を詳論するであらう。彼は古今を通じて謬らざる最も眞純なる價值を有する倫理上の原則を定めたれども、その時代に存せし思潮と社會制度のために粉塵せられ壓服せられて、その發言以來常に認識を得んとして苦闘した、而も猶その豫定の結果を實現することが出来な。其正當なる亨得に向ひて忍耐し、努力するは將來の教會の使命である。諸君は予は將來の時代に於て一般に採用せらるゝらしき基督教の形式は此の會議（この論文は千九百十三年十月六日より九日までニューヨーク

州バファロー市に開かれたるユニテリアン及び他の基督敎諸敎會の總會に於て讀まれたのであるに於て代表せられたる諸敎會に親しき形式、即ち神の父たること、人類の同胞たること、イエスの指導者たることの形式の中に現はされてゐるといふ確信に對する理由を諸君に提供しつゝあつたことを感得せらるゝであらう。これは證權よりも自由を選擇し、自然の勢力及び過程の中に、天使をも惡魔をも認めず、人間を神視せず、和解的、犠牲的、若しくは贖罪的にあらず、人類をば不合理なる恐怖より解放し、理性と希斥し、望に信賴し、牧師と宣敎師とを有すれども中保的僧侶を有せず、罪惡と不正と不善とを承認し且つ排而して眞正面より死を諦視すれども、主として善と生と愛とを注目するところの基督敎の一形式である。勿論予は現在の外觀及び直接の結果に非ずして、思想及び感情の強烈なる暗潮、無數の心意と意志と、多くの宗敎的團體とが參與すべき永久的運動に就いて考へてゐるのである。

## 七

此祝福せられたる信仰を傳承し、若しくは自ら獲得したる人々の双肩には、同胞に對して或る明晰なる義務が負はせられてゐまいか。吾人ユニテリアン主義の平信徒及び自由主義の信仰に於ける吾人の先覺者は概して吾人の尊敬する説敎者及び作者に傳説的神學の暗所を貫かしめ、且つユニテリアンの敎義及活用をして古風の宗敎的言説を信ずる無性なる大衆を醗酵せしむるに委するを以て満足して居つた。この穿入作用は成就せられた。而して酵母は不思議なる作用を惹き起した。精確なる科學と政治學とのみならず、近世經濟學、新しき歴史文學、散文及び韻文にものされたる近代文學の大多數は一

得意の時代に達する迄は有効に實行せらるゝことが不可能であつた。それはローウエルがロビンソンとブルースターより引用する次の句に甚だ巧妙に現はれてゐる、『吾人は神の最も嚴重にして神聖なる羈絆と契約のうちにある一團體として結合す、而してそれを犯せば吾人の良心をして傷ましむ、又その爲に吾人は相互の善と全體とを注意する様に嚴に結合する事を信ず』。而しながらロビンソンとブルースターの嚴肅なる教訓はブリマスの植民地に於て完全なる結果を致さず、而していづれの人間社會に於ても未だ實現せられないのである。されど最近五十年は基督教紀元のあらゆる先行の世紀よりも人類同胞説の實現に向つて一層の進歩を目撃した。此進歩は社會のあらゆる階級の道德的及び生理的健康を増進する一切の手段に對する廣汎なる興味や、誠實なる産業の製品のより善き分配や、大小を問はず、また製造的もしくは配分的たるに論なく一切實業上の道德や、將又全人民に健全にして有効なる教育を與へんとする目的等のうちに示されてゐる。人類中の不幸なる人々に對する同情あり、慈悲あり、公平無私なる顧慮は實行せられ、又政治、行政、實業界を動かして、過去五十年間、政體の如何を問はずして歐米に於けるあらゆる進歩的人民の特色となりて平和と善意との一新紀元を齎らさんとする望みがある。猶未だ東洋はこの同胞感情を實現せんとする此新衝動を殆んど感じない。此一般に行はるゝ感情を有効ならしめんと働きつゝある多くの社會的勢力は散漫にして善く組織せられてゐない。されど是等の勢力は皆仁慈的にして一つの目的を遂行せんとしてゐる。この同胞的感情を養成する組織は指導者、先見者及び豫言者を有すれども、未だ支配者を有たない。是等は群衆の愛に富む情緒より發生する。是等は次第に群衆に影響し、是等の影響は時の進むに従ひて人類の社會的組織に益々有力なる

ものとなるであらう。それは恰かも吾人の神の事業と稱する者が進行するが如く、急がずに、休まずに前進する一事業である。實にやそは神の間斷なき恩澤の一部分、然り、比較的に新しい部分である。

近代人の宗教觀をかく深く影響したる是等の新勢力は吾人の神觀より個性と人格とを奪ひたる如くも思はる。そは司法官、玉座にゐます君王、戰爭の神として擬人的神觀より遠かりたる遍在的精力の龐大なる想像である。然りと雖も、科學と民本主義と同胞觀念に於けるこの進歩を目撃したる時期の間に、個人に對する人間の顧慮及び天才ある個人に對する人類の感謝の念は決して减小せずして、却つて増進したのである。今日の吾人は吾人の祖先よりも一層明晰に且つ包容的に指導者たる大人物に對して吾人の負ふ所を認容するのである。吾人は彼等が過去の豫言者、先見者及び聖者に對して感ぜしがごとく、吾人の英雄に對しても強烈なる敬慕の念を懷き、又彼等が彼等の英雄に捧げしごとく、吾人の英雄に對しても強烈なる感謝の念を有するのである、而して普通教育は現代の人々をして如何なる時代の文豪もばその恩人と指導者のうちに含有するをえしむるが故に、吾人は更に多くの人々に感謝し得る便利を有する。人間の愛情は今も依然として家族、國家、及び民族中の長者に獻げらる。人格に對する感覺と信任とは常に強烈にして不可抗的なる、且つ常にしかあるべき、吾人の天性の遺傳的部分である。故に人が人たる間は神は一人格として思惟せられ、あらゆる他の名に優りて意義深き名を有するであらう。神の屬性に關して科學の一切の新説明を考量すれば、父をば家族の敬愛すべき首長と思惟する人々の間にありて神を「我等の父」として記述するものは最も善き名である。



そは一切の科學的及び一切の民本主義的成功の條件である。そは眞理を發見するの條件にして、併せてその結果である。如何なる豫言的發言も『爾は眞理を知るべし、而して眞理は爾に自由を與へん』との豫言よりも、一層完全に成就せらるゝことが出來ぬ。蓋し四百年間白人種の眞正なる進歩は自由、然り、家族に於ける、産業に於ける、政治に於けるあらゆる種類の自由——兒童、婦人、及び男子にとりて益々多くの自由——に向つた。而して自由の二大使僕は民本主義と科學とであつた。縱令行動上の一單位あらずとも、聖職團、教議會、僧官會議、もしくは宗教議會として組織せられたる基督教會は大部分は從來自由に反對するものと思惟せられた。されど、新教改革以來、幾多の基督教會、もしくは教派は進化の過程を蒙りつゝありたれば、やがて、公々然として且つ全く自由の味方となるであらう。

過去一百年の間政治的、宗教的及び社會的自由の進歩はかくの如く絶對に、確實に、且つ不休不息にありたれば、吾人は將來に關しては、根本的にして公平なる自由と兩立せざる一切の證據と勢力とは、その新舊を問はず、時の長さ過程に於て自由なる變更を受け、或はその使用を中止せらるゝに至らんと推論するも過言であるまい。世には時々證據と特權を可とする反動が生起するであらう、されどもそは一時的にして、殆んど齒牙に掛くるに足らぬであらう。同様に勞働組合、社會主義の如き十九世紀に於て民本主義的理想を撫育し、又大體に於て民本主義の運動を促進したる諸種の動力は廿世紀に於ては衰微することがあるかも知れぬ、何となればその或る政策と方法と合理的個人主義と無私なる自由とは明かに衝突すべく、又是等の組織に於ける專制的にして壓迫的なる分子は自由主義者を

支配するに至ることあるかも知れぬからである。これと等しき理由のために、産業及び商業に於ける各種の獨占事業は、自由競争を滅殺し、且つ進歩を杜絶するが故に、首尾好く抵抗せらるゝであらう。同様に世界に於ける仁慈的行動に對する自由にして協同的の好意を最も好く組織する諸教會は殘存するであらう。若し基督教にして政府や寡人政治的制度と絶縁せんか、そは聰明なる民本主義と進歩的科學との懇切なる同盟者となり、又自由、眞理、正義、個人主義及び人類同胞の最も有力なる進歩者となるであらう。吾人は一切の古代文明は人間奴隸制度に基き、且つその暴力は彼等にありては權威の唯一の源泉であつたことを想起する時は、吾人は自由に向ふ道程を如何に遠く旅し來れるかを理解する。自由の増進すると共に、暴力の使用は減じて、今や吾人は將來の社會に於て使用せらるゝ暴力は無智と微弱とを保護し、個人及び集團に於ける惡癖を防止し、自然の兇敵と彼自らの有害なる衝動とに對して人間を保護する威力たらんと信ずるに至つた。暴力及び且つ往々にして暴力を使用するに際して發達したる男性的美德を得意とする人々は將來の文明は暴力とその剛健なる美德を廢除するならんことを恐るゝに及ばぬ。人間の自然及び彼自らの缺點と惡徳との衝突は種々なる保護的威力と人間の勇敢、忍耐、及び自らを犠牲にする友情のために永く大に之を使用するであらう

## 五

新しからざれども、新に應用せられて人類の宗教觀を速かに變更しつゝある第三の教義は人類同胞説である。イエスは陰に陽に之を教え、基督教會はそれに就て多く説法したなれども、そは民本主義の

らるゝ教會は、北米合衆國に於ける如く、非常なる多數の種類となりて繁榮することが出來やう。政に民本主義の争はんとする所のものは宗教に非ずして、久しく格別なる特權と獨得の教權とを所有したる古き國教となれる宗教である。最も民本主義の國民も如何なる特權を有せざるも一般人心を鼓吹するの術を知る教會によりて甚深なる感化を受けることが出來やう。

### 三

その大分部は教會と關係なき米國民本主義は基督教の發達に偉大なる歴史的意義を有したる多くの獨斷的教説や、信條や、慣例や典禮には驚くべき冷淡を示してゐる。民本主義は化體、豫定、代理的贖罪もしくは使徒繼承に關する古來の獨斷的教説には毫も興味を有せない。そは等の討議に参加せず、從つて何等の感興を覺えないのである。此點に於て苟くも基督教國に於ける年若き民本主義者の大衆は猶其國々に於ける多くの宣教師にとりて猶肝要と思はるゝ神學上の論議に毫も利害を感じること能はざる支那及び日本の思想家に酷似する。幾世紀の間基督教國に於て生死の問題たりし獨斷的教説もしくは信條は、基督教徒たらしつゝある支那人もしくは日本人に對しては、秋毫も重要にして利害ある事柄と思はれない。之と等しく民本主義的社會は基督紀元の最初の五世紀間に徐々として成形し、爾來約十三世紀間根本的變化なくして時代を逐うて傳はりたる基督教布教團にその背を向くのである。

又科學者を活動せしむる精神は近代社會に於ける民本主義の精神を勢援する。概して科學者は年齢

もしくは前時代の承認に基く傳説もしくは權威に對してはあるか無きかの尊敬を有するのみである。彼等は極めて個人主義的にして、特權階級、もしくは結晶し、或は沈澱したる真理の傳説的もしくは神聖視せらるゝ體系には殆んど何等の同情を抱かない。概ね科學者は魔術と奇蹟とを信じない。彼等は眞理と事實とに對して熱情を有すれども、單なる思索や人間の直覺にのみ基く理論を好まない。さもあらばあれ、眞理及び事實に對する彼等の觀念は自由にして抱容的である。されば彼等は宗教それ自身や、人類の歴史や言語の歴史をば眞理と事實との領域に收めて最も科學的なる精神と完全なる公平とを有する人々にも勤勞して實益を得しむるのである。此意味に於て世界諸宗教は科學的研究に對して正當の分野である。勿論、研究者の眼に人類社會に最も多く貢獻したと映ずる宗教こそ最も同情を以て探究せらるゝであらう。又科學者は科學的研究の適當なる範圍内にその起源、相互關係及び相反的結果に關して人間の精神的作用、情緒及び情熱の全圍を包括する。故に用意周到なる實驗家は精神と肉體との反應、精神と精神との反應又他人の意志に及ぼす一人の意志の反應を研究して大なる成功を收めた。別言すれば、科學は理性を肯定して人間の全性質は宇宙と其神の性質と調節する事を信ずる。

#### 四

是等の二種の尤大なる勢力の中に——民本主義と歸納法に由る科學的研究の精神——根本的に重要な共通の一要素が存する、即ち自由の要素にして、人の欲する儘に考へ、且つ語る一個人の權利以上の一種の自由である。そは民本主義並に科學及びその一切の歸依者にとりて存在の第一條件である。



いふもの即ち是である。

## 二

民本主義は人間の支配者に對する世人の概念に大なる變化を生起した。支配者が實力及び武勇の權利に依つて、若しくは門地の權利に依つて其位地を保有せる間は彼は往々にして群衆に由りて神視せられて、神及び神々の典型となつた。中世紀を通じて封建制度は天國に關する通俗的概念を供給した。而して實に今日に至るまで「神の國」の最も普通なる概念は封建制度の創設及び慣習に基いてゐる。幾十世紀の間存在し來つて、今日も多くの國民の間に存在する教會及び國家間の密接なる關係は、支配者が神權によつて支へられ、而して神が唯擴大せられたる人君に過ぎなかつた間は、自然にして避くべからざるものであつた。

過去より繼承せられた見解と傳説との頑強なる大集團に對して民本主義、殊に教會と國家とを全然分離したる米國民本主義が爆發した。民本主義はその支配者をば選ばれたる奉事者と見做す。そは支配者が當分國民の心意と勢力を代表する故に彼等を尊敬する。彼等もし吟味の結果愛を受くるに足ること明白となれば、換言すれば調法にして、廉耻を重じ、仁慈にして且つ人を感激し得べくんば、そは彼等を敬愛する。そは支配者としてよりも寧ろ却りて彼等を指導者と思惟し、而して實際彼等が指導の任に堪ゆる時は心底より歡喜を覺ゆるのである。民本主義は政府をば決して社會の或る支配階級もしくは部分の特別なる便益のためにあらずして、人民の便益の爲に種々なる種類の事業を指導し、且つ

實行するために自ら創設したる機關と思惟する。政府は社會の福祉の遍通的無休息にして、勤勉なる獎進者である、又かくあらねばならぬ。今日政府の背後の實力は輿論と呼ばれるものにして、思慮ある人民大多數の眞正にして熟考せられたる意見を遂行する政府こそ蓋し最上の者である。故に民本主義の一國民にとりては普通教育は最大急務である。政府に就いて、又政府の行動の源泉としての輿論に就いてこの概念は神に關する古代思想と兩立せざれども、それに關する近代思想とは全く兩立するのである。

過去一百年間歐米に於て進行しつゝありし社會的革命を最も善く觀察したる者は民本主義は此大運動に於ける最も強大なる勢力——崩壊し、分解し、且つ或意味に於ては破壊的なれども、一段の高處に於て建設的、深謀遠慮にして、又生氣を與ふる一勢力であつたことに一致する。そは古來の教權と傳説とに對して戦ひを宣すれども、それ自身の創造する所の新にして、より善き教權を設立する。其宗教に對するや態度概して好意を缺いた。何となれば公式の基督教會は幾世紀間支配階級の同盟者にして、貴族制度及び特權の方面に基き、若しくは神聖なる統治を行ふ高官と僧職とより成る、最大なる基督教的團體として組織せられたからである。新教改革以來基督教會はそれに屬する者の精神と生命とに及ぼす法律上の特權と特殊の教權とを有する一個の制度として考察せらるゝ時は、その勢力及び影響に於ては漸次衰微の狀態に在つた。されどもこの衰微の比率は民本主義の過去一世紀の間に大に早められた、而してその終局は未だ來らざるのである。苟くも國立教會なる者には民本主義は已むを得ずして挑戦する。されども民本主義的制度の下にありては任意の寄附と基本金とによりて維持せ

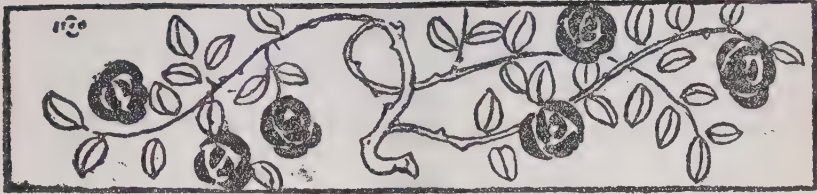
## 第二十世紀の基督教

ハーヴァート大學 名譽總長 チヤールス・エリオット

内ヶ崎作三郎 譯

### 一

千八百五十九年に『種の起原』が公にせられし以來、多少變更せられた生物進化の理論が一般に認識せられしとや、殊に生物學に關係して化學及び物理學の最近の勝利や、米國革命以來民主主義の急速なる進歩や、また人類同胞の教義が常とはゆかねども、往々にして實行せられたる事どもは、思想界の宗教觀を深く變更した。思想家は久しく人類の大衆のみならず、その智識ある指導者の間にも行はれたりし神に就いて一切の帝王的、及封建制度的觀念と共に、君主、帝王、若くは萬軍の主としての神に關する擬人的觀念を斥くるに至つた。され、神に關する種々の觀念中、創造者として彼に關する觀念程多大なる變化を蒙りたるはない。進化論は、天體にもあれ、將た又動植物にもあれ、創造をば短時期に於いて無限の製作者によりて唯一度切りに造られて、やがて自然法と呼ぶる、豫定の企圖の上を自動的に走るに委せられたる一片の製品ではなく、



成長しつゝ、若くは徐々に發達しつゝ、而して遼遠なる過去の歴史と、流動する現在と、無量不可測の將來を有するものとして表現する。苟くも思想家たる者は今やエデンの樂園の物語りや、兒童が雪や泥土より一個の形象を構成するごとく、土塵にて人を造りし者としての創世紀第二章に於ける神の描寫をば原始的神話、もしくは架空的詩歌としての外は信ずることはしない。近代人にとりて創造者は、人間の精神が微小なれども思惟すべからざる程に複雑なる夫自身の體軀を活動せしむるが如く、昨日も、今日も、而して永遠に萬有を活動せしむる間斷なき活動的の精力及び意志である。

野蠻人にとりて神々は主として自然の抵抗すべからざる激變、即ち電光、地震、洪水、旱魃、火山、及び暴風雨の中に認められた。第廿世紀の人々は専ら音響、光熱、電氣の驚くべき精力及び動植物の活力ある過程の中に、また人間の愛情と向上心との中に、及び人間社會の進化中に神を認むるのである。歸納的方法の應用によつて人類は過去百年内に於て、人間の使用に便益を與ふるやうに巨大なる自然力を適用する力を獲得した。かくして人類は神及び自然の新觀念に於て大なる靈的利益を得るに至つた。君主若しくは帝王としての神の思想は、自然科學の功績に由つて興へられたる夫自身に關する第十九世紀の天啓と兩立しない。今や神は不休息の勞働者として、普遍的奉事者として、倦むことなく、在さることなき精力供給者として現はるゝ。神を斯く考ふことは果たして非基督教徒的なるか。否、若し、我等が新約全書に存する崇高なる二章句を文字通りに解するならば、決して然うでない。一はイエスによつて發せられたる「神は靈なれば、之を拜するものは靈と眞とを以てせざるべからず」にして、他はポロによりて發せられたる「我儕は神に在つて活き、且つ動き、且つ存す」と



Books

Books

## NEW PUBLICATIONS

The Bible its Origin, its Significance and its Abiding Worth

by A. S. Peake. ....	3.75—.08
A Bookman's Letters by Robertson Nicoll. ....	2.25—.08
Christ in the Social Order. ....	2.00—.08
Epistle of Priesthood by Nairne.....	4.00—.08
The Facts of Life by C. Simpson. ....	1.75—.08
Greater Men and Woman of the Bible by Hastings.....	3.00—.12
History and Literature of the Early Church by James Orr. ....	1.25—.08
The Holy Land, Robert Hichens. ....	1.75—.08
Jesus and Future, E. W. Winstanley.....	3.75—.12
The New Testament a New Translation by Moffatt.....	3.00—.08
Old Testament in Life and Literature by Jane T. Stoddart. ....	3.75—.08
St. Paul and the Mystery Religions by H. A. A. Kennedy.....	3.00—.08
Shall we do without Jesus, by A. E. Hill.....	3.00—.08
The Spiritual Interpretation of Nature by J. Y. Simpson. ....	2.50—.08
Studies in the Apocalypes by Charles. ....	2.25—.08
Studies of Paul and His Gospel by Garvie. ....	3.00—.08
Unwritten Sayings of Our Lord by D. Smith. ....	1.25—.08
The Weakness of God and Other Sermons by Robert Cowan. ....	3.00—.08

Man to Man Library (1 yen Post 8 sen)

Four Men by James Stalker

Gospel for a World of Sin by H. Van Dyke

Man to Man by R. E. Welsh

Respectable Sins by Watson.

東京

教 文 館

銀座

(振替東京一一三五七)

六合雜誌



三

月

號

# 六合雜誌第三十四卷第三號目次

## 評論欄

第二十世紀の基督教

エリオット  
内ヶ崎作三郎譯

史家の見たる輿論政治

浮田和民

宗教の民主的傾向

安部磯雄

憲政の精神的背景

吉野作造

政治の根本的理想

内ヶ崎作三郎

創造の世界

野村隈畔

宗教の精神的本源

三並良

## 文藝欄

史影

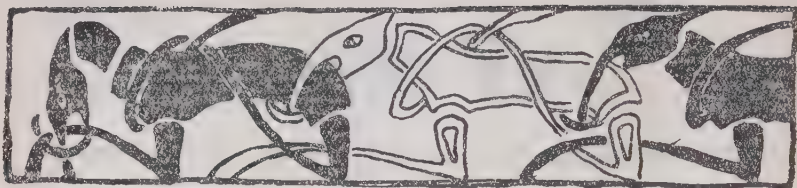
ストリンドベルヒ  
千葉掬香譯

白玉吟(短歌)

野口精子

監獄か學校か(對話)

佐藤清



In Meetings.....岡田哲藏.....〇

歐洲見聞錄.....盧山生.....八五

オット・ワイニンゲルに與ふる(詩).....佐藤清.....九〇

冬の夜の對話.....石田樅村.....九二

灰燼(小説).....井口杜村.....九四

社會欄

靈界の偉人故石井十次氏を憶ひて.....星島二郎.....一〇六

銀座教會の内と外.....K・Z・K.....一二三

死の歎美者となる前に(感想).....吉田絃二郎.....二八

時評欄

△警察制度改正の急務(鈴木) △下級官吏の辛勞(ふみはる) △神學研究

勃興の兆か(三並) △文藝家と思想家に檄す(三丁) △時事評語(寸鐵)

新刊批評.....惟一館たより.....編輯室より.....



ライオン齒磨はみがきは

品質ひんしつの勝すぐれる  
人氣じんきの盛さかんなる  
販賣額はんばいがくの多おほき  
價格かかくの廉れんなる

點てんに於おいて

世界せかい一いち！

總すべての點てんが世界せかい一いち

# THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 398. March. 1914.

## CONTENTS.

Christianity of the Twentieth Century. ....	Charles Eliot, Emeritus President of Harvard University. L. L. D.	
.....	<i>translated by</i> Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
Popular Government in the Light of History. ....		
.....	Prof. Dr. K. Ukida.	15
Democratic Tendency of Religion. ....	Prof. I. Abe.	20
Spiritual Background of Constitutional Government. ....		
.....	Prof. S. Yoshino.	29
Fundamental Ideals of Politics. ....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	36
The World of Creation. ....	W. Nomura.	47
Spiritual Foundation of Religion. ....	Prof. H. Minami.	57
"Leontopolis" ( <i>August Strindberg</i> ). ....	<i>translated by</i> K. Chiba.	66
<i>Tanka</i> .....	Mrs. S. Noguchi.	71
A Prison or a School? .....	K. Satō.	72
In Meetings. ....	Prof. T. Okada.	80
First Impression of Russia. ....	Rozan.	85
A Winter Evening ( <i>a poem</i> ) .....	J. Ishida.	90
To Otto Weininger ( <i>a poem</i> ) .....	K. Satō.	91
Tragedy of a Poor Couple ( <i>a novel</i> ) .....	T. Iguchi.	94
<hr/>		
Reminiscences of the late Mr. Ishii. ....	J. Hoshijima.	106
Rev. T. Ugai and his church. ....	K. Z. K.	113
<hr/>		
Fragmental Thoughts. ....	G. Yoshida.	118
<hr/>		
Topics of To-day. ....		123
Books of the Month. ....		131
Unity Hall Reports. ....		133

Published Monthly by the

TÔITSU KRISTOKYÔ KÔDÔKWAÏ,  
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

# 目下の好讀物は何?

## 基督教傳論爭史

■賀川 豊彦 編著■

基督教傳研究史は基督教傳の基礎學で、基督教傳は神學の基礎學である。編著者はこゝに見る處があつて、獨逸近代の名著アルベルトシュワイチエルの「ライマラスよりウレーデまで」を紹介し之に加ふるに英のサンデー・バルキット、モファート、トムソンアレンの運動、獨のドブシュツ、米のギルベルト、ウオアフィールドの研究を詳説し最近基督教傳研究界の大問題なる終末論の歴史を叙説し猶日本に於ける約三十冊の基督教傳の歴史を述べて、最後に著者獨創の論斷を與へたるもの基督教者必讀の良書である。

■菊判美本

■聖畫壹葉

■定價壹圓貳拾錢

■送料拾貳錢

福 音 舍

神戶 元町 鯉川 筋

振大 一三 四四 八番

Library of the  
PACIFIC UNITARIAN SCHOOL  
FOR THE MINISTRY  
Berkeley, California

# 六合雜誌



三  
月  
號

明治三十四年三月廿七日發售  
大正三年三月一日發行  
（每月一回一日發行）

六合雜誌第三十四年第三號



# 注意！

一、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候

二、本誌は従前は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今回内部の整理と共に毎號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御諒承下され度候

三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候

四、若し郵便爲替にて御送金の場合は芝區三田四國町

二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候

五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御註文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に

(前金切)と押捺致候間早速御送金可被下候

六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申

上ぐべく候

七、定價は内容の改善發達と共に下表の如く改定致候

間御承知下され度候

## 本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ケ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ケ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共
●海外は郵稅一冊に付金六錢(清國を除く) ●臨時號出版の際には規定以外に代金申受く			

## 本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓
●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候 ●二回以上連續掲出の際には特別割引可仕候			

大正三年二月二十日印刷納本  
大正三年二月一日發行  
(毎月一回一日發行)

定價貳拾錢  
稅共

發行兼編輯人 鈴木 文治  
印 刷 人 山本 與一郎  
印 刷 所 株式會社 秀英 舍  
東京市芝區西紺屋町二十七番地

## 發行所

東京市芝區  
三田四國町

## 統一基督教弘道會

〒振替東京二〇〇三番

## 賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋  
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

# 早稻田大學學生募集

學部名稱					修業年限		入學資格		入學時期	
大學部					大學部		中學程度合格卒業生は高等豫科第一期專門部各		第一期 三月、四月	
高等豫科					高等豫科		第一期專門部各		第一期 三月、四月	
政治經濟學科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
法學科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
文學科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
史學及社會學科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
機械、電氣、探採建築科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
政治經濟學科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
法律科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
國語漢文科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
英語科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
數學科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
理化學科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
機械科					三年		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
電工科					二年半		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
探採冶金科					二年半		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
建築科					二年半		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
土木科					二年半		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
附屬早稲田手工學科					二年半		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	
屬田校					二年半		科第一學年、高等師範部第一部		第二期 九月	

## 高等豫科一期

## 高等師範部二年

高等豫科第一期政法文商各科、高等師範部第一部豫科、第二期第一學年に無試験入學は四月末日まで、同入學試験は三月十九日午前八時より●高等豫科第一期理工科に無試験檢定入學は四月十五日まで、同入學試験は四月一日午前八時より。願書は總て前日迄に差出す事●規則書は郵券三錢を要す●詳細は各科事務所に照會すべし。

大正三年二月

東京 早稻田大學

統一基  
督教會  
集會案内

一 禮拜說教

毎日曜 午前十時

說教

内ヶ崎 作三郎

一 傳道說教

毎日曜 午後六時半

一 聖書研究

毎日曜 午前九時

基督教觀

三 並 頁

一 靈交會

毎木曜 午後六時半

擔任

内ヶ崎 作三郎

一 日曜學校

毎日曜 午前九時

校長

山本與一郎

一 音樂練習會

毎日曜 午後一時半

擔任

矢野房代

● 地方書店に告ぐ

- 一、雜誌書籍の發送は東京の各書店と同時に爲す、
- 一、發送、返品共に一切郵便に依る事、
- 一、雜誌書籍代金勘定請求は、參ヶ月乃至半ヶ年毎に於て爲す、
- 一、發送上其他に於て不都合を認められたる場合には直に御通知を乞ふ、
- 一、代金を請求しても更に拂込なき時は直に發送を停止すべし、
- 一、御送金は成る可く振替貯金を使用せられたし、
- 一、振替貯金口座は東京一〇〇〇三、統一基督教弘道會宛に願ひます

● 外國諸店へ

- 一、本誌も諸店の熱心なる御勧誘によりて逐號購讀者の増加しつつあるは本社同人一同の深く感謝する處なり海外發展は本誌の最も希望する所なれば今後益々御盡力あらん事を切に奉希上候
- 一、雜誌の發送は毎月一日を以て之を爲す若し不着の疑ある時は直ちに御報知を願上候
- 一、御送金の際は芝園橋郵便局を御指定被下度候

大正三年二月

六合雜誌社

二月一日發行

# 神學之研究

一冊  
廿錢

隔月  
發行

發行第五年第三號要目

次第豫告——萊殿大學  
神學教授 ラーケ博士の特別寄書

山上說教の神學

神學士 須貝 止

サシヅカリズム

神學士 池澤駿太郎

耶蘇の本懷と神國

文學士 鈴木龍司

聖書研究に就て

記者

耶蘇は精神病者なりや

シュワイツァー

トレルチ博士の宗教觀

ミラ

聖書研究上教會の意義

ブリッグス

米國新教の覺醒と危機

マシュー・ス

解説——グンケル著新約書の内容

新著紹介短評十數種

警 醒 社

發 賣 所

振替 五五  
東京 三

東京 銀座  
橋張區

購讀料 壹圓  
參拾五錢



# 創造

毎月一回

發行日

# 戀ころもろ

■ 第十四號一月一日發行定價廿五錢 ■

▲ 甲板の上 (詩)	▲ 小鳥と赤き夕日 (詩)	▲ 一生の仕事 (感想)	▲ 悲しき死 (小説)	▲ 彼の女に與ふ (詩)	▲ 春の曙の夢 (戯曲)	▲ 所謂後期印象派 (感想)	▲ アンドレエフ演劇論 (評論)	▲ 「海の夫人」と「熊」 (感想)	▲ 毒藥の壺
人見東明	加藤介春	岸田劉生	田中介二	福士幸次郎	秦 豐吉	木村莊八	米川正夫	清浦青鳥	相馬御風
短歌	大熊信行	田邊若男	石川才三郎	高山辰三	磯ヶ谷紫紅	津端修	沖鹽正光	上村千草	太田優子
								南くに子	美川康

獨自の世界を創作し、勇躍を自由にこころみつある人見東明の第二詩集なり。之れ著者が心臓よりも愛せる「獨の舞踏」以後の傑作八十餘篇を收めたるもの、近く美装して出づべし。(定價六拾錢)

發行所 東京 東●創造社 東京 小石川區 市谷一丁目 三〇番地 發賣

(後附四)

# 統一教會特別講演會

二月六日(金)午後六時半

一 オイケンの基督教觀

額賀鹿之助

一 力の福音

海老名彈正

二月七日(土)午後六時半

一 源發的宗教

三並良

一 永遠の求道者

山室軍平

二月八日(日)午前十時

一 靈界の連帶責任

内ヶ崎作三郎

同日 午後二時

一 婦人の力

新渡戸稻造

一 男子貞操論

矢島楫子

同日 午後六時半

一 演題未定

吉野作造

一 宗教の民衆的傾向

安部磯雄

一 態度の決定

内ヶ崎作三郎

芝區三田四國町(芝園橋停留場側)統一基督教會に於て開會讀者諸君の來會を歓迎す

# 帝國文學

（厘五錢一稅郵） 號 月 二 （錢十二金價定）

△誤られたるイブセン（評論）……………文學士 片山孤村

△クライストの最後（戯曲）……………文學士 成瀬無極

△前途（詩）……………文學士 茅野蕭々

△海鷗（戯曲チエエホフ）……………伊東六郎

△思ふやうに（小説ボタアペンコ）……………文學士 小林愛雄

△早春（短歌）……………鳴澤寡人

△昨秋の英國劇壇（海外叢壇）……………石本笙

△一月の文壇……………文學士 山田檳榔

△表紙繪……………矢代幸雄

## ▼新春文壇の權威▲

大日本圖書株式會社

京橋

銀座

# サンダーランド博士著

## ■ The Origin and the Character of the Bible

一冊金貳圓也  
郵税金八錢

## ■ The Spark in the Clod.

一冊金壹圓五拾錢也  
郵税金八錢

以上實費にて御取次可申候御希望の諸君は至急御申込み相成度候

東京市芝區三田四國町

統一基督敎弘道會

振替東京一〇〇〇三番



## 惟一館なより

△一月の惟一館は新しい時代の人々の新しい心で充たされてゐた。大正三年の恐ろしいムーヴメントが、今から一種の壓迫を持つて、吾々の上にのしかゝつて來てゐるやうに思はれる。

△東北、薩南相次いで天災地異の慘ましい報道が聞かされた。教會の兄弟達は應分の力を盡すことを怠らなかつた。内ヶ崎牧師は、青年會館やその他の所に出かけてまで、盛に救済方法を講ぜられた。

△本月の主なる説教は、前進と努力、久遠の信、眞我の實現、與ふるの喜び、天災と人生(内ヶ崎氏)、迷信論(武田氏)、等であつた。△十五日には例月の通俗講話會があつた。岸本氏の「精神と體力」安部氏の「生活費の問題」の講話があつた。聴衆二百五十の盛會であつた。

△十八日の午後、教會の有志達は本所深川の貧民窟訪問に出かけた。

△十八日夜、學生傳道演說會を開いた。偉大なる精神(嶺岸氏)新年の感(目賀田氏)、貧民窟視察談(鈴木氏)などがあつて、頗る盛んな集會であつた。

△二十三日夜、内ヶ崎牧師のお宅で本郷小石川聯合の「組會を開いた。窓の外には冬の夜の星がきらめいてゐた。兄弟達の花やかな語らひで靜かに平和な夜が更けて行つた。

△二十五日は、教會の總會が開かれる筈である。さぞ賑やかなことだらうと想つてゐる。(二十三日夜)

## 編輯室より

△ちらほら梅の花が綻び初めて來ました。これからいよいよ私達の活動の時になりました。

△一月は芝居のシーズンでありました。記者も成りツたけ、洩れなく見たいと思ひましたが、時間と經濟の問題でそれもできまへんでした。しかし私達は新しい劇の方面に對しても、常に深い意義と興味を抱いて行き度いと思つてゐます。

△岡田氏は毎號英文のものをお寄せ下さるのは、私達が讀者諸君と共に光榮とするところであります。一月號に同氏の標題に英詩としたのは編者の誤りであります。惡しからず……

△蘆山氏の歐洲見聞記は、毎號彼の地から送つていただくことになつてゐます。來月號にはいよいよシベリアからモスクワに入るの消息があります。

△今月號からは、大に社會欄を賑はすつもりであります。同時にこれから倍々評論の欄を盛にしたい考へです。

△三並氏のオイケン哲學の翻譯が文明協會から、出版せられたさうです。

△野村君は牛込拂方町三に移轉しました。

△内ヶ崎氏は三月號の爲め、ローマン・カゾリツクに關する長論文をものせらるゝ筈である。

△六合雜誌原稿は當分の間、府下集鴨町字集鴨、一四七〇内ヶ崎氏宅にお送り下さいますやうにお願いいたします。

# 神戶關西學院高等學部生募集

●在學生徵兵猶豫特典有

●出願四月四日正午迄

文科一年  
商科一年

（哲學科 英文）  
（學科社會學科）  
甲部 乙部

▲無資格者ノ爲メ別科ヲ設ク  
▲學則及貸費規則郵券貳錢送付又來校  
▲六日、七日英語及人物試驗施行  
（中學校指定校卒業生）  
（社會學科ハ政治法律ヲ主トス）  
（中學校指定校卒業生）  
（甲種商業學校卒業生）

凡參 拾 拾 拾  
名 名 名 名

神戸市外

私立 關西學院高等學部（電話三宮 長一七二〇）

勞働問題解決の先驅者——友愛會の機關新聞

## 友愛報新

■發行所

東京市芝區新堀町三十一番地

友愛新報社

■毎月二回、一、十五日發行  
□二月一日發行第二十一號  
■定價 一部 金三錢  
□郵稅 一部 金五厘  
■十部郵稅共前金三十錢

の『序に代へて』の一文は、滔々七十頁の一大論文となり、オイケン<sup>①</sup>の生立、性行、經歷、思想に對して詳密なる評傳となつて居る。讀者は此の一文を読むも、オイケン其人を髣髴し得べし、況んや巧みに譯しこなされたる本文に讀み至つては、殆んど魅せらるゝの感を抱くに至るであらう。譯者としての加藤氏は世既に定評あることであるが、本書の如きは、譯者が從來の譯書中最も悶熱したるもの、最も油の乗つたものと評することが出来やう。加ふるに外國語のコンマ、セミコロ、ビリオド等を精確に表はす爲めに、(、) (、) 等の三種の句點を用ひたるなど、其苦心の並ならぬを見るのである。予は十分の信任を以て本書を江湖に推薦せんとする者である。附録フオン・フリーゲルの『ルドルフ・オイケンの宗教哲學』は、從來各種の批評文中、最も徹底せる者なりと稱せられてゐる。オイケンと正反對の立場に立てる此思想家の批評は、オイケン研究者を益すること多大なるべしと思はれる。譯者の用意周到なるを多とする。終りに臨んで譯者の新愁に對して、無限の同情を表するものである。(價一・〇〇)

### 基督傳論爭史

賀川豊彦編著・神戸、福音舎出版

シュワイチェルの「ライマールスよりヴレーデまで」の英譯を意譯的に抄譯したるものを以て過半とし、之にサンデーの「近世研究に於ける基督傳」ドープシュッツの「福音書の終末論」などを加へたものである。初め僕は此の書を見て、何故シュワイチェルを譯したのかと思つた。それには固より理由がある。シュ氏は基督傳の論爭史を書くふりをしては居るが、詳しく見ると彼れの

書は純歴史的の序述と云ふよりも、寧ろ一個の目的を以て書かれて居る。即ち耶蘇を全然非歴史的のものとするか、或は全然歴史的のものとするか二者その一を擇ばないと、不合理になると云ひ。而して彼れの云ふ歴史的とは馬可及び馬太に於ける傳説、殊にメシヤの終末的記事をその儘に信用する意味になつて居て、シュワイチェルは之を信じ、且つ基督傳論爭史の歸着は彼れの執るこの説であるとを此の書で辯明しやうとしたのである。故に獨逸の批評家のうちには表題を變じて「ライマールスよりシュワイチェルまで」とせよ、などと云つたものもあつた。斯う云ふ譯のある著書であるから、公平に耶蘇傳の論爭が此の書によつて知られるや否や、甚だ問題である。歴史と見るにはもう少し客觀的態度が必要であらう。もう少しオットー、シュミードルが「耶蘇傳研究の主要問題」でやつて居るやうに、各個の問題の要點を引き出して來るとも必要である。併し編著者賀川君も亦た「私はイエスの人格を信ずる以上、宇宙の神秘を信ずる以上、イエスのバルシヤを猶期待して善いと思ふ」と云つて居るやうに、終末信者であることを知つて見れば、君がシュワイチェルを譯した理由も解せられるやうに思ふ。

けれどもシュワイチェルも賀川君も共に耶蘇傳論爭史を寫すに偏頗なるを免れない。耶蘇を終末信者と見る見方もあるけれども、その他に彼れを社會改良家と見るものもあれば、超絶意識のなかつた者と見る者もあり、その他幾多の見方がある。故に論爭史ならば、もう少し廣い基礎の上に立つ必要があらうと思ふ。殊に歐米ではスミスやドレヴスの耶蘇抹殺論が出て以來、今では少し下

火にはなつたものの矢張此の議論は續いて居る。若しサンデーやドーブシュツを紹介するの必要あらば、抹殺論者の説も大に紹介し、且つ之を論ずるの必要があらう。殊にシュワイチエル自身もこゝに見る所あり、且つヴレーターは數年前に歿したからでもあらうが、昨年出版した第二版は、表題を變じて「耶蘇傳研究の歴史」となし、そして「耶蘇の歴史の最近の非認」や「耶蘇の歴史に關する爭論」を大に詳述して居る以上は、之を看過してはならない。のみならず、シュ氏は耶蘇傳に關する議論で千九百七年—全十二年迄に起つた事柄をも附加して居る。

固より斯う云ふたからとて僕は賀川氏の勢を認めないのではない。耶蘇傳の研究は我國では未だ充分成立して居ない。論爭史もさるとながら、本文批評などもさつぱり疎である。それ等の根本的研究が賀川君の著書によつて刺戟せられて起るならば、その功も亦た没すべからざるものがあらう。耶蘇傳は決して架空的に造られ得るものではない。(價一・二〇)(三並生評)

## ●再生の人

ハロルド・ペグビー著・救世軍本營發行

英國の救世軍に於いて行はれた救靈事業の事實談である。救世軍がその特別な使命を帯びて特別な使命を果して居ること、及び如何に人間の心の奥底にまで立ち入つて不思議なる改心の事業をなして居るかがこの書によつてうかがはれる。(價五〇)

## ●華嚴發達史

龜谷聖馨、河野法雲、共著・名教學會發行

華嚴宗は東大寺を本山とする佛教の一派であつて、天平以來大

に我國に勢力のあつたものであるが、今は教派としては餘り勢力はない。けれどもその所依の經典たる華嚴經は、各宗に於て大に研鑽せらるゝと云ふのである。本書は龜谷、河野二氏の協力によつて成つた研究を公にしたもので、華嚴經の傳來から、その宗派の印度、支那、日本に於ける歴史、特にその派に出てたる高僧及びその時代が描寫されて居る。故に華嚴の「發達」を知らんと欲するものには、大いに便利を與ふるものなるは疑いない、唯だ吾人は考證學の立場から考へると——これは僕の僻でもあらうが、もう少し經文そのものゝ傳來が明かにしてもらひたかつた。要するに佛教ではまだ基督教神學の科となつて居るやうな「聖書の緒論」とか「經典史」とか或は「本文」或は「寫本」の歴史とか云ふやうなものが纏つて居ないやうである。その信仰上の議論と純歴史論とが、雜然として混合しては居まいかと思ふ。此の華嚴經は久しく知れなくなつて居たのを、佛滅七百年の後に、龍樹菩薩が龍宮に入つて再び得來つたものである。そして龍宮とは俗説信仰の云ふやうな海底の宮殿でなく、北印度雪山中にある一民族の住地であると云ふやうな考證は、僕の如き門外漢には當否を判斷するとは出来ないうが面白い讀んだ。然し七百年後に龍樹が得たにいたつて、否な二百年後に存在して居た證據があるにした所で、それで未だ釋迦が、成道第二七日に菩提樹下に説かれた説法だと云ふ證據にはならない。斯う云ふ點がもう少し明かにしてもらひたかつた。歴史的考證の立場から斯う云ふ點に興味を有して居る僕には、こんな蜀賈的感じが湧いたから、附記して置く(價二・〇〇)(三並生評)



彼の遺稿を読むは大久保の彼の寓に於て西歐より歸つて初對面するやうである。色々の聯想が湧いてくる。僕にはまづこの遺稿の全背景がバノラマのごとく目前に展開する。僕は故人の生ける形見としてこの一巻を読んだ。

彼は文明批評家としての使命を有した。彼の説く所何ぞ雄大なる。彼は世界の大勢に立脚して日本の現状を論じた。又日本人たるの自覺より世界の進歩を觀察し批評した。トルストイとワッツを説くと共に北齋と廣重とを讃美した。「國立劇場と紀念像とを建築せよ」とに於て藝術の愛慕者たる彼の本領をみる。イブセンに關する論文皆讀むべし。ことに帝國文學の呼物であつた時論は今猶再讀する價值あり。殊に後篇中の「海と人生」「さすらひの記」「故郷の記」等散文詩人としての野の人の味ふに足るものがある。傷春歌はハインネにならへる彼の新體詩を集めたるもの清新にして悲しき思ひに溢る。短歌は主として戀の歌をあつむ。野の人の聲と歌とは友人たる僕を動かすのみならず、現代の多くの年若き人々に訴ふるであらう。(價二・二〇)(S・U生評)

上杉博士對  
美濃部博士

### 最近憲法論

星島二郎編  
實業之日本社發行

美濃部上杉兩博士の憲法論争は最近の學術界の一壯觀であつた。殊に兩氏共に帝國大學の教授とし堂々としてその學說を天下に發表したる所、その勇氣よみすべきものがある。而して國體や主權に關する公正なる學說が一般より歡迎せられたるに徴しても我國の思想の進歩の跡あるを祝せざるをえず。本誌々友星島君學餘兩博士の論文及び穗積、浮田、市村、井上(宏)織田諸博士の

論文十六篇を輯録した。誠に調法な本である。又この大問題の研究に關する良好なる參考書たり。而して凡そ日本の憲法について何等かの知識を有せんとする人々には必讀の書である。

(價一・二〇)

### 新選英和辭典

増田藤之助著・丸善株式會社發行

英和字典の世に行はるゝものその數や甚だ多い。又僕等が小學時代を追懷すれば英和字典の進歩は著しい。しかしながらこれ迄の著書は無責任なるもの少からず、徒らに大家の名を借り、所謂羊頭狗肉を賣る者の跋扈するは識者の歎じたる所である。増田藤之助氏は早稻田大學に於て名望高き英學者である。僕等は中學時代に於て同氏の編輯する「日本英學新誌」によりて啓發せられしこと少くないのである。殊に同氏は和漢文學の素養深く、譯語の妥當洗練なるを以て重きをなす。されば英學者が往々にして英和字典の粗雑なるに避易すれば、もし増田氏をして編纂の責に任せしめば必ず理想的の辭書を見るを得んと想起せしめた。幸にして早稻田大學出版部は數年前この大任を増田氏に託した。爾來同氏は拮据この重任を負はれて多くの助手を指揮し、一々原稿を訂正修補し、全く同氏自身の理想を實現したるもの即ち本書である。

されば本書は尋常一様の英和辭書でない事は明かである。稱して五十年來の因襲的譯語を根本より一掃したといふは決して僭越の辭でない。本書獨特の譯語の見本を左に記さう。

able 有爲の。 alive 生きとし生ける。 eventual 思ひ出多

や。 (cursive) 飄逸なる。 incoherent 支離滅裂の。

memory 遺名。 氣。 quietly 從容とし。 understand

ing 意思疏通。 viscidus 有爲轉變の。 warning 殷

鑑。 wild 豪放なる、跌宕の。 your かゝ、世の。

一ページ二欄詰にて千四百餘ページの手の辞書である。英學生のために好個の字書として推薦す。(價一・八〇)

## ●代表的世界文學物語

杉浦政泰著・北文館發行

ホマーのイリアット、ダンテの神曲、チョーサーのカンタベリー物語、セルヴァンテスのドン・キョーテ、ミルトンの失樂園、ゲーテのファウスト、ユーゴーのレ・ミゼラブル、イブセンの人の家、トルストイの復活等九篇の梗概をものせるもの、文體もさらくと解し易し。クリスマス、年頭の贈物や讀物としてよきものである。(價〇・八〇)

## ●新獨逸語雜誌

一、二、三號 新獨逸語雜誌社發行

獨逸語の必要が日に／＼感ぜられて來て、従つて普通の語學雜誌は甚だ多いが、趣味少く又多方面に亘らざる憾みがある。しかるに此度發行せられたる新獨逸語雜誌は、文藝、法律、醫學、經濟方面の名著を解釋すると共に趣味ある記事に富み、且つ文法の講話などもありて、獨逸語の高等雜誌として理想的のものである。イブセン、フォルクマン、アンドレーフ、ショットレル、コンラッド、アドレル、フリードリッヒ諸氏の著者を譯載す。執筆者は小野、田中、湯淺、千葉、莊司の諸氏。一部郵稅共廿一錢。

## ●此の人を見よ

ニーチエ著 安部能成譯 南北社發行

二千年前に『來りて觀よ』と云ひ得た一大人格があつた。その人格者を慕つて集つた基督教會に向つて峻烈な反抗をさへげたフリードリッヒ・ニーチエも來りて『此の人を見よ』と云ひ得る人格であつた。ニーチエの剛健な男性的な、極端なる自我主能的な思想の感化が近世思想界に如何に大なる刺戟を與へたかは云ふまでもない。吾人はこの『此の人を見よ』に於いて彼れの偉大なる人格のエッセンスを観ることが出来る。それにふれることが出来る。今や吾人の要求するところは空虚な概念な一般的法則ではない。人そのものである。そしてかゝる人の自らなせし註釋に接することの出来るのは吾人の幸福と云はねばならぬ。ナザレの耶穌に行つたものはまたニーチエをも見なければならぬ。そしてその兩者が如何に共鳴して居るかを知らねばならない。彼れは基督教會を非難した、神學を非難した。併し基督そのものを非難しなかつた。(價〇・九〇)

## ●現代宗教哲學の主要問題

オイケン著 加藤直士譯 警醒社發行

現代の哲人オイケン博士の思想が、續々我が國に紹介さるゝ中に、本書オイケンの著書中の珠玉と稱へられる “Haupt problem der Religionsphilosophie der Gegenwart” を英譯より重譯したるもの、全篇五章より成り、最後の一章は未だ英譯なきに依り、獨逸原書より三並良氏が譯されたものである。卷頭にオイケン博士の鮮明なるコロタイプ版の肖像が載せてあり、更に譯者

## ■現代哲學講話

リール博士著・北文館發行  
安井辰衛譯

『現代の獨逸哲學を讀めるもの、皆オイケンに口にする。されどオイケン以外に知名の思想家なきにあらず。就中ベルリン大學のリール博士は新カント派の學者として知らる。安井文學士此度同博士の「現代哲學入門」を譯した。本書は即ちそれである。譯者自ら序して「本書はオイケン又はベルグソンの哲學といふ如き意味に於て、必ずしも現代哲學と言ふべからずと雖、現代の哲學攻究に於てカント研究が如何に重要な位置を占むるかを知らば批評哲學を力説する本書が「現代哲學」と稱するは敢て不當と言ふべからず。』といへるは本書の價值を示す言である。八講中記者は第五講、自然科學的一元論と哲學的一元論と第六講、人生觀の問題と、第七講ショーペンハワーとニーチェ厭世觀の問題とを興味を以て讀んだ。リール教授の哲學的一元論は左の如きものだ。

『感覺がよりて以て發生する實在と感官がよりて以て作用する事物とは同一實在である。既に最も簡單なる事物中に働いてゐるところの同一創造力が吾々によりて吾々のうちにその働きを繼續するのである。その創造力は自然と悟性との共通源根であり、事物にその可解的形式を與へ、吾々に理解する能力を與へたのである。かくの如くにして創造力は自然法則と思惟法則との間にかの調和を挿入するのである。……此創造力そのものは其本質に於て永久に過境的であつて、吾々の視ひ知ることを許さない。實在の秘密は思惟によりて穿鑿することは出來ない即ち實在の原理は思惟に先行するのである。換言すれば第一に實

在が在つて、次ぎに思惟があるのである。』

これは慥かに日本現代の思想に對する一貢獻である。

又人生問題は畢竟するに、價值問題であるとして、左の斷定がある。

「星や太陽が互に夜の闇黒から輝くやうに價值は次第／＼に人間の眼界に昇て来る。そして此を最初に觀た者、最初に體驗した者、衆に先じて經驗した者がその新價値の創設者である。彼は一層高き途にある人間を識り、之れに新しい生活形式を示し、古い價値概念に新精神を注入するのである。その新價値をして效驗あらしめる爲には創設者は又新と舊とを聯絡しなければならぬ。』

ソクラテスの教訓の批評はこの大聖に對する讚美である。

『渠れの最高の證明即ち渠れの死を瞥見しなければ未だソクラテスの學説を了解することは出來ない。外面的に觀察するときには渠れの學説は平凡無趣味殆んどペダンチックであるが而かも、その内面に神の姿を藏してゐる。』

ショーペンハウエルの厭世觀の批評は傾聴すべきものがある。ニーチェに對してはリール教授は甚だ温かい態度を示してゐる。ニーチェ研究の一參考である。

『ニーチェはショーペンハワーに反對に人生の味方となつた。……氏は厭世觀が依つて以て人生を否定する理由のために人生を肯定する。これは氏の哲學を尤も要約した形式である。……かくして人生否定の厭世觀を人生肯定の英雄主義に轉化した。……イブセンの場合はヨハネス・ロスマルが「自分の周圍に快活

なる貴族を創らうとしてゐる。」それと時を同じうしてニーチエは又ツアラトウストラに新貴族の出現を豫告してゐる。所謂新貴族とは門地に非ず、況んや財産に非ずして精神及人格の貴族である。……ニーチエは人間を大きくして不羈獨立にせやうとする。……渠れの哲學の根本問題は生活の照明、神化である。ニーチエは先天的に即ち本質上宗教的氣分を帶びた性質を有してゐる。氏の無神論すら宗教的色彩と宗教的熱烈とを有してゐる。……併し渠れの見解は其根本的缺陷即ち歴史的意義の缺乏を暴露してゐる。』

リール教授はゲーテに於て理想的人格を見出した。

『實に偉大なる人格は自己以外の凡てのものを自己修養、自己完成の爲に使用しやうとする。社會も國家も否人類も偉大なる人格の最高幸福に役立つ手段道具となるのである。偉大なる人格は屹度「この本性の幸福」を他に分與せねばならぬ。かくして自己内部の豐滿を注ぎつゝ自分「全體」の機關となる。全體が彼の中に生きてゐる如く彼れ自分全體の爲に生きてゐる。ニーチエが教へた貴族的個人主義と現代公衆の説とを支配する汎衆主義の中間に立ちてゲーテは既に純正なる調和を窺見し、美しい結合の基を置いた。』

とにかく此書は現代哲學の大勢を知らんとする者の一讀すべき良著である。(價一・五〇)(S・U 生評)

## ■哲人何處にありや

齋藤信策遺稿  
姉崎小山雨氏編・博文館發行

野の人齋藤信策君逝いてより四年餘、僕はオックスフォードの

夏休中寂しき寄宿舎に居残りたる時、この訃報に接して、僕等の友人中の一秀才の夭折したるを悲しまざるを得なかつた。彼は樗牛の弟として、寧ろ阿兄の才華煥發なるに蔽はれたる觀もあつたが、その人物の眞率にして野人肌の詩人であつたことは樗牛に見るべからざる長所であつた。

されど野の人も才筆の人であつた。彼が仙臺二高時代より明治四十二年夏の死に到る迄、創作に、翻譯に、評論に健筆を縦横にはせた。彼はニーチエが超人にあこがれた如く哲人にあこがれた。彼はトルストイ、ワッツ、ワグナー、イブセン、ニーチエ、ウエレスチャーギンを讚美した。北人たる彼が北歐の偉人に共鳴を覺えたは怪しむに足らぬ。彼は英雄主義を奉じてナポレオン、ルーズヴェルト、ブライアン等の政治家をも讚嘆した。

近頃ニーチエの思想再びわが思想界を風靡せんとする傾向がある。而してこれは彼等兄弟が登張竹風と呼應して一世の問題を喚起したのではなかつたか。近頃茅原華山君首唱して第三帝國を説く。而もこれ野の人が明治三十九年の夏「イブセンは誰ぞや」「イブセンの第三王國」として詳論したるものでないか。七年前に彼の血を吐いて叫びたる所今漸く社會の耳聰を聳動せんとするはこれ彼の豫言者たりしことを證明するものでないか。

彼の遺稿今や姉崎博士と小山鼎浦君との盡力によりて美裝九百餘ページの大全となつて僕の机上に横はる。あゝ無邪氣なる小児のごとく笑ひ、戀になやめる人として歌ひ、豫言者として論境の風雲を卷ける彼は今靜かに我が書齋を賑がす古人の仲間入をしてゐる。



の帝大特權廢止運動、齒科醫學生等の特權獲得運動、近くは京大法科教授等の同盟罷職事件の如き、いづれか時代の機微を語るものにあらざる。加之、社會の下層に於ては、多年壓抑忍従の生活に慣れたる勞働者も、漸く自己心内の權威に眼さめ、一種の社會的、團體的運動によりて、自己階級の安全保障を期せんとするが如き、蓋し大正の新機運を示すものにあらざるはないのである。

思ふに世界の歴史は、特權階級に對する民衆の反撥、貴族社會に對する平民階級の對抗に依りて編み出されて居る。而して其根柢中心を流るゝものは、多くは經濟的慾望の變體である。政治も亦其經濟的説明は、政權其物を租税を負擔する多數者の間に獲得しやうとするのであつて、或少數者の專制を許さるゝにある。これは著しき近代の特色である。萬朝報の茅原華山氏が、政治は米に在りと叫んで居るが如きは、則ちこれをいふのであると思ふ。教育の進歩は個人の自覺を促し、個人自覺の結果は、政權の渴望となる。政權の渴望といへば語弊もあるが、政治に無關係で居られなく

なる、惟命惟從で、盲從しては居られなくなるのである。これ實に眼ざましい現象であつて、今てこそ尙此現象はこゝかしこと、斷片的に現はれ來つて居るのであるが、今に打つて一丸となすの時來らば、恐らくは何者の力も抑止する能はざる一大改革が成し遂げられるであらう。政權を私する特權者流の特權は移されて平民の掌中に歸する時茲に平和の王國は建設せられるのである。見よ、民衆の時代は必ず來らむ、民衆勝利の時代は必ず來らむ、明治維新は武士の力で出來たかも知れぬが、所謂大正維新なるものは、是非民衆の力、平民の力に依つて之を成し遂げねばならぬ。(鈴木生)

### 露風集

東雲堂發行

三木露風氏は現時の詩壇に於いて最も異彩を放つて居るものゝ一人である。吾々は氏の詩に於いて美はしき詞藻を見るのは云ふまでもないが、特に氏の詩を愛する所以のものはその眞面目な態度である、その神秘の影の漂うて居ることである、そして吾々の心の底から悲しい人生の悲哀を繰り出す力をもつて居ることである。この集には明治卅九年より四十三年の秋までの氏の初期作品を採つてある『白き手の獵人』を讀みたるものは、この詩集をも讀むべきである。(價〇・九〇)

# 新刊批評

## ■ロイド・ヂョールズ

内ヶ崎作三郎著・前川文榮閣發行

現代英國の社會政策王、否、世界を通じての社會政策王、ロイド・ヂョールズ氏は、最近五六年の間に養老年金法、國民保險法、土地制度改正問題と矢繼早に平民保護の法案を提出して、この數年の間に於て、社會政策の基礎を定めんとして奮闘して居るのである。反對黨に對する反駁、諷刺諧謔口を突いて出づる機智、雄渾壯大なる雄辯、情理兼ね至れる政策、殊に其高明正大なる人格等、一として吾人の愛慕を引かざるはない。其片田舎の小學校長の小伴より大英國の大藏尙書に至れる經歷は、正に立志傳中のものたるを失はぬ。本書は此一代の偉人を傳して、細大漏さず、固より政治家としてのロイド・ヂョールズ、社會政策の實行家としてのロイド・ヂョールズを見るには、聊か物足らぬを覺えるけれども、行文流麗にして、諄々として説き進むる所、さながら世故に長け蘊蓄豊かなる老翁が、冬の夜の爐邊に愛々の兒孫を集めて、偉人傳を物語つて居るが如くである。讀んで厭く所を知らず、巻を捲く能はざらしむ。筆者騰次郎學士の筆力の凡ならざるを示してあるを見る。巻頭に掲げたる平服及び官服のヂョールズ氏の小照、並に幼時の住宅、現時の私邸の寫眞など、巻中の説明を助けて、讀者にいふべからざる融會を與へ、附録『平民演説』はヂ氏の面影を活躍せしめて居る。今や我國政界の一大回轉期に

際し、人類の政治的發達を遂げたる一大模範たる大英國の代表的政治家の面影を偲ぶは、決して偶然でない。所謂趣味と實益とに富める良書として、青年諸君の好讀物たるを失はぬ。

(價一・三〇)

## ■天路歷程

パンヤン作  
松本雲舟譯・幹醒社發行

天路歷程が唯だ我國計りで云つても、どの位信仰を喚び起したか、その數は限らない位であらう。僕の家にも「明治十四年八月東京上梓」となつと居る佐藤喜峯氏の譯本がある。雲舟君は「十三年單行本として出版された」と序文に書いて居るが如何のものにや。又佐藤氏は「支那譯から重譯したものだ」とも云つて居るが、敬宇先生の題辭を見ると、喜峯翁の之を「六十蟹文始下手」と云つて居るから、まんざら英文を知らなかつたのでもあるまい。然し固より喜峯翁のは「意譯」とも斷つてあるし、且つ前篇のみであるが、(これも敬宇先生が「天路歷程前後編」と云つて居るのとは合はない。すると前の句も疑ふ餘地がないではない)雲舟君はその靈筆を以て、前後兩篇を譯して、完成した。その勞には謝せざるを得ない。記事は夢を説いたものである。此の夢には多くの教訓が含くまれて居る。唯だ現代的な、現世的な今の思潮にこれが昔の程の感化を與ふるや否や、これは問題である。併し御伽話を好む少年少女の讀みものとしては甚だ善いものである。僕の家的高等小學生なども此の本を與へたら、休まずに二日かゝつて讀んでしまつた(價一・五〇)(三並評)

して詳細なる知識を有せざるか故に、容易に其何れか是、何れか非なるを判ずるを得ないけれども、罷工者を目するに直ちに反逆人を以てし、迎ふるに彈丸硝藥を以てするが如きは、如何にしても異人種に對する偏見に基く所多しと思はざるを得ないのである。あゝ此人種の反感と、階級鬭争の紛糾とは、知らず何れの時にか解くるであらう。

(ふみはる)

## 社會政策なき國

工場法の施行は又々延期された。一旦會議を通じた法律で、從來施行せられなかつた所のものは、他には馬匹去勢法あるのみだといふ。工場法と馬匹去勢法！職工と而して馬！何等のコントラストであるか。社會政策に關係深き人々は、爲めに態々山本首相を訪問して、施行促成を試みたが、凡て無駄であつた。如何に財政が苦しければとて、六億の歳計の中で、五萬圓の實施準備費の遺繰が出来ぬものであらうか。貴族院の一名士嘆息して云つた、工場法の施行延期は先づ可なりとしても、

これでは丸で日本に社會政策なしといふに歸する、外國に對しても恥かしいと。あゝ社會政策なき國！而して世界の一等國！どこ何處にこんな一等國があるものぞ。驚き入つた次第である。

日本の實業家や政治家の中には、工場法の施行を以て、特に職工保護に偏するものとして、工業の發達を害すとなすものがある。農相山本、藏相高橋の如き、皆其人々である。何たる短見、何たる淺慮ぞ。いふまでもなく工場法は勞動社會の憲法である。工場法を施行することは、立憲政治を行ふことである。立憲政治は共和政治ではない、然るに工場法の施行を以て、直ちに職工偏重と解するものは、正しく立憲政治と共和政治とを混同すると同一である。尤も頭の古い連中は民衆の勃興を以て、惡傾向となし、寧ろ專制に還るを喜ぶものもあるといふから、封建の遺風の残つて居るのも已むを得ないかも知れぬ。抑々今頃主従關係を以て、二十世紀の資本勞動の問題を律しやうとするのが間違ではないか。古の武士が領主に忠勤を挺て家來が主人に従順であつたのは、申すま

でもなく其生活を保障されて居たからである。然るに今日は賃銀制度で人を使ひながら、則ち主人としてなすべき事は棚に上げて、獨り勞働者にのみ忠勤と從順とを求めるのは、あまりといへば蟲のよい話である。時勢後れにも程がある。

加之、工場法の施行は、公平に考へて、工場主其人にも利益である。工場主なる人が、自分の懷勘定のみ考へて、私しやうといふならば、不都合でも不便利でもあらうけれども、工場主は工場主としてなすべき丈のことをなさうとならば、寧ろなすべき事の標準のある方が利益な筈だ。況んや現在の工場法の如く極めて寛大なるものなるをや。これをしも實行を難んずるといふならば、世に法律なるものを設けぬがよいのである。彼の保守的にして且つ自由放任的なる英國に於てすら、最近の社會政策上の進歩は、果して如何なるものがあるか。工場法の一つすら實行し得ざる國家は、遂に大なる國家たることが出來ぬのである。

(B・S・T)

## 民衆勝利の時代

我國は久しい間專制政治であつた。いはゞ黔首を愚にするを以て、政治政策の根柢とし、民は據らしむべし、知らしむべからずの方針に出てゝ居つたのである。明治維新以來、駭々として西洋の制度文物を輸入し、幾多の波瀾曲折を経て、所謂立憲政治は敷かれたのであるが、立憲は名のみにして、實は依然として政府萬能、官僚萬能の政治が行はれて居た。けれども時勢はいつまでも專制の迷夢を許さぬ。見よ、春風一度吹き初めて、梅花漸く綻び、堅氷やゝに解けて春光熙々、將に百花一時に開き、狂瀾一時に殺到せんとするを。

憲政擁護の運動は其第一聲であつた。滅閥興民の聲は直に之れ後援となつた。而して今や則ち滅稅廢稅の聲は天下の輿論となり、潮の湧くが如く、國內各所に響應するのである。民衆覺醒の兆は既に十分に之を認めるとが出来る。況んや一般思想界に於ては個人主義的傾向は著しく、却つて其病調を帶ぶるを憾みとする位である。私立大學生等



餘りに慾が深い。自由を得るの道は一臣民たるに限る。而して國庫の補助にのみ信賴する帝國大學が一朝一夕にしてこの自治を與へらるべしとは思はれない。

教授諸氏は教授任免の決を教授會にて定めたとの希望である。若し果して然らば老朽若朽の淘汰の困難は却つて現行法以上であらう。今日の大學令によれば、文部大臣にして英斷あらば教授を任免すること左程困難でない。教授會が誠意を以て老朽若朽の退職を議決すべしとは吾人の信ずる能はざる所である。

吾人は文部大臣が速かに教授諸氏の辭表を許容せられんことを望む。今や私立大學多し。法律を學ぶ所何ぞ京都法科大學に限らん。或は暫く之を東京法科大學に合するも宜いであらう。而して辭職後の教授諸氏は民間に下りて大に活動すべく、民論これより盛にして民權更に振ふに至らん。これに徴しても法科大學教授辭表を許すは國民の進歩にも有益なることである。

澤柳總長の進退はこれ文部大臣との相談によつ

て決すべし或は止まるも可、退くも可であらう。法科教授諸氏の行動は法律的でない。法制上に於て失敗すべきも、精神的には何等かの刺戟を社會に與へたことは事實である。諸氏辭職するも恨むことはない。諸氏の一見兒戯に類したる斷行も時勢の進運に貢獻する所あるはいふ迄もない。

(官學生)

## 南阿の大同盟罷工

一月九日、南阿非利加トランスワール地方に一大同盟罷行起り、炭礦夫、鐵道員、一般職工等結束して立ち、南阿勞働者組合聯合會之が采配を振り、其勢頗る猛烈、人を殺し家を焼き、鐵橋を爆破する等の大騒動となり、遂には軍隊出動して發砲するに至り、一週間後にして辛うじて鎮靜に歸した姿である。其猛烈にして慘酷なる到底彼國ならでは見ることを得ざる所である。

今回の事の原因たる抑々何に基くのであるかと言ふに、これは全く感情問題なるが如くに見ゆるのである。常ならば勞銀又は勞働條件によつて動

くべき労働者が何故にかく癡猛に奮起暴動するに至つたかといふに、海外電報の報ずる所に依れば、オレンヂ自由國の白黒兩人種共働の一炭鑛ケーグルス・フオン・タイテンに於て、黒白人争鬭の結果、黒人バストなるものが、白人労働者の爲めに蹴殺されたるに基因するといふのである。さらでに昨年七月中同じく同盟罷工の起つた折、政府は三千餘名の兵士を出動して一齊射撃を加へ、罷工者二百六十餘名殺傷した。晝晷の恨未だ盡さざるに、又々今回の事あり、黒人労働者は白人労働者に向つて喚き叫んで打つて懸り、白人労働者も亦、少年鑛夫に至るまで、獲物々々を携へて反撃し、慘憺たる血闘は開始された。此一場の悲劇が忽ち導火線となつて、同盟罷工の劫火は焰々として燃え廣がり、遂に又々軍隊の出動を促して、漸く鎮靜に歸したやうな次第である。けれども武力に依る鎮壓が、果して眞の平和的解決であるか否か、問題である。現に一記者のいふ所に依れば、昨年七月の罷工者の虐殺事件に依つて、著しく黒人労働者に無政府黨的傾向を加へたと評して居る。又

又此の有様では、一時止むなく屈服はするであらう。併し夫れとても恐らくは、大噴火の後に一時休火なるが如きものであらう。

今回の事件の如きは、明かに人種的憎怨の結果である。白人の蔑視に對する黒人の反感の爆發である。由來白人の強烈なる自負心は、異人種に對する輕侮となり、到處に種々の問題を惹起すことは、人道の發達、平和の發達上、心外に堪えざる所である。日米問題の如きも、亦實に茲に根ざせるものと思はれる。凡そ物、動あれば必ず反動あり、壓迫甚しければ必ず反撥あり、恰も積雪に壓せられたる若竹が、撥ね返るが如くである。白人黒人を輕侮すれば黒人反抗し、富者貧者を虐遇すれば貧者憤ほり、學者無學者を冷すれば無學者怒り、貴族平民を蔑視すれば平民爲めに背叛す、蓋し人情の通則である。世の中は決して己れ獨りの我意の通る處ではない。一寸の蟲にも五分の魂、却て窮鼠猫を噛むの譬もある。人種問題も、國際問題も、社會問題も、平和問題も、悉く同一筆法で論斷することが出来ると思ふ。南阿の罷工事件に付ては、吾人不幸に

とて鬼の首でも取つた如く、天晴れ大政治家よと自惚れるに至りては、愚の極、否寧ろ氣の毒千萬ではないか。世界に於いて我國の如く貧乏にして、而かも我が國の如き租税の重きはないであらう。

國家の財政は國民經濟に立たざるべからず。國民經濟は根幹である。國家の財政は枝葉である。苛斂誅求以て國民經濟を衰弱せしめ沈滞せしめ、否枯死せしめて其の上に財政を築かんとする我が國政府の氣が知れない。吾人は民本主義を主張するものである。民富みて國富むのである。今度の三税廢止の根本理由は、國民の生活費に課税するが不當であるといふことである。國民の口を塞ぎ手足を縛りて、尙國民の發展を望む、愚も極れるではないか。獨りかくの如き消極的理由あるのみならず、織物消費税廢止の如き四億の支那人を顧客とする海外貿易を盛んにするのである。營業税廢止の如き我が實業界に潑刺たる元氣を與ふかも知れない。東京市の營業者につき一人百七圓に相當する負擔も亦重いてはないか。營業税約二千五百萬圓、織物消費税は約千九百萬圓、通行税は約四百萬圓、

合計五千萬圓の減税である。小額なりと雖も民本主義より見て一日も早く廢止あらんとを望む。

我が國の租税は獨り負擔の重きのみならず、また課税が甚だ不公平である。今回東北の大凶作は、一は課税の重きことにもよる。課税重ければ地主は多くの小作米を請求せなければならぬ。小作人は小作米多き故普通の收穫にては利益がない。失敗したならば小作米を減じて貰ふだけだと度胸をきめて晩種を植ゑるのである。冷氣一度來れば一粒の米をも得ざるに至るのである。東北は地僻にして氣寒く自然の關係上收穫が少ない。一毛作漸くなし得るのみにて、二毛作はやれない。東北の土地と關西の土地とは租税の負擔力が遙かに異なつてゐる。然るに租税が殆ど同じく、時によると東北が重さに至りては不公平もまた甚しいではないか。一面東北に一杯の粥をも口にする能はざる者あるかと思へば、他の一面には堂々たる貴族、常に忠君愛國を食物にする某々侯子爵等が奈須野にて廣大なる土地の脱税ありといふではないか。不公平もまた甚しいではないか。我國の租税の缺點

をあぐれば數限りもない。三税廢止の如きは第一歩のみである。(みねぎし生)

### これ學者の態度なりや

京都法科大学教授の總辭職はいはゞ平地に波瀾を起したるもの、或は之を痛快と評すべきか。されど冷靜に考ふれば吾人は必ずしも教授諸氏にのみ同情を寄することが出來ぬ。

恐くはこの問題は感情問題が原因で、理窟は附録であらう。東京帝國大學にては滅多に教授を淘汰したことがない。實際教授會の勢力が強くして總長の觸手を許さないものであらう、京都の法科大学諸氏も心私かに東京大學の先例に據つて行動せんと期してゐたであらう、然るに柳澤總長の赴任と共に一大英斷が行はれて七八名の淘汰があつた。淘汰その物は却つて社會の同意を得たけれども、その方法は餘りに辛辣を極めたと見た。京都法科大学教授は總長にかゝる腕を揮はれては正當防禦の方法を講ぜねばなるまい、それにつけて年來宿望の大學自治案を提出したのであらう。

よつて澤柳總長の態度にも缺點はないといはれない。ことに文科大学教授の後任者を少壯者の間に求めたるはよしとして、直ちに學位號を與へ、門外漢をして文科大学を以て總長の親兵としたと痛くない腹を探ぐられたは是非もないことである。とにかく澤柳總長のやり方は餘りに派手過ぎる。法科の教授等の反抗を促したと思はれる。恐くは澤柳總長には赤心を人の腹中に推すといふ雅量が乏しかつたかも知れぬ。

さればとて法科教授の總辭職は無意味である。現行大學令は決して大學の自治を許さない、教授も官吏である。即ち官吏服務規律の下にあるのである。もし大學の自治を得んとすれば大學令を改正するより他に道がない。大學令を改正するには宜しく正々堂々の陣を張るがよい。總辭職のごときストライキめいたことをやる必要はない。大學令を改正するには宜しく立憲的方法を採るべしである。法科教授は餘り感情に驅られた。

一體大學教授は官吏である。官祿は捨てたくない、自由はふたいたいといふ。所謂兩手に花である。



の學校ではあるまいか。法律や政治、經濟の學校ではあるまいか。それは國家が成立する爲めには、此の種のとを學び得たものが多數入用であるには相違ない。けれども一方に於て純粹の理論を専門的に研究する者はどれ丈けあらうか。大學で云へば文科へ行くものがどれ丈けあらうか。その數は實に微々たるものである。秀才と稱へらるゝ青年の八九分通りは皆な法科へ走るではないか。その次ぎは工科へ行くてはないか。東大、京大でも、三田や早稲田でもさうであつて、文科は青年より大に虐待せられて居るが、常路者よりも繼子扱ひにされて居るとは明かに見透かされる。

私立大學だつても多數は皆な政治學校や商業、工科の學校である。官立の大學だつても、矢張さうであつて文科は僅かに二つしかない。單科大學がいゝの、綜合大學がいゝのと色々な議論が戰はされて居ても、その根本に如何なる大問題が蟠居して居るかを度外視した淺薄な議論が多い。従つて文科などは眼中に置いてないやうである。所が問題はこゝにあるのである。

過去半世紀間に於ける科學の進歩は驚くべきものである。固よりその進歩も深くなつたとは云はれないかも知れないが、廣くなつたのは確かな事實である。併し廣くなつた爲めに、専門の上に専門が出来た。その結果は或は四分五裂と云つてもいゝかも知れない有様である。何處に統一を求めんかは解らなくなつた。これが結果として技巧に富める鋭敏な専門家や、善良な教師や、敏腕の實業家は澤山に出来たであらう。併し偉大なる精神家は見るとが出来ないやうになつたではないか。

政治や法律の方面に於てもさうではないか。條文を暗記して居たり。習慣に通曉して居る者は澤山にあらう。タイプライターの事務を執る外交家なども益々増加するのであらう。けれども天下の大勢を洞察し天と共に政治を論ずるやうな活眼者は愈々少くなつて行くてはないか。

世の教導者であるべき筈のものが皆な斯くの如き有様である。大多數者が附和雷同するのは當然である。何等の識見もなく群衆の大聲を揚げて居る。實に憐れむべきものである。學術界の先導者

であつた醫學の領域に於てさへ、そんなとが行はれて居る。元來近世醫學は充分學理的研究の基礎の上に立つて居たのであるが、それが段々輕蔑せられるやうになつて居る。嘗て伯林に於て一介の貧書生が醫術開業免狀を取りは取つたが、食うとが出来ず、殆んど餓死せんとした時に、天外より奇想を得て「自然醫」の看板を出して忽ち大繁昌をしたとがある。彼のクリスチャン・サイエンが流行したり、靜座法が多數の人を集め得るのも纏つた思想を一つも有せずして、附和雷同何か利益する所あれば、それで足れりとする者の多くなつたことを證するのではあるまいか。

凡そ政を執るものに施政の大方針がなければならぬ如く、宇宙の間に人間として存在する以上は、存在を達觀し、あらゆる現象を統一して考へ、人生の意味、目的を研究せずに居る譯には行かない。之れが研究せられずしては人間道が安定する筈がないのである。否な學術も、政治も眞の發達は出來ない。然らば學問界の方で此の方面の事に従事するのは何であるかと言ふに、それは文學で

ある、否な更らに精密に云へば哲學である。然るに今や當路者も青年も多數は相共に之を輕蔑して居る。是れ僕が學界の恨事とする所である。此の點に大に努力する者がなければ前途は甚だ悲觀せざるを得ない。(三 並)

### 三稅廢止は第一歩のみ

冷罵に妙を得たる友人曰はく、日本政府の政治は恰も貧乏息子の道樂の如しと。一言最も能く我政府を批評せりといふべきである。この貧乏息子たる政府の父母たるものは誰ぞ、言ふまでもなく國民である。國民が血の汗を滴らして得たる財寶を悉く取去りて、馬鹿な事に私利に下手に使用して、父母たる國民をして貧乏に陥いらしむるのみならず、民力涸渇し負擔の重きに堪えざらしむるは我が政府である。

我府の財政の亂雜曖昧愚劣なる政策は最早整理をなす時にあらずして、改革する時である。區々たる彌縫策をなす時にあらずして、根本的に政策を一變する時也。僅かに五六千萬圓を節減したり

出來ぬので、彼は次第に懷疑に陥りて、自分の間違ひを悟るに至つて、基督を惡み、悶々の情に堪えず。彼はやむなく家を飛び出して川の岸に立つた。時に一つの光りがあつて彼の眼を射た。中に聲あり、「我兒よ汝は何故に我に來らざるや、我は爾を奴隸とせず、爾を助くべし」といふた。此聲を聞いて以來彼の心は大に落ちついて、著述に耽つた。述作中凡ての矛盾と衝突とより超越して圓滿なる思想を發表するに至つた。

歐洲は政治的に統一せられてゐた。その時に聯邦大會がベルリンに開かれて、それを支配する行政官が選ばれた。そは誰あらう前記の著者であつた。彼は人格と知識と雄辯とによつて支配者に選ばれた。彼は「世界の平和」を實現せんとして、自己の實力と軍隊の力とによつて之を實現せしめんとした。又彼は凡ての人類を物質的にも満足せしめんとした。即ち社會事業であつた。されど人類は胃腑の充つると共に遊戲にふけらんとするのであつた。然るに東方の學

者ありて科學的に人類に快樂の滿足を與ふると稱した。彼は此學者を採用して人類に快樂をも供給せんとした。

續いて基督の再來、反基督に關する挿話がある。さて此天才は反基督即ち惡の子となるのである。即ち彼は凡てを自己の名に於て之を爲すのである。彼は神に従ふことをせずして、單に自己の命に於て凡ての美事をなした。基督の所謂「我が名によつて」爲さぬものである。即ち神の意志を代表せずして自己の意志を實行せんとするものである。

斯の如く露西亞人の宗教心は絶対に神の意志に服従するのである。何故にペートル大帝は反基督と思惟せらるゝかといふとペートル大帝は教會の權威を否認して帝國を建設せんとしたるためである。彼以上に國民を苦しめても、教會を否認せざれば反基督と思惟せられないのである。兎に角露西亞國民の宗教思想の本流は何れの方面に向ひつゝあるかはこの物語りによりて理解することが出来るのである。

前記の天才の理想は世界の平和であつたか、猶反基督と思惟せられたるは自己中心のためである。又社會事業を經營して猶反基督と思惟せらるゝは人間を單に物質的に満足せしめんとするは人間を侮辱するので、基督は人はパンのみにて生くる能はずといふた。即ち此の點に於て反基督である。基督は荒野の試煉に於て奇蹟を退けたのであるが、此天才はこの奇蹟を實現せんとした、即ち反基督の精神である。即ち純粹なる宗教的動機より出立すれば、露西亞は反基督と看做すのである。これ丈の事實について露西亞人の宗教思想を綜合するは極めて困難の事である。これに満足せざる時は各作家について研究せねばならぬ。恐らくはこの講演のこの問題の序説のごときものであらう。とにかく露西亞の人心根柢に深い宗教心が潜んでゐる。時々政治的改革が行はれて、人民の興味がこの方面に引き着けらるゝことあれども、國民は總じて宗教に歸つて神にあこがれ、未來界を思ひ反基督のことなど思惟するに違ひない、要するに

現代の思想の立場より見れば、露西亞の宗教思想は極めて非現世的非實用的であるが、これがその國民性の根柢をなすことは疑ひを容れる餘地がない。』

これで面白い講演が終つた。色々な質問などあつて散會した。鹿子木夫人コルテリアは露西亞人にしてイエナ大學に於てオイケン教授の指導を受けて哲學博士の學位を有せらる。露西亞人自身の告白なる丈誠に興味ある講演であつた。或は三月號に全譯が本誌に發表せらるゝかも知れぬ。(二會員)

## 學界の恨事

一方より見る時は現今の我邦は文物旺盛の時代と云ふべきである。小中學は勿論のと各種専門の學校は日に月に益々その數を増して居る。書籍の出版は新刊、翻刻共に甚だ多數である。その上雜誌の數は殆んど計算するところが出來ない程である。けれども先づ學校をよく注意して見ると、如何なる高等の學校が多いであらう。それは實業、實務



課税があるからである。昨年十月より十一月にかけてこの運動はベルリン各處に催されリーベクテヒト博士のごとき最も猛烈にプロシヤ國教會を攻撃した。彼曰く「プロシヤ國教會は最早宗教的團體に非ずして、政治的組織である。初代教會を標準とすれば現在の國教會は神聖褻瀆である。その目的は内なる人の改革に非ずして支配階級の走狗たるに過ぎぬ云々。」是等の集會に於て國教會より分離せんと決心したるもの署名者千三百二十八人を數へ昨年末迄に二萬人の署名者を得んとの決心であつた。これ又何の兆ぞ。個人の心靈そのものに權威を有せざる組織的宗教の末路を示すものではないか。

又プロシヤ國教内には信條告白に反對する一團の人々ありて宗教々育團と稱し、信條に束縛せられず、眞に宗教的情操を養はんとする特志家がある。牧師がもし智德兼備の人であればこの指導者たるが、多くの場合に於ては平信徒中の有識者これを指導すと。かゝる團體の出現はこれ又時勢の要求已むを得ずして生起したる運動である。社會

主義の積極的反抗運動に對して何程の効果あるを知らずと雖も、こは獨逸の新教々會内の一光明である。プロシヤ國民の三分の一は天主教徒にして其數は次第に増加しつゝあり。新教徒の家族の増加率の少きに對して天主教徒のそれは著しく増加しつゝあり。而して一方には社會民主々義者の反抗がある。プロシヤ國教會の窮狀察すべしである。然かも宗教々育團はこの要求を満たさんがために現はれたのである。これまた時勢の進運を證するものではないか。

南米の白露は由來天主教を唯一の宗教と認めたが、此度議會は憲法上の獨占權を天主教に與へざることを議決したと傳へられる。南米の天主教僧侶は知識と德望とに於て北米のそれに匹敵することとが出来ぬ。智的道德的分子は教會と没交渉ならんとしてゐる。佛蘭西のごとく宗教の自由を承認するに至るのであらう。

時の進みは遅々たるものがある。されど一面には眞理の勝利が着々として實現されつゝある。吾人は希望の光に照されつゝ前進することが出来

る。(内ヶ崎生)

## 露西亞文學に於ける宗

### 教的情調

一月十二日夜惟一館圖書室にて基督教同志會の月次例會が開かれた。集まるもの十三名。例によつて會食の後鹿子木夫人コルチリアの「露西亞文學の宗教的情調」について獨逸語の論文朗讀があつて三並良氏通譯の勞をとられた。

『露西亞國民は宗教的民族である。米國人は何事にも實用的、現世的であるが、露西亞人は宗教を人生のために使用せんとする。メレジコスキは米國人の宗教は機械的だと批評した。然るに露西亞人は宗教に絶對の位置を與へて人生をしてこれに服従せしめんとしてゐる。かゝる態度はトルストイやドストイフスキ等にも示されてある。露西亞の基督教は「世の終り」即ちエスカトルジに重要な位置を與へる。今より二百五十年程前にペーター大帝が西歐の文物を

輸入して大改革を行つた時、彼は反基督と思惟せられた。これを信ずる基督教徒は世の終りは近いと考へた。爾來「反基督」は教會迄も占領したと考へて、教會も政府も否認して、山に潛み森に隠れて、あの世の接近を待ち望む者がある。十九世紀の終りに死せし作者ソロビョーフの對話三篇のうちにこの思想がよく現はれてゐる。

大改革が行はれて歐洲が一聯邦となつた。時に一人の男子が生れた。大天才で、行くとして可ならざるはない。三十歳にしてその名世界に轟いた。彼は神を信じ、善を信じ、救ひを信じた。彼は善人なれども彼より取り去る能はざる思想がある。即ち自己中心の思想である。即ち彼は虚榮心の奴隷となつてゐた。自分は神より選ばれたるものと考へた。しかし、彼は基督に反抗はせずして、基督は自分の先驅者であると考へた。基督もし刃を以て此世に臨みたりとせば自分は平和を齎らす者だと自信し、自己の天職は基督の精神を完成するのであると自惚れた。然るに此世の終りに近かずして奇蹟を見ることが

び私の憧憬にかへつて來たい。

於鈴山に落ちる夕日の名残り、檜や杉の茂つてゐる森や、はてしもなく續いてゐる茶臼原を弱々しく彩る頃この農村の小高い丘にある鐘樓から、アンゼラスの鐘がゴーン／＼とつき出されて、餘韻ながく淡い夕靄に消えて行く。折しも、甘諸畑に鋤をとつてゐた若い農夫婦も、馬を曳いて野路とぼ／＼と歸り來る青年も塾舎で夕食の米をといでゐた少女も、小川のほとりに餘念なく、たはむれてゐる幼き孤兒も一齊に首を垂れて瞑目してゐる。その光景を想像して見給へ、ミレーの描いたそれよりも美しい繪ではないか。

私は最初、この別天地を訪問した時心ひそかに、何時かこの様な景色を實現したいと思つて歸つた事である。私は日向を慕つて、石井氏を慕つて平和な茶臼原を慕つて、先夏再びこの別天地を訪問したのである。

恰も訪問した夕私は京都の人々の寄附によつて建てられてゐる京都館といふのに、知己の人々と種々物語をしてゐた際、向ひの丘から、ガン／＼といふ半鐘の音が聞えて來た。話してゐた孤兒院の

人々は急に姿勢を正して瞑目した。私の其時の歡と言つたら……。同じく瞑禱した後私の脇の下に感激の汗が、ほと／＼と流れ出てた程であつた。

翌晩私は、或る塾舎に行つて、子供を相手にち伽話をした。丁度話の最中に、夕べの鐘が鳴り出した。私は話に氣を取られて、そのまゝ續けてゐたところが聞いてゐた子供達は鐘を相圖に皆默禱しはじめた。

私もはつと氣がついて默禱したものゝ、背に水を浴せられたやうな感じがした。

かくしてアンゼラスの鐘は、益々私の心に強く印象されたのである。

たゞ一つ残念なのは、今茶臼原で響いてゐるアンゼラスの鐘は、所謂半鐘を用ひて居るので幾分火事の時のやうな感じを與へるので、折角の場所に私はしみ／＼口惜しく思つたので、一つ眞に宗教的な音響のするよい鐘を寄附したいと思つて種々方法で集金して居る次第である。



時

時

## これ果して何の兆ぞ

昨年十一月米國ユニテリアン諸教會の總會はバ  
 フロー市に於て開かれた。同市の一長老教會プレスビテリアン、即  
 ち日本に於ける日本基督教會)はその教會を會議  
 場に提供し、ユニテリアン諸教會の代表者を最も  
 懇ろに待遇した。吾人の立場より見れば何も珍し  
 いことでない。されど米國に於てこの現象をみる。  
 これ何の兆ぞ。

英國ロンドン郊外のエンフィールド長老教會の  
 牧師タブルユー・ユー・オルチャード博士は、新神  
 學運動の副將にして近代人に對する福音の宣傳者  
 である。今日の新神學運動はキャンベル氏と彼と  
 によりて指導せらるゝのである。余は年來同博士

の説教及び講演の愛讀者にして刺戟せられたるこ  
 とと少からず。同博士近頃「神基督及び人に關する  
 説教集」を公にした。ゼームス・モーフアット博士は  
 大英週報に於て之を激賞した。而して「福音新報」  
 記者も大に之を推奨した。余は大に満足を感じる  
 一人である。福音新報記者の進歩派基督教の代表  
 者に獻げたる賛辭は當然の雅量を表白したるも  
 の、されどこれ果して何の兆ぞや。

序にオルチャード博士はグラスゴウのトリニチ  
 ー教會のハンター博士の後任者として招聘せられ  
 たといふことである。該教會は會衆派の一教會な  
 れどもその位置はロンドンのシテ、テンブルに  
 酷似して著しく近代主義的色彩を放ちつゝあり。  
 オルチャード博士は之に應ずるや否や英蘇兩國宗  
 教界の好奇心を惹きつゝある問題である。

獨逸プロシアに於ては、宗教上の不安の極に達  
 しつつある。社會民主黨及び一元主義者モーストは相結合  
 して國教會に向つてストライキを試みてゐる。蓋  
 しプロシアに於ては苟くも國教會に籍を置くもの  
 は出席の有無を問はず所得税の五分の一に等しい



如何に幸なるわが務よ。

御旨かしこまいそしめる身、

慰を告ぐる夕べの鐘。

の讚美歌を歌ひつゝ、夫婦打連れて野路を歸つて来る姿を想像して見給へ。實に何とも言へぬ平和な美しい光景ではないか。私は、この繪のやうな實景を見たいと、憧憬れてゐた。若し未だ日本に無いならば、小さくてもよい理想の此様な農村を作つてみたいと思つてゐた。

こんな事を考へてゐた先年、私は横須賀に軍艦の進水式を見に行つたついで、中學時代の同窓の友が、水雷團にゐたのを訪ねた事がある。

貴様遣ひの快活な談話で、時の移るを忘れて、昔の物語りに耽つてゐた際、突然窓外に囀鳴たるラツパの音が響き出した。すると今まで他愛もなく大言壯語して居つた活潑な少尉や主計の先生達には、かにかしこまつて、瞑目靜思ラツパの音の止むまでしんとして了つた、茶を運んで來てゐた一兵卒は廊下でそのまゝ立止まつて、同じく瞑目した。

今まで騒々しかつた水雷團の各室は、水を打つたやうにしんみりとなつた、私もあまりの壯嚴さに何とも言へぬ敬虔の感に打たれ、祈禱の時のやうに瞑目した。遠くに響くラツパの音は、ミレーの繪の深く印象されて居る私の耳には、アンゼラスの鐘の音のやう

に響くのであつた。喇叭の音は止んで、皆は再び元の騒々しさにかへつた。西に傾いた夕日は、葉山の方より水雷團の窓を透して靜かにその室に射し込んで來て、少尉の顔は黄色くかゞやいてゐる。私はそれまで、こんなに氣持の好い光景に接した事はなかつた。聞けば日出日没軍艦旗の上げ下しには、必ず彼のようにするのだと知つて、我が海軍にも宗教ありと思つたのである。

それもその筈、海軍の元々は基督教國、「きつ」とその習慣の起りはアンゼラスと同意味のものであつたに相違ない。海軍の喇叭の音は將にアンゼラスの鐘である。この事を友に語りしも、軍人の先生達は、笑つて信ぜなかつた。

この實景に接して以來、アンゼラスの鐘に對する私の憧憬は益々強くなつた。そして都市傳道にのみ熱心な我クリスト教界に、もつと農村の傳道を盛ならしめたい、出來得べくむば、一村を擧つて同信の徒となし、夕べの鐘を相圖に、老いたるも若きも、道行く人も、家に居る人も一齊に祈禱をするやうな、平和な村を見たいといふ念が切になつた。

眞の傳道は、地に植ゑなければ駄目である……

私の憧憬れて居る此の様な理想の村が、意外な人々によつて、意外な處に既に建設されて居るのである。これを石井十次氏によつて創立せられた有名な岡山孤兒院が、都會にゐて半ば見世物風にして、人の同情にのみ訴へて生活させては、眞の

孤兒の救済は出来るものでないと、院長の深い考から、全部日向の國兒湯郡茶臼原に移住殖民し、獨立自營今日に至つて居るのである。

日向といへば日本で、最古の國であるが、港も無ければ、鐵道も十分に通じて居ないために、未だ、あまり開けてゐないのである。

廣い廣い野原には、あまり住家は見あたらない。それもその筈。三百萬人でも住める處に、未だ、五十萬人位しかゐないのである。國名から日向で、暖い事は此上なし、健康地としては、醫學上から云つて、日本一であるさうだ。景色はよし、氣候はよし、土地は廣いし、小殖民地として好個の處である。

岡山孤兒院は約六百人を一團として、この様な國の恰度眞中に位する高原茶臼原に陣取つて、ここにクリストを中心として石井氏の指導の下に、純農民生生活を營んで居るのである。私は前後二回此の別天地を訪問した。

一流の小川を中央に、田畑山林三百町一と纏めになつて居るのはなか／＼廣いものである。

遠く南に霧島山を望み西に於鈴山聳え、東に坦々たる幾千町の野を隔て、太平洋が見える。其處に塾舎あり、學校あり、會堂あり事務所あり、共同販賣店、倉庫、住宅、精米所、散髪所等凡そ

六十棟の建物は、かなたの丘の上に、こなたの小川の傍に、或は向の桑園の眞中に風致よく建てられて、宛然一小農村をなして居る。男女の院兒約三百人、十二三人を一組として一名の保母（お母さん）に守られ、各々塾舎に住つて居る。これ等の塾舎には附屬の耕作地があつて、一家族平均水稻四段、陸稻一丁、甘藷五段、桑園一町、菜園二段によつて自活してゐるのである。保母や兒童の力及ばざるところは同院の出身者にして、既に一家をかまへ居る者の補助を受けて、ともかく、かくした十二三戸の塾舎は、獨立自營をやつてゐるのである。

孤兒院を中心に附近の農村に見習ひに出てゐる院兒が二百名程ある。これ等の農業見習生は、將來結婚獨立して一戸をかまへるやうになる。既に十五組の夫婦が出来て、子供も三十一人生れて、この社會で殖民地と云はれてゐる。

石井院長の理想は茶臼原に、二百構を造るにあるのださうである。可憐なる孤兒は、かくして生活し教育され、親の有る貧家の子弟よりも、寧ろ優れる境遇を與へられてゐる事は、子供にとりても、國家にとりても實に此上なき幸福である。宗教的に自然的に、教育され生活して居るこの農村から、將來どんな人物が生るゝかも判らぬ。

孤兒院農村の内部の事に就いて、いろ／＼語りたいが、あまり長くなるのでしばらくおいて、再

云つて、風揚げに羽子つきに或は活動寫眞に行つて太平樂を歌つて居るのでないか、貧民窟の子供等は子供心にも自分等の境遇を薄々分つても居様が彼等だつて世間並みの子供と同じ様な事を欲するのは當り前である。『元日やあれも人の子樽拾ひ』自分はほんとに其の通りだと思つた。

この長屋には救世軍から救はれたクリスチャンだと云ふ三十歳位の人が居つた。温なしさうな人で何んでも室の向ふに小さい箱庭の様なものを造つて居た。また、車夫らしい四十格好の男が六十許りの老人と酒を飲んで居つたのがあつた。酒は電氣ブランとかでメチールが多く這入つて居るとの噂さがある。この長屋ではこの車夫丈けが有福ものらしい。長屋の真中頃に一家七八人の一家族があつた。祖父母と父母と子供等であるが、夜などはどうして寝る事であらう、冬はまだしも、夏の最中をどうして暮らす事であらう、あれでも道徳が維持されるであらうかと自分は人間と動物と

の界目を見せつけられた様な氣がした。

自分は部屋の上人に色々の事を尋ねた老人は次の様な事を應へた。

『この長屋に居るものは、麻つなぎや、燐寸箱造りや、洋傘の骨や、そんな様な事をして居る。

若い連中は餘所へ稼ぎに行くが、多くは一日三十五錢位のものである、それに營養不充分で働けないから大抵は斷られる。また雨でも降ると休む事になり、一日寢食ひをせねばならぬ。また、子供は相當の年齢になると奉公に出す』と。

統一教會の一行は種々慰問をつくして歸途に急いだが、其の附近の子供等が大勢集まつて來て救世軍救世軍と云つて居た。成程救世軍の働きはここかと自分はつく／＼感じた。

道すがら自分達は色々な感想を語り合つたが、其の中に一人の友人がこんな事を云つて居た。

『君、これでも人間だからね!』(終り)

## アンゼラスの鐘

岡山孤兒院茶臼原農村の光景

星 島 一 郎

ミレ一の書いたアンゼラスの鐘といへば、少し西洋畫に趣味を持つておいての方は勿論の事基督教者の大抵の方はよく御承知の事と思ふ。私はあの繪が大好きで、中學時代から今日まで、寄宿舎に居る時も、下宿について居る時も、この繪を私の室から離れた事はない。ミレ一の苦心は音響を繪に寫す事は出来まいかといふ點にあつたさうであるが、吾々基督教信徒にとりては單に若き農夫婦が、一日の業を終へて平和なる夕べの野に、感謝の祈禱をしてをる光景が心を惹くのである。

遠景に小さく見えてゐるのは天主教會の鐘樓であつてフランスの田舎では、午後の三時になると、

どの教會もそろつて、アンゼラスの祈禱にゴンゴンと鐘をならす。その鐘の音を相圖に、どんな仕事をしてゐても直ぐに止めて、祈禱をなしその日の業を終へるのださうで、今しもあの若い農夫婦は、今まで汗して、馬鈴薯を掘つてゐたのを向ひの寺の鐘の音を聞いて、鍬を置いて首を垂れ、いゝと高きに在ます全能の父よ、あなたの御恵に満ち満ちたるこの平和なる野に私共夫婦は睦じく一日の働をなし、多くの收穫を與へしめ給ひし事を感謝いたします。……と言つたやうな祈禱をした後

今日も送りぬ、主に仕へて



さんも居る。教會の婦人連が可憐の同情心から色色な慰問品を配ると、彼等は青黒い病み疲れた様な顔に感謝の色を漾はしてお禮をする。部屋の中は何一つあるてなし、薄ぺらな筵むしろに、煎餅の様なしかも綿屑の見える、名許りの夜具が出されてある。そして、膳など碗等はあるかないか、解らない。子供等は營養不充分のために、ドレもドレも青い顔をして居る。お菓子をやると、大急ぎで鵜飲をする程に迄飢ゑて居るのである。部屋部屋の中には留守のものもある、これは多分、稼いぎに出たものらしい。部屋部屋の中に大分病人が居つた様子で、あちら、こちらに、ゴホンゴホンと云ふ音や、呻うめきの聲がする。自分は肺結核が襲うて居ると思つた。部屋は固より薄暮く陰鬱の氣がトンネル一帯を掩ふて居り、呼吸が詰まる様な感じがするのだもの病人の多いのも無理はない。便所は共同便所である、而も防臭の設備がないのだから夏になると、どんなにか困るだらうと思ふ。假し彼等は慣れて居るにもせよ、衛生上から見て、どう言ふのかと思ふ。

こんな風な長屋が一つの屋敷内に、右にも左にも前にも後にも横にも縦にも全て蜂の巢さるの様になつて並んで居るので、あれで何處から光線が通るのかと思ふのである。

自分は残らず廻り最後の部屋の前に來た時、何んだが内ヶ崎牧師がお婆さんを對手にして會話をして居られる。立聽たきとすると、

牧師「貴方のお國は。」

老婆「へエ東京で御座います。」

牧師「こゝに何年居りますか。」

老婆「左様四年になります。」

牧師「お子さんは。」

老婆「二人御座います、一人は奉公に出して居ります、こゝに居りますのが眼が悪いので」

牧師「失禮ですが、貴方のお職業は。」

老婆「燐寸の箱を張つて居ります、千個を張つて十六錢頂くので御座います。」

牧師「一體此處の家賃は幾何ですか。」

老婆「疊たたみなしで一日六錢で、皆日掛けて御座います。」

牧師「イヤ高いものですねえ。何んでも正直の心に神宿ると云ふから、心を正直にしてね、さうすると何時か運が向いて来るから。お婆さんこれはお土産ですよ。」

老婆「こんなに頂戴物迄致して誠に有難う御座ります。」

かくて牧師の一行は立ち去られた。自分は猶ほ残つてこの老婆一家の様子を見るにどうも此處にある部屋部屋の中で一番樂しうな生活を營んで居るものらしく思ふた。戸口には亭主の慰みか葵や小菊や、福壽草などの鉢が十個許りあつた。

自分は一行と共に更に更に長岡町にあるトンネル長屋を訪れた。(長岡町四十番地)

道路に面した入口には各長屋に居る戸主の名札が並んで居る。此處も矢張り三尺そこいらの細道で兩側の部屋部屋では、皆障子を明けて、子供あるものは子供を前に出して、何か下さいと云つて居る。

教會の婦人達はお土産がガラリガラリなくなるので大分困つた様子に見受けた。この長屋は横川

町のものよりは高等であつた様で、家賃も一日九錢だと云つて居た。

自分等は更に長岡町六十番地の長屋を訪問した。この長屋の暗い事つたら夥しい。三燭かの電燈が而かもかなしで暗い、じめじめした細横丁を照らして居た。この長屋の細道には屋根がないためか、三尺ばかりの長い道が濘<sup>ぬ</sup>かつて居る炭俵や、ぼろ切れて濘<sup>ぬ</sup>るみを防いでも駄目な程常にゴチャ、ゴチャして居る。

長屋の部屋部屋では皆障子を明けて物珍らしさうに私共を眺めて居る。さも苦しうな底力のない咳<sup>せき</sup>があつちこちで聞える、また夜着のまゝ寢そべつて居たお神さんが、婦人より慰問品を貰つて居たのもあつた。子供等は兄弟同志で分配品の奪ひ合ひをして居つたが自分は尤もな事だと思ふ。

發育の旺んな子供等が食ふものも食はされず、着るものも寒さを凌ぐに足らずして、而も家と申せば彼の三疊敷き、隙間漏る風は、彼等がなぜなき子供をして、夜も満足に眠らせない有様であるのに、世間一般の子供達は如何、ソレお正月だと

や。到る處皆然らざるなし。嗚呼類風靡々として鬼國に漂ふの觀あるのみ。

若し如上の弊に見るありて、國家の進運を策せんとせば學術教育の方針に向つて一大刷新を企つるの必要あると共に、一面に於て青年學生の政治運動を大に助長すべし。古今の例に徴するも、國家の振興は、貪婪なる老政治家の手に由らずして、誠忠なる青年の手にまつこと大なり。故に青年學生を合理的なる監督の下に政治的集團を作るは尤も適當の處置なり。かゝる集團にして假令世の所謂政治運動を爲さざる迄も、政界革新者の準備的訓練を授くる機關として取扱ふも無益にあらず。若し一步を進め幾分にも政治思想を全國に普及するの機關たらば、益々目的を達するに近からん。蓋し我が國民は政治に付きて甚だしく知識を缺く。若し此種の集團が、國民の政治的知識を高むるに貢献して、國民は無制限なる軍備擴張は果し

て必要なりや否や、多數の爲めに正義は遂に蹂躪し去られざるべからざるものなりやを正確に判斷するに至らば、是れ決して國家生民の不幸には非ざるなり。

嗚呼我等と志を同ふする青年諸子よ。試みに思へ、日月の照す所、四時の行はる所、雲布風動す。之れ衆民相抱いて樂しむべき地にあらずや。しかも今や資本家と、一般人民と、大臣と下民と、軍人と國民と相乖離して、情に於て相疏通せず。國の内外平穩なるが如くして實は暗流相衝つ。世上次第に純樸の風失せて、利益の爲めに四方奔鬪す。法令益々密にして德風愈々すたる。如斯狀を呈せる一因は、政治其宜しきを得ざるに在り。此の天地を肅清し、眞實の光明を光被せしむる者は是れ青年の責ならずや。眞實の意味に於ける政治運動決して忽諸に附すべからず。

## トンネル長屋の印象

高橋 清 吾

一月十八日（日曜）の午後、統一教會有志の一團は本所區にあるトンネル長屋を慰問した。自分はこれまで話には聞いて居つたが、未だ見た事になかつたから、好い機會だと思つて一行に加はつた。

先づ最初訪れた所は横川町の長屋であつた。狭い汚ない露路を這入ると突き當りに、髪を蓬々させたお神さんが、何か洗ひ物をして居る。洗場のある所は五坪許りの明き地で、其處には塵埃が一面に散らばつて居つて、何とも云へぬ臭氣がブーンと来る。

自分は長屋に這入つて見たが實に驚いて仕舞つた。悲惨な生活をして居ると云ふ事は前から聞いては居たが、まさか、これ程迄とは想像だもせ

なかつた。建物は恰度トンネルの様な造り方で、入口と云ふのは幅三尺あるかなしの狭い、そして、小暗い所である。この小暗い長い細道の兩側には間口一間、奥行一間半（三疊敷さ）の部屋が幾つともなく並んで居るのであるが障子と云ふ障子は破れ煤ぼけ、各部屋の内部は自由に見える有様である。彼等はこの三疊敷きの部屋に哀れな煙りを立てゝ居るのだが、板圍ひ一つで隣家であり、障子明くれば三尺向ふは、また向ふ隣りとなるのである。

自分達が這入つて行つたので彼等は何事が出来たかとても思つたか、或は障子の破れ目から窺いて居る男もあれば、或は障子を開けて、何んだと云ふ事なしに、只滅茶苦茶にお辭儀をするお神



も、記憶力は人生の價值を定むる唯一の標準なりや。抑々亦學校が人才を品臨するは果して何の意義ありや、教育とは如斯ものなりや。第四、現代の政治法律の學は餘りに功利的に傾かずや。當面の問題は則ち利害問題にして、正不正は暫く之を問はざるが如し。學の要は理義を先きにして、人を光明に導くに存す。正義天下に通達するに及ばば、生民必ず其幸福に悦ぶべし。功利を先にするは徒に社會濁流の奔衝を防がんとするものにして、清流の源に溯るものにはあらざるなり。今日の學遂に社會崩壞を止むるに足らざらんを恐る。

### 三

現代學制の不備大凡以上の如し。往古支那に一賢帝あり。帝師と事を論じて曰く「何を以て國を治むる」帝師曰く「賢を尙んで功を尙ばん」と帝の曰く「後世必ず纂弒の臣あらん」と、深く功利の説の天下後世を誤るを恐るゝが如し。而して今や、我が學界功利の説を立つるのみならず劃一的典型を以て人物を作らんと欲し、之に授くるに私

智的教學を以てし、強ゆるに技術的訓練を以てす。青年學生を賊するの事實は、眼前に顯然たるものあり。何ぞ當に後世纂弒の臣を出さんことを恐るの比ならんや。

學校の目的は人才の教養に在りとせば、學校は獨り知識を與ふるのみならず、人才養成の目的に叶ふ實際的方面も併せて之を計らざるべからず。例へば大學に在りては青年學生の政治問題的運動を相當の監督の下に保護獎勵するの必要あり。現在に在りては動もすれば干渉して反つて其自由を束縛するに傾くは痛歎の外なし。余近日大學構内を過ぐ、時に法科大學に於て政治運動禁遏の揭示あり。則ち曰く「學生々徒にして、政治運動に熱中し、又は集會結社に参加するは不穩に付き爾後如斯こと無之様注意すべし」と。如斯禁制は餘りに干渉に過ぎたる者あり。其文辭の體裁既に甚だしく非立憲的なり。且つ夫れ法科大學は現に政治法律に關する學科を學生に教授しつつある傍ら政治運動を禁遏せんとするは矛盾に非ざるか。凡そ思想の教養之を久ふすれば言語となり、文章とな

り、行動となりて、自ら外に發露すべし。政治思想の涵養は總て學生の政治運動を意味する者なり。若し思想と運動と何等關係なしとせば、之れ思想は思想にあらず、迷誤なり、迷夢なり。不知學校は單に政治運動と毫末の關係なき故に政治的空論を机上に弄ばしめて足ると爲すものなりや。若し事實然りとせばこそ人を迷誤に陥るゝものにして、何ぞ教育の名を冒すべけんや。近時政治を口にする人士少からざるも、政治の眞義を解する者に至りては誠に尠し。或る者は政治を以て一種の道樂と看做し、或者は政見を賣りて衣食す。政治は決して遊戲又は賣買の資に非るなり。政治の眞義は皇天を畏れ、正義を以て民を布くに存す。皇天の下に統閱せられて、共和の政を布くは實に政治の理想なり。政治を尊重し、其冒瀆を匡す者は、先づ之れ大學校なり。政治は決して暴動にあらずるなり。交番所の焼打、演說會場の狼籍は政治運動と關せず。之れ亂民の暴舉にして政治と極反す。之を匡す者は、國民に政治を教ふる大學に於てすべきものならずや。然るに大學自ら政治運動は一

種の暴動なりとするが如く、學生の政治運動を禁すと云ふは、則ち衆愚の見に従つて政治を論定する者、自ら政治を侮蔑すと言はずして何とか言はんや。當初大學を設くるの目的は官僚の末輩を作るに在りしか。學閥の基礎を置くに在りしか。

#### 四

大學は内外に於て其學生を桎梏すること如斯。此に由りて之を見れば、今の教育は人材を成す能はざるのみならず、反つて之を困苦毀壞せしめて成るを得ざらしむる者なり。故に此の門に養はれたる者、世に出づる時は、既に英氣を消磨せる後にして、彼等何の希望と云ふの希望をか抱かんや。蓋し希望胸中に溢れて、初めて踴躍鼓舞すべし。眞の希望失せて何ぞ眞勇を揮ふを得んや。今の青年の頭腦を悩ます者は、早くいかにして衣食せん乎との問題にして、其慾求する所の者は遊逸なり。或は富豪の女婿となれば更に妾を畜へんことを思ひ、官吏となれば局長に巧言を以て媚ぶるを辭せず。而して何ぞ獨り此の風此の大學にのみ限らん

# 學生と政治運動

太田 振策

## 一

水清ければ魚樂しみ、泥濁加はれば魚病む。今や天下の氣逆診にして、人は皆心身に病患を抱くが如く、ひいて病弊は又深く社會制度、國家組織に浸漸せるが如し。此の逆診の氣を掃蕩し、四海の文物を煥乎たらしめんとせば、今日の急務として、政治的に人才を百練し、従つて一般國民をして等しく政治に目を開かしむるの要あるは、恐らく異論なからん。

我が國に於て明治以降、今日の如く政界の腐敗、政治家の不謹慎なるは恐らく之れ無かるべし。明治維新當時の政治家中其中堅となりて活動せる者は、身を犠牲にして君國に殉するの誠意ありしが

如し。下りて議會開設の當初に際しても、自由民權の大義に熱中するの類は尙ほ之を見るべかりしなり。而かも年と共に政界は次第に腐敗紊亂して救ふべからざるに至れり。今や政治家は利權勢位の爲めに黨派を立て、互に軋轢す。彼等必ずしも口に主義主張を呼ばざるに非るも之れ偶々賣藥の廣告と一般、暫く人心を惹かんとするのみ。彼等は必ずしも國家を云々し、陛下の萬歳を呼ばざるに非るも、一點國家に盡くす誠意なし。利害の爲めに集散し、巧に情意投合を爲す者は我が國の政治家に非ずや。如斯政治家の手を経て國家の治平を望むは、木に緣りて魚を求むると一般何の甲斐かあらんや。嗚呼興國の策は他に秘計あるに非ず。この場合有爲の士一大勇猛心を起して、此の

頼風と戦ふに在り。而して百難勇往の戰士を作らんとせば、國民の俊英に深く政治的訓練を施すに在り。百練して新人物を養成し以て新時代の來るを俟つべし。

## 二

學校教育の主眼は那邊に存する乎、蓋し云ふまでもなく人才教養に之れ在らん、而して政治教育の骨子は政治家を出すに存し、政治の理想は皇天の下に統閣せられて、共和の政を布くに在り。故に苟くも此の理想を體する者は皆政治家と云ふべく、必ずしも議員たるを要せじ。山谷江湖の士尙且つ政治家たるの資格に於て缺くる所なし。如斯人士を養成するは之れ政治教育の本旨なり。而して今の教育方針は如何、余は此の數年法料大學に學びて多少其教化の内情を知り得たりと信ず。故に今少しく之を論評せん。

今の政治經濟に關する教育方針を見るに、之れ人性を完成せしめんとするに非ずして、反つて人性を賊するの弊なきか、これ余の竊に憂ふる所な

り。第一現在の教育は、人格養成の大眼目を閑却して、技術的方面を偏重するが如し。強ち技能を輕視するは不可なるも、人格養成を後にして、技能本位の教育を施すは往々人を誤り易し。第二、學生をして甚だしく智學に勞せしむることなきか。余の淺學を以て、今の科學の價値を憶斷するは、碩學に罪を負ふを免れ難からんも、余の見る所を以てすれば、現代の科學は根柢甚だ薄弱なり、生命に磐居することを爲さずして、頭腦の私智的思辯に根柢するが如し。講學者に決定の地位を與へざるは之が爲めなり。かゝる私智的學藝を注入し、學生をして機械的に暗記せしむるは之れ精神を耗疲せしむるに止まる。第三、學生をして悉く劃一的制度を強制して其美茂の才を剪截することなきか。今日の學制は各自得意とする學問を研究するの時間と餘裕とを與へざる也。學校は一樣の試験を課して、學生の進退優劣を計る。異等の成績をおさめたる者は、之を賢良として市朝にすゝめ、其然らざる者は然らずとして之を卑しむ。學校が賢愚を定むるの標準は記憶力の強弱に由る



にもほの見えてゐた。モンナヴァンナ等に比較して性格そのものが餘程くだけた、そして極めて人情物的になつてゐる爲もあらうが、轟々と人の胸に應へる所が多かつた。全體から言つて見ると氏の藝術は餘程冷たい、押へたところが多い。これが氏の長所でありまた短所であるかも知れない。イブセンの作そのものが何處までもあんなものかも知れないが、私達には苦しくつて見て居れないと思ふほど冷たい所がある。五つの幕を通して殆んど凡べてが冷たい女性であつても宜い。しかしせめて最後の一齣だけには、雲雀のやうになつた氣分の女を見せて貰つても宜かつたらうと思ふ。

中井哲氏のヴァンゲルは、その人になつてゐた。但しこの優にも尙少しせりふの上にも、いさの上にもゆとりを持たせたいと思つた。

## 吾聲會創作劇公演

近頃翻譯劇に關する非難があることに聞こえる様になつた時に、吾聲會が率先して日本人の手に

澤田正二郎氏の他國人は、この劇中に見る唯一の象徴的人物である。何となく舞臺協會の佐々木積君を想はせるやうなせりふの人であつた。

田中介二氏のリングストランドは先づ無難の出来であらう。少しの誇張も銜氣もない、極く眞率な藝である。見てゐて心持ちの宜い優であつた。

これを要するに藝術座の藝術味の特長は、その落ち着いた、やゝ沈むだ、地味なところにあるやうに思ふ。藝術座の人々の技藝は未だ完きものとは言はれない、併し第一回に比較して著しい進境を否むことはできない。たゞ考へなければならぬことは、そのアクトが進むに隨つて、やゝもすれば歌舞伎式な巧みが加はりはしないかと想ふことである。これは私の杞憂であつて欲しい。

(ゆふしほ)

なつた創作もその演じたのは注目に値する。併しながら私は不幸にして翻譯劇以上の興味をこの公

演に於いて見出することを得なかつた。翻譯劇はその演出の際に當つて役者が原作者の意を了解しない爲め、または彼我社會生活の相違より起る不了解や、役者の先天的缺陷等の爲めに、随分珍妙なことをやつて居るのには相違がない。併しなから観る人の眼からは、そんな缺點のあるのにも拘らず、そこから多くの暗示や教訓を得ることが出来る、即ち戯曲そのものの包含する優秀なる内容はこれを拒むことは出来ない。そこへ比べて琴平丸が表白するところの内容の餘りに貧弱なる事をおかしまざるを得ない。一つは日本の社會生活そのものの無容内に因するは言ふまでもないが、要するに日本にはまだ眞面目なる生活の煩悶者がなく、深刻なる生活の苦闘もしくは革命者がないと云ふことに歸せねばならぬ。觀て居て何だか間の抜けた、あつけない感じをしないでは居れない。

自分は矢張り今のところ翻譯劇の方を見たい様な氣がする。

併しかう云つたからとて全く駄目だと云ふのではない。この戯曲には可なりの皮肉も出てくるし、運命の力の不思議な恐ろしいはたらきも感じられた。たゞ西洋の芝居の深刻な色彩に比して感銘が足りないと言ふまでのことである。

自分がこの芝居を見て一番感じたことは吾聲會の俳優諸君の技藝が著しく進歩したと云ふことであつた。一つは戯曲の意味が了解され易かつたからであうが、兎に角、餘程進歩したこと丈はたしかである。就中、稻富、諸口の諸君には著しい進境が認められる。その他横山、花柳、諸君にも將來はある。諸口氏には剛強な意志を見、稻富氏には理智の才を見る。併しまだ眞の熱情はこれを何人にも認め得ない様な氣がする。

(T S K)

## 藝術座の「海の夫人」

藝術座の第二回公演が一月十七日から有樂座で開かれた。そのつい前に新劇社や、吾聲會が随分苦しい破目に陥つて了つた時だつたので、新しい劇の試みに對する世間の人々の注目は一層、藝術座のこの公演の上に、一種の重苦しいやうな期待や危ぶみを以て充されてゐた。藝術座の立ち場は少くとも新劇の試みに對する一種の暗示を私達に與へた。私達は試みの時代から、實際的時代に入らうとしてゐる。

出し物はイブセンの「海の夫人」チエエホフの「熊」であつた。「海の夫人」は同じイブセンの「人形の家」が提供した婦人問題に對する、イブセンの解決とも見らるるものである。劇全體の調子が海といふ深い神秘的なローマンチックに包まれてゐて本來寫實的な筋を譯もなくぐんぐんと結末まで運んで行つた。近頃ショウの作物を觀馴らされてゐた眼には、著るしくイブセンの象徴的表現法

や、そのローマンチックな色彩が眼立つて見えた。

田舎醫師ヅングルの後添ひのエリーダは、故と燈臺守の娘であつた、そしてあらゆる海のローマンスにつつまれて大きくなつた。お人良しのヅングルの妻となつてからも、彼の女の海に對する憧憬は止まなかつた。それにその娘時代に何氣なく婚約した外國船の男のことが忘れられなかつた。その旅の男は絶えず彼の女の心頭に浮んでは、彼の女の心を脅すのであつた。そこにリングストランドといふ病身の若い彫塑家が彼の女の家を訪ねて、彼れが航海中に出逢つた一人の不思議な男の話をして聞かした。エリーダはその不思議な男こそ、兼て自分が婚約してゐた旅の男であることを確めて、彼の女の心はますます恐怖と不安に充たされる。そこへ恐ろしい、凄いほどな表情を持つた旅の男が、まるで大海の底からでも生れて來た、怪物のやうにして、彼の女の前にはれるのである。

る。旅の男はエリーダに昔の約束を迫る。女の心はまるで一種の魔力に魅せられたやうに自分と自分の決心に背いて不思議な旅の男の方に惹き入れられて行く。旅の男は自由意志といふ言葉を女に聞かせる。女の心は倍々動く。自由意志！自由意志！凡べての結婚も自由意志でなされたものでなければならぬ。ヴンゲルと彼の女との結婚は、一種の利益交換であつた。結婚は自由意志から成り立つたものでなければならぬ。エリーダは「自由意志によりて成されたる結婚」を想ふとき、始めて婦人として覺醒したのであつた。深切なお人良しのヴンゲルは悲歎絶望を押へて、彼の女に自由を與へた。彼の女は、今や、自由の女となつた。彼の女自身の意志に依つて、彼の女自身の責任を持つて、家庭の一人となることができた、妻となることができた。彼の女には、彼の女自身の意志を持つてその夫を選択するの自由が與へられた。彼の女は、彼の女を誘惑したる旅の男と、お人良しのヴンゲルの何れをも自由に選擇する權利を與へられた。彼の女は、再びヴンゲルを選んだ。そ

してヴンゲルの手に歸つて來た。しかし此の時の彼の女は、一刹那前の彼の女ではなかつた。彼の女は覺醒したる女として、自由意志を持てる女として、豊かなる家族的愛情を持てる女として歸つて來たのであつた。

舞臺裝置配景から行つて全體のトーンは可なり細い所まで整つてゐた、氣分から行つても此の座特有の落ち着いた藝術味が現はれてゐたのは嬉しい。しかしやゝもすれば、弱々しい頼りないやうな氣を惹き起させる點もあつたかと思ふ。例へば第一幕の庭園に臨んだ前廊のやうなものは、よしそれが瀟洒たるものを望むにしても最少し、スタビリチーを有つた感じを抱かせるものであつた方が良くはないかとも思はれた。或は第二幕の池の如きも最少し廣い氣分を持たせる工夫があつて欲しかつた。しかし兎も角あの狭い有樂座に、あれだけの大きな舞臺面を拵へなければならなかつた人々の勞作は同情してやらなければならぬ。

松井須磨子氏のエリーダは、此の優でなくてはと思はせる點が、そのせりふの上にもしぐさの上



深い下の谷底から吹き上げてくる寒風の爲め、四邊の積雪が颪風に煽り立てられた砂塵のやうに舞ひ上つて、殆ど一尺先も眼を開いて正視する事が出来ず、剩へ冷へ切つた暴風の爲め息の根も止まりさうで、碌々氣を落ち付けて呼吸すらしてをられなかつた。二人は隧道の出口から少し下つた坂の曲角の所で、びし／＼膚を衝き刺してくる吹雪の難を避けて、漸くほつと一息ついた。

「今日は未だ早いと思ふてたら、もうこれ三時近くやでえ」

其時丁度二人の側を六七貫もありさうな小包の大行囊を擔いで、息使ひ荒々しく通り過ぎて行つた郵便脚夫の、甲斐々しい後姿を見送つて、淺吉は急に時間の事が頭に浮んで來た。

「こんな具合ぢや、松ヶ茶屋の下位からとぼ／＼日が暮れるかも知れん。尤も雪路で明るい事は明るいやらうが、それにしても、足元が危うて叶はん。サあきぬ標をしつかり穿かうや。」

二人は荷をよいあんばいに雪の中に下して、凍りつめた下り阪の危険を豫防する爲め、草鞋の下へ鐵の簡単な標を結び付けた。

「淺さん、サ、一寸起して。」

深い雪の上に仰向になり、自分の荷を背に負つて立たうと跪きながらあきぬは淺吉の方を振り返つて斯く彼の助力を乞ふた。

「よしや」淺吉はどツしりした男の聲で、快諾の旨を告げて、早速妻の氷の如に冷え切つた兩手を握つて、彼女を起してやつた。あきぬは淺吉のごつ／＼した荒くるしい大きな手に攫まつた時、何とも言へぬ心強さと、同時に自己の全生命を捧げ得る異性に對しての一種女らしい衷心からの満足とを感

得した。二人は又無言の儘危なかつしい氷の急坂を下り初めた。先前隧道の中でおきぬの口から索道の話を聽いて以來淺吉は妙に沈み込んで考へ深さうな眼元には滅多に現はさない不安の色が漂うて居つた。殊に彼女が「索道がついたら、ほんまに便利になるやうなア、」と言つた其最後の言葉は堪え難いほど彼に精神上の苦悶を與へた。「索道がつく。そりや便利な事に違ない無論便利や……併し……」彼は其以上自分一人て考へて見る事すら恐ろしくてならなかつた。便利は便利だ。併し便利の爲に……」此處まで獨言つて彼は再び戰慄した。「何に。其便利の爲に誰かゝ飯が食へんやうになるとしたら……」彼は不安の餘り、自分の後におきぬのゐる事なども殆ど忘れかけてゐた。

「淺サン。」

おきぬは淺吉が、いつになく時々足を踏み外しさうなのを氣遣つて、細い鋭い聲で夫の名を呼びかけた。

「どつか身體でも悪い事ないのかえ。もつと確乎歩かうやないか。夫君の足元見とると、冷汗が出て仕様がないわえ。」

淺吉は唐突に斯んな注意を受けて、俄に惡夢から醒めた時のやうな、一種の惡寒を覺えた。

「イヤ別にどつこも悪い所はない。たゞ昨夜碌々夜具も被なんなので、寒さにがた／＼震へて、一寸とも眠られなんださかいやらう。」

おきぬは、彼の此返答を以つて如何にも満足したらしく心配さうな顔色を少し和げて、嬉しさうに彼の後に跟いて下つた。淺吉は此苦しい辯疏に一時彼女を安心させながらも、二人の間に少しく沈黙が續くと、彼は怖る／＼例の索道問題に就いて深く、而して眞劍に考へざるを得なかつた。(未完)

氷のやうな谷風との爲め、逆も皮膚の表面へ流れ出るまでには至らなかつた。横川の村から南へ一里も登るとそこには、小南峠の一軒茶屋があつた。平生なら他の連中のするやう、彼等夫婦も此茶屋に一憩して豆や駄菓子の子二三錢も、むしや／＼やつてゆくのが常であつた。併し今日といふ今日こそ、彼等には、もとよりそんな餘裕とはなかつた。二人は寒い山風を避ける爲に深く戸を閉した茶屋の中庭を通り抜けて、只管他人の眼を憫ふやうにすた／＼自分等の家路を急いだ。茶屋のすぐ先には例の隧道があつた。横川方面からの入口は春先から夏にかけての、酷い泥濘に引きかへ、今は全く一間にも餘る大氷柱で、半分以上も閉塞せられてゐた。

「あきぬ」久しく沈黙を守つてゐた浅吉は隧道の入口で彼の妻を呼びかけた。

「今日は提灯を借つてくるのを忘れて失策つたなア。未ださう遅いことないのやけどこんな雪降で隧道の中は眞暗やて。下は凍て／＼つる／＼やさかい、之らんやうに用心して伴いて來や。うつかりすると轉るで。」

あきぬは何時も定つた浅吉の親切な注意を想ひ起しながら

「ほんまに暗いのな。併し横川へも今年の五月頃は索道がつくつて言ふとるさかい、此處へも電氣の一つ位ひはつけてくれるやろかい」

「何に索道つてかい」

何も氣付かないらしいあきぬの言葉に愕いて、浅吉はいつにない頓狂な大聲を揚げた。

「さうやなアもう去年の十月から東京の技手さんが來て、仕事をやり初めたつて言ふとつたさかい、

なんぼ晩<sup>おそ</sup>うても此の五月には出来上るやろ。然<sup>さ</sup>うすると後<sup>あと</sup>もう一、二、三、四、五、正味<sup>せうみ</sup>ざつと四ヶ月やなア。」

斯<sup>しか</sup>う言ひながら淺吉は態々指を折つて如何にも寂しい、而して疑深い眼付であきぬの方をふりかへらうとした。「もう後四ヶ月本統<sup>ほんぽう</sup>にかい。」淺吉は再び小聲で斯く呟いた。背<sup>せなか</sup>にあんかや皿、鉢、茶碗の類を負ぶつてゐたあきぬは夫の注意もあつたので一層用心深く彼女の足元に力を入れて歩いた。あきぬは一方足の方に氣を奪はれ、一方隧道の中が眞暗なため淺吉の寂しい不安らしい表情や、殊更指を折つて月數<sup>つきすう</sup>を勘定してゐた事など一寸とも氣付かず済んだ。併し淺吉が獨言<sup>ひとりご</sup>の心算<sup>しんさん</sup>で小聲ながらに繰返した「もう後四ヶ月、本統<sup>ほんぽう</sup>にかい」といふ自問自疑の一句は明瞭すぎる程、彼女の耳に入つた。

「淺さん。」

あきぬは不思議に打ち顫える自分の聲を制して、すぐ前の夫に話しかけた。

「何すつてそんなに月數<sup>つきすう</sup>なんか勘定しとんの。索道のやうなもの何時<sup>いつ</sup>出来ても宜えぢやないかえ。併しそらまア一日でも早う出来るほど宜えことは宜えけどな。索道がついたらほんまに便利になるやうなア。」

淺吉は唯黙々として淺墓な女の考へを物悲しく聽いてゐた。二人は間もなく隧道の闇を抜け出て急に明るい雪の世界に踏み出した。今日は雪曇りの爲めか、いつも遠く眼下に展開せらるべき大和平原の廣々した景色も見えなかつた。また此小南峠と其高さを競つてゐるやうな金剛葛城の諸山も其雄姿を深く冬空の中に隠して居つた。隧道の出口は其入口のやうに大きい氷柱<sup>つら</sup>で閉<sup>とざ</sup>されてゐなかつた代り、



つてお出て。何に構ふもんか。それに今日は芽出度い御正月ぢや。お前にも年酒の御馳走位ゐせにやならん。ンあきぬも一緒か。此處へ來たら上つてゆつくり雜煮でも食ベツてさう言つてやつてお呉れ。」如何にも嚴格らしい、併しどこことなく人懷ッこい大旦那は、自分の家内や嫁に言ひつけて今日はいんと淺吉夫婦を構つてやつてくれと注意しておいた。

「旦那はんどうもすみまへん。いつも／＼可愛がつてもろて」

「イヤ淺公そんな遠慮は一寸とも要らん。時にのう今日汝お正月の二日ぢやないか。おまけに此の大降り。荷持でも今日ら働いてるのは汝等位ゐのもんぢやらう。如何して又……」

大旦那は此處まで來て、急にさつき午餐の時、地方の赤新聞に載つてゐたといふ簡單な三面記事の事を想ひ出した。それには去月卅日の午前淺吉夫婦の出稼中、留守番の女兒が失火して一戸全焼した由を手短く記載し最後に全損額三十圓と書き添へてあつた。彼の三男が食卓についてから此記事を読み上げた時家内一同は申し合せたやうにくす／＼噴飯した。彼等には總損高三十圓といふ事が想像のつかないだけ一層可笑しくてならなかつた。併し唯一人、例の大旦那は彼等の淺慮な笑ひを聞いて、堪らないといふ程厭な澁い顔を見せた。

「一體汝等は何が可笑しい。ほんまに譯のわからん奴ばつかし揃ふたもんや。汝等はさう可笑しかろうけど、淺公の身になつて見い。彼奴等夫婦が廿年の間汗水垂らして、あの苦い峠坂を通過して漸々と貯めた臍繰財産が、今度の火事で焼出された卅圓ぢやないか。可哀相に彼奴等がこれから又働いてあれだけの金を儲けるのにやつぱり又十五六年はかゝる。想ふて見りや三度々々斯んな白飯を戴くなん

て俺はもう勿體なうて叶はん。而して無論笑ひ事ツちやない。」

大旦那の指圖で、淺吉は大和屋から色んな日用品を恵まれた。蒲團、あんか、古着、古畳を初めとして、差當り日常生活に必要な器具は大抵此家で揃へて貰つた。淺吉夫婦は最初から眼を眞赤にして此人々の慈悲心に泣かされてゐた。「どうも難有う御座いました、誠にすみません」二人は赤く泣き腫らした眼を抑へて代る／＼大和屋の人々の前に禮を述べた。

「のうあきぬ、俺等の村の衆とえらい違ひやないか。村の衆等は平生から俺等をこやばん、こやばんといふて碌に交際もしてくれん。これや後で聞いた事やが、何でもあの火事の時、村の衆は猫の子一疋も消防に來てくれなんだちう事ツちや。大和屋の大旦那のやうに大きい財財を拵へるお方ばどこか違つたところがあるなア」

「さうやとも、死ぬのもそりや怖いやらうが、米も、家も、着物もないのに未だ生きてゆかにやならん位ひ苦しい事はない。そやのにあの慈悲深い大和屋の大旦那がをられんだら、妾等ほんまにどうなつたことやらう。大旦那こそ妾等の命の親やて」

横川の村里を少しばかり離れて、歸りの山路にさしかゝつた時、二人は殆ど涙ぐんで斯んを事を話し合つた。雪は朝の間よりも少しは小降りになつたけれども、寒さの故か積つてゆく割合は比較的急速であつた。野も山も谷も今は一面に眞白くなつた。溪河の所々はその緩漫な流れの爲に二寸に餘る厚氷を張り、其上には地上と同じやうに雪が用捨なく積つてゐた。雪の小降りとなるにつれて山上風は漸く烈しく、坂の險しいのと荷の重いのとで、自然に滲み出る二人の汗もそのすぐ後から強い嵐と

はもう一尺近くにもなつてゐた。裸足に荒造りの草鞋を括りつけた二人の足先は、長年慣れてはゐるといふものゝ、所々赤く水腫に膨れ上つて一目見るからに傷々しい感じを起させた。眉の濃い色の蒼黒い浅吉は時々妻の姿を偷み見するやうに眺めた。彼女は忠實な妻として十數年來彼の勞働の分擔者であつた。彼には戀とか愛情とかいふ言葉が何等の意味をも有してゐなかつたけれども偶然「若し彼女がゐなくなつたら」といふやうなことを考へる時常に彼は唇の色を失ふ程怖れ且つ戦いた。彼は彼女と離れて一時も生活する事が出来なかつた。彼女はどこ迄も彼の尊い生命其物であつた。

「汝の言ふ通りや。あの事……なんぼ諦めやうと思ふても、己等みたよな思切りの悪い男にや、とても出来ぬ事ッちや。あの前の晩俺はどうも妙な夢を見た。家のお時奴が此間下市で買ふて來てやつたばかりの玩具を、誰か近所の小供にへしつぶされて一人でしく／＼泣いてやがつた。併し彼女も小供ながら、俺等の貧乏な暮しをよく知つとるんで、俺を見ても他の娘のやうに又買うてくれとせがまなんだ。俺は奴を可愛想やと思ひながらつひ眠を醒した。俺は今でも其夢が不思議でならん。翌日汝と一緒に家を出てゆく時、お時の奴が何やらし／＼して俺はどうも後が氣懸りでならなんだ。そして午時分歸つて見るとあの酷たらしい始末。世間の噂ぢや、お時が外へ遊びに出て居つた間に、お粥を炊いとつた竈の火がとんであんな火事になつたんぢやさうな。併し俺には村の衆の狭い量見や、殊更あの不思議な夢があるんで、どうもちつと合點の行かぬ所があるやうに思へてならん。」

浅吉は罪のない顔にも自らなる憤怒の色を湛へ、寒さと口惜さに聲を顫はせながら、血色の悪いあきぬの顔を凝視してこんな事を口走つた。二人は其處を立つて長い間無言の儘喘ぎ喘ぎ峻険な山坂を

攀ぢ上つた。峠の頂に近い路端の兩側には、鬱蒼たる杉檜の森林が晝猶ほ暗さまでに長く遠く立ち寒がつてゐた。路の上に覆ひ被さつて居る重々しい木々の枝からは時々恐ろしい音を立て、厚い雪がドツサリ地上に落ちて來た。二人は顫をすくめながら自分等の背中に這入つた雪片の融けて行く心からの寒さに打ち顫えた。

「今日ももう午過ぎやで、横川は不相變の大降りかな。」

隧道近くに來た折、淺吉は思ひ出したやうに小聲で呟いた。

「雪行きはどうも工合悪い、歸つて來るまで餘り澤山積つてくれんと宜えがなア。」

二人は横川の村に着いた。淺吉は下市からの荷物を持つて、第一に大和屋の旦那の宅へ行つた。

「御免ッ」

「御祖母さん荷持さんが來てますぜ。」

六つばかりの惻發さうな此家の子供が其祖母に告げてやつた。

「今行きますが一體誰や。」

「私淺吉です。」

淺吉といふ言葉を耳にして今迄奥の八疊で何やら新年の雑誌を讀んでゐた此家の大旦那は急に炬燵から這ひ出て來た。

「オ、淺公か斯んな大雪の日にようやつて來たのう。サ、外は寒いさかい草鞋を解いて此圍爐端に上



沖の波は打ち寄せて來た。沈黙と暗黒とは破られ、僕は再び僕の脈搏を感じ初めた。否、此脈搏に覺醒し、此脈〇を見出した。遠く深き氣分のうちに、僕の溶け往きしは、千秋が彼の一刹那の氣分に分け入つたのであつた。そして彼れの脈、彼れの息は、僕の脈、僕の息となつて居る、彼れは僕のうち活き、僕は彼れのうちに活きて居る。霞も、文も、此の生命の交通に還つて來た。還つたのではない、彼等も予も之れに醒めたのだ。我等の生命は固く結ばれて居る。而かも我等は未だ其如何して然るかを知らない、其何故たるを解しない。また此の生命、希望を見失ふこともあらう（見失ひたくない）。されど之を奪ふものはない。之を滅ぼすものはない。希望は復活し、生命は更新して止まない。予は今東雲の朝を望んで寢に就く。眠りのかなたは脈かである。すゝゝと安けき夢を結べる光坊は微笑んで居る。明日を樂んで居る。眠りのうちにも生命は充實して往く。旭日の影は月影に代はるであらう。

\*

\*

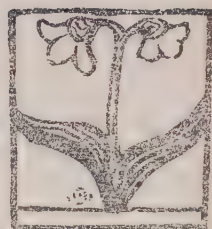
\*

\*

\*

\*

電燈にカバーを纏ひ、蒲團と搔卷とに身を包む。眼を閉ぢた。松風の音が微かに隙き間をもれて來る。之に聞き惚れて暫しはずどろむ。薄らぎ往ける氣はまた晴れ／＼して來た。僕は醒めた。今の一瞬僕は何處に彷徨ひしか。僕は知らず。たゞ僕はかのまどろみより歸つたのである。僕は誘ひし松風の音は何處より來りしか。濱邊よりか、月よりか。松風か、沈黙か、神祕か、あゝ僕はまた溶け入らんとする……………僕は迎へ入れらるゝ心地がする。客人としてか、友としてか、イントルーダーとしてか。あゝ暖かい、あゝ抱かるゝ、あゝ此心持ち……………。



## 灰 燼

井 口 杜 村

「きぬ己等も今日から本統の其日暮しになつたな」

十五六の少年時代から働き盛りの今日に到るまで、天秤棒一本を頼りに賤しい荷持の境涯に甘んじて居る浅吉は、廿年來踏みなれた山路とはいへ、二里に餘る小南峠の峻阪にさしかゝつた時、自分のすぐ後に喘ぎ／＼登つて来る妻のおきぬを顧みて、重々しい彼の口を利き初めた。

「本統になア、浅さん妾別に人様を恨むといふわけやないけど、どうも神様や佛様のなさる事がわからん。信心も却々當になるもんやないな、今日はこれ正月の二日やないかえ。重たい荷を負うて毎日毎日困難いこの峠を通ふのは、私等の損な運命やさかい、別に何とも思はへんけど、あれさえなかつたら、せめて正月の三ヶ日だけは他の荷持と同じやうに、雑煮に餅の一つや二つは入れてゆつくり御祝ひも出来たんやらうのになア。」

二人が板橋の袂で一と休みした折、今迄默然として、只管夫の後に伴いて登つてゐたおきぬは、如何にも頼りなさうな様子をして、女らしい泣言を數々並べた。大晦日の夕方から降り初めた雪は今朝になつて、愈々正月らしい本降りになつた。しと／＼と積つてゆく牡丹雪の深さは所によつて

等の仰ぎ見る處ではないか。彼等は其出でし處に還つて居る。其處は星影きらめくかの大空でもない、又千仞の海底でもない。彼等と我等との此繋ぎ、此ゴールデン、チェーンである。この暖かき生命である。この金鎖は最早斷つよしもない。否、永劫斷たれしことはない、繋がれて居つたのである、結ばれて居つたのである。此の生命の流は、我等の希望である。希望の先きに希望あり、希望と希望とは持續する生命を成して居る。生命は血液であつて、希望は其脈搏である。是れが我等の故郷である。假りの故郷を慕へる我等の三兒は、此永劫の故郷を暗示して呉れた。その無邪氣にして熱烈なる心を以て、その死を以て、暗示して呉れた。彼等の死は死ではない、生である。聖化である。復活ではない、實は生の繼續である、生の進化である。千秋は船出したのである、繪具を買ひに往つたのである。彼はその最後の息まで繪具を求め得て大作をなす希望を失はなかつた。彼は其肉の眼を以て外を望む能はざるに至つて、瞑目した。そして内に向つた。内を望んだ。内を深く、遠く、而して絶えず望みつゝ我等を導いて居る。我等を導いて共に其大作を成就せしめんとして居る。此生命の大作を現實ならしめんとして居る。千秋は其名の如く、來る春も、來る秋も、何時までも前を望んで居る。肉の眼の閉ざされしは、外に向けるものが内を向いたのである。然らざれば、彼が肉の終りは斯くも平靜なるを得し譯はない。彼れは希望に満ちて居つた。彼は死といふことを念頭に置かざりしほど、生命の脈搏が打ち絶ゆることはなかつた。彼の病氣が其肉の脈搏を百五十以上にも達せしめ、更らに其れ以上にも達せしめて、數ふること能はざりしほどに、迅速なる生命の進行に入り込んだ。彼の生命が描がき出す大作は何んであらう。否、我等は彼のみの努力として、之を驚嘆するに止まることは出来ない。彼

の脈搏の一つ宛が我等の脈搏に混入せねばならぬ。是れが眞の共鳴であらう。あゝ彼は其瞑目、沈黙の刹那に於いて、一大飛躍をなし、其の飛躍は之を其の靜かにして而かも雄辯なる屍によりてシムボライズして居つた。我等は其シムボルの薄き幕を破つて、其核心に突入せねばならぬ。オリバー・ロツヂは此の幕、此のシムボルの目に／＼薄らぎ往くことを説いて居るではないか。我等の今見るところは朦ろであるが、面のあたり相見て相抱く時も近づきつゝある。此視力の朧げなるが、彼れが瞑目の際に於ける、深くして切なる我等の苦痛であつた。我等の生命は彼の生命と共鳴して居りながら、我等は之を定かに知らずに居る。たゞ本能に於て共鳴して居るとても言はうか。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

時は刻々と進んで往く。縁側の戸は閉された。埒に歸る鳥の音もはや聞えなくなつた。内にはたゞ光坊の寢息さあるのみだ。外は打ちては返へす漣波みの音が空に牙えて居る。あゝ此の戸一重が内外を隔てゝ居る。生命は此隔に拘らず、進んで往く。夜は更け、靜寂は彌や増しに深い。嗚呼此森々たる沈黙の壓迫を如何すべき。僕は何處まで沈んで往くのであらう。轟々と迫り來る此肅殺凄愴の氣を如何にせん。電燈は輝けど其光りはこの陰影を射透しがたい。我は谷より谷に、底より底に落ち行くばかり。この暗らさと、この冷めたさ！我手我足は凍らんとする。眼はくらむ。刻々の脈搏は今一つ残る。最後の一つは最後の息に掻き消されんとする。深く沈める氣分が遠く／＼展開する……………  
…希望の光り微かに……………



くして底力ある音聲と其の持主である。(今より思ふ、彼れは此際神經亢奮せり)。「美濃部さんにも宜敷、木村さんにも宜敷、シネダーさんにも宜敷」(其他たゞ一面識ほかなしと思はるゝ知人や、學友の名を列舉せるが、僕は一々記憶せぬ)「あゝ船が來た…………お母あさん波が」繪具を買ひに…………「花が咲いて」「お父うさんも、お母あさんも、皆んなが一所に入らつしやるから、コンナ嬉しいことは…………」など途切／＼に語り續くる聲の朗々たるを聞くばかり。「千秋、安心が何よりだよ」と力の籠もれる聲も混じつて居つた。僕は更に彼の側近く寄つた。何も言ふことはない。彼れは目を睜つてヂット僕をながめた。室内は森とした。彼れは僕の顎や頬を指頭で力を入れて弄ちつて居る。最早言葉はない。たゞ沈黙！。父も、母も、子も、我とも思はず、爾とも思はず、涙さへもない。たゞあるものは沈黙のうちに進行する或物と、我にもあらず、彼にもあらずる此の繋なぎ。此の靜かにして此の暖かく、此の暖かにして無限に延び往く心持ちのみが搖曳して居る!!

我が追懷の連鎖は斷たれ、我が筆の進行は止まつた。見れば「お休みなさい」と言はんとて、寢衣を着けたる光坊は満面に笑みを湛へて、我が前に立つた。そして一寸腰を曲げた其可愛らしさ、其の無邪氣さよ。彼はお辭儀をしたつもりである。この可愛らしさを感じる刹那の心持ちは、かの追懷の一連鎖として矛盾がない。たゞ／＼廣い、深い、暖い、そして切實なる流である。僕は再び暖かい懷に抱かれた。過ぎし日と現在とが結び附いた。千秋は此の瞬間も「花が咲いた」と笑みながら言うて

居る。そして、鹿に追はれながら「厭やあ」と叫んで逃ぐる文子の姿が見える。霞が本を買ふてとねだる心持ちが犇々と僕の身に迫つて来る。吹雪降りしきる京の朝、毛絲の頸巻きに首をすくめながら、相變らずにこゝせる霞の姿は靈化されて現はれて来る。あゝ彼女は彼時既に不治の病に犯かされて居つたのだ。我等は之を確かと悟つてあつた。我等に此の恨事あるも、彼女の今尙笑める穉やかな顔はこの恨事を解き消すのである。解き消されてこそ、「お父うさんもお母あさんも皆んな一所」になれるのではないか。あゝ此の一所！學者も、宗教家も分らぬ。分らぬが、矢張り一所に違ひない。現に僕は一所になつて居る。其處に美しい生命の水が通うて居る。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

一度び眠りて二度び我等の親心に復活し、我等に附き纏うて、我等の此の小さく汚れた心を淨化し、靈化し呉るゝ、我等の愛兒は、均しく青葉山の緑、廣瀬川の流を忘れなかつた。加茂の流、吉田山の姿はいつも彼等の幼なき心に五城樓下を追懷せしめた。「京都も善いが、仙臺は善かつた」とは彼等の常に口にする處であつた。霞と文とは京霞のうちに高く／＼登ぼり往きては又我等に還つて来るのであるが、千秋は高師の濱邊より白波を蹴つて遠く旅立ちしたのである。千秋は茅渚の海邊に來たりてよりは、下加茂の森を慕うて居つた。あゝ彼等は其出てし處を忘れない。京都にては仙臺、大阪にては京都を想うて止まない。斯くて彼等は今や我等を想うて居る。我等を迎へて居る。そして、我等も我等の出てし處を振り返つて見る。彼等と我等と、其故郷は何處ぞ。我等の振り返つて見る處は、我

寫せしアポロの像もある。春日社頭にて鹿に追はれし文子の姿もあり／＼と見える。雪降る朝も、風吹く夕も、變らてにこ／＼せし霞の笑顔に何とも言へぬ引力がある。あゝ是れは夢であらうか現つてあらうか。夢ならば、我れ等が嘗て涙だになき哀しき別れをなせし、我れ等のいとし子三人までの姿は、などて斯くまで鮮かであらう。現つならば、哀はれ／＼と打ち眺むるばかりで、聲も言葉もないは何故であらう。あゝ霞の唇が動く。千秋の手が畫布の上を走る。文子が人形さんを弄ぢつて居る。……隣りの室で、最早姉も兄も忘れたる光坊が、危なげに「どうじよ」というて母親の乳房に縋り附く氣合がする。此氣合ひも彼等三人の姿も、何づれを夢とし、何づれを現つと定むるよしもない。たゞ現前である、活きたる現前である。昔でもない、今でもない、たゞ此あり／＼せる光景である。此可愛い心持ちである。まあ千秋！よくこそ／＼、あの額の書にも優される肖像を……霞みちちゃん！お前はあの菖蒲田濱が好きだねえ。また名古屋へ往つたら、大須のあの勸工場で幅の廣いリボンを買はうよ。……階子段に優さしい足音がする。光坊が机の前に來て、廻らぬ舌で「御わん／＼」というて此筆をつつき、此袖を引張る。其紅葉のやうな手に引張られて飯臺の前に坐ることもしたい。三人の兄妹とも尙ほ沈黙の語らひがしたい。あゝ此心持ち！三人の兒等も光ちちゃんも、其うちに活きて、動いて、笑つて居る。松風がまた牙えて聞える、月影がさして來た。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

廣島の牡蠣なりとて玉出の叔父より送れるを總菜として夕飯を濟ました。二階に戻つて、またを

執る。月影が右の縁側に移つて居る。電燈がついた。此燈影と彼月影と、何處に隔てがあらう。たゞ光、たゞ此明かるみ！僕は今、此光を迫るのだ。此の光は夕飯前の光、彼の世の光と此の世の光と融合せる靈の光（まあ斯うても言はうか）。其光の影でもあらうか。シムボリズムとやらを薄すく思ひ浮べる。シムボライズするは何れの光り？シムボライズせらるゝは何れの光？光坊は象徴か、三人の兄弟は象徴か。それとも悉く皆象徴か。光坊が其可憐な手をもて予を誘ひ往ける以前より、今の此の瞬間までの活ける流れ一切が象徴か。斯く思ふ思ひそれ自からは、活ける流れである。けれども尙ほ其奥に何物かゞ隠現して居る。一切の主觀、最奥の主觀がある。人も、我も、光も、此處に融合して居る。三人の愛兒も、光ちゃんも、僕の此の現前の心持ちに活きて居る。僕の此の心持ちも、彼の世も此の世も、此の一切の奥の心持ちに動いて居るのであらう。

斯く思ひ續くるうちに、今より一ヶ月以前の朝に、我が思ひは飛んだ。あの朝は靜かな朝であつた。波の音もせず、月の光りもなく、縁側の小鳥もまだその眠りから醒めなかつた。僕は眠むるともなく、醒むるともなく、下座敷なる千秋の病める呼吸を數へて輾轉して居つた。二階を昇ぼり來る跫音ありと思ふまもなく、「今夜こそ千秋は駄目のやうです、あなた一寸……」と蒼卒だしく呼ぶ聲に誘はれて、彼の枕邊に辿りつくまでは、僕は覺えなかつた。而して其の枕頭に座せる瞬間に、僕は我しらず、變つて居るのに氣が附いた。

最早慾もなく、學問もなく、地位もなさ空虛の我——暗らい／＼空虛の我を見出した。僕には主觀なく、客觀なく、哲學も、宗教も、信仰も、讚美も何もない。たゞ其處にあり／＼と存するは、曇りな



擔いだ鐵道護衛兵の立つてゐるのを見るとやつぱりシベリアといふ感じがする。

汽車の中の食事は豫て聞いて居るが却々うまい。殊にパンとバターときてはとても日本では食べられない。午後ハルビンに着く。茲で朝鮮を経由してくる丁氏に逢ふ約束だつたので、ブラットホームに下りると工學士其他二人の同胞と共に待つてゐる。一行合せて九人となつたので愈々賑やかになつた。

ハルビンは却々大きな町だ。支那領でありながら全然ロシアの東方經營の策源地となつてゐる。目にとまる大きな建築といへば皆軍事上のものである。戰爭後益々兵備を擴張して、今ではこゝを中心に十箇軍團の兵を、置いてあるといふことである。二箇師團の問題で騒いでゐる様なことは實に危い、危い。

勿論吾人は増師論者ではないが斯様なことで鼎の輕重を問はれる様な心細い身上では、さて邦家の前途をどうすることだらう。之は國民一同どうしても禪をしめなほして考へなければならぬ問題である。積極主義にせよ、消極主義にせよ、さし當り勤儉力行、寧ろ國家隆興のためといふよりも國家の自衛のために足りるだけの資本をつくらねばなるまい——これはむづつかしい話になつたが何人もロシアのハルビン附近に於ける經營を見たならば斯様に考へるであらう。

ハルビンの町はづれに出ると松花江の流が見える。こゝに架けてある鐵橋は志士沖禎助氏が破壊を企てたものだといふ。心なき水は洋々として流れて行く。(未完)

## 磯邊の一夜

茅渚の浦人

僕は今茅渚の浦、高師の濱邊から大阪灣を隔て、遙かに六甲山の雄姿を望んで居る。そして何か考へに沈んで居る。あゝ最早山も見えぬ、波の音も遠くく退いて往つた。たゞ下た座敷に林檎のやうな頬を有てる光ちやんの、元氣よく愛くるしい聲が聞えるのみだ。斯くて外は靜寂を加ふるに随つて、内は耳もて聞き、眼もて見、手もて觸るゝことの出来ない形や、聲やて、賑やかになつて來た。西の空に搖曳する彼の雲にも似たらんやうな、そして其れにも増して千態萬狀なる景色が我が衷に一大バラマとなつて居る。然かり我が衷である。我が頭でもなく、我が胸でもない。我が深いく、我が廣いく、奥の奥、底の底である。斯く記し、斯く思ふ間に、去年の夏横濱なる弟の家より、靜養中なる千秋の徒然を慰めんとて携さへ來たれる文鳥の優さしき囀づりが、ちらと耳に止まる。松風の音も牙える。電車が轢しる。僕は今この瞬間何處に彷徨うて居るのか。僕の内に、僕の外にか。外に向ふのが僕か、内に向ふのが僕か。僕は今何をして居るのか。

靜かに濱邊を打ち眺むと思ふ僕は、はや千秋の笑める彼岸、此世ならぬ世界に住んで居る。而かも又此の世の形も見える、此世の聲も聞こえる。此の世も彼の世も我が衷には宛然ら一つ世である。此の瞬間の僕は此の世と彼の世とに融け入つて居る。僕は今大きい、そして暖かい懷に楽しい夢を見て居るやうな心持ちである。其夢のうちには我が千秋も居る。其愛好せし繪の具も見える。其好んで模

も、上陸して見ると甚だ汚い。傾斜地にあるから坂の多いのは已むを得ないが、往來の凸凹の激しいこと到底市街とは思はれぬ。克く東京の道路の惡口を聞くが、こゝへ來て見ると先づ安心する。雨でも降つたら足駄どころの騒ぎであるまい。

市場といふ所に行つて見た。東京の緣日に見る様な小屋を連らねて古着、古道具を並べてある。汚ひこと夥しいが、そこにうろついている人間とては、到底お話しにならぬ。ゴルキ一の「どん底」を思ひ出させる。其上何んともいはれぬ惡臭、自分はY氏等の案内がなかつたなら驅け出したであらう。

市場を通りぬけると往來の傍に大砲がある案山子砲臺ではあらうが物騒な所だ。こゝからロシヤ島の西の入江が見える。汚い荷物船の間で子供が泳いでる。大人でも子供でも着物を着る時決して拭かぬさうである。

町の中央にクレストアルベルスといふドイツ人のデパートメント・ストアがある。三越よりは稍大なり。

何とかいふ公園に行つてみると、こゝは軍港を一目に瞰下して日露戦役に纔かに逃れた軍艦一艘淋しげに碇泊してゐる。曾て某陸軍將校がこゝに佇立して居つた處が憲兵に拘引されたといふことである。實に物騒極まる所長居は無用とこゝを去つて、一茶亭に休息した。ロシヤ名物の紅茶を啜りながら、往來を眺めてゐると、種々な服裝をした人間が通る。中にも目立つて殊に多いのは軍人、丈は高く、衣服は立派だし、長い劍を引きずりながら歩く姿は一見いかにも強さうだが、中には妖嬈たる美人と腕を組んで行くのもある。美人と相乗りでドロシユケを驅るのもある。之は一寸日本では見られぬ

風體之ては戦争に負ける筈だ。

日も傾いたのでドロシユケを走らせて出張所に歸る。こゝの馬車はロシヤの小説の挿繪でなじみの形をしてゐて大分變つてゐる。腰のあたりをふくらました御者の格好のおかしさ、けれども馬は立派だ。急坂をどし／＼駆け上る。唯道が悪いので度々膽を冷やさせる。

出張所で牛鍋をつゝきながら快談縦横思はず時を移してしまつた。汽車の出るのに間もないので再び馬車を走らせて停車場に戻る。

### 三 浦鹽斯德よりハルビンへ

萬國寢臺會社の列車はさすがに立派だ。日本の汽車に比べると廊下だけ廣い。室の中は疊四疊も敷かれようか、M少佐と、A大尉と、三人、可なり荷物もあつたが皆棚の上にかたづいてしまふ。一寸日本の汽車も廣軌になつたらばと思ふた。さて愈々シベリアの曠野を旅するのと思ふと、心細くもあれば物珍らしくもある。かねて聞いてゐた鐘が三つ鳴ると汽車は動き出した。丁度午後の七時、折から山の端に上る月、なつかしい故國をも照らしてゐるのであらう。

汽車は市街の裏山の間を通つて北へ／＼とゆく、こゝには恐ろしい背面の工事が施されてあるさうな。無數の電燈が輝いてるけれど何も見えぬ。

あくれば十八日。汽車は燃ゆる様な紅葉の森の中を走つてゐる。其中にまじる白樺の眞白な幹の美しさ。中禪寺のあたりを思ひ出させて、思ひも設けなかつたいゝ景色である。けれど折々路傍に銃剣を



いつでも自分の様な二等客も混つてゐる（義勇艦隊では二等客を一等客同様に取扱ふ）。貨物といつて野菜菓物の類に過ぎぬ、之では到底引合ふ筈がない。さすがに大國の度量は違ふ。

船の動搖が段々と激しくなつて來たが、やうやく夕食もすんだのでキャビンに引込んで、ベッドにもぐり込んでしまふた。何ともいへぬ寂しい感じがして、さらぬだに眠られぬものを、忌々しや船を打つ波の音、汽罐の音までが頭の中をかきまはす。

あくれば十六日。キャビンの圓窓からのぞいて見ると、船は日本海の真中を走つてゐるとみえて、唯渺茫たる大海原、島の影だに見えぬ。大分船の動きも靜かになつたので甲板に出て見る。藤椅子に腰かけて日本海々戰の跡はこゝらであらうかななどと考へてゐると、いつの間にか此四五日來かき亂された頭の中まですつきりとして來た。天空快濶の一語は此際の感じを盡くしてゐる。

やがてN學士も上つて來る、話をしてみると矢張り不思議に種々な關係をもつてつながれてゐる。飯を食ふ外に用事もないので此日も甲板を散歩したり雑談をして暮れてしまつた。

九月十七日。けふは午前十時に浦鹽斯德へ着くといふので初めて外國の土地を踏むのかと思ふと何んとなく心落付かず早くから眼がさめる。甲板に上つて見る。島か、大陸か、ところ／＼青い赤土の山が見える。漸々近くなると丘陵波の如くに起伏する大陸の一端、浦鹽斯德の北に當る處だといふ。

やがてロシヤ島（浦鹽斯德の港口）が見える。あすこ、こゝに砲臺や兵舎が散任してる。成程要害

堅固な軍港、戦争時分の事が思ひやられる。船は漸々進行を緩くしてロシヤ島の一角を廻ると、丘陵の斜面に立ち並んだ市街が見える。赤や青や様々な色が彩られて一寸日本には見られぬ景色だ。

水雷艇やら工作船やら、何か頻りに工事をしてる間を莖帆を擧げて、悠々と走りゆくジャンク、面白い對照だ。

暫らくして船は姉妹船の舷側に止る。豫て三井物産會社の出張所に照會されてあつたのでY氏が出迎へに來て居られた。また旅に慣れぬ身には地獄に佛といふ感じがする。恐ろしい顔をした六尺豊かの男がギョロ／＼睨めつけながら甲板に並べられた荷物の検査を初める。種々ひどい目に逢つた話を聞いてゐるので何んとなくこはい。何んでもカバンを開いてさあ御覽なさいといふ様にしておく方がいいと聞いてゐたので其通りにしておくと、やがて自分の順に廻つて來た。荷物運搬夫がカバンの中をかき廻す上から眺めてゐて次へ／＼とゆく。運搬夫が取り出す一つ二つの品には目もくれず濟んでしまつた。跡は運搬夫が元の通りにかたづけしてくれる。こんなことなら彼も之も持つて來れば宜かつたと思ふ。

荷物は案内用達を仕事にしてる某日本人に託して（此人は税關の検査の時など通譯をしてくれるので、甚だ便利だが特權を利用して大分貪る）M少佐、A大尉とY氏に連れられて物産會社出張所に赴いた。

## 二 浦鹽斯德見物

出張所で午飯の御馳走になつてから、市街の見物に出かけた。船から見た市街は却々立派だけれど

この點に於ては、彼は最も宗教的感情を懷いて居たのだ。乍併、彼は斯くの如き人生に對する熱愛の情をよく具體化することの出來ぬ人間であつた。胸には、かう一杯、宗教的な人生を思ふ心が充ちて居ても、能く之を實際に表白すべき力を缺如して居たのである。彼は最後までラヴィンガ基督の愛人であつたらしい。死期に近く、彼がその基督に對する愛着の情を或る人に打明けたと云ふ話は、私には言ひ難い床しさを起させる。彼のある友人は、彼の基督に對する心を評して、彼は唯だそれに依つて抽象的な戀愛の情を満足せしめて居たに過ぎぬと云つた。左様評するのも強ち誤りとは云へまいが、併、彼が最後まで基督の愛人であつたのは彼が彼自身の中に缺如して居た力を基督の中に見出して之に憧憬れたのではなかつたか。私は左様思ふ。

### 甲寅年始賦短古一篇述所感

松尾敬天

自勞自活強於兵。此心常誓神明行。吾唯深敬天然理。成生不息萬物乎。朝勞筋骨未感重。夕喫粗飯體更輕。身無人爵燦爛輝。家有團欒共樂聲。學友訪來開胸襟。達觀宇內談且評。如斯幸福向誰謝。高天無聲眼分明。

# 歐洲見聞記

廬 山 生

## 一 敦賀より浦鹽斯德へ

金ヶ崎の一角に、二つ三つ星が光り初めたかと思ふと、九月十五日の日は暮れてしまつた。やがて鐘が鳴る、見送りの人は退船せよといふ報知であらう。いつまでも盡さぬ名残をとめて舷梯を下りて行く老母の後ろ影!! 自分は初めて別離の悲みといふものを深くく味ふた。七時氣笛の聲衰れに船はゆるぎ出た。夕闇に消えてゆくランチの中、白いのはハンケチでも振つてゐるのであらう。それもやがて見えなくなつて淡い敦賀の町の燈火が走馬燈のやう。茫然として暫らく欄に寄りながら眞黒な山の姿を眺めてゐると、鈴を鳴らして食堂の用意が出来たと知らせて來た。

船はロシヤ義勇艦隊のペンザといふので、三千噸ばかりの船だが、却々綺麗である。食卓に集つたものすべて九人、しとやかなイギリス人夫婦、イギリスの商人、狸の様な顔をしたドイツの男、日本人ではM工兵少佐、A砲兵大尉、N工學士、他に朝鮮人の様な人と自分、少し船が揺れだしたのでN學士、M少佐はキャビンに引込んでしまふ。A大尉と話をしてみるとお互に友人の友人といふ様な不思議な縁故を持つてゐることが解つた。ドイツ人は南洋あたりで大分金もうけをして來た男と見えて、獨り傍若無人に饒舌を振つてゐる。一等客は之だけの他に三等客も餘り澤山もない。おまけに一等と



ると思はれる。

死に行く前夜を共に明した彼の友人は、吾等級友の追悼會に臨んで、「彼は決して早く死んだのではない。悟つて悟り切るまで生きて居たのである」と云つた。けれども私は左様は思はない。寧ろ今まで悟つて居たと思つて居た事も動搖し初めたのであつたらう。否、それ以上の新しい、一層大なる迷ひを迷ひ初めたのであつたと思ふ。彼は今迄、非常に苦んで來たには違ひない。普通人の思ひ及ばぬ内的煩悶を味つて來たには相違ない。けれども恐らく彼は、未だ嘗つて吾等普通人の味ふ様な言譯の出來ない、恥しい苦しい氣持を味つたことは無かつたらう。だけれども今や彼れは、その氣持を見出し初めたのではなかつたか。彼れは遺書に認めて「俗界に韜晦して云々」と云つたけれども、その俗界が自己の外にあるのではなく、自己の内にあることを、若しくは自己の内に現れ來らむとすることを敏感なる彼は早く切に知覺し初めたのではなかつたか。そして、これに對しては、最早彼は死を以て自己を理想化するの他に、自己を理想化するの途はなかつたらう、彼が自己理想化は、その最高潮に達して、同時に、彼が實際生活は絶望の極度に登つたのである。或人が評して斯う云つた。例へば、彼は今迄、馬に跨つて進んで來たやうな者である。然るに最早馬では通れない隘路に差しかけたのである。若し、彼が飽く迄、其處を通らうと欲ふならば、馬から降りて徒歩すべきであつた。徒歩しても尙ほ進み難くば匍匐しても行くべきであつたと。けれども、彼は彼が從來乗つて來た愛馬を捨てることが出來なかつた。却つて、彼は乗つた儘、拍車を蹴つて突進した。そして、馬もろともに隘路の入口に於て粉碎し終つたのである。彼は彼が生に依つて得むと欲したものを死に依つて決し

て得たのではない。乍併、そは彼の美はしきロマンチズムの敗亡を語る最大の記念である。

私は、彼が訃報に接した夕、つく／＼と淋しい心地に打たれた。かう凝然と暮れて行く室の中に坐つて居ると、何時しか涙が浮んで来る。あゝ彼がその危機を通り越すのは最う暫くであつたらうに！彼は愈々死なねばならぬ所まで來たのであるから、だから、私は彼に生きて居て貰ひたかつた。私は彼に彼が更に生きて「我を見よ」と言つて貰ひたかつた。「自分でさへ生きて居るではないか」と私に言つて貰ひたかつた。

誰が見ても彼は淋しい人であつた。父母兄弟は元より居らず、友人も稀有だ。生きたる戀も無かつたけれども彼はこれ迄、眞の淋しさを味はつた事はなかつたかも知れない。遺書を認める時までには左様であつたと思はれる。けれども、それから死の瞬間までには、時があつた。その間には、と思ふと、思はず私は身の震ひわな／＼を禁じ得ぬ。併し若し彼が尙ほ生きて居たならば、彼は彼が今迄、味つた有らゆる淋しさよりも、更に深い淋しさを味つたであらう。身に地につきたる生活の皆無なるを悟る。世に最も淋しき者の淋しさを。乍併、斯くして尙ほ生くる事は彼のアリストクラチックな性質の如何しても許さなかつたことであらう。實に彼も亦、人生を人一倍愛したいと欲する人間であつた。如何なる低い卑い生活をも熱愛したいと願つて居たらう。彼がクロボトキンの相互扶助論を愛讀しなかつたのも、明にこの事を語るものではないか。彼は常にデヴオートとして生きたかつたのである。

會に恨みあつての事ではない。加之、人の思想は何時までも一所に停滯して居るものではなくて、常に變化しつゝあるものではないか。然るに當局者が斯る個人の心的事情をば毫も辨ぜず、唯だ彼が嘗て社會主義者であつたと云ふ事の爲めに、執念<sup>しよね</sup>を壓迫を加へたとは、何たる愚かな事であらう。彼の死に就いては、勿論間接ではあるが、彼等にも責任がないとは云はれぬ。乍併これは傍<sup>はた</sup>から見ても云ふ所の事であつて、彼自らは決して其様な事の爲に死んだのではない。また、彼が老莊を愛讀して、その卷を離さなかつたと云ふ事も事實であるが、乍併これは、その感化に依つて彼が死を企てたと云ふよりも、これを愛讀する彼が如何に、哲人的風格を具へて居たかを語るものである。然らば彼は何故に死んだのであるか。この疑問は精神的にも社會的にも、今や、一個の重大なる問題を提出するものではあるまいか。

彼は吾等の級友<sup>クラスメイト</sup>中、最も純なる理想家<sup>アイデアリスト</sup>であつた。恐らく唯一の理想家であつたかも知れない。

そして、儼乎たる禁欲主義者の生活を保つて居た。彼は父の熱血を承け繼いで、火の如き情熱を有つて居た。同時に冷水の如き透徹なる頭腦を有した。また、彼の中に母の血によりて混れる江戸文明の頹廢したる影を見たと云ふ級友もある。幼くして父を失ひ、母に離れ、信濃の山中に彼は育つた。眼の飽くまで訝々した秀麗な少年であつた。夙く基督教の感化を受け、社會主義思想の影響を被り、中學時代既に、周圍の激しい壓迫に遇うたが、飽くまで自己の信念を維持した。早稻田の文科に來て、最初、彼の思想は甚だしく動搖したと云はれる。併し依然として彼は彼であつた。彼はその精神に於て、何處までも貴族的<sup>アリストクラチック</sup>である。大學に來てからの彼は熱心なるクロボトキンの崇拜者であつた。種々思

想上の變化はあつたに相違ないが、死後に遺した日記帖の包に *Remains of a revolutionalist* と記して居たのが、かのクロボトキンの自叙傳 *Memoirs of a revolutionalist* の表題に因むだ者である事、紛がふ方なきに見るも、彼が最後までクロボトキンを愛した事は明である。彼は優秀の成績を以て、大學の課程を終へた。然る時漸くにして彼が危機は迫り來つたのである。その後は級友の誰も彼を知らなかつた。

今や彼は今までよりも一層自己をリヤライズしなければならぬ時機に到達した。彼は確に撰ばれた人間であつた。天才であつた。私は彼れの性格を思ふとニイチエのそれを聯想する。彼は他の模すべからざる賜物を持つて居つた。自己の理想に終始し得る人間であつた。級友の多くが彼の死を聞いて餘り不思議がらなかつたのも、その爲めである。乍併、彼も亦一面に於ては、吾等と同じ普通の人間であつた。矢張り何時かは、總ての官能の開放せらるべき運命を持つて居た。今や彼はこの事をリヤライズしなければならぬ時機に到達した。彼は從來寡言であつたが、その寡言は彼が自己のみを語るむがための寡言である。自己を語ることに於ては、寧ろ彼は饒舌であつたと云はれ得るかも知れない。斯の如き意味に於て、彼は今迄よりも一層自己を語ることを尊ばなければならぬ時機に到達した。彼の爲人と彼の從來懷いて居た思想との間には、大なるギャップがあつた。これは彼自身も既に自覺しつゝあつた事に相違ない。彼の思想は漸次變化しつゝあつた。社會の問題より自己の問題に、物質の問題より靈の問題に彼の思想は變つて居た。そして今や、一轉化すべき時機に際會したのであ



# 六合雜誌愛讀者諸君に申上るす

どうすれば東京市内で賣つて居る様な安いねだんで書籍雑誌が安くかへるか愛讀者諸君是非共左記の事柄を御一讀願ひます

- 一、東京市内で出版する書籍や雑誌は何んでも定價の一割引を致します（但し、醫書と、小學校用の教科書、法律書、舶來の書は元價が非常に高う御座います故定價通りに願ひます）
- 一、中學校用、小學校用他の教科書、特價、豫約發賣の書籍は其のねだんより五分の割引を致します
- 一、送料は實費だけを申受けます
- 一、御註文は總て前金で願ひます
- 一、御住所、御姓名はわかる様に御書き下さい
- 一、本誌の毎月の廣告の書籍、雑誌は申す迄もなく販賣致します
- 一、御自分でどの本がよいか、どの雑誌がよいか、よるのに御こまりの方は往復葉書で御申込み下さいますならば十分に調べて御返事致します
- 一、御註文の品物は親切を第一とし、包み方の丁寧及び速かに發送する事等はどこの書店にもまけないつもりです是非共一度御試めしに御註文を願ひます

東京市神田區表  
 所賣販大誌雜籍書  
 店書堂枝文



## 自殺せし級友

福田秀太郎

過る十一月五日の未明、上野發の貨物列車が戸山の原の踏切を過ぎつた時分、機關車の前に躍り入つた青年があつた、體を三個に轢きちぎられて、眼もあてられぬ程無慘な最期を遂げた。この青年が吾等の級友クラスメイトの一人山本一藏であると云ふ事の傳へられた日、私は鋭いショックを覺えた。鋭いショックを覺えた者は、大方數多くあつたであらう。彼は、決して、レ・ジー・ベシミストではなかつた。最も勤勉で、最も眞摯な人間であつた。彼の死が、私や私の知る一二の友の不徹底な、輕薄な生活を彈劾する所以である。然らば彼は何故に自殺したか。刑事の付け廻す爲に就職の不可能に陥つたからであると云ふ者があり、或は、老莊哲學の感化であると噂する者もあつた。何れも皮相の觀察である。尤も、彼が社會主義者であつたと云ふ事で刑事に付け廻されて居たのは事實である。爲めに就職の不可能に陥つたと云ふ事も同じくであらう。その事が間接に彼の死を手傳うたと云ふ事はあり得る。若し、斯の如き事に依つて妨げられず、聊かでも彼が望に叶ふが如き業務に就き得たならば、彼は或は死ぬにも死なれなくなり、そして、その間に彼も生の光を掴むべき餘地を與へられたかも知れない。彼が所謂危險思想を懷いたと云ふも、それは彼が眞摯なる内生活の發展のためである。何も彼が國家、社

# 東亞之光

第一 每月 一發 一回 第二 號 部金十二錢郵稅一錢五厘 拾貳冊金二圓十五錢郵共

モルモン教の起源、教義及現狀に就て エイチ、ジ、アイビング

神道の主なる神祇に就て

日本人の退化

釋尊と華嚴

噴火三句

綜合大學と單科大學

新道德論

獨逸婦人問題の特徵

自然主義より浪漫主義へ

田園文學と文藝復興期

ケルレル及其作品

現代文藝私疑

檣城及檣花の考證坪井久馬三。 檣花考伊藤篤太郎。

## 評論

京大の紛擾に就て。 排日問題と國際道德

古田博士著國民道德の教養を讀む

コーサンド氏著東西思潮の統一を評す

東北振興の

根本策

海外思潮。 漢詩。 選歌。 選句。 文藝。 宗教。 哲界學彙報

【中附四】

發行所

東京 市本 區五 駒

東亞協會

振一 替口 座七 東七 京番

# ▼統一基督教會々員著書案内▼

著者	書名	冊數	定價	郵稅	出刊元	上記の書籍は我が 統一基督教會員の 著すところのもの なれば本社は地方 讀者の爲に、特に 取次の勞を執るべ し、郵稅は本社に 於て負擔すべけれ ば定價のみを送ら るべし
三並良	福音書 (陀譯)	一	三、五〇〇	八〇	統一基督教會 梁江堂	
安部磯雄	現代戰爭論 (譯)	一	八五〇	二二〇	北博館	
内ヶ崎作三郎	英國より祖國へ 人生と文藝學 近代人の信仰 ロイド・デ・ヨール	一	一、〇〇〇 二、五〇〇 二、〇〇〇 三、〇〇〇	一二〇 一八〇 二二〇 二二〇	北博館 警醒社 同文英閣 前川	
神田佐一郎	登高自卑	一	五〇〇	八〇	統一基督教會	
向軍治	ハッ當り集	一	三〇〇	四〇	警醒社	
岸本能武太	英語發音の原理	一	七五〇	八〇	北文館	
今岡信一郎	新神學 (譯)	一	一、〇〇〇	八〇	同	
小山東助	光を慕ひて	一	三〇〇	四〇	警醒社	
永井柳太郎	社會問題と殖民問題	一	一、五〇〇	一六〇	新興社	
合著	進歩的宗教		三五〇	六〇	統一基督教會	
坂本政雄	二十世紀の男女	一	三〇〇	四〇	警醒社	
淺田泰順	新リヒテル 譯律氏和聲學	一	一、七〇〇	一〇〇	淺田泰順	

申込所

東京市芝區  
三田四國町

六合雜誌社

振替東京  
一〇〇〇三



文學博士 村上專精先生自叙傳

六十二年一名赤裸々

三六版美本  
定價九十錢  
郵稅八錢

▲惡戰苦闘の立志傳、明治佛教の側面史▼

これ村上博士が過去六十一年間惡戰苦闘の活歴史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て龜鑑とすべき絶好の立志傳たり殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり

▲村上專精博士著數作種▼

▲通俗修養論

定價一圓八錢  
郵稅八錢

▲增補自信錄

定價六十錢  
郵稅八錢

▲女性訓

定價四十錢  
郵稅六錢

▲誠のしるべ

定價四十錢  
郵稅八錢

▲科註大乘起信論

定價十六錢  
郵稅二錢

▲科註原人論

定價十二錢  
郵稅二錢

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副  
長ハ目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)  
(本 八九八(私宅用))

## 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

## 院長

醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ二一番

## 南湖院

河野、高橋、兩副長ハ目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後  
入院、診後應需

おだやかに動悸うつ海の夢、  
 にほひこぼるるみどりの靄につつまれて、  
 いつもかはらぬ若き日のよろこびに生き生きと、  
 おだやかに動悸うつ海の夢。

\*\*\*

\*\*\*

夢見る海のいと深き紺青のふかみをさして、  
 およぎいるうろくづよわが空想よふかく行けかし、  
 そこには目にて見られぬ人の世の密かなる愛の歎と、  
 失なへる愛の痛みと末つひに得られぬ愛の絶望と、  
 味なき鹽の踏まるるよりも道に踏まるる恥辱はなきや、  
 夢見る海よほほむむ海よいと樂しき豫言を我にうたへ、  
 その動悸うつ胸の上にて倦むことなき戀のうれしきよろこびと、  
 刹那に永遠を味はひ得る満足ときちがひとを我に歌へかし、  
 おゝ汝のおもてに光あり陰あり記憶しがたき色彩あり、  
 わがうれしきうろくづよわが空想よおゝ更に深くゆけかし。

# 春に先だちて

ニシ  
イド  
ギ  
ユ  
リ  
ツ  
ク  
先  
生  
著

## 科 學 概 論

▲菊判クロース製 定價二圓 郵税十二錢

■苟くも思想界に立つ人々に取つて、本書は必要缺くべからず。かゝる書籍は東洋にも西洋にも恐らくは絶無なるべく、蓋し世界唯一の珍書といふべし。

富 永 德 磨 先 生 著

## 基督教の根本問題

▲菊判五百五十頁 定價一圓五十錢 郵税十二錢

■新らしく基督教を究めんとする人々は、本書に依て知識と生命とを得べく、舊き信仰に疲れたる人々には、之に由て新生面を拓き、新經驗を感じ、不斷の向上をなさむ。

スタンレ・ホール博士著 文學士 和田琳熊先生譯

## 青年期の心理及教育

▲四六判五百頁 定價一圓 郵税十二錢

■今や我國が此書の翻譯に依て教育上少からざる暗示を與へらるゝこと疑もなく、譯文は平易流暢而して精嚴。

東京 發兌

東京

京橋

尾張

町

警

醒

社

書

店

振替

東京 五番



東西古今の詩人の戀歌はすべて、

隨處より來りて、

爾の足の下に跪く唯一つの愛となりて集りぬ。

## 樂園

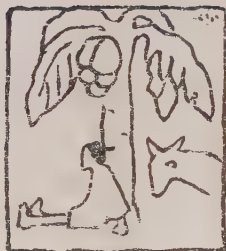
此方に、戀人よ此方に來れ。わがこの快樂の花園に歩み出て、わが花の美はしく咲き匂ふを見よ。西風は花の薰りを帶びて靜かに吹く。此處には月光きらめき、銀流は森の路を呼び走る。

此方に、戀人よ、此方に來れ。我等は不死の花の美を眺めつゝ心の深さを開かん。恍惚たる幻想を恣にして互に花環を織り、東雲の中に消え行く迄、星の光を見守らん。

戀人よ、我等のこの喜ばしき園にて我等は永しへに住みて、樂しげに歌を歌はん、此處にて我等の心は生の神秘のうちに鼓動せん。然り、幾日か幾夜かは愛の君の幻影のごとく過ぎて、我等は果してなき歡樂の夢に酔はん。

〔譯者註、「樂園」「無限の愛」は作者の青春時代に屬す、「祈」「永遠の家郷」「わが心」等は後年に屬す。青春期の

詩人は戀愛を生命とし今は神の愛を生命とす。この變遷を示さんがために兩極端の思想をあはせて録したり。〕



# 海の夢

佐藤清

光<sup>ひかり</sup>はほつかりと白<sup>しろ</sup>くくもれる海<sup>うみ</sup>にさし、  
 いま醒<sup>さ</sup>めし目<sup>め</sup>に淡<sup>あは</sup>夢<sup>ゆめ</sup>のこころよさ、  
 うすもやのかげより浮<sup>うか</sup>ぶ白<sup>しろ</sup>帆<sup>は</sup>とともに、  
 このゆふぐれの音<sup>おと</sup>もなく……

\*\*\*

\*\*\*

しづかにのぞくをんなのかほのにほひにも、  
 目をばひらかぬ海<sup>うみ</sup>のすふオゾンのいきに、  
 ガスの火<sup>ひ</sup>のたどくしくも咽<sup>むせ</sup>びつつ、  
 夢<sup>ゆめ</sup>のあかりを目<sup>め</sup>のうへに……

「大君よ、我は爾を引きつくるには餘りに小し、  
さればこそ我が生命はすべて涙なれ。」

「我は限りなき空を照らす、

さはれ我は小さき露の一滴に身を任かすを得べし。  
かく太陽は言ひて微笑みぬ。」

「我一點の閃光となりて爾を充たさば、  
爾の小さき生命は美はしき球とならん。」

## 無限の愛

我は百千の形と時となりて常に爾を愛したり。

生は生に續きて幾時代。

我が甘き心の織り成せる歌の鏈を

爾はしとやかに頸の邊にかけたり、

生は生に續きて幾時代。

我過ぎし昔の物語に耳うち傾くる時、

ありし代のかすかに遠き愛の痛みに、

古き人々の邂逅と別離とに——

我は爾の姿が暗く灰かなる永遠を通して、

光を集め來りて、萬有の記憶の中に

常に動かぬ星の如く現はるゝを見る。

我等二人は愛の雙子流に沿うて浮び來りぬ、

その源は永劫者の内奥の心に湧けり。

我等二人は幾万の戀人の生涯の中に戯れぬ、

涙多き悲哀の寂寥のうちにて、

甘き結合のわなゝぐ内氣のうちにて、

常に自らを新しくする古き、古き愛のうちにて、

久遠の愛のうねりゆく大水は

遂にその完全なる終極の道を見出しぬ

心の喜び、悲しみ、あこがれ凡て、

幻想の瞬時の記憶はすべて、





## 榕樹の陰

Rabindranath Tagore  
うちがさき 譯

(ラビンドラナース・タゴール氏は印度ベンゴール州カルカッタの大詩人、さきつ頃ノベール文藝賞金を領したる名譽ある人なり試みに二三の小品を譯出す)

### 祈

こは爾に對するわが祈なり、わが神よ——わが貧しき心の根を打ち給へ。

わが喜びと悲しみとを氣輕に荷ふ力を我に與へ給へ。わが愛を果實<sup>みのり</sup>多き奉仕たらしむる力を我に與へ給へ。

決して貧者を棄てず、傲慢なる強者の前に膝を屈せざる力を我に與へ給へ。

日常の瑣事の上に高くわが心を擧ぐる力を我に與へ給へ、

而して愛を以て御心に我が力を任せまつる力を我に與へ給へ。

### 永遠の家郷

爾に一揖して、我が神、我があらゆる官能を緊張し、此世を爾の御足に觸るゝことを得しめ給

へ、貯へられたる時雨を孕みて、低く垂るゝ七月の雨雲のごとく、爾に一揖して、凡て我が心を爾の戸によりかゝらしめ給へ。

すべてわが歌をして異れる調べを合して單一なる流となし、爾に一揖して、静默の海に注ぎ入らしめ給へ。

夜となく、晝となく、山の古巢に飛び歸る懷郷の鶴のごとく、爾に一揖して、我が生命をあげてその永遠の家郷に向ひて舟出せしめ給へ。

## わが心

この地球に住む幾億の人は我が心に入り、互に交りて言ふべからざる歡喜を有す。

其處に戀人等が入りて互に見交し、兒童は立ちて嬉しげに笑ふ。

わが心は勝れたる歡喜に浪々と溢る。而してこの世には一人の靈だにあるなし。

そは空なり。我之を知る。凡てが我が心に入りしなるを、如何てか斯くあらざるべき。

## 小

「オゝ太陽よ。爾の姿を支ゆるものはたゞ空に非ずして何ぞや。

我爾を夢むれども、我は爾に仕ふるを望む能はず」

露の雫は泣いて且つ語りぬ。

But look ! Even the brain is put in the dark prison of skull.

Wisdom, Love, Genius, all act in this prison house.

Only apparent conquest of Light is the artificial illumination  
of night.

There you see the Kingdom of God appearing.

But when earth has spent all its forces, what then ?

That is the final victory of Lucifer.

God has to begin his rebellion elsewhere.

---

In the vast Kingdom of Darkness,

Stars are but faint lights.

We say, "Twinkle, twinkle, little, stars !"

In the Universe, there must be space where even star-lights  
can never reach.

There Darkness reigns supreme, cold and dead.

---

Married people said to bachelors :

"You are only half yet."

The latter replied :

"How can only one woman make you a perfect whole ?"

## DARKNESS.

Darkness is original : Light is accidental.

You say Darkness is only the negation of Light.

But why not Light the negation of Darkness ?

Before God said, “ Let there be Light,”

Darkness was upon the face of the Deep.

If Lucifer is the Prince of Darkness, his kingdom existed  
before that of God.

Then God is a rebel in the Kingdom of Lucifer.

God in his rage created Suns.

But they were red hot and unfit for living.

So he made planets, but he had to give over half of their time  
to Darkness.

Man was made to live on earth.

But his life is not everlasting ; it is followed by death.

Even while he is living, he has to sleep.

Thus we all serve two Princes.

There must be some compromises between these two Princes.

Is not our brain the highest creation in the Kingdom of Light ?



Big scholarly names among merchandises.

That terrifies me to become an author.

---

The impotence of a man at a post of importance is miserable.

Nay, it is a crime.

Sometimes such a man is put on such a post, simply because  
he is harmless.

He is harmless at the cost of ability.

---

A sheet of white paper ready for any writing,—from a childish  
scribbling to a piece of poem.

Which is most agreeable for the paper?

---

A piece of waste paper thrown into the basket.

Who knows its stuff will never return on my desk as a white  
paper again?

---

If possible we want to know, but we can't. So we believe.

Vital questions remain unsolved, since the faiths.

Faith is not a joy; it is a sorrow.

Is there any thing so sad as faith is?

Tetsuzō Okada.

I bethought myself. I was neither half before marriage nor whole after it.

To me marriage was a scientific experiment.

Becoming a parent was another experiment.

---

Old friends are meeting together.

There is a mute communion among them.

"I shall be at your funeral," thinks one.

"No, I shall be at your's," feels the other.

Every one thinks or hopes to outlive others.

But who knows ?

There is such a cruel competition going on even among the intimate friends.

---

I look at portraits and busts.

Heads alone seem to count for men, and all the rest insignificant.

Thus many great men are beheaded and arranged for show by painters and sculptors.

---

I see advertisements.

## アブラハム

人間は絶對といふことは考へられるものではない。自分が<sup>こしら</sup>拵えた規則通りに人間が歩いて行かれるものではない。生命は一筋縄ではいかない。

## 富める人

實に亂暴なことを仰<sup>おつしや</sup>有る。法律も道德もあなたの前には何の價值もないやうに思はれる。あなたは神といふものに迷うてゐる。私はその迷うてゐる政治家の犠牲になつてこんな酷<sup>ひど</sup>い地獄に落されてゐる。感情だけで動いてゐる盲目者は實に危険だ。殊にそれが或權力を握つてゐる時ほど危険なことはない。

## アブラハム

私は自分以外に對しては何の權力をもたない。よし持つてゐたにしてもそれを決して振はうとはしない。お前さんが道德や法律などを辯護する所が私には一寸俯に落ちかねる。……

私はただ生命の進むまゝに任せてゐるのだ。私は生命といふ鋤をもつて無限の時間と空間とを切り開いて行く農夫なのだ。私はただはゐない。私は何時<sup>いつ</sup>も働いてゐるのだ。私の切り開いた處にはどういふ花が咲き、どういふ果實<sup>み</sup>が實るか<sup>み</sup>はわからない。又そこに生長する樹木が昔からその邊に生えてゐる樹木に對して害を與へるか、或は死を與へるか、そんなことはわからない。私は善といふことも惡といふことも考へない。美といふことも眞といふことも考へない。ただ潑刺たる生命の進むがまゝに進むがまゝに進んでゐるだけだ。

## 富める人

實に私にはあなたの爲され方がわからない。私は豚のやうに満足してゐるよりも目を醒して苦痛をうけてゐる方がいゝ。私は天國へ行くことなどはもう望まない。私はいつまでもこゝにゐる。

## アブラハム

お前さんがそこにじつとしてゐると、よくお前さんのことがわかるやうになるだらう。

## 富める人

私は現在の私を齎したそのかげにある見えない力、私の理性では未だ解らないその神秘な力、その力といふものを知りたいのだ。そして何うしてあなたといふものが此冥土の支配者となつてゐるかを知りたいのだ。——どうもこゝはあの世で考へて來たとはまるで別世界だ。私は善に對しては善、惡に對しては惡、富に對しては富、貧に對しては貧といふことを豫期して來た。ところが此處はまるで矛盾撞着だらけだ。

## アブラハム

生命は計畫通りに出來上る固定した材木のやうなものではない。之が生命の真相なのだ。まだ生命といふものを端的に見馴れてゐないから、始めて度の強い眼鏡を掛けた時のやうに燒點に合はないので變に感ずるのだ。今によく解るだらう

## 富める人

私は未來に行つたらすべての現象の意味が明瞭になるといふことを教へられて來た。ところがいよゝゝ來て見ると、あの世の事よりもわからない。死はすべての見えないものを見えなくしてゐる面帷をとるのであると信じて來た。ところがまるで反對だ。死は生よりも厚い面帷を私にかぶせてくれたのだ。生といふ度の合はない眼鏡よりも、もつと度の合はない眼鏡を掛けてくれたのだ。私にはもう何もわからない。何も見えない。ただ殘酷な權力者の壓迫を感じただけだ。

## アブラハム

さうだ、あの世にゐた時に解らない事が、此世に來て急に解るものではないのだ。ただ俄かに場所を換へられると、自分といふものが少しでも意識的に考へられるかも知れんといふ老婆心でこんな手段を採つてゐるだけなのだ。——永くそこにゐると、まただんゝすべてのものが解らなくなるかも知れない。……………



アブラハム　お前さんは私と一緒にゐたつて満足の出来る人ではないのだ。私共の今ゐるところは

お前さんがさきにゐた處よりもいゝ處ではないのだ。

富める人　しかし此處こゝよりはいいでせう。

ハブラハム　いやお前さんの今ゐる處よりもいゝ處ではないのだ。

富める人　そんなら何故なぜあなた方は嬉うれしさうな様子をしてゐるのですか。

アブラハム　そんなら何故なぜお前さんはそんな面白おもしろくない様子をしてゐるのか。

富める人　私にはわかりません。

アブラハム　私にもわからない。

富める人　私はそんな感情の問題を論じてゐるではありません。私は今理性の満足を得なければなりません。感情の満足なんてことは私の欲する所ではないのです。全體なづ何故富貴なものが地獄にはいなければならないのですか。

アブラハム　地獄極樂といふことは頭腦あたまの中には入らない問題だ。

富める人　全く Arbitrary will だ。實に無茶苦茶だ。私は未來といふものはこんな無茶苦茶なものとは思はなかつた。ヘロデの政治よりも酷ひどい。カヤバの裁判よりも酷ひどい。此調子ではテロの暴虐より酷ひどくならないとは限らん。

アブラハム　どこにも裁判官などはゐない。どこにも皇帝や權力者はゐない。——ここは自分の價値を見出すところなのだ。あの世では自分が他人の價値を定めてゐるのだが、ここでは自分が自分

の價值を認めてそれを定めてゐるのだ。こゝでは自分が神であり得ると同時に又自分が獸でもあり得るのだ。そして誰も自分に干渉することも出来なければ、批評することも出来ないのだ。

干渉したり批評したり妨害することの出来る者はたゞ自分だけなのだ。又それと反對に創造したり成長したり法悦したりすることの出来るものは自分だけではないのだ。そして自分も勝手にさういふことが出来るのだ——たゞかういふ風にあの世にゐた時と正反對の地位におかれてゐると、自分といふものが比較的よく自分に理解されるのだ。位地といふものはたゞ便宜上のもので、それ以外に深い意味のあるものではないのだ。ほんとうに深い意味のあるものをそのために失つてはいけない。

**富める人** 私は自分の價值を定めることは出来ない。又私が自分の價值を定めることが出来たにしても、それが何んな利益があるのですか。

**アブラハム** そんなことがお前さんが自分に定める價值かも知れない。

**富める人** わかつた、わかつた。こんなわからない事の起る原因が今やつとわかつた。

**アブラハム** わかつたら幸だ。どうしてわかつた？

**富める人** 一寸お聽きなさい。あなたは自分の子を殺さうとなすつた無分別者だ。そういふ人だもの、これ位のわからん事するのは何でもない筈だ。

**アブラハム** 場合に依つては子でも殺さなければならぬ時があるものだ。

**富める人** 實にけしからん事を仰有る。之は人道問題だ。私はどんな場合にも殺人に反對する。どんな權勢が私に臨んでも私はそれをしない。

以てお答へなさい。

アブラハム

さう怒らなくつてもいい。そんなら聞いて見るが、お前さんは此處に來る價值があると思ふやうな事をしたことはないか。或はしなかつたことがないか。

富める人

私は市民として、父として、夫として、主人として、皆それ／＼責任を盡したつもりです。私は少しも疚しいところはありません。

アブラハム

それはほんとうかい。——おい、ちよいと、ラザロはゐないか。——ラザロ、ラザロ、（ラザロ出づ）お前さんは此男を知つてゐるかい。

富める人

知つてゐます。之は私の戸口にゐた乞食兒です。

アブラハム

お前さんは此男に何かなすつたことは無かつたかい。

富める人

此男とは口をきいたこともありあしません。しかし私の奴婢の者どもがたび／＼此男について小言を言つてゐるを聞きました。私は何も此男にゐるい事をした覺はありません。……此

男は全體今何をしてゐるのです。何だが貴族のやうな風をして……

アブラハム

此男もさきの境遇の價值を明瞭に知るために、さきのと正反對の境遇に今置かれてゐるのだ。お前さんが現在に不平があるなら此男にも不平があるだらう。

ラザロ

私には不平はありません。

アブラハム

お前には不平がない。（富める人に向ひ）、お前さんは何うだ。

富める人

私には大いにあります。あなたの爲さる方法には少しも筋道が立つてをりません。あな

たの考<sup>かんが</sup>へかたに依ると、貧乏人は正義で、富豪は不義者だといふのらしい。私は随分慈善もいたしました。義損金<sup>ぎえんきん</sup>も棄てました。高い税金も収めました。そして自分がさういふことを爲し得る財産があつたといふだけで、こんな境遇に陥るといふことは實に不道理千萬です。奇怪千萬です。まるで無茶苦茶だ。

アブラハム 一寸聞いて見るがね、お前さんはあの世で楽しい生活をしたと言つてゐるが、その時は少しも不平がなかつたのかい。充分満足してゐたのかい。

富める人 そりあ随分不平もありました。税金が高いので脱税をしたり、櫛目<sup>くしめ</sup>を胡麻<sup>ごま</sup>化したりするのは私もほと／＼いやになつてしまひました。酒倉の検査の時などはほんとにいやになつてしまふ事がたび／＼でした。……さう、さう、かういふことが一度ありました。何でも土地は田や畑だとひどい税金をとられたものです。そりあ實に無法な税金でした。それで私は曠野<sup>あらの</sup>の拂下<sup>はらひさけ</sup>をしてもらつて、だん／＼それを熟田<sup>じゆくてん</sup>にしたのです。さうですな、五十町歩位もあつたでせう。しかし役所の帳面は曠野<sup>あらの</sup>でせう。だもんですから、税金は一文も出さずに済んでゐたのです。すると三十年も過ぎてから小百姓どもがそれに氣がついて騒ぎ出したりしたものですから、大いにまごついたこともございました。……しかし、現在のやうなひどい事は夢に見たことさへなかつた。

アブラハム ラザロ、お前はどうかだつたい。やはり不平があつたらう。

ラザロ 私には不平といふものは少しもありませんでした。私は旦那<sup>つぐえ</sup>の案<sup>あん</sup>から落<sup>お</sup>ちる屑<sup>くづ</sup>をいただけばそれで満足の絶頂であつたのです。



ざるがためである。人民は空想と噓はんも、吾人は火山すらも利用の途があると思ふ。火山を刺戟して、毎日程よく噴火せしむることを得ば、人類はこの火力を動力に變化し得ること必ずしも不可能でない。然る時は日本帝國内には、六十個の永遠的天然火爐を動力として所有し、世界各國民をして羨望せしむることなしと限らない。人類の無智は自然を敵とし、科學的智識を十分に發揮する時は自然を服従して、人生の幸福のために活用することが出来るのである。吾人は自然科學の進歩日本に於て甚だ幼稚なるを悲しまざるを得ず。而して上下共に軍人をのみ崇拜して、眞理の闡明者を尊信せざるは我國民の一大罪惡と斷ぜざるを得ない。

吾人は現在の日本文明を見て、この甚だ幼稚なる状態にあるを悲しむものである。即ち人命に對する尊敬なく、個性に對する認識なく、知識に對する信賴が十分でない。蒼天默々として語らず。たゞ天變地異をして語らしむ。吾人は端座襟を正しうしてこの深遠なる意義を學ばなければならない。



## アブラハムと富める人

佐藤 清

### 富める人

私にはあなたのお考がわかりません。お言葉の通り、私があの世にありました時は、紫袍と細布を着て、楽しい生活を送つてゐたには違ありません。けれども私が父の財産を受けついで、それを自分の力でふやして、それで楽しい生活を送つたからとて、全體何がいけないのですか。物質上の幸福を享けるといふことは絶對的にいけないのですか。天國に行く者は皆禁慾主義者でなければならぬのですか。肉體の快樂といふものはそれ程劣等なものですか。

### アブラハム

押しきつてさうでなければならぬといふ譯でもない。しかしあの世の境遇と正反對の境遇に今をるといふことは、さきの境遇の價值をきわだつて明らかに味ひ得る利益がある。同一の境遇を繰返すといふことは、それが幸福であつても、或はそれと反對に不幸であつても、人を疲らせるものだ。

### 富める人

しかし今私のゐる處は地獄です。地獄は罪に對する報償としての場所です。私はそんな一時通れの遁辭を聞いて満足は出来ません。あなたもアブラハムとも言はれる程の人なら、責任を

を以てしたのである。然らば火山研究所もしくは火山測候所なる者が櫻島を首として活火山の附近に定設せられてよいのである。而して學術的研究によつて火山内部の状態を常に實測して噴火もしくは爆發を一週間もしくは二週間に於いて豫知することが出来れば人畜の被害を著しく減少し、もしくは皆無ならしむること必ずしも不可能でない、故に政府當局者はこの機會に於いてこの方面に新事業を起さんことを希望するのである。日本は世界一の地震國である。故に日本は世界的名聲を博する地震學者のあるは誇りとするに足ることである。されども社會及び國家はかゝる種類の學者を優遇しないのである。故に人材をこの方面に吸引することは容易ならぬことである。故に政府は宜しく地震學者を優遇すべきである。爵位を授くるも可である。特別なる待遇をするも可である。最も進んで斯學に殉ずる眞骨頭の學者の輩出すればこれに過ぎたる幸はない。或は曰く、日本は貧乏國であつてかゝる餘裕はないと。吾人をもつて見るに日本は決して貧乏ではない、相撲や藝人にさへも巨萬の富を有せしむるではないか。もしかゝる金を潮流測量の事業もしくは火山研究の事業に投ずることが出来ればこの爲めに科學は進歩し、人命は救助せられ、産業は發達して、國家の利益となるであらう。酒色に巨億の金を投ずることを知つて社會公益の爲めに分毛の金を惜しむ日本人の大多數は甚だ哀むべき無學者であると斷ぜざるを得ない。鹿兒島縣會は先年百四十圓の地震微動器の購入費を否決したと傳へられる。その愚や及ぶべからずである。

天變あり、地異あり、遭難あり、迷信の乗ずべき機會である。或者は失心し、或者は落膽し、或者は發狂するに至る。東北及び薩南の諸君よ、諸君願はくば自暴自棄するなかれ。皇天は諸君を訓練して更に偉大なる者とならしめんが爲めにこの逆境に諸君を投じたのである。諸君の心霊の力はあらゆる障礙に打ちかつて尙餘りがある。諸君は諸君の人命の尊貴なることを悟らんが爲めにこの試練のうちに置かれたのである。人生の不幸は往々にして人類の無知より起るものである。今にしてこの事を云ふ盜賊を見て繩をなふ如しと雖も尙これを云はざるにまざるものがある。

吾人は此場合に於て日本民族の根本的問題に觸れてゐたい。由來日本人は愛國心に富み、國防のために巨億の國帑を費して悔いないのである。吾人は必ずしも之に反するものでない。されど吾人は火山國地震國の日本は外冠以外に地熱といふ強敵と戰はねばならぬのである。その他二百十日前後の暴風雨のごとき、若くは往々にして之に附隨する大出水のごとき、いづれか大敵に非ずや。外敵のために多くの師團と軍艦を設くるを知つて自然の敵に對しては費す所殆んど數ふるに足らず。蓋しこれ我が爲政家の近眼にして遠謀大慮する所なきがためである。故に火山爆發の豫知の手段のごときは毫も施す所がない。もし巡洋艦一隻の費用をこの方面に向くる時は全國六十の活火山に一々測候所を設立し、且つ之を維持することが出來よう。薩摩は帝國海軍幹部の根據地である。而して一櫻島の爆發のために蹂躪せらる。これ何の兆候ぞや。これ帝國の政治家が大に熟慮すべき問題ではないか。

吾人は更に進んで自然を敵とせずして味方とする方略を研究せねばならぬ。今日人類が暴風雨や、海嘯や、地震や、爆發のために苦めらるゝは彼等が無知にして未だ大自然力を利用する方法を知ら



積むが如くに乗客を積んだのであらう。彼等が規則違反をしたときも。無意識的に習慣的になしたことに違ひない。不幸にして此度の遭難を見たのであるが、遭難せずして乗客過剰の法規を破つたことは一再にして止まらなかつたことであらうと思ふ。然らばこれ監督官廳の責任にあらずして何であらう。これ即ち遞信大臣の責任である。少くとも東部遞信局長及び海事部長の責任である。人命を運搬する沿岸航路の監督の不行届はこれ何をもつて遞信省は國民の前に辯明せんとするのであるか。先づ愛鷹丸は最初の湊に於いて四十幾名の乗客を有したのである。然らば第二の湊に電報を發して切符の發賣を中止せしめなければならなかつたのである。この事のなかつたのは第二の失敗である。第二は救命ボートの不完全であつた。第三は船客名簿の不完全であつた。たとへば早稻田大學出身の岡由巳君の如きは行衛不明者の一人であるが、船客名簿中にはその名を見出さないものである。

タイタニック號の沈没は一大警告を歐米の汽船會社及びその監督官廳に與へた。北米合衆國に於いては、凡て汽船に五十人以上の乗客あれば必ず無線電信の設備がなければならない、また乗客幾人ごと一隻のボートが備へられなければならない。また一隻のボート毎にそれを操縦し得る二名の水夫がその中に乗らなければならない。この最後の規定はタイタニック沈没の際にボートを漕ぐ能はざりし水夫があつた爲めである。

愛鷹丸の乗客百數十人は一陣の疾風に弄ばれて、恨みを吞んで海の藻屑となつた。日本國民は何をもつて彼等の恨みを晴らすべきであらう。汽船の設備の完全と、それを十分に監督することである。また駿豆鐵道會社の線を延長して、大仁より伊豆の南端に達せしむることもその一方法である。もし

天城の險は隧道を鑿つに便ならずとせば或所は乗合自働車を運轉すればよろしいのである。これとて  
も必ずしも駿豆沿岸の交通に便利を與ふことは出来ないが、風濤高きとき安全の旅行を欲する人に  
とつてはなきに優ること萬々であらう。

## 二

第三は櫻島の大噴火である。同島及び鹿児島市街附近の損害に就いてはこの文を草する時までには  
確實なる報道に接しない。されども人畜の死傷や家屋の崩壊したるものゝ多きは云ふまでもない。吾  
人は薩南の被害民に對しては滿腔の同情を寄するものである。應急の救助を實行することは焦眉の急  
である。併しながら東北の凶問題に次いで、それを根本的に解決せねばならぬ如く、噴火問題もかゝる  
場合に於いて根本的に解決するは必要である。日本は火山國である。世界の活火山三百五十五の中六  
十は實に日本帝國に散在す。我が帝國内の噴火山は活、休、死の三種を合すれば殆んど二百を數ふ。  
即ち吾人は噴火山上に住むものである。淺間山、阿蘇山、霧嶋山、櫻嶋山の如きは皆活火山の尤なる  
者である。そして皆今日まで幾度となく噴火したものである。就中櫻島の如きは今日まで廿數回の噴  
火の歴史を誇つて居る。殊に安永年間の大爆發に際して死傷者總數殆んど萬に近く、家畜の損害は千  
をもつて數ふる程であつた。然らば櫻嶋に住宅を構へ農村を經營するのは稍冒險的に屬することであ  
る。されど氣候溫暖にして地味豐饒なる天恵の厚き寶島を放棄するは情として忍ぶ能はざるところであ  
つたかも知れない。櫻島大根の名は天下に高く、甘蔗によく漁業によし。自然は危險を償ふに遺利

或は説をなすものがある、東北地方の寒流は太陽の黒點に原因すると。この説は甚だ受取り難き議論である。若し果して然らば世界全體その影響がなければならない。萬に一この説は事實なりとすれば高層氣象學の研究が必要である。

かゝることは殆んど夢を談ずるが如きものであるが、甚だ手近なる實際問題がある。東北はもともと農業には適して居ない、恐らくは工業の土地であらう。然るに資本は缺乏して居る。その原因の何であるかを尋ねて見ると、全く高利貸が多い爲めである。たとへば青森縣地方に於いては少しく財産を有つて居るものは直ぐ質屋を營んで下流社會の資本を吸取して自ら得意として居るさうである。もし彼等にして質屋業に成功すれば次には小銀行を經營して大仕掛の高利貸しを開始すると云ふことである。故に産業の爲めに投ずる贅本が少なくなるのである。これ東北が工業國たるべくして工業國たり得ない眞原因である。吾人は東北の凶作に際して東北の富豪が大に覺醒せんことを希望せざるを得ない。

同時に吾人は政府當局者が東北の窮狀に對して適宜の方法を講ぜられんことを希望せざるを得ない。氣候寒冷にして收穫多からざる同地方に對して氣候溫暖にして收穫多き西南地方と同比例の租税を徵發するは決して公平なる處置でない。殊に西南戰爭以後の大戰爭には東北人民は帝國の臣民として血税租税を十分に負擔したるに拘らず、その遺利及び恩澤は全く西南地方に吸收されたる觀がある。東北の振ふ能はざる故なきでない。且つ東北各縣に知事たるもの多くは一時の腰掛けとして赴任する者多く、東北地方開發を念とするもの甚だ少ない。青森縣のごときは一人知事の在任期は二年内外に過ぎぬとのことである。如何に聰明なる爲政家を以てしても二年の在官期に於ては同等の研究も施設

もなし能はざる明白である。要するに代々の日本政府は東北人民を輕蔑し、侮辱したのである。而して東北人民は唯々として之に屈從したのである。東北の士氣振はず、政治觀念に乏しく、滔々として迷信に陥りつゝあり。

されば東北人は先づその人生觀を確立せよ。眞の信仰に立て。實力主義を實行せよ。而して政治上の權利を主張し、科學者と提携して産業の方針を定めよ。然らずんば東北は永遠に自然の壓制を超脱することが不可能であらう。東北には未拓の原野森林四百萬町歩ありと稱せらる。然れども東北人の頭腦の中には更に大なる未開の地の存するを悟らざれば、東北の振興は決して實現せらるべくもない。

第二は一月四日伊豆の國、戸田沖に於ける愛鷹丸の沈没である。二日三日は海上不穩であつて交通が斷絶した。四日は極めて靜平であつたから前二日間の溜り客が小さい小蒸汽船の室内及び甲板に溢れたのである。廿餘名の乗客定員に對して百數十名の乗客があつたのである。遭難者の一人は僕の知人である、僕は特別なる興味をもつてこの破船一件を研究した。この事件の直接の責任者は愛鷹丸を所有する駿河灣汽船會社の責任である。然るに此の會社は損失に損失を重ねたるボロ會社であつて、その重役株主の如きは駿河及び伊豆の國の小資本家である。正直に云へば漁夫や農夫の上々たるものである。愛鷹丸は現に法規を破つて乗客過剰の犯罪を敢てした。これ大にせめなければならぬが、もとゞ社長及び重役は人命の貴重なることは十分にわかつて居ないだらうと思ふ。彼等は鮪や鰹を





## 天變地異と生命の價值

内ヶ崎 作三郎

吾人は常に生命の價值と尊嚴を説き、眞我の實現を標榜するものである。而してこの立場より考へて刻下の眞面目なる實際問題に逢着せざるを得ない。

第一は東北の凶作問題である。東北各縣は昨秋の大出水に續いて著しく冷寒なる氣候を迎へたのである。その爲めに米作は非常なる損害を被つた。従つて北海道及び青森縣に於いては空前の凶作となり、未曾有の慘狀を呈せんとして居るのである。

有志當局者は云ふまでもなく、地方の新聞記者政、治家、宗教家等協力して救済の實を擧げんと奔走して居るのは吾人の大に満足するところである。また中央に於いても東北救済會なるものを設立したのは甚だ時宜に適したものと云つてよい。吾人は東北に於ける罹災民諸君に對しては滿腔の同情を寄するより他はない。

然れども、吾人は冷靜なる立場よりかゝる凶作を未然に防ぐ方法を講じなければならない。禍を轉

じて福としなければならぬ。東北凶作の一原因は恐らく海流の變更の爲めてあらう。金華山沖を流るゝ潮流に二種ある、一は黒潮にして南より來り、一は親潮にして北より走る。然るに、その原因は詳ではないが、近頃暖流が太平洋に面せる東北地方の沿岸を去つて寒流が接近しかけたと云ふ説もある。何の爲めに潮流が變化したかは吾々局外の知るところではないが、或人は地軸の變更の結果であらうと云つて居る。吾等の地球は廿三度半の傾斜をもつて空中に轉々するものである。故に時に地軸に變化を來すことは不可能ではない。現在のサイベリヤは數十萬年前には赤道直下の熱帶國であつたかも知れない。今日尙ほ前世界の巨象の白骨がサイベリヤに於いて發掘さるゝはこれを證明するものである。

もし潮流の變化が地軸の變動に原因するとせばこれ人力をもつてしては如何なる策をも施し得る餘地がない。されどもし太平洋中の地震もしくは陥没の爲めに生じたるものとすれば多少の研究の餘地がある。何等かの人爲的方法によつて、黒潮を接近せしめて親潮を遠げしむることは出来ないであらうか。北米合衆國に於いては、その東北岸に於いて北氷洋より流れ來る氷山及び寒潮の爲めに、氣候が著しく寒冷の度を加ふるが故に、ニューファウンドランド沖の淺瀬を利用して巨大なる堤防を造り、北方より來る潮流をして大西洋の真中に向はしめんとする計畫をなす空想家があると云ふことである。然らば日本に於ても人爲的方法を案出して黒潮を東北太平洋沿岸の地方に引きつける方法は必ずしも絶對に不可能でない。もしこの事が成立すれば東北地方の産業は遽に長足の進歩をなすに相違ない。即ちこれをなすには、潮流測候の事業を企てなければならぬ。

神的生命の本源があると思ふ。本源の泉から玉と碎ける水晶のやうな流れが湧出するのに比すべきものがあると思ふ。吾人は此の泉の水を飲むのである。否な飲まなければならぬ。

此の本源から噴き出て居る生命は、名の付けやうがないかも知れない。併しながら個人我そのものではない。個人我を超越して、四方に瀾漫して居る。その力、その生命を感じれば感ずる程、愈々崇高絶大なるに驚かざるを得ざるものとなる。個人の生命と此の絶大なる生命とが互に纏つれ合つた、所謂生活過程なるものがこゝに生ずと見るべきであらう。さうすると、兎に角どうしても、こゝに我と云ひ汝と云ふとを意識せざるを得ざる關係が、兩者の間に成立するのは事實である。此の汝と稱へらるゝものは實に驚嘆すべきものである。古來人間は之れに色々の名稱、殊に名稱のうちでも、その以上はないと云ふやうな名稱を付けた。普通今日呼ばるゝ神とは則ちその一である。

であるから神と云ふ概念をのみ、辭典から覺え來たからと云つて、實際の宗教には何の用をもなさない。神と云ふ概念や文字を知らないからと云つても、實際彼の本源的な生活過程が成立してさへ居ればそこに生ける宗教はあるのである。

此の本源的過程に我もあり、汝もありとすれば、そこで神の人格と云ふとが、明瞭になると思ふ。

人間は自分を人格だと信じて居る、否な人格であらう。彼の本源的な生命は人間の人格のなかへ浸みこんで来る。そこでどうしても之を人格的にしか、考へざるを得ないことになる。若し何とかして非人格的に考へるとも出來やう。併し若しさうすれば直ぐに人間以上のものになる。是れ反つて彼の本源的生命を尊重する所以でない。であるから神を人格的に考へるのは、人間の力では已むを得ざるとな

るを記憶してさへ居れば、最も適當な考へである。

唯だ單に神の概念に限らず、何でも皆な固定して活動を止めたやうになつたものは、皆なこの本源に環元せしめたいものである。さうすると再び潑刺たる根本の生命に復活することが出来る。そして再び活動を始めるに相違ない。活動があればそこに眞の發展も生じて來るのである。

人間界のことは何事でも皆な、この觀察點に引き寄せて見ると、行き詰らないやうにすることが出来る。僕は「生の創造」「生活の充實」などと大に生を高調したこともよかつたが、今や既に再び生命の本源を忘れかゝつて居るので、これ亦た「生の創造」「生活の充實」などと稱する概念に固定して、更に發展することを忘れては居まいかと思ふ。

道德のことでもさうである。道德と云ふやうな、そして此のことはなすべし、彼のことはなすべからずと云ふ條文が孤立して、人間に對峙すると思ふから、反つて人間を壓迫するものにもなつたり或は人間の方からは之れに反抗したりするやうになり、終には道德の無勢力を憤慨されるのではあるまいか。道德を一度彼の本源的生命のなかへ戻して見たらばどうであらう。本源的生命が益々豊富に愈々新たになつて行くには、丁度彼の道德に要求せらるゝやうな行爲をするのであるとなつたらば、道德と我れとは對立の位置には居ない。彼れは我れの味方である。我れの過程のうちに在る。

若し之を布衍したならば涯限あるまいが、吾人はどうしても本源的生命に歸り、本源的生活をなさなければならぬことは、今云つた丈けても明白であらう。



的にも考へるとが出来るのである。自然と神とを同一視するのは、兩者を共に生物學的に觀察するのであつて、つまりカテゴリーの違ふものを一つカテゴリーの中へ入れやうとするのである。

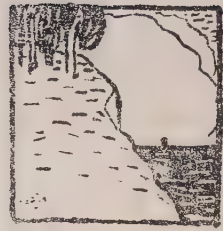
次ぎに吾人は全體としての神を見たいと思ふものである。否な元來精神的なるものが部分／＼に斷ち切られるものであるとを疑はざるを得ない。我等部分的のものが、吾人の精神に働きをなした所で、それに盲人が象に觸れるやうなものである。耳を掴んだり、尾を握つたりする丈けて、どうしてこれが全軀の一部分であるのが分らうか。理學者が唯だ自然の理學的研究をする時に、神を發見しないのは當然である。これは耳を掴んで居る盲人が全象を發見しないのと同じとである。解剖學者が人軀を利刀の下に寸斷する時に精神の居場所を發見し得ないのも亦た同じとである。全軀は部分を包容して居るけれども、部分が集合して全軀を形成したのではない。先づ全軀が在つて、そして部分があるのである。

此の道理があるので、吾人は部分／＼から溯つて終に神を見やうとするならば、それは大なる間違である。吾人は神の全軀に觸れなければならない。或は之を見なければならない。

けれども神を見るなど云ふと、直ぐに神秘的な考へが起るが、僕はそんな考へ方をして居るのではない。僕の考へによると、神秘は決して獨創的のものではない、創造的のものでもない。神秘は甚だ第二次的のもの、否な甚だ翻刻的のものである。神秘者は唯だ獨創者の見せつけた所のものを僅かに再現せしむるに過ぎない。彼の神を見たと言ふ者と稱ふる者にした所で、その見る所は果して何ものであらう

か。嘗て書物で讀んだ所、或は見た所を神經の興奮する際に幻像的に見るに過ぎない。過去よりの發展に斬新な要素を加ふるとはない。新發展、一大轉向を神秘者に求むるは、猶ほ木によつて魚を求むる如きものである。故に若し僕が神を見ると云つても、それは彼の神秘者や見神家の稱ふる所とは全く違ふ。或は見ると云はずに神を直覺するとか、若しくは神と相觸るとか云つたならば、僕の云はんとする心地をよりよく云ひ現はし得るかとも思ふ。

然らば吾人は何處で神を直覺し、或は神と相觸れるのであらうか。僕はそれは意識であると思ふ。前にも云つたやうに意識を除いたならば、何ものも現はれ來る位地はない。けれども意識が智情意などのやうに分裂して居てはいけない。固より實際は分裂して居るものでもない。全體としての意識である。此の全體としての意識の奥底から、萬石の水が一時に噴出するやうな自覺を得るとがある。此の力は何であらうか。僕は前に神と云つたけれども、若し吾人が教師や先輩から、神と云ふとを習つて居ないならば、勿論神と云ふ觀念が忽ち生ずる理由はない。——一方から見ると誠に不幸にも、色色な、餘計な混合物が這入つて濁つて居る、神の觀念を吾人は學校や教會や、一語にして云へば過去の歴史から傳承して居る。それが爲め歴史的の偶像になつた神ばかりに注意を向けて、唯だ哲學的に構造した概念に氣を奪はれて居るのであるが——吾人の心の奥底には常に此の測り知られない、吾人が少しく注意を之に向ける時には驚異に脅かされざるを得ざる活動がある、否生命と名づくべきものがある。吾人は實に自分と此の生命とが、こゝで直接に相觸るゝを意識するのである。僕はこゝに精



## 本源的生命

三 並 良

大河の滔々として奔流するや、その勢力は實に爽快なるものがある。けれどもこの擧ぐる所の濁波は決して愉快なものではない。愉快なのは寧ろ谿谷の間に混々として盡きず湧き出づる水晶のやうな水である。彼の大河の水には勢があるやうに見えるけれども、そこには混合物がある。その勢力は借りものである。若しも此處、彼處の谷合に直接、水が噴出しなかつたならば、大河は出来ない。若し噴水が止んだならば、如何なる大河と雖、終に流れるものがなくなつて涸れてしまふであらう。貴いものはどうしても本源の水である。

吾人が精神上の生活も亦之に等しくはあるまいか。人は動もすれば下流を見て、この本源を忘れるはすまいか。普通、人は客觀を重しとする。けれども客觀を見出だすのは、主觀が作用するからではあるまいか。客觀が如何に主觀の方を向いて、這入らうと迫つて來た所で、主觀が之を受け取るものである限りは、その受け取る條件がある。即ち主觀の提供する形に従つて這入つて來なければならぬ。客觀と稱へらるゝものでも、それが果して純客觀的のものであるとは、未だ俄かに斷言することは出来ない。

即ち如何なるものでも、先づ意識に現はれて來なければ議論にはならない。この意識に現はれるものには、固より内部から突き進んで來るものもあらう。外部から這入るものもあらう。けれども後者は必ず主觀の力で打ち直され、その要求する形になつて意識に上るものであることを記憶すべきである。

既に意識に上つたものが、色々に組み合される。或はそれが客觀的に再現せられる。それが思想であり、藝術であり、文學であり、哲學であり、倫理であり、事業であり、宗教である。さう考へると神の啓示と云ふものも、全く見方が變らなければならない。火山が破裂する、地震がある。之を神の啓示だと云ふものがある。果してさうであらうか。戦争が起る、飢饉がある。これも神の啓示だと云ふ、これ亦た果してさうであらうか。啓示は雷や嵐のやうな外部的のものに於て與へられるものではない。さればとて軟な風のなかにもあるのではない。

これ等は皆な部分的のものではないか。自然の一部分ではないか。自然は神であらうか。自然の一部分は矢張、神の一部分であらうか。吾人は第一、自然即神と云ふやうな汎神論的思想を排斥しなければならぬ。自然が進化發展するから、神も亦た進化發展すると云ふやうな淺薄な思想をも排斥しなければならぬ。自然が神であり、神が自然であるならば、さうも云へやうが、さうでない以上は、この二ツに區別を認める以上は、さうは云へない。——こんな議論の成り立つたのも生命論が滔々として世間を風靡したから起つた結果である。併し生命は之を生物學的ビオロギカルに觀察するとも出來るが、精神



ぎない、最初のもの、最後のもの最上、最深幽の又幽、玄の又玄、たゞこの瞬間味はるゝ、あはれ人の思ひ、そはたゞ低きものなるよ。これまさしく神との融合である、この地この境、見るも祈なり、考ふるも祈なり、愛するも祈なり、動くも、住るも行くも臥すも。されど、我はこゝに内含的實行の祈禱に就てあまりに多くをいはうと欲しない、今はたゞ意識的に外に表はれた祈禱そのもの、中に於て人のこゝろの神とつらなり、又は神との關係に於て、眞の生命の宗教的意味に集中されたるをいへば足りる。

「天にいます我等の父よ」といふたゞ此一言の祈、そは心のいと深きところにて顔と顔とを眞の神と拜接せしむ。しかして心意感情肉體のいづれも正しき据り、適當なる關係を定むる。これまさしく神との融合の必至の條件である。我れ人の名をよぶ時そのたゞ注意を喚起するのみなる場合はそれを除く、もし人の父よと呼ぶ時その訴への耳にのみ容れられたるにてよろぶべきや、その聲胸の奥まで行かでは止まじ。嬰兒に乳房を與ふる母の慈愛

のまなざし胸に縋る我子の面を時の間のはなるゝことあるも、泣きては直に情を加ふべし。それにも増して深きは天なる父の愛の御心なり。一セコンドの刻みも我を忘れ給はず「イスラエルを保つものは睡ることなし」彼はたゞ念々不捨である。さればわが祈禱といふ、神の注意をわれらのために呼ぶのでは決してない、我を愛せよと彼に強ふるのでも決してない。たゞ我がさまよへる心靈をエーテルの如く常に圍繞して放たざる神の愛のところに、我はたゞ行く、我は招かれたりとの自覺を呼び起されたるを告ぐるのみである。

されば、哲學的宗教は、その尤なるものにして、なほ眞理の微光を理窟の上に味ふとを得るにすぎない。そはたゞ神と人間との關係を議論し出すにすぎない。そは決して直ちに愛なる父よといふことを感得せしめない。我いふ宗教は愛を感じ愛を思ひ愛に依て組織されたる眞理を。論議を通さずむんずと掴まねばならぬ、面と面と相向ひ直感的に認めねばならぬ。理性は唯人の子を乾きに乾

きたる砂原に送り神と人との愛による關係交渉を思ふことなからしめ、有限の思想に止らしむる嫌がある。彼等は人をして偶像及び人の形したる神より離れしむるといふはよし。されど理路いよいよ整然として彼等が心はます／＼哀れなり、あれ父なき子の終に三界に流浪せざるものゝいくそばくぞ。無の見に囚はるゝものは天に神を戴くことが出来ない。有の見に執する者は地に神を保つこと不能である。その心の清淨が己が幻を眞理のいとも深き根柢に打碎き得る人は、神は父なりそはたゞ彼は神たるが故にあり、最も離れ居るが故に最も近く最も正しきが故に最もあはれみ深しといふことを見る事が出来る。彼にありては天も地も相連りて太陽の光と熱との如し。見ゆる物はそれ自らに於ては意味なしとしてもその説明補充を啓示せられたる全體の中に、見えざるものゝ中に見出す。物質の世界は精神の大洋にかこまれながら無限に漂へる一孤島にすぎない。打見たるところ無頓着なるが如く太陽は正しさものにも正しからざるものにも同じく光を與へる、自然の養へ

る燕は地上に落ち、自然の光榮にて彩られたる秋草は消ゆることがあるかも知れぬ、然も一切萬有の上には悉皆の有情無情の背後には天の父の愛と攝理とはかゝりて休み給はない。而してあはれはいよ／＼罪あるものに加はるのである。

斯くして祈禱の力は徹底して人は眞の自覺に至らなければ措かない。心の惱も、肉體の穢れも或は消え又はありても障礙をなさず、全身全靈其自覺によりて支配せらるゝに至る眞の宗教的生活の眞髓である。茲に信仰生活聖靈の生活は起りて人の生活は神の興味と一致し、局限的な肉 self は滅びて神我を捕へたりとの感は刻一刻にしげく我はたゞ神の意志の機關たるが如く思はざるを得ないやうになるのである。故にいはいはく「我すめども我生けるに非ず基督我に在りて生くるなり」と。あはれ祈禱は人心至奥の眞理に對する無限の渴望、生の渴望、感情の眞理、意志の眞理、あらゆる眞に向つての至心滿腔の渴望の表出であつて、神の無極の慈悲とよるべなき人の子のあはれとはただこの一點に極る。

とは出来ない。されば又別の方面よりいへば、一度この祈禱の要求に動かされて心霊に響を與へられたる經驗だにあれば、よし形式や教義に於て缺くところあるも其の人は宗教の中に住しつゝありといはれる。

今茲にこの現象を少しく心理的に考察して見やう。ジエームス及び其一派の心理學者は心靈のことを古來の形而上的見解で満足せず、今少しく實質的基礎を持たせたいともがいて居る。彼等のいふところに従へば、人は實際の經驗上部分的自己の集合である。これが互に相争ふことあるに至れば、それは變態であるが、平常の場合に於いていつも統一あるものではない。之を他の言葉にていへば讀書食事步行等行住坐臥のわれらが經驗は離れ易き繼續の下に活力が積み重つたにすぎない、されば自己が眞に自己を意識するには大いに精力の増した時か衰へた時にこの成長を感じ減退に氣がつくのみで、全體としての自己を知るは極めて稀であるといはねばならぬ。つまり人は遭ふ所

の一切の經驗より成立せらるゝものだが、常には其一面を自ら知り得るのみで、事實に於ては人はただ漠然たる人格の感じを有するのみである。而して古き意味の人格といへば直ちに有目的の觀念を意味し、目的ある主觀的關係を抜きにしてはこれあるを得なかつた。しかるに我等の取らんとする一步進みたる人格の觀念は、社會的組織や、人間相互の關係や、あらゆる經驗から成立つのでこの人格の觀念から自他の區別はなされ、又統一は見出さるゝ。斯の如き經過なくば個人は決して他の人格との交渉は見出せない。かるが故に物の自然的法則に支配せらるゝに反し、主觀と客觀とは經驗に依つて起るといはれる。

斯の如き見方からいへば、宗教とは斯して成る人格の精神的精力があれやこれやの活力の中心點を得て、全體的自己統一ある自己を見出した時の現象を指すに外ならない。其時其際其經過に於てこれを肉體的に見れば、一種全身の反應を起し或は筋肉の緊張強烈なる運動を惹起する等のことがあり、この結果として自然に音聲を發するにいた

ることがある。——實に苦痛の叫び、満足の悦び等は、音の初まりであつて此自然の發音こそ人類言語の起元とせられ、これから言葉は漸次發達したものだといはれる。——此等は人類にも下等動物にも共通である。全く直感的で比較的無意識の活動であるらしく一種特別の心的昂奮に屬し、他の活動との結合なしに起る事が多い。これ即ち純粹の祈禱である。

以上は人の活力を主として見たもので従つて祈禱の起元であるが、これが信仰的色彩を添ふるのと多きにつれキッドの所謂超理性の要素で、一般に宗教の本質とせらるゝ神秘的分子も加つて來、終には、御心のまゝにならしめ給へとの主の祈りとなるのである。

水草は其の花實が水面に浮んで居つても其根は水中にあることを忘れてはならない。人間生活の大部分は精神の世界にかくれ、見ゆるこの世にはたゞ生理的組織の表現を見るのみである。しかしながら精神界の秩序はもとより肉體界の秩序を含めて見らるゝが如き調和をなして居るのである、

故に肉體と精神とは人に於て相敵對し互に他を排除するものでなく全く同じき全體に屬するのである。されば精靈的生活は此本質的一致に叶ひ、これと融合し自己の衷なる神に没入する事である。精靈的生活の表はれたる基督は神の子となるべきことを吾人に與へたのである。さればトーマス・ア・ケムピスは曰ふ「汝のある所そこに天あり、汝のあらざるところ其所に地獄あり」と、こは神の恩寵なくんば考ふことが出來ない故に切りつめていへば祈るもやがて神の賜である。人類の精神は刻一刻とその活力を増進することに於て撓む時なけれど祈禱に於ける時の如く完全にその自らを表はす時はない。換言すれば祈禱は實に精神生活それ自らである。祈禱は人の心を神の情意と精神に引き上げなければ止まない。而してその時、人の心は幻にあらず感情にあらず意志にあらずこの三精神の生活の渾然として其最高の表現をなす。誠に祈禱に於て人の精神は實在の根元に徹底し人の肉體は緊張の極度に到達する。あらゆる有限のものこの世のものは遠き遠き彼方に眺めらるゝに過





## 生の渴仰と祈禱

鈴木龍司

凡そいかなる宗教に於ても祈禱といふ現象を含まないものは恐らく見當らなからう、日本に於ける眞宗は祈禱なき宗教として有名である。しかしながらこれも仔細に考ふる時は必ずしも祈らないとはいはれない、自分一己の安心のために祈ることとは敢てしないとしても親鸞上人の御消息集を見ても直ちに

わが御身の料はおぼしめさずとも朝家の御ため國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはじめてたくさふらふべし

との文言が発見さるゝ、されば眞の宗教には必ず祈の附屬するものなりとして敢て失當とはいはれぬ。道德的情操、美術的感情等もその進んだと

ころでは甚しく宗教と相近きものあるは何人も承認するところであるが、これ等と眞に宗教を區別するものは「あゝ難有い」といふ感謝の念、一歩進みてはこの祈禱の有無であらうと思ふ。

尤もハルトマンの如きは明に祈禱に反對して居る、彼はその宗教哲學に於いて述べて曰く、

祈禱は精神的賜の中宗教的意識がまだ有神教に止つて居る時代に存することと純正の解脱宗教に進んではこれあるべきことでない。神を包括包容の我としないで人格的に我に對する汝といふやうにして置けばこれと對話する必要上から、又神が魔術的超天然的奇蹟干渉をなして人に本質外の恩寵を下すことが出来るものとすれ

ば、此の如き恩寵を祈願するのもし。即ち宗教的關係を人格的交渉として其實在の一般を知らないならば、救済の筋道が神と對話するやうな形式で、或は懺悔祈禱に或は請願祈禱に又は感謝祈禱に表はるゝことが出來やう。しかしながら此の如き對話形式は皆神と人との人格を二とするより出づること、唯一の眞實の救済は非人格的絶對神の含蓄的恩寵即實在の一致である事を知れば祈禱は對話から獨語に移り、ついには自己の中に自己と語るやうになるであらう。ある人はこの獨語即祈禱と看做してもいいではないかといふであらう。しかしこれは架空ぢや、祈禱は有神的基本に立つ宗教的意識が實在の一致を望んで其正鵠を得ないところ、茲にその代償を求むるの心から起るのである。我等が宗教にありては此の如き對話的交渉の要はない。祈禱の眞味は宗教的意識が自己の中に存する汝なく我なき絶對の力を我に集むるにある。と。しかし、これ一見非難の如くして實は我がいはんとする祈禱の眞義をいふものである、思ふに

この非議はあまりに祈禱を形式的に取つたからであるまいか。プロフェッショナルに一定の神聖とせらるゝ文句を繰返へすことが必ずしも祈禱ではない。人心必然の要求たる絶對的偉力との神秘的融合によりて起るところの心靈の共鳴即ちこれ祈禱である。その偉力が人格神であらうと、自己の中にある絶對の力であらうと、今は論ずる限りでない、かく見ればハルトマンの最も氣に入りさうな禪家の見性の場合の如き端的にも祈禱はあるであらう。あはやといふ瞬間、自己の中に存する汝なく我なき絶對の力を我に集め得たる瞬間、これを祈禱として毛頭異存はない。しかも宗教的意識が眞に實在の一致を如實に悟るは實に無限の彼方にあらう、然らば即ちその代償を求むるためのやるせなき人心機微の願、又已むを得ないではないか。かくの如き要求、經驗は常の人にありて必然である。これは祈禱といふ名の存在せざりし前よりありし事實である。されば重ねていふ、此内の祈禱缺損する間はそれは倫理であり得る、哲學であり得る、しかしながら未だ以て宗教といふこ

である。個性に取つては實在でなくて陰影である。勿論この場合の個性は決して小なる個體、我ではない。なぜならば所謂個體我は統一を自ら創造するものでなくて、却つて他から強迫的に統一さるゝものであるから、だから他から統一さるゝ國民は決して眞の個性ではない。個體我の集團は完全なる社會ではない。社會は個性の生活面でなければならぬ。個性の生活面であるから、そこに進化あり創造あり且つ評價があるのである。斯くの如き統一を眞に社會的個性 (gesellschaftliche Individuum) と云ふべきである。

これは個性の他に接觸する方面であるが、その意識的持續の方面は歴史を形成する。この歴史なるものは從來の歴史家の研究した様に、その各事實は決して同質的反復のものではない。そこには矢張り單なる持續の外に價値の努力或は創造がある。即ち儼然たる統一 (持續) があつて、個々に分析し乃至一般的に翻譯出來ないものである。各事實の顯現は記憶のつゞき、即ち創造を意味する

が故に、凡て一回丈けのもの異質のものである。然れども最等の多樣性を超越した持續 (Zeitüberlebens Dauer) がある。此持續は個性の價値意識の創造過程であるから。是れ又歴史的個性 (geschichtliche Individuum) である。歴史は既に個性的のものであるから、私の歴史と他人の歴史との異は云ふまでもない。更に大にしては日本の歴史と外國の歴史とも、決して同一ではない。

然れども社會と云ひ歴史と云ひ、別々に存在するとは出來ない。この二つは密接に結合したものの、社會は歴史の連鎖に依繋し、歴史は社會の溫床で成長する。これ即ち時間と空間言ひ換ふれば統一と持續との渾一した、深遠にして廣大な生活體である。即ち文明的個性 (geschlechtsgesellschaftliche Individuum) で、自己個性の本性顯現たる渾一的行為に相當するものである。この渾一的生活體の中に於いて初めて個性は、文學、哲學、宗教、美術等の生活内容を創造する。又この生活の中にその本性の發現として、眞善美等の價値を創造する。

斯くの如く個性は自己を無限に擴充する要求と能力とを有する。即ち世界を創造しこれを自己の生活内容とする要求を有する。社會的個性も歴史的個性も乃至は文明的個性も悉く皆人格的個性の全體的獨存的渾一性の顯現擴充に過ぎない。

## 七

かくの如く個性は決して個體的存在でも、反復的運動の連續でもなく、永久的絶對的な意識を有する、全體的存在、持續的活動であるから、分析や翻譯の符號の形式的結合に依つて、その本質を認識し得ないのみならず、單に靜的な觀照的な直覺に依つても理解し得ないのである。價值は直覺するのでなくて創造するものであるから、價值意識の絶えざる活動の個性も、自ら活動し創造しな

ければ、その真相は到底解らない。個性の活動慾及びその生活情味は、自ら經驗せねばならぬ。我が實際角力をとつて見なければ、自分の力を意識し得ないと同じく、廣く且つ深く活動しなければ個性の擴充力、創造力確執力等は本當に解らない。なぜならば個性は不斷の活動であるから。故に眞に個性の本質を認識せんとせば、單に持續の内面から見なくて、價值存在として、即ち目的存在として見なければならぬ。かくして初めて個性の憧憬的な進歩的な創造的な努力を理解し得る。而して價值的存在としての個性に依つてのみ、眞の精神生活乃至宗教生活が創造さるゝのである。個性を離れて、否個性を超越して精神生活を解するは、全く無意義である。



的に分析すれば、その要素は悉く自然法であつて自由を失ふのであるが、さればと云つて全く自然法を否定したならば、自由はまた決して成立し得ない。個性の行爲の中には自然法も矢張り融合し得る。併しそはたゞ個性の意味を表現し自由を容易ならしむる効果あるものとして、存在する。斯かる多様性を有する個性の渾一性は、決して單なる持續でなく、單なる運動の變化ではない。意味の持續、乃至價值の變化、言ひ換ふれば絕對意識(Das sollen)の統一的現實的活動即ち生活であるから、我々が直接その生活動に闖入して體驗しなければ、到底その真相を如實に認識し、その氣分情味を充分味ひ得ないのである。直覺は單に個性の空間的統一と時間的持續とを認識するに過ぎなく。意識的渾一即ち價值の動作は、經驗或は體驗(Erlebnis)に依らねばならぬ。

以上は個性を個人的方面より觀察したのであるが、社會的方面から觀察しても矢張り同一のことが言ひ得る。身體の空間的統一に該當するものは社會であり、意識の時間的持續に該當するものは歴

史であり、而して行爲の價值的渾一に當るものは即ち文明生活(Kulturleben)である。然れども社會的統一と歴史的持續とは個人的方面から見たときの純粹統一乃至純粹持續とは、大に性質を異にしたものであるが爲めに、その認識には益々我々の直接經驗を必要とするのである。社會的方面に於ける個性は、殆んど直覺では認識されないものである。なぜならば直覺は無關心的のものであるが、社會的に現はるゝ個性は極めて執拗な熱烈な關心的動作であるから。個性の本質はその生活を社會的に擴張するに隨つて、益々明瞭に發揮される。そしてその根柢はいよゝゝ堅固になる。社會的統一も歴史的持續も人格的個性、言ひ換ふれば價值的直接意識者、絕對の創造者にその根柢を有して初めて意義を生ずる。反對に個性はその統一を社會的にし、その、持續を歴史的にし、その渾一を文明生活にして初めて發達する。

然るに學者や宗教家は動もすれば、社會的文明的統一の根柢を、價値の直接意識者たる人格的個性の外に求めんとするから、その所謂統一は空虚

な陰影になつて了ふのである。所謂人道とか神とか絶對者とかを想像的に描いて、それに依つて文明社會を統一し、そして個性を極めて小さいものとして其中に編み込もうとする。しかし乍ら人道でも神でも個性の價値意識乃至渾一生活を離れて言ひ得ない。もし言ひ得るとせばそれは個性と何の關りもないものである。現在の處、我々の經驗から、自己個性以外に社會の他の統一者及び意識者を認識すると全く不可能である。他に統一者或は同一の個性ありと思ふは、自己の類推に過ぎない。たとへ他に確かに目的個性或は神が存在するとしても、それは我に對して絶對ではない。我に依つて意識された限り、それは自己個性即ち我れの生活内のもの、決して我れの生活を統一するものでなく、唯我れの生活を豊富にし充實ならしむる方便として内容として、我に對して價値と意義とを有する。自己個性を離れて他の物自身に我を左右する絶對價値ありと思ふは、到底個性の先天衝動たる要求そのものが許容しない所である。

## 六

社會の統一は各個人の動不動の自然的關係、愛憎好惡の心理的關係、又は利害の經濟的關係等に依りて説明すると出来ない。個性の渾一性を離れて單に社會的統一を自然科學的に認識せんとするは大なる矛盾、大なる不合理である。勿論その種の形式乃至狀態は科學的に研究し得るだらう。然れども是等の形式乃至狀態から、社會の統一性を構成することは全く不可能である。この統一なるものは是等の狀態と根本的に異なるもの、それを超越したもの (einzelnüberlegene) である。しかしこの統一は個性を超越したものでなく、却つて個性に依つて統一されたもの、言ひ換ふれば社會に於ける凡ての動作及び關係が個性の絶對的價値意識即ち根本要求に統一されたものでなければならぬ、否らざればその統一は決して實在的ではない。故にもし社會が個性の要求を無視して或はそれを超越して、一般的事業を爲したとしたならば、その社會は個性の生活内容ではなく却つて生活の敵

破し、自由運動をなすものである。例へばかの音楽家の如きは同時に兩手兩足を動かし乍ら、更に美しい音聲を出して音楽を奏する。この場合手の運動と足の運動とを分割して、全く關係のない個の運動と見るとは出来ない。更にその口内より發する音聲と樂器の響きとを無關係に解するとも出来ない。之等を音楽家の意識の運動と比較して考ふるときは益々密接なる統一がある。個體は過去も未來も意識しない、従つて現在もないが、個性は同時に過去にも未來にも居るとが出来る。又同時に甲の人にも乙の人にも働さかけるとが出来る。然れども是等の運動は個性の渾一性を外にして、到底理解し得ないのである。

されば生命即ち個性は持續性 (Dauer) と統一性 (Einheit) との一致融合した渾一體である。單なる時間てなく空間でもなく、更に深いもの更に充實したもの、言ひ換ふれば精神のあるものである。而してこの渾一體の内には勿論、非常に複雑な變化即ち多樣性がある。例へば前にあげた音楽家の運動のやうに、同時に時間的變化と空間的變

化とを有する。統一性の方面から見れば空間的變化であるが、持續性の方面から見ると時間的變化である。而して個性の渾一性から見るときは、絶對的に分割の出来ない變化である。なぜならば個性の空間的變化即ち位置の變化運動 (Ortsveränderung) は、必然的に時間的變化即ち性質の變化 (qualitative Veränderung) を伴ふからである。もし個性の空間的變化が絶對的に時間變化を伴はないものならば、その個性の運動といふとが出来ない。而してこの變化の伴隨は個性の意識性に基因する。なぜならば意識の本質は記憶のつゞきであるから。例へば余が林檎を同時に弟にも友人にも與ふるときに、弟に對する氣分と友人に對する氣分とが全く同一なるとは出来ない。又今日友人に與ふる心持と昨日與へた時の心持とは同一でない。これは意識には記憶即ち發達性或は變化性あるが爲めである。かゝる個性の渾一性は我々自ら自己の動作に參與して直接經驗するのであるが、科學は凡て之れを分析して靜的に研究しやうとするから、個性の本質を理解し得ないのである。



## 五

從來の科學は個性を研究するに三、方面から始めた。即ち初から渾一的個性を三方面に分解して、更に精密に部門的に分解しやうとしたのである。生理狀態と心理狀態と運動狀態即ち行爲である。生理狀態の分析は生理學、心理狀態の分析は心理學、而して運動狀態の分析は倫理學の本分である。是等の三科學は何れも分析をその任務として居るので、物の本質は問はない唯その狀態を翻譯する。言ひ換ふれば、狀態の異つた多様性のみを注意して、多くの記號に分析する。しかし科學の見る多様性は徹頭徹尾 Homogeneous のもので、個性の多様性とは根本的に異つてゐる。彼等には心理狀態と生理狀態との本質的差別の説明は出来ない。更に個性と個性との差別を認めない。倫理學は多少個性の統一性を意識して居るが、それは單に狀態の統一に止まり、依然として分析法で統一を講成しやうと努めてゐる。だから倫理學の統一は純然たる形式即ち概念であつて、何等の内容も努力も

ないものである。随つて個性の自由といふも本來の立脚地からは、何うしても説明の出来ない問題である。

今個性を生理的に直覺すればそこに空間的統一を認識し、心理的に直覺すればそこに時間的持續を認識し、行爲その者を經驗すれば、そこに潑刺たる渾一性を認識し得る。生理學は空間的統一を分析して化學元素に到達し、遂に個性の肉體的生命を捉へ得ない。心理學は時間的持續を分析して神經作用に横入りし、遂に個性の意識的生命を逸した。更に倫理學は生理學と心理學との結果を組み合して、個性の行爲即ち意識動作を理解しやうと爲し、そして個性を空虚な陰影の中に辛じて摺み出したのは、皆當然の結果である。個性の渾一性は最も明かにその行爲即活動に現はるゝものであるが、この行爲は實に精神と肉體との交感的融合であるが故に、過去の記憶より分離出来ないと同時に、物質や自然法とも離すとの出来ないものである。行爲の自由には少しも自然法則を含有して居らぬと思ふは謬りである。行爲を科學



い。記憶のない所に進化と統一とのあるとは、斷じてないのである。科學の分析して得た所のは、かゝる個體的存在である。個體的存在の前後左右の並列<sup>シヤグスタホシヨ</sup>、並びにその自然的關係が科學の世界である。然るに創造の世界に於いては、羅列<sup>リンチス</sup>或は全體<sup>ホーヤ</sup> (Ganze) である。自然的關係でなくて意識的關係である。この意識的關係 (bewusste Beziehung) と云ふとは、渾一性の本質であつて、我の統一的人格を理解する上に最も重要なものである。

人格の渾一的個性を根本的に理解するには、價值意識<sup>トベウストヤイン</sup>即ち要求の何たるかを研究せねばならぬ。なぜならば要求なくしては、生命も個性もあり得ないからである。人格の渾一は單にベルグソンの説いた様に、意識の形而上學的持續言ひ換ふれば時間的連續のみでは理解出来ない。記憶といふとも若し全く價值意識即ち評價を離れて、意識そのものゝ本質上必然的持續であるといふならば、それは果して我々の生活に何程の意義を有する

ものであらう。又何程の効果があるであらう。我は時々記憶そのものを呪ふとがなからうか。過去の記憶一切を忘却してしまふと思ふとがなからうか。我々の要求を離れて記憶は無意味である。否却つて個性を分割せんとする大なる力と誘惑とを胎藏してゐるものである。これが爲めに人格の統一の緊張が弛廢せられ、創造的意志が麻痺せしめられる。更に創造といふとも純粹持續であると云つた丈では、まだ不充分である。そこには努力なく要求なく、充實がない。單に純粹に時間的持續のみから人格の統一を説くのは、少くとも個性の本質に徹底したものではない。絶對的な價值意識即ち根本的衝動的內面要求に觸れないで、之れを直覺し體驗しないで、人格の統一言ひ換ふれば眞の個性を理解し得るであらうか。個性の不可分割といふとが、單に時間上の意識過程であるならば、それは何等の目的も力もないものでなければならぬ。それは單に心理的個性である。されども人格<sup>パーソナリティ</sup> (Persönlichkeit) を有する個性は、必ず價值意識

を有する個性、意義を欲する個性である。かくして初めて自由も創造もその根柢を有し、甲と乙とが特別の意味を有するのである。この點に於いてベルグソンの説明は、猶甚だ消極的であると思ふ。

#### 四

生命を時間的に見るとが、もしその不可分割の意味であるとするならば、それは又空間的にも言ふとが出来まいか。然りである、生命は時間的には持續であると同時に、空間的には統一である。更に進んで云へば生命にはもつと根本的な全體的な性質がある。これは生命が益々進化して意識が明瞭となり、人格が愈々その個性的自動的存在を確實ならしむるに従て廣さに於て深さに於て發揮して來る。而してこの根本的な全體の性質を發揮するに従つて、生命は完全なる域に達する。そこに生命は絶對的個性として現れて來る。故に全體の本質は人格の個性を理解するに欠くべからざるものである。これは即ち時間空間を超越したもので、個性の渾一性ユニバーサル・インディビデュアル・ナチュールと名づける。斯かる渾一性は物

質の運動に就ても消極的に認むるとが出来る。例へばイの所からロに達する運動は、時間的に云へばイ秒よりロ秒に至るまでの一運動であるが、空間的に云へばイ點からロ點に至るの統一である。然れどもこの運動は單純である。持續と統一との渾一したもので、時間的に見たる空間的に見たるは、既にこれ運動を分割し初めたものである。況んや科學者のやうに更に時間を分割し空間を分割するに至つては、ますます運動の渾一性を滅却するのである。運動を時間的にのみ見て空間的には分割し得ると思惟するは、これ未だ運動を意識的に考へないからである。物質界に於ける器械的運動を時間的持續と見るは敢て困難ではない。然るに個性の運動即ち意識的行爲に至ては更に空間的統一性がある。物質的個體は同時に異所を占領し、同時に異なる運動を爲す事は出来ない。例へば玉突の球の如きは、同時に此所にも彼所にもあるとは出来ぬ。又同時に右にも左にも動くとは出来ない。然れども個性は必ずしもかくの如き制限を受けない。發達するに従つて益々此の如き制限を突

得たと思惟する。然れどもかゝる説明は余の行爲の本質を少しも理解してゐない。之れは單に行爲の一般的形式に過ぎない。だから若し甲の人が余と同一のことを爲したとしたならば、科學者は矢張り同一の説明を與へるであらう。乙の人がやつても亦確かに同一である。なぜならば科學者の説明した行爲は、余の行爲でなくて、甲にも乙にも當てはする一般行爲であるから。而も余の行爲と甲又は乙の行爲とは決して同一ではない。心理學者は各人の動機に、程度の差をつけて説明せんとするかも知れぬ。されど動機そのものに本來程度のあるものであらうか。動機は分析し比較し得べき關係のものであらうか。斯くして科學者は遂に、この單純なる一行爲を認識し得ないのである。

科學者は單に余の行爲を、數多の符號に翻譯したに過ぎない。余の行爲そのものは決して是等の符號の中にあるのではない。又是等の符號の關係的結合の中にも含まれてゐない。その行爲の本質は佳人に對する意識にある。この意識はたとへ戀愛の意識と解つても、その氣分の色合及びつゞきは、

科學の立脚地からはいかなる記號を以ても、表し得ないのである。科學者は自然法に叶つた、比較的物質力を多く費した行爲が、最も意義のある且つ有益な行爲であるといふ。されど我々に取つては、そは何等の意味もないのである。

科學は到底個性を認識し得ないといふ理由から、個性の存在を否定し去るとは出来ない。なぜならばそれは個性の存在しない爲めであるから。科學的方法の不完全なるが爲めであるから。個性と科學的研究とは兩立しないものである。故にもし科學がその本來の態度を抛擲し、非科學的方法をとる事ありとすれば、個性は必ずしも認識し得ないとはない。否最も直接に確實に認識し得るのである。而して從來科學の研究した知識が、皮相的な相對的なものであるとするならば、個性的認識は本質的絕對的であると云ひ得る。なぜならばそれは一切の假定乃至關係を超越したものであるから。然らば個性とは果していかなるものであるか。勿論そは我々各自が直接經驗するもの、言ひ換ふれば内面的に直覺するものであるから、科學的に説



明するとは絶対に出来ない。科學的に説明が出来ないといつて沈黙を守るとは、又甚だ愚などであるが、併し科學的でない限りは如何様にも、それに對して説明を試みられる。又個性の絶対的なものを毀損せざる範圍内で説明するは、一向差支ないと思ふ。

### 三

科學の研究法が分析的であるとすれば、個性は全く分析すべからざるものであるといふとが、最も明瞭な説明であらう。個性とは元來分割の出来ないもの (individual-indivisible) とする意味であるが、それは數學的に或は化學的に分割出来ないのではない。個性は決して單數でも元素でもない。ここにいふ個性は數學的個性でも化學的個性でもなく形而上學的個性である。言ひ換ふれば持續的個性、直覺的個性である。然らば直覺的個性は何故に分割出来ないかといふに、それは純粹の渾一<sup>ユニタス</sup> (Übereinstimmung) であるからである。純粹渾一<sup>ユニタス</sup> 是はいかなるものにも分割出来ない。それは時間的

に分割出来ないのみならず、空間的にも分割出来ない。否時間と空間とに別々に離して考ふるとの出来ないもの、本來時間と空間とを超越したものであるといふとが出来る。故に個性の不可分割は、それが元素言ひ換へれば既に分割し得る要素を含有してゐない爲めでなくて、全くその持續的統一な爲めである。その自由なるが爲め、創造的なるが爲めである。更にその異質<sup>ヘテロゲニアス</sup> 的なるが爲めである。分割は元來時空の同質<sup>ホモゲニアス</sup> を豫想する。而して同質は記憶のつゞき即ち創造的進化を認めない所から生じた翻譯である。隨て自由の理を説くとは出来ない。なぜならば自由は個性の必然的屬性であるから。數學的單數及び化學的元素ならば、自由がなくとも、記憶のつゞきがなくとも、個性であると云ひ得るかも知れぬ。しかしそれは生きた個性ではない。否嚴密に云へばそれは個性ではなくて、個體である。生命なき器械的物質である。それを支配するものは内部の力でなくて、他から加へられた、器械的自然力である。個體には決して意識<sup>コンシャス</sup> (Bewusstsein) はなから従つて記憶のつゞきがない



研究すべきものでなくて、形而上學的に經驗し直覺すべきものである。本來流動的なもの進化的なもの、意識的なもの、統一的なものは凡て之れをそのまゝ科學的に分析研究することは出来ない。科學の世界は個性の世界、即ち創造の世界とは、その本質が根本的に異つてゐる。科學の世界は全く流動しない、進化しない、意識しない隨つて統一のない世界である。故にたとへ個性を科學的に研究したとしても、その得る所は決して生命に對する眞の知識、即ち絶對的認識ではない。個性の性質は元來その自由にある。そして個性の自由は、意識する、言ひ換へれば要求するといふ神秘な内面的事實、即ち先天衝動から發する。この内面的事實は絶對的なものであつて、あらゆる假定及び法則を超越して居る。而してこの事實は我々の行動に徴して明かに了解し得る。我々の行為の價值乃至權威は、この内面的事實の絶對的なことに基因する。決してある種の假定や外部に對する關係に依存するものではない。だから我々が自己の行為に對して、ある種の假定及び關係上

から批評され判斷されるときは、非常に不愉快な感じ、侮辱された感じがする。なぜならば我々の生命たる行為の自由を無視され、内面的の絶對權威を蹂躪されたからである。若し基督の愛を評して、彼れが愛の道德的なことを意識したが爲めに、或は貧しさもの病めるものを不便と思ひしが爲めに、或は彼れの性質の病的なるが爲めに、かくの如き愛を爲したと言ふものあらば、基督は必ず、自己の權威の侮辱を感じずであらう。否彼れはかゝる批評は一切理解し得じといふに相違ない。もし基督が自己の愛に對して何等か言ひ得るとせば、『我は愛せんが爲めに愛した』といふの外に、何事も語り得ないであらう。我れは愛せんが爲めに愛した。これは到底説明し得ることではない。いかなる説明もいかなる象徴も、殆んどその絶對的意識の氣分を表現し得ない。説明や批評に慣れた倫理學者は、かゝる愛を盲目的である、非道德的である、無意味であるといふであらう。勿論それは科學者としての立場から言へば、或は眞理であるかも知れぬ。然れども科學者の所謂愛は

自由の愛ではない。絶對の愛ではない。かゝる個性の愛は單に關係に依りて説明することは出来ない。

## 二

科學の世界は凡ての個性を排除した世界、自由の創造力を認めず進化を否定した世界、絶えざるつゞきのない個々體の世界である。だから時間的にも空時的にも、凡てが同一一般的な世界である。然れどもかゝる世界は果して存在するであらうか。假りに存在し得るとしても、それは世界と名くべきものであらうか。何等の意味も價值もない世界の存在は、到底我々の思考し得ない所である。しかし斯かる世界は、科學者から見ると實際ある。而も儼然たる實世界である。この外に他の世界ありとせば、それは幻影の世界、空虛の世界である。科學者の所謂幻滅とは空虛の世界を滅して、自然的な一般的な反復的な世界に目覺めることである。されども我々から見ると、これ果して幻滅なりや幻生なりやは容易に理解することが出来る。

我々は不幸にして科學者の實世界に目覺めることは出来ない。又悲しいことには科學の幻影世界を憧れてゐる。我々は何うしてもこの世界を斷念する勇氣はない。勇氣の出るときは既に、我々の生命の盡きた時であらう。故に我々の世界と科學の世界とは、根本的に相容れないものである。科學者には我々の内面生活の自由な清新な根本世界は、空虛な陰影として現れる。例へば、余が銀座の街頭から金の指環一個を買ひ求め、之れを小包に託して湘南の佳人に贈つたとせよ。この行爲は單純で而も不可分割のものである。然るに科學者は余の行爲を分解して、いろ／＼に説明するであらう。先づ銀座、金の指環、金圓の供給、湘南の佳人、小包郵便等數多の記號を列擧するであらう。次ぎに之等の名稱の間に、種々の關係をつけて何等かの連結を求むるであらう。指環と金圓の間には經濟的關係をつけ、余と郵便物の間には社會的關係をつけ、そして余と佳人との間には友情關係をつけて一般的の法則を立てるであらう。かくの如くして科學者は余の單純なる一行爲を理解し

基督教たるを失はぬ様古き方向にも十分近接したる啓示である。彼は多くの近代的勢力の中に恰も斯うした基督教の進歩を認めるのである。即ち内在と人道主義の力説、宇宙の無限なる大さと共に、神の性質中に未知分子のあるとを認める事、奇蹟に對する反抗、隨て基督教社會と非基督教社會との間にある溝渠間隔の撤去といふ事共である。彼は又機械的よりも寧ろ動的に啓示を見る近代の信仰、従つて一切儀禮的觀念には反對なもの、中にも基督教の特性を認めてゆく。創造者から捨てられて罪と其解脱のためにのみ忙殺される所謂失はれた世界の觀念を排斥すると、終局として見らるゝ絶對的真理を包含的體系的に組織形成せんとする要求を擯けると、而して最後に、人生の全體は靈によつて支配さるべきものとし、又宗教的經驗とは人生のあらゆる要素の評價又個人攝取であるといふ、さうして思想や世界に向けて基督教を展開すると。かうした傾向の中にも彼は基督教の本性を認めるのである。

凡て斯うした一切の近代的思想は、現代生活における神自身の眞實な顯現、人類に對する神の自啓の最近最新の形相として見らるべきものである。



## 創造の世界

### 個性論

野村 隈 畔

一

生命は生きつゞきである。創造のつゞきである。言ひ換へれば、記憶の進化的持續である。而して記憶のつゞきの眞の姿は、我々の内面的意識を直接經驗するに依て、即ち直覺するに依つて認識せられる。生命は記憶の進化的純粹持續なるが故に、その過程は創造的であり、個性的であり、而して時々刻々の異質的變化である。もしその過程より記憶のつゞきを剝奪したならば、言ひ換へれば、意識そのものを嚴密に科學的に見たならば、我々は果して生命を創造的であり個性的であり、而して時々刻々異質的變化であると思惟し得るであ

らうか。つゞきのないものは決して個性的といふとは出来ない。個性的でないものは、決して異質的變化を爲すとは出来ない。而して異質的變化がなくして、そこに創造があるといふとは無論出来ない。なぜならば、創造とは單なる空間的變化、言ひ易ふれば同質的の變化でなくて、異つた性質變化して行くつゞきであるから。そしてこの異質的變化のつゞきは生命そのものの本質である。

生命の本質はかくの如きものであるとすれば、生命は即ち個性インディビジュアル（Individual）であると云ひ得る。而して科學や從來の哲學が、到底かゝる生命を認識し得なかつたといふ理由も、その個性なるが爲めであると云ひ得る。蓋し個性は科學的に



彼は亦た此點の故で以て、他方面では互に相反對して居る教義學者、組織神學者、哲學者、保守的又進歩的の凡ての側から、聯合一致の攻撃を被つた。彼等には個人の最高權ほど憎惡すべきものはないからである。

其批評に對して彼は、個人の信仰と史上の事實との間に存する本質的關係を以て答へる。神秘家は現實を忘れて永遠の中に没頭してゐるが、トレルチは有神論を以て宗教の全現象と其の史上における進化に基礎を置かねばならぬと云ふ。彼は從來唱へられた歴史と規範との關係に就ての三説を排して居る。即ち歴史は人類理想の暗い表現に過ぎぬとする合理論と、奇蹟に依て保證される權威を要する超自然主義と、それから歷史上における觀念の絶對的實現なる進化論的唯心論と、凡て此等の説は前世紀の批評に依て破壊されて了つた。そこで、唯一の他の解釋は史的傳説と經驗を以て、必然にして眞理と認識された實在の純な事實的不合理的連續であるとする見解である。一切の新思想と經驗とは、其先行する思想と經驗から流出しても其中に包含されないで、其連結の證左となつて居る。故に常に過去に對する熱情、未來の新創造、それから個人的攝取といふとがある。史的對象は決して單に攝取され易くなつて居るものでない。却て常に新に創造されて、史的分子と意識的にして個人的な擴張と變更との混合の中に、其連續性を支持する。之れは單なる放恣な主觀説ではない、寧ろ正確な史的主觀論といふべきである。

彼は事實から豫想に論陳を移す傾がある。而して歴史を考量評價するに豫想の正當なと否其必然なとまで認容する。唯問題とする所は、豫想の依て生ずる經驗の範圍と精確性と、それから其が種々な

る事實の攻撃に堪へられる能力如何といふのである。吾人には史上に原本的精神的價値の存在の可能性のみならず、其蓋然性すらも豫想する權利がある、其價値といふのは純粹に自然主義的に假定を以てしては説明されないものである。更に自然主義者も全く其方法に於ては不正當にも「先天」といふ保護を要するとは理想論者と同様である。宗教史を判斷するトリュルチの規準は之である、即宗教は宗教的先天價値が最も明白に發現して居る最高點であるとせねばならぬ。宗教の中には絶對感が最も充分に表現されてあるといふものである。

## 六

然るに彼に依ると宗教的先天、絶對感といふのは大宗教的人格の事柄である。是れ一切永續的宗教の本源は個人に與へられた天啓であるからだ。そこで彼は勢人類の宗教的天才を高調力說せねばならない。此點は彼のリッチル派と相爭ふ一つである。リッチルの神學では獨特の根柢をなして居る此の創造的個性を、トレルチも暫く力說しては居るが、彼は更らに宗教は獨り其の創立者に依る許りでない又其發展の全線に互つて見らるべきものであるとを主張する。例へば基督教を考ふるに當りては、基督の教訓や人格はたとへ其中心又支配的のものではあるが、單に之で充分な標準とはならぬ。寧ろヘゲルの豫言者に始り耶蘇で其絶頂に達し、パウロ加特力教會新教徒の運動を通して發展され終に今日吾人と共にあつて生き、生長し、創造し行く力である。斯して遂に進化的啓示の概念に到達する、之に依れば聖書は中心的思想惟されて而も現代の啓示が並び認められる。進歩するが而も傳説と結合し

つて居る。正統主義の排他的超自然主義を以て、彼の包容的超自然主義を非とするからそんな評を下すのである。併し事實彼は實證論や實用主義や唯物論を採らないと同様に汎神論者でもない。彼の神の觀念は彼が屢々推賞して措かないベルグソンの創造力と似て居る。即ち神は彼に依れば、吾人の理解を絶する世界に働いて之を期待豫測の中に入れられない大なる不可説の力である。神は不可解であるが人類史上殊に其最高人格の中に顯現して居る。若し吾人にして世界の世紀、人類の住む他世界の存するを、有史以前此地上に生活した無數の人類の在るを考へ來るならば、神の自啓を一時一處に限定するとが出来ない。神は人類の心を以て計るとが出来ないが、人格的語類で考ふる外ない。世界より離れてあるも尙それに内在し、人より離れてあるも之と交通し得るものである。斯うした説き方は徹頭徹尾有神論である。此中には神の性質中の意志的にして、明かに非理知的な分子が著しく力説されて居る。其結果としてトレルチは普通のカルビン派の人々よりも、遙に大なる同情をカルビンの豫定論に有つて居る。彼は此教義が今日輕視されて居る不當を鳴らして居る。

#### 九

要するに宗教意識には、心的生活の他の形相と同様に、人に確實な知識を與ふる權利と能力がある。從來は餘り論理的能力といふとのみが正當と主張されて來たが、其結果として機械的自然主義的又は理性の知れる法則を絶する創造的精神を解しない機械的偏知的の理論家の獨斷説となつた。今や論理に其確實性を認むると共に、同じく道德的意識にも之を認むることになつた。之と同様に宗教の絶對

感も確實正當とさるべきである。永い經驗と人生事實の思惟に依て、宗教的信仰の正當なると、宇宙の靈的解釋は正當であるといふ知的自信が起る。併し此信認は信仰の補足的保證として輕視さるべきでないが、之を以て他に證明する證據とするには充分でない。本來宗教上の事柄は只宗教意義に依てのみ理解されるものである。そして確實といふことを樹立し其證明を擧げるには、只神自身との直接な靈的接觸を試みて、宗教的實驗に入るとに依る外はない。換言すれば其處は一切經驗中の最も著しく個人的なものである。それに對しては他の別種の經驗の交渉もあらうが、然もそれとは判然たる區別を守つて立つ統一のある、力ある自證的のものである。恰も吾人の論理的統一、善惡美醜の感覺が正確な様に、正確正當である。知識そのものゝ代りに宗教的知識の理論を以つてするとは出來ない。凡て其境を見んとするものは凡て同じ狭い内から入らねばならない、回心といふとも傳來的神學のそれではなくて、廣義の又全く深い意味で經驗されなくてはならぬ。低級から高級に至る、物質一的時期的のものから靈的永遠のものに來るといふ新生の實驗、宗教をして宗教たらしむる實在の感を信者に開示するための靈の父との交通をも實驗しなくてはならぬ。

## 五

茲に彼の最も根本的な要點がある、即ち宗教的過程の本質的主觀性といふことである。此點からして彼は有ゆる時代の神秘家や、彼のより深く歸依するシュナイエルマッヘルや、その聖書主義や反社會性を排し乍らも祇虔教徒や、及び彼の學生時代に此感化をうけたリッチルと深く接觸する様になつた。



此等の見解は從來妥當とされてあつた。然るに史的研究は事實を一層よく知つてよく説明するに至らしめた。道德と宗教的分子とが非常に密接して居る大宗教にありてすら、斯うした分化又は一致といふことは當筈まらない。宗教にありて第一要件は倫理的能力又は正義といふことでない。寧ろ神との融合である。次の要件は「それに似る」といふことであらふが、併し同一ではない。宗教は常に獨立である、而して道德より派生し又は之を聖化する爲に存在するものでない。一切の高等な宗教には、見えずして永遠なるものを眺むる宗教的分子と、見ゆる所の時間的實際的世間的道德的分子との間には對照せるは反對がある。宗教の辯護者が其信仰の道德的結果を擧げていふことに對しては、道德を缺いた強烈な宗教的情緒や、不死の極端な行爲に沈湎した狂熱的信仰といふものが持出される。之は勿論偽善ではない、發展の低いためである。而して此事は取もなほさず宗教と道德の同一又は派生といふことでなくて、各獨立のものたることを證するのである。道德はあらゆる其種々なる形式をもつて社會的生活から生ずる。然るに宗教は超人間的實在との經驗から源を發するから、本原的に道德と違つたものである。

宗教と道德との結合は只倫理と宗教の融合による。ヴントは主張していふ、此事は史的に成しとげられた、而して此故に宗教の目的は今や實際道德法であると。斯うした融合は決して絶對的にはならなかつたが、事實起つたのである。併し若しさうとした所が、之に依ては宗教が倫理に其源を發してるといふ事どころか、其反對さへも證明し得ないと思ふ。事實宗教は倫理に依て潔められて來つた。併しニイチェが基督教について云ふ通り、一切の普遍的宗教は二重の倫理を有つて居る。一眼は世界

に向ひ他の一眼は天を仰いで居る。即ち世間的道德と宗教的道德と是れだ。斯して二個の要素は相並んで存在し互に相異つたものとなつて居る。

### 三

トレルチの理論の道脈を簡単にいふと斯うである。一切の思想は、人類意識の事實の分析、純にして簡なる心理學的研究を以て立たなければならぬ。機械的自然主義的及び聯合説は全然價値のないものではないが心理の事實を充分説明し得ない。此問題を最もよく解くものは構成説である。精神には互に關係あるが各自獨立して各自の範圍を支配する種々なる能力がある。意識の倫理的美的及び道德的要素は各自の領分を有し、各自の原理に依て作用し、各自の標準に依て判斷される。然れ共人類經驗の事實は、宗教的意識も亦人類思想の獨立的分子を成すといふとからして、同等に取扱はるべきとを要求するのである。

宗教的才能の此特性は其絶對の感覺である。即ち世界の偉大なる宗教家に其源を發し、それから斯の如き本源的の生産的能力を有たない人々の中に、種々な方法に依て再現されるものである。此信仰の正確なるや否やは、心理學の範圍を絶し知識論の中に來る。此絶對感なるものは果して正確なるか。

トレルチの答は已に述べた通り、宗教的絶對感は人類の意識、就中吾人の所謂宗教的天才または豫言者と呼ぶ人類の大指導者の中に發現する絶對的客觀的實在に基因生起するものとする。彼は明かに有神論者<sup>スト</sup>で、徹頭徹尾人格的唯心論者である。テオドル・カフタン等が彼を呼んで汎神論者とするのも謬

は其論文の前半である。後半は彼の基督教觀で歐米の學者としては餘程思切つた立場から見たものである。

## 二

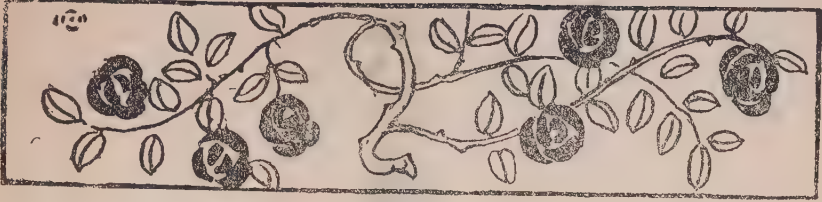
ヘーゲル派の進化的觀念論は、宗教を以て觀念に歸結する。即ち原始的宗教中に種子として存した觀念が、次第に進化發展して基督教に至り其最高絶對の發現に到達したのであるとする。此思想には偉大な、多くの人を満足させるものがあるが、種々の點に於て薄弱である。先づ後世の宗教に發展した種子を、何時でも原始人の抱懷した思想中に發見しうる程に、吾々は彼等の思想を知つて居らず又知られない。又史的基督教に、斯かる哲學的絶對と一致するとも出來ない。次に進化論は說として價值ある正當なものだが、之を世界の大なる宗教運動に當籍めるとは出來ない。是れ人類の永續的宗教を生じしめた偉大の中に發現する創造的支配的分子を無視するからである。斯くしてトレルチはヘーゲル、シェリング、ブライデレルやケーアドの様に宗教を哲學の附屬として見るとに反對する。

彼は又フォイエルバッハ一派の様に、宗教を以て單に人類の實用的創造、人類要求の詩的汎神化とする思想は迷想だとする。又宗教を藝術に歸し之を以て單に自然の美と調和の感覺なりとする美的神論も迷想なりとする。凡て斯る考は幻想を以て客觀的實在と豫想して居る。併し乍ら之れ果して宗教の事實を支持するに足る見てあらうか。若し要求が思想を産む父であるなら現るものは唯恐怖と心痛の感情のみであらう。併し事實は反つて暖かな感應といふものが慰安的賠償となり、一切宗教の有

力な分子として存在して居る。有力な宗教には常に溫和と峻嚴の二方面が有る。而して之は人工的創造といふとよりも、寧ろ客觀的實在に對する反應として見た方が更に優つた説明である。宗教的生命が獨立的文化を攝取するといふことは理想的過程ではない、何となれば宗教は文化の理想化でないからだ。却つて宗教はイスラエルや希臘にあつた様に、一定の文明形體から分離せんとした、且又文明が宗教の敵であるといふ見解は、絶えず見られるのである。宗教の著目する所は彼岸である。故に宗教を單に現實の再現の外何等新しいものを創造せぬ彼の詩的空想に押込めるといふことは、只其の絶對に對する根本的感覺を全き迷想となして了ふことである。之れ一切價値の世界を奪去るとである。

今日最も廣く行はるゝ説は、宗教を以て道德から派生したとするものである。或は少くとも宗教を正當な行爲の單なる侍女であるとする。即ち宗教とは絶對て色を附けた道德に過ぎない。所謂マヌーアーノードが感情に觸れた道德である。凡ての問題の倫理的方面が力説される時代には、斯うした一致の見方は止を得まい、して又事實兩者は甚だ相近接して居る。カントは道德的立法者とは道德法からの必然的結論であつたとする。即ち彼によれば宗教は權威ある超自然的衣服を道德法に著せるのである、無上命令法の自然的論理的結果なのである。即ち宗教は道德の結果、而して道德から生じたものに過ぎない。他の學者はいふ、宗教は人類が其道德の理想に到達せんとする努力に自らの弱點を生ずる所からして、空想的に作り出されたものである。此故に普通の人は之に従ふことが出來ないのである。之に依ると神とは吾人を人生の大なる道德的事業に向つて驅るため取入れられたものである、其の道德的行爲が自からの實行力を有たない時に、之を促進刺戟するためにあるものである。





## エルンスト・トレルチの宗教觀

相原一郎介

### 一

人類文化の凡ての形相が暴かれ研究される現代に於ては、基督教のみに對し獨り優先權を與へておくことが出来なくなつた。凡て他の宗教も人生の事實として見らるゝが故に、基督教も先づ此等の諸宗教と相並び同等の足場に置かれ、理性と科學の嚴密な檢査を受けねばならなかつた。斯くして過去一世紀に於いてあらゆる偶像破壊は行はるゝに至つた。白日晴天の下で奧秘な神聖體は解剖され分析された。獨逸の宗教歴史學派といふのは、所謂英米の比較宗教學派といふべきものであらうか、其起原は未だ最近の事に屬するにも係らず學界に多くの貢獻をなして居る。此學派の爲す所は實に自由な研究であるが故に、一方からは如何にも不敬虞亂暴なラデカリストと見られるが、已に云つた通り基督教をして白日晴天の下に他宗教と同等の立脚地から出立させて、其主張と價値に權威を發見せんと努力するに外ならない。過去の自由神學は破壊に忙しくて

未だ建設の見るべきものが無かつたが、今や漸く基督教の公明正大な主張權を説く聲を聞くに至つた。我がエルンスト・トレルチは其の第一人者として、獨逸の宗教神學界の敵味方から仰望されて居る。彼は一八九六年ウェントの後を襲うてハイデルベルグ大學の神學教授として今日に至つて居る。

彼はヒンネベルグの編纂した「現代の文明」といふ叢書中の一卷「組織的基督教」の中に、「宗教及び宗教學の本質」といふ序論と、同叢書の基督教史中に「新教と教會」といふ長編を書いて居る。又クロノフ・イツシャのための紀念出版書中には「廿世紀初頭の宗教哲學」を書いて居る。此他ヘルツオクの新教百科辭典及び目下發刊中の「歴史及現代の宗教」といふ辭典には幾多の重要な教義學文明史に關した項目を書いて居る。此他宗教哲學や科學に關した單行的小冊子は種々あるが、其中で「基督教の絶對性及び宗教史」といふものは一昨年第二版を出して居る。オイケン教授は彼の「宗教哲學の重要問題」の中の何處かで此書を推賞して居つたと思ふ。トレルチ教授は又昨年中、其の論文を集めて二卷の書を作つた。一は「基督教會の社會學」で他は宗教哲學神學倫理上の論文集である。彼は又目下宗教哲學の系體的著述に取かゝつてるといふが、一昨年已に宗教哲學及び教義學の講演をやつたやうであるから、其出版も近いと思ふ。彼は獨逸の學界では已に新進大家の部に列して名聲嘖々たるものがあるけれど、英米の教界には未だ餘り傳へられて居ない。近頃クラウン神學書庫の一として「新教と進歩」といふ彼の著述が翻譯された。又彼は昨年中米國ハーバード神學評論及びシカゴ大學出版の米國神學雜誌に論文を寄せて居る。最近のハーバード神學評論にプリンス頓大學のミラー氏がトレルチの思想一般を紹介して居る。此の人は最近彼の講演に侍した人であらふ。茲に抄譯するの

徒使  
保  
羅  
傳

洋裝布製箱入美本  
松永文雄氏著

定價壹圓郵稅八錢

嘖々の好評

「六合」曰く——信徒にも求道者にも一般の人々にも苟くも保羅を知らんとする人にとりて、學理に走らず、平凡に隨せず、憧憬と理智との調和を以て描かれたる保羅研究者の好著である。附録の引證は良き思ひ附である。

「基督教世界」

曰く——本書日本人の物せる保羅傳中の白眉たり。著者松永氏は初代教會史の專攻を以て名ある篤學の士、今其の積年の研究に基きて此著を公にす、苦心丹精の書として吾人の推獎する所以なり。

(中略)歐米に於ける最近の保羅研究の成果を集めて之を大成せるものと謂ふ可し。

「朝日新聞」

曰く——本書は此のパウロの信仰を主眼として説きたるものにして初めに羅馬帝國の當時の各方面の事情がパウロをして世界的傳道に進ましむるに深き因由ありしことを示し以てパウロの信仰、倫理觀人格等を平明に概説したり。

哲學博士アレン、ケイ、ファウスト先生著

(新刊)

宗教々育指針

△四六判表紙美裝二四四頁

△定價四十五錢郵稅八錢

本書は博士の深き造詣を以て學理的、心理的及實際的方面より日曜學校に關する宗教々育の持論を主張とを公表せるもの、而も各種の事項に對しては各種の名著を參照し一々其の材料の出所を明にし、更に過去廿有五年間米國及日本に於て親しく其の事業に係はりたる長き經驗の結果を加へて世に知らしむる所多し。故に他の群書に比して遙に一頭地を抜くものなるは今更に喁々するの要を見ず。苟も日曜學校に關係ある趣味を有するの人士は須らく先づ博士の名に賴りて直らに一本を購讀せられんことを敢て推獎する所以なり。

# 六合雜誌



二  
月

號





# 六合雜誌第三十四卷第二號目次

本 欄

エルンスト・トレルチの宗教觀……………相原一郎介……………一

創造の世界(個性論)……………野村 限 畔……………三

生の渴仰と祈禱……………鈴木 龍 司……………六

本源的生命……………三 並 良……………三

天變地異と生命の價值……………内ヶ崎 作三郎……………六

文 藝 欄

アブラハムと富める人(戯曲)……………佐 藤 清……………七

DARKNESS……………岡 田 哲 藏……………七

榕樹の陰(ラビンドラナース・タゴール)……………うちがさき譯……………八

海の夢(詩)……………佐 藤 清……………九

自殺せし級友……………福田秀太郎……………九

歐洲見聞記……………盧 山 生……………一〇



磯邊の一夜

茅渚の浦人……………七

灰

燼(小説)

井口杜村……………八

藝術座の「海の夫人」

ゆふしほ……………四

吾聲會の創作劇公演

T S K……………六

社會欄

學生と政治運動

太田振策……………六

トンチル長屋の印象

高橋清吾……………三

アンゼラスの鐘

星島二郎……………七

時評

△これ果して何の兆ぞ(内ヶ崎) △露西亞文學に於ける宗教的情調(S T)

△學界の恨事(三並) △三税廢止は第一歩のみ(嶺岸) △これ學者の

態度なりや(官學生) △南阿の大同盟罷工(ふみはる) △社會政策なき國

(BST) △民衆勝利の時代(鈴木)

新刊批評

惟一館たより

編輯室より……………

ライオン歯磨はみがきは

品質ひんしつの勝すぐれる  
人氣にんきの盛さかんなる  
販賣額はんばいがくの多おほき  
價格かかくの廉れんなる

點てんに於おいて

世界せかい一いち！

總すべての點てんが世界せかい一いち

# THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 397. February. 1914.

## CONTENTS.

Prof. Ernst Tröeltsch and his Philosophy of Religion...I. Aihara.	2
The World of Creation. .... W. Nomura.	13
Longing and Prayer.....R. Suzuki.	26
The Fundamental Life.....Prof. H. Minami.	32
Calamity and Human Life.....Rev. Prof. S. Uchigasaki.	38
<hr/>	
Abraham and the Rich Man ( <i>a play</i> ).....S. Satō.	47
Darkness. ....Prof. T. Okada.	57
Poems of Rabindranath Tagore .....Pev. Prof. S. Uchigasaki.	58
A Dream of the Sea ( <i>a poem</i> ). ....S. Satō.	63
On Suicide. ....H. Fukuda.	65
First Impression of Siberia. ....Rozan.	71
One Night by the Seaside.....C. Nakamura.	77
Tragedy of a Poor Couple ( <i>a novel</i> ).....T. Iguchi.	85
On the Representation of "The Lady from the Sea" .....	
..... Sub-editors.	94
<hr/>	
Students and Politics.....S. Ōta.	98
A Visit to the Slums in Tōkyō.....S. Takahashi.	103
On the Chausubara Orphanage.....J. Hoshizima.	107
<hr/>	
Topics of To-day.....	111
Books of the Month. ....	125
Unity Hall Reports. ....	132

Published Monthly by the  
TŪITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,  
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.



# 忽三版

早稻田大學  
教授

金子筑水先序 稻毛詛風氏著

四六判  
上製全

正價金壹圓

郵稅  
八錢

## オイケンの哲學

オイケンは現代思想界の明星也。物質文明の弊風滔々たる時生の價值と光彩とを力説せる者は彼の哲學也。著者は我國のオイケン紹介者の不誠實と無責任とを憤慨し斷然筆を呵して一流の體系と文章とにより此の大哲の根本的思想を最も精確平明に傳へんとして本書を成す是れオイケン研究者は勿論苟くも現代人を以て任ずる者の必讀を要請して已まざる所以なり。

● 稻毛詛風 市川虛山共著

● 四六判上製美本  
全 壹 冊

正價金壹圓 郵稅八錢

# 新刊

## ベルグソンの哲學の真髓

生命本位の哲學、直覺本位の哲學、流動進化の哲學と新哲學革新の第一鐘を撞きたる天才哲學者ベルグソンの名は今や雷霆の權威を以て吾等が面前に迫れるに非ずや。空虚なる論理的遊戲を排し、活哲學に依て宇宙の真相と生命の神秘とを味得せんとするものはベルグソンの哲學に就かざるべからず然して本書は此の現代哲學者の思想の傾向と價值と特色と眞髓とを最も精確平明に叙述論評せるもの苟くもベルグソンを知り現代思想の中心生命に觸れんとするものは一日も速やかに本書を讀み終へるべからず。附加雷同、絶叫呼號の時は去りて靜思反應以て自己の思想と生活とに徹すべき時は來れり。眞摯誠實なる人士の清鑒を待つ。

〔明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可〕  
〔六合雜誌第三拾四年第一號（大正三年）一月一日發行（毎月一回一日發行）〕

〔本誌  
定價一冊貳拾錢〕

發行所 東京市神田區表神保町 大田同館

Library of the  
PACIFIC UNITARIAN SCHOOL  
FOR THE MINISTRY  
Berkeley, California

# 六合雜誌



二  
月  
號

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可  
大正三年二月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌第三十四年第二號

# 謹賀新年

大正三年元旦

## 統一基督教弘道會

會長	副會長	理事	同	同	同	會計	幹事	書記
安部磯雄	神田佐一郎	岸本能武太	向軍治	内ヶ崎作三郎	内藤濯	三並良	鈴木文治	海上輝男

## 六合雜誌社

今岡信一郎	岡田哲藏	加藤一夫	吉田源次郎	内藤濯	内ヶ崎作三郎	野村善兵衛	小山東助	菊川四郎	三並良	鈴木文治	日比野幸一
-------	------	------	-------	-----	--------	-------	------	------	-----	------	-------



# 近 代 學 藝 叢 書

文學士石原謙氏完譯。序說及解説

第 參 編

## マッヘル シライエル 宗教論

菊版全壹冊  
高雅なる裝禎  
定價  
金貳圓  
送料金十二錢

最新刊

本書は現代宗教哲學の建設者たる著者が、青春の熱血を濺いで宗教の本质を闡明し、教養上必然にして最貴なる所以を切論せる古典的名著也。偉大なる氏の思想と生活とは、明快なる譯文と精細なる序說及解説とに由つて更に其權威を加へたり。専門研究者及教養に志ある士の精讀を俟

波多野文學博士宮本文學士共譯

第壹編

## オノノ理想主義哲學

菊版全貳冊  
定價金貳圓  
送料金十二錢

文學士和辻哲郎氏著

第二編

## ニイチエ研究

菊版全貳冊  
定價金貳圓  
送料金十二錢

波多野博士 村岡典嗣共譯

## 宗教哲學概論二

定價一圓三十錢 送料十二錢

東京市日本橋大傳馬町

内田老鶴圃

振替東京二二四六番



# ●神學部の開講

神學部は前期に引き續き、既に左の通り開講せり。その他の科目の設置は未定なり。又オイケンのものは其最新著にして、現に丸善書店に若干部あり、有志者は買ひ入らかるべし

●時●日……每週月、金曜の午後四時——六時迄。

●科●目……比較宗教史より見たる福音書。

ベルグソン著 Schöpfungserische Entwicklung の講讀  
(丸善にあり定價三圓七拾五錢)

●擔●當●者……三 並 良氏

統一基督教弘道會

## 教 育 部

■ 毎月二回、一、十五日發行

勞働問題の解決の先驅者

友愛會の機關新聞

# 友愛新報

一 月 一 日 發 行 第 十 九 號

定 郵 一 部 一 部 一 部 一 部 一 部  
價 稅 郵 稅 郵 稅 郵 稅 郵 稅  
金 部 金 部 金 部 金 部 金 部  
三 厘 三 厘 三 厘 三 厘 三 厘  
錢 錢 錢 錢 錢

■ 發行所

東京市芝區新堀町三十一番地

友愛新報社

# 注意！

- 一、本誌は一切前金にあらざれば發送致さず候
- 二、本誌は従前は本會及び本誌に特別關係ある人には進呈致居候處今回内部の整理と共に每號無代進呈は何人にも致し不申事と相成候間御愛讀の方は此の際本年度よりの誌代御送附下され度候
- 三、御送金はなるべく安全なる振替貯金に依られ度候
- 四、若し郵便爲替にて御送金の場合は芝區三田四國町二番地六合雜誌社と指定し拂渡局を三田芝園橋郵便局と指定せられ度候
- 五、本誌代金に對しては領收證を差出さず代金領收次第御注文通り發送可致候又前金切れの節は帶封に（前金切）と押捺致候間早速御送金可被下候
- 六、本誌の廣告に關しては御照會次第詳細に御通知申上ぐべく候
- 七、本誌への御寄稿は凡べて、本郷區眞砂町十五番地内藤濯宛に願上候
- 八、定價は内容の改善發達と共に昨年より下表の如く改定致候間御承知下され度候

## 本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金貳拾錢	郵稅共
六冊	半ヶ年分	前金壹圓拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓貳拾錢	郵稅共

●海外は郵稅一冊に付金六錢（清國を除く）  
●臨時號出版の際は規定以外に代金申受く

## 本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金拾貳圓
普通		半頁	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告御斷申上候  
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正三年十二月三十日印刷納本  
大正三年一月一日發行  
（毎月一回一日發行）

定價  
貳拾錢  
稅共

發行兼編輯人 鈴木 文治  
印刷人 山本 與一郎  
印刷所 株式會社 秀英 舍  
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

## 發行所

東京市芝區  
三田四國町

統一基督教弘道會  
〒振替東京二〇〇三番

## 賣捌所

東京堂◎北隆館◎東海堂◎同文館◎上田屋  
◎警醒社◎教文館其他全國有名書店

# 書籍特價發賣

## 統一基督教會案內

一禮拜說教 每日曜 午前十時

說教 內ヶ崎 作三郎

一傳道說教 每日曜 午後六時半

一聖書研究 每日曜 午前九時

基督教觀 三 並 頁

一靈交會 毎木曜 午後六時半

擔任 內ヶ崎 作三郎

一日曜學校

校長 山本與一郎

一音樂練習會 每日曜 午後一時半

擔任 矢野房代

三並良先生著

◎福音書大觀 全一冊 郵稅共 金四十錢

神田佐一郎先生著

◎登高自卑 全一冊 郵稅共 金四十錢

◎チャンニング一語千金全一冊

◎パーカー一語千金全一冊

◎エマーソン一語千金全一冊

右三冊を金三十錢(特別割引)にて送る

自由基督教ユニテリアンの小冊子 十餘冊

迷信を加味せず、科學と調和し現代と調和したる基督教を知るは萬民刻下の急務なり、本會は殆ど實費以下の定價を以て、これを全國に配本しつゝあり、右十餘冊を金二十錢(特別割引)にて送る

申込所

統一基督教弘道會

東京三田四國町二番  
振替東京一〇〇〇三番

# 創造

毎月一回

第一行日

# 第歩

■ 第四十號一月元旦發行定價廿五錢 ■

□ 停車場にて	（詩）	人見東明	□
□ 結婚まで	（小説）	加藤介春	□
□ 處女	（小説）	福永挽歌	□
□ 彼の女に與ふる歌	（詩）	福士幸次郎	□
□ 道惡	（小説）	岸田劉生	□
□ 調和と征服	（感想）	清浦青鳥	□
□ モムベルト三篇	（詩）	茅野肅々	□
□ 湖上	（詩）	福田夕笑	□
□ 殺戮	（翻譯）	米川正夫	□
□ 毒藥の壺	（感想）	相馬御風	□
□ 「海の夫人」の種々相	（評論）	中村吉藏	□
□ 「海の夫人」の内部	（評論）	仲木貞一	□
□ イブセシ個人主義序説	（評論）	稻毛詛風	□

## 相馬御風著

最も熱烈なる要求を以て新生活の第一歩を踏み出さんとするものゝ眞實なる叫びなり。最近の文壇に於て思想問題の中心點なるの觀ある『毒藥の壺』を初め著者最近の思想表白を收めて此の一巻にあり。新生活の曙にあこがるゝものは來れ新生活の曉鐘は今や鳴りひびけり。

新定價 金十六錢  
發賣

發行所 東京市小石川區 ● 創造社 東京堂發賣



## 惟一館なより

△十二月の惟一館はクリスマススの準備に、我も人も忙い思ひをし  
た。それに惟一館記事係りの小僧が何處に行つたか、見えなくな  
つたので、記事材料の供給者がなく編輯の方でも、このたよりを  
書くのに困つて了つた。それで何時も惟一館の窓から芝の本通り  
に面して、天下の形勢を睥睨してゐるやうな海上君のところに行  
つて、辛ツと間に合はして貰つた。

△十二月七日の、永へに若き心（内ヶ崎氏）、宗教の獨立（安部磯  
雄氏）十四日の心靈の創造（内ヶ崎氏）等が、この編輯メ切りま  
での主なる説教であつた。

△十四日には、十四人の新しい入會者と二人の轉會者があつた。  
新しき兄弟達の將來と惟一館の未來を祝福しなければならぬ。こ  
の夜はまた學生傳道演說會を開いた。帝大、早大、慶大の諸君が  
十人といふ顔觸れて、頗る盛なことであつた。

△十五日には、第廿二回の通俗講話會が開かれた。高崎介藏、向  
軍治氏のお話があつた。聴衆百五十人、餘興として薩摩琵琶の彈奏  
があつた。

△十四日以後は、いよ／＼クリスマススの準備で追ひ廻された。説  
教が濟むと日曜學校を始め、俱樂部の青年達や、委員室の中年達  
までが、合唱や、對話の稽古で目がまはりさうであつた。それか  
ら一幕物の劇をやるといふので、三並花弟さんが主として背景か  
ら小道具までを拵へて下さる。内藤さんがステージ・マザー・チャー  
といふ格、太田、中村、岸本、西田の諸君それに花弟君までが踊り

出していよ／＼芝居は本物になつた。そして絃二郎作の「紅い花」  
を「理想卿の女王」といふ題で演ずることにした。内藤さんは廿  
日過ぎになつたら毎日稽古をやるのだと言つて油の乗つてゐるこ  
と夥しい。（十二月十六日記す）

## 編輯室より

△明けましておめでとう。愛讀者諸君の御健康を祝します。私達  
は過去的一年に於いて、小ひきな力ではありましたが、何か或る  
物の影を、我が宗教界なり、思想界に投げることが出来たかと信  
じてゐます。私達の事業そのものが直接何の反響をも惹き起さな  
かつたかも知れないが、私達自身では少くとも私達の立ち場が一  
歩一歩明かに意識されもし、了解もされて來たやうに思ひます。

過去的一年に於いて私達は出来るだけ、宗教と文藝とあらゆる  
思想とを相觸れさせることを努めやうと試みました。そしてその  
中から、眞實に私達が求めて行かなければならぬ生命の基調に觸  
れやうと思つたのであります。兎も角私達は、現代の日本の思  
想界に於いて興味のある位置に置かれてあることを知つてゐま  
す。また責任を感じてゐます。來る一年間に於いて私達の理想が  
倍々新しい曙光に接近せんことを希望します。

△内藤氏が、本誌の編輯を何うとかするといふやうなことが、あ  
る新聞に載つてゐましたが、あれは誤であつて、同氏は仍り同人  
として吾々と同じ道を歩いて下さるのです、因に同氏は本郷森川  
町一、仲の通り二六三に轉居されました。

△内ヶ崎氏のロイド・ヂョールズが出版されました。

△加藤君の「闇に輝く光」もいよ／＼賣り出しました。

△吉田君も長崎から歸つて、本郷蓬萊町五、垣内方に移つた。

院長診察、月、水、木、金、午前、入院、診後應需、林、峰間、兩副  
長ハ目下當院ニ在勤

電) 八八八(病院用)  
本 八九八(私宅用)

# 東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

院長  
醫學士 高田 畊 安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ一二番

# 南湖院

河野、高橋、兩副長ハ目下當院ニ在勤、院長診察、土曜日午後  
入院、診後應需

の血と力を心ゆくばかり味ふことがでける。世の眞率な宗教家や牧者や修養を志す人々に一本を薦む（價一、三〇）

### ▲ジヨセフィン・バットラー夫人

矢島母子著・替醒社

發行

一千八百二十八年に生れて、一千九百六年に死んだ女豫言者バットラー夫人の小傳である。その一生は基督教徒の奮闘の生活であつた。その最も力を盡したるは婦人問題殊に廢娼問題であつた。時節柄一讀すべき著である。但し巻頭に早稻田老伯の序を添へてあるが、これはなくもがなと思つた。（價〇・五〇）

### ▲ロイド・チョールヂ

内ヶ崎作三郎著

これは本文に鈴木氏のロイド・チョールヂ論があるので、ロ氏その人の傳が窺はれるであらうが、次號に於て詳評する。

### ▲使徒パウロ傳

松永文雄著 教文館發行

火のやうな信仰と、深遠な思想を持つてゐた保羅の生活を内部的に解剖せんと努めたものである。神學の立ち場からでなく、寧ろ彼れ自身の日常生活や彼れの書翰に著はれた、彼れの内部的信仰の生活から、彼れを批評したものである。當代の羅馬帝國から説き起して、彼れの世界的傳道、彼れの新生活、自覺、基督との關係、彼れの信仰、愛、倫理觀、彼れの人格等を組織的に論じてある。信徒にも求道者にも一般の人々にも苟しくも保羅を知らんとする人、宗教を知らんとする人にとりて、學理に走らず、平凡

に墮せず、憧憬と理智との調和を以て描かれたる保羅研究者の好著である。附録の引證は良き思ひ附きである。

### ▲佇みて

土岐哀果著・東雲堂書店發行

土岐哀果氏は短歌の改革者である。そして氏の目ざしてゐる改革は、措辭上の單なる革新でもなく、詩形の單なる破壊でもなく、實に日常生活全體のさながらなる報告と云ふ點から始まつてゐる。だから氏の作には、文字の綾で人の目を眩まして了ふやうな偽りの手法がすこしも見えないのみならず、どこまでも一本調子で行かうとする眞實味が強く鋭く表はされてゐる。この書は氏が最近の歌集で、千九百十三年の五月、氏が讀賣新聞記者として、朝鮮と滿洲とを遍歴された折の收穫が盛られてゐる。氏は此の一卷に自ら序して、「僕みづからの肉體の斷片とも云ふべきものである」と云つて居られるが、「けふではじめて、われはわが身の愛すべきあるじにありけり、日はおほざらに」と云ふのだの、「さまざまの、はじめての人に逢ひたれど、尊しわれは、尊しわれは」と云ふだのを味つて見ても、私は其處に「土岐哀果」と云ふ一の人格の強みを感じずに居るわけに行かない。閑人や道樂者の玩具ぐらゐにしか思はれてゐなかつた短歌が斯くまで、改革されて、口調が可い惡いのと云ふ事を短歌鑑賞の標準としてゐる人のまだ中々に多い世間に見せつけるのは、至つて痛快な事である。私は此の一卷を眞面目な歌集として、また痛快な歌集として推稱したい。（價・六〇）

## ▲獨歩詩集 東雲堂發行

獨歩の詩集を手にして感慨無量なるものがある。彼れ近いて數年。吾人は未だ彼の如く眞摯にして卒直なる熱情家を見ないのである。今日から彼れの詩を見れば、その技巧に於て、その文字に於て、その感情に於て、頗る粗雑なものゝ如く、幼稚なものゝ如く思はるゝかも知れない。併しながら誰か彼れの詩から永遠に對する弱小なる自我の涙を見ないものあらう。神秘幽玄なる世界に對する現實の痛ましい哀愁に共鳴しないものあらう。そしてまた、彼れの不幸なる。かの全身全靈をさゝげた敗殘の戀のむくろの跡に泣かざるものあらう。獨歩の作品はその詩たると小説たるとを問はず、永く傳へらるべきものたるは言ふまでもない。

(一七〇)

## ▲女天下

チエホフ著  
伊藤六郎譯・新陽堂發行

或る工場の女主人アンナ・アキモフナのやるせない悲哀と寂寞とを描いたものである。二十七歳になつてもまだ男を知らず、戀もしない女の心の淋しさと、千人二千人の職工をみんな自分の贅澤の爲めに使つて居るのだと云ふ苦悶と、クリスマス當日に彼の富の前に多くの職工や學校の教師や生徒や、それから彼女から金をもらふ辯護士などが、お祝ひにやつて来る、それに應對する彼女の倦怠と、此處こまやかな心持がよく表はされて居る。勿論大したものでないが、チエホフ一流の氣のきいたところがある。

(價・四〇)

## ▲書窓車窓 加藤咄堂著・丙午出版社發行

加藤咄堂氏は佛教界の一立物である。地方に講演に出かけた。都合で讀書をしたりして生活して居る人である。この書はその旅行中や讀書の際に感じた氏の感想集だと云ふ。序文に(筆耕舌耕二十有餘年、齡不惑を過ぎてまだ安立の地を得ず、鬢髮霜を加へて壯志なほ消えず、言の稚氣を脱せず、説の圓熟を缺くものそれこれに由るか)とある吾々にとつては、他の多くの宗教家の如く、悟道を得て居る様な顔をしないうちに氏の長所がある、併し不幸にしてそればかりのことである。氏はよく自らを知つて居ると云はねばならぬ。氏は矢張り地方に行つて講演するのがよからう、もしくは經文の講解をするのがよからう。(價・六〇)

## ▲木山熊次郎遺稿 内外教育評論社發行

不振なる教育界に於て、眞摯熱烈にして、深大なる抱負をもつてのものとして、矚目されて居た木山熊次郎氏は三十二歳の若年をもつてこの世を去られた。それは實にわが教育界の爲めにも、木山氏の爲めにも痛恨のことゝ云はねばならぬ。今同氏の篤實にして強健なる人格を記念せんが爲めに、氏の稿を集めて出版したのが本書である。現代の青年、ことに教育家はこの書によつて大に啓發せらるゝところあらう。(價・六〇)



とを自覺して居る。その場合には此麼調和は果して何れ丈の力があらうか。

先生は尙も、この社會及國家を愛する力は世界人類を愛する力であり、自然界を通ずる生命であり、萬物の裏にあり、中にあり、超越して居る神と交感する生命であることを説き、自我はその生命の中に融け込むのでなくして飽くまでも對立するものであると説かれた。

『かくて神を信じ基督を信ずることによつて神に對するのである。神に吞まれるのでない、神御自身を自己の一身にせんとするのである。偉大なる人格の自覺がそこに明瞭になるのである。そしてそこに偉大なる力が發するのである……萬物を支配する王たるの自覺に達するのである。而してこれ實に基督が私共を召して神の子となす所以である……』

先づ大體、此麼説教であつた。自我（もしくは個性）を何處までも高調して、それが無限の大生命に吞まれるものでないと云ふのは讃成であつても、自我とその大生命との對立とは一體どんなことであるか、また對立すると同時に、その大生命が個性の中に自らを實現すると云ふことはどんなことであるか、それはもとより一場の説教では論じ盡されないであらうが、頗る曖昧であつた。私達は一場の説教であるからと云つて非常な重大な問題を放棄しておくことを許してならない。

この日の海老名先生は餘程油がのつて居た様に思ふ。インスピレーションに充たされて居た様に思ふ。先生は矢張り雄辯家である。特に此頃は鬚に白毛がまじつた所依つてもあらうが、何となく人生を知つて居るお父さんと云つた様な風が見える。丁度メテリリンクの劇に出て来る老人の様な感じを起さず人である。私は先生をモンナ・ヴァナのマルコ老人に非常に似て居ると思つた。たゞ異つて居るところはまだあれ丈の年功が積んで居ないと思はれるのばかりだと思つた。そしてマルコ老人と同じ程度に於て實生活の甘いも辛いも十分になめて居ないから、自分では人生を知り抜いて居ると思つて居ても、實際にはまだ何處かに急所にふれ得ないところがあることを感じずには居られなかつた。

# 新刊批評

## ▲人と超人

堺利彦譯・丙午出版社發行

バアナアド・シヨウの“Man and superman”の翻譯である。シヨウの作品中で、シヨウの人生哲學を味ふのには最も適當なものである。その中でも第三幕のドン・フアンの場合は、彼れの作としては珍しくイリュウジョンの昂じたものであつて彼れの辛辣な人生批評の警句が刺すやうに感ぜられるのだが、これは都合で梗概だけにして譯してある。太だ遺憾だが今日ではそれ以上は出す譯に行くまい。しかしながら他の三つの幕を通して、シヨウが言はんと欲したところ、語らんと欲するところを充分味ふことはできる。加之に巻頭卷末シヨウ研究に必要な材料を添へてあることは、頗る深切なやり方である。譯者の言の如く、シヨウは眞の意味に於いて近代の偉大なる説教者であり、哲學者であり、道德家であり、豫言者である。その中にても殊に「人と超人」は彼れの實際的でしかも哲學者的である方面を知るに便宜である。(價・九〇)

## ▲カンディダ

河竹繁俊譯・早稻田大學出版部發行

これもバアナアド・シヨウの數ある喜劇中で、その代表作と認められてゐるものである。元來シヨウの喜劇から出て来る笑は、何時も、人を壓し附けるやうな恐ろしい凄味の光をちら／＼と見せ

られるものだが、この作は殊にその感が深いものである。出て来る人物も人物も、如何にシヨウが現代人を深く解し得てゐるかに窺はれる。天才的な詩人マーチバンクスや、理智的な、そして彼の女自身の美の力を使つて巧に男性を弄んでゐる實際的な新しい女カンディダや、或は偽善家空論家の牧師モーレルにも、吾々と何れかに於いて共鳴する點を發見することができる。兎も角シヨウは現代の劇界が有する一ツの誇りである。しかもまだこの國では眞實に彼れは未だ了解せられてゐないと思ふ。彼れの作物が相次いで、紹介せらるゝことは、大に喜ぶべきことであると思ふ。(價・六〇)

## ▲ノラ

森林太郎譯・警醒社發行

婦人問題或は婦人解放と常に結び付いて聯想されるほど世界的になつたイブセンの「人形の家」の翻譯である。曩きに抱月氏が「人形の家」と題して出版したことがあり、文藝協會が演出して一時世間を婦人問題で騒がしたことがあつた。ノラ及び譯者の定評は既に定つてゐるからこゝに贅言する必要はない。紙質装幀また可。(價・一、三〇)

## ▲基督教講話

山室軍平著・警醒社發行

著者は最も熱心なる平民的基督教の傳道者である。隨てその口にする所も、必ずしも深遠の哲理ではない。極めて平凡な言葉で、基督教の眞髓を人に説くのである。氏の講話に深い所を求むることは或は不可能であらう。しかしながら燃ゆるやうな熱心

親もなく、子もなく、妻もない孤獨の人にして果して力があるか。親を養ふ義務があり、家族を支ふる義務があつて、初めてその人には力が生れて來るのである。力の源は即ちこの愛にある。……………

かくて先生は、この自我貢定の力は家庭や社會や國家を打破するものでなうて、それを成就するものであることを説き、他人や國家や社會を愛することが自己第二の姿であると説いた。

『富豪はその富の故に必ずしも幸福でない、却つて悲み憂ひの人である。併し富豪にして若し一度その財を社會又は國家の爲めに献げんか、喜びと平和はそこから生れるであらう。一種の麥、地に落ちて朽ちずんば實を結ばない。社會の爲めに盡せば自我も大きくなる。』

他人を愛することが、自己を愛する自我の第二の姿であるとなして、愛の爲めに自己を捨てることを自我と衝突しないと云ひ、社會國家の爲めに盡くすことは自我を大ならしむる所以であると説いたのは頗る我意を得て居る。先生も矢張り一切の根柢を自我におき、愛も犠牲も自我の爲めであるとせられるのである。これは普通一般の基督教牧師の容易に云ふことの出来ないところである。愛と犠牲とを極端に高調する基督教では決して此様なことを説いてはならないとせられるのに相違ない、併し先生はこれをせられた。

併しながら、これを以つて自我貢定と否定との兩道を全く完全に調和することが出来たと思へば、それは先生の大なる誤謬と云はねばならぬ。思想の表面ばかりを見て、一般的、概念的な調和を試み容易に結合することの出来ないものを無難作に組み合せるのは進歩主義を標榜し、思想に於て他派に優れて居ると自惚れて居る組合派の人達の缺點である。かつて自然主義が勃興した時分に、海老名先生は直ちに、基督も眞の自然主義者であつたと書いたのを私は覚えて居る。今はまた自我の貢定と

否定とを調和さして居る。凡ての思想を吞まうとする意氣は壯であるが、皮層であると云ふ謗は免れない。たとへば、成程、他人や家族を愛するのは自我の要求であるのは云ふまでもないが、先生の云はれる様に、常にこの兩者は并行するであらうかどうかと云ふとは實際問題である。親を養ひ家族を支へるのは自我の喜びであらう、そしてまたそれ等のものゝ爲めに精を出して働く時にはその物質的要求の多ければ多いだけ、忙はしければ忙しいだけ吾々の生命から力が出ると云ふのも事實であらう。けれどもその力は、家族や社會が國家の要求と自分の個性もしくは眞實と并行し、融合した時のみ發揮するものであつて、而も多くの場合この自我の眞實要求と親や兄弟や妻子の要求とは相背馳するのである。國家や社會と、自我との關係にも、それと同じものがあるのである。吾々は自我の眞實に生きやうとすれば、國家や社會の虚偽にして盲目的な勢力の爲めに、無殘にも、生存をさへ屠られなければならぬ破目に陥ることがあるのである。そして實際現代の眞面目な煩悶は茲にあるのである。この際、自分の安全をはからんが爲めに社會や國家や家族の意志に従つて自己の眞實を没却すべきか、或は死を見ること火を見るよりも明らかなるにも拘らず自己の眞實を主張すべきが問題なのであるか。たとひ家族の意志に背いても愛から出た自分の行動を斷行すればいい、然らばたとひそれがその當時家族の意に充たないことであつても結局は愛であると云つてしまへばそれだけである。併し私達はそんな概觀的な思想だけでは何うしても満足が出来ないのである。實際問題にふれて何うしたらよいかと迷はないで居られないのである。のみならず私達には、實際に於て、自分の眞實と、家族や社會の要求との間に矛盾する場合が決してないであらうか。私達は實際にそれが存して居るこ



力は茲から湧いて来る。力は全體を自覺するより出づる。全體なる神を味得する時に初めて生れる。

要するに先生の説教は之で盡きて居るのである。即ち力は全體なる神を味得するより出づると云ふこの一事に盡きて居るのである。先生は神は全體であると云ふ前程を据えて此の説教を始められたのである。そしてその全體なる神は基督によつて神に交るときに味得することが出来ると論ぜられたのである。併し『基督によつて神に交る』とは一體どんなことであるかはお説きにならないのである。

それは信者に聽かすのであるから説く必要がないと御考へになつて居るかも知れないが、これは實に重大な問題である。多くの信者と稱するものは解つた顔をして實は少しもわかつて居ないのである、否多くの牧師自身が解つて居ないことを解つた振して説いて居るのである。『主にありて神に交る』とか何とか云ふことは已に生命のない一種の（おさまり文句）であつて、言語の弄びに過ぎないのである。眞實なる求道者は何うかして全體を——先生はたゞに哲學的のタームとしての全體を云つたのではなくして、全體の生命のことを云つたのであらう。——味得したいと云ふことにある。それを味得しさえすれば、先生が以下に話された様な効能なんかは聞かなくてもいいのである。それを先生は何の躊躇もなく『基督にありて神と交る』と素通りせられたのは決して現代人の苦煩を知つたものとは云はれないと思ふ。

併し斯く云へばとて、先生が全くその生命を自覺する方法を教えないと云ふのではない、以下それに觸れて居る處は少くないのである。たゞそれが『基督によつて神に交る』方法でなくて、主として哲學的考案から來て居る方法である。先生は慥かにこの説教に於て哲學と宗教とを上手に握手さして居られる。先生は何時でも此麼説教をなさるのかどうか知らぬが、此の目のは餘程哲學味の勝つたものであつた。内的に缺けた概念的な理窟に富んだものであつた。いつそそんな事なら舊い基督教の形式に従つて「基督によつ

て神に交る』などと云ふ曖昧な、内容のない、言葉を用ひないで欲しいと云ふのが私の希望である。特に進歩派をもつて自ら任ずる先生に對して——。説教は下の如くに走る。

『吾々は先づ第一に自分を愛する。自分の生命を大切にする。他は一切排斥し去つても自分一個を立てやうとする利己的な性質をもつて居る。これは決して悪いことではない、生命に入るの第一歩である。茲に深い意味が含まれて居る。この主我主義に不思議なものがある。吾々は基督に來つてこの一念を打破するか？否らず。多くの人は自分自らを淺くし輕くして居る。吾々は基督に來つて自分の偉大なことを確信するに至つた。その偉大なものは自分の中にあるのである。一切のものを茲から抽き出すことの出来るものである。基督の所謂全世界をもつてしても代へ難いものである。それは太陽の光と熱とに散らされる朝露の儚ない生命でない。實に深い高い生命である。この生命を自覺し、この生命を生活することが基督者生活である。その生命の爲めには一切を捨てねばならぬ、一切を犠牲に供せねばならぬ。

即ち先生はその全體の生命と云ふものを吾々自己の低度の生命の中にさへ認めて居るのである。先生の所謂主我主義は彼の大生命の萌芽であるのである。私は先生が初めから神は全體である杯と持つて來たことを甚だしく慊らず思ふが、この一段に於て自己から大生命を掘りあてやうとしたことは感謝せずには居られない。而も多くの舊い牧師や宗教家や道德家が頭から排斥し去らうとする利己的、精神をさへ排斥すべきものでないとせられた先生の度量に感せずには居れない。吾々がもし全體の神の顯現であるならば利己も亦神の内容でなければならぬ。少くとも神の成長や進歩の過程でなければならぬ。

先生は茲に今日の思想界の問題たる自我肯定と基督教の自我否定との調和を試みやうとして居る。

『この生命は内より外に出てんとする力である。たゞ己れを愛する生命ではない、他人をも愛する生命である。それは發して親子の愛となり、夫婦の愛となり、友情となり、家庭となり、社會となり、國家となるのである。それ等を愛する力となるのである。』



## 本郷教會を訪ふ記

——教會歴訪記の三——

陰鬱な冬の日の曇つた大空がカラリと晴れて、小春日の様に温かく麗らかな日曜であつた。組合教會の主腦にして、かつて帝都の青年學生の熱狂的崇拜的となつて居たる、今も尙多數青年の着實なる指導者たる海老名先生の説教を本郷壹岐殿坂の教會で私は聞いた。十二月七日第一日曜日。

私はこれ迄にも度々先生の説教を聞いたが、未だ嘗つて一度も心の底から奮ひ立つたり、感激の涙を流つた様なことはないが、その代りまた一度も感心しないで歸つたこともない。軽い精神的興奮の微醉を感じないで歸つたことは滅多にない、私は一種の懐しみと好奇心とに充ちた心で出かけた。

私が教會の門口に立つたのは十時に少し前であつた。先づ第一にきこえたのはクリスマスのお稽古らしい少女の可愛い唱歌の聲であつた。入口のところに大分白い髪の雜じつた小羊の様な顔をした海老名先生御自身と、これもやつぱり小羊と云ふより外には名を付けない様な若い谷津博士であつた。會堂に入らうとすると一人の青年が騰寫版摺りの教會報をくれた。新人、新女界などもそこに並べられてある。富士見町の會報が印刷であるのに、こゝのは騰寫版である。富士見町の會員が青年よりも紳士に多いのに、こゝの會員は紳士よりも學生に多いと云ふことはそれによつても知られるのである。

富士見町の教會は整頓して奇麗で何となく神さびて居るのに反して、本郷教會は汚なくて落ち着きがよくてそして學校の様である。何となく座り心地さへよくない様な感じがする。こゝがこの教會の一つの特徴であるかも知れないが、金さへ出來たら——無理

に拘らへる必要はないが——立派な會堂を建て、少くとも壁畫位を描いてほしいものである。

十時に禮拜が始められた。額賀副牧師の『吾悲しみを知れり』と云ふた様な顔と、『吾愛を感じ』と云つた様な海老名先生の顔とが同時にバルビツトに表はれた。額賀氏の司令のもとに式が行はれたのである。路加傳十一章を読む額賀氏の聲は牧師として決して適當でなかつた。有り難さうに讀まないで、而も無難作な讀方をしてはならないと云ふ二つの努力が相反揆したものだから、何となく薄片で、潤ほひのない金切り聲であつた。氏の長い祈禱も同じ缺點があつた。あんな祈禱なら千言萬言云つても決して自分で満足しないだらうと思はれる程その祈禱が生命の核心に觸れて居ない様に感じられた。一體誰だつて日曜毎に心ゆく祈禱なんか出来るものでない。二言三言で満足の出来ない祈禱が出来ないと感じたなら、どん／＼黙禱にでもすればよいと私は思ふ。

説教の前に七八名の新入會員に洗禮式が行はれた。それがすんでから、海老名先生の説教があつた。説教の題は『能力の源』と云ふのであつた。内容は大略下の如くである。

『神を信すると云ふことは如何に尊いことであらう。わけても神と交り、神と親しむと云ふことは如何に味はひ深きことであらう。それは實驗の人でなければわからない。』

神は宇宙の一部分でない。全體である。一切は神の中にある。吾々は基督によりて神と交つて何を自覺するか。吾等は天地の小さき部分であると自覺することであるか、否。神の子であると自覺することである。而してその意味は深長である。神は全體である、一部分でない、故に神の子たる吾々も一部分でなくて全體である。神は大なる全體である。吾々は小なる全體である。一切が神の中にある如く、一切は吾々の内に秘そんで居るのである。吾々の中にはまだ現はれざる全體があるのである。この全體を信じ、交ることとは如何に尊いことであらう。



英國に於ては幾多の開墾せられたる土地あり、此等は皆荒蕪の儘放棄せらる。今にしてこれが計をなさずんば英國の農家は自滅のみ。農民の賃銀は低くして其生活を支ふる能はず、今や何人も農家のみを以てして相應の財産を作るの道なし、農民の借地權は不安定にして、地主の專横は其極に達す、農民は其結果流離して皆都會に出て、失業者となる。今日の土地制度は最も舊式にして獨占權の最も甚だしきものなり。此制度は最早改良の餘地なし、今日は全然此制度を根本より覆して、新なる制度を建設すべきの時代に屬す。

と、而して彼れは其改良策として述べて曰く——第一、農業労働者は適當の労働時間と相當の家屋、庭園を有し、且つ年賦に依りて將來自己の地面を所有するに至るべき希望あるを要す。

第二、農業労働者が自己の努力に依りて土地を改良し、其收益を増加したる場合に於て、理由なく其土地を沒收され、若くは借地權を値上せらるゝことあるべからず。

第三、農業労働者の智識を開發し、其の業務に就て絶えず向上指導の道を講ずべし。

第四、農民が其產物を市場に出すに際し、過大なる運賃を拂ふが如き弊を根絶すべし。

第五、政府其他の公共團體が土地を買上げんとする場合には、相當價格を以て之を買上ぐるやう法律を制定することを要す。又地主にして土地改良、又は其他の設備に努むるの意志なきか若くは實行するの能力なき場合にも、國家が相當價格を以て之を買上ぐるの法律を設くること肝要なりと。

更に氏は市街土地問題即ち都市改良の問題に就ては、最も激烈に少數地主が土地の獨占をなせるを攻撃して居る。此恐るべき獨占のために多數の貧民が、家賃の爲めに苦み、不健康の爲めに苦しみ居る

の實狀に對して、甚しく憤慨の語氣を漏らして居る。氏は身を以て此弊害を除去せんとして、奮戦苦闘を續けて居るが、これのみは流石の氏も、其情實利害の纏綿せるに、聊か手を焼いて居る形である。併しながら氏が此土地制度改革運動は、今や全國に反響を喚起して、滔々たる革命の怒濤は、國內を通じて渦卷いて居るから、いづれは氏の提案が勝を占むるであらう。但し保守黨の連中は無論默過する筈はないから、何れは英國議會に於いて一大波瀾は免れまい。地主對小作人、貴族對平民、蓋しこの取合は頗る面白いと思ふ。

最後に臨んで一言したいのは、氏が何故にかくも社會政策に熱中するかといふに、夫れは氏が寒村貧家の出なるが故なりといふことである。農民の苦痛、勞働者の辛苦に對して、百も二百もよく承知して居るからである。貧家に生れて、大藏尙書の榮位に上つたのも偉いが、榮位に上つて昔を忘れないのも偉いと思ふ。余は英國の現代の偉大なる一平民として永遠に氏を記憶したのである。翻つて我國の現狀は如何、五萬圓の歳出が覺束ないといふ理由の下に、既に議會を通過して二年にもなる工場法は、むざ／＼又もや無期延期となつた。あゝ西の端なる社會政策の模範國と、東の端なる社會政策絶無の國と、洋を隔てゝ攻守同盟の誼を結びつゝありとは、何たる天の諷刺ぞや。

行力を有することゝなつた。而して今も尙効力を有するは勿論である。

### 三

ロ民が社會政策上、第二の效績として數ふべきものは、國民保險法である。此保險法は英國內全體の勞働者に及ぼす大法案であるが、これは勞働者の疾病保險法と失業保險法とより成つて居る。これも獨逸に於ては、疾くに實行して居るものであつた。それをロ氏自ら五年前獨逸に赴いて、最も熱心に研究の結果、一昨々年議會に提出することゝなつたのである。

此疾病保險法は、勿論勞働者の保護の目的に出たもので、勞働者が疾病の爲めに、其勞働を停廢するに至れる時、其生活費を補充せんとするものである。之れが支給の方法は、二十六週間を限度とし、男子は一週間に五圓、女子は一週間に三圓七十五錢を給與するのである。資金の拂込の方法は、直接の利害關係者たる勞働者第一に多額出資し、次に雇主、次に國家といふ順序を以て、各其一部を負擔することになつて居る。此法案も多少の反對を受けたのであつたが、結局同氏の勝利となつた。

次に氏は更に勞働者を失業の苦痛より救はん爲め、失業保險法を案出した。此法案は全國の勞働者を悉く包合したのではなく主に機械工業又は建築勞働者を以て、適用の範圍とし所得稅賦課の最低限度たる年收一千六百圓を限界とし、之に満たざる者に相當の割合を以て交附するのである。

此兩法案に對しては最初より種々の非難が起つたのであつた。それは其規模あまりに廣大に過ぎ、名を保險に藉りて、保險以外に種々の目的を達せんとし、爲めに社會の各方面に利害の衝突を、惹起

するに至らんとしたるが故であつた。工業政策上通例労働保険と稱せらるゝ重なる者は、失業、老廢（又は養老）、疾病、傷害の四種であるが、此中老廢者の爲めには、養老年金制度あり、傷害者の爲めには職工賠償法があるので、英國の社會に於て保険の必要あるものは、疾病、失業の二種である。而して國民の案に従へば疾病保險の名の下に於て行はるものは單に病者に對して疾病手當を給するに止まらず、更に施樂救療、結核患者の療養所收容、婦人労働者の分娩手當給與をも併せ行はんとしたものであるから、さてこそ各方面の攻撃が來たのである。わけても下層社會を相手として居た醫者は自分等の職業の範圍を蠶食せらるゝを恐れ、保險法規定の義務を履行せざることを約して、政府を脅かさんとしたのであつた。加ふるに被保險者たる労働者は、眼前の利慾の爲めに、懸金を惜み、雇主も亦未來永遠の利益を思はずして、反對の態度に出でんとした。併しながら遂に此兩案は議會を通過して、千九百十二年五月以來法律として執行力を有して居る。而してこれが施行の爲めに利益を被むべき労働者並に其家族の數は、一千六百万と計上せられて居るのである。

ロイド・チョールズ氏の第三に指を染めたるものは、有名なる土地制度改革問題である。此問題は其影響も大なる丈けに、流石の辣腕を以てしても容易に形が付かぬやうに見える。氏は此問題に關して三度四度も演説して居るが、未だ議會の成案となつて居ない。案の内容は、農業土地並に市街土地兩方を含んでゐて、双方共に今よりもつと自由に、もつと樂に、下層民をして土地に親しみ得るやうにしやうといふのである。先づ農業土地問題則ち農村問題よりいはゞ、氏は先づ英國農民の憐れむべき狀況を述べて、次の如く言うてゐる。曰く――



流に乗り出て、奮闘幾年、遂に總理大臣に次ぐべき大藏尙書の榮職に就くを得たのである。彼れは天性の偉人である、天才である。併しよく此大器を大成し得しめたものは、彼れ自らも明言するが如く、叔父なる人の浚心瀝血の功に依ること、勿論である。叔父は此英邁なる小甥を育まん爲めに、遂に獨身を以て生涯を終始した、貧窮を以て生涯を終始した。併し其獨身も、貧窮も共に光榮の貧窮であり、光榮の獨身である。

ロイド・チョールヂの政治家として傑出せる點は、十指を屈するも尙足らぬかも知れぬ。併しながら、彼れが本來の面目、本來の立場は、いふまでもなく社會政策である。彼れは平民の子として、あまりに多く平民——寧ろ貧民、下層民——の窮乏を知り、虐げらるゝを知つて居た。彼れは平民の友として、あまりに多く貴族富豪の輩が、社會上政治上經濟上優越の地位を占め、獨り其利を専らにして、他を顧みざることを知つて居た。斯くの如くにして、彼れが一度台閣の人となるや、矢繼早に其實施と成功とを期したものは三種の法律案となつて現れた。曰く養老年金法、曰く國民保險法（疾病保險法、失業保險法）、曰く土地制度改革法、これである。予は今之等の梗概を語つて此花形役者の面影を偲ばうとするのである。

## 二

養老年金法は、今を距る五六年前、ロ氏の提案によつて、英國議會に提出されたる大問題である。議會は爲めに内閣と大衝突をなして、二回までも解散を餘儀なくされたが、結局ロ氏の雄辯と勇猛心

とは勝を制して、五年以前法律として發布せられた。元來英國民は自助的國民なるが故か、社會的法制の點に於ては、常に獨逸に遅れ勝ちである。獨逸に於ては此種の法律は、社會黨の刺戟によつて、千八百八十九年七月二十二日を以て、議會を通過して居る。則ち癱疾養老保險法、(*Invalids und Altersversicherung*)なるものである。英國に於ても、老貧民、老衰労働者の問題には苦んで居つた。隣保共濟の制も普ねからず、扶養義務の實行も勵行されず、結局は救貧院 (*Poor house*) の厄介者であるが、夫れもまた本人の自治心自助心を傷ける虞がある。畢竟、獨逸の制に倣つて、(勿論獨逸は保險制度、英國は年金制度の違はあるが) 此制度を設くるに至つた。救濟事業の上より見れば、一種の戸外救助の方法である。さて其内容といへば、七十歳以上の老人に對して、毎年政府から一定の補助金を與へやうといふのであつた。一ヶ月の最高支給額は十圓とすといふ制度である。それも誰彼に論なく、一般に支給しやうといふのでなく、一ヶ月の収入十圓に満たざる者に對して、其不足額を支給するのである。例へば茲に一ヶ月五圓又は三圓の収入ある者あれば、之に對して其不足額則ち五圓又は七圓を支給するの制度である。而してこれが爲めに政府の毎年支出する額は、約八千萬圓以上なのであるが、然らば政府は如何なる財源によつて、此巨額を支出せんとするのか。ロ氏には次の如き案がある。曰く、(一) 地租の増徴 (二) 所得税の増率 (三) 遺産相續税の増徴、これである。此案が議會に出るや、議會は鼎の湧くが如き騒動となつた。夫れも其筈、此案は國家が富豪地主の財力を奪つて、之を貧民に附與しやうといふのである。ロ民が熱辯は度々議會に火と散り花と咲いた。而して議會は二度までも解散された。けれども勝利は常に政府側の占むる所となつて、此案は五年前法律として實



## ロイド・ヂョールヂと社會政策

鈴木 文治

英國近世の政治史を繙いて、吾人は二個の巨人の足迹を見るのである。一は逝けるグラッドストーン、一は活けるロイド・ヂョールヂ其人である。然かも此二大偉人は奇しくも、幾多の共通點を有するこそ、限りなき感興を覺えしめるのである。勿論其出身のところは違ふ、一は雲の上よりし、一は地の底より出た。則ち前者は富豪千金の子、後者は貧民布衣の兒である。従つて前者が政治の行程に上るや、宛ら坦々たる大道に鞭を擧げて駟馬を驅るが如きに反し、後者の同じ行程に上るや、羊腸たる嶮路を、重荷を負ふて攀ぢ登れるが如くである。其行程は斯くの如く違つて居るが、併し一度政界の人となるや、共に多くの共通點を認めるのである。其熱烈なる感情に於て、其强健なる意志に於て、其明晰なる頭腦に於て、其火の如き雄辯に於て、其不盡の精力に於て、其不拔なる確信に於て、其高潔なる生涯に於て。而して我がロイド・ヂョールヂ其人は、更に飽くまでも平民の子にして、平民の味方、平民の代表者たるの點に於て、著しく特色づけられて居るのである。

ロイド・ジョーナル氏は、西曆一千八百六十三年一月十七日を以て、マンチエスター市の場末に呱呱の聲を擧げた。彼れの家は代々地方の郷士であつた。併し其父に至つて一介郷士の生活を以て屑しとせず、學者たんとするの熱望より、都に出て、攻學多年、遂に地方の一小學校長の椅子を贏ち得たのであつた。彼れの母は或る田舎の牧師の娘、かくて若き夫婦は幾年月を過ぎたのであつたが、丁度デョールジデ三歳の折、父は病を以て黄泉の客となつた。かくて幼き寧馨兒は一人の姉と一人の未亡人たる母と共に、其母の故郷なるラムニタルデューエ村なる叔父―母の弟―の許に引取らるゝことゝなつた。斯くして、未來の政界の大立物は其幼時を此寒村に、叔父の手に育てられた。

彼れが幼時の教育は、極めて不自由にして、且不便なるものであつた。流石に村には小學校の設備はあつたが、單に夫れ丈けて夫れ以上の學問をするには、實に一字を學び、一句を知るにも並々ならぬ骨折が必要であつたのである。併しデョールジは堅忍不拔であつた。獨りデョールジのみならず、其叔父なる人の献身犠牲の生活は、實に此世界的偉人を生ひ立たしむるに、なくてはならぬものであつた。彼れは生涯獨身で押通した。それは其未亡人たる姉と其兒等を鞠養せんがためである。叔父は其老境に向へる後にも、若い元氣を振ひ起して、少年デョールジと共に、佛蘭西語を學び、佛法を研究したのであつた。其長ずるに及ぶや、叔父は多年粒々辛苦の裡に貯蓄した數千金を擲つて、デョールジをして攻學の途に旅立たしめたのであつた。かくて十四歳にして辯護士豫備試験に及第し、二十一歳にして正辯護士の資格を得た。辯護士として如何に徳望ありしかは言ずもがな。彼れは不義を惡むこと蛇蝎の如く、正義を愛すること情人に過ぐるものがあつた。これよりして代議士として政界の中



生は刹那の實在である。刹那の表現である。實在と表現みな生の創造の新しき切斷面である。人生は永遠であらう。しかし私自身にとつて人生の永遠性が何の價値を有つてゐやう。私は私の刹那的生そのもの、生活そのものに價値があればそれで満足である。私達はその満足を購はんが爲めに自我本具の生命力を放散してゐる。絶えざる創造は絶えざる自己生命力の放散である。衰滅である。

創造は新たなるもの、或は虚無なるものよりして、或る實在を造り出すことではない。自己の生命を裂きて、最も徹底的に、生そのものゝ與ふる力を感ぜんが爲めである。そしてその最高潮の生命の力は美なる形式に於いて現はされなければならぬ。

私の腕は毎日毎夜永遠に連なる鐵坑を穿つてゐる。私の一生は鐵坑に入りて、鐵鑛を斷つことであつた。私の祖先は私の一步先きにその鐵鑛の勞作に疲れて死んだ。私は同じ鋤を振つて同じ勞作を繰り返してゐる。前の刹那に私が切り拓いて置いた坑道は次の刹那に暗のなかに沈められて了つた。私の創造的勞作なしには一寸の前途をも獨りてに開かれることはない。私は私の生命力の凡べてを傾けて堀鑿の勞作を始めなければならぬ。私の生命が放散せられては、鐵鑛と撃つ鋤の刃の閃光となつて暗の底に明滅する。私の生命の刹那々々の消滅！それが私の創造であり勞作である。それが刹那的閃光となつて、人生の最高潮を表現する。私はその閃光を唯一の充實生として慾求する。

虚無から虚無に、暗から暗に押し流さるゝ運命の人々！ 暗に咲くでもあらう黒百合花は、私達の美的、實感的な生活に何の關りがあらう！ 私達は虚無と虚無、暗と暗との境ひ目の光明の刹那に、せめて心ゆくばかり白百合花の銀の瞬さに酔はうてはないか。私達が切り拓いた道の後ろには、永久の

暗が私達の踵に跳び附く狼のやうに、私達の生命を脅かしてゐる。私達の前は未だ人間の斧を入れぬ森の暗である。人々よ、生命の斧を振つて未知郷の梢を斷れ、人々よ斧と梢の相撃つては散らす閃火を見よ。それが何と美しい火花ではないか。私達はその火花を見てゐやう。まぢろぎもせずに。私達は幾度も暗のなかに「おう美しい火花！」といふ聲を聞いた。私達も皆な起つて閃光の美をたゝえた。しかしながら誰も、その火花私が達自身の「生命」の放散であり、隱滅であることを知らなかつた。私達は、自分の骨を焚き、自分の肉を燃やした暗の焰を見て、美しいとたゝえてゐるのだ。自己の生命の隱滅が齎らす閃光にほゝ笑む人生の巡禮者！

閃光がひらめいた。人々の笑ひ聲が聞えた。閃光が滅えた。人々の笑ひが絶えた。すべてが暗のなかに吸ひ込まれた。あはれなる自己燃焼の生命者！

それでも私達は少しでもぢつとしては居れない。過去は虚無であつた。未來は暗黒である。今私達に實在と勞作と創造の力を與へられた刹那に私達は自分の肉を裂き、自分の生命を投げ出してせめてもの閃光を作り出さう。そしてその閃光を讃えやう、その光耀に白百合花の美しさを眺めやう。

刹那！刹那！現實の生命刹那！虚無から虚無に入るその境ひ目の生の刹那！私の生命の凡てをその刹那に燃焼しやう。そしてその刹那に私の生の力の凡てが快く燃えて行くひらめきの美しさを見やう！現實刹那の生命の尊嚴は、この切なる絶望の運命者から味はれるものでなければならぬ。

人生の暗黒と悲哀から生れ出た人々の索むる生の執着はこれではなければならぬ。暗の森から出て、暗の森に送られる旅人には、森と森の境を劃る一と時の光明界が、何うして懐しくないことがあるらう。今私達は「生」といふその一と時の光明界に投げ出されてゐる。通り過ぎて來た森の冷たい風が、まだ私達の毫孔の一つ／＼に慄へてゐる。行く手の森の暗い底から、言ひ知れぬ物のどよめきが呻いてゐる。私達は今刹那の光明を浴びてゐる。そこには紅い花が咲いてゐる。そこにはなだらかな銀線がさ／＼やかな諧律を造つてゐる。そこには若い人々の心と心とが同じ波動の胸のときめきを聴いてゐる。そこには戀がある。愛がある。やさしい涙がある。美しいねたみがある。大理石の肌に絡んだ縁髪は、放縱な生活慾の歡喜に、膩立つてゐる。生活の慾望が人々の肉を透して燃えてゐる。刹那刹那の生活！そこには量り知れぬ美しさと眞實とが盛られてゐる。そして私達が進んで行く時に凡べてこれ等の生活實相が私達の肉を透して私達の心絃に響くのである。私は行く手の暗を想ふことを爲さない。暗と暗との境に横はるこの刹那の人生を絶對のものとしなければならぬ。その刹那の實在は悉く、一つの光明に輝かされ、一つの光明に生きてゐるのであるが故に、その悉くが善でなければならぬ。私の心は時として凡べてのものを善であることと見る事ができる。しかしながら私の生活の情調は、必ずしも善であるものを美とは感じないのである。そして最も深酷に私の生活を動かす衝動は善でなくして、美である。縱令へ善であるべきものも、美でなければ私の生活には眞實ではない。私はこの光明界に於いて唯美をのみ索めてゐる。現在の私は美の形を表現してゐない事象に對しては、眞善何れを所有せしめて考ふこともできないのである。

生！生！ お前は弱い乙女であつた。お前は私の寂しい道づれであつた。私達の寂しい人生に於いて、私達は可憐なお前より他に、一人の旅人をも見出さなかつた。お前は寂しい乙女であつた。しかしお前は何時も美しい處女であつた。お前のもし何處かに美でない現象があつたとしても、それはまだ私の眼が、お前の全體を美と見るまでに發達してゐないからだ。しかし現在の私にそれだけの批評眼を養ふことを強ひて呉れるな。私は日々お前の美に憧憬れてゐるのだ。それが私の生活の凡べてなのだ。十年二十年とお前の姿を凝視めてゐる間に、お前の姿の凡べてが、美と見えるかも知れない。そしたら眞善美が悉く一致するのだ。私には眞もない善もない、唯美のみがお前の凡べてなのだ。

暗と暗との境に横はる刹那の人生の光明界に置かれたる凡べては美そのものでなければならぬ。私にとつては人生は美を措いて何物もないのである。生とは美の別名でなければならぬ。生は美を表現することによりてのみ、光明とも法悦ともなるのである。生命の跳躍は美の實現を他にしては存在し得ないのである。少くとも私にはさうとしきや想はれぬ。

人生とは何であるか。生とは何であるか。暗と暗との境の一光明界に於いて、表現せられたる美の味到境に過ぎない。私達は寂しい旅人である。虚無より虚無に入る巡禮者に過ぎない。旋律のあはれな御詠歌をうたひながら、自らのあはれなリズムに溶け入る幻想者である。野の草花を手折つては、またあはれな御詠歌を唄ふ巡禮者である。當て途もなく雲の峯を越えて、落葉の森を踏んで、札所々々の古ぼけた山門に立つ巡禮者である。そしては自らの物あはれな御詠歌のリズムに、郷愁の涙を見出す巡禮者である。その涙のなかに懐しい美を見出す幻想者である。



て、私自身を作つてゐる生命の放散なのだ。若し私の勞作が創造であるとするならば、私の日々が創造であるとするならば、私は永遠に廢滅といふ悲しい運命を知らない筈ではないか。今日の創造を踏み臺として私は明日の創造に入るのではないか、そして永遠の創造に私は生きなければならない筈ではないか。しかしながら私達は一瞬でも廢滅、寂滅といふ背景を後ろにせずには生きて行かれないのではないか。

廉價なる肯定論者は吾々の寂滅を以て、更に新しき生命に入る準備としての假死に過ぎないとも言ふであらう。もしさうであつたならば、何と値價のない現在ではないか。未來世の光明界を渴仰する迷信と五十歩百歩の差ではないか。私が若し來世界を希望するといふならば、それは未來世が光明であるからではないそれが暗黒であり、虛無であるからである。私が死の境を冀ふならば、それは死の境が無自覺であるからである、全虛無であるからである。

現實を味ふ切なる生の要求はこの寂しい心から生れたものでなければならぬ。私達は過去の創造の骸の上に立つて今日の創造に生きてゐる、そして明日の死の淵を瞰きながらなほ生を求めてゐる。

生とはたゞ現在に於ける勞作の對象に過ぎない。生とはたゞ創造自覺の刹那的實在に過ぎない。私が過去に於いて戀人のやうに求めてゐた「生の影」は、私の刹那刹那の創造のひらめきに過ぎなかつた。私は私の肉體のなかに本然的に眠らされてゐる生命の持續を有つてゐる。長い長い生命の持續の黃金絲を有つてゐる。私は本然的にその生命の絲を繰り出すのである。私はその勞作を「日々の創造」と言つてゐる。時の進みが、日の影を喰み盡して行く毎に、私の生命の黃金絲も小止みなく死の影へ

と繰り出されて行く。その小さな金絲の上に朝の太陽が紅薔薇の色を投げかけることもある。私の金絲がその光明の法悦をしみく〜と味ふ、そして私はあゝ美しき生の創造！と呼ぶこともある。或はその小さな金絲の上に冬の夕陽が雪國の荒寥たる顔影を漂はすこともある、私はあゝ寂しい生の創造ではないかと想ふこともある。

生命の黄金絲は絶えず繰り出されてゐる。朝の影と夕の影とを泛べて、齊しく暗黒と死滅の夜に向つて繰り出されてゐる。

生命！ 私の生活の凡てを支配する生命！幻滅より幻滅に入る生命！ 死と死の境を結び付ける短い連鎖それが、私の生命である。暗影と暗影を境する刹那の光明、それが私の生命である。

戀人のやうに懷はれてあつた生命！ お前ほどいぢらしいあはれな運命を荷うた實在が何處にあらう。あらゆる實在が生命であらばあらゆる實在はいぢらしい寂莫な頼りない者ではないか。

生命！ 生命！私は昨日までお前を美しいものとして憧憬れてゐた、お前を強いものとして待つてゐた。お前は美しいものではあつた、しかしお前は強いものではなかつた。お前はいぢらしいものであつた。いたいけな嬰兒であつた。あはれな處女であつた。

生命！私はお前を強いものと想へばこそ、お前を呪ひもした、お前に反抗もして見たいと思つた。しかしながらお前は美しいものだつた、弱いものだつた、私達の寂しい旅の唯一人の道づれてあつた。私は今お前を崇める氣分は失つた。そのかはりにお前に反抗する心持ちも失つて了つた。お前は今から私の可憐な妹だ、私の戀人だ。弱き者としての戀人だ……………

れて行くのである。かくして寂しい人生の一頁が手繰られて行くのではないか。

夕暮の街！ 夕暮の村！ これが私達の行き着くべき一日の最後の場面であり、これが寂しい私達の一生の最後の場面ではないだらうか。

生の歡喜！ 生の跳躍！ 何と輝かしい、何と晴々しい言ひ現はし方ではないか。私は過去の一年

間、これ等の言葉の眩いほどな光明や、私の幼い心を蕩かすやうな潤熟に、私の寂しい生活——私が本然的に運んで來た荒寥たる運命的生活——から、自覺的な自主的な生活の新しい世界を開拓したかのやうに想ふこともあつた。「俺は勇者である。俺は運命の創造者である。俺は生命の愛撫者である。

俺は生命それ自身の表現である。私は聲を大にして、こんなことを繰り返して言つて見た。殆んど内省する餘裕さへないくらゐに、生命！ 生命！と叫んで見た。

私はひたすらに燃ゆるばかりの生命を想ふた。私は「爛熟——したばなりの集實に見る生命の強烈な魅力を想ふた。私は乙女の透き通るばりの頬肉にたゆたへる歡樂の生命の脅威にふといた。そして私はその刹那の生命に驚歎した。『凡べて生命は力である。力のある所に生命の叫びがあり、生命の叫びがある所、みな眞實である。生命の基調と共鳴する所、みな美である。美は悉く眞實であり、道徳的である。生命の力は衝動の振絃に鳴つて、そこに永久に若き戀の歌が唄はれる。そこに法悦の光明が人生を銜耀する。生命！ 生命！ 永遠に青春爛蕩の高潮時をのみ知つて、頽廢幻滅の虚無を知らざる生命！』私は生命をこんな風に考へて見たのであつた。

「私は今、生命を攫んでゐる。私は今生きてゐる。」と思つた刹那に、私は自分の幸福を生命の本脉に向つて感謝せずには居れなかつた。

生命！ 生命！ 爾の名の美しいことよ。爾の名の力強いことよ。しかしながら、その名の美しいことよ、力強いところが私の生活にとりて何の希望をも光明をも運んで呉れるのではないではないか。私は聲を大きくして生命！ 生命！ と叫んで見た。しかしその聲には何の力も充ちてゐなかつた。私は尙一度起つて、最後に渾身の力をこめて生命！ と叫んで見た。私はその錆びたる聲の空虚であるのに驚いた。落葉し盡した樺の森を踏む旅人のやうに、灰色から灰色の空間に吸ひ込まれて行く、私の聲の滅び行く姿を私は凝然として、姑く見つめてゐた。聲は錆びてゐた、しかしそれは私の生命の片影ではなかつたか。小さな振動であつた、しかしそれは私の生命から絞り出された生そのもの、勞作ではなかつたか。

私は生を索めんが爲めに、私は眞實の生命を攫めんが爲めに、生！ 生！ と叫んだ。その聲こそ私の肉體から切り放たれた眞實の生命であつた。私は「生」を叫ぶ毎に私の肉體に宿る生命の一片一片を吾自ら切り放つてゐることに氣付かなかつたのである。天に向つて私の嚴かな心が、生を索むる時、私は祈りの聲を擧げた。その聲の一旋一律が私の生命の肉の一片一塊であることに氣附かなかつたのである。

私は生を創造せんが爲めに生きてゐるのではない。生を浪費せんが爲めに生きてゐるのである。生の總支拂ひを果さんが爲めに生きてゐるのである。私の日々の勞作、それは私の生の創造ではなくし





## 自我燃焼の歎美

感想

吉田 絃 二 郎

私達は未だ發見せられざる眞理に向つて、感謝しなければならぬ。隠れたる眞理のうごめけるところに、私達の生活の日々の新しさと命とが流れてゐる。

私達は毎日々々、埋もれてゐる眞理を探して歩いてゐる。私達は過去一年に於いて、聞き飽きるほど「生」、「眞實の生活」、「生の充實」といふ言葉を聞かされもし、また私自身でも叫んでも見た。

現在に於いても仍り、「眞實の生活」、「生活の充實」を索むる私の慾求は、恰かも荒野に食をあさる狼のやうに、凄い飢渴の眼を夕暗に輝がしてゐる。

生命とは何であらう？ 眞實の生活とは何であらう？ 私達は新しき哲學の解釋を待つまでもな

く、渾然として永遠の時を流るゝ大生命の實在を想はずにはゐられない。しかしながら、大生命の實在、或は萬象流轉の根本相を想像し得たところて、それが現在私の寂しい生活に何の慰めにならう？ 何の解決にならう？ 現代多くの思想家、宗教家殊にベルグソン哲學に根據を置く一派の人

々は、主として生命生長の歡喜を説き、生命の跳躍を高調するのであるが、それが私の沈滞し切つた生活に何れだけの光明を與へたであらうか。

私は街に出て終日秋の陽を浴びて歩いた。私は幾度か丁字路や三叉路や、十字路に出つ會した。その度毎に私は右に行くべきか、左に行くべきかを考へなければならなかつた。私は雜作もなく自分の行くべき道を選んだ。私は豫定せられた目的によりて道を選んだのではなかつた。私は何か一つの決定せられた目的によりて南北を決めたのではなかつた。私は日當りの良さゝうな道を取つたこともあつた。柳の並樹が快い蔭を造つてゐる方向へ歩いて行つたこともあつた。不圖した好奇心から、灰色の建物の方へと曲つて行つたこともあつた。そして私が夕暮に辿り着いたところは、何時も申し合したやうに、頼りない、不安な、投げ遣りな、哀調に顫いた燭の家並みてあつた。

私は疲れ切つた脚を、殆んど重い鐵鎖を引き摺る囚人のやうにして、懐しい夕暮の燭を慕ふて、人々の扉の前に立つのであつた。當て途もなくさ迷ふ巡禮者のやうに。

空には永遠の謎を瞬く星の光があつた。うす暗い軒下を抜けて、厩から發酵する牧草の甘酸い物の香が襲ふて來た。何と隋れ切つた夜ではないかと私は想つた。

濁酒を爐に突き込んで、他愛ない野良唄に夜を更かす若者等もあつた。彼等の唄の絶望的な諧律！彼等の笑ひが何と機械的ではないか？彼等の原始的な傳説が、夢路を辿る者のやうに、家から家の爐邊に繰り返されてゐる。彼等の愚昧な眼が自然の驚異に脅かされてゐる。彼等の一日がかくしてら割

る。小娘登場。女はエープロンを掛けてゐる。

小娘 みなさん克く眠ッてゐらつしやるわね。お風邪をひきますよ。

まあ克く眠ッてゐらつしやること。

(と言ひながら、第三の男を揺り起す、第三の男驚いて跳び上りさま椅子を引ツくら返して自身も後ろに倒れる。同時に娘が持つてゐたコーヒー茶碗の四ツをも落してみぢんにする。第一第二の男、旅の樂師も驚き立ち上る。)

第一の男。あやッお前は……

第二の男。一體誰だい、……

娘……理想郷のクイーン!!!

第一の男 理想郷のクイーン!!!

第二の男 理想郷のクイーン!!!

娘 多、理想郷のクイーン!!!

第三の男。(腰をさすりながら)多ッ女王!理想郷の!

あゝ痛い……

音楽家。アハ、い、い、い、

第三の男。(なほ腰をさすりつゝ)諸君!理想郷の女王の爲めに(と言つて杯を上げる。彼れよろめく、その機に紅い酒彼れの顔から衣にかゝる)

第一の男。吾等の理想郷の爲に!

第二の男 理想郷の女王の爲めに!

第三の男。(小娘を正面に伴れて)凡べて吾等の理想郷に入るものはこの小娘の如くならざるべからずア、痛い……

旅の音楽家 アハ、い、い、い、(寂しく哄笑ひながら樂器を執つてまた減入るやうな曲を奏づる)(幕)(二三・一二・六)

——この脚本は統一教會クリスマスの爲めにものしたるものなり——



## 二 本 の 樹

—— キリアム・バトラア・イエエツ作 ——

小 島 幸 治 譯

まことに、かれら自らの心を見よや、  
あらたかなる樹は其處に育ちゆき、  
歡喜よりあらたかなる枝はさし、  
すべてのわななく花をつくる。  
かはりゆく果實の色づきは、  
やさしき光もて星にもまがひ、  
かくれたる根のやすけさは、  
静かにも宵なかに植ゑられぬ。  
葉しげる梢のゆらめきは、  
海にその旋律をあたへ、  
わが唇と音楽とをつれそはしめぬ、  
これらのために不思議の歌をうたひつゝ。



あゝ私は、人間の悲しい運命を知らぬあの小雀等が羨ましい（三人の青年驚きて顔を見合はす）あゝ寂しい私の生活！（静かにマンドリンを奏づ。）（間）

運命の男。笑うわ！笑うわ！あのやうに笑うわ！お前等が切り拓いて行く理想郷の爲めに、あれ、あのやうに世界の街々が紅い燭を點してゐる

わ……………

若い人々よ、女よ！男よ！

俺を恐れるな。俺を惡むな。

俺はお前達の善良な道伴れだ。

俺は世界のありとあらゆる悲劇と喜劇とを見成つてゐるのだ。

俺には何の權威もない。俺はたゞお前等が唄う時に唄い、お前等が眠る時に眠るのだ。

（三人の男はこの時また眠りに陥ちる）

それ、そのやうに眠る時に眠るのだ。

お前達が生れる時に俺は生れるのだ。

お前達が死ぬ時に、俺は死ぬるのだ。

お前達が戦う時に、俺はお前達の劔にお前達の盾に人間の光明と希望と廢滅との影を抱いてゐる

るのだ！人々よ！お前等は強者だ！お前等は實行者だ！お前等は創造者だ！

おう、人間の永遠なる創造の光明！

俺はあはれなる生命力の従僕だ！

俺は永劫に亘りて、

この時間とこの空間の縛から脱れることはできないのだ。

俺の名は運命の神である。

しかし俺の永遠の實在は、人間が創造する悲劇と喜劇の觀客であるに過ぎない。

小ひさな人間よ。お前達こそ限りなき人生の創造者だ。

お前達は笑へ！

お前達は眠れ！

お前達は唄へ！

お前達は戀の夜を紅い酒にも酔へ！

俺は冷たい血管と、死の影に顫ける黒い衣に生きてお前達の歡樂と自由を見成つてゐるばかりだ。

俺に何の自由があらう！

祝福せられたるお前達人間の生活！

呪はれたる俺の運命！

(此の時窓の外にホザナア！ホザナア！と叫ぶ聲す。旅の樂師は樂器を抱きながら窓に凭りて外を眺める)

おう、更らに新しい人間の世界が開かれるのか？俺は冷たい呪の眼をもつて、花やかな理想郷の實現を見るに忍びない。

俺の暗黒な世界がこの刹那に、

あの輝かな星のやうに、

柔かなメロデアスな春雨のやうに

物の音と物の香に溶けて行くであらう。

牧場の小羊よ

牧場の星の影よ

柊の木の實よ

紅い花よ

黄金の冀よ

オーケストラの大旋律よ

ありとあらゆる現象の一片片に

新しき理想の世界が生む新しき生命の花を飾れよ

さすらは草の葉に置く露の上にも

静かな静かな春の朝の樂の音を顫かせよ

夜の星よ

湖の藻の白い花よ

そして俺の眼を見つめてゐるこの戯曲の前の

人よ！最う俺は二度と人々の前にこの黒い瞳と、

黒い衣を表象として用ふことはあるまい。

人々よ運命の男が與ふる

黒い瞳と黒い衣に顫けるこの暗示を受け給へ。

まどかな今宵の夢が、

草の葉を踏む小羊のやうに

銀の鈴を鳴らして人々の胸に

永久の生命を與ふるであらう！

(間)

おう夜よ！夜よ！俺の世界の夜よ！

永久の理想郷の光明の爲めに！

(舞臺一面が暗となる。窓を通じて星の飛ぶ影頻りなり)

(青き光窓より照らすと共に、一條の光明白衣の女を送り來る。

運命の男は既に影を隠して了つてゐる。三人の男はまだ眠つてゐる。旅の樂師がたゞ一人ストーブの前に踞つて樂器を弄んでゐる。

うな豪い、大きな人達は理想の國には窮屈で這入れ切れないだらうよ。

第二の男。さうすると理想の國は、直さに満員と来るのだね。

第三の男。ところがなか／＼さ。その理想の國たるやだ、純の純なるもてね、一寸でも不純な奴はみんな落選だ。恐らくソクラテスも、スピノーザも、二宮尊徳も落選だらうて。

樂師。大變入學試験が難しい國と見えるね……。まるで日本のやうな國と見えるね。

第一の男。さうだとも、理想の國には入學試験といふやうな面倒臭いことはないのだ。しかし、そこは純の純なるものであるから、少しでも意志を働かした生活、または無理遣りに撓め直した生活から出立した人間には、永久にその理想の國は來ないのだ。ソクラテスが瘦せ我慢を捨てゝさ、あの毒の杯を飲まなかつたら、恐らく彼れは理想の國の人となることのできたかも知れない……。

また二宮尊徳が無理な骨折りて金を貯めなか

つたなら、理想の國の人となることのできたかも知れない。

樂師。では何だ、諸君のやうな見すばらしい、肩巾の狭い、色の蒼白い、そして紅い酒の謳歌者ばかりが理想の國に入ることが出来るんだね。

第一、第二、第三の男。さうだとも……。

樂師。そしてその理想の國は何處にあるんだね。

第一の男。この卓子の上に！

第二の男。この紅い酒のなかに！

第三の男。この燭の焰のなかに！

樂師。(ブン／＼怒つて) 莫迦にしてゐあがる。(不圖氣を取り直して) それなら俺の理想の國は、このマンドリンのなか／＼アハハ、(ストロブの前に腰を卸して、樂器ををいぢくる。寂しい曲を奏づる)

第二の男。彼のあはれなる理想の國の落選者の爲めに……

第三の男。彼のあはれなる旅の音楽家の爲めに……

第一の男。理想の國を政府の保護や、傳道會社や、富

豪の金庫に求むる日本の宗教家達の爲めに……

第一、第二、第三の男。諸君乾杯ッ！アハ、ハ、ハ、ハ、

(杯を上げて飲む)

樂師。あはれなる理想狂！テーブルの上の理想郷

！蠟燭の上の理想郷！紅い酒の理想郷！(ストー

プの前に手をかざしながら) ストーブの前の紅い燭の

理想郷！アハ、ハ、ハ、ハ、ハ、(此の時彼れのコートの裾が

ストーブの焔で焦げてゐるのに氣附いてあせつて採み消さうと  
する) 第三の男それを見て

第三の男。ストーブの前の悲哀郷アハ、ハ、ハ、ハ、

第一、第二の男。アハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

(遠くにてまた祈りの鐘の音聞ゆ) (間)

樂師。アハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、(寂しき笑ひ聲にて)

あのやうに今まではしやいてゐた小雀等が、

あれ、亡國の小羊のやうに眠りに陥ちてゐる。私

は世界の涯から涯を、この小ひさなマンドリンを

抱へて歩いてゐる………

夕ごとに、夜ごとにこのやうに淋しい燭のそば

に寄つては、その日／＼の旅路の出來ごとを想ひ

かへすのが、私の生活の凡べてのやうに想はれ  
る………

或る時は、私は榆柳の下蔭にオツフィリヤの  
やうな處女の亡骸が渚の水草に、死の國の夢を  
夢みてゐるのを見た………

また或る寒い雪國の夕には、旅やつれした若  
い音樂家が、むく犬のやうに顫へながら、廢寺  
の前に立つてゐるのを見た。私はその男の前身  
はハムレットか、それともロミオのやうな青年  
でもあつたらうと想つた………

私はその日／＼の悲しい出來事を、この絲の  
上に想ひ出しては、悲しい彼れ等の運命に、私  
の涸れ果てた涙を灑いでゐる………

私は何處に行くといふ當て途もなく、酒場か  
ら酒場と旅路を歩いてゐるのだ。私のこの絲の  
音が、冬の夜の星と空氣を顫かす所に私の生命  
があるのだ………

私の樂の音が東の窓から流るれば、私は東に  
行くのだ。私の歌のひびきが森の梢を滑れば、  
私は森のなかにさ迷ふのだ………



彼れ等が歌うまゝに、彼れ等が戀するまでに、彼等が踊るまゝにまかせてゐなければならぬのだ。俺は運命の神と呼ばれてゐる。しかし俺には運命を司る權威はない。俺は永遠に亘りてたゞお前達の自由な、盲目的な人生の冒險を見成つてゐなければならぬのだ。お前達は一寸でも俺の監視かれ脱れることはできない。俺も亦一寸でもお前達から眼を離すことを允されてゐないのだ。お前達は俺が永遠にお前達の前に、お前達の歡樂を見せ附けられてゐるが爲めに、此の世界に、拘禁せられてゐることを知らないのだらう。おう、俺は自由奔放なお前達の生活が美ましくてならぬ。愚かなる人々よ、お前達は俺を運命の主權者と想ふのか。俺は運命の主權者ではない。俺はお前達が盲目的に開拓する運命の保證者だ。俺はお前達がこの舞臺に演ずる運命の戯曲の鑑賞家だ。おう、またあのやうに若い男達が歡樂の夜を貪つてゐる。

(旅の樂師が樂器を執つて寂しい曲を奏づる。窓の外にて疲れ

たやうな聲樂を聴く。)

俺が國の山から……何時も立ちのぼる煙……

秋が來ればさらさら……

立ちのぼる煙……

(唄を聴いてゐた樂師がハハハ……と大きな聲をして哄笑う。)

三人は申し合せたやうに吃驚して眠りから覺める)

第一の男。(大きな欠伸をしながらのけ反つて)

あゝ、何時だね、おい何時だらう?

第二の男。おう、克く睡つたな、何時だらう?

第三の男。おう、最う九時だぜ、あッ、チャペルの祈

りの鐘が鳴つて居らあ……(此の時遠くにて祈の鐘聞

ゆ。三人齊しく耳をそば立つ。)

第一の男。何だ祈りの鐘か、アーメン。大に祈りの

鐘の健康を祝して乾盃しやうぢやないか。

(三人紅い酒の杯を上げて)

第一、第二、第三の男。祈りの鐘萬歲!! アハ、ハ、ハ、

(思ひ出したやうにして旅の樂師もアハハ……と哄笑する)

第一の男。時に、吾々のその所謂だ、理想の國の女

王なるものはまだ臨御ましまさぬのかね。

第二の男。いや、さう理想の國の女王だ、女王だと

朝から晩まで、君のやうにのべつ、幕なしに追

つかけられた日にや、何ぼ理想の國の女王だつて、姑く此の室へ臨御御中止と來るかも知れないぜ。

第三の男。ところでさ、君等はその、理想の國の女

王なるものが、どんなもんか知つてゐるのかね。

第二の男。横鎗を入れるつもりなら最つと氣の利いたことを言つた方が宜いぜ。理想の國の女王が何んなものか、そんなことが解るものかね。第一僕等はまだ、その理想の國なるものを見たことも聞いたこともないのぢやないか。理想の國といふのは馬鈴薯が出來るところなのやら、唐茄子が甘いところなのか、それとも翻譯劇が盛んな國だか、貧民が粥をすゝつて、大臣が相場に手を出す國なのだか、先づそれさへ解らないぢやないか。

第一の男。それとも宗教家が三敎合同に隨喜の涙をこぼす國かも、それとも君見たいな男がカンバスを擔いで「理想の國は……」てなことを言つて、紅い酒に酔つてゐる國かも知れないね。

第二の男。それとも自我主張者や、御用哲學者や、

個人主義者や、御用法律學者などがどんぐりの脊くらべをやつてゐる國だか、或はバアナアドショー見たいな皮肉屋が、室の隅の方でくすくすと冷笑つてゐる國かも知れないぜ、アハハ……

樂師。(立ち上つて三人を振り返りながら) アハ、ハ、ハ、

(三人の男はびつくりして樂師の方を見る)

樂師。僕は運命の神に反抗しやうと思つて、今日もこの寒い町を歩いて來たんだが、仍り僕は相變らず運命の神の囚人となつて、先づこの通りさ。……ところで君等はうまいことを言つてゐるね、その理想の國には、僕のやうな大音樂家はゐないのかね。

第一の男。まあぬまいね。

樂師。何うして？

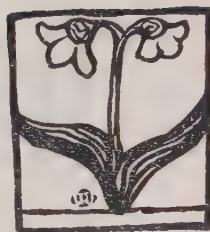
第一の男。でも理想の國には何でも大の字だとか、偉いとかいふ冠詞の附く者は居れないだらうよ。何故つて君、理想の國は四疊半式の至つて純な氣分に充ちた國にちがひないよ。だから大宗教家とか大學者とか、大人格だとかいふや

と思つて居るのかい』そして牧師が何か訓誡らしいものを讀みかけると『爾殺す勿れ』と云ふ十誡の言葉をもつて、この反<sup>アンティ</sup>基督<sup>クリスチヤン</sup>教<sup>ドクトリン</sup>精神<sup>スピリット</sup>をオーソライズせんとする偽善を眞向から責めつける。シヨオは此所に於て今日の基督教會の虚偽を最も力強く指摘して居るのである。實際今日の基督教會と云ふもの程矛盾と虚偽とを平氣で行つて居るところも少ないのである。一方に於ては基督や聖書を絶對の權威の如くに説きたてながら、その精神に従つて行動すれば今日の社會や國家の反抗と壓迫とに會はねばならぬところから、強いてこれに妥協して、キリストや聖書を曲解し曲説して居るのである。この軍隊牧師のなして居る矛盾虚偽は即ちその一例である。

ドイツに次いで愉快なのは佐々木氏のバアゴーン將軍である。バアゴーン將軍は丁度、日本の西園寺侯爵と同じ様な性格をもつて居る人である。彼は軍人であるが、スキンドン少佐の様に、人情を没却し、人格の尊貴を知らず、人の生命を屠ることを破れ鞋を投げ捨てると同じ様にして、たゞ軍隊的權威をばかり振りまはす男ではない。彼は實に人性を知つて居る、風流を解して居る、そしてその中に深刻な皮肉を藏して居る。佐々木氏の性格が、かゝる人物を演出するに適して居るのは云ふまでもない。バアゴーン將軍はスキンドン少佐の人物の小さいことを知り、智慮の缺乏を知り、而も彼れがふりかざす軍隊的權威に向つて心底からの憎惡を感じる正直な將軍である。『英國の軍人は陸軍省の前にはペコ／＼頭をさげるが、その他のところではいくらでも威張

る』のだと云つてスキンドン少佐をせめ、ドイツが『軍人さんでも考へることがあるのですかい』と罵倒するのを非常に嬉しがつてきく將軍である。

シヨオは滅多に感傷的な女を描かない。非常に理性の發達したローマンティックな戀なんか嘲り去つて、たゞ生活の爲めに結婚する様な女を描く。併しこの劇にあらはれた和泉房江氏のデユデイスは、どちらかと云へば餘程センチメンタルな、そして思慮の割合淺はかな女である。彼女は始め無下にドイツを嫌つた次にドイツの男らしい犠牲的精神に深く感動した。而てこのドイツの眞價を初めて知り、而もその男が今死に面して居ることを知るときに、どうしても靜然として居ることが出来なかつた。何うかして彼を助けやうとした。彼女はドイツを助けたければならぬと思つて、同時にまた夫をたすけねばならぬと思つた。夫の死は自分の死であることを感じた。彼女の胸はそのこみ入つた思ひの爲めに惱まされた。『あなたは妾をお殺になるつもりなんですか。あなたは妾が毎日毎日戸を叩かれたり、足音がしたりする度に——、恐ろしいので胸が差し込んで来る様な思ひをして——それで妾が生きて居ることが出来ると思つてゐらつしやるのですか……』と云てデユデイスの心持には夫を愛する愛のうちに自分を融かし込んで居ることがわかる。それと同時に又、アンダーソンは牧師としての使命は、少しばかりの危険の爲めに逃げる様なことは出来ないことを感じて居る。死と戀愛と生活の使命と、かうした問題が茲に提供されて居る。(かずを)



# 紅い花

絃 二 郎

## 人物

運命の男  
第一の男  
第二の男  
第三の男  
旅の樂師  
小娘

## 場所

或町外れの寂しい酒場の一室。

## 時

十二月の末の一夜。九時から十時に亘る。

驛路の涯を想はせるやうな樂の音が響く、ハハハ……と衆人の哄笑の聲を以て幕が開く。

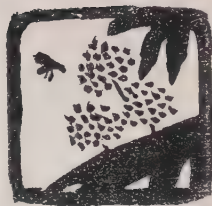
卓子を圍んで三人の青年が紅い酒を盛つた盃を前に置いたまゝ、或は手にしたるまゝにて眠つてゐる。下手暖爐の前に踞つて一人の旅の樂師が樂器を抱いて、正面を見つめてゐる。スト

ーヴの焰があか／＼と樂師の面に映つてゐる。上手に寄つて運命の男が突つ立つてゐる。男は頭から全身眞つ黒な衣を被いてゐる。卓子の上には一本の蠟燭が寂しげに瞬いてゐる。黒衣の男は幕の初めより終りまで一つ位置に在りて一つの表情を以て何時も同一の視線を保つてゐる。運命の男の姿は、三人の青年にも旅の樂師にも見えない不可思議な實在である。

運命の男。世界のありとあらゆる現象のなかに、人生のありとあらゆる流轉のなかに、俺は永劫不斷の時を貰き、悲しみと喜びと暗黒と光明とを操れよとの神の命令に依つて世界の初めより世界の終りまでをこゝに立たなければならぬのだ。

街の若い者どもが、蠟石のやうな歌ひ女の腕にすがつてゐる時も、或は紅石の胸飾に波打つてゐる歡樂の柔肌に顫いてゐる時も、俺はたゞ





## 舞臺協會の第一回公演

十一月廿八日から十二月一日まで、中一日をおいて三日間、舊文藝協會の一派から成り立つた舞臺協會の第一回公演が帝國劇場に於て行はれた。出しものはシヨオの『惡魔の弟子』とクラシカルな匂の高いキルヘルム・ホルツの『負けたる人』とである。自分はその初日の公演を観た。

全體から云つて『惡魔の弟子』はシヨオの作物としては決して傑出したものでない。シヨオがあゝの明快な頭をもつてする戯りに對して可なり反抗心をそゝられないでは居られないものもあつた。

英國軍人が牧師アンダーソンを捕へに來る場面、ならずもの、ディックと牧師とをうまく摩擦（ま）へて置いたら、軍法會議で被告が果して牧師であるか否かを檢べんが爲めに、誰でもいゝ街で會つたものや捕へて來いと命令すると、捕へられて來た證人はディックの弟であつたり、最後の場合にディックが絞首臺に昇つた今のは、際に牧師アンダーソンがやつて來て、ディックが助かるあたり、かなり拵（こしら）へ過ぎて居る様な感じがする。それで居て、劇全體が實に面白い。あちらからも、此方からも起つて來る鋭い皮肉の閃

めきと、虚偽の皮を解脱し剝奪する鋭利な批評の精神とが、強く響いて一種氣持の可い、興奮を覚えさゝれずには居られなかつた。

演技に於ても、俳優各自が自由に自己の特長を發揮して、而も何等の不調和な點を表はさず、清新の氣が潑刺として躍つて居たのは喜ばしい。『負けたる人』に於て、蠟燭の火を消し損なつたから彈琴の調へにつれてきこえる筈の音曲が、ちぐはぐになつたあたりは少々不體裁であつたが、兎に角全體としては藝術座の所演よりは遙かに上出来であつた。それを世間では、默殺しやうとでもするのか、モンナ・ヴァナであれ程さわざ立てたのに反して、錄に批評さへもしなかつたのは何の爲めであらふ。

最も活躍したのは森氏の『惡魔の弟子』ディックである。あの囁がれた聲やしまりのない音調などは飲んだくれの、我儘ものゝ放浪者、喧嘩買ひ、賭博うちたるディックの大膽な、傍若無人の振舞ひに相應じて、惡魔の弟子の性格を十分に發揮したと云つて

よい。彼には彼獨特の宗教があつた。その宗教は彼をして、世間一般の人生觀や道德の標準に對して、全く反對の態度をとらしめた。故に彼は凡ての人の批評や心持ちに對しては全く無頓着であり得た。そして自己の世界を自由に闊歩することが出来た。敬虔なる牧師の妻は彼と顔を合すことさへ嫌つた、彼の母は彼れと同棲することが出来ずして彼の家を去つた。彼れを好いたのは、たゞ彼の叔父の「ダツジョン」とその私生兒のエツシイばかりであつた。彼程世の中から恐れられ、惡まれ、相手にされなかつたものも少ないだらう。ところが彼は實に偉大なる事業をする。

英國軍人は牧師アンダアソンを謀叛人と認めて彼れを絞首臺に上せんが爲めに牧師の家にやつて來ると、牧師の妻とディックが居つた。軍人は彼れを牧師と誤認した。すると彼は平氣で牧師になりすまし、牧師の妻デユデイスには決してこのことを牧師に知らしてはならないこと、及び牧師を逃れしむべきことを注意して、自分は從容として居所に越いた。

斯くの如き我儘者にして、斯くの如きならずものにして、尙且つかくの如き自己犠牲を、易々として、而も最も大膽に男らしく行ひ得たと云ふことは、人々の驚嘆でなければならぬ。だから最初は惡魔の如くに彼を厭うた牧師の妻は熱烈なる彼れの讃仰者となり、遂に彼に戀愛をまで感ずるに至つた。脚本では市民が集つて彼れを胸あげをまでする事になつて居る。勿論、彼れのこの行爲は、彼自身が白狀して居る様に、これ決して彼が牧師に感心して牧師を救はうとする犠牲の精神からしたのでなく、又デユデ

イスをあはれと思ふ、切なる心から出たのでもなく、たゞ自然と彼麼ことをしてしまつたものではあるが、自分にとつては、自然とかくの如き獸身的行爲を、かの惡魔の弟子がなしたと云ふところに、より深い印象が刻まれずには居られなかつた。そして恐らく、これシヨオのねらつたところであらうと思ふ。斯くの如き人の心の中にも、自分でも知らない尊い行ひをなし得る無形の富を有して居ると云ふことは、何麼に愉快なことであらう。彼れは、のんだくれである、放浪者である、我利々々盲者の種類である、傍若無人の我儘ものである、よく云へば個人主義的超人である、何れも一般の宗教家や道德家や、世人から、蛇蝎の如くに嫌はれる性格である。ところが、この愛を知らざる、犠牲の精神を缺きたる彼れが、かくの如きことをなすのである。牧師のやり方は伶俐ではあるが何だかその周章とさわいだところは、彼の自若たりしに反して見劣りがせられた。自分は茲にシヨオの辛澗なる皮肉と批判とを最も氣持よく感じないでは居られなかつた。

彼れがまた、軍法會議の席上に於て、英國々王を罵り、軍隊牧師をやり込めるあたり、何とも云へぬ氣持がする。軍法會議に於ける彼の態度は『闇に輝く光』のうちのボクスの態度と頗る類似して居る、兩者とも極力軍隊の權威を否認して自我の權威を主張して居る。そして軍隊の虚偽を罵倒して居る。軍隊牧師は最後の儀式を莊嚴にせんが爲めに祈禱書を讀んだり、訓誡しやうとする、彼は云ふ『ふん、……ヘンデルの音楽と牧師一匹で人殺しと神聖なものにしようとするんだ。俺が君達のお手傳ひをしてもす

『君の様な聖人は特別だよ』尊敬か侮蔑か知らないが彼の畫友が彼に會て云つた其言葉が若し眞實なら、彼は社會を相手に戦はねばならぬ、よし社會を相手に決闘してもいいが、若しも彼は自然を相手に決闘して居る様にでもなつたら……彼の自滅だ。そう考へた彼は、彼の怒りの刃が何に向つてるかを見た時、少しく退避かなければならなかつた。其憎い旅の男にも妹に働いたと同様に彼自然の無言の力が働いて居るんじゃないか。そして自分は？自分の血は、肉は？自分の官能は？彼は退避かなければならなかつた。

彼は今まで獨身者として潔く正しくやつて來た積りで居る。そして彼は繪に就て此塵事を思つて居る——繪は理想の戀人だ。此總てが朽ち易い此世で遭つた美しい人の面影の一瞥を其儘忘れるのが口惜しいから描く。此世の中に生きて居る美しい人は直ぐ年とつて行く。然し繪は永久に年寄らない。此世の中に生きて居る。美しい人にいろんな缺點がある。然し繪には其麼ものはない。藝術を戀人にして畫家は永久に生きなけやならぬ、と。其故に彼の濁つた畫家の生活の間に立ち交つて居て尚ほ節操を守つてやつて來たのかも知れない。然し其藝術への衝動と藝術も何も知らない世の中の愚物の心の衝動との間に程度の差こそ認め、種類の別を彼は認る事が出來なかつた。彼は其憎むべかりし男と握手しなけやならない様になつて來た。彼と兄弟にならなけやならぬ様になつて來た——あたりに入の居らぬ甲板の上で、一匹の牝猿の手を取つてベンチに座つて居る或る北歐の詩人の靜かな心には其猿も眞の妹の様に思はれた様に。

彼は食事を終つて徐ろに立つた。そして其足下に力なげに倒れて居る小さい花を見やつた時、丁度

キリストがマクダラのマリヤの地に俯す黒髪を見る様な大きい香しい心になるのを彼は覺えた。許さう！いや其では足らぬ。願はう！彼男が永久に彼女を愛して呉れる様に。彼は一種云ふべからざる勝利の誇りに胸躍らしつゝ歩いた。勢よく歩いた。

彼は多分、其男にも妹にも遭つて話する爲めに、明日にも歸郷の途に就くてあらう。月々妹に送つて喜ばして居た、或婦人雑誌の來月號の口繪をば友達に託しても、展覽會の方はあり合せの繪で間に合せて置いても、取りあへず先づ彼は一つの新しい大きな藝術品を作る爲めに、歸郷の途に就くてあらう。(終)

△今月の雑誌は、原稿の締め切りを早くしたのと、原稿が餘り多過ぎたので、大分あちこちから送つていたといいた原稿は來月號に廻さなければならぬことになつた。これは寄稿して下さつた方々に厚くお詫びをして置きます。

△内ヶ崎氏は來月號の爲めに、ラビンドラナース・タゴール氏の近作を譯して送られた。タゴール氏は人も知る如く、先き頃ノーベル文藝賞金を受けたる印度の大詩人である。内ヶ崎氏のタゴール紹介は二月文壇の一異彩であらう。相原一郎氏は「エルンスト・トリヨルチの宗教觀」を送られた。五十ペーチから成る近ごろの大論文である。

△代表明世界文學物語(松浦政泰)新獨逸語雜誌(其社)現代哲學講話(安井辰衛譯)哲人何處にありや(齋藤信策遺稿)最近憲法論(星島二郎編)の新刊批評を内ヶ崎氏から送つていたといいたが、これも來月號に廻さなければならぬことになつた。



に走つて隠れるのを見た。斯うして二つの動物が彼のくしや／＼した心持を少し紛した時、はじめて彼の目に武藏野の柔い景色が其儘に映る事が出来た——廣い陸穂の稻田、ひよろ／＼と立つ榛の木、こんもりとした小さい杉林、廣い畔路——其に何處からともない蟲の聲さへ聞えて來た。

彼は何だか自然に魅された様な氣がしてならなかつた。あの遠い山のコバルト色の裳には醜い蝮蛇が冬眠の仕度をして居るのだらうに、何うしてあゝ云ふ風に自然は人の目に美しくあらはれるのだらうとそう思つたが、直ぐ、畫家もあの一ツ一ツとしては美しくもない繪の具をべた／＼と塗つては美しい繪を作るじやないか、と云ふ事を思ひ合した時、自分が彼の淺薄な模倣者だといふ果敢なさの感じよりも、自分には彼と同様な力が作用して居ると云ふ強い誇りの感じに微笑まざるを得なかつた。

彼は日當りのいゝ畔を見付けて其處に三脚床几を居えた。がもとより彼は繪を描かうとはしなかつた。落ちつけば見える草の戦ぎにも自然が出す不斷の力を凝視しつゝ、靜かに晝の辨當を開いた。

一口食ふ毎、彼の心は不思議に落ちついて行くのを感じぬ譯には行かなかつた。故郷の懐しい思ひ出は再び彼の心を占領して來る——あの山が出、あの川が出、あの畑が出た。黒い畑の土に處々消え残つた雪がある。僕に連れられて妹と二人淺葱摘みに行つた景色が今彼の胸に鮮かに描かれた。雪解けた水の増した小河の丸木橋を彼と妹は交る／＼僕の背に負んぶして向岸へ渡つた……其廢事を思つて時、ちらと飯粒が落ちた様な氣がしたので、彼はすぐ其右足の靴の傍を見た。すると其處には飯粒の代りに白い小さい花が謎の様に咲いて居た。彼には其がまるで飯粒が花になつた様に奇異に感ぜられたが、『飯粒が花になつた！』とそう思つた刹那、彼は造化主の創造の喜びと云ふものを想像した。

勿論彼は舊約聖書に書いてある様な事は信じて居なかつたが、あの土塊で以て總ての生物を拵へてアダムと云ふ男に與へ、其男の肋骨からエバと云ふ女を拵へて男に連れ添はしたと云ふ其時の造化主の喜びの心を想像して、姑く彼は他愛もない空想の世界に遊んで居た。が臆て辨當から落ちた飯粒を股の間に見出した時、彼は飯粒と白い花とを別々に見た。

なよ／＼とした細長い莖に、豆科植物の花によく見る様な島田鬚に似た形ちの小さい花がついて居て、葉の形はたんぼ／＼に似て居るが其が可愛い程小さいものであつた。段々見詰めて居ると、其小さい花がつい先頃までは無垢であつた優しい妹の顔になつて行く様に思はれて、彼の目は我知らず濕んで居た。此一瞬間にも彼女の體內では新しい生命を有つた細胞は刻一刻に分裂しては脹らんで居るのだと思つた時、彼の心は自然無言の力の恐しさに堪へられぬ感じに戰慄した。

彼は其小さい花を挽ぎ取つて香を嗅いで見たが何の匂も無く、花の名を思ひ出さうと努めたがつひに思ひ出せなかつた。て姑く弄んだ後、彼は其花を傍へ捨てた。根本から離れて淺しく其傍に倒れて居る小さい可愛い花には大きな力に反抗し得ない愚かものゝ悲哀が遺憾なくあらはれて居た。彼は其を長く凝視して居るには忍びなかつた。或る若い娘が不義な事して家から出た後で、戀しい懐しい故郷の母を想出しては『もう私はあの母の子でない、自分の體內の此子の母だ』と淋しくもそう感じては暗い心に沈む……其麼姿に妹を装はせて考へた時、彼は妹を騙した男を憎く思つた。そして其男の不義を怒つた。若しも男が其儘彼女を捨てる様な事があつたら……決闘！恐しい言葉が彼の心に囁いた。



## 彼の歩み

石 田 樅 村

畫家の彼れが、故郷の家に残して置いたたつた一人の妹が今度何うしても或旅の男に添はなけれりやならぬ様な深い關係に陥つて居たと云ふ事を、親からの手紙で知つた其次の日の午後だつた——

彼はたゞ無意味に郊外を歩き回つて居た。明後日までに或る婦人雜誌の口繪を描いてやらなければならぬ事も、彼等同人の展覽會の締切は五日後に迫つてゐる事も、何も彼も彼の念頭を去つて仕舞つて、彼はたゞ其重大事件——實は在外彼が考ふるが如くには重大でないのかも知れないが——に就て、茫然當所もなく考へてはふらり／＼歩いて居た。

彼の黒い洋服と、前額を覆ふ風變りの赤黒い畫家の帽子の影と、洋服の肩まで房々と垂れて居る黒い毛とで、彼の顔は殊更に蒼く見えた。からりと澄渡つた初秋の空を時々仰ぐ彼の眼には濕ひのない光が潜んで居る。彼は吐息し乍ら、今まで右の肩から左へ斜めに掛けて居た畫箱を外して、今度は其を左肩へだけ託したが、聽て發作的に右の手に持つた三脚床几を高く振りあげては復た打ち下した。丁度惡魔のまぼろしをても打ち叩く様に。

彼の畫箱の中にはいろんな繪具が納められて居たが、初秋の午前の日光を浴びた郊外の木立や畑の

色の配置は少しも寫さるゝ事なしにワットマン紙は空しく白く其儘殘されて居た。今日の彼は、一枚の些かなカットをすらも描き得ぬ程に熱して居た。彼は靜かな心で色と形とを寫して樂しむよりも、もつと重要なもつと急な要求に驅られて、秋の光に没入して居る。秋の郊外の心に突進して居る。人間と宇宙の意味に浸らうとして居る……と、上から注ぐ暖い日の光に接吻さるゝ女の喘ぐを見せて、とある烟は彼の目前に廣がつた……が忽ち、其の上に漲る肥料の匂が鼻に衝いた時、彼が今まで持つて居た故郷の妹に起る幻影は消えて、人間と宇宙との醜い現實の姿をまざ……と彼の胸に見た。

『畜生、妹が姦淫を犯したんだ！』正と云ふ光澤のない既成概念の鏡に照して映された妹の赤裸々な姿を見た時、其は餘りに殘酷な宣告だとそう思つた。『可哀想に、妹は騙されちやつた！』彼は斯う呟いて、さも力が抜けた様に三脚床几を持つた右手をだらりと下げた。が彼はまだ足を止めず郊外の道をぶらり……歩いて居た。

彼の同人が新年宴會に、とある西洋料理屋の青い瓦斯燈の下に集つた時、一人の友が彼に向つて吐いた毒舌を今苦々しく思出さずには居られなかつた。『世の中に處女なんてありやせんよ』と友に云はれた時、彼はむきになつて怒つたが其の時の不眞面目な友の顔が今鮮かに見える——自分の方を嘲笑ひ乍ら立つて居る様子が——堪らなくなつて來た彼は、三脚床几を振りあげて其幻を打續ち叩き壊して尙も歩いた。

其三脚床几が道側の陸穂を勢よく撫でた時、バタ／＼と軽い音をたて、蟬蛸が一匹飛び立つたので彼の視線が一寸其方へ外れる。と今度は彼の赤靴とすれ／＼に颯が一匹道を横斷して左側の芋畑



## I DO NOT SING.

I do not sing. I only speak.  
In speaking, I want to get out of the national limit.  
Hence I resort to a foreign tongue.

Is not the universe the body of God, and men and other  
living beings the parasites?

It may be that the earth is a living being with the body  
of fire, rock, and Water, and with immense number  
of parasites.

Even parasites have to struggle for existence. That is  
sad indeed.

I stars! I gaze at you and how I wish to go unto You!  
But it can never be,—never.  
If never, why do you shed your light upon me, as if  
beckoning me?

Revelation!  
We look back and wonder how much has been wasted  
before reaching it.

Transmigration!  
A journey with ups and downs.  
Why do you avoid it and seek Nirvana?  
Miseries may attend its way, to be sure; but still better  
than total extinction.

We think of gods and devils who bring happiness or  
misery to mankind.  
Such is our human-centric pride, even while thinking of  
superhuman beings.

Will there not be superhuman beings, utterly indifferent  
to our welfare?

Look at the multitude! The faith of immortality wavers.  
Doubts set in, and O how lonely!

The world! It wants common-place work. It is fond of  
sacrifices.

It seems as if Jealous of supremacy.  
Or does it sacrifice many for the sake of rare  
supremacy?

The dishes and plates on the table, beautifully dressed!  
Think how these come into congeries in one's stomach!  
A letter just written. It is being sealed. Will it ever  
meet my eyes again? Perhaps never.  
A sad thought, as if parting with one's child forever!

A letter from an old friend. It brings back the past.  
I write answer with old heart, but with new thought.

Preachers even in ordinary talks, use the superlatives  
too much.

It betrays that they are used to try to impress others,—  
with little success.

Prevention of cruelties to animals.  
It is prevention of cruelties to our sentiment.

“Bergson!” “Bergson!”

“Creative evolution!”

What fascination! But most of men are mere repetitions.  
How rare are the creative geniuses!

Tetsuzo Okada.

で自分の身窄らしい世界を守つて行くことだ、そしてこの生活に入つた自分の心持を穢してはならないのだ。獨<sup>どく</sup>自<sup>じ</sup>に、自分で、自分の生命を開拓し創造して行かうと決心した此の自分の眞實を傷けてはならないんだ。その生命が飽くまでも自己の眞實を主張するところからして此生活を獨<sup>おの</sup>自<sup>づ</sup>と撰<sup>せん</sup>らんだのだ。そしてその生活とは何であつたか。それは即ちお前を創造することであつたんだ、お前の中から尊いものを繰<sup>く</sup>り出して、些<sup>ちよつ</sup>とも雜りけのない醇なものを創らうとすることであつたのだ。自分の世界を……即ちお前を創らうとすることであつたのだ。その爲めには自分の生命を捨つることを少しも苦しいとも悲しいとも思はなかつたのだ。自分の生命をお前に移したまでに過ぎないのだから。捨てるんでもない、與へるんでもない、たゞ移したまでだ。形のない生命に形を與へてやつたまでだ。お前は勿論、今はまだ立派なものでない、お前には缺點だらけだ。けれど僕の生命はお前を措<sup>お</sup>いては無いのだ……僕はお前を熱愛しないでは居られない。崇敬しないでは居られない、そして何處までもお前に執着<sup>しゆぢやく</sup>しないでは居られない……さうだ、こんな尊いものを有つて居ると云ふことを僕は忘れてはならない。全世界をもつても代へることの出来ない此様に尊いものを……』

『まあ、兄さんは……』と云つて、周章<sup>あわ</sup>てゝ貞代は私を遮<sup>さへ</sup>つた。『妾はそんな立派なものでも尊いものでもありません。けれど、妾は兄さんや姉さんに此程<sup>これほど</sup>にまで愛せられて居るかと思へば、妾はもう嬉しくて々々々々……』

貞代はもうその次を云ふことは出来なかつた。袂<sup>たもと</sup>で自分の顔を隠<sup>かく</sup>して、聲をたてゝ泣き出した。それは恰も彼女の感激がその絶頂<sup>ぜつてい</sup>に達して、彼女の生<sup>せい</sup>の高潮<sup>たかしほ</sup>を打ち寄するに足るべき渚<sup>なみ</sup>も今はなくなつ

てしまつたかの様に見えた。

私は姉がその間何麼顔をして居たか、何麼ことを言つたか、何麼態度をして居たか薩張り知らなかつたけれど、姉が、

『あゝ妾は……』と云ひ出した時に、不圖、氣が付いて見ると、姉の眼は涙で眞紅になつて居るのを見た。姉は云つた。

『まあ妾は、幾年の間、この一時を待つて居たこととせう。三郎さんが眞個にこの尊い貞代を自覺する様になるこの一時を……。けれど私はもうこれで全く安心してしまひました。私達が三人ともこの生命の高潮に乗つて、自分達でも豫想しなかつた、此麼に美しい濱邊に打ち上げられたとを知つたので……。ねえ三郎さん、あなたはもう此麼墓場の様な家でも辛抱が出来てせう、その家に何よりも尊いものを見付けたのですから……。ね、出来るでせう……。私達は三人とも、一時も離れられませんが、私達は大きな生命の表と裏とですよ、刀で云へば鞘と刀身とですよ。どちらが缺けても駄目なんですよ……』

私は自分の頭や心情に今迄かぶり着いて居た重い黒雲が一時に吹きとばされて、煌々たる月が影もさやかに照り輝くのを覺えた。私の心は軽くつた。私の生命は一時に活復つて来るのを覺えた。

私達の生活は以前よりもつと苦しくなつた。私達はバン問題の爲めに苦しんで居る。私達は三度の食事を二度にして。私達は泣いて居る。同時にまたその涙を私達の生命の糧として居る。(完)



『まあ、兄さんは眞個に獨りぼつちなの?』と云つた貞代の顔には憤怒と失望とが明々と刻まれて居る様であつた。恰も、私達が二人もかうして兄さんの爲めに力を盡して居るのに、それが兄さんにとつて、何の役にも立たないと云ふのですか、と云つてでも居る様な眼をして……。

『だつていゝかね』と私は云つた。『僕は今迄、二三の會社や學校に關係した、そして其所に自分の生活の基礎を立て、行く筈であつたんだ。ところが何處へ行つても自分の眞心を満足することが出来なかつたのだ。たとへば伯父の會社などにしたところだね、僕は最初自分の生活は、此處に立てる外はないと思つて、非常な期待をもつて入社したが、入つて見ると矢張り駄目だ。伯父と僕とは何うしても陟ることの出来ない時代の相違があるらしいんだ。伯父は僕を了解しない、僕は伯父を了解しない。而も伯父は若い者が何、生意氣な、と云つた風に癢にでもさわるのか、年長の權威をもつて無理に僕を威壓しやうとするのだ、實際、僕と伯父とは、かつて一度だつて平靜な態度をもつて、また言葉をもつて、お互に思想を語り合つたことはないんだ、伯父は直ぐ怒なりつけてその聲で臆病者の僕を抑壓しやうとするのだ。それでは、その會社に居たつて僕は自分の生活をする事は出来ない。たゞ伯父の生活だ。僕は何も他人の意見や利害に關はなくて、自分一人の利己主義を實行しやうとするのではない、けれどせめては自分の心から他人の爲めに盡し、他人の爲めに生命をさしげ得る様になりたい。犠牲は尊いことに相違ない、併し自分と云ふものを没却した犠牲程つまらないものはない、それは犬死だ。僕は自分の眞心からして自分の身を殺し得る様な、そんな犠牲なら何時でもする。まあ、それはさうとして、此處わけだから、僕はもう何處へ行つても駄目なのだ。今に伯父

はもう僕にガミ／＼云ふことさへも止してしまふだらう、その時は伯父が全く僕を捨てた時なんだ。そんなことを思ふと何だか淋しくてたまらないのだ。

貞代は私の言葉を遮つた。

『それでは兄さんは自分の心の底から、自分の生命をさへげて行つて來たものは一つもないのですか、今までもなかつたのですか……』

貞代は烈しく私を責める様に見つめた。その眼から熱い涙が落ちた。私も黙つて悲しさうに貞代の眼の奥までも見つめて居た。新しい思ひが私の心の底に浮んで來た。新しい力は私の衷に湧いて來た。

『うむ、ある。たつた一つ有る。それは……』私は自分の衷に我ながら如何ともすることの出來ない、自分よりも遙かに尊い、高い、強い、力のシヨックを感じた。私の手は獨りてに動いて居た。そして私は夢中に貞代の手を固く握りしめた。『それは即ちお前だ。お前を創造することであつたんだ……』かう云つて私は眼から涙を瀧の様におとした。

貞代は黙つて軽く私の腕に身體をよせかけて、鳩の様な眼でしとやかに私を見上げた。その眼は見えない手で私の全心全靈全體を強く／＼抱きしめるのであつた。

暫らく無言のまゝに、互に見つめ合つた後に私は自分の眼の涙を拭ひながら云つた。

『さうだ。僕はもう世間普通の人と同じ生活を夢みてはならないのだ。洋行だとか學問だとか會社だとか云つた様なことを考へてはならないのだ。僕は今既に新しい生活に入つて居るのだ。即ち自分

あたりは、大きな校舎や會社が、氣味のわるい、生き物の様に屹立して居た。私の胸は妙に平穩かてない。伯父の家、伯父の思想、花子さん、花子さんの忠告、旅行！佛蘭西、花子さんの眼と握手。私はそれ等の思ひを振落さうと努めた。けれど花子さんはだにの様に私の心の中に食ひ入つた。

私の家は相變らず陰氣であつた。私が伯父のところから歸つたのはもう夜の十二時頃であつたが、姉も貞代もまだ起きて仕事をして居た。

『お歸りなさいまし。おそかつたのねえ兄さんは……』と貞代は心配して居たらしい顔をあげて急に晴やかな笑ひを口もとによせた。姉は私の顔を凝乎と視つめながら

『まあ三郎さんのお顔の蒼いこと、何うかしやしなかつたの？ 伯父さんが怒つて？』と眞實のこもつた眼を私に投じた。

『いゝや、些つとも……だけど相變らず僕を了解しないところから、僕は的のはづれた批評を浴びせかけられた……』

私はたゞかう答へたばかりで、また沈み込んでしまつた。伯父は私の心持ちを少しも了解してゐない、併しそれも二人は別の世界に住んで居るのだから仕方がない。かう思ひながらも、伯父の自信に充ちた、人を威壓しやうとしてかゝつて居る批評や言論を聞いた自分には、それが一種の恐ろしい力をもつて自分をずたづたに切り責めて居る様に感じられた。『お前は駄目だ。お前はもう一刻々と死

んで行つて居るのだ、さあこの通りに……』と云つて、蠶が桑の葉を嚙んで行く様に、自分の生命を喰ひ盡くして行く様に思はれた。自分はかうして伯父の爲めに殺されて居るのだと云ふことを痛切に感じさへれた。『自分は遂に伯父の會社の旋風の生の行進にはぐれてしまつて、所謂、人生の落伍者になるのかも知れない。丁度陰氣な墓場の空氣が自分の家を取り絡んで居る様に、自分も亦人生の墓場にとぢ込められ封じ込められてしまふのかも知れない』かう思ふと、私はもう恐ろしくてたまらなかつた。私はもう自分の人生に一點の光も認めることが出来なかつた、一條の道も見出すことが出来なかつた。全く暗黒である、全く恐怖である。私はいつそ自身の深い要求を捨て、しまつて伯父の會社の旋風に乗つて一生を華々しく過さうかとも思つた。花子さんの腕を握つて、歐州に旅行をして、つまらない學問でも辛抱して學んで來やうかとも思つた。

私の心持を直覺的に感知してとつた貞代は曇つた顔をあげて私に云つた。

『妾、忘れて居ました。花子さまがお歸りになつて居ましたでせう？』

『あゝ。僕は屹驚した。あの女は立派な女になつて居る』

『それで兄さんはまた、佛蘭西へ行きたくなつたのでせう、花子さまはどうあつても兄さんを連れて行くと云つて居らしたのよ。兄さんはそれでまたふさぎ込んだのでせう、ねえ、きつとさうでせう、妾知つて居るわ。』

『いゝや、さうぢや、僕は佛蘭西へなんか行きたくはない。たゞ、これから何うして生きて行かうかと思ふと何だか氣がつまりさうなのだよ。僕は獨りぼつちなのだ……』



『三郎さん、私達は随分しばらくしてたねえ』と花子さんは途々私に話した『私達のお別れしたのはお互にまだ子供の時分でしたものねえ。何でも貴方が十二で、私が十の時だと思ひますよ、それから妾は十八になるまで東京に居たんですが、十八の年に××公使に随行して巴里に行つたのでした。』と花子さんは獨りて記憶の糸を繰り出す様にして『そしてそこに六年も居たんですものねえ。だから私達はまる十四年間で云ふもの別れて居たんですよ、勿論手紙では始終往復して居ましたけれど……』

花子さんは話しながら何時も活潑で、元氣でそして愉快さうであつた。何麼人でも頭から呑み込んでしまつて居ると云ふ様な風であつた。それに反して、私はまた例の羞かみ虫に惱された、そして自分の思ふことは殆んど一言も云ひ得なかつた。

『さうですねえ。私達は子供の時分、よく遊びましたねえ』

子供の時分、姉と花子さんと自分とで、淋しい遊びをしたことや、花子さんが東京に居る伯父のところへ呼び寄せられて行つてしまつたので、私達二人はどんなに悲しんだかを思ひ出して居た私は、やつとこれ丈けを云ふことが出来た。

私達は市内電車の通つて居る街に出た。けれど花子さんは歸らうとはしなかつた。私達は電車の線路に沿うて尙も話しながら歩いた。もう店を閉ぢかけて居るところもあつた。

『ねえ三郎さん。お父さんは眞個に残念がつて居るのですよ。そして、折角あれ程にまで話を進めてから止すなんて、一體三郎さんはどんな了見で居るのだらうと云つて居るんですよ。まだこれか

らでも何うにでもなりますから、あなた行つていらつしやい。それはいいことよ。私も復行くの、一緒に行きませう、妾は彼地で色々の名高い人を知つて居てよ。有名な文學者とも、畫家とも、學者とも、宗教家とも……妾はあなたを紹介してあげるわ、そしてあなたはそれ等の人の手藝で屹度いゝ運命の緒を見出されるわ、外國に居ても、日本に歸つていらしても……』

何時の間にか、私達は市内電車の終點にまで辿り着いて居た。私はそこから山の手線の電車に乗つて歸ることにした。別れに臨んで花子さんは、西洋式に私の手をとつて、固く握りしめ、情熱のこもつた眼で私を凝乎と視つめて、

『さやうなら三郎さん。そのことは今一度よくお考へになつた方がよう御座んすよ。若しあなたが何うしても行かないとなればお父さんはまた貴方の同僚の誰かをやりますよ。さうするとその方々は二三年もしたら歸つて来て立派な地位に着くんですよ、世間からでも囃されるんですよ、何不自由なく贅澤な生活をする事が出来るんですよ。そして貴方はその時、どうして居らつしやるの。お父さんは鼻で貴方を嘲笑しますよ。貴方は全く獨りぼつちにならなければならぬんですよ。ねえ、三郎さん、も一度氣をとり換へて、行く決心をなさいますな。私も實際、他の方をやりたくないの、貴方と一緒に是非旅行したいの、あなたに地中海沿岸の景色を見せてあげたいの、フランス女優の顔を見せてあげたいの……では左様なら三郎さん、また被來いな……』

山の手に沿うた秋の森は靜寂な夜の氣に掩はれて、濃淡さまざまの黒い陰影を私の眼の前に描き出した。櫟林の下に散在して居る家々には、美しい燈火が點々と散らばつて居た。地面の平に展られた

いなんて云ひ出して……眞個に残念なことをした……』

私は黙つて何も答へなかつた。願はくは今夜はこの談しが出なければ可いかと私かに念じて居た位、此の問題に觸れることを私は好まなかつたのである。何故なれば私を伯父がその自分の會社から洋行さして呉れると云ふことは、慥かに伯父の非常な厚意によることであり、私も亦、自分の生活の安定の爲めには、さうした方がいゝと思つたのにも拘らず、私の心の中には、私自身にも如何ともしることの出来ない、私よりも強い或者があつて、この企てを妨げたのであつて、その邊の消息は到底これは他人に話して了解さすことの出来るものでないと、私は思つて居たからである。伯父はそれから例の如く若いものを罵倒し始めた。

『今日の若いものは何かと云へば直ぐ自我だの個性だのと云ふが、一體、彼等は皆眞の自我や個性の何であるかを知らないのだ……皆は自分よがりの自我狂に過ぎないのだ。謙遜して多くの人々から學び、もつと努めて廣く學問をしなければ決して大さうならんと云ふことを知らないのだ。彼等は極小さな自分一個だけの自我に閉ぢこもつて居て、その自我を造る社會だとか自然だとか云つたものを全く度外視するのだ。そんなものに大さうなる筈があつてたまらない。お前だつて同じ事だ、今の様な小さな思想ぢやとても大さうならないよ。俺はそれが残念でたまらないのだ』

伯父は更に進んで團體の必要を私に説いてさかせた。自分一人では何にも出来ない、今日はたゞ團體の力によつてのみ事業をなすことが出来る、伯父の會社でも近頃その邊のことに鑑みて、社員相互の扶助を目的とする購買組合を設立した、年一人づゝの留學生を海外に送ることにした、事業の擴

張の爲めに月々一日の講演會をやることにした、などと云ふことを話して聽かせた。私は尙も黙つて聽いて居た。なぜ自分の思ふことを語らないのかそれではお前が益々やすく見くびられるに過ぎないからだと一方では自分の臆病をはがゆくてたまらなかりながら何とも云はないできいて居た。そして寧ろ自分の中にある或る不可抗な力を呪ひもした。伯父の云ふ團體の力は私の眼の前を、旋風の如くに會員の運命を乗せて時勢を叱咤しつゝ疾走した。私の頭の中には失望や恐怖や暗黒や、それからまた、奮勇や戰鬪や眞實の心持ちが、搔き廻された水面の様に亂舞するのを覺えた。

以前にも私は或人から洋行をさして貰ふことになつて居た。ところがそれも私の衷にある彼の恐ろしい力の反抗に逢つて斷つてしまつた。そして一時職を失つて困つたので、幼ない時分、郷里で知つて居た伯父が今、或る會社を経営して居るのを幸ひ、そこに頼つて行つて使つてもらふことにした、ところが今度も亦、その會社で同じ運命を繰り返して居るのである。私は今や、伯父の所謂、團體の力の流れからはぐれてしまつて、自分獨りで自分の世界を築いて行かねばならなくなつて居るのである。成る程自分一個の力でもつて、自分の世界を創造して行くとは自分の力の餘りに小さいのを感じずには居られない。けれど私の衷に芽生えた生命は、伯父の會社に隘れて居る剪圍氣の中には成長し得ないのだから仕方がない。私は團體を呪ひはしない。けれどたゞ自分の衷情とそぐうた團體に屬して働きたい。自分がその團體の一エージェントとなる限りは、その仕事が即ち自分の生活そのものであるのだから自分の衷情を主張するのは決して不道理ではない筈である。壓へつけられる様な重い心持ちに襲はれながら、私は叔父の家を辭した。花子さんは私を送つて一緒に町に出た。



翌日の夕方、私は郊外に住んで居る私の伯父を訪ねて行つた。おど／＼する心持ちを凝乎と抑へて訪ねて行つた。私は伯父には拂ひつくせぬ程の恩義がある。それにも拘らず今度も亦、伯父の意に背いて、もう十中の八九までも決定つて居た洋行談を不意に斷つてしまつた。私はもとより、伯父はそんなことの爲めに機嫌を損ねる様な人でないと云ふことを知つて居るが、何となく氣がひけて仕方がなかつた。

伯父は快よく私を迎へて呉れた。平常の通り、そのもぢや／＼した頬鬚の間から、血色のいゝ顔に、稍々神經質な、何處かに不安のある、憂ひを表はしながら、それでも例の大揚な態度でもつて、

『何うだね。旅行は面白かつたかね』と訊ねながら私には碌に挨拶もしないで、ソファアの上に腰を埋めた。私は旅行中の疎遠などを謝した。

『何、旅行中はゆつくり落着いて手紙などは書けやしないよ。俺もこの夏は一ヶ月ばかり彼方此方あるさまわつた』と云つて、伯父は自分の旅行した國々の風景や人情などを私に話してさかせた。私はまた私の旅行から得た印象や夏期中の生活などを掻いつまんで話した。下女がやつて來て晚餐の仕度が出来たと知らせたのは彼此一時間も話し合つた後であつた。

私達は大きな食卓を圍んで晚餐を共にした。食卓は何時も快活な悲しみを知らない伯父さん、大人なしい太郎さん。羞にかみやの二郎さん。それから私が見て驚いたのは花子さん。私は花子さんを此處に見やうとは思ひがけて居なかつた。まだ今頃、歸國すると云ふ様なことを夢にもさいて居なかつ

た。歸つて居ると云ふことさへ誰からもきかされて居なかつた。私は初め、華奢な縮緬の着物を着て、房々した髪を真中から奇麗に分けて頭の兩側にたらし、少々後部の方に意氣な束髪を結んで居る、そして生々した眼は長い黒い睫毛で縁どられ、愛らしい笑が兩頬に浮かんで居る美しい女は一體、誰であらうと疑はずには居られなかつた。

『あゝ、お前にはまだ話さなかつた。花が歸つたよ』

と伯父は私をつれて食卓に着くと直ぐ、花子さんの方を眺めながら私に云つた。

私は全く不意打ちをくらつた様な氣持がした。そして驚くより外は何事をも語り得ず、何事をも思ひ得なかつた。

『あゝ、さうでしたか、さうでしたか』と繰り返しながら『何時お歸りでしたか』と私は訊ねた。

『この方は三郎さんねえ、』と花子さんは伯父に目をくれて『まあ懐しい』と表情たつぷりな親しげな眼を私に向け。稍プラウダな態度をして私に云つた。『先月の五日に歸りましたの、急に歸つたものですから誰方にもお知らせ致しませんでしたの』

伯父は花子さんに就て色々な話しをして私にきかせた。

食事がすんでも私達は尙、食卓を離れなかつた。私の血の躍る様な巴里の談や、あの廣漠たる米國の自然などが花子さんの可愛い口を通して話された。伯父は始終満足げな笑ひを、福々しい兩頬に浮べて居た。そして最後に私に云つた。

『だから君も行つて來ればよかつたんだ。折角あれ程にまで骨を折つてやつたのに自分から行かな

『まあ、さう？ 三郎さんは随分、薄情はくじやうなのねえ。私達をこんな墓場はかばの様なところにほつといて…自分丈自分けそんないいとこに居やうなんて…』

『さうぢやないさ。あなた方をも一緒に呼んでよ』  
すると貞代が横よこから口を容いれた。

『けれど妾わたしはそんなところは厭いやですよ。とても永い間ことそんな處へは住まれないわ。いゝと思ふのはほんの僅の間よ。住むなら妾はやつぱり此都こが一番いいわ。何故なら此都こは人の生命が一番、活潑に動いて居るところなんですもの、私達だつて生き甲斐がひがあるわ。…妾は一體兄さんが（貞代は私をさう稱よんで居た）佛蘭西へお出でになると云ふことさへ好きでせんでしたの。兄さんは彼處あそこへさへ行けば明るい世界に出られる様にばかり思つて居らつしやるけれど、それは駄目だめよ。なぜなら、そこでは何處どこに世界が廣うても…』貞代の顔には何時の間にか恐ろしい程の眞面目まじめさと嚴肅さとが表はれて居た。『どんなに世界が廣うても、生活が樂になつても、色々の人からても嘲あざわらされても、もうその時は兄さんの死んだ時よ、精神的に…その時は兄さんは私達と離はなれて居らつしやるんですもの、私達と…兄さんは私達を離れては生きられないのよ…』

『さうですよ。そして私達も三郎さんを離れては生きられないのですよ…』と姉はつけ加へた。貞代まことの言葉は私には一種不可抗な神の命令でゝもある様な氣がした。私は彼女を教育した。何處いづの間にか彼女が私を支配して居る。けれど私は尙感謝する、彼女は私を奴隸どれいの如く支配して居るのではない、それはたゞ私自身の衷情ちやうじやうを喚び起すことによつてゝある。だからこそその力は私にとつて不可

抗な力なのである。それは實に私の内部に於ける運命の様なものである。仲の可い運命である。そしてその運命に従つて私は世の中と戦はねばならない。私は云つた。

『だから私は佛蘭西へは行かないことにしたぢやないか。』

『さうよ、それは妾がさう念じたからよ。私の念力がとどいたのよ』

貞代はそのキリツとしまつた口もとに柔さしい微笑をふくみながら、燃ゆる様な眼で私を眺めた。『どうして彼の娘は私をかうも蠱惑すのであらう』と私は惑うた。

佗しい五燭の電燈が私達の座つて居る六疊の間を薄暗い光で包んで居た。私達の間には、私が旅から持つて歸つた土産がならべられて居た。耶馬溪の繪はがきに貞代はうつとりと見入つて居た。姉は松浦川がいゝと云つた。私は旅びの話をした。新しい幾つかの経験や、土地の傳説などを話してきかせた。大きな黄ろい美しいバナ、の果の芳香は、日本の國の南から歸つて來た人の土産として、一種の憬れと熱情を語るに適當なものであつた。

窓を通しては、流れて居る谷の様な街が、直ぐ下に家並をならべて居た。向側の高臺は、こんもりと繁つた森であつて、その中には公爵か皇族かの御邸が永遠に閉された秘密の様に、息を靜めてひそんで居た。青いアーク燈の光りが物凄くあたりを輝らして居た。谷から高臺への傾斜には、溫泉場の様な灯が層をなして段々と高く重なつて居た。私達の周囲をとり圍んで居る空氣は墓場の様に重くろしく、靜寂の力は益々強く私達に壓しかぶさつて來た。



には出ないと云ふ條件の下に姉をも、私と共に都に出した。私達はもう兄から學資を送つて貰はなかつた。そして二人で力のつく限り働いた。姉は私の食事の世話をする外に、近所の縫物を請負つた。私は新聞を配達した。私達の結びは益々固くなつた。

貞代は母の里の遠縁に當る家の娘である。彼女の家も豊ではないが、元來が惻愾な性質をもつて居て、頭腦もいゝし、心だても素直な上に、年には不似合な程しつかりしたところがあるので、貞代の父は口癖の様に『この子だけは些つとは眼をあげてやりたいんで御座んすよ』と云つて居たものである。貞代自身も亦、私達二人が東京に居るのを知つて、どうかして都に出たいと念じて居たのである。そして遂に或日彼女は私達の佗住居を訪ねてやつて來たのである。不足がちな學資の仕送りを受けながら、貞代は或る女學校を卒業した。そして卒業した後、國へは歸らないで、私達と一緒にどんな苦勞でもして見たいと云ひはつた。私達は自分の子を教育する位の熱心と覺悟とをもつて、貞代を仕上げやうとした。私達の生命は全くこの少女を育てる爲めに打ち込まれたと云つても可い位に彼女の爲めに骨を折つた。

貞代は私達の世界であつた。私達にとつては貞代の美しいのは私達自身の美しいのであつた。貞代の健康は私達の健康であつた。貞代の幸福は私達の幸福であつた。貞代の趣味や生活が高尙になり、深くなり廣くなればなるだけ、私達の世界も高くなり深くなり廣くなるのであつた。私達は自分の所有を少女によつて見ることが出来るのであつた。自分の心や性格や力や、一切の生命の富をこの少女の中に映すことが出来るのであつた。貞代は實に私達を映す生きた成長する鏡であつた。

貞代は成長した。貞代は次第に進歩し發達した。併しその爲めに私達はどれだけ苦心をしたか知れない。私達は自分の生きて行く丈けども中々並大抵なことではなかつたのに、たといそれは自分の眞底の要求から出て來た、自分の眞實の生活の爲めだとはいへるにしても、兎に角、かうした生きた精神的藝術品を創作する爲めに、私達の弱い生命が、どれだけ消耗されたか知れない。私は獨りて心の中にかう念じた。

『よし！生命よ。お前は消耗するならするが可い。俺はお前をこの小さな身體の中に押し込めて置いて腐らしてしまふよりは、外に出して何かに植を付けて、新しい芽ばえをそこに見る方が何れ丈け可いかもしれまい。俺の生命はその爲めに消耗されねばならないのだ。俺はその爲に死なねばならないのだ……』

ところが不思議にも亦、貞代の爲めに傾倒し盡したと思つた私達の生命は、成長した貞代の肉體から美しうなつたその額から、顔から、口から、そしてその緑の髪から、倍にもなつて別種の生命を私達の中に送りかへすのであつた。立派になつた彼女の人格にはもう私達を支配する力をもつて居た。

『旅行は面白かつたの！ 彼地はいゝところだつてねえ』

久し振りに自分の家で私が晚餐をすました後に、私の持つて歸つた繪はがきなどを眺めながら、姉はかう云つて私に話しかけた。

『あゝ。随分愉快だつたねえ。僕はもう歸りたくはなかつた』

居る雨に濕うるはされた、淋しい畑の畔に赤い萬壽草まんじゅそうの花が咲き揃うて居るのであつた。

惶急あわただしく過ぎ去つた漂泊へうひやくの旅び！

その思ひ出の淡い哀愁！

それが今、この恐ろしい生の渦捲によつて惹き起された不安な思ひと結び着いて、私の神経を、光線に射られた蝙蝠の様におびえさすのであつた。人出の多いプラツトホームに降りるや否や、私は人目を避ける罪人かなんかの様にこそ／＼と其處そこを脱け出で、私を待つて居る小さな淋しいわが家へと車を走らせたのである。

身窄みぢらしい私の家は墓場の様な静寂に包まれて二本の大きな銀杏いんげんの樹の蔭に立つて居た。私の姉はその墓場の番人の様に、虔つとやか忍従の静かさを、その顔にたゞへながら、數年來私達と一緒に住んで、私達の眞味しんみの家族の様になつて居る貞代と二人で、薄暗い五燭の電燈の下で縫物の針を餘念なく動かして居た。

『まあ、三郎さんは酷いひどのねえ。妾わたし、どんなに喫驚びつくりしたと思つて？ だしぬけに歸つて来るなんて……』  
玄關げんかんに私を迎へるや否やかう云つて私をたしなめた姉の顔には、包みきれぬ喜びの色が溢れて居た。貞代は莞爾えんじりと微笑ほえんで、散らかつたものを取り片ついたり、火鉢に火をついだりなどした。

姉とは云へ、私達は實は双兒ふたこであつた。たゞ私が彼女よりも一刻さきに此世の光を見たと言ふので私の土地の風習ふうしに従つて、前に生れた私が弟と呼ばれ、後から生れた彼女が姉と呼ばれたまでであ

る。母の胎内たいないからして已に奇しき運命を共にして居た私達二人は、生れてから、も母の乳房ちゆうぶを一つづい銜くはへて二つの膝を半分わけしたものである。けれども、その母は永くは私達の世話を見られなかつた。私達がやつと五つになるかならずやに、母は持病の癪しやくに胸を壓し塞ふさがれて、その儘、呼吸いそをひきとつてしまつた。それから暫らくの間、嫂あにやめの手で育てられた後、繼母の冷たい翼つばさのもとに喰くまれたのである。それは幼ない私達にとつて何處どこに悲しい試煉であつたであらう。私達二人は自然と深く深く結び着いて行かずに居られなかつたのである。そればかりではなかつた。私達が九つになつた時、父は、また私達を残して此の世を去つた。一時に迫つて來た不運や悲哀を、僅わずかに酒の力で消けして居た父は、或る日、酔つぱらつた後に飼牛かうぎを曳ひいて家の前の堤防の上を河に沿うて下つて行つて居る間に、何うした拍子か牛が一時に跳ね出したので、脚下あしもと危あやふくよろめいて居た父は、到頭その堤防の上から河中かわなかに投げ落され、大きな岩に頭を打つ附けて、そのまゝ死んでしまつたのである。悲しい暗い運命の雲は、私達の人生の曙あけぼのからして、その空に掩おほうて居たのである。かくて私達二人は幼ない時分から他の小供等の當然うけ得べき恩恵おんけいにも浴よくしたことのない淋しい少年となり、少女となつたのである。この世の中に眞個ほんとに頼たよりたよられるものとは、たゞこの双兒の姉と弟とばかりであつたのである。十二三歳の頃から、私達二人は村から町へ移された。町の小學校に通ふ爲めに一人の叔父おぢの家へ預けられた。そしてその町で私達は二人とも普通學の課程を修めた。私はそこで中學を卒業した。そして更に専門の學科を修めんが爲めに都會に出なければならなかつた。併し姉には女學校以上の修學は許ゆるされなかつた。けれど姉は私と離れては、一日も居られないと云ひ張つたので、長兄あには到頭、學校



腰はアレース、胸許むなもとは、ボサイドーンそれに似つ  
此日此時數多き、勇將の中アトロイスの  
子は神明の計ひに、赫耀影を抜き出てぬ。

雄志抱きて戰の、隊伍に就ける軍勢は

よすがらこゝに横わる、見よ今燃ゆる百千の  
篝火かきりへば風無き夜、皎々牙え照る月のあたり

列星ひとしく燦爛と、天上高く光る如ごと。

山嶽及び起伏する、丘陵並に谿谷の

姿其時現はれつ、無限の大空頭上たいくうとうじやうに

萬星率ゐて現はれて、牧人明日あすを喜ばむ

數はた斯くや水軍と、クサアントスの大江の間

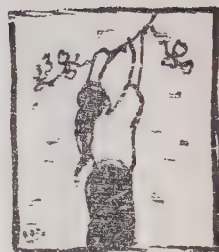
トロイヤ軍勢の焚火たきびに照すイーリオス

見よ原上の一千の、篝火ひとつの篝每ごと

火焰の光寫し出だす、軍兵あの一／＼五十人

大麥小麥嚙みながら、軍馬はたまた足揃へ

兵車のそばに立ち並び明日あすの曙光を待ちわびぬ。



## 寂しき家にて

加藤 一夫

汽車が都に近づくに従つて、線路に沿うた町々の様子は次第に變つて來た。私は立ち並んで居る煉瓦造りの工場にも、毒々しい黒い煙を吐く幾本かの高い煙突にも、店頭飾られて居る色々の商品にも、活氣に充ちた停車場の物賣りの呼聲にもすべて三等のものの一々に忙はしない、性急な、苛々しい都會人の生活の象徴を見ないでは居られなかつた。生さんが爲めに不斷に工夫し、計畫し、創造し、戰つて居る、生命の海の渦捲が、底氣味の惡い呻なり聲を舉げて、弱い私の神經にまで攻めよせて來るのを感じないでは居られなかつた。私はもう平穩な心をもつて周圍の光景を眺めることが出來なくなつた。そしてまる三月の間を田舎で過して、そこに新しく始めた自由な生活によつて、胸に湛へることの出來た歡喜の小波が、無殘にも攪き亂されて行くのをとどめることが出來なかつた。

私が都を立つたのは夏もまだ初めてであつた。新緑の瑞々しい若葉が處々の森や林に滴つて居て、やつと五六寸ばかり延びた青い稻田の面に、涼しい朝風が心地よく吹きわたる頃であつた。それがもう紅葉が山々を美しい錦繡で飾り、稻田は見渡すかぎり黄金の色に匂ひ、冷たい秋風が枯れた黍穀にサラ／＼と鳴る頃になつて居るのであつた。汽車の窓から外を眺めると、小糠の様にジメ／＼と降つて

アカイヤ人を戦闘に、進むる命を傳へしむ。  
令使即ち命をのべ、衆速につどぬ來ぬ。

今アトロイスの子の傍そばの、神寵厚き列王は  
令を下して驅け廻る、中に綠眼のアテーネー  
不朽不滅の珍寶の、楯を携ふ

楯に純金の百の總ふさ、垂れたり總は精好の  
織のいみじく各々の、價まさしく百の牛。

此楯取りてアテーネー、アカイヤ人の陣中を  
縦横はげしく驅け廻り、衆を勵ましおの／＼の  
胸に飽くまで奮戦の、たけき思を湧かしめぬ。

衆人忽ち勇みたち、感じぬ戦甘うして  
船に乗じて最愛の、故郷に行くに優りぬと。

譬へば嶺の頂の、大森林を燒き立つる

猛火あらびて炎々の、焰遠きに照る如く  
集り來る軍勢の、武具より燦と照り返す

光は遠く空に入り、天に冲りてめざましき。

かなた譬へば飛び翔くる、禽鳥無數のあつき群  
鵝鳥丹鶴頸長き、白鵠一つに群れかけり、

アシアの廣き原の上、カイステールの川ほとり  
翼を延して揚々と、かなたこなたに飛び廻り  
嗷々鳴きて下り立てば、沼澤ために鳴り渡る  
跡さながらにアカイヤの、衆軍陣より水師より  
スカマンドロスの岸の上、群り來り軍勢と  
軍馬の脚の轟に、大地はげしく鳴りどよむ。  
斯くして春に花と葉と、萌えづる如く百千の  
衆軍並びて止りぬ、スカマンドロスの花の野に。  
其陽春のうらゝの日、瓶に牛羊の甘き乳  
溢るゝ頃に牧人の、小舎に紛々飛び廻る  
無數の青蠅密集の、群見る如く長髪の  
アカイヤ人の軍勢は、トロイヤ軍と相向ひ  
其覆滅を心して、戰場さして群りぬ。

譬へば山羊の數多き、一群牧場に混ざるを  
養ひ馴れし牧人の、容易く認め別つごと  
諸將おのゝ其部下の、衆兵分ち整へて  
戰場さして進ましむ、中に大王アガメムノ  
頭と目とは雷震の、ツオイイスの威神見るごとく



チツボラ それぢや私も行きます。私も行きます。  
モゼス あなたはこゝに待つておいて。私の行手  
には光が輝やいてゐる。けれどもそこには剣と  
争闘が待つてゐるのだ。

チツボラ あなたは私を欺いてゐるのではないの  
ですか。あなたは私を欺いて遁げやうとしてゐ  
らしやる。

モゼス 私があなただを欺いて遁げやうとしてゐ  
る？ 私はもう行かなければならない。あなたは  
こゝに待つてゐておくれ。私はすぐ埃及へ行か  
なければならぬ。

チツボラ 私はあなたがわからない。どうしても  
わからない。

モゼス 何がわからない。あゝ、あの火が見えな  
かつたあなたに私の心のわからないのも無理は  
ない。しかしぢきにわかるだらう。

チツボラ そんならどらぞ今晚だけとまつて明朝  
早く御立ちなさい。

モゼス いや、いや、そんなことは出来ない。今  
立たなけりあならないんだ。——私は今すべて  
のものを征服し統一する生命を握つてゐるの  
だ。私の胸の鼓動は生命の根源に脈うつ力と鼓  
動を合せてゐるのだ。私は行かなければならぬ  
い。埃及の文明を破壊するために……（幕）

（一千九百十三年十二月四日稿）



## イーリアスの一節

——あらしの前——

土井 晩翠

斯くて饗宴こと終り、口腹各満てる時

ゲレーナの勇士ネストール、衆に向ひて陳じ曰ふ。

『あゝ光榮のアトライデース、民の大王アガ멤ノン

言語討議は既に足る。神の命じてわれの手に

托せる事功いつまでか、再び延引さすべきや。

いざ傳令の使者をして、鐵甲よろふアカイヤの

衆水陣に集むべく、朗らの聲に宜らしめよ。

我は一齊打つれて、軍陣廣く驅け廻り

奮戦苦闘の雄たけびを、こと速に擧げしめむ』

彼れ斯く陳ず民の王、アゼ멤ノン之を納れ

直に音吐朗々の、令使に命じ長髪たぐちの

に近づくに随つて四面一時に光輝を増す。モゼス火の傍に立つてそれを凝視してゐる間に突然仰向に倒れる。チツポラ駆け寄る。火消えてもとの野となる。

チツポラ モゼス、モゼス、しつかりなさい、し

つかりなさい、よ、よ、よう、モゼス……

モゼス (目を醒ます) おゝチツポラか。私は今第三

の天に登つて私の全生涯の縮圖を見せられたのだ。私は今宇宙の生命を此目で見たのだ。私は今始めて意志力を以て私の思惟の世界を征服することが出来たのだ。(起き上る) 私は思惟の思想に喘ぎ悩んでゐたのだ。あまりにあのれを考へすぎてゐたのだ。私は労働でもつて此頭腦の世界に打勝つことが出来なかつたのだ。私は私の行くべき道を知つてゐた。しかし私は手を拱いてそこを通つて行くことをしなかつたのだ。そして其道を知らないと思つてゐたのだ。私は之から私の知つてゐる道を大手を振つて、この強い

足をあげて、大膽に歩いて行けるのだ。

チツポラ あなたは此頃は妙に苦んでゐらしつ

た。黙つて苦しんでゐらしつた。そして私には

それを話しても下さなかつた。父は男といふ

ものはあんな風に苦むことがあるものだといつ

てをりますし、私もそんなことに口を出しあし

ませんでしたが、あなた、ほんとうに何うかな

すつたのぢやありませんか。……でも今日は不

思議にあなたの顔には喜びがあります。

モゼス、そうだ、私の顔には喜びがある、光があ

る。今私の精神に燃された光が顔に反射するの

だ。チツポラ私は今初めて純一な生活の門に入

つたのだ。刹那に永遠といふものを味はふたの

だ私は今ほんとうに戀をすることが出来る。私

はあなたを私のものとする事が出来る。私の

前面には光が輝き、生命が躍躍してゐる。私は

今宇宙の生命を目を醒しながら呼吸してゐる。

チツポラ どうしたのです。どうしたのです。モ

ゼスちつとも私にはわからない……

モゼス あなたはあの聲が聞えなかつたのか。宇

宙の生命があの荆棘の上に燃えながら、雷のや

うな聲で語つたのを聞かなかつたのか。

チツポラ 野は青く、日光は光つてゐました。し

かし荆棘の上には火なんかありあしませんでした。

た。雷の音なんか私には聞えあしませんでした。

モゼス あの聲が聞えなかつた？あの火が見えな

かつた？私にはあなたがわからない。私はこゝ

で宇宙精神に捕へられたのだ。

チツポラ あなたはほんとうに何うかしてゐらつ

しやる。

モゼス 私は宇宙精神の前に立ちながらも、言を

左右に托して責任を遁れやうとしたのだ。しか

し今日は何時までも胡麻かしてはゐられなかつ

たのだ。

チツポラ (目が醒めたやうに) モゼス、今あなたはほ

んとうに私を愛して下さると言ひましたね。ほ

んとう、ほんとう？ (腕を與へる、モゼスそれに接觸

をする)

モゼス 今私はほんとうにあなたを愛することが

出来る。私は本と靈をもつてあなたを愛するこ

とが出来る。

チツポラ ぢや結婚して下さる？

モゼス 今私は靈も肉もあなたと一緒にになる。そ

のやうにすべての猶太人の靈肉と一緒にになる。

チツポラ (喘いでゐる)

モゼス (チツポラから腕をほり解いて俄かに) チツポラ、

私は之から埃及へ行つて来る。

チツポラ (驚いて) 埃及へ、どうして？

モゼス 私の思想の赴くべき所へ行くのだ。あな

たと私を今永久に結びつけた私の中に生れた新

しい生命が私に命ずる所へ行くのだ。



**エテロ** 天才は別だ。天才は別だ。決意したからとて。天才ぢやない。

**モゼス** 私はそうは思はない。決意する人が天才です。自分の思想の赴き得る人が天才です。萬難を排して自己の思想に生きる人が天才です。

**エテロ** しかし私共は天才ではない。天才は何處かに隠れてゐるので、天才が自ら出現しなければ我々にはわからないのだ。しかし我々が天才でないといふことだけは明白でせう。

**モゼス** 我々は天才でないと仰有るのですか。そんなら誰が天才ですか。天才はあなたであるかも知らない。或は私であるかも知らない。

**エテロ** あなたが天才か。失禮だが世の中にあなたのやうな天才があるのですか。野原で羊を牧うてゐる天才があるのですか。埃及から遁げ出してゐるやうな天才があるのですか。

**モゼス** 私は今は勿論天才ではありません。いや、

いや、私が天才なんて事はない。(俄に意氣銷沈して) しかし明日は天才であるかも知らないんだ。

**エテロ** (慰めるやうに) 青年といふものは大概激しい情欲に悩まされるものだが、あなたは空想に悩まされてゐるのだ。あなたを救ふものは矢張勞働の外にはないでせう。私はあちらへ参ります。(エテロ退場)

**モゼス** (自分の思想に悩まされてエテロのことを忘れる) 私

はほんとに戀をすることも出来ない。生活の道を開くことも出来ない。私はチツポラのいふやうに蛇かも知からない。目先ばかり見える。思切つてやる事が出来ない。私は思切つてやれば新しい世界へ出られるのだ。そこでは思想が藝術となる。本能と靈が空虚なく抱き合ふ。時間が、空間となつて實現する。すべての飢渴が悉く癒される。私は知つてゐる。しかしどうして

も出来ないのだ。(チツボラ入る、モゼスそれを知らずにある、チツボラ傍に立つ)

チツボラ 何をしてゐらつしやるの、モゼス。

モゼス あゝ、チツボラ、私はもうこゝにはゐられなくなつた。こゝに私が永くゐればゐる程あなたのためではないのだ。

チツボラ そんなことを言はずに何時までもこゝにゐて下さいな。結婚なんてもう言い出しあしませんから。

モゼス そう誤解されては困る。私はあなたの生涯を誤まるかも知れない。何時までもこゝに私がある。

チツボラ 何故でせう。何故私の生涯を誤るのでせう。私にはわからない。

モゼス 私がこゝにゐるとあなたが何時までも結婚が出来ないかも知れないから……

チツボラ そんなことはわからないわ。兎に角い

つまでも此處にゐて下さいな。てなきあ私何處へでもついて行くわ。

(四面急に暗く、右手の荆棘の上に火が見える、モゼスそれを見ると俄かに恐怖の表情)

モゼス チツボラ、何か不思議な聲がするでせう。あなたには聞えるかい。

チツボラ いゝえ、何にも聞えあしません。

モゼス 一寸待つてお出で。何か見える。あれ、火が見える。あなたは見えるかい、あの荆棘の上に燃えてる火が……

チツボラ いゝえ、何にも見えあしません。

モゼス 誰か私を呼んでゐる。あなたかい、今私を呼んだのは……

チツボラ いゝえ、私呼びあしません。

モゼス (見えない力のために火の方へ引きすられるやう進んで行く) あなたはこゝに待つてあいで。私はあの火のとこまで行つて見て来るから……(モゼス火

はい びやう かんぢや すく

# 肺病患者を救ふ

東京府下大森海岸八幡電車停留所上二百五十番地の川名助次郎は數年來自身に最も激烈なる肺病を憂ひ京濱の大醫にさへ見放されたるが偶然にも一大奇藥を發見し之れが爲め九死に一生を得たるを喜び爾來同病者の救済に努むる十年一日の如く服藥者の中に既に全治せるもの非常の多きに達したり依て返信付照會者には其詳細を通知す

## 御來宿者を歡迎致候

### 高等宿 榮林館

館主 文學士 今岡信一郎

本郷區追分町三〇  
電話下谷 三三四六乙

(追分電車終點ヨリ五分間)

## ●地方書店に告ぐ

- 一、雜誌書籍の發送は東京の各書店と同時に爲す、發送、返品共に一切郵便に依る事、
- 一、雜誌書籍代金勘定請求は、參ヶ月乃至半ヶ年毎に於て爲す、
- 一、發送上其他に於て不都合を認められたる場合には直に御通知を乞ふ、
- 一、代金を請求しても更に拂込なき時は直に發送を停止すべし、
- 一、御送金は成る可く振替貯金を使用せられたし、
- 一、振替貯金口座は東京一〇〇〇三、統一基督教弘道會なり

## ●外國諸店へ

- 一、本誌も諸店の熱心なる御勧誘によりて逐號購讀者の増加しつつあるは本社同人一同の深く感謝する處なり海外發展は本誌の最も幸榮に存ずる所なり今後益々御盡力あらん事を切に奉希上候
- 一、雜誌の發送は毎月一日を以て之を爲す若し不着の疑ある時は直ちに御報知を願上候
- 一、御送金の際は芝芝園橋郵便局を御指定被下度候

大正三年一月

六合雜誌社

す。

**モゼス** (苦痛に堪へないといふ表情) そうです。私も埃及にをりましたが、今は實力あり自信あるものが猶太の間に起るべき時です。私共は其人の出現を渴望してゐます。實に猶太には人物が久しく起らない。

**エテロ** ほんとうに猶太には人物が起りません。猶太は永年の奴隸のために其天才の芽を摘まれてしまつたのでせうか。猶太は埃及の壓迫の下に沈黙して滅んで行くのでせうか。

**モゼス** (確信を眉宇の間にあらはしながら) そんなことはありません。猶太には宇宙精神があります。宇宙精神のある所には天才が潜んでゐるのです。早晚天才は出なければならぬ。ただそれは時間の問題です。私共は天才の出現を待つてゐる。望んでゐる。

**エテロ** 私もそれを信ずる。天才は何處かに潜んでゐるに違ない。その天才が意を決して現はれる時始めて猶太は生さるのです。埃及の文明が倒れるのです。宇宙精神が満幅の光彩を放つのです。私共は待つてゐればいゝのだ。ただじつとして其天才の出るのを待つてゐればいゝのだ。

**モゼス** 待つてゐる? いや、私はもう待つてはゐられない。私の精神の中から何物か破れ出やうとしてゐる。燃える火が山の岩を破つて出るやうに、嬰兒が母親の身體を破つて出るやうに……

**エテロ** あなたはどうかしてゐる。あなたのいふことは私にはわからない。

**モゼス** 決意すれば誰れでも天才になれるでせうか。天才はたゞ他人が決意の出来ない時に決意し得る人をいふのではないでせうか。或は天才といふものが別にあるのでせうか。



賣文社々長 堺利彦先生譯

# バナード ショウ作 人と超人

三六判 美本  
定價 九十錢  
郵税 八錢

翻譯界、演劇界、出版界に多くの問題を提供せむとす

シヨウ 熱今彼の最大作の譯書出 生命哲學彼の皮肉彼の諷刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の兩性觀

熱罵悉く此の一篇の中に在り

譯書 內容 本文の外、譯者の序、原著の序及原著通俗版の序、シヨウの人物月旦、著作、革命家必携及其座右銘、私が倫敦で見た人と超人（松居松葉等あり）

堺利彦先生著書數種

## ▲樂天

囚人

定價六十錢  
郵税八錢

## ▲賣文

集

定價壹圓  
郵税八錢

▲自傳 赤裸の人

定價一圓  
郵税八錢

▲社會主義倫理學

定價壹圓  
郵税八錢

東京東區石川原町六番 丙午出版 東振 小京 石川 區原 町六 番 雞聲堂

# 東亞之光

價定り限號本 號 聖 七 (年 新)  
錢三稅郵錢五十四 號 別 特)

孔子とソクラテース  
ダウキン博士の無前の學勳  
イエスと猶太國民思想

文學博士

井上哲次郎  
加藤弘之  
海老名彈正

予が釋尊觀の一斑前田慧雲、ソクラテス得能文、耶蘇と文化の問題高木壬太郎、カントに就て思出すことにも紀平正美、哲人カント小林一郎、孔子の政教一致論小柳氣司太、教育家としての孔夫子宇野哲人、カント小議大島政徳、ソクラテスのダイモニオン藤井健治郎、耶蘇傳の問題三並良

ゾ  
ロ  
ア  
ス  
タ  
ー

文學博士

學聖カント  
現代に與ふる耶蘇の刺激

加藤玄智  
桑木嚴翼  
内ヶ崎作三郎

生命に就て谷津直秀、ソクラテース深作安文、新人クリスト廣井辰太郎、儒教私議大江文城、孔子に就て星野恒、カントとダウキン吉田靜致、孔子の學風に就て林泰輔、大聖ゾロアスター堀謙徳、密教より見たる釋尊釋慶淳、孔子と基督高島平三郎、我觀耶穌松村介石、基督より釋伽へ島地大等、孔子とダウキン三輪田元道、孔子に就て杉浦重剛、ダーウイニズムと新倫觀島本愛之助

ダーウィンと淘汰説

理學博士 石川千代松

偉なる哉ソクラテース

文學博士 井上 富子  
文學博士 谷本 了子

唯我獨尊

漢詩、龜谷天尊。短歌、尾上柴舟。俳句、志田素琴。英詩松浦一、其他詩歌、新體詩種々、募集歌句。

海外思潮。學術、宗教、教育界彙報。

(中附五)

振替口座東京  
二〇七〇七七番

會協亞東

東 京 市 本 郷 區  
駒 込 千 駄 木 町 五 〇

發行所

内ヶ崎作三郎 先生著

# 近代人の信仰

▲四六判クロス製  
▲箱入、六百頁餘  
一圓廿錢  
郵税十二錢

新刊

新春の讀物として、敢て大方の近代人に薦む。

近代文明は物質のみならず、又精神と心靈との方面に於ても、實に一大驚異である。科學の精確と、心靈の神祕と、文藝の眞摯と、宗教の擴張と、いづれか人文史上の轉機を語らざるむ。著者近代思想の潮流に倅して、信仰の彼岸に到らんとす。近代の科學、哲學、文藝、宗教に興味を有し、近代人の努力と、憧憬と、歡喜とに對して同情ある人士に取りて本書は有力なる刺戟と、暗示とを提供すべし。

■内ヶ崎君の「近代人の信仰」は氏がこの兩三年

間に公にした論文集である。大體上近代の思想を理解し、新なる思想の上に古い信仰の新生命を求めやうとする近代神學家の思想を代表して居るとも云はれやう。そして多方面なる趣味と、同情の多い理解と、熱烈な信仰の要素とは、その文その想に一種云ひしれぬ味を賦與して居る。亦以て一種の思想問題研究と云ふべきである。(新日本)

■統一教會の牧師として日本現基督教界の新人たる内ヶ崎文學士の論集なり。宗教は過去一世紀の間旺なる物質的勢力に壓倒せられて僅かに餘燼を保つの有様にすぎざりしもの廿世紀に至りて又

其復活の曙光を顯はせり。此世界的思潮に乗じて最も進歩せる精神生活を唱道し、科學、哲學、藝術の三者を合一して完全なる一大宗教を建設せんとするもの、これ即ち著者の目的にて、其一々の論文は皆信仰に燃えて、生彩の陸離たるを覺ゆ。

(東京日々)

■近代思想の新らしき氣分を攝取して、古き基督教の信仰を活かさんとする著者の主張を稱したるものなり、勿論裏面に十字架臭味を加へざるところ所謂著者一流のユニテリアニズムの特色なるか。(東京朝日)

■眞に篤信熱情の名文章である。(國民)

發行所

東京市橋區銀座二丁目

警醒社

振五 替五 東三 京番



# 「著原ンケイオ<sup>ル</sup>フ<sup>ド</sup>

加藤直士先生譯

## 現代宗教哲學の主要問題

四六判クロス

定價壹圓

郵稅八錢

今やオイケン教授の代表するニユウアイデアリズムの哲學は、潮の如く澎湃として我思想界に寄せ來り、一代の思想を支配せんとする時に際し、苟くも之が研究に志ある人々にして、本書を逸するは蓋し大なる損失ならむ。此書オイケンの著作中の寶玉とも稱すべき名著也。最も簡潔に、平易に彼の思想のエッセンスを披瀝し、其主張する新理想主義の哲學的見地より現代の主要問題、就中宗教問題を解決せんと努めたるもの。一讀直ちに吾人をしてオイケン哲學の核心を捉へ、之を人生の活問題に適用し、紛糾せる一切の疑問を一掃せしむるに足る。

卷頭譯者の序は、七十頁に亘る堂々たるオイケン研究の發表也。更らに卷末フォン・フォーゲルの批評文を加へて、近來讀書界の一偉觀たらしめたり。

■オイケン哲學のエッセンス也。寶玉の隨一也

發兌 東京 京橋 銀座 警醒社書店 振替 東京 三五番



ゼスに與へる。モゼスそれに接吻をする。遙かに父を見つけて

お父さんが來ます。さよなら。

モゼス さよなら(エテロ入る)

エテロ チツポラはもう歸りましたか。

モゼス 只今向うへ參りました。私はどうしても

チツポラと結婚は出來ないといふことを眞面目に感じます。私は早く何處かへ參つた方がよからうと思ひます。若しこうして何時までも一緒にゐたら、非常に耻づべきことになるかも知れません。

エテロ そんなことは無い。結婚は兎に角として約束だけでもいいでせう。あとはあなたの先決問題が解決されるまで待つても差支ないのです。

モゼス しかしその先決問題が永久に解決されずにしまふかもしれません。一生涯そういふ生活で終るかも知れないのです。

エテロ 今私は埃及から遁げて來たといふ猶太人に遭ひました。

モゼス (大に激昂して) どういふ男ですか。今そこにゐるのですか。

エテロ 何處へといふこともなく馬で駈けて行きました。妙に丈の高い若者でした。

モゼス どんなことを言つてゐましたか。

エテロ 誰かを尋ねに來たやうな様子でしたから、私が誰をさがしてゐるのかと聞きましたら、猶太人を救ふ人をさがしてゐるのだと申します。埃及の文明を破壊して新しい精神の文明を建設する指導者をさがしてゐるのだと申します。その若者がいふには、猶太には望を掛けてゐたひとりの人があつた。しかし其人はもうひとりで埃及を遁げてしまつた。私は今そのひとりをさがしてゐるのではない。もう誰でもいい指導者になつてくれる人がほしいといふので

早稻田大學  
教授

勝俣銓吉郎 河竹繁俊 譯

新刊

# カンディダ

洋裝全一冊  
正價金六拾錢  
郵税金四錢

## 傑作集

(第三集)

本作は空想的なるノラを脱化せる**實際的の新しき女カンディダ**を以て中心と爲し、

之に配するに習俗的なる牧師の覺醒と不羈奔放なる年少詩人の戀愛とを以てせる悲喜劇な

り。人の自覺に關して生じ、或は**夫婦相互の理解**なきより**近代的苦**

悶の、巧に描寫せられて人情の機微を穿ち、思はず同感の涙を濺かしむるものあり譯筆

の凡ならざる多言を要せず。劇文學、近代思潮、婦人問題の研究者、社會改良家、宗教家

等の常に三讀すべきものなり

坪内譯  
博士

ウーレン夫人の職業

坪内逍遙  
市川又彦 譯

武器と人

全一冊  
各六十錢 郵稅各四錢

發行所

東京牛込早稻田  
振替東京一二二三番  
早稻田大學出版部

東京堂至誠堂 其他  
北隆館盛文館

ものが思想しきうとならなければ眞じんの純じゆんな生活は出來ないだらうと思おもひます。

モゼス それでは腦髓のうずいを破壊して胴體どうたいだけで生きろと仰おつしや有るのですか。

エテロ 棄すてる必要はない。ただ意志いしを以て知識ちせきを征服せいふくするところに満足まんぞくし得る生活が起るのだらうと思おもひます。

モゼス それは私には堪たへられません。私はどうしても腦髓のうずいに生きなければならぬ。私は意識いしぎしつゝ満足まんぞくしなければなりません。そこに私の問題が横よこたはるのです。

エテロ 人といふものは満足まんぞくの状態じやうたいを意識いしぎするとは出來るものではないと思おもひます。満足といふものは自己おのれといふものを全く没却ぼつきやくした状態といふもののだと思おもひます。

モゼス 私の要求えうきうは目を醒さしつゝ満足まんぞくの状態を享けることです。泥醉でいすいの状態で満足することは私

には堪たへられません。

エテロ そういふ事は誰だれも私共に教おしへたものはない。昔むかしの人は皆自己おのれを没却ぼつきやくしてそこに眞の人生じんしやうを發見はつけんしたと言いつてゐます。自己おのれを没却するといふことは勞働らうどうの外にはないのです。

モゼス 私は只今ただいままで勞働らうどうをしさへすれば満足が得えられるものと考かんがへてをりました。しかし私は勞働でもつて思想しきうの世界を抑おさへて粉こならしてゐたのです。私は自分の思想しきうの苦くるみから勞働でもつて救すくひ出されやうとしてゐたのです。私は自分おのれのもつてゐる思想しきうの導みちくまに進すすむ所に満足があると思おもひます。單に徒ただなる勞働らうどうではない。思想しきうです。思想しきうの導みちくまに進すすむことです。

エテロ あなたは今いまどんな思想しきうに苦くるめられてゐるのですか。

モゼス どうも言いへません。また言いへる位なら

んな苦みはしないでせう。若し私がそれを言へた時は私が救はれた時なのです。

エテロ 兎に角結婚のこともよくお考へなさい。

あれ、チツポラが来る。私は一寸向うへ参ります。

モゼス そうですか。(チツポラ入る)

チツポラ あなたは此處にゐらしたのですか。

あちこち随分探しましたわ。

モゼス 今までお父さんと話をしてゐました。

チツポラ どんな話?

モゼス (力をこめて) 結婚の話さ。

チツポラ あなたはなさるつもりなの。

モゼス とても出来あしない。

チツポラ (急に萎れて) ぢやあなたはほんとうは私を愛して下さらないんだわね。

モゼス あなたの愛が或目的のある愛だ。私の愛は目的のない愛だ。即ちただ愛するために愛す

るのだ。一方からいふと私の愛は臆病な愛だ。

あなたの愛は大膽な愛だ。若しあなたが私にほんとうの愛が無いといふなら、私はあなたがほんとうの愛がないとも言へるでせう。

チツポラ それぢやあなたの愛は art for art's sake の愛ね。

モゼス それぢやあなたの愛は art for life's sake の愛ですね。

チツポラ あなたは冷静に見る方ねえ。

モゼス あなたは何にでも熱する方だ。

チツポラ あなたは蛇と鳩で出来てるやうですわ。

モゼス あなたは柔かい舌で出来てるやうだ。

チツポラ 兎に角あなたは私を愛して下さるのですわねえ。

モゼス あなたはどうですか。

チツポラ 私ですか。私は申しませない。(腕をモ



りの女のためです。お前の愛してゐるひとりの女のためです。

モゼス そんなことを仰有つてはいけません。私はいくらでも随分苦しんでゐるのです。私の顔をごろんなさい。

ナホミ お前の幼い時のことを思ふと、何といふ望多い少年であつたでせう。そして今のお前の有様を見ると、何といふ情無い姿でせう。お前にはもう男の心がない。勇氣がない。果敢な精神がない。埃及がお前の雄々しい心までも腐らしてしまつたのでせうか。

モゼス 何と仰有つても私はその人ではありませ

ん。

ナホミ お前の幼い時は猫の子が濠に落ちてゐても助けてやるといつた風な子でした。それでゐて……あゝそう／＼こういうことがありました。お前覺えてゐるかい。お前が丁度七つの春で

した。王様が大臣等の禮拜を受けて、それからお前にも禮拜させやうとしたことを……するとお前は禮拜などはするどころか、つか／＼と王様の前へ行つて、王様あなたは生命の源ですかと尋ねるのでせう。すると王様も何のことか解らないもんだから、そうぢやないといふの。するとねお前があなたが生命の源でないなら禮拜はいたしません。禮拜すべきものは、ただ此生命の源の外にはありません。私ははら／＼して聞いてゐましたが、そのまゝで済んだことがありました。……あゝあの時のモゼスが慕はしいあのモゼスが今ほしい。

モゼス お母さん、お母さん、お母さんはもうゐ

ない……（暴風は俄かに己みて四面一時に暗黒となる。や

がて暗黒より薄明に移り、薄明より正午の日光となり、急に白熱光となる、モゼスもとの所に草を茵にして眠つてゐる。四面白熱光となる時、俄かに眼を醒す、此時光は平明に歸す）

ひ

どく長い夢を見たもんだ。あれ、お母さん、……いや、チツボラのお父さんが来る。お父さん。

エテロ まあいゝ處で遭うた。一寸御相談したいことがあつて、あなたを尋ねてゐたところでした。

モゼス 御相談といふのは全體何ですか。

エテロ 外でもないのですが、實はあなたの結婚問題です。

モゼス 私の結婚問題ですか。まあそれは一寸因るのです。

エテロ でも一生獨身でゐる譯でもないでせう。

それに時期といふものがあります。之は御相談ですが、若し娘がお氣に入りますなら差上げてもいいのです。

モゼス 氣にいらないういふのではありませんが、私にはそれよりも先決問題があるのです。

その解決がつかないと、どうしても私は動きが

とれないのです。また私のやうに迷つてばかりゐる者には結婚は却て非常な重荷になるでせう。

エテロ 先決問題といふのは一體何です。迷つてゐるといふのは全體何ですか。

モゼス 自我の分裂です。統一なき自我の生活です。

エテロ 労働なき生活は二つの世界を持つてゐることです。苦惱といひ、迷悶といふのも、皆一つの世界に住まぬものの悩です。彼等は手と頭と別々に生きてゐるのです。労働と思维とが一つにならなければそこに二つの世界が出来るのです。

モゼス こゝへ參りましてからも私は随分労働もいたしました。又自分のすべての欲望をも棄てました。しかし私は依然としてもの私です。

エテロ あなたは矢張思想が勝てゐる。労働その

**チツボラ** まあ、そんなに汗ばんで……何だつてそんなに激昂してゐらつしやるの。

**モゼス** 一寸待つておくれ、あの、敵がゐるんだから……

**チツボラ** まあ、お待ちなさい。私はあなたの心持がわからないうちは放せません。(チツボラの父 祭司エテロ入る)

**モゼス** (チツボラの手を振りほどく) 私はチツボラの心がよくわかる。あれは私を愛してゐる。純潔な愛をそいでゐる。——私はあれを愛してゐる。愛に於てはあれに劣らない。しかし出来な。言ひ切るなどは出来ない。夫婦には出来ない。ほんとの戀は出来ない。

**エテロ** (チツボラの傍に行く) どうも甚い暴風が吹くわ。モゼスはこゝにもゐないやうだ。あれはもう駄目だらう。お前をほんとうに愛してゐるのぢやないんだ。若しほんとうに愛してゐるもの

なら、すぐ約束が出来る筈だ。

**チツボラ** もう私もあきらめてゐます。そして私は何時までも御父さんの傍にゐていたときませう。

**エテロ** いや、いや、モゼスに嫌はれたつて、いくらも貫手はあるんだから心配せんでもないわ。(暴風の音はげしくなる。)

**モゼス** 待つてくれ。五年待つてくれ。チツボラ、チツボラ、五年待つてくれ。

**チツボラ** まあ強い暴風ですこと、もう歸りませう。

**エテロ** (チツボラを助けたがら) ほんとに甚い暴風だ、さあ歸う。

**モゼス** チツボラ、もう五年待つてくれ。五年待つてくれ……あゝもう行つてしまつた。私のいふのが聞えないやうだ。チツボラ、チツボラ……

(モゼスの母ナホミ五十歳、稍亂した態で入る)

ナホミ

モゼスはもうゐない。猶太の魂はもうゐない。世の中はたいもう暗黒と滅亡ばかりとなつた。埃及の偶像が猶太の神を蹂躪つてしまつた。……あゝ、モゼスがゐる……モゼスぢやないか……

モゼス

御母さん……あゝ、お母さんですか。あなたはどうしてこんな所へお出でになつたのです？そして又問題を持つて御出でになつたのですか。私の生活に當然来るべき變化は來たのです。私は埃及を遁げてこんな所にうろついてゐるのです。御母さんの仰有ることはもう皆私にもよく了解つてゐます。しかしそれを實際に行ふ人間は別にあるてせう。其人は私ぢやありません。私ぢやありません。

ナホミ

いゝえ、それはお前です。お前の外には誰もありません。何故そんな弱い心が破れないのです？

モゼス

どんなに強い心を持つてゐたからとて、あの潮よりも盛んなる大勢を動かそうとするのは殆ど落ち掛かる山崩れを一手でもつて搏たんとするやうなものです。私はお母さんの教育を呪ふのではありません。自分を埃及の王子とばかり思ふべき筈の私が、猶太人だ、敵だ、祖國の恢復だと吹き込まれた教育を呪ふのではありません。私はこういふ教育をば私の比ひなき恩賜と思つてゐます。たゞ私は埃及王宮の榮華と權威と幸福とを味つたことを呪はずにゐられない。

ナホミ

お前はあの壯大な埃及の物質文明に酔つてゐたのです。いや、お前は自分の生活の根柢を動かさうとする破壊の蟲を恐れてゐたのです。今は何のために羊を收うて遊んでゐるのです。お前にはあの猶太の浮囚の海のやうな苦惱のうめきが聞えないのですか。それはたゞひと



ぢや。

王女 もう今になつてお申譯も何もございませ  
ん。女の淺墓な憐憫の心を呪ふより外はござい  
ません。それにしてもあのモゼスが……あのナ  
イルのほとりに小さな草舟に乗せられて、あの  
木蔭にすや／＼と眠つてゐたあのモゼスが……  
自分の運命も、國の運命も、まして私達の運命  
などは夢にも思ひもかけずに眠つてゐたあのモ  
ゼスが……今思つて見ても夢のやうな、あの美  
しかつたモゼスが叛反人にならうとは……恩を  
忘れて仇でかへす……

王 そんなに心配せんでもいいわ。ひとりのモゼ  
スが何をたくらんだとて、正義に勝つ不義はな  
い。恩人に勝つ忘恩者はない。戦勝者に勝つ戦  
敗者はない。

王女 御父さん、けれど私はどうしても信じられ  
ないやうな氣がしますわ。あんな優しい、臆病

な昆蟲一つ踏みつぶしても、終日泣いてゐたや  
うなあのモゼスが……

王 いや、信じられないこともない。あゝいふ者  
がうつかりすると大それた事をしてかすもん  
だ。しかし奴が何をしてくすにもせよ、恐いこ  
とはちつともない。帝王は神じや。祖先は神ぢ  
や。偉人は神ぢや。わしは即ち人類の神ぢや。  
人類の禮拜を受けるものはわしぢや。わしの敵  
は猶太人だけぢや。猶太人を滅すことは、則ち  
わしが全世界の支配者となるといふ意味じや。  
彼等が自分の精神内部に經驗する權威を主張す  
る時には現實にわしの手中に握つてゐる權威を  
主張して、直ちに彼等を斷頭臺の上に立たせる  
のだ。わしと彼等とは別の人格ぢや。人民と神  
とは別の人格ぢや。いや、いや、人格を以てゐ  
る者は此フアラオ家の血族だけぢや。

王女 私どもに反抗するものは誰だつて滅びなけ

ればなりません。しかしモゼスが其反逆者にならうとはどうしても信じられません。あゝ、じつとしてさへなれば、埃及の權威も、榮華も幸福も、皆モゼスのものとなるだらうに……

## 王

モゼスが何をしやうとたくらんでも、埃及文明の莊麗と偉大とを破壊することは出来ない。わしはわしの文明を祝福する。そしてわしを禮拜し、わしの文明を讚美する人民を祝福する。

埃及文明を裝飾する天文學と、建築術と數學とは、わしの不朽を記念する記念碑ぢや。埃及人はわしの記念碑を建てるために飽くことなく科學と藝術と哲學と法律とを追窮してゐるのだ。

自然が此文明以外に産出し得る目に見えないものを、何處に所有してゐるだらうか。現象は一切ぢや、目に見えないものは虚無ぢや。神は則ち權力ぢや意志ぢや。わしは則ち最も大なる意志ぢや。(暴風また強く起る。)

## 王女

おゝ暴風がします。お父さん歸りませう、歸りませう。何だか私悪くなつて來ましたわ。

## 王

そうだ、軍隊にモゼスの逮捕狀を送らなければならん。(歩を移す)わしの生命は戰爭と殺戮と禪拜ぢや。權力の喜ぶものは破壊ぢや。弱者の樂むものは平和ぢや。わしの大きい意志は、時といふ曠野を切り開いて行く鋭い鋤ぢや。わしは時を征服する力ぢや。さあ、行かう。

## モゼス

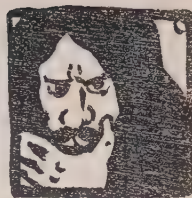
(諸手を捻りながら後を追ふ)私は埃及に對しては戰敗者で忘恩者、猶太人に對しては非愛國者、埃及文明に對しては、卑怯なる未練者だ。私に何かの使命があると思つたりしたのは、狂氣の沙汰かも知れない。……いつそ差違へて死なう(追ひかける、モゼスの愛人チツボラ、十九歳入る)

## チツボラ

まあ、モゼス、モゼス、何をそんなにあわてゝゐらつしやるの。

## モゼス

おゝ、チツボラ!



# モゼス

——一幕物——

佐藤 清

る。

(ミデアンの曠野、左手に橄欖の並木が地に蔭を投げて其下に井戸がある。野はたゞ起伏極りなき牧草の緑なるかをりに満ち處々に水を湛へたる凹地があり、橄欖樹その表面に蔭を投げ、道は迂曲してやがて綠草の間に没し、遙かに目を揚げると、ホレブの秀峯高く層雲の間にあらはれてゐる。右は稍

小高い丘陵をなして、荊棘にうづもれてゐる。處々に牧羊の群れが見えて、その鳴き聲と鈴の音が眠げに聞えて来る。モゼス、史は四十歳と傳へてゐるけれども、實は三拾歳、筋骨逞く、中背の青年、顔には之ぞといふ特色はないけれども、獨りでゐる時は眉目の間に限りなき暗愁を漂はして、一種沈鬱なる氣分を人に與へる。暮あくともゼス橄欖の下の井戸の傍に、草を茵として眠つてゐる。やがて光が弱くなつて薄明となり、全く暗黒になるかと思ふと、復光が増して來て、仄かに人の顔が見える程になる。此時、暴風の音がすさまじく橄欖の並木のうしろを通る。暴風は音階の最高部より最低部を上下しつゝ變化して絶間なく通る。埃及の奴隸になつて勞働に疲れきつてゐる猶太人數名、何か口々に罵りながら出て來

猶太人甲(猶太人乙の首玉を掴へながら) 手前は何だつておれのしろといふ事をしねえんだ。譯があるなら言つて見ねえ。

猶太人乙(牽きずられながら) 譯つてこともねえけれど、おれだつておれの背負つて行かねえならん荷物があるんでねえけえ。

甲 そんな事あ百も承知だあ。しろといふことは、しさへすりあ文句はねえんだ。

乙 そりあ無理といふものでねえけえ。お前がいやなら、おれだつていやなんてねえけえ。之れも、天罰だとあきらめるより外あねえんだあ。

甲 何をつべこべ叫きあがるんでえ。ぢや手前は

いよくしねえといふんだな。いよくしねえといふんだら、こちらにもこちらの方が見があらあ。(乙の横顔を張り飛ばす。)

丙 待ちねえ、親方、よ、一寸待ちねえ。

甲 どうしたといふんでえ。手前も頬張られてえのけえ。

乙 今度だけは勘辨してくんねえよ、親方あ。今度だけ。

丙、丁、戊 親方あ。今度だけは勘辨してくんねえ。勘辨も糞もあるけえ。あら、手前らの糞つ面を見ると、いましくしてしやうがねえんだ。

え、どうでもなれツ(矢庭に手にしてゐた斧を振はうとする、モゼスうしろから出てとめる)

モゼス 一寸待てえ。何だつてそんな亂暴なことをするのだ。お前らは全體みんな猶太人ぢやないか。同國人が同國人を苦めるといふ法があるか。

甲 (モゼスを熟視して) あい、お前さんは何だ。昨日、あの、埃及人を空井戸に入れて殺した男だ。

な。お前さんは……お前さんはあの埃及人を殺したやうに、あれまで殺す氣なんだな。

モゼス (色を失つて倒れそうになるのをじつと堪へて) 馬鹿いふな。——行け、行け、出て行け。

甲 みな遁げろ、遁げろ。(モゼスを置いて皆退場)

モゼス まさか誰も知るまいと思つてゐたんだが、もうこうなつては仕方がない。あれも遁げ出すより外に道はなくなつたのだ。(橄欖のうしろを通る暴風が強くてまた急に弱くなる。此時白髪の埃及王と王女が、どこことなく激昂した態度で出づ。王女は四拾歳ぐらゐだが、三拾四五にしか見えない。王はもう頽齡であるけれども、元氣は旺盛してゐる)

王 お前が育てたモゼスが猶太人で、そのモゼスが叛反の發頭人になつて、そのモゼスが宮殿から遁げ出して、市に火をつけやうとしてゐるぞうだ。憎い奴ぢや、骨を粉にしても憎み足らん奴



一戰は確かに此の名譽を壞るものであつた。英國の名譽の大なる損失であつた。蓋し至言である。吾々が他の國と戰を交ふる時に、その事が正義であるか否かは、容易に決定し得らるべきものではない。防禦の止むを得ざる場合には兎も角、自ら起つて戰ふことには大に反對しなければならぬ。

#### 四、勞働問題と宗教

勞働問題に對しても吾々は大に言はなければならぬ。勞働問題とは少數の資本家と多數の勞働者との間の關係問題である。無論基督の心は一視同仁である。しかし若し何れに基督が多大の同情を有してゐたかと言へば、弱き者、貧しき者、幼き者に對してであつたと信ずる。彼の傳道の第一の説教に於いて彼は先づ「我れ食しき者に福音を傳ふ」と述べてゐる。その他聖書の所在に吾々は彼が貧者、病者、廢者の味方であり、慰藉者であつたことを知ることが出来る。ところが今日の基督敎は必ずしも弱き者の味方であると言はれない。寧ろ富者顯者の專有物となつてゐるやうにも見受

けられる。米國に行つて見ても、その會堂は溫められ、男女は晴れ衣を飾つて出入してゐる。今日の信徒には「爾何を食ひ、何を着んと思ひわづらふこと勿れ」といふ言葉は、何の意味をも彼等に對しては有してゐない有様である。しかし宗教は仍り貧民の友でもなければならぬ。それには何うしても政治から離れてならぬ。富者と言はず、貧者と言はず、苟しくも吾々が生活を營んで行くところに、一日でも政治から離れた生活はない。宗教家が政治に對して無關心であるならば、宗教家自身既に、眞實に社會的生活の何であるかを了解せざるものである。政治は吾々の生活の背景を作つてゐるものではないか。そして宗教は實に、政治を批判する權威と使命とを持つてゐるのではないか。嘗て佛蘭西革命の際に、斷頭臺上に立つたマダム・ロランが「自由よ、汝の名によりて如何に多くの罪惡が行はれつゝあるよ。」と叫んだが、今に至るまで美名の下に罪惡が行はれつゝあることは吾々の屢々經驗するところである。例へば誤まれる國家觀念が、國家なる美名の下に、多くの

罪惡を醸しつゝあることは、吾々が絶えず見聞する所である。此の際に方つて、常に昭々として眞理の光明に彼等を批判するものは、宗教の威嚴でなければならぬ。如何なる權勢も宗教的信念を冒すことは出来ない。古來多くの宗教は非常なる政府の壓迫を蒙つた。しかしその壓迫にも危害にも耐へてこそ始めて眞の宗教が發達するのである。またそれだけの氣力と確信がない宗教であつたならば、國家にとつてもその宗教は何の益する所もなく、宗教自身は早晚衰滅すべきものである。

## 五、最善なる宗教政策

然らば今日、日本の政府は宗教に對して如何なる態度を持すべきであるか。國家は如何なる方法を以て宗教を利用すべきであるか。また宗教は如何なる決心を以て國家の宗教政策に對すべきであるか。それは言ふまでもなく、國家は宗教の何であるかを知らなければならぬ。宗教の權威を認めなければならぬ。昔日、大名が學者を招聘する場合には、大名自身と雖も一段低き坐に着きて、そ

の教を受けたのである。政府がこの心持を以て、宗教に對するならば、政府の宗教政策は必ず成功するにちがひない。若し政府が一步を誤つて、宗教家に對する態度が恰かも彼の家庭教師に對する富豪の如き態度であるならば、宗教は國家に對して、何の功獻をも効さないであらう。單に宗教のみでなく、教育家に對する政府の方針が、さながら家庭教師に對するやうな考を以て實施せられてゐる間は、眞實の教育は出来ないのである。今日官立學校の教師は皆な官位を授けられてゐる。しかもその官位は悉く文部大臣の下に在るのである。彼等の一言一行凡べて文相の意圖を伺はなければならぬ。教育家も學者も政府の下に在りて、彼等自身の學說をまて束縛せらるゝのであつたならば、教育の發達を望むことは出来ぬ。

政府が若し宗教の何物たるかを承認せず、宗教の尊嚴を懷はずして、これが利用をのみ企劃するならば、政府はたゞ宗教を去勢するのみで、宗教から何物をも得る事は、出来ぬ。宗教自身も恐らく自己の立ち場を失ふのに止るであらう。

以上は極端な例であるが、やゝもすれば宗教は國家に利用せられて、自己の立ち場を忘るゝことがある。

## 二、宗教は絶對の判批者なり

然らば宗教と國家とは如何なる程度に於て、また如何なる點に於て一致すべきものであるか、提携すべきものであるか。少しく兩者の關係を述べて見やうと思ふ。

宗教は國家から超越したものでなければならぬ。宗教としての立脚地から見れば國家といふ區別は眼中にない筈である。基督教にせよ、佛教にせよ、苟しくも世界的宗教を以て目せらるゝものゝ立ち場は、國家を超越して、全世界人類の上に打ち建てられなければならぬのである。宗教は國家を超越するが、國家と衝突するものではない。國家が正道を歩いてゐる間は、宗教は國家と提携することが出来る。

次に宗教と國家の關係は批評者と被批評者の關係である。吾々一個人より見れば、吾々の出發點

は個人である。しかし個人なるものは、決して絶對なものではない。社會に對する時個人の行爲は一種の社會的批評を受けなければならぬ。この點から考ふれば、社會或は國家は或る意味に於いて、非個人的である。これと同じ意味に於てならば、宗教も亦非國家的であると言ふことが出来る。かくして宗教は國際間の關係を批判するの權威を有してゐる。宗教の使命と尊嚴はこゝに在ると思ふ。彼の學問の眞理が常に國家を超越して、國家を裁斷するが如く、宗教も亦絶えず宗教の眞理によりて國家を批判するものである。吾々は排日問題に對する毎に國民としては、頗る不快を覺ゆるのであるが、宗教の立ち場から觀察すれば、冷靜に此の問題の性質因由を裁斷することが出来るのである。私は確かに、日本の宗教家も米國の宗教家も、その多くは比較的正しき判斷を下してゐると信ずる。米國の宗教家は、カクフォルニアの所置は不法であると批難してゐるに對して、日本の宗教家は、何故にカリフォルニア人が日本人を排斥したのであるか、これに就いては日本人自らも顧みる

所がなければならぬと主張してゐるのである。これは宗教が國家或は國際問題に對して如何なる位置に在るべきものかといふとに關して、一例を擧げたに過ぎないが、私はこゝに殊に宗教が國家の上に立ちてその使命と尊嚴とを實現せなければならぬ二つの重要問題を論ぜねばならぬ。即ち宗教は戦争と勞働問題に對しては、常に國家の批判者でなければならぬことである。

### 三、宗教と戦争

戦争といふ實現象に對する宗教の批判は何であるか。今日世界の各國が相競ふて、軍備に急なることは事實である。しかしながら吾々の主張する基督教の四福音書の何處にも、戦争を是認したるものはない。基督の精神の何處にも戦争を是認してはない。基督は絶対に戦争を否認してゐる。今國家は戦争を是認してゐる。宗教はこれを否認してゐる。然らばこの問題は如何に解決すべきものであらうか。トルストイも亦絶対に否認してゐる。彼は絶対的の無抵抗を唱へたのである。ロイド・ヂ

ヨルヂも亦熱心なる戦争反對論者である。かのトランスバールの役に、英國は大軍を動かしたが、彼は國會に於いて飽くまでもこれに反對した。單に戦争の始めに於いて反對したるのみならず、戦争の最中に於いても政府の方針に反對した。彼の友人等は、彼の言論が次會の選舉に惡影響を及ぼすことを虞れて、彼に忠告する者もあつた。しかし彼は終にその主張を枉げなかつた。その結果は果して次の選舉に於いて、彼は大打撃を蒙つたのであつた。この戦争中に、ローズベリイ卿がオックスフォードに於いて、「英國はこの戦争の結果、第一に財政の損失、第二に有爲の青年を失ふと」言つて、戦争に反對したことがあつた。この記事を彼のロイド・ヂヨルヂが新聞紙上に見てから一週間ばかりの後、彼はローズベリイ卿が述べた二つの損失の上に、更らに大なる損失を掲げた。それはトランスバールの戦争が英國の歴史を瀆すといふことであつた。古來英國は常に小國を助け、義戦にのみ干戈を動かしたる點に於いて世界に誇るべき歴史を有してゐたのである。然るに南阿の





## 宗教の獨立

安部 磯雄

### 一、國家と宗教

最近に於いて奥田文相は主なる宗教家を招待して懇談するところがあつた。此の以前には床次氏が主として三教合同の希望を以て、各教派の人々を集めたのであつたが、今度の會合は單に政府が、國民の精神教育上に於いて、大に宗教家の努力を希望するといふやうな目的の爲めに企てられたものであつたらしい。兎も角政府が、國民の精神教育に對して、宗教の力を認むるに至つたことは、大に賀すべき現象と言はなければならぬ。しかしこゝに注意しなければならぬことは、宗教者自身と國家自身が各々自己の立ち場を忘れてはならぬことである。両者が相齊しくべきは勿論であるが

しかし兩者は必ずしも常に同一の道を歩むべきものではない。兩者が眞に自己の道を自覺し、峻嚴なる區別の外に立ちながら、しかも相伴ふ時に、兩者は眞に圓滿なる和解と發展とを得るものであることを忘れてはならぬ。十二月の「太陽」に浮田博士も論じて居られたが、日本の國家教育は智識教育の上には大なる効果があつたが精神教育の上には何の力もなかつた。政府自身も今日まで極端に宗教を峻別してゐたことが、當を得てゐなかつたことを自覺したらしい。現に吾々が記憶してゐる人々の間にも、東京帝國大學の某博士の如きは嘗て「宗教と教育の衝突」を論じて、頗る宗教を攻撃したことがあつた。その博士が今日にありては、這般の政府の新しい企畫に對して發企者の

一人であつたと思ふ。政府として宗教を忽にすることの不可なる所以を政府自らが知つたのは、宗教上にも教育上にも確かに一進歩と言はなければならぬ。しかしながら、尙ほ考へなければならぬことは、國家本位である爲めに、若しあらゆる宗教を國家といふ網の目のなかに編み込もうとするのであつたならば、或は國家の利用物として使用せんとするのであつたならば、これは國家自身にとりても宗教にとりても、重大な問題となるのである。尤も利用は必ずしも悪いとは言はれない。時としては國家が宗教を利用するが如く、宗教も亦國家を利用することは、不可でない場合もある。しかし宗教が若しその本性或は自己の立脚地を没却してまでも、國家の利用となるのであるならば、宗教の生命は即坐に失はれなければならぬのである。即ち宗教はその味を失へる鹽と一般である。世界の歴史を見るも古來宗教が國家に利用せられたる實例は多々ある。殊に現代に於て、最も惡き意味に於て宗教が利用されつゝあるは獨逸國である。人も知る如く、獨逸は國家觀念の最も旺盛な

る國である。隨てその宗教も亦頗る國家觀念の犠牲となつてゐるものがある。獨逸に於ては教會堂の建築はさまで困難なることではないのである。その所以は國家が飽くまでも宗教を利用せんが爲めに、殆んど非常識的な恩典を宗教に與へてゐるからである。例へば新しき教會を建設せんが爲めには、政府はその教會の建築費贖出の方法として、富籤を許可するのである。獨逸帝國の法律によれば富籤は絶対に禁止せられてゐるのである。しかもそれが神聖なるべき教會の殿堂建築の爲めには公然許可せられてゐるのである。伯林の街の角々に聳えてゐる大殿堂の多くは、主として此の富籤の方法によりて集められたる財力を以て築かれたのである。かくして獨逸國の教會の多くは致々として國家の御用を勤めてゐるのである。獨逸政府にとりて最も恐るべきものは、年々社會黨の増加である。國家は極力僧侶をして悉く社會黨に反對せしめてゐる。議員の選舉に際しては、僧侶等は神聖なる教壇の上から、社會黨を罵倒して、その信徒の社會黨に投票せざらんことを努めてゐる。

の感覺性を空けて、直ちに精神生活の新創造に若々しき力を感ぜねばならぬ。ここよりして第一步を初めねばならぬ。初らしい新生活の第一歩、その第一歩を初むると云ふことが、今の自分等に取りては當面の急だ。一切の過去を大なる現在の一枚に織り成して、不斷に向上し、不斷に發展して、之かねばならぬ、新しく生くることにのみ光りに觸れるときがあるのだ。我を取り巻いて居る萬有、我と近い關係の一線に立つて居る人生、我そのものの自我意識、これ等は三にして一なる生活に織りなされて行かなくてはならぬ。萬有と人生と義、三にして一なる渾一の心境が、此現實の深い生命の姿が、如實に我等の生活の中に匂うて來るときに吾等の生活はそれがそのまゝ神の生活であるのだ。生活藝術であるのだ。活きた哲學であるのだ。宗教が生活となり、人格が光明となるのであるのだ。そこにのみ「永遠」は脈うつて居る。「神秘」は花咲いて居る。

新しい生活の第一歩、そこには新しい生命が呼

吸して居る。生命に觸れたる歡喜が躍動して居る。生長の歡喜が歌はれて居る。自分の歩む一步一步の步調そのものがしとやかな音調を奏でて、「時」そのものと流れを同じうして居る。生活のリズムは、時のリズムと脈を打つて居る。ここでは時が生命である。「無限」は我が生活の一步一步に、姿を現はして來る。若やかな美しい無限の姿が、人生の色彩をなして來る。生命と云ふ潮の中に泳くことが、吾等の生活となつて來る。ここでは自身は無限のシンボルであり、神の化身となり來るのである。

人生は神の詩、無限の現はれてあつて、物質と見ゆる萬有も、凡てが精神の形式となつて照つて來る。我と我が生活の光に驚いて來る。一切は感謝である、一切は讃歌である。「生命」につき込んだ生活、斯うした生活のみが、吾輩の宗教である。生命の宗教は自分のヘルツの鼓動である。宗教は自分を包む空氣であると共に、宗教は自分の生んだ匂ひである。神秘の神秘。生命の生命。斯く云

ふ外に、宗教生活を表現すべき言葉を持たない。光流の世界だ。靈潮の世界だ。觸光柔輦の世界である。

自己の生活の中に生命を體得して來ると共に、他の自分・他の生活を認めて、其の意識の中にまともに生くことが出来る様になる。我と人と深い同感が、自分の生命の一分身となつて來る。我は我のみに生くるにあらずして、我ならぬ我の世界に、我の脉搏を感じると云ふ様な心、そこに我は人間の一切の生活と呼應して居る。我が社會となつたのである。社會が我となつたのである。生命を握つて立つたる宗教生活の唯中よりは、生命の香氣や神秘や色彩が至る所にこぼれると共に、同じ神秘の匂ひや、生命の香いや、沈黙の色

彩を、一切の人間の物象に於て見る事が出来る。光は到る所にこぼれて居る。イエスの衣の裾にそと觸れし病婦の病の癒されし如く、一切の万有、一切の人生の衣の裾にそと觸れることによりて、神の生命に觸れ光明に浴びることが出来る。一切は無碍光如來の慈光の中に包まれて居る。

要するに眞の宗教は、驚異の内光に觸れてそこに生命の光に突き當らなくてはならぬ。自我意識の内部から生命がこぼれ出なくてはならぬ。精神の創造は、斯くして吾等の生活の中に實にせらるるだらう。ここに吾等は眞の意味に於て「吾等は神によりて生き又動き又在ることを得る」眞正の生活に入るのである。



に實在の一關に幕進し來るもの猶ほ、ここに難透難入の一關に出遇うて失身喪命するのである。ここに一切は自我大抛擲の一境に立たなくてはならぬ。「唯だみころのまきに」と云ふ此の大死一番底のどん底に直入して、復活し來るの概がなくてはならぬ。ここに無求の一境がある。至深の要求は無求の一境に至る。求むることの最も高さもの、これ即ち求むる所なきの一境である。大宇宙的意識の發展である。一たび此の大意識の發展を實證して立てる靈界の勇者は、渾身これ光明と化するのである。

然り宗教上の無碍の一道は渾身の光明である。

宗教は心靈救済に終るものではない。宗教の到達點は心靈より肉體に至るのである。渾靈渾身悉くこれ光明。斯くの如きは、神其のものの姿である。肉に宿れる神。肉になりし神。否肉そのものが靈となつたとても云ふべき境界。さう云つた様な人格の光明が、一切を光被し來るときに、初めて我等の靈はその光明に浴びて目さむるのである。

基督の如きは、渾身光明の當體である。彼の肉は靈であつた。彼は肉のうちに神を現はして居つた。「それ道肉體となりて吾等のうちに宿れり」と云はれた人格のうちにこそ宗教生命そのものが靈動して居る。彼の姿、彼の眼、彼の顔、彼の手、彼の足。其一舉一動一舉手一投足の、凡てはこれ神の光明ではなかつたか。神の詩は彼の生活の中に、最もよく編み込まれて居つた。彼の生涯は一大劇詩であつたではないか。吾等は直覺の眼をみひらいて彼の「神」たることを見るべきではないか。神學化された意味に於て、基督が神だと云ふことは、吾等の知らざる所である。されど眞正の生活は神を語つて居る。生活そのものが神の創造であり、神の表現であり、活きたる藝術其のものであると云ふ意味に於て、吾等は基督の生活を神の詩、否、神そのものの表現であり、創造であると思ふのである。斯く見なくては吾等の宗教意識は、純なる満足を得ないのである。

罪人の友となつた基督は罪人の心を持つて居

つた。罪人の胸に神の美を見て居た人であつた。

罪人の胸に神の美を見得る人は、神の心を持つた人だ。一切の罪惡を自分の肩上に擔ふと云ふ意識を持つた人、全世界の罪人の爲めに死ぬと云ふ意識を持つた人、盲者の眼となつた人、跛者の足となつた人、現實の人生其のものの深き悲みと、苦しみと、罪惡と、闇黑との一切を味つた人、これ等と渾一になり得た人、これを聖化しようとした人。こんな人が神でなくて何であらう。自分は自分の胸にかう云ふ人を想像して來るだに、既に其の人の前に頭が下がつて來る。そこから光明が十方を照らして來る様に感ずる。大なる人格は光明そのものである。ゆ、とりのあるふ、つくりした優しみの中に、深い悲みをかくして居る神の様な人格、斯う云ふ人格の前には、一切は溶けて流れて、只光明と輝くのみである。

万有を我が觀念の懷に抱ける我が意識は、其の内面生活に於て、萬有の存在と我との間に、一味共通の生ける交感の相通ひつゝあることを自覺し

て、そこに一種の神秘の光明に驚き、更に現實を超じて立てる聖者の胸に、更に深奥なる内部生命の光耀をながめ、そこに至深の渴仰をさへげて、一導の光明を認め來りて、再び我が意識の底に沈潜して其の如實の姿を見んとするのである。

我が意識の深みには、あらゆる醜なるもの、黒きもの、汚れたるもの、邪なるものが沈んで居る。これは偽らざる自我見性の境に立てるものの告白せざるを得ない所である。自分も今、此の弱小空疎の蛇に噛まれつゝある。しかも此の弱小空疎の感じの強いと云ふ所に、一つの力を感ぜざる譯には行かぬ。眞面目に謙遜な敬虔な心を以て、「これは駄目だ」とさうくや自分には、自分ながら驚くべき一つの聲がある。今は此の聲一つが自分の力だ。自分は此の聲一つを力にし杖にして奮闘して居る。何等かの強い大きい力に觸るるまで戰つて居る。觀念の世界に立つて、觀照する靜觀の態度もなくてはならぬ。併し現實の生活にあつて、現實ならぬ現實の深い味ひにも徹せねばならぬ。時空

に襲はれるのである。

絶望の驚異とても言はうか、そう云ふ様な感じが自分の全意識を支配し占領して來ると、其の絶望の驚異そのものが、一閃光となつて輝いて來る様に感ずる。今まで我と彼と相對立して居つた存在の神秘の中に、其の幕一枚を開いて、互にかすかながらに相感應し、相共鳴して居るもののあることに氣付く、呼吸が通ひ初めて來たのだ。動いて來たのだ。脈が打つて來たのだ。

驚異は知識の萌芽であるとのことであるが、更に其の終結であるとも云はれるだらう。兎に角驚異の情に動かされた自分の意識は、あらゆる存在は内面的には互に關係し合つて、従つて統一の相を具して居る諸現象の數多として、其の姿を現はして居るものと云ふ一境に到つた。此の一境に見到して、あらゆる存在の姿を眺めて見ると、一木一草一座一法一切は、互に相呼び相應へ感應相即の妙境に立つて居る。實在は只一個の全體のみにある。而かも一にして多、多にして一なる相

即の妙趣は、有限のうちに絶對が微笑し、絶對のうちに有限が花咲くと云つた様な境界である。ここに一切は全意識の中に統一され、萬有は我が意識の内容に入り來つた、其の一波一浪として動きつゝある。一切を意識の領内に編み入れて我が有となし、我が人格の内容となし、こゝにその統一の世界を創造する、これ即ち我が心靈の本性である。一切を我に融化し、統一し、白熱化して「これに生あり、之の生は人の光りなり」と宣ひ來りて、自己人格のうちに、大宇宙的生命を體得し得たるとき、「眞人は即ち神也」と云ふ境界を自己心證の上に表現し得るのである。

宗教的意識の心證が、一たび其の高調に達して、神人合一の妙境を自我の經驗中に體得し來るときは、其の人格の豊富なる生命の潤ひとも云ふべきものは、一大慈光となつて、露の如く滴り、光りの如く照つて來るのである。此の光に浴びて生くと云ふ所に、宗教的歸依信樂の一面が匂うて來る。人格の深い匂ひこれが吾等の生命である。吾

等の至深の要求は、限り無き深さを有する人格の生命の光の中に活きたいのである。こゝに一切のものを得たいのである。天地の實在が人格を有するや否やは、こゝにしばらく言はない。吾等至深の要求を打ち開き、全人格の一切を捧げて、歸依三昧の誠を打ち込む至高の實在者なくしては、吾等の要求は所詮満足することが出来ないものである。觀念の世界に生きて萬有の姿を、我が心の一波一浪として觀じたる我がこゝろは、觀念の空疎なる生活に堪へ得ずして、今や直ちに全身全靈をあげ、「愛」そのもの、當體なる宇宙の大實在に肉薄せずんば已まざる底の白熱的要求に渴仰して居るのである。要求は即ち感應である。要求やがて創造である。全人格の至深の要求は、今やその感應として我が意識を高擧せしめて、一種の宗教的光輝の状態に導いて居る。我が意識の無限の思慕の情そのものが、やがてこれ大神の恩寵として我に降り來りし光明の雫である。思慕の刹那が即ち、恩寵感應の刹那である。此の高調の一境に參じて、其の光被を如實に感じたる神人の内的

光耀は、これやがて生死を一超したる永遠の生活である。新らしき創造は、こゝに其の曙光を放つべきである。古人が「神を慕ふものよ汝の靈は活くべし」と心證せられし經驗は、「一心欲見佛、不<sub>二</sub>自惜<sub>一</sub>身命」と道破した聖者の經驗と相應する所のものがある。自分は天地に神なきを憂へず、唯だ我に熱烈なる思慕の要求なきを憂ふ。「求めよさらば與へらるへし、門を叩けよさらば開かるべし」と云ふ感應相即の一境ばかり、宗教の眞理を語つて居るものはない。この全人の要求なくして宗教の門に入らんとするは、所詮は無意味である。

されど更に百尺竿頭一步を進めて宗教の眞風光を見れば、吾等内心の至深の要求は、宗教的生活の第一歩に過ぎない。至深の要求が盡くる所に、一切抛擲の一境が開けて來る。現實を超越せんとする至深の要求は、我が心靈の深き聲である。ここに求道の涙がこぼれて居る。肉なる我の要求を否定し、單なる生活の無意味に泣き、天地存在の寂寥に泣き至深の要求にからまれて、まづしぐら



その足はくればなるによごれけるかな

君はまた春の日にかへるよしなし……

うらわかき母よ、をさなごをまもれ  
道をよけ、影を求めて、ひたすらに  
をさなごの若立をまもりはぐくめ

母よ、ただをさなごの行く路に

ふたつなき白妙の花を撒けかし

君が子の榮ある旅に行く日を  
ものかげに見送るは幸あらずや

ふたつなき薔薇の花を、百合の花を

やはらかに、やさしき花を、子らは踏みつつ

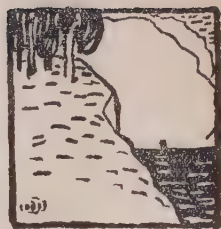
かへりみて、母を見て、微笑みながら  
子らは、ああ、子らは行くらむ、遠き旅路を……

うらわかき母よ、ゆめな思ひそ

うらわかきそのかみの悲哀を、はた歡喜を

そのかみの戀人をゆめな思ひそ

母よ、ただ白妙の花を撒けかし



## 光に觸るゝとき 金子 白夢

吾等の宗教生活は、吾等の全人格の力を以て存在の神秘に驚いて、そこに光明に觸るゝところから初まる。

自分は今、此の地上生活を續けて居る。兎に角續けて居ると云ふ事實——此の存在の事實は、今死の様な力を以て、自分を擱んで居る。存在の一大事實、これ程深い恐ろしい事實はない。一切を否定し盡そうとしても此の存在の事實だけは、否定し盡くすことが出来ない。存在が何等の意味を有して居るか、自分は知らない。併し此の存在が恐ろしい力を以て、自分を壓して居ると云ふ事は、争ふ事は出来ない。自分の存在そのものが、驚くべき神秘であると共に、自分の周囲を取り巻いて居るものも、一大神秘である。自分は神秘と神秘

の中に介立して居るのだ。此の存在の謎は、何を吾等に語つて居るのであらう。自分はこう考へて來ると、もう知識上の解釋を以て與へられたものでは、満足することが出来なくなる。知識と云ふものは、存在其のものの真相に至りては盲者である。知識以上の力、生命の本源に直入する力、そう云ふ様な力の外には、存在の内奥に竊進する力はないのである。存在が黒い翼を擴ろげて、自分の生活を蔽うて居る。自分は意識のどん底から目を擧げて、幽かに此の恐ろしい怪物を眺めて居るのである。然り絶望の氣分に満たされて、よろこびになつて、此の存在の前に立つて居るのである。天寂々地漠々と云つた様な此の暗黒の世界に立つて、我獨り覺めて居る様な寂しさ、無限のやるせない寂しさ

水でもヒマラヤの水でもない貯水池の水を認識せんとするものではない。又はペテロでもなくパウロでもなく、オイケンでもなくベルグソンでもない人間を研究するものではない。

また他の例を以つて譬へて見ると哲學は一種の實在に對する去勢術である。かの牧畜者が家畜の肉を取らんとする時に、それを去勢して家畜を肥滿せしむるが如く、哲學者は實在を我が生活に利用せんとするや、先づ實在を去勢して之れを無限に膨脹せしむるのである。故に一旦去勢的哲學者の認識範圍に這入つて來た實在は、直ちに變化して動的實在は靜的となり、持續は死デス解リゾリューションされ、創造力はなくなつて因果となり、異質は同質となり、荒々しい個性は平等に溫和マイルドくなる。即ち全く潑刺たる生命が去勢されて何等の生産イレツォインデラフ力もなくなつて了ふのである。そのかはり去勢された實在は生産的發展を爲す餘地がないから、止むを得ず空漠な概念的脂肪のみを無限に膨脹せしむるのである。斯くの如き不自然な病的な膨脹を見て、哲學者は最も生命あり内容あり美味のある實在で

あると喜ぶのである。そして又此くの如く膨脹した實在は、我々の實生活の上に利用するに甚だ便利で且つ必要なものである。我々はこの去勢された實在を利用して今の物質文明を作り上げたのである。故に去勢術は一種の實用主義に基いた厚生術である。しかし我々は今去勢しない生産力の溢れてゐる實在に接觸せんとして居るのであるから、物質的文明を脱却する必要がある。眞に創造力と生産力のある生きた實在を捕捉せんとせば、利用せんとする實生活を超越せねばならぬ。『やはり野におかれんげ草』でヤコビ博士が所謂『プラグマティズムを超越』せねばならぬ。在來の科學的去勢術を根本的に拋棄せねばならぬ。永久の生産的創造力を有する實在を捕捉の唯一の方法は、利用を離れた無關心的の直觀である。

眞の創造は潑刺たる生産力から生じて來る持續的生殖である。Heterogeneousな個性の増加である。進化は個性が多くなりて更に他の個性を生産するの謂である。生命は限りなく個性を造する生産力であり、永久の持續的進化である。



# 母

竹  
友  
藻  
風

うらわかし母よ、ゆめな思ひそ  
うらわかしそのかみの悲哀をはた歡喜を  
そのかみの戀人をゆめな思ひそ  
母よ、ただ白妙の花を撒けかし

うらわかしそのかみの心は褪せて  
清秀の聲はいますがれぬとも  
靜かなる愁の色のはに曇れる  
慎ましき母の眼をえこそ怠れね

あたらしき女の國を君は拓きぬ  
朝ぼらけ、少女の國をあとにせしより  
ふりつもる雪を踏み氷をあゆむ



あり、永久の戦であるからであるまいか。我々は永へにモーンフル・ブラックと戦はねばならぬ。カールイルも戦つた。amor fati の旗標の下にニイチエも戦つた。イブセンも戦つた。ロマンローランも戦つたトルストイも戦つた。Excellior の旗を立て、ロングフロも戦つた、そしてメーテルリンクもオイケンもベルグソンも、皆戦場に出て、生の悲哀を味ひつゝあるのである。醒風吹きすさむ血汐の河を涉り、屍の山を越えつゝある。彼等は一人になるまで戦はんとしてゐる。凍える絶頂まで昇り切りむとしてゐる。宗教も戦ひ、文學も戦ひ、哲學も戦ひつゝある。

オイケン哲學もベルグソンの哲學も、凡ての障礙物を押しのけて物の眞實を如實に掴み出さんと戦ふ點に於て洵によく一致して居る。そして眞實の生命を直接經驗或は直覺に由つて捕へんとするとも、また共鳴して居る。オイケン是在來の舊き人生觀に對して、ベルグソンは舊き世界觀に對して共に戦ふのみならず、生活そのものゝ流れに這入つて新しい戦ひを爲さんとするのである。眞實の

姿は常に『動く』相すがたの中に最もよく瞭々ありくと現はるゝものである。生命は時々刻々の流動である。而も斷片的のものでなくて純粹持續の變化である。オイケンが。絶對の眞實境に於てのみ、生きた變化フエリシヤルシジと充全なる内面現在グアイシヨウロとを感じ得ると言つたのは之れである。眞の形而上學も眞の藝術も共に、この生命の『動く』の姿を認識するにあるのである。科學は到底この『動く姿』を解することは出来ない。從來の哲學も亦この動く生命を殺して了つた。故に現代の新しい哲學はこの生命を再び生かさなければならぬ。靜かな貯水池からザワ／＼する急流の河に持ち來さなければならぬ。之れが爲めには從來の舊き方法を一切ふり棄てなければならぬ。シヨペンハウエルが理知の研究の終局に達した所に初めて眞の哲學的研究が起らなければならぬといひ、ベルグソンは眞の形而上學は理知を超越して動く生命を直覺するにありといひ、ヤコビがベルグソン哲學を評して眞の哲學はブラグマティズムを超越した所にあるといつたのは皆此精神を一にして居る。オスカール

Art only begins where Imitation ends. Life is changeable, fluid, active, and that to allow it to be stereotyped into any form is death. That to be impractical was to be great thing. つたのは、眞の藝術の任務は靜的な拘束的模倣的な或は實用的な形式を一切解脱して、生命の流動的創造を赤裸々に表現するにあるからである。もし藝術が單に自然を模倣するにあるならば、何も苦んで蕪骨な手と古い筆とを以て書くよりも、寫眞を撮る方が一番氣がさいてゐるが、寫眞で満足出来ないのは何の爲めか。我々がかの絶えず變化する活動寫眞を見て、普通の寫眞よりも幾分興味を感じ稍々眞實の面影を漂はすとが出来るのは何の爲めか。勿論活動寫眞の姿と眞實の相そのものとは根本的に異なるものであるが、我々はあの動く姿の中に何者かのはたらきと力と靈のひらめきとを感じ得るが爲めてなからうか。普通の寫眞には我々は少しの深さも力もはらたさもしんみりと味ひ得ない。在來の哲學も畢竟何の深さも働かない生命の寫眞を撮つて居たのである。」

之を譬へて見ると今までの哲學は大きな貯水池の如きもので現代の哲學は晝夜流れてゐる河の様である。概念とか相對原理とかいふ大きな貯水池を造り、その中に澄んだ水も濁つた水も或は淡水も鹹水も皆入れて了つて、その濁りや鹹味を下層に沈澱せしめ、表面に浮んだ軽い淡い清い水のみを見て、凡ての水は一樣で平等であるといふが如きものである。いかなる水でもこの不可思議な貯水池の中に流れ込むと、魔術的に變化して了ふ。故に魔術的科學者は水の眞の姿を見たことはない。謂はば水の個性を知らない。否知らないのを魔術の本領と誇つてゐる。我々は魔術は大嫌ひである。澄んだ水は澄んだ水として、鹹水は鹹水として味ひたいと思ふ。

富士から流るゝ水もヒマラヤからわく水も、ナイアガラの瀑布も華嚴の瀧もそのまゝの姿で動くまゝの相で觀じたいと思ふ。そこに眞實の相があり生命のはたらきがあると思はれる。哲學はこの眞實のはたらきを認識せんとするのである。決して科學の様に淡水でもなく鹹水でもなく、富士の



## 創造の世界（上） 野村 隈 畔

### 生命論

春の野に咲ける小さき草花に對する、詩人の態度と科學者（植物學者）の態度とは、いかにその間に大なる徑庭があるであらう。淋しき秋の夕ぐれ、しとくと生柴なましばの上にふりそゞる時雨を見て、宇宙の流轉無常を觀じて沁々しみじみと悲哀の涙を味ひ、生命の永恒輪廻の相を悟りて崇高驚異の念に打たるゝ詩人と、四時の變化を天文學的に考察し、時雨の流轉を物理學的に觀察して明瞭なる因果的知識を得て喜ぶ科學者との心のだどりの間に、いかに深い／＼異りがあるであらう。人の子がその眞理の爲めにその愛の爲に、凡ての敵や脅迫と黄昏たふがれ

の翼の襲ふまで戰つて命を棄てた人生の悲劇を見て、そこに生命の眞の姿と眞の飛躍と眞の創造と、眞の莊嚴なる美とを直觀して、或は泣き或は驚き或は祈りする詩人と、その人の意識を心理學的に乃至病理學的に研究し、その行爲を倫理學的に乃至經濟學的に比較校量して、冷靜なる善惡の判斷を下すところの學者との間に、いかに神秘な隔りの幕があるであらう。そして今までの科學者とか學者とか批評家とかいふ近眼者色盲者に由つて、いかに生命の相すがたが毀たれ嘲けられたであらう。いかに生命のはたはた、生命のはげみが遣る瀨ない程に妨げられたであらう。そしていかに生命の溫かき血は冷され、絶えざる美しさつゞきは見る

影もなく細々に寸断されたであらう。生きて居るものは勿論殺すとも出来、解剖分析するとも出来やう。されど全くこれを滅するとは出来ない。我々に何等の涙なく何等の欠陥なくこれを滅するとは出来ない。我々は科學者の態度や批評家の態度を決して非難はしない。彼等の爲すところが全然無益であるとも言はない。それは却つて人生に必要であるかも知れぬ。否我々の日常生活には何うしても、そうする必要がある。しかしそれは決して人生の眞諦ではあるまい。第一義ではあるまい。眞の内部要求ではあるまい。我々の最初に而して眞實に欲求するところのものは、事物の眞の姿を見るのである。事物の内面に深く潜んでゐる生命そのものに觸るゝとである。否それと同化するとである。若し事物に意識ありとすれば、熱と情と愛とを以てその意識と感應するとである。生命の口に接吻し生命の體を抱きて、熱き呼吸と烈しき鼓動とに震えんとするとである。我々は之れが爲めに煩悶してゐる。之れが爲に懂れてゐる。そしてこれが爲に雄々しく戰つてゐる。我々の生活はこの要

求の表現である。否生命そのものの創造相である。我々が赤裸々に物の眞實を觀じた時に、生の力強き自由と感ずると同時に何とも云へぬ悲しさと深い壓迫とを覺える。そしてこの悲哀と壓迫とはます／＼我々の眞實を見る方を鋭くし我々の奮闘心を刺戟する。人間の偽らざる聲と儼かな偉大とは、この眞實を直覺して鋭い悲哀を味つた時に最もよく現れるのであるまいか。何となれば、そこには我々の全我の戰と、何物をも恐れざる大膽な自己投出とがあるからである。カーライルが *The man's misery, unhappiness and hypochondria, is always some of his Greatness.*—Sorrow-stricken, half-distracted, the wide elements of mournful black enveloping him, wide as the world—and called that is即ちこの意味ではあるまいか。眞實の相乃至生命の創造は決して楽しいもの、平坦なものではない。苦しき forward である。悲しき struggle である。涙多き succession of falls である。何故に人間はかくも悲しきとや、恐しき戰をくり返へさねばなるまいか。畢竟人間の生命そのものは永久の悲哀で



となれば千種萬様の人格的要素を統一して生命あるアズ、ア、ホールの人格體系たらしむるものは自我の價値的存在に對する信仰を他にしてはないからである。從て人格の發達が應て信仰の發達でもあり、信仰の確否が應て人格の統一の緊粗でもあり、更に自我に對する信仰の破滅が、應て人格の分裂でもある。人格と信仰との關係を二元的乃至主從的に見るが如きは、信仰の本質を以て偏に消極的な所謂『人格の表白』となす最淺薄な思索に原因するものといはねばならぬ。人格は信仰を中心動力とした統一體であるから、信仰を離れて人格なく人格を他にして信仰はあり得ないのである。

此意味に於て懷疑とは小信仰の分裂であり、統一的信仰を要求する過渡的狀態であるから、懷疑に徹するといふことは、事實上にも理論上にも、共に不可能な事である。此の如く自我の成立保存完成に最有効な動力たる信仰は實に人格活動の絶頂點である。從つて全人格系統中最有力なそして權威あるものは信仰である。吾々は事實に於て唯だ此一動力に自己の全生活を托しても居るし、又其

の託する度が強ければ強い程全人格系統が安定堅固となるのである。換言すれば全人格系統を只此の一動力に委任し得た時が、即ち『生の充實』とか解脱とかいふ狀態に達した時に他ならない。斯くの如く信仰が全人格系統に君臨し、之れを支配し得るのは、即ち信仰が人格成立の動力でも精髓でもあるためである事はいふ迄もない。從て個人の信仰の真相を知る事が、應て其人格の真相を知る事である、そして斯かる意味でのみ、吾々は信仰を以つて人格のあらはれであるといふ事が出来るのである。

## 八

信仰を斯くの如く見れば、人類は信仰的生物であると共に、信仰は個人的、進歩的のものである事を一層十分に證明するものといはねばならぬ。何となれば人格の成立とは特色ある團體的統一の成立であり、そして信仰が成立の効力だからである。且又人格は不斷に自己のライフ、及び宇宙を創造し行く進歩的自由體たる限り、乃至は人格が自

我の存在價值を自認し、それを永劫に發展せしむる所のベターライフに對する自覺である限り、其の自由及び自覺の中心動力たる信仰が、動的、進歩的である事も自明の理である。斯くして信仰の内容の異なるに従ひ、人格の内容も異り、從て神も亦千種萬様のモードを以て個人格にのぞむのである。

之を要するに人格が信仰を生むのではなく、信仰が却つて人格を生み、信仰が人格を消極的に規制するのではなく、高大な信仰が弱小な信仰を規制し、發達した人格が不完全な人格を規制するのである。人格系統に於ける信仰の積極的意義は、正に此の點に存すると云はねばならぬ。

## 九

低當なる信仰の基礎の上に、儉安の殿堂を築き、そこに惰眠を貪るならば、吾々は寧ろ高大な懷疑

の激浪の中で轉輾反側することを喜ぶものである。

吾々の中心要望は、全自我を挺して驀進する事の出来る充實旺盛な氣力である自己に徹し得る確信である。從つて神を信じ神を見出すに先立つて、神を信じやうとする力乃至神を見出し得るといふ確信を欲する。勝利を欲するに先立つて戦ひ得る勇氣を欲する。

さうだ、無限な吾々の生の要求の先づ第一に欲するものは、神でも佛でもなく、懸命に自己自身の生活を生きやうとする誠意と斯くの如き生活を生き得る氣力である。

吾々の自我は此の自我燃焼の炬火に憧れ、生きた信仰の成立に悶えて居る。

烈が救済の可能をポストチュレートするのである。要するに價值保存と救済の可能とは、正に自我の絶對化要求及努力即ち宗教的信仰に必具する二面とも二要素ともいふべきもので、斷じて對立的二天的のものと見る事が出来ない。

## 六

生の要求に根ざし、無限の創造乃至『自我の絶對化』を目的とする信仰は、其半面に於て、救済解脱安立に對する要求即ち絶對者乃至神の恩寵を豫想する事は必ずしも不當な事ではない。或意味に於て信仰は、正しく救済乃至安立に對する要求及努力であるといはねばならぬ。何となれば『自我を絶對化』することは『自我を安立』せしめる事に他ならぬからである。如露如電の果敢ない現實我の相對的刹那的生活の不安に堪へ兼ねて、自我、詳しくは現實以上の偉大な或者の全能の袖にすがつてその存在價值を永劫不朽な實在乃至精神生活の巖上に彫付けやうとする要求こそ、眞實十分な意味での宗教的信仰の起源である。換言すれ

ば安立のない所には、詳しくは安立に對する要求乃至その可能に對する豫想のない所には、信仰も宗教もあり得ない。不完弱小な現實我以上の或者に對する憧憬乃至その實在に對する假定のない所には、信仰も宗教もあり得ない。そして其安立といひ絶對といふも、斷じて靜的のもの完具のものではなくて、生活經驗の統一完成に對する根本要求の理想境乃至究竟體としてである事は、既に論じた所である。懊惱し煩悶する現在であればこそ、吾々は安立をも絶對者をも憧憬するてはないか。神といひ、絶對といひ、解脱安立といふも、只永劫未到達未實現のものであり乍ら、尙且永劫それを生活經驗の究竟對象とも理想ともしてのみ、乃至は價值生活を増進充實する至上唯一の豫想條件としてのみ、眞實十分な意義を有するのである。斯かる意義に於て、信仰は最大不可能事を可能事ならしめずば止まずとする強烈なる生の根本的第一義要求と見ねばならぬ。一言にすれば、信仰は個體に絶對的生命の火を點ずるものである。ベターライフの無限的追求である。白松氏の

『神になる意志』である。停滯不動の安靜三昧に止り徹するのではなくて、不安、矛盾、撞着、暗黒、未完に充溢した現實的相對的個體生活を、價值生活の精髓としての精神力乃至生命力により不斷に否剎那毎により、強大に踏破し超越し行いて、永劫に止る事を知らぬ眞生活を創造し完成すると共に、新宇宙を創造し、完成しやうとする根本要求乃至その實現のための全的努力こそ、正しく信仰の核心である。一言にすれば信仰は新自我、新人生、新宇宙の無限の創造力であり、自我人生宇宙の將成的改善の唯一にして最高な原動力であらねばならぬ。

## 七

最後に信仰と人格との關係について、一瞥を與へて見やう。吾々を以て見れば、信仰は人格成立の中心動力である。何となれば自我の存在價值に對する信仰の成立が、即ち嚴密にいふ人格の成立だからである。人格の主要素たる自覺とは、此種の信仰の別名であり、自由も統一も等しく、此種

の信仰の内容だからである。詳しくは自己の存在價值を正視し、且その保存發達完成に對する手段方途に就ての自由選擇をなし、更に一切の云爲行動をして、此價值我の中心に聯關統一する必要と可能との根據に對する信仰の成立のみが、十分な意味での人格を成立せしめる根本條件だからである、

然るに通例信仰は『人格の表白』であるといはれる。然し乍ら吾々を以て見れば、一切の生活經驗が『人格の表白』であるから『人格の表白』を以て信仰の全相全意義を蔽はんとするならば、只狹義の宗教的信仰にのみ限定せらるべきである。何となれば宗教的信仰は、現在我の小弱に堪へ兼ねて、生の力と慰安とを得るに足る様な理想我絶対我即ち所謂神を假定する所の要求であり、從て又神は個人人格の創造した、即ち個人人格の根本要求の創造した理想的表白に他ならぬからである。然し乍ら嚴密にいへば、既成完備の人格が、信仰を生んだのではなくて、如上の意味で信仰の成立が即ち、宗教的人格の成立である事を忘れてはならぬ。何



ば、信仰はこれらの七色を融合に依て生命の躍動する白熾光の焦點―何物をも燃焼せしむる生命の焦點である。従つてあらゆる真理は、少くとも眞理感<sup>○</sup>は全人格的信仰でなければならぬ。

廣義の信仰は、知識の解決せざる所を是認し、知識の論證をも俟たずして、尙且知識の反對する餘地のない所にその特色を有する者である。これ要するに信仰が知識に比して自我乃至生命の一層根本な作用だからに他ならない。即ち信仰は知識に比して一層直接的な實用的なものである點に於て、吾々はジエトムスが『信仰の妥當性は實用的効果に依てのみ定められる』といった見解に左袒するのである。更に之を狹義の信仰に徴するも、信仰は其本質に於て實用的である事、詳しくは生の創造の最大動力である事は一入明らかである。

#### 四

生の創造、詳しくは自我の存在價值を絶對化する事を中心目的とする狹義の信仰、即ち宗教的信仰の特色は、何等かの意味に於て、絶對的要素を

豫想する點に存する。たとへば神とか宇宙精神とか、絶對生命とか最高實在とかいふものを豫想する事に依て、生の創造力を最強烈にし、自我の價值を十分に發現しやうとする全的第一義的要求の充足を見やうとするのが、即ち嚴密な意味に於ける信仰の特色精髓に他ならない。

然し乍ら信仰的要素を豫想するといふ事は、直ちに神を必要とするといふ意味ではなく寧ろ少くとも現實我以上の或者の存在乃至自我をその究竟の地點に迄高めやうとする強烈な要求理想の存在を豫想するといふ意味に他ならない。然して斯くの如き意味に於て、信仰は一面自我の要求努力を根柢とし乍ら、他面所謂安立乃至救済といふ事を否定し得ないものである。

生の要求乃至創造の根據から、信仰を見やうとする吾々は、信仰を以て自我生活を超越する宇宙其自身の神秘のみを闡明する秘鍵の様に見る見解に従ふ事が出来ない。何となれば信仰は宇宙の神秘を闡明するがために精しくは闡明せんがために、自我の生命の神秘を闡明する事を中心要務

とするものだからである。換言すれば自我生活を充實し、自我の價値を高大にし、即ち個的生命を燃焼し創造する事に依て、宇宙の大生命は解れ、その神秘を闡明する事が、嚴密な意味での信仰の眞髓だからである。此點から見れば、自我乃至生命の本質が動的發展的のものである限り、信仰も亦自我乃至生命の流轉躍進に従つて、不斷に更新改善進捗するものでなければならぬ。従つて吾々が『茲に自我の存在價値を絶對化しやうとする要求乃至努力』を以て、狹義の特色とするも斷じて抽象的靜的超越的絶對的立脚地から信仰や人生や實存やを見るものでない事をことはつて置かなければならぬ。換言すれば吾々にとつては、絶對といひ神といふも、吾々の自我の要求が創造したものに他ならない。

## 五

翻つて思ふに、吾々は信仰を以て『實在感』であるとする一派の心理學者の見解を是認せねばならぬ。何となれば信仰は自我の永久實在に對する、

乃至自我と關係ある宇宙の永久實在に對する要求だからである。ジエームスが『信仰は實在を認むる精神状態にある』といひ、ヘフディングが『連續が必ず存するといふ確信である。即ち神が種々の變化の中にも變化せずして恒存するといふ確信である。』といひ、更にブラットが『信仰とは與へられた事物の實在に對する肯諾の心的状態である』とし、而かも彼は件の『實在感』のみを以て信仰の全相を悉したものとせずして、之に加ふるにドルチルの所謂『救濟確認』即ち『實在せる神の救濟を疑はざる事』を以て必要條件として居るのも、此意味に於て相當の根據ある言と見ねばならぬ。然し乍ら吾々は要求と救濟とを以て二元的對立的の要求とするものではなく、寧ろ所謂『自我の絶對化』即ち無限なる『生の創造』に對する要求の二面と見るものである。換言すれば吾々はこれを以て、カントの所謂ゾッレンとケンネンとの關係の如く要求が強烈である結果として、必然に救濟の可能を信ぜしめるものと見るのである。即ちゾッレンがケンネンを生み、絶對化的要求の強

は如何なるものに對しても、吾々は自我の存在を否定し自我の價值と尊嚴とを犠牲にする事は出来ない。換言すれば吾々が絶對生命<sup>アイブ</sup>の存在を信じ、實在の永遠性を肯定しやうとするのも、要するに自我の價值と尊嚴とを高大にしやうとする要求の發現に他ならない。これらは即ち個的生命の充實乃至創造に裨益を與ふる限りに於てのみ可能でも必要でもあるといはねばならぬ。従つて世に神ありとすれば、それは吾々の要求や努力が吾々の生活、現在乃至將來の生活を改善して完全に向つて進んで行きたい、乃至行き得るといふ基本要求乃至其要求に、必然的に伴隨する信頼の基礎となる神でなければならぬ。換言すれば神の存在はやがて、よりよき將來の創造に對する肯定原理となり自己改善に對する努力價值の可能の保證者となつてのみ初めて意義を有するものである。此かる意味に於て自我の要求乃至生の要求を離れては信仰も神も存在し得ないのである。従て若しそれが吾々の全生命を托し得るものならば神でも佛でも木や石でもいい。吾々は只自己の生活の意義と價值

とに對して、確信の力を與へ希望の光を惠むものこそ衷心から翹望して居る。然して此事から見れば、信仰乃至宗教が嚴密な意味に於ける哲學と離れるものでも、截然區別し得べきものでもないことはいふ迄もない。然し乍らいふ所の信仰は、何を意味するであらうか。

### 三

信仰は、自我及び自我に關係するあらゆる存在に對する要求が、最緊密に集中し、最高潮に昂上した精神狀態である。別言すれば自我の存在價值を絶對化し、永劫化しやうとする全的要求乃至その要求を實現しやうとする努力である。然して信仰は最深奥の要求であり、最高度乃至全體的精神活動であるから、精神乃至自我の部分的能力たる知力理性の證明認許を要しない所の無假定無所依なそれ自身に於て價值を決定するものに他ならない。何となれば信仰は自我の生命が最緊張した狀態に於て、活躍したものだからである。換言すれば自我の價值を最も完全な境域まで高めやう



とする生の第一我欲の最も端的な、從て最も具象的な表現が、信仰に他ならないからである。斯くの如き意味に於て、吾々は信仰の中に自我の最も高き、又最も深き即ち自我の真相及全相を直觀自得する事が出來ると共に、斯くの如き自我の最高焦點を通じて、宇宙に遍在する絶對生命<sup>ライヴ</sup>の炎々たる靈火のまたたきを見る事が出來るといはねばならぬ。然して近代哲學に於ける『直觀』は斯くの如き意味での信仰に他ならない。此點から見て吾々は信仰を以て自我の一部分たる感情の作用と見たり、或は純他力的に解したりする見方を排するものである。何となれば、吾々にとつて信仰は全生命全自我上の事象であり、從つて努力、精しくは最強大な全我的努力を他にしてはあり得ないからである。換言すれば自我乃至生命の創造作用を離れた意味に於いての信仰は、吾々にとつて全然ノンセンスだからである。此點に於て信仰の眞義を闡明しやうとするものの第一着歩は信仰と知識との關係區別を明瞭にすべき事でなければならぬ。然して知識と對立して信仰を見る時には、信仰に

廣狹二義の存在するのを知る事が出来る。あらゆる生活經驗從つて知識の根柢基礎としての信仰と、知識を超越する意味に於ける即ち宗教的意味に於ける信仰とがそれである。然して吾々が『自我の絶對化的要求』であると定義する信仰が、後者を意味する事はいふ迄もない。

信仰を廣義に解する時には、あらゆる知識は勿論生活經驗そのものが信仰の根據の上に起つといはねばならぬ。何となれば現前當面の自覺的な生活經驗に依て認識する極めて狹少な範圍以外のあらゆる事象に對して、吾々は只此信仰に依てのみ統一を附し、存在の根據を與へ得るからである。從つて自己の信仰範圍が即ち、實在の範圍でも人生の限界でもあるといはねばならぬ。『あり』とは『ありと信ずる』事であり、『善し』とは『善しと信ずる』事である。此の點から見れば、一見客觀的抽象的絶對的と思はれる科學的——數學的知識だに、尙ほ且つ主觀的信仰に根ざすものに他ならない。たとへば科學的知識が、ブリズムを通して壁上に散映した光も熱もない七つの色であるなら



信仰は必ず現代生活に矛盾するものであらうか。充實した生活といひ、意義ある生活といひ、若しくは自我生活とか、眞實なる生活とか、生の創造とかいふ様な事も、信仰を否定し排斥し蹂躪し破壊しない間は、到底不可能なものであらうか。吾々は斷じてさう思ふ事が出来ない。極言すれば、吾々信仰を離れて生活を思ふ事が出来ないと共に、信仰を離れて實際に生活する事が出来ないのである。嚴密にいへば、信仰の破壊といふも、それは、信仰そのものの破壊を意味するものではなく、生命ある信仰を創造建設せんがために、時代精神に權威を有せぬ舊い死んだ信仰を破壊する事を意味するものではないか。或は自我生活といひ、眞實なる生活といふも、生存と努力の保證となる所の價值存在に對する信仰を豫想せざる限り、到底不可能な事ではないか。更に生の創造といふも、生命そのものに對する確信、乃至創造の事實及可能に對する確信なくして、どうして肯定する事が出来やうか。斯くの如き意味に於て、吾々は最も眞摯な態度を以て『人は信仰の動物である』とい

ふ先哲の言を是認すると共に、新らしい立脚地から、信仰や宗教や乃至神といふものを研覈攷究せねばならぬ。

これを最近時の風潮に就いて檢して見ても、人心の傾向は事實に於て、正に新信仰の要望に葵向して居るではないか。オイケン等の所謂新理想主義の哲學とか、精神本位の哲學とかいふものが、眞摯な現代の思想家に對して極めて強烈なる感化影響を與へつゝあるのも、要するに此の事實の一證に他ならない。一言にすれば、現代の最も眞摯な人達の最大苦悶は、新信仰を獲得創造しやうとする努力に對する苦悶でなければならぬ。生の建設創造、それが信仰の肯定でなくて何であらうか。吾々は實に全生命全努力全自我を托する事の出来る健全な信仰に對して、憧憬祈求翹望の至情を效して居るものである。

翻つて思ふに、正しい人生觀を確立するといふ事は、堅實な信仰の基礎の上に立つ事である。全的活動をなすといふ事は、全人格的信仰に生さるといふ事である。斯くの如き意味に於て、正しい

人生觀を確立し全的生活をなすことに依て眞實なる生活を生きやうとする吾々から見れば、嚴密な意味に於ける信仰を度外した所には、生活がないのである。

## 二

眞實にして最善なる生活を生きやうとする第一義欲の目覺めてる人にとつて、宇宙は生命ある實在と見えねばならぬ。勿論吾々より高遠廣大である全宇宙の眞相全面は、吾々の力に依て闡明し悉すといふ事は到底不可能である。只吾々が澄徹した眼で凝視する時に於て、實在の本質は神秘的ではありながら、生命を有する永遠的存在であるとを直觀する事が出来るのである。然して吾々は事實に於て、自己の生命が斯くの如き大生命と永遠に聯續して居るものだといふ感じを打ち消す事が出来ない。短き五七十年の生涯、只それだけで吾々の生命が、少くとも吾々の存在價值が、全然壊滅に歸するものとは思はれない。否、無限の要求を本質とする吾々の自我は、さう思ふ事を欲しな

い。即ちかよはき吾々の努力も、價值も、自我も、乃至は生命も、此の大生命の本流に朝宗して、永遠に浪打ち流れ行くものと信じてこそ、初めて生存の安立も努力の慰安をも見出す事が出来るのである。事實に於ても個人の存在價值はその肉體的生命の死と共に消滅するものではなく、人文の大潮に沿うて永遠に後代に傳はるではないか。斯くの如き意味に於て、吾々は個的生命の價值と尊嚴とを信ずるがために、詳しくは個的生命の價值と尊嚴とを最も十分に信ぜんがために、全一的な永劫的な乃至は絶對的な大生命の實在とその價值と尊嚴とを信ぜねばならぬ。即ちこれを信ずる事に依て、吾々はそこに自己存在の價值の擔保を得、努力奮闘の慰安を得たい。少くとも吾々は、宇宙や實在を以て偏へに冷たい索寞な物的機械的必至的存在と見る時には、寂寥の感を打消す事が出来ないと共に、熱烈旺盛な生の第一義欲を充足する事が出来ないものである。

然し乍ら、吾々にとつて最も尊いものは自我である。従つて凡そ如何なる場合に於ても、若しく

には二つのものが甚だ明瞭に現はれて居る。それは自然主義的機制的のものと、主智主義的理性的のものとしてある。前者は精神生活の有らゆる標準と任務とを、外界に對し實證せられたる學說に適應するやう形成せんと試み、後者は存在の全範圍を絶對的思索過程たらしめんとするのである（「プロレゴメナ」六十八頁）。

## 八

けれども環元的論法を用ひ、勞作界に照して此の二つのうち何れかに獨占的効力を歸するとが出来るかを驗し、その然り能はざるを見て、更に歩を進めて、彼の勞作界は他の連絡、否な生活が總てを包括せんとする一運動現はれ來らざるやを調査するのである。此の如き認識の方法は是れオイケンが *noologische methode* と稱するものである（「ノオローギッシ」なる形容詞は希臘語の「ヌース」より來れるものにして元來「ブシヘー」即ち心に

對する精神である。從て「ノオローギッシ」を精神的と譯し、心理的と譯する「ブシホローギッシ」に對せしむるを適當となすべきものなれども、精神的なる語は他の譯語として用ひらるゝが故に、僕は直知的と譯するのである。その理由は實在の深處に入つて本源的なものと直接に相面するものであるからである。オイケンは斯くしてこゝに深みあり、活動あり、獨立あり、創造ある精神生活あるを發見するのである。（認識と生活「百廿一頁以下」）。

こゝには唯だオイケンが如何なる認識上の論法を用ひて、そして遂に精神生活に達するか、その論法を明かにするのが主眼であつた。彼れが實際此の論法を用ひて如何なる奮闘をなすやは他の問題であるが、オイケン哲學を云々するも、此の認識論的論法を明かにせざれば到底その真相を知るとは出来ない。



# 生の創造と信仰

稻 毛 詛 風

## 一

自我の權威の肯定主張が、やがて生活問題の最高最大重要な事の様に見えるに於て、神や信仰を説く事が極めて迂愚な閑事業と見られるのは當然な事象である。從來革命的思想が偶像破壞的精神と呼ばれ、新時代の先驅者が偶像破壞者と稱せられて來た事實に依ても、蓋し思半ばに過ぎるものがある如く、新思潮新傾向の興起が、舊信仰の破壊にその第一着歩を始めるのは、歴史の立證を待つまでもなく、極めて明白な事實である。斯くの如き意味に於て、現代の曉鐘も亦舊信仰の破壊の手から撞き出されたのである。科學思

想の勃興、實證的精神の遍滿、自然主義的人生觀の勝利、これらが即ち舊信仰の否定破壊を他にして、何を意味するであらうか。即ち理性に目覺め、現實に目覺め、ファクトに目覺めた人にとつては、在來唯一最高の權威者でも慰安者でもあつた神は最早彼等の讚歎、渴仰、歸依、敬虔、思慕、祈求の對象となる事が出來なくて、却てその猜疑罵詈嘲笑排斥の對象となつたのである。従て彼等にとつて權威あり價值あるものは、權力や物質力であり、彼等にとつて眞理となるものは、只科學の承認し事實の立證する以外にはないのである。然し乍ら斯くの如き破壊的態度は、果して現代人にどれ程十分な満足と與へたであらうか。更に



當り全體を支配する本源から連絡をして居ない。

唯だ色の成績が外面的に集合したのである。固より分解は此の連絡に對し大に斧鉞を加へ、この主線を示すとも出來る。けれども未だ全體を明瞭に現はすとは出來ない。若し全體を明瞭に現はさんと思へば、要素を充分に確定し、統一によつて特徴を得たる行爲を活動せしめ、共通の目的を標準として價値の列次を定むるの必要あるが。此の如き出發點を與ふるものは則ち綜合的論法である。

之を以て見ると綜合的論法は全體の想を初めに圖取りするものである。即ち此の論法が着々歩を進めて行く代表者たり、或は先導者たるものが出來るのである。然らば此の如きものは何處に存在するか。曰く是れ普汎の生活が到る處に示す行爲の總括的現實系統が示して居る。換言すれば各時代の特徵を有する文明詳言すれば文明類型が示して居る。例へばカントの哲學系統は決して個々の認識を後から組合せたものでなく、內的統一を有するものであるが、更にこれよりも大きな人類の全體を精神的連絡によつて包括する文明系統なる

ものが生ずる。希臘のクラシック文明はその一つである。此の文明では總てが藝術觀によつて支配されて居る。藝術家の勞作が作品となつた計りでない。世界も國家も、個人の生活も作品であつた。

近代と雖亦た同じやうに、內的統一を示して居る。例へば學問を支配するものは勢力でふ概念である。然し勢力でふとは學問界にのみ用ひられるのでない、倫理や宗教に於ても、勢力概念が支配して居る。倫理に於て最も重んぜられる所は、希臘に於ける如く美術的人性を實現するのでなく、有力なる活動である。宗教に於ては瞑想に耽つて永生を求めず、萬難を排して活動するを以て永生に近かづくとして居る。即ち吾人は文明を内から統括する綜合的汎性を認めざるを得ない。これがオイケンの云ふ文明系統或は生活系統若しくは *Synlogema* である。

固より生活系は皆な自己を完成する爲めに、吾人の活動を必要とする。従てその實行は現實的環境の條件に服従し、その危險にも脅かされる。之を以て完全な成績や錯誤を破つて統一的な、そし

て本質的な意味に溯るの必要がある。さうすると初め見えるのは、唯だ輪廓丈けである。けれども此の輪廓を段々に充實するのである。オイケンの云ふ「全體より全體に向ふ努力」とは實に此のことを云つたのである。即ち此のとなすものは精神生活である。精神の猛然たる奮進はどうしても現象の渾沌たるものを破つて、本質の全體に達せざれば止まない。

周圍は渾沌たり、紛糾を極めて居る。けれどもその中から全體的の努力が段々分明に現はれて、一の類型が出来る。此の時に吾人は綜合的作用をなす普汎的原動力を得る。此の原動力は多種多様なものを同時に現前せしむる (*Synoptische Vergegenwärtigung*) は是れ實に彼の分解作用が到底企て得る所である。而てこの現前は彼の直覺<sup>直イデア</sup>とは全く違ふ。直覺は傍觀者の如きものであるが、彼の同時的現前は實在を形成する創造である。生活の形成である。實在を自ら體驗するものである。恰度將軍が自ら戦ひつゝ戦場の全軀を思索のうちに整然として容れて居るのと同じである。(認識と

生活」百卅八頁以下)。

## 七

然らば彼の綜合的な生活系は存在するものなるか。若し存在しないものならば、如何に綜合しやうとしても、それは不可能である。又若し既に綜合されて居るものならば、吾人の努力は不必要である。然るに吾人は此の全部否定と全部肯定との外に尙ほ第三の場合を考へるとが出来る。即ち生活系を創造せんとする試みは、吾人之を人類の歴史に於て發見する。けれども此の試みは不完全であつて、既に他の試みが勝利を得んとして現はれて居るが而も尙ほ未だ充分徹底し得ないかも知れない。若し斯くの如きとありとせば既に存在するものを批評し、新らしき全軀を發見するの必要がある。「固より吾人は此の研究をなすに當り、運動の経過が既に到達した位置より、即ち近代及び現代より之を初めるのである。さうすると吾人は殊にこゝに活動しつゝある生活系によつて研究しなければならぬ。斯く思つて現代を見ると、こゝ

勢力と對象との關係も亦た環元論法から見ると全く違つたものになる。即ち兩者は分離せる範圍ではない。同一活動の二方面である。例へば法とは何であるか。これは對象である。けれども此の對象は勢力によつてのみ存在するものである。勢力之を維持するとなければ、如何なる處にも之を見ることは出来ない。けれども勢力も亦た對象と共に存在するのであつて、對象なくして存在はない。されば力の對象は行爲と生活との以前に存在するものではない。これによりて及びこれと共に存在するのである。けれどもそれだからと云つて對象は勢力運動の單なる產物となされてはならない。否な對象も勢力も行爲に於て同等の位置を有するものである。對象は行爲により精神的なるもの、深みより引き上げられて、實在的生活の表面に現はされるのである。だから勢力に對する對象の獨立が否定されるのではない、固定し、外部にあると云ふ意味の對象が認識上の研究より除かれるのである。主觀と客觀との關係も矢張り此の通りである。客觀なき主觀なく、主觀なき客觀はな

い。オイケン<sup>レヒト</sup>は之を説明する爲めに毎々大なる藝術のとを云つて居る。作品は外的存在物の單なる模寫ではない。これは心靈を有し、その最微の構造に至るまで精神的勢力の浸み込みたるものである。然れども亦た飄漾せる氣分でもなければ又紛々として分裂せる状態でもなく、常に對象的にして、明瞭に特徴を現はしたる創造である。

此の如く主觀も客觀も或は勢力も對象も之を總括する全體的生活によつて包まれる。オイケン<sup>レヒト</sup>は此の包括的行爲を全行爲 (Volltat) と名づけて居る。此の全行爲が生ずると共に、先づ第一に實在が心靈生活のうちに於て生ずる。要するに有らゆる多種多様なものは、一の行爲、一の總體行爲によつて支持せられねばならない。さうすると「此の總括行爲は決して直接なる意識の作業ではない。否な此の意識は反對續出の渦中にあつて、如何にして之に勝ち得るや、その眺望すらない、況んや自ら全體的過程を産み出すが如きとは無論不可能である。されば生を與ふる行爲、即ち全行爲は意識の背後に轉置せられなければならない、創

造の工場は一層深き根柢の上に在るのである」(全上六十四頁「認識と生活」百廿頁等)。

此の如き全行爲をなす者は何であるか。是れオイケンが云ふ精神である、精神生活である。彼の分解的論法は則ちこの精神の生活に二重の性質あるを認めざるを得ない。そして全行爲はその一方の本源的事實であつて、意識の奥底より出て來るものである。之れを以つてオイケンは精神生活の核心は、智情意以上にありとし、カントが意思に與ふるに他よりもより以上の位地を以てしたる如きは、偶々以て彼れが云ふ意思とは他の二つの心靈の力に比すべき一能力にあらず、生活の全體を移して活動たらしめんとする眞意に出てたるを窺ふに足るべく、從てカントも亦た實に精神生活の核心は心靈能力の以上にあるとなさんとするものであると云つて居る(「認識と生活」百四十五頁)されば吾人は道德、宗教、藝術等の問題に就ては常に進んで彼の本源的に生活の全體のうちに流れ入るものありや、ありとせばそは何ものなりやを究めなければならぬ。(「プロレゴメナ」(六十

五頁)。

## 六

然れども分解的論法も、その越え能はざる坪がある。即ち分解は材料を自ら供給すると能はざるものである。然るに此の材料を供給するものがある。それは實に勞作界である。勞作界とはオイケンが文明全體に與へた名稱である。カントも嘗て理性の本體を知らんとした時に、その研究の出發點を理性の產物に取つた。理性の產物はカントの意見では學問であつた。詳言すれば數學と科學とであつた。彼れは若し理性にして是等の產物を生じたりとせば理性とは如何なる性質のものならざるべからざるやと問ふた。是れ彼れの出發點であつた。是れ前に云つた先驗的論法である。然るにオイケンは單に數學的科學に出發點を置かず更に之を擴張して文明の全體、即ち勞作界に置いた。そしてこの勞作界こそ認識に材料を供給するものとなるのである。

勞作界は連絡を有するものである。けれどもし



を自己の内部へ包み容るゝ能力を有する全體性のものたる必要がある（「プロレゴメナ」四十二頁）是れに於て二つのとを要求せなければならぬ。即ち直接なる個人生活を根據とせざると、是れその一である。既に完了して心靈なきものとなりたる成績を根據とせざると、是れその二である。然らば何を根據とすべきか。曰く人類の行爲に於て又た生きたる行爲として了解せられたる歴史的發展の全體に於て與へられたるものを根據とするのである。（是れオイケン博士に「大思想家の人生觀」てふ著述のある所以であらう）此の行爲は實に共通の勞作界であつて、大なる一連絡を形成するものである。是に於て普汎的或は宇宙的生活のうちに、更に他の區別が生ずる。即ち單に勞作と相伴ふもの（例之懷疑の如きもの）と、勞作の一成分たり、その全體に於て確實なる位地を有するもの（例之理性批評）との間には大なる相違がある（同上四十三頁）。

斯くの如く吾人の研究は現象によりて、その全體を窺はんとするものである。その方法や階級に

幾多の相違があつても、之を包括的全體觀に組織せんとするものである。且つ此の場合に於ても吾人に關係するものは、如何なるものも皆な内生活に屬するものなり、との思想と勇氣を鼓し徹底的に考へ、初め内生活に屬せざる如く見ゆるものをも、此のうちに引き入れ、殊に勢力と對象てふ對立をも内的活動のうちに包括せしむべし、との要求を猛然として貫徹しなければならぬ。斯く有らゆる出來事（過程）を變じて内的活動となすことを名づけて、オイケンの内照（Innensicht）と云つて居る（同四十六頁）而して此の内照の成分として必要缺くべからざるものが二つある。それは分解と綜合である。

## 五

こゝに云ふ所の分解の特色を、一言にして云へば環元的論法である。即ちオイケンが自ら云ふ如く「此の論法は生活の全範圍を環元して行爲となし、有らゆる成績は、之を支持し、創造する根本に歸着せしめ、個々の動作を生活の表現なりと解し、

以て有らゆる多種多様なものは、如何なる一般  
的制約<sup>ベザンク</sup>と素質とを有するとを示すやを研究し、  
成績を評價するにはその相互の關係如何と問は  
ず、精神的全體能力の作用なり、との點よりする  
のである。斯く考ふると個體の特色は全體の特色  
を表明し、個體の特色は表明の總計に於て全體の  
特色を現はすのである。」されば個々の現象は二重  
の取扱ひを受けることになる。例之自然説明の分解  
的、機制的論法に就ても吾人は、その發展、成績を  
尋ね、そが思索を以て自然を服從せしむる幾許な  
るや、認識の最後の目的に近づく幾許なるやを考  
ふるは、その一である。然るに斯くの如き議論の  
系統は間斷な行爲である。故に若し勢力の供給  
を怠るならば此の行爲は全然瓦解する。之を以て  
此の系統は精神的性質と精神的能力の證據とな  
る是れその二である。これは例を智力範圍から取  
つて來たのであるが、更にさうでない他の一例を  
舉げて見やう。例へば慈悲とは何である。一方に  
於ては、其が人生と社會に對し、如何なる功績をな  
すものであるか、努力の全體に於て如何なる價值

を有するものであるか、例へば倫理系統の根本主  
義とするに足るや否やを考へるとも出來るが、又  
他方に於て、慈悲とは如何なる心靈的性質を有し  
且つ之を表現するものなりや、そは如何に人間の  
感情と行爲、人間相互の關係を表象するや、是れ  
等總てに於て慈悲は果して精神的<sup>、、、</sup>生活の全部の性  
質をよりよく了解せしむる所ありやなどの問題を  
提出するとも出來る。であるから環元法は固定す  
る所のものを變じて活動的行爲となし、有らゆる  
特別なるものを、全體を證明するものとして評價す  
るのである。從て急激にして且つ豊富なる前進運  
動の看過したる普通汎的なるものを描出し、成績  
のうちに埋められたる本源的なるものを解放し且  
つ覺醒せしむるのである。此の本源的なるものは、  
元來個々の現象の事實的狀態の根柢たり又前提を  
なすものなりと雖、認識的意識によりて始めて明  
かにせらるゝものである。若しこのと明かなるに  
至れば、事物の觀察も最初の光景とは大に變じ、  
日常平凡なるものに就ても、斬新なるものを得べ  
く、新問題を提出するであらう（全五十四頁）。

は純粹に方式的學問を以て満足せざる以上、學問的認識の本源と前提とが、どれ丈け人間の精神に於て現前し實現して居るかと問ふとを等閑に附し能はざるのは當然である。

四

斯う考へて見ると理想的條件に着目するとも必要であるが、それが心理的には如何に成立するものなるかを問はざれば、此の理想的條件は主觀とは親しみのないものになる。故に先驗的論法と心理的論法とを綜合するとは出来まいか。認識の本源と前提とが、如何に人間の精神に於て現前し、實現するか人間がそれに生きるかを考へなければならぬ。さうすると畢竟心理的論法と先驗的論法とを結合するようになる。否な結合するのではない、此の兩者が始めより渾然として一になつて居る、否これよりも一步先さへ出た立脚地を求むるの必要がある。オイケンの認識論は實に此の立脚地を發見しやうとするものである。

眼を轉じて現代が如何なる精神的勞作をなすか

を見るに、科學や思辨スベラチオンに分れ、その科學や思辨は相爭ふて一致點を見出さざるのみならず、更に人間の直接生きつゝある本源と接觸することなきに至つて居る。是れ現代が生を呼び、生を要求する聲の盛んなるのみならず、この反響の大なるものある所以である。是れ實際主義プラクティズムや生物主義ビオロギズムの唱道せられ且つ迎へらるゝ所以である。固より是れ等に皆な幾多の眞理を有すと雖、而も分裂して全生活の統一を得せしめざるものである。オイケンはその舊著「プロレゴメナー」に於ても新著「認識と人生」に於ても此の現狀を叙述して、統一を求めざるを得ざる所以を論じて居る。

然らば吾人は如何なる點より議論を進めて行くべきであらうか。それは意識である。何事にあれば先づ通過する處は意識である。何事もこゝに現はれる。けれど此の意識には色々なものが雜然として混同して居る。空想の識り成せる色どりの綺麗なものもあれば、奇妙なものもあるし、省察レフレシオンの構想もある。そしてこれ等が、偶然的な或は雜然として流れ込む周圍の影響を受けて、意識の世



界を建設して居る。であるからさし當り意識の内容にはほん物もあれば、僞りもある。自ら體驗したのもあれば、考へ出したものもある。之れを以て吾人は意識の描ける内容に初めから信用する譯には行かない。けれども行爲とてもこれに等しい。何んとなれば人間の行爲も亦た意識から出發して居る。そして思索に推論的なのがあるやうに、行爲にも間接的なものがある。ここにも亦た眞實もあれば虚偽もある。歴史の産み出す所のものは此の混雜を一層増加せしむるにもなる。斯う云ふ譯であるから吾人は直接與へられたものうちに於ても、更に原發的事實と二次的事實とを區別しなければならぬ。故に研究の第一歩は意識より實生活に進入するである。(「プロレゴメーナー」廿頁以下) 然らば如何なるものが原發的事實であらうか。こゝにも亦た一寸原發的に見ゆるものが、詳しく考へて見るとさうでないところがある。例之個人の自我主張は疑ひもなく一の事實である。けれども此の自我主張が直ちに精神活動の原發的或は本源的性質のものであるとは云へ

ない。自我なるものが個人の狹隘なる、オイケンの毎々云へる如く、點のやうな存在を離脱し、民族を超越し、人類を超越し、宇宙の全體を體驗するのが、反つて眞の本源的な要求ではなからうか(「基線」八十三頁以下參觀) さう見るとこゝに個人意識を超越した一種特別な全體的な活動が發生して居るのである。これが實在の特別な概念とも云へるのである(「プロレゴメナー」卅一頁以下)。

若し實在の最後の根柢にして、斯くの如きものなりとせば、吾人は此の最後の實在に迫りつく爲めに、有らゆる現象に共通なる憑據或は核心を發見しなければならぬ。尤も現象の核心を發見する爲めには先づ、現象を見なければならぬ。そして此の現象は一方に於ては有形的に吾人の眼前に在るものでなければならず、又他方に於ては餘り有形的になり過ぎて、心靈を失ひ、精神的行動の分らないものであつてはならない。故に此現象は内的活動を固持するものたるを要する。それのみならず、全體を總括するにしても個々の現象を唯だ單に併列したものであつてはならぬ。全延長



上を游いて居るやうなもので、堅き根柢の上に立たんとすれば必ず溺れざるを得ない。オイケンオイケンの第一の著述は先づ哲學上の重なる用語の意義を研究したもので「現代の根本概念」と題してある(千八百七十八年出版)併しこれは千九百四年の第三版からは「現代の精神的潮流」と改題せられ、殆んど書き改められて、新著述のやうになつて居る。その次ぎの著述が「人類の意識と行爲とに於ける精神生活の統一研究の序論 (Prolegomena zu Forschungen über die Einheit des Geisteslebens in Bewusstsein und Tat der Menschheit, 1885) であつた、これはその後(千八百八十八年)に出た「人類の意識と行爲とに於ける精神生活の統一研究」の序論であるけれども、亦たオイケン教授の認識論上の立ち場を明かにしたものである。其の後昨年に至りては「認識と生活」なる著書も出来て居る。之を以て彼れの認識論上の立ち場は、是れ等の諸書を參考すれば明瞭に分るのは勿論である。

### 三

認識論ベグリーの論法は如何なるものが正鵠を得たものであるか、と云ふとは今日最も熱心に論争せらる所の問題である。これに就ては現今二つの説が相譲らずして力争して居る。一は心理的論法を取るもの、他の一は先驗的論法である。此の時から云はないとオイケンオイケンの立場を明かにするのに不便があるから、吾人は少しく之に就て論ずる必要がある。

心理的論法は認識論を心理學の一部分と做すものである。此の論者の説によると認識上の問題は、心理學に用ゆると同じ實驗的方法によつて攻究、解釋し得らるゝものである。殊に學問上の認識をなすに當り、人間の心靈生活に起り來る所のものを詳細に觀察し、叙述すれば、認識手段の能力と學問的認識の効力及びその區域に關し、信賴するに足る説明を得るものと信じて居る。之を以て心理的論法の注目する要點は、個人若しくは種屬の心靈に認識手段と學問的認識とが、如何に成立するかである。固より此の論法に對しては攻撃がある。即ち心理學とは他の學問と同じく、一の學問である。さうすると既に學問的認識を前提として

居るではないかと云ふのである。又認識手段は實際與へられたる心靈生活にどのやうに成立して來やうと、その効力と價值とは全く之に關係のないものである。その効力は寧ろ眞理を把握する爲めには、必然的の性質を有する事を實證するに由つて生ずる。例へば因果律は緊要なる一の認識手段である。然るに此の因果律なるものは、果して個人の先天的に有するものなりや、或は然らず、實驗を積んで段々に養成し得たるものなりやは、その効力に影響はない。先天的なるにせよ、或は實驗によつて得たるにせよ、眞理を認識するに、因果律は缺ぐべからざるものである。實証性の範疇にせよ將た空間、時間の概念にせよ、同じとであると云ふのである。

此の理由があるので、心理的論法に對立せしむるに、先驗的論法を以てするやうになつた。此の論法は數學或は數學的科學或は場合によれば史學などの承認せる學問的價值を基礎として議論を進めて行くのである。是れ等の學問は如何なる條件の下に成立し得べきものなりやを問ふのである。

是れ等の學問から出發して、演繹的に、もつと適切に云ふならば環元的に、その本源、その前提の如何なるものなりやを究め、そしてこゝに得たる結果に由て更に的確にその學問の効力と限界を規定し得べしとなすのである。さればこゝの問題は心理的研究にあらず、論理的、換言すれば概念の分解的研究である。

然るに此の先驗的論法を取るものは、少しく極端に走り、學問的認識の本源や、前提は實驗的に與へられたる意識のうちに現前し、その存在を證明し得るや否やは認識論者には、全然無關係の問題なりと主張する。否な更に進んで之を顧慮せば障害を生じ、事實を誤解せしむるの恐れあるを以て、唯だ學問的認識の理想的條件を確定するに必要であり、有益であると主張するのである。

此の主張は少しく極端のやうではあるが、しかし學問的認識に必要な理想的條件に着目するのは當然であらう。前に云つたやうに認識手段が如何なる由來を有するかは、その効力を決定する理由とはならない。けれども亦た一方に於て認識論



## オイケン哲學の認識論的基礎

三 並 良

—

吾人は思索する。何を思索するのであらうか。如何に

何に思索するのであらうか。吾人は生きる。如何に生きるのであらうか。生きるに何か内容があらうか。ありとすれば之は如何なるものであらうか。思索と生活との二つは如何に相關係するものであらうか。それとも風馬牛の如く何等關係のないものであらうか。是等の問題は思索や生活が深くなると直ぐ起る疑問である。之を以て既に業に、印度や希臘の古代より今日に至る迄、常に繰り返へされて居る。近頃はさも物々しく生活の創造を稱うる者がある。けれども如何なるものが創造されるのか、その事を説くものは甚だ稀れてある。唯水の流

れ／＼と止まず、跡かたを留めざるに等しきものが生と名づけられるやうである。それは餘りに皮相的な見解である。歴史を知らず内部もない。唯外面から見た運動に生と云ふ名稱を附けたに過ぎない。こんなものを生活の創造など云ふならば大間違ひである。創造と云ひ出したのは存在を外面からでなく内面から見やうとする爲めであらう。

皮相的な、上調子な生活の創造呼ばはりに厭き足らず思ふ者のうちには、自我の凝視と云ふやうなものを稱へるやうになつた。自我の凝視も結構であるが、併し之を更に一層深く考へると無意味になりはしまいか。若し自我を凝視して居たらば、自我が見えやうか。否な決してさうではない。唯だ自我を凝視して居るなと云ふ意識がある丈けで

あらう。そして何ものも出て來はしない。若し何ものかゝ出て來たらばその刹那には、自我の凝視は消滅して最早凝視ではなくなる。凝視の状態は恰も穴の内から鰻が頭を出すか／＼と見つめて居るにその影だも見えないと同じ光景である。影だも見えないのは當然である。比喻では凝視する者と、される者との二つになつて居るが、自我の凝視ならば主客同一である。凝視すと自ら意識する間は此の凝視意識がある丈けて何ものもない。故に若しこの兩者が渾然として一に合したならば其の極は前に云つたやうに凝視して居るな、と云ふ意識すらもなくなつて無我境、無意識境に入るとになるのであらう。然らば生と云ひ、創造と云ふ、畢竟是れ何ものであらう。自我の凝視とは相容れざるものではないか。

## 二

吾人が生の創造、或は自我の凝視と云ふとに就いて一言を費やしたのは何れも其れ自身を論ずる爲てはなかつた。如何に今日宇宙間に於ける人間

の位地が不安定なものになつたかを示す爲めてあつた。若し眞に不安定なりとせば、之れを安定せしむるが爲めには、思索や生活は初めより分りきつたものとなし、そして議論を進めて行つてはならない。思索とは何ものであるか。その内容は何であるか。思索によつて何が認識せられるかと云ふ根本問題に立ち入つて考へる必要がある。若し此の事が明瞭でなかつたならば幾百萬言の議論も畢竟砂上の建築に過ぎない。而して此の根本問題と生とは如何なる關係を生ずるかを考へなければならぬ。否な或は此の根本問題を考へる時、既に生の問題が交渉して來るであらう。これは人生研究の上に於いて最も緊要な問題である。之を以て哲學者が其の意見を樹つる時には是非とも此の根本から叙説しなければならぬ。

オイケン教授は之れが爲め其の如何なる著述に於いても必ずその認識論を持ち出して居る。否な彼れはその著述に着手した時、既に此の基礎から定めてかゝつて居る。蓋し若しさうしなかつたらば、如何なる名論卓説ありとするも、そは畢竟水

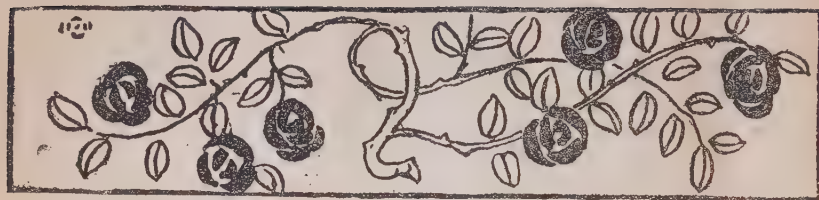


はその源泉に於いても、その大海に入る刹那に於いても老若、舊新の別はない。河流は永遠新たなる水である。山谿の水も平野の水も、常に新たなる實在である。常にその刹那刹那に於て如一の眞實である。吾人は生れ出てたる 刹那に於いて新たであつた。吾人は死ぬる刹那に於ても新たなることが出来る。猶太の悲觀的智者は日の下に新しさものなしと諦めた。吾人は日の下の物は常に新しと信ずるのである。

過去を顧みて灰色に隠れ行く廢墟の衰滅をのみ想ふてはならぬ。既に堀りかへされたる土壤は頽廢の色を漂はして、唯新人の踏むに委ねられてある。吾人の生活は舊き土を踏むことではない。吾等は新たなる荒野を開拓して新たなる土の香を嗅ぐことに生命の歡喜を覺ゆるのである。

生の歡喜と、そしてその刹那刹那に切り拓かれ行く新たなる生命の躍動！永久に新たなる吾人の生命！そしてその刹那はやがて未來に移りゆくのである。吾人は未來に向つて雄々しく進む勇者である。そして刹那刹那が與ふる若き心の泉を掬みて永遠に若き心の世界を領せんとする勇者である。

舊き年を送る時も吾が心は若くあつた。また新しき年を迎ふるに際しては吾が心は更に／＼一段の若かさとなしさとを實驗するのである。



雪 あ かり 野 口 精 子

もの清く身にも靈にもちりを見ず赤城に光る今朝の初雪  
 にほやかに山紫の大赤城その初冬をわれも着なまし  
 あはれなる年期がうたふざれ唄の木枯を吹く夜の耳を吹  
 く軒近く雀來たりて我ゆめを啄む心地寒さあかつき  
 かへり咲さうす色の薔薇匂ふ秋ほのかに思ふ戀の來し方  
 星流るその瞬間の胸底にひびくものあり大なるかな  
 強てなほ戀を粧へるやからあり見せまじ清く澄める涙は  
 大利根の水の音澄む我ゆめも玉とならまし星の降る夜を  
 火をたきて何をか祈るわがうたに血あれ熱あれ紅葉の秋  
 霜しろし一葉落ちたる紅もみぢ心に欲しく清きさまかな

第三に吾人は世間に對して消極的態度を持してはならぬ。あらゆる事象に對して白眼視する者、無關心的態度を持する者、これ等は皆老衰しなければならぬ。何となれば宇宙は活動である、萬象は聯關である。世には暗黒面をのみ見る人がある。されど暗黒は光明に附隨する自然の現象に過ぎないことを知らなければならぬ。吾人が一度この地上を離れて、地球の物理的束縛から脱るゝならば、吾人は永遠に光明界に住することが出来るのではないか。暗黒は一時的の現象である。光明は永遠の實在である。宇宙は永遠の肯定である。

次に吾人は自然の美を味ふことを知らなければならぬ。朝暾夕陽に或は天空の星坐に對して、恍惚として我を忘るゝほどでなければならぬ。米國の或學者は八十歳に至るも尙ほ、毎夜二三時間づゝ星を仰いで喜んだと傳へられる。年々再々花相似たりではない。年々歳々花は新たである。日も月も星も雲も一瞬一瞬悉く新たである。刹那刹那に新たなる自然美を味はないのは人生の不幸である。

次に常に青年の意氣を失はず、常に青年を信じ、青年と接することである。吾人はまた小兒の友となりてその光ある笑ひを別たねばならぬ。更に常に新しき理想を抱くことである。エマルソンは吾々は吾々以上のものと談ずる時に吾人の心は常に若やぐを覺ふと言つた。吾人は大我の中に浮ぶ小我のなかに、永久に若き自我の面影を發見しなければならぬ。自我は永遠より永遠に進化し行く生命の表現である、自我とは神の本體を如一に本具するものである。我れ泣く時神と共に泣き、考ふる時、苦しむ時、喜ぶ時、神と共に考ふるのであり、苦しむのである、喜ぶのである。眞に斯くの如き人は基督魂を彼の心の奥底に見出すことの出来る人である。さて基督とは何であるか、言ふまでもなく、神

の永遠の生命が最もよく人類に宿りたる人格である。吾人もし眞にこの心境を開拓することが出来ればその歡喜は盡きないのである。殊に年若うして道のために斃れられたる基督を有するは吾人の大なる幸福である。彼は三十三歳かも知しくはそれより若くして十字架上の死を遂げられた。彼は最も清高なる感情と純潔なる生活とを有したる人であつた。彼の涙も若くその血も若くあつた。彼は改革者、豫言者として、青年獨特の理想を説いた。されば吾人の生活が、常に彼によりて導かれ、又新しき生命を鼓吹せらるゝ時、吾人の生活は日に日に若やかなる永久に向つて發展するであらう。基督教の歴史は改革また改革以て今日に到つたのである。基督教の如く革命の歴史を有する宗教はない。蓋し基督なる永遠に若き人格が與ふる大靈覺の力が永遠に吾々の信仰の生命に動きつゝあるが故である。

四

之を要するに永久に若き心は、永久に變化ある心である。永久に發展し、活動し、直進するの心である。吾等の生活の刹那は常に新たにして、常に眞實なるものでなければならぬ。吾等の生活の全一が、さながらに永遠の生命の全一となつて吾等は常に永遠にして、しかも常に新たなる光明の歡喜を味到しつゝ、吾等の生の行進に向つて、勇士の如く奮進するのである。

世に舊きものゝ爲めに舊きを言ふ人がある。否新しきものゝために舊きを思ひ出でよ。更に進みて吾人は更に新たなる日の生活の爲めに新たなる生命を讃へなければならぬ。

人生は河の如きものであらう。人生の流域が長さに従つてその容積は増すものである。河の流れに



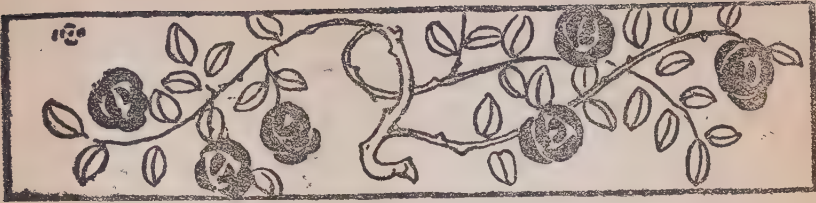
人生を愉快に味ふことが出来るであらうと説教したことがあつたが、自分は今その齡に達して、自分の豫言が誤つてゐなかつたことを實驗した云々」と。吾人はその肉體の老衰を憂うるの必要はない。吾々の精神作用は殆んど永久に亘りて老衰を知らないのである。最も恐るべきは吾人の精神の衰頹である。殊に日本人はその風貌に於ては、寧ろ西洋人に比べて甚だしく若く見えるのであるが、その精神に於ては頗る早熟早老たることを免れないのである。徳川家康は人の一生を譬へて、重きを荷うて遠さを行くが如しと言つたが、それは彼が既に老境に達した後の感慨を述べたものであつたに違ひない。人生は決して重荷を背負ひながら、たど／＼として、辿り行くやうなものではない。永遠に若やいだ心を抱いたる人にとりては、人生は何時も花やかな、何時も輝かなものであらねばならぬ。

エマルソンの七十七年の誕生祭に方りて、オックスフォードのマックスミューラー博士が、彼に一書を送つた。その内に印度の古典ウバンシアードよりの引用語があつた。

『老齡と頹廢は肉體、感覺、記憶、心意を捕ふれども、その觀察者たる自我を捕ふることは出来ない。自我は決して疲れず、唯肉體のみ自我を支持するに疲る。自我は決して盲せず、唯感覺の窓のみ塵と雨にて曇るのみ。自我は決して忘れず、唯記憶に記されたる碑銘のみ消え失するのである。而して多くの事が忘却せらるゝは、寧ろ良きことである。自我は決して誤らず。吾等の時計の多くの輪が錆びるも、吾等は永遠に正しき天上の時針盤を仰ぎ見てゐるのである。』

然らば永久に年老いぬ方法は何であるか。その一つとして吾人は常に理想を未來に置かなければならぬ。吾人は過去を顧る必要はない。過去に對して吾人は何等の權威をも持たないのである。過去は過去として葬らしめなければならぬ。訂正し得るもの、期待し得るもの、計畫し得るものは唯未來にのみ存するのである。伊太利の未來派の人々の主張は、過去は悉く惡なり未來は悉く善なりといふのである。伊太利には過去の遺産として大きな美術館や寺院がある。しかしその多くは唯伊太利國民をして、乞食根性を養はしむるの材となつてゐるに過ぎない有様である。昔ジュリアス・シイザーを生み、セネカ、シセロ、ワージル、タシタスを出し、中世に至りては、ダンテ、ラファエル、ミケル・アンゼロを産したる伊太利は、今日無數なる奴隸的國民を出してゐる。そこで伊太利の氣慨ある青年等は一切の過去及び過去が現在に對して齎したる凡べての事象を打破しなければならぬと主張するのである。彼等が伊太利の現狀に慄らぬ結果、未來にのみ眞實があり、善がある如く考へたのは無理ならぬことであるが、しかし吾人はかほどまで過去を呪ふ必要もない。吾々は過去より發展し來りたるが故に過去を承認しなければならぬ。過去の努力、過去の眞實を認めなければならぬ。しかし同時に吾人は過去の失敗、過去の罪惡、過去の暗黒から一掃せられた新しい氣分を持して進まなければならぬ。

更に永久に若き心を失はざらんが爲めに、吾人は絶えず新しきものに對する興味を持たなければならぬ。舊い物に眞理があるやうに、新しいものにも亦眞理があると知らなければならぬ。宗教にも藝術にもあらゆる科學にも、常に新しき眞理を求むることに深き興味を持つことを努めなければならぬ。



# 永遠に若き心

内ヶ崎 作三郎

## 一

「生の力」或は「生の要求」といふ語は今日の思想界、殊に文壇の新しい流行語となつて來た。「しかし生きなければならぬ」或は「生きたい」といふ觀念或は慾望は必ずしも近代人に見られる現象ではない。ありとあらゆる生物と人類とが遠い遠い太古の方、生そのものに附隨して、自發的に本能的に、喚起せられたる衝動に他ならぬのである。さて今日吾人が「生の力」或は「生の要求」を叫ぶ時に、それには近代的の意義なり、近代的の特色なりを伴つてゐなければならぬ。即ち舊時代の人々がたゞ生に對して、漠然とした要求や觀念を抱いてゐたのに對して、吾々は「生」に面して肯定的な、徹底的な態度を持してゐることである。今日吾人は「生の要求」を高調する。そは一日一日の「眞實の生活」を無上の價值と尊嚴と見做すからである。

## 二

昔秦の始皇は徐福をして、不老不死の藥を日本に求めしめた。波斯にも亦不

老不死の藥の傳説が遺つてゐる。それは不思議な光明を放つてゐる碧玉であつて、その光明に觸るれば二十八日にして、八十歳の老年も嬰兒に還ると稱されてゐる。

メチニコフの説によれば、人間は適當なる生活を營むことによりては、百四十歳まで生きることが可能である。然るに猶太の詩人は人生を七十年であるとして歌つた。それからして西洋では人生は七十年であるかのやうに考へられた。更に東洋に於いては人生は五十年とせられるやうになつた。メチニコフの學説の立ち場から見れば、七十年或は五十年は尙ほ青年時代である。吾人の肉體は終に物質的生長衰耗の運命を免れないが、その精神作用は生命のあらん限りは衰へないものである。グラツドストーンの如きは、八十三歳に至るまで宰相の椅子に在つた。彼がアルメニア問題に關して、世論を喚起したのは、八十七歳の時であつた。ゾイクトリア女皇も八十二歳まで皇位に居られた。オックスフォードにソマヴィールといふ女子の大學がある。英國に於て最も舊い歴史を有する女子最高の學府である。これはメーリリー・ソマヴィールといふ婦人を記念する爲めに建てられたる大學である。ソマヴィール夫人は八十九歳にして、科學に關する高遠なる著書を公にしたのである。又英國に於ける自由基督敎指導者の一人なるマチーノーは八十を超えて三種の名著を完結した、ゲーテが八十を超えて、フ라우ストを完成したことは誰も知れるところである。年老うるといふことはさまで悲しいことではない。老は生長の圓熟に他ならぬのであつて、老いて後、人は始めて凡べての現象に對しても、寛裕ある觀察をすることが出来るやうになるのである。十八世紀に始めて自由基督敎を唱へて、また酸素の發見者たるジョセフ・ブリストリーが言つたことがある。「自分は、人間は八十歳に達しても尙ほ



●新春の目出度休日を最も能く利用するは●

米國國民論

▲米國國民論は個人をして自營自活の生命を保護  
生命を貴重すべき  
眞理を述べ

▲米國國民論は家庭をして平和財産を保護  
眞理を増進すべき  
親睦ならしめ克く

▲米國國民論は國家をして調權利を保護  
眞理を説く  
和せしめ専ら

著者 ムルフォード博士  
譯者 根本正先生  
洋裝布製箱入二八〇頁  
定價 一圓郵稅八錢

使徒保羅傳

著者 松本文雄氏  
裝幀美本箱入二五四頁  
定價 一圓郵稅八錢

非風な靈的天才——深遠なる思志——熱烈なる信仰——雄大なる事業——高貴なる人格とを兼備したる使徒保羅の偉人なる生涯を著者が一般人士の爲に神學上の術語を避けて最も通俗的に而も麗妙の筆を揮つて最も興味多く記述したるもの。著者が専ら信仰的實驗の書翰を基礎とし更に著者自身が信者の立場よりして彼れの靈的生命に觸れ而して自から感激し憧憬し崇拜の餘り著はしたる生氣潑瀾たる活歴史

●斯かる二大名著を繙くことにある可し●

# 誌 雜 合 六



新  
年  
號

# 六合雜誌 第三十四卷 新年號目次

本 欄

永遠に若き心(評論)……………内ヶ崎作三郎……………二

雪あかり(短歌)……………野口せい子……………九

オイケン哲學の認識論的基礎(評論)……………三並良……………一〇

生の創造と信仰(評論)……………稻毛詛風……………二五

創造の世界(感想)……………野村隈畔……………三四

母(詩)……………竹友藻風……………三九

光に觸るゝとき(評論)……………金子白夢……………四二

宗教の獨立(評論)……………安部磯雄……………四八

文 藝 欄

モゼス(戯曲)……………佐藤清……………五〇





イーリアスの一節(あらしの前)……………土井晚翠……………七

寂しき家にて(小説)……………加藤一夫……………七

I do not Sing(英詩)……………岡田哲藏……………七

彼の歩み(小説)……………石田櫨村……………六

舞臺協會の第一回公演……………かずを……………一〇三

紅い花(戯曲)……………絃二郎……………一〇五

二本の樹(詩)……………小島幸治譯……………一二三

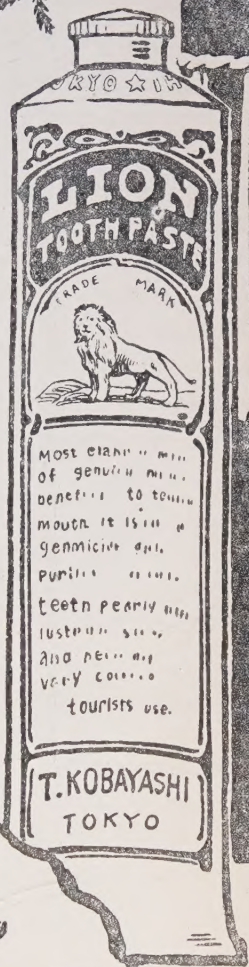
自我燃焼の歎美(感想)……………吉田絃二郎……………一二四

ロイド・チヨールチと社會政策……………鈴木文治……………一二四

本郷教會を訪ふ記……………記者……………一二三

■新刊批評……………  
■惟一館記事……………  
一元





細い聲で言つて御覽なさい——  
ライオン！

まあ、何て韻きの好い言葉でせう、  
優しい親しみのある！

太い聲で叫んで御覽なさい——

ライオン！

まあ、何て權威のある言葉でせう、  
強い底力のある！

ライオン歯磨

象徴的氣分の實現に過ぎません。  
この二ツの發音の與へる



ライオン齒磨  
ライオン洗石鹼

本舗 東京 小林

# THE RIKUGO-ZASSHI.

No. 396. January. 1914.

## CONTENTS.

Elixir of Life .....	Rev. Prof. S. Uchigasaki.	2
<i>Tanka</i> .....	Mrs. S. Noguchi.	
Prof. R. Eucken's Theory of Cognition .....	Prof. H. Minami.	10
Creation of Life and it's Relation to Faith .....	S. Inage.	23
The World of Creation .....	W. Nomura.	34
<i>Mother (a poem)</i> .....	S. Taketoto.	39
Moments of Inspiration .....	Rev. H. Kaneko.	41
The Independence of Religion .....	Prof. I. Abe.	48

"Moses" ( <i>a play</i> ) .....	K. Satō.	54
"Before the Tempest" ( <i>one passage out of Homer's Iliad</i> ) .....		
.....	Prof. B. Doi.	71
<i>A Lonely House (a novel)</i> .....	K. Katō.	75
<i>I do not Sing</i> .....	Prof. T. Okada.	94
<i>A Painter and his Sister (a novel)</i> .....	J. Ishida.	96
On the Representation of "The Devil's Disciple" by the Stage- Association of Japan .....	Kazuo.	102
<i>Red Flower (a play)</i> .....	G. Yoshida.	105
<i>Two Trees (a poem)</i> .....	K. Kojima.	113
Fragmental Thoughts .....	G. Yoshida.	114

Lloyd-George and his Social Policy .....	B. Suzuki.	124
--	------------	-----

Rev. D. Ebina and his Church .....	Sub-editors.	132
Books of the Month .....		139
Unity Hall Reports .....		142

Published Monthly by the  
TÔITSU KRISTOKYŌ KŌDŌKWAI,  
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.



Library of the  
PACIFIC UNITARIAN SCHOOL  
FOR THE MINISTRY  
Berkeley, California

396

1914

C

X288.11

R528

# 六合雜誌



新年號

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可  
大正三年一月一日發行每月一回一日發行

六合雜誌第三十四年第一號